第４章　調査成果

第１節　基本層序

今回の調査地は、平成 23 年度及び平成 25 年度の発掘調査を合わせ、東西 530 m、南北 210 mの範囲に設けられた。低地に立地する遺跡であるため、調査地毎に層相は異なっており、連続する地層であっても、土色や土質など地層の基本情報は異なる。そこで、各調査地の基本層序や地層の捉え方については、各調査成果において個別に記述することにし、ここでは各調査地の地層の対比を以下の表１にまとめた。地層の番号は、砂層及び泥層（作土）のユニットを調査時の所見に基づいて、その成因或いは時代的なまとまりで付与したものである。

各調査地の遺構面のつながりは、自然堆積層の上面、あるいは、自然堆積層の下面が、同一ないし同一に近い遺構面として確実性が高いと考えられる。自然堆積層の堆積環境も一様ではなく、同時性が担保される地層は多くはないが、一定の時期に大量に、かつ集中的に土砂が堆積した場合については、連続する遺構面として把握される場合があった。

今回の調査では、弥生時代中期中葉以前、弥生時代後期以前、平安時代後期以前に堆積した砂層がそれぞれ該当する。砂層の下面では水田、砂層の上面では集落・耕作痕等が検出された。遺構の存続時期や加工･廃絶された時期など一定の時間幅を考慮する必要はあるが、調査地間で地層の対比がしやすく、認識の誤差が生じにくいと考えられる。

なお、地層名については、各調査地毎に付与しており、整理の過程で所見が変更された場合もあったが、調査時に使用した地層名の変更は行っていない。　（後川恵太郎）

表１　層序対応

時期	1-3区	1-4区	1-5区	1-1・2-1区	1-2区	2-2区	4区	3区	13-7区	13-2区	13-3区	13-4区	13-6区	13-5・8区
現代	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土	現代作土
近代	近代作土	近代作土	近代作土	近代作土	近代作土	近代作土	近代作土	近代作土	近代作土	1-1	近代作土			
近世	1-1	1-1	1-1	1-1	1-1	1-1	1-1	II	□１	2 3-1～3-2	1	1	1	1-1
				1-2b										1-2
										3-3				1-3
室町時代後期	1-3	1-3	1-3	1-3	1-3	1-3	2-1	III	※２			1-3	2	2
	2-1						2-2							3-1
							2-3			4-1～4-2				3-2
				1-4b	1-4b	1-4b								
鎌倉時代～室町時代前期	3-1	2-1	3-1	2-1	2-1	2-1	△3-1	IV		4-3		2-1	3	3-3
													4	4-1-1
													5	4-1-2
平安時代末期			3b	2-2b									6	4-1-2b
平安時代後期	4-1	△4-1	4-1	3-1	3-1	3-1		V		4-4		3-1	6	(4-1-3)
				3-2b	3-2b	3-2b	4-1			□4-4b	□2b	3-2b	□7	
（平安時代前期）	4-2		4-2・△4-3	3-3	3-3	3-3						3-3		
奈良時代		4-2		△3-4b	△3-4b			VI						
飛鳥時代前期		5-1-1		4-1	4-1	4-1	5-1	VII			3	4-1		
古墳時代後期		5-1-2	4-4	4-2	4-2	4-2	5-2	VIII		5	4	4-2		
古墳時代後期			4-5	4-3	4-3	4-3		IX		△6		4-3		
古墳時代前～中期	5-1			5-1	5-1	5-1		X				5-1		5
弥生後期～古墳中期														
弥生時代後期	□5-2b	5-2b	5-2-1b	5-2b	5-2b	5-2b	5-2b	XI				□5-2b		5b-1～3
			5-2-2											
			5-2-2b	6-1				XII						6・6b
弥生時代中期後葉	6-1	6-1	6-1	6-2	6-1	6-1	6-1-1	XIII				6-1		7
							6-1-2							
							6-2-1							
							6-2-2							
		6-2					6-2-2b							
弥生時代中期中葉		6-3	□6-2	6-3	6-2	6-2	6-3							
		6-4		6-4	6-3	6-3	6-4							
	※6-4b	6-5b	6-4b	6-5b	6-4b	6-4b	6-5b	XIV				※6-4b		
弥生時代中期前葉	※7-1	7-1	7-1	7-1	7-1	7-1	7-1 7-2					※7-1		8
				7-2	7-2	7-2								
				7-3b	7-3b	7-3b								
弥生時代前期後葉	※8-1	7-2		8-1	8-1	8-1	△8-1					※8-1		
				9-1	□9-1									
				9-2										
		8-1		9-3										
		9-1		9-4										
縄文時代後期以前	※10	10	10	10	10	10	10					※10		9～12

１）※トレンチで確認。２）△確実性低い。３）□以下の地層は未調査、1-3区は部分的に第7-1面を調査。４）局所的に細分した地層は一部省略。

第２節　１・２・４区の調査成果

第１項　１・２・４区基本層序（図７～24）

讃良郡条里遺跡は、沖積低地に立地する遺跡で、泥層と砂層が交互に堆積することで地層は形成される。地層の認識は、土壌とその母材の関係を重視して、自然堆積層をｂ層、その上部に形成された土壌層をａ層として地層を把握した。

ａ層は土壌学でいうＡ層に対応し、自然作用による土壌化や作土・客土など人為による土壌化に区別される。後者に当たる作土は、灌漑や洪水によってもたらされた浮遊土砂が混入し、母材となる自然堆積層の単なる撹拌と違い、自然作用による土壌化と大きく異なると考えられる。

以上を踏まえて、地層の名称は、土質の区分を重視し、地層毎に番号を付け、各地層において細分が可能である場合は、枝番号を用いた。面及び地層の呼称は、自然堆積層はｂ層、ないしｂ面として表示し、土壌層はａを省略して表記した。

調査では、地層の連続性を把握することに努めたが、微地形や土地利用の違いによって、各調査地の地層が厳密に対応しない場合があった。また、地層が細分される場合、基本的には、枝番号を振って対応したが、極めて限定的に堆積する水成層については、直上の地層名に水成層を示すｂ層を付加した場合がある。一方、遺構埋土の内、偽礫の供給源が判明したものは、挿図内は括弧（）を用いて表記した。

なお、以下の説明は、２－１・２－２区で用いた地層名を使用しており、６層の説明については２－２区の地層名を用いた。また、各調査地の調査成果については、地層名の統一を図っておらず、調査時の地層名を使用し、遺構面は「１層上面＝第１面」というように地層名に対応させた。

現代作土・近代作土

近年まで調査地周辺は、水田として土地利用が行われていた。現代作土は、粗砂～極粗砂混シルトを主体としており、砂礫を多量に含む。調査地全体に堆積する地層である。なお、現代作土の上面では、条里型地割の痕跡を留めた水田が確認できる。

近代作土は、現代作土の下に部分的に遺存した。細砂混シルトを主体とし、粗砂～極粗砂を少量含む。現代作土の下位に部分的に認められる場合が多く、現代作土に削平或いは収斂される。

１層

作土と自然堆積層を１層とした。室町時代後期から江戸時代にかけて形成された。４層に細分でき、作土の１－１層と１－３層、１－３層と２－１層の間に堆積する水成層をそれぞれ１－２ｂ層、１－４ｂ層とした。

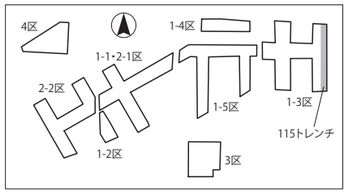
１－１層は、シルト混粗砂～極粗砂を主体とする作土である。江戸時代後期。１－２ｂ層は、１－１層の母材となる砂礫層を想定して設定した地層で、２－１区坪境の溝内などで、部分的に認識されたものである。結果的には、調査地全体で確認できた地層ではなく、限定的な範囲の確認に留まった。１－２ｂ層は、１－１層形成時に、耕作が下位にまで及んだため遺存状況が不良であったと考えている。

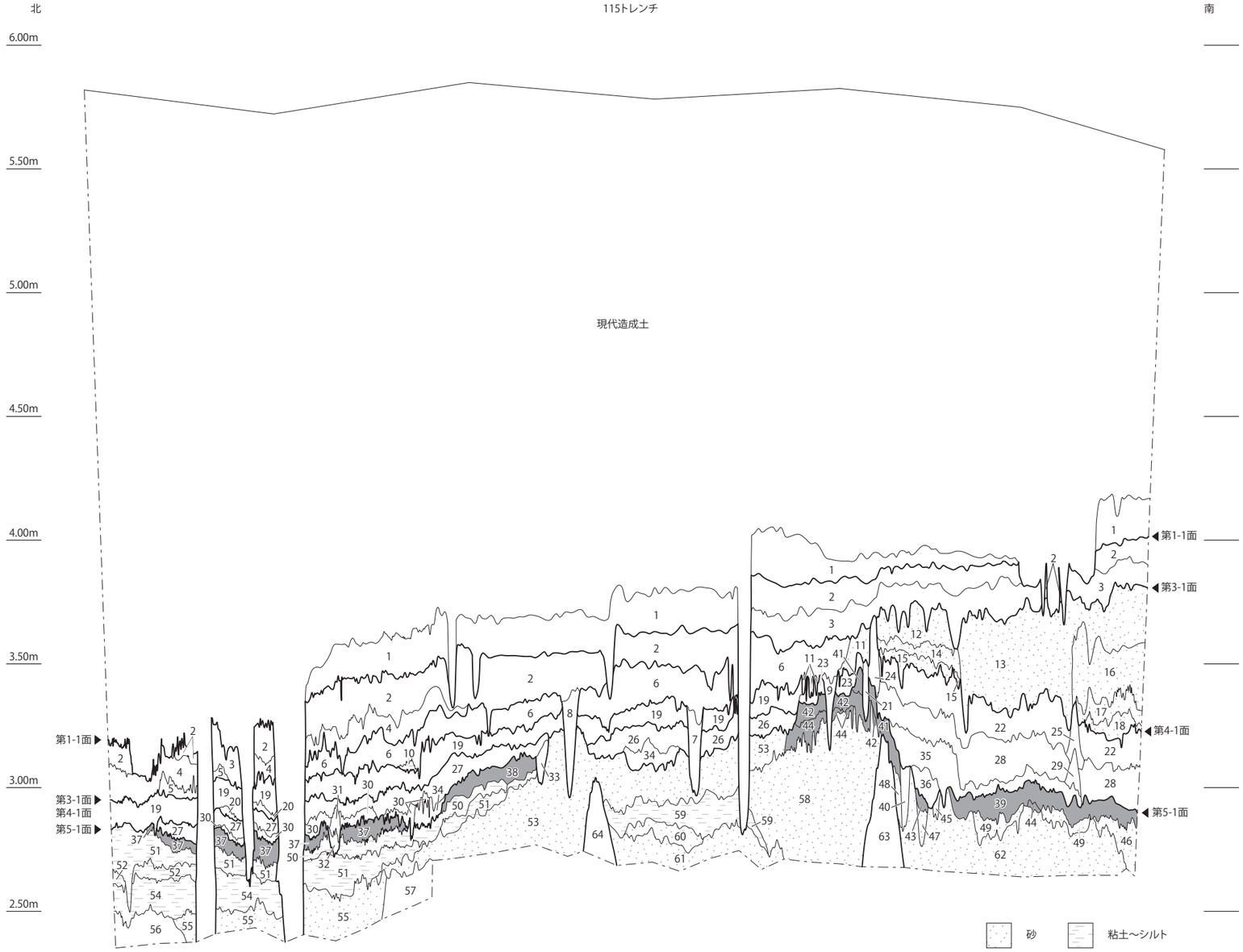
１－３層は、粗砂～極粗砂混シルトを主体とする作土である。室町時代後期。その下位に堆積する自然堆積層は、１－４ｂ層とした泥層で、局所的に遺存が確認できた。低所の一部で確認できたのみで、主として遺構（溝・溜池）埋土に堆積する。

２層

作土と自然堆積層を２層とした。鎌倉時代から室町時代前期にかけて形成された。２－１層は、細砂

1-3区





115トレンチ
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　現代作土
2　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　1-1層
3　2.5Y6/1黄灰　シルト混細砂　1-1層
4　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質極細砂　粗砂を多量含む　1-1層の細分
5　2.5Y6/2灰黄　細砂混シルト　1-1層の細分
6　5Y6/1灰　細砂混シルト　2-1層
7　7.5Y6/2灰オリーブ　細砂　粘土を少量含む　遺構埋土
8　2.5GY5/1オリーブ灰　粗砂混シルト　遺構埋土
9　7.5Y5/1灰　粗砂　遺構埋土
10　2.5Y6/2灰黄　粗砂混シルト　2-2b層
11　7.5Y5/1灰　細砂〜粗砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
12　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂〜細砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
13　10Y5/1灰　細砂〜粗砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
14　5Y4/1灰　細砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
15　5Y5/2灰オリーブ　細砂〜粗砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
16　5Y6/1灰　細砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
17　2.5Y4/1黄灰　粘土質細砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
18　7.5Y5/1灰　細砂　3b層　2-1区2-2b層に対比
19　5Y5/2灰オリーブ　細砂混粘土　4-1層　2-1区3-1層に対比
20　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　4-1層細分
21　7.5Y7/1灰白　細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
22　5Y5/1灰　細砂混シルト　粗砂を多量含む　4-1層　2-1区3-1層に対比
23　5Y5/1灰　細砂混シルト　4-1層
24　7.5Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂混シルト(5-1層)偽礫を多量含む　畦畔
25　5Y5/1灰　シルト混粗砂〜極粗砂　畦畔
26　5Y5/1灰　細砂混シルト　4-2層
27　5Y4/2灰オリーブ　細砂混シルト　4-2層
28　5Y4/1灰　細砂混シルト　粗砂を多量含む　4-2層
29　5Y4/1灰　シルト混粗砂　畦畔
30　2.5Y4/1黄灰　粘土　粗砂を多量含む　4-2層の細分
31　5Y3/1オリーブ黒　粘土　粗砂を微量含む　畦畔
32　7.5Y4/1灰　粗砂　遺構埋土
33　5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト　遺構埋土
34　7.5Y5/1灰　シルト混中砂　4-2層の細分
35　7.5Y4/1灰　シルト混細砂　4-2層の細分
36　10Y5/1灰　シルト混中砂〜粗砂　4-2層の細分
37　5Y4/1灰　粘土　5-1層
38　7.5Y5/2灰オリーブ　シルト混粗砂　斜面堆積物　5-1層
39　10Y4/1灰　シルト質極細砂　5-1層
40　7.5Y2/1黒　シルト混粗砂　遺構埋土
41　10Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂　5-1層
42　10Y4/1灰　細砂混シルト　粗砂を多量含む　5-1層
43　10Y4/1灰　シルト質細砂　5-1層
44　10Y5/1灰　細砂混シルト　粗砂を多量含む　5-1層の細分
45　10Y4/1灰　細砂　5-2b層
46　10Y5/1灰　細砂　5-2b層
47　7.5Y4/1灰　細砂　5-2b層
48　7.5Y6/1灰　粗砂　5-2b層
49　10Y5/1灰　細砂　5-2b層
50　5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　5-2b層
51　10Y4/1灰　シルト質粘土　5-2b層
52　7.5Y4/1灰　シルト質粘土　5-2ｂ層
53　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　細砂混シルトを少量含む　5-2b層
54　5BG6/1青灰　シルト質粘土　5-2b層
55　2.5Y2/1黒　粗砂〜極粗砂　細砂混シルトを少量含む　5-2b層
56　5Y3/2オリーブ黒　粗砂混シルト　5-2b層か
57　5Y3/1オリーブ黒　粗砂混シルト　5-2b層か
58　7.5Y4/1灰　極細砂〜粗砂　5-2b層
59　7.5Y4/1灰　シルト質粘土　5-2b層
60　10Y4/1灰　粗砂　5-2b層
61　10Y6/1灰　粗砂　粘土を少量含む　5-2b層
62　10Y6/1灰　細砂〜粗砂　5-2b層
63　10Y6/1灰　粗砂混シルト　畦畔　6-1層
64　10Y6/1灰　粗砂混シルト　畦畔　6-1層

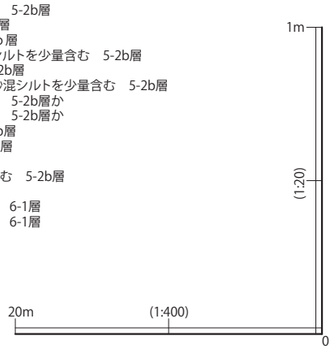
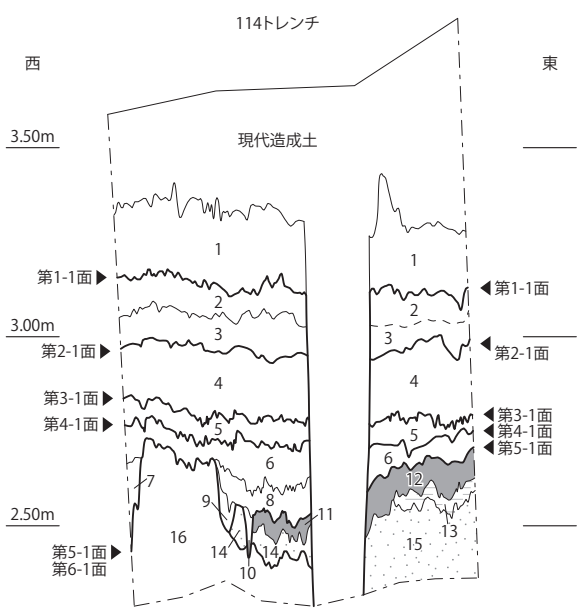
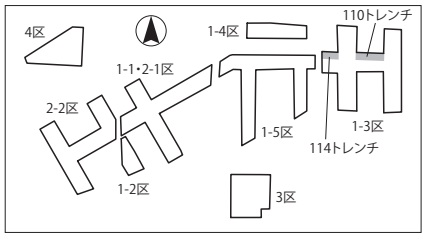


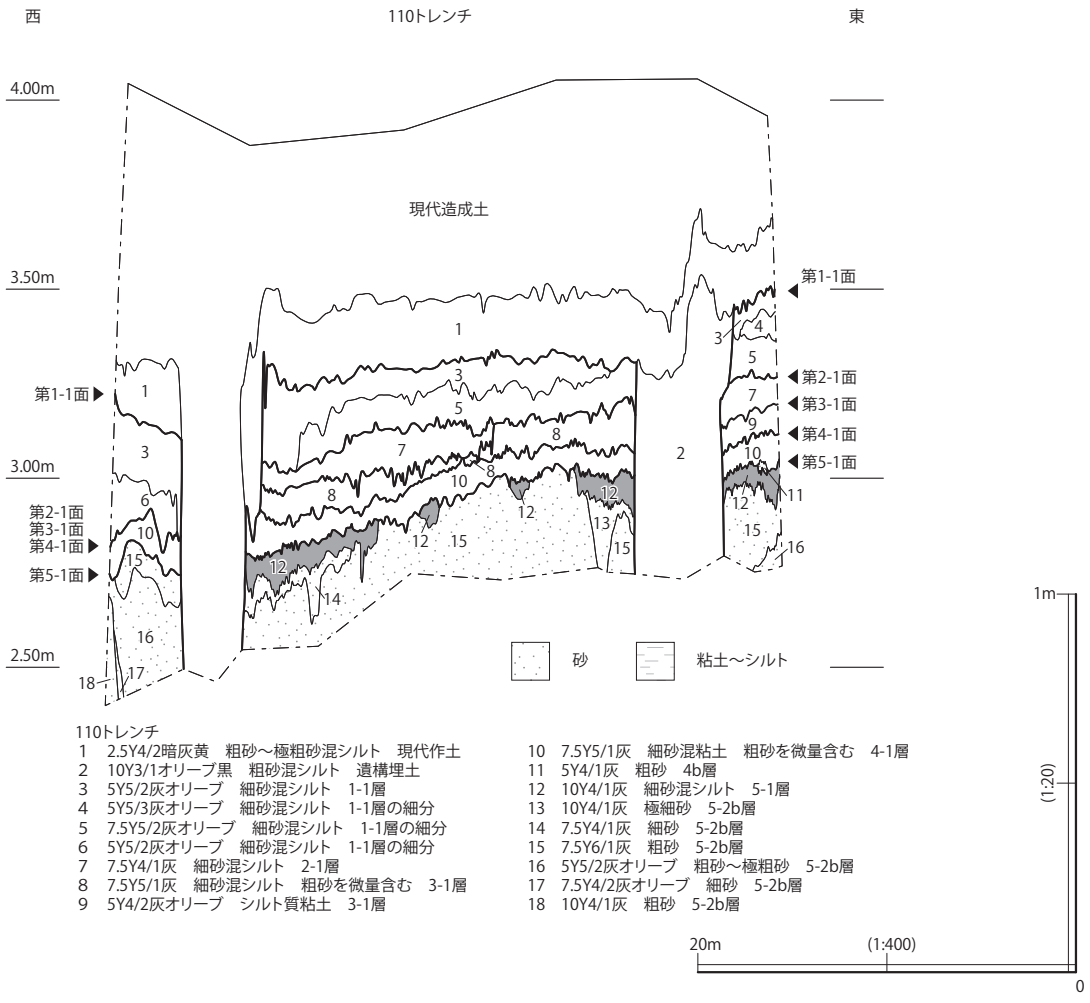
図7　1－3区　115トレンチ断面

1-3区





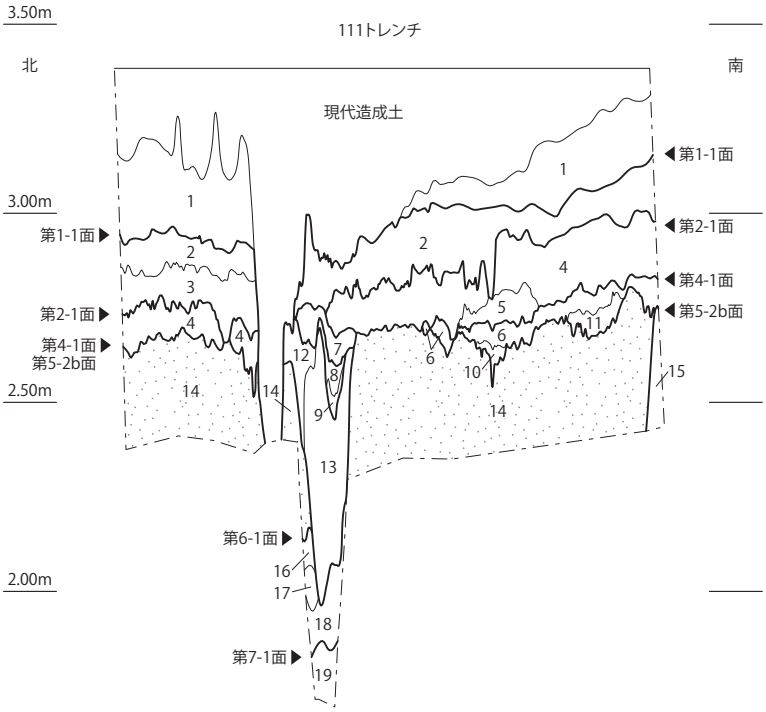
114トレンチ
1　2.5Y3/1黒褐　粗砂～極粗砂混シルト　現代作土
2　2.5Y6/2灰黄　細砂混シルト　1-1層
3　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト　1-1層の細分
4　5Y5/3灰オリーブ　シルト　粗砂～極粗砂を少量含む　2-1層
5　7.5Y4/1灰　粘土　粗砂を少量含む　3-1層
6　5B4/1暗青灰　極細砂混粘土　4-1層
7　5Y5/2灰オリーブ　シルト混粗砂　遺構埋土
8　N4/0灰　極細砂混シルト　4-2層
9　5B5/1青灰　極細砂粘土　遺構埋土
10　N5/0灰　細砂混シルト　遺構埋土
11　N5/0灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　5-1層
12　7.5Y5/1灰　極細砂混シルト　5-1層
13　10Y4/1灰　極細砂混シルト　5-2b層
14　10Y6/1灰　粗砂　5-2b層
15　10Y5/1灰　細砂～粗砂と粗砂の互層　5-2b層
16　10Y5/1灰　シルト混粗砂　6-1層

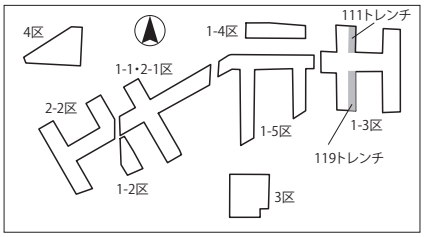


110トレンチ
1　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂～極粗砂混シルト　現代作土
2　10Y3/1オリーブ黒　粗砂混シルト　遺構埋土
3　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　1-1層
4　5Y5/3灰オリーブ　細砂混シルト　1-1層の細分
5　7.5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　1-1層の細分
6　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　1-1層の細分
7　7.5Y4/1灰　細砂混シルト　2-1層
8　7.5Y5/1灰　細砂混シルト　粗砂を微量含む　3-1層
9　5Y4/2灰オリーブ　シルト質粘土　3-1層
10　7.5Y5/1灰　細砂混粘土　粗砂を微量含む　4-1層
11　5Y4/1灰　粗砂　4b層
12　10Y4/1灰　細砂混シルト　5-1層
13　10Y4/1灰　極細砂　5-2b層
14　7.5Y4/1灰　細砂　5-2b層
15　7.5Y6/1灰　粗砂　5-2b層
16　5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　5-2b層
17　7.5Y4/2灰オリーブ　細砂　5-2b層
18　10Y4/1灰　粗砂　5-2b層

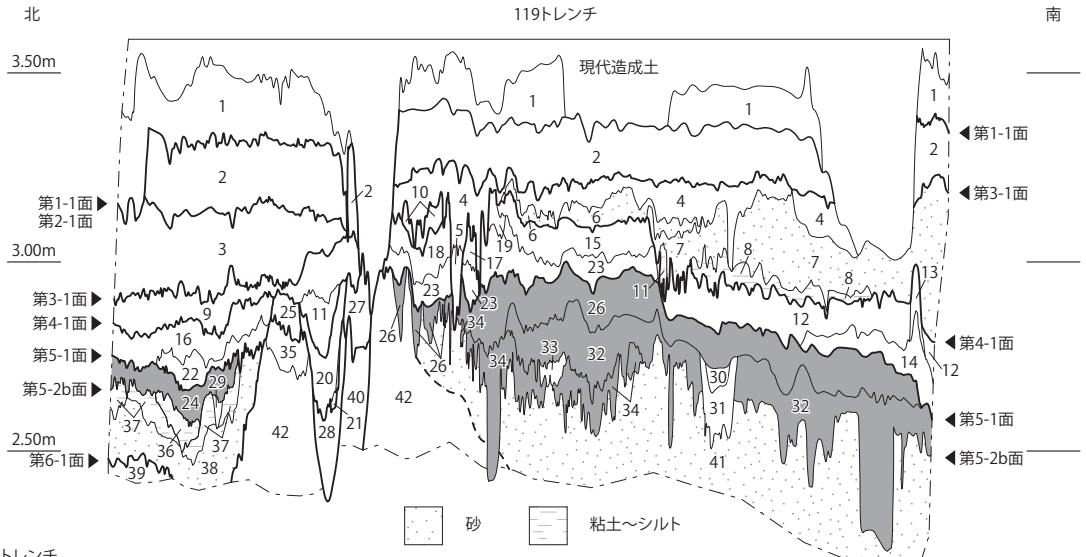
図8　1－3区　114・110 トレンチ断面

1-3区





111トレンチ
1　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂～極粗砂混シルト　現代作土
2　7.5Y5/1灰　粗砂混シルト　1-1層
3　5Y5/1灰　極細砂～細砂混シルト　1-3層
4　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　2-1層
5　5Y5/1灰　細砂混シルト　2-1層の細分
6　5Y4/2灰オリーブ　極細砂質シルト　4-1層
7　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　4-1層
8　7.5Y4/1灰　細砂混シルト　遺構埋土か
9　7.5Y6/1灰　細砂　遺構埋土か
10　2.5GY3/1暗オリーブ灰　シルト混細砂　4-2層
11　7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト　4-2層
12　10Y4/1灰　極細砂　炭化物を少量含む　水成層流路内堆積物
13　2.5GY4/1暗オリーブ灰　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　流路内堆積物
14　5Y5/2灰オリーブ　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　5-2b層
15　10Y3/1オリーブ黒　シルト質細砂～中砂　粗砂を多量含む　畦畔
16　10Y3/1オリーブ黒　シルト質細砂　6-1層か
17　10Y4/1灰　シルト質細砂　6-1層か
18　7.5Y6/2灰オリーブ　粗砂　細砂を少量含む　6-4層か
19　5GY3/1暗オリーブ灰　シルト質細砂　7-1層か



119トレンチ
1　2.5Y3/1黒褐　粗砂～極粗砂混シルト　現代耕土
2　5Y3/2オリーブ黒　極細砂混シルト　1-1層
3　5Y5/3灰オリーブ　細砂混シルト　2-1層
4　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　3-1層
5　7.5Y3/2オリーブ黒　極細砂　遺構埋土
6　5Y6/4オリーブ黄　極細砂　3b層
7　5Y5/1灰　粗砂～細砂　粘土を少量含む　3b層
8　5Y5/1灰　粘土　3b層
9　5Y4/3暗オリーブ　細砂混シルト　粗砂を多量含む　3-1層
10　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂混シルト　3-1層
11　5Y4/2灰オリーブ　細砂混シルト　3-1層の細分
12　5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　4-1層
13　5Y2/2オリーブ黒　粘土　細砂を多量含む　畦畔
14　7.5Y3/1オリーブ黒　極細砂混シルト　4-2層
15　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　4-1層
16　5Y4/2灰オリーブ　シルト質極細砂　4-1層
17　2.5Y4/2暗灰黄　シルト　粗砂を多量含む　4-1層
18　2.5Y4/2暗灰黄　シルト　粗砂を多量含む　4-1層
19　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂混シルト　畦畔か
20　5Y4/1灰　細砂混シルト　極細砂～細砂（5-2b層）を少量含む　遺構埋土
21　10Y3/1オリーブ黒　細砂　極細砂～細砂（5-2b層）を少量含む　遺構埋土
22　7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト　4-2層
23　5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト　粗砂を多量含む　4-2層の細分
24　5Y4/1灰　シルト質極細砂　5-1層
25　5Y4/2灰オリーブ　シルト混細砂　盛土　5-1層形成段階
26　10Y2/1黒　細砂混シルト　粗砂を多量含む　5-1-1層
27　10Y4/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　盛土　5-1層形成段階
28　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂　遺構埋土
29　10Y3/1オリーブ黒　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　遺構埋土
30　5Y2/1黒　粘土　細砂・炭化物を多量含む　遺構埋土
31　10Y2/1黒　粗砂混シルト　遺構埋土
32　10Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　粗砂を多量含む　5-1-2層
33　5Y3/1オリーブ黒　シルト混粗砂～極粗砂　遺構埋土か
34　7.5Y3/2オリーブ黒　シルト混粗砂～極粗砂　5-2b層偽礫を少量含む　5-1-2層の細分
35　5Y5/1灰　シルト質細砂　5-1-2層に対比可能か　土壌層
36　7.5Y4/1灰　細砂質粘土　5-2b層
37　7.5Y6/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　5-2b層
38　2.5GY6/1オリーブ灰　極細砂　5-2b層
39　10Y6/1灰　シルト混粗砂　6層か
40　5Y6/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　水路か
41　10Y4/1灰　極細砂～極粗砂　5-2ｂ層

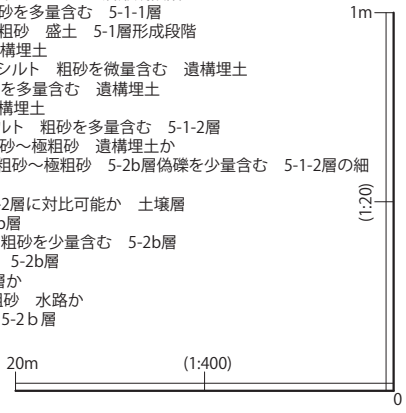
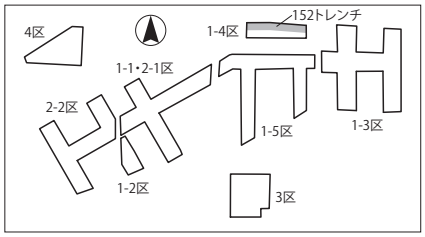


図9　1－3区　111・119トレンチ断面

1-4区



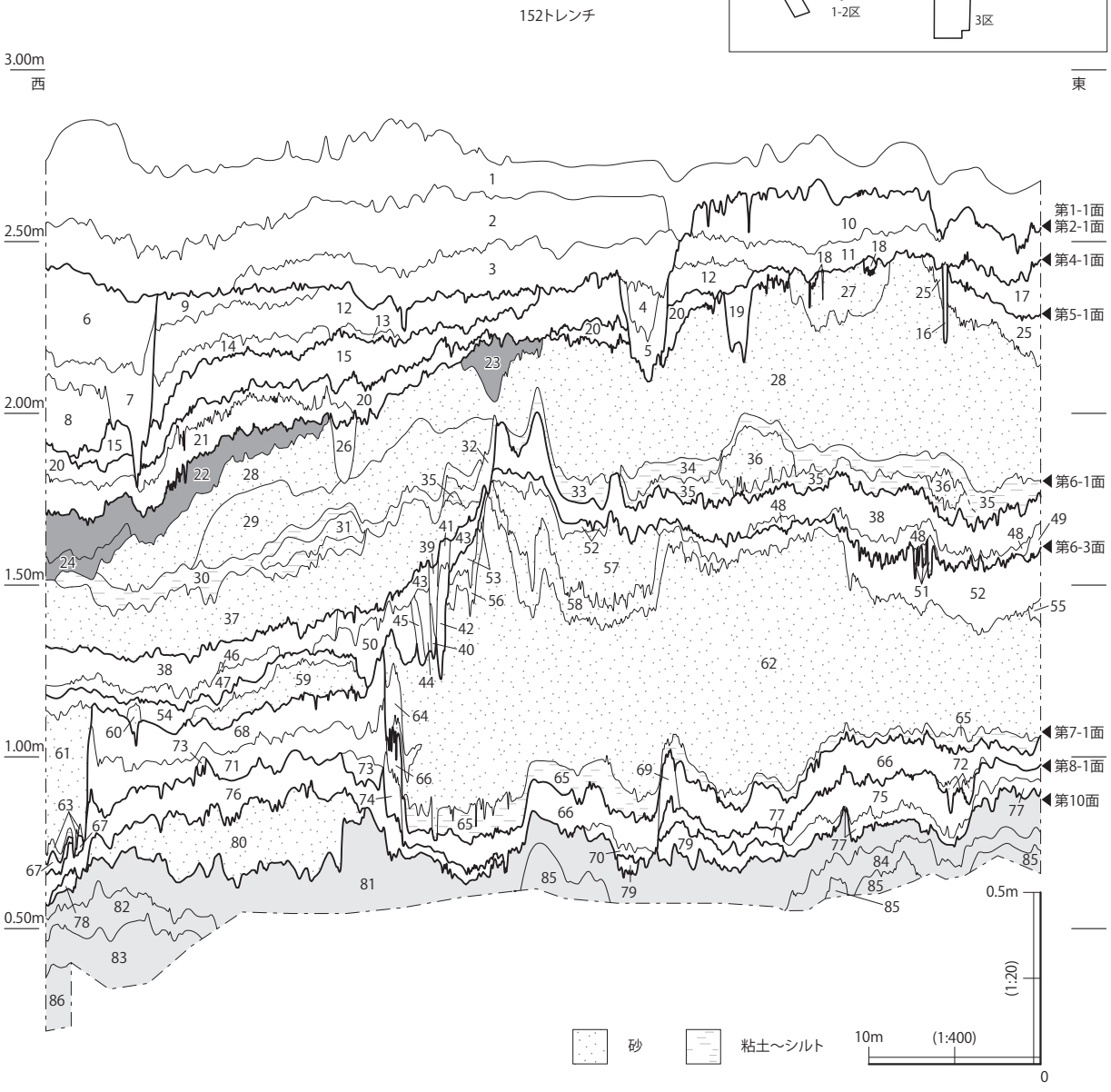


図10　1－4区　152トレンチ断面（1）

～中砂混シルトを主体とする作土で、低所ではさらに細分できた。2－1層下面では、耕作関連の溝が多数検出された。2－1層を覆う自然堆積層がなかったため、良好に遺存する水田畦畔は検出することはできなかったが、2－1区では坪境の畦畔が検出された。なお、1－3・1－5・4区では、3－1層として掘削を行っている。

2－2b層は、細砂～粗砂を主体とする水成層である。1－1～1－3・1－5、2－1・2－2区では、3－1層上面の条里型地割の水田面を覆う砂層で、1－3・1－5区では3b層として掘削を行った。

3層

作土と水成層を3層とした。平安時代前期から平安時代後期にかけて形成された。4層に細分でき、作土を3－1層と3－3層、水成層を3－2b層、3－4b層とした。

152トレンチ
1　5Y3/2オリーブ黒　シルト　粗砂を多量含む　現代作土
2　10YR3/1黒褐　細砂質シルト　現代作土
3　2.5Y3/2黒褐　シルト　粗砂を多量含む　現代作土
4　5Y5/1灰　中砂～粗砂　粘土を多量含む
5　5Y4/1灰　シルト質粘土　遺構埋土
6　5Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　遺構埋土
7　2.5Y3/1黒褐　極細砂　シルト質粘土偽礫を多量含む　遺構埋土
8　2.5Y4/1黄灰　粘土　粗砂を多量含む　遺構埋土
9　5Y4/1灰　細砂混シルト　1-1層
10　5Y4/3暗オリーブ　細砂混シルト　1-1層
11　5Y4/2灰オリーブ　細砂混シルト～粘土　1-1層
12　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　粘土(3層)偽礫を少量含む　1-1層
13　5Y4/1灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を多量含む　1-1層の細分
14　5Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　1-1層の細分
15　5Y4/1灰　細砂混粘土　粗砂を微量含む　2-1層(3層に対比される可能性あり)
16　5Y4/1灰　細砂混シルト　遺構埋土(中～近世のピット)
17　5Y3/1オリーブ黒　粗砂混シルト　溝埋土　4-1層に対比
18　5Y5/1灰　シルト混細砂　4-1層
19　N3/0暗灰　細砂混粘土　粗砂を多量含む　4-1層
20　5Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　4-1層
21　2.5GY4/1暗オリーブ灰　極細砂～細砂混シルト　4-2層
22　5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　5-1-1層
23　5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　5-1-1層
24　5Y3/2オリーブ黒　シルト質粘土　5-1-2層　遺構埋土の可能性あり
25　N3/0暗灰　シルト質粘土　遺構埋土
26　5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　遺構埋土
27　5Y4/1灰　細砂　5-2b層
28　5Y5/1灰　極細砂～極粗砂　5-2b層
29　5Y7/1灰白　極細砂～極粗砂　5-2b層
30　N6/0灰　粘土　5-2b層
31　5Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　5-2b層
32　5Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　5-2b層
33　5Y6/1灰　シルト質粘土　極細砂のラミナあり　5-2b層
34　5Y5/1灰　シルト質粘土　極細砂のラミナあり　5-2b層
35　5Y4/1灰　シルト質粘土　シルト質極細砂　5-2b層
36　5Y7/1灰白　極細砂～極粗砂　5-2b層
37　7.5Y6/1灰　極細砂～粗砂　5-2b層
38　2.5Y5/1黄灰　シルト混細砂～中砂(偽礫状)を多量含む　6-1層
39　2.5Y4/1黄灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
40　5Y4/1灰　シルト混極細砂　遺構埋土
41　2.5Y5/1黄灰　粗砂～極粗砂　細砂を少量含む　遺構埋土
42　5Y5/1灰　粗砂　細砂を少量含む　遺構埋土
43　5Y4/1灰　シルト　粗砂～極粗砂　6-1層
44　2.5Y5/1黄灰　粗砂～極粗砂　礫2～3㎜大を少量含む　遺構埋土
45　2.5Y6/1黄灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
46　2.5Y7/2灰黄　粗砂　6-1b層
47　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　6-2層
48　2.5Y5/1黄灰　粗砂混シルト　6-2層
49　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　畦畔
50　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　6-2層
51　5Y6/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　6-2b層
52　2.5Y4/1黄灰　極細砂質シルト　粗砂を多量含む　6-3層
53　5Y5/1灰　シルト質極細砂　斜面堆積物　6-3層
54　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂～細砂　粗砂を多量含む　6-4層
55　2.5Y4/1黄灰　粗砂混シルト　遺構埋土
56　2.5Y6/1黄灰　極細砂　6-4b層
57　2.5Y6/2灰黄　極細砂～中砂　6-4b層
58　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　6-4b層
59　7.5Y6/1灰　細砂～粗砂　6-4b層
60　5Y7/1灰白　細砂～極粗砂　6-4b層
61　2.5Y7/2灰黄　細砂～粗砂　6-4b層
62　5Y7/2灰白　極細砂～極粗砂　シルト質粘土を含む　6-4b層
63　5Y6/1灰　シルト質粘土　6-4b層
64　N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　崩落土
65　N5/0灰　シルト質粘土　6-4b層
66　N3/0暗灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　7-1層
67　5Y5/1灰　粗砂混シルト質粘土　7-1層
68　5Y4/1灰　シルト混極細砂～細砂　7-1層
69　N3/0暗灰　シルト質粘土　畦畔
70　N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　7-2層
71　5Y4/1灰　シルト質粘土　細砂～中砂を多量含む　7-2層
72　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　7b層
73　N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
74　N4/0灰　シルト質粘土　粗砂～極粗砂を多量含む　斜面堆積物　7-2層の細分
75　N3/0暗灰　シルト質粘土　8-1層
76　N3/0暗灰　極細砂質シルト　粗砂を多量含む　8-1層
77　N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　8-2層
78　7.5Y6/1灰　粗砂混シルト　弱い土壌化　9-1層
79　N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　弱い土壌化　9-1層に対比できるか
80　7.5Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　9b層
81　N5/0灰　シルト質粘土　10層
82　N4/0灰　シルト質粘土　10層
83　N4/0灰　シルト質粘土　10層
84　N5/0灰　シルト質粘土　10層
85　N6/0灰　シルト質粘土　10層
86　N3/0暗灰　粘土　植物遺体を含む　10層

図11　1－4区　152トレンチ断面（2）

3－1層は、粗砂混シルトを主体とする作土である。平安時代後期。3－2b層は粗砂～極粗砂を主体とする。3－1層の畦畔直下以外に遺存する場合がほとんどであったが、1－5・2－1区では調査地南側に遺存した（図5の3b層対応）。3－3層は、中砂～粗砂混シルトを主体とする作土である。平安時代前期か。自然堆積層を挟在しない場合が多く、3－1層と明瞭に区分できない場合が多かった。なお、1－3・1－5・4区では、4－1・4－2層として掘削を行った。1－3区では、東西に検出された微高地を境に、北側と南側で地層の対比が困難で、微高地北側で4－1層として掘削した地層は、さらに古い段階に形成された可能性がある。3－4b層は粗砂～極粗砂を主体とする。1－1・2－1区の南側を中心に堆積が認められた。2－2・13－4区では5－2b層の直上に堆積する2層に取り込まれ、作土として用いられたと考えており、同範囲の2層は砂礫の混入が顕著である。

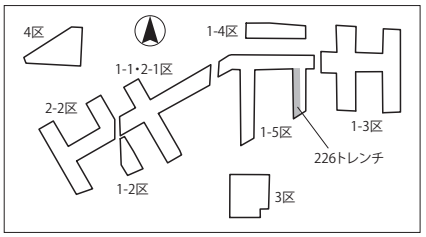
また、1－5区の微高地上の4－1層とした古土壌から奈良時代の遺物が出土した。1－4区4－1層からも奈良時代の遺物が出土したが、明確な水田畦畔は検出することができなかった。微高地上の4－1層を低地の4－1層の連続性が確認できた地点はなかった。4区では、4－1層とした当該期の作土から、奈良時代の遺物とともに、平安時代の遺物が出土しており、1－5区微高地上の4－1層と1－4区4－1層の時期の下限については現時点で不明である。

4層

低地を中心に堆積する作土と微高地上に形成された古土壌を4層とした。古墳時代後期から飛鳥時代前期にかけて形成された。2～3層以上に細分が可能である。作土は泥質で、低地を中心に堆積し、2－1・2－2区では同層によって弥生時代に形成された微高地周辺の平坦化が進む。

4－1層は細砂混シルトを主体とする。古墳時代後期～飛鳥時代前期。4－2層は、極細砂～細砂混

1-5区



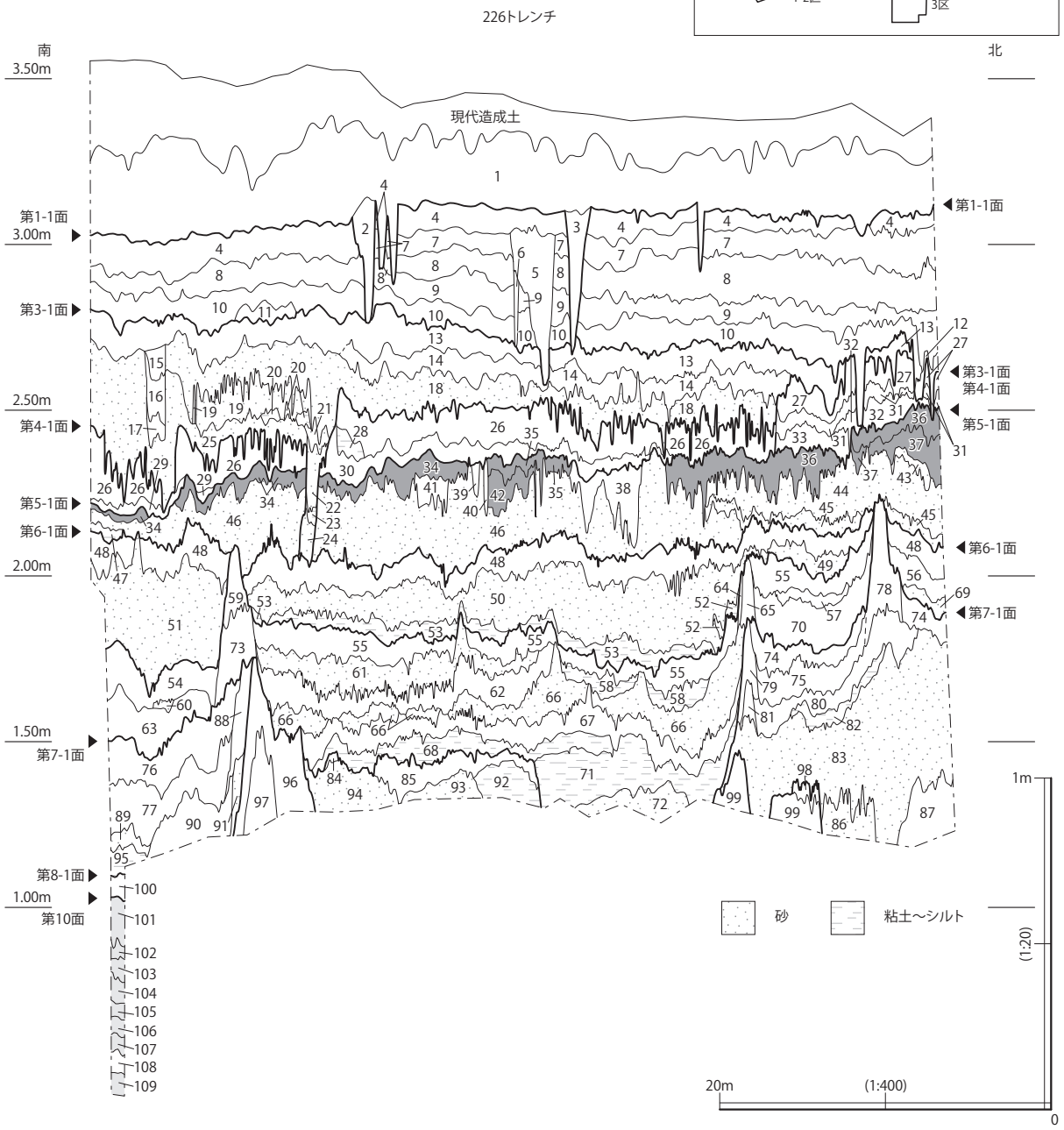


図 12　1－5区　226 トレンチ断面（1）

シルトを主体とする。古墳時代後期。4－3層は、極細砂混粘土を主体とする。古墳時代中期～後期。各地層の上面で、畦畔ないし擬似畦畔が検出された。

4層は細分を行ったが、層相は類似しており、自然堆積層を挟まない限り、地層の境界は不明瞭である。2－1区では、4－2・4－3層の直上に部分的に砂層が堆積したため、4層が明確に分かれ、第4－2面及び第4－3面の擬似畦畔が、第4－1面の畦畔と異なる位置で検出された。また、1－5区では、古墳時代の集落南側に堆積する4層は、5層以上に細分できた。

226トレンチ
1　2.5Y4/2暗灰黄　現代作土
2　N4/0灰　シルト質細砂　遺構埋土
3　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　遺構埋土
4　7.5Y5/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　1-1層
5　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト　粗砂を少量含む　遺構埋土
6　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　遺構埋土
7　N5/0灰　細砂～中砂混シルト　1-1層
8　5Y4/1灰　極細砂混シルト質粘土　1-3層
9　10Y4/1灰　細砂～中砂　1-3層
10　2.5Y4/1黄灰　粗砂～極粗砂混シルト　1-3層
11　2.5Y5/1黄灰　粗砂混シルト　1-3層
12　5Y5/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
13　2.5Y5/2暗灰黄　シルト混粗砂～極粗砂　3-1層
14　10Y4/1灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　3-1層
15　2.5Y7/4浅黄　粗砂　2～3㎜礫を少量含む　遺構埋土
16　5B5/1青灰　粘土　遺構埋土
17　5B6/1青灰　シルト　遺構埋土
18　2.5Y6/3にぶい黄　極細砂～細砂　粗砂～極粗砂を多量含む　3b層
19　5B5/1青灰　シルト～極細砂　3b層
20　5Y5/1灰　細砂混シルト　3b層
21　10Y3/1オリーブ黒　シルト質極細砂　3b層
22　2.5Y6/2灰黄　細砂～中砂　3b層
23　N4/0灰　粘土　3b層
24　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　3b層
25　2.5Y5/1黄灰　極細砂と粗砂の互層　3b層
26　5BG4/1暗青灰　細砂混シルト　4-1層
27　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　4-1層
28　N5/0灰　シルト～粘土　4-2b層
29　5B6/1青灰　極細砂～細砂　4-2層
30　10BG5/1青灰　シルト質細砂　4-2層
31　N4/0灰　極細砂～細砂混シルト　4-3層
32　10Y4/1灰　細砂混シルト　弱い土壌化　4-3層
33　5BG4/1暗青灰　粗砂混シルト　4-3層の細分
34　N5/0灰　シルト質粘土　5-1層
35　N5/0灰　シルト質粘土　5-1層
36　N4/0灰　細砂混シルト　5-1層
37　N3/0暗灰　細砂混シルト　5-1層の細分
38　N5/0灰　シルト混粗砂　遺構埋土
39　5Y5/2灰オリーブ　シルト混粗砂　遺構埋土
40　N4/0灰　シルト混粗砂　遺構埋土
41　N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
42　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　5-1層の細分
43　10Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を含む　5-2b層
44　2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂　5-2b層
45　N6/0灰　シルト質極細砂　5-2b層
46　5B5/1青灰　粗砂～極粗砂と細砂の互層　5-2b層
47　N5/0灰　細砂混シルト　5-2b層
48　5B4/1暗青灰　細砂混シルト　6-1層
49　N5/0灰　粗砂～極粗砂　6-1b層
50　N5/0灰　粗砂～極粗砂　6-1b層
51　5Y5/1灰　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-1b層
52　N6/0灰　粘土　6-1b層
53　N6/0灰　シルト質粘土　6-1b層
54　N4/0灰　粗砂混シルト　6-2層
55　N4/0灰　シルト質粘土　6-2層
56　N3/0暗灰　シルト質極細砂～細砂　粗砂を多量含む　6-2層
57　5B5/1青灰　砂礫混シルト　6-2層
58　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　6-2b層
59　5Y4/1灰　シルト質極細砂　粗砂を多量含む　畦畔
60　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　6-2b層
61　5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　6-2b層
62　N4/0灰　極細砂混シルト　作土か
63　N4/0灰　シルト質粘土　作土か
64　10Y4/1灰　シルト混粗砂　畦畔
65　10Y4/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　畦畔
66　N5/0灰　粗砂～極粗砂　粘土をラミナ状に含む　6b層
67　5Y5/1灰　シルト質粘土　作土か
68　10Y4/1灰　シルト質粘土　6-4b層
69　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
70　5B5/1青灰　極細砂質シルト　作土か
71　5Y5/1灰　極細砂質粘土　6-4b層
72　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
73　5Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　畦畔
74　5B5/1青灰　粗砂混シルト　7-1層
75　N5/0灰　シルト質粘土　極細砂～細砂を多量含む　7-1層の細分
76　5B5/1青灰　粗砂混シルト　7-1層
77　10Y5/1灰　極細砂質シルト　作土　7-2層
78　5B5/1青灰　シルト質粘土　畦畔
79　5B5/1青灰　極細砂混シルト　畦畔
80　5Y3/1オリーブ黒　シルト質極細砂　7-2層
81　10Y6/1灰　シルト混極細砂　7-3b層
82　10Y5/1灰　シルト　7-3b層
83　N6/0灰　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　7-3b層
84　N4/0灰　極細砂混シルト　7-1層
85　N3/0暗灰　シルト混粗砂～極粗砂　古土壌　7-1層
86　N5/0灰　シルト質極細砂　7-3b層
87　N5/0灰　シルト混粗砂　7-3b層
88　10Y5/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　極細砂混シルト偽礫を含む　畦畔
89　10Y5/1灰　粗砂～極粗砂　7-3b層
90　N5/0灰　シルト混粗砂　作土か
91　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　7-3b層
92　N3/0暗灰　シルト質粘土　7-3b層
93　5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　7-3b層
94　10Y5/1灰　粗砂～2～3㎜礫　極細砂～細砂の薄層を挟む　7-3b層
95　5B5/1青灰　粘土　7-3b層
96　10Y5/1灰　シルト混粗砂　極細砂～細砂を含む　畦畔
97　10Y4/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　畦畔
98　N3/0暗灰　粘土　8層に対比できるか
99　10Y4/1灰　極細砂混シルト　8層に対比できるか
100　5B5/1青灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　8層に対比できるか
101　5B6/1青灰　粘土　10層
102　10Y5/1灰　粗砂～極粗砂　10層
103　5Y5/1灰　粘土　粗砂を微量含む　10層
104　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　10層
105　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　10層
106　5Y4/1灰　粗砂　10層
107　5Y3/1オリーブ黒　粘土　炭化物を微量含む　10層
108　5Y4/1灰　粘土　古土壌
109　5Y4/1灰　粘土　10層

図13　1－5区　226トレンチ断面（2）

なお、1－3区では、3－1層と同様に、微高地北側4－2層を当該期に形成されたと考えたが、微高地南側の地層と対比させることが困難であった。「4－2層の細分」として掘削した地層が対比できる可能性がある。

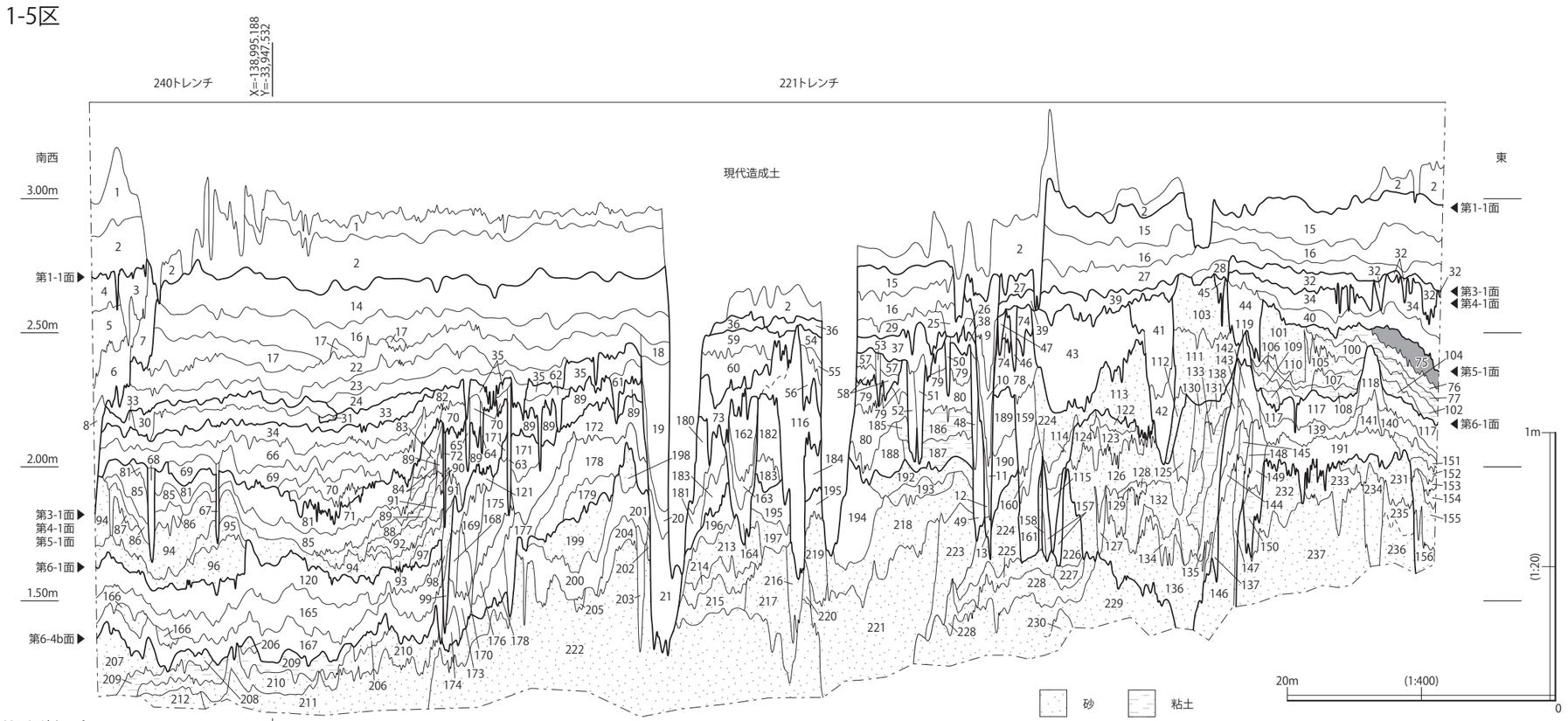
5層

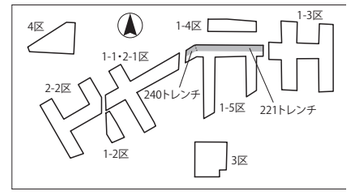
低地で形成された作土と微高地上に形成された古土壌､その下位に堆積する自然堆積層を5層とした。弥生時代後期から古墳時代中期にかけて形成される。作土及び古土壌は2層以上、自然堆積層は3層以上に細分が可能である。

5－1層は作土及び古土壌である。1－1・2－1区の5－1層とした作土は、シルト～粘土を主体とし、区画が広い水田が検出された。微高地上の5－1層とした古土壌は、砂礫を主体とし、直下で弥生時代後期から古墳時代の集落が検出された。

5－2b層は弥生時代後期以降、砂・泥層によって構成された地層を総称した。5－2b層は、1）第6－1面の廃絶後、一部の地域が水没することによって泥層が堆積する、2）氾濫堆積物の砂層が低所を中心に堆積する、3）砂層上面にできた起伏の低所に泥層が堆積して平坦化が進む、という過程で堆積する。

1-5区

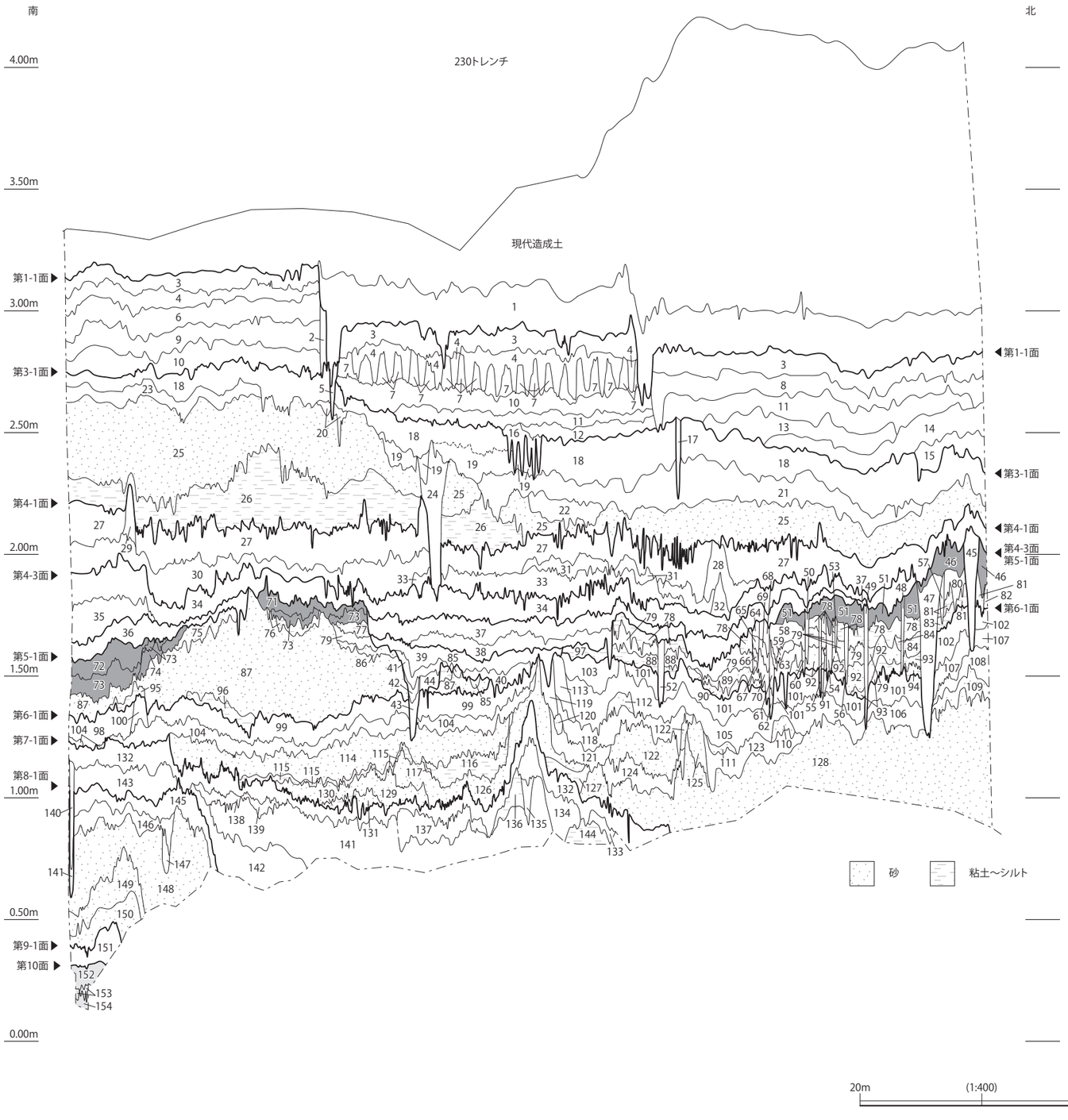


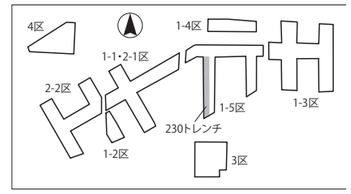


221・240トレンチ
1　2.5Y3/1黒褐　粗砂混シルト　現代作土
2　2.5Y4/2暗灰黄　細砂混シルト　粗砂～極粗砂を少量含む　旧作土
3　5B5/1青灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　遺構埋土
4　5Y5/1灰　粗砂混シルト　耕土　遺構埋土
5　2.5GY4/1暗オリーブ灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　遺構埋土
6　N5/0灰　極細砂～細砂　溜池　遺構埋土
7　5Y4/2灰オリーブ　粘土　湿性堆積物　遺構埋土
8　N4/0灰　粘土　遺構埋土
9　10YR5/6黄褐　粗砂混シルト　遺構埋土
10　N5/0灰　粘土　遺構埋土
11　N4/0灰　粘土　粗砂を少量含む　遺構埋土
12　N5/0灰　粗砂混シルト　遺構埋土
13　N4/0灰　粗砂～極粗砂　細砂混シルト　加工時形成層　遺構埋土
14　7.5Y5/1灰　極細砂混シルト　1-1層
15　5Y4/1灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　1-1層
16　7.5Y5/2灰オリーブ　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　1-1層の細分
17　5Y5/2灰オリーブ　粗砂混シルト　1-3層
18　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂　遺構埋土
19　5Y4/1灰　粗砂混シルト　遺構埋土
20　5B5/1青灰　粘土　遺構埋土
21　5Y5/1灰　粗砂混シルト　遺構埋土
22　10Y5/1灰　細砂混シルト　1-3層
23　N4/0灰　シルト混細砂　1-3層
24　5B5/1青灰　シルト質粘土　1-3層
25　5B5/1青灰　粘土　遺構埋土
26　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　遺構埋土
27　5Y5/2灰オリーブ　シルト混極細砂～細砂　1-3層の細分
28　10Y4/1灰　極細砂混シルト　遺構埋土
29　10Y4/1灰　粗砂混シルト　1-3層の細分
30　5B5/1青灰　シルト混細砂　3-1層 (2-1区　2層に対比)
31　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　3-2b層
32　10Y5/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　3-1層 (2-1区　1層に対比)
33　10Y5/1灰　粗砂混シルト　3-1層
34　N3/0暗灰　シルト質極細砂～細砂　4-1層
35　N3/0暗灰　シルト質粗砂～極粗砂　4-1層
36　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　4-1層
37　N3/0暗灰　細砂混シルト　4-1層
38　N3/0暗灰　シルト混粗砂　4-1層
39　10YR4/2灰黄褐　シルト混極細砂　粗砂～極粗砂を少量含む　4-1層
40　N4/0灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　4-1層
41　10YR4/3にぶい黄褐　粗砂～極粗砂　礫1cm大未満を多量含む　遺構埋土
42　2.5Y5/3黄褐　粗砂～極粗砂　礫1cm大未満を多量含む　水成層　遺構埋土
43　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　水成層　遺構埋土
44　10YR4/3にぶい黄褐　シルト質粘土　極細砂混シルトを少量含む　粗砂を少量含む　遺構埋土
45　10YR4/3にぶい黄褐　シルト混極細砂～細砂　遺構埋土
46　2.5Y4/1黄灰　極細砂～細砂　遺構埋土
47　2.5Y4/1黄灰　極細砂～細砂　極粗砂を少量含む　遺構埋土
48　N3/0暗灰　シルト混粗砂　遺構埋土
49　N5/0灰　極細砂～細砂　粗砂～極粗砂を少量含む　遺構埋土
50　N3/0暗灰　細砂混シルト　遺構埋土
51　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　遺構埋土
52　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　遺構埋土
53　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　遺構埋土
54　2.5Y4/1黄灰　極細砂　粗砂を少量含む　4-2層
55　2.5Y3/1黒褐　極細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
56　2.5Y3/1黒褐　極細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
57　10YR4/1褐灰　極細砂　粗砂を少量含む　4-2層
58　10YR5/1褐灰　極細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
59　2.5Y4/2暗灰黄　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　4-2層
60　2.5Y4/2暗灰黄　極細砂～細砂　極細砂混シルトを少量含む　遺構埋土
61　N4/0灰　細砂～中砂　粗砂を少量含む　古土壌　4層の細分
62　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　古土壌　4層の細分
63　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　遺構埋土
64　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂　遺構埋土
65　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　遺構埋土
66　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　4層の細分
67　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　遺構埋土
68　5B4/1暗青灰　極細砂混シルト　遺構埋土
69　N4/0灰　粗砂混シルト質粘土　4層の細分
70　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　4層の細分　5層に対応か
71　N4/0灰　極細砂混シルト　遺構埋土
72　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　遺構埋土
73　N4/0灰　極細砂～細砂　粗砂を微量含む　4層
74　5Y4/1灰　極細砂　細砂を少量含む　粗砂を微量含む　古墳時代の盛土
75　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　5-1層
76　N6/0灰　シルト質粘土　弱い土壌化　5-2-1b層
77　N4/0灰　シルト質粘土　5-2-1b層
78　5Y5/1灰　極細砂～細砂　細砂を少量含む　古土壌由来の細砂混シルト偽礫を少量含む　盛土
79　5B5/1青灰　極細砂～細砂　粗砂を多量含む　盛土
80　5B6/1青灰　極細砂～細砂　粗砂を微量含む　盛土　79の細分
81　N4/0灰　細砂混シルト　弥生時代後期に形成された古土壌　5-2-2層
82　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　粗砂を多量含む　5-2-2層
83　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　斜面堆積物　5-2-2層
84　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　5-2-2b層
85　N5/0灰　シルト質粘土　弥生時代後期に形成された古土壌　5-2-2層
86　N4/0灰　極細砂～細砂　5-2-2層の細分
87　5B4/1暗青灰　極細砂～細砂　粗砂を多量含む　5-2-2b層
88　5B5/1青灰　シルト質極細砂　5-2-2b層
89　5Y5/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　5-2-2b層
90　N5/0灰　細砂　5-2-2b層
91　5Y5/2灰オリーブ　極細砂～細砂　粗砂を多量含む　5-2-2b層
92　N5/0灰　中砂～粗砂　極細砂を少量含む　5-2-2b層
93　N5/0灰　シルト質極細砂　5-2-2b層
94　5B3/1暗青灰　粗砂～極粗砂　5-2-2b層
95　5Y5/1灰　極細砂～細砂　5-2-2b層
96　5B5/1青灰　極細砂～細砂　5-2-2b層
97　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　5-2-2b層
98　N5/0灰　シルト混極細砂～細砂　遺構埋土　5-2-2b層
99　5Y6/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂と細砂の互層　遺構埋土　5-2-2b層
100　10YR5/3にぶい黄褐　粗砂～極粗砂　遺構埋土の可能性あり　5-2-2b層
101　10YR5/3にぶい黄褐　粗砂～極粗砂　5-2-2b層
102　N5/0灰　シルト質粘土　5-2-2b層
103　10YR5/3にぶい黄褐　極細砂　粗砂を少量含む　鉄分沈着顕著　5-2-2b層
104　N3/0暗灰　粗砂　極細砂を少量含む　5-2-2b層
105　10YR5/3にぶい黄褐　粗砂～極粗砂　5-2-2b層
106　10YR5/2灰黄褐　シルト質極細砂　5-2-2b層
107　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　5-2-2b層
108　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂混シルト　5-2-2b層
109　10YR4/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　5-2-2b層
110　10YR5/2灰黄褐　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　5-2-2b層
111　10YR5/2灰黄褐　極細砂～細砂　5-2-2b層
112　10YR5/1褐灰　極粗砂　5-2-2b層
113　2.5Y5/1黄灰　極細砂　粗砂を少量含む　5-2-2b層
114　N5/0灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
115　N4/0灰　極細砂　粗砂混シルトを少量含む　遺構埋土
116　2.5Y6/3にぶい黄　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　遺構埋土
117　N3/0暗灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　6-1層
118　N4/0灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　畦畔
119　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂　粗砂を少量含む　畦畔
120　5B4/1暗青灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　6-1層
121　5Y5/1灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　斜面堆積物　6-1層
122　N5/0灰　極細砂　6-1層
123　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　6-1b層
124　N5/0灰　極細砂～細砂　6-1b層
125　10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂　6-1b層
126　2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂　6-1b層
127　10Y5/1灰　シルト質極細砂　6-1b層
128　2.5Y5/1黄灰　粗砂～極粗砂　6-1b層
129　10Y5/1灰　極細砂～細砂　6-1b層
130　N5/0灰　極細砂　6-1b層
131　N4/0灰　極細砂　6-1b層
132　N6/0灰　極細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-1b層
133　5B5/1青灰　シルト質粘土　6-1b層
134　N5/0灰　極細砂　6-1b層
135　N4/0灰　極細砂　6-1b層
136　2.5Y6/3にぶい黄　極細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-1b層
137　10Y4/1灰　極細砂　6-1b層
138　N4/0灰　極細砂～細砂　斜面堆積物　畦畔
139　10Y4/1灰　極細砂～細砂　粗砂～極粗砂を多量含む　6-2層
140　N3/0暗灰　中砂～粗砂混シルト　6-2層
141　5B4/1暗青灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　畦畔
142　10Y4/1灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　盛土　畦畔
143　N5/0灰　極細砂～細砂　粗砂を微量含む　盛土か　畦畔
144　N3/0暗灰　極細砂　粗砂～極粗砂を少量含む　弱い土壌化
145　10Y5/1灰　極細砂　粗砂を微量含む　6-2b層
146　2.5Y6/2灰黄　極細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-2b層
147　10Y4/1灰　極細砂～細砂　6-2b層
148　N4/0灰　細砂　粗砂～礫2～3㎜を多量含む　弱い土壌化
149　10Y5/1灰　極細砂～細砂　礫3～5㎜を少量含む　盛土　畦畔
150　10Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　6-2b層
151　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-2b層
152　N3/0暗灰　シルト混粗砂　6-2b層
153　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-2b層
154　N4/0灰　粗砂　6-2b層
155　N3/0暗灰　シルト混粗砂　6-2b層
156　N4/0灰　極細砂と粗砂の互層　6-2b層
157　2.5Y6/2灰黄　粗砂と極細砂の互層　遺構埋土
158　5B5/1青灰　極細砂～細砂　遺構埋土
159　10Y4/1灰　中砂～粗砂　極細砂～細砂を少量含む　遺構埋土
160　N5/0灰　細砂混シルト　遺構埋土
161　2.5Y5/1黄灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
162　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂　極粗砂～礫5㎜以下を多量含む　遺構埋土
163　N3/0暗灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
164　N4/0灰　極細砂～細砂　シルトを少量含む　遺構埋土
165　10Y4/1灰　粗砂混シルト　6-2層
166　10Y4/1灰　極細砂　粗砂～極粗砂を少量含む　6-2b層
167　N4/0灰　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　6-2層の細分
168　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　水成層　遺構埋土
169　5Y5/1灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
170　N5/0灰　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　遺構埋土
171　2.5Y4/1黄灰　シルト混粘土　溝埋土の可能性あり
172　N4/0灰　シルト質粘土　溝埋土の可能性あり
173　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂～極粗砂　遺構埋土
174　N5/0灰　細砂と粗砂の互層　遺構埋土
175　5Y5/1灰　シルト混粗砂　盛土
176　N3/0暗灰　極細砂混シルト　古土壌　6-2層の細分
177　N4/0灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　水成層　一部弱い土壌化
178　N4/0灰　シルト混極細砂　盛土
179　N4/0灰　細砂～中砂　粗砂を多量含む　盛土
180　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　盛土
181　5Y5/1灰　極細砂～細砂　礫5mm～1cmを少量含む　盛土
182　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　盛土
183　N5/0灰　極細砂～細砂　粗砂を多量含む　盛土
184　10Y4/1灰　極細砂　粗砂を少量含む　盛土
185　N5/0灰　極細砂　溝埋土の可能性あり　6-2b層
186　N5/0灰　シルト質粘土　溝埋土の可能性あり　6-2b層
187　N5/0灰　シルト質粘土　溝埋土の可能性あり
188　5PB4/1暗青灰　極細砂～細砂　粗砂～極粗砂を少量含む　盛土か
189　5B5/1青灰　粗砂～極粗砂　盛土
190　N5/0灰　粗砂～極粗砂　盛土
191　10Y4/1灰　シルト混極細砂　粗砂を少量含む　6-3層
192　5B5/1青灰　極細砂～細砂　6-4b層
193　2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-4b層
194　10Y4/1灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　6-4b層
195　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　6-4b層
196　2.5Y5/1黄灰　極細砂　粗砂を少量含む　6-4b層
197　N5/0灰　極細砂　6-4b層
198　5B6/1青灰　極細砂～細砂　6-4b層
199　5B5/1青灰　極細砂～細砂　6-4b層
200　N4/0灰　極細砂～細砂　弱い土壌化　6-4b層
201　2.5Y6/2灰黄　極細砂　6-4b層
202　5Y5/1灰　極細砂～細砂　粗砂を少量含む　6-4b層
203　N4/0灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土か
204　N5/0灰　極細砂　粗砂を少量含む　弱い土壌化　6-4b層
205　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む　6-4b層
206　N4/0灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
207　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
208　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
209　10Y4/1灰　シルト質粘土　6-4b層
210　2.5Y5/1黄灰　粗砂　6-4b層
211　N6/0灰　極細砂～細砂　6-4b層
212　2.5Y5/1黄灰　極細砂　6-4b層
213　5Y5/1灰　粗砂～礫1cm　極細砂と粗砂の互層を含む　6-4b層
214　5Y4/1灰　極細砂～細砂　6-4b層
215　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
216　N4/0灰　細砂と粗砂の互層　6-4b層
217　N5/0灰　極細砂～シルト質極細砂　6-4b層
218　N5/0灰　極細砂　シルト質粘土を少量含む　6-4b層
219　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
220　N4/0灰　極細砂　粗砂を少量含む　6-4b層
221　N5/0灰　極細砂～細砂　6-4b層
222　5Y5/2灰オリーブ　極細砂～細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-4b層
223　5Y5/1灰　極細砂～細砂とシルト質極細砂の互層　6-4b層
224　2.5Y4/1黄灰　極細砂と粗砂～極粗砂の互層　上位は弱い土壌化　6-4b層
225　10Y3/1オリーブ黒　シルト～極細砂　6-4b層
226　N6/0灰　極細砂～細砂　6-4b層
227　10Y4/1灰　粗砂～礫2～5mm　6-4b層
228　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　6-4b層
229　2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂　6-4b層
230　N6/0灰　極細砂～細砂　6-4b層
231　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
232　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂～極粗砂　6-4b層
233　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂～極粗砂　6-4b層
234　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　6-4b層
235　N5/0灰　粗砂～極粗砂　細砂を少量含む　弱い土壌化　6-4b層
236　N5/0灰　極細砂　シルト質極細砂を少量含む　6-4b層
237　N6/0灰　極細砂～細砂　シルト質極細砂を少量含む　6-4b層

図 14　1－5区　221・240 トレンチ断面

1-5区

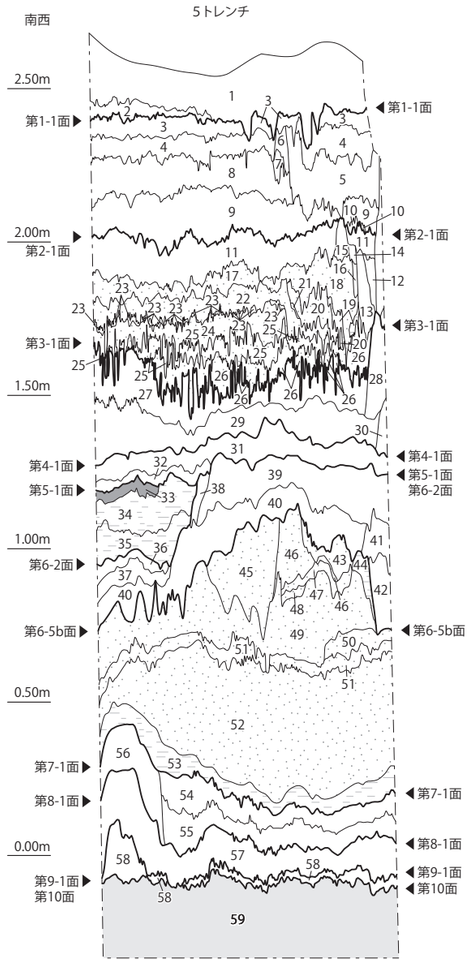


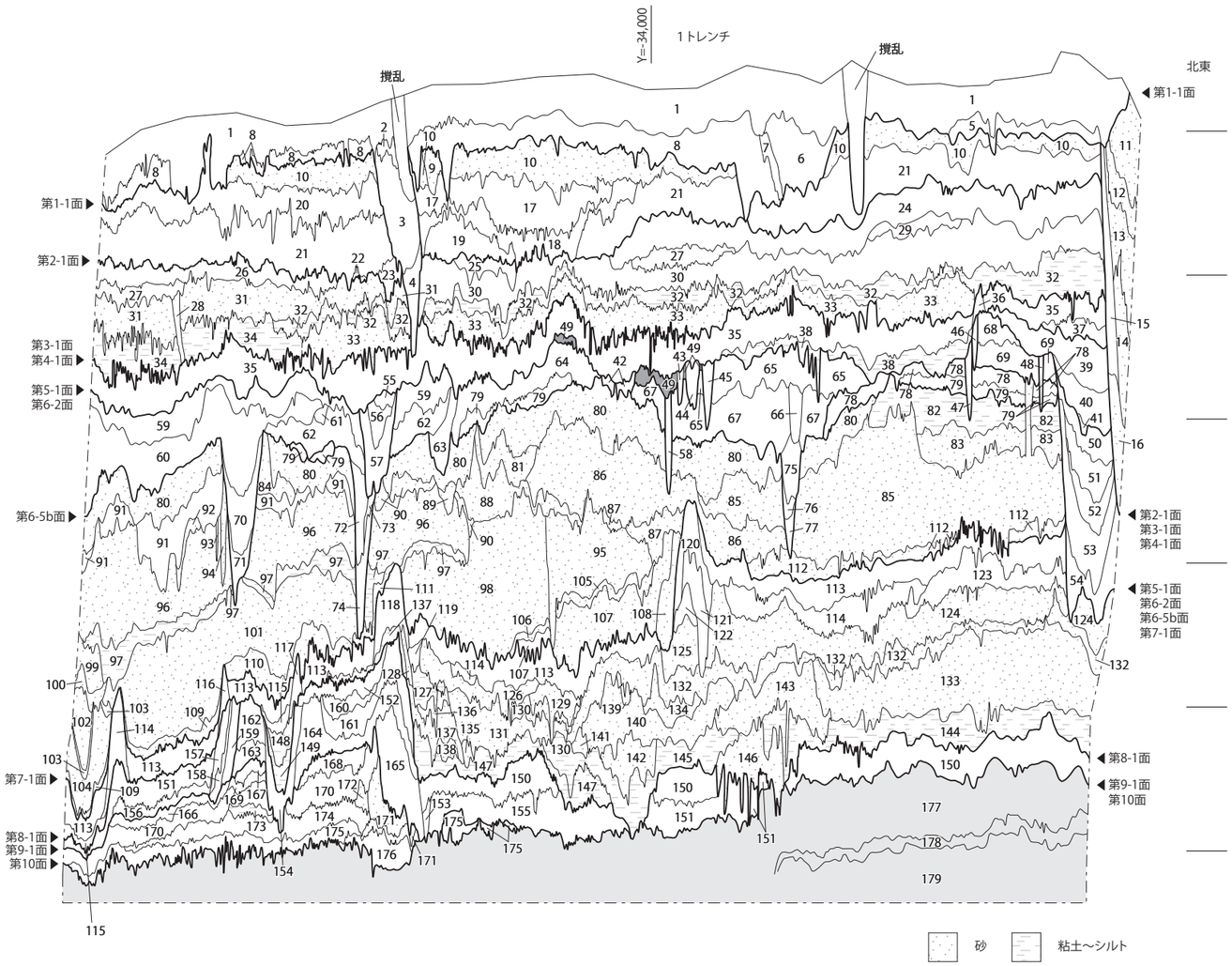


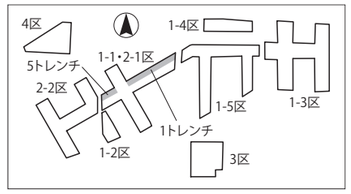
230トレンチ
1 2.5Y4/2暗灰黄　粗砂混シルト　現代作土
2 10Y5/1灰　シルト混極細砂　遺構埋土
3 10YR4/4褐　シルト質極細砂〜細砂　1-1層
4 10YR3/2黒褐　シルト質極細砂〜細砂　1-1層の細分
5 10Y5/1灰　細砂混シルト　遺構埋土
6 10YR4/2灰黄褐　シルト混極細砂〜細砂　1-3層
7 2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト　1-3層
8 5Y4/2灰オリーブ　極細砂混シルト　中砂〜粗砂を少量含む　1-3層
9 7.5YR4/3褐　細砂混シルト　1-3層
10 10YR5/2灰黄褐　極細砂混シルト　1-3層
11 10YR5/2灰黄褐　極細砂混シルト　1-3層
12 5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト　1-3層
13 5Y4/1灰　極細砂混シルト　1-3層
14 5Y5/2灰オリーブ　極細砂混シルト　1-3層
15 5Y6/2灰オリーブ　細砂混シルト　遺構埋土
16 10Y5/1灰　細砂混シルト　遺構埋土
17 5Y5/2灰オリーブ　極細砂混シルト　遺構埋土
18 2.5Y5/2暗灰黄　粗砂〜極粗砂混シルト　3-1層
19 2.5Y5/2暗灰黄　シルト混極細砂　3-1層
20 2.5Y5/2暗灰黄　シルト混極細砂　3-1層
21 2.5Y5/2暗灰黄　粗砂〜極粗砂混シルト　3-1層
22 2.5Y5/2暗灰黄　粗砂〜極粗砂　3-1層
23 2.5Y5/2暗灰黄　シルト混粗砂　3-1層
24 5Y6/4オリーブ黄　粗砂〜極粗砂と粘土と極細砂の互層　遺構埋土
25 2.5Y6/3にぶい黄　粗砂〜極粗砂　3b層
26 10Y6/1灰　極細砂質シルト　3b層
27 5BG4/1暗青灰　粗砂混シルト　4-1層
28 N4/0灰　シルト質粘土　畦畔
29 N4/0灰　シルト質粘土　畦畔
30 N4/0灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　4-1層
31 N4/0灰　極細砂混シルト　4-2層
32 10Y4/1灰　シルト質粘土　畦畔
33 5Y6/3オリーブ黄　極細砂　4-2層の細分
34 7.5Y5/1灰　シルト質粘土　4-3層
35 7.5Y5/1灰　シルト質粘土　遺構埋土
36 7.5Y5/1灰　シルト質粘土　4-4層　落ち込み埋土
37 5Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　4-3層
38 10Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　4-3層の細分
39 5Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　4-4層
40 5Y5/1灰　シルト質粘土　4-4層の細分
41 5B4/1暗青灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　4-4層の細分
42 5B4/1暗青灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　遺構埋土
43 5B5/1青灰　シルト質粘土　炭化物を少量含む　遺構埋土
44 5B4/1暗青灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　4-4層の細分
45 N5/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
46 10Y4/1灰　粗砂混シルト　5-1層
47 N5/0灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　遺構埋土
48 N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
49 N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　遺構埋土
50 N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
51 5B3/1暗青灰　シルト質粘土　5-1層の細分
52 5B3/1暗青灰　シルト質粘土　遺構埋土
53 N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
54 N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　遺構埋土
55 N5/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
56 N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
57 N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
58 5B4/1暗青灰　シルト質粘土　シルト偽礫を多量含む　遺構埋土
59 N3/0暗灰　シルト質粘土　炭化物を含む　遺構埋土
60 N4/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
61 N4/0灰　シルト質粘土　粘土偽礫を含む　遺構埋土
62 N5/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
63 N4/0灰　極細砂混シルト　粘土偽礫を含む　遺構埋土
64 N4/0灰　細砂混シルト　遺構埋土
65 N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　遺構埋土
66 N3/0暗灰　シルト　炭化物を多量含む　遺構埋土
67 N5/0灰　シルト質粘土　遺構埋土
68 10Y4/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
69 N4/0灰　シルト混粗砂〜極粗砂　遺構埋土
70 N5/0灰　シルト混粗砂〜極粗砂　粗砂を多量含む　遺構埋土
71 10YR5/2灰黄褐　シルト質粘土　5-1層
72 N5/0灰　シルト質粘土　中砂〜粗砂を多量含む　5-1層
73 N5/0灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　5-1層の細分
74 N4/0灰　シルト混粗砂〜極粗砂　5-1層の細分
75 N4/0灰　シルト質極細砂　5-2-1b層
76 2.5Y4/1黄灰　粗砂混シルト　5-2-1b層
77 N4/0灰　シルト質粘土　5-2-1b層
78 5B6/1青灰　粘土　5-2-1b層
79 5B4/1暗青灰　シルト質粘土　5-2-2層
80 10Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　5-2-2層
81 10Y4/1灰　極細砂混シルト　5-2-2b層
82 7.5Y4/2灰オリーブ　粗砂〜極粗砂　5-2-2b層
83 2.5GY6/1オリーブ灰　粘土　5-2-2b層
84 5B4/1暗青灰　極細砂質シルト　5-2-2b層
85 N4/0灰　極細砂質シルト　5-2-2b層
86 N4/0灰　極細砂〜細砂混シルト　5-2-2b層
87 2.5Y6/3にぶい黄　粗砂〜極粗砂　5-2-2b層
88 5B4/1暗青灰　極細砂混シルト　5-2-2b層
89 5B4/1暗青灰　シルト質極細砂　5-2-2b層
90 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　5-2-2b層
91 5B4/1暗青灰　シルト質極細砂　5-2-2b層
92 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　5-2-2b層
93 5B6/1青灰　極細砂質シルト　5-2-2b層
94 10Y5/1灰　シルト質粘土　5-2-2b層
95 10G4/1暗緑灰　粘土　5-2-2b層
96 10Y6/1灰　粘土　5-2-2b層
97 5Y4/1灰　極細砂混シルト　5-2-2b層
98 10Y5/1灰　粘土　6-1層
99 10Y5/1灰　粘土　6-1層
100 10Y4/1灰　細砂混シルト　畦畔
101 10Y4/1灰　シルト混極細砂〜細砂　6-1層
102 10Y5/1灰　粘土　6-1層
103 10GY6/1緑灰　粗砂〜極粗砂　6-2層
104 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　6-1層の細分
105 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　6-2層
106 10BG5/1青灰　シルト混粗砂〜極粗砂　6-2層
107 10GY5/1緑灰　粗砂〜極粗砂混シルト　6-2層
108 10Y5/2オリーブ灰　シルト質極細砂　6-3層か
109 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　6-2b層
110 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　6-2b層
111 5Y5/2灰オリーブ　粗砂〜極粗砂　6-2b層
112 5B6/1青灰　極細砂〜細砂　6-2b層
113 10Y4/1灰　粗砂〜極粗砂　畦畔
114 5Y5/2灰オリーブ　粗砂〜極粗砂　6-2b層
115 5Y5/2灰オリーブ　粘土　6-2b層
116 10Y5/1灰　粗砂混シルト　6-2b層
117 10Y5/1灰　粘土　6-2b層
118 10Y4/1灰　シルト質極細砂　6-3層か
119 10Y5/1灰　細砂混シルト　畦畔
120 5Y5/2灰オリーブ　粗砂〜極粗砂　6-2b層
121 N5/0灰　極細砂〜細砂　粗砂を多量含む　作土　6-3層
122 5B6/1青灰　粗砂と極細砂の互層　6-3b層
123 N5/0灰　粗砂混粘土　6-3層
124 5Y5/1灰　シルト混粗砂　6-4b層
125 5B4/1暗青灰　シルト質粘土　6-4b層
126 2.5Y6/2灰黄　粗砂〜極粗砂　6-4b層
127 5B5/1青灰　シルト質粘土　粗砂〜極粗砂を微量含む　6-4b層
128 5Y6/2灰オリーブ　中砂〜粗砂　6-4b層
129 2.5Y5/2暗灰黄　粗砂〜極粗砂　6-4b層
130 10Y6/1灰　シルト質粘土　6-4b層
131 10Y6/1灰　粗砂〜極粗砂　6-4b層
132 10G4/1暗緑灰　細砂〜中砂混シルト　7-1層
133 N4/0灰　極細砂〜細砂混シルト　7-2層
134 N4/0灰　細砂〜中砂混シルト　7-2層
135 N3/0暗灰　細砂混シルト　遺構埋土
136 5B6/1青灰　シルト質粘土　7-3b層
137 5B4/1暗青灰　粗砂混シルト　7-2層
138 2.5Y6/2灰黄　粗砂〜極粗砂　7-2層
139 5Y4/1灰　粗砂混シルト　7-2層
140 2.5Y5/2暗灰黄　粗砂〜極粗砂　遺構埋土
141 2.5Y5/1黄灰　極細砂〜細砂　遺構埋土
142 10Y4/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　7-3層
143 7.5Y5/2灰オリーブ　粗砂〜極粗砂　7-2層
144 5Y5/1灰　粘土　7-2b層
145 10Y4/1灰　細砂混シルト質粘土　8-1層の細分
146 N4/0灰　極細砂混シルト　8-1層の細分
147 2.5Y5/2暗灰黄　極粗砂　遺構埋土
148 10Y5/1灰　極細砂　8-2b層
149 7.5Y4/3暗オリーブ　粗砂　8-2b層
150 5GY6/1オリーブ灰　粗砂〜極粗砂　8-2b層
151 10YR5/1褐灰　シルト質粘土　9層
152 10YR4/1褐灰　シルト質粘土　10層
153 10YR4/1褐灰　シルト質粘土　10層
154 2.5Y6/1黄灰　シルト　10層

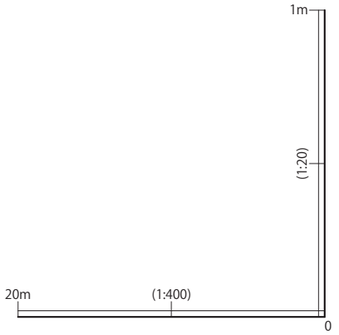
図15　1－5区　230トレンチ断面

1-1・2-1区









1トレンチ
1 2.5Y4/2暗灰黄　粗砂混シルト　現代作土
2 2.5Y3/2黒褐　粗砂混シルト　旧作土
3 5B4/1暗青灰　粗砂混シルト　遺構埋土
4 5Y6/2灰オリーブ　粗砂　遺構埋土
5 N3/0暗灰　粗砂混シルト　旧作土
6 2.5GY5/1オリーブ灰　粗砂～極粗砂混シルト　遺構埋土
7 5B5/1青灰　細砂混シルト　遺構埋土
8 10G5/1緑灰　粗砂混シルト　旧作土
9 7.5Y8/1灰白　細砂～　1-2b層
10 5Y6/1灰　粗砂　1-2b層
11 5Y8/2灰白　細砂～中砂　1-2b層
12 2.5Y5/1黄灰　細砂と極細砂～中礫の互層　1-2b層
13 5Y5/1灰　粘土～シルトと細砂の互層　1-2b層
14 5Y5/1灰　細砂　1-2b層
15 5GY5/1オリーブ灰　粗砂混シルト　遺構埋土
16 N5/0灰　粗砂混シルト　1-2b層
17 N6/0灰　粗砂混シルト　遺構埋土
18 N6/0灰　粘土　遺構埋土
19 7.5Y7/1灰白　粗砂混シルト　粘土偽礫を多量含む　遺構埋土
20 5B4/1暗青灰　細砂混シルト　1-3層
21 7.5Y5/1灰　シルト混細砂　粗砂～極粗砂を少量含む　1-3層
22 N6/0灰　粘土　遺構埋土
23 5Y5/1灰　粘土　遺構埋土
24 10Y6/1灰　細砂～中砂混シルト　2-1層
25 N5/0灰　細砂～中砂混シルト　2-1層
26 5B6/1青灰　細砂～中砂混シルト　2-1層
27 10Y5/1灰　シルト混粗砂　2-1層
28 10BG5/1青灰　細砂混シルト　遺構埋土
29 10Y5/1灰　粗砂～極粗砂　2-1層の細分
30 10Y6/1灰　粗砂～極粗砂　2-1層の細分
31 5Y7/4浅黄　細砂～粗砂　2-2b層
32 10Y6/1灰　粘土　2-2b層
33 7.5Y6/1灰　粗砂～極粗砂　2-2b層
34 10BG6/1青灰　シルト～粘土　細砂を少量含む　2-2b層
35 10BG5/1青灰　粗砂混シルト　3-1層
36 10BG5/1青灰　粗砂混シルト　畦畔
37 2.5Y4/2暗灰黄　中砂～粗砂混シルト　3-3層
38 N5/0灰　粘土　3-4b層
39 5BG4/1暗青灰　シルト混細砂～中砂　4-1層
40 N4/0灰　シルト混細砂～中砂　4-2層
41 2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　4-2b層
42 5B4/1暗青灰　細砂混シルト　遺構埋土
43 N5/0灰　粗砂混シルト　遺構埋土
44 N4/0灰　粗砂混シルト　遺構埋土
45 N4/0灰　粗砂混シルト　遺構埋土
46 N3/0暗灰　粗砂混シルト　遺構埋土
47 N3/0暗灰　粗砂混シルト　遺構埋土
48 5Y5/1灰　粗砂混シルト　遺構埋土
49 N3/0暗灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　古土壌　5-1層
50 10Y4/1灰　シルト混細砂～中砂　遺構埋土
51 N4/0灰　シルト混細砂～中砂　遺構埋土
52 10Y4/1灰　シルト質粘土　遺構埋土
53 N4/0灰　粘土と粗砂の互層　遺構埋土
54 10Y4/1灰　粗砂混シルト　遺構埋土
55 5B5/1青灰　粘土　遺構埋土
56 5B5/1青灰　粘土　粗砂を少量含む　遺構埋土
57 N5/0灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
58 5B3/1暗青灰　シルト混細砂　遺構埋土
59 7.5Y5/1灰　シルト混細砂～中砂　盛土　6-2層
60 10Y5/1灰　細礫質粗砂　盛土　6-2層
61 N5/0灰　粗砂～極粗砂　盛土
62 N5/0灰　細砂～中砂　盛土
63 N5/0灰　粘土質細砂　盛土　遺構埋土
64 10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　細砂を多量含む　盛土　6-3層
65 5B3/1暗青灰　細砂　粗砂を少量含む　盛土　6-3層
66 N3/0暗灰　シルト混粗砂　遺構埋土
67 5B3/1暗青灰　細砂　粗砂を少量含む　盛土　6-3層
68 10Y4/1灰　シルト混粗砂　盛土　6-3層
69 7.5Y4/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　盛土　6-3層
70 N5/0灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
71 5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　遺構埋土
72 N5/0灰　シルト混粗砂　遺構埋土
73 2.5Y6/6明黄褐　粗砂　遺構埋土
74 5Y5/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
75 2.5Y6/3にぶい黄　細砂　遺構埋土
76 N6/0灰　細砂　粘土を少量含む　遺構埋土
77 5Y5/1灰　細砂混粘土　遺構埋土
78 5G3/1暗緑灰　シルト混粗砂　細礫を少量含む　6層
79 5G4/1暗緑灰　シルト　粗砂を少量含む　6層
80 N4/0灰　細礫質シルト混細砂　シルトを少量含む　6-5b層
81 N3/0暗灰　粗砂～極粗砂　細礫を多量含む　6-5b層
82 5B5/1青灰　シルト質細砂　6-5b層
83 5B4/1暗青灰　細砂　粘土を少量含む　6-5b層
84 5G4/1暗緑灰　粗砂～極粗砂　6-5b層
85 10Y4/1灰　粗砂　細砂を少量含む　6-5b層
86 N6/0灰　粗砂　6-5b層
87 N5/0灰　シルト混粗砂　6-5b層
88 N6/0灰　細砂　粗砂を少量含む　6-5b層
89 N5/0灰　細砂　6-5b層
90 N4/0灰　細砂　6-5b層
91 N5/0灰　細砂　弱く土壌化　6-5b層
92 N5/0灰　シルト混粗砂　6-5b層
93 N5/0灰　細砂混シルト　6-5b層
94 N5/0灰　シルト混細砂　6-5b層
95 2.5Y6/4にぶい黄　細砂と粗砂～極粗砂の互層　6-5b層
96 2.5Y6/6明黄褐　粗砂　6-5b層
97 10Y4/1灰　細砂混シルト　6-5b層
98 2.5Y6/3にぶい黄　細砂と粗砂の互層　6-5b層
99 2.5Y6/6明黄褐　粗砂　6-5b層
100 N5/0灰　細砂　6-5b層
101 2.5Y6/2灰黄　細砂と粗砂の互層　6-5b層
102 N7/0灰白　細砂と粗砂の互層　6-5b層
103 N5/0灰　細砂　6-5b層
104 N7/0灰白　粘土質細砂　6-5b層
105 5Y4/1灰　粗砂　6-5b層
106 N5/0灰　細砂　6-5b層
107 2.5Y6/6明黄褐　粗砂　6-5b層
108 N4/0灰　細砂　6-5b層
109 10G4/1暗緑灰　粘土質細砂　6-5b層
110 N5/0灰　細砂　6-5b層
111 N5/0灰　シルト質細砂　6-5b層
112 10G5/1緑灰　細砂　6-5b層
113 10G4/1暗緑灰　シルト質粘土　7-1層
114 5BG4/1暗青灰　粘土　細砂を少量含む　7-1層
115 10G4/1暗緑灰　細砂混シルト　7-1層の細分
116 10G4/1暗緑灰　細砂混粘土　畦畔
117 10G4/1暗緑灰　粘土　畦畔
118 5B3/1暗青灰　シルト混粗砂　畦畔
119 5Y5/2灰オリーブ　シルト混粗砂　畦畔
120 N3/0暗灰　粗砂　畦畔
121 2.5Y6/6明黄褐　細砂と粗砂の互層　遺構埋土
122 N5/0灰　細砂　遺構埋土
123 10G4/1暗緑灰　細砂と粘土の互層　7-2層の細分
124 2.5Y6/1黄灰　極粗砂　7-3b層
125 N5/0灰　細砂　7-3b層
126 10Y4/1灰　粗砂　7-3b層
127 N4/0灰　細砂混シルト　7-3b層
128 2.5Y5/3黄褐　粗砂　7-3b層
129 5BG4/1暗青灰　細砂と粘土の互層　7-3b層
130 5Y6/1灰　粗砂　7-3b層
131 N6/0灰　細砂　7-3b層
132 5BG3/1暗青灰　シルト混粗砂　7-3b層
133 2.5Y6/1黄灰　粘土質細砂と粗砂～極粗砂の互層　7-3b層
134 5B3/1暗青灰　粗砂　粘土を少量含む　7-3b層
135 N6/0灰　中砂～粗砂　7-3b層
136 5BG4/1暗青灰　粘土　7-3b層
137 10G4/1暗緑灰　細砂～中砂混シルト　7-3b層
138 N6/0灰　中砂～粗砂　7-3b層
139 5B3/1暗青灰　粗砂　7-3b層
140 2.5Y6/2灰黄　粗砂　7-3b層
141 N4/0灰　細砂と粘土の互層　7-3b層
142 2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　7-3b層
143 2.5Y6/2灰黄　粗砂　粘土の薄層を挟む　7-3b層
144 5B4/1暗青灰　粘土　7-3b層
145 5BG4/1暗青灰　粘土　7-3b層
146 2.5Y6/1黄灰　粗砂　7-3b層
147 5BG4/1暗青灰　粘土　7-3b層
148 5BG3/1暗青灰　細砂～中砂混シルト　7-3b層
149 5BG4/1暗青灰　粘土　7-3b層
150 5BG3/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層
151 5BG3/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層
152 5BG3/1暗青灰　粘土　8-1層
153 5BG4/1暗青灰　粘土　極細砂～細砂を少量含む　遺構埋土
154 10G3/1暗緑灰　粘土　9層由来の土塊を含む　遺構埋土
155 5BG3/1暗青灰　細砂質粘土　8-2層
156 5GY6/1オリーブ灰　粘土質細砂　8-2層
157 5BG4/1暗青灰　極細砂混粘土　畦畔
158 5BG5/1青灰　細砂混シルト　9層由来の土を多く含む　畦畔
159 5G4/1暗緑灰　細砂混シルト　畦畔
160 10G3/1暗緑灰　細砂質粘土　8-2層
161 10G3/1暗緑灰　粘土　細砂を多量含む　8-2層の細分
162 5G4/1暗緑灰　細砂混シルト　盛土　8-2層
163 5G4/1暗緑灰　細砂混シルト　盛土　8-2層
164 10G4/1暗緑灰　粗砂質粘土　8-2層
165 5BG3/1暗青灰　細砂質シルト　盛土　8-2層
166 10Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　9-1層
167 5G5/1緑灰　粘土　細砂を少量含む　9-1層
168 10G4/1暗緑灰　粘土混粗砂　9-1層
169 5G3/1暗緑灰　粘土　細砂を少量含む　9-1層の細分
170 5GY6/1オリーブ灰　粘土　細砂を少量含む　9-2層
171 5BG5/1青灰　細砂　9-2層
172 5GY5/1オリーブ灰　細砂と粘土の互層　9-2b層
173 5BG3/1暗青灰　粘土　9-2層
174 5BG3/1暗青灰　粘土　9-3層
175 N5/0灰　中砂～粗砂混シルト　10層を母材とする　9-4層
176 N4/0灰　シルト質粘土　9-4層の細分
177 5PB3/1暗青灰　粘土　10層
178 5B5/1青灰　粘土　10層
179 5PB3/1暗青灰　粘土　10層

図16　1－1・2－1区　1・5トレンチ断面（1）

5トレンチ
1　7.5YR3/2黒褐　粗砂混シルト　現代作土
2　7.5YR3/1黒褐　細砂混シルト　粗砂～極粗砂を少量含む　旧作土
3　2.5Y4/2暗灰黄　極細砂～細砂混シルト　細礫～中礫を少量含む　鉄分沈着顕著　1-1層
4　2.5Y5/1黄灰　細礫～中礫混シルト　粘土～シルト偽礫を少量含む　極細砂～細砂混シルトを少量含む　1-1層
5　10YR5/1褐灰　細砂混シルト　粘土質シルト(1-3層)偽礫を少量含む　1-1層
6　2.5Y5/1黄灰　粗砂混シルト　畦畔
7　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　古土壌由来の偽礫を含む　遺構埋土
8　2.5Y5/1黄灰　粘土質シルト　粗砂～細礫を少量含む　1-1層
9　10YR2/1黒　粘土質シルト　粗砂を微量含む　1-3層
10　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂混シルト　1-4層
11　10Y6/1灰　細砂混シルト　2-1層
12　7.5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂混シルト　遺構埋土
13　5Y6/3オリーブ黄　粗砂～極粗砂　細砂混シルト偽礫を少量含む　遺構埋土
14　10Y6/1灰　細砂混シルト　2-1層
15　2.5Y5/1黄灰　細砂混シルト　畦畔
16　10Y5/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
17　5Y4/1灰　シルト混細砂～粗砂　2-2b層
18　2.5Y6/4にぶい黄　中砂～粗砂　細礫を少量含む　2-2b層
19　5Y6/1灰　粘土　2-2b層
20　2.5Y6/1黄灰　細砂～中砂　2-2b層
21　2.5Y5/1黄灰　粘土　2-2b層
22　2.5Y6/1黄灰　極細砂～細砂　2-2b層
23　2.5Y5/1黄灰　粘土　2-2b層
24　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂～極粗砂　2-2b層
25　10GY5/1緑灰　細砂と粗砂の互層　2-2b層
26　2.5Y6/1黄灰　粗砂～極細砂　細砂混シルト偽礫を含む　2-2b層
27　10BG5/1青灰　粘土質シルト　3-1層
28　10BG5/1青灰　粘土質シルト　畦畔
29　10Y8/1灰白　粘土質シルト　細礫～中礫を少量含む　3-2層
30　10Y8/1灰白　粘土質シルト　細礫～中礫を少量含む　畦畔
31　5BG4/1暗青灰　粘土質シルト　細礫～中礫を多量含む　4-1層
32　N4/0灰　極細砂～細砂混シルト　4-2層
33　N5/0灰　シルト～粘土　5-1層
34　N7/0灰白　シルト質粘土　極細砂～細砂を少量含む　5-2b層
35　N5/0灰　シルト質粘土　極細砂～細砂を少量含む　5-2b層
36　10GY6/1緑灰　シルト混細砂　6-2層
37　10BG6/1青灰　中砂～粗砂混シルト　6-3層
38　10Y4/1灰　シルト混粗砂　土壌化　6-3層
39　10Y5/1灰　シルト混極粗砂　細礫～中礫を多量含む　盛土
40　10Y5/1灰　シルト混粗砂　細礫を多量含む　6-3層
41　10Y5/1灰　シルト混細砂　6-4層
42　2.5Y6/6明黄褐　粗砂～極粗砂　遺構埋土
43　10Y5/1灰　細砂　6-5b層
44　10Y4/1灰　細砂混シルト　6-5b層
45　10Y4/1灰　細砂　粗砂を少量含む　6-5b層
46　10Y6/1灰　細砂　6-5b層
47　10Y4/1灰　細砂　6-5b層
48　5Y6/2灰オリーブ　細砂　6-5b層
49　2.5Y6/6明黄褐　粗砂　6-5b層
50　N6/0灰　細砂　6-5b層
51　N4/0灰　シルト混粗砂　6-5b層
52　N6/0灰　細砂と粗砂の互層　6-5b層
53　10G5/1緑灰　シルト質粘土　6-5b層
54　10G5/1緑灰　細砂～中砂混シルト　7-1層
55　10G4/1暗緑灰　細砂～中砂混シルト　7-1層
56　10GY4/1暗緑灰　シルト質粘土　畦畔
57　5BG3/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層
58　5GY6/1オリーブ灰　粘土　白雲母を多量に含む　9-1層
59　N4/0灰　シルト質粘土　10層

図17　1－1・2－1区　1・5トレンチ断面（2）

なお、1－5区では、5－2b層中に、5－2－2層とした古土壌の堆積が認められた。弥生時代後期前葉から後葉の土器が出土している。1－5区の微高地以外に明確に同層に対比できる地層を確認できなかった。低地においても、同層と対応できる地層は不明で、5－1層とした古土壌に収斂する可能性がある。1－3・2－1・2－2区の低地に堆積する5－1層が対比できるものか。

6層

低地で形成された作土と微高地上に形成された土壌層、その下位に堆積する自然堆積層である。弥生時代中期中葉から弥生時代中期後葉にかけて形成された。4層以上に細分でき、4区では5層以上に細分できた。

低地は水田として利用されており、作土はおおよそ2層に細分できた。6－1層とした作土は、粗砂～極細砂混シルトを主体とし、やや泥質である。6－2層とした作土は、中砂～粗砂混シルトを主体とする。6－1層と6－2層に挟在する砂層は認められず、一部の擬似畦畔内に砂層の堆積が認められた。6－1層と6－2層は、層相が似ており、地層の境界部が不明瞭で、低地では6－2層を掘削した段階で、6－4b層が露出する場合が多かった。

微高地上の6－1～6－3層は、母材となる6－4b層を反映して砂質である。2－1・2－2区では、6－2・6－3層形成段階に、溝の開削と微高地の造成が大規模に行われた。なお、6－3層は、6－4b層の上位に形成された古土壌で、6層中、最も古い段階に形成された地層である。2－1・2－2・4区で検出した微高地の基底面を構成する。

6－4b層は、弥生時代中期後葉以前に堆積した泥層と砂層を総称した。6－4b層は、1）第7－1面の廃絶後、1－1・2－1・4区が水没することによって泥層が堆積する、2）氾濫堆積物の砂層が同範囲に分厚く堆積するという過程で堆積する。2－1区微高地内では、6－4b層中において堆積範囲は不明であるが、古土壌が断面で確認できた。

なお、2－1区では、2－2区6－1層に対比できる6－2層直上の泥層を6－1層として調査した。弱く土壌化しており、わずかに高まる部分が検出された。部分的に面が更新された可能性がある。

また、4区北東側は、6－1～6－3層の堆積過程において、自然堆積層が挟在し、古土壌を上下に

明確に分けることができた。１・２区とは異なる河川の影響を受けたためと考えられる。４区では、６－１～６－４層とした微高地上の古土壌を除去した段階で弥生時代中期中葉の集落が検出されている。

７層

作土と自然堆積層を７層とした。弥生時代中期前葉に形成される。３層以上に細分できる。

７－１層とした作土は、細砂～中砂混粘質シルトを主体とする。７－２層とした作土は、細砂混シルトを主体とする。７－１層と７－２層の地層の境界部は不明瞭で、土質は同質であった。また、７－２層は遺存状況が悪く、７－１層のみが認識される場合があった。

７－３ｂ層は、砂層と泥層の自然堆積層で、１－１・１－２区の一部、その他の調査地では、畦畔内に堆積が認められた。１－１・１－２区では、弥生時代中期前葉の集落が第７－３ｂ面で検出されている。

なお、７－１・７－２層と８－１層の間に自然堆積層がない場合、７－１・７－２層には、８－１層ないし８－１層に由来する偽礫が含まれていた。その傾向は、７－１・７－２層の下位になるほど顕著である。７－１・７－２層中に含まれる８－１層は、２－２区西側では火炎状を呈し、地震痕跡が想定される。一方、２－１・２－２区東側では８－１層由来の偽礫の形状は多角形を呈し、水田の作土下位に相当する加工時形成層ないし水田開発時の初期段階の形成層になる可能性がある。

８層

作土と古土壌を８層とした。弥生時代前期後葉に形成される。７－１・７－２層とした作土に撹乱されている場合が多く、畦畔内及び２－１区及び２－２区西側の一部で堆積が認められた。２－１・２－２区では７－１・７－２層に８－１層に由来する偽礫が含まることから、調査地の全域に堆積していたと考えられる。

８－１層とした作土は、シルト質粘土を主体とする。２層以上に細分できる場合があったが、２－２区では単層として認識された。７層に撹乱されている影響で、地層の遺存状況は不良である。黒味が強いため、土質だけではなく、色調から上下の地層と明瞭に区分できる場合があった。

１－１・２－１区では８－１層上面で水田畦畔が検出された。１－１区は小区画水田、２－１区は大畦畔が検出されており、２－２区では大畦畔の続きが確認された。一方、４区は８－１層の堆積が一部で認められたが、全体に遺存状況が悪く、不明な点が多い。しかし、当該期の遺物が出土したことや、灌漑用の水路として機能したと考えられる溝が少なくとも７－２層下面にまで遡ることから、８層形成段階、弥生時代前期後葉には、水田が広域に展開していたことが想定される。

８－１層とした古土壌は砂質で、微高地上を中心に堆積する。１－４区は７－２層が同層に対比できる。２－１区の微高地では、８－１層を除去した段階で溝及びピット等が検出された。

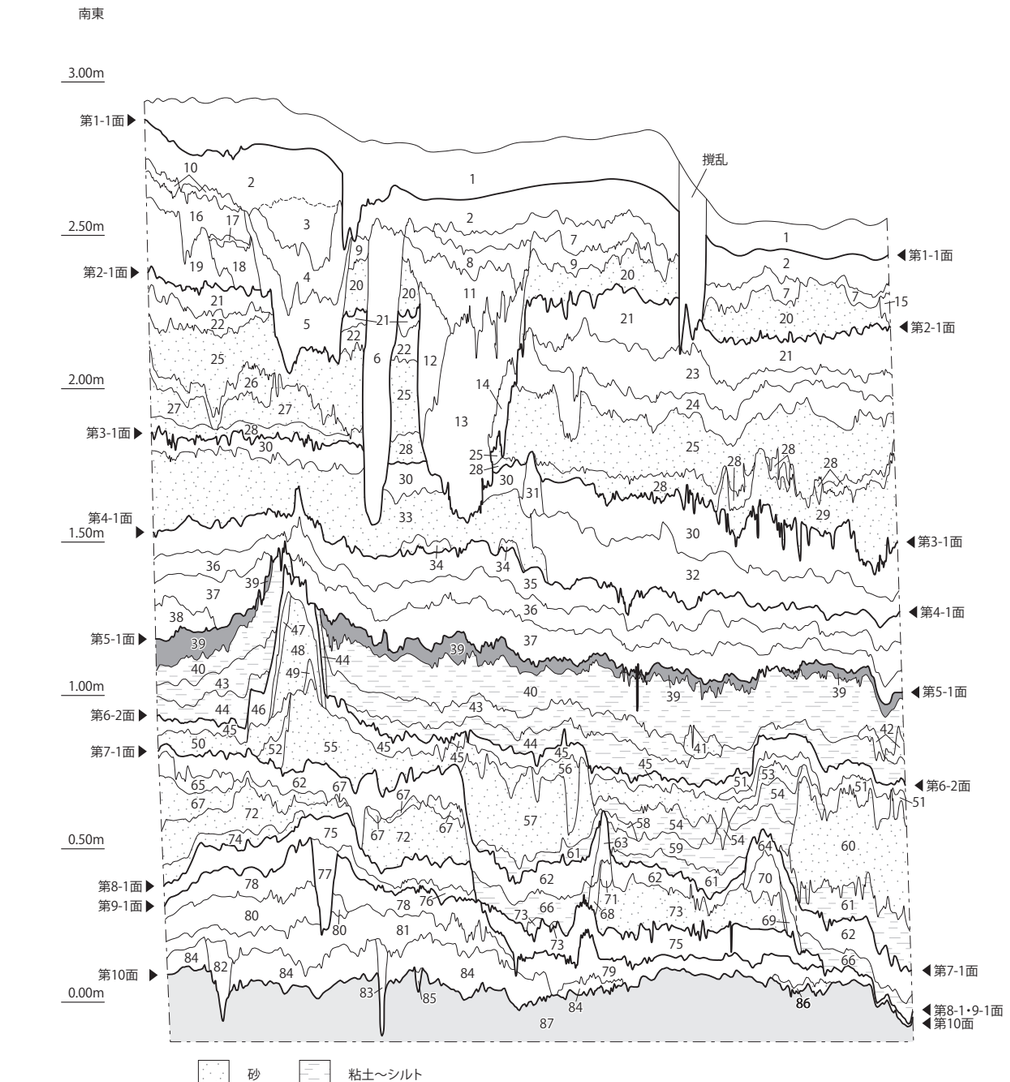
なお、８－１層とした地層名は、９層上部に形成された古土壌として把握できる可能性があったが、２－１区の低地で、８層は泥質、９層は砂質で明瞭に分かれたため、それぞれに地層名を付与した。

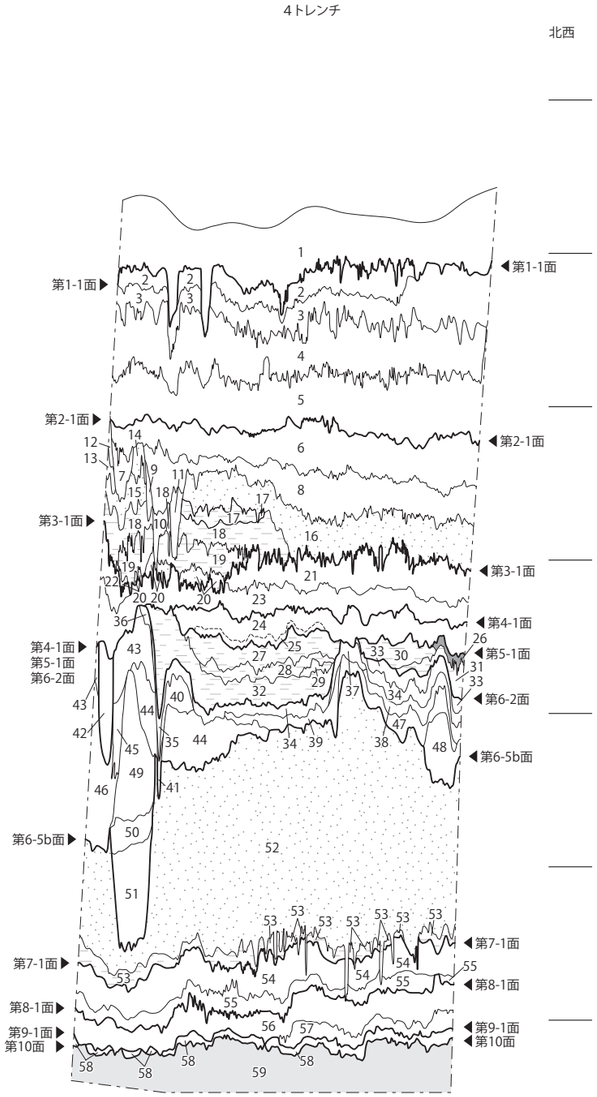
９層

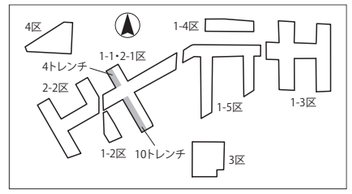
土壌層と自然堆積層を９層とした。縄文時代晩期から弥生時代前期中葉にかけて形成された。２層以上に細分できるが、局所的に堆積するため各調査地に堆積する９層の対比をそれぞれ行うことは不可能であった。そのため、細分した地層名を用いず、土壌層は９－１層、自然堆積層は９ｂ層として以下の記述は行う。

９－１層は砂質で、９ｂ層とした砂礫上部に形成された。９ｂ層は水成層の砂礫で、堆積範囲は微高地とその縁辺部、10層上面の低所などに限られ、１－１・１－２・１－４・２－１区で確認された。

1-1・2-1区







10トレンチ
1 2.5Y3/1黒褐 粗砂混シルト 現代作土
2 10Y6/1灰 粗砂混シルト 1-1層
3 10YR6/1褐灰 粗砂混シルト 細礫〜中礫を少量含む 遺構埋土
4 10YR6/1褐灰 シルト混粗砂〜極粗砂 遺構埋土
5 7.5GY5/1緑灰 シルト質粘土 遺構埋土
6 10Y6/1灰 粗砂〜極粗砂 遺構埋土
7 N5/0灰 シルト質粘土偽礫 1-3層
8 10BG4/1暗青灰 粗砂〜極粗砂混シルト 遺構埋土
9 2.5Y5/6黄褐 細砂混シルト 1-3層の細分
10 10YR7/1灰白 シルト質粘土 1-3層
11 7.5Y6/1灰 シルト混細砂〜中砂 遺構埋土
12 10Y5/1灰 粗砂混シルト 遺構埋土
13 10Y5/1灰 シルト質粘土 遺構埋土
14 10Y4/1灰 シルト質粘土 細砂〜粗砂を少量含む 遺構埋土
15 10Y4/1灰 粗砂と細砂の互層 遺構埋土
16 5Y6/1灰 細砂混シルト 遺構埋土
17 2.5Y6/2灰黄 シルト質粘土 遺構埋土
18 2.5Y5/2暗灰黄 極細砂〜細砂混シルト 遺構埋土
19 7.5YR6/1褐灰 シルト混細砂〜中砂 1-4b層が弱く土壌化した地層
20 10Y5/1灰 極細砂〜細砂 1-4b層
21 10Y6/1灰 細砂〜中砂混シルト 2-1層
22 10Y5/1灰 細砂〜中砂混シルト 2-1層の細分
23 10Y6/2オリーブ灰 細砂〜中砂混シルト 2-1層
24 10Y5/2オリーブ灰 細砂〜中砂混シルト 2-1層
25 7.5Y6/1灰 細砂〜中砂と粗砂〜極粗砂の互層 2-2b層
26 2.5Y7/1灰白 細砂 2-2b層
27 5Y6/6オリーブ 中砂〜粗砂 2-2b層
28 5Y4/1灰 細砂 2-2b層
29 10Y5/1灰 細砂 2-2b層
30 10BG5/1青灰 粗砂混シルト 3-1層
31 N5/0灰 粗砂混シルト 畦畔
32 2.5Y4/2暗灰黄 中砂〜粗砂混シルト 3-3層
33 5Y5/2灰オリーブ 粗砂〜極粗砂 細砂〜中砂を少量含む 3-4b層
34 5BG5/1青灰 細砂 3-4b層
35 5BG4/1暗青灰 シルト質粘土 4-1層
36 N4/0灰 シルト質粘土 4-2層
37 7.5Y5/1灰 シルト質粘土 4-3層
38 N5/0灰 シルト質粘土 4-3層の細分
39 N5/0灰 シルト〜シルト質粘土 5-1層
40 10G6/1緑灰 シルト質粘土 5-2b層
41 5Y5/2灰オリーブ 粗砂 5-2b層
42 5Y5/2灰オリーブ 粗砂 5-2b層
44 10Y7/1灰白 シルト質粘土 6-1層
45 10GY6/1緑灰 粗砂〜極粗砂混シルト 6-2層
46 5Y3/1オリーブ黒 細砂 粗砂〜極粗砂を多量含む 畦畔
47 5Y4/1灰 粗砂〜極粗砂 畦畔
48 5Y5/1灰 粗砂〜極粗砂 6-2b層
49 5Y5/2灰オリーブ 粗砂〜極粗砂 6-2b層
50 10Y4/1灰 シルト混粗砂 6-2b層
51 10BG6/1青灰 シルト質粘土 6-3層
52 5Y5/2灰オリーブ 粗砂〜極粗砂 6-5b層の細分
53 5Y4/1灰 粗砂 6-5b層
54 10Y5/1灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む 6-5b層
55 10Y4/1灰 粘土質細砂 (8-1)層偽礫を含む 6-5b層
56 10G4/1暗緑灰 シルト質粘土と粗砂の互層 6-5b層
57 2.5Y5/6黄褐 粗砂〜極粗砂 6-5b層
58 2.5GY5/1オリーブ灰 細砂 6-5b層
59 10Y4/1灰 シルト質粘土 炭化物を少量含む 6-5b層
60 2.5Y5/4黄褐 粗砂〜極粗砂 6-5b層
61 10Y4/1灰 シルト質粘土 細砂ラミナを含む 6-5b層
62 10G4/1暗緑灰 細砂〜中砂混シルト 細礫〜中礫を微量含む 7-1層
63 10G5/1 シルト質粘土 畦畔
64 5G4/1暗緑灰 シルト質粘土 畦畔
65 10Y4/2オリーブ灰 粗砂 7-1層
66 5G5/1緑灰 シルト質粘土 細礫〜中礫を少量含む 7-3b層
67 5G5/1緑灰 シルト質粘土混粗砂 7-3b層
68 10G4/1暗緑灰 シルト質粘土 畦畔
69 10G4/1暗緑灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む 畦畔
70 5G5/1緑灰 シルト混粗砂 畦畔
71 2.5GY5/1オリーブ灰 シルト質粘土 細砂〜中砂を微量含む 畦畔
72 5Y5/1灰 粗砂〜極粗砂 7-3b層
73 5Y5/2灰オリーブ 粗砂〜極粗砂 7-3b層
74 5BG5/1青灰 粘土質細砂 7-3b層
75 5BG3/1暗青灰 シルト質粘土 8-1層
76 5GY4/1暗オリーブ灰 シルト混粗砂 8-1層の細分
77 5GY5/1オリーブ灰 細砂混シルト 遺構埋土
78 5GY6/1オリーブ灰 シルト質粘土 粗砂を多量含む 9-1層
79 5GY6/1オリーブ灰 シルト混粗砂〜極粗砂 9-1層
80 5GY6/1オリーブ灰 シルト質粘土 9-2層
81 5GY5/1オリーブ灰 シルト質粘土 細砂を多量含む 9-2層
82 10G4/1暗緑灰 粗砂 遺構埋土
83 10G5/1緑灰 シルト質粘土 粗砂を多量含む 遺構埋土
84 10G5/1緑灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む 9-3層
85 10Y4/2オリーブ灰 粗砂 遺構埋土
86 5GY4/1暗オリーブ灰 粗砂 9-4b層
87 N4/0灰 シルト質粘土 10層

4トレンチ
1 2.5Y2/1黒 粗砂混シルト 現代作土
2 7.5Y5/1灰 細砂〜中砂混シルト 1-1層
3 10YR6/1褐灰 細砂〜中砂混シルト 粘土〜シルト偽礫(1-1層)を含む 1-1層
4 7.5Y5/1灰 細砂混シルト 1-1層
5 5Y5/1灰 粗砂〜極粗砂混シルト 1-3層
6 10Y6/1灰 細砂〜中砂混シルト 2-1層
7 10Y7/1灰白 粘土 遺構埋土
8 N4/0灰 粗砂質シルト 遺構埋土
9 N5/0灰 細砂混シルト 遺構埋土
10 5Y7/2灰白 粗砂〜極粗砂 遺構埋土
11 5GY5/1オリーブ灰 細砂混シルト 遺構埋土
12 N6/0灰 細砂混シルト 細砂を少量含む 坪境畦畔
13 N5/0灰 極細砂〜細砂混シルト 坪境畦畔
14 2.5Y6/1黄灰 粗砂〜極粗砂 2-2b層
15 5B6/1青灰 細砂〜極細砂 2-2b層
16 10Y4/1灰 粗砂〜極粗砂 2-2b層
17 5B5/1青灰 シルト 2-2b層
18 N5/0灰 細砂混粘土〜シルト 2-2b層
19 5B5/1青灰 粘土〜シルト 粗砂を微量含む 2-2b層
20 10Y6/2オリーブ灰 極粗砂〜細礫 2-2b層
21 10BG5/1青灰 粗砂混シルト 3-1層
22 N5/0灰 粗砂混シルト 坪境畦畔
23 2.5Y4/2暗灰黄 粘土〜シルト 粘性強い 3-3層
24 5BG4/1暗青灰 細砂混シルト 4-1層
25 N4/0灰 極細砂〜細砂混シルト 4-2層
26 N5/0灰 シルト〜粘土 5-1層
27 10G6/1緑灰 シルト質粘土 5-2b層
28 10G6/1緑灰 シルト質粘土 5-2b層
29 10G6/1緑灰 シルト質粘土 5-2b層
30 10G6/1緑灰 シルト質粘土 5-2b層
31 10G6/1緑灰 シルト質粘土 5-2b層
32 10G6/1緑灰 シルト質粘土 6-1層
33 10Y7/1灰白 シルト質粘土 6-2層
34 10Y7/1灰白 粘土 6-2層
35 10YR3/1黒褐 細砂混シルト 遺構埋土
36 5Y3/1オリーブ黒 粘土 6-2層
37 2.5Y4/1黄灰 粗砂混シルト 畦畔
38 10GY6/1緑灰 粗砂〜極粗砂混シルト 6-3層
39 10GY6/1緑灰 粗砂〜極粗砂混シルト 6-3層
40 5Y3/1オリーブ黒 粗砂混シルト 畦畔
41 5Y4/1灰 粗砂〜極粗砂 遺構埋土
42 10YR6/8明黄褐 粗砂〜極粗砂 遺構埋土
43 10YR4/1褐灰 シルト質粗砂 盛土
44 10YR5/1褐灰 粗砂混シルト 盛土
45 N5/0灰 粗砂混シルト 遺構埋土
46 10YR5/8黄褐 極粗砂〜粗砂 遺構埋土
47 5G4/1暗緑灰 細砂混シルト 古土壌 6-4層
48 N5/0灰 粗砂混シルト 6-4層形成前の盛土か
49 10YR6/8明黄褐 粗砂〜極粗砂 遺構埋土
50 5Y4/1灰 粗砂〜極粗砂 古土壌に由来する偽礫を含む 遺構埋土
51 N6/0灰 細砂〜中砂 遺構埋土
52 5Y8/3淡黄 粗砂〜極粗砂 細砂の薄層を挟む 6-5b層
53 5Y5/2灰オリーブ 粘土 6-5b層
54 10G4/1暗緑灰 細砂〜中砂混シルト 7-1層
55 10G4/1暗緑灰 細砂〜中砂混シルト シルト質粘土(8-1層)偽礫を少量含む 7-1層
56 5BG3/1暗青灰 シルト質粘土 8-1層
57 10G3/1暗緑灰 シルト質粘土 8-1層
58 5GY6/1オリーブ灰 シルト混粗砂〜極粗砂 9-1層
59 N4/0灰 シルト質粘土 10層

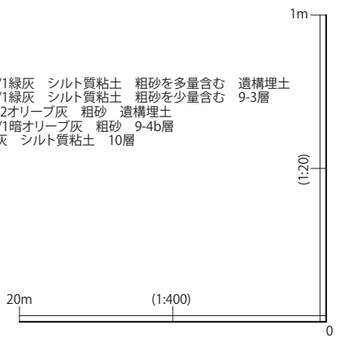
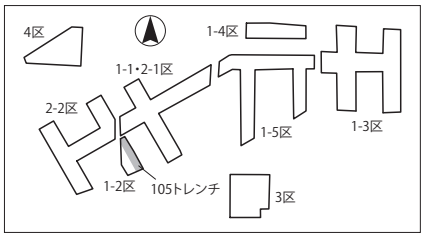


図18 1−1・2−1区 4・10トレンチ断面

1-2区



105トレンチ

北西　　南東

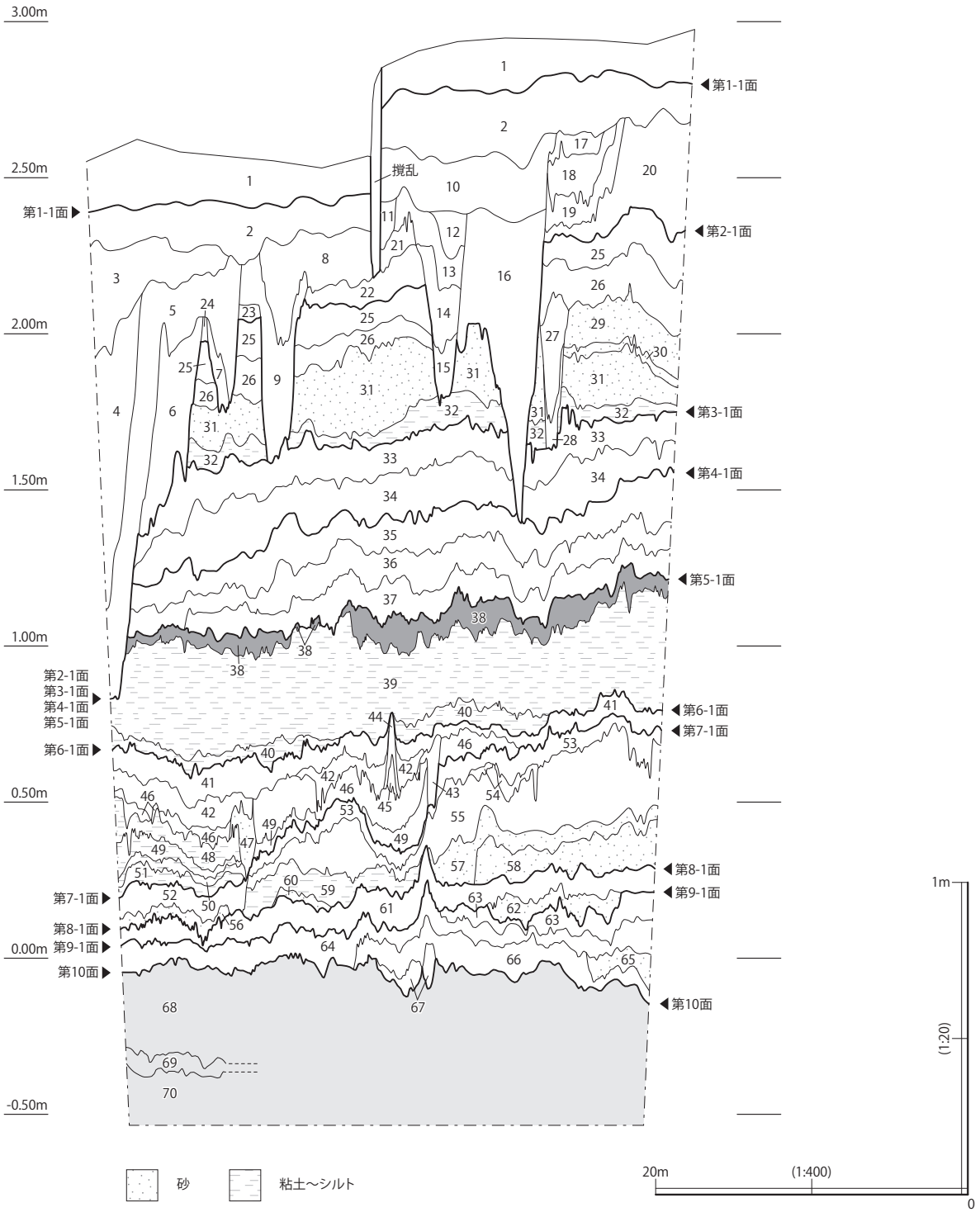


図 19　1－2区　105 トレンチ断面（1）

105トレンチ
1　7.5Y5/2灰オリーブ　粗砂混シルト　現代作土
2　2.5Y6/6明黄褐　シルト混粗砂～極粗砂　1-1層
3　10YR6/3にぶい黄橙　極細砂混シルト　遺構埋土
4　N4/0灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　遺構埋土
5　N3/0暗灰　粗砂混シルト　遺構埋土
6　N4/0灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　遺構埋土
7　N3/0暗灰　シルト質粘土　遺構埋土
8　5Y5/2灰オリーブ　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　遺構埋土
9　2.5Y4/1黄灰　粘土と極細砂の互層　遺構埋土
10　5Y5/1灰　粗砂混シルト　1-3層
11　5Y5/1灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　遺構埋土
12　2.5Y5/4黄褐　細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
13　2.5Y5/3黄褐　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　遺構埋土
14　2.5Y6/6明黄褐　粘土　遺構埋土
15　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂混シルト　遺構埋土
16　2.5Y4/2暗灰黄　粘土　遺構埋土
17　10YR5/3にぶい黄褐　細砂混シルト　遺構埋土
18　2.5Y4/1黄灰　粘土　遺構埋土
19　N5/0灰　細砂　粗砂を多量含む　細砂混シルト偽礫を少量含む　遺構埋土か
20　5B5/1青灰　細砂混シルト　1-3層
21　N4/0灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　1-3層
22　2.5Y4/1黄灰　粗砂　1-3層
23　N4/0灰　粗砂　1-3層
24　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　1-3層
25　N4/0灰　粗砂混シルト　2-1層
26　N4/0灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　2-1層の細分
27　10YR5/3にぶい黄褐　粗砂　粘土を含む　遺構埋土
28　N6/0灰　粗砂　粘土を含む　遺構埋土
29　5Y5/2灰オリーブ　粗砂　2-2b層
30　10Y4/1灰　シルト混粗砂　2-2b層
31　5Y7/6黄　細砂と粗砂の互層　2-2b層
32　5B5/1青灰　粘土　2-2b層
33　10BG5/1青灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　3-1層
34　10BG5/1青灰　極細砂質粘土　3-2層
35　5BG5/1青灰　細砂混シルト　4-1層
36　N4/0灰　粘土　4-2層
37　7.5Y5/1灰　粘土　4-3層
38　N5/0灰　粘土　5-2b層偽礫を少量含む　5-1層
39　5B5/1青灰　粘土　5-2b層
40　5B4/1暗青灰　粘土　5-2b層
41　10GY6/1緑灰　粗砂～極粗砂混シルト　6-1層
42　10BG6/1青灰　中砂～粗砂混シルト　6-2層
43　5B4/1暗青灰　粗砂　遺構埋土
44　10Y4/1灰　シルト混粗砂～中砂　畦畔
45　10Y4/1灰　シルト混細砂　畦畔
46　5B4/1暗青灰　粘土　極細砂～細砂を多量含む　作土か
47　10Y4/1灰　粗砂　6-4b層
48　5B4/1暗青灰　粘土　極細砂を少量含む　6-4b層
49　N4/0灰　粘土　6-4b層
50　5Y6/1灰　粘土　6-4b層
51　10G4/1暗緑灰　粘土　6-4b層
52　5B5/1青灰　細砂～中砂混シルト　7-1層
53　N3/0暗灰　シルト混細砂　粗砂を多量含む　7-1層
54　10Y3/1オリーブ黒　シルト混粗砂　7-2層
55　5Y3/1オリーブ黒　粗砂～極粗砂　7-2層
56　5Y3/1オリーブ黒　粗砂～極粗砂　土壌化　7-3b層
57　N5/0灰　極細砂　7-3b層
58　5Y4/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　7-3b層
59　N5/0灰　シルト質粘土　7-3b層
60　10Y4/1灰　粗砂　7-3b層
61　5BG3/1暗青灰　粘土　8-1層
62　10Y4/1灰　粗砂～極粗砂　8-2b層
63　N4/0灰　粘土　粗砂を少量含む　9-1層
64　5GY6/1オリーブ灰　粗砂混シルト　9-1層
65　N4/0灰　粗砂～極粗砂　9-2b層
66　5GY5/1オリーブ灰　シルト混細砂　粗砂を多量含む　9-3層
67　N4/0灰　細砂混シルト　9-3層の細分
68　N3/0暗灰　粘土　10層
69　5B6/1青灰　粘土　10層
70　N4/0灰　粘土　10層

図 20　1－2区　105 トレンチ断面（2）

1－1・2－1区微高地の造成が9－1層が形成された段階であることや微高地上に溝が開削されることから、9－1層が作土であった可能性を想定したが、畦畔は検出されなかった。

なお、1－4区8－1層は縄文時代晩期に形成された可能性があり、突帯文土器が出土した。その直下の9－1層は縄文時代晩期を遡ることが確実である。他の調査地の9ｂ層については遺物が出土していないため、時期は特定しがたいが、縄文時代晩期以前に堆積したと考えられる。

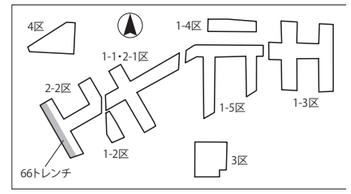
10層

土壌層と湿性堆積物を10層とした。縄文時代後期末から晩期前葉以前に形成されたと考えられる。泥質の地層で、調査対象外であったため地層名の細別は行っていないが、5層以上に細分できる。

古土壌や腐植を多く含む地層が重層的に堆積しており、遺物は出土しなかった。1－1・2－1・2－2・4区では、10面に帰属する遺構は確認されなかった。下層確認のため掘削したトレンチでは、10層上面から2m以上の泥の堆積が確認された。

今回の調査地北東、第二京阪道路の調査では、縄文時代後期以前の砂層の堆積が認められているが、1・2・4区に砂層が堆積するのは9層形成以降である。周辺の地形変化に伴って、湿地の環境にあった今回の調査地に氾濫堆積物が供給されるようになり、弥生時代前期後葉には広い範囲で水田開発が行われたと考えられる。

2-2区



66トレンチ
1　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂混シルト　現代作土
2　7.5YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　1-1層
3　5Y5/2灰オリーブ　粗砂混シルト　粗砂を多量含む　1-1層の細分
4　2.5Y6/3にぶい黄　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　1-3層
5　N5/0灰　シルト質粘土　1-3層の細分
6　5PB4/1暗青灰　シルト質粘土　1-3層の細分
7　2.5Y5/2暗灰黄　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　1-3層
8　2.5Y5/3黄褐　シルト混粗砂　1-3層
9　5GY4/1暗オリーブ灰　粗砂混シルト　2-1層
10　5G5/1緑灰　シルト質粘土　中砂～粗砂を少量含む　2-1層の細分
11　N4/0灰　粗砂混シルト　2-1層の細分
12　10Y5/1灰　シルト質粘土　中砂～粗砂を少量含む　3-1層
13　10Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　4-1層
14　2.5Y4/1黄灰　粘土質シルト　遺構埋土
15　10Y4/1灰　シルト混細砂～極細砂　遺構埋土
16　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　遺構埋土
17　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　シルト質粘土(5-1層)偽礫を少量含む　遺構埋土
18　10YR4/1褐灰　粘土質シルト　遺構埋土
19　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　遺構埋土
20　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　遺構埋土
21　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　遺構埋土
22　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　遺構埋土
23　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　遺構埋土
24　5GY5/1オリーブ灰　シルト質極細砂　遺構埋土
25　5B5/1青灰　極細砂質粘土　遺構埋土
26　N4/0灰　極細砂混シルト　遺構埋土
27　10Y5/1灰　シルト質粘土　遺構埋土
28　10Y5/1灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　遺構埋土
29　10Y4/1灰　極細砂混シルト　遺構埋土
30　2.5GY5/1オリーブ灰　極細砂混シルト　遺構埋土
31　2.5Y4/1黄灰　シルト質粘土　遺構埋土
32　5Y4/1灰　シルト質粘土　遺構埋土
33　10Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　5-1層
34　10Y4/1灰　シルト質極細砂　5-1層
35　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　遺構埋土
36　10Y4/1灰　極細砂　水成層　5-2b層
37　5G5/1緑灰　極細砂質粘土　水成層　5-2b層
38　10Y4/1灰　粘土質シルト　5-2b層
39　N4/0灰　シルト質極細砂　5-2b層
40　N4/0灰　シルトと極細砂の互層　5-2b層
41　5B3/1暗青灰　シルト質極細砂　5-2b層
42　N3/0暗灰　極細砂　粘土の薄層を挟む　5-2b層
43　N5/0灰　極細砂　粘土をラミナ状に挟む　5-2b層
44　10Y4/1灰　粘土質シルト　5-2b層
45　N4/0灰　粘土質シルト　5-2b層
46　5Y5/1灰　粘土質シルト　5-2b層
47　N4/0灰　極細砂　5-2b層
48　N4/0灰　粘土質シルト　5-2b層
49　N5/0灰　粘土と極細砂の互層　5-2b層
50　N5/0灰　粘土質シルト　5-2b層
51　5G3/1暗緑灰　極細砂質シルト　5-2b層
52　5GY5/1オリーブ灰　極細砂と粘土の互層　5-2b層
53　10Y4/1灰　極細砂質粘土～シルト　5-2b層
54　10Y3/1オリーブ黒　粗砂　崩落土
55　N5/0灰　粘土　5-2b層
56　10Y3/1オリーブ黒　シルト　細砂を少量含む　6-1層
57　10GY6/1緑灰　粗砂～極粗砂混シルト　6-1層
58　5Y5/1灰　粗砂　遺構埋土
59　10Y4/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
60　10Y4/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
61　2.5Y5/2暗灰黄　シルト混粗砂　畦畔
62　10Y5/1灰　シルト混細砂～中砂　粗砂を多量含む　遺構埋土
63　5Y6/1灰　シルト質細砂～中砂　遺構埋土
64　5Y5/2灰オリーブ　シルト混粗砂～極粗砂　畦畔
65　10Y5/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　畦畔
66　10Y3/2オリーブ黒　中砂～粗砂混シルト　6-2層
67　10BG6/1青灰　中砂～粗砂混シルト　6-2層
68　5Y7/2灰白　粗砂～極粗砂　遺構埋土
69　N6/0灰　極細砂と細砂の互層　遺構埋土
70　2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂と粗砂の互層　6-4ｂ層
71　N3/0暗灰　シルト質粘土　6-4ｂ層
72　10G4/1暗緑灰　シルト質粘土　6-4ｂ層
73　N7/0灰白　シルト質粘土　6-4ｂ層
74　10G4/1暗緑灰　細砂～中砂混シルト　7-1層
75　10G4/1暗緑灰　シルト質粘土　畦畔
76　10G4/1暗緑灰　シルト質粘土　畦畔
77　5G5/1緑灰　細砂混シルト　7-2層
78　10G5/1緑灰　シルト質粘土　シルト質粘土(8-1層)偽礫を含む　畦畔
79　5BG3/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層
80　N5/0灰　シルト質粘土　弱い土壌化　10層
81　N4/0灰　粘土　10層
82　N5/0灰　粘土　弱い土壌化　10層

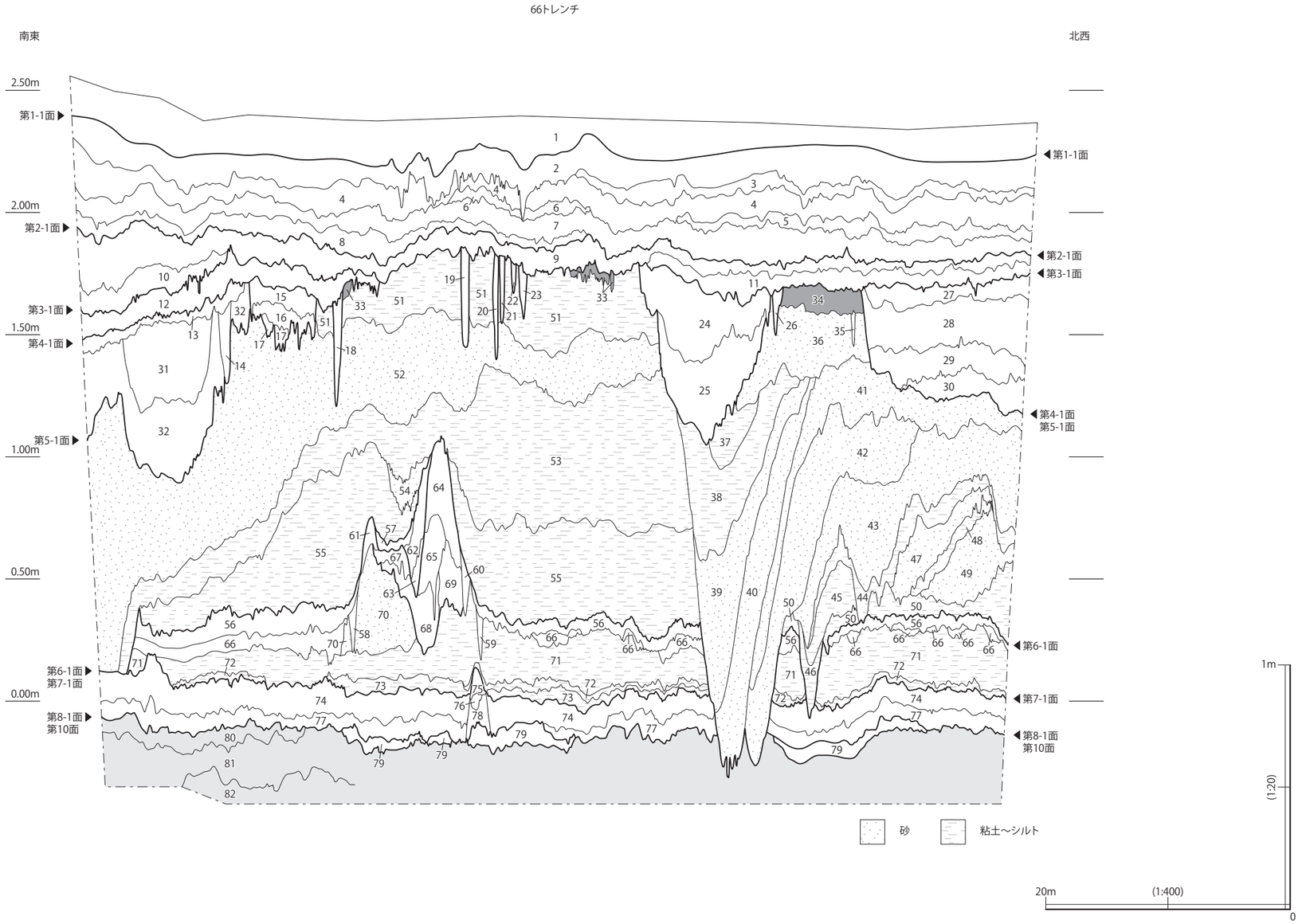
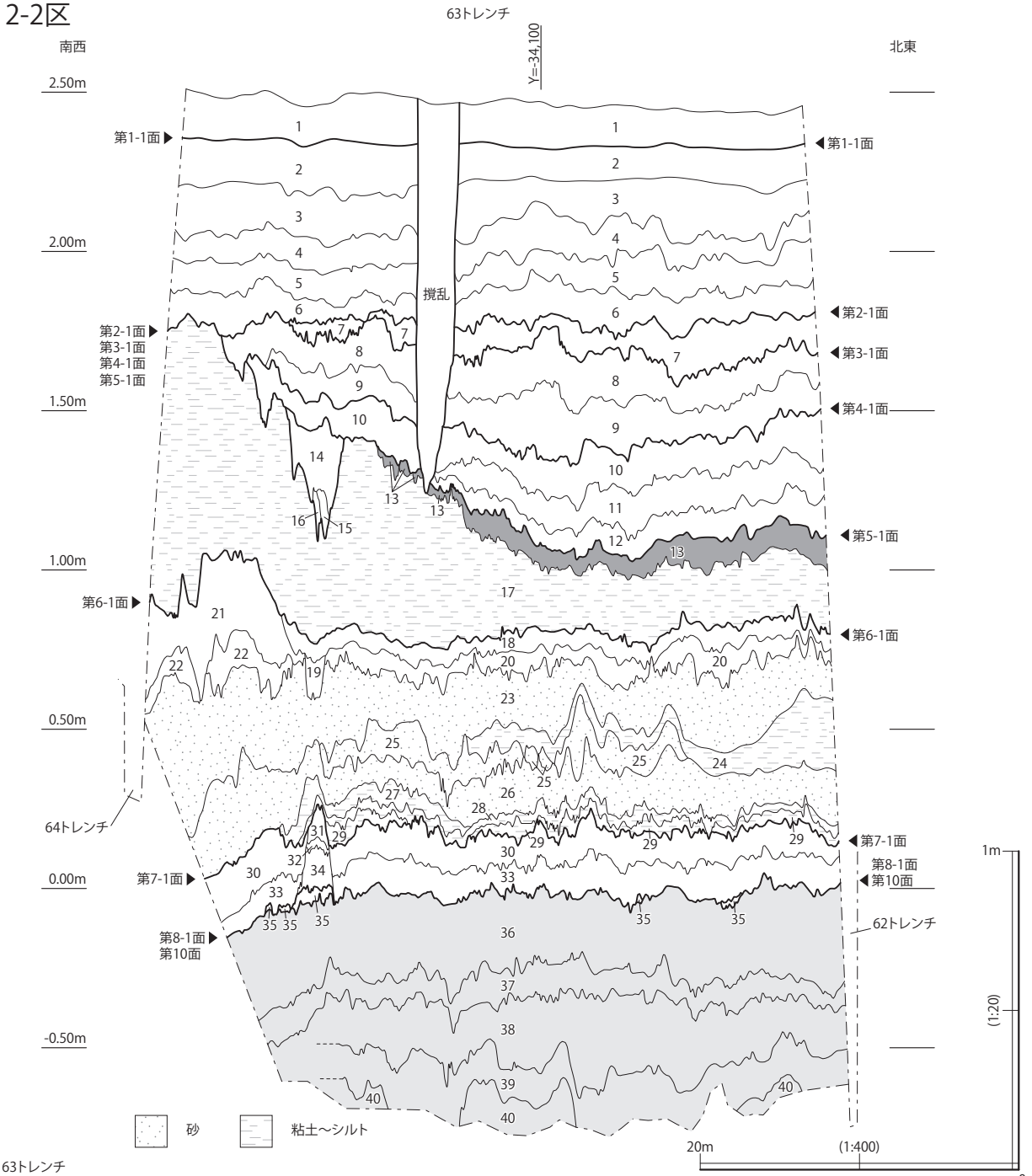


図21　2－2区　66トレンチ断面

2-2区



63トレンチ

1 10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　現代作土
2 7.5Y5/1灰　粗砂混シルト　1-1層
3 2.5Y5/4黄褐　粘土　粗砂を微量含む　1-3層
4 5Y5/1灰　粘土　粗砂を少量含む　1-3層
5 5Y5/1灰　粘土　粗砂～極粗砂を少量含む　1-3層
6 5Y5/2灰オリーブ　粘土　極細砂～細砂を少量含む　1-3層の細分
7 2.5Y6/1黄灰　粗砂混シルト　2-1層
8 N5/0灰　極細砂質シルト　細砂～中砂を微量含む　3-1層
9 10Y6/1灰　極細砂質シルト　3-3層
10 5BG4/1暗青灰　粘土質シルト　4-1層
11 N4/0灰　極細砂～細砂混シルト　4-2層
12 7.5Y5/1灰　極細砂混粘土　4-3層
13 N5/0灰　シルト～粘土　5-1層
14 2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　遺構埋土
15 5Y5/2灰オリーブ　細砂　粗砂を多量含む　遺構埋土
16 2.5Y7/2灰黄　粗砂～中砂　遺構埋土
17 10G6/1緑灰　粘土　5-2b層
18 10GY6/1緑灰　粗砂～極粗砂混シルト　6-1層
19 10Y6/1灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
20 10BG6/1青灰　中砂～粗砂混シルト　6-2層
21 5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　盛土
22 5G4/1暗緑灰　極細砂　粗砂を少量含む　盛土
23 2.5Y6/1黄灰　細砂と粗砂と粘土の互層　水成層　6-4b層
24 5B5/1青灰　粘土　細砂を少量含む　水成層　6-4b層
25 5Y5/2灰オリーブ　中砂　粘土を含む　水成層　6-4b層
26 10Y6/1灰　粗砂～極粗砂　水成層　6-4b層
27 N5/0灰　粘土　湿性堆積物　6-4b層
28 5Y6/1灰　粘土　湿性堆積物　6-4b層
29 10G4/1暗緑灰　粘土　湿性堆積物　6-4b層
30 10G4/1暗緑灰　細砂～中砂混シルト　7-1層
31 10G4/1暗緑灰　粘土～シルト　畦畔
32 5Y4/1灰　粘土　湿性堆積物
33 5G5/1緑灰　細砂混シルト　7-1層
34 5G5/1緑灰　粘土～シルト　8-1層偽礫を少量含む　7-2層
35 5BG3/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層
36 5Y4/1灰　粘土　10層
37 N4/0灰　粘土　10層
38 N6/0灰　粘土　10層
39 N4/0灰　粘土　10層
40 N5/0灰　粘土　10層

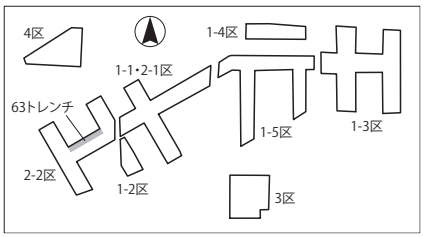
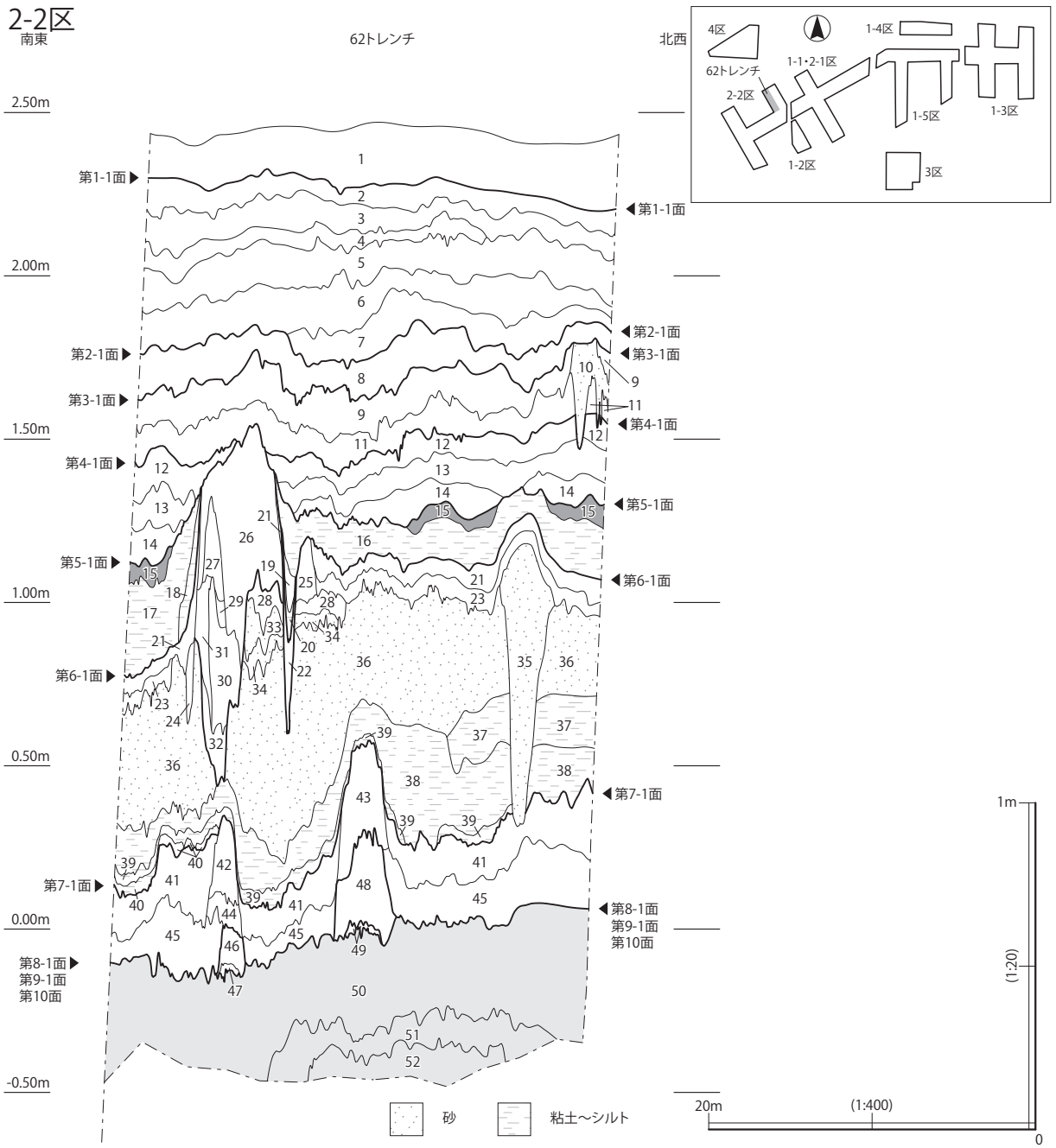
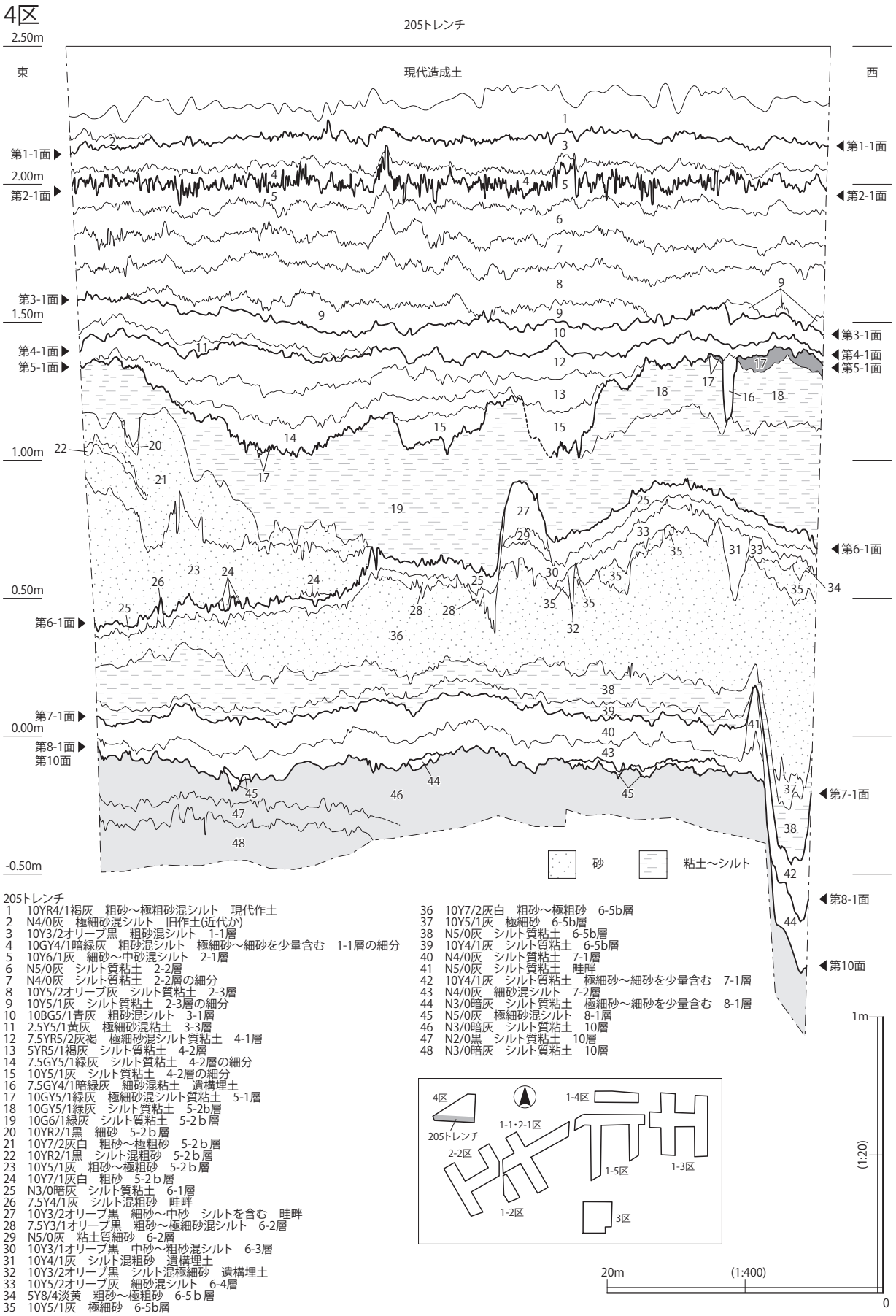


図 22　2－2区　63 トレンチ断面



62トレンチ
1　2.5Y3/1黒褐　粗砂混シルト　現代作土
2　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質粘土　粗砂を少量含む　1-1層
3　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質粘土　粗砂を少量含む　1-1層の細分
4　2.5Y6/2灰黄　シルト質粘土　粗砂を少量含む　1-3層
5　5Y5/2灰オリーブ　シルト質粘土　粗砂を微量含む　1-3層の細分
6　5Y5/1灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　1-3層
7　5Y5/1灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　1-3層
8　5Y4/1灰　細砂混シルト　砂礫を多量含む　2-1層
9　10BG5/1青灰　粗砂混シルト　3-1層
10　2.5Y6/4にぶい黄　粗砂〜極粗砂　3-2b層
11　5G5/1緑灰　粗砂混シルト　3-3層
12　5BG4/1暗青灰　細砂混シルト　4-1層
13　N4/0灰　極細砂〜細砂混シルト　4-2層
14　7.5Y5/1灰　極細砂混粘土　4-3層
15　N5/0灰　シルト〜シルト質粘土　5-1層
16　N5/0灰　シルト質粘土　5-2b層
17　N4/0灰　シルト質粘土　5-2b層
18　10Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　5-2b層
19　5Y4/2灰オリーブ　シルト質粘土　粗砂を多量含む　5-2b層
20　5Y5/1灰　シルト質粘土　5-2b層
21　10GY6/1緑灰　粗砂〜極粗砂混シルト　6-1層
22　5Y4/1灰　シルト質粘土　細砂を多量含む　遺構埋土
23　10BG6/1青灰　中砂〜粗砂混シルト　6-2層
24　10Y6/1灰　シルト混細砂　粗砂を少量含む　遺構埋土
25　5Y4/2灰オリーブ　細砂〜中砂　粗砂を少量含む　畦畔
26　2.5Y5/2暗灰黄　細砂〜中砂　粗砂を多量含む　盛土
27　2.5Y6/2灰黄　粗砂〜極粗砂　礫2〜3㎜を多量含む　盛土
28　5G4/1暗緑灰　細砂　粗砂を少量含む　6-3層
29　N6/0灰　細砂　遺構埋土
30　2.5Y7/3浅黄　粗砂〜極粗砂　遺構埋土
31　2.5Y5/1黄灰　シルト混極細砂　遺構埋土
32　2.5Y7/2灰黄　粗砂〜極粗砂と細砂の互層　遺構埋土
33　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂　6-4b層
34　5Y5/1灰　シルト混細砂　6-4b層
35　2.5Y5/4黄褐　粗砂〜極粗砂　細砂を少量含む　溝か　6-4b層
36　2.5Y6/4にぶい黄　細砂と粗砂の互層　6-4b層
37　5Y6/2灰オリーブ　シルト質粘土　6-4b層
38　5B5/1青灰　シルト質粘土　6-4b層
39　5Y6/2灰オリーブ　シルト質粘土　6-4b層
40　5Y5/1灰　シルト質粘土　6-4b層
41　10G4/1暗緑灰　シルト質粘土　7-1層
42　10G5/1緑灰　シルト質粘土　畦畔
43　10G5/1緑灰　シルト質粘土　畦畔
44　10G4/1暗緑灰　シルト質粘土　畦畔
45　5G5/1緑灰　細砂混シルト　7-2層
46　5BG3/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層
47　5BG4/1暗青灰　シルト質粘土　8-1層と9-1層由来の偽礫を多量含む　8-1層
48　5G3/1暗緑灰　シルト質粘土　8-1層
49　5G3/1暗緑灰　シルト質粘土　9-1層
50　5GY6/1オリーブ灰　シルト質粘土　10層
51　10Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　10層
52　10Y5/1灰　シルト質粘土　10層

図 23　2－2区　62 トレンチ断面



205トレンチ
1　10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂混シルト　現代作土
2　N4/0灰　極細砂混シルト　旧作土(近代か)
3　10Y3/2オリーブ黒　粗砂混シルト　1-1層
4　10GY4/1暗緑灰　粗砂混シルト　極細砂～細砂を少量含む　1-1層の細分
5　10Y6/1灰　細砂～中砂混シルト　2-1層
6　N5/0灰　シルト質粘土　2-2層
7　N4/0灰　シルト質粘土　2-2層の細分
8　10Y5/2オリーブ灰　シルト質粘土　2-3層
9　10Y5/1灰　シルト質粘土　2-3層の細分
10　10BG5/1青灰　粗砂混シルト　3-1層
11　2.5Y5/1黄灰　極細砂混粘土　3-3層
12　7.5YR5/2灰褐　極細砂混シルト質粘土　4-1層
13　5YR5/1褐灰　シルト質粘土　4-2層
14　7.5GY5/1緑灰　シルト質粘土　4-2層の細分
15　10Y5/1灰　シルト質粘土　4-2層の細分
16　7.5GY4/1暗緑灰　細砂混粘土　遺構埋土
17　10GY5/1緑灰　極細砂混シルト質粘土　5-1層
18　10GY5/1緑灰　シルト質粘土　5-2b層
19　10G6/1緑灰　シルト質粘土　5-2ｂ層
20　10YR2/1黒　細砂　5-2ｂ層
21　10Y7/2灰白　粗砂～極粗砂　5-2ｂ層
22　10YR2/1黒　シルト混粗砂　5-2ｂ層
23　10Y5/1灰　粗砂～極粗砂　5-2ｂ層
24　10Y7/1灰白　粗砂　5-2ｂ層
25　N3/0暗灰　シルト質粘土　6-1層
26　7.5Y4/1灰　シルト混粗砂　畦畔
27　10Y3/2オリーブ黒　細砂～中砂　シルトを含む　畦畔
28　7.5Y3/1オリーブ黒　粗砂～極細砂混シルト　6-2層
29　N5/0灰　粘土質細砂　6-2層
30　10Y3/1オリーブ黒　中砂～粗砂混シルト　6-3層
31　10Y4/1灰　シルト混粗砂　遺構埋土
32　10Y3/2オリーブ黒　シルト混極細砂　遺構埋土
33　10Y5/2オリーブ灰　細砂混シルト　6-4層
34　5Y8/4淡黄　粗砂～極粗砂　6-5ｂ層
35　10Y5/1灰　極細砂　6-5b層
36　10Y7/2灰白　粗砂～極粗砂　6-5b層
37　10Y5/1灰　極細砂　6-5b層
38　N5/0灰　シルト質粘土　6-5b層
39　10Y4/1灰　シルト質粘土　6-5b層
40　N4/0灰　シルト質粘土　7-1層
41　N5/0灰　シルト質粘土　畦畔
42　10Y4/1灰　シルト質粘土　極細砂～細砂を少量含む　7-1層
43　N4/0灰　細砂混シルト　7-2層
44　N3/0暗灰　シルト質粘土　極細砂～細砂を少量含む　8-1層
45　N5/0灰　極細砂混シルト　8-1層
46　N3/0暗灰　シルト質粘土　10層
47　N2/0黒　シルト質粘土　10層
48　N3/0暗灰　シルト質粘土　10層

図 24　4区　205 トレンチ断面

第２項　１－３区

１－３区の発掘調査は、３－１層上面まで機械掘削し、以下、第５－２ｂ面まで人力掘削した。なお、１－３区の発掘調査は弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面の第５－２ｂ面までで、下層確認のための深掘を２箇所行って調査を終了した。

第３－１面（図 25、図版１）

１層を機械掘削して除去した遺構面で、３－１層とした細砂混シルトの上面に当たる。調査地の南側では、機械掘削終了時で３ｂ層の上面が露出した状態となり、１・２層に削平を受けたため、遺構面の遺存状況は悪い。

地形は全体的に平坦で、調査地南側は３ｂ層とした砂礫層上面がやや高い。一方、調査地北西側は、５－２ｂ層とした砂礫が分厚く堆積することにより、南西側とほぼ同じ標高である。

第３－１面では、第１面に帰属する杭列と、１・２層下面に帰属する耕作関連の溝が検出された。１層下面の耕作関連の溝は砂礫を多量に含む埋土であるのに対し、２層下面は泥質の埋土である。耕作関連の溝は大半が１層下面に帰属した。なお、２層下面の溝は、方位が東西で、１層下面の溝と方角が異なる。

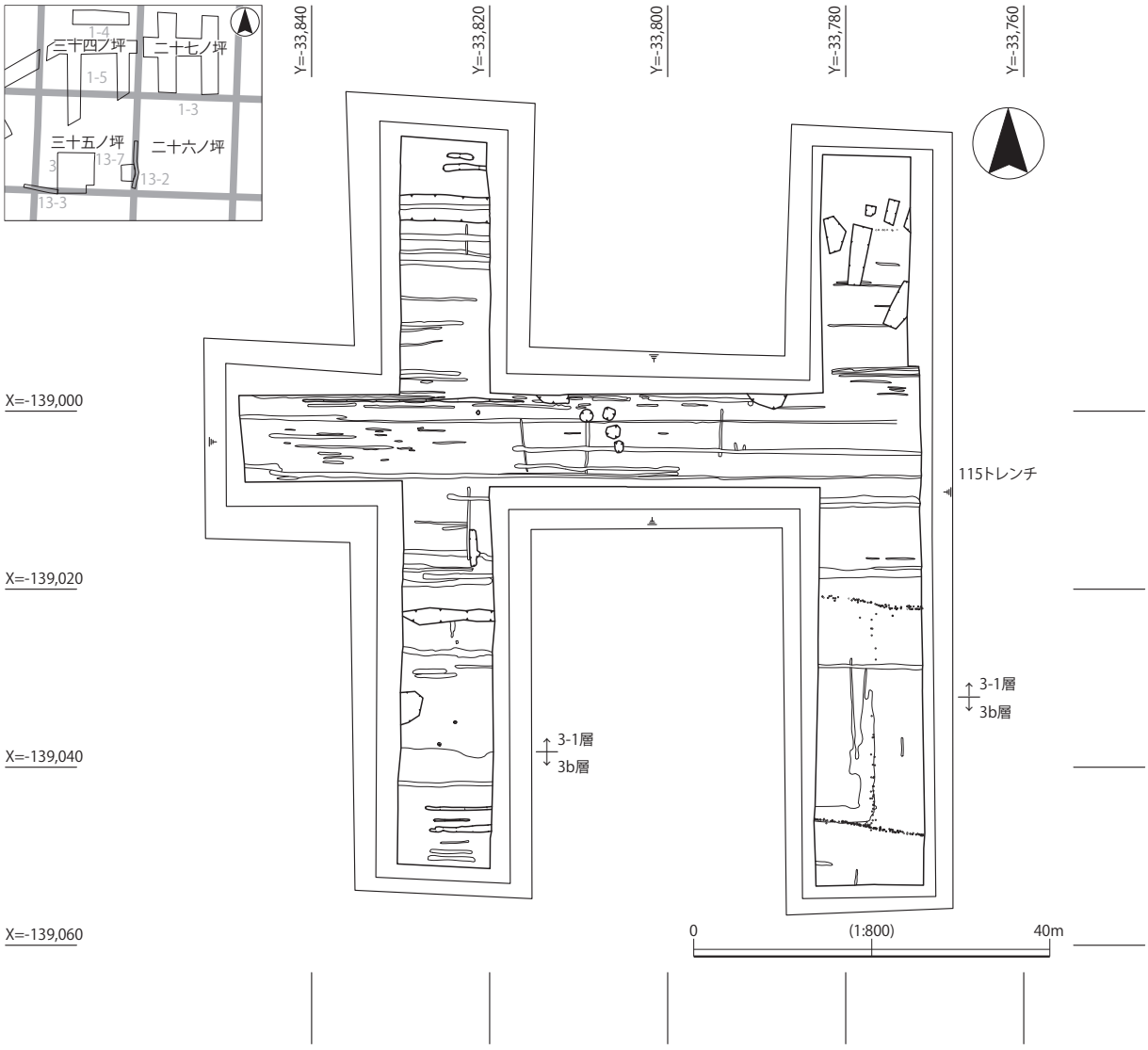


図 25　１－３区　第３－１面平面

第４－１面（図 26、図版１）

３－１・３ｂ層を除去して検出した遺構面で、４－１層とした細砂混粘土の上面に当たる。調査地の北西側では、この段階で一部５－２ｂ層が露出した状態となり、調査地南東では 1942 微高地が顕在化する。３ｂ層は 1942 微高地と第４－２面で検出された 1946 微高地の南側に堆積しており、調査地南東・南西側では３ｂ層に覆われた条里型地割の水田が検出された。一方、同微高地の北側は、３－１層と４－１層の間に自然堆積層が挟まれないため、遺構面の遺存状態は悪い。

地形は、1942・1946 微高地部分が高く、微高地の南北が低くなっている。第４－１面より下層の遺構面では、弥生時代後期以降に堆積した５－２ｂ層上面及び弥生時代中期後葉以降に堆積した６層上面を反映した地形が徐々に顕在化する。

なお、第１項で述べたとおり、1942・1946 微高地北側の４－１層は、微高地を挟んで、南側の４－１層と地層の連続性が不明確であったため、地層の対比については課題を残した。

水田

条里型地割の水田が 1942・1946 微高地の南側で検出された。条里型地割の水田は、一辺８～ 12 ｍで、1942 微高地に接する部分のみ、やや歪な形状の区画となる。1942 微高地の南側は、水田区画の一部

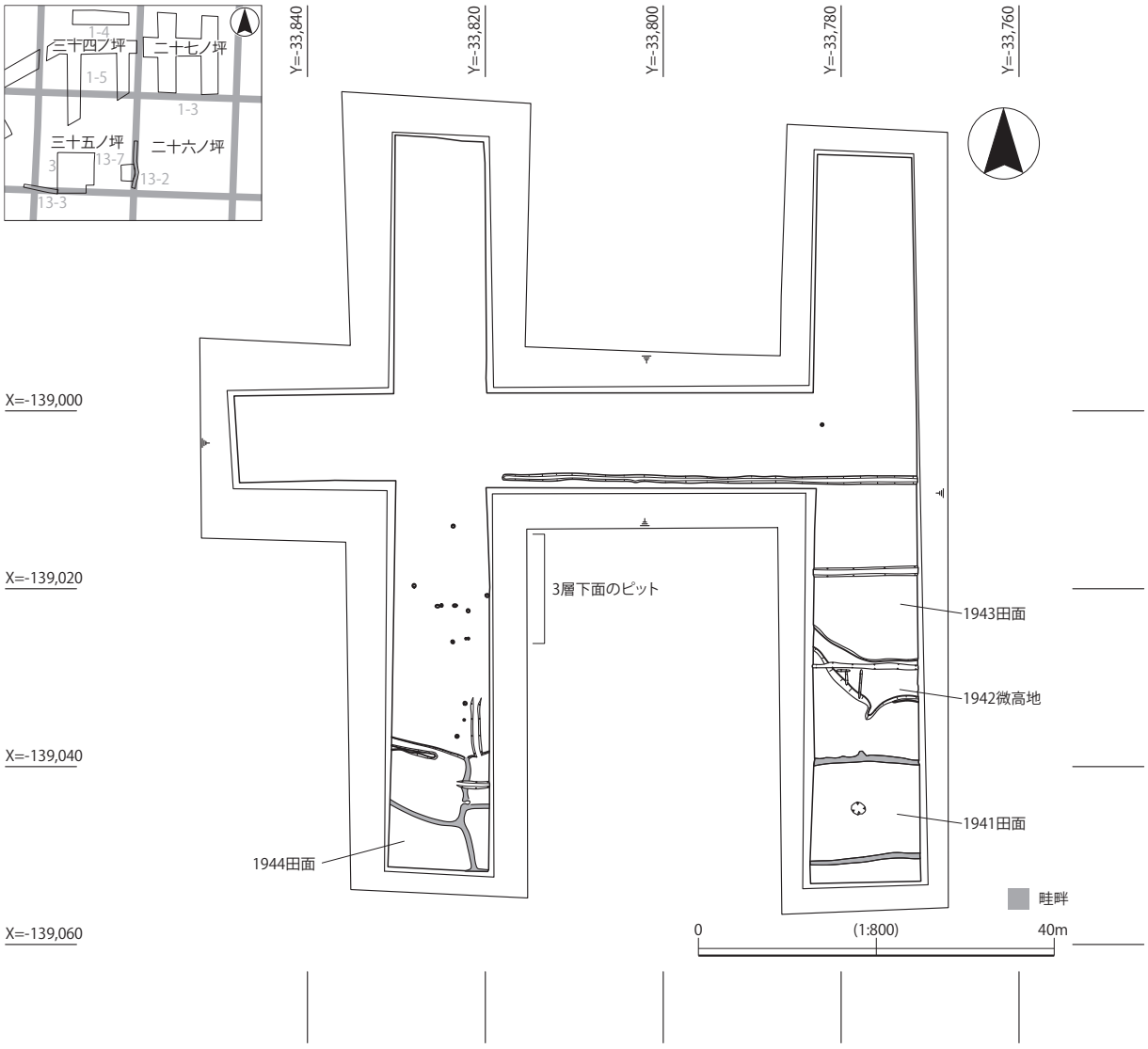


図 26　１－３区　第４－１面平面

となっており、４－１層形成段階の畦畔ないし段として利用された可能性がある。古墳時代の遺物が大量に出土したため、調査当初、古墳時代の水田と考えたが、後に４－１層が２－１区３－１層に対比できることが判明した。時期は平安時代後期と考えられるが、当該期の遺物は皆無である。

第４－２面（図 27、図版１）

４－１層を除去して検出した遺構面で、４－２層とした極細砂混シルトの上面に当たる。1942・1946 微高地の北側では、５－２ｂ層が露出する範囲が広がる。

1942 微高地の南側では、４－１層下面に帰属する擬似畦畔と、南西方向に延びる田面の段が検出された。南西方向に延びる田面の段は、第４－１面で検出された条里型地割の区画とは異なるもので、５－２ｂ層上面の高まりに沿うものである。

４－２層とした作土から古墳時代中～後期の土器が多量に出土しており、古墳時代の水田作土の可能性があると考えたが、第５－１面で検出された擬似畦畔（４－２層帰属）も条里型地割の区画で、その可能性は低い。４－２層はさらに細分が可能で、南西方向に延びる田面の段は４－２層下位の地層に帰属する可能性がある。なお、下位の地層は古墳時代の作土である可能性があるものの、遺存状態が悪いため検証することはできなかった。

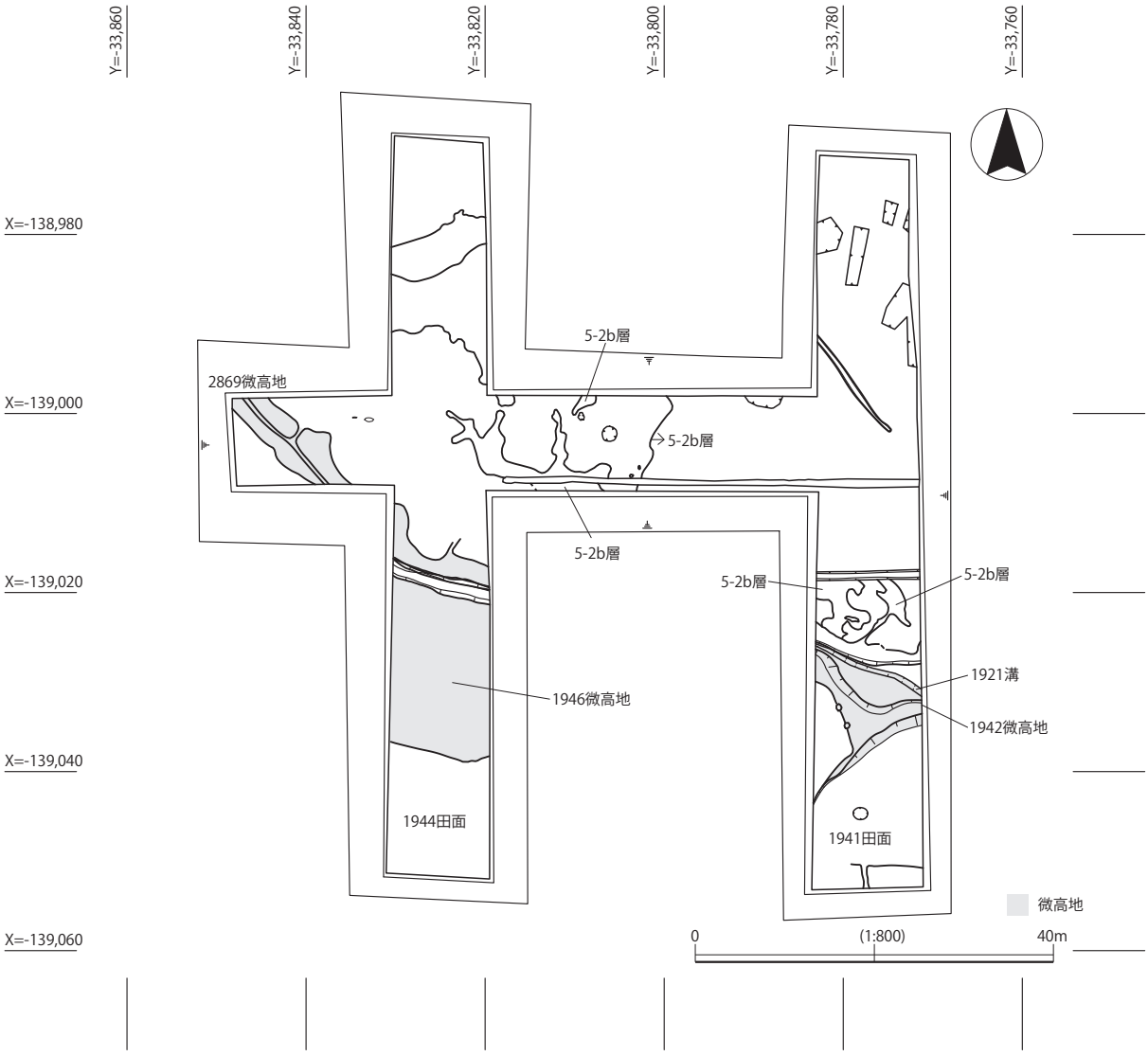


図 27　１－３区　第４－２面平面

第５－１面（図 28）

４－２層を除去して検出した遺構面で、５－１層とした古土壌、シルト質極細砂～細砂の上面に当たる。1942・1946 微高地が第４－２面より顕在化し、南北の低所と比高は 0.1 ～ 0.2 ｍとなる。

第５－１面では、調査地北東部で水田と、微高地上で 1921・1963・2870 溝が検出された。1963・2870 溝は、第５－２ｂ面で検出された遺構と同時期に機能し、低地と微高地を分ける区画溝としての機能もあったと考えられるため、第５－２ｂ面で報告を行う。

なお、５－１層とした古土壌は、層厚が 20cm を超える場合があり、調査時には地層の境界部が不明瞭ながら、５－１－１・５－１－２層として掘削を行った。弥生時代後期から古墳時代中期初頭までの土器が出土している。

水田（図 28）

調査地北東部で検出された小区画水田である。５－２ｂ層を芯にした擬似畦畔が検出された。8019・8020・8022・8024 擬似畦畔は水田の中央部が低くなる地形に合わせて設置されたもので、その間を区画する擬似畦畔も検出された。水田の南側は５－２ｂ層上面が高くなっており、地形的に低い場所を利用した水田と考えられる。

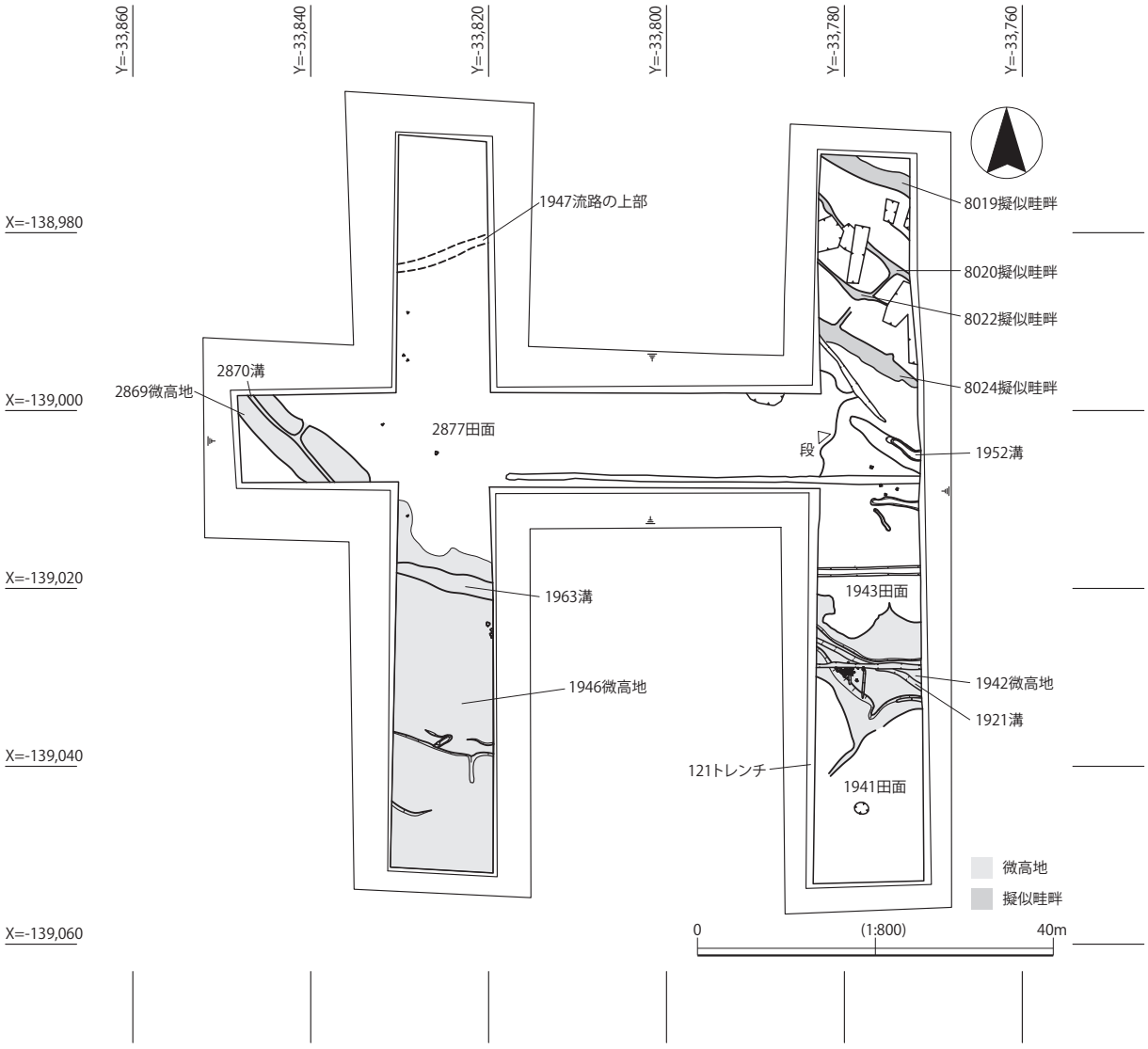


図 28　１－３区　第５－１面平面

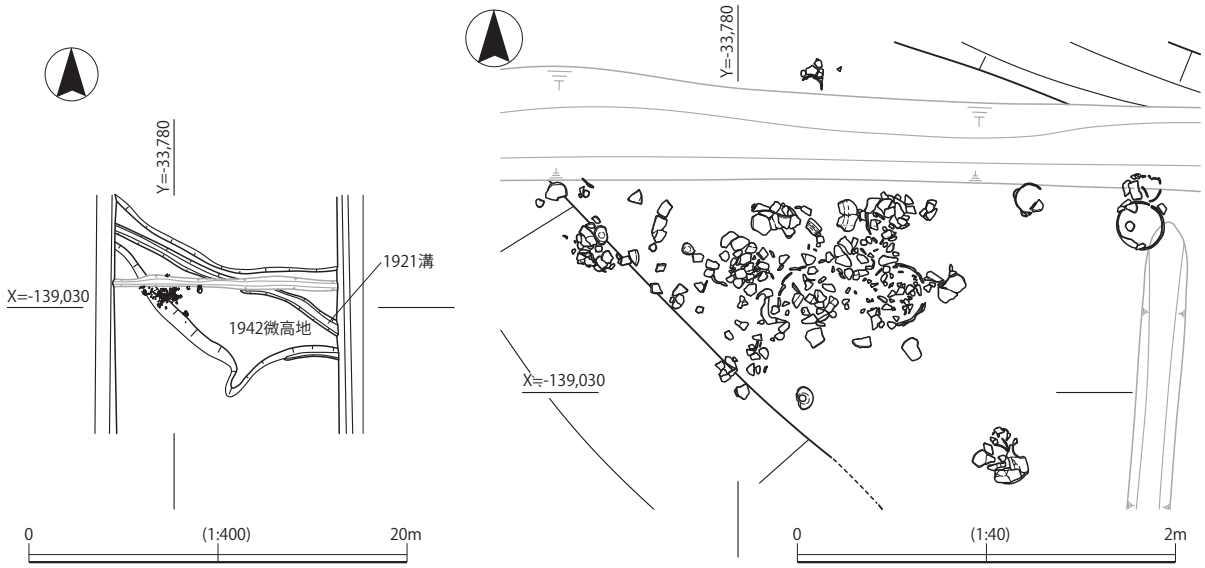


図 29　1－3区　1942 微高地遺物出土状況平面

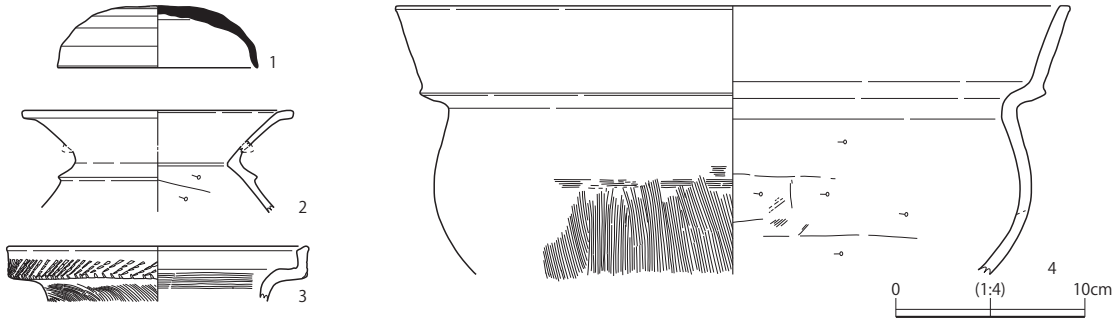


図 30　1－3区　1921 溝・4－1・5－1層出土遺物

遺物が出土していないため、時期の詳細は不明である。層相から 5 － 1 層に対比できると考えられ、時期は古墳時代中期初頭以前が想定される。

1921 溝（図 29・30）

1942 微高地上で検出された。規模は、幅 0.3 m、深さ 0.2 mである。埋土は、水成層の砂層で、流向は北西方向と考えられる。1921 溝から、図 30 － 1 の須恵器坏蓋が出土した。口径が小さく、TK209 ～ 217 型式に位置づけられる。低地において同時期の水田作土を検出することはできなかったが、当該期の集落は周辺になく、1921 溝は微高地上で機能した灌漑用水路と考えられる。

1941・1943 田面出土遺物（図 26・30、図版 53）

1942 微高地の南北で形成された 4 － 1 ～ 5 － 1 層からは弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器が多数出土した。微高地の範囲は、後述する弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が分布する範囲に対応すると考えられる。出土した土器は、多くは細片となっており、4 － 1 ・ 4 － 2 層から出土した土器には古墳時代後期のものが含まれる。

微高地とその周辺の水田から出土した遺物の内、搬入品と考えられる土器を抽出して、図 30 － 2 ～ 4 を図示した。2 は鼓形器台である。細片を図化。筒部はかろうじて面が認められるが､明瞭ではなく、稜に近いものである。口径及び筒部径は遺存した部分から復元しており、図示したより大きくなる可能性がある。精良な胎土を用い、白色を呈す。山陰地方からの搬入品。布留古段階の資料に伴うものと考えられるが、筒部は稜に近いものであり、これより新しくなる可能性がある。3 は受口状口縁の壺であ

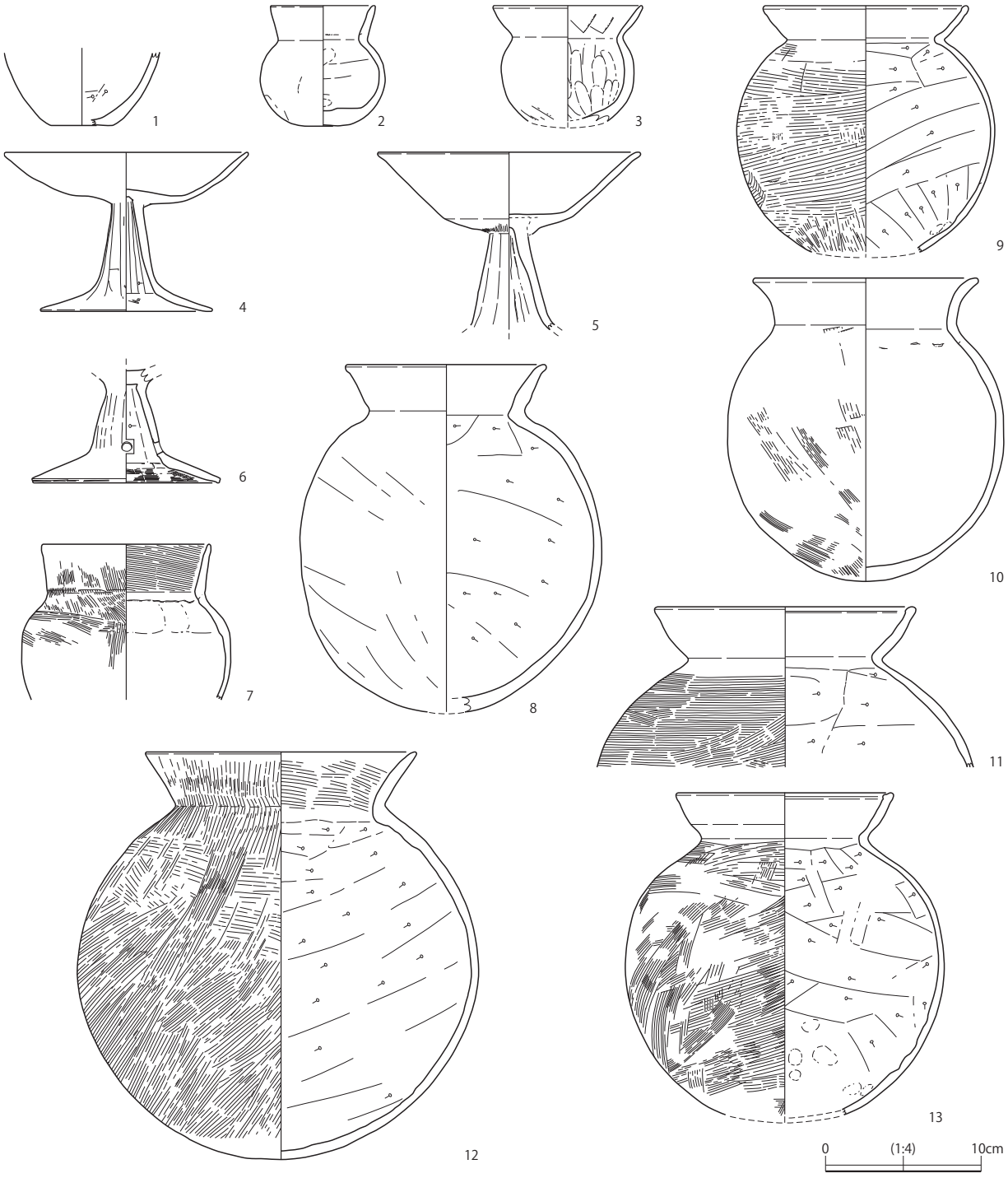


図 31　1－3 区　1942 微高地出土遺物（1）

る。口縁部外面に列点文が施される。内・外面にはハケメが残る。近江地方からの搬入品。弥生時代後期前葉～中葉に位置づけられる。 4 は複合口縁の鉢である。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリで、一部に成形時のハケメが残る。精良な胎土を用い、白色を呈す。山陰ないし吉備地方からの搬入品。 2 と同段階か、端部に面をもつため、それより新しいものと考えられる。

1942 微高地（図 27 ～ 29・31 ～ 33、図版 1 ・51・52）

調査地南東で検出された微高地で、古墳時代中期以降に人工的に造成されたものと考えられる。規模は、幅 2 ～ 5 m、高さ 0.1 ～ 0.2 mである。微高地の盛土単位は土壌化によって不明。微高地の基底面

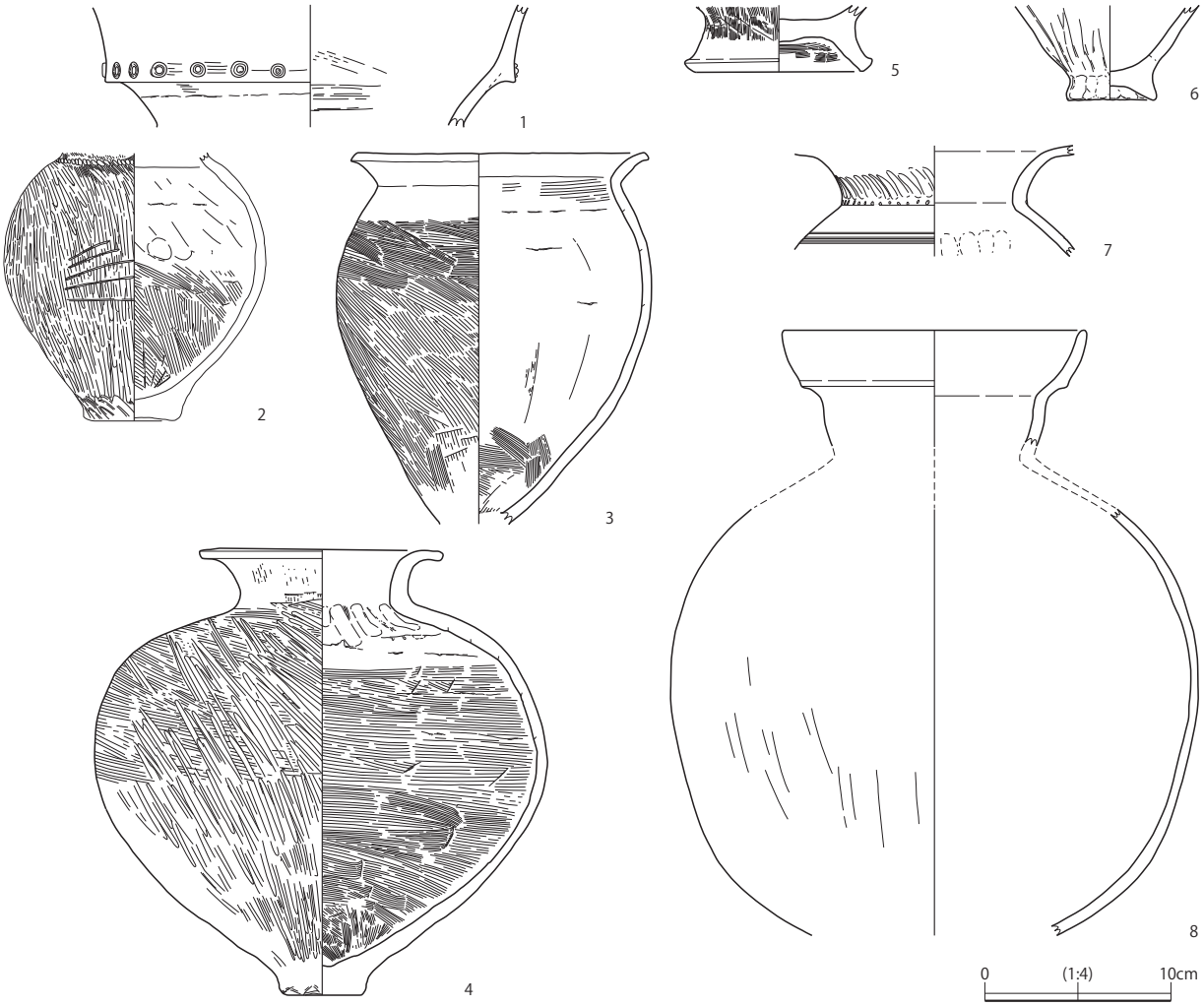


図 32　1－3区　1942 微高地出土遺物（2）

で、土器溜まりが検出された。土器溜まりは、4－1層形成段階の土地利用の状態を反映して、微高地が西方向に狭まる部分で検出された。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土しており、周辺の水田開発に伴って集められたものと考えられる。

1942 微高地の土器溜まりから出土した土器と土器溜まりに関連する土器を図 31・32 に図示した。図 31－1・3・4・7～13、図 32－2～4・6・8は土器溜まりとして取り上げたものである。図 31－1は鉢で、底部が平底である。2・3は、土師器小型丸底壺である。2は、口縁部が短く、やや直立して立ち上がる。3は口縁部がやや外傾しており、口縁部内面には板ナデの痕跡が残る。4～6は土師器高坏である。7は小型の土師器甕である。外面はハケ調整、口縁部内面はハケ調整、体部内面は磨滅が顕著であるが、頸部直下はナデ調整される。8～13は土師器甕である。8は口縁端部がやや外反しており、9～13に比べて器壁が分厚い。外面は板ナデ調整、内面はヘラケズリされる。9は口縁部端部が肥厚しており、体部は球形を呈す。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整される。10は口縁部が直立気味に立ち上がり、端部に向かって外反する。体部外面はハケ調整、内面は磨滅により不明である。11は口縁端部が肥厚し、やや内傾斜しているが、断面形は丸い形状を呈す。12は体部外面が粗いハケ調整、内面はヘラケズリ調整される。13は口縁端部が肥厚し、内傾斜面はヨコナデによってやや凹む。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリ調整で、内底面には指頭圧痕が残る。布留4～5式、古墳時代前期を中心とした資料と考えられる。

図 32 － 1 は複合口縁壺である。外面に円形浮文が貼り付けられる。２は弥生土器壺である。外面は縦方向のヘラミガキ後、体部中位には横方向の直線で、５条の沈線文の記号が施される。３は弥生土器甕である。外面はハケ調整、内面はハケ調整の後ナデか。４は弥生土器広口壺である。口縁部が外反しており、端部は丸くまとめられる。外面は横方向のハケ調整の後斜め方向のヘラミガキ、内面は横方向のハケ調整で、頸部付近はナデ調整される。５は壺底部である。外面にハケメが残る。６は甕底部である。外面は板ナデで、原体の片側に圧力をかけて調整が行われるため、粗いハケメに見える。７は壺頸部である。頸部外面はヘラ状工具を押し当てて斜め方向にナデが施される。肩部には、櫛描き直線文が施される。１と同時期のものか。８は複合口縁壺である。内外面は磨滅しており、遺存状況は悪いが、ハケないし板ナデで用いられた原体の痕跡が筋状に観察される。乳白色を呈する胎土の特徴から搬入品と考えられる。弥生時代後期後葉から弥生時代後期末に比定できる。

第５－２ｂ面（図 33・34・38、図版１）

５－１層とした古土壌を除去して検出した遺構面で、５－２ｂ層とした砂層の上面である。５－１層は 1942・1946 微高地を中心に分厚く堆積し、先述したとおり、調査では５－１－１・５－１－２層として細分して掘削した。第５－２ｂ面で検出された遺構の一部は、両地層の層中で不明確ながら検出

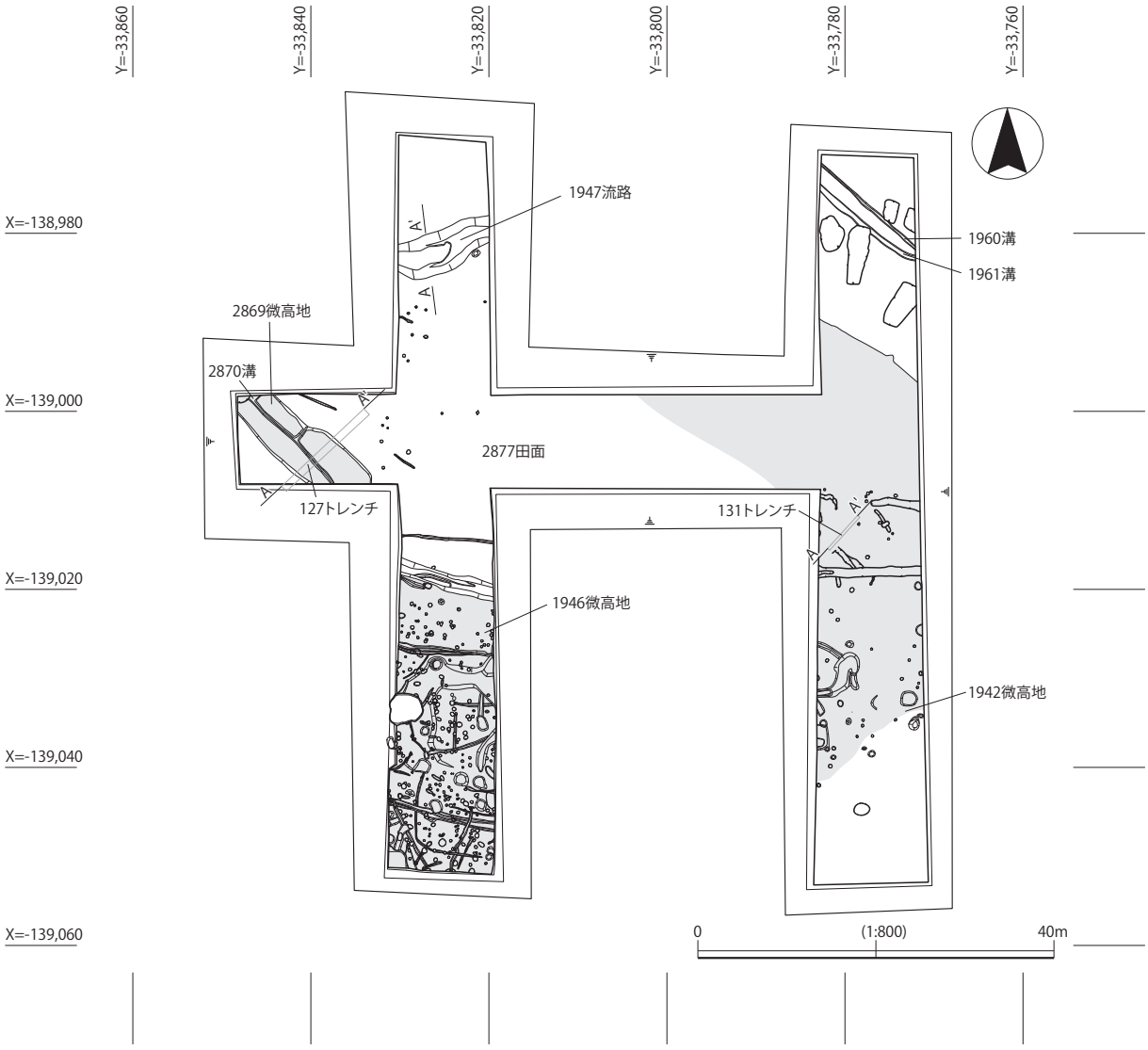


図 33　１－３区　第５－２ｂ面平面

図 34　1－3区　第5－2ｂ面東側平面

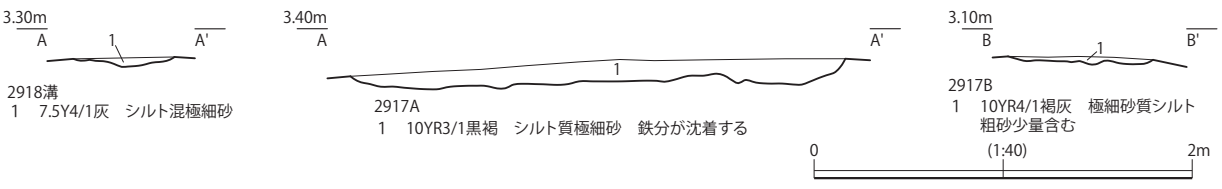


図 35　1－3区　2917 ～ 2919 溝断面

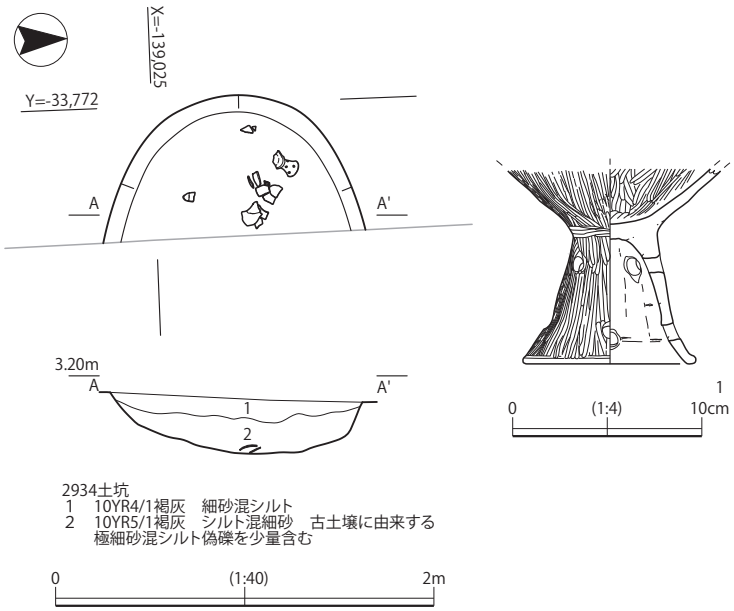


図 36　1－3区　2934 土坑平・断面　出土遺物

されており、実際には両地層をさらに細分して掘り下げを行ったが、結果的に第５－２ｂ面での遺構検出となった。

地形は 1942・1946 微高地が高く、そこから南側に低くなっている。1942 微高地北側は５－２ｂ層上面が全体的に高くなっており、第５－１面より微高地の範囲は広いことが想定され、遺構は希薄であったものの、溝やピットが検出された。なお、以下の報告では、1942 微高地と 1946 微高地周辺とそれ以外の範囲に分けてそれぞれの調査成果の報告を行う。

第５－２ｂ面南東側（1942 微高地周辺）

2934 土坑（図 34・36、図版２・51）

2917 溝の北東で検出された。115 トレンチを設定した場所に当たり、全容は不明。平面形は、円形ないし楕円形である。規模は東西 0.75 m、南北 1.4 m、深さ 0.3 mである。埋土は、下層がブロック土、上層が細砂混シルトである。

図 36 －１の弥生土器高坏、甕の体部片が出土した。高坏は口縁部を欠損した状態で出土した。坏部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、坏部と脚部の接合部は横方向のヘラミガキが施される。脚部には円形の透孔が２段に穿たれる。弥生時代後期初頭に比定される。

2917 溝・2918 溝（図 34・35・37、図版 53）

2934 土坑の西側で検出された。不明瞭ながら切り合い関係があり、2917 溝の方が新しい。2917 溝は弧状になっており、北東側が不整形な土坑状の広がりをもつ。底面に凹凸があり、平面的には２基の土坑が連続するような形状を呈する。規模は幅 0.2 ～ 2.5m、深さ 0.1m である。埋土はシルト質極細砂で、図 37 －４に示した複合口縁壺が出土した。2918 溝は幅 0.5m、深さ 0.04m である。埋土はシルト混極細砂で、2917 溝の埋土に似る。図 37 －５のＶ様式系の甕が出土した。

2903 土坑他出土遺物（図 37）

上記に掲げた遺構以外の遺物を図 37 －１～３に図化した。１～３は 2903 土坑から出土した。１は有段口縁の丸底壺である。内外面は横方向のヘラミガキが施される。２は土師器甕で、口縁部は肥厚し

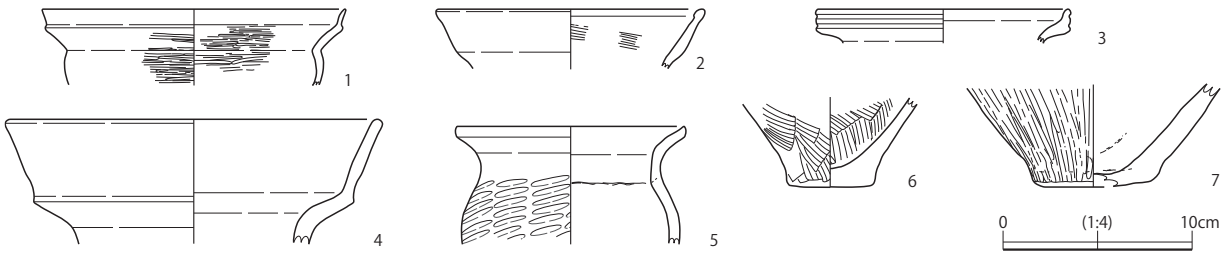


図 37　1－3区　2903 土坑他出土遺物

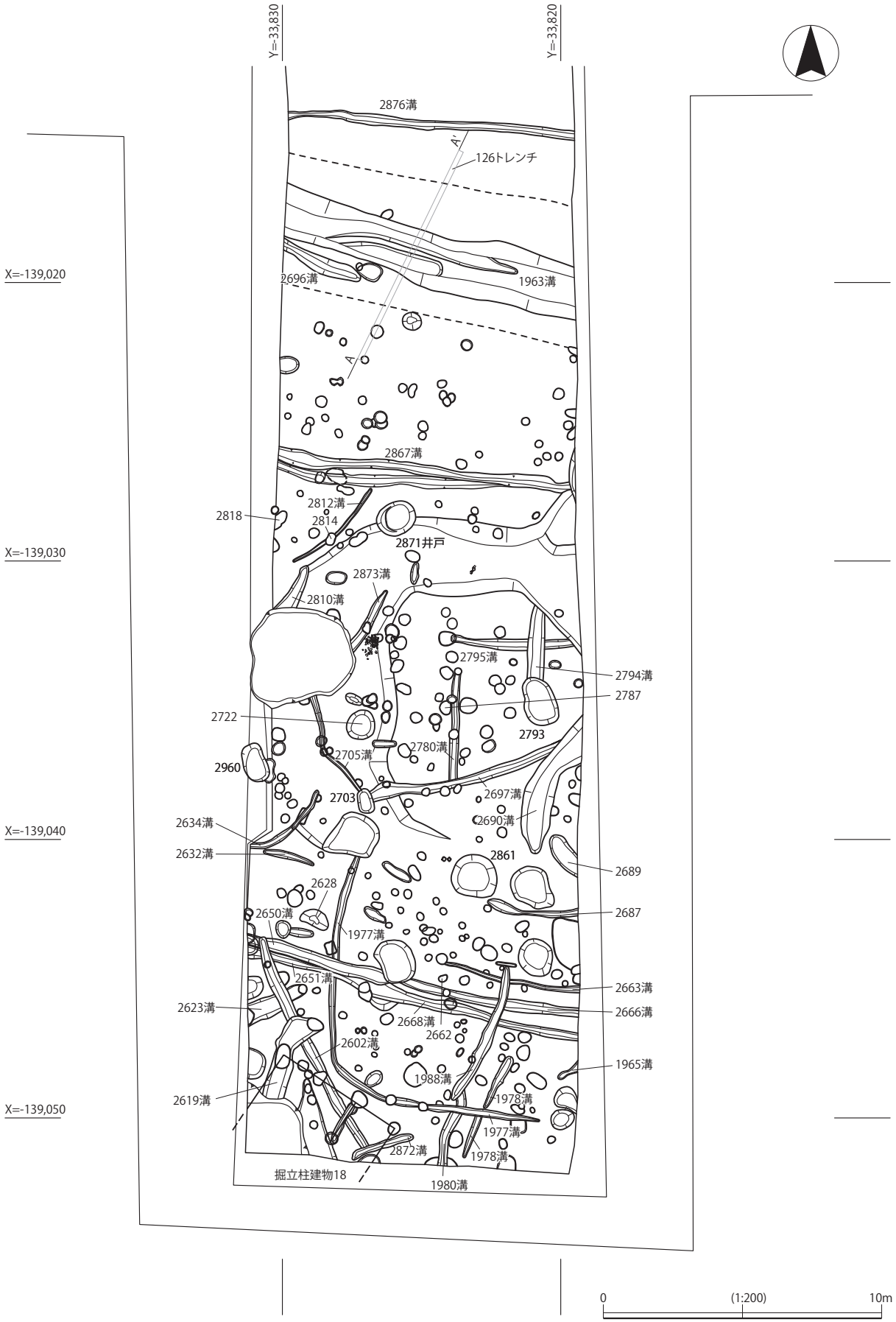


図 38　1－3区　第5－2ｂ面西側平面

ており、端部は丸くおさめられる。３は吉備系の弥生土器甕である。口縁部外面には２条の擬凹線がめぐる。弥生時代後期前葉の遺物で、混入品と考えられる。６は 2900 土坑から出土した弥生土器甕底部である。内外面はハケ調整される。７は 2907 土坑から出土した弥生土器甕底部である。外面はヘラミガキ、内面は磨滅して調整は不明。

第５－２ｂ面南西側（1946 微高地周辺）

掘立柱建物 18（図 38・39）

2666 溝の南側で検出された。建物構造は、１間以上×３間である。柱穴は５基検出されており、２基で柱根が遺存した。それ以外はすべて柱を抜き取られていた。出土遺物は、土師器細片が出土しているが、時期は不明である。５－１層の形成以前に建てられた掘立柱建物と考えられ、古墳時代前期か。

1963 溝（図 28・38・40・41、図版 54）

1946 微高地の南端で検出された。規模は、幅 1.0 m、深さ 0.3 mである。掘り直しがあり、北側に新しく掘り直される。一部平面的に重なることから、掘り分けが不十分であったが、土器は新しい段階の溝に伴う。1921 溝・2870 溝と規模が異なり、1946 微高地縁辺部にあって、基幹水路として機能したと考えられる。

また、両肩に幅２mの畦畔が擬似状に検出された。溝掘削時に生じた５－２ｂ層由来の砂礫を盛土として用いており、1946 微高地北側の５－１層がすりつく。

1963 溝からは図 41 －１～９が出土した。１は土師器坏である。２は壺の底部で、外面にはナデの痕跡が残る。３は須恵器坏身で、口縁部は内傾し、他の坏身と比較して器壁が分厚い。４は土師器を模

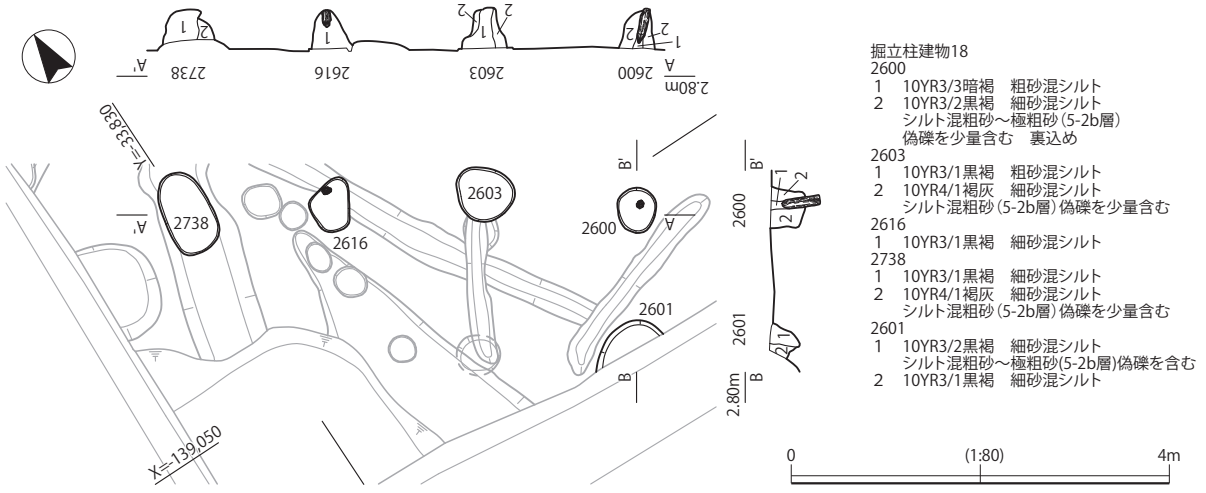


図 39　１－３区　掘立柱建物 18 平・断面

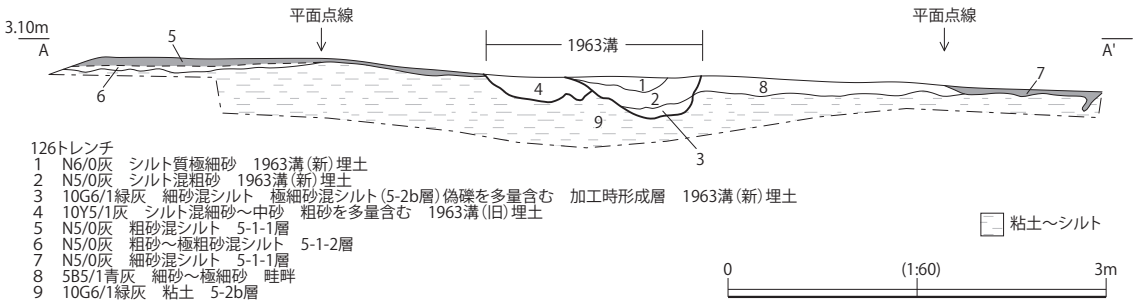


図 40　１－３区　126 トレンチ断面

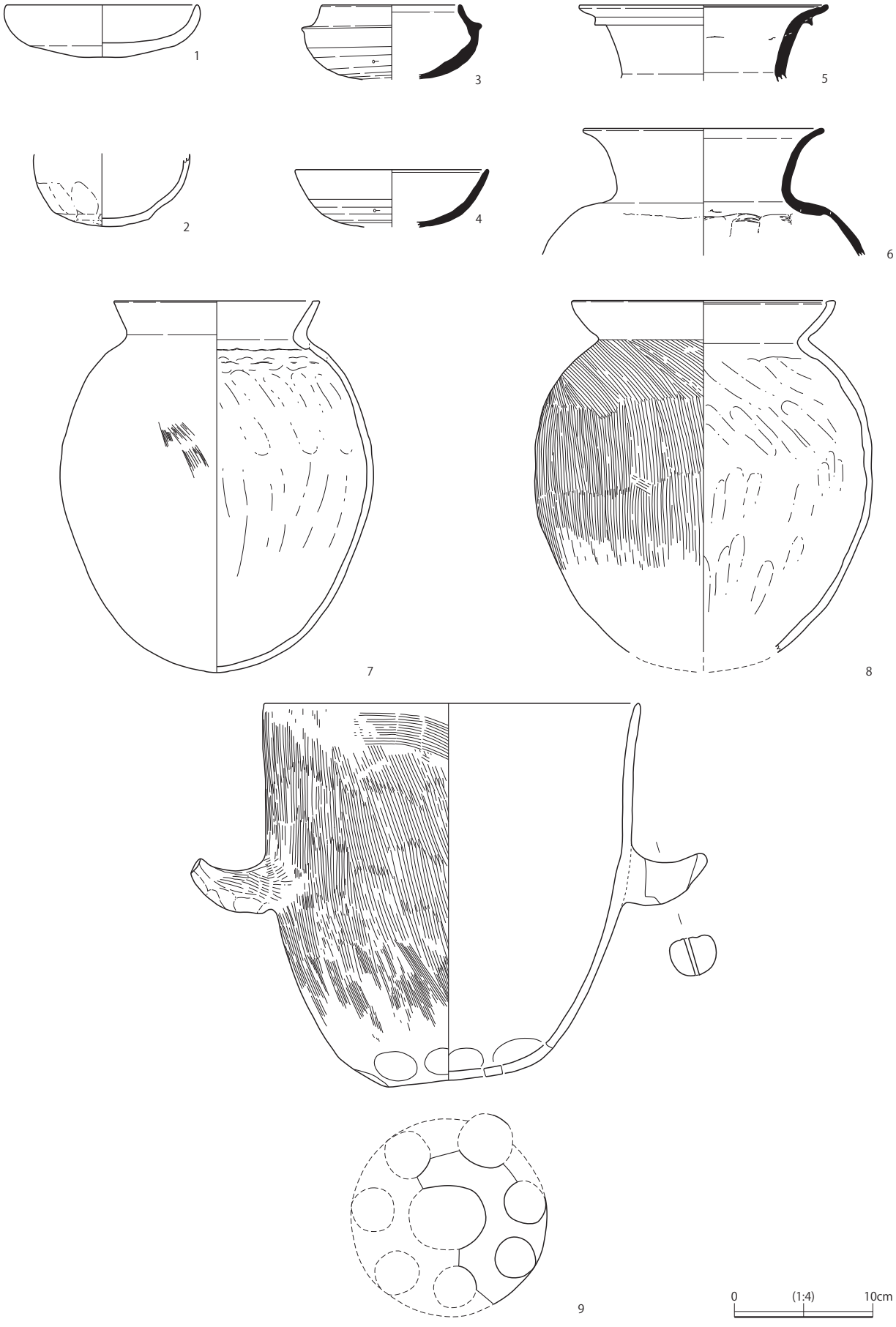


図 41　1－3区　1963 溝出土遺物

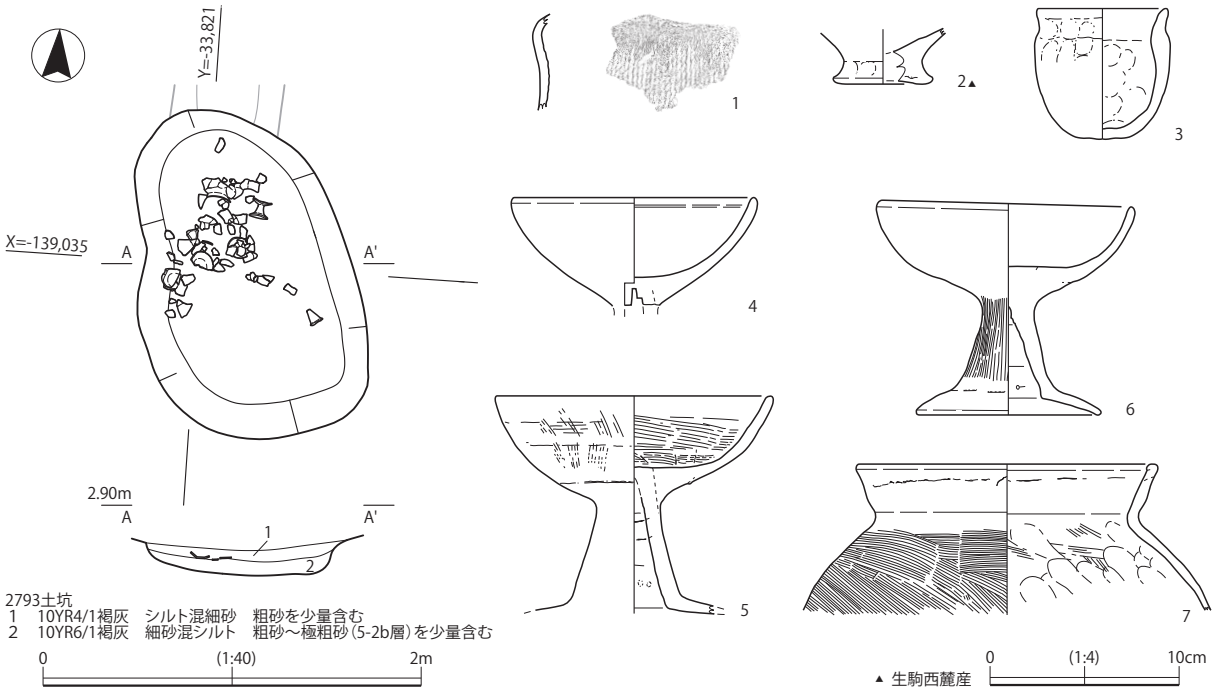


図 42　1－3区　2793 土坑平・断面　出土遺物

した須恵器の高坏坏部である。口縁部に明瞭な凹みがある。外面は中位以下はケズリが施される。５・６は須恵器甕である。５は、口縁端部内側に凹みを持ち、口縁端部より下がった位置にやや丸みを帯びた突帯がめぐる。７・８は土師器甕である。７の口縁端部はやや平坦で、内側にわずかに突出する。外面は磨滅が顕著で、部分的にハケメが残る。８は口縁部がやや内湾しており、肥厚気味の端部は端部上面と外面のヨコナデにより、内側に弱く突出する。９は土師質の甑である。底面には円形の蒸気孔が６箇所確認できた。把手は切り込みを有するもので、ハケ及びナデによって成形される。

出土した須恵器は TK73 型式に比定できると考えられ、微高地上に形成された５－１－１層から出土した須恵器と同段階である。1963 溝の時期は古墳時代中期初頭と考えられる。

2793 土坑（図 38・42、図版２）

2794 溝埋土を除去して検出された。平面形は不整形、規模は、長軸 1.8 m、短軸 1.2 m、深さ 0.16 mである。埋土は、下層がブロック土、上層は周辺で形成された古土壌と土質が同じシルト混細砂である。

2793 土坑から、図 42 －１～７の韓式系土器・土師器が出土した。１は韓式系土器の鉢頸部から体部にかけての破片である。外面は縄蓆文のタタキが施される。２は土師器甕ないし鉢の脚台部で、外面にナデの痕跡が残る。３は小型の鉢で内外面はナデ調整される。口縁部はナデによって成形され、歪な形状を呈す。４～６は土師器高坏である。４は坏部で、口縁部は内湾気味ではあるものの、やや直線的に立ち上がり、逆「ハ」の字形を呈す。５は、坏部外面がハケ及びヨコナデ、内面がハケによって調整される。脚柱部内面は横方向のナデによるもので、工具痕が残る。６の坏部は、内外面は磨滅しており、詳細は不明。脚柱部外面は単位幅が狭いヘラ状工具によるナデ、脚柱部内面は上位がナデ、下位は遺存状況が悪く不明瞭だがケズリによって仕上げられた可能性がある。７は土師器甕である。口縁部は内面がわずかに肥厚し、丸い形状を呈す。体部外面は斜め方向のハケ調整で、上位のハケ調整は断続的に横方向に施される。

出土した土師器の特徴と、縄蓆文土器が伴うことから古墳時代中期前葉に位置づけられる。

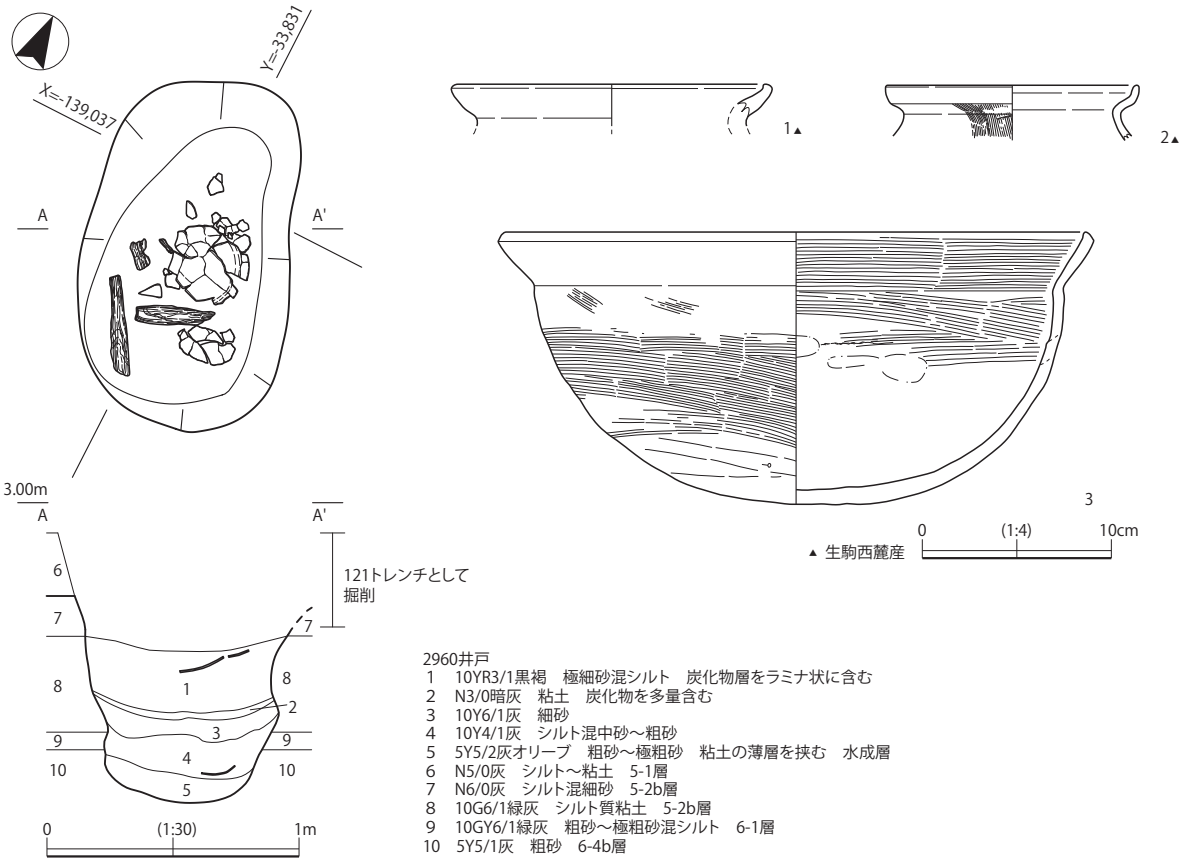


図 43　1－3区　2960 井戸平・断面　出土遺物

2960 井戸（図 38・43、図版 2・50）

2793 土坑の西側で検出された。側溝を設定した場所で検出されており、埋土上部は側溝掘り下げ時に一部を掘削した。平面形は、隅丸方形に近い形状を呈する。規模は、長軸 1.4 m、短軸 0.8 m、深さ 0.6 mである。埋土は、下層に水成層の砂層、中層は古土壌に由来する砂層、上層は炭化物の薄層を挟んで、周辺で形成された古土壌と土質が同じ極細砂混シルトである。上層から土師器鉢がまとまって出土した。

2960 井戸から出土した土器は、図 43 －1～3がある。1・2は土師器甕である。口縁端部は上方につまみ上げて丸くおさめられる。2は受け口状の口縁部である。3は土師器鉢である。3の口縁端部は上方につまみ上げられて、三角形状を呈するが端面はシャープではなく、やや丸みを帯びる。外面は中位から上位にかけては斜め方向のハケ、下位は板ナデ調整される。内面は上位がハケ、下位は板ナデが施される。布留 1 式に位置づけられる。

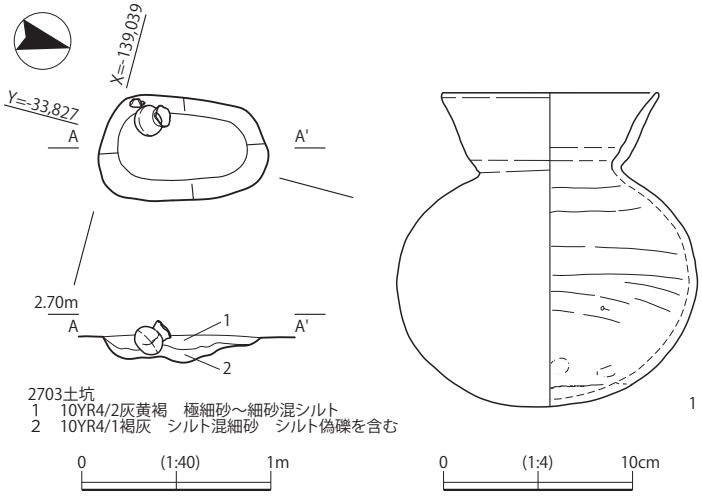


図 44　1－3区　2703 土坑平・断面　出土遺物

2703 土坑（図 38・44、図版 2・50）

微高地上の、凹地で検出された。規模は、長軸 0.9 m、短軸 0.55 m、深さ 0.16 mである。埋土は、下位がブロック土、上位は極細砂～細砂混シルトで、埋め戻

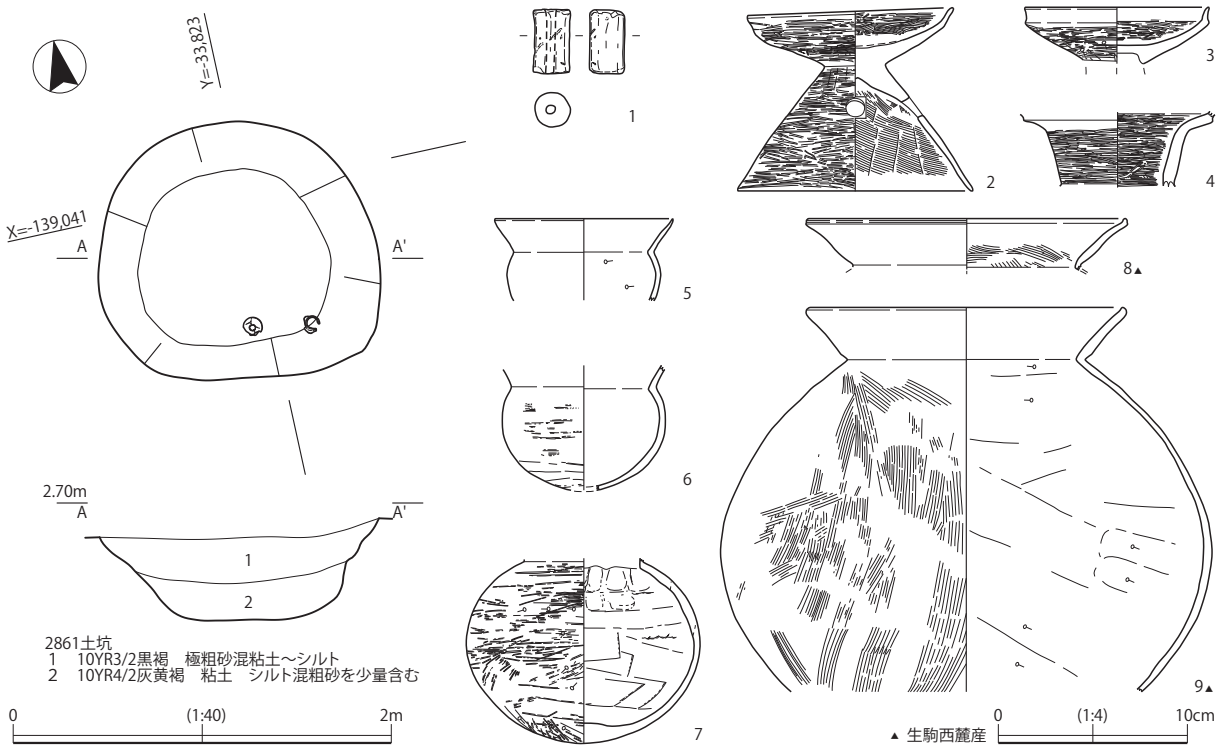


図 45　1－3区　2861 土坑平・断面　出土遺物

されたと考えられる。土坑の南西隅から、図 44 － 1 の土師器直口壺が出土した。1 は口縁部がヨコナデ、外面が磨滅により不明、内面がヘラケズリにより仕上げられる。体部中位よりやや上位に一箇所孔がある。この孔は、器壁が薄くなった部分が粘土接合痕に沿って、剥離してできたと考えられる。布留古段階に位置づけられる。

2861 土坑（図 38・45、図版 50）

2666 溝北側で検出された。埋土の状況から井戸として機能した可能性がある。平面形は円形に近い形状を呈す。規模は、直径 1.5 m、深さ 0.44 mである。埋土は、下層が湿性堆積物のシルト混粗砂を含んだ粘土で、上層は周辺で形成された古土壌と土質が同じシルト混細砂で、泥質である。

2861 土坑から、図 45 － 1 ～ 9 の土製品・土師器が出土した。 1 は土錘である。ナデによって円柱状に成形される。 2 ・ 3 は小型器台で、外面には細いヘラミガキが施される。胎土は精良。 4 は壺頸部で、小型器台と同じく細かいヘラミガキが施される。 5 ・ 6 は小型丸底壺である。内外面は磨滅が顕著であるが、5 は内面にケズリが施される。 7 は壺体部である。 4 と接合する可能性あるが、接点がなかったために別に図化した。外面はケズリの後、横方向のヘラミガキが丁寧に施される。内面は板ナデが施される。2861 土坑から出土した土師器は、布留 1 式に位置付けられる。

2871 井戸（図 38・46、図版 2 ・ 53）

微高地上の凹地、北側斜面で検出された。平面形は円形を呈し、規模は、直径 1.4 m、深さ 0.6 mである。井戸底から木片などとともに、底部を欠いた土師器甕や小型丸底壺等が出土した。なお、小型丸底壺や木片は土師器甕の上から出土したが、平面図は作成しておらず、図版 2 の写真を参照されたい。2871 井戸から出土した遺物は、図 46 － 1 ～ 4 を図化した。 1 は土錘で、側面は楕円形を呈する。 2 は土師器高坏脚部である。内面にはシボリメと工具痕が残る。 3 は小型丸底壺である。外面はやや粗いハケ調整、内面はヘラケズリで頸部直下はナデ調整される。 4 は甕である。外面は粗いハケ調整が施される。

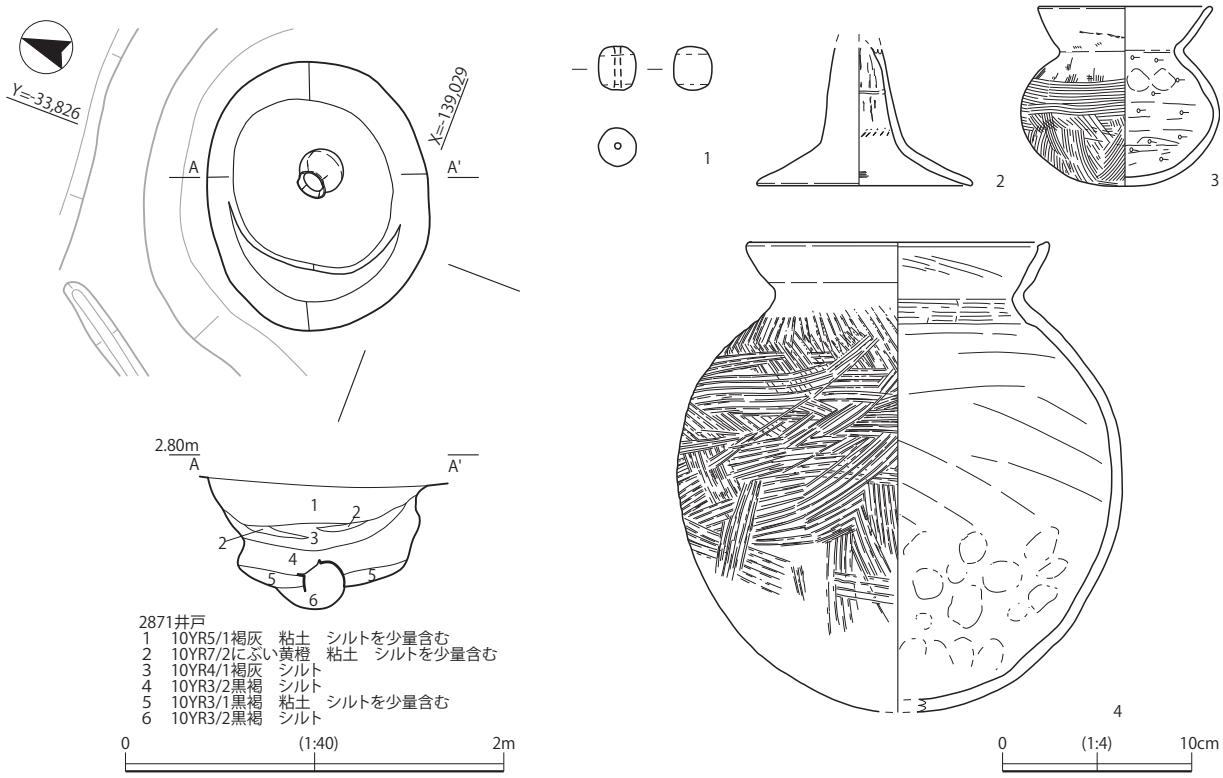


図 46　1 － 3 区　2871 井戸平・断面　出土遺物

2689 土坑（図 38・47、図版 2 ・53）

2861 土坑の東側で検出された。平面形は不整形な長楕円形を呈するものと考えられ、弧状にやや曲がる。規模は長軸 1.6 m以上、短軸 0.7 mである。土坑底面直上から、弥生土器が細片となって出土した。

図 47 － 1 は鉢の把手で、逆「U」字形の形状を呈す。 2 は長頸壺で、口縁端部の外側が肥厚し、丸い形状である。 3 は甕ないし鉢の底部である。 4 は短頸壺の口縁部である。 5 は甕で、外面は板ナデ、内面は磨滅しているが、ナデによる調整か。 6 は高坏で、坏部の内外面にはヘラミガキが観察されるが、磨滅が顕著である。弥生時代後期後葉。

1977・2602・2650・2651 溝（図 38・48）

1946 微高地上では、0.2 ～ 0.5 m幅の溝が複数検出された。竪穴建物に関連する溝等を考慮して調査を行ったが、竪穴建物は 1946 微高地では検出されなかった。埋土は大半が周辺で形成された土壌に由来するものである。1977 溝は調査地南側で大きく屈曲するが、これは 5 － 2 b 層の高まりの縁辺部に沿うもので、用排水・区画を目的として掘削されたものと考えられる。

その他遺構出土遺物（図 38・48、図版 71）

上記に掲げた遺構以外に、1942・1946 微高地周辺で検出された遺構から出土した遺物を図 48 － 2 ～ 4 ・ 6 ～ 9 ・ 11・13 に図示した。

1 は土師器の甑ないし鍋の把手で、2651 溝から出土した。 2 は土師器甕で、2818 土坑から出土した。 3 ・ 4 は土師器高坏脚部で、 3 は 2696 溝、 4 は 2690 溝から出土した。 5 は須恵器高坏脚部で、2651 溝から出土した。外面にはカキメが施される。 6 は須恵器甕で、2628 土坑から出土した。口縁部外面の突帯はシャープさに欠け、丸味を帯びる。 7 ・ 9 は土師器甕で、 7 は 2687 溝、 9 は 2722 土坑から出土した。布留 1 式。 8 はＶ様式系の甕で、2662 ピットから出土した。11 は土師器鉢で、2697 溝から出土した。13 は弥生土器高坏で、2876 溝から出土した。内外面はヘラミガキが施される。

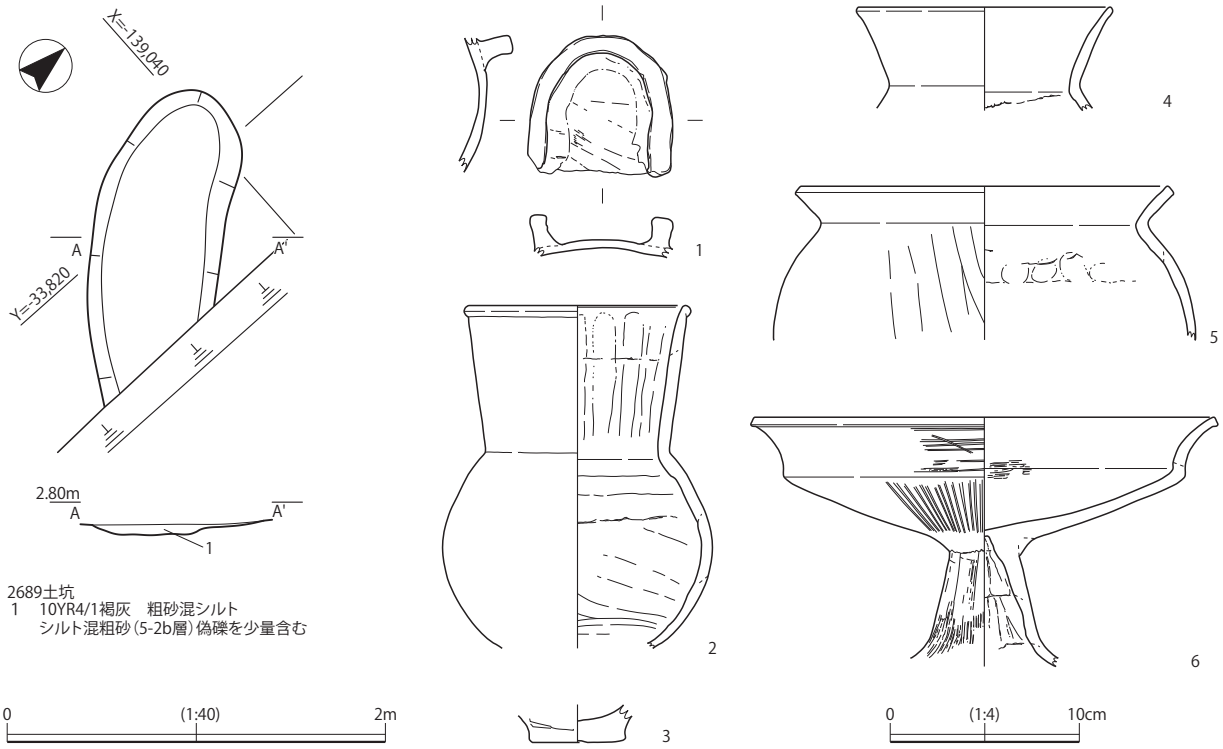


図 47　1－3区　2689 土坑平・断面　出土遺物

弥生時代後期前葉。14 は滑石製紡錘車で、2787 ピットから出土した。断面形は三角形状を呈し、側縁は細かいピッチで削られた面をもつ。表•裏面にはケズリの痕跡が残っており、粗い仕上がりである。

1946 微高地他出土遺物（図 27 ～ 28・33・49、図版 52 ～ 54）

5－1層とした古土壌は、先述したとおり、調査時には5－1－1・5－1－2層として、大きく上下に2層に分けて遺物の取り上げを行った。両地層に明確な地層境界部があったわけではなく、任意分層発掘に近い方法で掘削した。

また、5－1層は、第4－2面の 1946 微高地と 1944 田面に対応させる形で、遺物の掘り分けを行った。結果的には、第5－2ｂ面の調査成果から、弥生時代後期から古墳時代中期初頭にかけては、同じ微高地上であったことが遺構の分布から確かめられており、微高地と水田という区分は当該期には有効ではなく、平面的に地層を掘り分けたものに過ぎない。出土遺物の時期・種類の傾向も、大きく変わるものではなかった。

図 49 －1 ～ 19 が第 4 －2 面 1946 微高地、20 ～ 31 が第 4 －2 面 1944 田面、32 が 2877 田面に対応する範囲から出土した。5－1－1層から出土した土器は、図 49 －1・7・8・9・11・20・21・22・27・28・29・31 である。32 は、2877 田面の層厚が薄い部分から出土しており、5－1層として取り上げを行ったものである。

1は須恵器甕で、口縁部直下の突帯は丸味を帯びる。2は韓式系土器の鉢で、外面に縄蓆文タタキが施される。3は土師器壺で、内外面に細かいハケメが残る。4は土師器壺で、口縁端部は内上方につまみ上げられる。内外面には、細いヘラミガキが施される。布留1式。5は複合口縁壺で、口縁端部は一部欠損する。6は弥生土器壺で、体部上位に波形の記号文が施される。7・8は小型丸底壺である。7の外面は磨滅しており、成形時のハケメが観察される。9は土師器甕で、外面には右上がりの細いタタキメが残る。大和型の庄内式甕。10・11 は土師器甕で、10 はタタキの後、ハケが施される。12 は台

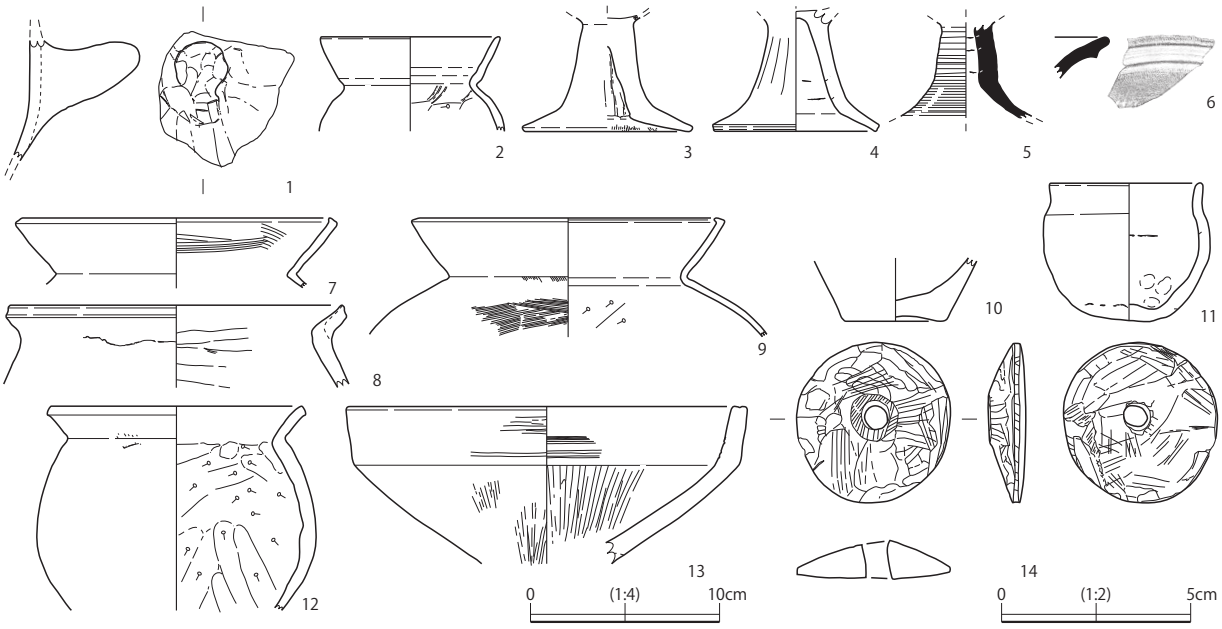


図 48　1 － 3 区　2651 溝他出土遺物

付甕で、口縁部は低く外方に広がっている。東海系の宇田型甕。13・14 は小型器台で、外面には横方向の細いヘラミガキが施される。15 ～ 18 は土師器高坏である。19 は弥生土器壺の口縁部である。20 は韓式系土器鉢で、外面には平行タタキが施される。21 は土師器高坏である。口径が小さいもので、口縁端部は肥厚する。内面には放射状の暗文が施される。22 は須恵器を模した土師器である。外面の突帯は、口縁端部と同時に成形されるため、断面形は端面の凹みのように見える。24 は土師器甕である。25 は小型器台である。26 は須恵器高坏で、坏部底面には列点文が施される。TK73 型式。27 は須恵器高坏型器台で、外面には櫛描文が縦・横方向に施される。焼成時の焼け膨れによって、器体は大きく歪む。28 は土師器鉢で、外面には粗いハケ調整が施される。29 は土師器片口鉢である。30 は土師器鉢で、白い胎土が用いられており、搬入品の可能性がある。31 は須恵器把手付椀で、外面下端は静止ヘラケズリが施される。把手もケズリによって仕上げられる。32 は弥生土器甕で、外面はヘラミガキが施される。

2870 溝・2869 微高地（図 28・33・48・53）

調査地西側、2869 微高地上で 2870 溝が検出された。2869 微高地は周辺の水田開発に伴って人工的に盛土を行って造成されたもので、断面の所見から、弥生時代中期中葉の 6 層形成段階まで遡る可能性がある。規模は、幅 6.5 m、第 5 － 2 b 面からの高さ 0.2 mである。2869 微高地の斜面から図 48 － 10・12 が出土した。2869 微高地の、 5 － 1 層に対比される斜面堆積物から出土した。弥生土器の甕で、弥生時代後期後葉と考えられる。 1 － 5 区北東部で検出された 4590 微高地と同様の変遷を辿る可能性がある。2870 溝の規模は、幅 0.4 m、深さ 0.3 mである。埋土は水成層の砂層で、下層では異なる位置に溝が掘削される。2870 溝には水口が一箇所伴っており、水口も下層では異なる位置で機能したことが確認された。

1947 流路（図 28・33・50・51、図版 2・51）

1946 微高地の北側で検出された。第 5 － 2 b 面で認識しており、 5 － 2 b 層の堆積過程で最終段階に発達した流路と考えられる。 5 － 2 b 層上位の堆積物としては最も古く、弥生時代後期前葉の土器が出土した。1947 流路と同様に、 5 － 2 b 層の堆積過程で最終に発達した、 2 － 2 区の 1890 流路は弥

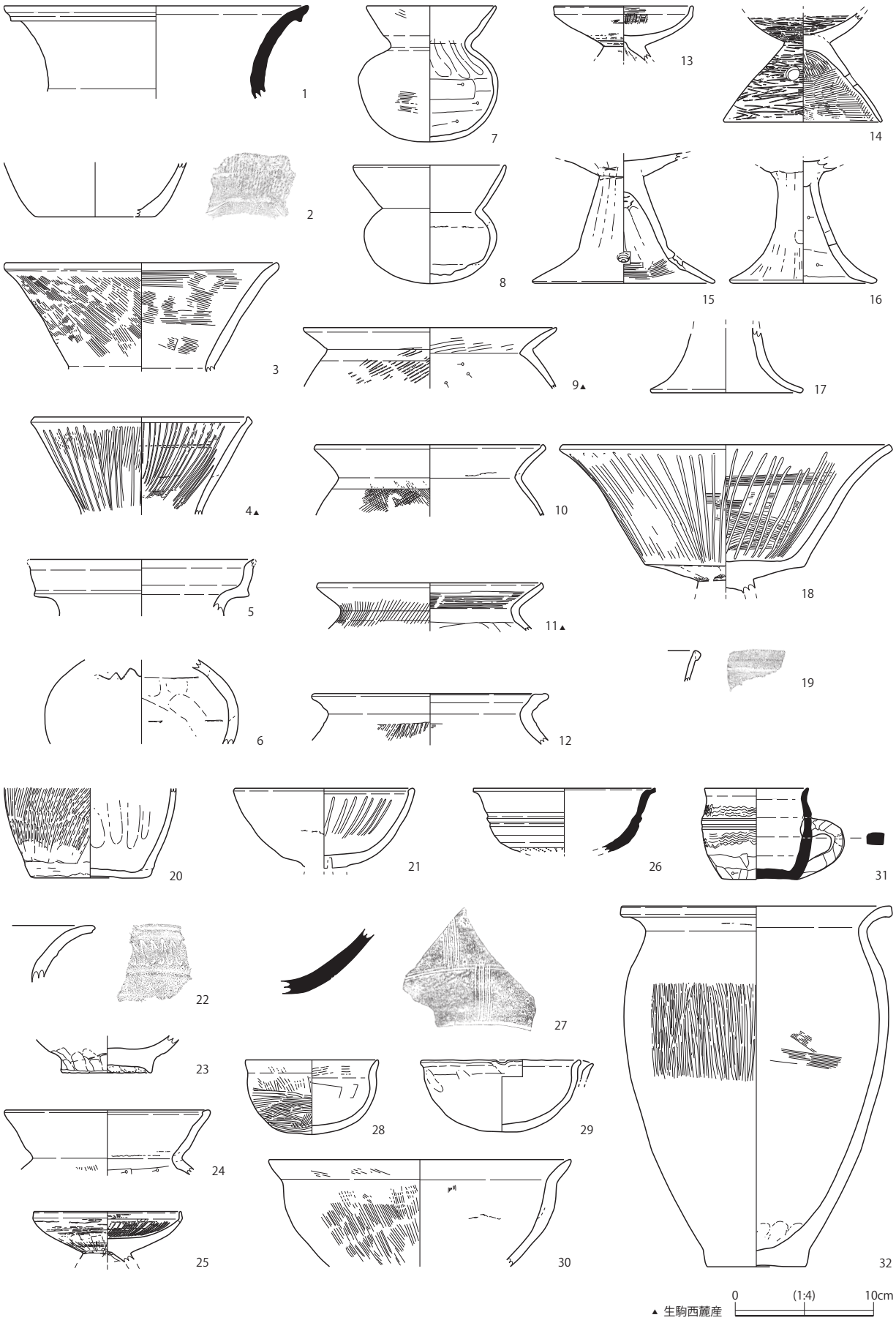


図 49　1－3区　1946 微高地他出土遺物

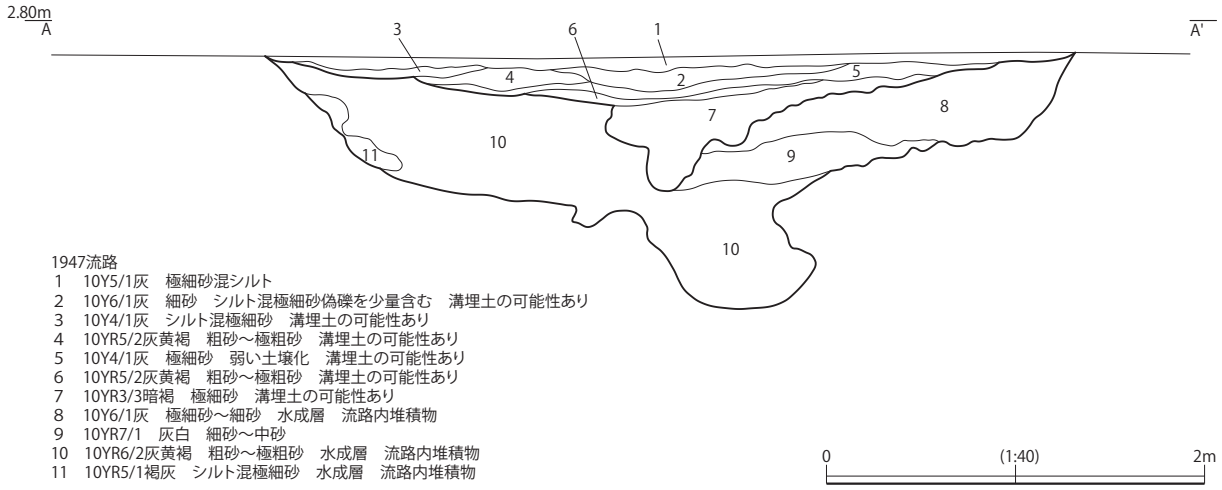


図 50　1－3区　1947 流路断面

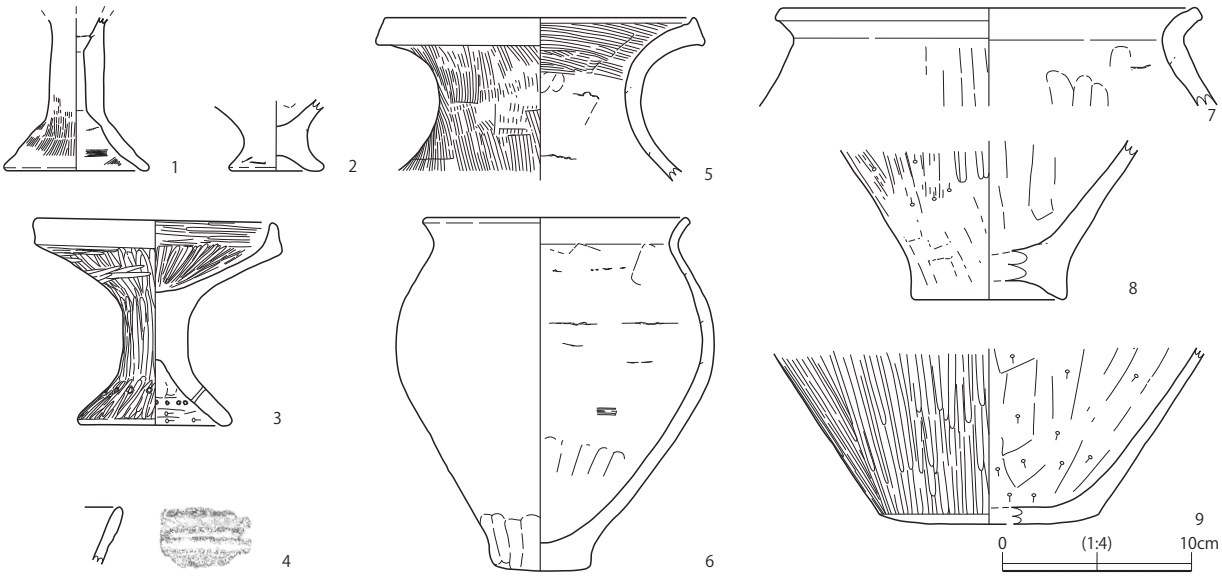
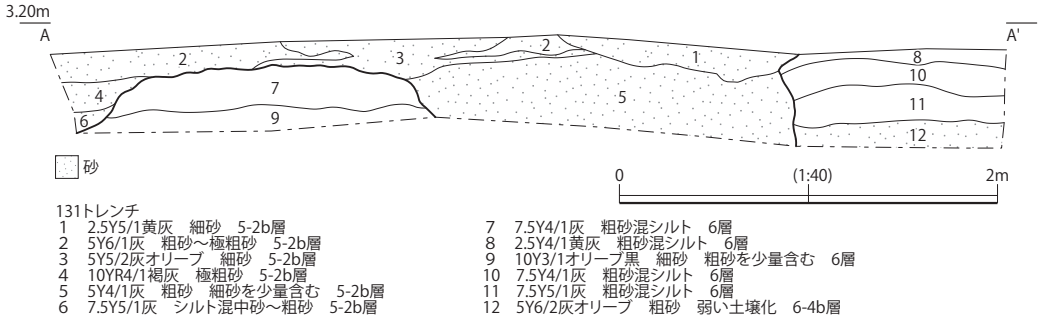


図 51　1－3区　1947 流路出土遺物

生時代後期後葉の土器が出土しており、1947 流路より新しい。1－3区周辺に堆積する5－2 b層は、2－2区より早い段階で堆積が停止したものと考えられる。

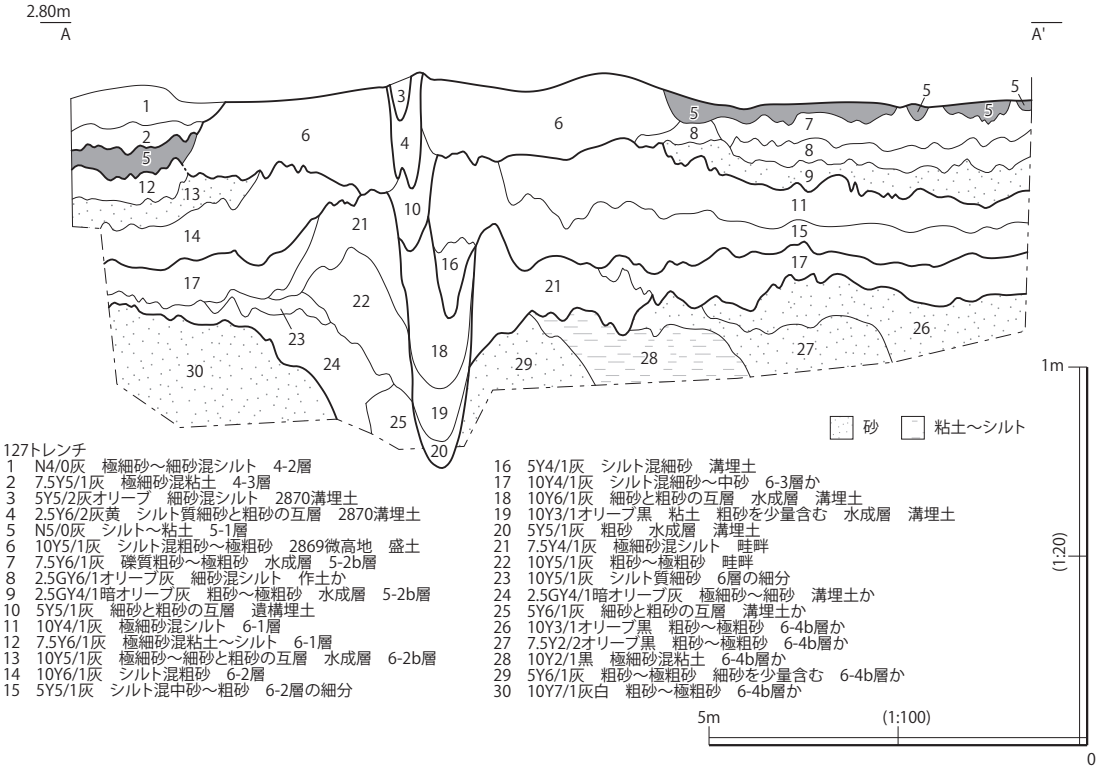
なお、1947 流路は、その上部が加工されて、第5－1面で溝として機能した可能性がある。平面的に検出していないが、断面の検討から溝の可能性があると判断された。溝としての規模は、幅 4.2 m、深さ 1.3 mに復元される。埋土は極細砂で、偽礫状を呈する。上部も溝状に凹んでおり、周辺より低い場所であったと考えられ、古墳時代以降の水路として利用された可能性がある。

1947 流路から出土した弥生土器と縄文土器は、図 51 －1～9を図示した。1は高坏である。2は鉢ないし甕に伴う脚台部である。3は高坏である。坏部は屈曲して短く立ち上がり、端部は丸く仕上げられる。口縁部外面はヨコナデ調整によって凹む。内外面はヘラミガキによって仕上げられており、脚裾部には小円孔が穿たれる。脚部内面はナデとヘラケズリによって仕上げられる。4は、縄文土器の深鉢である。磨滅が顕著で上流から流されてきたものと考えられる。宮滝式～滋賀里Ⅰ式。5は広口壺で、口縁端部は外側に面を持ち、ハケ調整がなされたせいで上下にやや拡張したような形状をなす。6は甕で内外面は磨滅が顕著であるが、ナデの痕跡と、成形時のものと考えられるハケメが観察される。7は



131トレンチ
1　2.5Y5/1黄灰　細砂　5-2b層
2　5Y6/1灰　粗砂～極粗砂　5-2b層
3　5Y5/2灰オリーブ　細砂　5-2b層
4　10YR4/1褐灰　極粗砂　5-2b層
5　5Y4/1灰　粗砂　細砂を少量含む　5-2b層
6　7.5Y5/1灰　シルト混中砂～粗砂　5-2b層
7　7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　6層
8　2.5Y4/1黄灰　粗砂混シルト　6層
9　10Y3/1オリーブ黒　細砂　粗砂を少量含む　6層
10　7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　6層
11　7.5Y5/1灰　粗砂混シルト　6層
12　5Y6/2灰オリーブ　粗砂　弱い土壌化　6-4b層

図 52　1－3区　131 トレンチ断面



127トレンチ
1　N4/0灰　極細砂～細砂混シルト　4-2層
2　7.5Y5/1灰　極細砂混粘土　4-3層
3　5Y5/2灰オリーブ　細砂混シルト　2870溝埋土
4　2.5Y6/2灰黄　シルト質細砂と粗砂の互層　2870溝埋土
5　N5/0灰　シルト～粘土　5-1層
6　10Y5/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　2869微高地　盛土
7　7.5Y6/1灰　礫質粗砂～極粗砂　水成層　5-2b層
8　2.5GY6/1オリーブ灰　細砂混シルト　作土か
9　2.5GY4/1暗オリーブ灰　粗砂～極粗砂　水成層　5-2b層
10　5Y5/1灰　細砂と粗砂の互層　遺構埋土
11　10Y4/1灰　極細砂混シルト　6-1層
12　7.5Y6/1灰　極細砂混粘土～シルト　6-1層
13　10Y5/1灰　極細砂～細砂と粗砂の互層　水成層　6-2b層
14　10Y6/1灰　シルト混粗砂　6-2層
15　5Y5/1灰　シルト混中砂～粗砂　6-2層の細分
16　5Y4/1灰　シルト混細砂　溝埋土
17　10Y4/1灰　シルト混細砂～中砂　6-3層か
18　10Y6/1灰　細砂と粗砂の互層　水成層　溝埋土
19　10Y3/1オリーブ黒　粘土　粗砂を少量含む　水成層　溝埋土
20　5Y5/1灰　粗砂　水成層　溝埋土
21　7.5Y4/1灰　極細砂混シルト　畦畔
22　10Y5/1灰　粗砂～極粗砂　畦畔
23　10Y5/1灰　シルト質細砂　6層の細分
24　2.5GY4/1暗オリーブ灰　極細砂～細砂　溝埋土か
25　5Y6/1灰　細砂と粗砂の互層　溝埋土か
26　10Y3/1オリーブ黒　粗砂～極粗砂　6-4b層か
27　7.5Y2/2オリーブ黒　粗砂～極粗砂　6-4b層か
28　10Y2/1黒　極細砂混粘土　6-4b層か
29　5Y6/1灰　粗砂～極粗砂　細砂を少量含む　6-4b層か
30　10Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　6-4b層か

図 53　1－3区　127 トレンチ断面

甕で、口縁部は外反し、端部に面を持つ。外面は板ナデ調整、内面はナデ調整される。８は甕底部である。内外面はケズリに近い板ナデで、その後の工程と考えられるヘラミガキが一部で認められる。９は甕底部である。外面はヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整される。出土した高坏や短頸壺から、弥生時代後期初頭の資料と考えられる。

第６－１面（図 52・53）

１－３区の発掘調査は第５－２ｂ面で終了したが、第５－２ｂ面において第６－１面に帰属すると考えられる畦畔が露出している場合があった。また、断面においても、６層に帰属する畦畔を確認しており、隣接する１－５区の弥生時代中期後葉の水田面が広がっていることが推測された。131 トレンチでは両肩部に堤を伴う溝が確認されている。第５－２ｂ面の平面においても、堤上部ないし堤の形状が反映して土質が変わる部分が検出された。不明瞭ながら、堤の基底面が下がっていく部分が確認されており、６ｂ層上面の高まりを加工して、溝を掘削した可能性がある。また、127 トレンチでは先述したとおり、2869 微高地が６層形成段階まで遡る可能性が確かめられている。2869 微高地の断面で溝が複数確認されており、溝肩部に堆積する地層も複数に分かれている。

第３項　１－４区

１－４区は、４－１層上面まで機械掘削し、以下、第７－１面で検出した 8062 微高地は第９ｂ面まで、それ以外の範囲は第７－１面まで人力掘削した。

第４－１面（図 54、図版３）

１・２層は機械掘削によって除去した遺構面で、調査地東半は５－２ｂ層とした砂礫の上面、西半は４－１層とした細砂混粘土の上面に当たる。調査地東側が１層、調査地西側が２層によりそれぞれ削平を受ける。第４－１面では、１・２層の下面遺構で、耕作関連の溝が検出された。また、機械掘削対象とした、近世の 4011 溜池と 4001 溝がそれぞれ痕跡として残存する。地形は、東から西側にかけて緩やかに低くなるが、中～近世の作土層の除去面であったため、ほぼ平坦である。

なお、機械掘削を行った時点で、調査地東半は第５－２ｂ面が露出していたため、当該範囲では古墳時代以降と考えられる土坑・ピットが検出された。

4014・4032 ピット列（図 54・55、図版３）

北西から南東に並んで検出されたピット列である。4015 溝が検出された範囲で掘削される。長径 0.2 ～ 1.5 m、短径 0.2 ～ 0.4 mのピットが、0.3 ～ 0.5 m間隔で、ほぼ等間隔に並ぶ。埋土は粗砂～極粗砂混シルトの単層である。１－３層下面に帰属し、１－３層が作土として用いられた段階に形成されたものと考えられる。なお、１－４区では１－３層に対比される地層は明確に認識しておらず、１－１層を細分した地層が対比される可能性がある。２－２区 1667 ピット列と同段階に掘り込まれたピット列と考えられる。1667 ピット列では上部が溝状につながる部分が検出されており、4014・4032 ピット列も本来連続する遺構であった可能性がある。遺物は土師器・須恵器の細片が出土した。１－３層下面に帰属することから室町時代後期以降に掘削されたものと考えられる。

２層・４－１層出土遺物（図 56）

図 56 －１は、韓式系土器の平底鉢で、２層から出土した。外面に縄蓆文が認められる。２・３は４－１層から出土した、奈良時代の須恵器坏身底部である。１－５区で微高地上に形成され、４－１層として掘削した地層からも奈良時代の遺物が出土した。４・５は近世の 4001 溝から出土した遺物である。４は須恵器坏身で細片を図化。TK43 ～ 209 型式。５は須恵器甕の口縁部である。

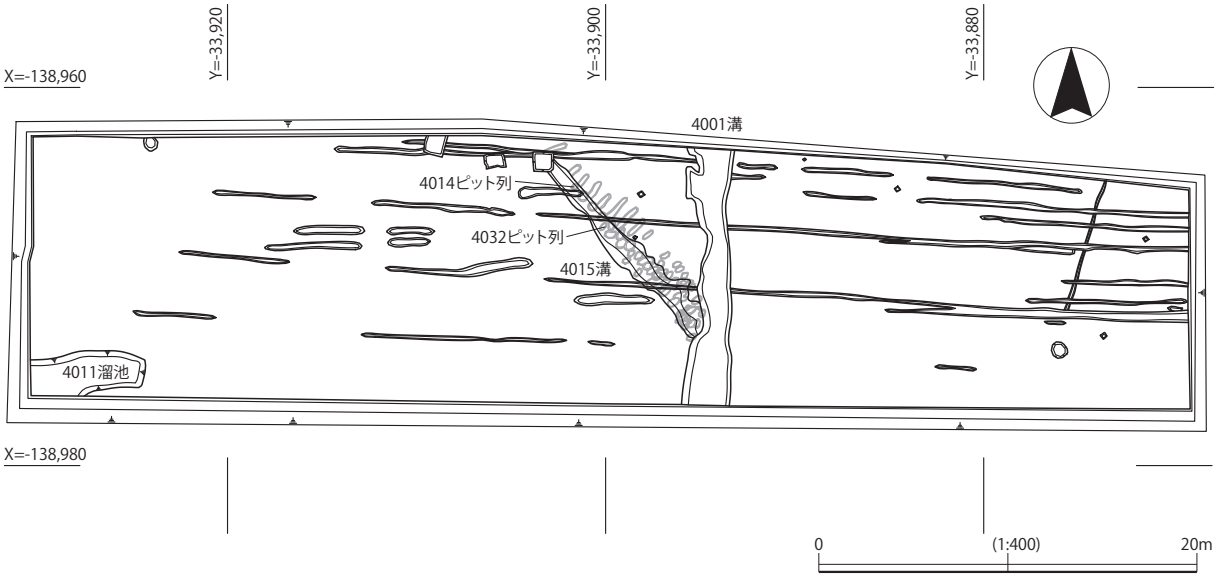


図 54　１－４区　第４－１面平面

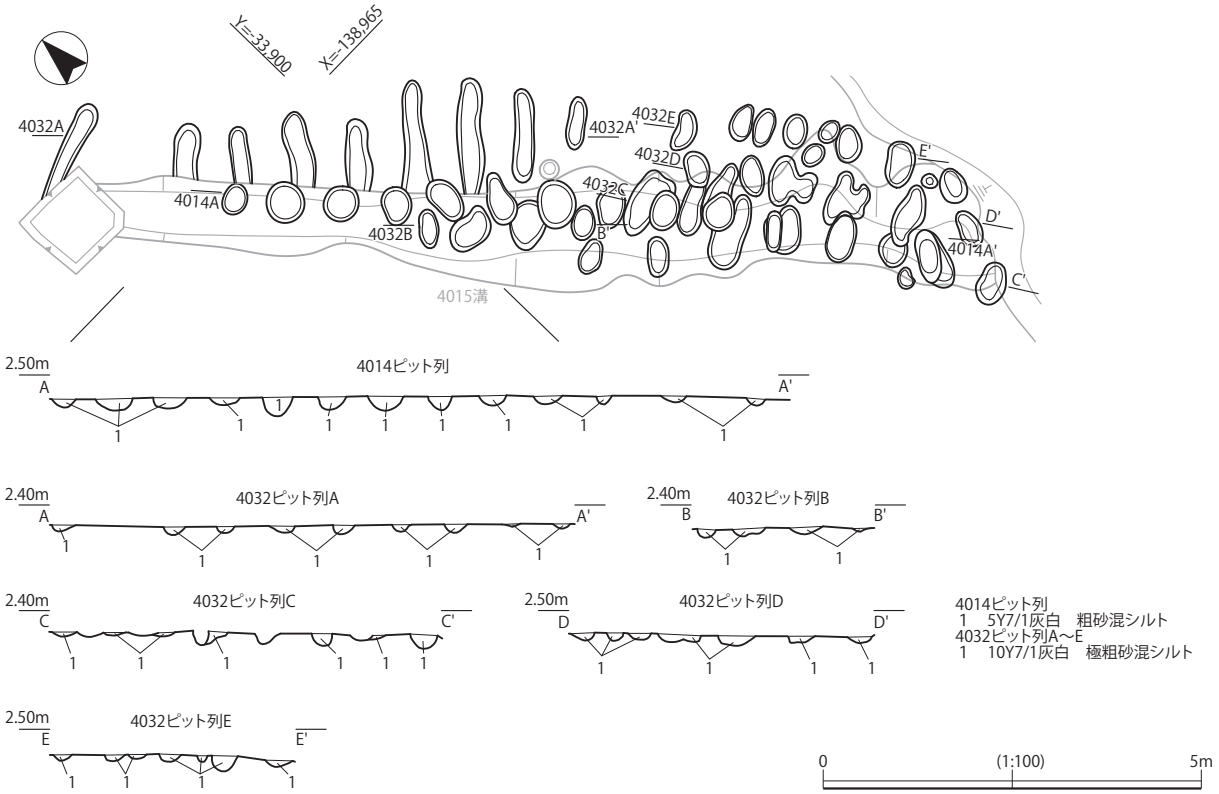


図 55　1－4区　4014・4032 ピット列平・断面

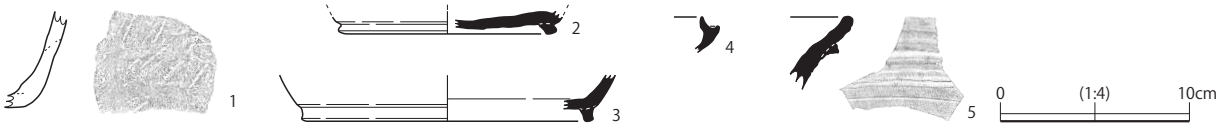


図 56　1－4区　2・4－1層出土遺物

第 5－1面（図 57）

4－1層を除去して検出した遺構面である。調査地西半で、5－2ｂ層によって形成された微高地と低地が明瞭に分かれた。5－1層とした古土壌は、西側 4043 田面において、5－1－1層及び 5－1－2層として、2層に掘り分けて調査を行った。5－1－2層は、基底面が斜めになっており、遺構埋土の可能性があると考えられる。以下では 5－1－1層上面は、第 5－1面として報告を行う。地形は、調査地東側が高く、中央では微高地の凹凸があり、西側に向かって緩やかに低くなっている。調査地中央は、溝の掘削や西側の水田開発に伴って、5－2ｂ層上面の地形に人為的な改変が加えられたものである。第 5－1面では、水田・溝が検出された。なお、第 5－2ｂ面では、5－1層下面に帰属する擬似畦畔が検出された。正方位の区画で、4－1層に帰属する可能性も検討したが、調査所見から現状では 5－1層下面に帰属すると判断した。

4035・4036 溝（図 57 ～ 59）

調査地中央で 2 方向に分かれる溝である。4035 溝は、東側の規模で、幅 1.1 m、深さ 0.3 mである。下位に水成層の砂層、上位に土壌に由来する細砂～粗砂混シルトが堆積する。北東から南西方向に微高地を横切って流れ、西方向に延びる微高地上で、2 方向に分かれる。4036 溝は、谷地形を西方向に流れ、4043 田面に水を供給したと考えられる。4035・4036 溝に切り合い関係はなく、同時期に機能したと

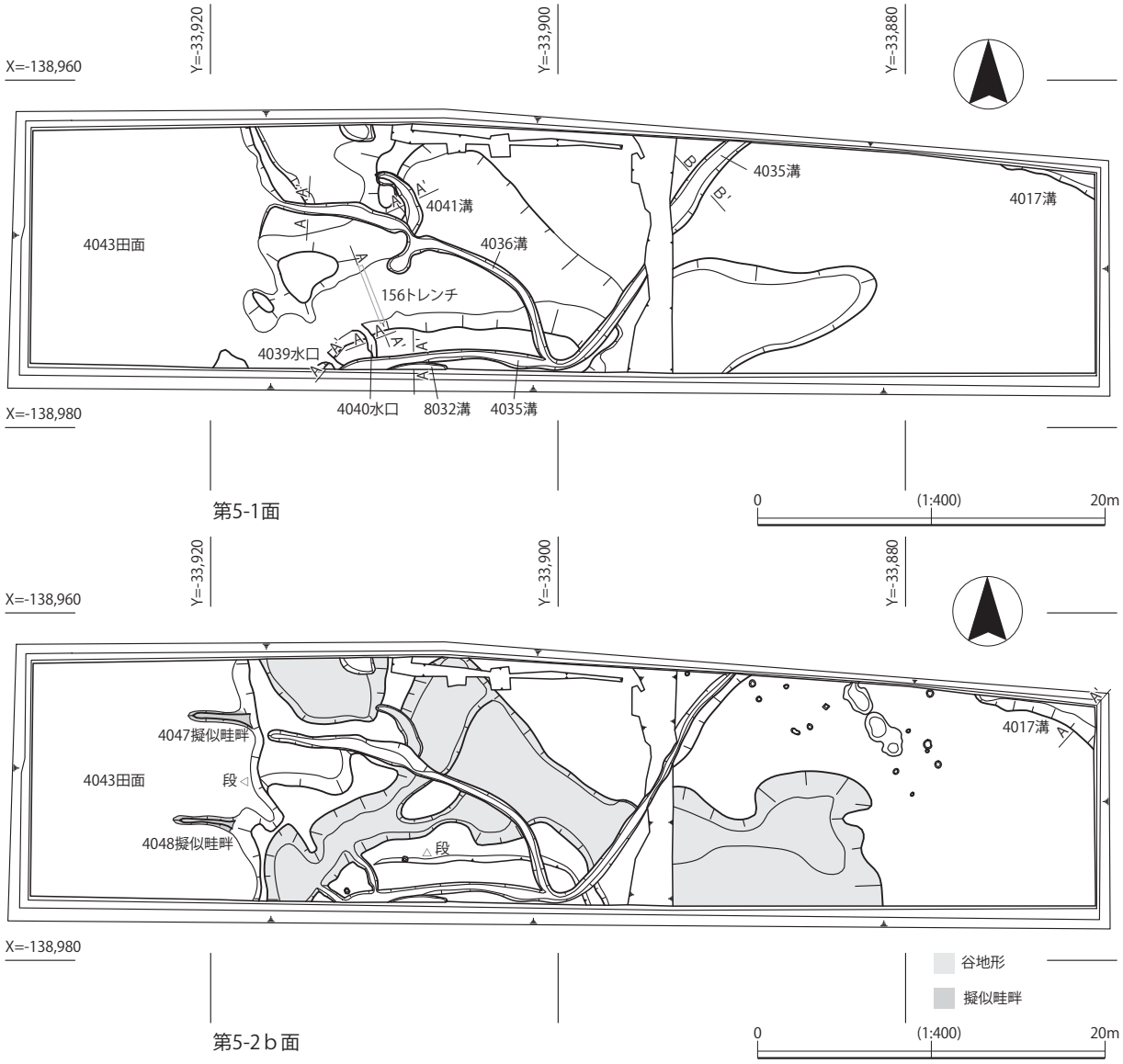


図 57　１－４区　第５－１・５－２ｂ面平面

考えられる。4035 溝は１－３区 2869 微高地上の 2870 溝と連続する可能性がある溝で、主要な灌漑用水路と考えられる。

4035 溝の西側では、4039・4040 水口が検出された。この水口は 4035 溝に切られた状態で検出された。4036 溝が掘削される前にこの水口から谷地形を利用して、4043 田面に水を供給したことが想定される。谷地形の埋没に伴って、水口の機能が失われ、4036 溝の開削につながったと考えられる。なお、4036 溝は、溝加工面の状況で、4043 田面からやや離れたところで途切れており、連続していない。水利施設は検出されなかったが、田面との境界で水量の調節を行ったと考えられる。4035 溝からは図 59 －２・３が出土した。２は須恵器坏蓋で、TK10 型式新段階に比定される。３は土師器高坏の破片である。

4017 溝（図 57・58）

調査地北東で検出された。調査地外にかかるため、全容は不明である。幅 1.5 m以上、深さは 0.56 mである。埋土は、下位から中位は水成層の砂層、上位は粗砂混シルトであり、4035 溝と埋没過程は似る。流向は北東方向で、4035 溝の規模より大きく、基幹水路として機能した可能性がある。両溝は

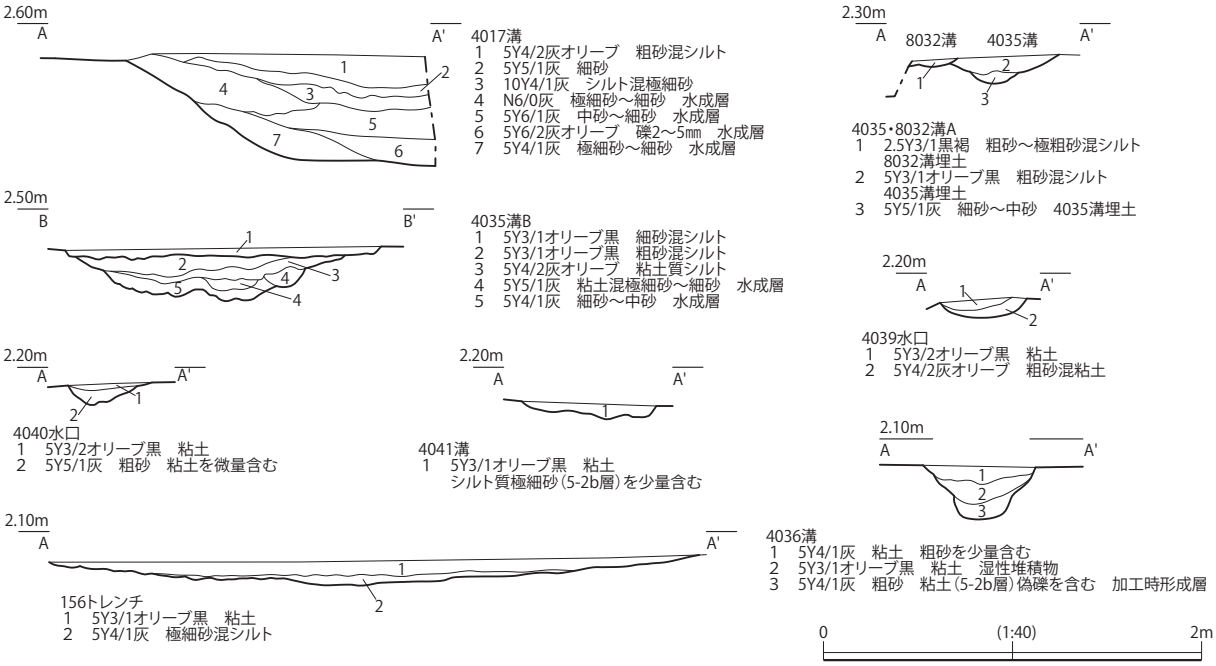


図 58　1－4区　第5－1・5－2ｂ面溝断面

埋土に対比関係があり、調査地の北側で、4017 溝が 4035 溝に分岐する可能性が想定される。

4043 水田（図 57・59）

西側の低地で検出された。4043 水田には、4－1 層、5－1 層が堆積しており、長期間に渡って、水田として土地利用されたと考えられる。

第 5－2 ｂ面では、5－1 層に帰属する 4047・4048 擬似畦畔が検出された。擬似畦畔の間隔は、6ｍで､小区画の水田が広がっていたと考えられる。擬似畦畔と田面の段はほぼ正方位であるのに対し、4035・4036 溝が微高地と谷地形に規制されて蛇行する。先述したとおり、微高地際は 4043 田面に堆積する作土が収斂しており、擬似畦畔の帰属する地層が新しくならないか検討を行った。谷地形を埋没させる地層と 5－1 層が対比できると判断されたため、最終的に擬似畦畔は 5－1 層に帰属すると判断した。なお、5－1（5－1－1）層は、図 59－1 の弥生土器壺が出土したのみで、時期の下限は抑えられなかった。

第 5－2 ｂ面（図 57・58、図版 3）

5－1 層を除去した遺構面で、5－2 ｂ層とした砂層の上面に当たる。第 5－2 ｂ面の地形は、5－2 ｂ層とした砂礫が調査地北東側に堆積することで形成されるが、第 6－1 面の地形が逆転するには至っていない。4048 擬似畦畔から北東に延びる高まりは第 6－1 面の 8033 畦畔を反映したものである。第 5－2 ｂ面では、東側の微高地上で土坑・ピットが検出された。なお、土坑・ピットは機械掘削の終了時から検出されていたもので、上部が削平されており、遺構面の帰属が不明である。西側で検出された水田より、地形的には高く、小規模・短期間の集落が存在した可能性がある。調査地中央の谷地形は、先述したとおり、溝のような断面形をもたず、微高地に対して緩やかな傾斜であった。周辺の高まりは盛土によって造成されたものと考えられるが、遺物が出土しておらず、時期は不明である。なお、4035 溝西側では、微高地斜面で谷地形を加工した際に形成された段が検出された。

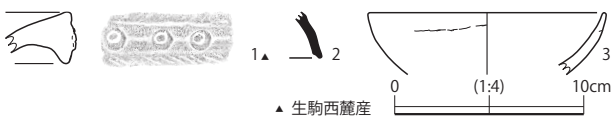


図 59　1－4区　4043 田面・4035 溝出土遺物

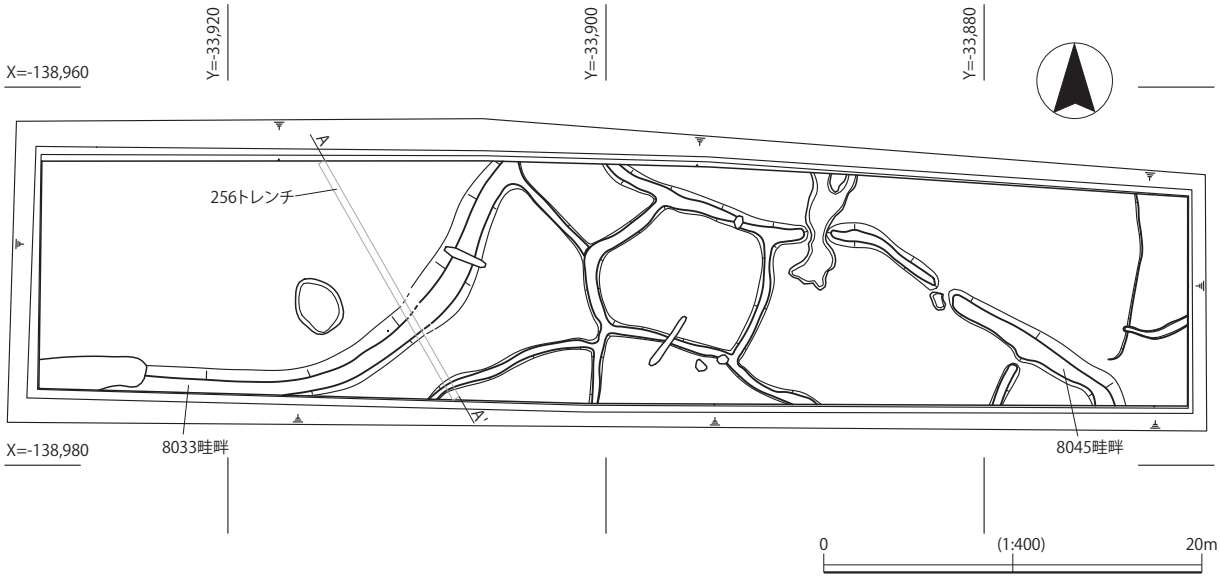


図60　1－4区　第6－1面平面

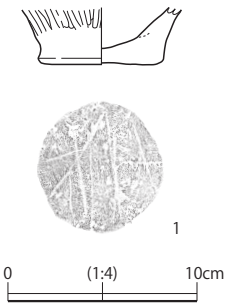


図61　1－4区
6－1層出土遺物

第6－1面（図60・61・62、図版3・4）

5－2b層とした砂層・シルト質粘土を除去して検出した遺構面で、6－1層の上面に当たる。5－2b層は、1）8033畦畔より西側が砂層で埋没する、2）周辺が水没して湿性堆積物のシルト質粘土が堆積する、3）北東側を中心に再び砂層が堆積するという堆積過程が復元され、8033畦畔より東側にシルト質粘土の堆積が認められた。

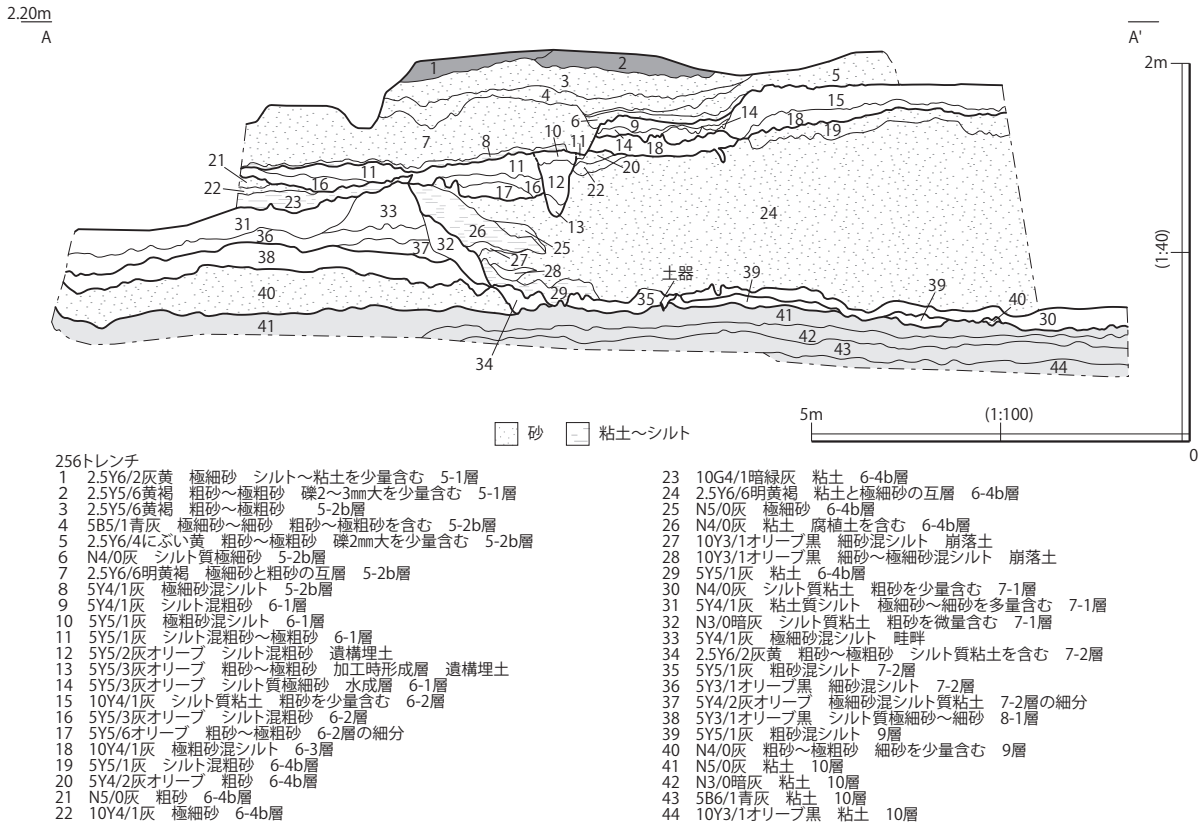
第6－1面では、自然堆積層に覆われたため良好に遺存する小区画水田が検出された。地形は、8033畦畔と8045畦畔に挟まれた中央部が高く、北東方向と北西方向にそれぞれ低くなっている。第7－1面で検出した8062微高地周辺に砂礫層が堆積することによって形成された地形で、第7－1面と地形が逆転している。

水田（図60・61）

畦畔は、8033・8045畦畔とその間で検出された小区画水田を構成する小畦畔に分かれる。8033・8045畦畔は地形が傾斜変換する場所に沿って設置されており、この2条の畦畔を境に、北東と北西にそれぞれ低くなっている。比高は0.3～0.4mである。小区画水田は、8033・8045畦畔に平行する畦畔を設置した後、それに直交する畦畔で区画される。

8045畦畔の北東側は、5－2b層の浸食が顕著で、畦畔1条と田面の段を検出するに留まった。また、8033畦畔の北西側では、5－2b層による浸食痕のみが検出され、畦畔は確認できなかった。8033畦畔北西側の6－1層は、6－4b層に由来する偽礫と土壌に由来するシルト混粗砂～極粗砂の偽礫が混ざり合った状態が観察された。撹拌を受けていない可能性があり、作土として用いられたか不明である。この偽礫は、8033畦畔から3～5mの範囲に広がっている。第6－4b面では、6－2層下面に帰属する筋状の痕跡が不明瞭ながら検出されており、水田の段となる可能性があり、8033畦畔に沿って平坦地が設けられていたと考えられる。

また、第6－4b面4050溝は、断面観察時に第6－1面から加工された可能性があると判断されたが、第6－1面廃絶期には機能していなかったと考えられ、土壌化の影響もあり、第6－1面で検出することはできなかった。



256トレンチ
1　2.5Y6/2灰黄　極細砂　シルト〜粘土を少量含む　5-1層
2　2.5Y5/6黄褐　粗砂〜極粗砂　礫2〜3㎜大を少量含む　5-1層
3　2.5Y5/6黄褐　粗砂〜極粗砂　　5-2b層
4　5B5/1青灰　極細砂〜細砂　粗砂〜極粗砂を含む　5-2b層
5　2.5Y6/4にぶい黄　粗砂〜極粗砂　礫2㎜大を少量含む　5-2b層
6　N4/0灰　シルト質極細砂　5-2b層
7　2.5Y6/6明黄褐　極細砂と粗砂の互層　5-2b層
8　5Y4/1灰　極細砂混シルト　5-2b層
9　5Y4/1灰　シルト混粗砂　6-1層
10　5Y5/1灰　極粗砂混シルト　6-1層
11　5Y5/1灰　シルト混粗砂〜極粗砂　6-1層
12　5Y5/2灰オリーブ　シルト混粗砂　遺構埋土
13　5Y5/3灰オリーブ　粗砂〜極粗砂　加工時形成層　遺構埋土
14　5Y5/3灰オリーブ　シルト質極細砂　水成層　6-1層
15　10Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　6-2層
16　5Y5/3灰オリーブ　シルト混粗砂　6-2層
17　5Y5/6オリーブ　粗砂〜極粗砂　6-2層の細分
18　10Y4/1灰　極粗砂混シルト　6-3層
19　5Y5/1灰　シルト混粗砂　6-4b層
20　5Y4/2灰オリーブ　粗砂　6-4b層
21　N5/0灰　粗砂　6-4b層
22　10Y4/1灰　極細砂　6-4b層
23　10G4/1暗緑灰　粘土　6-4b層
24　2.5Y6/6明黄褐　粘土と極細砂の互層　6-4b層
25　N5/0灰　極細砂　6-4b層
26　N4/0灰　粘土　腐植土を含む　6-4b層
27　10Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　崩落土
28　10Y3/1オリーブ黒　細砂〜極細砂混シルト　崩落土
29　5Y5/1灰　粘土　6-4b層
30　N4/0灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　7-1層
31　5Y4/1灰　粘土質シルト　極細砂〜細砂を多量含む　7-1層
32　N3/0暗灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　7-1層
33　5Y4/1灰　極細砂混シルト　畦畔
34　2.5Y6/2灰黄　粗砂〜極粗砂　シルト質粘土を含む　7-2層
35　5Y5/1灰　粗砂混シルト　7-2層
36　5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　7-2層
37　5Y4/2灰オリーブ　極細砂混シルト質粘土　7-2層の細分
38　5Y3/1オリーブ黒　シルト質極細砂〜細砂　8-1層
39　5Y5/1灰　粗砂混シルト　9層
40　N4/0灰　粗砂〜極粗砂　細砂を少量含む　9層
41　N5/0灰　粘土　10層
42　N3/0暗灰　粘土　10層
43　5B6/1青灰　粘土　10層
44　10Y3/1オリーブ黒　粘土　10層

図62　1－4区　256トレンチ断面

水田作土からは、8033畦畔の西側斜面において、図61－1の弥生土器甕の底部が出土した。外面はヘラミガキが施され、底面に木ノ葉の圧痕が認められる。

第6－2・6－3面（図60・63）

第6－2面は、6－1・6－1ｂ層を除去して検出した遺構面である。第6－1面と同じ位置で、擬似畦畔が検出された。第6－1面と水田区画は同じため、平面図は割愛した。

第6－3面は、6－2・6－2ｂ層を除去して検出した遺構面で、第6－1面で検出された8033・8045畦畔はこの段階に造成されたと考えられる。調査地の南東隅で擬似畦畔が検出されており、図63に図示した。

また、6－4層は調査地内で部分的に認められたのみで、平面的に検出することはできなかった。

第6－4ｂ面（図63、図版3・4）

6－3・6－4層を除去して検出した遺構面で、6－4ｂ層とした砂層の上面に当たる。

第6－4ｂ面では溝・杭列、6－3層に帰属する擬似畦畔及び田面の段が検出された。6－3層に帰属する擬似畦畔は調査地北東で検出されたもので、第6－1面8045畦畔の位置より北東側で田面の段が検出された。

4050溝・杭列14（図63・64）

第6－1面8033畦畔の北西側で検出された。規模は、幅0.3ｍ以上、深さ0.3ｍである。埋土はシルト混粗砂で、周辺で形成された土壌に由来する土で埋没する。先述のとおり、第6－1面の廃絶時には機能していなかったと考えられ、6－1層形成時に機能した溝と考えられる。灌漑用の水路として機能し、南から西方向へ流れたと考えられる。

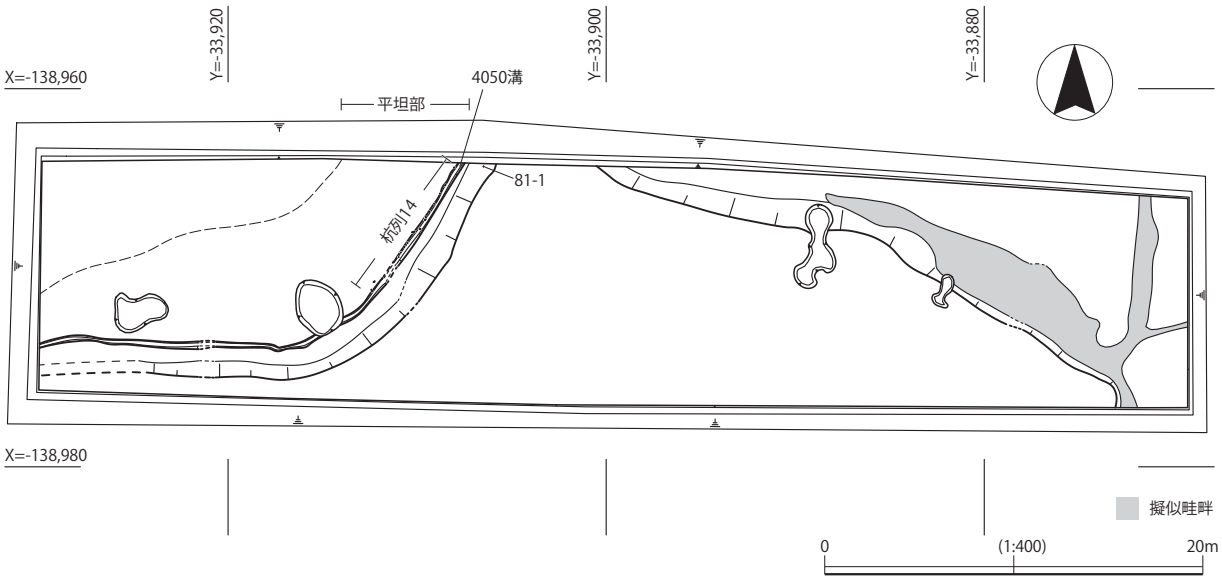


図 63　１－４区　第６－４ｂ面平面

4050 溝の西肩部を中心に、杭列 14 が検出された。4060 杭のみ、溝の内側で検出された。溝の護岸・畦畔の土留め、土地区画として機能したと考えられる。ただし、4050 溝の護岸敷設としては、断面から復元される溝幅のかなり内側に打設されたことになり、8033 畦畔の裾部付近に打設した土留めの可能性が高いと考えられる。

６－３層出土遺物（図 65、図版 56）

第６－１面 8033 畦畔があった西側の斜面地において、図 65 －１の弥生土器広口壺が出土した。６－３層に帰属する。底部は欠いているが、体部上半から口縁部にかけてほぼ完存する。外面は粗いハケ調整の後、体部上半は横方向、体部下半は縦方向にヘラミガキが施される。内面は縦方向のナデ調整で、口縁部内面には横方向のハケ調整される。また、口縁端部はやや面を持っているが、最終的に上下から横方向にナデ調整されることで、面の上下がやや潰れた状態になる。Ⅲ－１様式と比定しているが、粗いハケメや外反する口縁部及び端部の形状からⅢ様式の中でも古相を示すと考えられる。

第７－１面（図 66、図版４）

６－４ｂ層とした砂層・シルト質粘土を除去した遺構面で、７－１層の上面に当たる。７－１層は、微高地上がシルト混極細砂、水田作土がシルト質粘土である。地形は、8062 微高地が最も高く、東から西にかけて緩やかに低くなっている。第７－１面では、水田・溝が検出された。8062 微高地上では、微高地の周囲を囲むように 8063 畦畔が検出された。また、8064 畦畔の西側では、６－４ｂ層の浸食痕が検出された。なお、8062 微高地周辺の水田は、第７－１面で調査を終了し、8062 微高地の範囲については第９ｂ面まで調査を行った。

水田（図 66）

8062 微高地の東側では、8064 畦畔が検出された。全体に南西方向に低くなる地形に合わせて設置されたもので、8064 畦畔に平行する 8046 畦畔も検出された。8064 畦畔では水口を一箇所確認しており、上面を覆う６－４ｂ層による浸食痕が水口の西側に認められた。8046・8047 擬似畦畔は、遺存状態が悪く、第７－１面をかなり削り込んで検出されたもので、畦畔の芯となる９ｂ層が擬似状に検出されている。また、8062 微高地の西側では、畦畔が東西に検出されており、西側にも水田域は広がるものと考えられる。

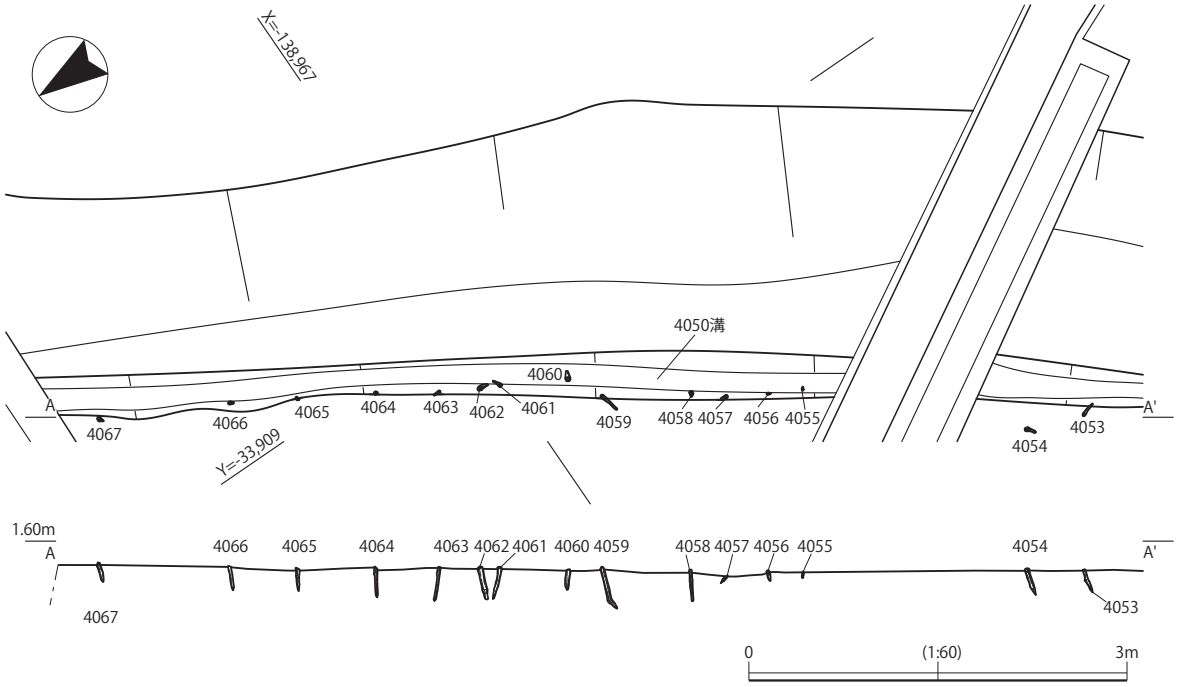


図 64　1－4区　杭列 14 平・断面

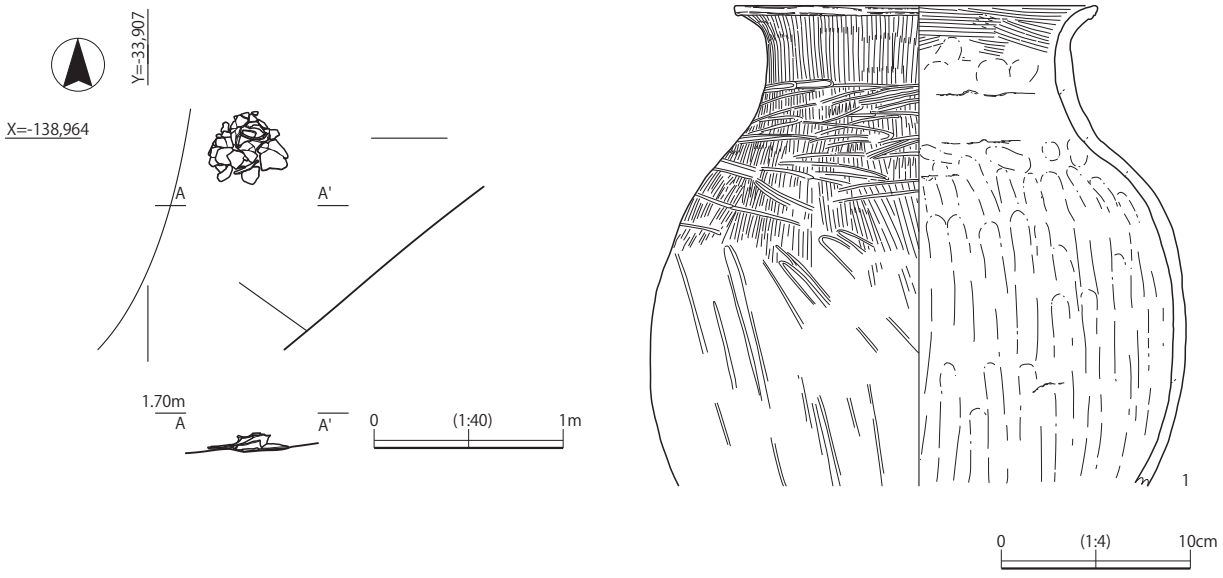


図 65　1－4区　第 6－4ｂ面遺物出土状況平・立面　出土遺物

8062 微高地・8071 溝（図 66）

北から南方向に緩やかな斜面をなす微高地で、９ｂ層上面の高まりが縄文時代晩期から弥生時代中期前葉にかけて造成されたものである。第７－１面では、微高地を縁取るように 8063 畦畔が検出された。8063 畦畔は、幅 2.0 m、高さ 0.1 mを測り、土壌化により盛土単位は不明である。当該期に水田畦畔として利用された可能性はあるが、第７－２面において、７－１層下面に帰属する田面の段が 8062 微高地上で検出されなかったため、今回の調査では明らかにできなかった。

8071 溝の規模は、幅 1.4 m、深さ 0.08 mである。埋土は６－４ｂ層とした粗砂～極粗砂である。６－４ｂ層の浸食が大きく、人為的なものか判断が躊躇されたが、同範囲の７－１層下面も凹んでおり、微高地縁辺に掘削された溝として機能したと考えられる。

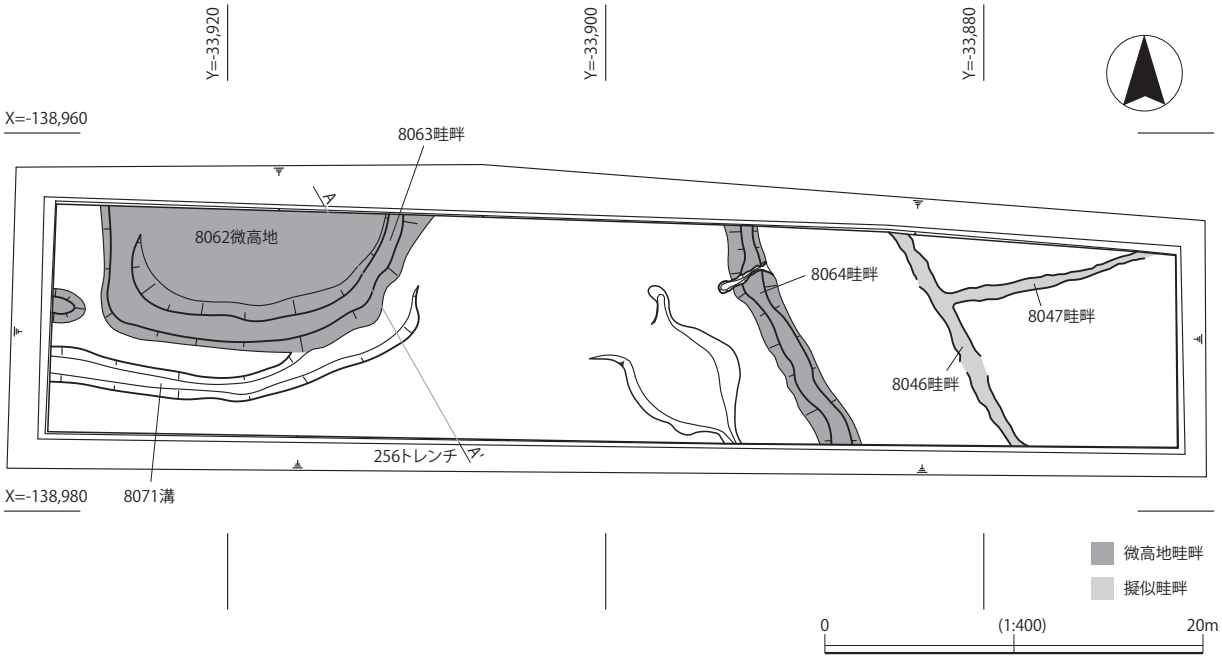


図 66　１－４区　第７－１面平面

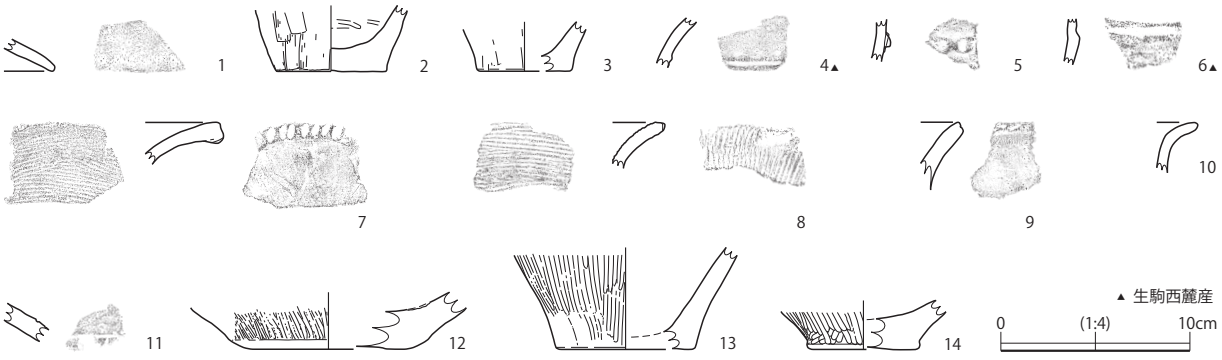


図 67　１－４区　６－４ｂ・７－１層出土遺物

６－４ｂ・７－１層出土遺物（図 67、図版 56）

６－４ｂ層とした砂層中から弥生土器、縄文土器が出土した。図 67 －１は蓋、２・３は甕底部である。４は縄文土器深鉢体部である。宮滝式～滋賀里Ⅰ式か。５は縄文時代晩期の突帯文土器の深鉢である。突帯の形状は三角形を呈し、刻目は大「O」字形に近い。長原式中～新段階。６は縄文土器深鉢の体部片と考えられる。宮滝式～滋賀里Ⅰ式。

７－１層からは、図 67 －７～ 14 が出土した。Ⅰ～Ⅱ様式に比定できる。７は壺口縁部で、口縁端部は粘土が付加されて突帯状にやや外方向に拡張し、刻目が施される。口縁部内面は粗いハケ調整が施される。８は甕口縁部で、内外面には粗いハケが施される。７・８はⅡ様式に比定される。９は大型の甕口縁部で、端部に沈線文が施される。10 は甕口縁部である。11 は壺体部で、沈線文が１条以上施される。12 ～ 14 は甕底部である。９～ 14 はⅠ様式に比定される。７－１層から弥生時代前期から中期前葉の遺物が出土しており、これより下層の７－２層からⅡ様式の遺物が出土していないことから、弥生時代中期前葉に７－１層は形成されたと考えられる。

１－５・２－１・２－２区７－１層に対比できる地層で、他の調査地から出土した弥生土器も、当該期のもので１－４区の調査成果と矛盾しない。

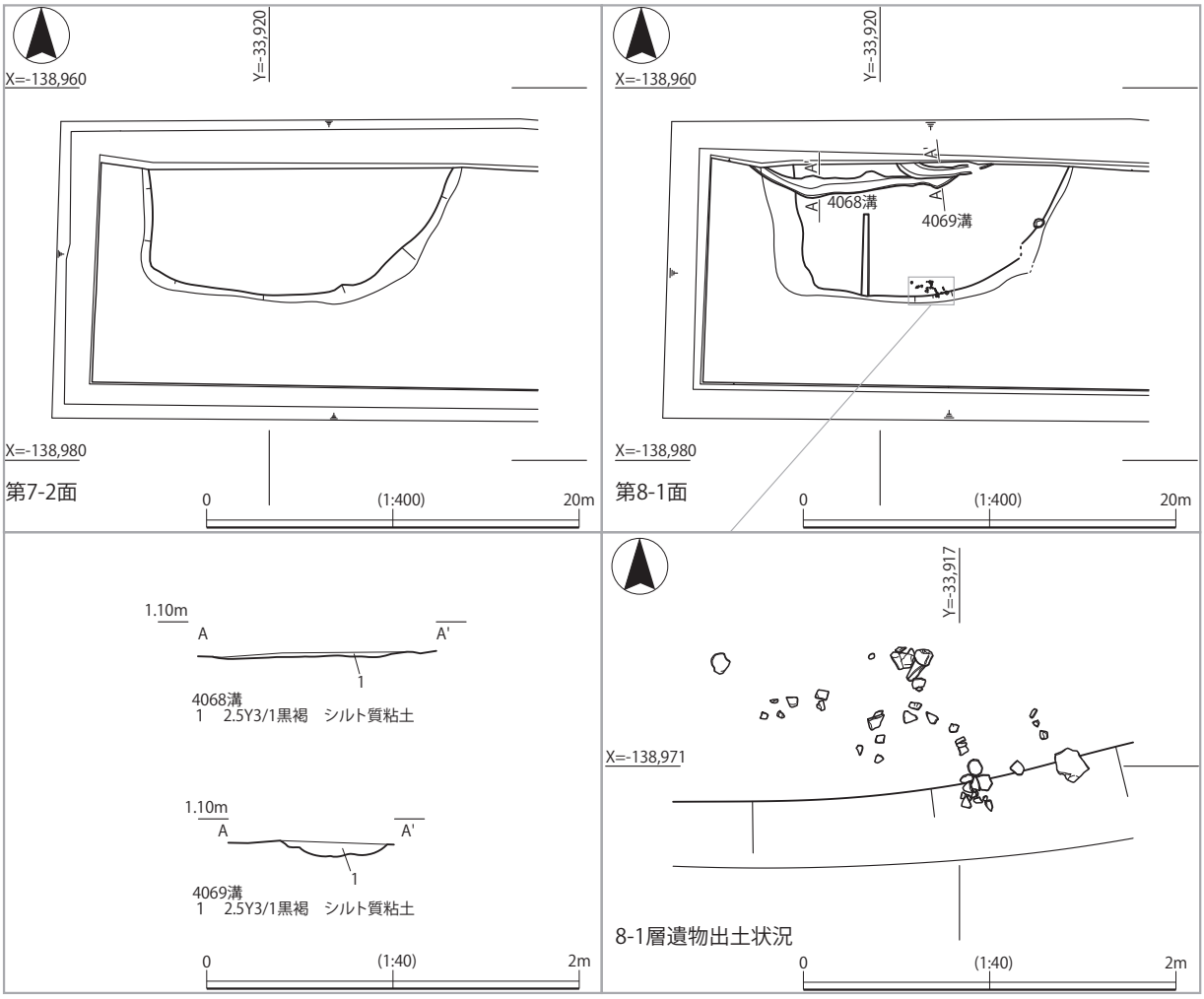


図 68　１－４区　第７－２・８－１面平・断面・第８－１面遺物出土状況平面

第７－２面（図 68）

8062 微高地上で、７－１層を除去して検出した遺構面で、７－２層としたシルト質粘土の上面に当たる。先述したとおり、畦畔痕跡の検出を試みたが、第７－１面 8063 畦畔際に低くなる部分を認めたのみで、遺構は検出されなかった。

７－２層出土遺物（図 70、図版 55・56）

７－２層から図 70 －１～ 11 が出土した。１は無文の甕で、頸部は「く」の字形に成形される。２・３は壺体部で、２は沈線文が３条以上、３は２条以上施される。４～７は突帯文土器である。４は外反する口縁部で、口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付ける。無刻目で水走式に比定される。５は口縁端部に接する位置に突帯貼り付けられる。断面は三角形状で、小さい「O」字形の刻目が施される。６は口縁端部に近い位置に突帯が貼り付けられるが、口縁端部の内外面を挟んでナデを行っているため、突帯の形状は下方向に垂下した三角形状を呈する。７は口縁端部に接して突帯が貼り付けられており、貼り付け後に端部の成形が行われたため、突帯の形状はやや丸い三角形状である。８～ 10 は底部である。11 は、当初深鉢底部の可能性があると考えたものだが、天井部外面がヘラミガキで丁寧に調整され、煤が付着することから、器種を蓋と判断した。外面はハケ調整で、天井部は外側にやや拡張しており、横方向のナデによって成形される。７－２層は出土遺物から弥生時代前期後葉に形成されたと考えられる。

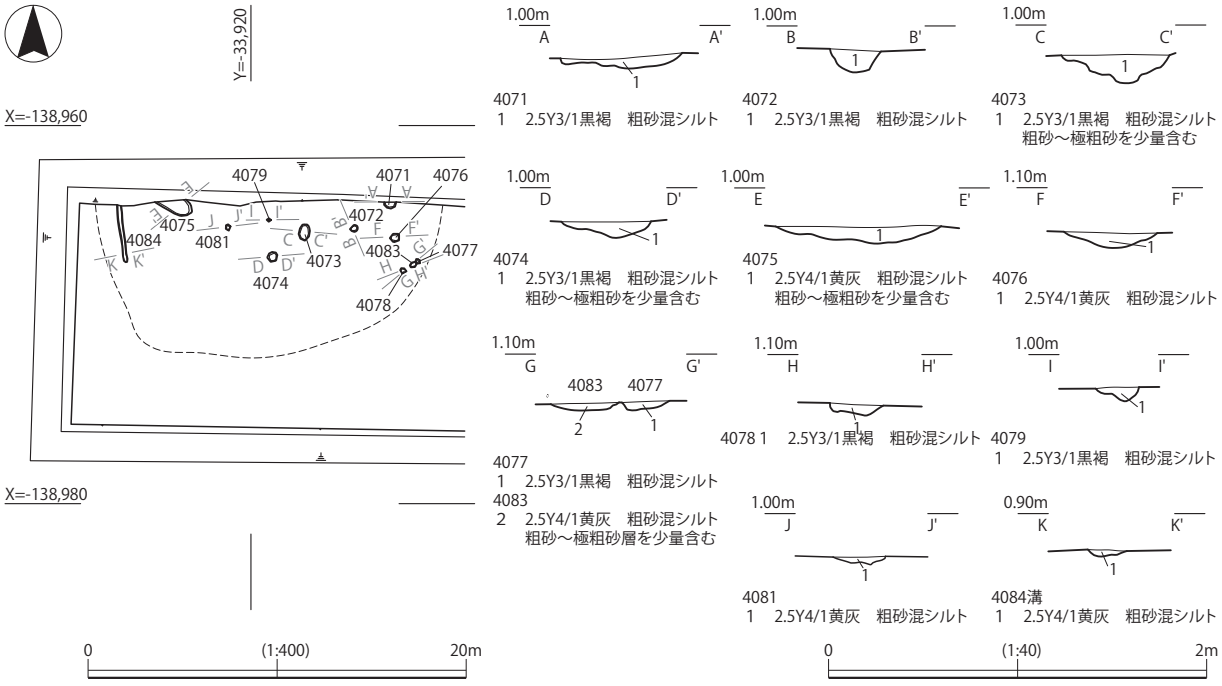


図 69　1－4区　第9－1面遺構平・断面

第8－1面（図 68、図版4）

8062 微高地上で、7－2層を除去した遺構面で、8－1層とした極細砂質シルトの上面に当たる。第8－1面では、溝2条が検出された。

4068・4069 溝（図 68・70、図版 56）

4068 溝の規模は、幅 1.0 m、深さ 0.02 mである。埋土はシルト質粘土で、湿性堆積物と考えられる。4069 溝の規模は、幅 0.6 m、深さ 0.08 mである。埋土は 4068 溝と同じくシルト質粘土である。

4068 溝から図 70 － 12・13 が出土した。12 は弥生土器壺である。成形時の粘土接合部分を利用して、口頸部境の段が形成される。外面及び口縁部内面はヘラミガキ、内面はナデで丁寧に仕上げられる。また、頸胴部境には削り出しの段と沈線3条が施される。口縁部には紐孔1箇所が確認された。13 は甕体部で、上位に沈線が5条以上施される。内外面はハケ調整、外面には煤の付着が顕著である。12・13 はⅠ－3～4様式に比定される。4069・4068 溝から出土した弥生土器は、7－2層と8－1層の層理面で検出されており、7－2層から出土した縄文土器と8－1層から出土した弥生土器を理解する上で、指標となると考えられる。

8－1層出土遺物（図 70、図版 55）

8－1層から図 70 － 14・15・25 の弥生土器と 16 ～ 24・26・27 の縄文土器が出土した。この内、図 70 － 23・25・26・27 は斜面堆積物の8－1層から出土した。縄文土器より弥生土器の出土したレベルが高いという傾向はあったが、層位的に明瞭に分かれるものではなかった。

14 は鉢で、口縁部から下がった位置に突帯を貼り付け、突帯には刻目が施される。外面はヘラミガキ、胎土は他の壺等に用いられるものと同じである。15 は壺体部で沈線が3条施される。25 は壺底部である。外面はヘラミガキされる。14・15・25 は、少量であるため時期を特定しにくいが、Ⅰ－2・3様式に比定されるものか。

16 は深鉢で口縁部に接して突帯が貼り付けられる。突帯は上下を挟んでナデ調整されるため、歪な

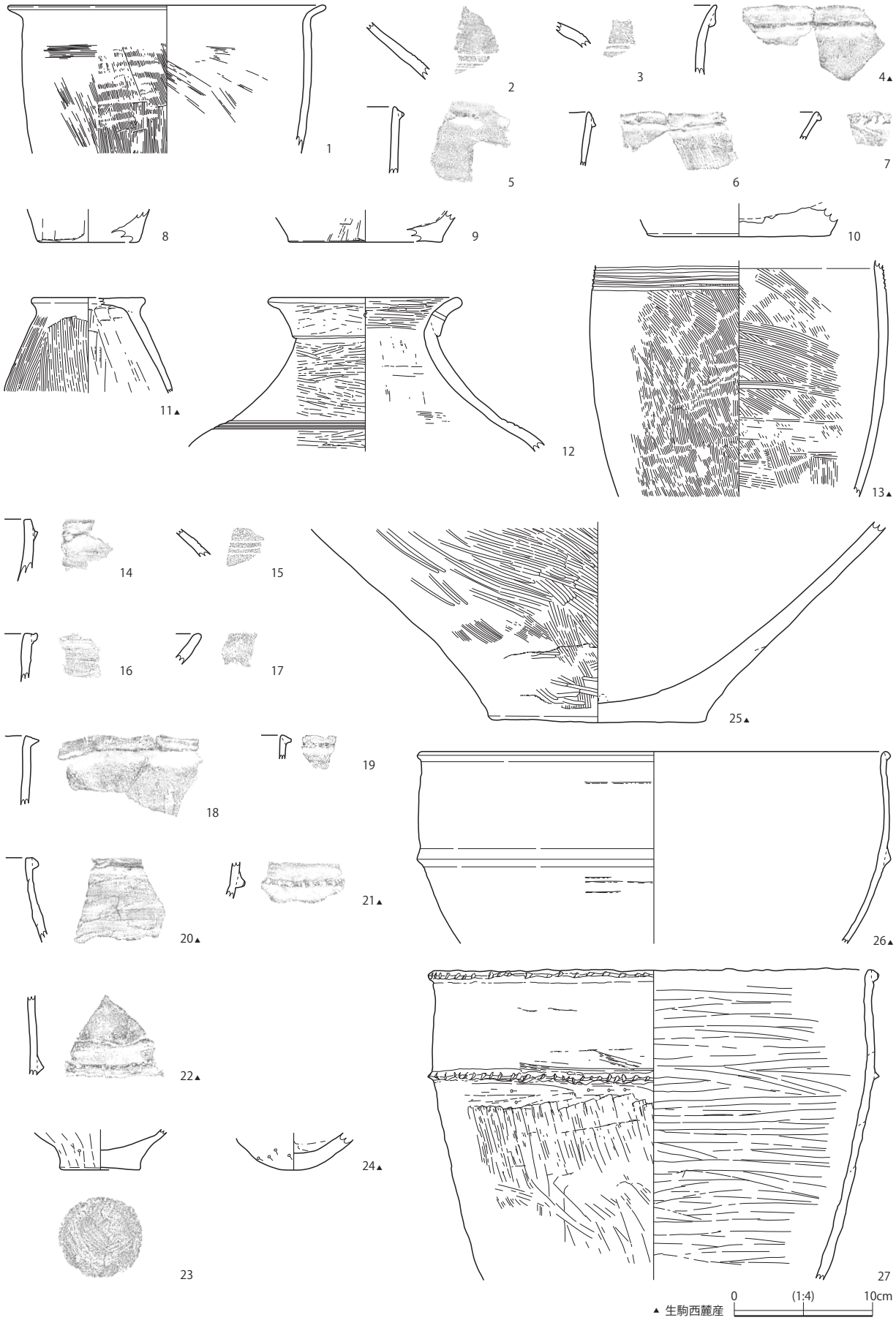


図 70　1－4区　7－2・8－1層・4068 溝出土遺物

台形状を呈する。17 は粗製の胎土と形状から浅鉢の口縁部と考えられる。内外面とも磨滅が顕著である。18 は深鉢で、口縁端部に接して突帯が貼り付けられる。突帯は上下から挟んで形状が整えられる。突帯の断面形は三角形で、無刻目である。19 は深鉢で、口縁端部に粘土を付加して、突帯が貼り付けられる。突帯の形状は断面三角形で無刻目である。20 は深鉢でやや平坦な口縁端部に接して、突帯が貼り付けられる。突帯は丸い形状で無刻目である。21 は深鉢体部である。断面三角形の突帯には、線状に近い刻目が施される。

22 は深鉢体部である。断面三角形の突帯は無刻目である。23 は深鉢底部である。やや上げ底気味で、外面は条痕調整される。24 は深鉢底部で、丸底である。全体が磨滅するが、外面は条痕調整か。26 は深鉢である。砲弾形を呈し、突帯は口縁部の体部にそれぞれ貼り付けられ、無刻目である。口縁部の突帯は端部に接して貼り付けられており、断面形は丸味を帯びる。体部の突帯は上下から挟んで横方向のナデによって成形されており、断面は三角形である。27 は深鉢である。砲弾形を呈し、突帯は口縁部と体部にそれぞれ貼り付けられ、小さい「D」字形の刻目が施される。外面は板状工具のようなものを用いたケズリに近い調整、内面は条痕調整である。16・18 ～ 24・26・27 は縄文時代晩期の長原式、中でも新段階を中心とした資料と考えられる。

第９－１面（図 69、図版４）

８－１層を除去して検出した遺構面で、９－１層とした砂礫層上面に当たる。９ｂ層上部が弱く土壌化した部分を９－１層としており、９ｂ層と明瞭に区分できるものではなかった。

第９－１面では、溝・土坑・ピットが検出された。第９－１面の直上に堆積する７－２・８－１層とした古土壌を除去して検出されたもので、７－２・８－１層形成時に掘削された遺構が含まれる可能性がある。ピットは、直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.02 ～ 0.16 m前後で、掘り込みが浅いものが多かった。なお、4084 溝は、8062 微高地と第７－１面の水田面の境界部に当たる場所で検出されており、７－１層下面に帰属する可能性がある。検出された遺構から遺物は出土しなかったため、時期の詳細は不明である。第９－１面で検出された溝・土坑・ピットの埋土は、８－１層形成以降の古土壌に由来すると考えられることから、縄文時代晩期以降にこれらの遺構は掘削されたと考えられる。

また、溝・土坑・ピットは、主として 8062 微高地北側に集中する一方、南側にかけて希薄となっており、今回検出された遺構は、当該期の集落の縁辺部に位置付けられる。

第４項　１－５区

第３－１面までを機械掘削し、以下、第６－２面、一部の範囲は第７－１面まで人力掘削して発掘調査を終了した。

第３－１面（図 71、図版５）

１層を機械掘削して検出した遺構面で、３－１層とした極細砂混シルト上面、一部は３ｂ層とした砂層の上面に当たる。調査地の北側では、３－１層は１層とした近世段階の作土の削平により希薄で、４・５層上面が露出している部分がある。当初、３－１層は、２－１区３－１層に対比可能な地層として掘削を行ったが、調査の進展に伴い、２－１区２－１層に対比できる地層であることが判明した。

地形は、１層とした近世の作土を除去した遺構面で、全体的に平坦である。５－２ｂ層によって形成された地形が平坦化するのは中世以降になってからで、当該期の第３－１面の地形にはその痕跡を留めない。第３－１面では、１層下面に帰属する耕作関連の溝と坪境の溝が複数検出された。

4568 溝（図 71 ～ 73、図版５）

4568 溝は調査地北東で検出された。規模は、幅 1.6m、深さ 1.0m である。流向は西方向で、１－４区 4001 溝と連続する。埋土は泥層主体の湿性堆積物と粗砂混シルトである。溝の屈曲部では、木樋が検出された。板材を箱形に組み、半円形に加工した板材と組み合わせて、水流を調節したと考えられる。半円形の板材は溝断面形に合わせて丸く加工されており、背面は杭によって支えられる。箱形に組

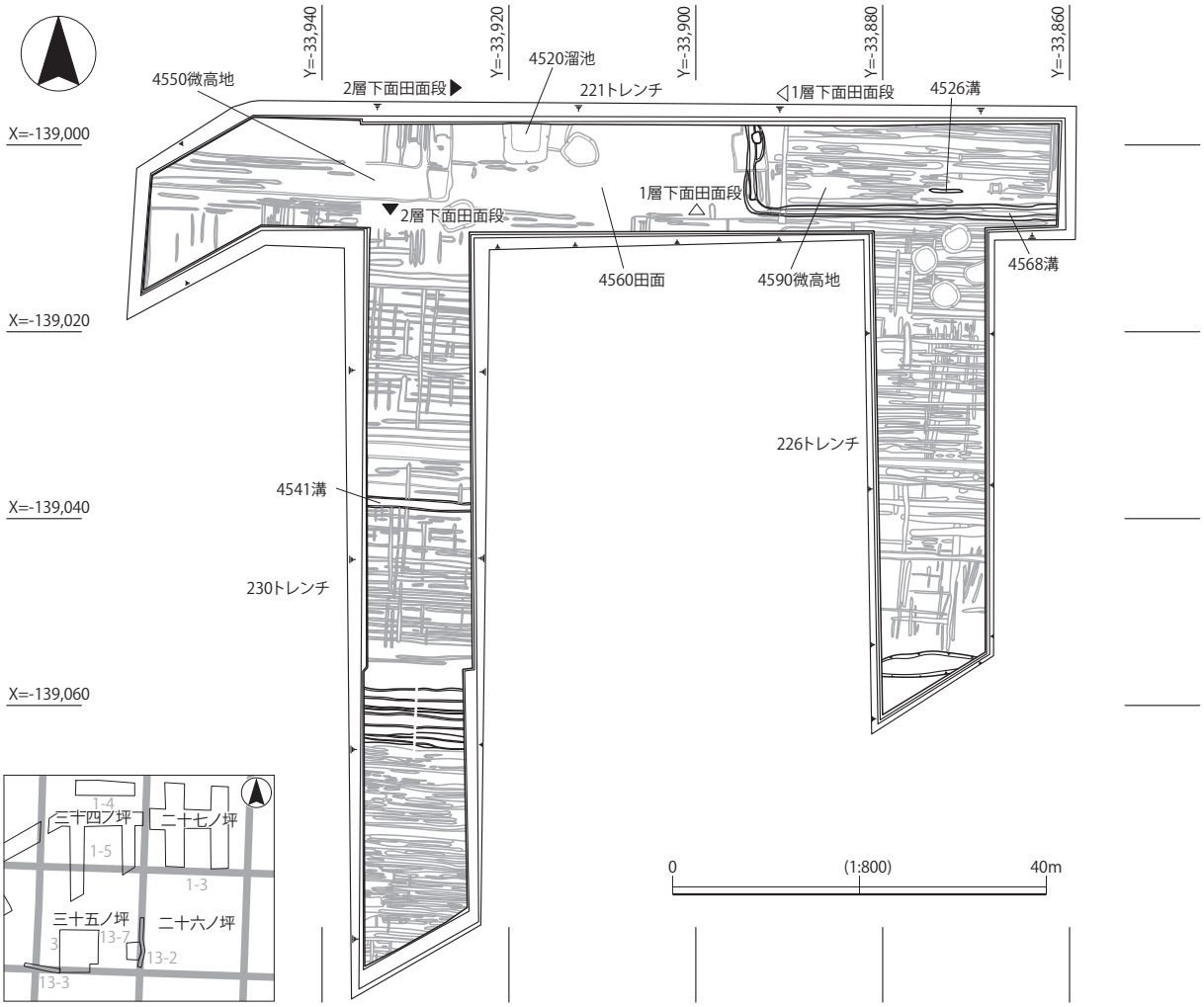


図 71　１－５区　第３－１面平面

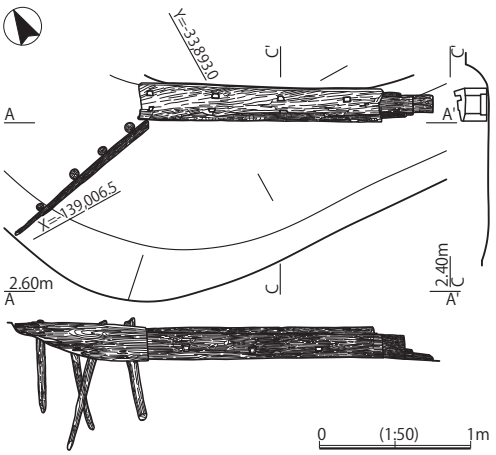


図 72　1－5区　4568 溝木樋平・立面

み合わされた板材は建築部材の転用ないし別の場所にあった木樋が転用されたと考えられる。図 73 －２は側面、３はホゾ穴でそれぞれ鉄釘が確認された。転用前の建築部材としては、ホゾ穴の加工や板材の法量から桁柱を想定している。これ以外に、4568 溝からは瓦等が出土した。１－１層が溝埋土直上に堆積することや、１－３層より新しい段階に掘削されたことから江戸時代後期に機能したと考えられる。

２－１層・３－１層出土遺物（図 74）

図 74 －１は瓦器小皿で、２－１層から出土した。13 世紀代と考えられる。２は北宋銭の「景祐元寶」で、３－１層から出土した。初鋳年は 1034 年である。

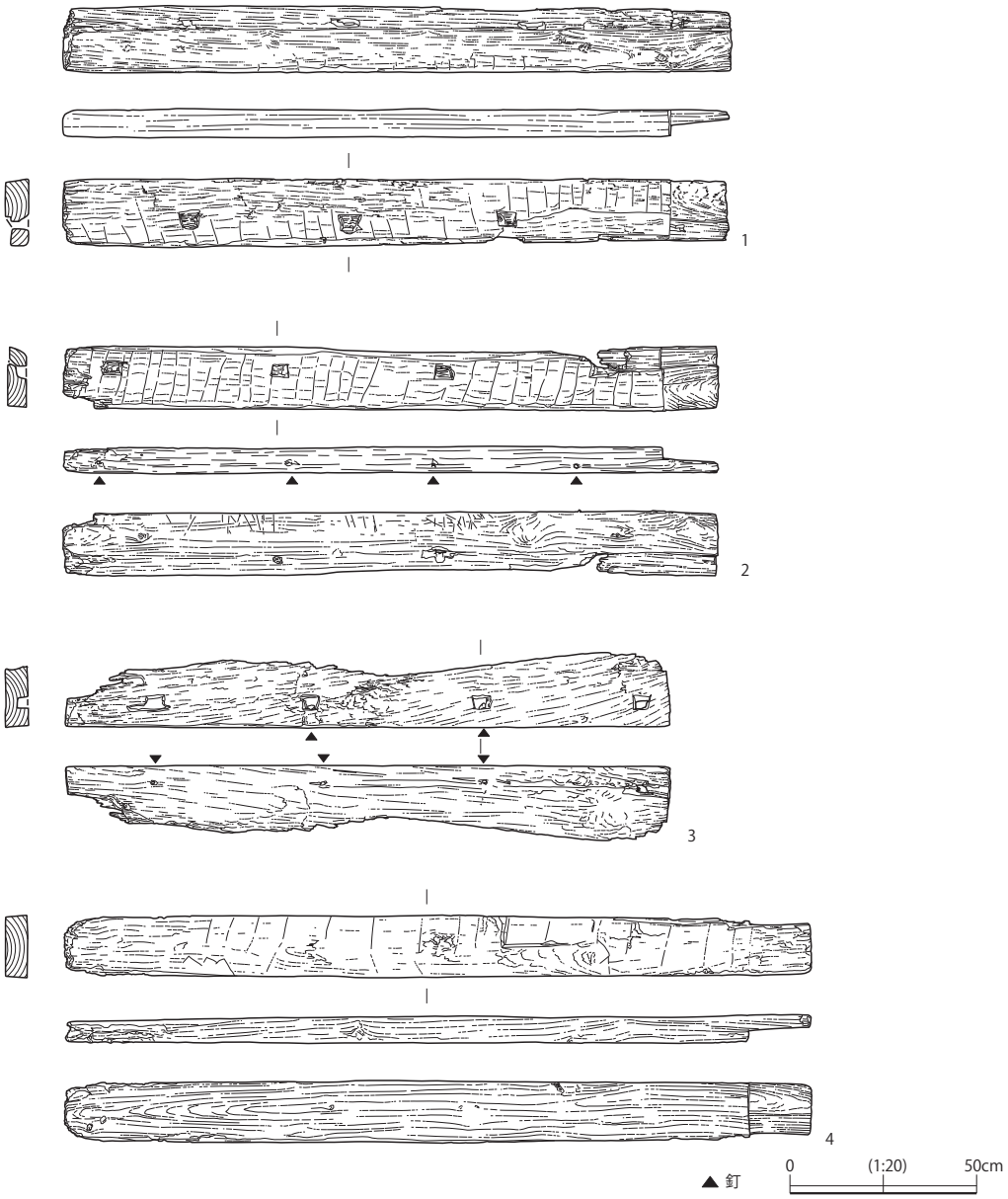


図 73　1－5区　4568 溝出土遺物

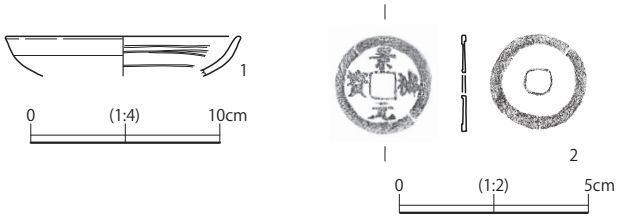


図 74　1－5区　2－1・3－1層出土遺物

第４－１面（図 75、図版５）

３－１・３ｂ層を除去して検出した遺構面で、４－１層としたシルト質粘土の上面に当たる。調査地南東・南西では３ｂ層が遺存しており、３ｂ層を除去した段階で条里型地割の水田が検出された。地形は５－２ｂ・６－４ｂ層上面の高まりを反映して、調査地北側が高く、南東及び南西で検出した水田に向かって徐々に低くなる。一方、南西側で検出された水田では５－２ｂ層上面を反映して全体に南側が高く、中央部の X=-139,040 周辺が低い。

水田（図 75）

調査地南東・南西で条里型地割の水田が検出された。調査地南西では坪境の 8074 畦畔が検出された。中世以降に坪境の溝の掘り直しが行われた場所で、畦畔の北側は撹乱を受ける。8074 畦畔南側では、板材を置いて水流の調節を行った 4596 水口が検出された。板材の直下と水口から水を回していた田面では、３ｂ層により浸食痕が検出されている。同様の浸食痕は坪境の畦畔南側においても検出された。

なお、調査地西側は遺存状況が悪く、畦畔のわずかな盛り上がりを検出したのみであった。２－１区の東側の状況と同じである。上面を覆う砂層の堆積が薄いためで、中世の作土（２－１層）に削平を受けた部分もあった。

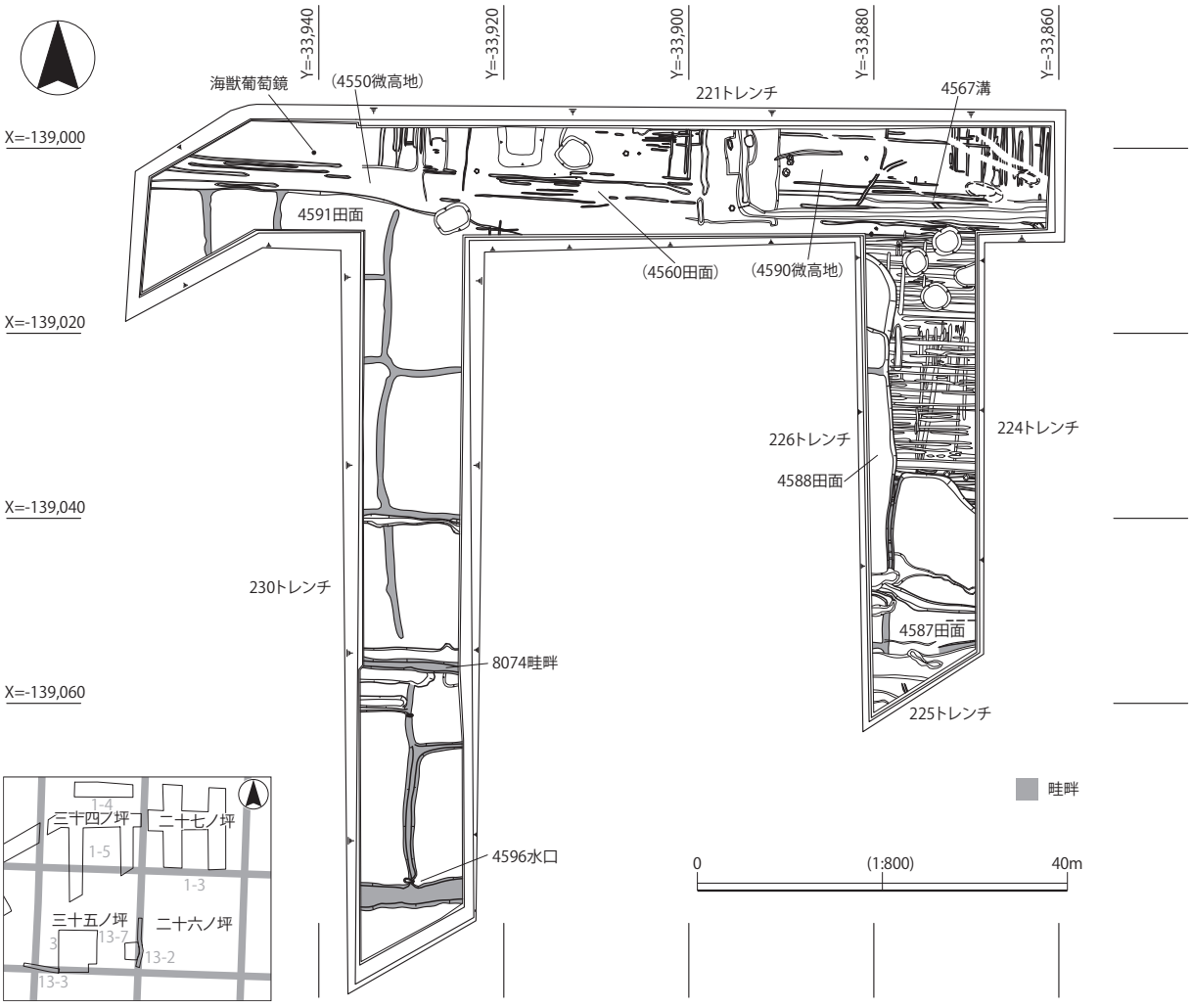


図 75　1－5区　第４－１面平面

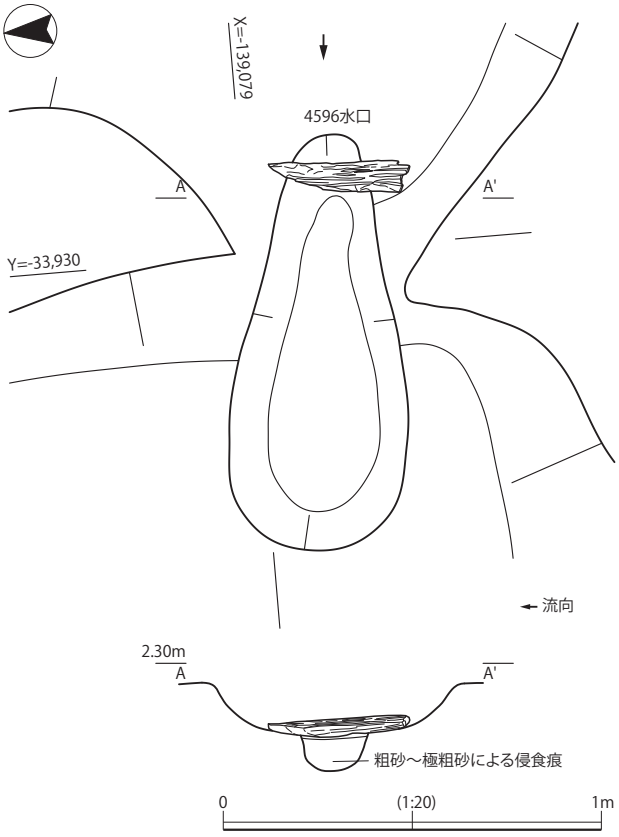


図 76　1－5区　4596 水口平・立面

海獣葡萄鏡（図 75・77、図版 5 ・67）

西側の微高地上で 4 － 1 層の直上から出土した。遺構に伴うものではなく地層境界部から出土した。海獣葡萄鏡の周辺は金属成分の溶出により 10cm の範囲で赤変する。鏡面が上に向けられた状態で出土した。海獣葡萄鏡は、直径 3.9cm、鈕高 0.5cm、縁厚 0.4cm、鏡体の厚さ 0.1cm、反り 0.1cm である。背面中央に伏獣形の鈕があり、鈕の周囲に獣像 4 頭が表現される。その外側には珠点 7 点が配され、葡萄紋と考えられる。鏡縁部には鋳造時の湯道の切断痕が残っており、鏡縁部･鏡面共に未研磨である。

4541 溝・3～4層出土遺物（図78､図版67）

図 78 － 1 は須恵器坏蓋で 4 － 1 層とした作土から出土。 2 は須恵器坏身で、 4 － 1 層とした微高地上の古土壌から出土した。海獣葡萄鏡は、 2 の須恵器坏身が出土した 4 － 1 層の直上で検出された。 3 は須恵器壺底部で、第 3 － 1 面 4541 溝から出土した。 4 ・ 5 は 3 b 層から出土した。 4 は須恵器坏身、 5 は須恵質蛸壺である。 6 は須恵器壺底部で、外底面にヘラ記号がある。 7 は須恵器坏身底部で、外底面の墨書は判読不可。

第 4 － 3 面（図 79、図版 5 ）

4 － 1 ・ 4 － 2 層を除去して検出した遺構面で、 4 － 3 層としたシルト質粘土の上面に当たる。 4 － 1 層と 4 － 2 層は､低地（水田）では明瞭に 2 層に分かれるが､微高地では地層の境界部が不明瞭であっ

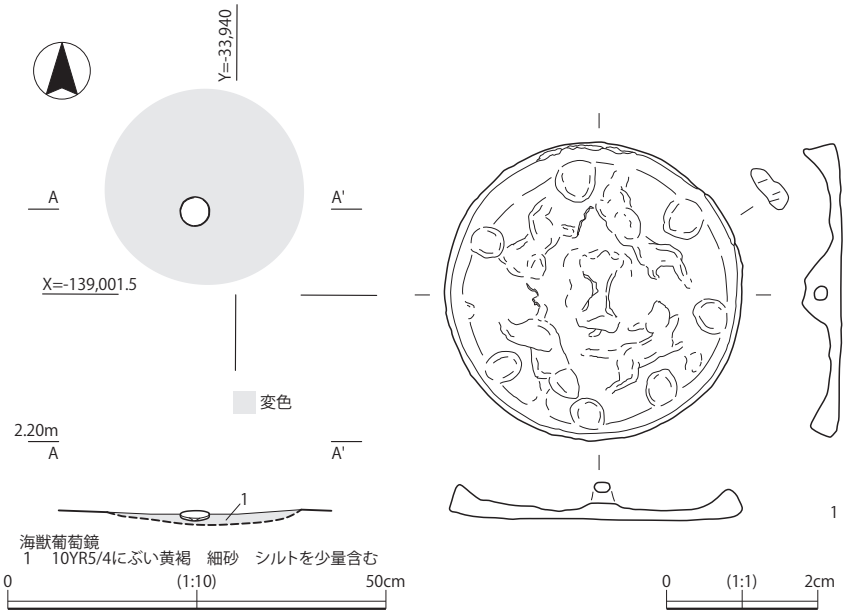


図 77　1－5区　海獣葡萄鏡平・断面　出土遺物

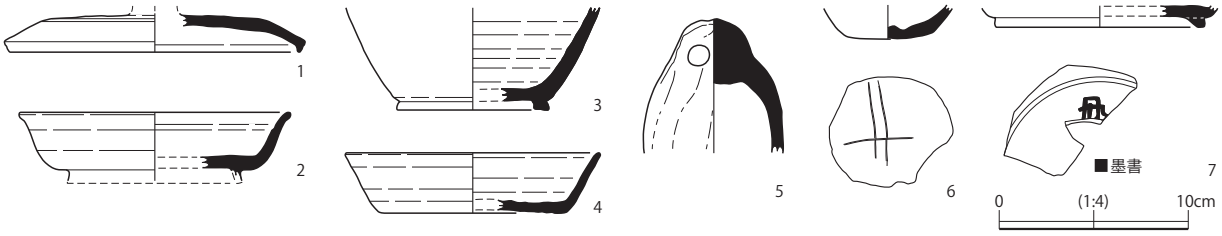


図 78　1－5区　4541 溝他出土遺物

たため、両層を同時に掘削した。また、4550 微高地・調査地南東側の水田では、4－1層を除去した段階で5－2b層が露出した状態となる。

調査地南西側では、4－2b層（4－2層直下の砂層）の堆積が一部で認められ、4－1・4－2層に帰属する擬似畦畔以外に、4－2b層に覆われた 8075 ～ 8077 畦畔を検出した。第4－1面の畦畔と位置が異なるが、区画の規模は第4－1面と同じである。4－3層からは、時期を明確にする遺物は出土しなかったが、8075・8077 畦畔は4－1・4－2層下面に帰属する擬似畦畔に平行しており、平安時代前期を遡らないと想定される。

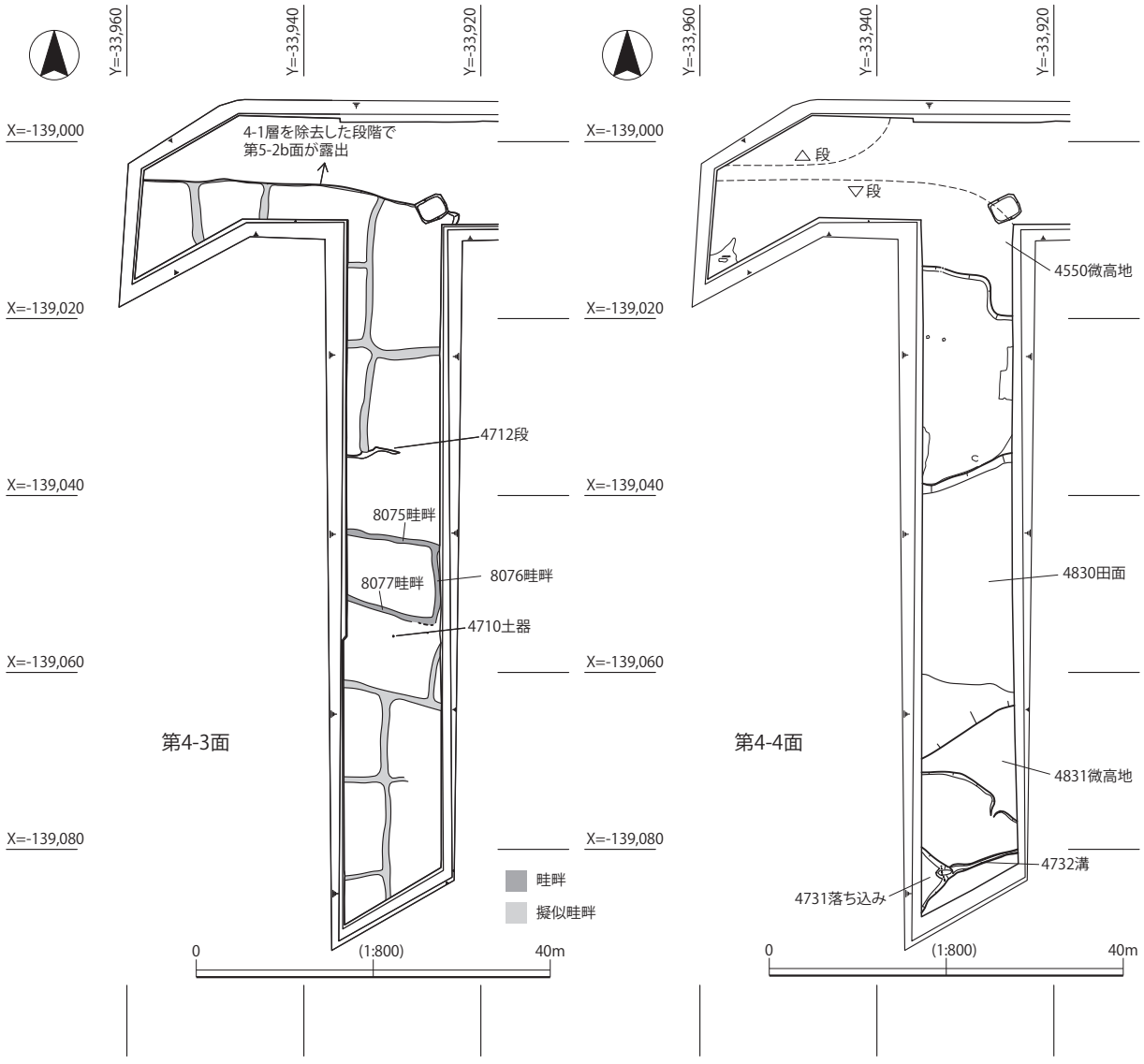


図 79　1－5区　第4－3・4－4面平面

4710 土器・トレンチ出土遺物（図 79・80、図版 67）

４－２ｂ層から図 80 －１が出土した。１は須恵器平瓶で、完形品である。飛鳥Ⅲ型式に比定される。第４－３面は平安時代前期の段階が想定され、直接時期を示す資料ではないと考えている。また、図 80 －２の須恵器坏身が側溝掘削時出土。３ｂ層に帰属すると考えられる。

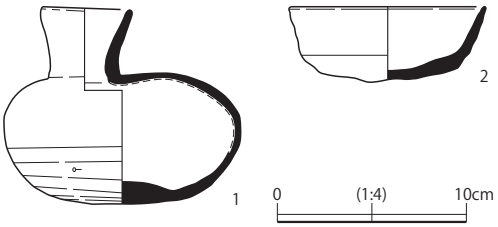


図 80　１－５区　4710 土器・トレンチ出土遺物

第４－４面（図 79）

４－４層は 4550 微高地と 4831 微高地に挟まれた 4830 田面と 4731 落ち込み周辺に堆積する。４－４層下面が水平であることや、微高地へのすりつきが段をなすことから、水田作土として用いられたと考えられる。4830 田面以外の範囲は４－１・４－２層を除去した段階で、５－１層ないし５－２ｂ層上面が露出する。第４－４面では、4732 溝と 4731 落ち込みが検出された。

4732 溝・4731 落ち込み・4733 シガラミ（図 81、図版５）

4831 微高地南側で検出された。4732 溝の規模は、幅 0.8 ｍ以上、深さ 0.05 ｍである。西側で 4731 落ち込みと接続し、接続部で 4733 シガラミが検出された。4731 落ち込みの規模は、検出幅 8.0 ｍ、深さ 0.3 ｍである。4732 溝・4731 落ち込みの埋土は、水成層が確認できず、周辺の作土に由来すると考えられるシルト質粘土で埋没する。4733 シガラミは、西方向に流れる水流を調節した施設で、4731 落ち込みへの水の供給を調節したと考えられる。

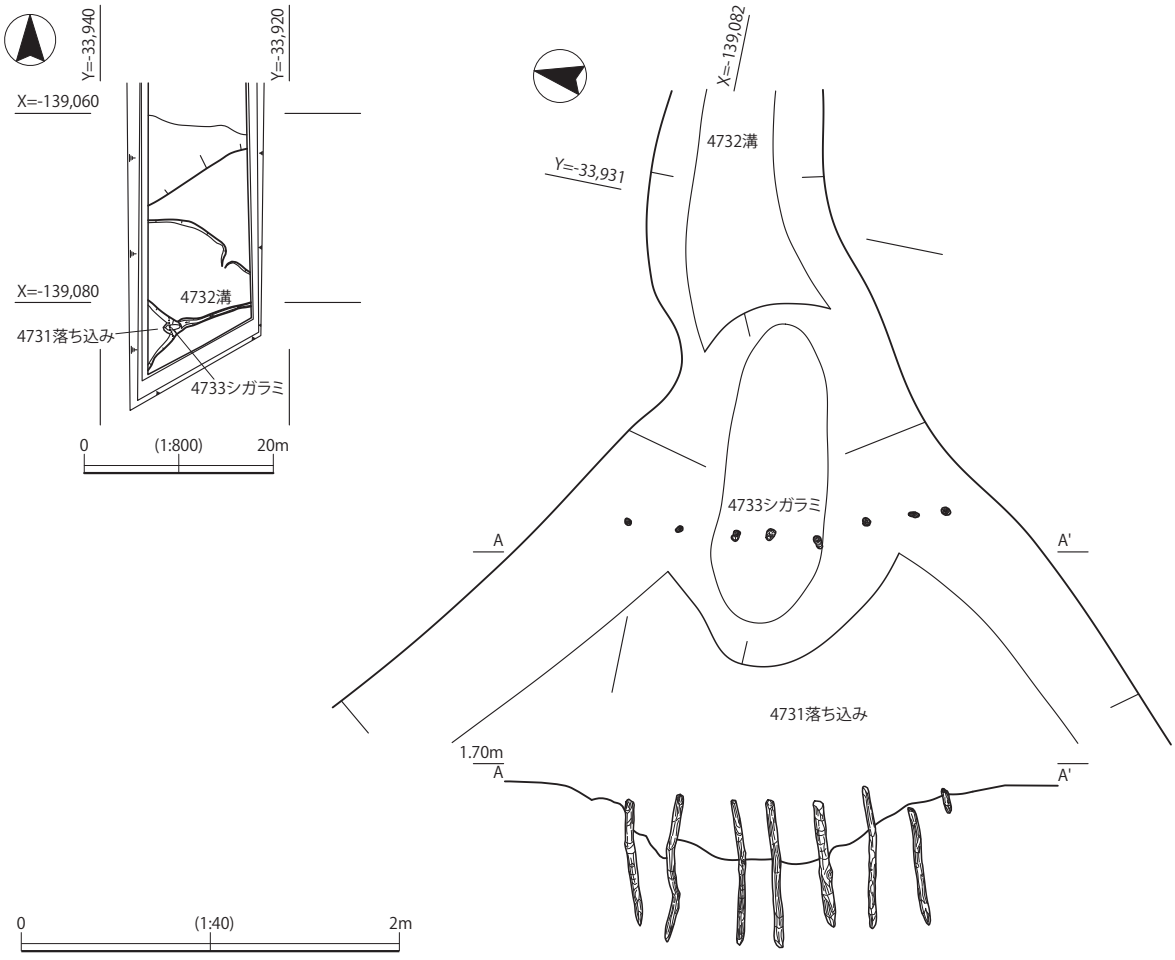


図 81　１－５区　4732 溝平・立面

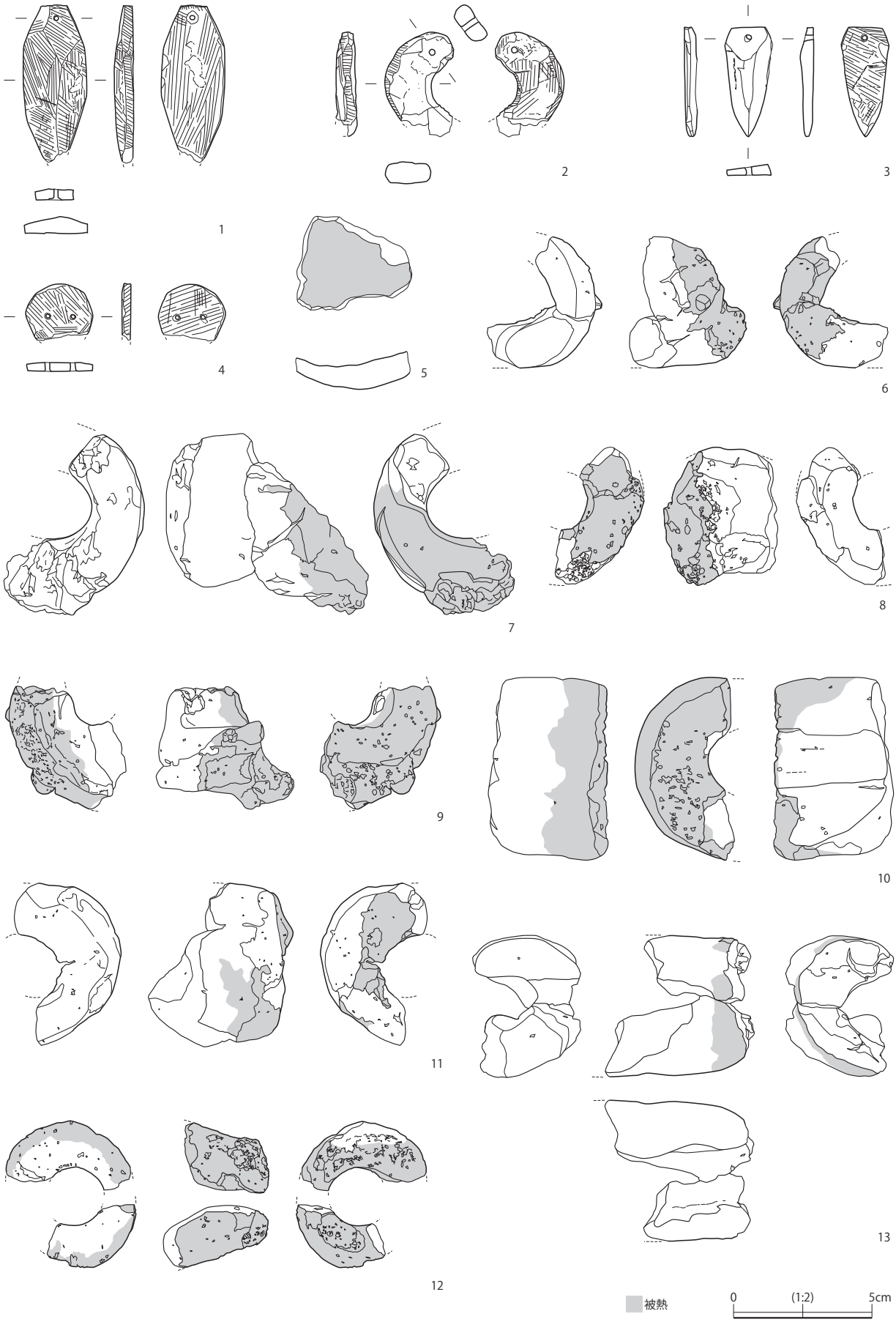


図 82　1－5区　4－1・4－2層出土遺物

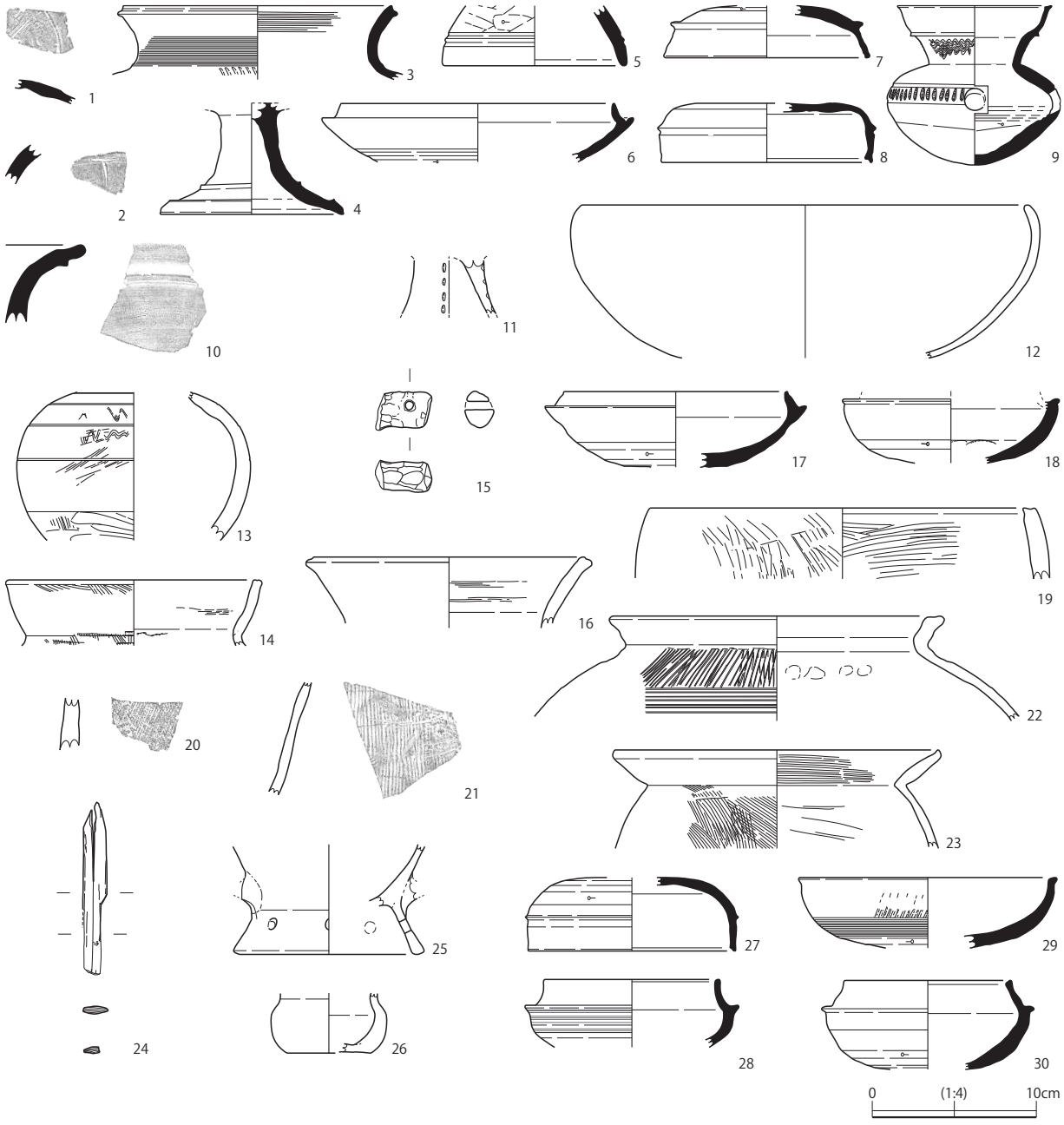


図 83　1－5区　3－1～5－1層出土遺物

3－1～5－1層出土遺物（図 82・83、図版 66・70・71・75）

3－1～5－1層から古墳時代の遺物が多数出土しており、主だった遺物を図示した。図 82 －1は滑石製剣形石製品で、4－1層から出土した。鎬は片側に片寄って表現されて、立体感がやや失われたものである。2は滑石製勾玉で、4－4層から出土した。3は滑石製剣形石製品で、4－4層から出土した。鎬部分は新しい欠損である。4は滑石製有孔円板である。多角形状を呈し、側縁の研磨は斜め方向で、粗い仕上がりである。5は土師器で、器種は不明である。器壁が分厚く、取瓶の可能性がある。内面には炭化物が付着し、胎土は粗い。6～13は鞴羽口である。6・8・9・11・12は、鞴羽口の中では小型のものに属す。先端は高温によりマグネタイト化しているものか。7は中型の鞴羽口で、精良な胎土をもつ。後端部は欠損。10は円筒形の鞴羽口で、器壁は分厚い。先端部は一度切り落とされ

た後に再利用される。12 は 4 － 3 ・ 4 － 4 層から出土。先端部は絞り気味に成形を行い砂が付着する。13 は 4 － 2 層から出土。小型の羽口で、粘土を二重に棒状のものに巻き付けて成形する。先端部は切り落とした可能性がある。後端部もソケット状に作ったものか。

図 83 － 1 は須恵器坏蓋で、3 － 1 層から出土した。天井部に櫛描文が施される。2 は須恵器甕口縁部で、「T」字のヘラ記号あり。3 は須恵器甕で、4 － 1 ・ 5 － 1 層から出土資料が接合。4 は須恵器高坏脚部で、3 － 1 層から出土。5 は須恵器器台ないし鉢か。4 － 2 層出土。6 は須恵器坏身で、4 － 2 ・ 5 － 1 層から出土資料が接合。7 は須恵器坏蓋で、4 － 2 ・ 4 － 4 層から出土資料が接合。8 は微高地上で、1 層により削平を受けた場所から出土しており、直下で竪穴建物 13・14 等が検出された。9 は須恵器鼈で、調査地北東の微高地上で出土した。10 は須恵器甕で、4 － 3 層から出土。11 は土師器高坏脚部で、4 － 2 層から出土。12 は土師器鉢で 4 － 2 層から出土。13 は須恵器を模した土師器で、4 － 2 ・ 4 － 3 ・ 4 － 4 層から出土資料が接合。下位はケズリの後ハケ調整か。15 は土師器把手で、4 － 3 層から出土。16 は壺口縁部で、4526 溝から出土。17・18 は須恵器坏身で、4 － 3 層から出土。14・19 は 4 － 4 層から出土。19 は土師器鉢ないし甑である。細片を図化。20 は韓式系土器で、4 － 3 層から出土。21 は韓式系土器甕の体部片で、4 － 4 層から出土。直線文系平行タタキが施される。22 は東海系の土師器甕で、4 － 3 ・ 4 － 4 層から出土資料が接合。23 は土師器甕で、4 － 2 層から出

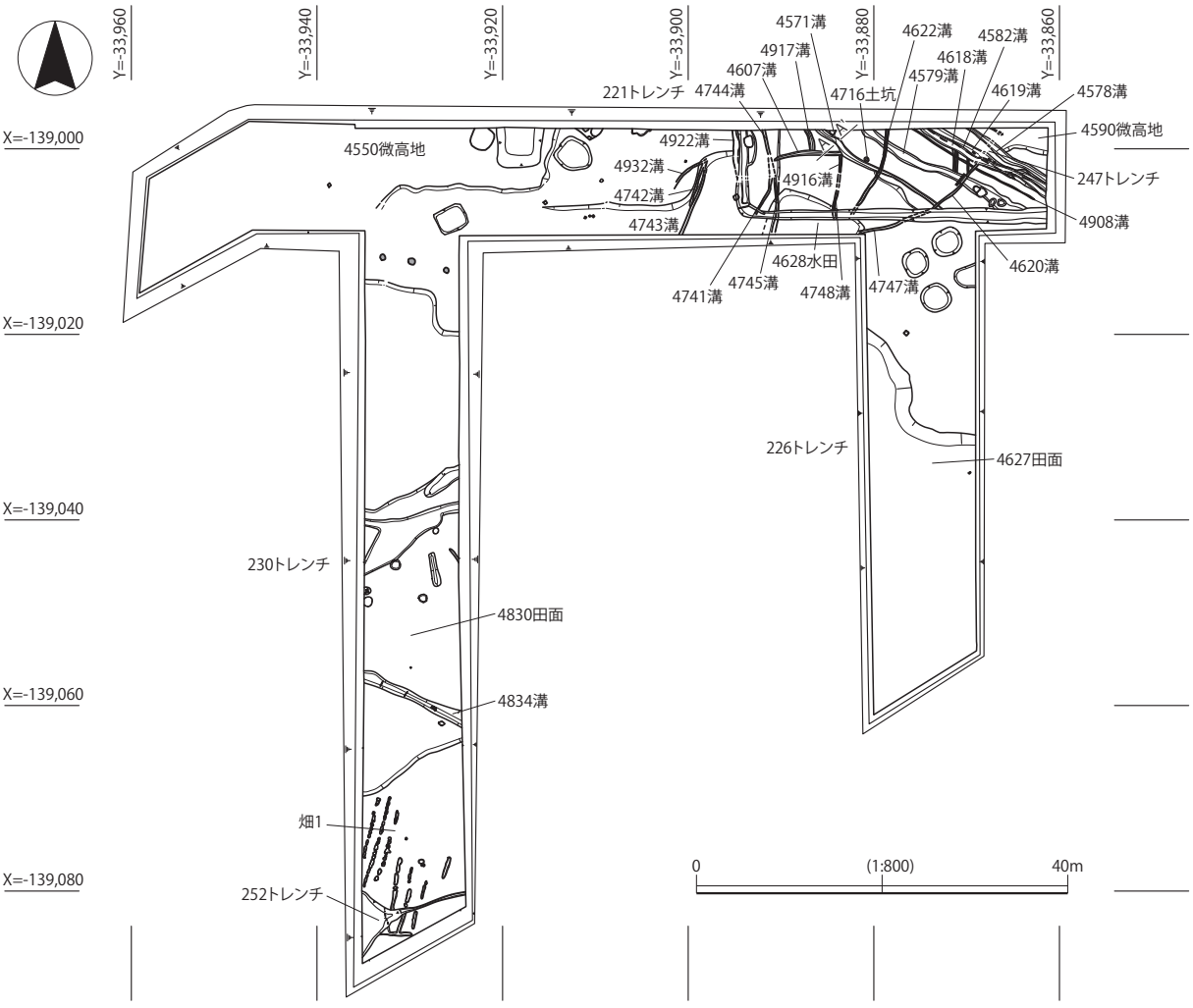


図 84　1 － 5 区　第 5 － 1 面平面

土。24 は不明木製品で、４－１層から出土。切り欠き部分は、加工痕が不明瞭で、折損しただけの可能性がある。25 は弥生土器把手付鉢で、４－４層から出土。26 はミニチュア土器で、５－１層から出土。27 ～ 30 は４－４層から出土。29 は須恵器鉢で、外面はハケの後、カキメが施される。

第５－１面（図 84、図版 7）

５－１層としたシルト質粘土（古土壌）の上面に当たる。４－１・４－２層を除去した段階で調査地の大半は５－１・５－２ｂ層が露出した状態となる。北側の微高地上では一部の古墳時代の遺構が確認されており、溝・畑等も検出された。

これらの遺構については、上部が削平されているものが大半で、第５－２ｂ面の集落と同時期に機能したと考えられるものも含まれることから、第５－２ｂ面においてまとめて報告を行う。なお、古土壌については、低地の４層形成過程で発達した、微高地上の古土壌も一括して５－１層としており、低地と微高地で同時期に形成された地層を明瞭に対比させることはできなかった。

第５－２ｂ面（図 85・86・92・111・137・147・186、図版７）

５－１層とした古土壌を除去して検出した遺構面で、５－２ｂ層とした砂・粘土層の上面に当たる。地形は、北側で検出した 4590・4550 微高地と 4831 微高地が高くなっており、4831 微高地の南北が低くなる。調査地東側の竪穴建物 10 から調査地西側の竪穴建物 33 が検出された範囲は、古墳時代

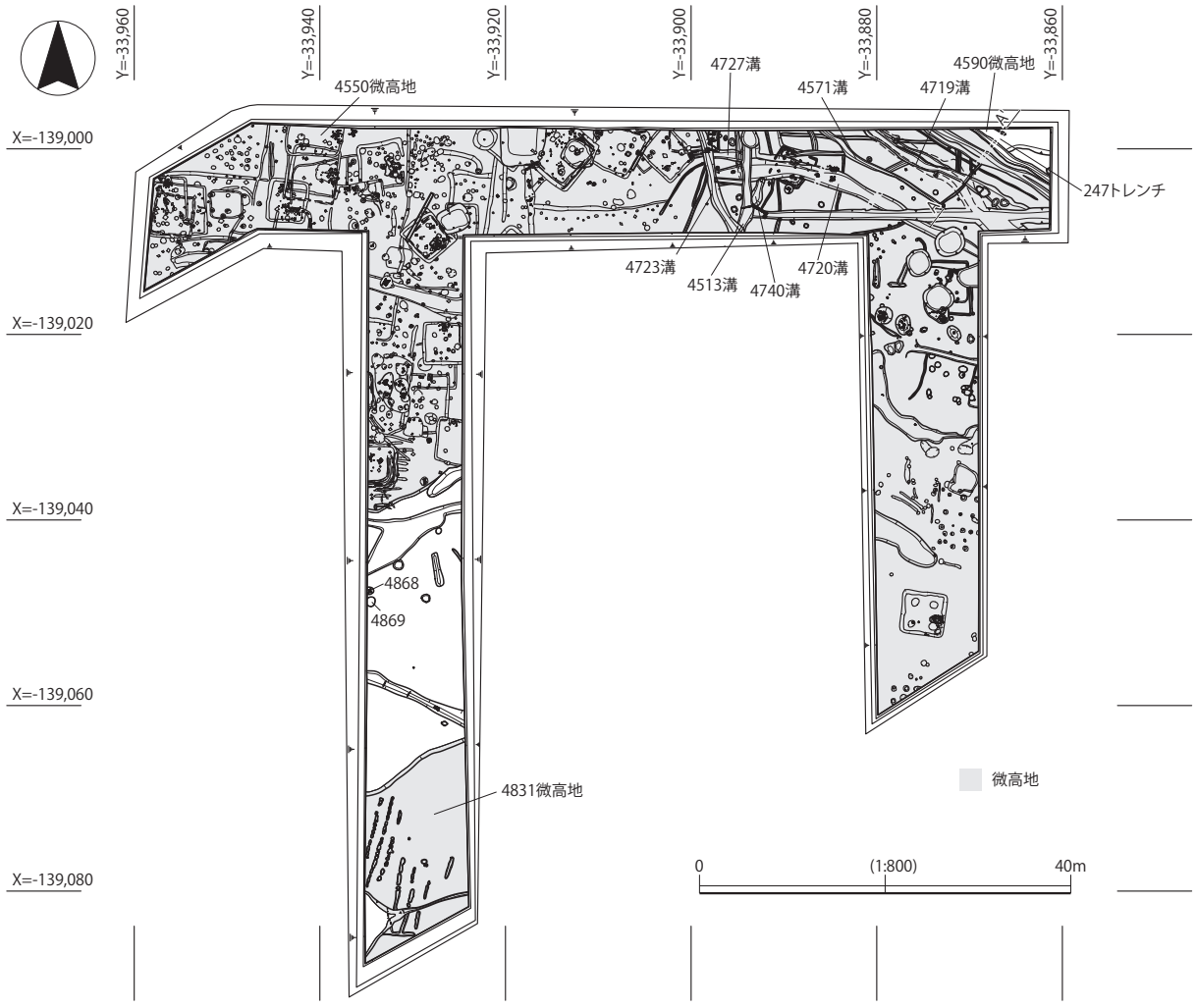


図 85　１－５区　第５－２ｂ面平面

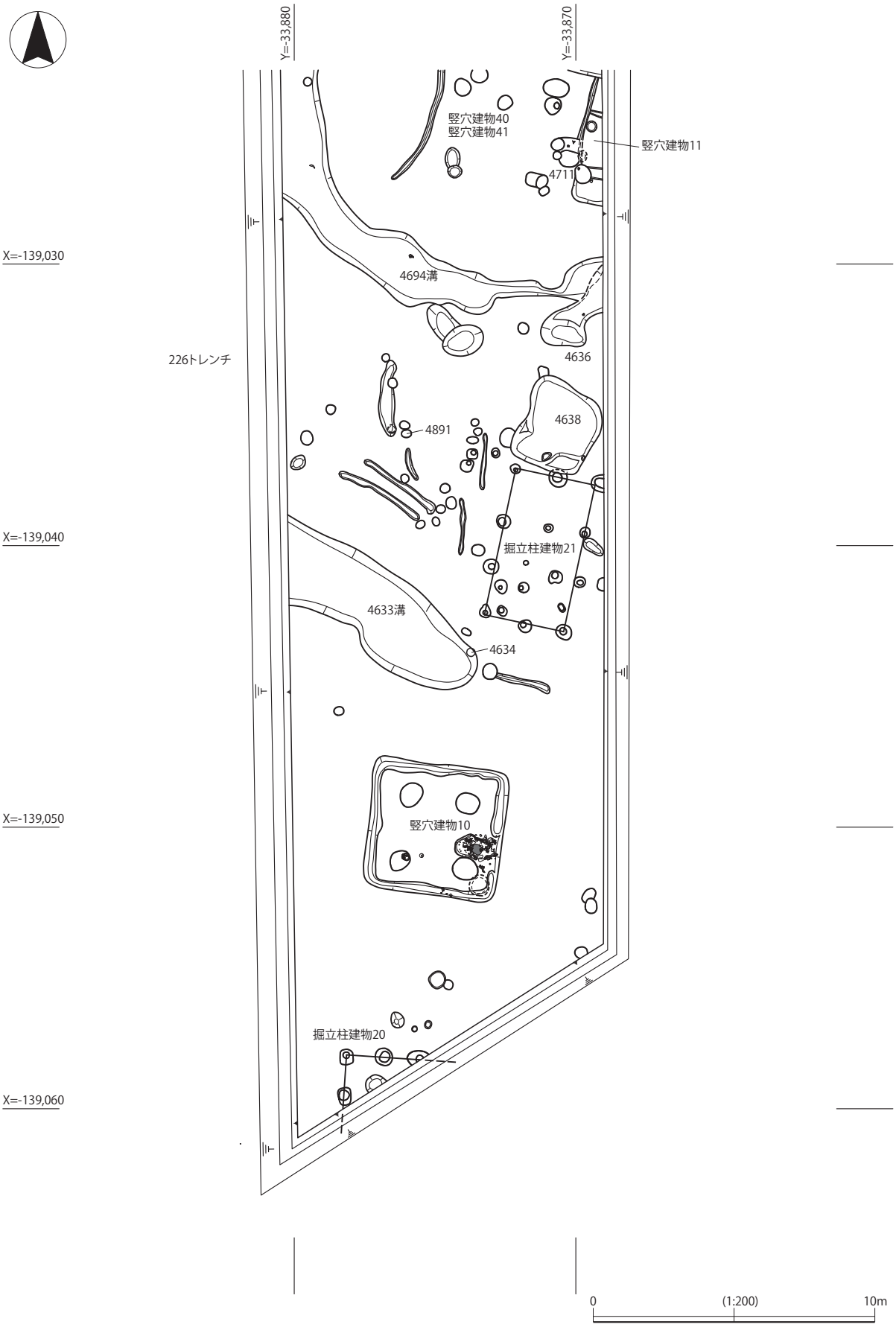
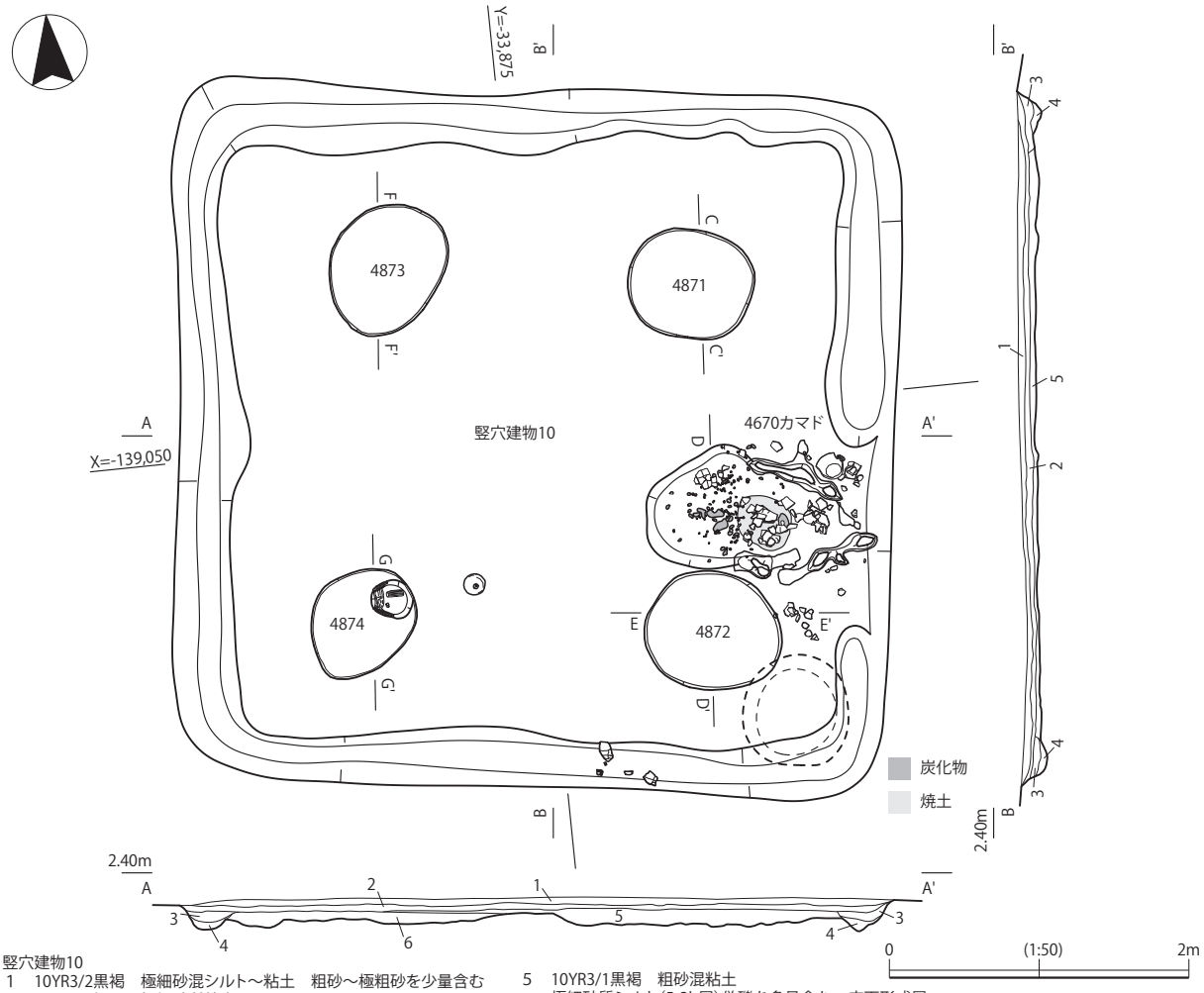
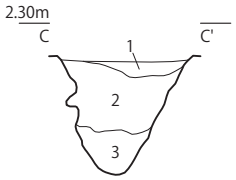


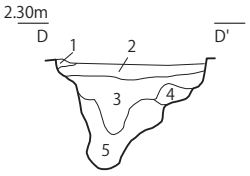
図 86　1－5区　第5－2ｂ面南東側平面



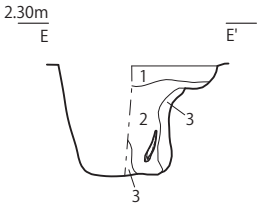
竪穴建物10
1　10YR3/2黒褐　極細砂混シルト～粘土　粗砂～極粗砂を少量含む
2　10YR5/1褐灰　極細砂質粘土
3　2.5Y3/1黒褐　シルト質粘土　壁溝埋土
4　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　壁溝埋土
5　10YR3/1黒褐　粗砂混粘土
　極細砂質シルト(5-2b層)偽礫を多量含む　床面形成層
6　10Y5/1灰　極細砂～細砂混シルト
　極細砂質シルト(5-2b層)偽礫を多量含む　床面形成層



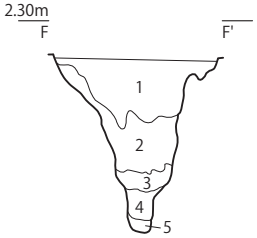
4871
1　10YR3/1黒褐　粘土質シルト　粗砂を微量含む
　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　粘土　抜き取り
3　5Y4/1灰　シルト混粘土
　粗砂～極粗砂(5-2b層)を多量に含む　抜き取り



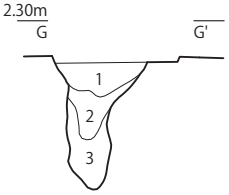
4872A
1　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　粗砂を微量含む
　抜き取り
3　10YR3/1黒褐　粘土　抜き取り
4　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
5　5Y5/1灰　細砂　抜き取り



4872B
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　粘土　シルト質粘土(5-2b層)
　偽礫を含む　抜き取り
3　5Y5/1灰　シルト混粗砂　抜き取り



4873
1　10YR3/1黒褐　粘土質シルト　粗砂～極粗砂(5-2b層)を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
3　10YR3/1黒褐　粘土　粗砂～極粗砂(5-2b層)を少量含む　抜き取り
4　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り
5　10YR3/1黒褐　極細砂　抜き取り



4874
1　10YR3/1黒褐　極細砂～細砂混シルト　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　細砂混シルト　極細砂を少量含む　抜き取り
3　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　抜き取り

0　(1:40)　2m

図 87　1－5 区　竪穴建物 10 平・断面

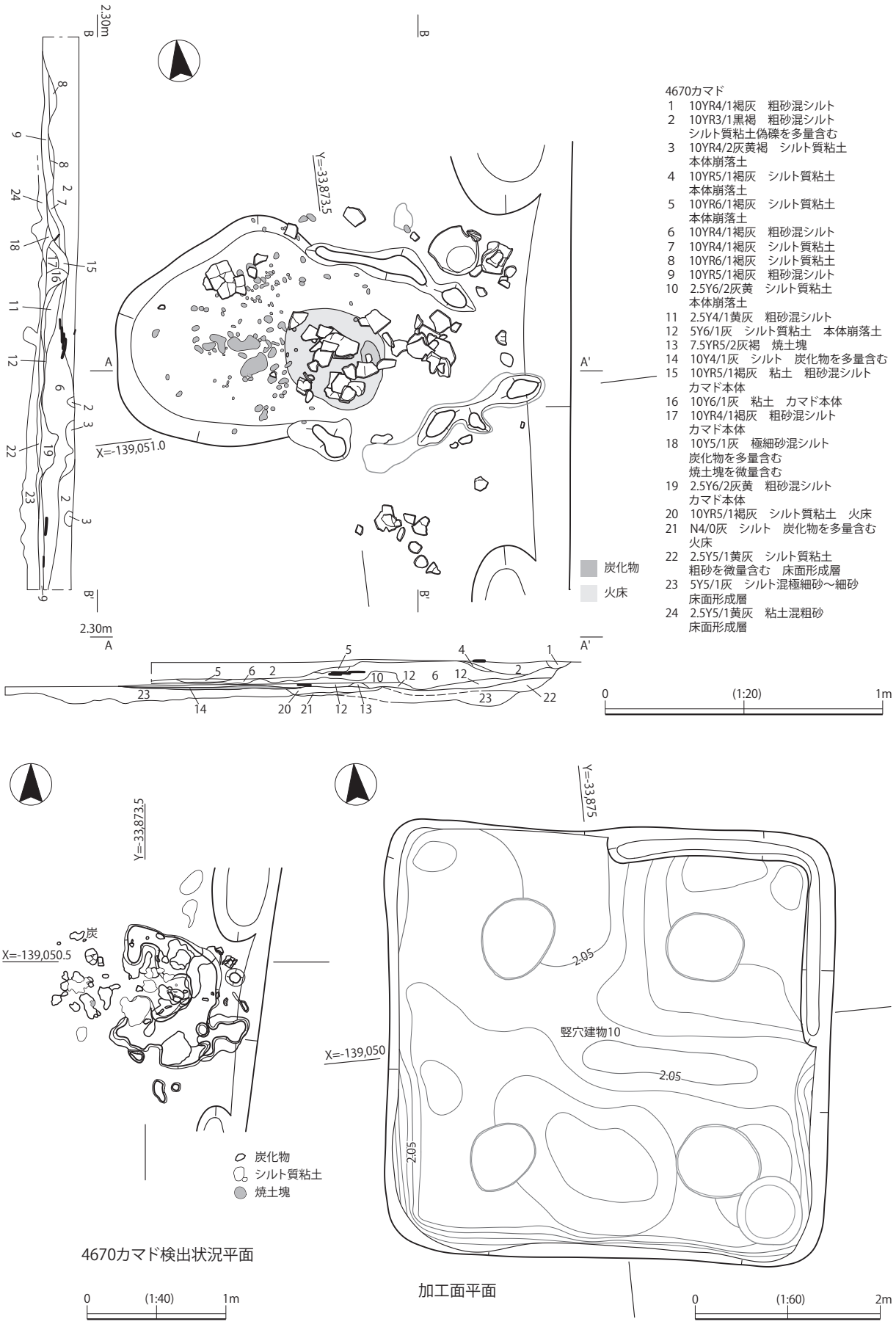


図 88　1 － 5 区　竪穴建物 10　4670 カマド平・断面　加工面平面

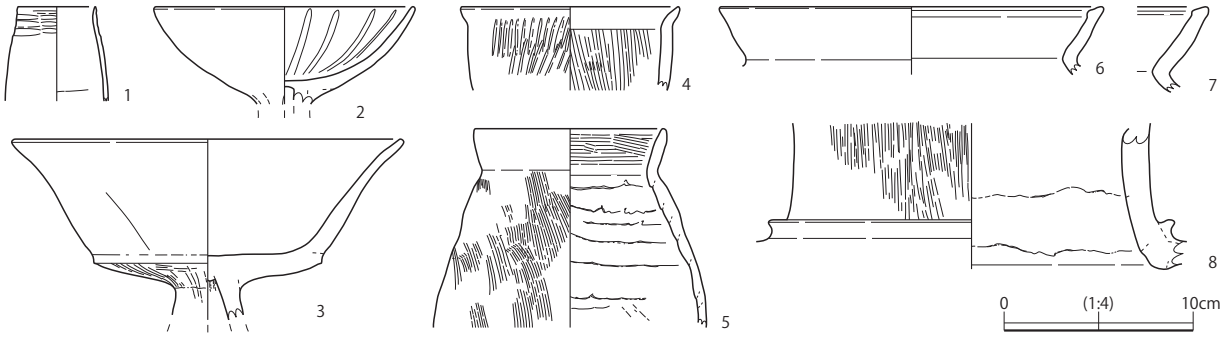
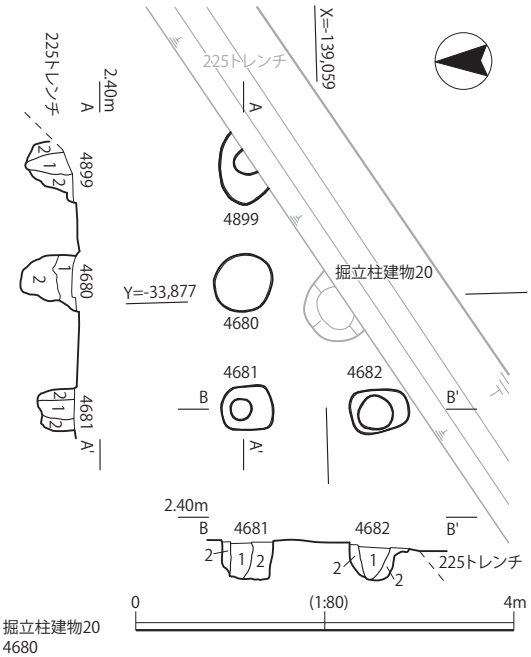


図 89　1－5区　竪穴建物 10　4670 カマド出土遺物

において同じ微高地であったと考えられる。この微高地は平坦ではなく、高低差がある微地形をなしており、土地利用の違いに反映される。第５－２ｂ面では、一部で同時に弥生時代後期の遺構・遺物が検出された。調査の進展に伴い、５－２ｂ層とした砂層中に、弥生時代後期の古土壌が形成されていることが判明し、弥生時代後期の遺構・遺物は当該期の古土壌が露出している場所で検出されたことが明らかとなった。５－２ｂ層を５－２－１ｂ層、５－２－２層（弥生時代後期古土壌）、５－２－２ｂ層として細分して掘削しており、弥生時代後期の遺構・遺物については、第５－２－２面で報告を行う。なお、５－２－１ｂ層と５－２－２ｂ層については、５－２ｂ層と省略して表現した場合があり、表記上、統一が図れなかった部分がある。

調査地南東側（図 86）

１－３区弥生時代後期～古墳時代前期の集落の西側に位置する。古墳時代前期の遺物の分布は、１－５区南東側が西限である。微高地上から南側に向けて、５－１層の堆積が連続する部分が認められ、竪穴建物 10 が検出されたことを根拠として、古墳時代には微高地であったと考えられる。



掘立柱建物20
4680
1　5Y6/1灰　シルト混粗砂　シルト質粘土を少量含む　抜き取り
2　5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　粗砂（5-2b層）を少量含む　抜き取り
4681
1　5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　抜き取り
2　5Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂（5-2b層）を少量含む　裏込め
4682
1　5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土　抜き取り
2　5Y4/1灰　シルト質粘土　粗砂（5-2b層）を少量含む　裏込め
4899
1　5Y4/1灰　シルト質粘土　抜き取り
2　5Y5/1灰　シルト質粘土　粗砂（5-2b層）を少量含む　裏込め

図 90　1－5区　掘立柱建物 20 平・断面

竪穴建物 10 が検出された範囲は、５－２－２ｂ層によって形成されており、竪穴建物 11 が検出された微高地と比較すると、標高は低い。遺構の密度は希薄で、古墳時代中期から後期にかけて地形の平坦化が進む過程で、比較的に早い段階で居住に適さなくなった可能性がある。

竪穴建物 10（図 86 ～ 89、図版６・57・66）

平面形は方形、一辺 4.6 ～ 4.8 ｍである。埋土は極細砂混シルト～粘土の偽礫で、最終的には埋め戻されたと考えられる。竪穴建物 10 の南側では、５－１層に帰属する擬似畦畔が検出されており、この擬似畦畔は竪穴建物の南辺に沿うものである。4760 カマドは、検出時、本体が内側に倒壊し、白色の粘土塊となって認識された。カマド機能時形成層の炭化物主体の地層（以下、炭層）まで下げた段階で、カマドの本体の一部が検出された。カマド本体は、長さ 1.0 ｍ、幅 0.8 ｍ、掻き出し口までを含めた長さは 1.6 ｍである。カマド

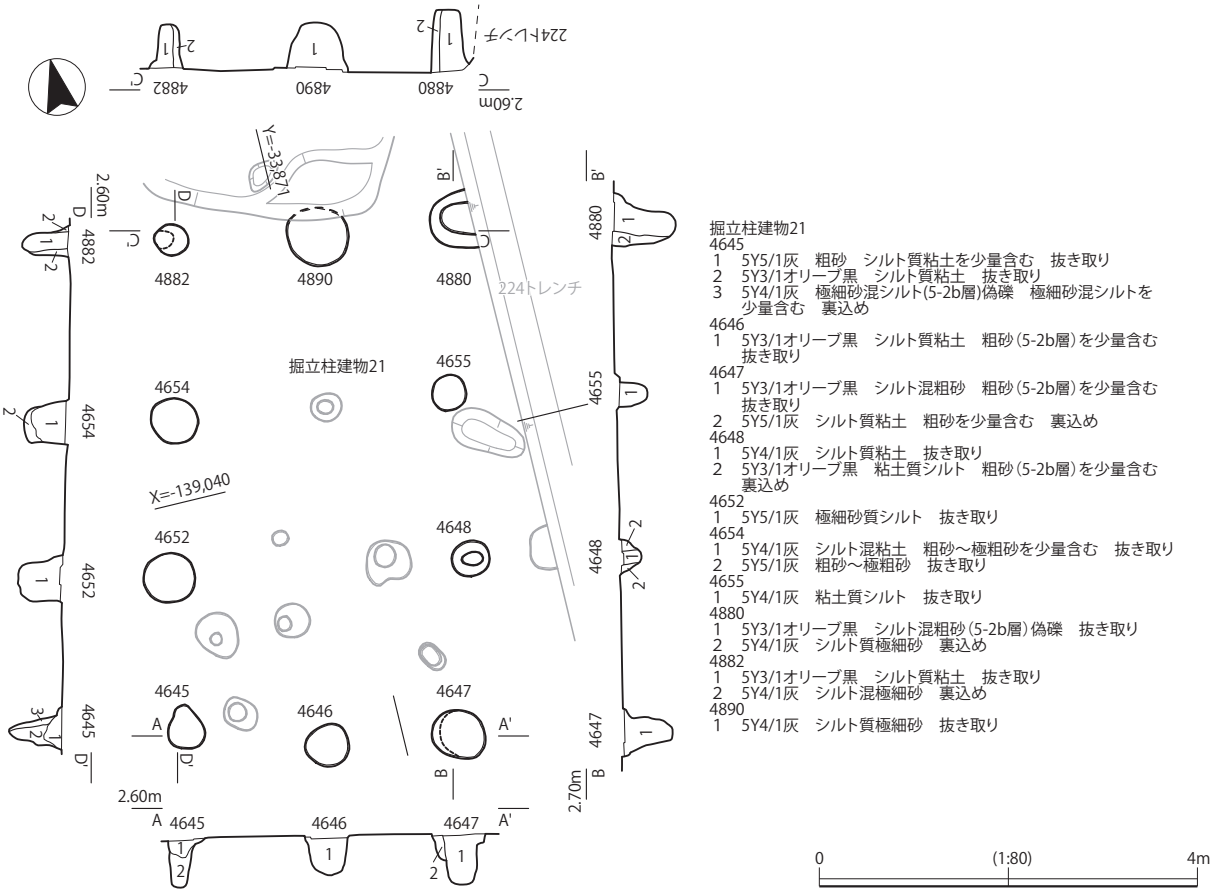


図 91　1－5区　掘立柱建物 21 平・断面

内の炭層は希薄で、カマド西側、奥壁側では炭層が一部で確認されたのみである。カマド内の支脚は確認されず、竪穴建物廃絶時に片付けられた可能性がある。また、カマド周辺に集中して土師器の破片が出土した。竪穴建物の加工面は中央部と北側が高くなっており、竪穴建物の四隅部分が深く掘削される。カマドは東辺中央の高い部分に構築される。

竪穴建物 10 から出土した土器は、図 89 － 1 ～ 8 を図示した。図 89 － 1 は製塩土器である。 2・3 は土師器高坏坏部である。 2 は椀形高坏で、坏部内面には放射状の暗文が施される。 3 は有段高坏で、支脚として用いられたものか。 4 は韓式系土器鉢である。外面はタタキ後ナデ調整、内面はハケ調整される。鉢の口縁部と考えられる。 5 は土師器壺である。外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整を行った後、板ナデ調整が施されたと考えられるが、粘土接合痕が残る。扁平な形状をしており、形状から壺に分類したが、内外面には煤が付着しており、煮炊き具として用いられたと考えられる。口径・胴部径の６割以上が遺存するものを図化したもので、形状は今回出土したものの中に類例はない。製塩土器か。6・7 は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、端部は内傾斜する。 8 は弥生土器壺頸部である。外面はヘラミガキが施される。Ⅴ様式。なお、須恵器は出土しなかった。土師器甕の口縁形状が布留式新段階に位置付けられることや共伴遺物から、竪穴建物 10 は、古墳時代中期前葉に機能したと考えられる。

掘立柱建物 20（図 86・90、図版 13）

竪穴建物 10 の南側で検出された。建物構造は 1 間以上× 2 間以上、規模は 2.8 m以上× 1.6 m以上である。柱はすべて抜き取られていた。出土遺物は皆無で、時期の詳細は不明である。竪穴建物 10 と方位が合うことから、時期は古墳時代中期前葉を想定している。

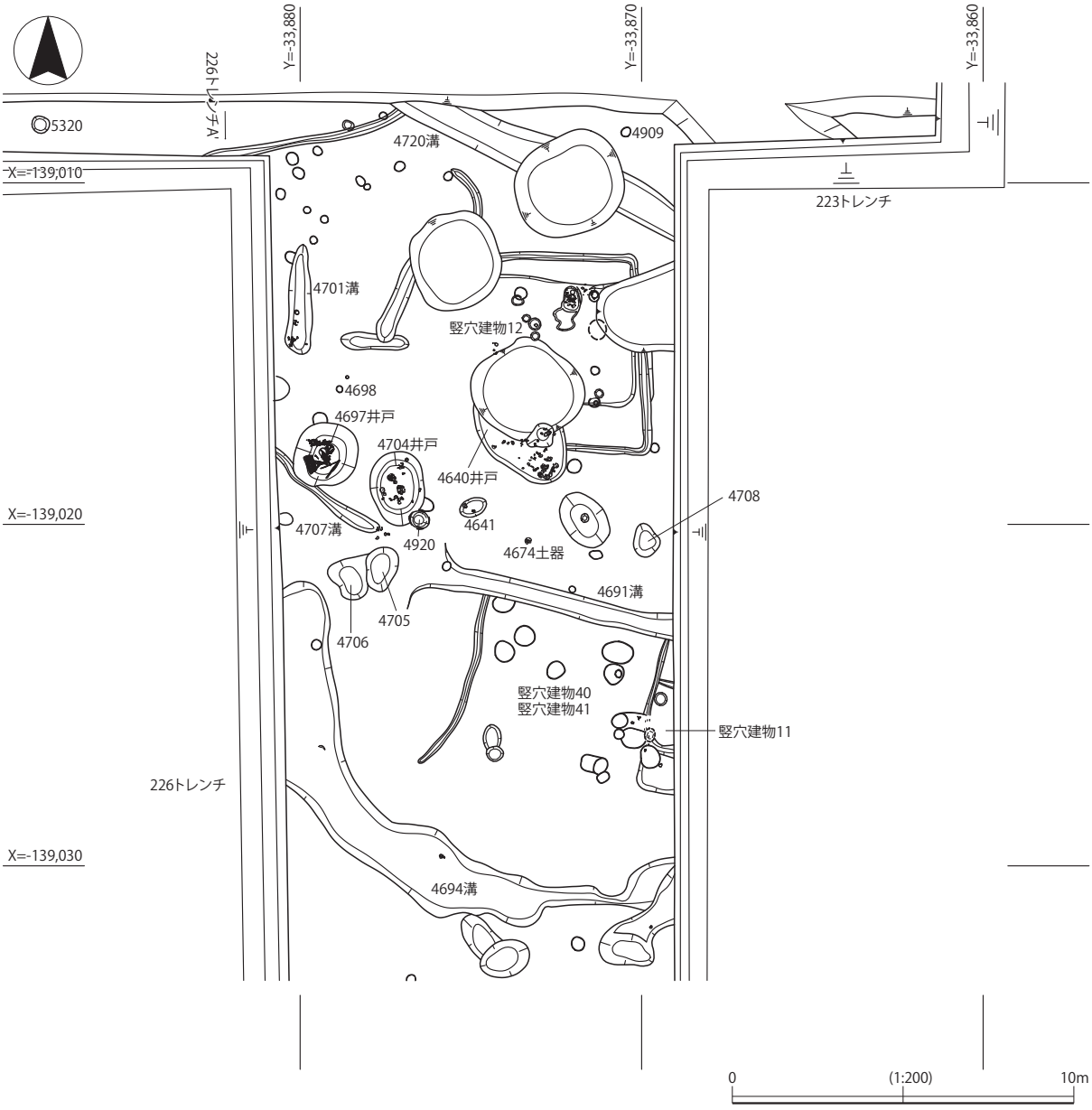


図 92　1－5区　第5－2ｂ面東側平面

掘立柱建物 21（図 86・91、図版 13）

竪穴建物 10 の北東側で検出された。建物構造は２間×３間、規模は梁行 5.2 ｍ×桁行 3.0 ｍである。柱はすべて抜き取られていた。出土遺物は、土師器・須恵器細片が出土したが、時期の詳細は不明である。竪穴建物 10 と方位が合うことから、時期は古墳時代中期前葉を想定している。

調査地東側（図 92）

１－３区から連続する微高地に当たる。古土壌が厚く堆積しており、４－４・５－１層として掘削を行った。古土壌からは、古墳時代の遺物の他、Ⅴ様式の弥生土器が出土した。１－３区の調査成果から、弥生時代後期から古墳時代中期初頭にかけて形成された古土壌と考えられ、北東側の微高地斜面に認められた５－１－２層が５－１－１層に収斂したものと考えられる。東側の微高地上では竪穴建物、斜面地ないし低所で井戸が検出された。

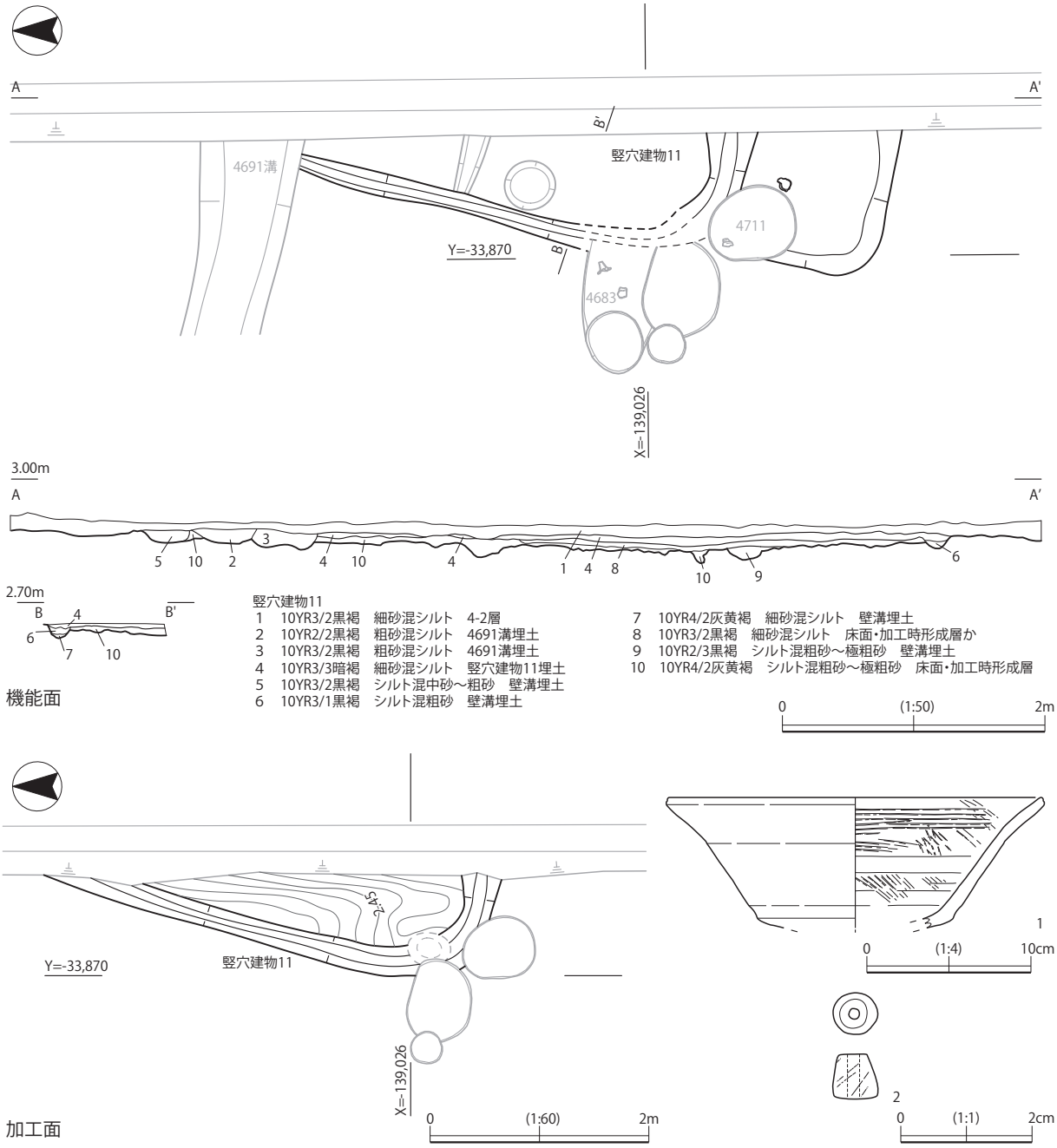


図 93　1－5区　竪穴建物 11 平・断面　出土遺物

竪穴建物 11（図 92・93、図版 71）

4694 溝の北側で、竪穴建物の南西部の一部が検出された。土壌化の影響が著しく、遺構検出は困難であったが、南西の平面形が南北にずれた位置で壁溝を検出しており、建て替えがあった可能性を想定している。なお、整理の過程で、4683 土坑として掘削した遺構がカマドであった可能性が高いことが判明しており、竪穴建物 40・41 は竪穴建物 11 より新しい段階に構築されたと考えられる。竪穴建物 11 からは、図 93 － 1 ・ 2 が出土した。 1 は土師器有段高坏である。坏部外面は磨滅しており、口縁部と段部分は横ナデ調整、内面は板ナデ調整後、ハケ調整される。内面の調整痕は明瞭に遺存するもので、粗雑な仕上げといえる。 2 は石製品の臼玉である。雲母を多量に含む岩質で、この岩質を用いた石製品は 2 の臼玉 1 点のみである。側面は截頭円錐形である。側面の研磨は一面を磨くことで円錐状に仕上げ、下端は一部を研磨するに留める。竪穴建物の時期は、古墳時代中期前葉から中葉を想定している。

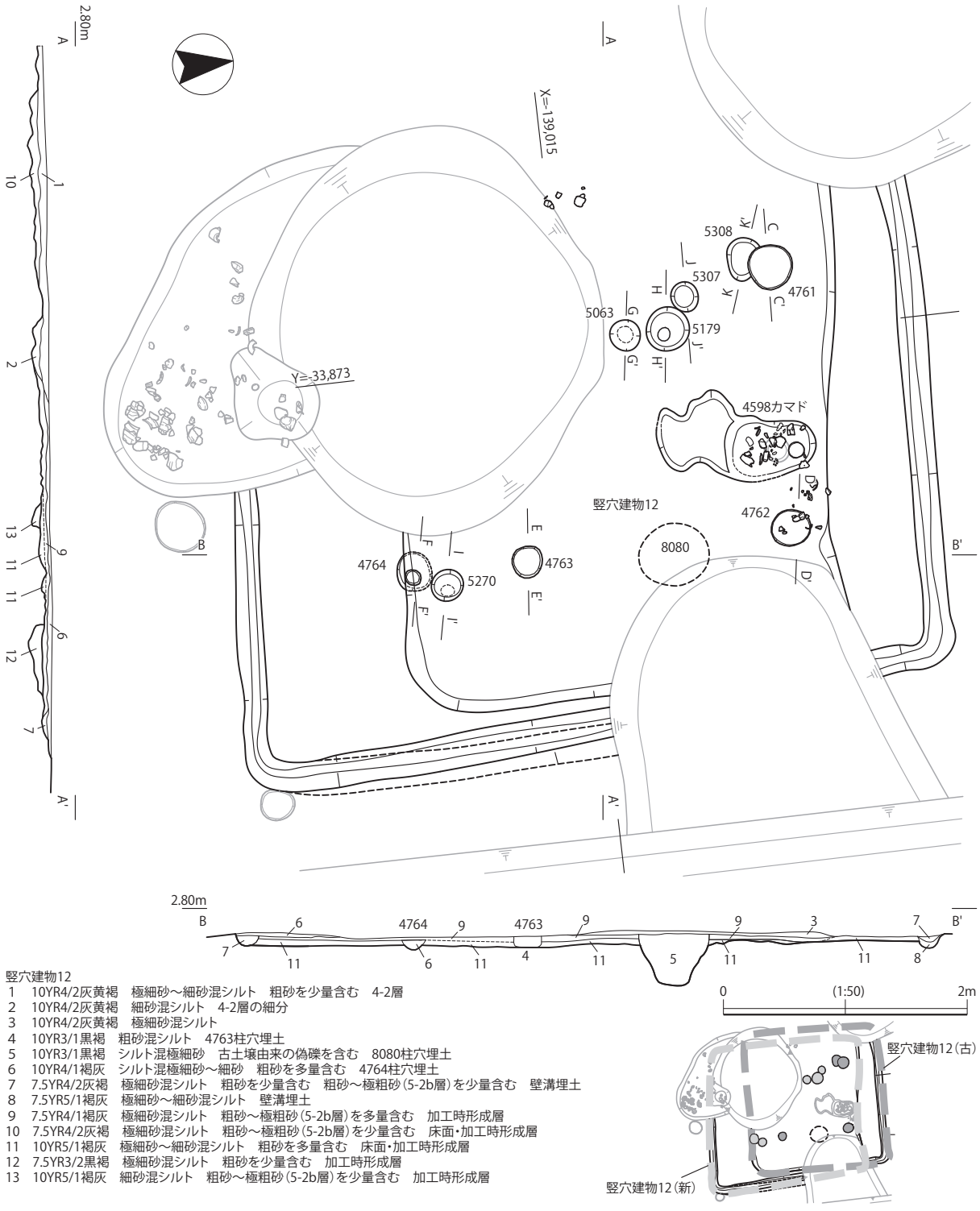


図 94　1－5区　竪穴建物 12 平・断面

竪穴建物 12（図 92・94 ～ 97、図版 6 ・ 63・65）

竪穴建物 40 の北側で検出された。古土壌掘削時に 4598 カマドが認識できたことから、竪穴建物が存在することが想定されたが、層中では平面形は確認できず、第５－２ｂ面まで掘削した時点で平面形が検出された。土壌化の影響により、西側の平面形は検出できなかった。調査当初から２棟の竪穴建物が切り合っていることが想定されたが、１）カマドの位置が竪穴建物内にあったこと、２）加工面まで下げた段階で段が検出されたこと、３）主柱穴と考えられる柱穴が複数検出されたことから、最終的に

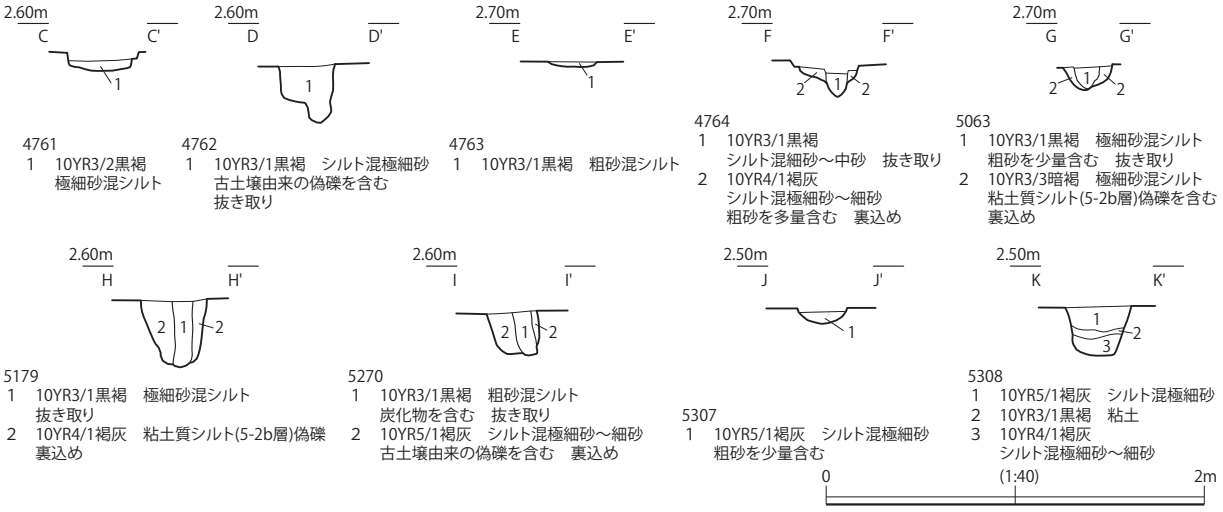


図 95　1－5区　竪穴建物 12　4761 柱穴他断面

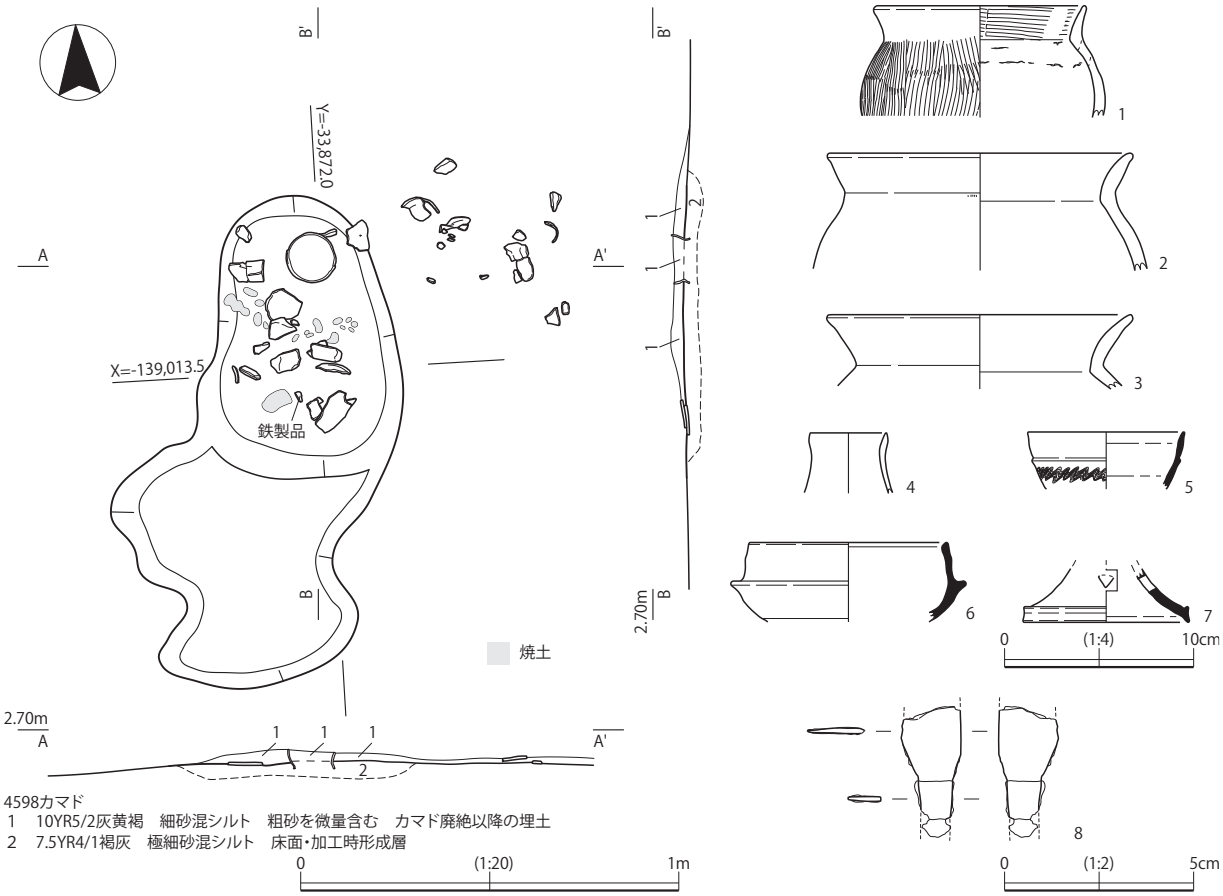


図 96　1－5区　竪穴建物 12　4598 カマド平・断面　出土遺物

2棟の竪穴建物と判断した。以下、古段階と新段階の竪穴建物に分けて報告を行う。

新段階の竪穴建物は、東辺で 5.0 mに復元できる。床面・加工時形成層直上の埋土は、極細砂～細砂混シルトで、竪穴建物の直上に堆積した古土壌と区別のほとんどつかないものである。4598 カマドを北側中央で検出したことを手掛かりとして掘削を進めたが、主柱穴は加工面ないし加工面に近い高さまで下げた状態で検出された。

4598 カマドは本体部分で長さ 0.75 m、幅 0.5 m、掻き出し口まで含めると 1.3 mである。カマド

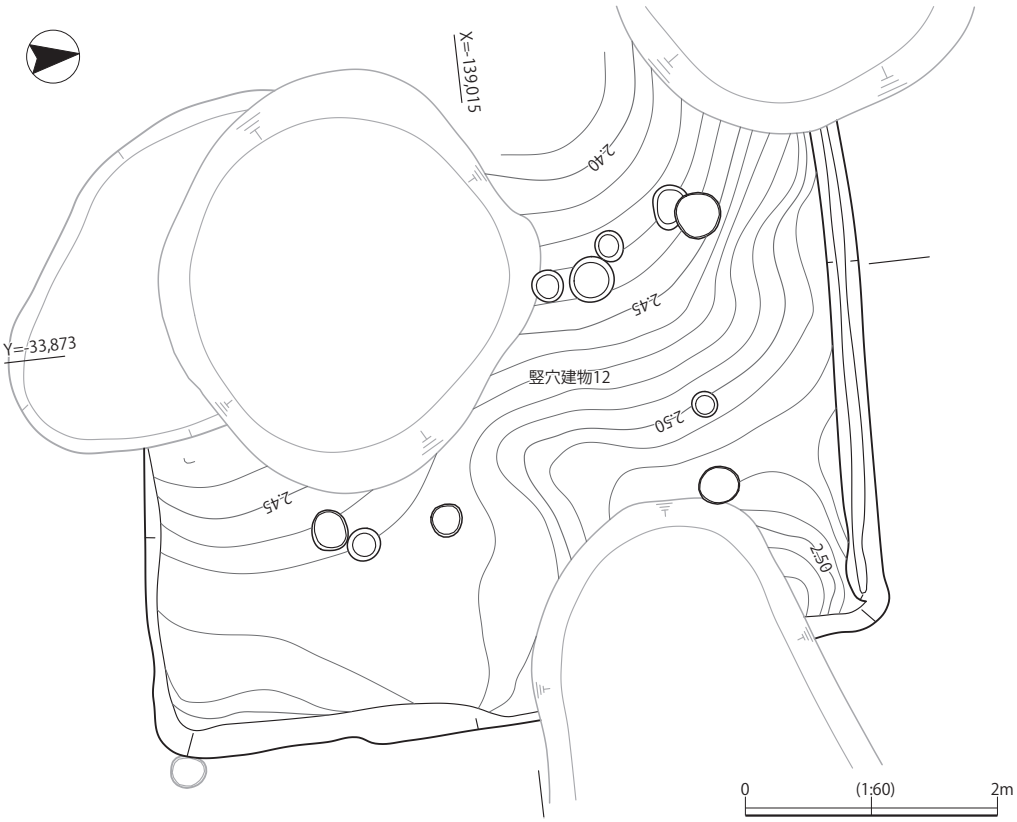


図 97　1－5 区　竪穴建物 12 加工面平面

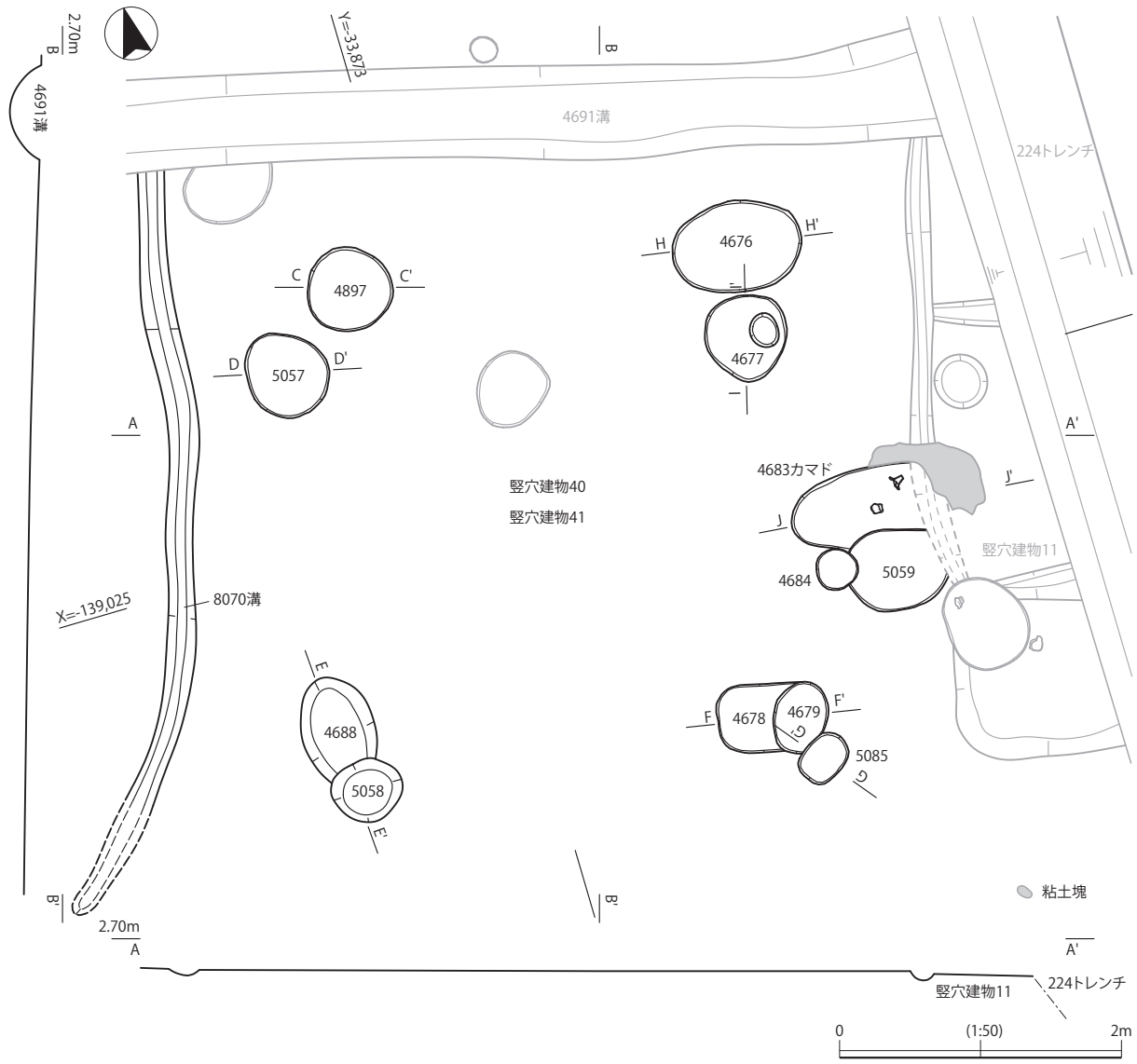
本体は検出されなかった。また、他のカマドでは機能時形成層である炭化物を主体とした地層が確認されたが、4598 カマドでは認識できなかった。ただし、カマド内の土器が出土した標高はほぼ同じであり、その標高がカマドの機能時の高さに近いものと考えられる。カマド内では土師器甕を用いた支脚が検出された。

出土遺物は、図 96 － 1 ～ 8 がある。 1 は支脚として用いられた甕で、体部の下位は失われている。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整される。 2 ・ 3 は土師器甕である。内外面は磨滅している。 4 は製塩土器で、内外面は磨滅。 5 は須恵器壺の口縁部である。 6 は須恵器坏身で、TK47 型式。 7 は須恵器高坏脚部である。透孔があり、破断面から逆三角形に復元した透孔を図示した。TK208 ～ 23 型式。 8 は鉄鏃である。上下が欠損する。残存部位は、関部及び頸部で、平面形は左右非対称である。関部は切断による加工を行ったものか。古墳時代中期中葉～後葉の竪穴建物と考えられる。

古段階の竪穴建物は、平面形は方形、東辺で 4.5 mである。主柱穴は 4761・5308 柱穴、4764・5270 柱穴、4762 柱穴と考えられる。4764 柱穴は 5270 柱穴と位置が異なっており、古段階と想定した竪穴建物においても建て替えがあった可能性がある。

竪穴建物 40・41（図 92・98・99）

竪穴建物 12 の南側で検出された。竪穴建物 2 棟分の主柱穴が計 8 基検出された。主柱穴の切り合い関係から、北側の竪穴建物 41 から南側の竪穴建物 40 に建て替えられたと考えられる。竪穴建物の規模は不明である。床面・加工時形成層は確認できなかった。8070 溝は竪穴建物の平面形の最終的な確認作業を行っていた時点で検出された。規模は、幅 0.2m、深さ 0.04m である。南側は斜面地であったため、溝の平面形が不明瞭であった部分で、位置関係から竪穴建物 40･41 の壁溝になる可能性がある。



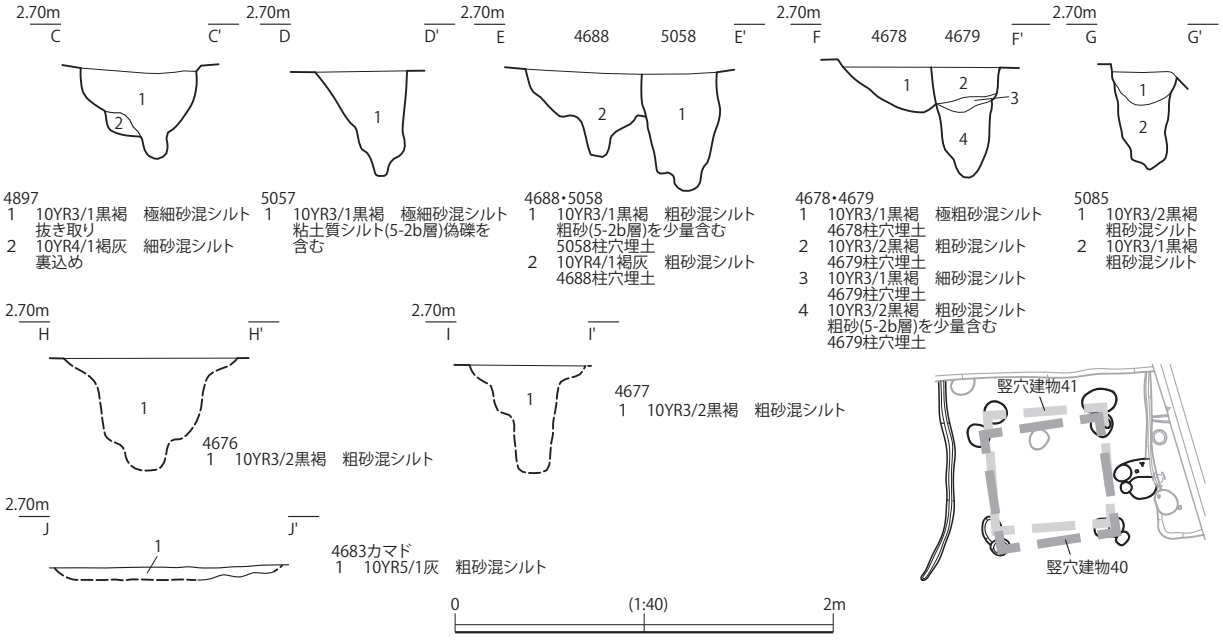


図 98　1－5区　竪穴建物 40・41 平・断面

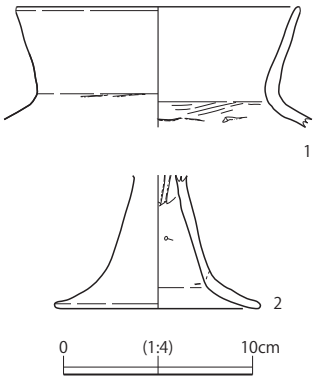


図 99　1－5区

竪穴建物 40・41 出土遺物

4683 土坑は、調査時には土坑と判断して掘削したが、1－5区竪穴建物のカマドを検討し、改めて調査時の写真を確認した結果、カマドであった可能性が高いと判断された。カマド燃焼部と掻き出し口に相当する部分を土坑として掘削したと判断しており、検出時の写真には粘土塊が 4683 土坑周辺に堆積している状況が確認された。ただし、4683 土坑の南北で検出された壁溝については、竪穴建物 11 に帰属させており、現時点ではそれ以上の検証は行えなかった。4683 土坑の規模は、長さ 0.9 m以上、幅 0.5 m以上である。

出土遺物は図 99－1・2を図示した。1は土師器壺で、竪穴建物 41 に伴う 4676 柱穴から出土した。2は土師器高坏で、4683 土坑から出土した。脚部外面は磨滅により不明、内面はケズリが施される。出土土器及び竪穴建物 11 との切り合い関係により、竪穴建物 40・41 は古墳時代中期前葉～中葉に位置付けられる。

4697 井戸（図 92・100・101、図版 71・76）

4704 井戸の西側で検出された。平面形はやや不整形な部分があるものの、円形を呈する。規模は、直径 1.8 m、深さ 1.36 mである。埋土は、底面直上が加工時形成層の粗砂～極粗砂、中層から下層が

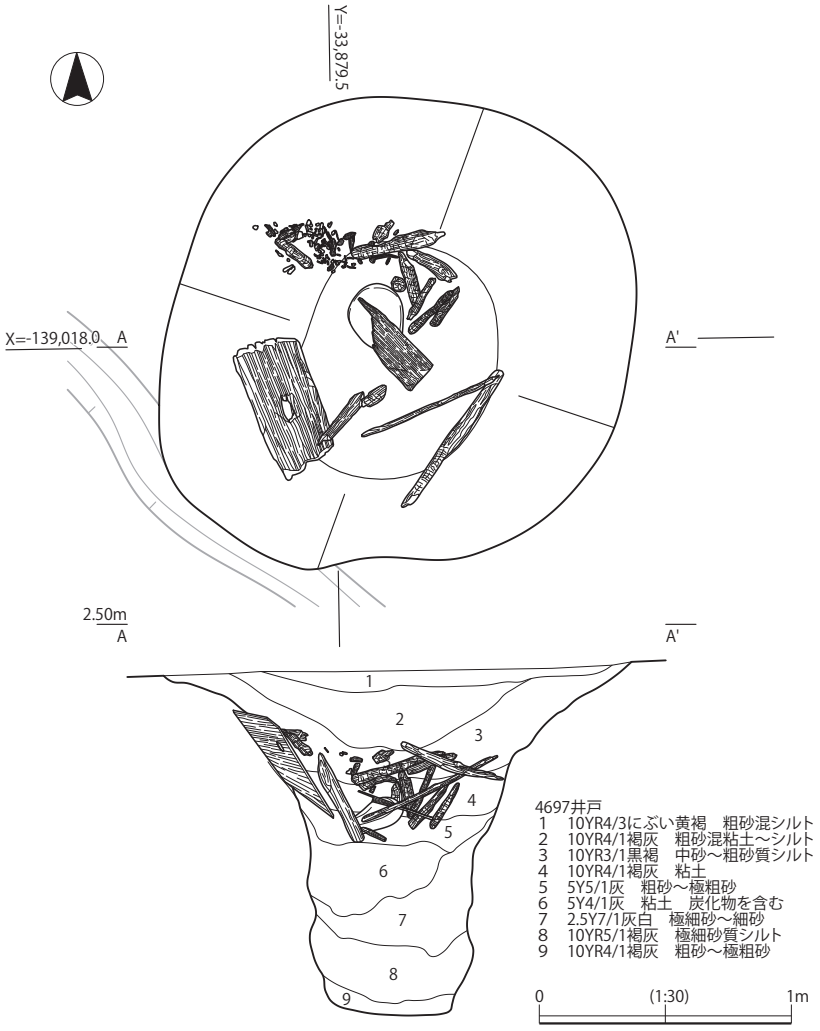


図 100　1－5区　4697 井戸平・断面

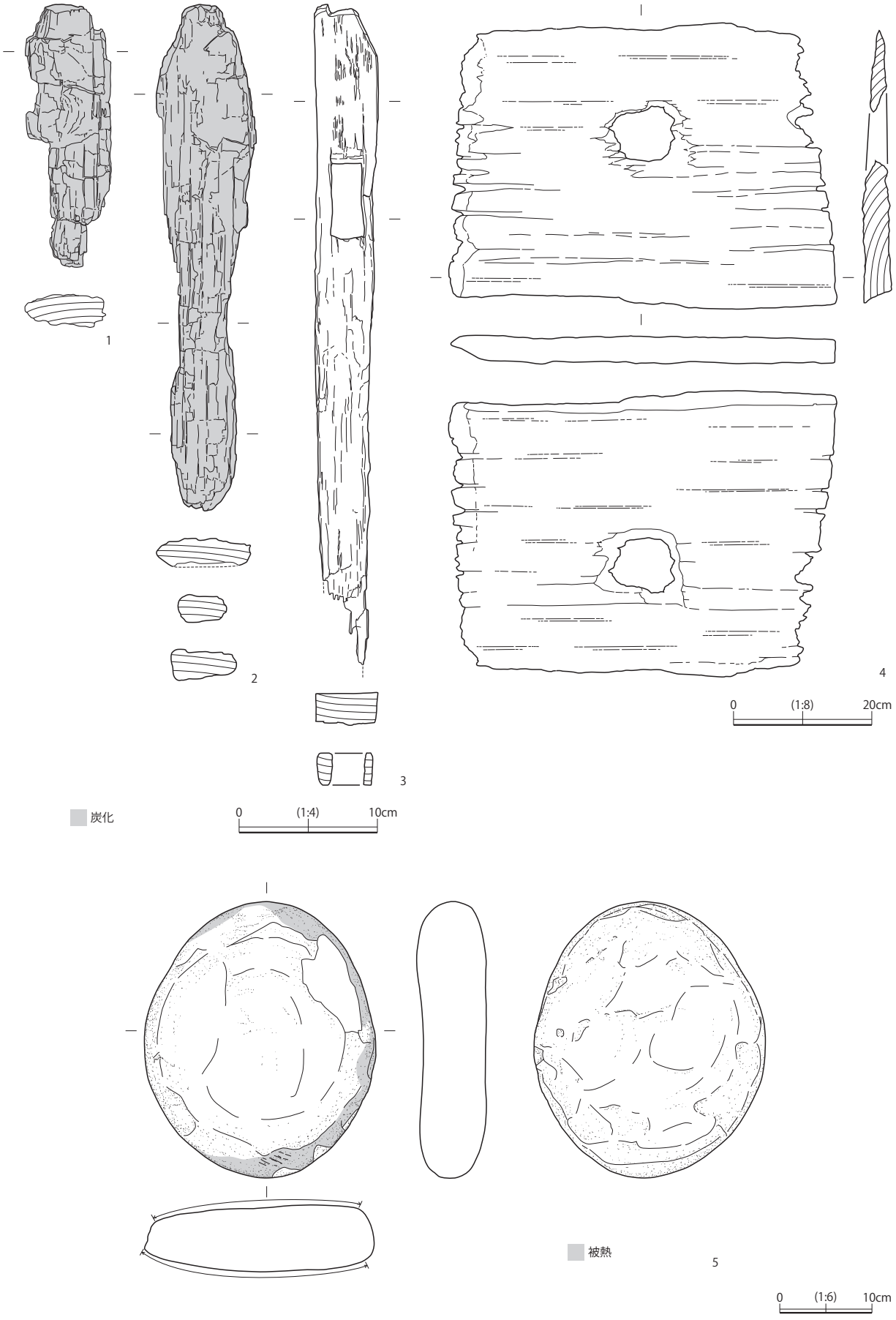


図 101　1－5 区　4697 井戸出土遺物

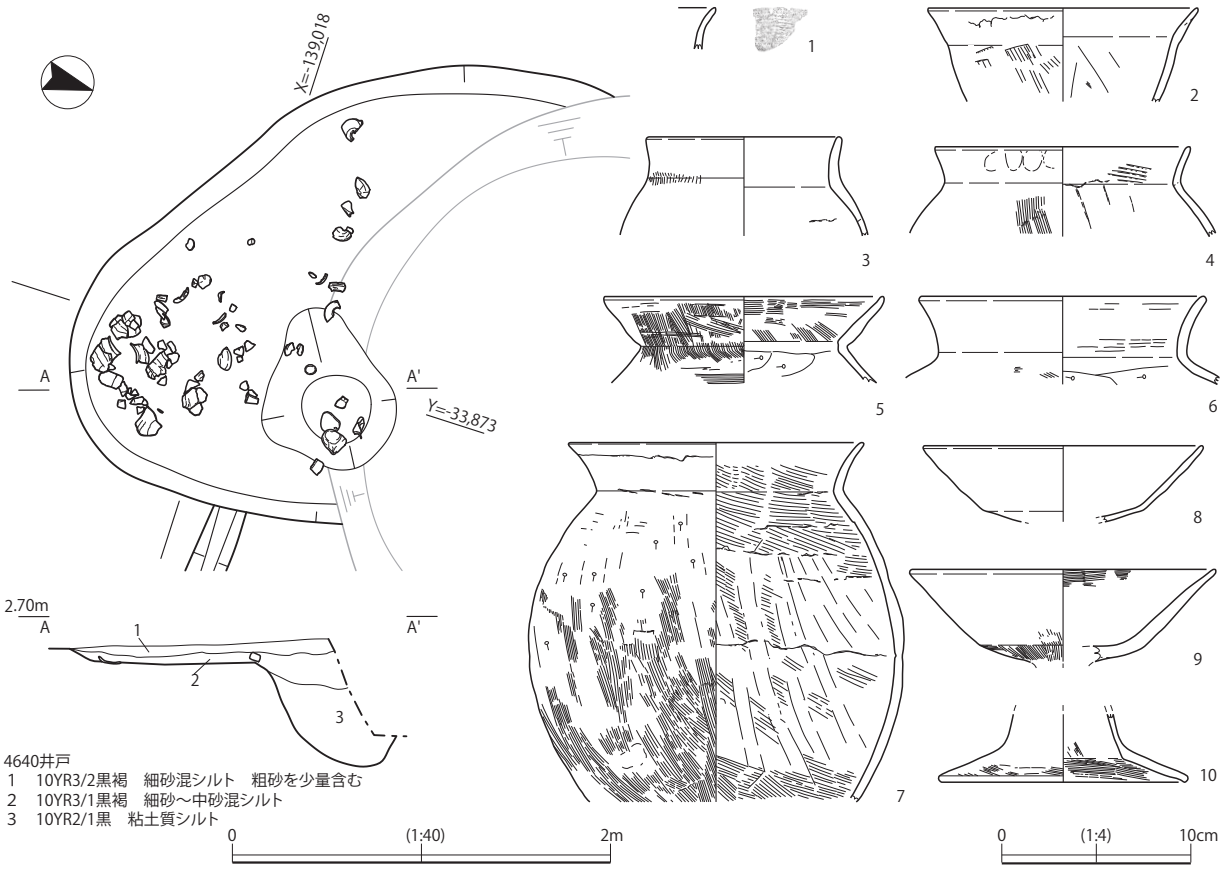


図 102　1－5区　4640 井戸平・断面　出土遺物

湿性堆積物の粘土と崩落土の砂層、上層は周辺で形成された土壌に由来する粗砂混シルトである。中層の湿性堆積物から木製品・台石が出土した。

4697 井戸から出土した遺物は、図 101 －1～5に図示した。図 101 －1・2は不明木製品である。両端が楕円状に整えられ、全体が炭化する。3は部材である。両端は折損しているが、幅の広い方に、ホゾ穴が加工される。4は部材である。全体に腐食が顕著で、両端は欠損部が多いものの、形状は台形に整えられる。中央に貫通孔が穿たれており、孔周辺は腐食が顕著であったが、円形であったと考えられる。今回出土した柱根の中には、円形の孔と同様の規模のものがあり、柱と組み合わせて鼠返しとして使用されたものか。5は台石である。表面は摩耗により内湾しており、中央部には敲打痕がわずかに認められる。

4640 井戸（図 92・102、図版 57）

竪穴建物 12 の南西部で検出された。竪穴建物 12 との切り合い関係は、竪穴建物 12 の遺存状態が悪く不明である。平面形は不整形で、断面形は漏斗形である。規模は長軸 2.80 m以上、短軸 2.3 m、深さ 0.7 mである。中央部が掘りくぼめられており、6－4ｂ層とした砂層に達する。埋土は、下層が湿性堆積物の粘土質シルト、上層が土壌に由来する粗砂混シルトである。

4640 井戸からは、図 102 －1～10 に示した土師器が出土した。1は鉢で、外面に布目圧痕がある。2は鉢である。3は壺である。頸部にハケメが部分的に残る。4～7は甕である。5・6は体部外面がハケ調整、内面がヘラケズリ調整される。7は体部外面がケズリの後ハケ調整、内面は斜め方向のハケが施される。8～10は有稜高坏である。稜は不明瞭で、9はかろうじてその痕跡を留める。出土した土師器から、井戸の時期は古墳時代中期中葉に比定される。

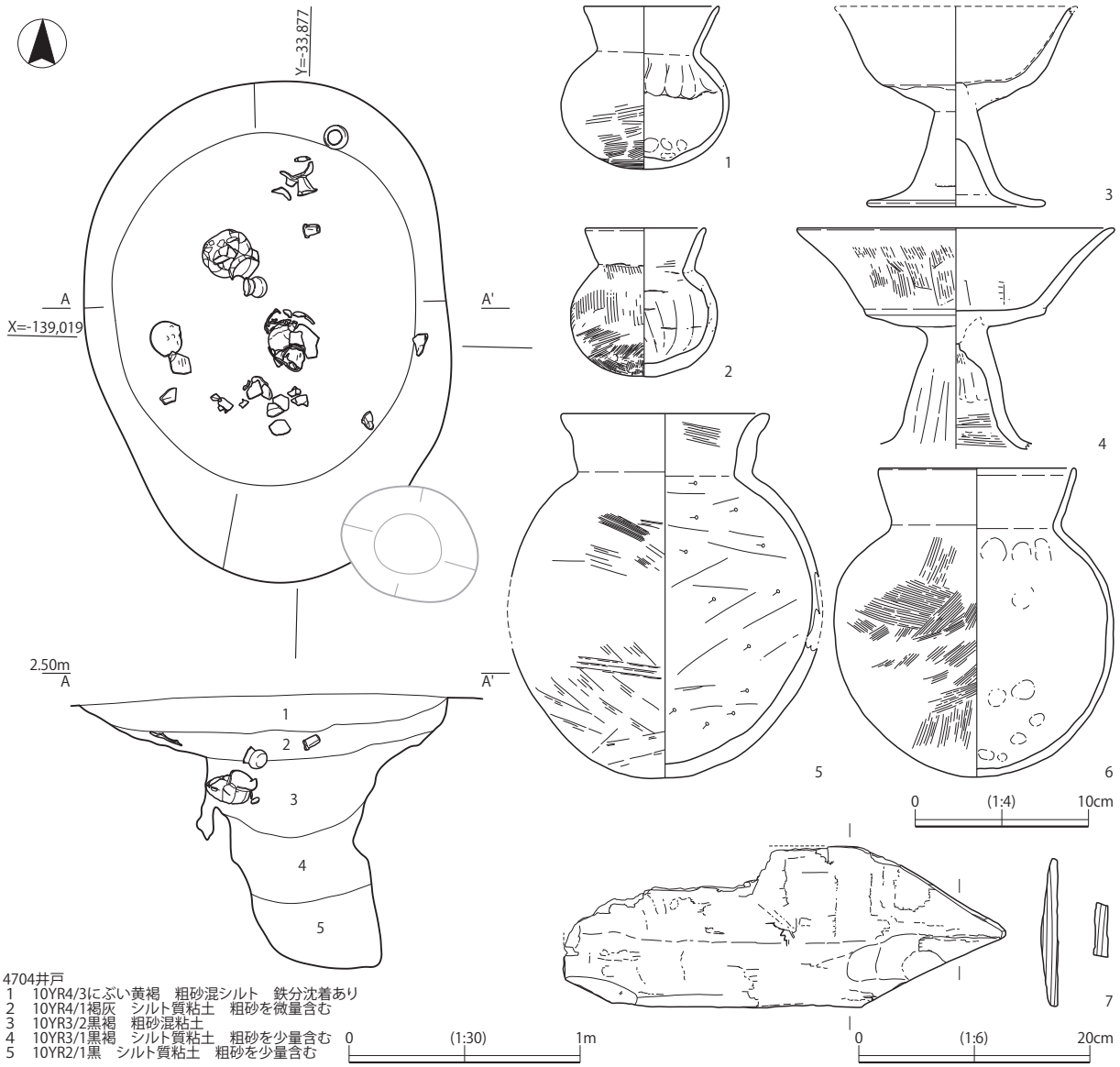


図 103　1 － 5 区　4704 井戸平・断面　出土遺物

4704 井戸（図 92・103、図版 58・75）

竪穴建物 12 の西側で検出された。規模は、長軸 2.16 m、短軸 1.5 m、深さ 1.2 mである。埋土は、中層から下層まで湿性堆積物のシルト質粘土と崩落土の砂層の互層、上層は土壌の粗砂混シルトである。上層から中層にかけて図 103 － 1 ～ 7 の遺物が出土した。1 ・ 2 は小型丸底壺である。3 ・ 4 は土師器有段高坏である。5 は土師器壺である。6 は土師器甕で、直口気味の口縁部である。外面に煤が付着。7 は矢板状の木製品である。全体に腐食が顕著で、先端はケズリを加えて尖らせる。

4843 溝他出土遺物（図 104、図版 57・71）

上記に掲げた遺構以外から出土した遺物は図 104 － 1 ～ 18 を図示した。

1 ・ 2 ・ 5 は 4843 溝から出土した。1 は韓式系土器の体部片である。外面には縄蓆文が認められる。2 は須恵器壺である。口縁部はわずかに欠損する。口縁直下にやや丸みを帯びた突帯がめぐる。5 は土師器甕で、外面はハケ調整、内面はナデが施される。3 は須恵器高坏で、4861 溝から出土した。TK216 ～ 208 型式。4 は須恵器坏身で 5319 土坑から出土した。

6 ～ 10 は 4694 溝から出土した。6 ・ 9 は土師器小型丸底壺である。6 は口縁部外面にヘラミガキ

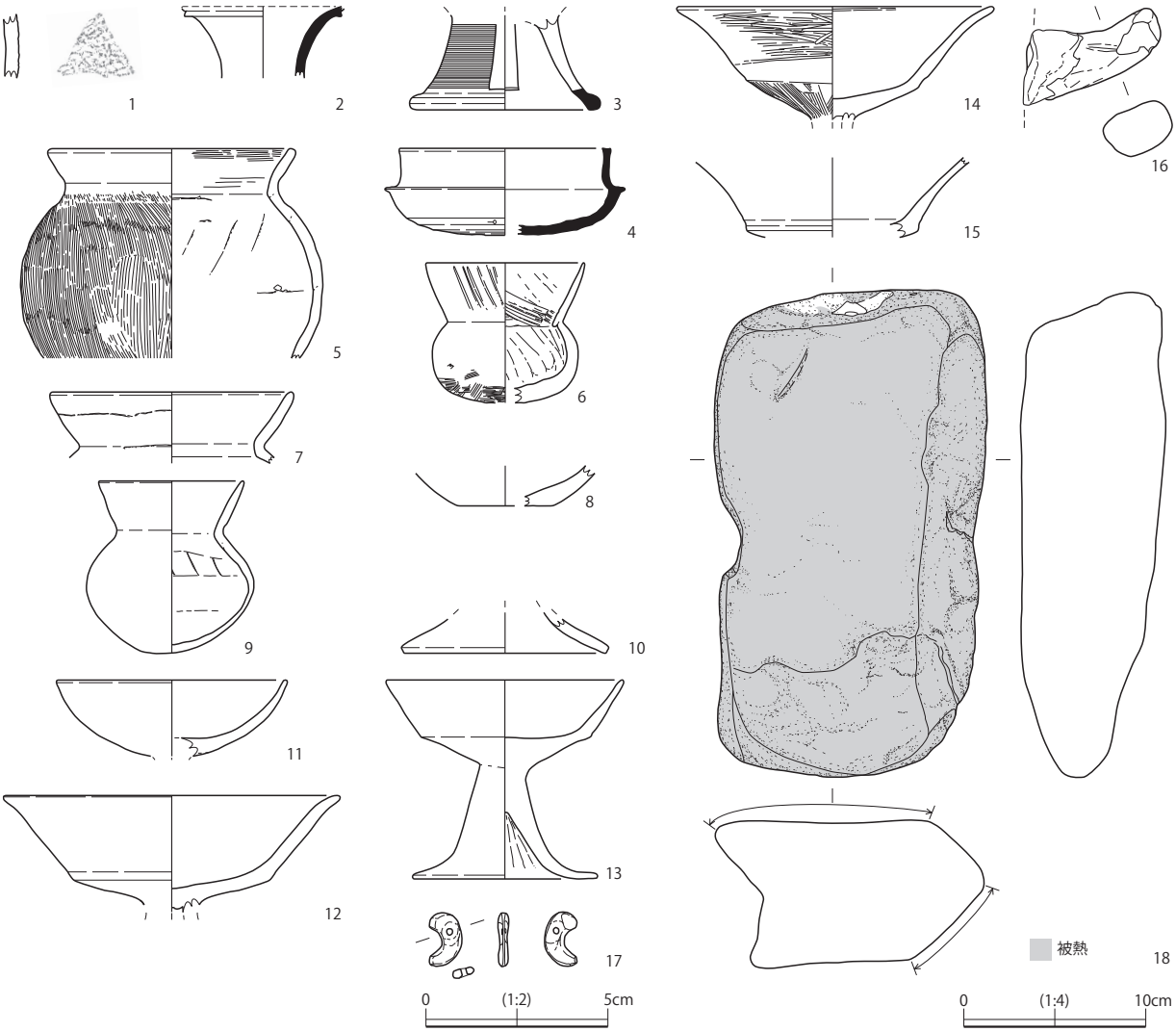


図 104　1－5区　4843 溝他出土遺物

が施される。7は土師器甕の口縁部である。8は土師器壺底部で、平底である。11は土師器椀形高坏で、4891 土坑から出土した。12・13は土師器有段高坏で、12は 4706 土坑、13は 4708 土坑から出土した。14・18は 4638 土坑から出土した。14は有稜高坏の坏部である。外面は横方向のヘラミガキが施される。18は台石で、全体に被熱を受ける。15・16は 4634 土坑から出土した。15は土師器有段高坏である。16は把手で、ナデによって仕上げられる。17は小形の滑石製勾玉で、4705 土坑から出土した。貫通孔の周囲にも円形の凹みがあり、厚みを減じた後穿孔されている。古墳時代前期から古墳時代中期を中心とした遺物が出土しており、古墳時代前期の遺物は、1－3区の当該期の集落と動向が合うもので、1－5区南東・東側は集落の西限となるものだろう。

調査地北東側（図 105、図版 7）

3－1層を除去した段階で5－1・5－2b層が露出し、溝が複雑に切り合っていた範囲に当たる。1－5区微高地上の最も高い場所で、古墳時代集落の用排水及び微高地周辺に展開する水田の灌漑用水路として機能した溝が複数検出された。微高地の造成は、弥生時代中期中葉に遡るもので、その変遷過程を図 105 に示した。

微高地の形成と溝の変遷は、以下のようにまとめられる。1）弥生時代中期中葉以前の砂礫層が堆積することによって高まりが形成される。2）弥生時代中期中葉以降の水田開発に伴い、微高地の造成と

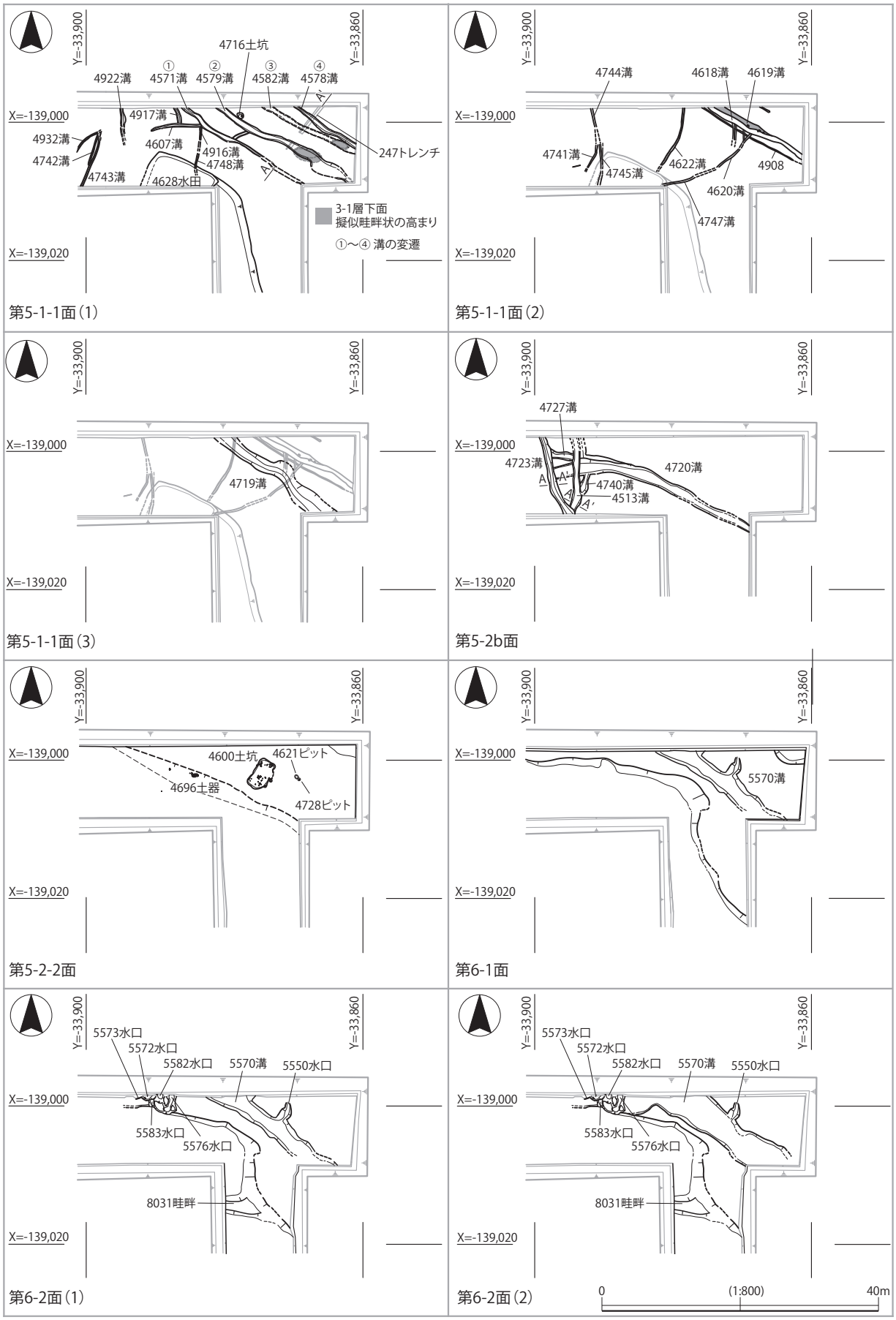
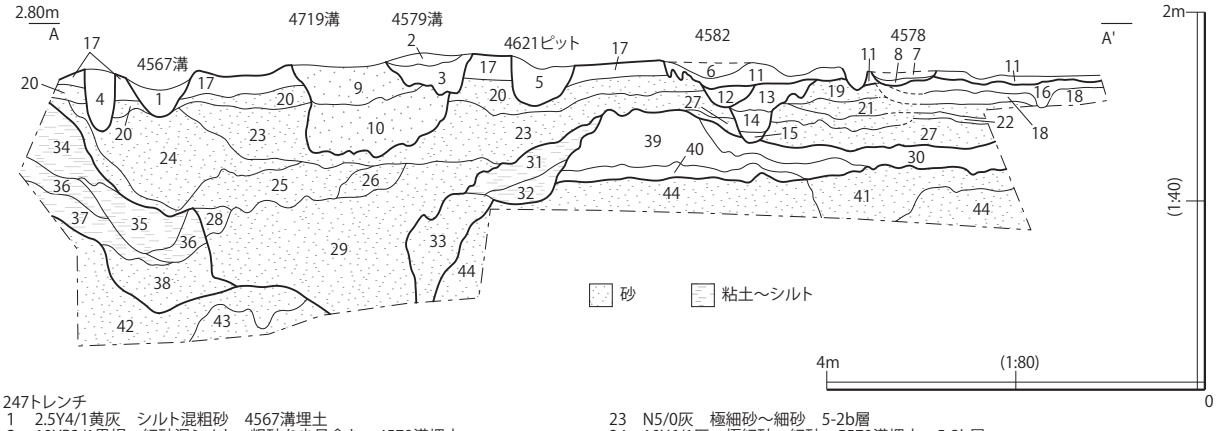


図 105　1－5区　北東側微高地上溝変遷

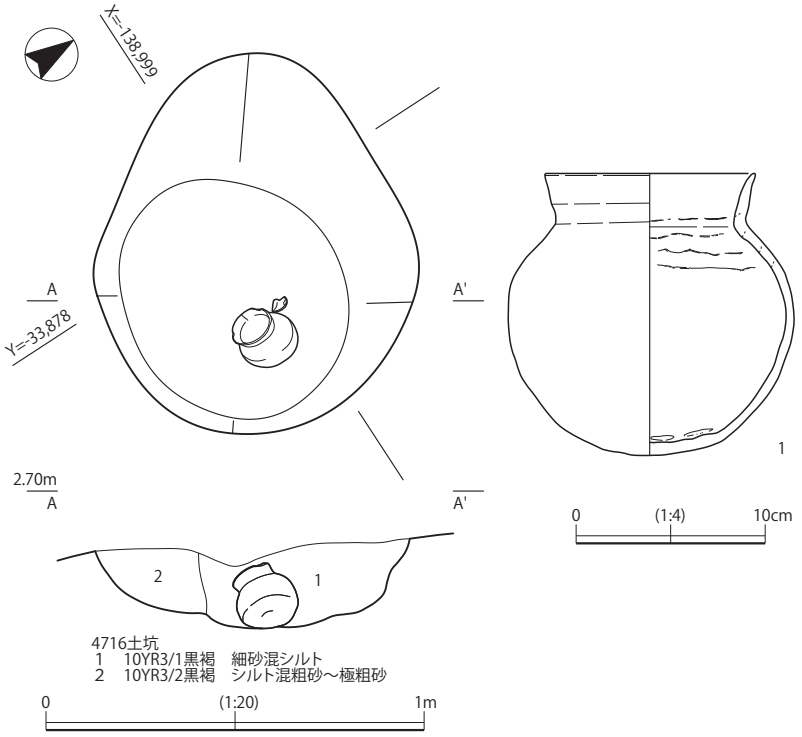


247トレンチ
1　2.5Y4/1黄灰　シルト混粗砂　4567溝埋土
2　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　粗砂を少量含む　4579溝埋土
3　10YR2/3黒褐　極細砂～細砂混シルト　4579溝埋土
4　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　4571溝埋土
5　10YR3/3暗褐　シルト混粗砂　4621ピット埋土
6　10YR3/2黒褐　シルト混粗砂　4582埋土
7　5Y8/1灰白　粗砂～極粗砂　4578溝埋土
8　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂　水成層　4578溝埋土
9　5G6/1緑灰　粗砂混シルト　4719溝埋土
10　N5/0灰　粗砂～極粗砂　水成層　4719溝埋土
11　10YR4/3にぶい黄褐　シルト混粗砂　5-1層
12　10YR3/3暗褐　シルト混細砂　4618溝埋土
13　10YR3/4暗褐　細砂混粘土～シルト　4619溝埋土
14　N5/0灰　粘土　湿性堆積物　4619溝埋土
15　N6/0灰　シルト混中砂～粗砂　加工時形成層　4619溝埋土
16　10YR5/2灰黄褐　極細砂質シルト　粗砂を多量含む　盛土の可能性あり
17　10YR6/3にぶい黄橙　シルト混極細砂～細砂　弱い土壌化
18　5G6/1緑灰　細砂　5-2-2層に対比できるか
19　10YR6/2灰黄褐　粗砂　弱い土壌化　5-2ｂ層
20　10YR5/2灰黄褐　シルト混細砂～中砂　5-2b層
21　N5/0灰　極細砂～細砂　5-2b層
22　N5/0灰　粗砂～極粗砂　5-2ｂ層
23　N5/0灰　極細砂～細砂　5-2b層
24　10Y6/1灰　極細砂～細砂　5570溝埋土　5-2b層
25　7.5Y7/2灰白　粗砂～極粗砂　5570溝埋土　5-2b層
26　7.5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　5570溝埋土　5-2b層
27　2.5GY6/1オリーブ灰　極細砂～細砂　極粗砂を多量含む　5-2b層
28　10Y5/1灰　シルト混極細砂　5570溝埋土　5-2b層
29　10Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　5570溝埋土　5-2b層
30　2.5GY5/1オリーブ灰　極細砂質シルト　6-1層
31　2.5Y3/1黒褐　極細砂混粘質シルト　5570溝埋土　6-1b層
32　2.5Y3/2黒褐　シルト質粘土　5570溝埋土　6-1b層
33　10Y4/1灰　極細砂～細砂　5570溝埋土　6-1b層
34　10Y6/1灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　5570溝埋土　6-1b層
35　10Y5/1灰　極細砂混粘土　5570溝埋土　6-1b層
36　7.5Y5/1灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　5570溝埋土　6-2b層に対比可能か
37　N5/0灰　極細砂混シルト　5570溝埋土　6-2b層
38　N4/0灰　極細砂　5570溝埋土　6-2b層
39　10Y6/1灰　粗砂～極粗砂　畦畔
40　10Y3/1オリーブ黒　細砂　6-3層
41　10Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂～中砂　6-4b層
42　10Y6/1灰　粗砂～極粗砂　6-4b層
43　N4/0灰　極細砂～細砂　6-4b層
44　10Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　6-4b層

図 106　1－5区　247 トレンチ断面

溝の掘削が行われる（第６－２面）。３）溝の埋没に伴って、弥生時代中期後葉に掘り直しが行われる（第６－１面）。４）弥生時代後期以降、溝の埋没に伴い、一部は集落として利用される（第５－２－２面）。５）古墳時代以降、再び溝が掘削され、以後埋没と再掘削が繰り返される（第５－１面～第５－２ｂ面）。

古墳時代については、切り合い関係の検討・出土遺物から復元を試みているが、大きく分けて、微高地の最も高所で検出された 4571・4579 溝が機能する段階、北東側の微高地縁辺で 4582・4578・4618・4619 溝が機能する段階に分かれると考えられる。4620 溝と切り合い関係がある溝を考慮して変遷を考えたが、4618・4719 溝は古い段階に機能した可能性がある。



4716土坑
1　10YR3/1黒褐　細砂混シルト
2　10YR3/2黒褐　シルト混粗砂～極粗砂

図 107　1－5区　4716 土坑平・断面　出土遺物

4619 溝（図105・110、図版71）

規模は、幅 0.8m、深さ 0.6m である。須恵器甕体部と図 110－1 の土師器甕が出土した。1 の外面はハケ調整、内面はナデ調整である。頸部は外反気味で端部は丸くおさめられる。

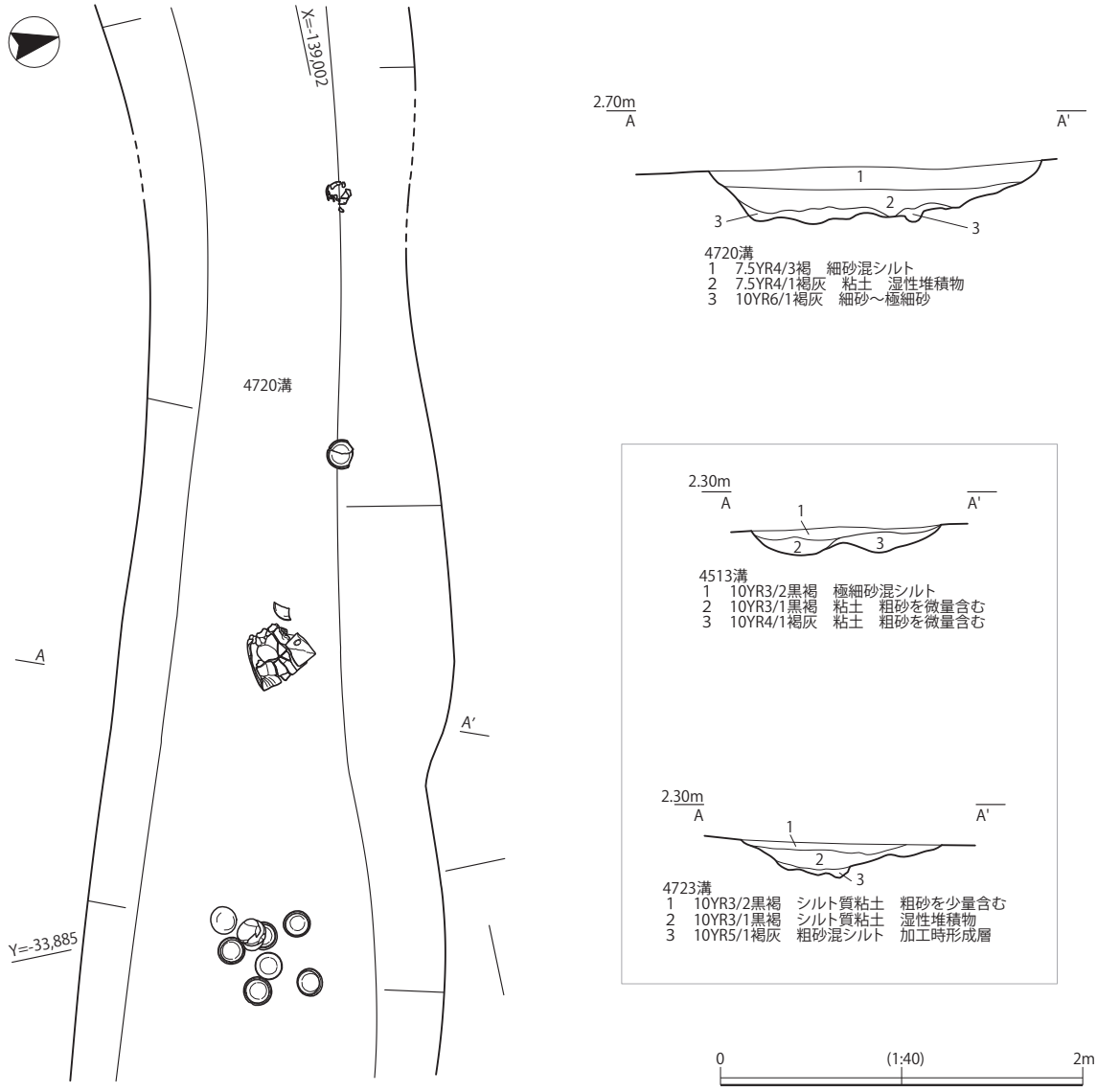


図 108　1－5区　4720 溝平面・4720・4513・4723 溝断面

4716 土坑（図 84・105・107、図版 59）

調査地北東の微高地上で検出された。当初、4579 溝に切られると考えたが、断面の検討から、4579 溝より新しい土坑である。平面形は不整形、規模は長さ 1.0 m、幅 0.85 m、深さ 0.2 mである。底面直上から図 107 － 1 の土師器甕の完形品が出土した。体部外面は磨滅、内面はナデ調整される。

4720 溝（図 85・105・108・109・111、図版 7 ・58）

4590 微高地北東部で検出された。規模は、幅 1.8 m、深さ 0.3 mである。埋土は、下層が細砂～極細砂で加工時形成層、中層が湿性堆積物の粘土、上層が土壌由来の極細砂混シルトである。溝内から、須恵器坏蓋･坏身､土師器甑などが出土した。須恵器坏蓋･坏身は､13 点出土しており､セット関係があったと考えられる。坏身は口縁部を上向きにし、一部は蓋と合わさった状態で出土しており、溝内に意図的に置かれたものと考えられる。

4720 溝は、西側で 4727 溝と切り合い関係があり、4720 溝の方が新しい。4723 溝は 4720 溝の廃絶以降に掘り直しが行われたため、4720・4727 溝より新しい。4720・4727 溝は、4723 溝以西では検出されていないことから、4723 溝に接続した段階があったことが想定される。4723 溝の東側で

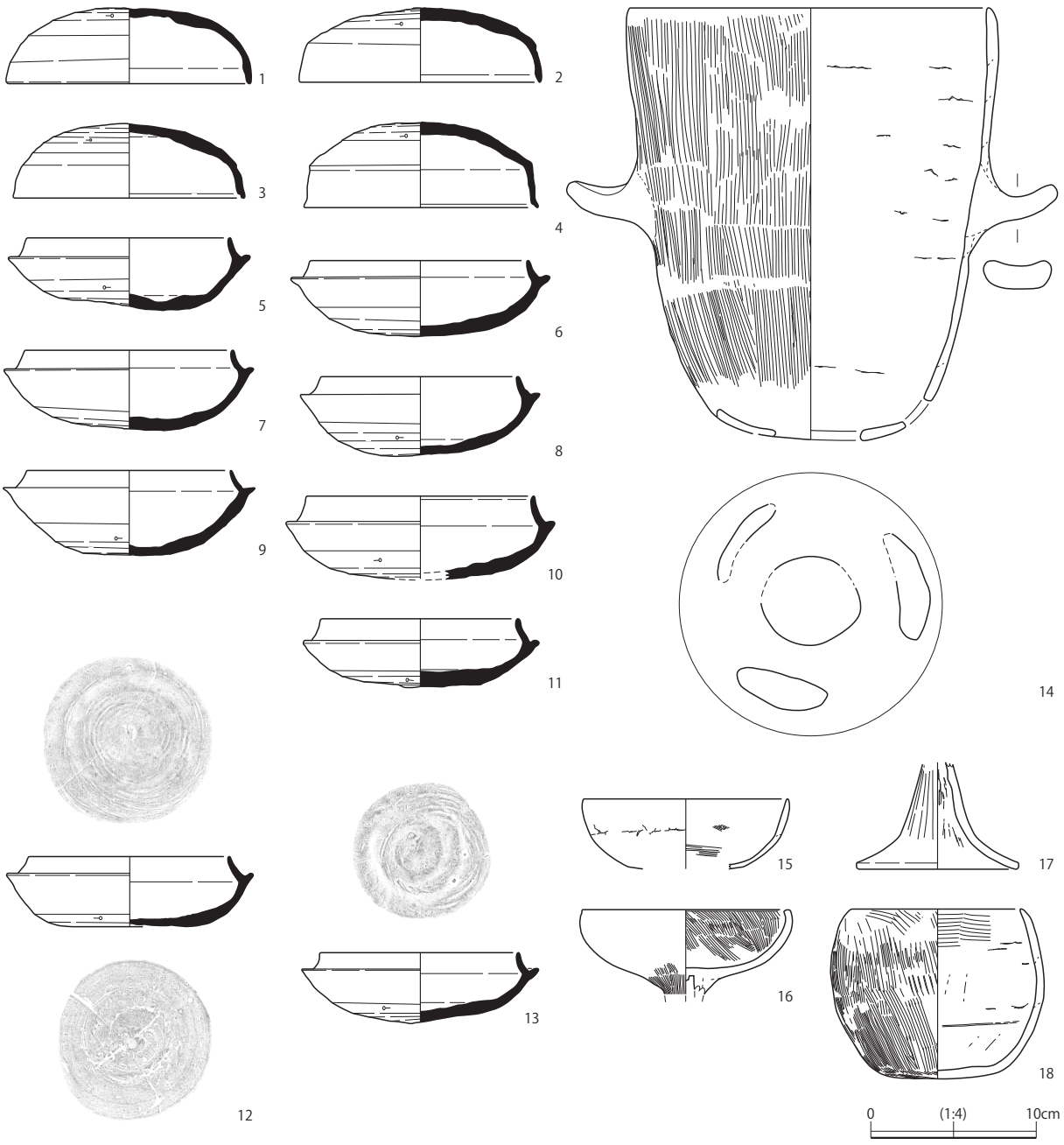


図 109　1 － 5 区　4720 溝出土遺物

は、4720 溝肩部に形成された古土壌を除去して、4740 溝が検出されており、4723 溝より古い段階に 4740 溝は機能したと考えられる。なお、4720 溝より北側に想定される古墳時代後期以降の基幹水路と接続して機能したと考えられる。

4720 溝から出土した土器は、図 109 － 1 ～ 18 を図示した。1 ～ 4 は須恵器坏蓋である。5 ～ 13 は須恵器坏身である。12 は外底面に線状のヘラ記号、内底面に同心円文当具痕が認められる。14 は土師器甑である。底面の蒸気孔は中央の円形の蒸気孔を中心として、半月ないし不整な楕円形状の蒸気孔が 3 箇所穿たれる。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。15 ～ 17 は土師器高坏である。18 は土師器鉢である。口縁部は内傾しており、底部は平底である。外面はハケ調整で、口縁端部は横・斜め方向のハケメが残る。内面は口縁部が横方向のハケ調整、体部が板ナデの後ナデ調整、底面がナデ調整される。MT15 ～ TK10 型式の資料が出土しており、TK10 型式新段階を中心とする。

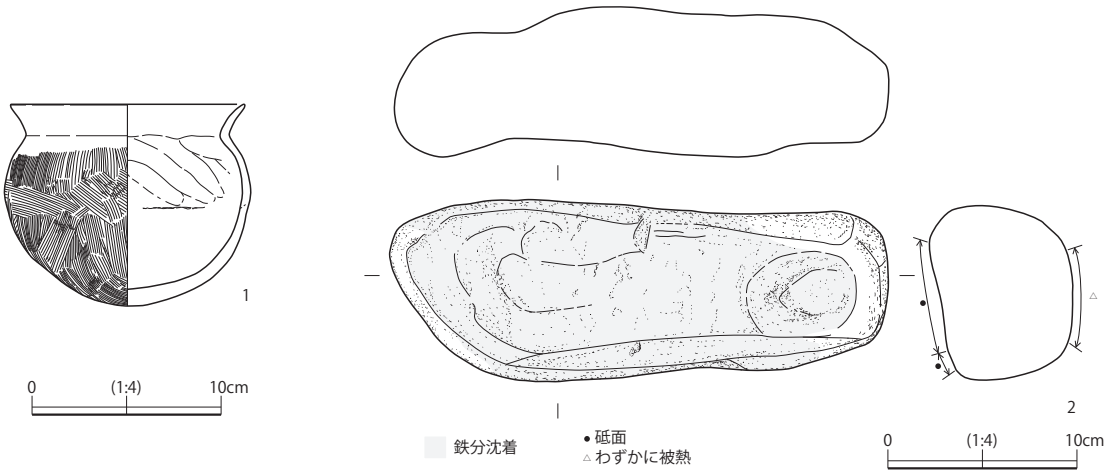


図 110　1－5区　4619 溝・4－4層出土遺物

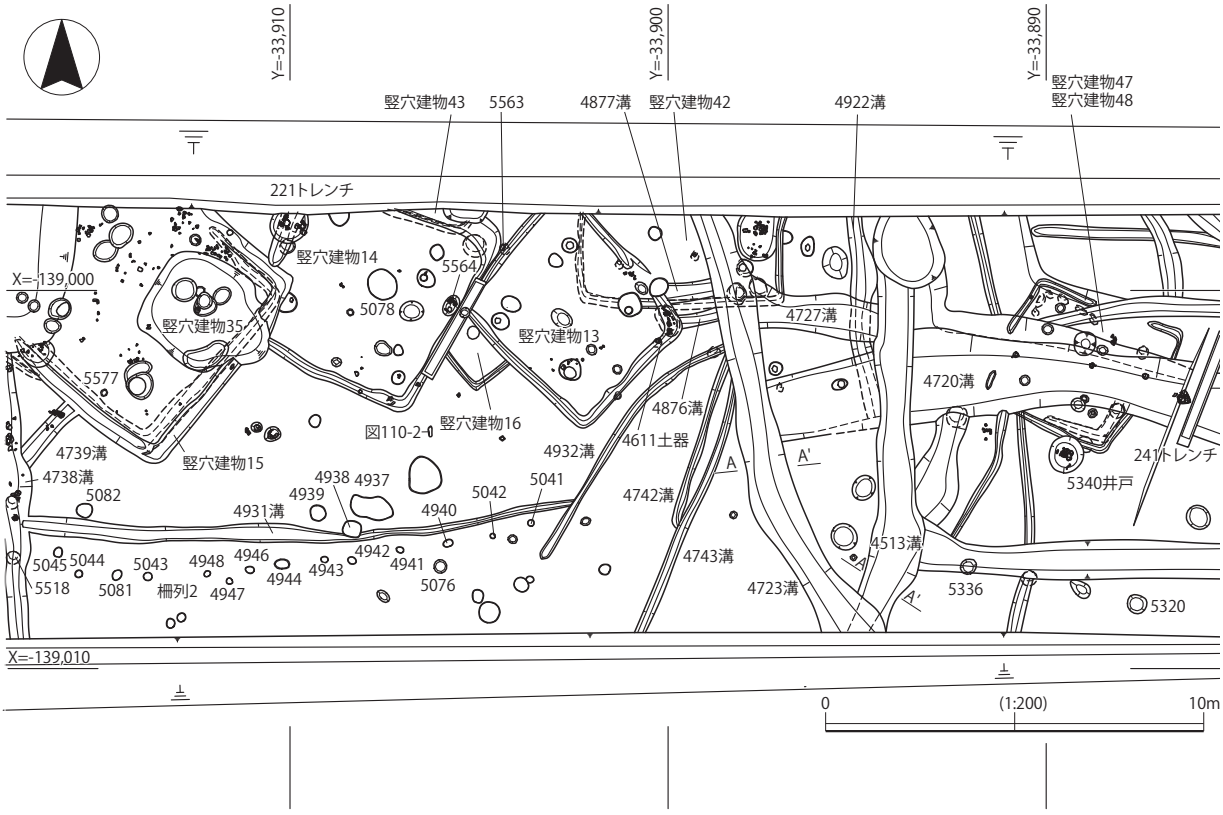


図 111　1－5区　第5－2b面北側（1）平面

調査地北側（1）（図 111）

弥生時代中期後葉から土砂の堆積が少なく、地層の堆積が進行しなかった範囲に当たる。竪穴建物 13 北側では弥生時代から古墳時代の地層が収斂している状況が確認された。4723 溝の西側に 4931 溝と柵列 2 が検出されており、それより以北で竪穴建物が複数検出された。4931 溝と柵列 2 より以南は、竪穴建物が検出されておらず、4931 溝と柵列 2 は南側に想定される水田と集落の境界部に設置されたものである。また、4513 溝の東西で、竪穴建物の密集度が明らかに異なっており、4513 溝を含めた南北の溝が 4590 微高地と竪穴建物が検出された範囲の区画となっていた可能性が高いと考えられる。なお、竪穴建物の基底面直下に形成される弥生時代後期の 5－2－1 層は、竪穴建物の床面・加工時形成層と区別が付きにくく、一部掘り過ぎた部分がある。

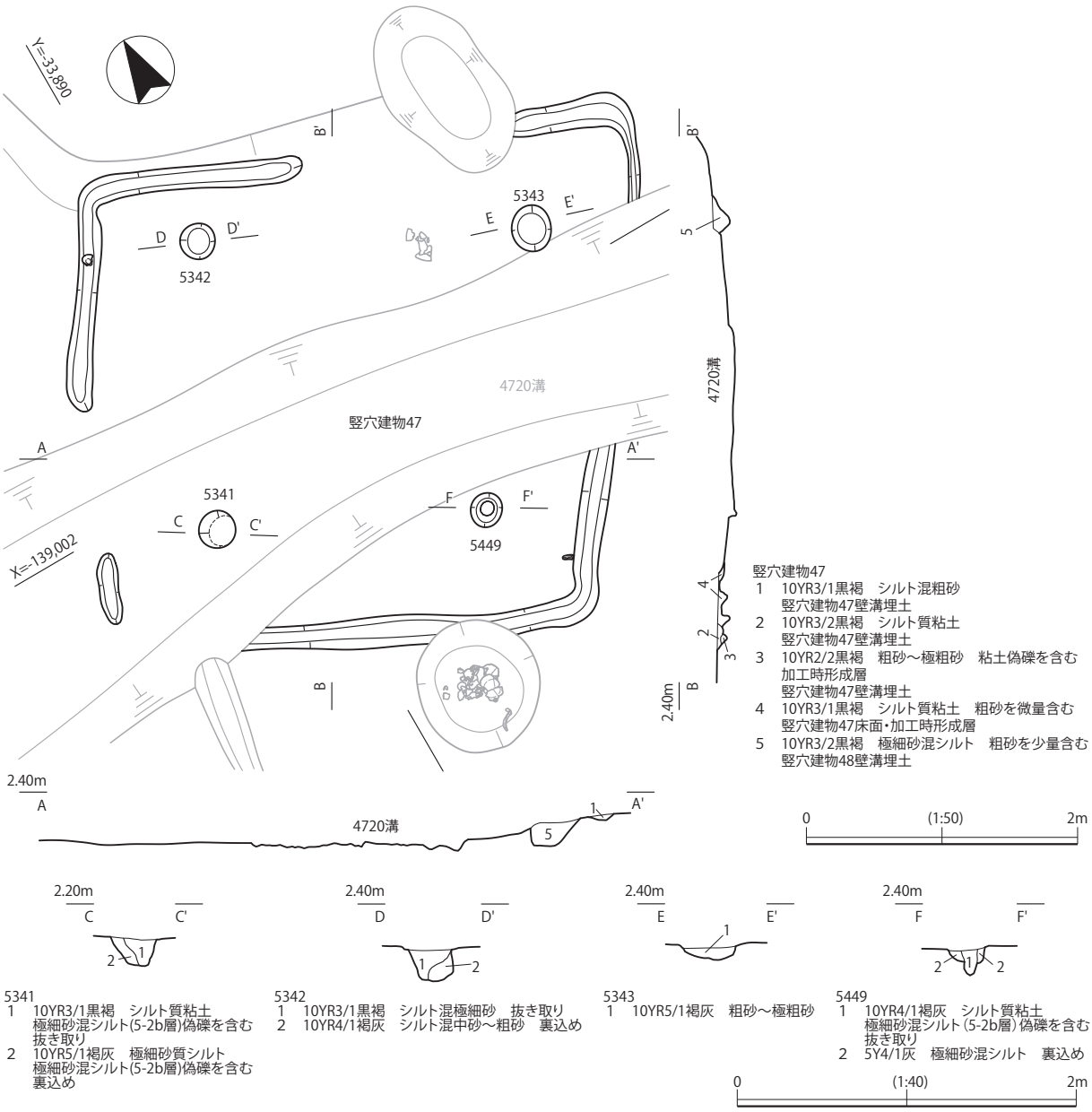


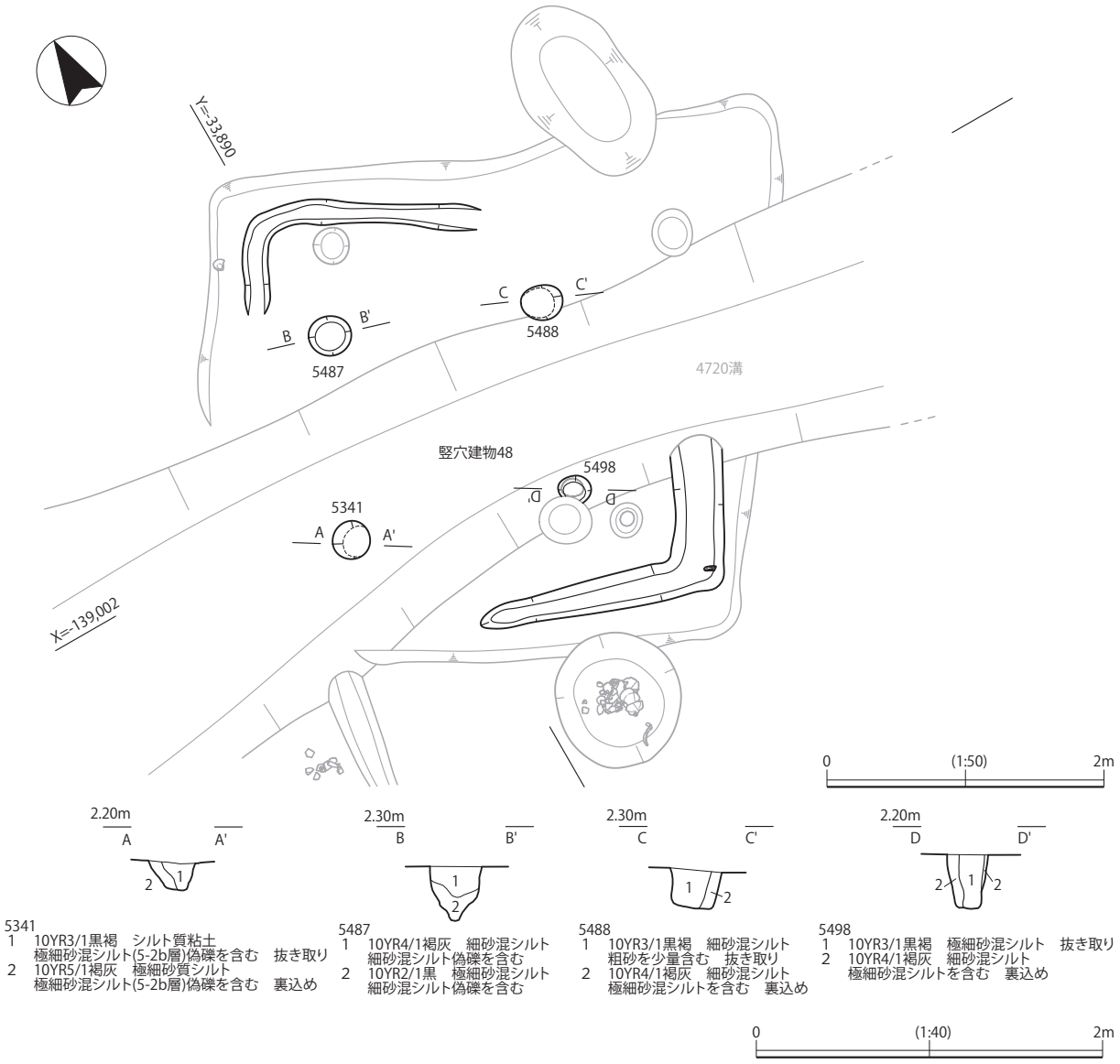
図 112　1－5区　竪穴建物 47 平・断面

竪穴建物 47・48（図 111 ～ 114、図版 7）

竪穴建物 13・42 の東側で検出されており、4720 溝に切られている。建て替えがあり、竪穴建物 48 を拡張したものが、竪穴建物 47 である。

竪穴建物 47 の規模は、北東辺 4.0 m、南東辺 3.6 mである。床面ないし加工時形成層と考えられる地層から土師器細片が出土した。時期の詳細は不明である。

竪穴建物 48 の規模は、復元値で、北東辺 3.5 m、南東辺 3.1 mである。壁溝南隅で板状の土製品が出土した。U 字形板状土製品の可能性を検討したが、遺存状況は悪く詳細は不明である。ただし、粗い胎土が用いられていることや、成形が粗雑なことから、U字形板状土製品ではなく、カマドや壁材などの破片と考えられる。主柱穴は、柱がすべて抜き取られており、他の竪穴建物と比較して規模が小さいものである。 2 棟の竪穴建物は、出土遺物が乏しく、時期の詳細は不明であるが、4720 溝・5340 井戸に切られており、古墳時代の中期中葉以前に比定できると考えられる。



5341
1 10YR3/1黒褐 シルト質粘土
極細砂混シルト(5-2b層)偽礫を含む 抜き取り
2 10YR5/1褐灰 極細砂質シルト
極細砂混シルト(5-2b層)偽礫を含む 裏込め

5487
1 10YR4/1褐灰 細砂混シルト
細砂混シルト偽礫を含む
2 10YR2/1黒 極細砂混シルト
細砂混シルト偽礫を含む

5488
1 10YR3/1黒褐 細砂混シルト
粗砂を少量含む 抜き取り
2 10YR4/1褐灰 細砂混シルト
極細砂混シルトを含む 裏込め

5498
1 10YR3/1黒褐 極細砂混シルト 抜き取り
2 10YR4/1褐灰 細砂混シルト
極細砂混シルトを含む 裏込め

図 113　1－5区　竪穴建物 48 平・断面

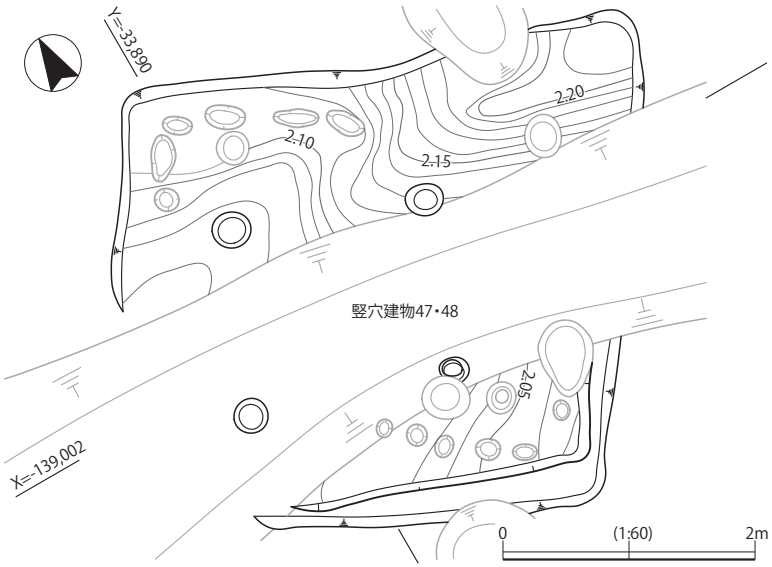


図 114　1－5区　竪穴建物 47・48 加工面平面

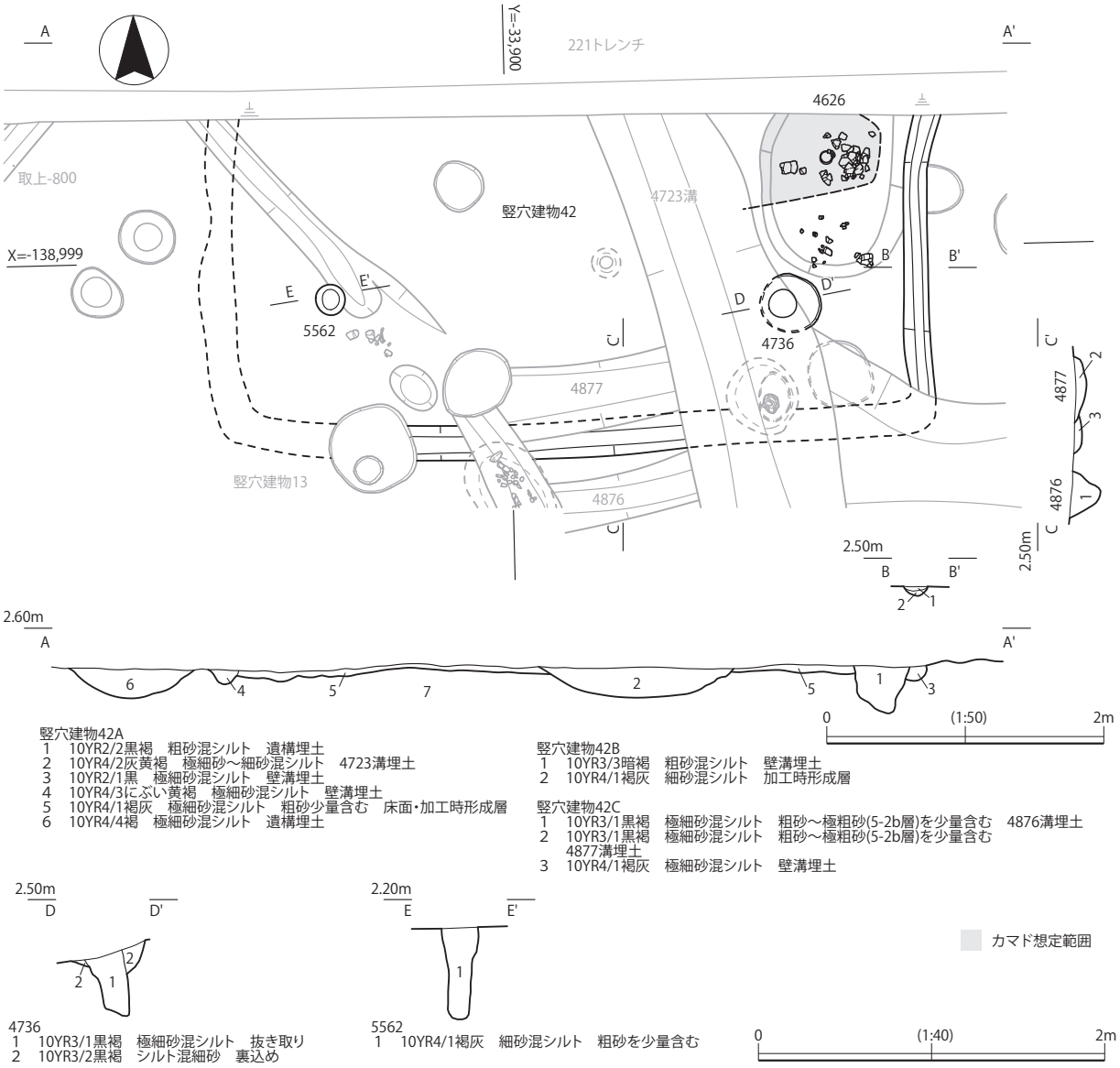


図 115　1－5区　竪穴建物 42 平・断面

竪穴建物 42（図 111・115・116、図版８・57）

竪穴建物 13 の北東で検出された。竪穴建物 13 の調査終了時に、周辺に形成された土壌層を除去した段階で認識された。床面は、土壌化の影響により平面的に確認することができなかった。

竪穴建物 42 の規模は、221 トレンチの断面から一辺 5.2 mに復元できる。床面・加工時形成層が断面では確認できるが、平面的には土壌化の影響により検出できなかった。主柱穴は、２基検出されており、柱はいずれも抜き取られたと考えられる。4736 柱穴は遺存状況が良く、深さは 0.5 mを測る。

竪穴建物の東側で検出した 4626 土坑は、竪穴建物 42 より先に調査を終えたものであるが、竪穴建物 42 が検出されたことにより再検討を行い、カマドであった可能性があると判断された。調査時、土器周辺部の土を削り込んだことにより、支脚と想定される土師器壺周辺に白色粘土塊の分布があったにもかかわらず、十分な検討ができなかった。ただし、カマド機能時形成層の、炭層は確認できていないため、未調査地となる北側を含めた、検証が必要である。

4626 土坑は、検出時の写真を元に、図 116 にカマドを推定復元した。規模は、長さ 0.95 m以上、幅 0.6 m以上の規模に復元される。なお、断面図の掘り込みはカマド構築時の加工面、ないし、竪穴建物の床

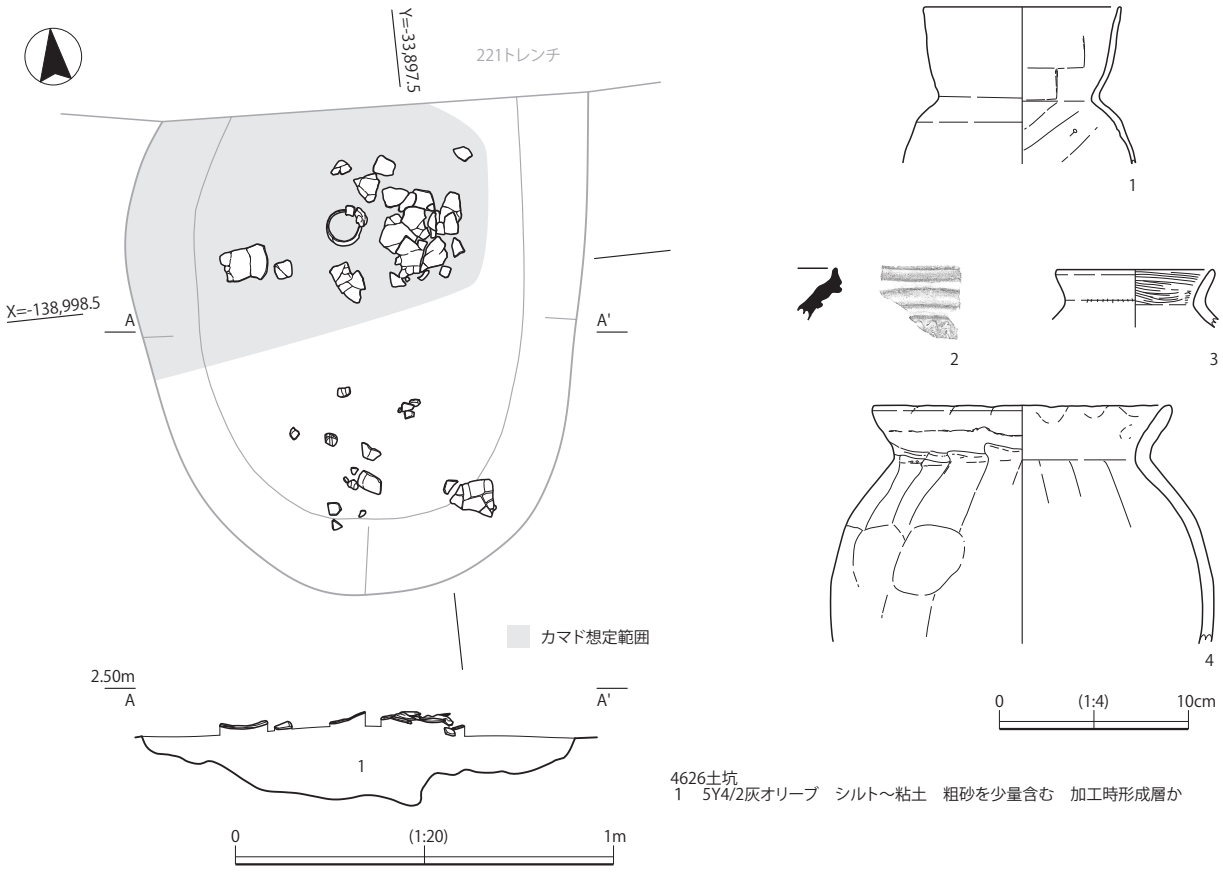


図 116　1－5区　竪穴建物 42　4626 土坑平・断面　出土遺物

面・加工時形成層と考えられるもので、深さ 0.2 mを測る。

図 116 －1・4は 4626 土坑から出土した。1の土師器壺は、口縁部を下向きにした状態で出土しており、支脚として用いられた可能性がある。体部外面は磨滅しているが、ナデ調整が施されたと考えられる。内面はヘラケズリが施される。4は土師器甕である。外面は板ナデ調整され、頸部には明瞭な痕跡が残る。また、体部中位には不明瞭なものの面が残っており、タタキによって成形されたものと考えられる。内面は磨滅しており、調整は不明である。また、これ以外に竪穴建物 42 から、図 116 －2・3の土器が出土した。2は須恵器甕の口縁部で、波状文が施される。TK208 型式以降と考えられる。3は土師器甕で小型のサイズである。細片を図化。出土した須恵器と竪穴建物 13 との切り合い関係から、竪穴建物の時期は古墳時代中期後葉以降を想定している。

竪穴建物 13（図 111・117 ～ 119、図版８・62・65）

4723 溝の西側で検出された。竪穴建物 42 より古く、竪穴建物 14 とは切り合い関係が不明瞭であるが、竪穴建物 14 の方が新しい。平面形は長方形を呈し、規模は北東辺で 5.0 m、南東辺で 4.3 mである。竪穴建物 14 と同様に、3－1層を除去した段階から、竪穴建物の平面形の一部が確認されていたが、土壌化が顕著な範囲であったために平面形を確認するのは容易ではなく、削り込みと精査を繰り返して検出作業を行った。そのため、竪穴建物検出時には、基底面となる5－2ｂ層が露出しており、その周囲には床面・加工時形成層が広がっている状況が確認された。主柱穴は、柱がすべて抜き取られており、柱根が残存するものは確認できなかった。

カマドは、北東辺の壁溝が連続しない部分で、土器がわずかに出土しており、北東辺の中央にあったことが想定される。カマドに由来する炭化物・粘土塊等は確認されなかった。

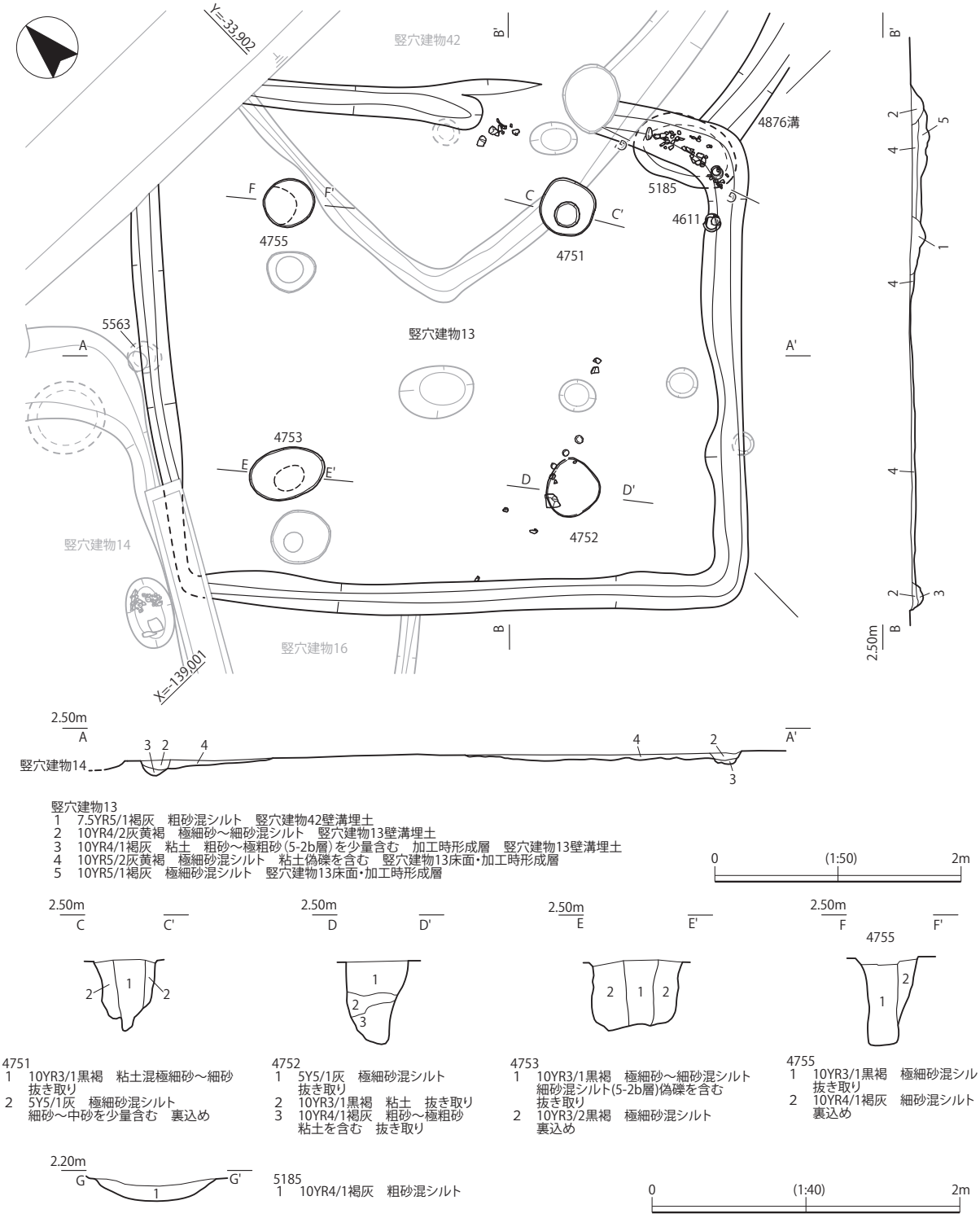


図 117　1－5区　竪穴建物 13 平・断面

竪穴建物 13 の北東隅の壁溝内の深くなる部分を 5185 土坑として調査した。壁溝との切り合い関係は無く、竪穴建物内の施設であったと考えられる。この 5185 土坑の北東側では、竪穴建物 13 の排水溝と考えられる 4876 溝が検出されており、5185 土坑と機能的に連携して、竪穴建物内の排水施設として機能したと考えている。4876 溝は、幅 0.36m、深さ 0.2m である。埋土は、極細砂混シルトで、竪穴建物 13 の壁溝埋土と同質である。また、竪穴建物 13 の検出作業を行っている際、竪穴建物 13 直上に堆積する古土壌から、図 119 － 7 の須恵器壺が出土した。4611 土器として取り上げを行った

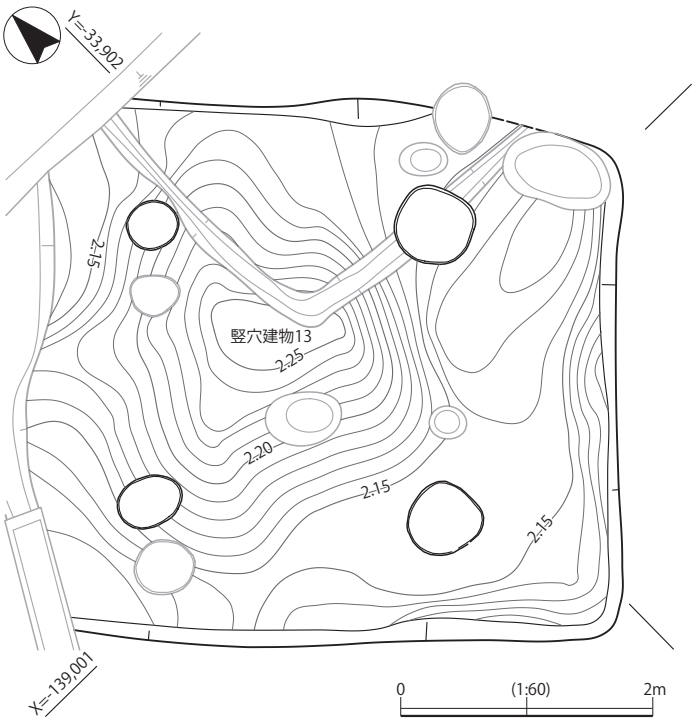


図 118　1－5区　竪穴建物 13 加工面平面

ものである。ピットに埋納された可能性を想定したが、断ち割り等の作業で確認することはできず、土器埋納遺構と確定するには至らなかった。後に、竪穴建物 13 が検出されたことで、竪穴建物 13 に関係する可能性があると判断した。竪穴建物 13 から出土した土器は、図 119 －1・2・4～7を図示した。1は土師器甕である。2は小型の甕で、外面はハケ調整､内面は横方向のナデが施される。4・5は須恵器坏身である。TK47 型式。6は須恵器壺口縁である。7は須恵器壺の完形品である。体部外面の中位は回転ヘラケズリ調整を行い、その上下は回転ナデが施される。5185 土坑からは、図 119 －3・8と製塩土器が出土した。3は製塩土器である。ナデ調整で内外面を仕上げられる。8は須恵器高坏脚部で､脚円形の透孔がある。TK23 ～ 47 型式に比定できると考えられる。

竪穴建物 13 は、出土した土器から古墳時代中期後葉に位置付けられる。東側で検出された 4720 溝より古い段階に機能したと考えられ、4876 溝の排水は 4723 溝に行われた可能性がある。

竪穴建物 16（図 111・120）

竪穴建物 13 の南西で、壁溝南隅と主柱穴が検出された。竪穴建物 13・14 に切られており、遺存状況は極めて不良である。床面は南隅で一部残存している状況が確認されたが、竪穴建物 16 の基底面は竪穴建物 13・14 の基底面より高くなっており、南隅以外は竪穴建物 13・14 の構築時に撹乱を受けたと考えられる。カマドは平・断面で検討を行ったが確認されなかった。周辺で検出した竪穴建物の中では、最も古い段階に構築されたものと判断される。主柱穴は、3基検出されており、柱はすべて抜き取られていた。遺物は、主柱穴の 4758 柱穴から土師器及び須恵器細片が出土した。須恵器は坏身で、図示しえないが、TK23 ～ 47 型式に比定される。

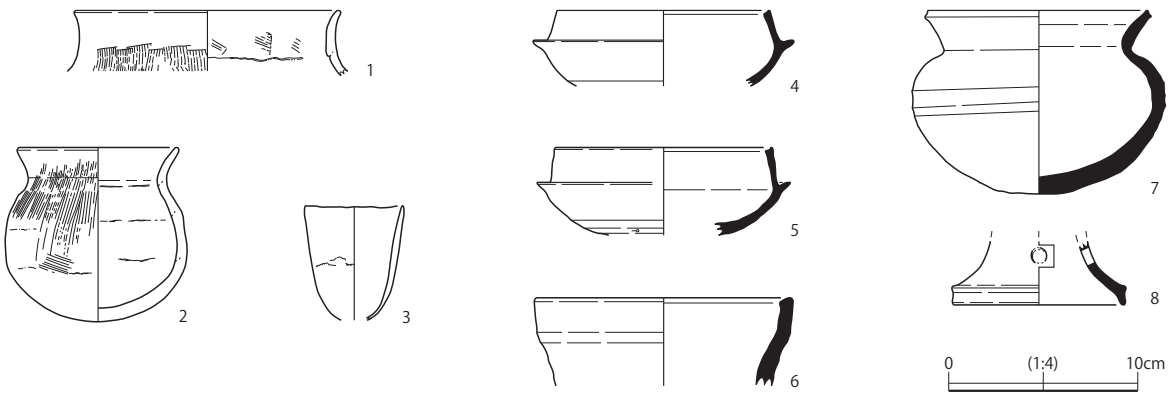


図 119　1－5区　竪穴建物 13 出土遺物

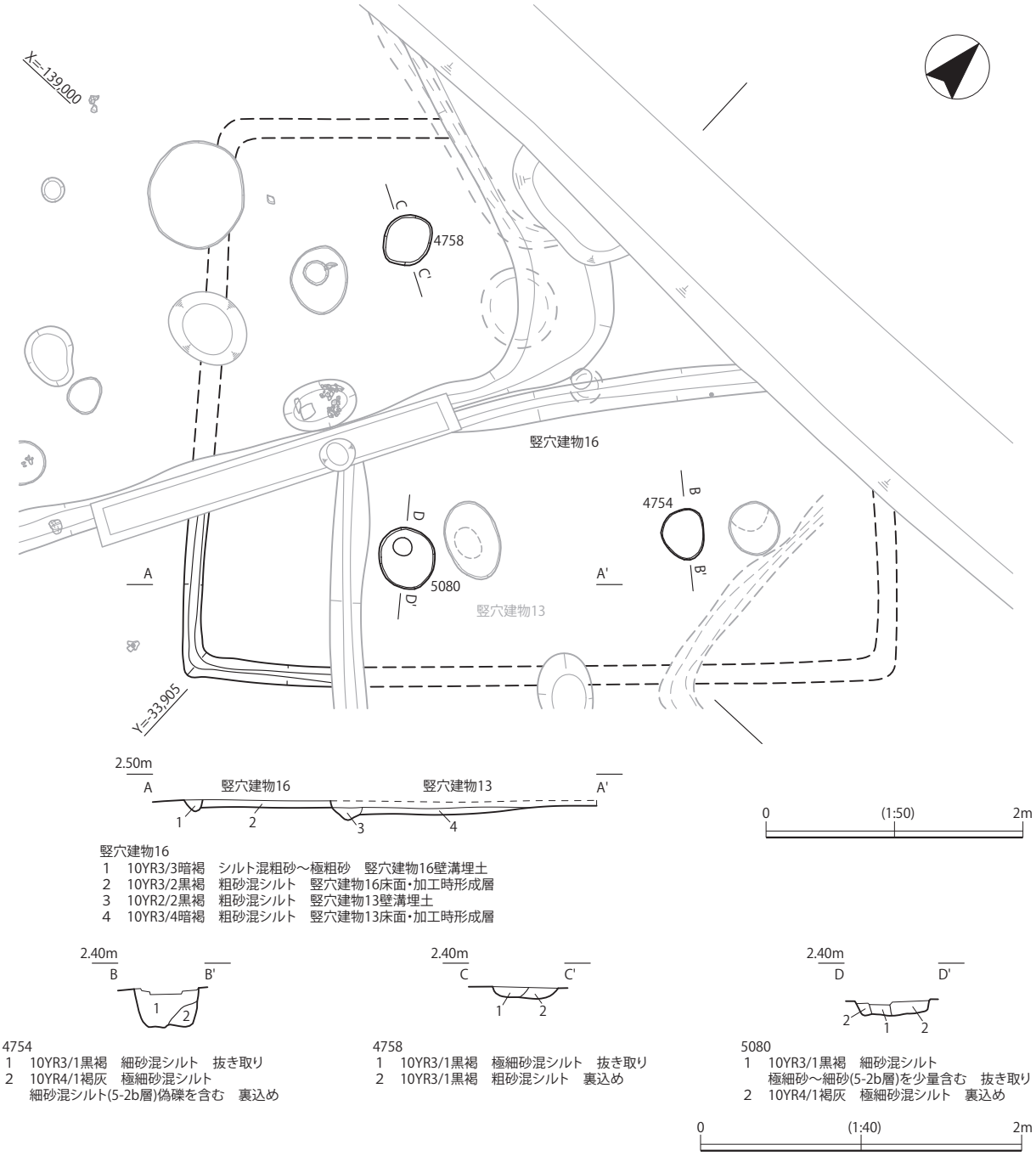


図 120　1－5区　竪穴建物 16 平・断面

竪穴建物 14（図 110・111・121 ～ 123、図版８・59・62・71）

竪穴建物 13・16 の西側で検出された。竪穴建物 15 との切り合い関係は土壌化の影響により不明で、出土遺物から竪穴建物 14 の方が新しいと考えられる。また、竪穴建物 13 とも切り合い関係があり、明瞭ではないが、竪穴建物 14 の方が新しく構築されたものと考えられる。平面形は方形を呈し、規模は南東辺 5.65 m、南西辺 5.0 m（復元値）である。主柱穴はすべて柱が抜き取られており、柱根が確認されたものはなかった。出土遺物は、壁溝内や床面直上から、須恵器や土師器が少量出土した。

カマドは、遺物の出土状況や壁溝の検出状況等から場所を特定することはできなかった。竪穴建物北西側でカマドであった可能性がある 4624 土坑が検出された。

竪穴建物を検出した時点で、竪穴建物 14 の中央で基盤層となる５－２ｂ層、その周囲に床面・加工

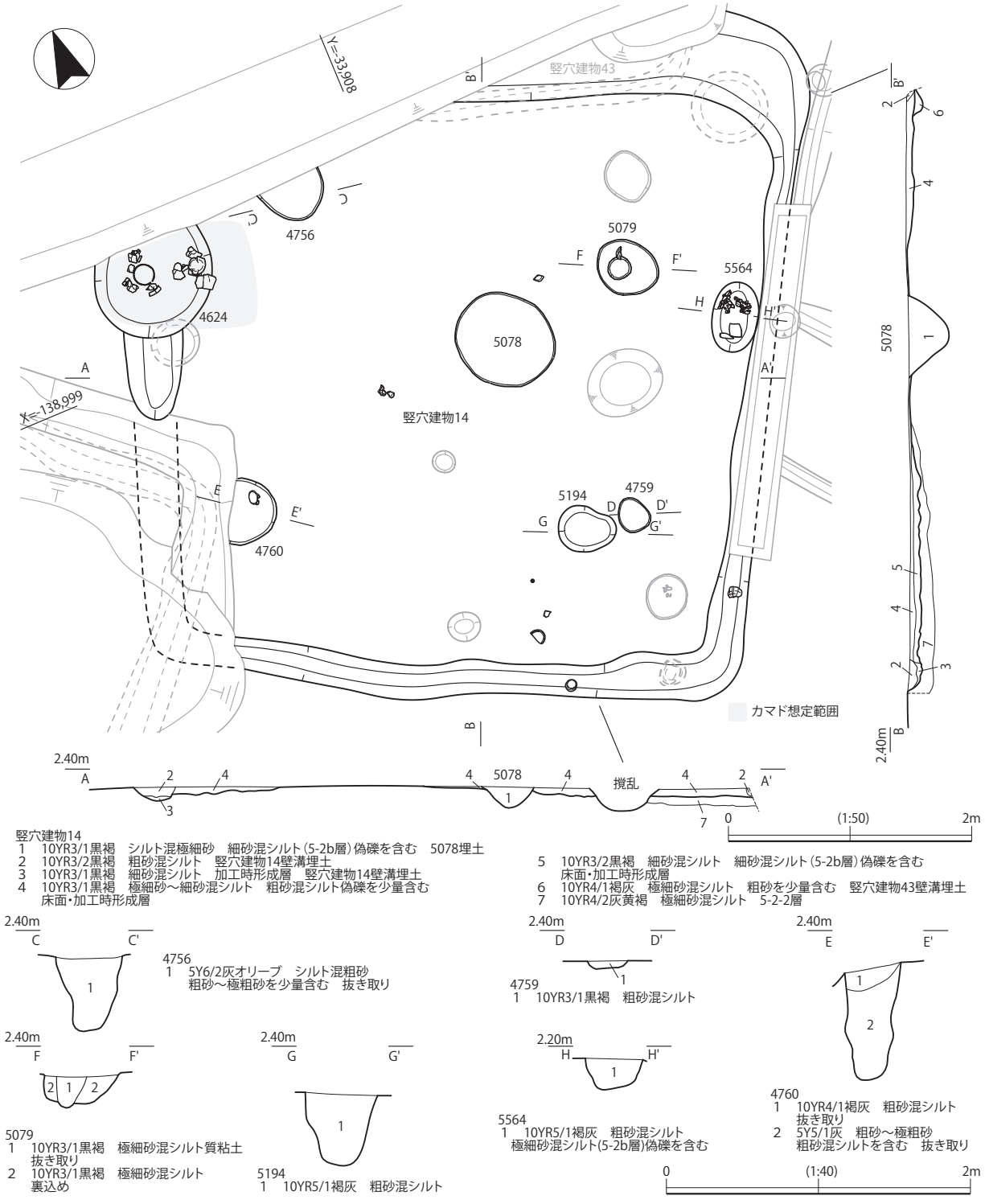


図 121　1－5区　竪穴建物 14 平・断面

時形成層が露出していた。

また、竪穴建物内の南東部では、5564 土坑が検出された。同位置に設定した地層観察用のアゼ内で検出されており、竪穴建物 14 と位置的な関係から、竪穴建物の付属施設の可能性がある。5564 土坑の平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸 0.58 m、短軸 0.38 m、深さ 0.2 mである。埋土は粗砂混シルトブロック土である。5564 土坑からは、須恵器甕の体部片と図 123 －4・6・7が出土した。4は須恵器坏身で、TK47 型式に位置付けられる。6・7は製塩土器である。6の内外面はナデで仕上げられ

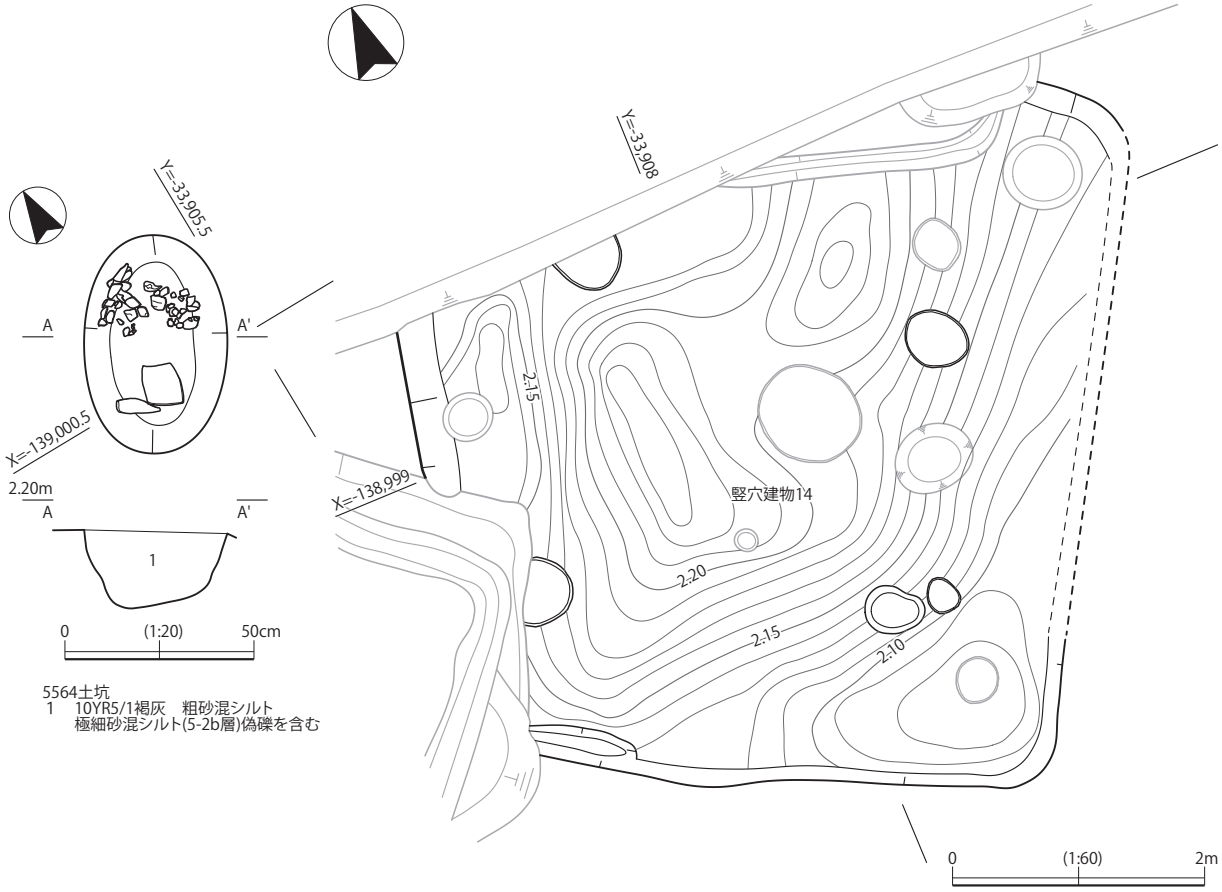


図 122　1－5区　5564 土坑平・断面、竪穴建物 14 加工面平面

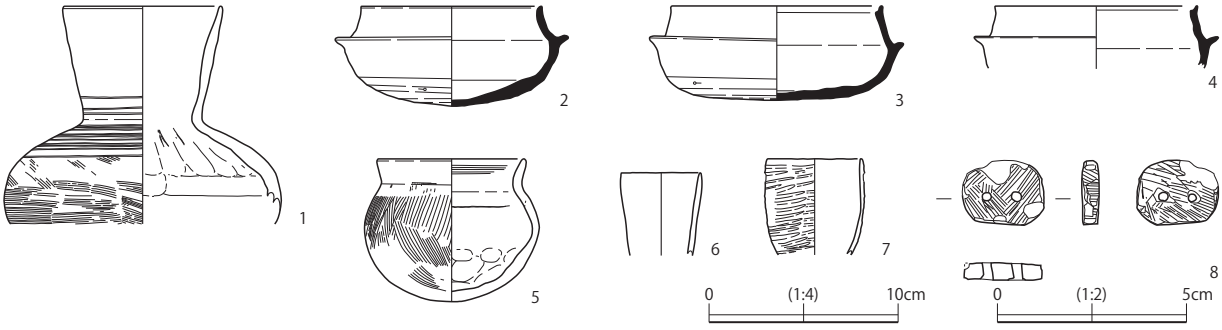


図 123　1－5区　竪穴建物 14 出土遺物

る。7の外面はタタキ、内面ナデ調整が施される。竪穴建物 14 から図 123－1～3・5・8が出土した。1は土師器直口壺で、頸部付近に横方向のヘラミガキが施される。内面はナデ調整、頸部にはシボリメが残る。2・3は須恵器坏身である。2は MT15～TK10 型式。3は TK47 型式。5は土師器甕である。外面はハケ調整、内面はナデ調整が施される。8は滑石製有孔円板である。

4624 土坑（図 121・124、図版８・57）

竪穴建物 14 の北西部で検出された。調査時には、土坑として掘削を行っており、4626 土坑と同様、遺物周辺を掘削したため、平面的な検討を十分に行えなかった。周辺で竪穴建物が検出されたため、改めて検討を行ったところ、1）検出時の写真記録から平面形「U」字形の落ち込みが確認できること、2）土師器甕を倒立させて口縁部が水平となるような状態で出土したこと、3）検出時に炭化物が周辺で認められたことからカマドとなる可能性が高いと考えられる。竪穴建物 14 北西辺の北寄りで検出されて

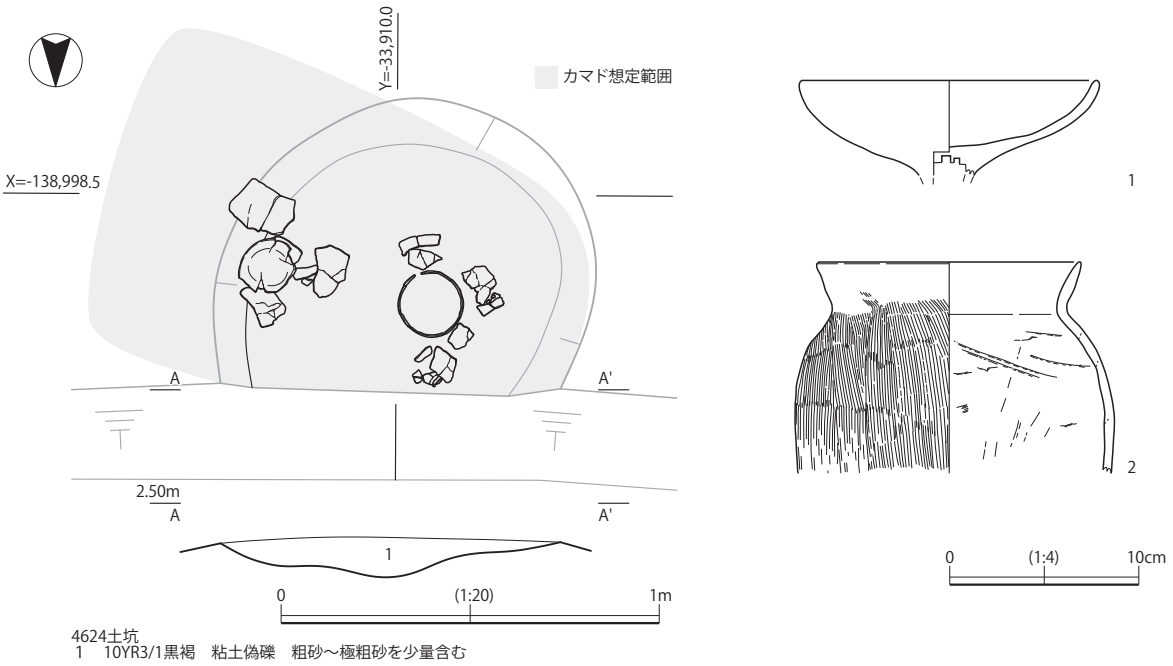


図 124　1－5区　4624 土坑平・断面　出土遺物

おり、竪穴建物 14 の主柱穴の配置状況から、竪穴建物 14 に伴う可能性は低いと考えられる。検出時の写真から、カマドとしては、長さ 1.3 m、幅 0.9 mに復元される。埋土とした地層は、床面・加工時形成層であった可能性が高い。

遺物は、図 124 －1・2 の土師器が出土した。1 は椀形高坏で、内外面は磨滅が顕著である。2 は甕で、支脚として用いられた可能性があるものである。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデの後、板ナデ調整が施される。なお、図 110 －2 は竪穴建物 14 の南側で出土した砥石である。

竪穴建物 43（図 111・125）

竪穴建物 14 の北側で検出された。竪穴建物 14 より古いと考えられる。壁溝のみが検出された。221 トレンチ断面においても、壁溝の延長部が検出されたが、東側は撹乱されており、全体の形状を復元するには至らなかった。カマド・主柱穴等については不明である。

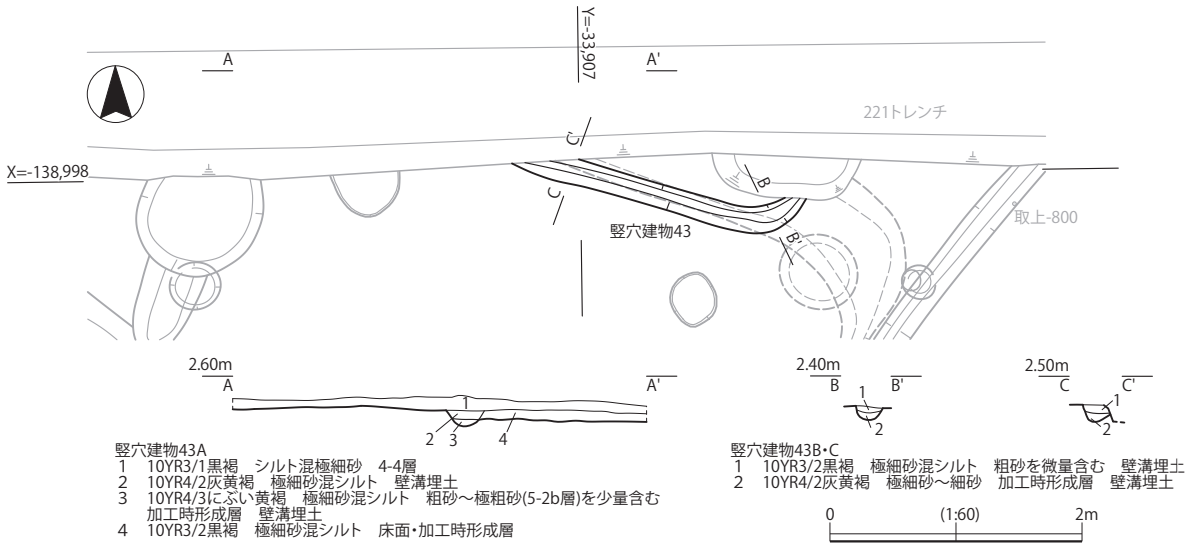
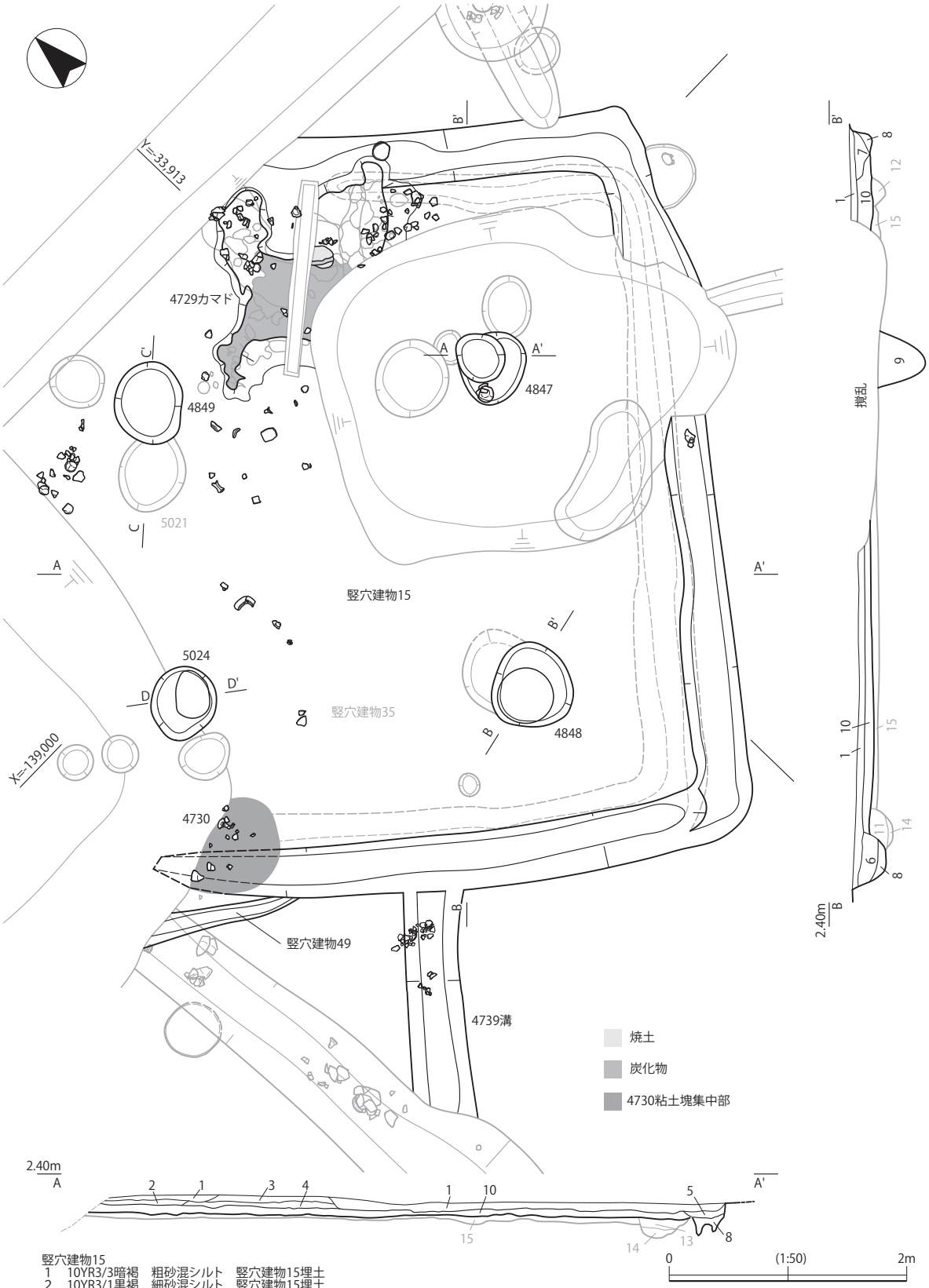


図 125　1－5区　竪穴建物 43 平・断面



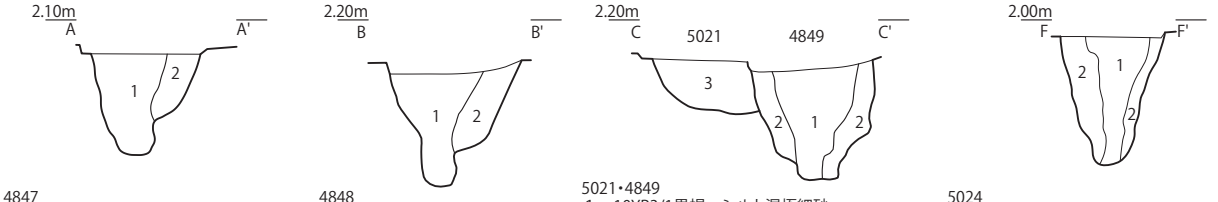
竪穴建物15
1　10YR3/3暗褐　粗砂混シルト　竪穴建物15埋土
2　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　竪穴建物15埋土
3　10YR2/3黒褐　細砂混シルト　炭化物を少量含む
　シルト質粘土(カマド本体崩落土)偽礫を多量含む　竪穴建物15埋土
4　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　炭化物を少量含む
　シルト質粘土(カマド本体崩落土)偽礫を多量含む　竪穴建物15埋土
5　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　竪穴建物15壁溝埋土
6　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　竪穴建物15壁溝埋土
7　5Y4/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物15壁溝埋土
8　5Y5/1灰　細砂混シルト　粗砂～極粗砂(5-2b層)を多量含む
　加工時形成層　竪穴建物15壁溝埋土
9　10YR3/1黒褐　シルト混細砂　4847柱穴　埋土
10　10YR3/3暗褐　細砂混シルト　竪穴建物15床面形成層
11　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　竪穴建物35壁溝埋土
12　10YR4/1褐灰　シルト混中砂～粗砂　竪穴建物35壁溝埋土
13　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂～極粗砂　加工時形成層　竪穴建物壁溝埋土
14　10YR3/1黒褐　シルト混中砂～粗砂　加工時形成層　竪穴建物壁溝埋土
15　10YR4/2灰黄褐　細砂混シルト　炭化物を少量含む
　竪穴建物35床面・加工時形成層

図 126　1－5区　竪穴建物 15 平・断面

4729カマド
1　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂
2　5YR5/6明赤褐　細砂混シルト
3　10YR3/2黒褐　粗砂混シルト
4　10YR3/3暗褐　シルト混粗砂　炭化物・粘土（4729カマド本体崩落土）偽礫を少量含む
5　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト
6　10YR3/2黒褐　粘土　炭化物を少量含む　4729カマド本体崩落土
7　10YR4/2灰黄褐　細砂混シルト　4729カマド本体崩落土
8　10YR4/2灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　4729カマド本体崩落土
9　10YR4/1褐灰　シルト　炭化物を多量含む　4729カマド機能時形成層
10　10YR3/2黒褐　シルト混粗砂　竪穴建物15床面形成層
11　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　竪穴建物15床面形成層
12　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　炭化物・粘土偽礫を微量含む　竪穴建物15床面形成層
13　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　竪穴建物15床面形成層
14　10YR4/3にぶい黄褐　粘土　8011カマド本体崩落土
15　10YR4/4褐　極細砂　粘土偽礫含む　8011カマド本体
16　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂　竪穴建物35床面・加工時形成層

0　(1:20)　1m

図 127　1－5区　竪穴建物 15　4729 カマド平・断面



4847
1　10YR3/1黒褐　シルト混細砂　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め

4848
1　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　裏込め

5021・4849
1　10YR3/1黒褐　シルト混極細砂　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混細砂　細砂混シルト（5-2b層）偽礫を含む　裏込め
3　10YR3/1黒褐　シルト混細砂　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む

5024
1　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土質シルト（5-2b層）偽礫を含む

0　(1:40)　2m

図 128　1－5区　竪穴建物 15　4847 柱穴他断面

竪穴建物 49（図 126・137）

竪穴建物 15 西側で、竪穴建物 15 の調査終了時に周辺で形成された古土壌の掘り下げを行ったところ検出された。竪穴建物 15・4738 溝より古い段階に機能した竪穴建物と考えられるが、遺物は出土しなかった。

竪穴建物 15（図 111・126 ～ 129、図版９・59・62）

竪穴建物 14 の西側で検出された。建て替えが行われており、古い段階を竪穴建物 35 とし、新しい段階を竪穴建物 15 とした。竪穴建物 15・35 内で検出された主柱穴は竪穴建物３棟分に相当する数が検出されており、平面的には２棟分の検出に留まったが、３回以上の建て替えがあった可能性がある。

竪穴建物 15 の規模は、南東辺で 6.4 mである。排水溝として機能したと考えられる 4739 溝が竪穴建物 15 の南西辺の壁溝に接続する。4739 溝の規模は、幅 0.5m、深さ 0.13m である。埋土は極細砂～細砂混シルトで、竪穴建物 15 壁溝と同質である。竪穴建物 15 の西側に位置する 4738 溝に切られているが、溝機能時には、２条の溝の底面の深さがほぼ同じで、4738 溝に排水した段階があったと考えられる。4729 カマドは、北東辺の中央で検出された。竪穴建物 15 検出時から、4730 粘土塊集中部から 4729 カマドまで粘土塊が帯状に検出されており、複数の竪穴建物とカマドの存在を想定して掘削を進めた。竪穴建物 15 の床面直上に近づくに従い、4729 カマドが認識されたが、土壌化の影響及び廃絶後にカマド北西側が撹乱を受けていたことから、カマド本体は、南東側の袖部のみの検出となった。粘土塊の集中部は、竪穴建物 15 廃絶以降の 4729 カマドの崩落或いは破壊に起因するものと考えている。なお、4729 カマドの平面図は、床面上位の土壌化した部分を若干掘り下げた状態で図化している。4729 カマドは、長さ 1.5 m以上、幅 1.55 m以上である。カマド内では、機能時形成層の炭化物を多量に含んだシルトが堆積しており、直上から土師器が少量出土した。カマド中央では、焼土塊を用いた火床が検出された。火床は被熱を受け赤変した粘土質シルトと、焼け締まって硬化した細砂～中砂混シルトが用いられており、硬化した細砂～中砂混シルトはカマドないし炉体など被熱を受けた粘土塊を再利用したものである。4729 カマドから図 129 － 1 ～ 3・８が出土した。なお、５・６・８は 4730 粘土集中部から出土した資料である。１～３は土師器甕である。１は口縁端部が肥厚し、丸い形状を呈す。３は他のカマドから出土した小型の甕から推測して、支脚として用いられた可能性がある。４は土師器の甑である。細片を図化しており､蒸気孔の形状は不明である。５～８は土師器高坏である。６の脚柱部外面はヘラナデが施される。７は有段高坏で、4847 柱穴から出土した。８は椀形高坏で、坏部は内外面が磨滅している。これらの資料は、古墳時代中期中葉に比定される。

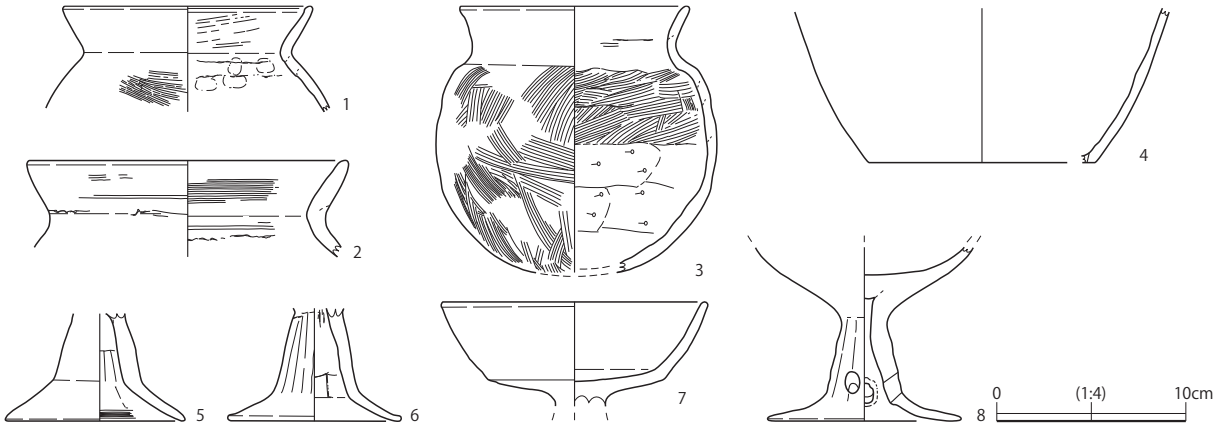
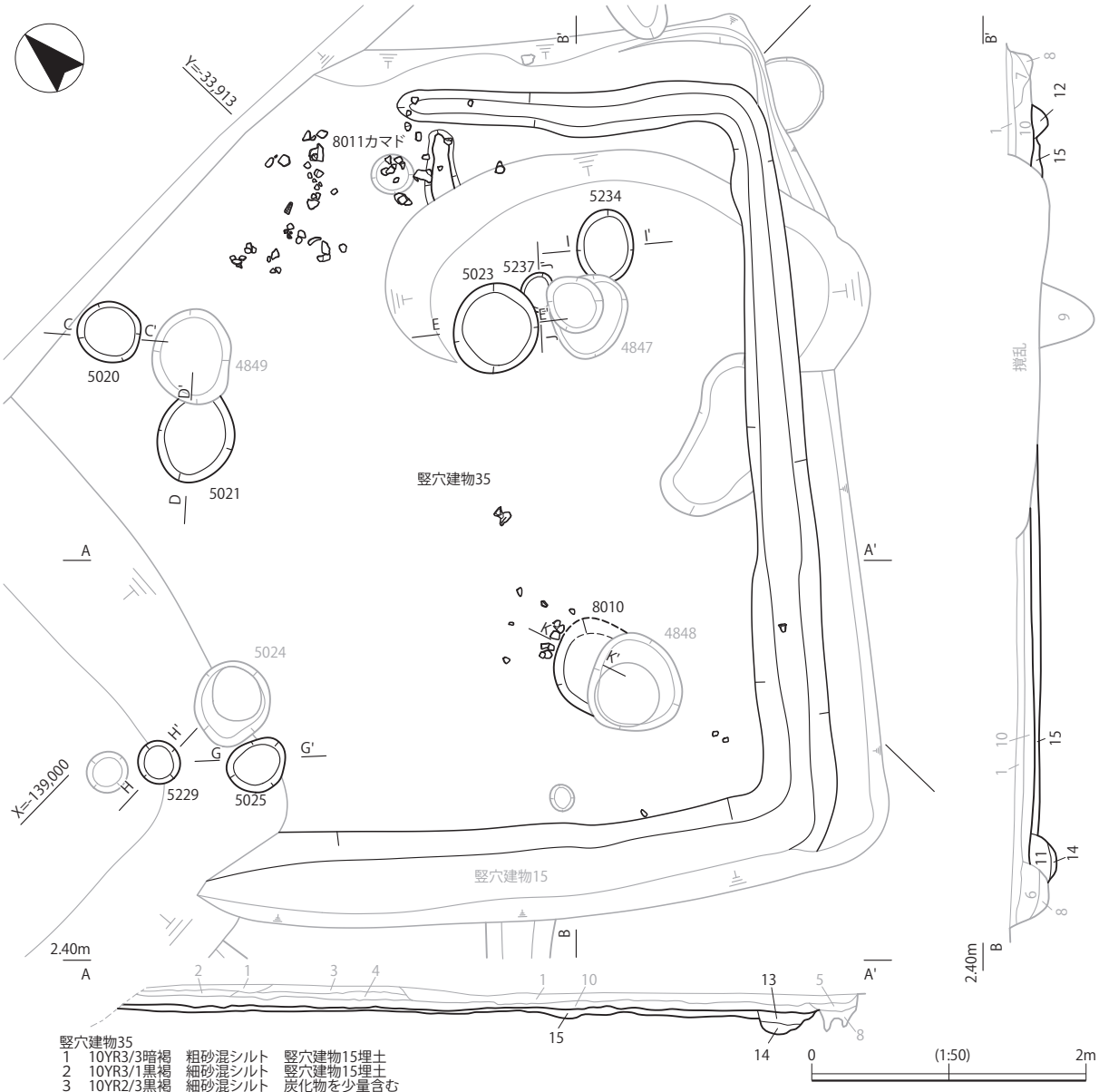


図 129　1 － 5 区　竪穴建物 15 出土遺物



竪穴建物35
1　10YR3/3暗褐　粗砂混シルト　竪穴建物15埋土
2　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　竪穴建物15埋土
3　10YR2/3黒褐　細砂混シルト　炭化物を少量含む
　シルト質粘土(カマド本体崩落土)偽礫を多量含む　竪穴建物15埋土
4　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　炭化物を少量含む
　シルト質粘土(カマド本体崩落土)偽礫を多量含む　竪穴建物15埋土
5　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　竪穴建物15壁溝埋土
6　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　竪穴建物15壁溝埋土
7　5Y4/1灰　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物15壁溝埋土
8　5Y5/1灰　細砂混シルト　粗砂～極粗砂(5-2b層)を多量含む
　加工時形成層　竪穴建物15壁溝埋土
9　10YR3/1黒褐　シルト混細砂　4847柱穴埋土
10　10YR3/3暗褐　細砂混シルト　竪穴建物15床面形成層
11　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　竪穴建物35壁溝埋土
12　10YR4/1褐灰　シルト混中砂～粗砂　竪穴建物35壁溝埋土
13　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂～極粗砂　加工時形成層　竪穴建物35壁溝埋土
14　10YR3/1黒褐　シルト混中砂～粗砂　加工時形成層　竪穴建物35壁溝埋土
15　10YR4/2灰黄褐　細砂混シルト　炭化物を少量含む
　竪穴建物35床面・加工時形成層

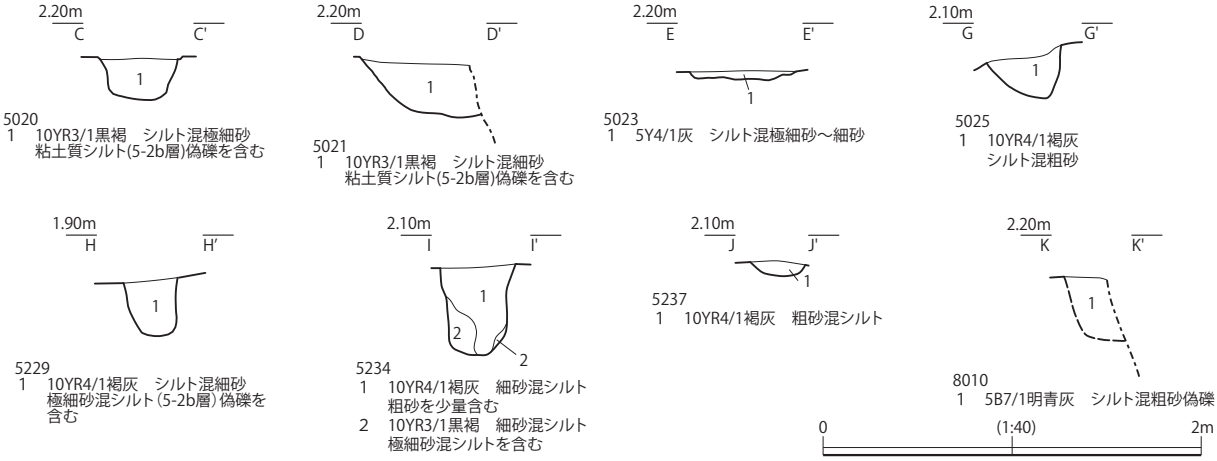


図 130　1－5区　竪穴建物 35 平・断面

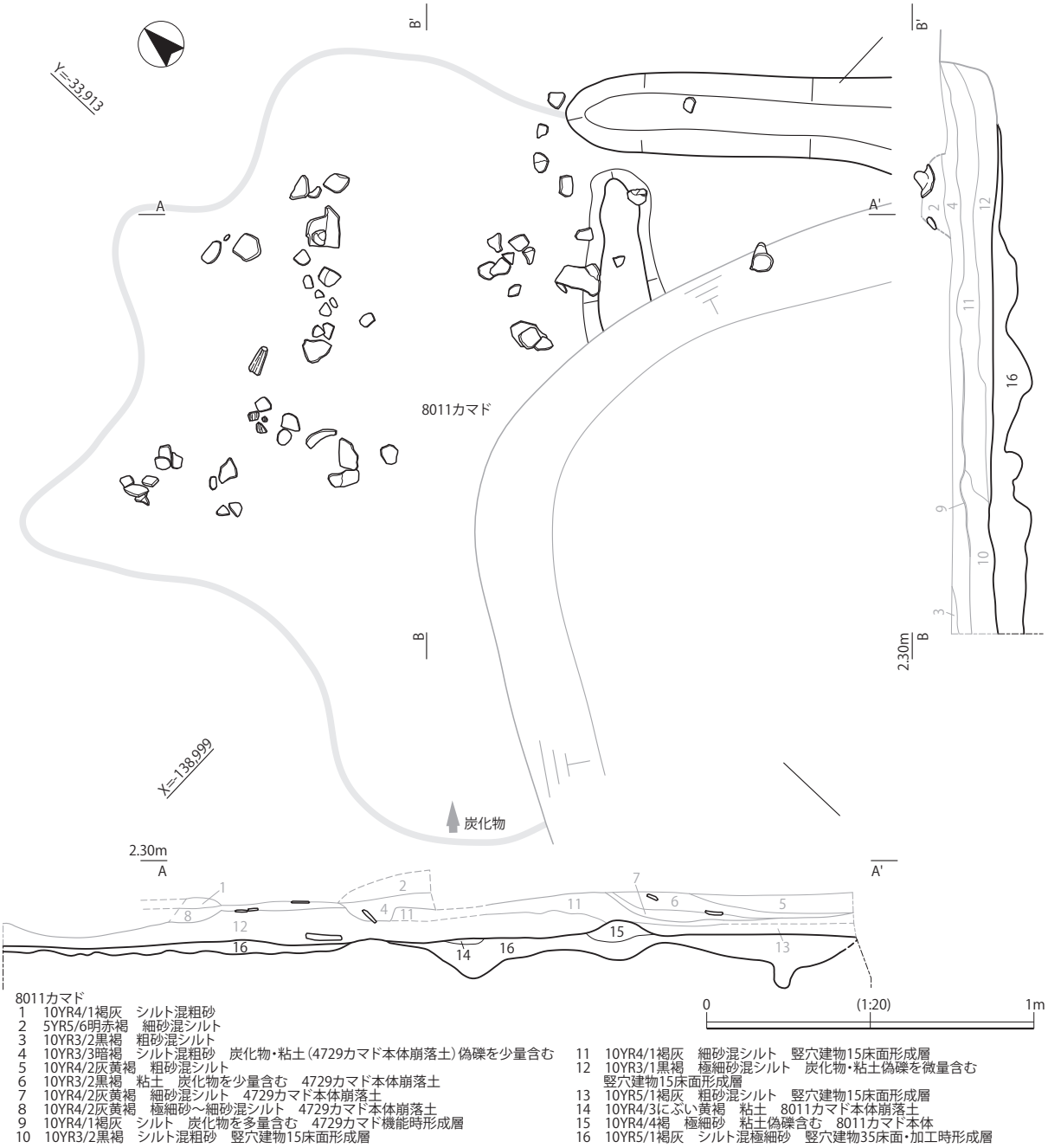


図 131　1－5区　竪穴建物 35　8011 カマド平・断面

竪穴建物 35（図 111・130 ～ 133、図版 9 ・62・65）

竪穴建物 15 と同位置で検出されており、南西辺は竪穴建物 15 の壁溝の位置と重なる。竪穴建物 15 と平面形が相似形で、建て替えに際し拡張されたということができる。規模は南東辺で 6.0 mである。竪穴建物 15 の 4729 カマドの直下で 8011 カマドが検出された。

8011 カマドは炭層と土師器細片の分布状況から位置が復元できる。袖部は 4729 カマド本体の直下で「擬似状」に検出されていることから、カマドの基本的な位置は 4729 カマドに踏襲されている。被熱よる赤変と火床は確認できなかった。なお、8011 カマド検出時に、カマド本体に由来すると考えられるシルト質粘土塊の広がりが確認されており、カマドの廃絶に伴ってカマド本体が解体されて地均しが行われたと考えられる。

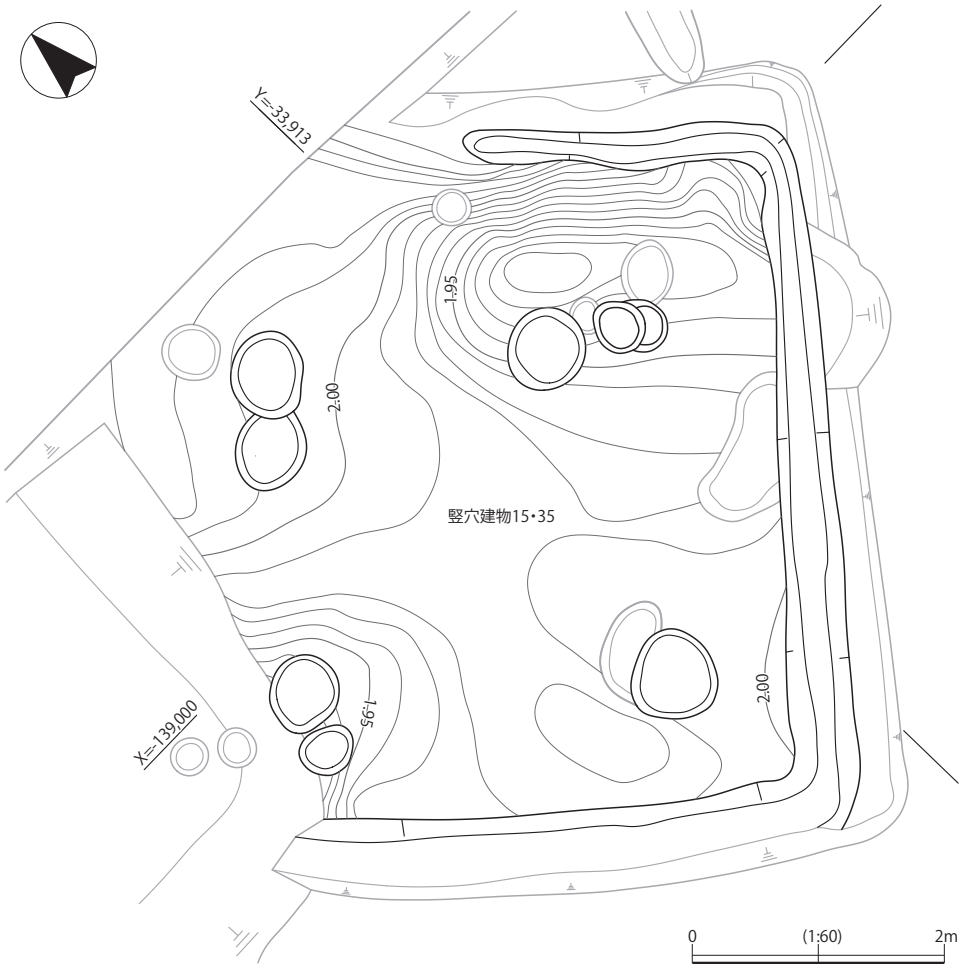


図 132　1－5区　竪穴建物 15・35 加工面平面

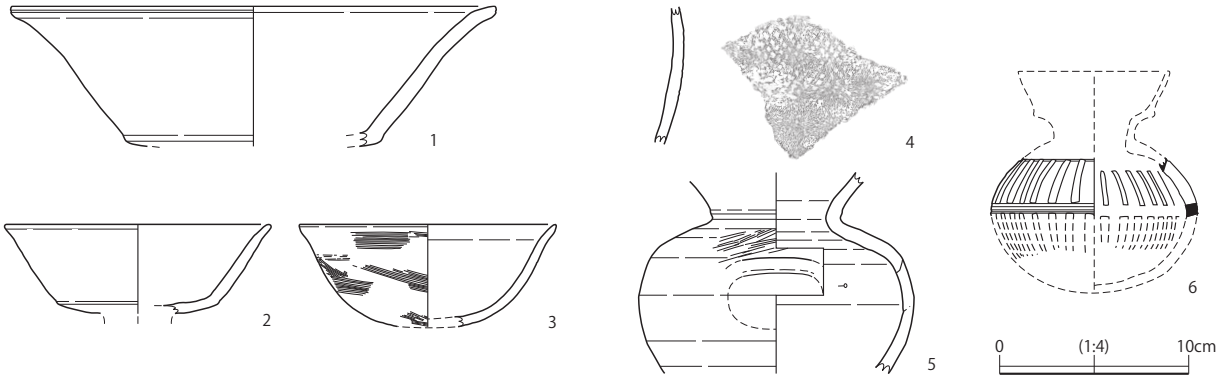
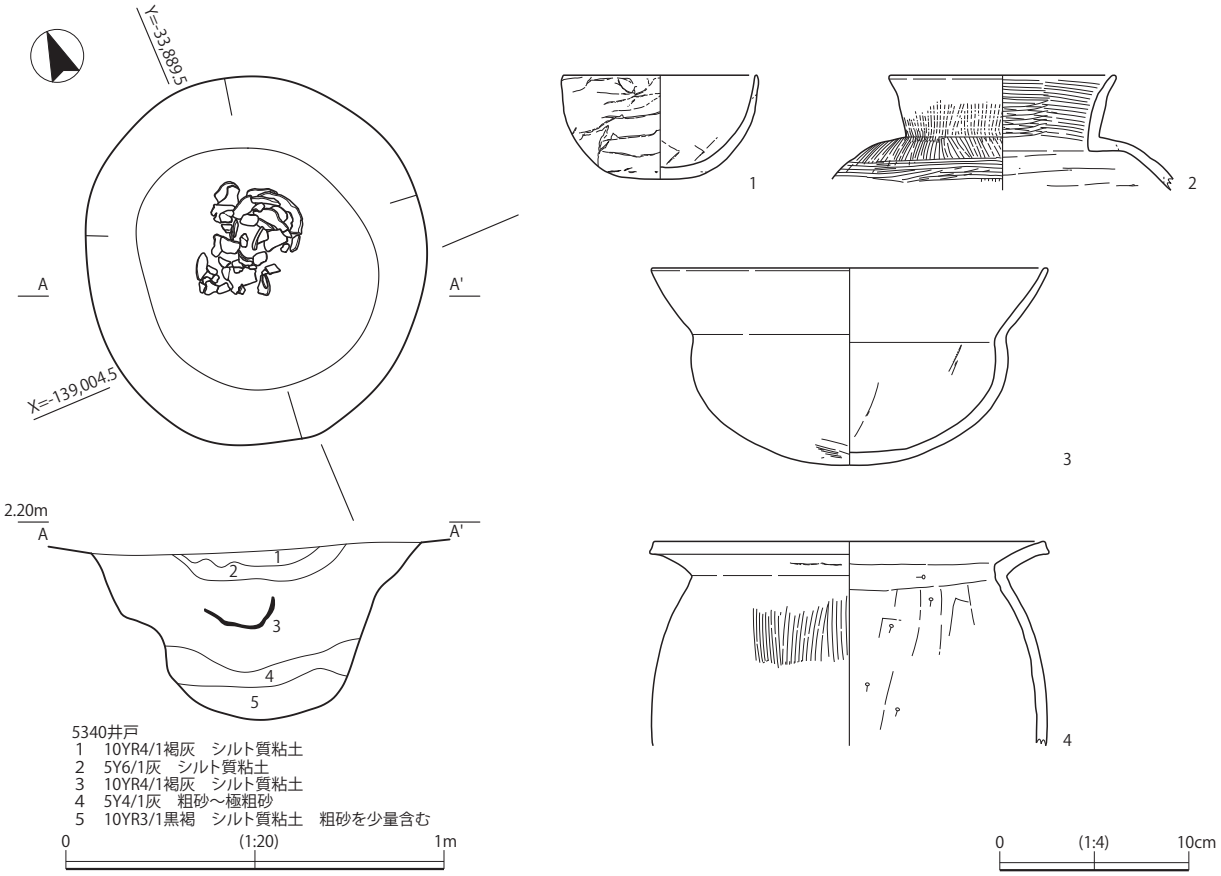


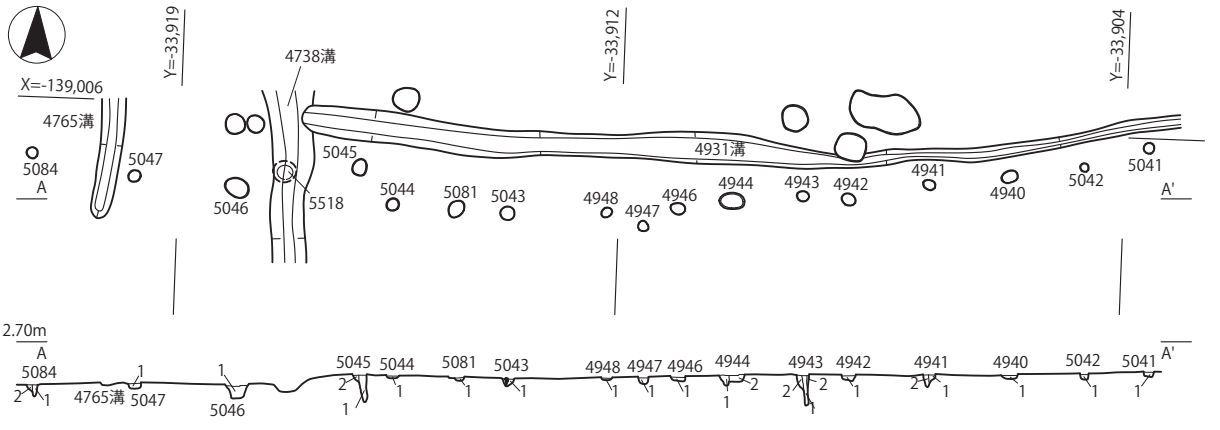
図 133　1－5区　竪穴建物 35 出土遺物

竪穴建物 35 から図 133 － 1 ～ 6 が出土した。1 ・ 2 は土師器有段高坏である。1 は竪穴建物 15 のカマドから出土した遺物と接合するが、竪穴建物 35 に伴うものと判断した。2 は壁溝内から出土した。内外面は横ナデによって仕上げられ、外面口縁部直下には成形時の指頭圧痕が残る。3 は土師器鉢である。外面はハケ、内面は磨滅。4 は韓式系土器鍋の体部片である。外面に格子目タタキが認められる。5 は土師器壺である。頸部直上に鈍い突帯がめぐる。体部の中位に透孔（円窓）と考えられる貫通孔が開けられる。透孔（円窓）は楕円形に復元されるもので、粘土接合部の剥離の可能性を検討したが、孔端面も焼成されており、焼成前に穿孔されたものと判断された。6 は須恵器二重口の体部片である。復元的に図化。TK73 ～ 216 型式。出土遺物から、2 － 1 区 82 溝と同段階に機能したと考えられる。



5340井戸
1　10YR4/1褐灰　シルト質粘土
2　5Y6/1灰　シルト質粘土
3　10YR4/1褐灰　シルト質粘土
4　5Y4/1灰　粗砂～極粗砂
5　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　粗砂を少量含む

図 134　1－5区　5340 井戸平・断面　出土遺物



4940
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
4941
1　5Y3/1オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　抜き取り
2　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　裏込め
4942
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
4943
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　抜き取り
2　5Y3/1オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　裏込め
4944
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　抜き取り
2　5Y3/1オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　裏込め
4946
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
4947
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
4948
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5041
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5042
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5043
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5044
1　5Y4/2灰オリーブ　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5045
1　5Y3/1オリーブ黒　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　抜き取り
2　5Y3/2オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　裏込め
5046
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5047
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5081
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む
5084
1　N3/0暗灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　抜き取り
2　5Y3/1オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　裏込め

図 135　1－5区　柵列2平・断面

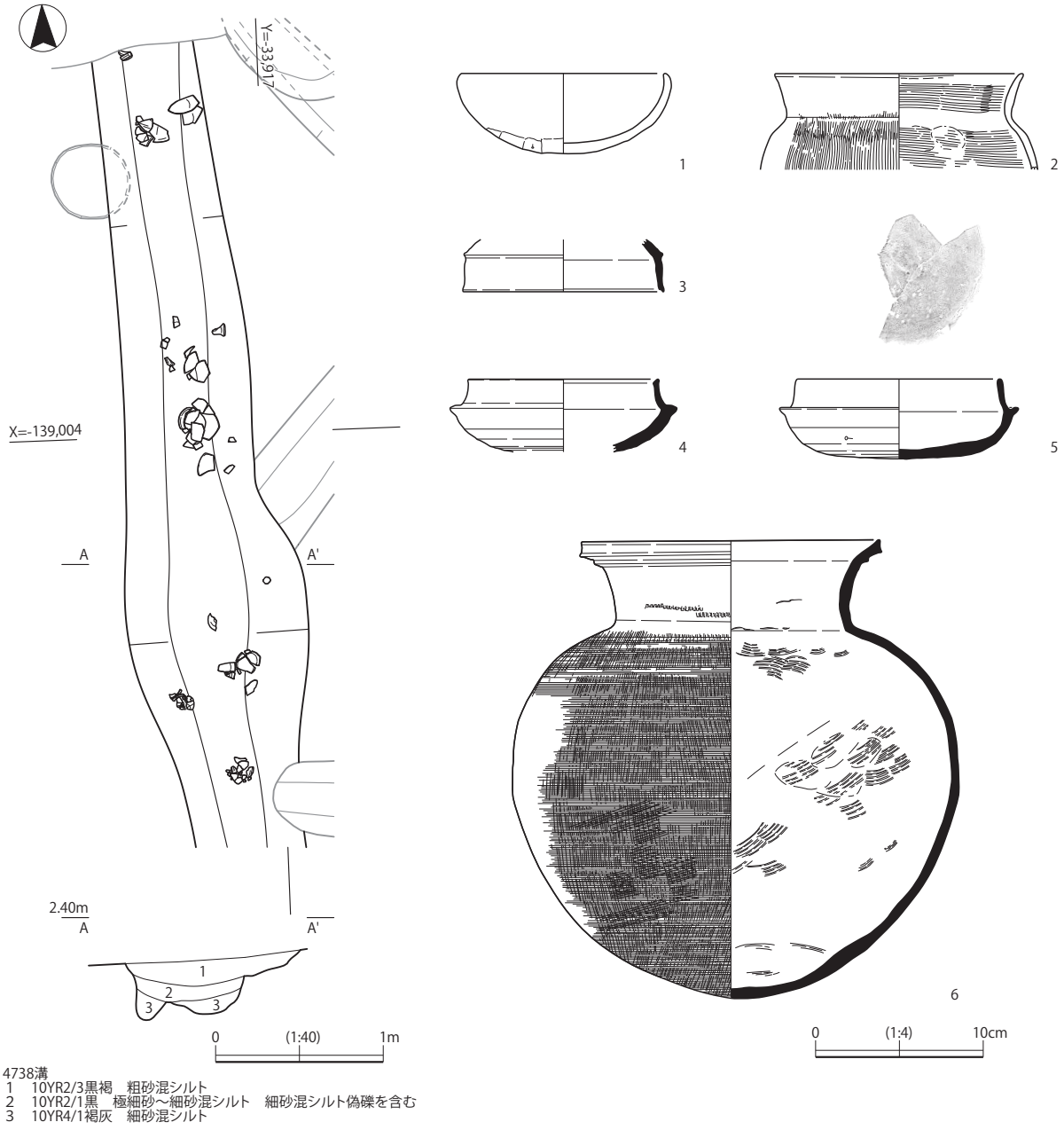


図 136　1－5区　4738 溝平・断面　出土遺物

5340 井戸（図 111・134）

竪穴建物 47・48 の南西部で検出された。規模は、直径 0.9 m、深さ 0.45 mである。埋土は、湿性のシルト質粘土を主体とする。埋土中層から土師器甕等がまとまって出土した。図 134 － 1 は製塩土器で、口縁部は擬口縁状に丸くおさめられる。内面は板ナデ調整。２は土師器甕である。内面は板ナデが施される。３は土師器鉢である。体部外面は、部分的に板ナデの痕跡がわずかに残る。内面は横ナデ調整で、工具痕が一部で観察される。４は弥生土器甕。古墳時代中期中葉に機能したと考えられる。

柵列２（図 135）

4931 溝の南側で検出された。4738 溝より以西は、柱穴の規模・埋土が若干異なっており、4738 溝より以東で完結した可能性が高い。4738・4931 溝と同段階に機能し、古墳時代中期前葉～中葉と考えられる。

図 137　1－5区　第5－2ｂ面北側（2）平面

4738 溝（図 111・136・137、図版９・59）

竪穴建物 15 の南西で検出された。規模は、幅 1.1 m、深さ 0.34 mである。埋土は、下層が極細砂～細砂混シルトを主体としており、底面直上の堆積は加工時形成層と考えられる。上層には、土壌に由来する粗砂混シルトが堆積しており、徐々に埋没していったと考えられる。4738 溝から出土した土器は、図 136 － 1 ～ 6 を図示した。 1 は土師器鉢である。 2 は土師器甕である。 3 は須恵器坏蓋、 4・5 は須恵器坏身である。 5 は内面に同心円当具痕が残る。口縁端部に面をもたないもので、TK216 ～ 23 型式に比定した。 6 は須恵器甕である。体部外面は平行タタキの後カキメ調整、体部内面はナデ調整で、凹み部分はナデが及ばず同心円文当具痕が残る。

調査地北側（2）（図 137）

調査地北側（2）としたのは､4738 溝と 4770 溝の範囲である。竪穴建物 4 棟（内､1 棟は建て替え）の他、井戸・ピット・土坑が検出された。 6 － 4 ｂ層とした、弥生時代中期前葉以前の砂層上面の高まりを反映し、微高地の中でも地形が高い。4738 溝より以西は土壌化が顕著で、 5 － 2 ｂ層上面をかなり削り込んだ状態で遺構面の検出を行った。柱穴が多数検出されたため、竪穴建物が存在する可能性を考慮しつつ掘り下げを行っており、4690 井戸等が検出された範囲からやや南に下がった場所で竪穴建物 26 等が検出された。4768 溝やその周辺で検出された溝は、当初、竪穴建物として調査を行ったが、カマドや主柱穴が確認されなかったため、最終的に溝と判断した。また、調査地北側、5097・5091・4767 ピット周辺では、小規模のピットが多数検出されており、このような傾向はこの範囲のみであったことから、土地利用が他と異なる可能性がある。なお、4771・5047 溝は、4738 溝と平行する南北方向の溝で、集落内の区画溝ないし、竪穴建物の排水溝として機能したと考えられる。

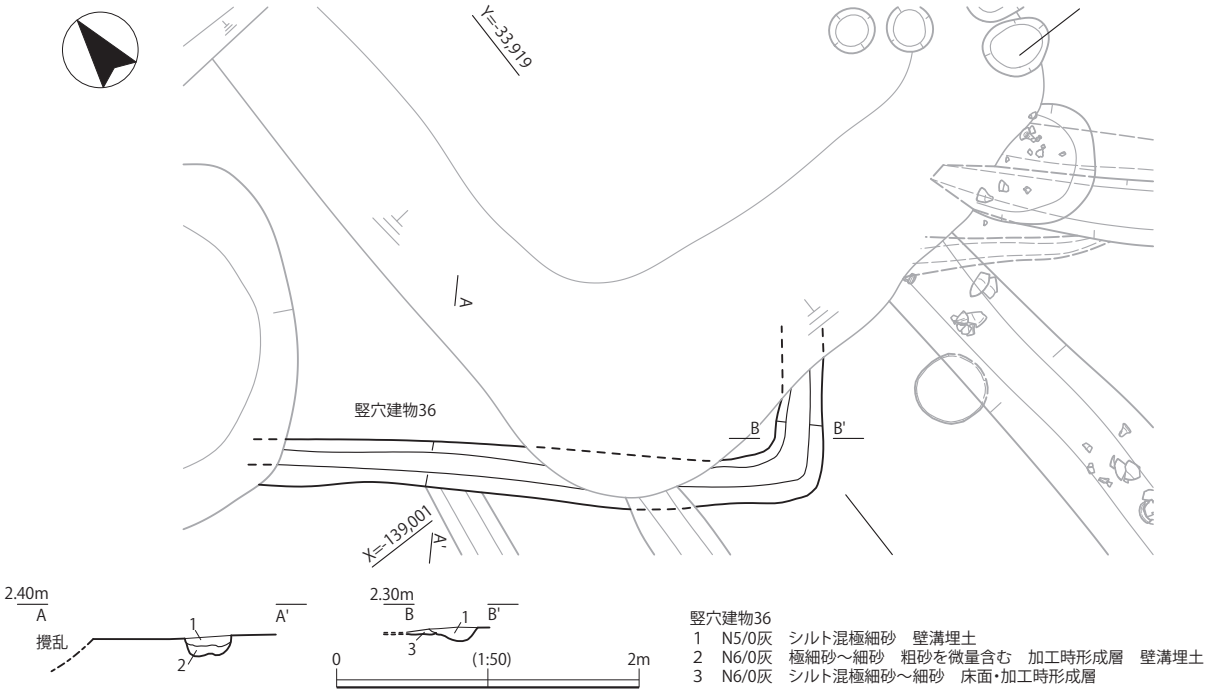


図 138　1－5区　竪穴建物 36 平・断面

竪穴建物 36（図 137・138）

竪穴建物 15 の西側で、壁溝のみが検出された。4520 溜池に切られていることや、北側部分は調査地外に当たるため全容は不明である。主柱穴についても、確認することができなかった。壁溝から土師器細片が出土したが、時期は不詳。なお、南側で検出した 4771 溝は、竪穴建物の方位が異なっているが、竪穴建物 36 の北側では検出されておらず、竪穴建物 36 の排水溝として機能した可能性があると考えられる。

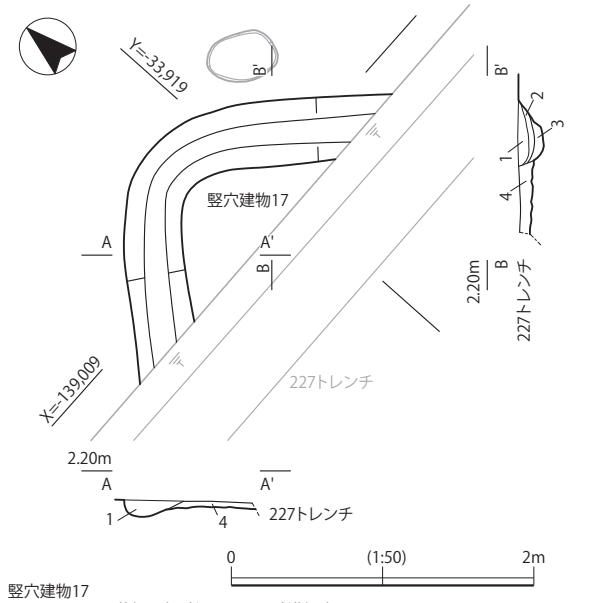


図 139　1－5区　竪穴建物 17 平・断面

竪穴建物 17（図 137・139）

4738 溝の西側で検出された。竪穴建物の北隅が検出されており、全容は調査地外にあるため不明。なお、側溝を設定した南側断面では、柱穴やカマドは確認されなかった。出土遺物は、土師器細片で、時期は不詳。ただし、竪穴建物 26 と同じ方位であることから、竪穴建物 26 と同段階に営まれた可能性がある。

竪穴建物 27（図 137・140・141、図版 9）

竪穴建物 17 の西側、竪穴建物 26 の北東側で検出された。竪穴建物 26 と切り合い関係があり、竪穴建物 27 の方が古い。規模は、北辺で 3.54 mで、東辺で 3.7 mである。竪穴建物 27 から遺物が出土しなかったため、時期は不明である。竪穴建物 26 より古くなることから、古墳時代中期前葉に構築されたものか。

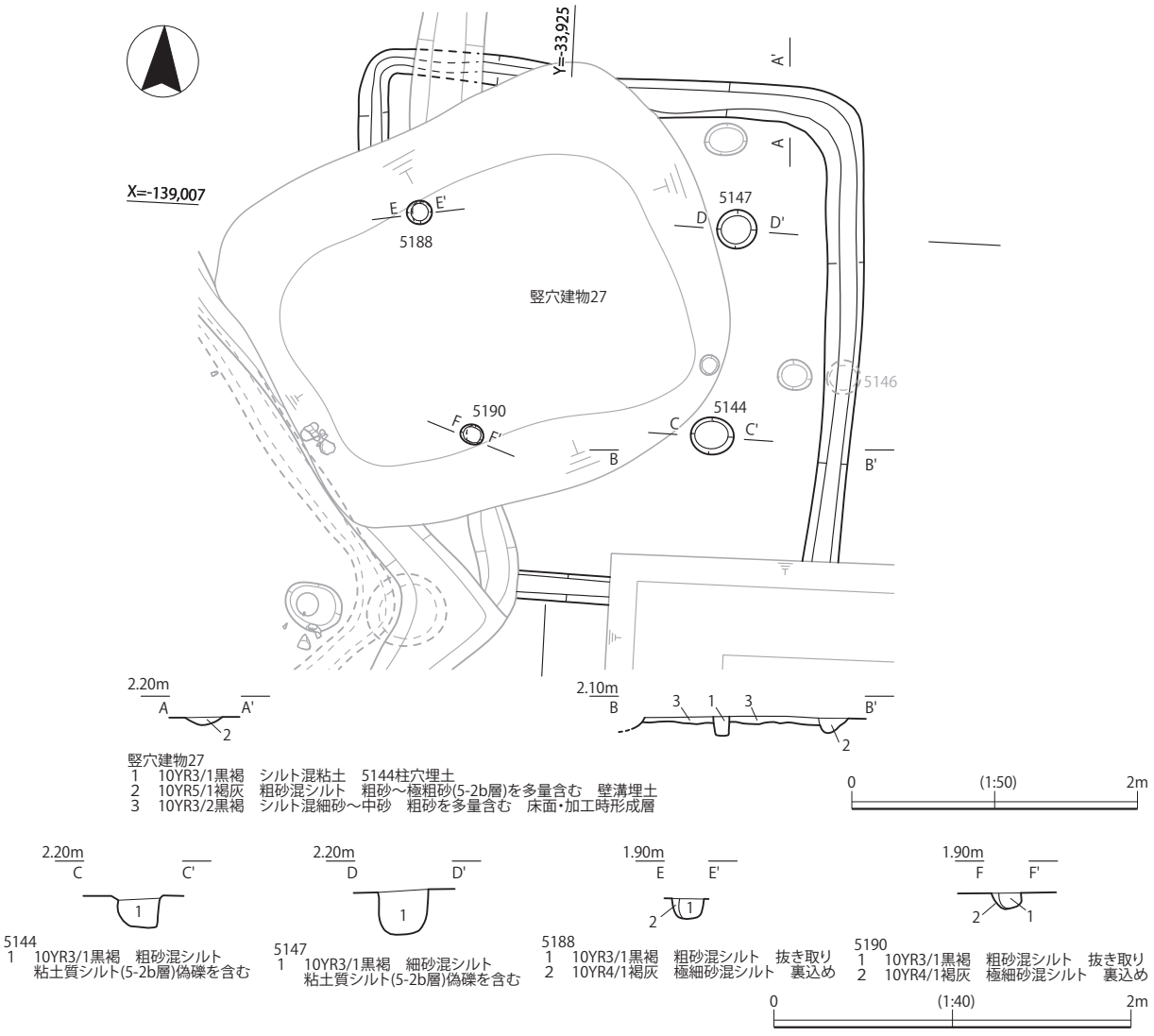


図 140　1－5区　竪穴建物 27 平・断面

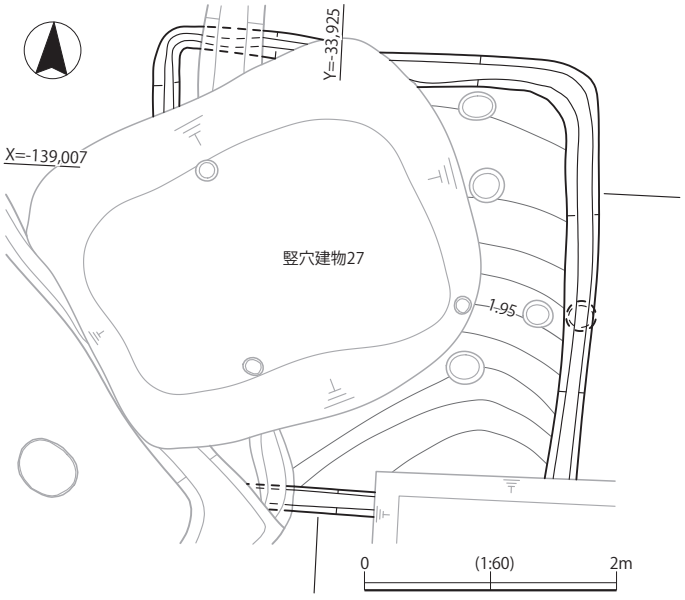
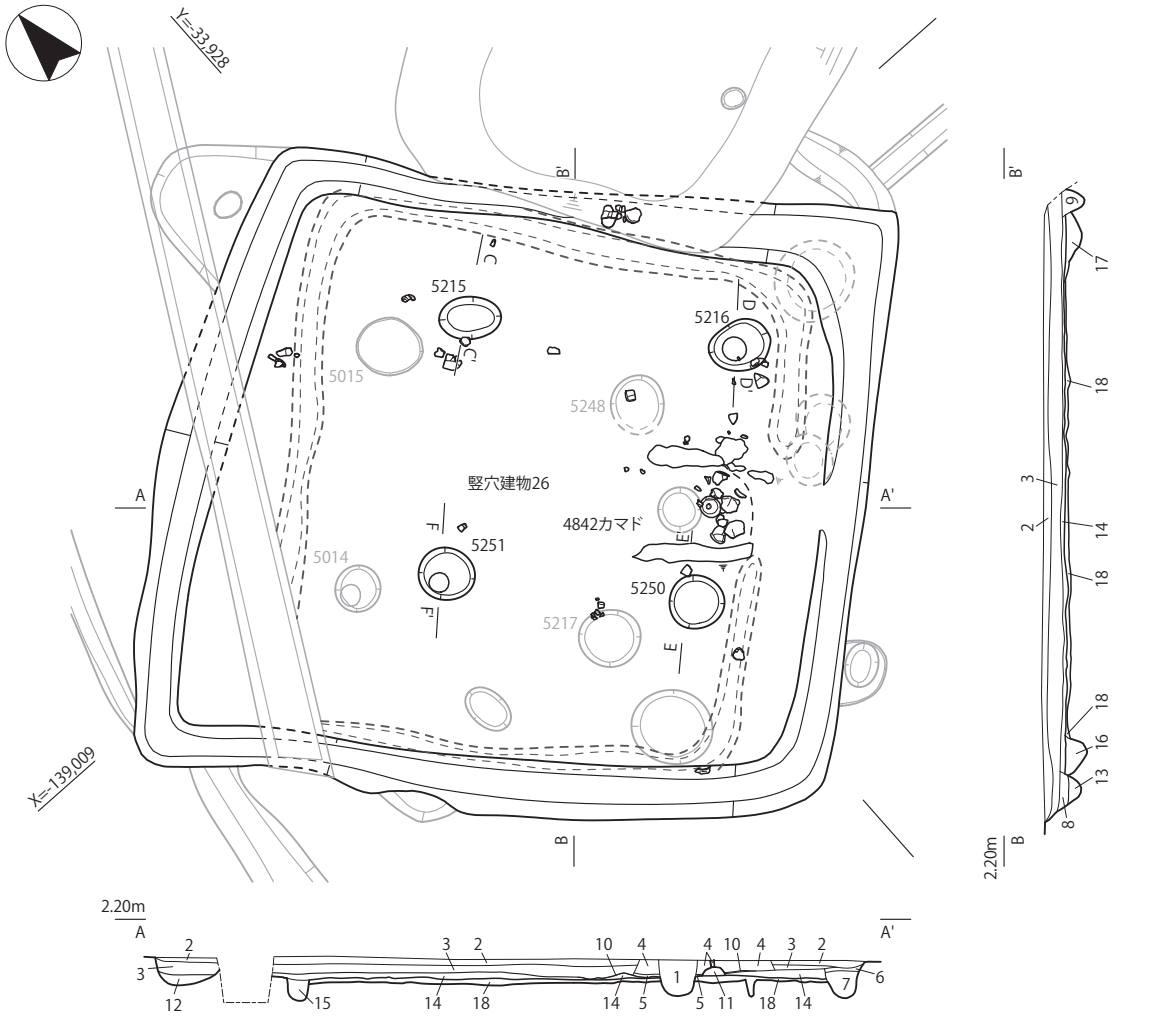
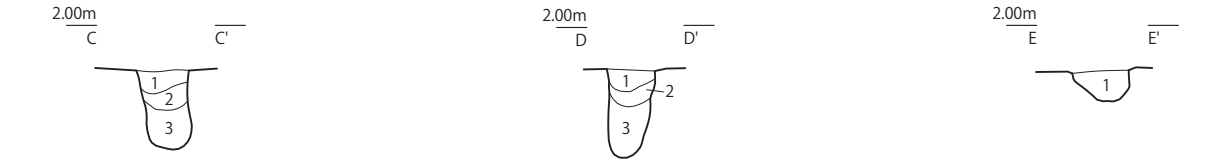


図 141　1－5区　竪穴建物 27 加工面平面



竪穴建物26
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　5249ピット埋土
2　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粗砂を微量含む
3　2.5Y3/1黒褐　粗砂混シルト
4　5Y5/1灰　シルト質粘土偽礫　4842カマド崩落土
5　10YR6/1褐灰　シルト質粘土　4842カマド崩落土
6　10Y3/1オリーブ黒　粗砂混シルト　竪穴建物26壁溝埋土
7　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂混シルト　竪穴建物26壁溝埋土
8　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む　竪穴建物26壁溝埋土
9　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂混シルト　竪穴建物26壁溝埋土
10　N2/0黒　粗砂混シルト　炭化物を多量含む　4842カマド機能時形成層
11　2.5Y6/1黄灰　粘土　4842カマド支脚内充填物
12　10YR4/2灰黄褐　極細砂～細砂混シルト　極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を少量含む
竪穴建物26壁溝埋土　加工時形成層
13　10YR5/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　極細砂～細砂（5-2b層）偽礫を含む
竪穴建物26壁溝埋土　加工時形成層
14　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　竪穴建物26床面形成層
15　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂　竪穴建物26古段階壁溝埋土
16　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土偽礫を含む
竪穴建物26古段階壁溝埋土
17　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　竪穴建物26古段階壁溝埋土
18　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む
竪穴建物26古段階床面・加工時形成層

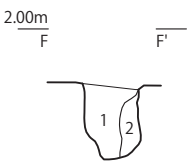
0　(1:50)　2m



5215
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト
2　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト質粘土
3　10YR4/1褐灰　細砂混シルト

5216
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト
2　10YR3/1黒褐　シルト質粘土
3　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂粘土を含む

5250
1　10YR4/1褐灰　極細砂質シルト



5251
1　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　極粗砂混シルト
シルト混極細砂～細砂（古土壌由来）偽礫を少量含む　裏込め

0　(1:40)　2m

図 142　1－5区　竪穴建物 26（新）平・断面

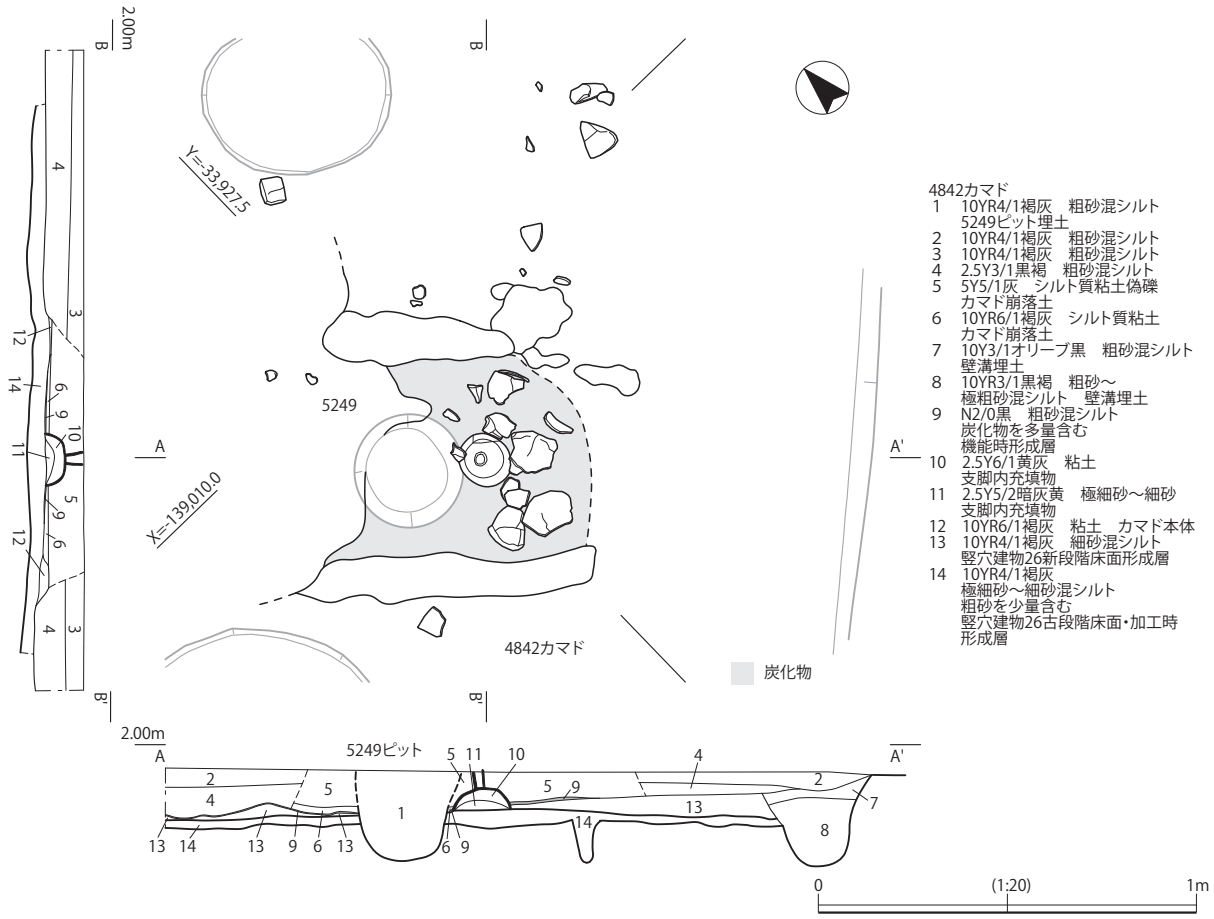


図 143　1－5区　竪穴建物 26　4842 カマド平・断面　出土遺物

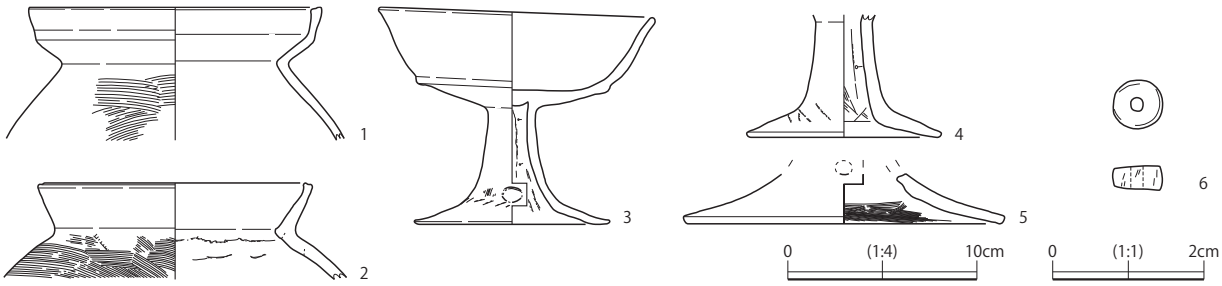


図 144　1－5区　竪穴建物 26 出土遺物

竪穴建物 26（図 137・142 ～ 145、図版 11・61・71）

竪穴建物 27 の南西側で検出された。竪穴建物 27 と切り合い関係があり、竪穴建物 26 の方が新しい。同じ位置で建て替えが行われており、それぞれ新段階、古段階として調査した。新段階の平面形は方形を呈し、規模は、南東辺 4.0 m、南西辺 4.7 mである。竪穴建物検出時に、北東辺中央と南東辺中央で白色粘土塊の分布が認められた。カマドを想定しつつ掘削を進め、南東辺中央で 4842 カマドが検出された。なお、北東辺の白色粘土塊周辺では、カマドに関係する地層や遺物は検出されなかった。

4842 カマドは、検出時に、カマド本体由来の粘土塊が崩落して、全体が一つの粘土塊のようになっていた。カマド機能時形成層の炭化物を多量に含むシルト層（以下、炭層）に近い高さまで掘り下げた段階で、カマド本体（袖部）が認識された。竪穴建物 26 新段階の壁溝の内側で検出されており、古段階に伴う可能性も検討したが、床面・加工時形成層と新・古段階の壁溝の切り合いから、最終的に新段階の竪穴建物に伴うものと判断した。なお、南東辺中央の壁溝については、平・断面ともに、溝の形状

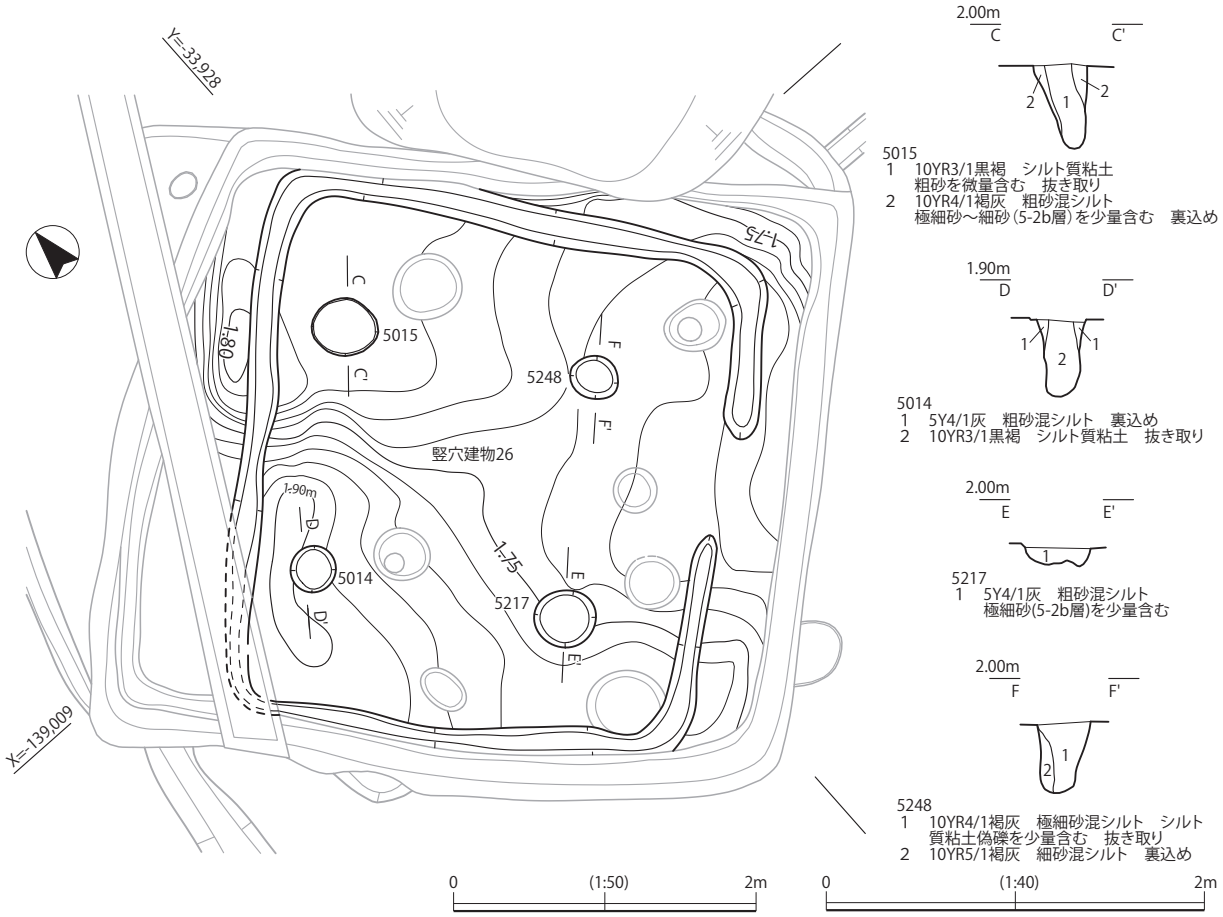


図 145　1－5区　竪穴建物 26（古）平面

が不明確な範囲であった。

4842 カマドは、本体部分で長さ 0.8 m以上、幅 0.75 mである。南西側は、廃絶時に除去されてしまったのか、検出することができなかった。カマド内の中央には、支脚として用いられた土師器高坏が出土しており、高坏の周辺からは土師器甕等の破片が出土した。

竪穴建物 26 から出土した遺物は、図 144 －1～6を図示した。1・2は土師器甕である。1は受け口状の口縁部で、端面はわずかに肥厚し、内傾斜する端面は横ナデ調整によって凹みがある。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整である。2は口縁部を横ナデ調整後に、端面と端部内側を横ナデ調整されたために端部内側が突出する。

3～5は土師器高坏である。3は支脚として用いられたものである。坏部外面は横ナデ調整、内面は磨滅。脚部は、外面は磨滅しており詳細は不明だが、一部ハケメが残る。内面は板ナデ調整されており、シボリメが残る。6は滑石製臼玉である。側面は縦方向と斜め方向に研磨される。出土した土師器は、古墳時代中期前葉から中葉に位置付けられると考えられる。

竪穴建物 26 古段階の規模は、北東辺 3.6 m、南東辺 3.4 mである（図 145 は、加工面の平面図を合成）。床面を形成する極細砂～粗砂混シルト上面でカマドは確認できなかった。4842 カマドと同じ位置にあったことも想定して調査を行ったが、古段階に伴うカマドの痕跡は認められなかった。南東辺の壁溝が中央部で途切れていることから 4842 カマドと同位置にカマドがあったことが想定される。加工面の状況は、南東辺中央と北隅が高くなっている。南西側を中心に掘削を進めて、竪穴建物が構築されたと考えられる。

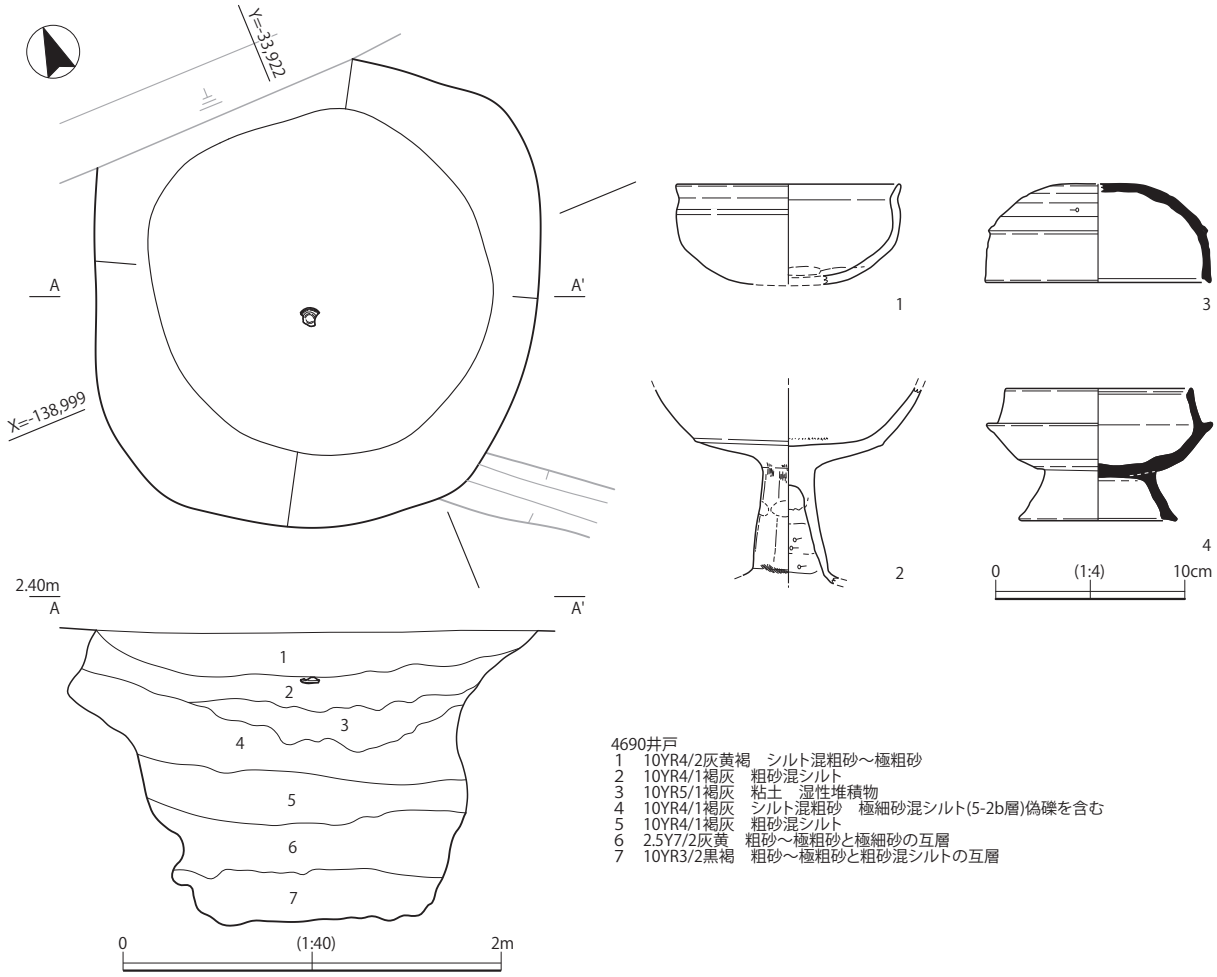


図 146　1－5区　4690 井戸平・断面　出土遺物

4690 井戸（図 137・146、図版 57）

竪穴建物 27 の北側で検出された素掘りの井戸である。平面形は不整な円形を呈す。規模は、直径 2.3 m、深さ 1.5 mである。埋土は、中層から下層が砂層主体である。湿性堆積物の粘土層を挟んで、上層は周辺で形成された土壌由来のシルト混粗砂～極粗砂で、徐々に埋没したと考えられる。上層に帰属する遺物として須恵器や土師器が出土した。下層の埋土については土壌洗浄も行ったが、遺物は出土しなかった。4690 井戸から、図 146－1～4 が出土した。1 は土師器鉢である。2 は土師器有稜高坏である。3 は須恵器坏蓋である。4 は須恵器高坏である。TK47 ～ MT15 型式。

調査地北西側（図 147）

4770 溝より以西を調査地北西側としてまとめた。4770 溝と 4820 溝に挟まれた範囲では、竪穴建物 5 棟のほか、鍛冶関連遺構として 4967 溝が検出された。4770 溝周辺から 2－1 区 82 溝にかけて鍛冶関連遺物が多数出土した。竪穴建物 20 からは鞴羽口が出土しており、鍛冶の操業が同範囲で行われていたと考えられる。なお、鍛冶関連遺物が出土した範囲の南限は 4837 井戸である。北限は、1－4 区で鍛冶関連遺物は皆無であったことと、240 トレンチ断面から鉱滓が出土したことから、1－4・1－5 区の間に設定される。

4820・4824 溝、4796 溝の間においても、竪穴建物・掘立柱建物が検出された。西側には、2－1 区 82 溝があり、その間に立地する竪穴建物や掘立柱建物ということができる。掘立柱建物 22・23 が

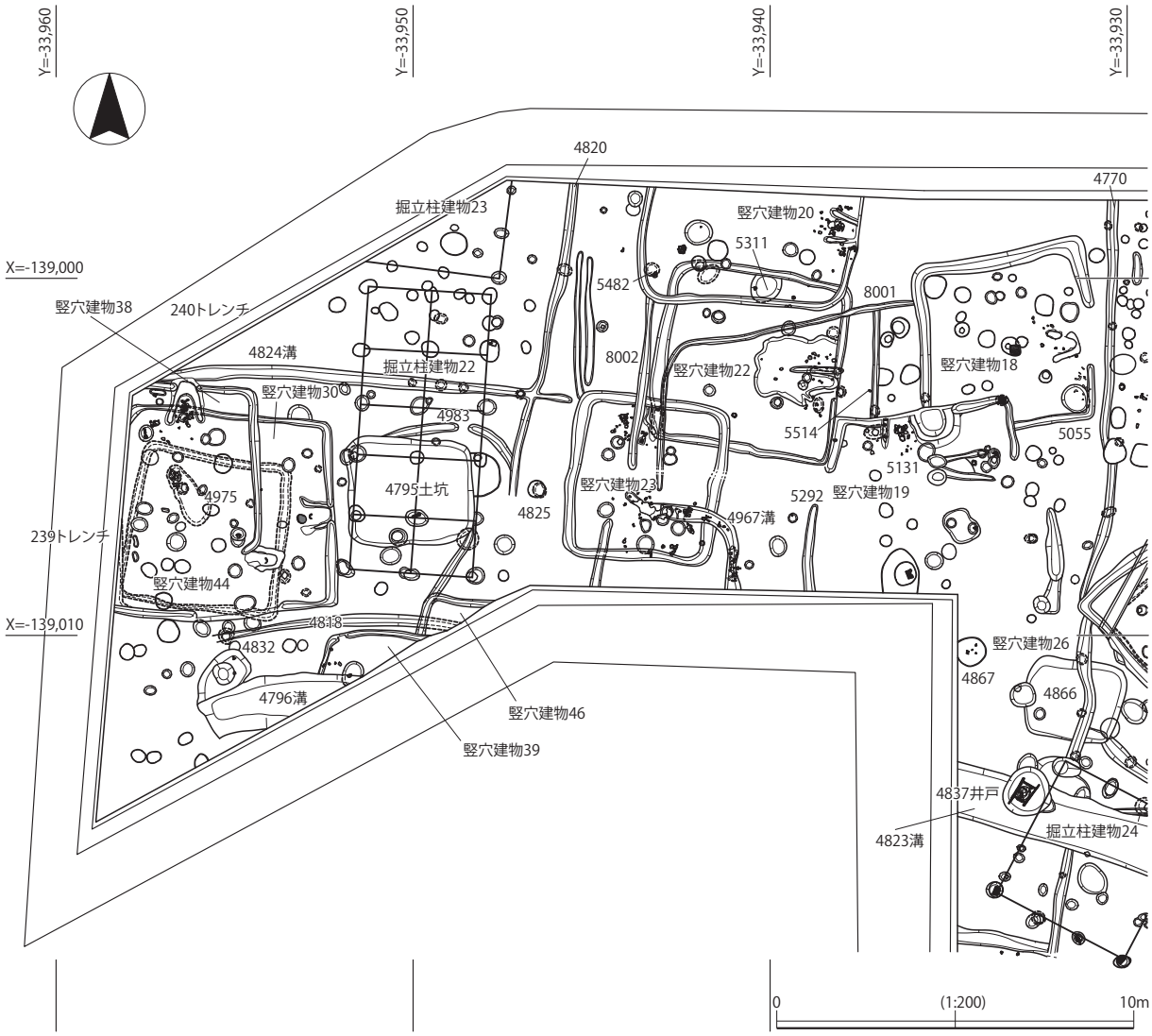


図 147　1－5区　第5－2ｂ面北西側平面

検出された基盤層は泥質の地層ないしこの地層に薄く堆積する砂層であった。第6－1面微高地が竪穴建物 20 東側から南西に延びて、掘立柱建物 22・23 周辺が地形的に低くなったためである。竪穴建物 38 周辺で基盤層が再び砂質になって、やや高くなっているが、第6－1面の微高地を構成する砂層の単位とは異なるもので、竪穴建物 38 周辺の砂層の方が新しいと考えられる。後述する 2－1区 82 溝の立地も、同様に弥生時代中期前葉以前の砂層によって形成された高まりと高まり周辺の微地形を利用したもので、竪穴建物や掘立柱建物の配置は地形に規制されたものである。

また、4796 溝・4823 溝は連続して機能したと考えられ、微高地を北側と南側に分けている。微高地が南側に下がる傾斜変換地に掘削されており、流向は南東方向である。第6－1面 8030 畦畔が接する田面の段と位置が重なっており、集落を区画する機能があると同時に、4796・4823 溝以北にあった竪穴建物等の排水施設として機能したと考えられる。4837 井戸より古い段階に機能しており、周辺で検出された溝としては比較的古い段階に位置付けられるものである。

なお、4770・4820 溝の範囲で検出した竪穴建物と 4967 溝は、竪穴建物の切り合い関係から、竪穴建物 18 →竪穴建物 22 →竪穴建物 23 →竪穴建物 20・4967 溝→（竪穴建物 19）の変遷となると考えられる。

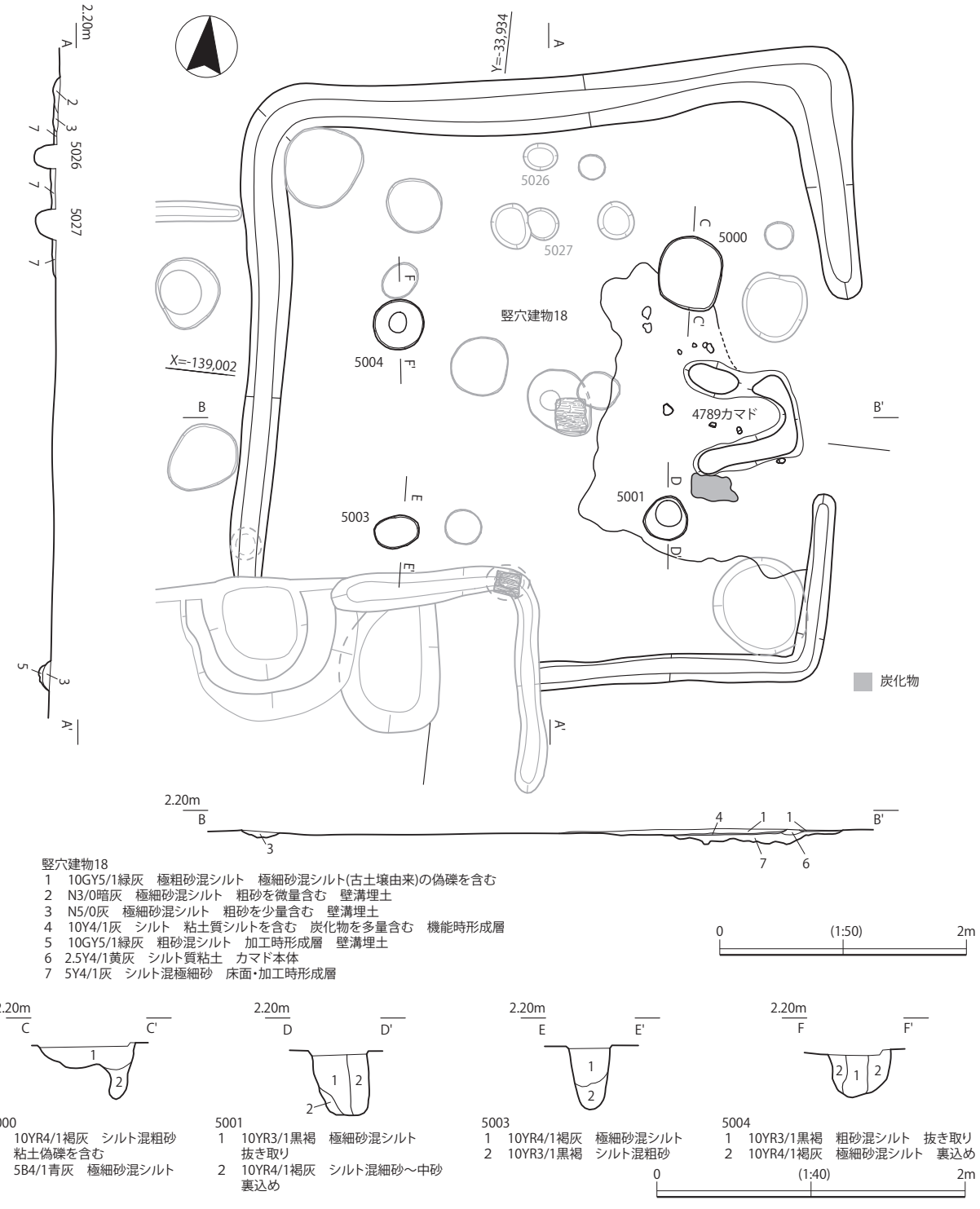


図 148　1－5区　竪穴建物 18 平・断面

竪穴建物 18（図 147 ～ 150）

竪穴建物 26 の北西で検出された。竪穴建物 19 と切り合い関係があり、竪穴建物 19 の方が新しい。土壌化が顕著な場所であったため、周辺を相当削り込んだ状態で検出した。平面形は正方形で、規模は一辺 4.0 mである。床面・加工時形成層は、竪穴建物の四隅を中心に残存したが、土壌化の影響により竪穴建物の基底面上部が失われていた。北辺の壁溝断面では、切り合い関係を示すような堆積状況が確認されており、壁溝の平面検出時にも切り合い関係を示すような埋土の違いが筋状に検出された。建て

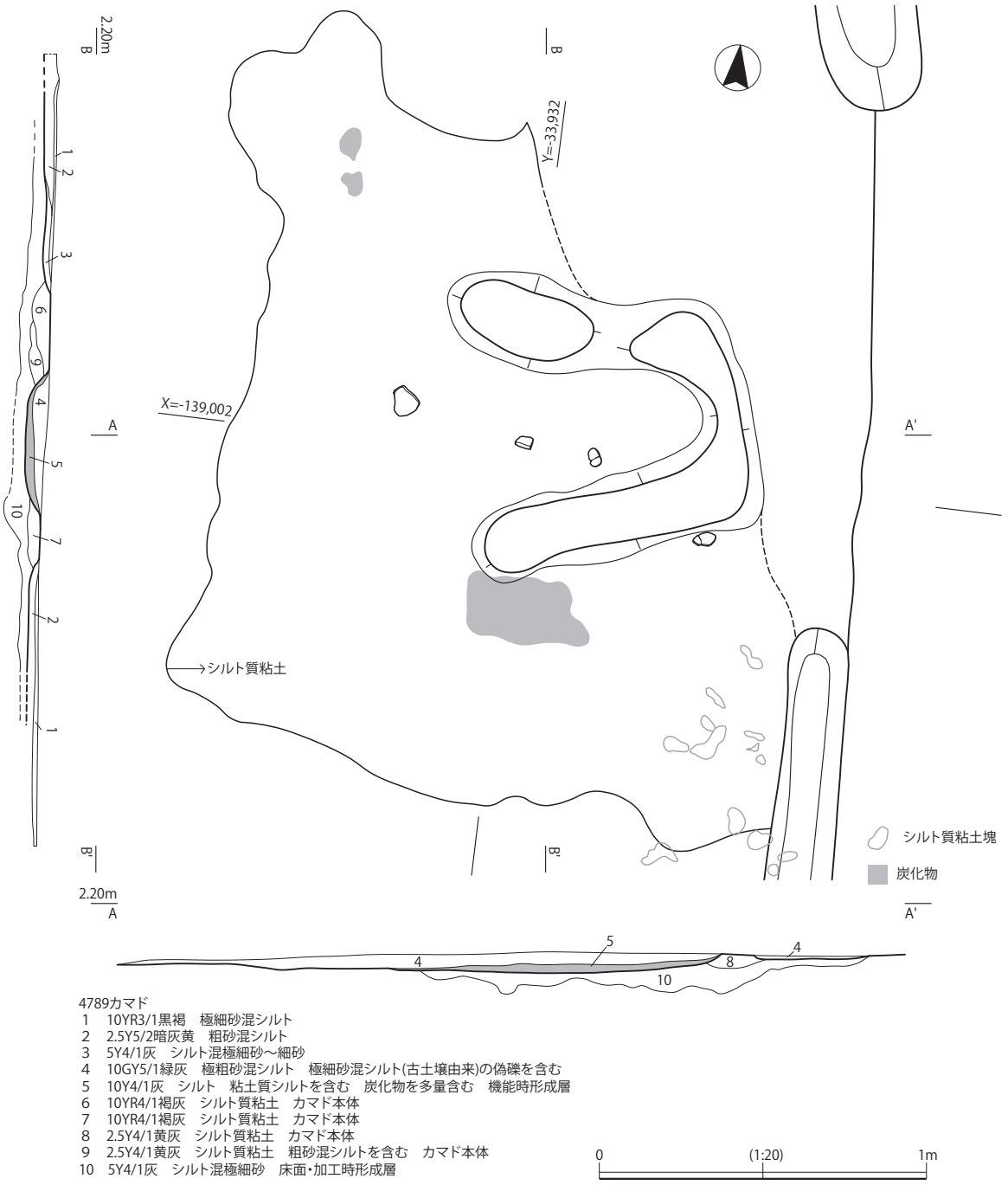


図 149　1－5区　竪穴建物 18　4789 カマド平・断面

替えの可能性があるが、主柱穴等に建て替えを示す痕跡は確認されず、断定するに至っていない。

東辺の壁溝中央が途切れた場所で、4789 カマドが検出された。4789 カマドは本体の長さ 0.9 m、幅 0.9 mである。検出時は、カマド本体に由来するシルト質粘土塊が、4789 カマド周辺に崩落している状況が検出された。カマドの遺存状況は不良で、カマド本体と崩落土は、原位置を留めるものと移動したものを区別するのは容易ではなく、カマド機能時形成層の炭層の堆積状況を根拠に、平面検出を行った。カマド奥壁が東辺の壁溝より内側で確認されており、壁溝に接してカマドが構築された他の竪穴建物と比較して構造的な問題を残している。

加工面の状況は、カマドが構築された部分と竪穴建物中央が最も高く、四隅に向けて低くなっていた。

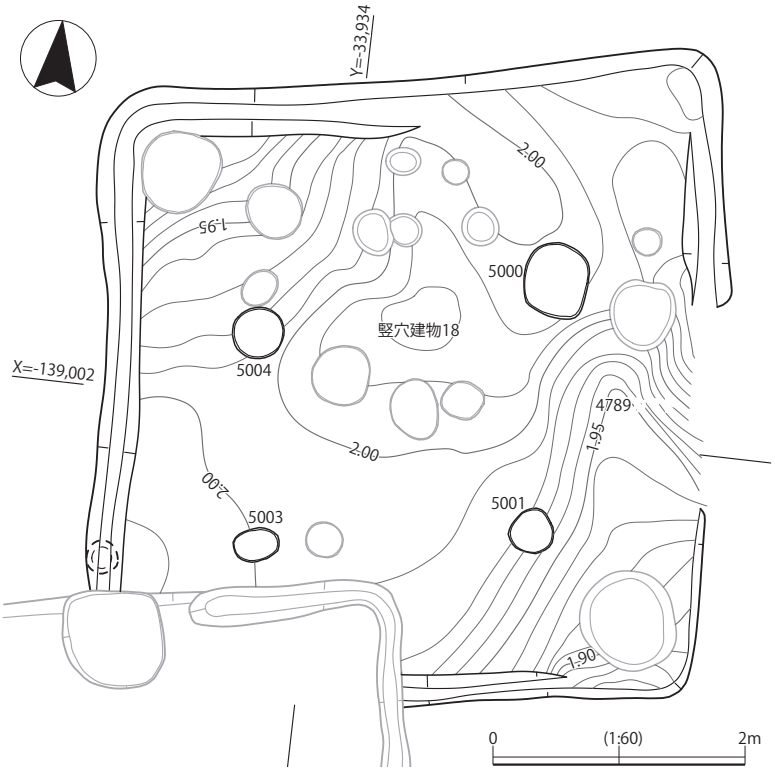


図 150　1－5区　竪穴建物 18 加工面平面

竪穴建物 18 から出土遺物は、カマド内とその周辺から土師器の細片以外に無く、時期を特定しうる遺物は出土しなかった。竪穴建物 19 に切られていることから、周辺で機能した竪穴建物の中では、古い段階に属し、古墳時代中期前葉の時期が想定される。

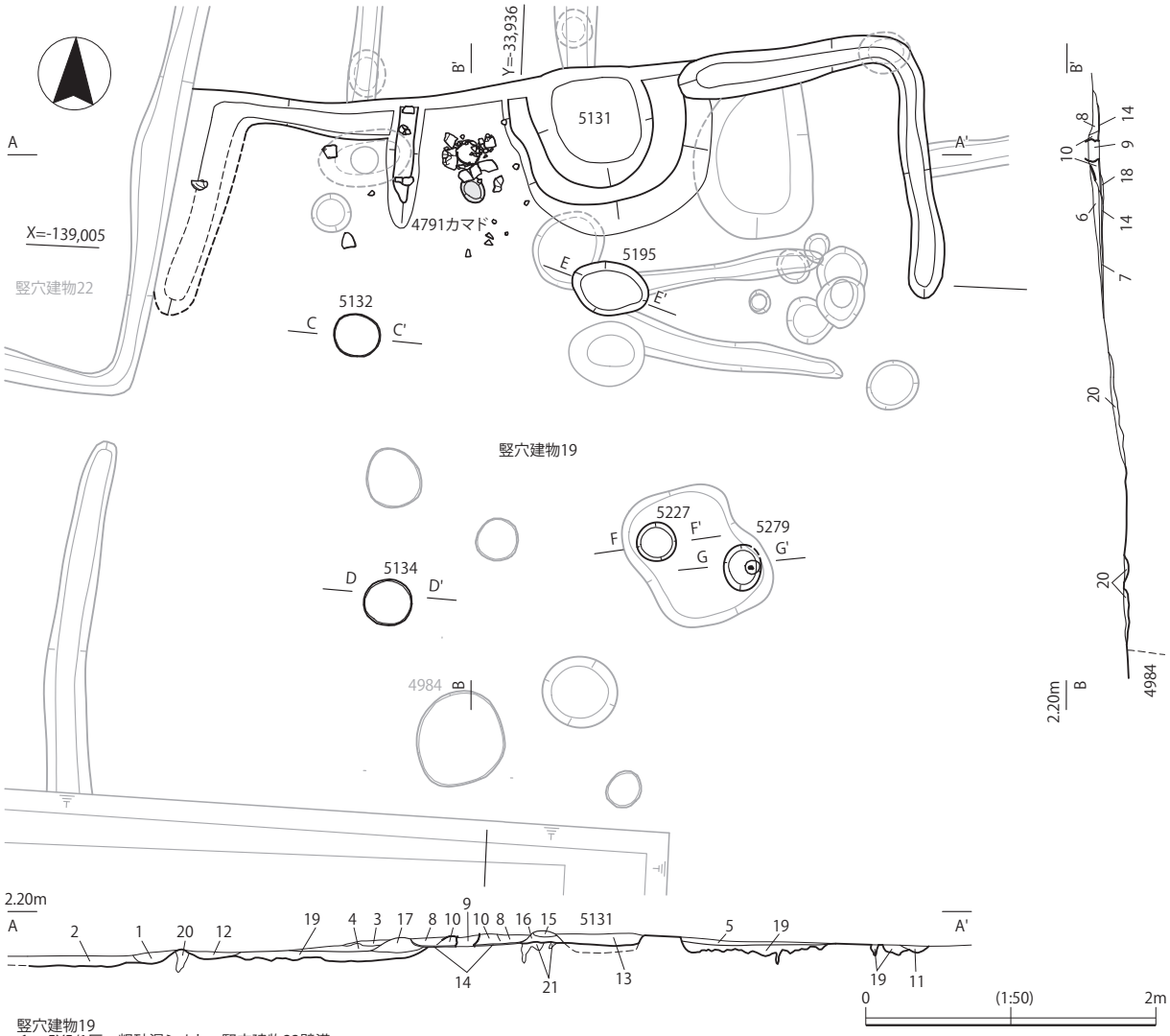
竪穴建物 19（図 147・151 ～ 154、図版 9・60・65・71）

竪穴建物 18 の南側で検出された。竪穴建物 18 と切り合い関係があり、竪穴建物 19 が新しい。斜面地に立地する竪穴建物で、土壌化の影響により、竪穴建物北側を検出するに留まった。竪穴建物 22 と接して検出されたが、切り合い関係は不明である。西側の壁溝は、検出時から不明瞭であった部分で、カマド、主柱穴と東側壁溝の位置関係から、調査後に誤認であった可能性が高いと判断され、図 151 では点線で表記した。

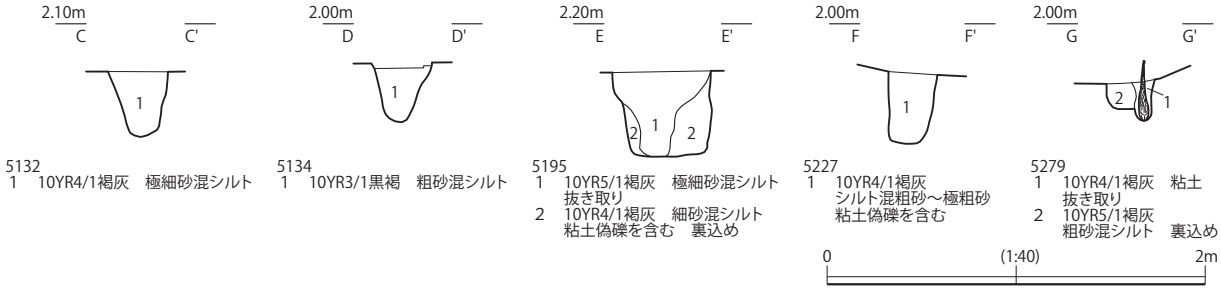
竪穴建物 19 の規模は、北辺で 5.1 m以上、南北の規模は不明である。南東側の主柱穴は、5227 柱穴と 5279 柱穴を候補とした。位置的に 5227 柱穴が主柱穴となる可能性が高いと考えられる。5279 柱穴以外は、すべて柱が抜き取られていた。

4791 カマドは、竪穴建物北辺の中央でカマド付属施設と考えられる 5131 土坑とともに検出された。規模は、長さ 0.9 m、幅 1.1 mである。カマド中央では、土師器甕を用いた支脚が検出されており、支脚周辺、炭化物を多量に含むシルト（以下、炭層）の直上からは、カマド本体の崩落土や土器片が出土した。カマド本体は、加工時に若干掘り込んだ部分を整地した後、基盤層に由来する砂層を突き固めて構築される。西側部分の基底面に凹凸が認められることから、加工時の掘り込みを想定したが、竪穴建物構築前に斜面地であった部分を整地した可能性もある。竪穴建物 19 西側に竪穴建物 22 があったため検証できなかった。カマドの支脚南側では、炭層を除去した段階で、火床が検出された。被熱を受けた細砂混シルトで構築される。遺存状況が悪く、火床構築時の掘り込みも浅いものとなっており、かろうじて確認できる程度であった。カマド前面、掻き出し口は、土壌化の影響により不明で、複数回に渡る精査作業でも土壌層中に炭層は確認できなかった。

5131 土坑は、4791 カマドの東側で検出したカマド付属施設である。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.8m、深さ 0.09m である。ドーナツ状に土手状の高まりが伴う。この土手は、4791 カマド袖部を共有するもので、東側は基盤層を削り残したものが利用される。平面的に、削り残した部分が土手のどの範囲まで広がっているか確認できなかったが、この削り出されて構築された土手は、カマド構築時の企画性が象徴されるものである。埋土は土壌に由来する細砂混シルトで、炭化物などの含有物は含まれず、泥質の土ではないことから、貯水目的の施設ではなかったようである。5131 土坑からは、土師



竪穴建物19
1　5Y5/1灰　粗砂混シルト　竪穴建物22壁溝
2　10YR3/2黒褐　粗砂混シルト　竪穴建物22床面・加工時形成層
3　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト
4　10YR4/2灰黄褐　極細砂混シルト　粗砂を少量含む
5　10YR3/2黒褐　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む
6　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト
7　10YR3/2黒褐　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む
8　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　シルト偽礫含む　カマド崩落土
9　10YR5/3にぶい黄褐　細砂混シルト　支脚内埋土
10　10YR3/2黒褐　細砂混シルト　粗砂～極粗砂（5-2b層）を少量含む
11　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト　竪穴建物19壁溝埋土
12　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粗砂を多量含む　竪穴建物19壁溝埋土
13　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　5131土坑埋土
14　10YR2/1黒　シルト　炭化物を多量に含む　カマド機能時形成層
15　10YR4/3にぶい黄褐　粗砂混シルト　カマド本体
16　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　カマド本体
17　10YR3/2黒褐　極細砂混シルト　粗砂微量含む　カマド本体
18　10YR3/3暗褐　極細砂混シルト　炭化物少量含む　火床
19　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　竪穴建物19床面・加工時形成層
20　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　竪穴建物19床面・加工時形成層
21　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　粗砂～極粗砂（5-2b層）を少量含む　古土壌の名残



5132
1　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト

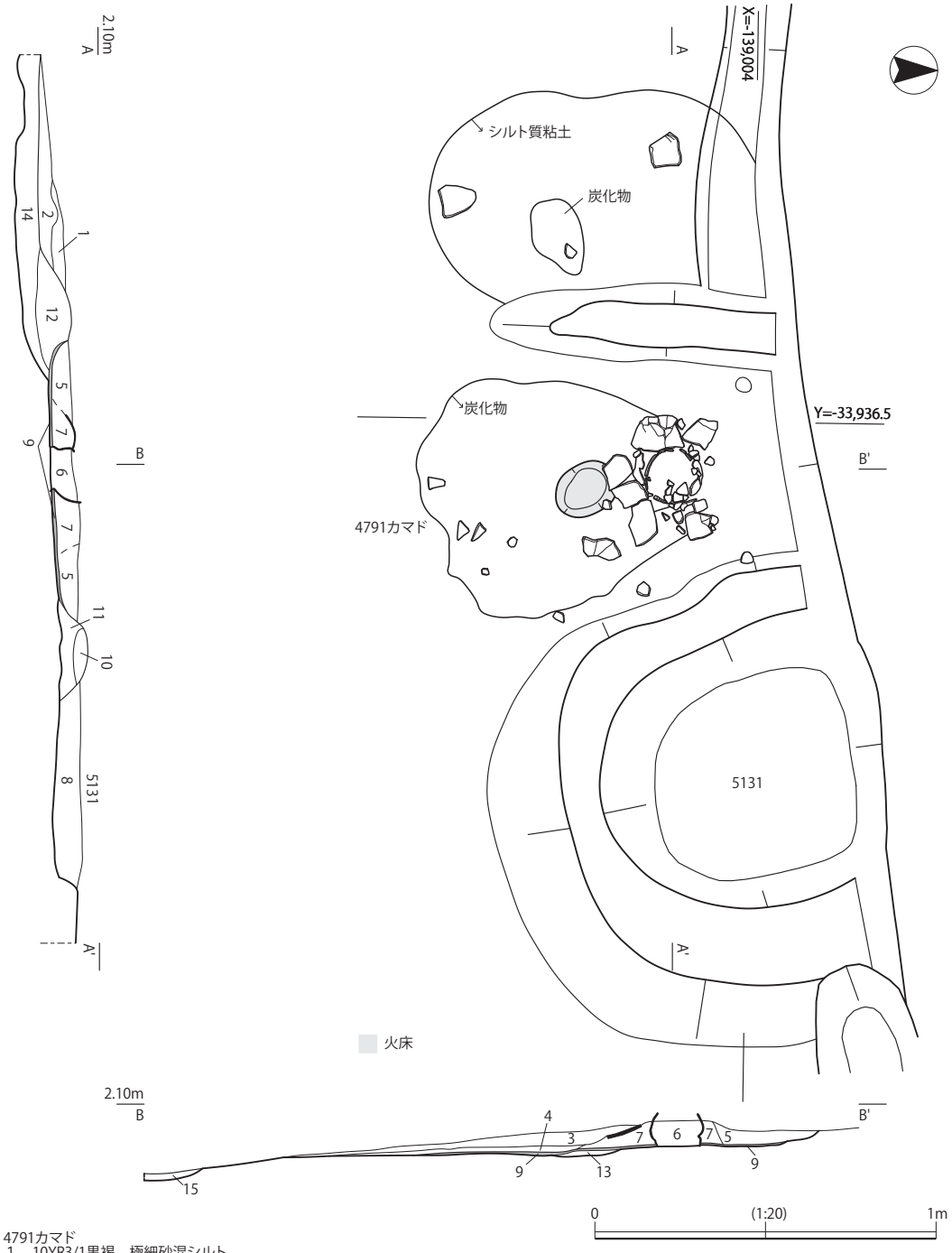
5134
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト

5195
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　粘土偽礫を含む　裏込め

5227
1　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　粘土偽礫を含む

5279
1　10YR4/1褐灰　粘土　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　裏込め

図 151　1－5区　竪穴建物 19 平・断面



4791カマド
1　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト
2　10YR4/2灰黄褐　極細砂混シルト　粗砂を少量含む
3　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト
4　10YR3/2黒褐　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む
5　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　シルト偽礫含む　4791カマド崩落土
6　10YR5/3にぶい黄褐　細砂混シルト　支脚内埋土
7　10YR3/2黒褐　細砂混シルト　粗砂～極粗砂(5-2b層)を少量含む
8　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　5131土坑埋土
9　10YR2/1黒　シルト　炭化物を多量に含む　4791カマド機能時形成層
10　10YR4/3にぶい黄褐　粗砂混シルト　4791カマド本体
11　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　4791カマド本体
12　10YR3/2黒褐　極細砂混シルト　粗砂微量含む　4791カマド本体
13　10YR3/3暗褐　極細砂混シルト　炭化物少量含む　火床
14　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　床面・加工時形成層
15　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　床面・加工時形成層

図 152　1－5区　竪穴建物 19　4791 カマド平・断面

図 153　1－5区　竪穴建物 19 加工面平面

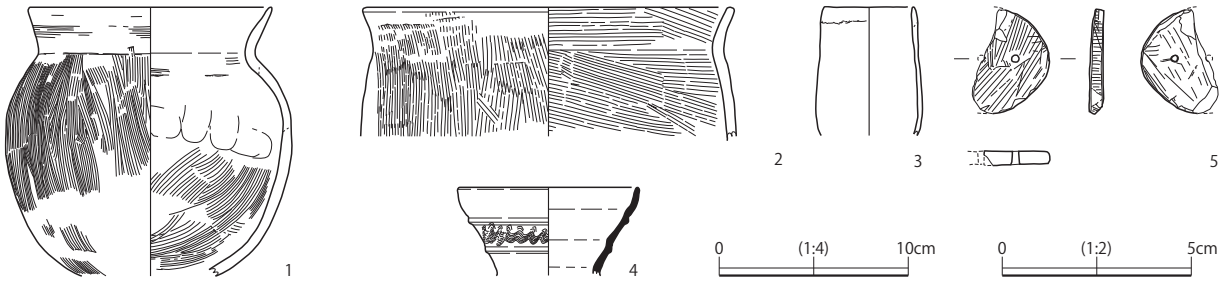


図 154　1－5区　竪穴建物 19 出土遺物

器甕などの細片が出土しているが、4791 カマド内のように遺物も出土しておらず、その機能は不明である。

加工面は、4791 カマドが構築された部分が最も高く、5131 土坑の南側は溝状に低くなっている。図 153 は、5131 土坑の土手状の高まりを除去した段階で加工面を図化したものである。

なお、5195 柱穴の東側、竪穴建物 19 の南東側では、竪穴建物の壁溝となる可能性のある溝が断続的ながら検出されており、竪穴建物 19 以南にも、竪穴建物が建てられたと考えられる。

竪穴建物 19 から出土した遺物は、図 154 －1 ～ 5 がある。1 は支脚として用いられた土師器甕である。体部外面は縦方向のハケ調整、体部内面は上位がナデ調整、下位がハケ調整される。2 は土師器甕で、細片を図化した。内外面はハケ調整される。3 は製塩土器である。内外面はナデ調整される。4 は須恵器壺の口縁部である。2 条の突帯間に波状文が施される。5 は滑石製有孔円板である。側面は、縦方向に研磨される。4 は TK23 型式に比定できると考えており、3 の製塩土器もナデ調整されるものであることから、出土遺物の時期は、古墳時代中期後葉に比定される。

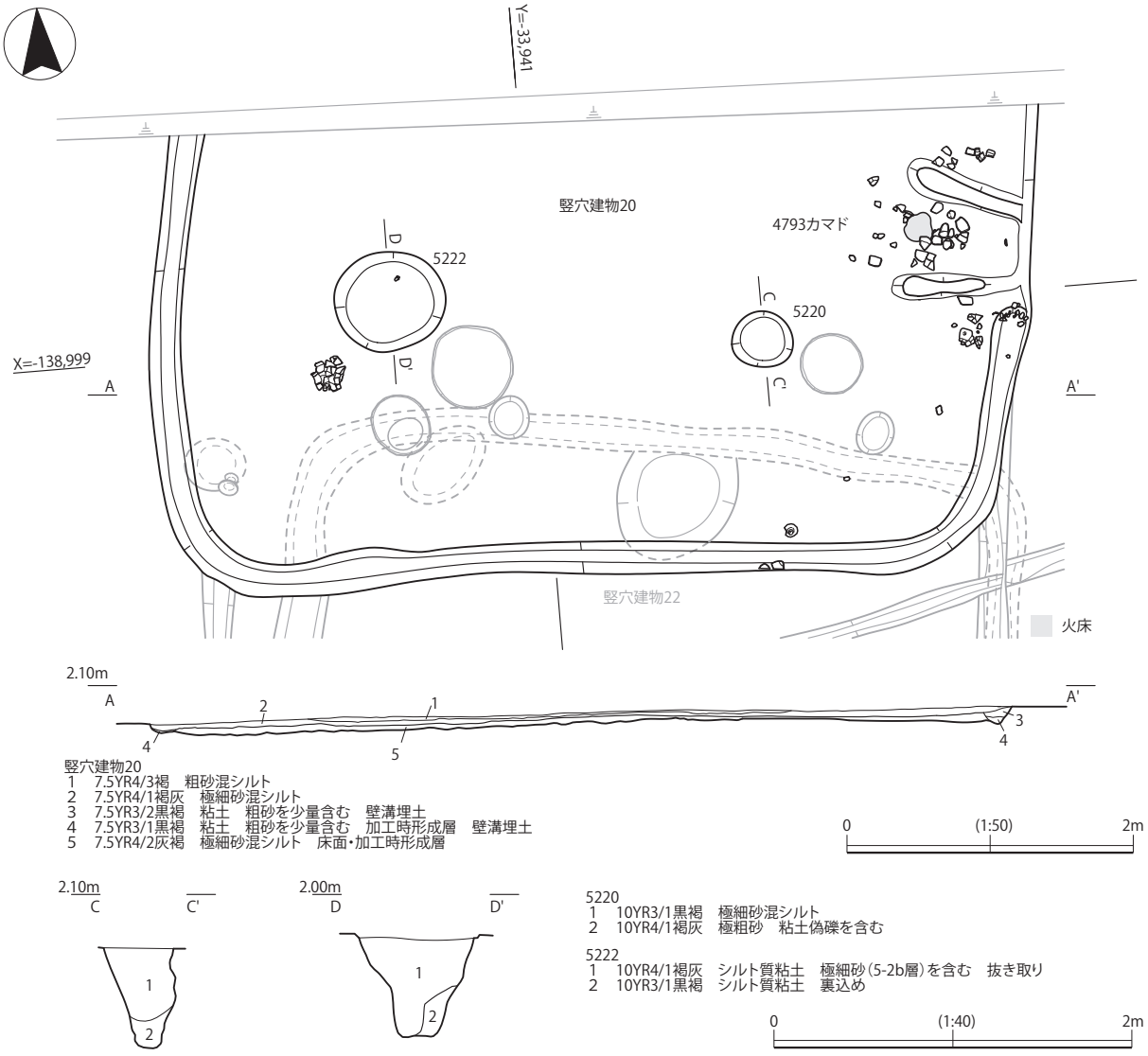


図 155　1－5区　竪穴建物 20 平・断面

竪穴建物 20（図 147・155 ～ 158、図版 10・70・71）

竪穴建物 18 の北西で検出された。竪穴建物 22 と切り合い関係があり、竪穴建物 20 の方が新しい。竪穴建物の南側部分が検出されており、北側は調査地外となる。規模は、南辺で 6.1 mである。主柱穴は、土壌化の影響により床面直上では確認することができず、床面もしくは基底面まで下げた状態で検出された。竪穴建物 10 と同じく、柱穴の平面形より大きく抜き取り穴を設けて柱はすべて抜き取られていた。

4793 カマドは、竪穴建物の東側で検出された。東辺の中央部に配置されたと考えられる。検出時には、カマド本体崩落土の粘土塊が竪穴建物の東側全体で確認された。規模は、カマド本体で長さ 0.9 m、幅 1.0 mである。支脚はカマド内で見出されなかった。カマド内では、カマド機能時形成層の炭化物を多量に含んだ粘土質シルト（以下、炭層）の直上で、土師器の破片やカマドの崩落土が検出された。また、カマドの南北でも、土師器の破片が出土しており、一部は壁溝内に落ち込んだ状態で出土した。

また、カマド内では、炭層を除去した段階で火床が検出された。火床は、椀状に掘りくぼめた部分を極細砂混シルトで成形した後、粒径が細かいシルト質粘土を充填して構築される。上部を構成するシルト質粘土は被熱を受けた粘土塊を再利用したものと考えられ、カマド使用時の被熱によって硬化面をも

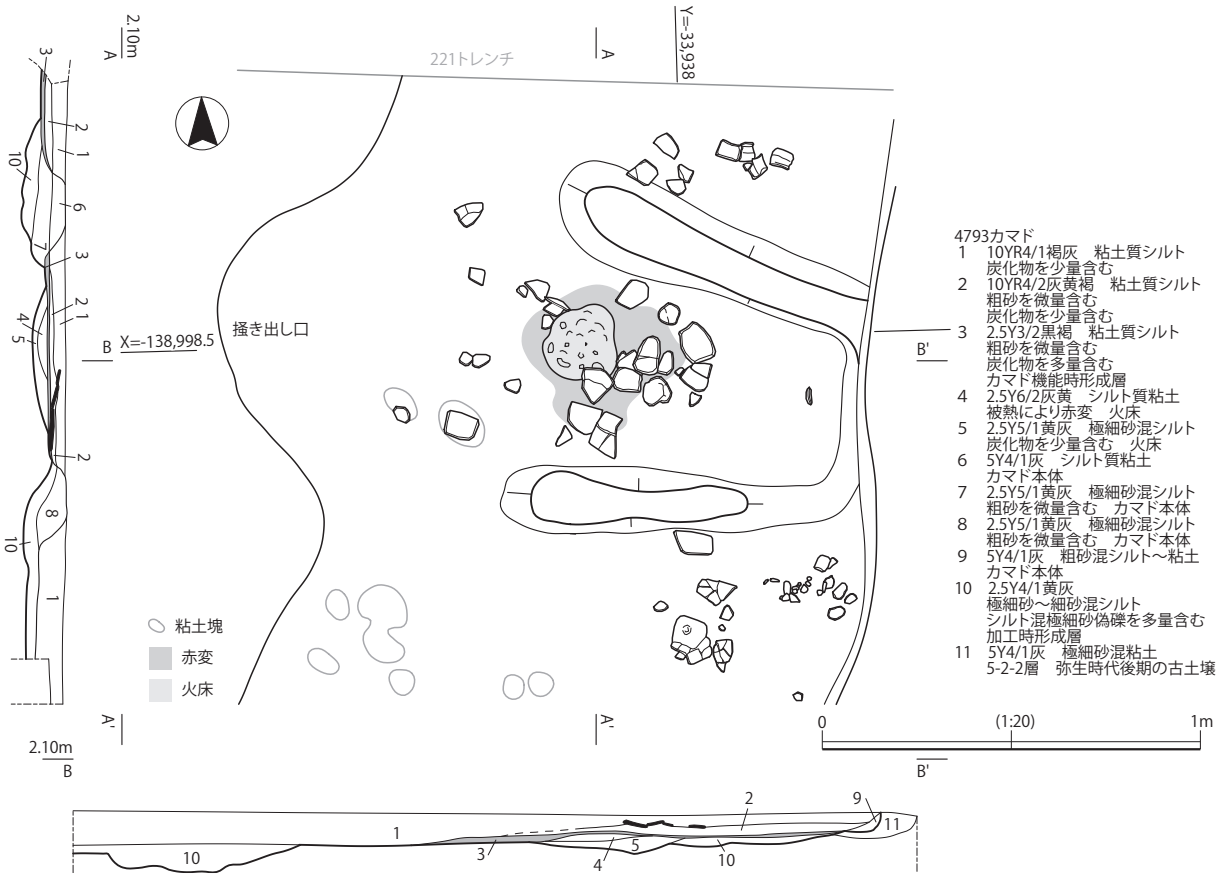


図 156　1－5区　竪穴建物 20　4793 カマド平・断面

つ。火床周辺も被熱を受けて、赤変している状況が観察された。

また、竪穴建物 20 の南西側では、8002 溝が検出された。竪穴建物 20 の壁溝埋土と 8002 溝埋土は類似しており、竪穴建物 20 の排水溝であった可能性がある。竪穴建物 23 が検出された範囲で途切れており、全容は不明である。

加工面は、カマドを検出した範囲が高く、南西隅にかけて低くなる。弥生時代中期中葉以前に堆積した 6 － 4 b 層と弥生時代後期に堆積した 5 － 2 － 2 層の上部に形成された古土壌が収斂する場所に当たっており、この斜面地を加工して竪穴建物 20 は掘削されており、加工面の状況は地形を反映したものである。南側で基底面が高い部分は、出入り口のような施設を反映したものか。

なお、主柱穴の 5220・5222 柱穴の南東側では、近接した位置で柱穴が確認されている。他の竪穴建物の事例から、建て替えがあった可能性がある。ただし、壁溝や床面で建て替えの痕跡は確認されなかった。4793 カマドの廃絶時には、カマド本体由来のブロック土で竪穴建物東側全体が埋め戻されており、竪穴建物内を整地したような状況であったことから、未調査部分を含めた検証が必要である。

竪穴建物 20 から出土した遺物の内、図 158 － 1 ～ 9 を図示した。 1 は須恵器高坏脚部である。脚外面の突帯はややシャープに成形される。内外面は回転ナデ調整によって仕上げられる。 2 は製塩土器である。外面は磨滅するが、板ナデ調整を行った可能性がある。内面は指ナデされて仕上げられており、その痕跡が明瞭に残る。 3 ・ 4 は土師器高坏で、支脚として用いられた可能性がある。 3 は有稜高坏の坏部で、内外面は磨滅する。 4 は内面を工具（板状工具か）によって調整される。

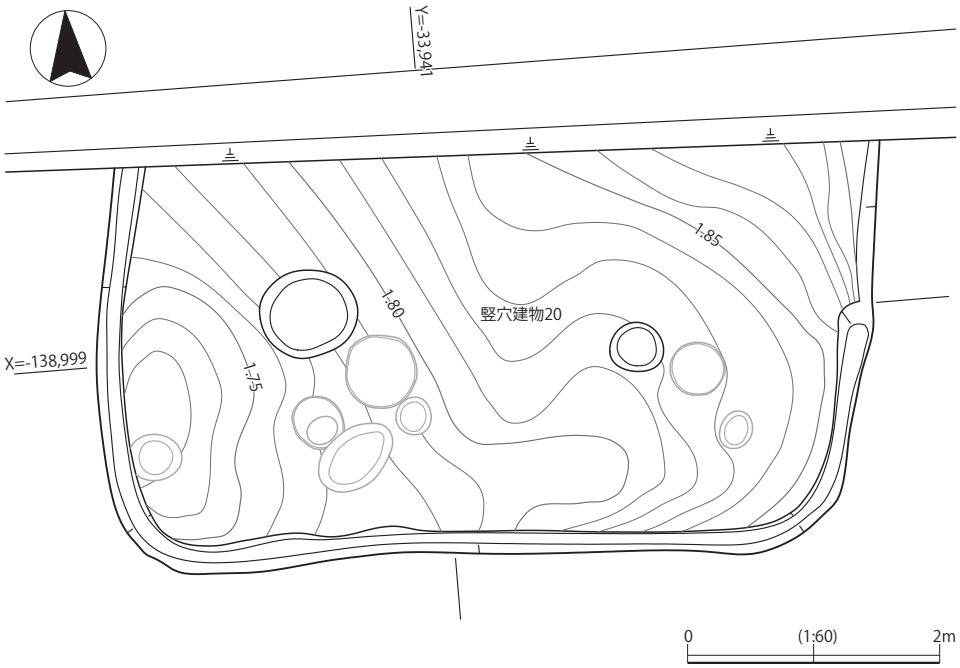


図 157　1－5区　竪穴建物 20 加工面平面

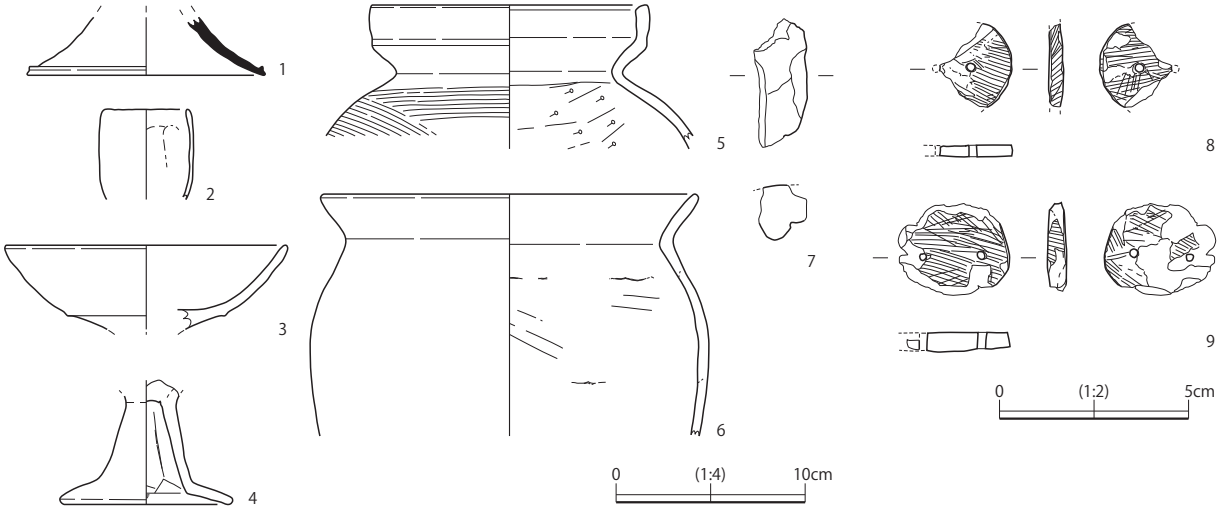
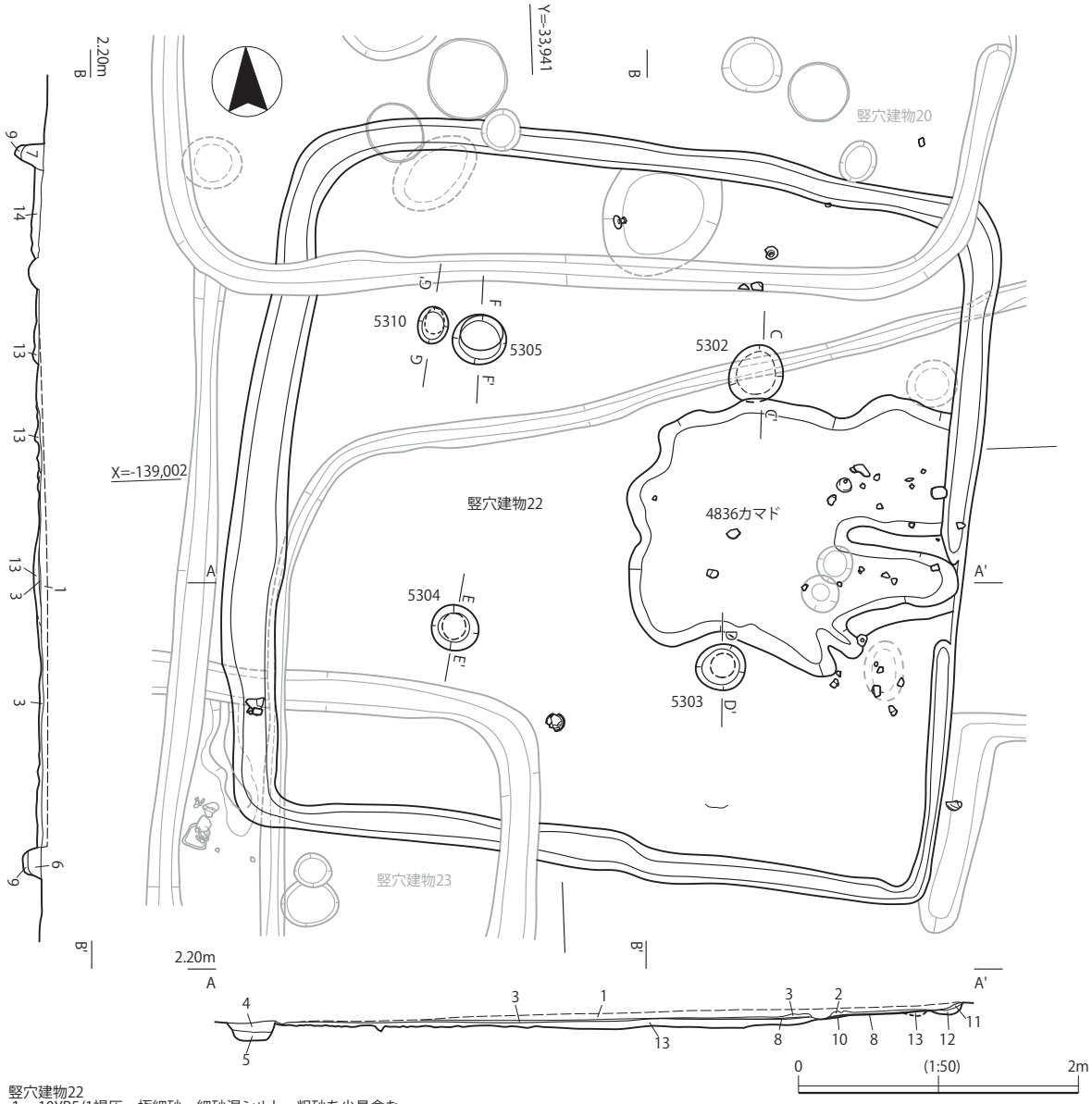


図 158　1－5区　竪穴建物 20　4793 カマド出土遺物

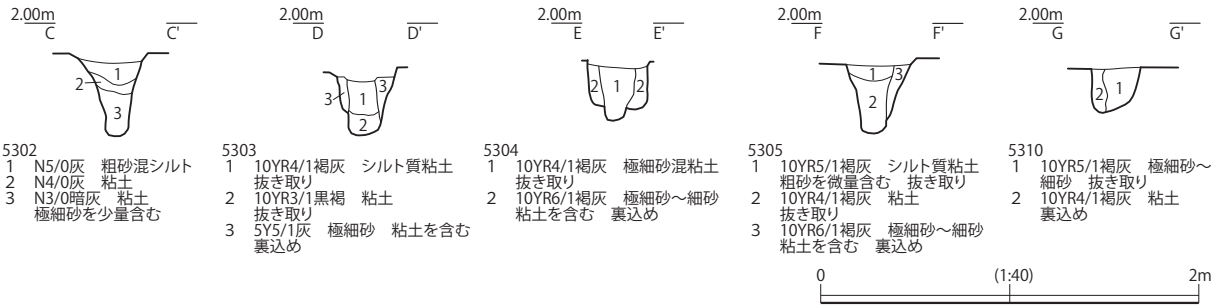
5は土師器複合口縁壺である。外面肩部には横方向のハケ調整が施される。内面は右上がりのヘラケズリで仕上げられる。6は土師器甕である。外面は磨滅、内面は板ナデの痕跡がわずかに残る。7は鞴羽口の破片である。外径に近い部分がかろうじて残存したものを図化した。被熱を受け、外径に近い部分が黒変する。胎土は粗い。全体に損耗が著しく、調整は不明である。鍛冶関連遺物が多量に出土した 4967 溝が南側にあり、竪穴建物から出土した鍛冶関連遺物として注目される。

8・9は滑石製有孔円板である。8は側縁は斜位に研磨されており、形状は多角形状を呈す。片側の貫通孔は、かろうじてその痕跡を留める。9は、楕円形を呈する有孔円板で、表裏面には研磨の痕跡が横位と斜位に残る。側縁の研磨は斜位に行われ、8と同様、多角形状を呈する。1の須恵器は TK208 ～ 23 型式に比定しており、共伴する土師器も同段階のものとして矛盾しない。

竪穴建物 20 の時期は古墳時代中期中葉～後葉に位置付けられ、古墳時代中期中葉、TK208 型式に操業したと考えられ、鍛冶関連施設である 4967 溝と同じ時期の遺構と考えられる。



竪穴建物22
1　10YR5/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む
2　7.5YR3/1黒褐　細砂混シルト　粗砂を少量含む　シルト質粘土（カマド本体崩落土）を少量含む
3　7.5YR4/1褐灰　極細砂混粘土　粗砂を微量含む　カマド本体崩落土
4　2.5Y4/1黄灰　シルト質粘土　壁溝埋土
5　2.5Y5/1黄灰　シルト質粘土　粗砂を多量含む　壁溝埋土
6　2.5Y4/1黄灰　シルト　粗砂　壁溝埋土
7　2.5Y5/1黄灰　粗砂混シルト　壁溝埋土
8　7.5YR2/1黒　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
9　5Y4/1灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　加工時形成層　壁溝埋土
10　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質粘土　赤変　火床
11　7.5YR3/1黒褐　シルト質粘土　カマド本体
12　7.5YR5/1褐灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　床面・加工時形成層
13　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト　床面・加工時形成層



5302
1　N5/0灰　粗砂混シルト
2　N4/0灰　粘土
3　N3/0暗灰　粘土　極細砂を少量含む

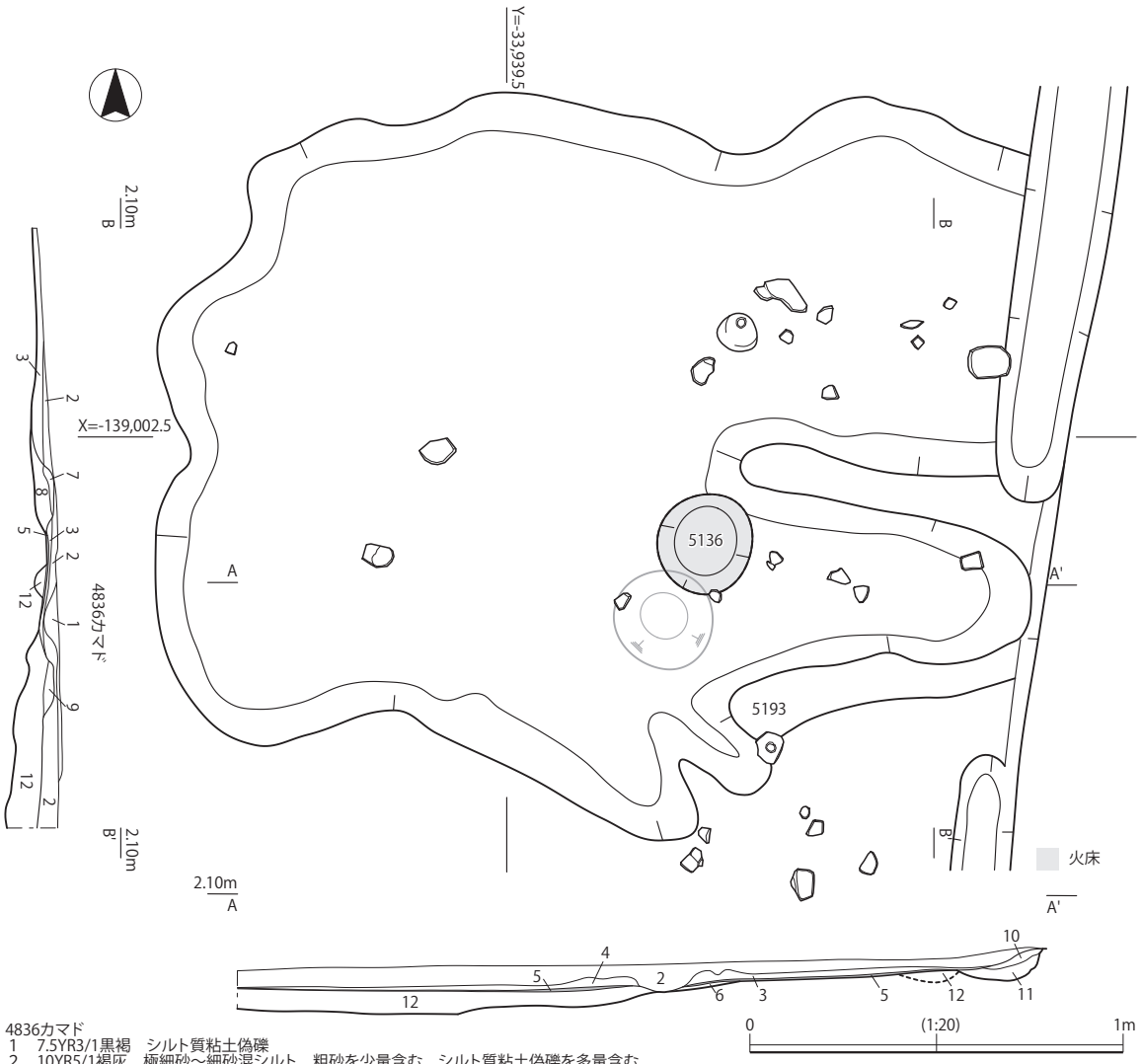
5303
1　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　粘土　抜き取り
3　5Y5/1灰　極細砂　粘土を含む　裏込め

5304
1　10YR4/1褐灰　極細砂混粘土　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　極細砂～細砂　粘土を含む　裏込め

5305
1　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　粘土　抜き取り
3　10YR6/1褐灰　極細砂～細砂　粘土を含む　裏込め

5310
1　10YR5/1褐灰　極細砂～細砂　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　粘土　裏込め

図 159　1－5区　竪穴建物 22 平・断面



4836カマド
1　7.5YR3/1黒褐　シルト質粘土偽礫
2　10YR5/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を少量含む　シルト質粘土偽礫を多量含む
3　7.5YR3/1黒褐　細砂混シルト　粗砂を少量含む　シルト質粘土(カマド本体崩落土)を少量含む
4　7.5YR4/1褐灰　極細砂混粘土　粗砂を微量含む　カマド本体崩落土
5　7.5YR2/1黒　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
6　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質粘土　赤変　火床
7　10YR5/2灰黄褐　シルト質粘土　カマド本体
8　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト偽礫　カマド本体
9　10YR5/2灰黄褐　シルト質粘土　粗砂を微量含む　カマド本体
10　7.5YR3/1黒褐　シルト質粘土　カマド本体
11　7.5YR5/1褐灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む　床面・加工時形成層
12　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト　床面・加工時形成層

図 160　1－5区　竪穴建物 22　4836 カマド平・断面

竪穴建物 22（図 147・159 ～ 162、図版 10・65）

竪穴建物 20 の南側で検出された。土壌化が顕著な場所であったため、当初、南側の壁溝の位置を誤認したが、調査の進展に伴い、壁溝の正確な位置が把握できた。竪穴建物 20・23 と切り合い関係があり、竪穴建物 20・23 より古い段階に機能した。平面形は方形で、一辺 5.1 ～ 5.2 mである。

竪穴建物東辺中央で、4836 カマドが検出された。カマドは、本体の長さ 0.9 m、幅 0.8 mである。カマドの北側は、床面が浅く掘りくぼめられており、カマド本体の崩落土とともに、土師器の破片が出土した。掻き出し口の底面と高さが同じで、カマド内の残滓を集めるような機能があったものか。

また、カマド機能時形成層の、炭化物を多量に含むシルトを除去した段階で、火床が検出された。火床は、泥質の土で構築されており、被熱を受けて赤変している状況が確認できた。なお、竪穴建物 22 の検出時、4836 カマド周辺では、カマドの掻き出し口を中心にカマド崩落土が床面全体に薄く堆積し

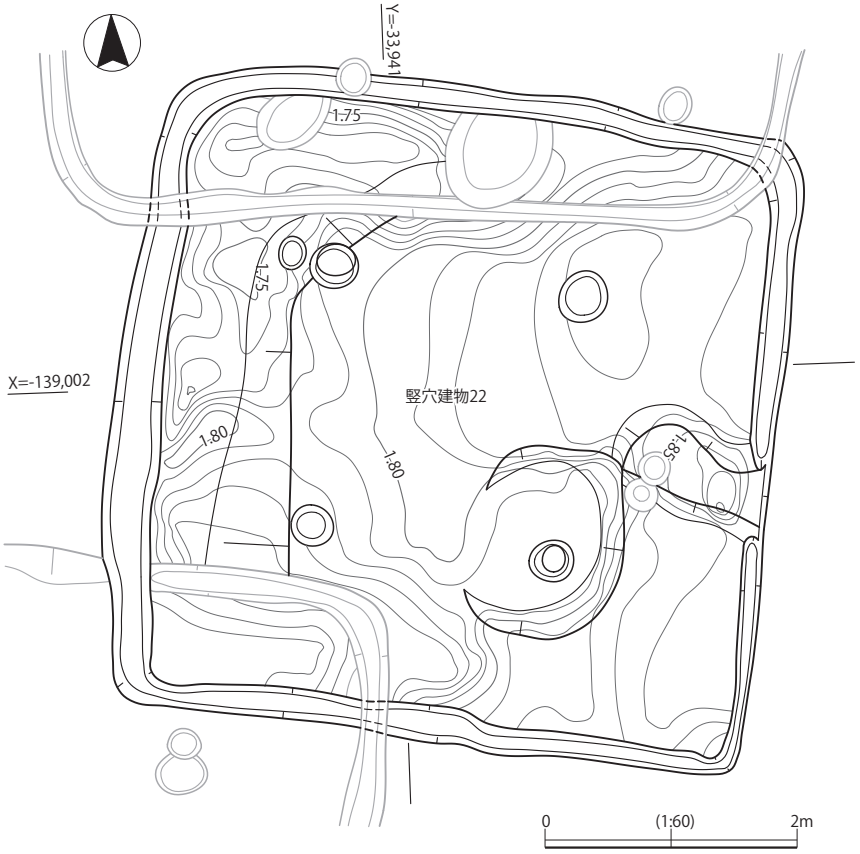


図 161　1－5区　竪穴建物 22 加工面平面

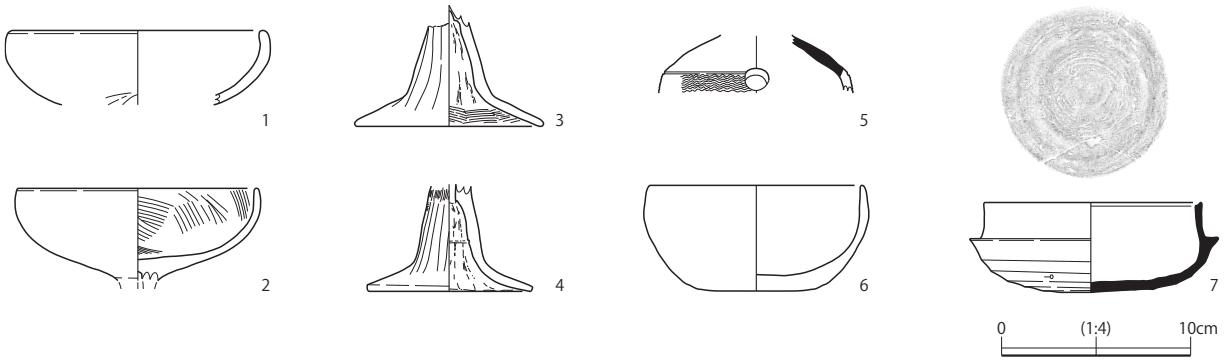


図 162　1－5区　竪穴建物 22 出土遺物

ている状況が検出されており、竪穴建物廃絶以降にカマドを解体して整地されたことが判明している。

加工面は、カマドを検出した範囲が高く、北西及び南西隅が低い。竪穴建物の南側中央が高くなっており、竪穴建物 20 と同様、竪穴建物の出入り口を意識したものか。

竪穴建物 22 から出土した遺物の内、図 162 －1～7 を図示した。1～4 は土師器高坏である。1・2 は椀形高坏の坏部で、1 の口縁部は内傾気味に立ち上がる。3・4 は床面掘削時に出土したもので、外面はヘラ状工具によるナデが丁寧に施される。5 は須恵器鼈で、波形が小さい波状文が施される。細片を図化。6 は土師器鉢で、平底に成形される。外面はナデ調整、内面は磨滅しており詳細は不明である。7 は須恵器坏身である。内面には同心円文当具痕が残る。TK208 型式。4967 溝から出土した須恵器坏身と比較し、同時期に位置付けられる資料で、TK216 型式まで遡らないと考えられる。

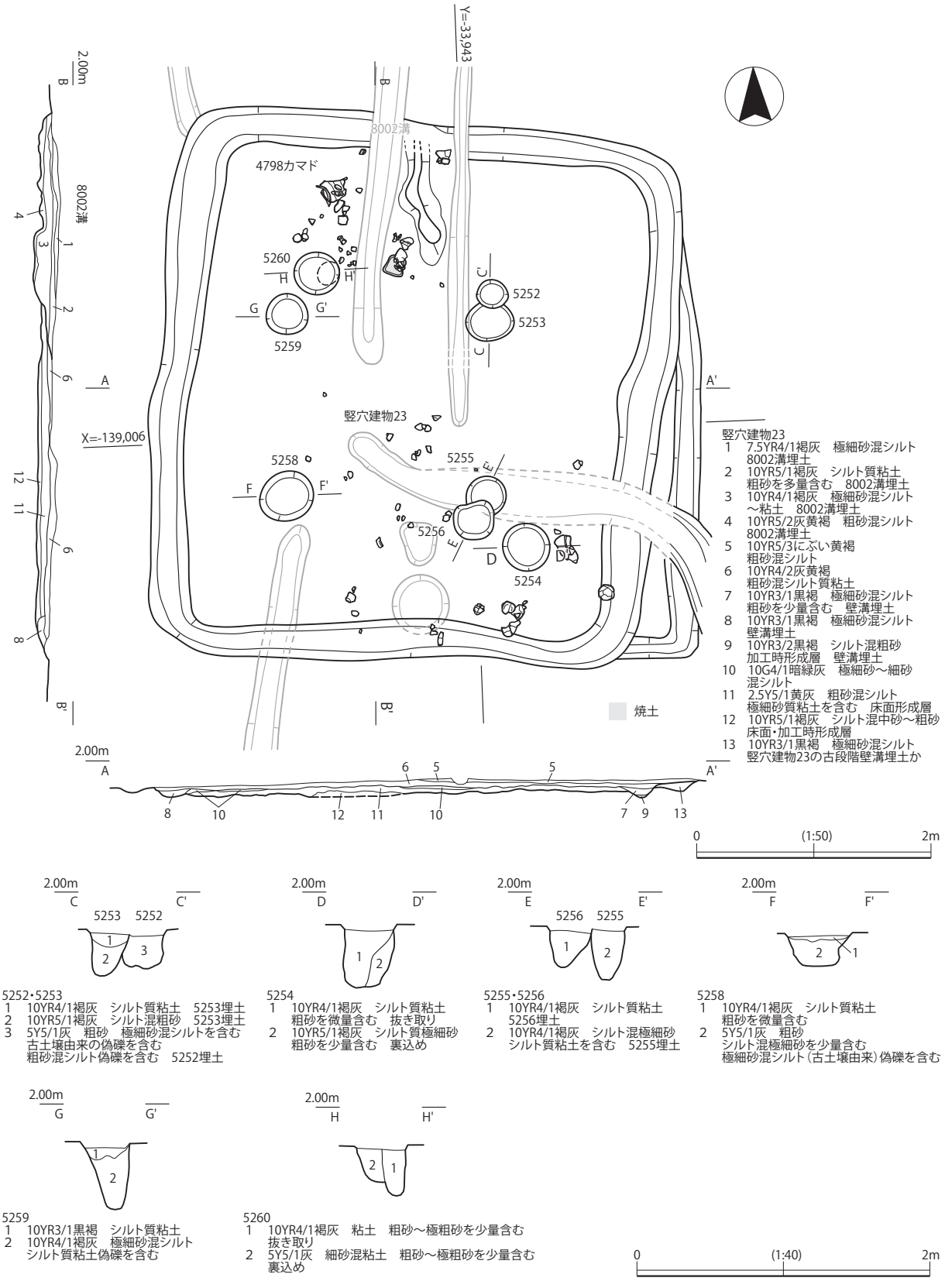


図 163　1－5区　竪穴建物 23 平・断面

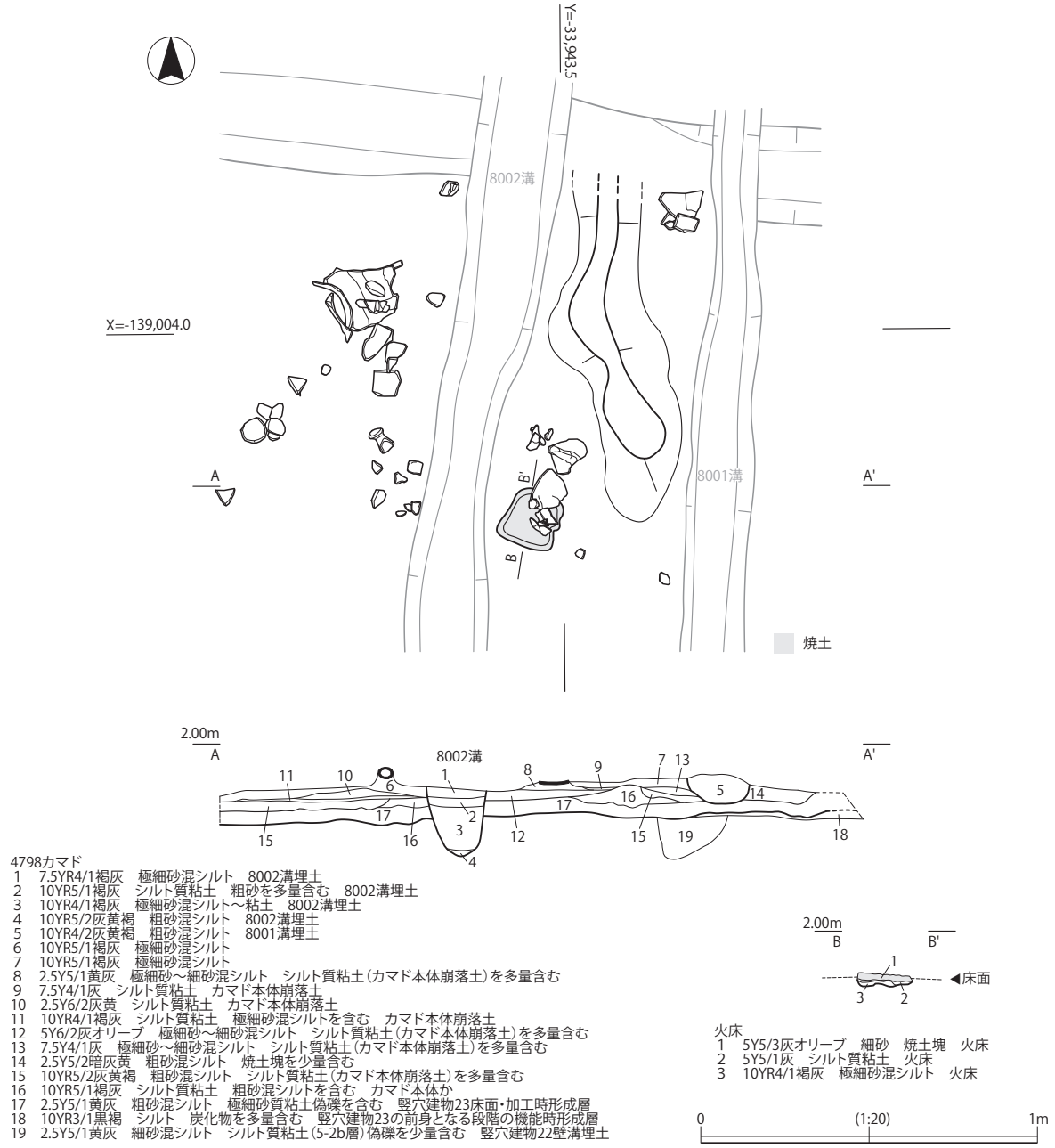


図 164　1－5区　竪穴建物 23　4798 カマド平・断面

竪穴建物 23（図 147・163 ～ 165、図版 10・60）

竪穴建物 22 の南側で検出された。建て替えが行われており、建て替え前を古段階、建て替え後を新段階として報告する。建て替え時に東側の壁溝の位置が西に移動するが、それ以外の壁溝の位置は変更されずに、古段階のものが踏襲される。主柱穴は南西の 5258 柱穴が同位置で建て替えられており、他の柱穴は位置を移動する。古段階の主柱穴は、5252・5260・(5258)・5255 柱穴が組み合って上部構造を支えたと考えられる。竪穴建物 23 の古段階・新段階の平面形は方形、規模は一辺 4.5 ～ 4.7 m である。4798 カマドを北辺中央で検出された。竪穴建物の新段階に伴うものである。カマドの規模は、長さ 1.2 m、幅 0.55 m以上である。西側は 8002 溝に切られており、カマド本体は検出されなかった。カマド本体があったと想定される場所には土器片が出土しており、竪穴建物廃絶時にカマドは破壊されたと想定している。カマド機能時形成層の炭化物を含んだ堆積物は希薄であった。支脚も確認されてお

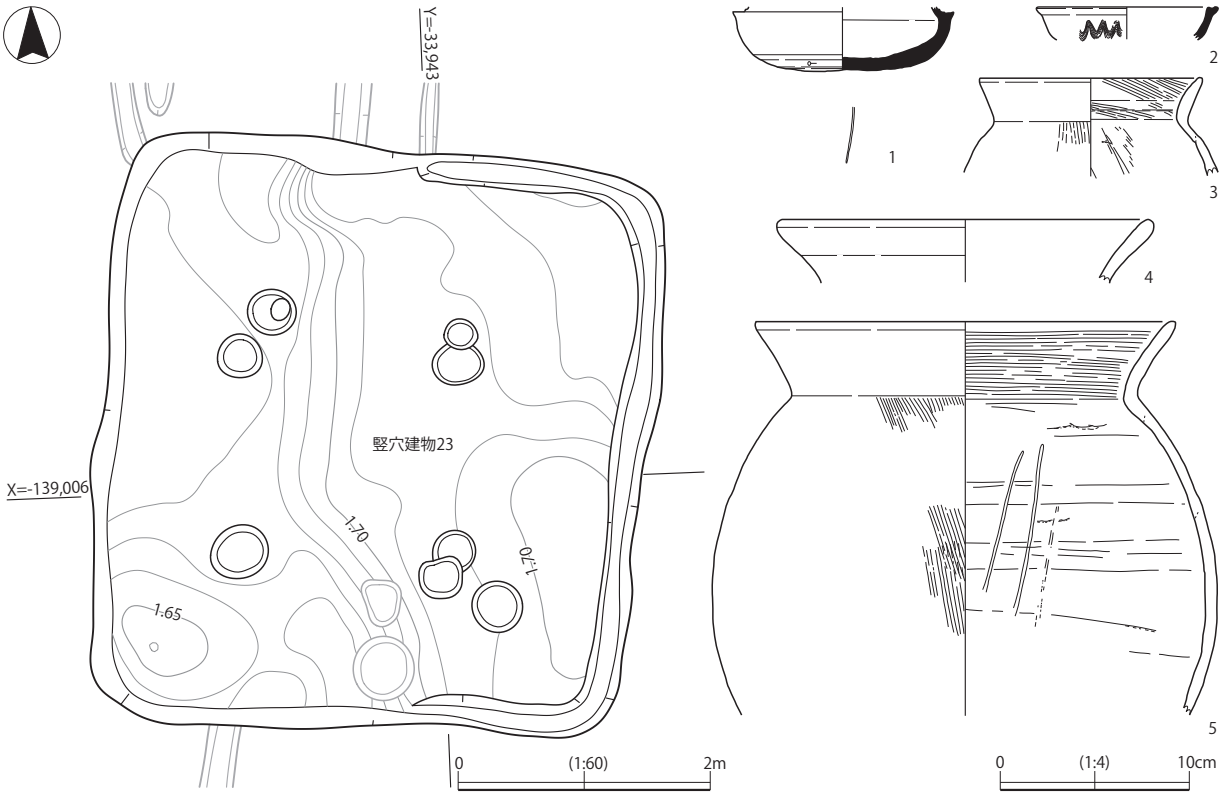


図 165　1 － 5 区　竪穴建物 23 加工面平面　出土遺物

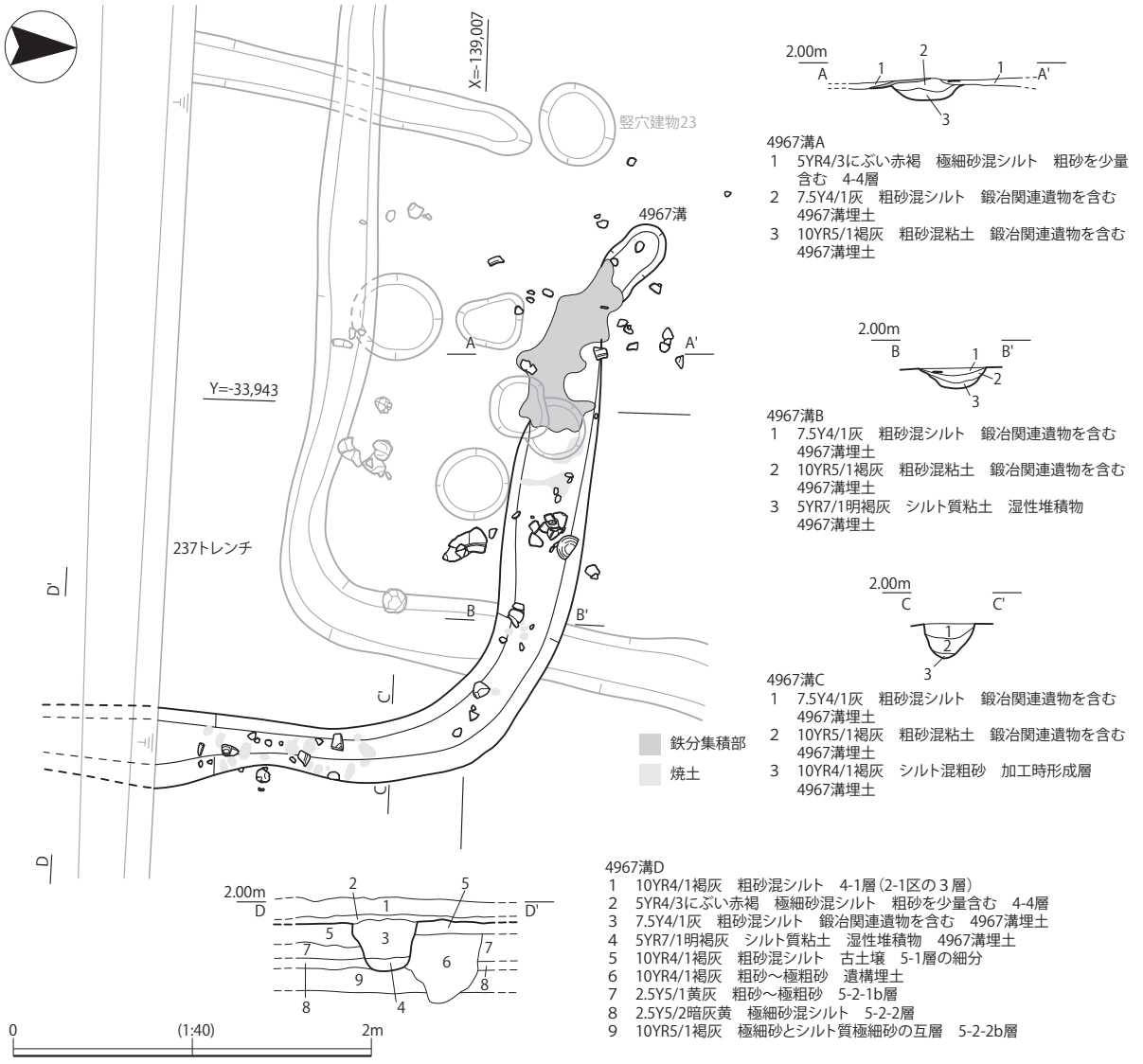
らず、カマド廃絶時に除去された可能性がある。カマド内では、床面からやや盛り上がった状態の火床が検出された。火床は、底面を椀形に掘り下げた後、基底面直上に粒径の細かい極細砂混シルト・シルト質粘土を充填した後、その上に焼土塊を突き固めて構築されていた。焼土塊は被熱を受けた粘土塊を再利用したもので、カマド機能時に被熱受け、硬化面をもつ。

竪穴建物 23 から出土した遺物の内、図 165 － 1 ～ 5 を図示した。 1 は須恵器坏身である。直接接合しないが、口縁部の細片も出土した。TK23 ～ 47 型式に位置付けられるものか。混入資料と考えられる。 2 は須恵器𤭯の口縁部か。口縁端部には受部が付く。端部より下がった位置に波状文が施される。 3 は土師器甕である。小型で、他の竪穴建物のカマドでは支脚として用いられる大きさである。 4 は弥生土器甕の口縁部で、混入資料である。 5 は土師器甕である。外面はハケ調整、内面はナデ調整し、縦方向に筋状の工具痕が残る。

4967 溝（図 147・166 ～ 170、図版 12・64・70）

竪穴建物 23 の南東部で検出された。切り合い関係は、4967 溝が新しい。古土壌の掘削中に鉄分が集積した硬化面（以下、鉄分集積部）が認識されたが、土壌化が顕著であったため、検出作業は溝周辺を掘り下げた状態で行った。平面形は北東部が「 L 」字形、鉄分集積部の西側は北西方向に緩やかに屈曲する。4967 溝の規模は、幅 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mである。埋土は、底面直上が加工時形成層のシルト混粗砂、下層がシルト質粘土、中層が粗砂混粘土、上層は土壌に由来する粗砂混シルトである。下層のシルト質粘土は湿性堆積物で、溝の南東側にのみ堆積する。

鉄分集積部は溝の西側で検出された。溝直上に形成され、上部は平坦面をなす。炉跡の可能性を考慮しつつ、断ち割りを行った結果、鉄分集積部直下に溝が連続することが判明した。鉄分集積部の形成と溝が掘削された段階には時期差があったと考えられるが、溝埋土の堆積状況から溝の埋没については各



4967溝A
1 5YR4/3にぶい赤褐　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　4-4層
2 7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土
3 10YR5/1褐灰　粗砂混粘土　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土

4967溝B
1 7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土
2 10YR5/1褐灰　粗砂混粘土　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土
3 5YR7/1明褐灰　シルト質粘土　湿性堆積物　4967溝埋土

4967溝C
1 7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土
2 10YR5/1褐灰　粗砂混粘土　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土
3 10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　加工時形成層　4967溝埋土

4967溝D
1 10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　4-1層（2-1区の３層）
2 5YR4/3にぶい赤褐　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　4-4層
3 7.5Y4/1灰　粗砂混シルト　鍛冶関連遺物を含む　4967溝埋土
4 5YR7/1明褐灰　シルト質粘土　湿性堆積物　4967溝埋土
5 10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　古土壌　5-1層の細分
6 10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂　遺構埋土
7 2.5Y5/1黄灰　粗砂～極粗砂　5-2-1b層
8 2.5Y5/2暗灰黄　極細砂混シルト　5-2-2層
9 10YR5/1褐灰　極細砂とシルト質極細砂の互層　5-2-2b層

図 166　1－5区　4967 溝平・断面

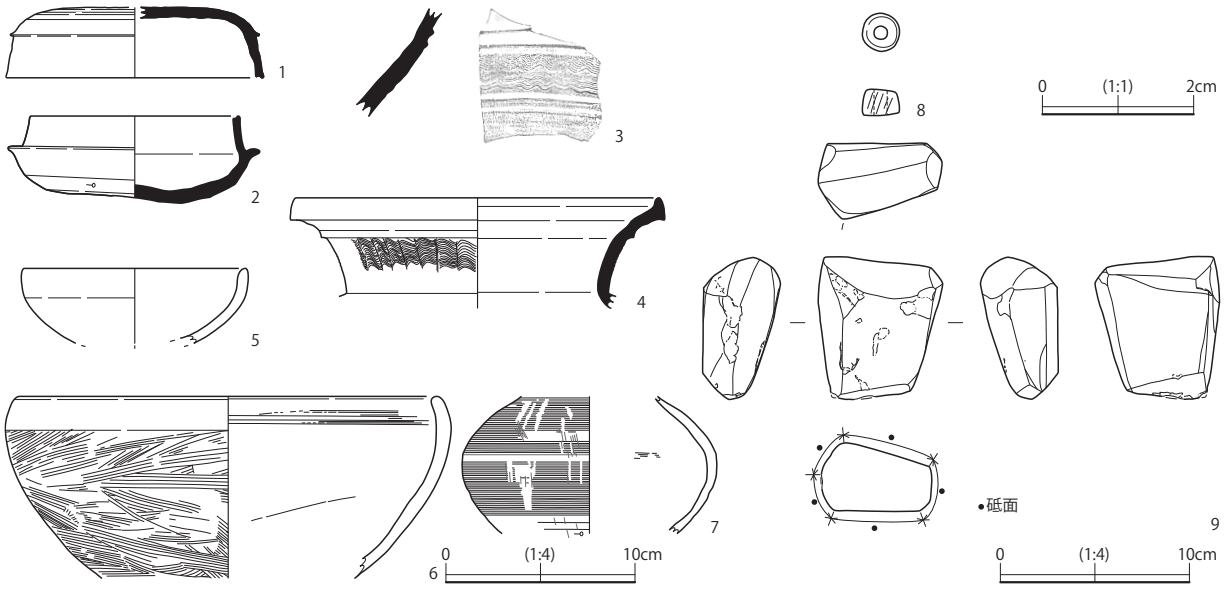


図 167　1－5区　4967 溝出土遺物（1）

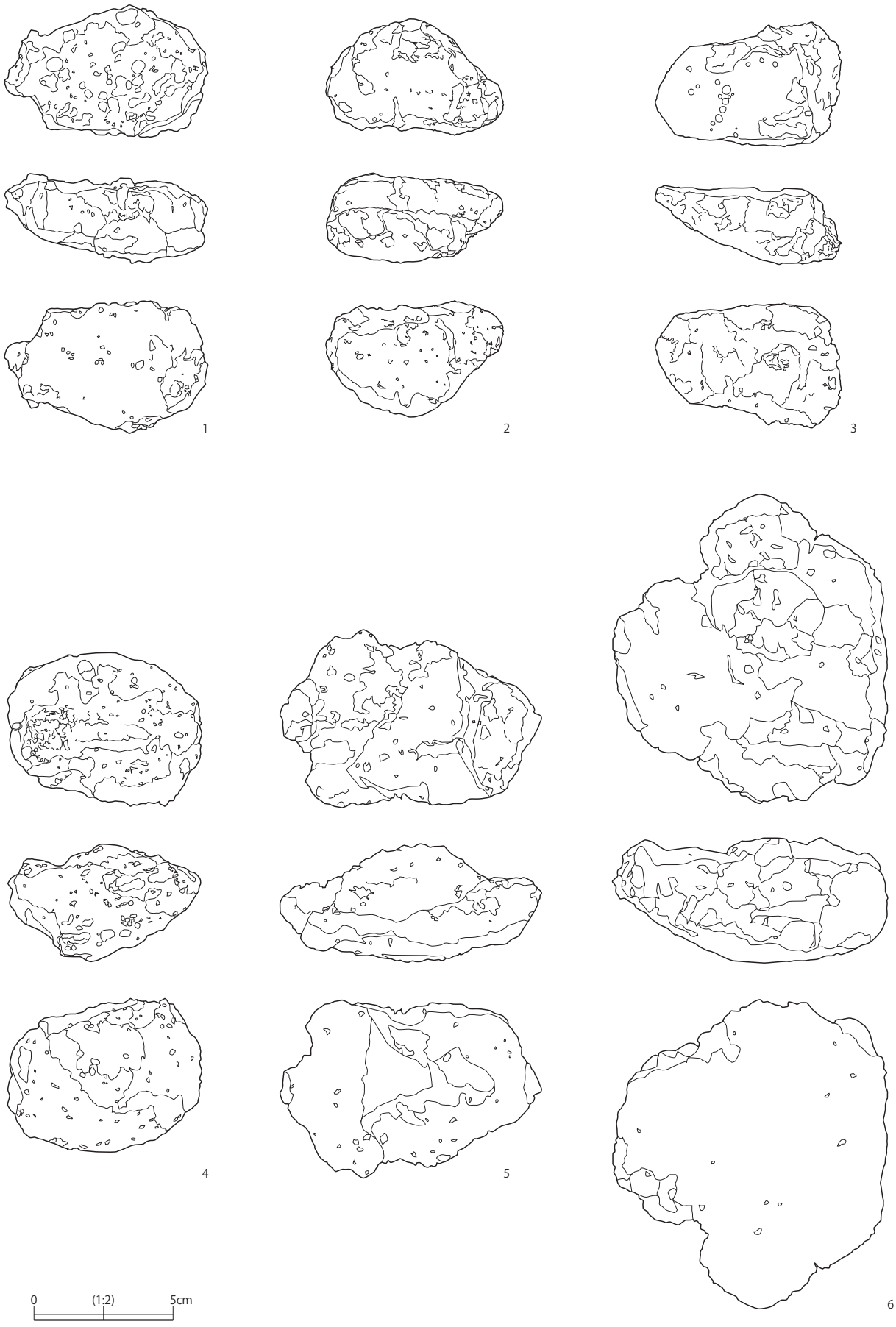


図 168　1－5区　4967 溝出土遺物（2）

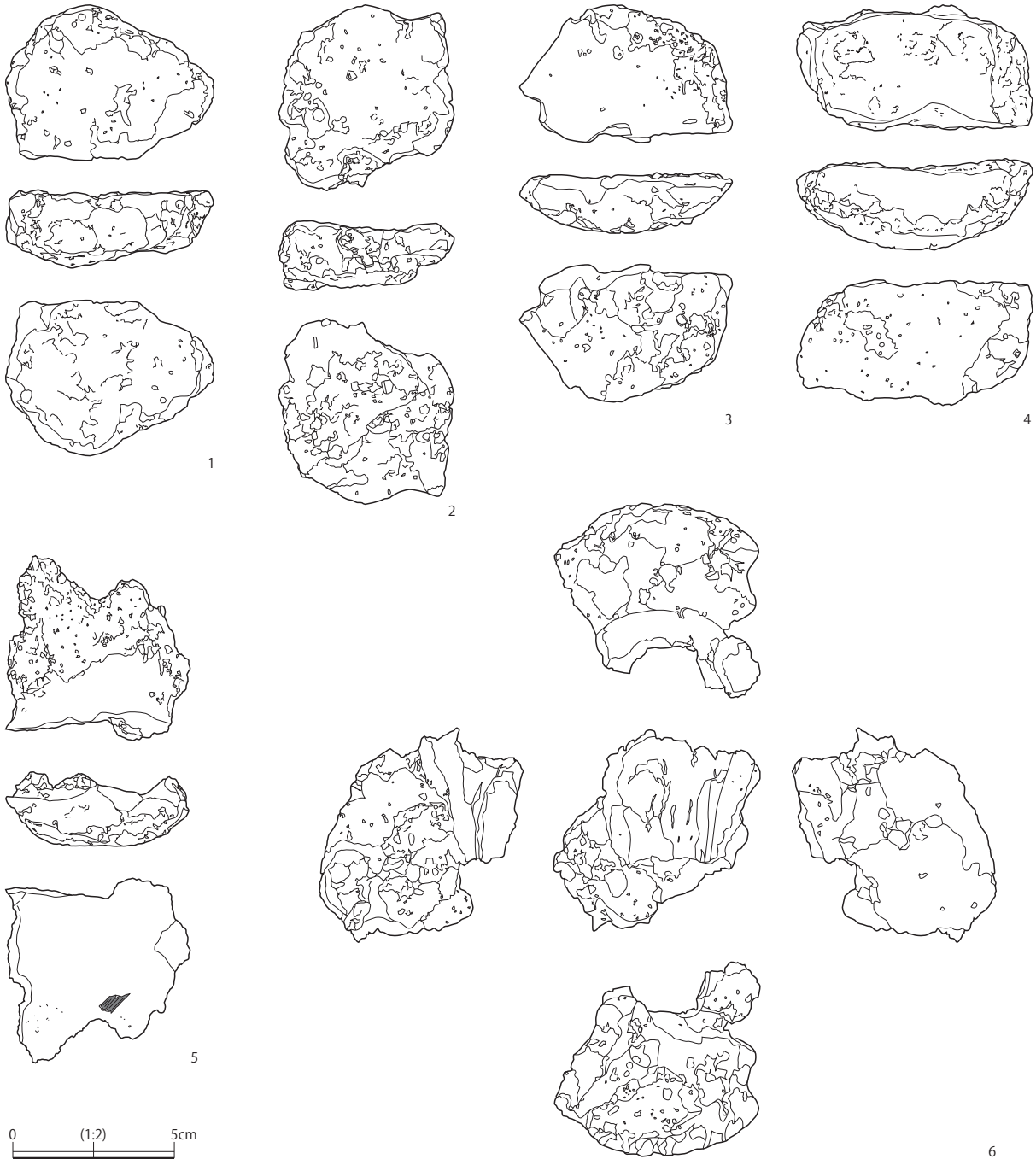


図 169　1 － 5 区　4967 溝出土遺物（3）

地点で異なることが想定され、鉄分集積部と溝が同時期に機能した可能性も考慮しなければならない。土器・鍛冶関連遺物は、上層と中層から細片となった状態で出土した。下層の湿性堆積物のシルト質粘土から遺物が出土しなかった。

遺物は北・南側の中央部に集中するが、237 トレンチ南側断面の 4967 溝の延長部においても鉱滓等が出土しており、4967 溝の廃絶時にまとめて廃棄された状況が想定される。

4967 溝から出土した遺物の内、図 167 － 1 ～ 9、図 168 － 1 ～ 6、図 169 － 1 ～ 6、図 170 － 1 ～ 8 を図示した。図 167 － 1 は須恵器坏蓋、2 は須恵器坏身で、TK208 型式。3 は高坏形器台の坏部である。4 は須恵器甕の口縁部である。5 は土師器高坏の坏部である。細片を図化。6 は土師器鉢である。外面はハケ調整、内面は横方向のナデ調整され、板ナデの痕跡が残る。7 は須恵器を模した土師

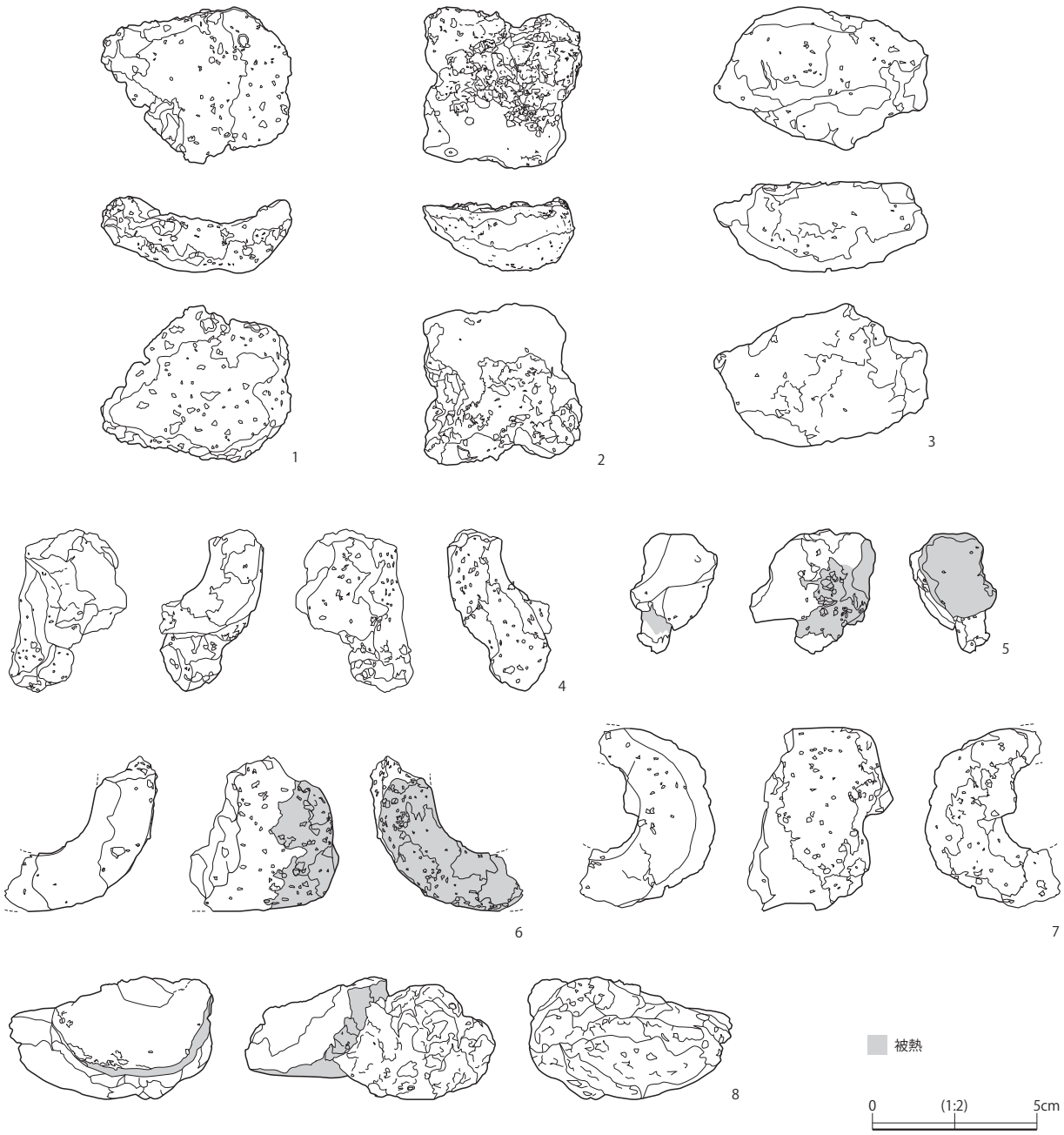


図 170　1－5区　4967 溝出土遺物（4）

器の壺体部片で、4967 溝の外側から出土した。4967 溝検出面の標高とほぼ同じ高さで、4967 溝と関連する可能性があるものとして図示した。8は滑石製臼玉である。側面の研磨は斜位である。9は砥石である。全面が砥面として用いられており、中砥ないし仕上げ砥として使用されたと考えられる。

図 168 －1～6は椀形滓である。1～4の椀形滓は、滓質は緻密で、緑灰色を呈す。底面には炉床土に由来する白色の粘土が付着する。5・6は、滓質は粗く集塊状である。鉄分の影響で赤褐色を呈し、一部は黒褐色を呈す。底面には粗砂から極粗砂と白色粘土が付着する。図 169 －1～4は椀形滓である。滓は緻密で、緑灰～青灰色を呈す。5はガラス質滓である。6は厚みのある大型の椀形鍛冶滓。茶褐色を呈し、質は粗である。羽口は滓の影響（成長）により破損する。下面には焼け締まった炉床土が付着する。図 170 －1はガラス質滓である。2・3は、椀形鍛冶滓である。滓質は緻密で、緑灰色を呈す。3は、滓質は緻密であるが、下位はやや粗い。4～7は鞴羽口である。8は先端にガラス質滓が付着する。

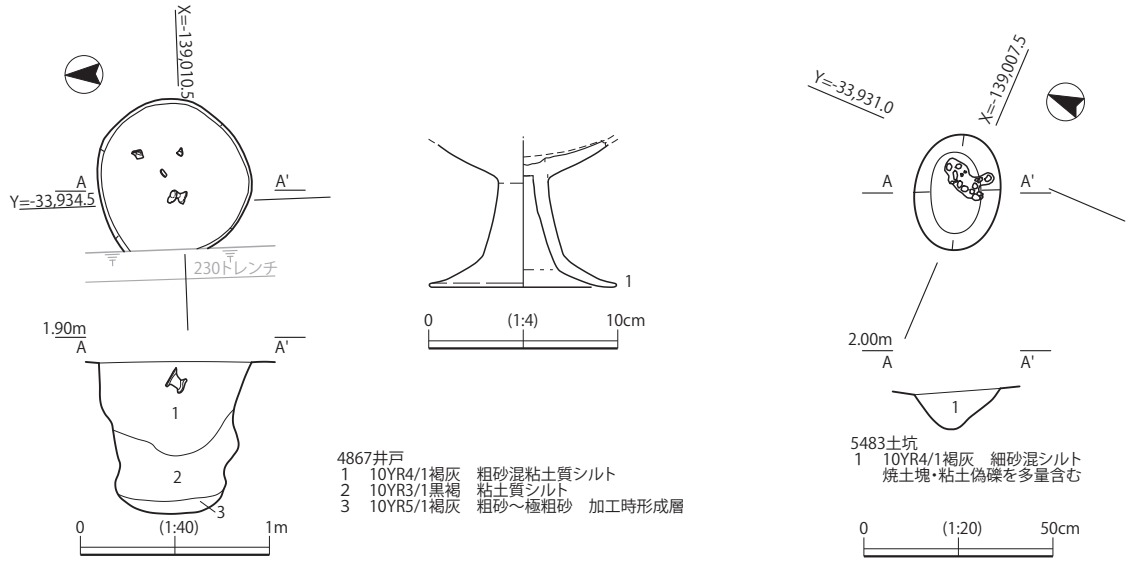


図 171　1 － 5 区　4867 井戸・5483 土坑平・断面　出土遺物

4867 井戸（図 137・171）

4866 土坑の西側で検出された。6 b 層に掘削深度は達しており、井戸と判断した。平面形は円形で、素掘りの井戸である。規模は、直径 0.8 m、深さ 0.8 mである。埋土は、下層が加工時形成層の粗砂～極細砂、中層から上層が湿性堆積物である粘土質シルトである。

出土遺物は、図 171 － 1 の土師器椀形高坏である。坏部は屈曲部を持たず、逆「ハ」の字形に開くタイプと考えられる。

5483 土坑（図 137・147・171）

竪穴建物 26 の北西にあり、5 － 1 層とした古土壌層中で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸 0.3 m、短軸 0.2 m、深さ 0.1 mである。埋土に焼土塊・粘土偽礫を多量含み、上面には硬化面が認められる。カマドの火床であった可能性が高く、竪穴建物の検出作業を繰り返したが、関連する遺構は検出できなかった。

竪穴建物 46（図 147・172）

竪穴建物 39 の北東で検出された。竪穴建物 39 と切り合い関係があり、竪穴建物 39 が新しい。床面と壁溝が遺存したが、大半は調査地外にあり、全容は不明である。カマド・主柱穴については、238 トレンチ断面においても検討したが確認されなかった。土師器の細片が壁溝内から出土したが、時期の詳細は不明である。

竪穴建物 39（図 147・173、図版 10・66）

竪穴建物 30 の南東で検出された。4796 溝と切り合い関係があり、4796 溝が新しい。竪穴建物の北側の一部を確認しており、壁溝及び主柱穴となる可能性がある 5233 柱穴が検出された。カマドは 238 トレンチ断面においても検討したが、確認されなかった。なお、竪穴建物の加工時の形状が、1 － 5 区で検出された他の竪穴建物より深いことや、床面が上下 2 層に分かれることから建て替えがあった可能性を想定している。

竪穴建物 39 から出土した遺物の内、図 173 － 1 ・ 2 を図示した。1 ・ 2 は上方に突出する突線をもつ北河内地域に特徴的な須恵器坏蓋で、1 は口径が小さく壺蓋となる可能性がある。2 は端面に丸味を帯びた面をもつ。2 は内側天井部に同心円文の当具痕が残る。ON231 ～ TK73 型式。

竪穴建物30・38・44（図147・174～181、図版11・60・65・66・71）

竪穴建物23の西側で、竪穴建物3棟が重複した状態で検出された。調査時、第5－2b面が検出された時点で、竪穴建物の存在が認識できたが、土壌化の影響により、竪穴建物の平面形が確認できなかった。その後、竪穴建物内の掘り下げを徐々に行って、それぞれの平面形を確認しており、竪穴建物44は竪穴建物基底面まで掘り下げて平面形が認識された。また、3棟の竪穴建物より新しい遺構として、4815カマドが検出された。当初、竪穴建物38の4821カマドに関連する遺構と考えて調査を行ったが、竪穴建物38の廃絶後に掘り込まれた遺構であることが判明した。なお、新旧関係は、竪穴建物44→竪穴建物30→竪穴建物38→4815カマドの順に新しくなる。

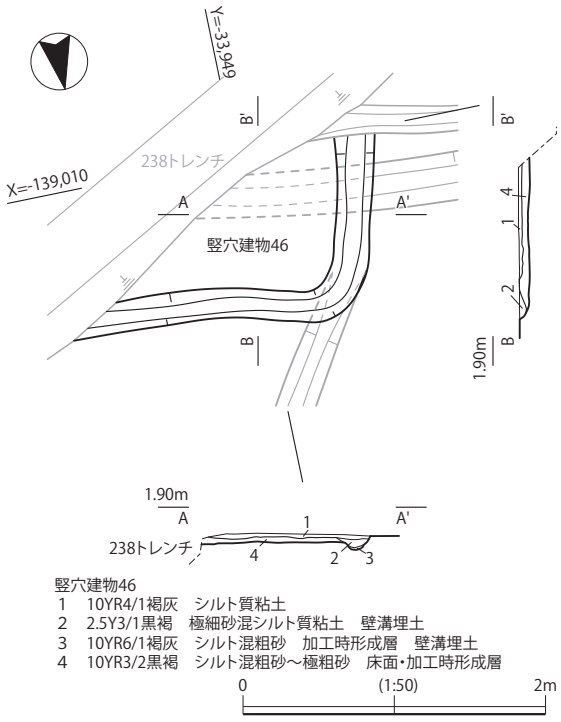


図172　1－5区　竪穴建物46平・断面

4815カマドは、機能時に形成された炭化物を含むシルト（以下、炭層）の平面形が、カマドと掻き出し口の形状と同じであったために、カマドとした。規模は、長さ1.8m、幅0.7mである。埋土は炭層のみが認められた。4821カマドに関係する可能性を想定して調査を行ったが、竪穴建物の埋土より層位的に上になることが判明したため、3棟の竪穴建物廃絶以降に機能したカマドと評価した。4815カマドが伴う竪穴建物の壁溝は検出されていないが、主柱穴については周辺で検出された柱穴の中に該当するものが含まれる可能性がある。4815カマドから図176－6・8が出土した。6は土師器甕である。8は土師器甑である。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整で仕上げられる。底部は中央の円形の蒸気孔を中心に、これより小さい蒸気孔が5箇所穿たれる。また、4815カマドと同じ高さで、7の砥石が出土した。竪穴建物38に帰属する

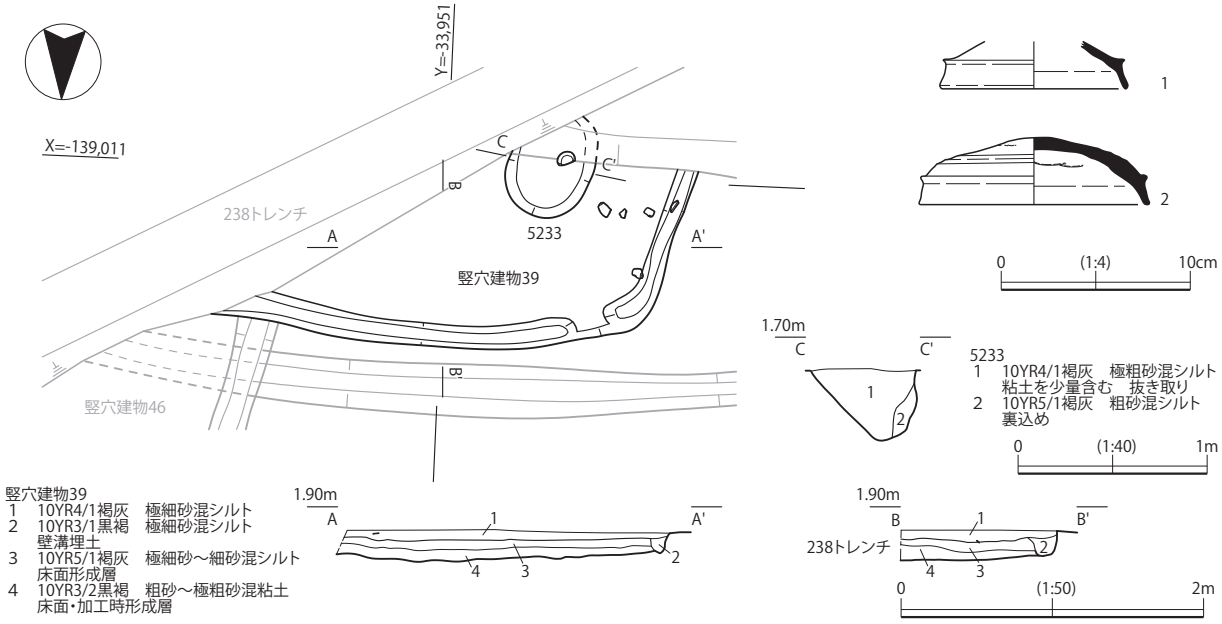
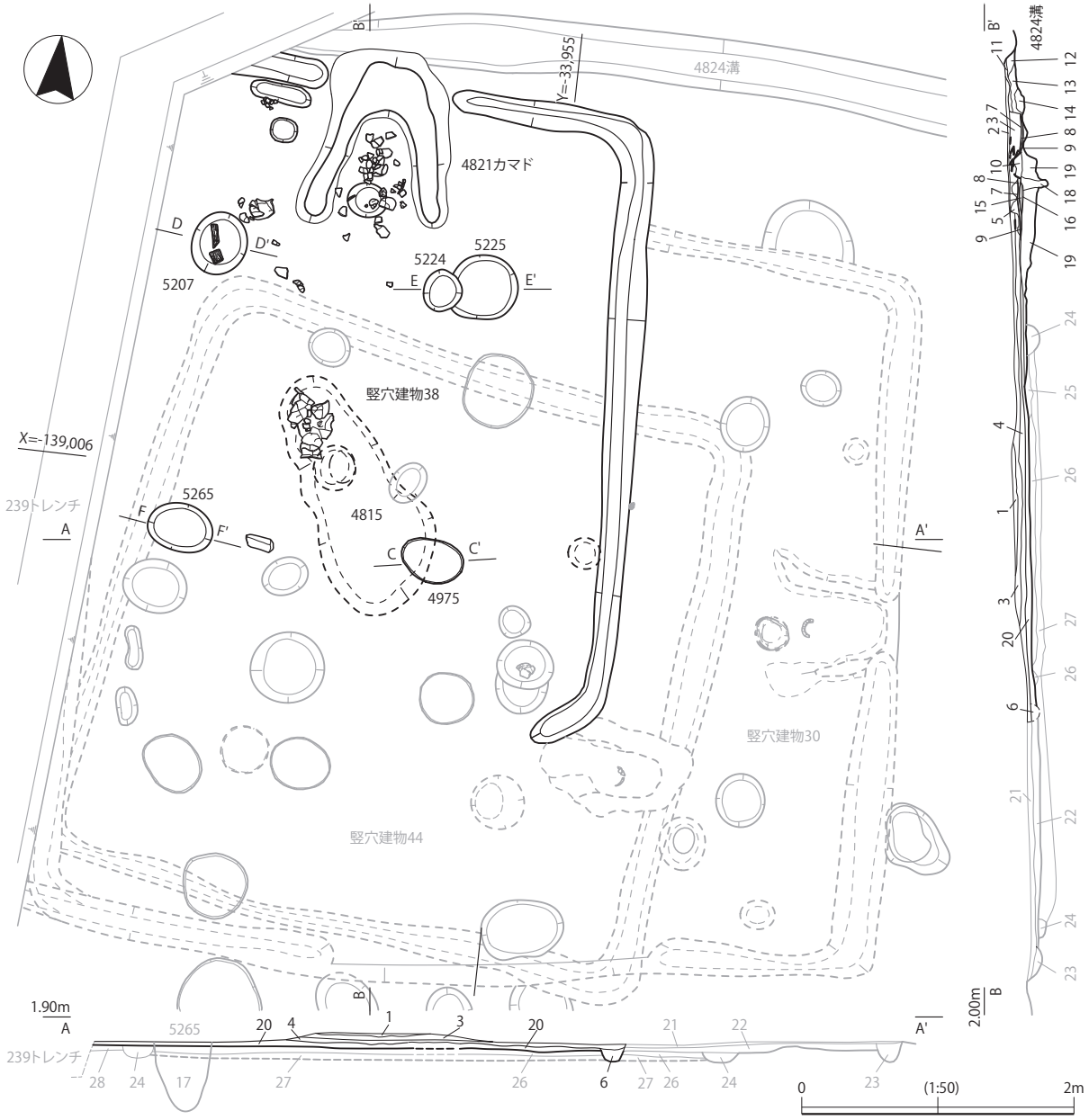
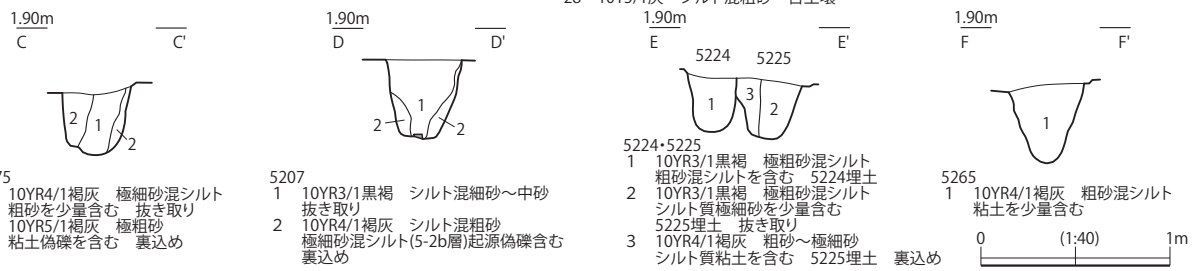


図173　1－5区　竪穴建物39平・断面　出土遺物



竪穴建物30・38・44
1　10YR3/2黒褐　シルト　炭化物を多量含む　4815カマド
2　10YR5/2灰黄褐　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
3　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を微量含む　竪穴建物38埋土
4　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を多量含む　竪穴建物38埋土
5　7.5YR5/1褐灰　粘土質シルト　焼土塊を多量に含む　4821カマド崩落土
6　2.5Y4/1黄灰　シルト混細砂　竪穴建物38壁溝埋土
7　N2/0黒　シルト　炭化物を多量に含む　4821カマド機能時形成層
8　10YR6/1褐灰　粘土質シルト　カマド内の整地層か
9　N2/0黒　シルト　炭化物を多量に含む　4821カマド機能時形成層
10　N5/0灰　シルト質粘土　4821カマド支脚内充填物
11　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　被熱したシルト質粘土偽礫を少量含む　4821カマド本体
12　2.5Y4/1黄灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
13　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
14　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
15　10YR6/1褐灰　シルト　被熱により上部は赤変　4821カマド火床
16　5Y5/1灰　粗砂混シルト　4821カマド火床
17　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土を少量含む　5265埋土
18　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
19　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
20　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
21　2.5Y3/2黒褐　シルト混極細砂　竪穴建物30埋土
22　2.5Y4/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　下位は加工時形成層　竪穴建物30埋土
23　2.5Y4/2暗灰黄　極粗砂混シルト　竪穴建物30壁溝埋土
24　2.5Y3/1黒褐　粗砂～極粗砂　シルト～粘土（5-2b層）偽礫を少量含む　竪穴建物44壁溝埋土
25　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　竪穴建物44埋土
26　10Y5/1灰　極細砂混シルト　竪穴建物44埋土
27　2.5Y4/2暗灰黄　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　竪穴建物44床面形成層
28　10Y5/1灰　シルト混粗砂　古土壌



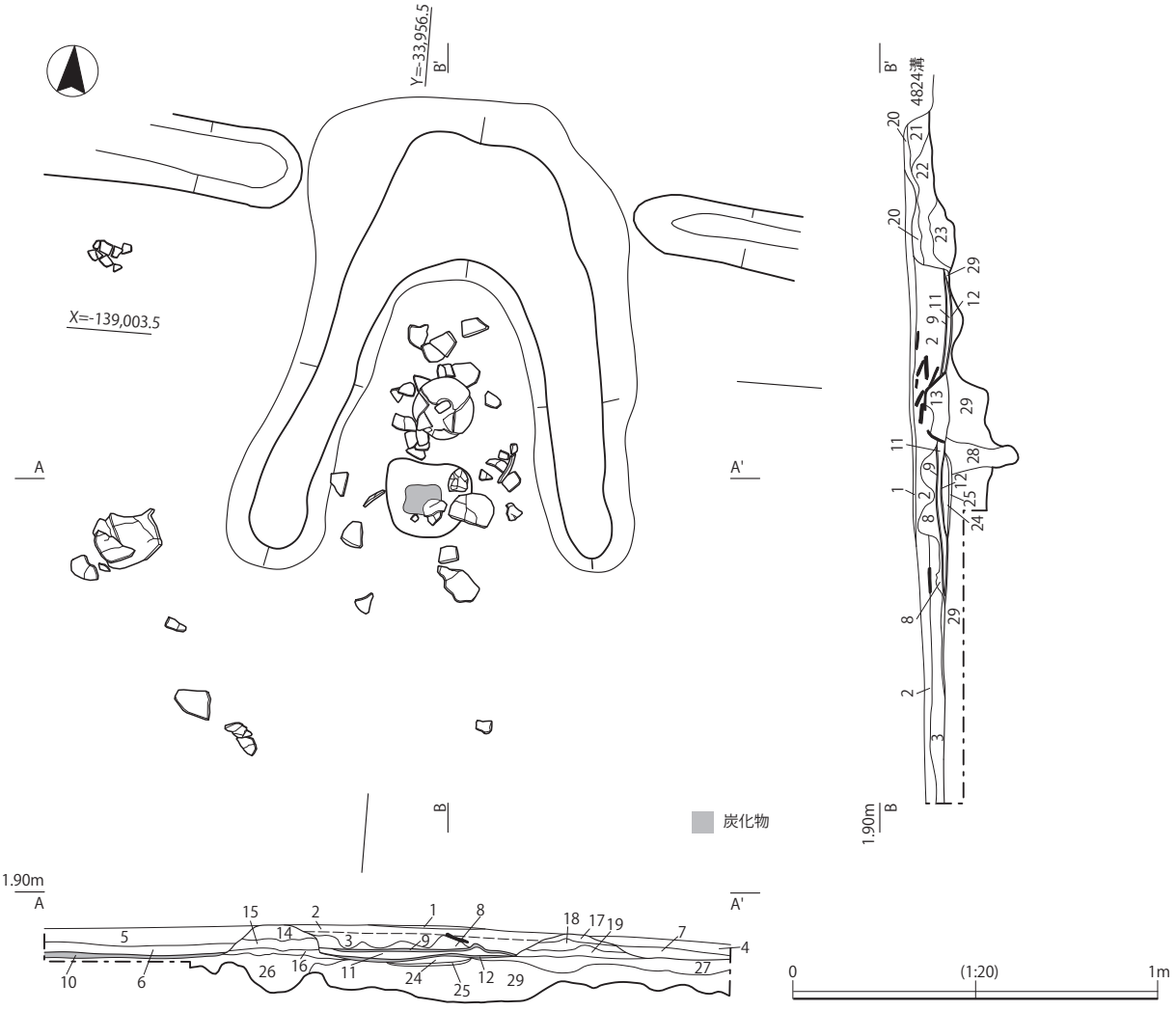
4975
1　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　極粗砂　粘土偽礫を含む　裏込め

5207
1　10YR3/1黒褐　シルト混細砂～中砂　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　極細砂混シルト(5-2b層)起源偽礫含む　裏込め

5224・5225
1　10YR3/1黒褐　極粗砂混シルト　粗砂混シルトを含む　5224埋土
2　10YR3/1黒褐　極粗砂混シルト　シルト質極細砂を少量含む　5225埋土　抜き取り
3　10YR4/1褐灰　粗砂～極細砂　シルト質粘土を含む　5225埋土　裏込め

5265
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土を少量含む

図 174　1－5区　竪穴建物 38 平・断面



4821カマド
1　10YR5/2灰黄褐　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
2　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を微量含む　竪穴建物38埋土
3　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を多量含む
4　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト
5　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト
6　10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂混シルト
7　7.5YR4/1褐灰　粘土質シルト　粗砂混粘土偽礫を含む
8　7.5YR5/1褐灰　粘土質シルト　焼土塊を多量含む　カマド崩落土
9　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
10　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む
11　10YR6/1褐灰　粘土質シルト　カマド内の整地層か
12　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
13　N5/0灰　シルト質粘土　カマド支脚内充填物
14　2.5Y5/1黄灰　極細砂混シルト　カマド本体
15　2.5Y6/1黄灰　極細砂混シルト　粘土偽礫を少量含む　カマド本体
16　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　カマド本体
17　2.5Y5/1黄灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む　カマド本体
18　2.5Y6/1黄灰　極細砂混粘土　カマド本体
19　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粗砂を微量含む　カマド本体
20　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　被熱したシルト質粘土偽礫を少量含む　カマド本体
21　2.5Y4/1黄灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　カマド本体
22　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　カマド本体
23　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　カマド本体
24　10YR6/1褐灰　シルト　被熱を受け上部は赤変　火床
25　5Y5/1灰　粗砂混シルト　火床
26　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　粘土偽礫を含む　加工時形成層
27　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土偽礫を含む　加工時形成層
28　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
29　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層

図 175　1－5区　竪穴建物 38　4821 カマド平・断面

可能性がある。砥面は 4 面で、砥石の中央部は使い込まれたために湾曲する。

竪穴建物 38 は、平面形は方形を呈し、規模は東辺で 4.6 mである。南側の壁溝は、土壌化の影響により検出できなかったが、竪穴建物に設定した南北の断面で、壁溝に該当すると考えられる落ち込みが確認されている。北辺中央では、4821 カマドが検出された。規模は、長さ 1.3 m、幅 1.1 mである。カマド中央では、支脚として用いられた土師器高坏が検出されており、支脚周辺の炭層直上から土師器の破片やカマド本体の崩落土と考えられる焼土塊が出土した。

竪穴建物 38 から出土した遺物の内､図 176 － 1 ～ 5 を図示した。 1 は土師器椀形高坏の坏部である。 2 は土師器鉢である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめられる。外面は横方向のケズリの後、横ナデ調整される。 3 は土師器椀形高坏である。外面は横方向のナデ調整、内面は磨滅する。脚柱部は外面へ

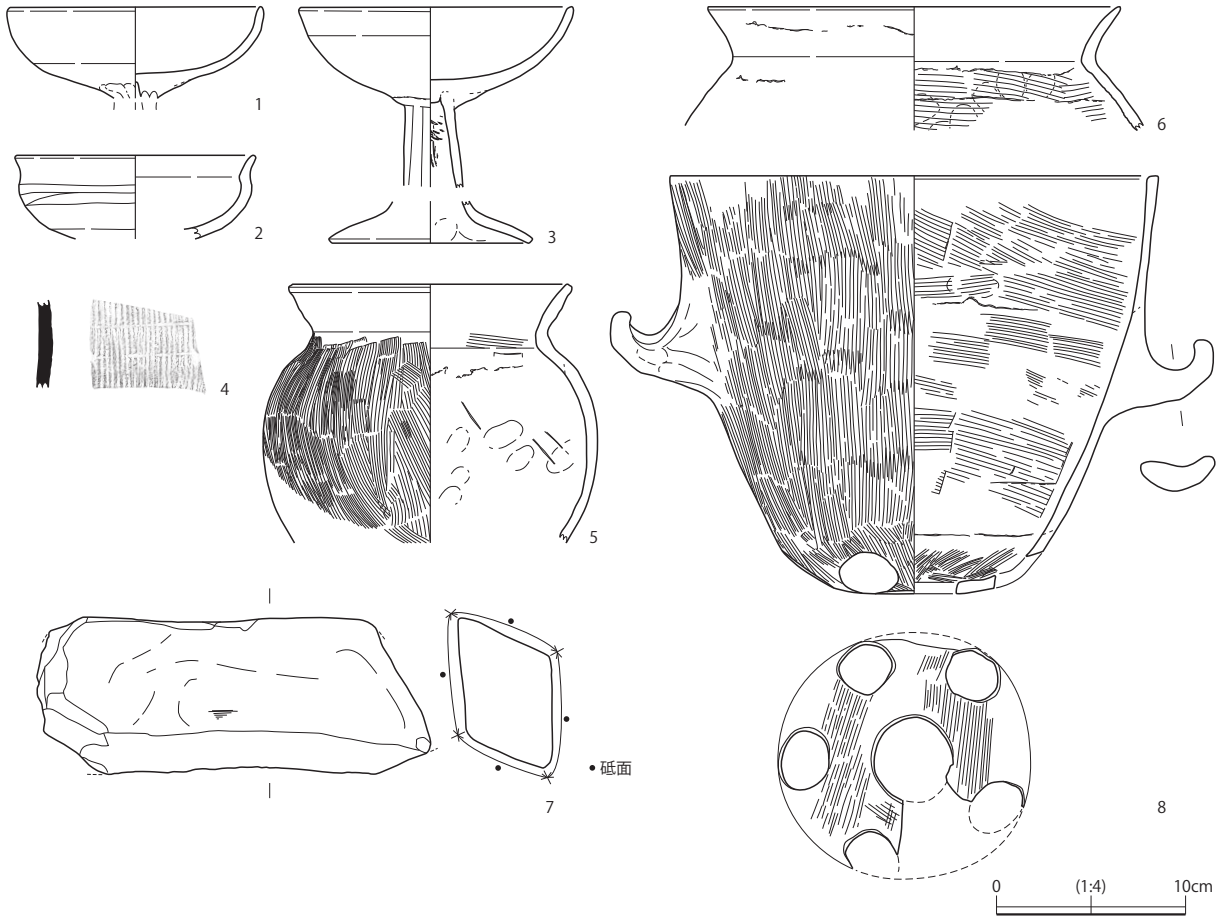


図 176　1－5区　竪穴建物 38　4815・4821 カマド出土遺物

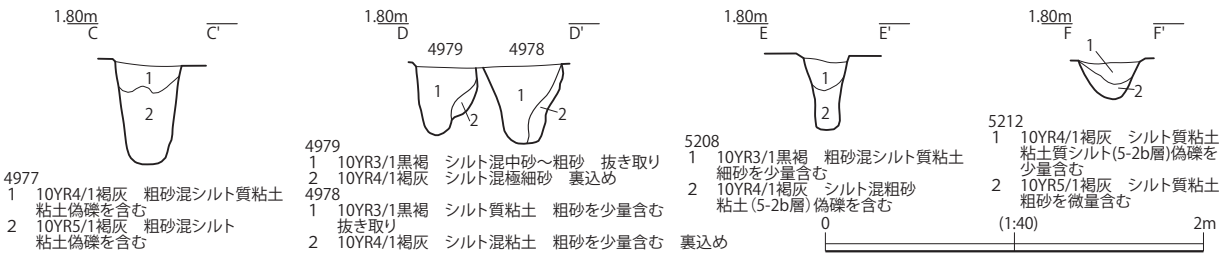
ラ状工具によるナデ、内面は爪跡とシボリメが残る。 4 は須恵器甕の体部片である。外面は縄蓆文タタキと沈線が施される。 5 は土師器甕である。外面はハケ調整、内面はナデ調整で板状工具の当たりが残る。竪穴建物 38 から出土した遺物は、古墳時代中期前葉～中葉に位置付けられるものである。

竪穴建物 30 は、平面形は長方形、東辺で 5.2 m、南辺で 6.3 mである。東辺中央で、4835 カマドが検出された。規模は、長さ 1.0 m、幅 0.85 mである。支脚として用いられた土師器甕が検出されており、口縁部のみが原位置を留めた状態で検出された。支脚の手前では、火床が検出された。火床は、椀状に浅く掘りくぼめた穴に、粗砂を微量に含んだ極細砂シルトで成形した後、より細かい極細砂混シルトで構築される。上部は、被熱を受けて赤変した状態が観察された。

竪穴建物 30 から出土した遺物の内、図 178 － 1 ～ 2 を図示した。 1 は須恵器坏蓋である。細片を図化しており、遺物の傾きは図示より内傾する可能性がある。TK208 ～ 23 型式。 2 は須恵器把手付埦である。把手は扁平な断面形を呈す。TK73 ～ TK216 型式。 3 は 5273 柱穴から出土した。土師器有稜高坏の坏部である。なお、5273 柱穴の帰属する竪穴建物は不明である。

竪穴建物 44 は、平面形は方形、一辺 4.3 ～ 4.4 mである。東辺中央の南寄りで、5030 カマドが検出された。規模は、長さ 1.1 m、幅 0.7 mである。支脚に用いられた土師器甕が検出されており、口縁部の細片が原位置で出土した。磨耗が顕著で、図化できなかったが、端部の形状は丸くおさめられたものである。火床は検出されなかったが、調査後に改めて写真を確認したところ、淡く赤変した粘土質の土が支脚の手前で確認できた。また、5030 カマドに近接して、5277 土坑が検出された。製塩土器の細片が多量に出土した。帰属する竪穴建物は不明である。出土遺物から竪穴建物の時期を特定しえなかっ

竪穴建物30・38・44
1　10YR3/2黒褐　シルト　炭化物を多量含む　4815カマド
2　10YR5/2灰黄褐　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
3　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を微量含む　竪穴建物38埋土
4　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を多量含む　竪穴建物38埋土
5　7.5YR5/1褐灰　粘土質シルト　焼土塊を多量に含む　4821カマド崩落土
6　2.5Y4/1黄灰　シルト混細砂　竪穴建物38壁溝埋土
7　N2/0黒　シルト　炭化物を多量に含む　4821カマド機能時形成層
8　10YR6/1褐灰　粘土質シルト　カマド内の整地層か
9　N2/0黒　シルト　炭化物を多量に含む　4821カマド機能時形成層
10　N5/0灰　シルト質粘土　4821カマド支脚内充填物
11　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　被熱したシルト質粘土偽礫を少量含む　4821カマド本体
12　2.5Y4/1黄灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
13　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
14　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
15　10YR6/1褐灰　シルト　被熱により上部は赤変　4821カマド火床
16　5Y5/1灰　粗砂混シルト　4821カマド火床
17　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土を少量含む　5265埋土
18　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
19　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
20　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
21　2.5Y3/2黒褐　シルト混極細砂　竪穴建物30埋土
22　2.5Y4/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　下位は加工時形成層　竪穴建物30埋土
23　2.5Y4/2暗灰黄　極粗砂混シルト　竪穴建物30壁溝埋土
24　2.5Y3/1黒褐　粗砂～極粗砂　シルト～粘土（5-2b層）偽礫を少量含む　竪穴建物44壁溝埋土
25　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　竪穴建物44埋土
26　10Y5/1灰　極細砂混シルト　竪穴建物44埋土
27　2.5Y4/2暗灰黄　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　竪穴建物44床面形成層
28　10Y5/1灰　シルト混粗砂　古土壌



4977
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト質粘土　粘土偽礫を含む
2　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む

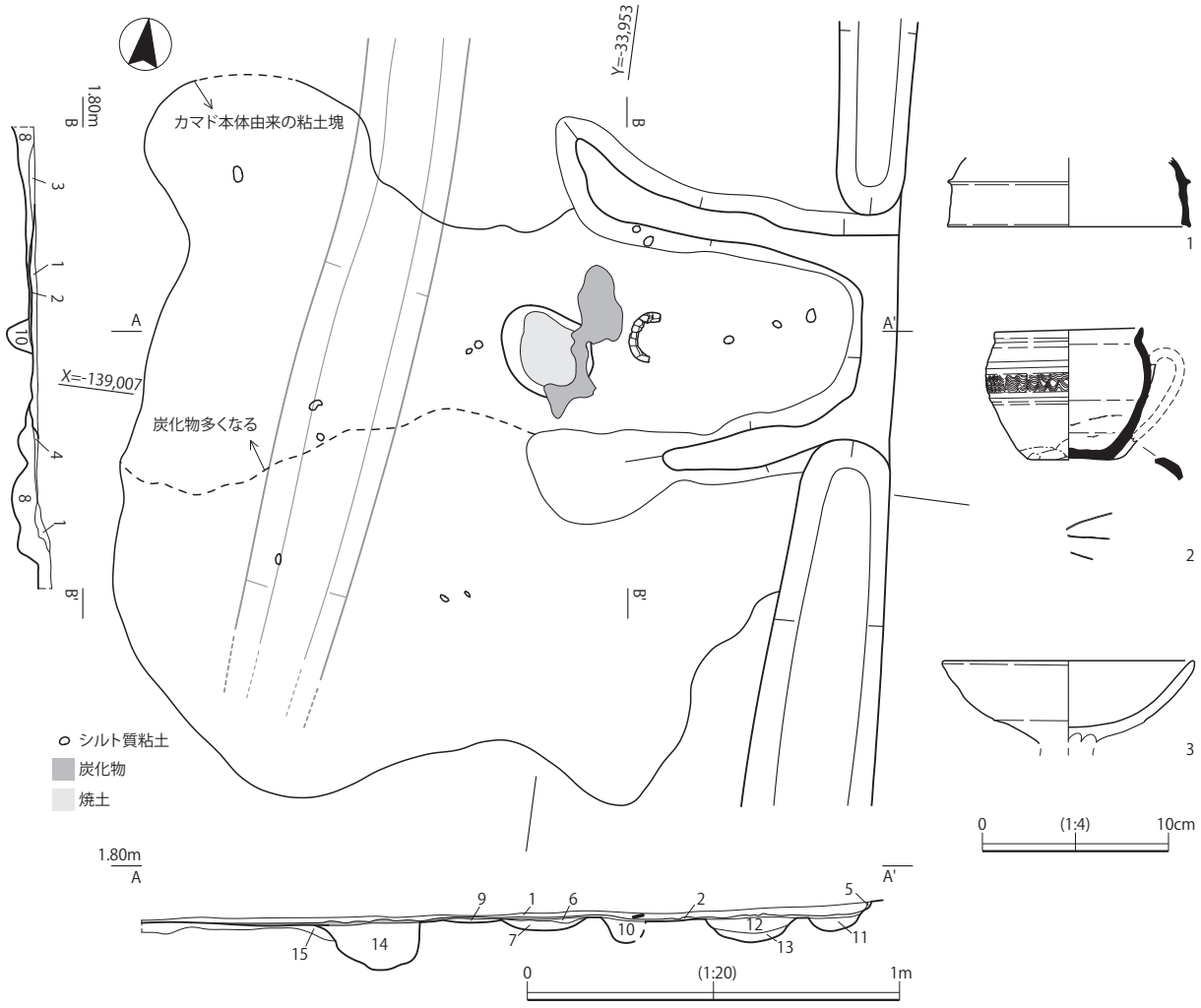
4979
1　10YR3/1黒褐　シルト混中砂～粗砂　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂　裏込め

4978
1　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　粗砂を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混粘土　粗砂を少量含む　裏込め

5208
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト質粘土　細砂を少量含む
2　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　粘土（5-2b層）偽礫を含む

5212
1　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を少量含む
2　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　粗砂を微量含む

図 177　1－5区　竪穴建物 30 平・断面



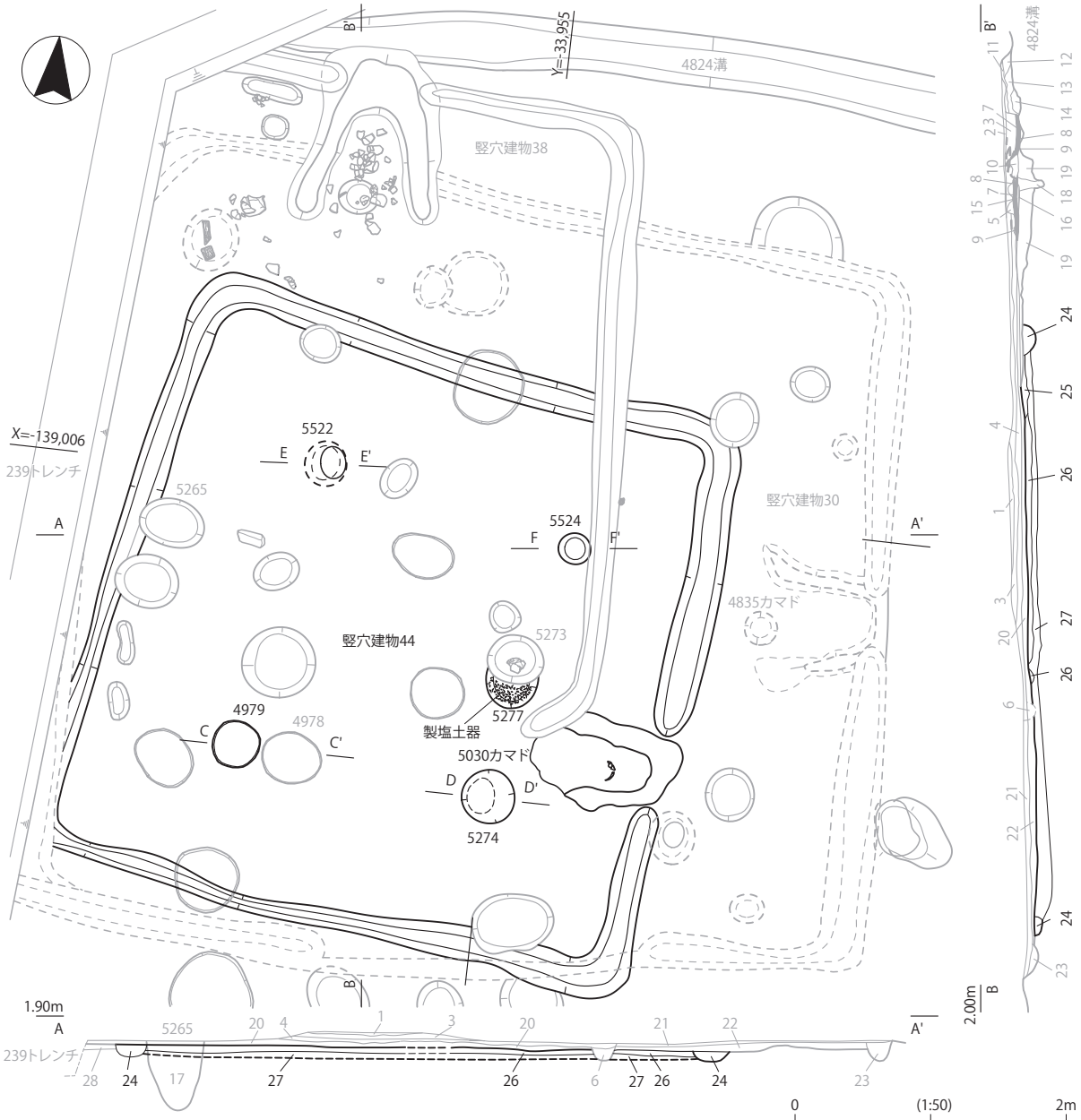
4835カマド
1　10YR4/1褐灰　極細砂混粘土　粗砂を微量含む
　カマド本体崩落土・焼土塊・炭化物含む
2　10YR3/3暗褐　シルト質粘土　炭化物を層状に含む　カマド機能時形成層
3　10YR3/2黒褐　シルト質粘土　カマド本体
4　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　カマド本体
5　10YR3/2黒褐　粘土
6　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　被熱を受けて赤変　火床
7　10YR3/2黒褐　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　火床
8　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト　竪穴建物30床面・加工時形成層
9　10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂混シルト　竪穴建物30床面・加工時形成層
10　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　竪穴建物30加工時形成層か
11　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　竪穴建物30加工時形成層か
12　10YR4/2灰黄褐　シルト混粗砂　竪穴建物30加工時形成層
13　10YR3/2黒褐　シルト混粘土　竪穴建物30加工時形成層
14　10YR3/3暗褐　シルト混粗砂　竪穴建物44壁溝埋土
15　10YR3/2黒褐　極粗砂混シルト　竪穴建物44床面・加工時形成層

図 178　１－５区　竪穴建物 30　4835 カマド平・断面　出土遺物

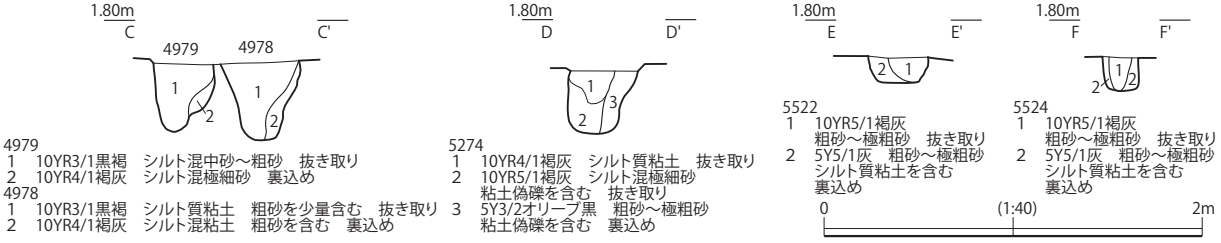
たが、竪穴建物 30・38 との切り合い関係から、古墳時代中期初頭まで遡る可能性があると考えられる。竪穴建物 30・38・44 の加工面は、一部、柱穴の検出のため掘り過ぎた部分もあるが、カマドが検出された部分が最も高く、竪穴建物 38 が検出された北側の範囲が、全体的に高くなっている。基盤層の５－２ｂ層上面も、加工面と同様に北側が高くなっており、低所となる方を積極的に加工して、竪穴建物が構築されている。

掘立柱建物 22（図 147・182、図版 13・63）

微高地西側、竪穴建物 30 の東側で検出された。２間× 5 間の総柱建物に復元される。規模は、梁行 3.8 m、桁行 8.0 mである。柱はすべて抜き取られていたが、4993 柱穴では柱下端部が抜き取り穴に廃棄された状態で出土した。図 182 － 1 は土師器高坏で、4816・4817 柱穴から出土したものが接合した。２は韓式系土器甑で 5159 柱穴の抜き取り穴から出土した。外面は格子目タタキ、内面はハケ調整の後、縦方向にナデ調整される。掘立柱建物 22 は、竪穴建物 38 と同段階かそれ以降に建てられたと考えられ、古墳時代中期中葉～後葉の時期に比定される。



竪穴建物30・38・44
1　10YR3/2黒褐　シルト　炭化物を多量含む　4815カマド
2　10YR5/2灰黄褐　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
3　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を微量含む　竪穴建物38埋土
4　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　炭化物を多量含む　竪穴建物38埋土
5　7.5YR5/1褐灰　粘土質シルト　焼土塊を多量に含む　4821カマド崩落土
6　2.5Y4/1黄灰　シルト混細砂　竪穴建物38壁溝埋土
7　N2/0黒　シルト　炭化物を多量に含む　4821カマド機能時形成層
8　10YR6/1褐灰　粘土質シルト　カマド内の整地層か
9　N2/0黒　シルト　炭化物を多量に含む　4821カマド機能時形成層
10　N5/0灰　シルト質粘土　4821カマド支脚内充填物
11　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　被熱したシルト質粘土偽礫を少量含む　4821カマド本体
12　2.5Y4/1黄灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
13　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
14　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　極細砂～細砂混シルト偽礫を少量含む　4821カマド本体
15　10YR6/1褐灰　シルト　被熱により上部は赤変　4821カマド火床
16　5Y5/1灰　粗砂混シルト　4821カマド火床
17　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土を少量含む　5265埋土
18　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
19　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　竪穴建物38加工時形成層
20　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　竪穴建物38埋土
21　2.5Y3/2黒褐　シルト混極細砂　竪穴建物30埋土
22　2.5Y4/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　下位は加工時形成層　竪穴建物30埋土
23　2.5Y4/2暗灰黄　極粗砂混シルト　竪穴建物30壁溝埋土
24　2.5Y3/1黒褐　粗砂～極粗砂　シルト～粘土（5-2b層）偽礫を少量含む　竪穴建物44壁溝埋土
25　5Y5/1灰　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　竪穴建物44埋土
26　10Y5/1灰　極細砂混シルト　竪穴建物44埋土
27　2.5Y4/2暗灰黄　シルト混極細砂～細砂　粗砂を少量含む　竪穴建物44床面形成層
28　10Y5/1灰　シルト混粗砂　古土壌



4979
1　10YR3/1黒褐　シルト混中砂～粗砂　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂　裏込め

4978
1　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　粗砂を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混粘土　粗砂を含む　裏込め

5274
1　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂　粘土偽礫を含む　抜き取り
3　5Y3/2オリーブ黒　粗砂～極粗砂　粘土偽礫を含む　裏込め

5522
1　10YR5/1褐灰　粗砂～極粗砂　抜き取り
2　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　シルト質粘土を含む　裏込め

5524
1　10YR5/1褐灰　粗砂～極粗砂　抜き取り
2　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　シルト質粘土を含む　裏込め

図 179　1－5区　竪穴建物 44 平・断面

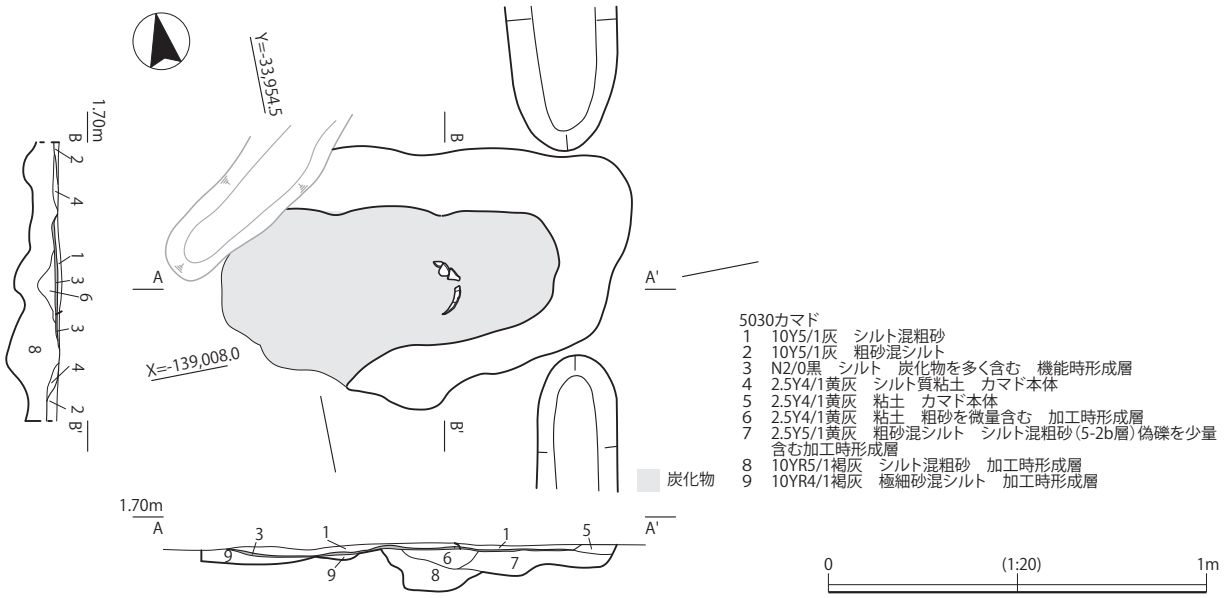
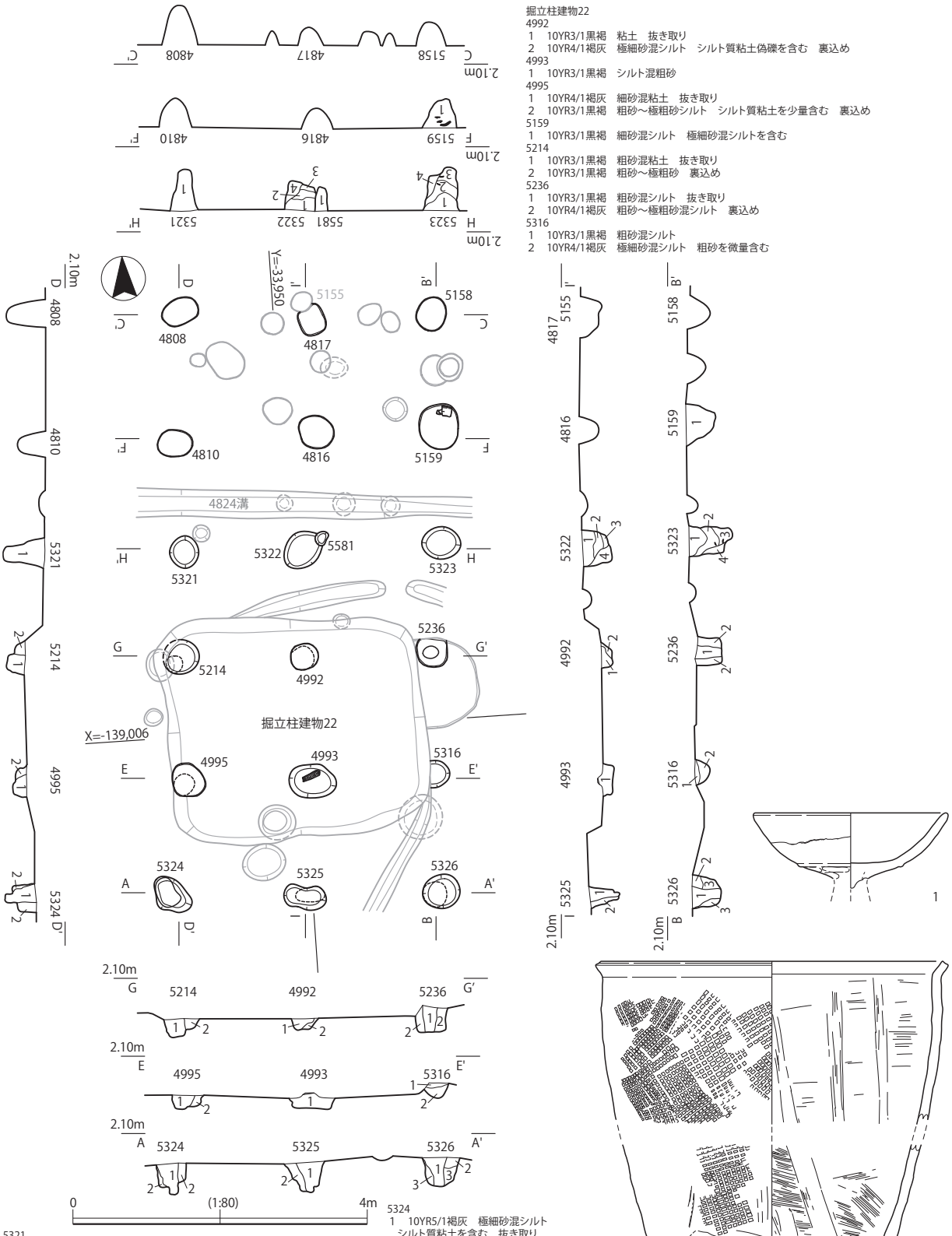


図 180　1－5区　竪穴建物 44　5030 カマド平・断面

図 181　1－5区　竪穴建物 30・38・44 加工面平面



掘立柱建物22
4992
1　10YR3/1黒褐　粘土　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土偽礫を含む　裏込め
4993
1　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂
4995
1　10YR4/1褐灰　細砂混粘土　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂シルト　シルト質粘土を少量含む　裏込め
5159
1　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　極細砂混シルトを含む
5214
1　10YR3/1黒褐　粗砂混粘土　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂　裏込め
5236
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　粗砂～極粗砂混シルト　裏込め
5316
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む

5321
1　10YR4/1褐灰　極細砂～細砂　シルト質粘土を少量含む　抜き取り
5322
1　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　粗砂～極粗砂を少量含む　抜き取り
2　5Y5/1灰　シルト質粘土　粗砂～極粗砂を含む　抜き取り
3　5Y4/1灰　シルト質粘土　抜き取り
4　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　裏込め
5323
1　N5/0灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　細砂～中砂を少量含む
極細砂混シルト(5-2b層)偽礫を含む　抜き取り
3　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　抜き取り
4　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　極細砂混シルト(5-2b層)偽礫を含む　裏込め
5324
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト
シルト質粘土を含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト
シルト質粘土を含む　裏込め
5325
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト
シルト質粘土偽礫を含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂質シルト
シルト質粘土偽礫を含む　裏込め
5326
1　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　極細砂を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　裏込め
3　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　シルト質粘土を少量含む　裏込め
5581
1　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土を含む

図 182　1－5区　掘立柱建物 22 平・断面　出土遺物

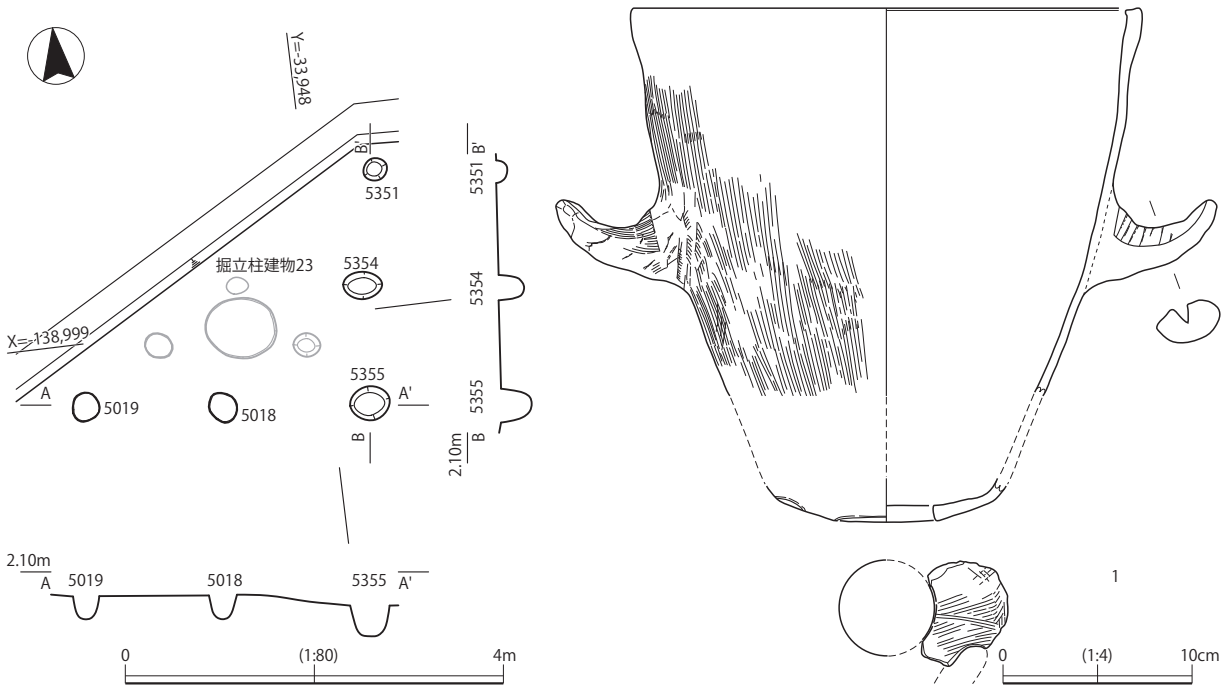


図 183　1－5区　掘立柱建物 23 平・断面　出土遺物

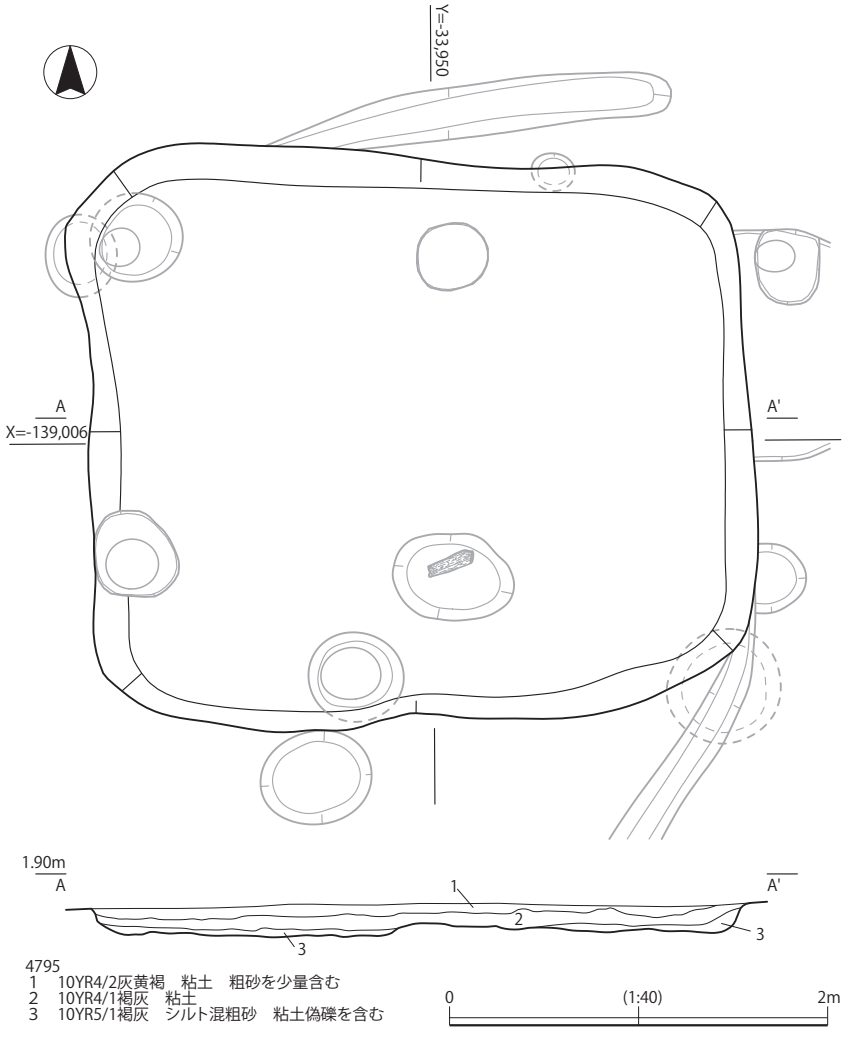


図 184　1－5区　4795 土坑平・断面

掘立柱建物 23（図 147・183、図版 13・63）

掘立柱建物 22 の北側で検出された。調査後に復元した掘立柱建物である。構造は 2 間以上× 2 間以上である。規模は、南北 2.4 m以上、東西 3.0 m以上である。埋土は極細砂混シルトのブロック土である。5355 柱穴から図 183 － 1 の土師質の甑が出土した。外面はハケ、内面は横方向のナデ調整される。

4795 土坑（図 147・184、図版 10）

竪穴建物 30 の東側、4967 溝の西側で検出された。平面形は長方形を呈し、規模は、長辺 3.5 m、短辺 3.1 m、深さ 0.2 mである。埋土は、底面直上が加工時形成層のシルト混粗砂、下層が湿性堆積物の粘土、上層が土壌の粗砂が混じる粘土である。遺物が出土しておらず、時期の詳細は不明。湿性堆積物で埋没している点が、周辺の遺構の埋没過程と異なっており、貯水を目的とした施設か。

4796・4823 溝（図 147・185、図版 65）

調査地西・南西側で検出されており、未調査地を挟むが、連続して機能したと考えられる。4823 溝の規模は、幅 1.5 m、深さ 0.6 mである。埋土は、湿性堆積物のシルト質粘土である。4796 溝から出土した遺物には図 185 － 6 の土師器埦がある。竪穴建物 39（TK73 型式）より新しく、4837 井戸（TK23 型式）より古いことが切り合い関係で確かめられており、時期は古墳時代中期前葉～中葉に比定される。

その他の遺構出土遺物（図 111・137・147・185、図版 60・63・65・76）

上記の遺構以外に出土した遺物を、図 185 に図示した。 1 は土師器高坏の坏部で、竪穴建物 47 の南側で検出した 5320 ピットから出土。 2 は土師器坏で、竪穴建物 14 の南側で検出した 4938 柱穴から出土。 3 は土師器高坏脚部で、竪穴建物 22 の直下、5311 土坑から出土。 4 は土師器高坏脚部で、4796 溝の北側で検出した 4832 土坑から出土。 5 は土師器高坏で、竪穴建物 20 の下、5482 柱穴から出土。 7 は土師器の底部で、竪穴建物 18 の東側で検出した、5091 柱穴から出土。平底で、内面に煤が付着。 8 は須恵器坏蓋で、4776 土坑から出土。 9 は須恵器坏身で、4767 土坑から出土。10 は須恵器無蓋高坏で、4773 柱穴から出土。11 は須恵器高坏脚部で、5091 土坑から出土。12 は須恵器高坏脚部で、5097 柱穴から出土。13 は竪穴建物 19 の南側の 4984 柱穴から出土した礎板である。

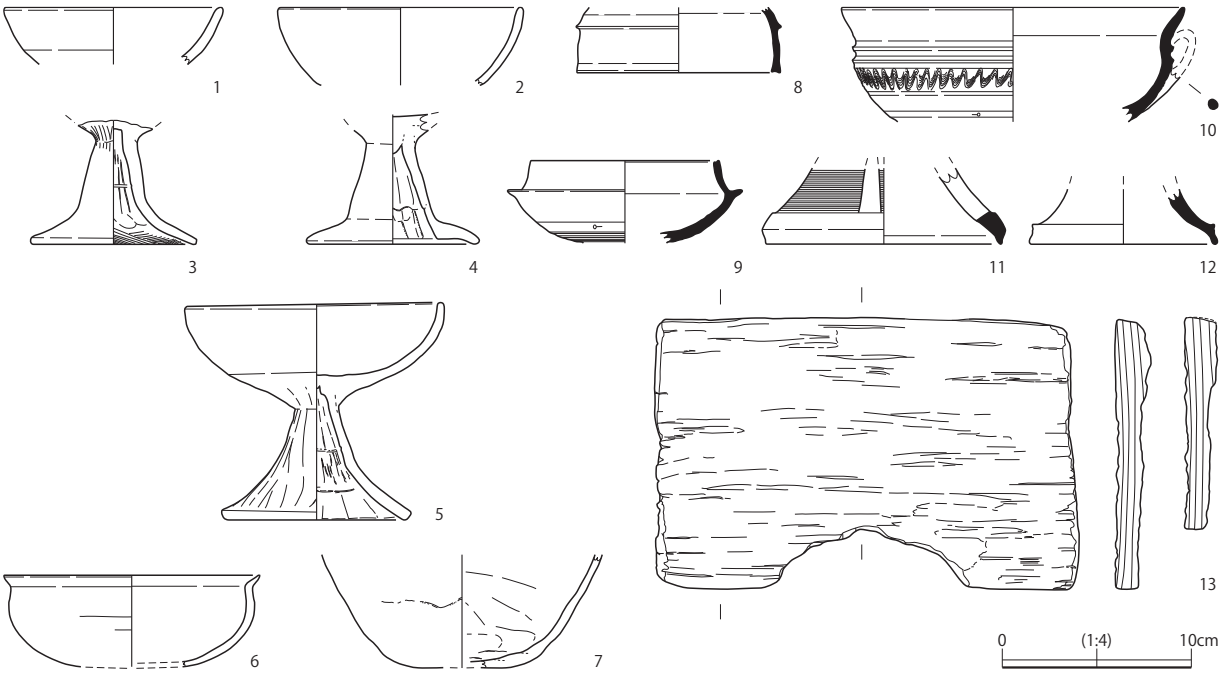


図 185　1 － 5 区　5320 ピット他出土遺物

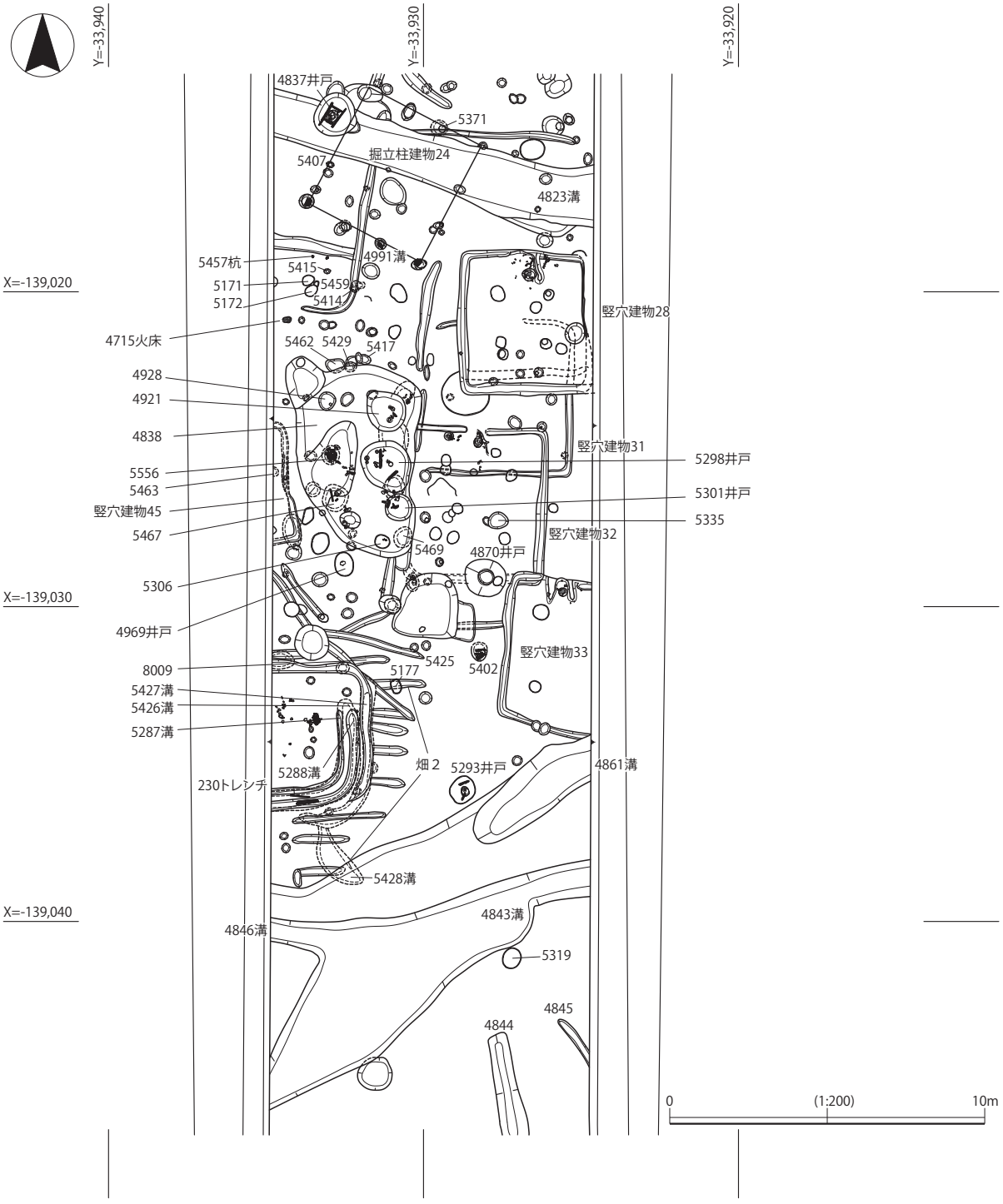
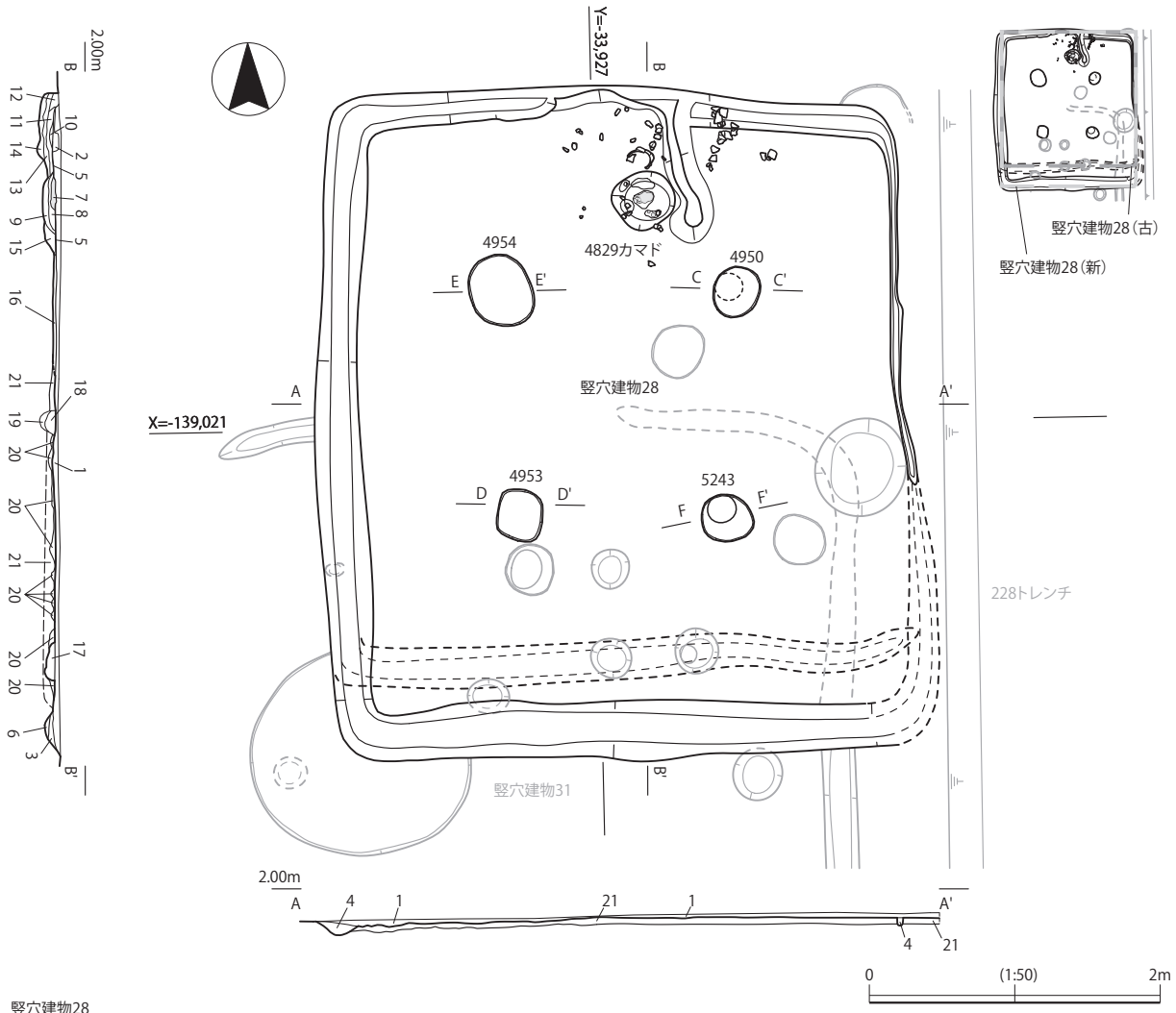


図 186　1－5区　第5－2ｂ面南西側平面

調査地南西側（図 186・229）

4823 溝以南の微高地を調査地南西側として報告する。4823 溝と 4843 溝に挟まれた微高地上では、竪穴建物・井戸・畑等が検出された。竪穴建物は切り合い関係があり、その変遷は、竪穴建物 31 →竪穴建物 32 →竪穴建物 28（古・新段階）→竪穴建物 33 になると考える。第 6 － 1 面の地形は、調査地南西側にも反映されており、第 6 － 1 面 8030 畦畔を境に東側が高く、西側が低くなる。8030 畦畔の上部はこの段階にすでに検出されており、4838 土坑とした井戸集中部は、8030 畦畔を境とした低い方、西側部分で検出された。なお、この 8030 畦畔を境に基盤層は、東側が砂質、西側が泥質である。



竪穴建物28
1　10YR5/1褐灰　極細砂質シルト　粗砂を微量含む　炭化物を微量含む
2　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　カマド本体崩落土
3　7.5YR5/2灰褐　シルト質粘土　竪穴建物28壁溝埋土
4　10YR4/1褐灰　細砂混シルト質粘土　竪穴建物28壁溝埋土
5　10YR2/1黒　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
6　10YR4/1褐灰　粘土　粗砂を少量含む　加工時形成層
竪穴建物28壁溝埋土
7　10YR5/2灰黄褐　シルト　赤変　火床
8　7.5YR4/1褐灰　シルト質粘土　火床
9　7.5YR4/2灰褐　シルト質粘土　火床
10　10YR6/2灰黄褐　粗砂混シルト　竪穴建物28床面形成層
11　10YR5/2灰黄褐　極細砂混シルト　粗砂～極粗砂を少量含む　竪穴建物28床面形成層
12　7.5YR5/1褐灰　極細砂混シルト　カマド本体
13　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　竪穴建物28床面形成層
14　10YR4/1褐灰　シルト質極細砂～細砂　竪穴建物28床面・加工時形成層
15　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　竪穴建物28床面・加工時形成層
16　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質粘土　竪穴建物28床面・加工時形成層
17　10YR4/2灰黄褐　シルト質粘土　極細砂～細砂を微量含む　竪穴建物28古段階壁溝埋土
18　10YR3/3暗褐　極細砂混シルト　竪穴建物31壁溝埋土
19　10YR3/2黒褐　シルト質粘土　竪穴建物31壁溝埋土
20　10YR4/2灰黄褐　シルト質粘土　粗砂を微量含む　竪穴建物31床面・加工時形成層
21　10YR5/2灰黄褐　極細砂質シルト　古土壌　5-2-2層

4950
1　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　極細砂を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　裏込め

4953
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　シルト混粘土を含む
2　5Y5/1灰　極細砂混シルト

4954
1　10YR3/1黒褐　粘土　極細砂混シルトを含む
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土（5-2b層）偽礫を含む
3　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト

5243
1　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土を少量含む　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　細砂混シルト　裏込め

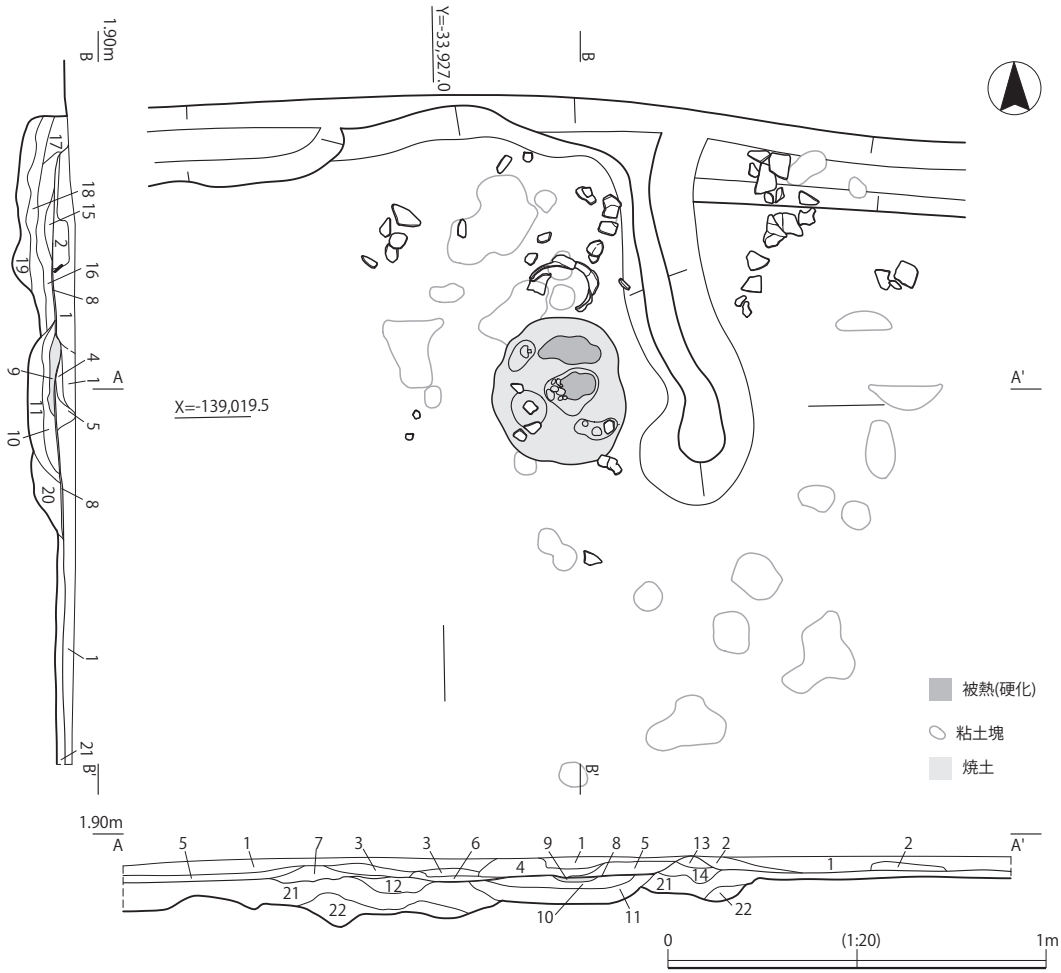
0　(1:40)　2m

図 187　1－5区　竪穴建物 28 平・断面

竪穴建物 28（図 186 ～ 189、図版 14）

4823 溝の南側で検出された。東側の壁溝は、加工面まで掘り下げを行った時点で検出された。そのため、検出面は他の地点の壁溝より下がっているため、見かけ上、壁溝幅が狭い。建て替えにより南側が拡張されており、建て替え前を古段階、建て替え後を新段階とした。なお、主柱穴は、古・新段階で切り合い関係を示すものがなかったことから同位置での建て替えと考えられる。

竪穴建物 28 新段階の平面形は長方形を呈する。規模は北辺 3.9 m、西辺 4.6 mである。北辺中央では、



4829カマド
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　粗砂を微量含む　炭化物を微量含む
2　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　カマド本体崩落土
3　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土偽礫を含む　カマド本体崩落土
4　7.5YR4/1褐灰　極細砂～細砂混シルト　粘土偽礫を含む　カマド本体崩落土
5　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　カマド本体崩落土
6　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　カマド本体崩落土
7　7.5YR5/1褐灰　シルト混粘土　粗砂を微量含む　カマド本体崩落土
8　10YR2/1黒　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
9　10YR5/2灰黄褐　シルト　赤変　火床
10　7.5YR4/1褐灰　シルト質粘土　火床
11　7.5YR4/2灰褐　シルト質粘土　火床
12　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト　極細砂を少量含む　カマド本体の名残りか
13　7.5YR5/1褐灰　極細砂質シルト～粘土　カマド本体
14　2.5Y6/2灰黄　粗砂混シルト　カマド本体
15　10YR6/2灰黄褐　粗砂混シルト　床面形成層
16　10YR5/2灰黄褐　極細砂混シルト　粗砂～極粗砂を少量含む　床面形成層
17　7.5YR5/1褐灰　極細砂混シルト　カマド本体
18　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　床面形成層
19　10YR4/1褐灰　シルト質極細砂～細砂　床面・加工時形成層
20　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　床面・加工時形成層
21　2.5Y5/2暗灰黄　シルト質粘土　床面・加工時形成層
22　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　シルト混粘土を含む　床面・加工時形成層

図 188　1－5区　竪穴建物 28　4829 カマド平・断面

4829 カマドが検出された。規模は、長さ 1.1 m、幅 0.8 m以上である。当初、カマドの西側本体と想定した粘土塊が検出されたが、カマド機能時形成層の炭化物を含むシルト（以下、炭層）が直下に確認されたことから、カマドの崩落土と判断した。カマド内では、図 189 －2 の土師器甕を用いた支脚が検出されており、支脚周辺に堆積する炭層の直上からは土師器の破片が出土した。また、カマドの東側においても、土師器の破片が壁溝内に落ち込んだ状態で出土している。

また、支脚の手前では、火床が検出された。平面形は円形を呈す。火床は椀形に掘りくぼめた部分をシルト質粘土で成形した後、粒径の整ったシルトを用いて構築される。火床の上部は、カマド機能時の被熱により、硬化面が形成される。

竪穴建物 28 古段階の平面形は正方形を呈する。規模は西辺で 4.1 mである。加工面直下の南側中央で焼土塊や炭化物を含む範囲が検出されたが、竪穴建物 31 に帰属するものと考えられる。

加工面は、他の竪穴建物と異なり、カマド直下が掘り込まれて低くなっている状況が検出された。全体的には東側が高くなっており、基盤層上面の状況を反映している。

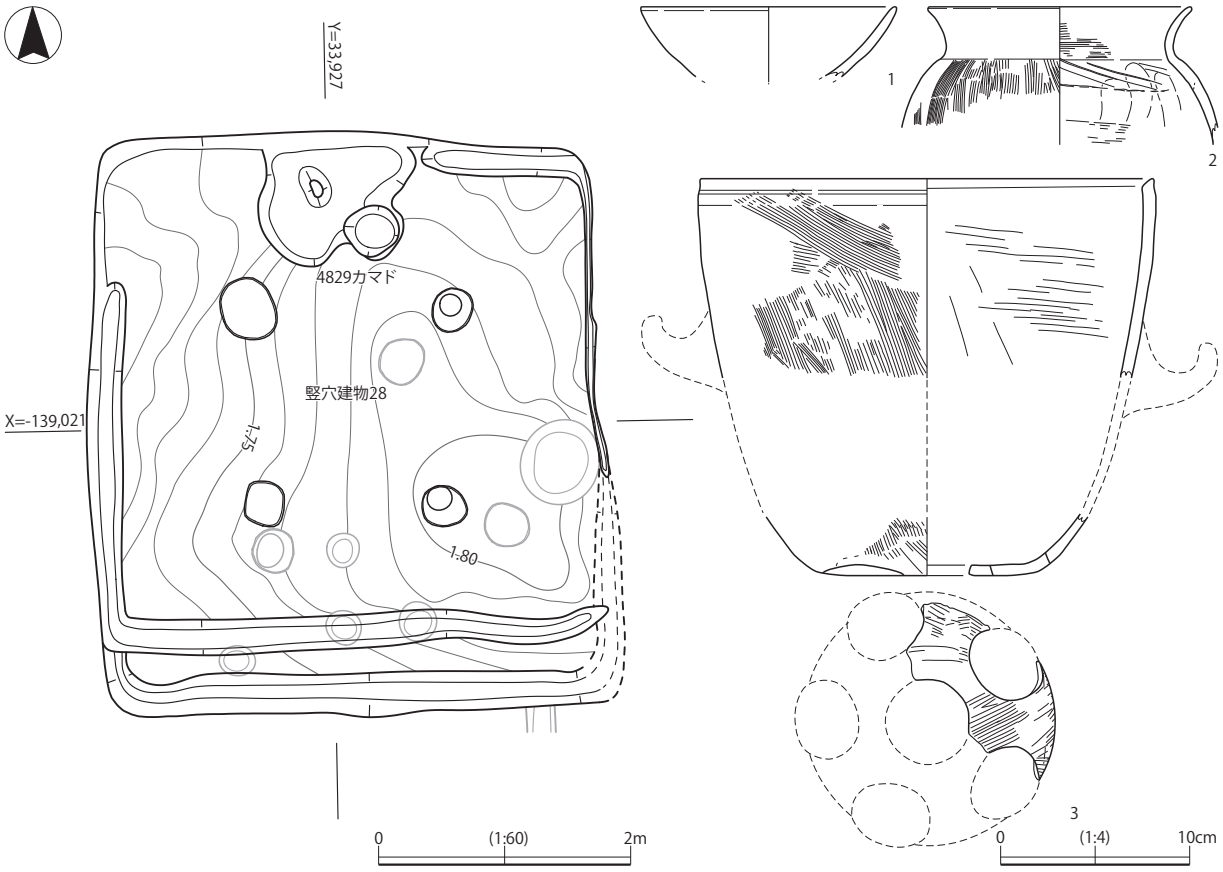


図 189　1－5区　竪穴建物 28 加工面平面　出土遺物

竪穴建物 28 から出土した遺物の内、図 189 － 1 ～ 3 を図示した。4829 カマドから出土した資料である。 1 は土師器椀形高坏の坏部である。 2 は土師器甕である。体部外面は縦方向のハケ調整、体部内面はナデ調整で、口縁部内面にはハケメが残る。 3 は土師器甑である。把手は欠損しており不明。底部には円形で大形の蒸気孔と、その周囲の蒸気孔が計 4 箇所が確認された。体部外面はハケ調整、体部内面はナデと板ナデ調整で仕上げられる。出土遺物は、古墳時代中期後葉以降に比定されるものである。

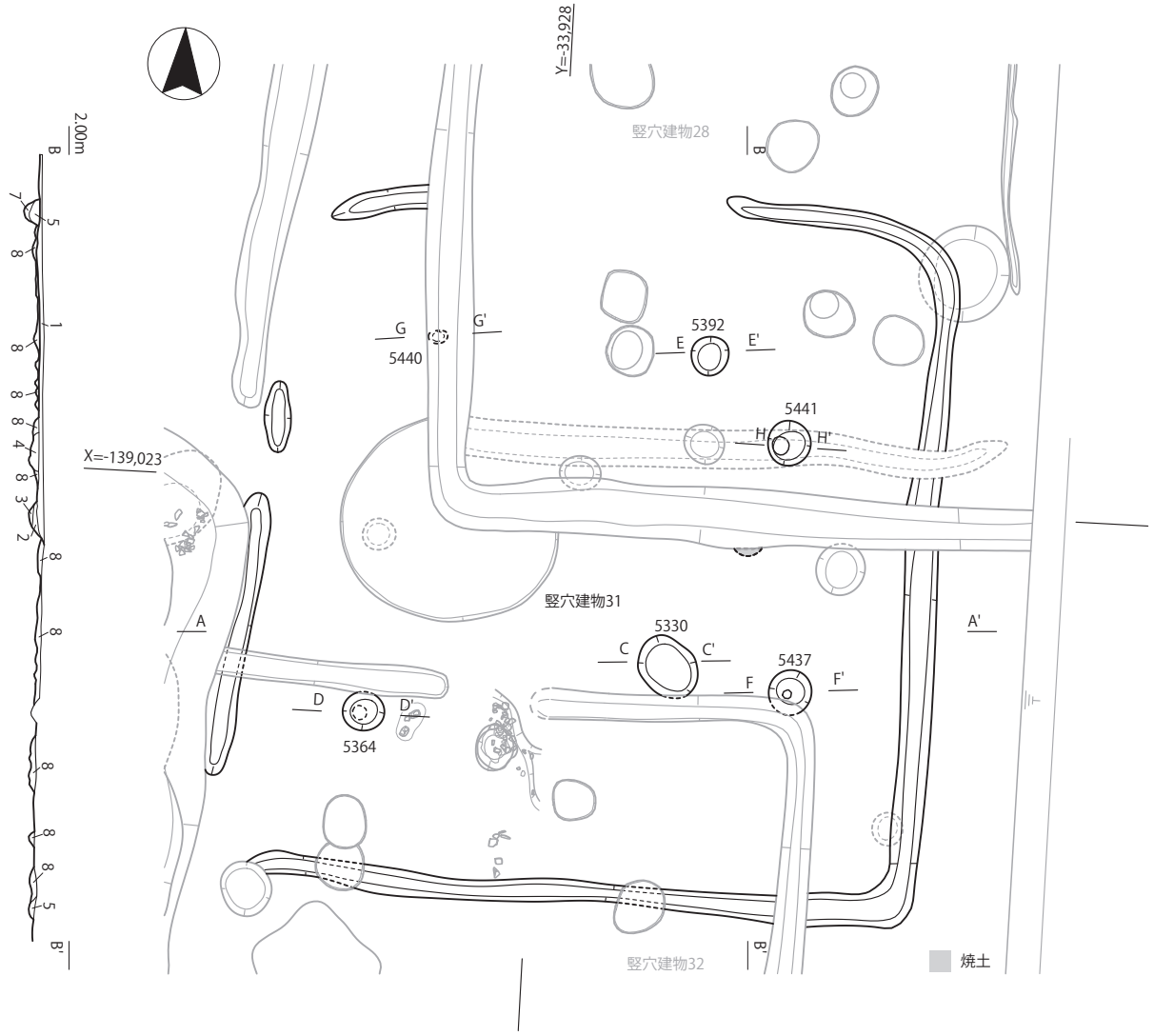
竪穴建物 31（図 186・190・191）

竪穴建物 28 の南側で検出された。竪穴建物 28･32 と切り合い関係があり、竪穴建物 31 の方が古い。西側の 4838 土坑との切り合い関係は不明である。西側は基盤層の５－２ｂ層上面が低くなっていく場所に当たり、遺存状態は悪い。西側の壁溝は加工時形成層としたシルト質粘土を含む粗砂が断続的に残るのみであった。

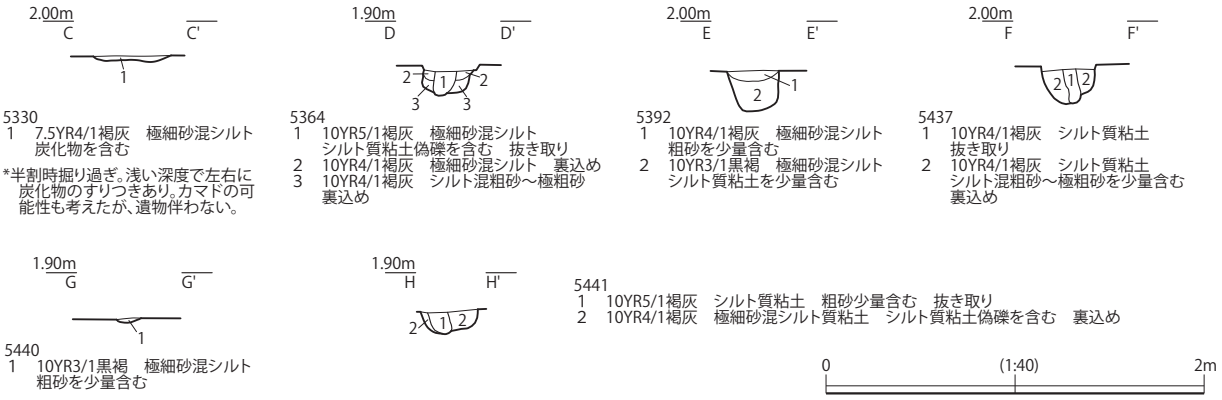
平面形は方形を呈し、規模は一辺 5.0 ｍである。床面・加工時形成層が部分的に残存する。東側中央で火床の可能性がある焼土と、竪穴建物 28 加工面となる、竪穴建物 31 の床面・加工時形成層上面で焼土塊と炭化物の広がりが検出されており、カマドは東側に配置された可能性が高い。

焼土については、周辺の竪穴建物の精査作業を繰り返し行ったことで、竪穴建物 31 の調査時には原形を留めていなかったため、写真・図面記録を元に復元的に図示した。竪穴建物 28 の断面観察用のアゼを設定した場所に当たっており、位置的に大きく異ならないと考えられる。火床の可能性がある焼土は、平面形は円形を呈する。床面・加工時形成層中で確認された焼土塊と炭化物は、この焼土に接するような位置関係にある。

主柱穴となる可能性がある柱穴は６基検出された。この内、5441・5437 柱穴は上記の焼土が火床



竪穴建物31
1　10YR5/1褐灰　極細砂質シルト　粗砂を微量含む　炭化物を微量含む　竪穴建物28埋土
2　7.5YR5/2灰褐　シルト質粘土　竪穴建物28壁溝埋土
3　10YR4/1褐灰　粘土　粗砂を少量含む　加工時形成層　竪穴建物28壁溝埋土
4　10YR4/2灰黄褐　シルト質粘土　極細砂～細砂を微量含む　竪穴建物28古段階壁溝埋土
5　10YR3/2黒褐　シルト質粘土　粗砂を少量含む　竪穴建物31壁溝埋土
6　10YR3/2黒褐　粗砂　シルト質粘土を含む　竪穴建物31壁溝埋土
7　10YR3/3暗褐　シルト質粘土　粗砂を微量含む　加工時形成層　竪穴建物31壁溝埋土
8　10YR4/2灰黄褐　シルト質粘土　粗砂を微量含む　竪穴建物31床面・加工時形成層



5330
1　7.5YR4/1褐灰　極細砂混シルト　炭化物を含む

*半割時掘り過ぎ。浅い深度で左右に炭化物のすりつきあり。カマドの可能性も考えたが、遺物伴わない。

5364
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土偽礫を含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　裏込め
3　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　裏込め

5392
1　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粗砂を少量含む
2　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　シルト質粘土を少量含む

5437
1　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　シルト混粗砂～極粗砂を少量含む　裏込め

5440
1　10YR3/1黒褐　極細砂混シルト　粗砂を少量含む

5441
1　10YR5/1褐灰　シルト質粘土　粗砂少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト質粘土　シルト質粘土偽礫を含む　裏込め

図 190　1－5区　竪穴建物 31 平・断面

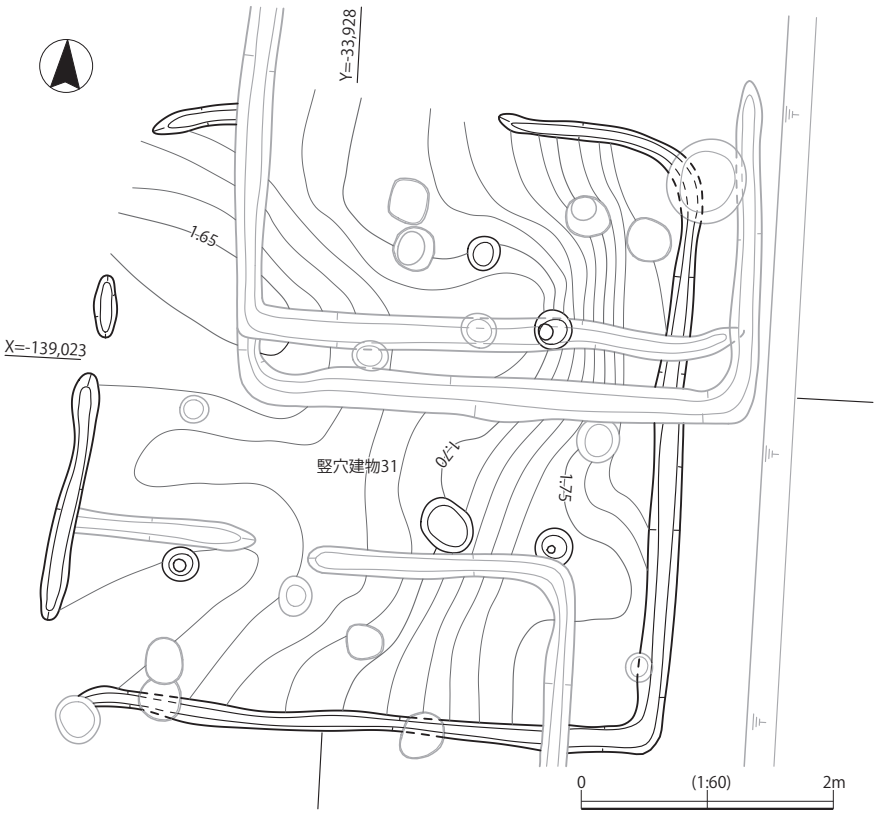


図 191　1－5区　竪穴建物 31 加工面平面

であった場合、位置的に近接しすぎるため、主柱穴にはならないと考えられる。また、他の柱穴についても、極めて遺存状況が悪く、加工時の形状を明確に持たないものが含まれた。主柱穴がこのような残存状態であるため、竪穴建物 31 の壁溝は、加工面の状況を検出したものに過ぎない可能性がある。

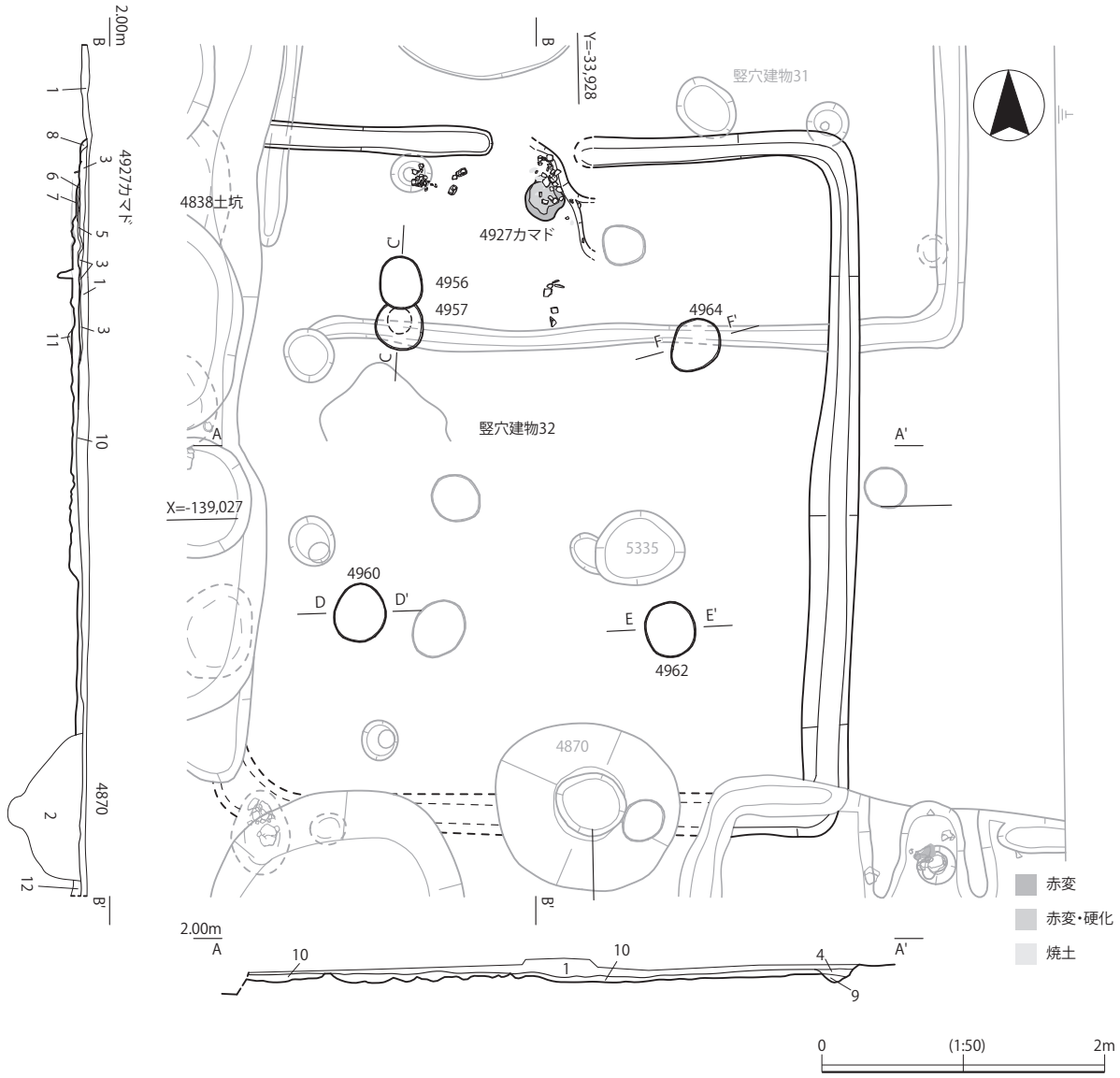
竪穴建物 31 から出土した遺物に時期が特定できるものはなく、他の竪穴建物との切り合い関係から、古墳時代中期前葉以前に構築されたと想定される。

竪穴建物32（図186・192～194、図版14・57・62・66）

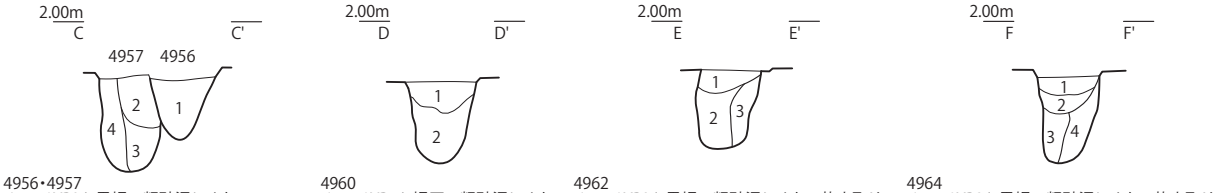
竪穴建物 31 の南側で検出された。4－4層とした古土壌の掘り下げを行っていた段階から、カマドやカマド西側から出土した製塩土器が認識されていたが、竪穴建物の平面形が検出されたのは、竪穴建物の床面に近いところまで掘り下げた段階である。竪穴建物 33 と壁溝が切り合っており、不明確であったが、竪穴建物 32 の方が新しいと考えられる。竪穴建物の西側にある 4838 土坑との切り合い関係は、不明である。後述するとおり、複数の遺構の集合体が 4838 土坑として認識された可能性があり、4838 土坑埋土上部が土壌化していたことや、竪穴建物 32 以西が斜面地をなしていたことから、切り合い関係は明確におさえることができなかった。出土遺物から判断すると、同時期か、4838 土坑が先行するものと考えられる。なお、図 192 の 4838 土坑は、完掘状況を図化したものである。

竪穴建物 32 の平面形は方形を呈し、規模は一辺 5.0 mである。南側の 4870 井戸周辺の壁溝は検出されなかった。4870 井戸との切り合い関係は不明である。なお、4870 井戸は素掘りの井戸で、土師器細片が出土した。時期の詳細は不明である。

竪穴建物 32 の北辺中央で 4927 カマドが検出された。規模は、長さ 0.9 m以上、幅 0.5 m以上である。西側は掘り過ぎたため不明。カマド内には、カマド機能時形成層の炭化物を多量に含むシルト（以下、炭層）が堆積している状況が確認できた。カマド本体に炭層がすり付く部分で、炭層が 2 層に分かれており、使用時に内側から補修された可能性がある。また、カマド中央では、土師器甕を用いた支脚が検出された。土師器甕は、口縁部から体部が半分に割れて、北側に傾いた状態で出土しており、カマド廃絶以降に撹乱を受けたと考えられる。なお、4927 カマドの南側からも、土師器の破片が出土しているが、炭層が非常に薄くなっていたため、掻き出し口は平面的におさえることができなかった。先述したとおり、4927 カマドの西側では、製塩土器がまとまって出土した。完形品のものが含まれていること



竪穴建物32
1　10YR4/2灰黄褐　粗砂混シルト　4-4層
2　2.5Y3/1黒褐　細砂混シルト　4870土坑埋土
3　10YR5/2灰黄褐　粗砂混シルト
4　2.5Y3/1黒褐　極細砂質シルト　竪穴建物32壁溝埋土
5　10YR3/1黒褐　シルト　炭化物を多量含む　カマド機能時形成層
6　7.5YR4/3褐　シルト　炭化物を少量含む　赤変　火床
7　7.5YR4/1褐灰　粘土　火床
8　10YR4/1褐灰　極細砂質シルト　粗砂を少量含む　カマド本体
9　2.5Yh/1黄灰　シルト質粘土　加工時形成層
10　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　粗砂を少量含む　床面・加工時形成層
11　2.5Y3/1黒褐　極細砂質シルト　竪穴建物31壁溝埋土
12　10Y5/1灰　粗砂混シルト　4-4層　古土壌



4956・4957
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　粘土偽礫を含む　4956埋土
2　10YR4/1褐灰　極粗砂混シルト　抜き取り　4957埋土
3　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　4957埋土　抜き取り
4　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　4957埋土　裏込め

4960
1　10YR4/1褐灰　粗砂混シルト
2　10YR5/1褐灰　粘土　粗砂～極粗砂を少量含む

4962
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　粘土偽礫を含む　抜き取り
3　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂　裏込め

4964
1　10YR3/1黒褐　粗砂混シルト　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　シルト質粘土　抜き取り
3　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　抜き取り
4　10YR4/1褐灰　シルト質細砂　粘土(5-2b層)偽礫を含む　裏込め

図192　1－5区　竪穴建物32平・断面

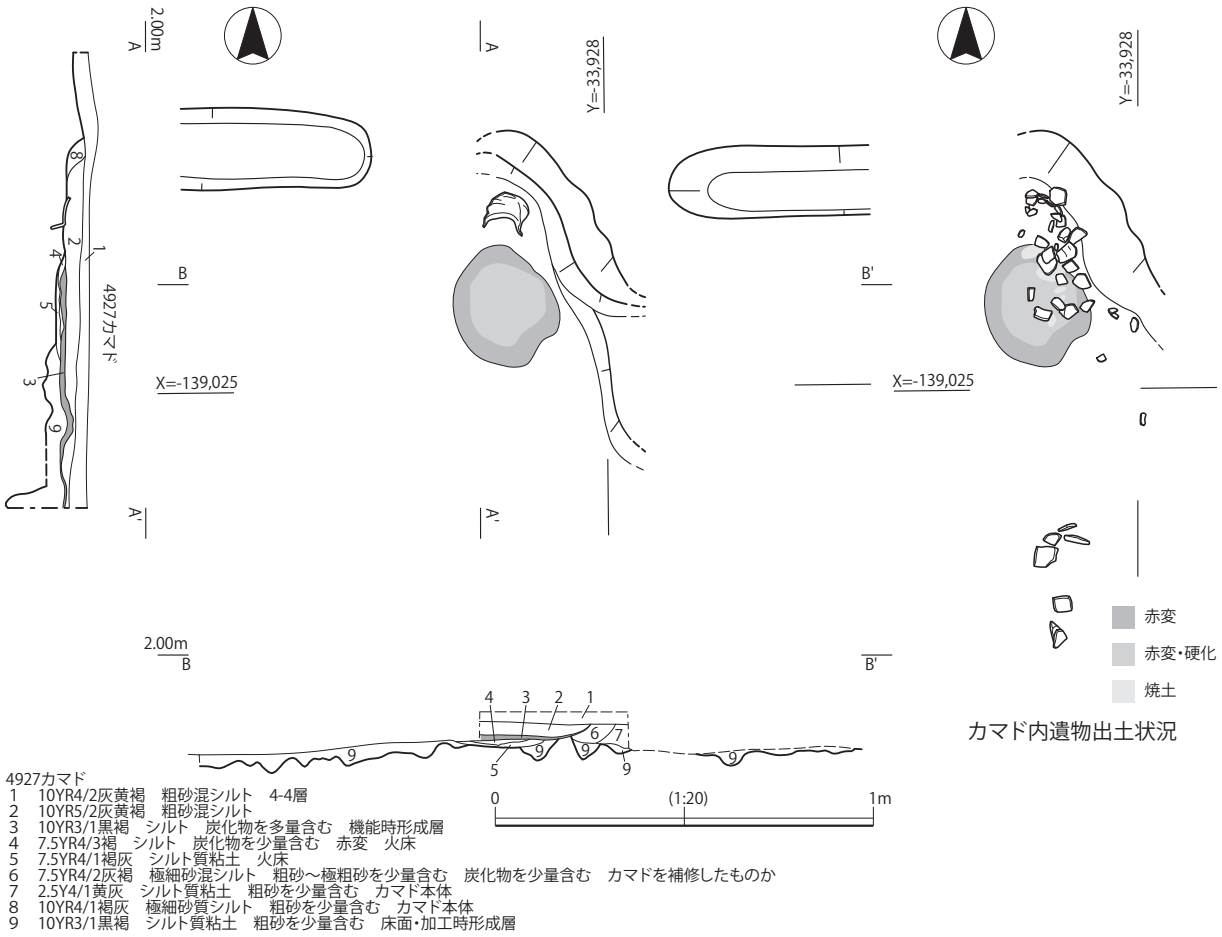


図 193　1－5区　竪穴建物 32　4927 カマド平・断面

や、竪穴建物 32 の南側で検出され、製塩土器が廃棄された 5402 土坑と近接していることが注目される。調査地北西側の竪穴建物 30・38・44 内でも製塩土器が廃棄された 5277 土坑が検出されており、集落内で使用された製塩土器の廃棄状況を考える上で、一つの事例となるものであろう。

支脚の手前では、火床が検出された。平面形は円形に近い形状を呈す。火床は、椀形に掘りくぼめた部分を成形した後、シルト質粘土を用いて構築される。シルト質粘土は、検出時にはブロック状になっており、上面の凹凸が顕著である。焼土塊を再利用したものと考えられ、被熱による変化が加わって、硬化面が形成される。

加工面は北側が高く、カマドを検出した範囲が若干周囲より高くなっており、北側に高い基盤層の状況を反映したものと考えられる。また、南西側の斜面は、第６－１面 8030 畦畔にすりつく５－２ｂ層上面を反映したものと考えられる。

竪穴建物 32 から出土した遺物の内、図 194 －１～ 10 を図示した。１・３・４が 4927 カマドから出土した。１は須恵器坏身である。TK216 ～ TK208 型式。２は土師器椀形高坏である。坏部外面は下位に粗いハケメが残る。内面は磨滅。３は土師器甕で、支脚として用いられた。体部外面には縦方向のハケメが残る。内面は上位が横方向のハケ調整、下位に指頭圧痕が残る。４は土師器の甑の把手である。内面にハケメが残る。５は韓式系土器鉢の破片である。外面格子目タタキ、内面ナデ調整される。６～ 10 は製塩土器である。竪穴建物の検出作業時に、4927 カマドの西側からまとまって出土した。６の外面はタタキ、内面はナデが施される。７の外面は粘土接合部の間を指押さえされた後、縦・斜め方向

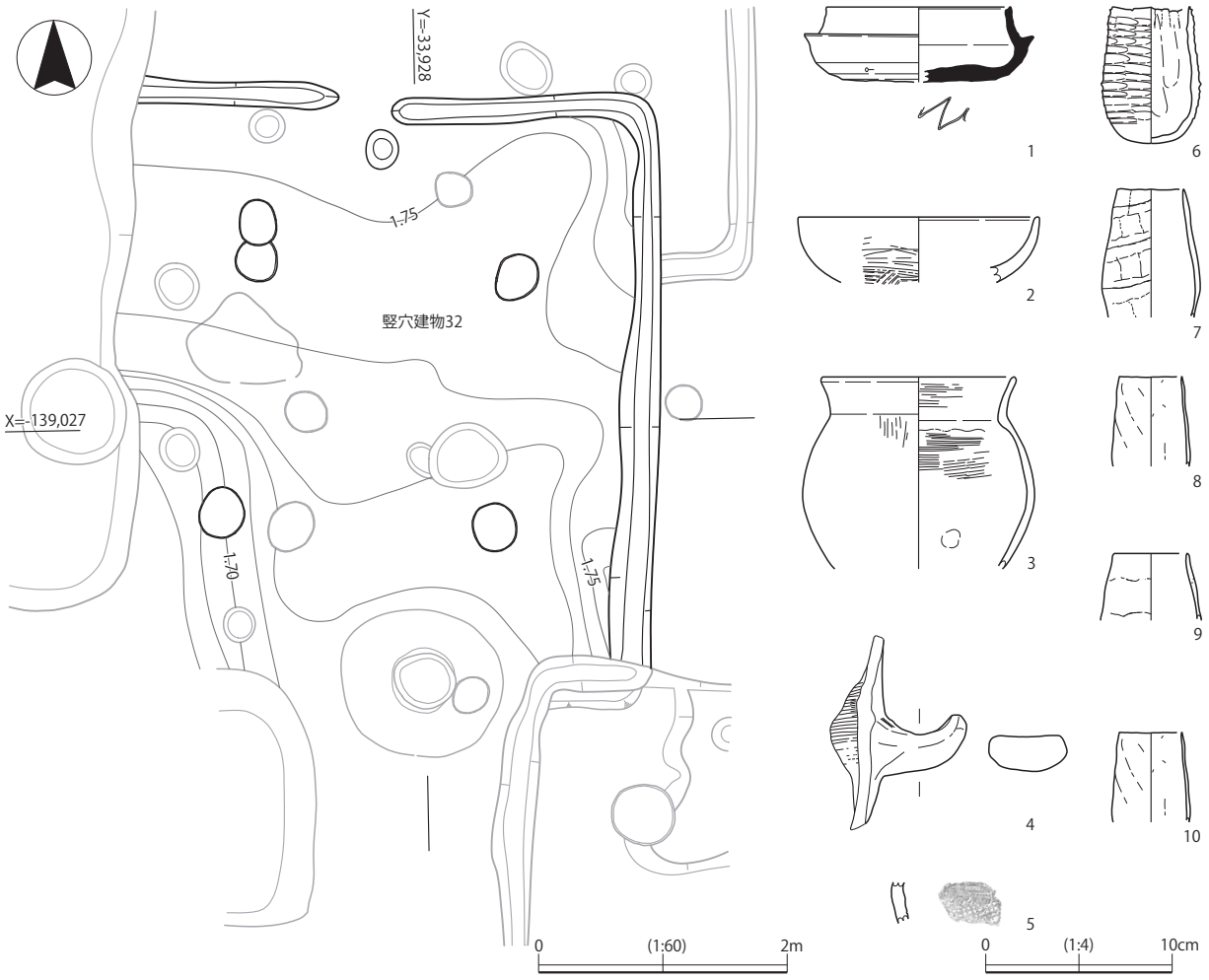


図 194　1－5区　竪穴建物 32 加工面平面　出土遺物

にナデ調整される。内面はナデで仕上げられる。8は内外面磨滅。9は内・外面ナデ調整される。10の内・外面は磨滅しているが、ナデによって仕上げられたと考えられる。出土遺物から、竪穴建物 32 は古墳時代中期前葉～中葉に位置付けられる。

竪穴建物 33（図 186・195 ～ 197、図版 14・59）

竪穴建物 32 の南東で検出された。南側は 4843・4861 溝を境界として、水田が広がっていたと考えられる。カマドを含めて竪穴建物の西半分が検出された。竪穴建物 32 と切り合い関係があり、竪穴建物 32 より新しい。平面形は方形を呈し、規模は西辺で 4.7 mである。

なお、南辺の壁溝は、調査時に検出が困難だった部分で、繰り返しの精査作業で、竪穴建物の基底面に近いところまで掘り下げた状態で溝を検出した。調査時には竪穴建物の壁溝と考えたが、竪穴建物の方位に合わず、確実性が低いため、図 195 では点線で表記した。竪穴建物 33 の主柱穴は 2 基検出しており、いずれも柱は抜き取られていた。東側の側溝断面では、他の柱穴は確認することができなかった。

4718 カマドは北辺中央で検出された。規模は長さ 0.75 m、幅 0.95 mである。検出時、本体崩落土がカマド内に落ち込んだ状態が検出されており、この崩落土を除去した段階で、カマド中央に火床が検出された。カマド内で、支脚は確認できなかった。

また、カマド機能時形成層の炭層が認められなかったことから、片付け行為が行われた後、カマドは廃絶されたものと考えられる。火床は円形を呈し、椀形に掘りくぼめた部分をシルト質粘土で成形した後、

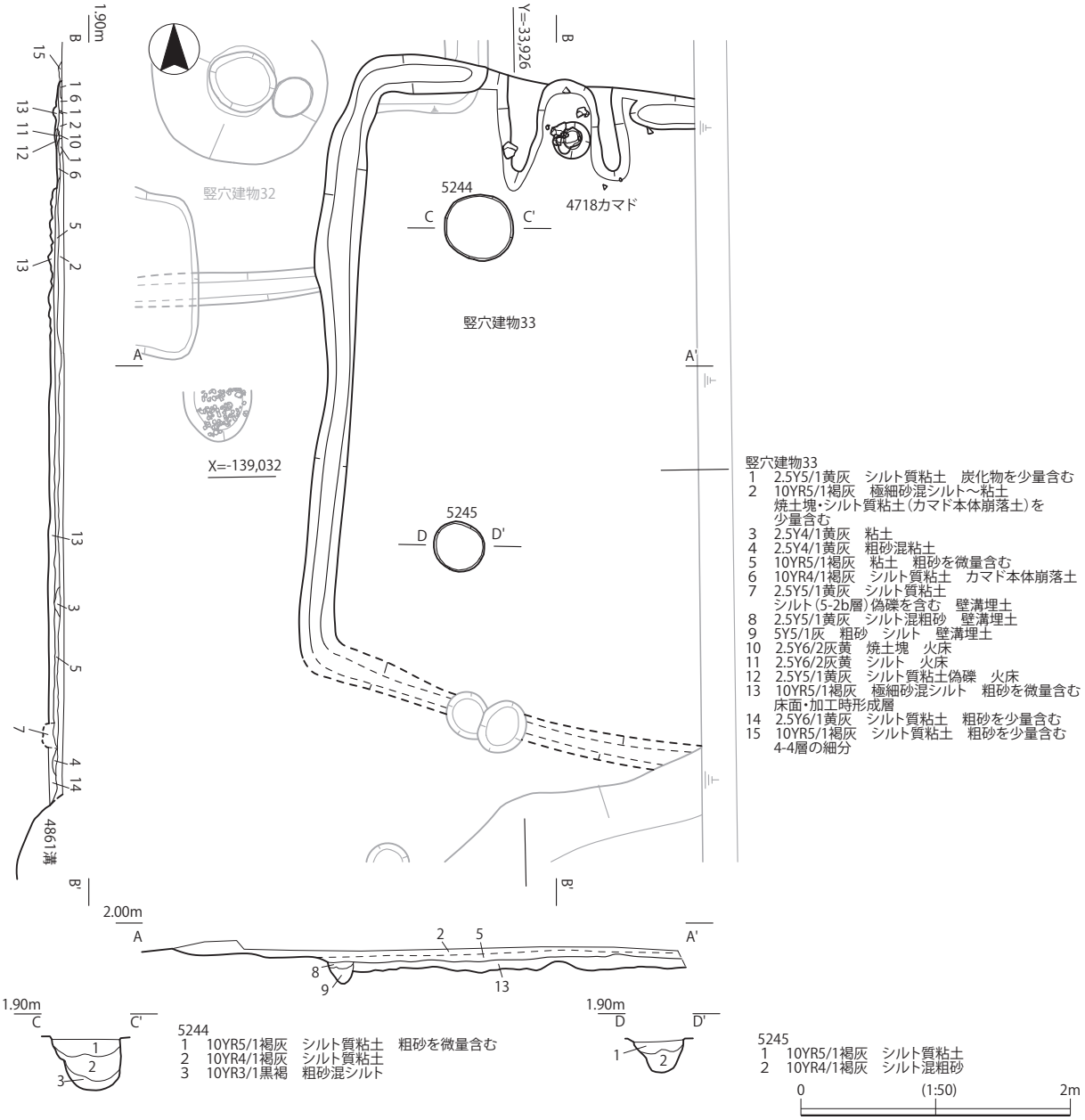
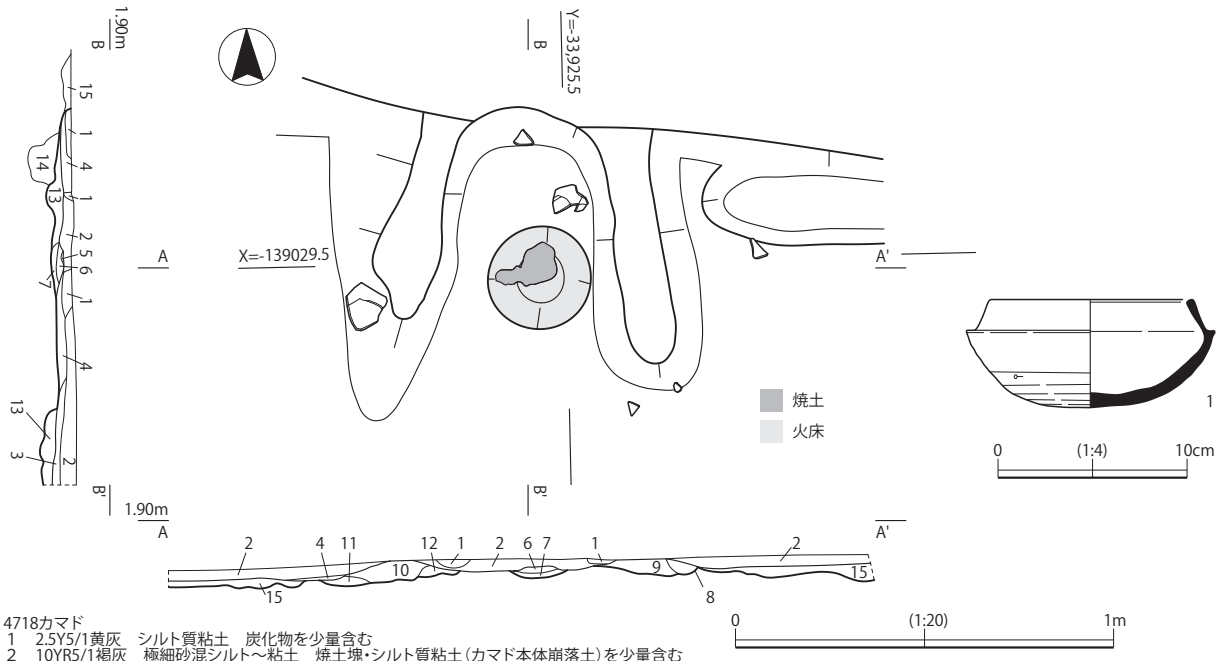


図 195　1－5区　竪穴建物 33 平・断面

粒径が整ったシルトを用いて構築される。火床上面では焼土塊が検出されており、カマド機能時の被熱によって、硬化面をもつ。

加工面は、4718 カマドが構築された部分が最も高く、全体的に南西に向かって低くなっている。竪穴建物 33 の北側から 5－2 b層上面は南西に向かって低くなっており、この状況が反映されて竪穴建物が構築されたと考えられる。

竪穴建物 33 から出土した遺物は、図 196 －1 の須恵器坏身がある。4－3層として掘削した地層から出土した破片と接合する。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめられる。外面は回転ナデと回転ヘラケズリによって仕上げられる。外面の回転ヘラケズリは体部中位以下に施される。須恵器坏身は、MT15 型式に比定されるもので、竪穴建物 33 は古墳時代後期前葉に機能したと考えられる。1－5区で検出された竪穴建物の中では最も新しい段階に位置付けられる。



4718カマド
1 2.5Y5/1黄灰 シルト質粘土 炭化物を少量含む
2 10YR5/1褐灰 極細砂混シルト～粘土 焼土塊・シルト質粘土（カマド本体崩落土）を少量含む
3 10YR5/1褐灰 粘土 粗砂を微量含む
4 10YR4/1褐灰 シルト質粘土 カマド本体崩落土
5 2.5Y6/2灰黄 焼土塊 火床
6 2.5Y6/2灰黄 シルト 火床
7 2.5Y5/1黄灰 シルト質粘土偽礫 火床
8 2.5Y5/1黄灰 シルト質粘土 炭化物を微量含む カマド本体
9 2.5Y5/2暗灰黄 シルト質粘土 粗砂を少量含む カマド本体
10 2.5Y4/1黄灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む カマド本体
11 2.5Y5/1黄灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む カマド本体
12 2.5Y4/1黄灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む カマド本体
13 10YR5/1褐灰 極細砂混シルト 粗砂を微量含む 床面・加工時形成層
14 5Y6/1灰 極細砂混シルト 粗砂を微量含む 遺構埋土
15 10YR5/1褐灰 シルト質粘土 粗砂を少量含む 4-4層の細分

図 196　1－5区　竪穴建物 33　4718 カマド平・断面　出土遺物

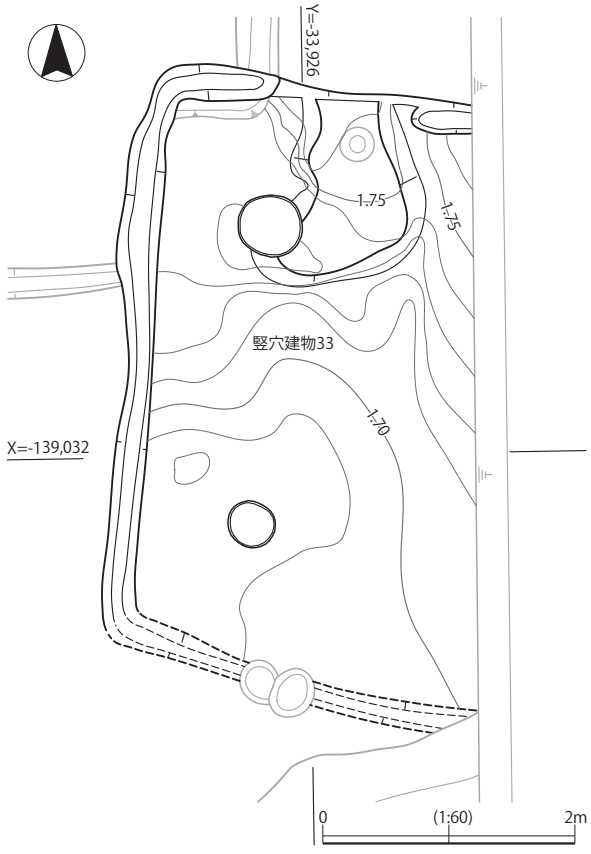


図 197　1－5区　竪穴建物 33 加工面平面

竪穴建物 45（図 186・198）

4838 土坑の西側で検出された。壁溝の一部が確認されており、全容は不明である。

当初から竪穴建物を想定して検出したにもかかわらず、床面・加工時形成層と５－２ｂ層の区別が難しく、一時的に土坑として掘削した。後に壁溝が検出されたため、改めて竪穴建物と認識するに至っている。竪穴建物 45 の規模は東辺で 3.8 ｍである。主柱穴・カマドは、230 トレンチ断面においても精査を行ったが、検出されなかった。

竪穴建物 45 から図 198 － 1 に図示した土師器椀形高坏が出土した。内外面は横ナデが施されており、坏部内面に放射状の暗文が施される。古墳時代中期中葉以降に比定されるものである。

なお、この竪穴建物 45 から２－１区 82 溝にかけては、調査地北側の６－４ｂ層が成因の微高地ではなく、５－２ｂ層により形成された微高地が広がる。竪穴建物 45 が検出されたことから、竪穴建物 45 と 82 溝南側をつないだ微高地上にも居住域が広がることが想定される。

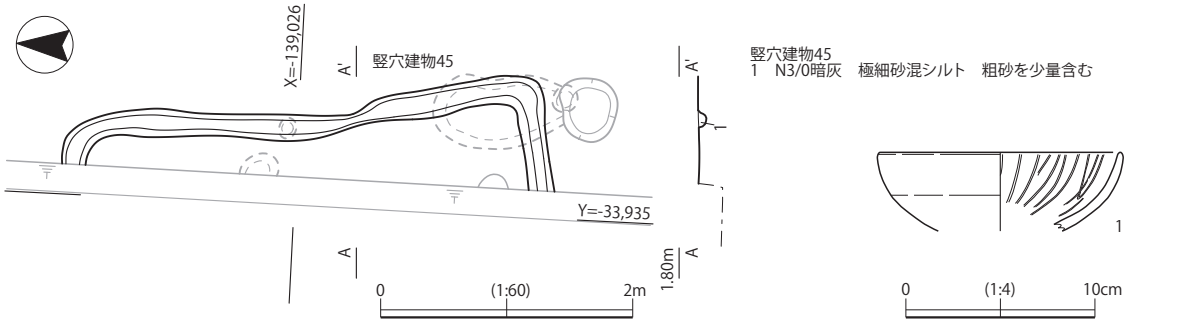


図 198　1－5区　竪穴建物 45 平・断面　出土遺物

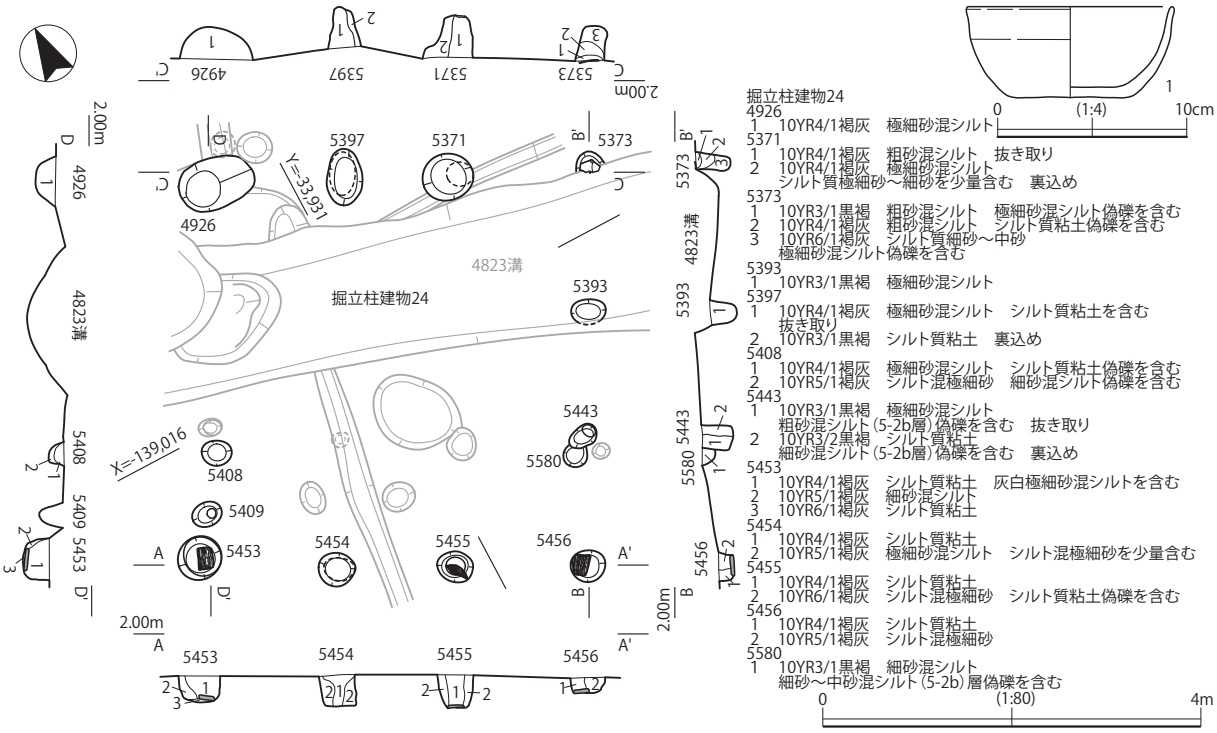


図 199　1－5区　掘立柱建物 24 平・断面　出土遺物

掘立柱建物 24（図 186・199、図版 13・63）

竪穴建物 28 の北西で検出された。規模は 2 間× 3 間である。梁行 4.0 m、桁行 4.2 mである。5371 柱穴から図 199 － 1 の土師器鉢が出土した。4837 井戸との切り合い関係は不明である。

4837 井戸（図 147・200 ～ 206、図版 13・60・72 ～ 74）

竪穴建物 26 の南西で検出された。扉板が井戸枠に転用される。4823 溝と切り合い関係があり、4837 井戸が新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸 1.4 m、短軸 1.3 m、深さ 1.4 mである。南東側では井戸構築時に使用された 8072 階段状遺構が検出された。井戸構築時は南東側が作業導線として使用されたと考えられる。井戸枠は、扉板を対向する位置に置き、板材（扉板を含む転用材）の長辺を 4 段に組み合わせて構築される。板材には節抜けしたものがあり、木片で栓をした状態が検出された。遺物は、枠内の中層から下層を中心に出土した。4837 井戸から出土した土器は、図 201 － 1 ～ 10 を図示した。1・2 は須恵器坏蓋である。1 は井戸枠外から出土。TK23 型式。2 は井戸枠内から出土。TK47 型式。3 は須恵器壺ないし瓶の口縁部である。4 ・ 5 は須恵器甕である。4 は口縁端部直下に鈍い突帯がめぐる。5 は、外面が平行タタキ調整の後、カキメが施される。内面はナデ調整で、同心円文当具痕が残る。6 ～ 8 は製塩土器である。6 は外面板ナデ調整、内面ナデ調整である。7 ・ 8 は外面タ

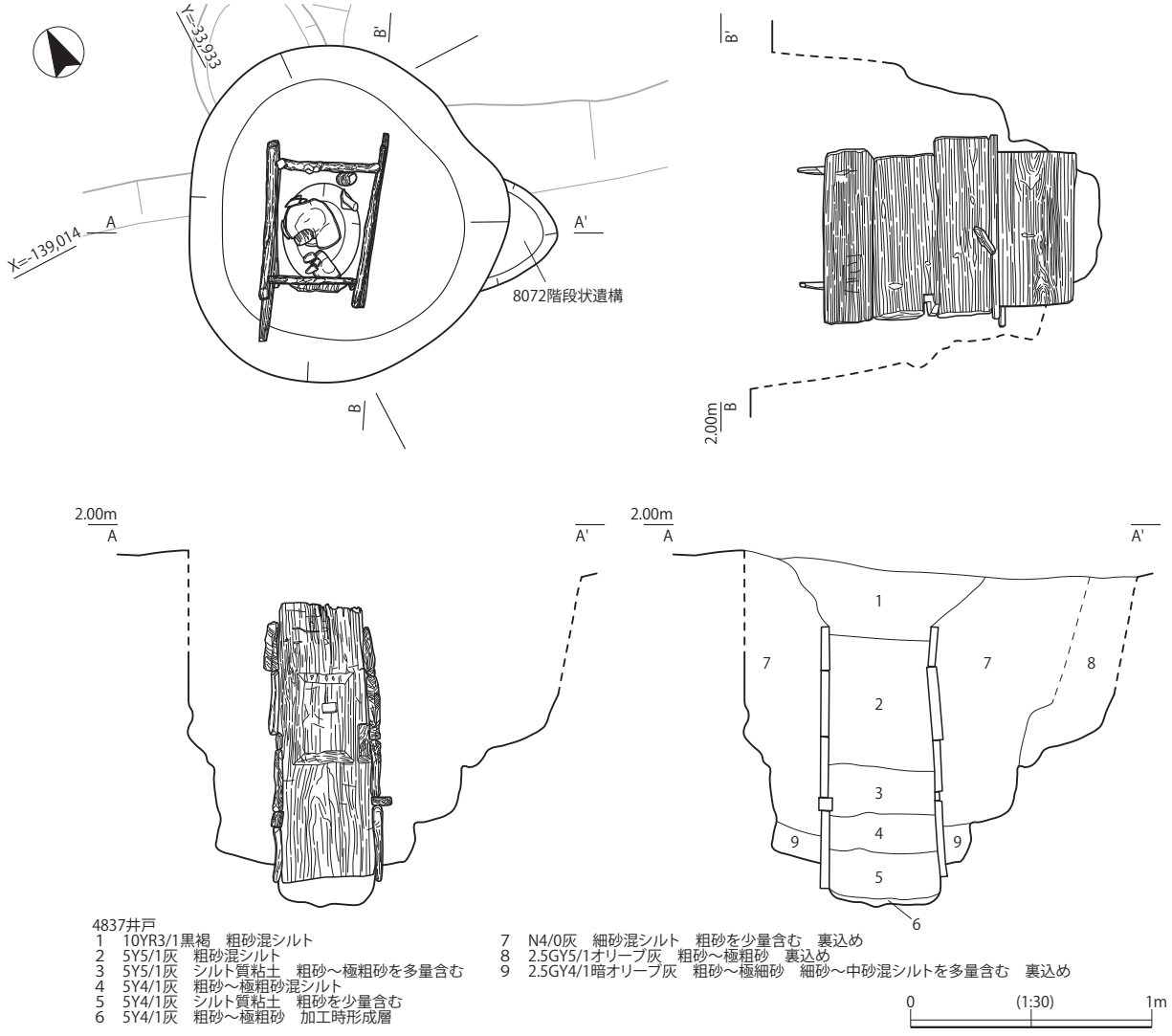


図 200　1－5区　4837 井戸平・断面

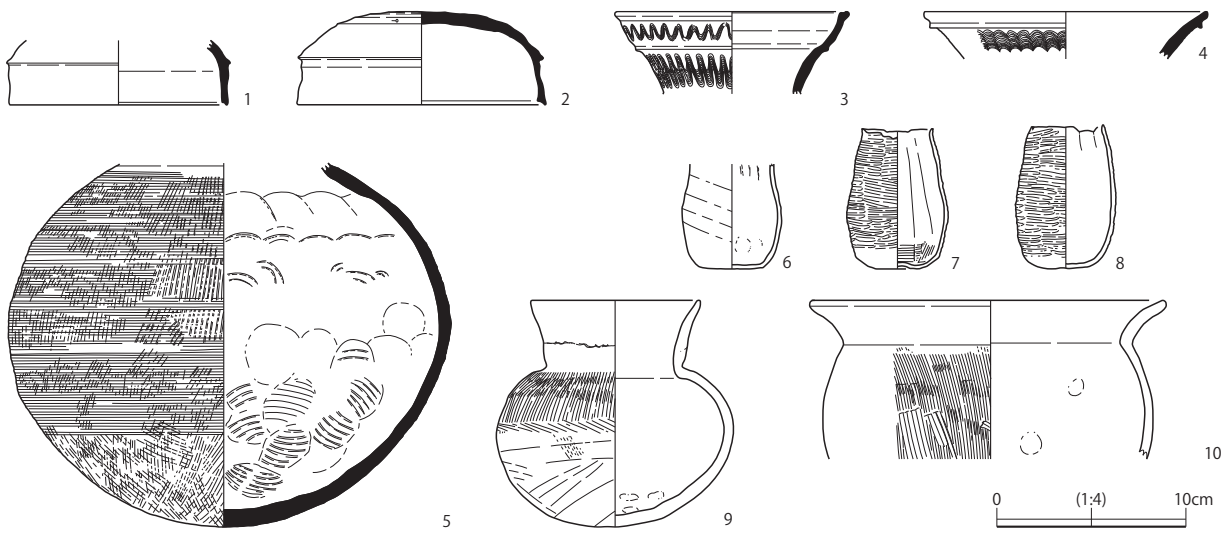


図 201　1－5区　4837 井戸出土遺物（1）

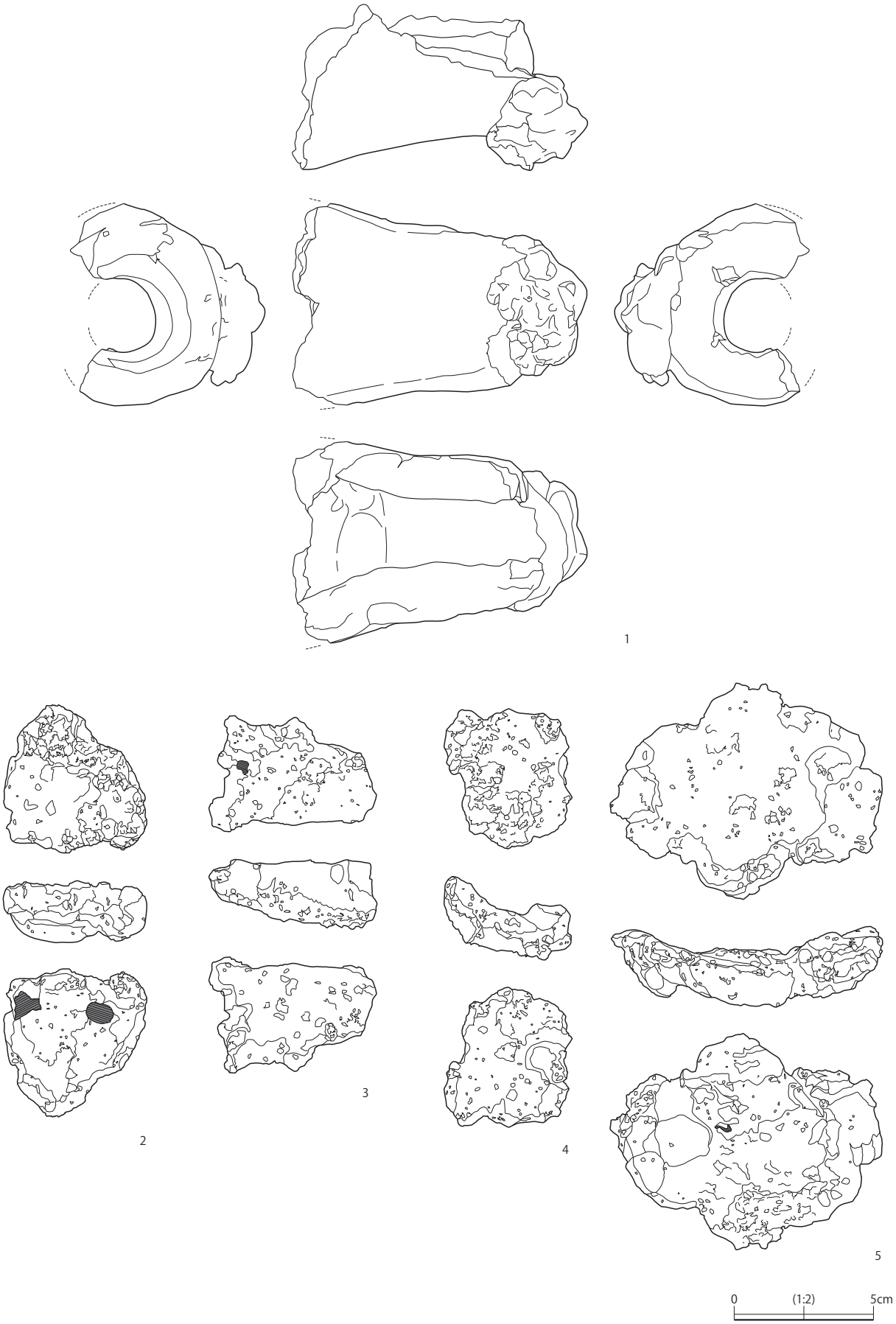


図 202　1－5区　4837 井戸出土遺物（2）

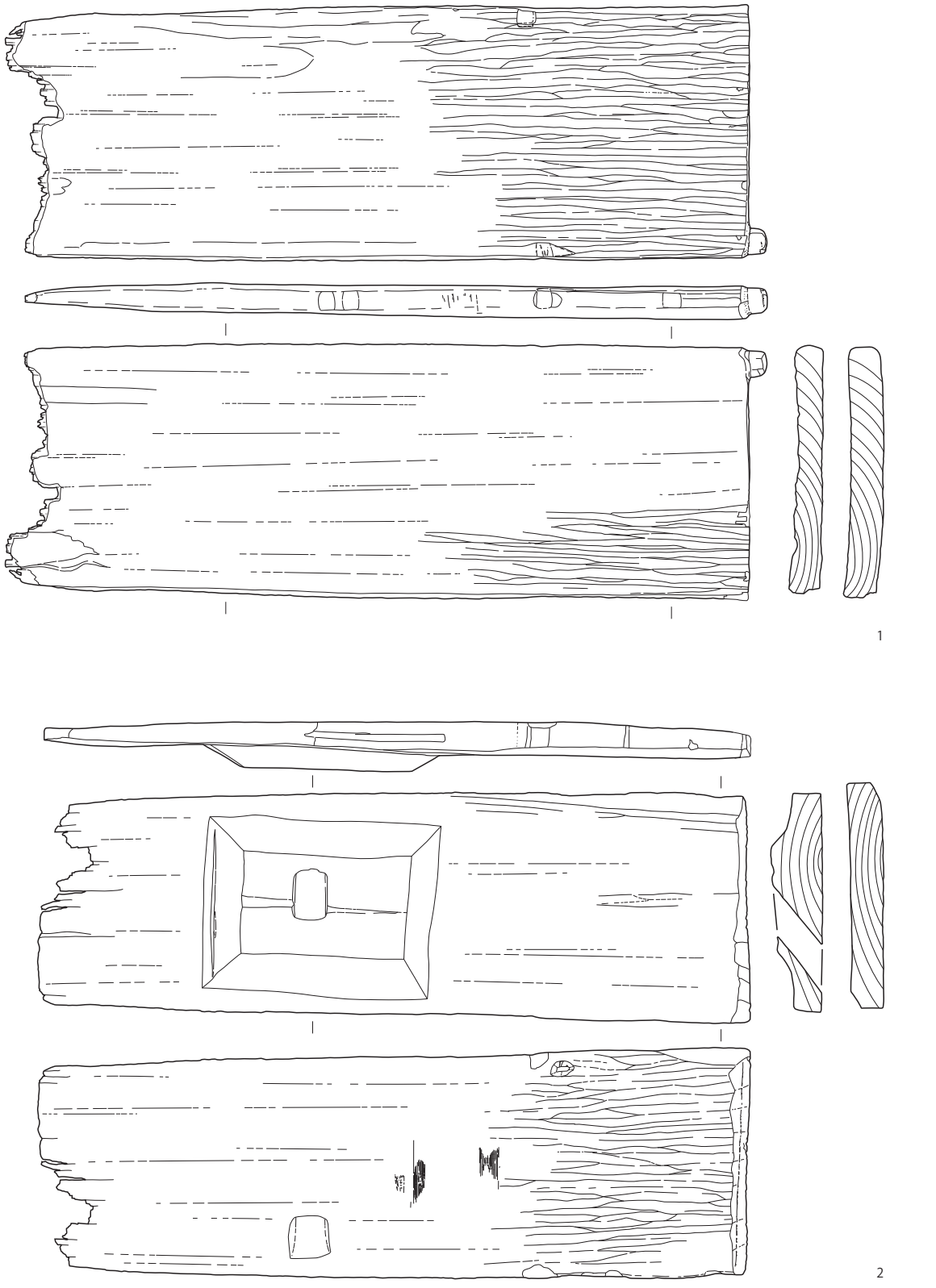


図 203　1 － 5 区　4837 井戸出土遺物（3）

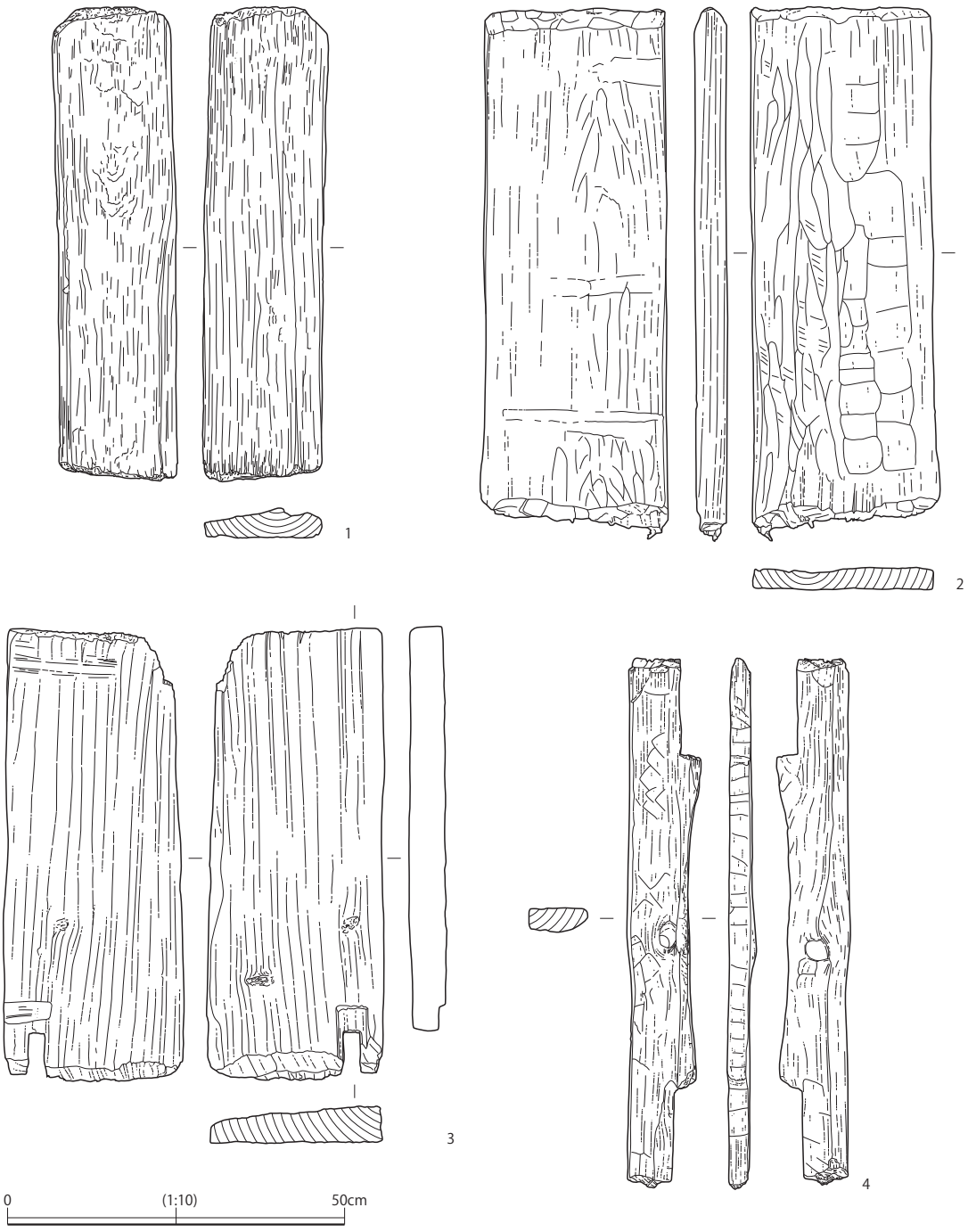


図 204　1－5区　4837 井戸出土遺物（4）

タキ、内面ナデ調整される。9は土師器直口壺である。体部外面の上位は縦方向のハケ調整、中位はナデ調整、下位は板ナデ調整で、中位から下位にかけてハケメが残る。10 は土師器甕である。細片を図化。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のナデ調整で、指押さえの痕跡が残る。

4837 井戸から出土した鍛冶関連遺物は、図 202 －1～5である。1は大形の鞴羽口である。先端にはガラス質滓が付着する。2・3は椀形鍛冶滓。滓質は緻密で、緑灰色。4・5はガラス質滓。下面には白色粘土と砂礫が付着。4837 井戸から出土した木製品は、図 203 ～図 206 である。図 206 －3以外、すべて井戸枠として使用された。図 203 －1・2は扉板である。1は、下端に円形の軸が作り出されており、使用時の摩耗が認められる。表・裏面は幅が狭い、縦方向のケズリ調整で仕上げられる。

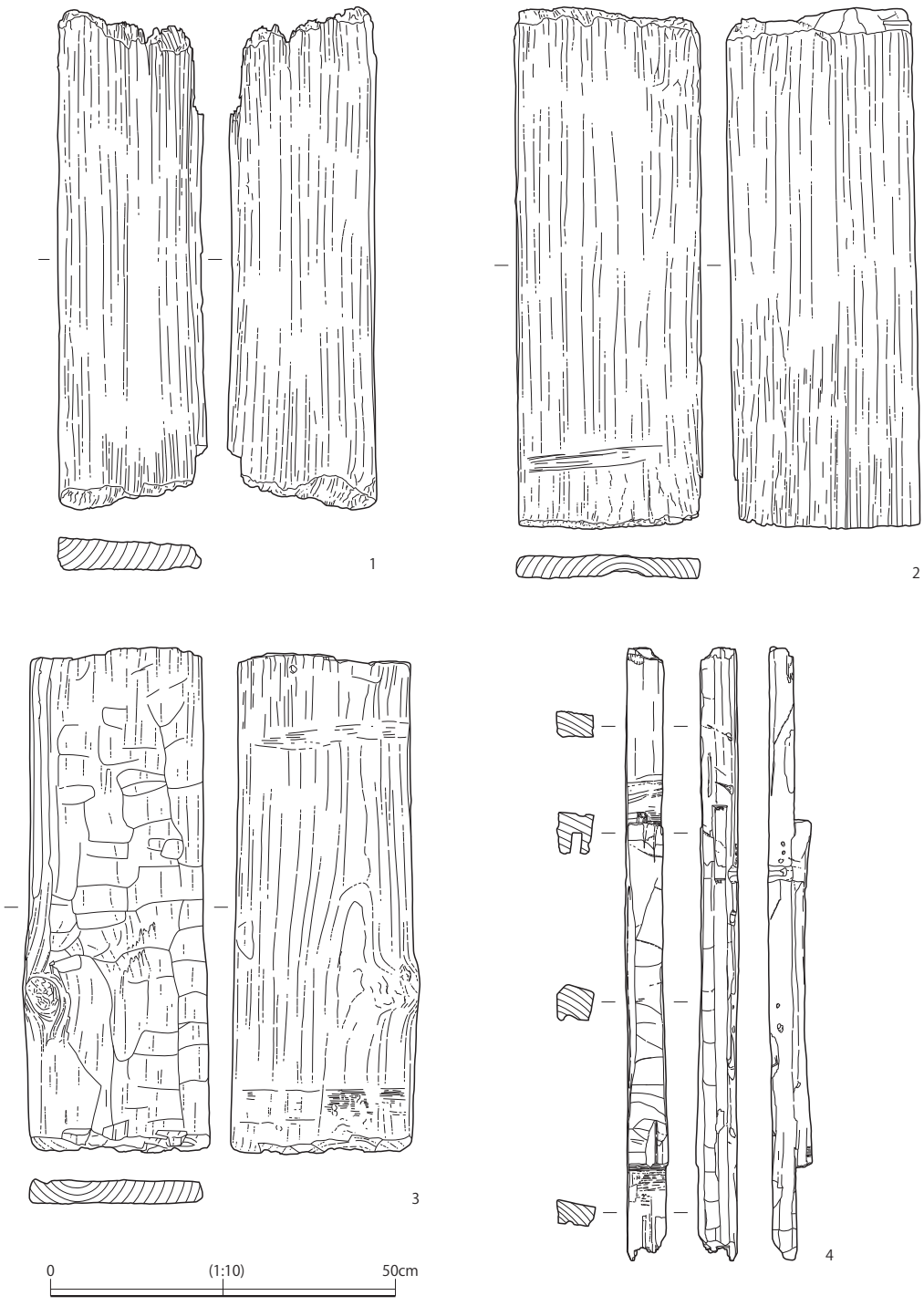


図 205　1 － 5 区　4837 井戸出土遺物（5）

また、側面には幅が狭く、方形のハツリ痕が残る。2 は中央部に突起部があり、斜位に貫通孔が開けられる。貫通孔は長方形を呈し、使用時のものと考えられる擦痕が残る。裏面下端から 40 ～ 50cm 上には圧痕、30cm 上で不整形な穴があり、扉板として利用された際の使用痕と考えられる。なお、圧痕は表面を押し潰すほど強いものではなく、接触痕に近い弱い圧力が加わったものである。擦過痕と考えられる筋状の痕跡とともに確認された。また、下端には転用時の加工痕が認められ、井戸底との接地面の調整ないし井戸枠として長さの調節を行ったものと考えられる。裏面は縦方向のケズリ調整が認められる。図 204 － 1 ～ 4 は井戸枠の東側に使用されたものである。1 ・ 2 は板材である。1 は井戸枠の最

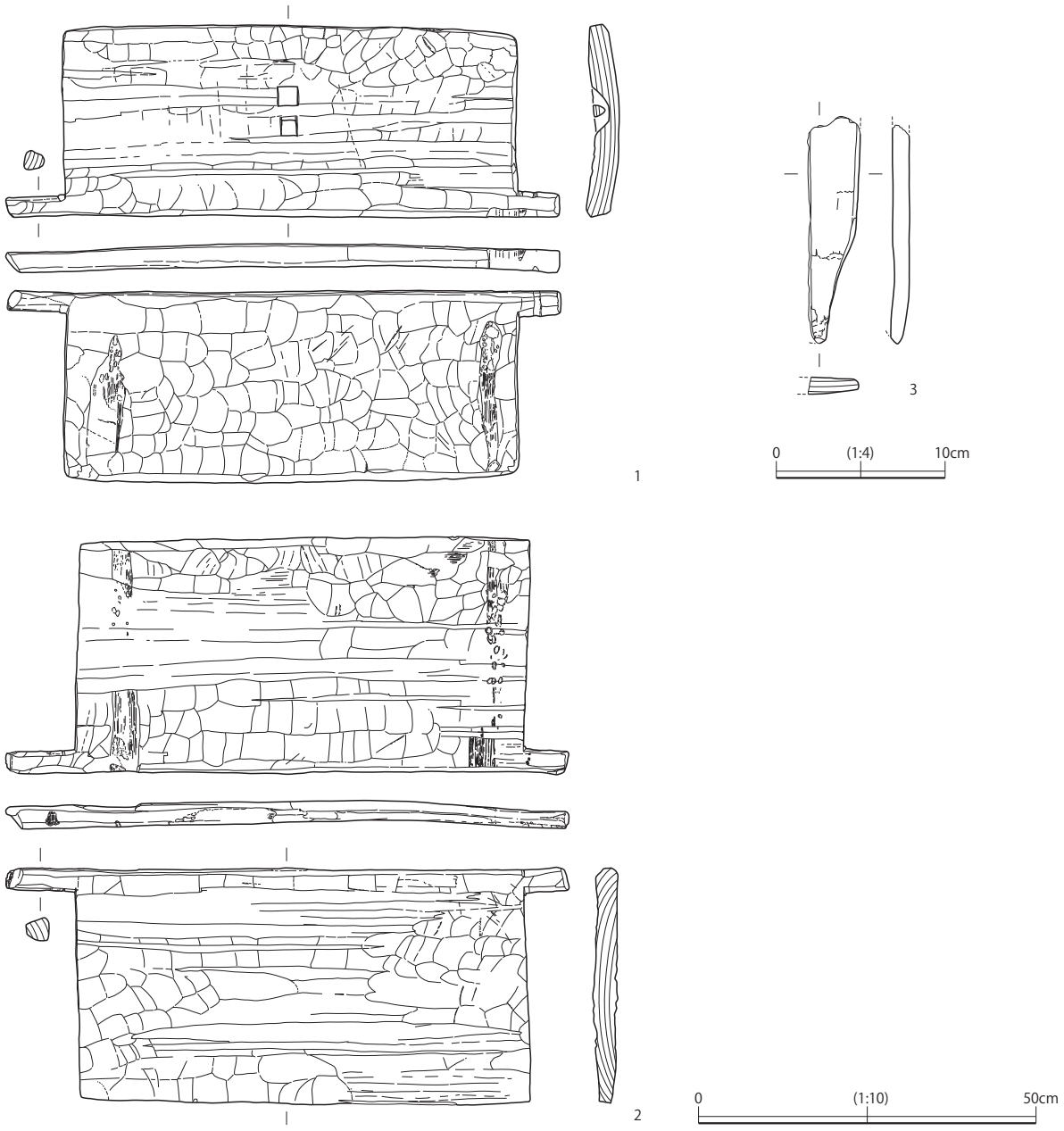


図 206　1－5区　4837 井戸出土遺物（6）

上段に用いられていた。2は両端に井戸枠転用時の加工痕、表面は縦方向に幅が狭い加工痕が観察される。また、井戸枠転用前と考えられる圧痕が3箇所確認された。3は板材で、両端は転用時に加工され折損する。表面に2箇所、圧痕が観察される。4は凸状に加工されたもので両端は転用時の加工で折損する。表裏面及び側面にはハツリの痕跡が残る。図 205 － 1 ～ 4 は井戸枠の西側に使用されたものである。1は板材である。井戸枠最上段にあったため腐食が顕著。2・3は板材である。両端は井戸枠転用時の加工で折損する。2は表面下端に圧痕が認められる。3は表面両端に近い部分に圧痕が認められる。4は図 204 － 4 と同じく、凸状に加工されたもので、側面裏側にはホゾ穴が加工される。両端は井戸枠転用時の折損である。図 206 － 1 は西側の井戸枠に転用された扉板である。表裏面は手斧による細かい単位の加工が施される。表面に、左右に並べた方形の孔を貫通させる。閂止めか。下端の軸（図上右側）は使用時の摩耗が顕著である。裏面の上下端には圧痕が認められる。2は東側の井戸枠に転用された扉板である。上下の軸が残存しており、下端の軸は1より摩耗しない。3は井戸枠内から出土した。

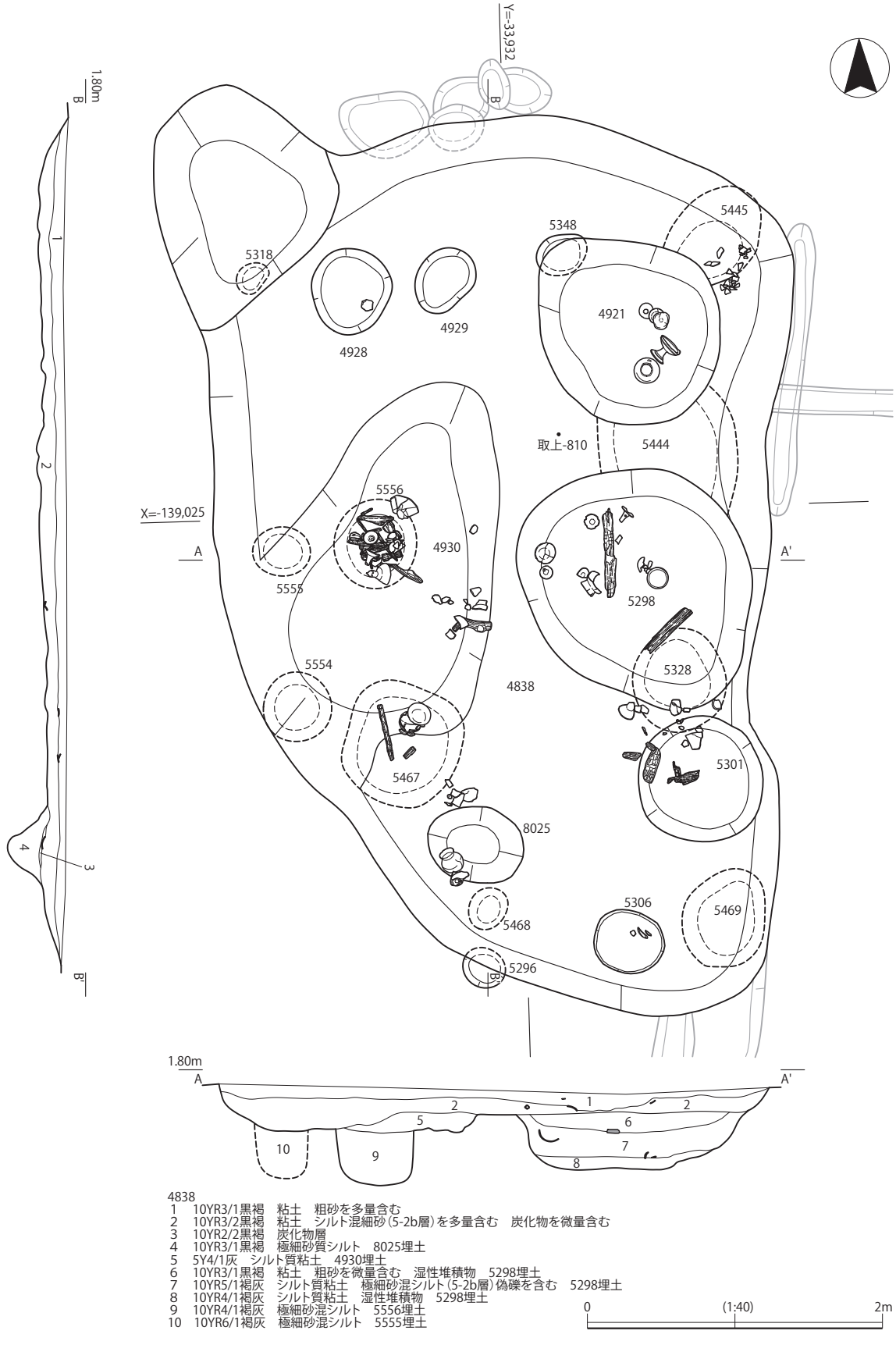


図 207　1－5区　4838 土坑平・断面

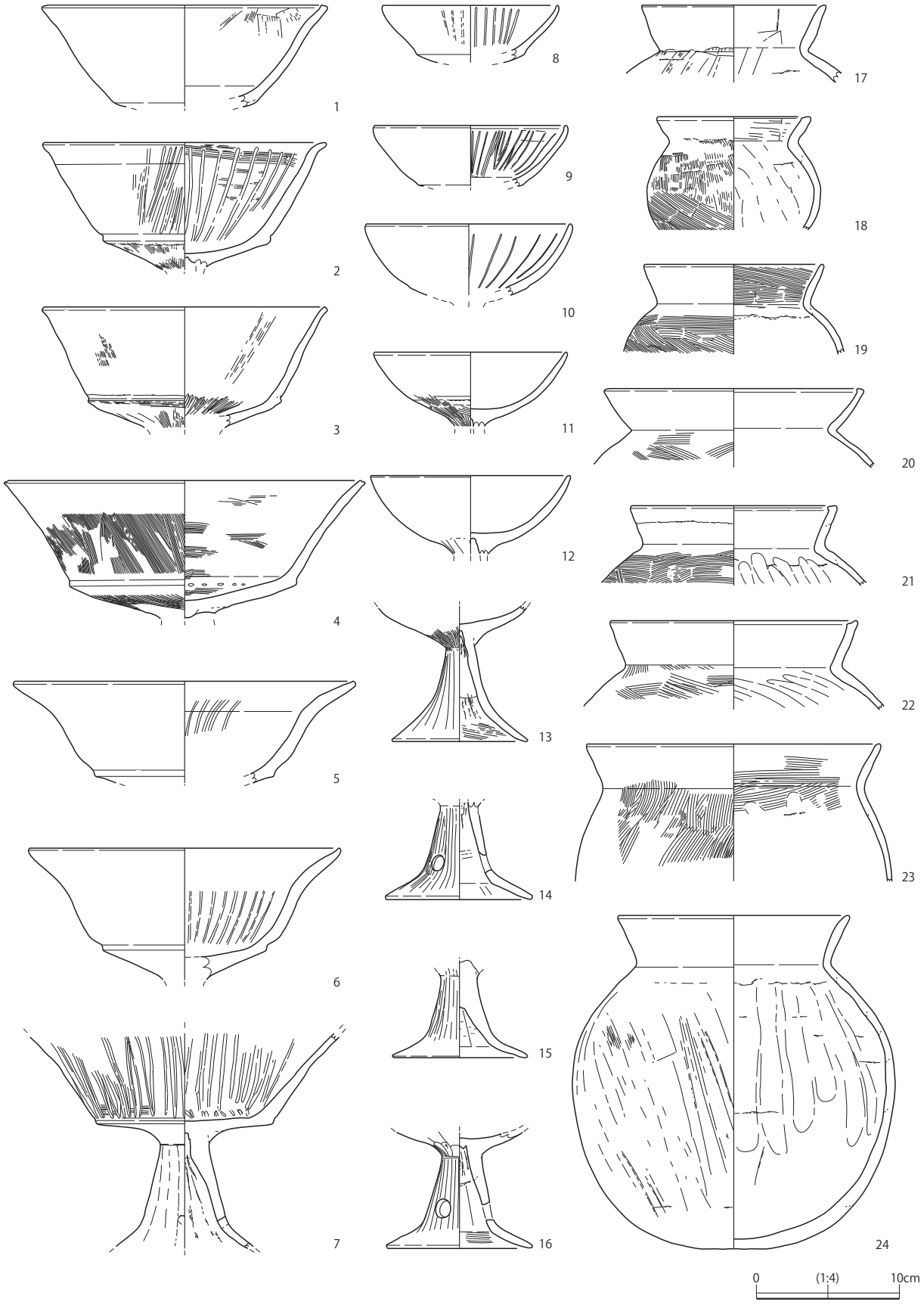


図 208　1－5区　4838 土坑出土遺物（1）

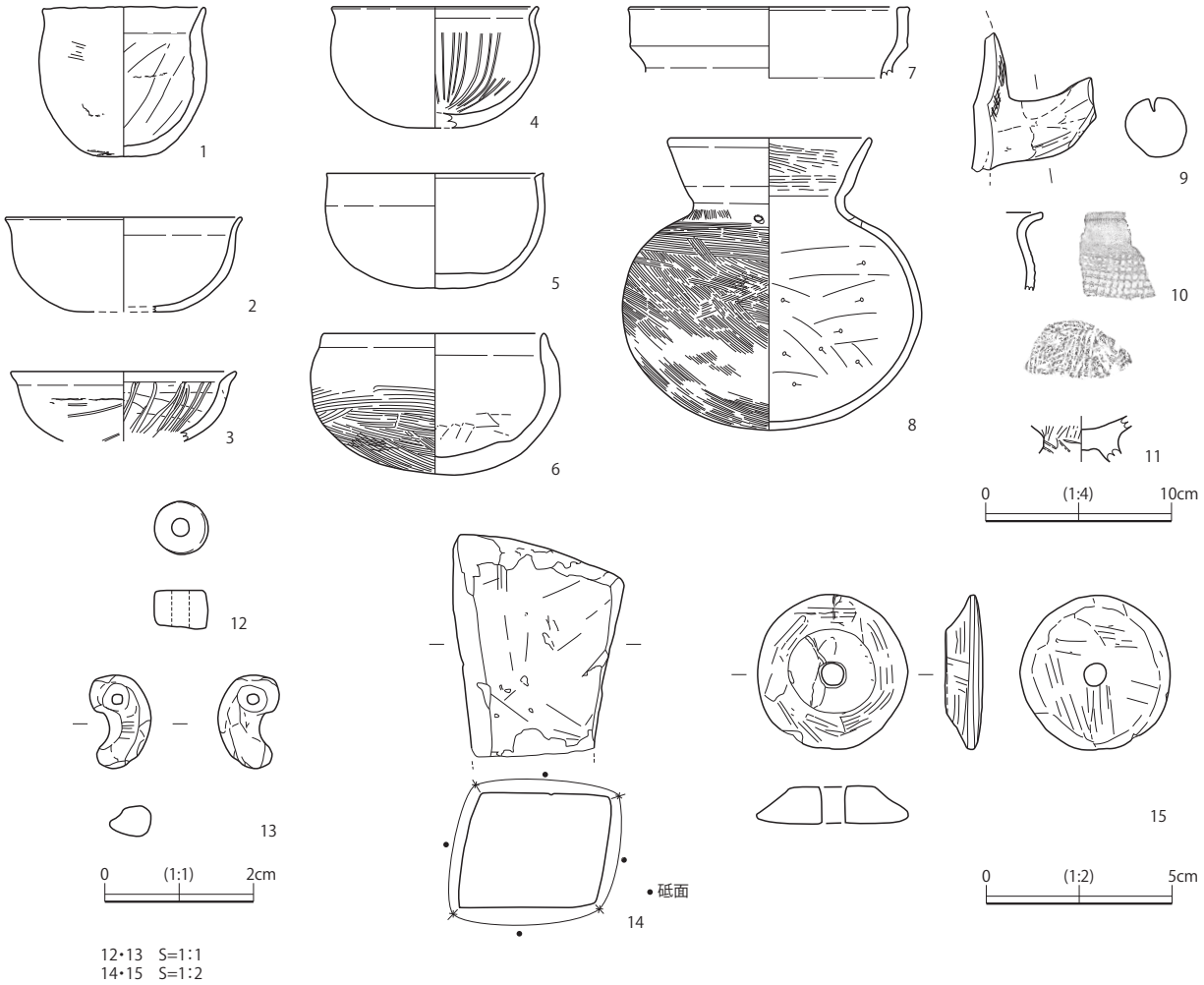


図 209　1－5区　4838 土坑出土遺物（2）

4838 土坑（図 186・207 ～ 209、図版 15・61・71）

4838 土坑は、複数の遺構と切り合い関係があり、埋土中位で確認された遺構もあったが、平面形は不明確で、切り合うすべての遺構は 4838 土坑底面で検出された。複数の遺構の集合体と考えており、図 207 は完掘状態を示したものである。4838 土坑の規模は、南北 6.0 m、東西 4.0 m、深さ 0.2 mである。4838 土坑から図 208・209 の遺物が出土した。図 208 － 1 ～ 16 は土師器高坏、17 ～ 24 は土師器甕である。24 の体部外面は板ナデ調整されるが、原体がなでつけられることによって、ミガキのように見える。図 209 － 1 ～ 6 は土師器鉢である。7 は土師器複合口縁壺である。8 は土師器直口壺で、8025 井戸から出土。内面上位は横方向、下位は斜めのヘラケズリ調整され、頸部に 5 mm の孔がある。9 は土師質の鍋把手である。10 は韓式系土器鉢、11 は土師器脚台付甕である。内・外面には煤が付着。東海系。12 は滑石製臼玉である。13 は滑石製勾玉である。14 は砥石である。砥面は 4 面。15 は滑石製紡錘車である。図示できるものに、須恵器は含まれなかった。

4921 井戸（図 186・210、図版 15・61）

4838 土坑内で検出された。平面形は不整形、規模は、長軸 1.4 m、短軸 1.23 m、深さ 0.6 mである。4921 井戸から、図 210 － 1 ～ 5 が出土した。1 ・ 2 は土師器高坏である。1 は口縁部外面に凹線状の凹みあり。2 の外面はヘラ状工具によるナデ、脚柱部内面は平滑に仕上げられ、上位にシボリメが残る。3 は土師器甕である。体部外面は板ナデ調整、体部内面は指ナデされる。4 は須恵器壺で、内面は

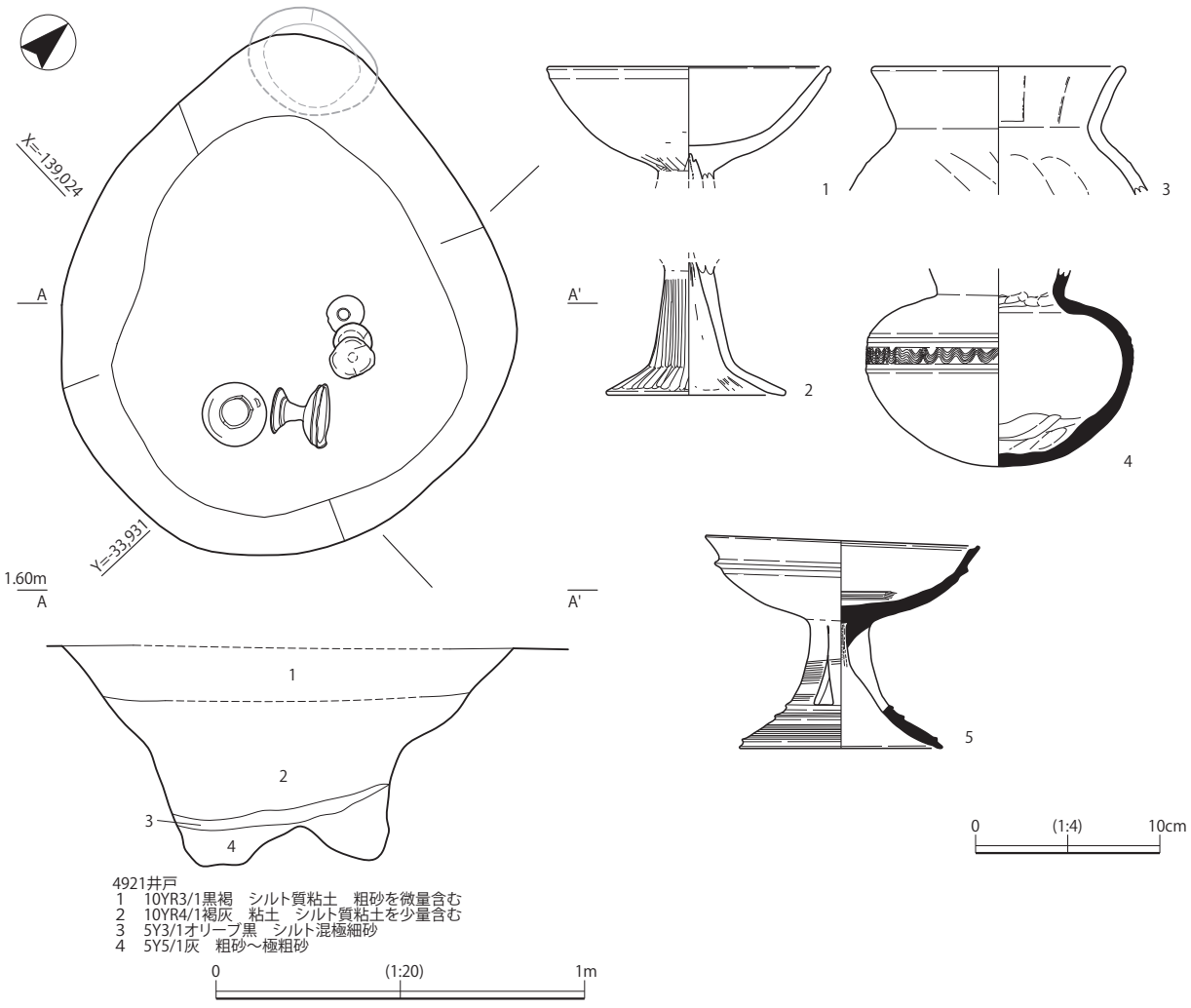


図 210　1－5区　4921 井戸平・断面　出土遺物

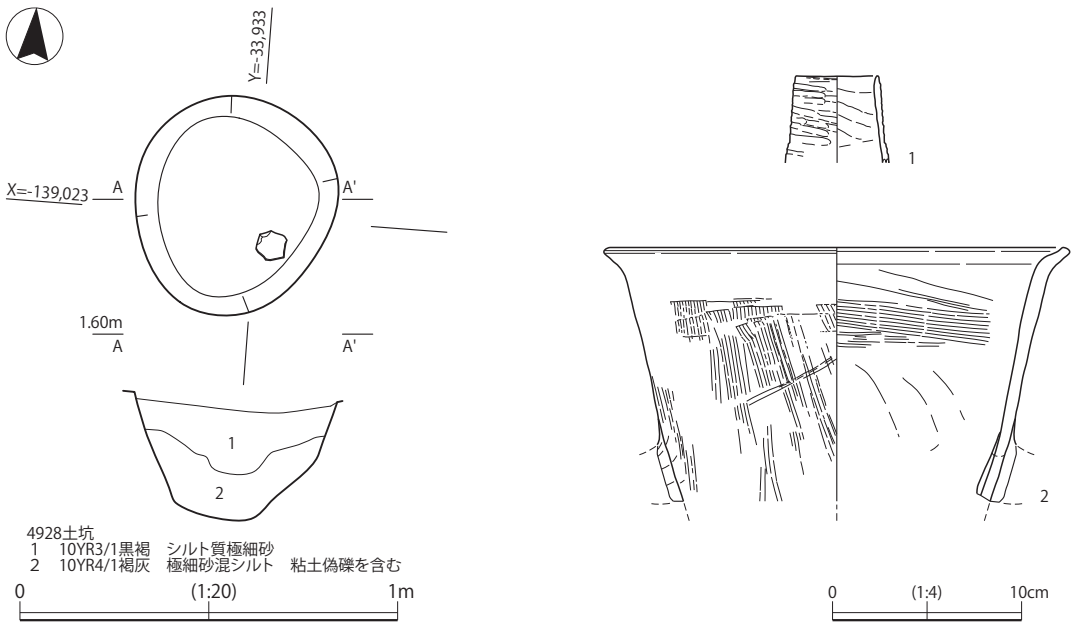


図 211　1－5区　4928 土坑平・断面　出土遺物

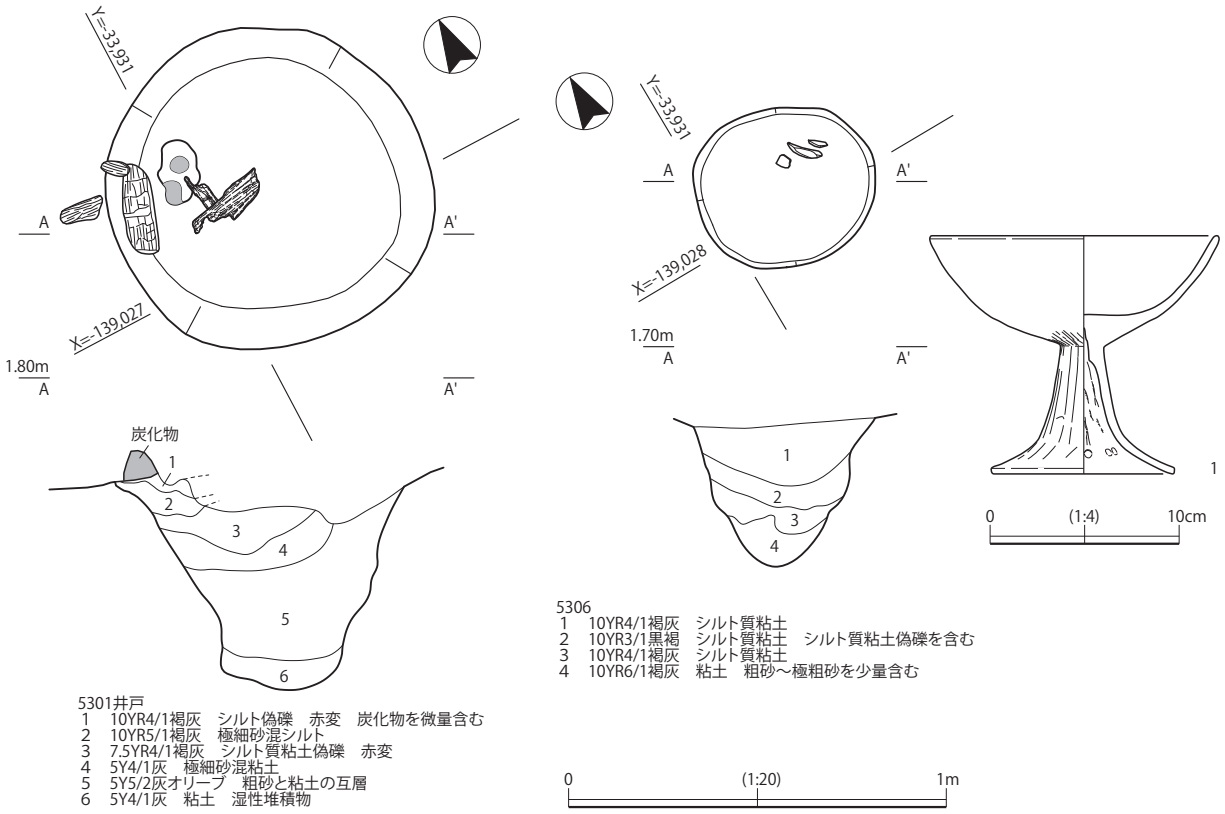


図 212　1－5区　5301 井戸・5306 土坑平・断面　出土遺物

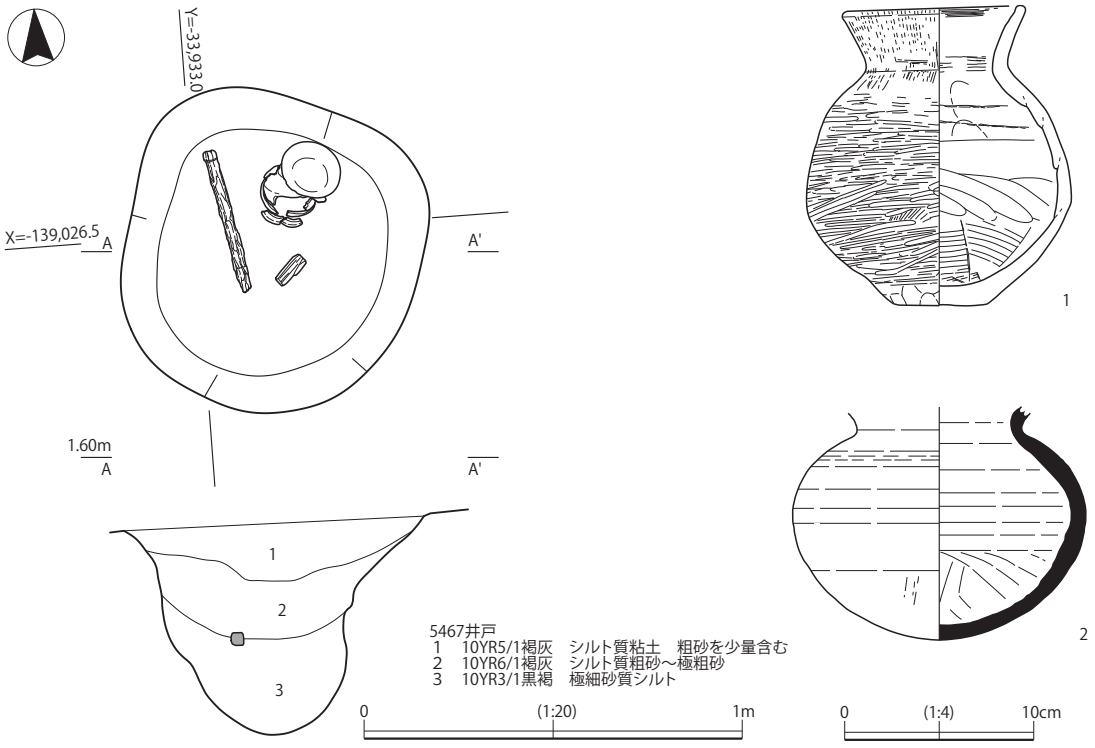


図 213　1－5区　5467 井戸平・断面　出土遺物

頸部がヘラ状工具によるナデ、体部上位が回転ナデ調整、下位がナデ調整される。5は陶質土器の可能性がある無蓋高坏である。口縁端部は凹みがあり、坏部外面には突帯が1条めぐる。脚部は、外面にカキメが施される。三角形の透孔を入れた後に、上位は回転ナデ調整される。ON231 ～ TK73 型式併行期。

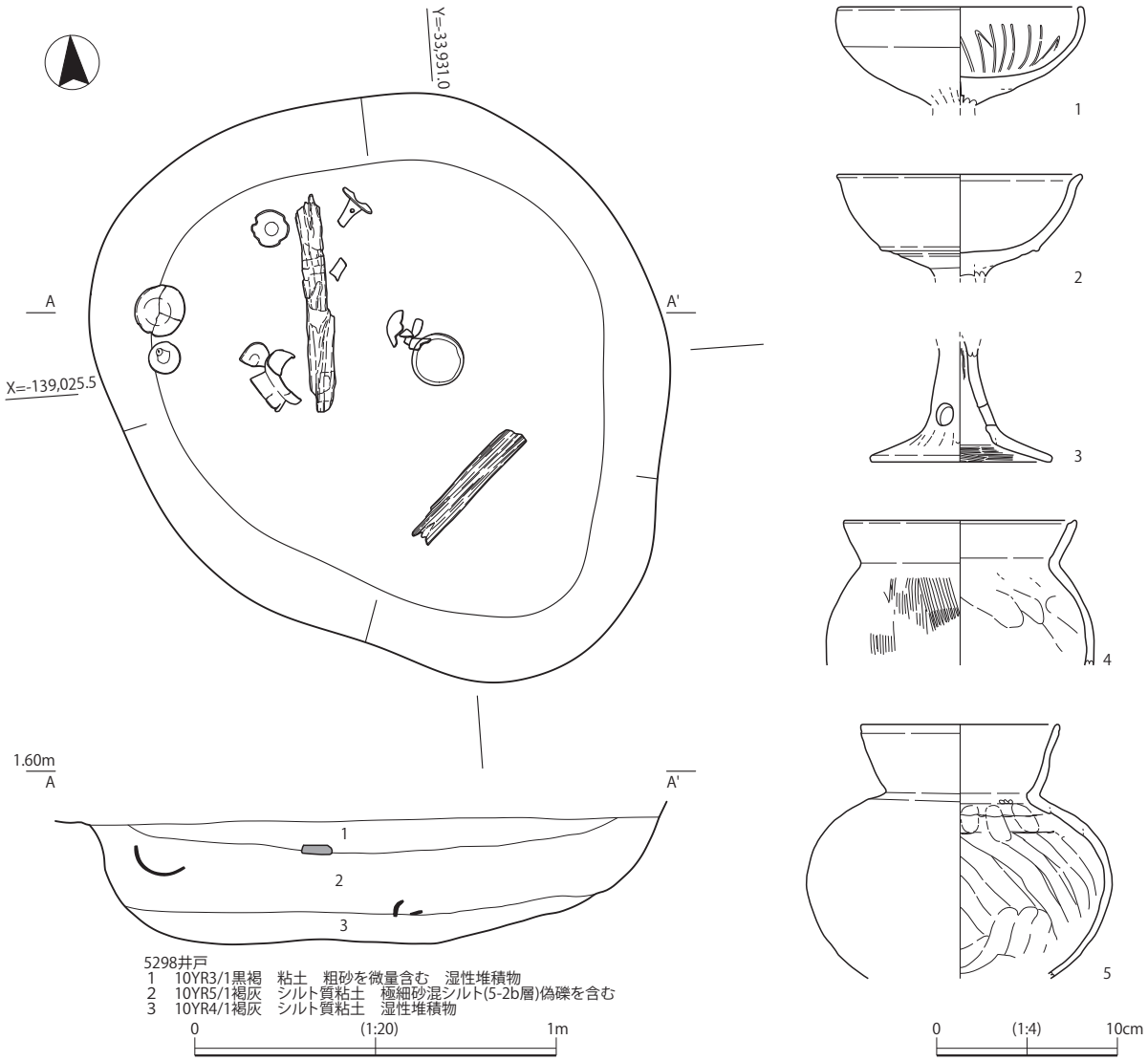


図 214　1－5区　5298 井戸平・断面　出土遺物

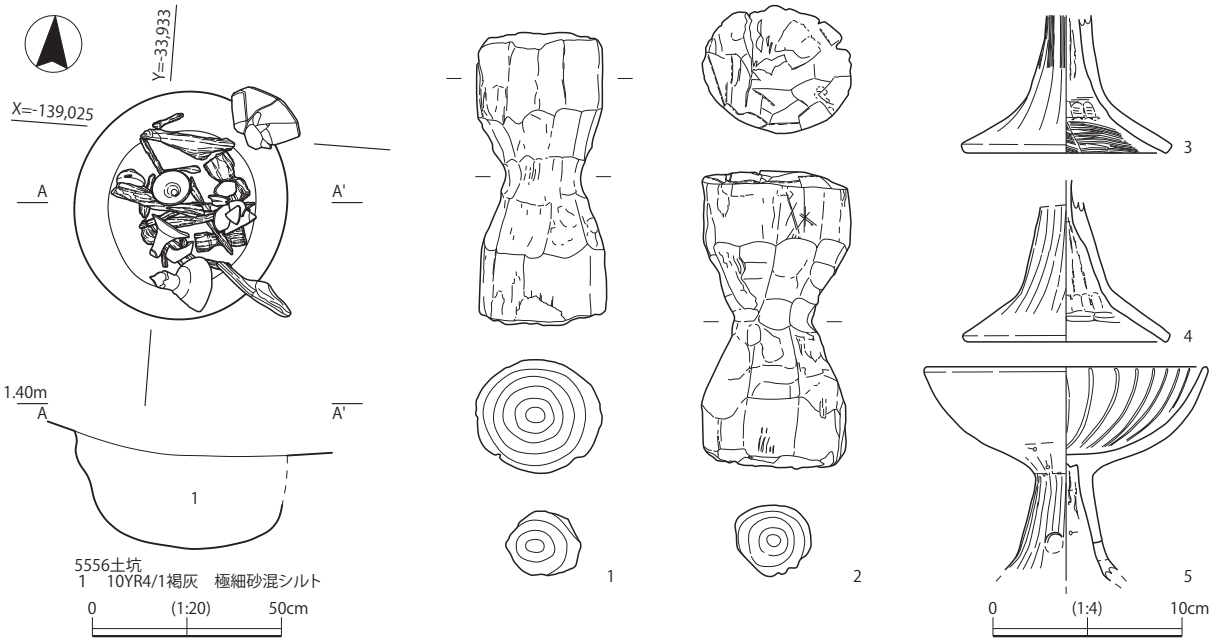


図 215　1－5区　5556 土坑平・断面　出土遺物

4928 土坑（図 186・211）

4838 土坑内で検出された。平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.57 m、深さ 0.3 mである。4928 土坑から図 211 －１・２が出土した。１は製塩土器である。外面は粗いタタキ、内面はナデ調整される。２は土師質の甑である。外面はハケ調整、内面上位は横方向のハケ、下位はナデ調整される。

5301 井戸（図 186・212）

4838 土坑内で検出されており、4838 土坑の埋土掘削中に認識された。平面形は円形、規模は直径 0.85 m、深さ 0.55 mである。上層は、被熱により赤変したシルト～シルト質粘土や極細砂混シルトである。被熱したシルトは、カマドないし炉などに由来するものか。土師器高坏の細片が出土した。

5306 土坑（図 186・212）

4838 土坑内で検出された。平面形は円形、規模は直径 0.4 m、深さ 0.37 mである。図 212 －１の土師器椀形高坏が出土した。

5467 井戸（図 186・213、図版 15・63）

4838 土坑内で検出された。平面形は不整な円形、規模は直径 0.8 m、深さ 0.55 mである。図 213 －１は平底の土師器壺である。外面は、口縁部が縦方向のハケ調整後に横ナデ、体部は横方向のヘラミガキ調整、底部はナデ調整される。内面は、口縁部がハケの後横ナデ調整、体部上位がナデ調整、下位はハケ調整される。胎土にはガラス質の砂粒が含まれており、形態により東日本系と考えられる。２は須恵器壺の体部である。外面は回転ナデ調整され、下位にタタキメが残る。内面は上位が回転ナデ、下位が板状の工具を用いたナデが施される。須恵器壺は、古墳時代中期後葉に比定される。

5298 井戸（図 186・214、図版 15・63）

4838 土坑内で検出された。平面形は不整形な形状を呈し、規模は長軸 1.77 m、短軸 1.47 m、深さ 0.35 mである。埋土は、下層が湿性堆積物のシルト質粘土を主体としており、中層にベースに由来する偽礫が入る。5298 井戸から図 214 －１～５が出土した。１～３は土師器高坏である。１は椀形高坏の坏部である。内・外面は横ナデ調整で、内面には放射状の暗文が施される。２は有稜高坏の坏部である。外面はハケの後横ナデ調整、内面は磨滅しており詳細不明である。４は土師器甕である。口縁端面は内傾斜し、わずかに凹む。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整される。５は土師器直口壺である。外面は肩部が縦方向のナデ調整、それより下位は横方向のナデ調整である。内面は指ナデ調整で、頸部に面をもつ。須恵器は伴わない。

5556 井戸（図 186・215、図版 15・75）

4838 土坑内で検出された。平面形は円形、規模は直径 0.6 m、深さ 0.25 mである。図 215 －１・２は木錘である。細い削りで外形を整えた後、中央を両側から削り込むことでくびれが成形される。両側の端面もケズリによって整えられる。３～５は土師器高坏である。３・４は脚部である。３の脚柱部の外面はヘラ状工具によるナデで仕上げられ、上位にはハケメが残る。内面は、脚柱部にはシボリメが残り、裾部はナデの後ハケ調整される。４の脚柱部外面はヘラナデ、内面はシボリメが残り、裾部内面はナデ調整によって仕上げられる。５は坏部内面に放射状の暗文が施される。出土した土師器は、古墳時代中期中葉から後葉の資料と考えられる。

4969 井戸（図 186・216、図版 71）

4838 土坑の南側で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 0.75 m、短軸 0.6 m、深さ 0.4 mである。斜めに傾いた状態で図 216 －２の砥石が出土した。砥面は１面で、風化により遺存状況は

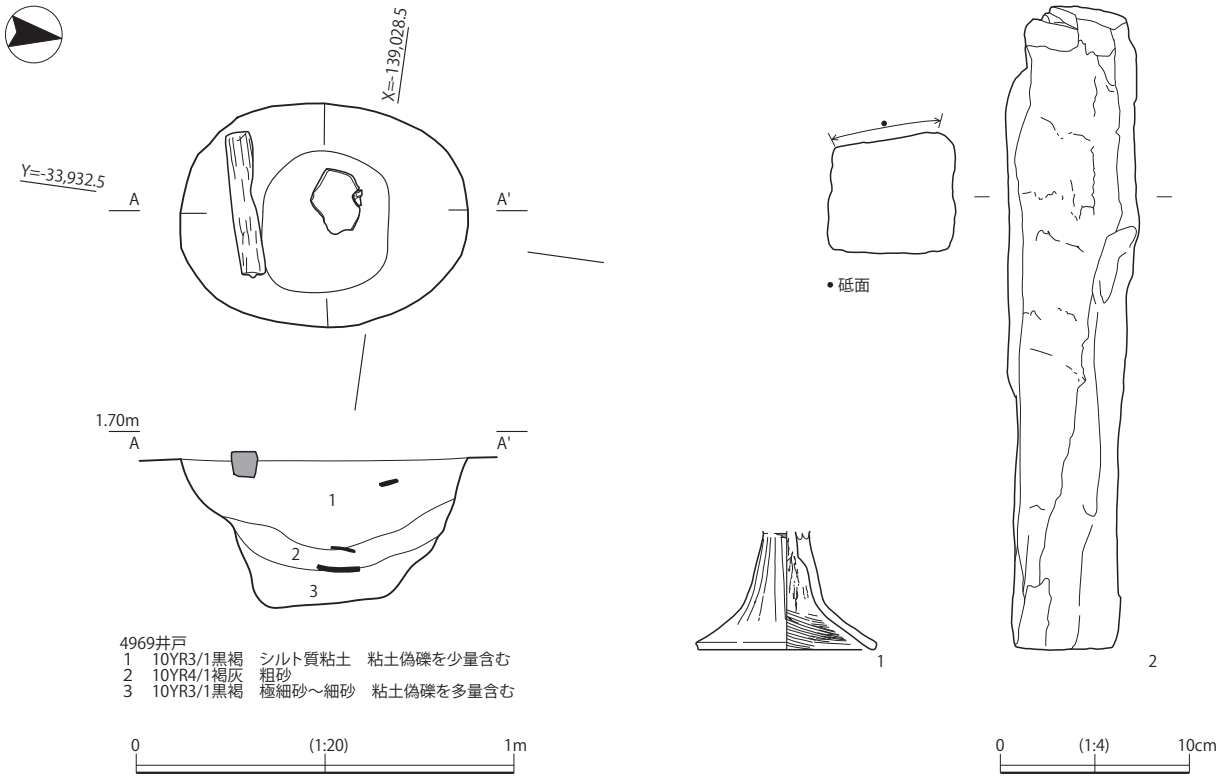


図 216　1 － 5 区　4969 井戸平・断面　出土遺物

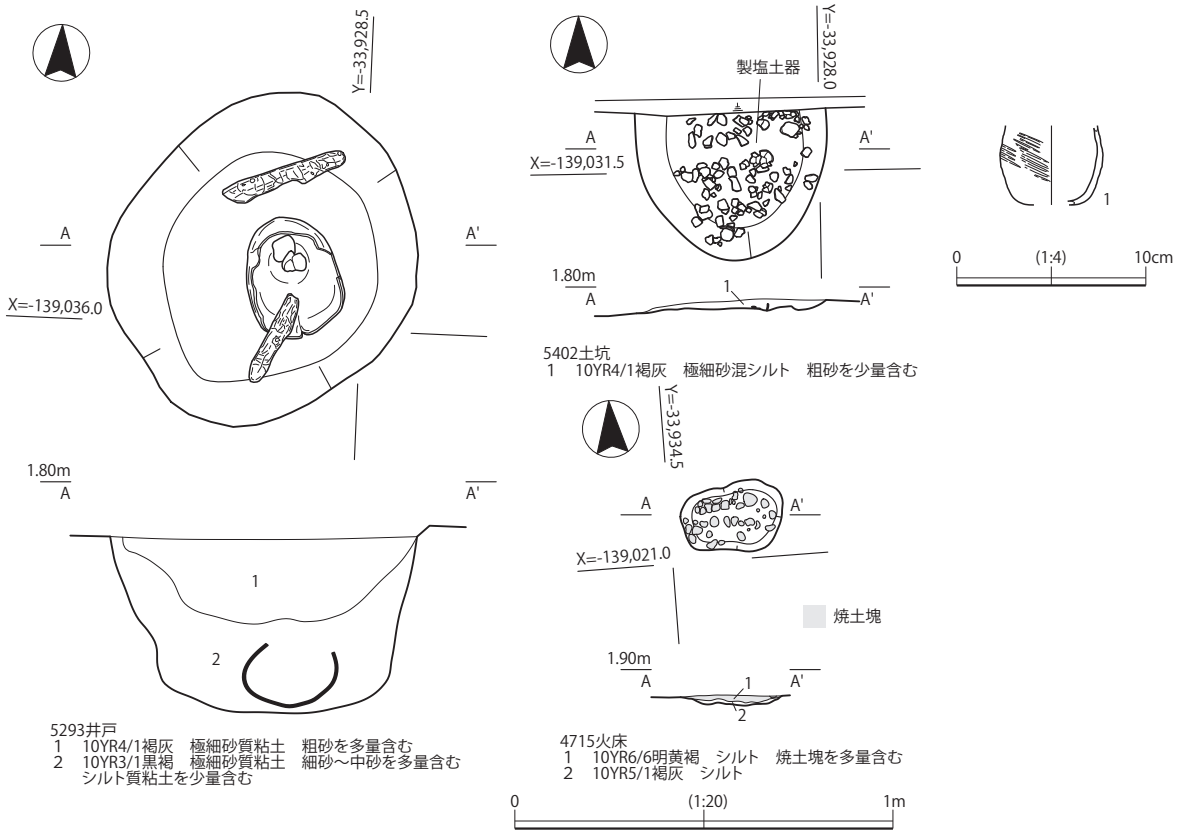


図 217　1 － 5 区　4715 火床・5293 井戸・5402 土坑平・断面　出土遺物

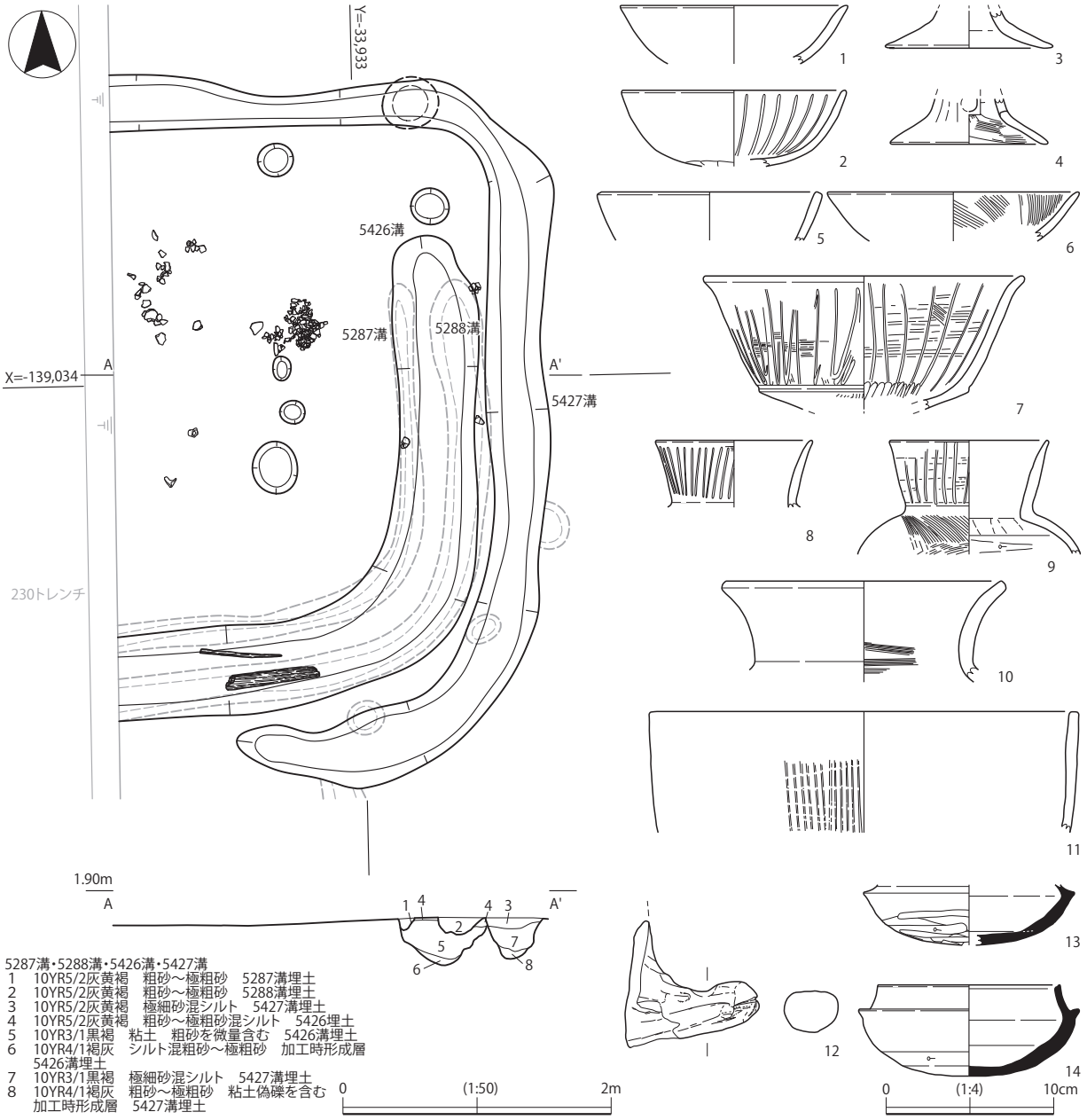


図 218　1 － 5 区　5287 溝他平・断面　出土遺物

悪い。砥面は使用時の摩耗で大きく湾曲する。他に、1 の土師器高坏脚部が出土した。外面はヘラ状工具によるナデ、内面はシボリメが残り、裾部はハケ調整される。

5293 井戸（図 186・217）

竪穴建物 33 の南西で検出された。平面形は不整形な形状を呈し、規模は長軸 0.9 m、短軸 0.8 m、深さ 0.5 mである。埋土は、湿性堆積物である極細砂質粘土を主体とする。土師器長胴甕の体部下半が下層から出土した。図示していないが、MT15 型式前後の須恵器坏蓋の細片が出土しており、5293 井戸の時期は古墳時代中期後葉～古墳時代後期前葉を想定している。

5402 土坑（図 186・217）

竪穴建物 33 の西側で検出された。トレンチを設定した場所に当たっており、北側は確認できなかったが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。南北の検出長 0.4 m以上、幅 0.5 m、深さ 0.03 mである。底面直上から製塩土器片が多量に出土した。図 217 － 1 は、外面はタタキ、内面はナデ調整される。

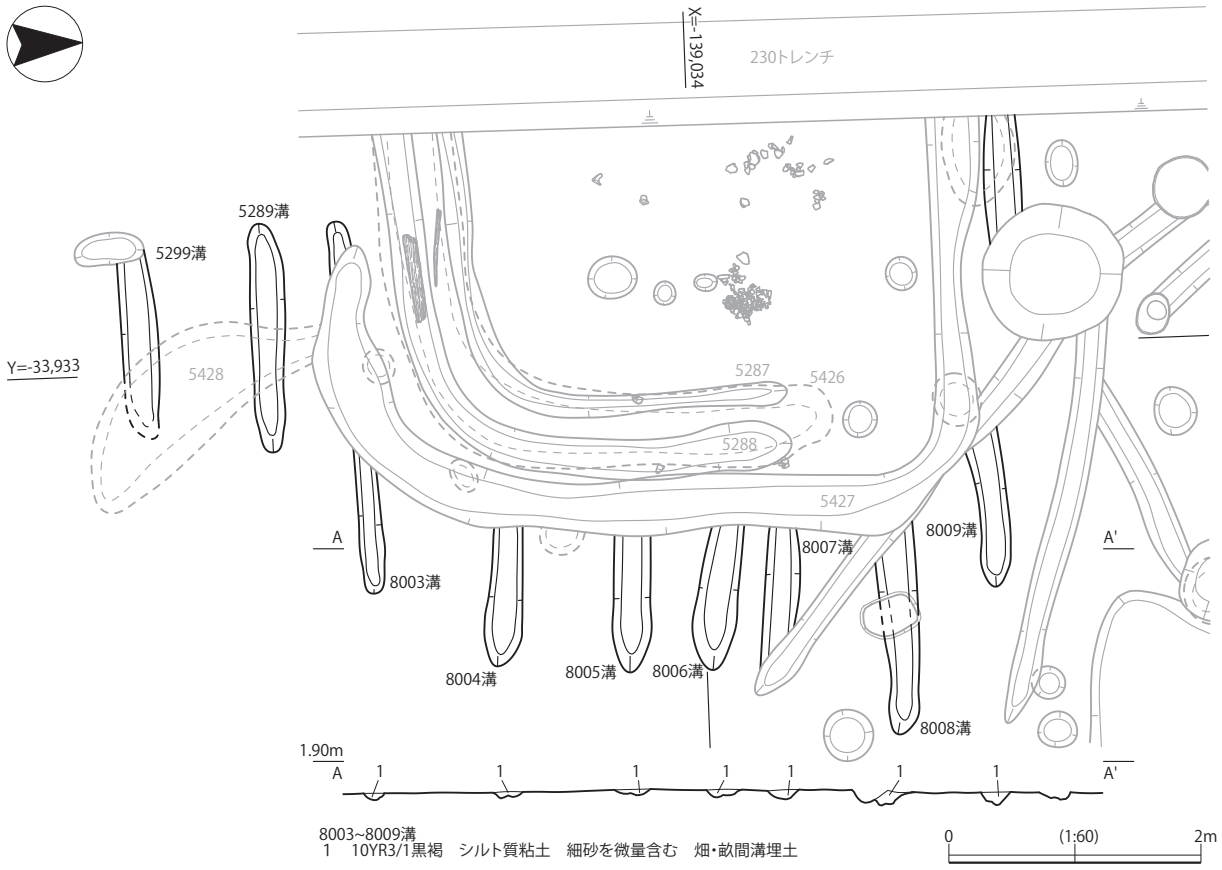


図 219　1－5区　畑2平・断面

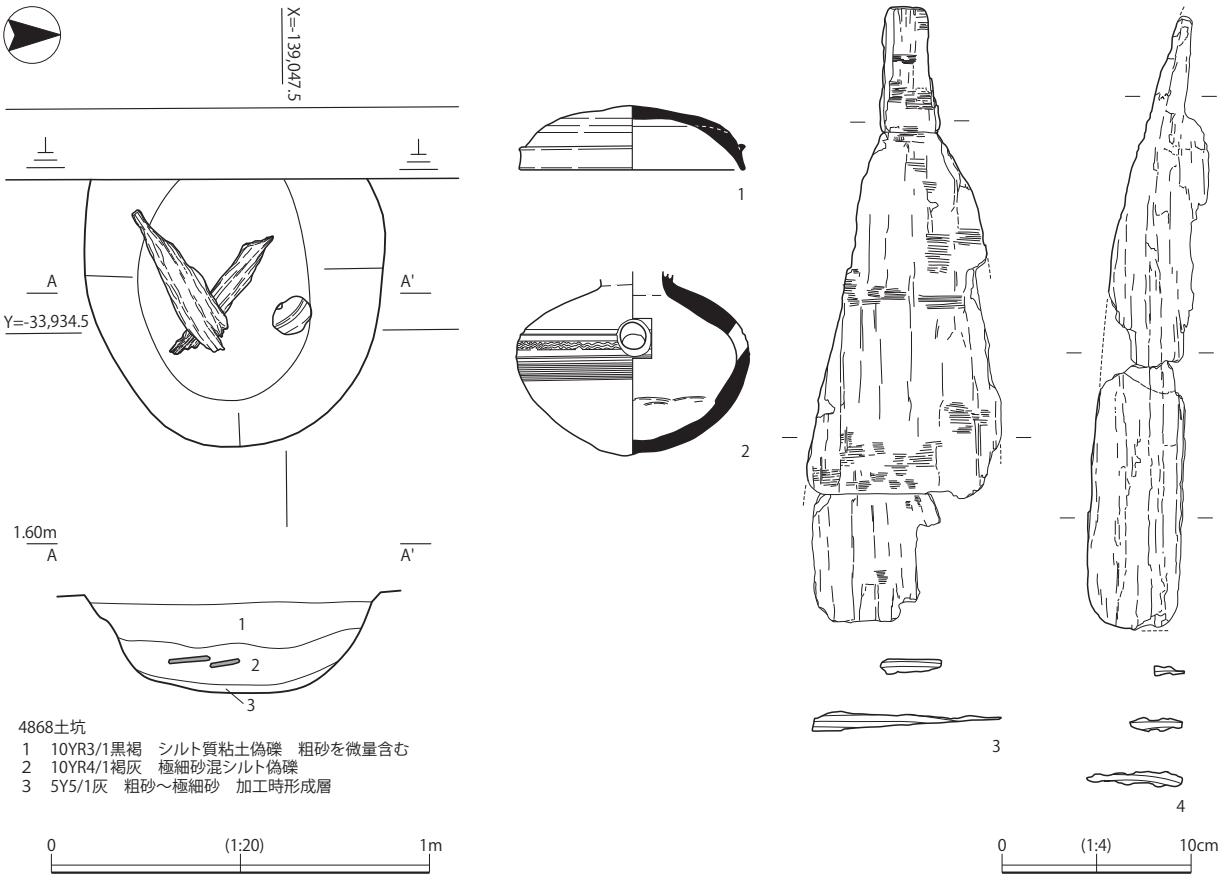


図 220　1－5区　4868 土坑平・断面　出土遺物

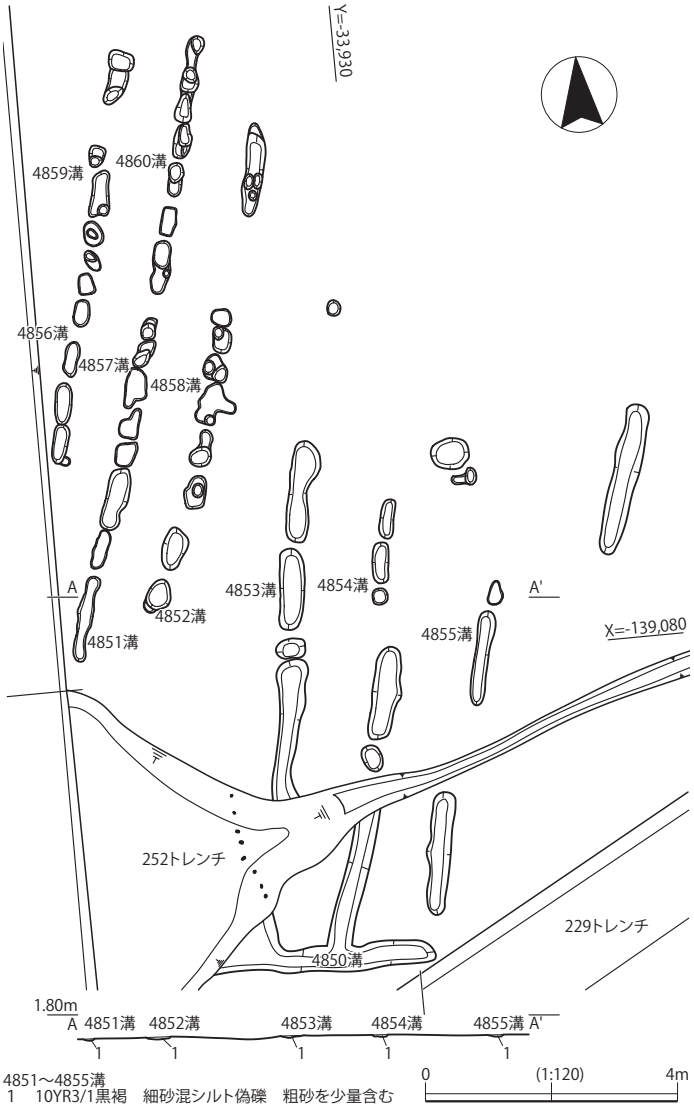


図 221　1－5区　畑1平・断面

4715 火床（図 186・217、図版 14）

竪穴建物 28 の西側で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 0.27 m、短軸 0.19 m、深さ 0.03 mである。底面直上に加工時形成層のシルト、その上に焼土塊の集積が認められる。周辺で竪穴建物に関係する遺構は検出できなかった。

5287・5288・5426・5427 溝（図186・218、図版15）

4838 土坑の南側で検出された。5287・5288 溝は、5426 溝の幅にほぼ重なることから、本来 1 条であったと考えられる。埋土の砂層の供給元は明らかにできなかったが、南側に水田域が近接しており、灌漑用として機能した可能性が高い。5426 溝からは板材が 2 点出土した。全体に腐食しており、用途は不明。

5287・5288・5426・5427 溝 と 溝 区画内から出土した遺物は、図 218 － 1 ～ 14 を図示した。2・3・5～8・11・12 は、溝区画内の、第 5 － 2 b 面直上から出土した。1 は土師器坏で、5287 溝から出土した。内外面は横ナデ調整。2 ～ 4・6・7 は土師器高坏である。5 は土師器甕、8 は土師器直口壺の口縁部で、外面は横ナデの後、ヘラミガキが施される。9・10 は土師器壺で、11 は土師質の甑、12 は土師器鍋の把手である。13 は須恵器坏身で、外面は静止ヘラケズリが施される。TK73 型式。5426・5427 溝掘削時に出土したもので、取り上げの不備により、帰属する遺構は不明。14 は須恵器坏身である。TK47 ～ MT15 型式。

畑 2（図 186・219、図版 15）

5427 溝の南から東側にかけて、畝間溝が検出された。5427 溝の内側では検出されなかった。畝間溝の規模は幅 0.3 m、深さ 0.05 mである。加工時形成層のシルト質粘土のみを確認しており、畑機能時の埋土は認められず、作土は確認できなかった。5427 溝に先行すると考えられ、古墳時代後期前葉以前の時期が想定される。

4868 土坑（図 220・222、図版 62・75）

畑 2 の南側で検出された。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.8 m、深さ 0.25 mである。当時の湧水層であったと考えられる 6 b 層まで掘削されており、井戸であった可能性がある。図 220 － 1 は須恵器坏蓋である。TK73 ～ 216 型式。2 は須恵器瓶である。内底面には同心円文当具痕が残る。3・4 は木製品のナスビ形平鍬である。腐食しており、加工痕は観察されなかった。

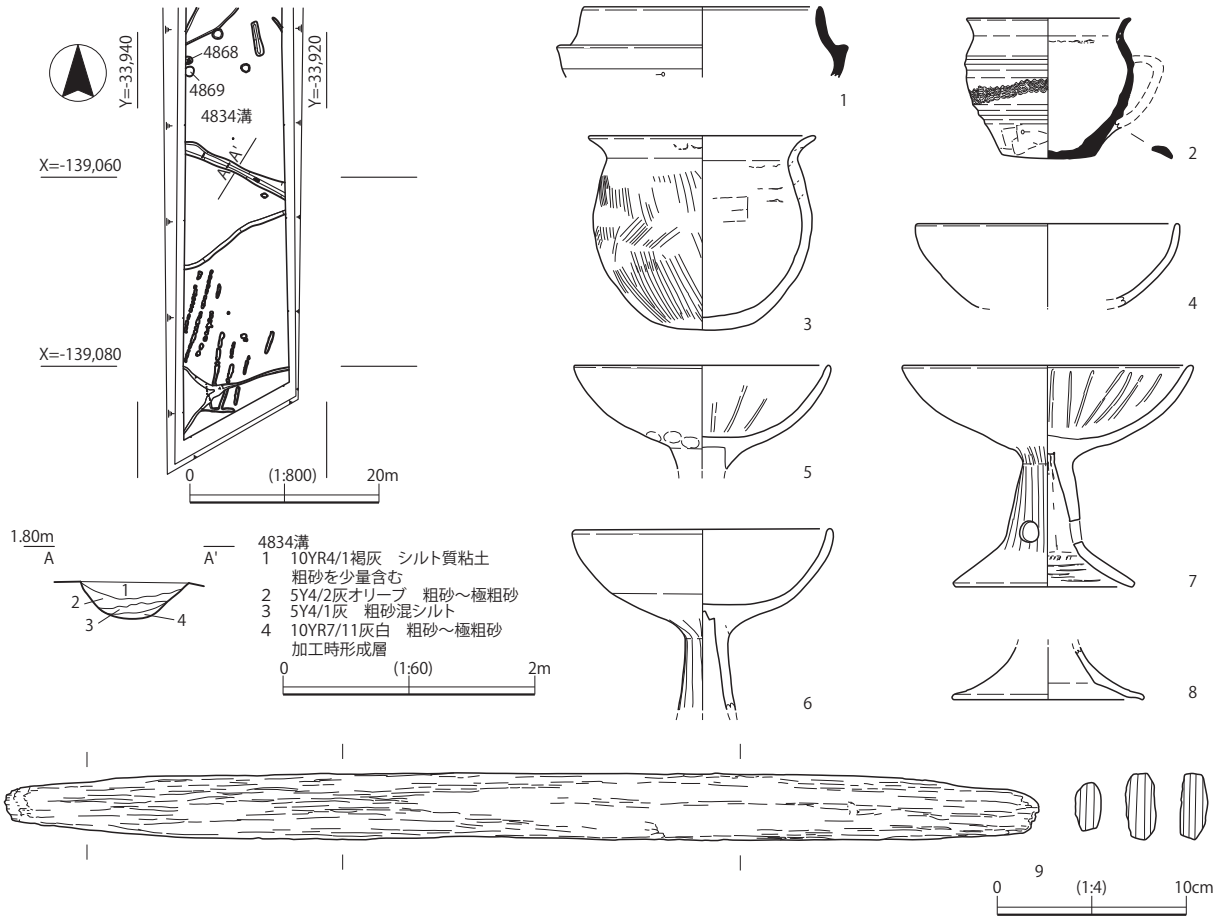


図 222　1－5区　4834 溝平・断面　出土遺物

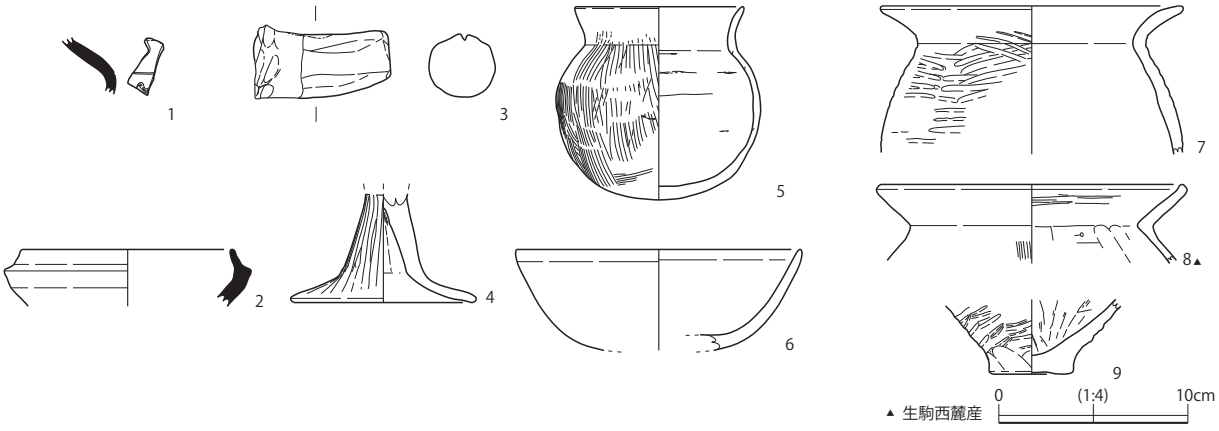


図 223　1－5区　5414 ピット他出土遺物

畑 1 （図 84・85・221、図版 15）

4831 微高地上で検出された。等間隔に並ぶ溝から、畑と判断した。畝間溝の規模は、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.01 ～ 0.04 mである。埋土は、粗砂混シルトの偽礫で、畑の加工時形成層と考えられる。基盤層が砂層の範囲では、溝底面の状況が良好に遺存しており、凹凸が顕著であった。

4834 溝（図 222、図版 61・76）

調査地南側の水田域で検出された。規模は、幅 0.8m、深さ 0.3m である。4834 溝から出土した遺物は、図 222 － 1 ～ 9 を図示した。 1 は須恵器坏身である。 2 は須恵器把手付埦である。把手の断面形は蒲鉾形を呈す。外面下端は静止ヘラケズリが施される。3 は土師器甕である。外面は斜め方向のハケ調整、

内面は板ナデの後ナデ調整が施される。４～８は土師器高坏である。４～７の坏部は椀形である。５・７は放射状の暗文が施される。９は棒状木製品で、両端は組物として使用されたのか、圧迫を受けて先細りする。断面形は丸味を帯びた長方形である。出土した須恵器は TK73 ～ 216 型式に比定されるもので、4834 溝は古墳時代中期前葉に機能したと考えられる。

古墳時代中期以降の水田作土除去面で検出されており、地層の時期と矛盾しないものである。また、２－１区では５－１面で古墳時代中期初頭以前の水田が検出されており、これらの溝への灌漑用水路と考えられる。

その他の遺構出土遺物（図 86・147・186・222・223・224、図版 62）

上記に掲げた遺構以外から出土した遺物を図 223 －１～９に示した。１は須恵器𤭯で、5414 柱穴から出土した。２は須恵器坏身で、4866 土坑から出土した。4866 土坑は竪穴建物 26 の南西で検出されており、貯水を目的として掘削されたものか。３・５・６は 4869 土坑から出土した。３は、土師質の把手で浅い切り込みがある。５は土師器甕である。外面は縦方向のハケ調整される。内面は指押さえ後ナデ調整か。６は土師器高坏の坏部である。４は土師器高坏脚部で、4991 溝から出土。竪穴建物壁溝の可能性を考えて調査を行ったが、集落内の区画溝と評価された溝である。図 223 －７～９は 4636 土坑から出土した遺物である。７は弥生土器Ⅴ様式系甕である。外面はタタキ、内面は磨滅しており詳細は不明である。８は土師器甕である。口縁端部はつまみあげられ、やや丸味を帯びる。外面はハケメが残る。布留１式に比定される。内面はヘラケズリとナデ調整で仕上げられる。９はⅤ様式系甕の底部である。

第５－２－２面（図 224・229・234、図版 16）

１－５区では、５－２ｂ層中、古土壌の堆積が認められたため、５－２ｂ層を５－２－１ｂ層（砂層）、５－２－２層（古土壌）と５－２－２ｂ層（砂層）に細分して掘削を行った。５－２－２層は微高地斜面にのみ堆積しており、低地で対比できる層準が確認されなかった。低地における水田作土は、層厚が

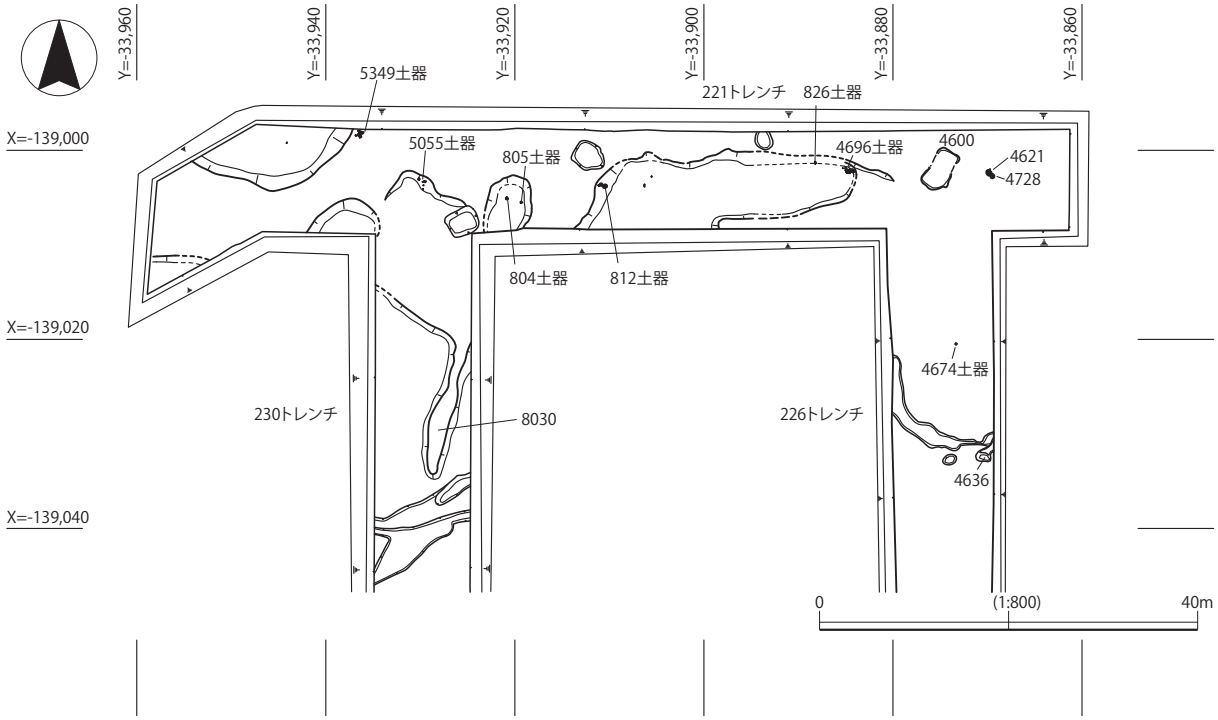


図 224　１－５区　第５－２－２面平面

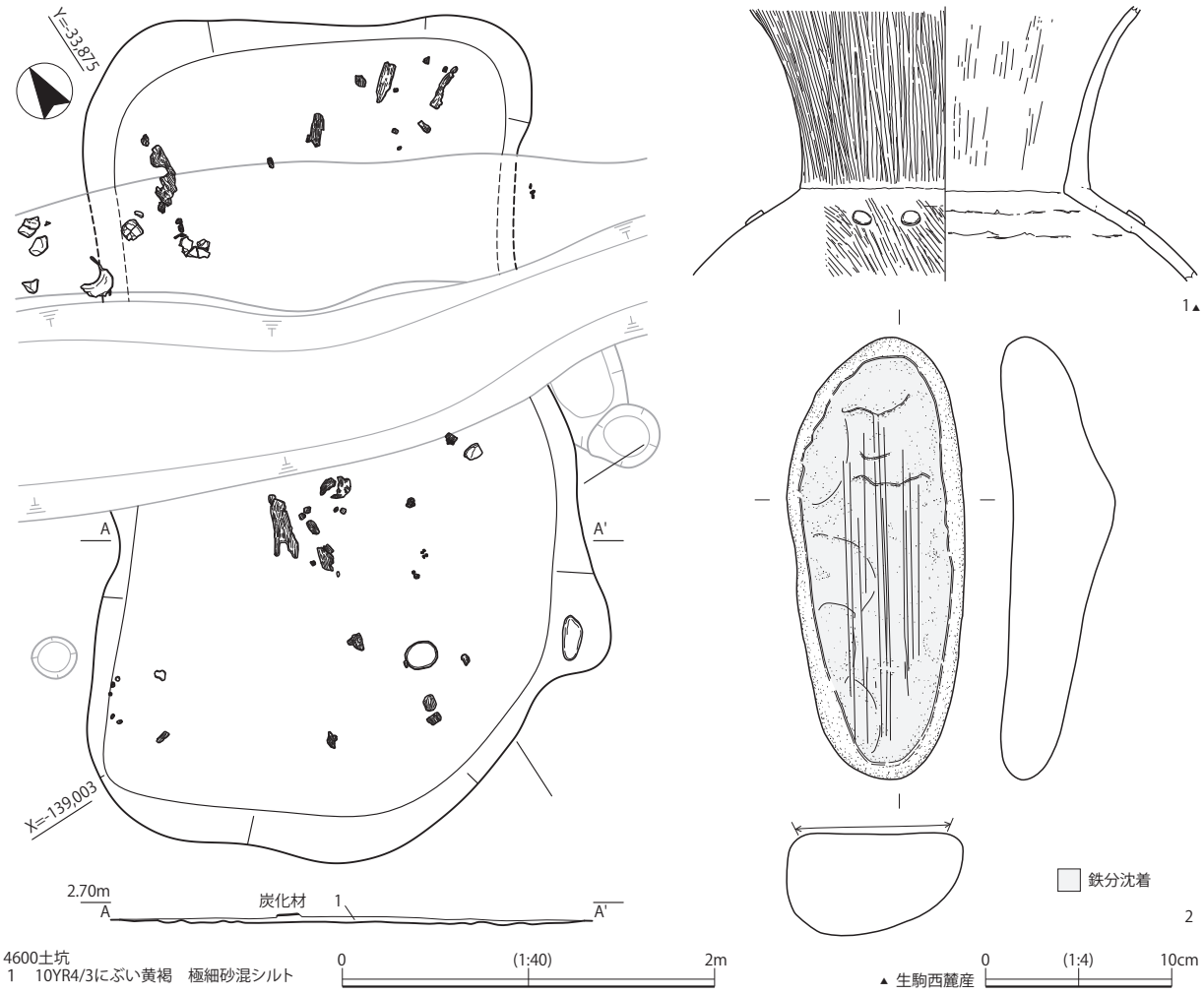


図 225　1－5区　4600 土坑平・断面　出土遺物

薄く、土砂の堆積が希薄であったことから、5－1層とした古土壌に収斂した可能性があると考えられる。

斜面地における5－2－1 b層は、微高地上で検出された 5574 溝が供給源となる破堤堆積物である。また、5－2－2 b層も同様に、5574 溝の破堤堆積物で、両砂層が明瞭に分離できたのは調査地西側のみであった。なお、調査地南東・南西側では、砂層の細分が不可能であったため、5－2 b層として一括して掘削を行っており、地層の呼称は5－2 b層を併用した。

第5－2－2面は、5－1－1 b層を除去して検出した遺構面で、5－2－2層とした古土壌の上面に当たる。地形は北側の微高地が最も高く、南西側に低くなる斜面地が形成される。南西側では、第6－1面の畦畔である 8030 畦畔に5－2－2層がすりついており、この段階にも水田として土地利用されていた可能性がある。5－2－2層中、第5－2－2 b面直上から、完形ないし完形に近い弥生土器が出土した。遺構に帰属するものはなく、地層に含まれる土器である。斜面地から個体毎に、ある程度まとまって出土しており、遺構番号を付与して取り上げを行った。

4696 土器とした取り上げは、微高地の南側斜面地の5－2－2層から出土した。直上には4層が堆積しており、上部は削平を受ける。5349 土器とした取り上げは、微高地に5－2－2層が収斂す

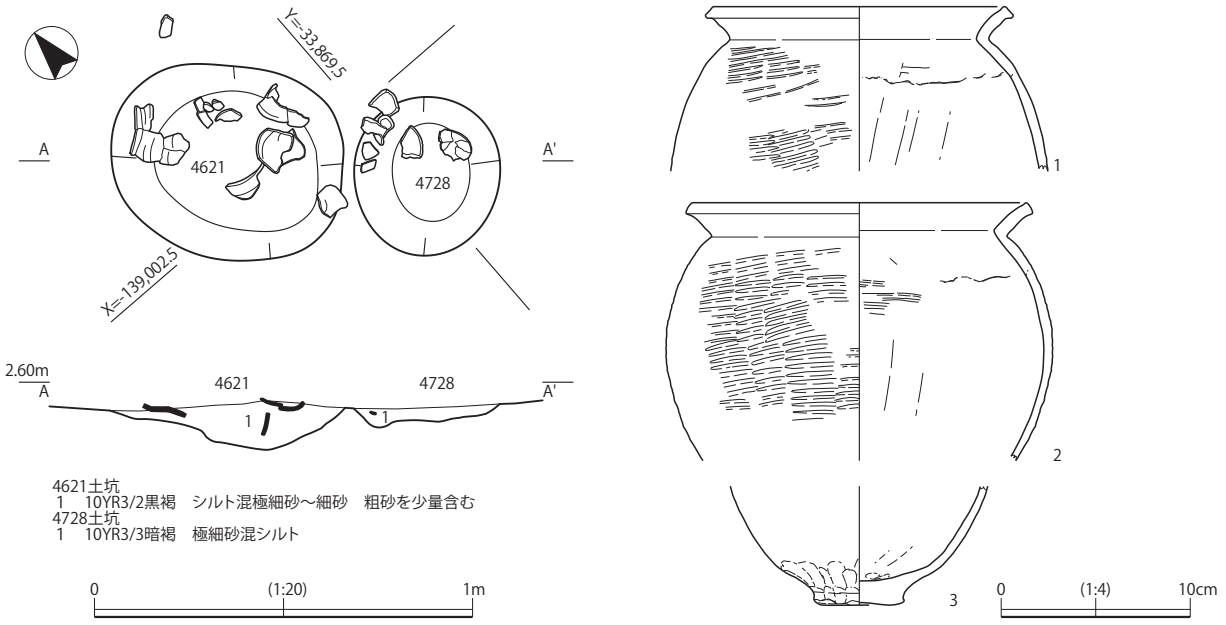


図 226　1－5区　4621・4728 土坑平・断面　出土遺物

る部分から出土した。221 トレンチからも、5349 土器に含まれると考えられる高坏脚部が出土した。4696・5349 土器は、斜面地に置かれた、もしくは、廃棄された出土状況を呈し、1－3区で検出された弥生時代後期集落の消長と関係する可能性がある。弥生時代後期後葉以降も微高地南西側は土砂の供給が続き、不安定な環境であったことが5－2ｂ層の堆積から想定されるが、これらの土器はその境界部付近に廃棄されたものである。

4600 土坑（図 224・225、図版 68・71）

調査地北東の微高地上で検出された。3層を掘削した段階で遺構が露出し、第5－1面の段階に調査を行ったが、帰属する遺構面の検討を行った結果、古墳時代の溝との切り合い関係と出土遺物から本遺構面に帰属させた。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 4.5m、短軸 2.4m、深さ 0.02m である。炭化材が放射状に近い状態で検出されており、竪穴建物の可能性を想定しつつ調査を行ったが、炉跡や柱穴などは検出されなかった。また、弥生土器の破片が、炭化材と同じ高さで出土しており、一部の弥生土器は、第6－1面の 5570 溝の上部まで広がる。炉跡・柱穴は検出されなかったが、短期間に使用された仮屋のような施設が想定される。

4600 土坑からは、図 225 －1・2が出土した。1は弥生土器壺で、肩部に円形浮文が貼り付けられる。外面及び頸部内面は縦方向のヘラミガキ、体部内面には粘土接合痕が残る。生駒西麓産。2は砥石で、表面に線状の使用痕がある。表面は鉄分の影響で、橙色に変色する。3－1層との層理面近くから出土しており、その影響で鉄分が沈着したと考えられる。

4621・4728 土坑（図 224・226）

4600 土坑の東側で検出された。4621 土坑は、平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 0.6 m、短軸 0.5 m、深さ 0.12 mである。4621 土坑から図 226 －1～3の弥生土器が出土した。1・2は甕である。1の外面はタタキ、内面はナデ調整される。2の外面はタタキ、内面は体部中位にハケメが残る。3は壺底部である。外面は底部に近い部分がナデ調整で、それより上位は磨滅により不明。内面も磨滅しており、調整は不明であるが、内底面は指頭圧痕と板ナデのような痕跡が残る。4728 土坑は、平面形は円形、規模は直径 0.4 m、深さ 0.05 mである。弥生土器の細片が出土した。

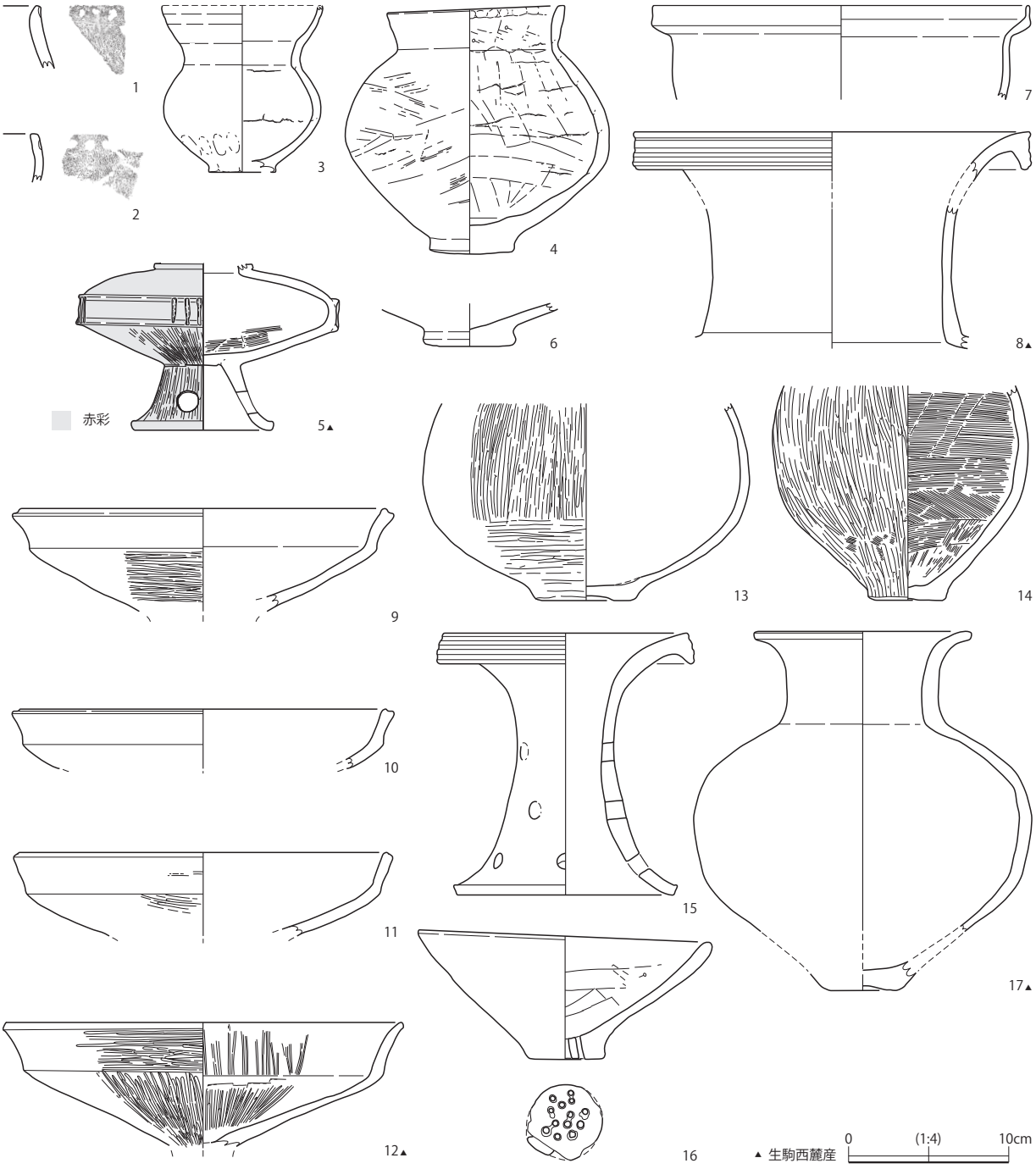


図 227　1－5区　5－2－1～5－2－2層出土遺物

その他の遺構・地層出土遺物（図 224・227・228、図版 68・69）

5－2－2層とした古土壌を中心に弥生時代後期の土器・石製品が出土した。図 227 －1は鉢で、4－1層から出土。2～5は5－2－2層から出土。3は小型の壺である。内外面はナデ調整される。4は短頸壺で、内外面は板ナデ調整される。5は台付長頸壺である。口縁部の破片が出土したが、細片であったために図化できなかった。吉備系。生駒西麓産。6は壺底部で、4－2層から出土。7は有段口縁の鉢で、4696 土器として取り上げを行った。8は広口壺で、微高地上の3－1層から出土。9～12 は高坏である。9は5－2－1 b層から出土。内外面は磨滅するが、外面は横方向のヘラミガキか。10 は 826 土器として取り上げを行った。11 は5－2－2層から出土。外面にヘラミガキが一部残る。

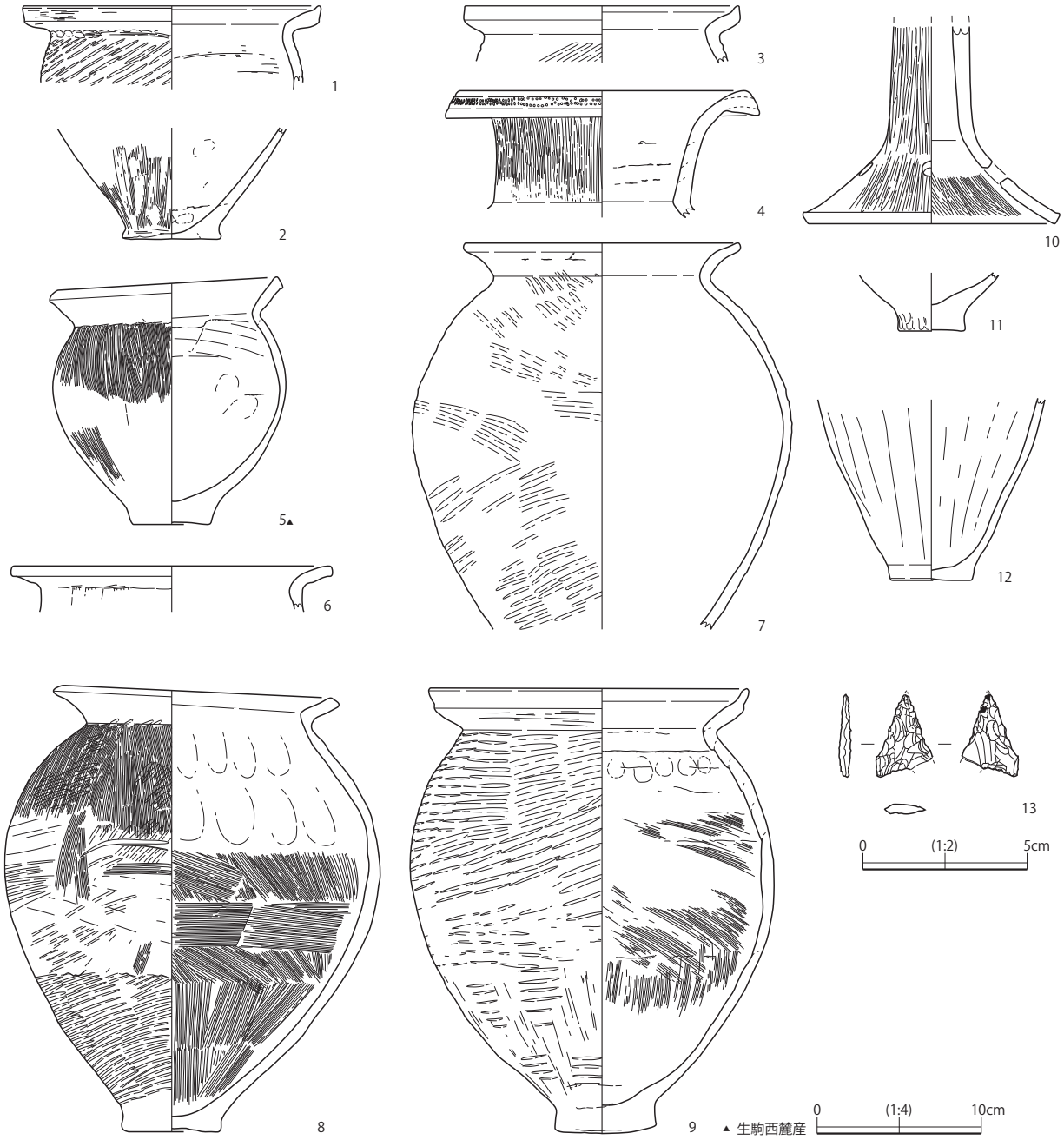


図 228　1－5区　4－4～5－2－1層出土遺物

12 は 5349 土器として取り上げを行った。13 は壺で、805 土器として取り上げを行った。外面中位は縦方向のヘラミガキ、下位は横方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。14 は 221 トレンチ掘削時に出土した土器で、5349 土器として取り上げを行った土器と同じ地層から出土したと考えられる。14 は壺の体部から底部である。外面はハケの後、縦方向のヘラミガキ、内面は横・斜め方向にハケ調整される。15 は器台で微高地上の 4 － 2 層から出土した。口縁端部には凹線文が施される。16 は鉢で、竪穴建物 12 が検出された微高地上の古土壌から出土。底部に小円孔が穿たれる。外面は磨滅、内面は板ナデ調整。17 は広口壺で、4696 土器として取り上げを行った。内外面は磨滅し、調整は不明。図 228 － 1 ～ 3 は 4 － 4 層から出土。 1 は甕で、外面はタタキ調整、内面はナデ調整される。 2 は甕底部である。外面はハケ調整、内面はナデ調整で指押さえの痕跡が残る。 3 は甕口縁部である。外面はタタキ調整。 4 は広口壺で、 5 － 2 － 1 層から出土し、5055 土器として取り上げを行った。端面

に円形の刺突文が施される。５は甕で、５－２－１層から出土し、804 土器として取り上げた。外面は縦方向のハケ調整、内面は上位が板ナデ調整、中～下位がナデ調整される。生駒西麓産。６は甕で、５－２－１層から出土。細片を図化。外反する口縁部で、端面に面をもつ。外面はハケ調整。７は甕で、4696 土器として取り上げを行った。外面はタタキ調整、内面は磨滅しているがナデ調整か。８は甕で、5349 土器として取り上げを行った。外面はタタキで成形した後、上位はハケ調整される。９は甕で、812 土器として取り上げを行った。10 は高坏である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面脚柱部はナデ調整、裾部はハケ調整される。11 は壺底部で、竪穴建物 14 直下の５－２－２層から出土した。12 は甕で､5349 土器として取り上げを行った。内外面は板ナデ調整される。13 はサヌカイト製石鏃で、4600 土坑の直上から出土した。微細な調整剥離を行って刃部が整えられる。

第６－１面（図 229、図版 16）

５－２－２ｂ層を除去して検出した遺構面で、６－１層とした細砂～粗砂混シルトの上面に当たる。第６－１面では、砂・泥層に覆われた水田が検出された。地形は、北側の微高地と南東側の 8029 畦畔周辺が高く、その間は緩やかな斜面となっている。北側の微高地は、６－４ｂ層上面の高まりが弥生時代中期中葉以降に造成されたものである。微高地上では、5570 溝や 5574 溝が掘削されており、灌漑用水路として機能する。

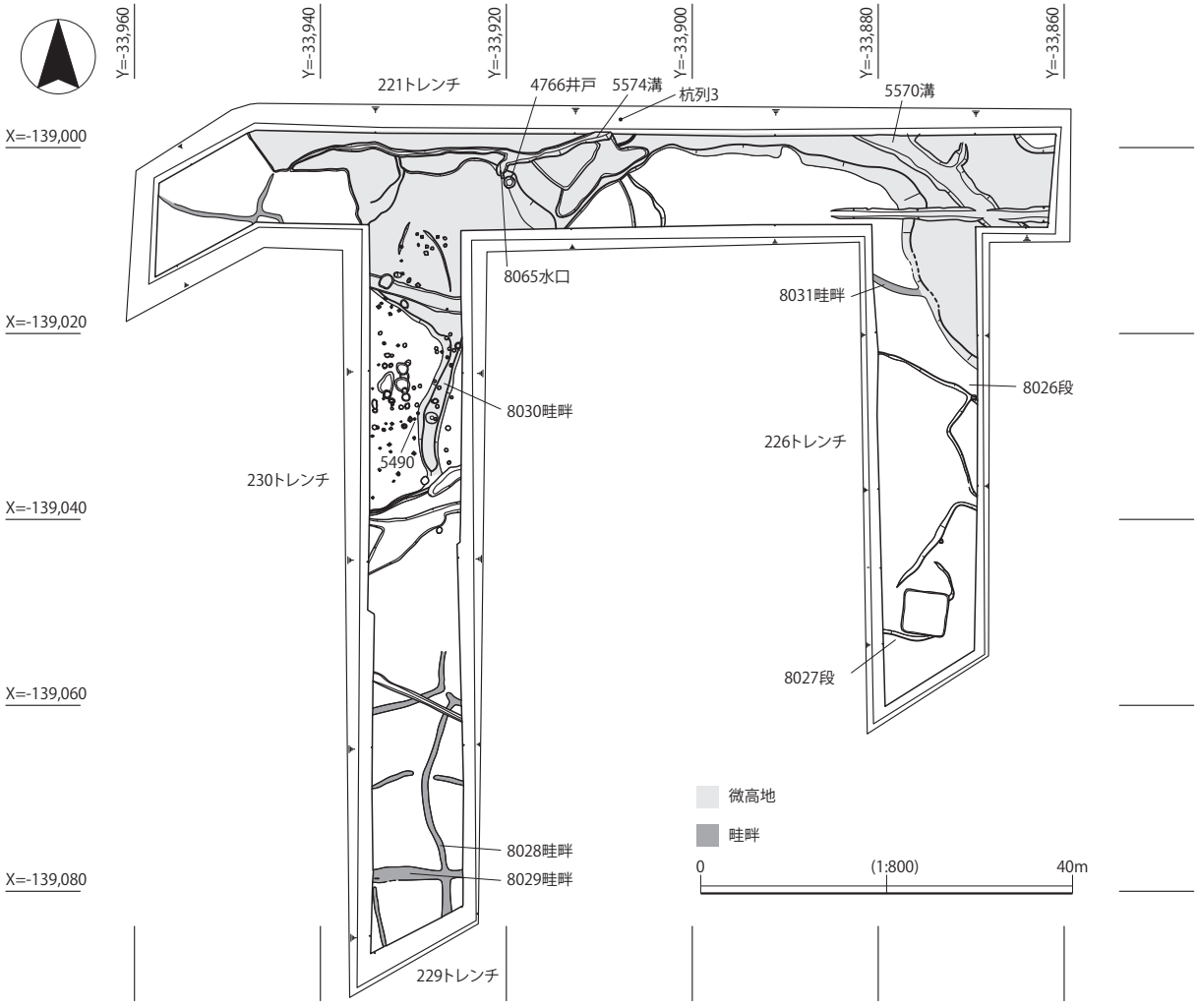


図 229　１－５区　第６－１面平面

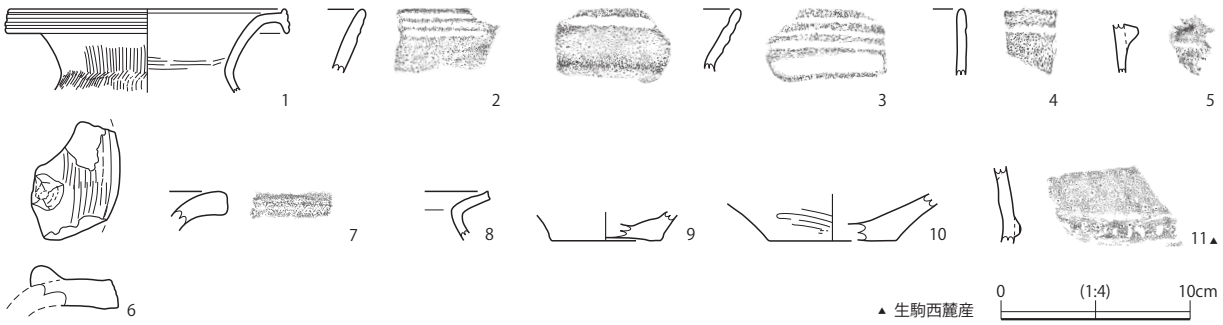


図 230　1－5区　5570 溝・6－1・6－2層出土遺物

水田（図 229）

調査地全体で検出された。南西側は、北側に低くなる地形に対し 8029 畦畔、西に向けて低くなる地形に対しては 8028 畦畔が設置されており、その間を小畦畔で区切った小区画水田が検出された。

南東側は、8026 段・8027 段と、その間を区画する小畦畔が検出された。南西側の畦畔と比較して畦畔の高さが低く、検出が困難であった。南東側の６－１ｂ層に対比できる地層が南西側では確認されておらず、南西側のみ遺構面の更新が行われたと考えられる。南東側では５－２ｂ（５－２－２ｂ）層直下の古土壌を６－１層としており、南東側６－２層と南西側６－１層が対比される可能性があるものの、今回の調査地で検証することが可能な断面がなかったため、調査時の所見に変更を加えていない。

調査地北側の 4766 井戸・5574 溝南東側では、畦畔及び田面の段が検出されており、水田として土地利用されていたと考えられる。

調査地南西側の 8030 畦畔周辺は、古墳時代の遺構が多数検出された範囲に当たり、６－１層を削り込んだ状態で遺構面の検出を行った。その結果、8030 畦畔に近接する範囲を中心に６－１ｂ層が露出しており、5490 土坑等の遺構が検出された。近接する遺構面の第５－２ｂ面に帰属するものも含まれていると考えられるが、Ⅲ様式に位置付けられる 5490 土坑が検出されたことにより、5490 土坑調査時に検出された時期不明の遺構を含めて図 229 に図示した。

６層出土遺物（図 230）

６－１・２層から出土した弥生土器の内、図 230 －６～ 11 を図示した。６は壺口縁部で６－１層から出土した。端面に櫛描直線文が施され、口縁部内面に円形の突起部が貼り付けられる。７は壺口縁部で、６－２層から出土した。端面に櫛描波状文が施される。８は甕口縁部で６－１層から出土した。口縁端部はわずかに上方へ立ち上がる。９は甕底部で６－２層から出土した。10 は壺底部で６－２層から出土。11 は突帯文土器で、６－１層から出土した。刻目は線状で、長原式新段階と考えられる。

5570・5574 溝（図 105・106・229・230・234、図版 16）

5570 溝は、北東側の微高地上で検出された。地形的に最も高い場所に当たり、古墳時代にも同位置で多数の溝が掘削された。5570 溝の規模は、幅 2.4 m、深さ 1.0 mである。水成層の砂層によって埋没する。掘り直しが複数回行われており、掘り直しに伴って溝両肩部に伴う堤が再構築されたことが断面で確認できた。２－１・２－２区で検出された当該期の溝に連続すると考えられ、弥生時代中期中葉から中期後葉の主要な灌漑用水路である。5570 溝から出土した遺物の内、図 230 －１～５を図示した。１は広口壺の口縁部で口縁端部は上下に拡張されており、端面に凹線文が３条施される。２～４は縄文土器深鉢で、宮滝式～滋賀里Ⅰ式に比定できる資料である。外面の口縁端部近くに巻貝を用いた凹線が施される。５は、円形の突起部が２箇所貼り付けられ、１箇所は剥離する。器種は不明である。

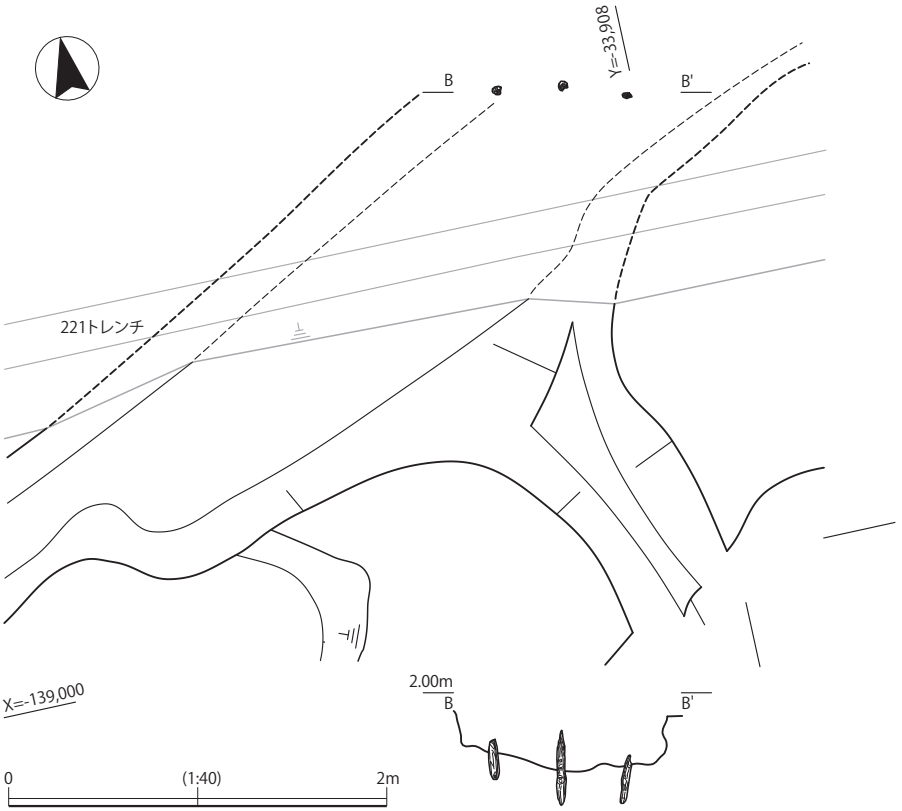


図 231　1－5区　杭列3平・断面

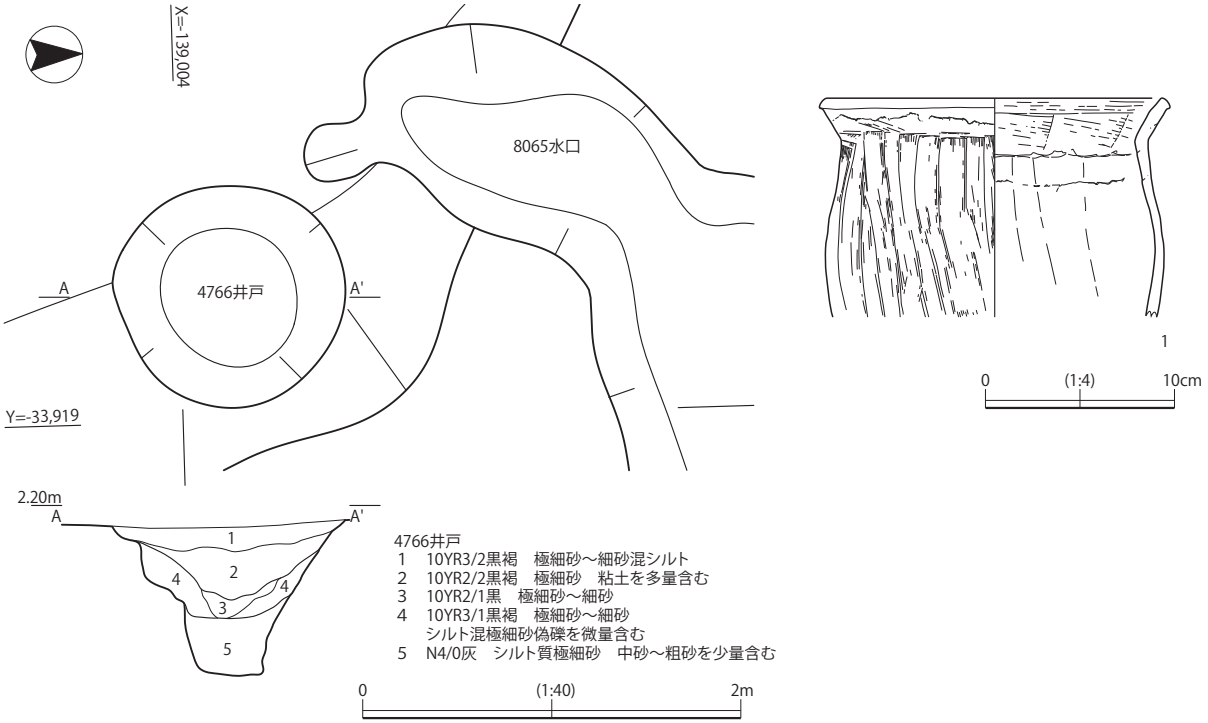


図 232　1－5区　4766 井戸平・断面　出土遺物

5574 溝は、北側微高地上で検出された。規模は、幅 0.6 m、深さ 0.5 m以上である。5570 溝と比較して規模が小さく、5570 溝から導水して南・西側の水田に、水を供給したと考えられる。221 トレンチの断面では、5574 溝に直交する杭列3が検出された。近在して水口も検出されており、シガラミとして機能したと考えられる。

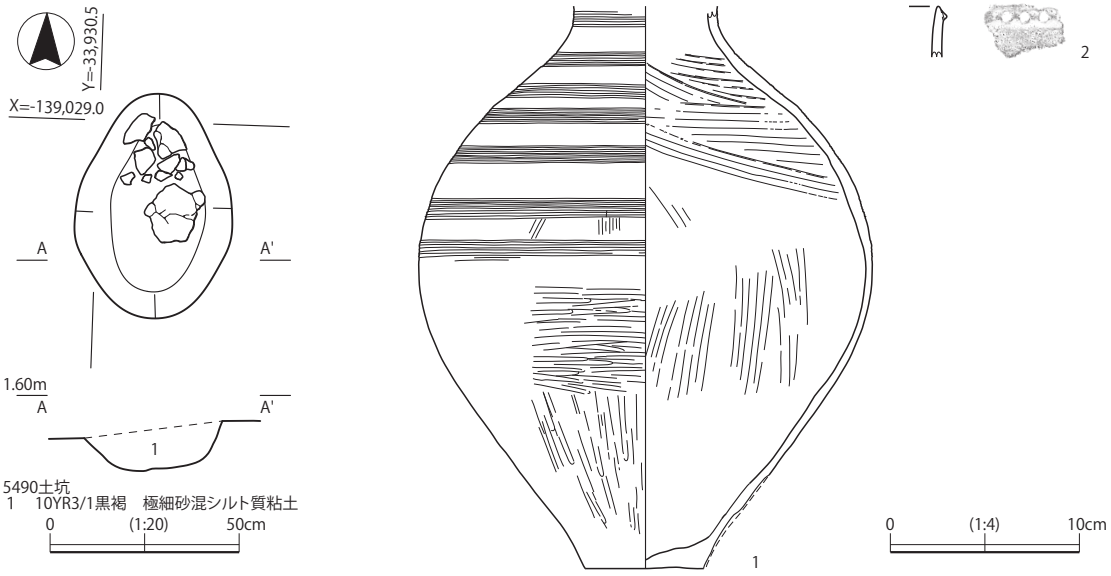


図 233　1－5区　5490 土坑平・断面　出土遺物

4766 井戸・8065 水口（図 229・232）

5574 溝の南側で検出された。第５－２ｂ面微高地上では古墳時代と弥生時代の古土壌が収斂する地点があり、4766 井戸は帰属する遺構面が不明であったため、埋土中層まで第５－２ｂ面で調査を行った井戸である。

4766 井戸の平面形は円形を呈し、規模は、直径 1.2 m、深さ 0.8 mである。埋土は下層がシルト質極細砂である。中層より上位は、機能廃絶後の堆積と考えられ、肩部に崩落土が堆積した後、周辺ないし井戸内で形成された土壌と考えられる極細砂～細砂が堆積する。６ｂないし７ｂ層まで掘削されており、井戸として機能したと同時に、5574 溝から 8065 水口を介して取水し、水溜めとしての機能もあったと考えられる。同様の遺構に、２－１区の 162 井戸や４区第６－４ｂ面で検出された井戸・土坑がある。4766 井戸から、中層より上位の埋土から図 232 －１の甕が出土した。体部外面はハケに近い板ナデ調整、内面はナデ調整である。弥生時代中期前葉に比定される。

第６－１ｂ面

南西側の 8030 擬似畦畔周辺では、６－１層の遺存状態が悪く、６－１ｂ層とした砂層上面が露出しており、土坑やピットが検出された。６－１ｂ層は局所的に確認できた地層で、調査はこの上面で終了したため、７層以下の地層と検証を行うことができなかった。230 トレンチで６－１ｂ層は確認されておらず、２－１区第６－５ｂ面及び１－５区 230 トレンチの所見から、６－４ｂ層に対比される可能性がある。なお、第５－２ｂ面と遺構面が近接していたため、5490 土坑周辺で検出された、時期不明の遺構は、第５－２ｂ面に帰属する遺構も含まれる可能性がある。

5490 土坑（図 229・233）

調査地南西側、第６－１ｂ面で検出された。平面形は不整形な形状を呈する。規模は、長軸 0.6 m、短幅 0.4 m、深さ 0.1 mである。図 233 －１は、頸部から体部中位にかけてハケ調整の後、櫛描直線文が施される。中位から底部にかけては、横・縦方向のヘラミガキが施される。内面は粗いハケ調整、上位のハケは原体が片側に強く当たっており、ハケメが二重に見える。Ⅲ－１～２型式。２は突帯文土器深鉢である。口縁端部には大「Ｏ」字形の刻目が施される。長原式新段階。

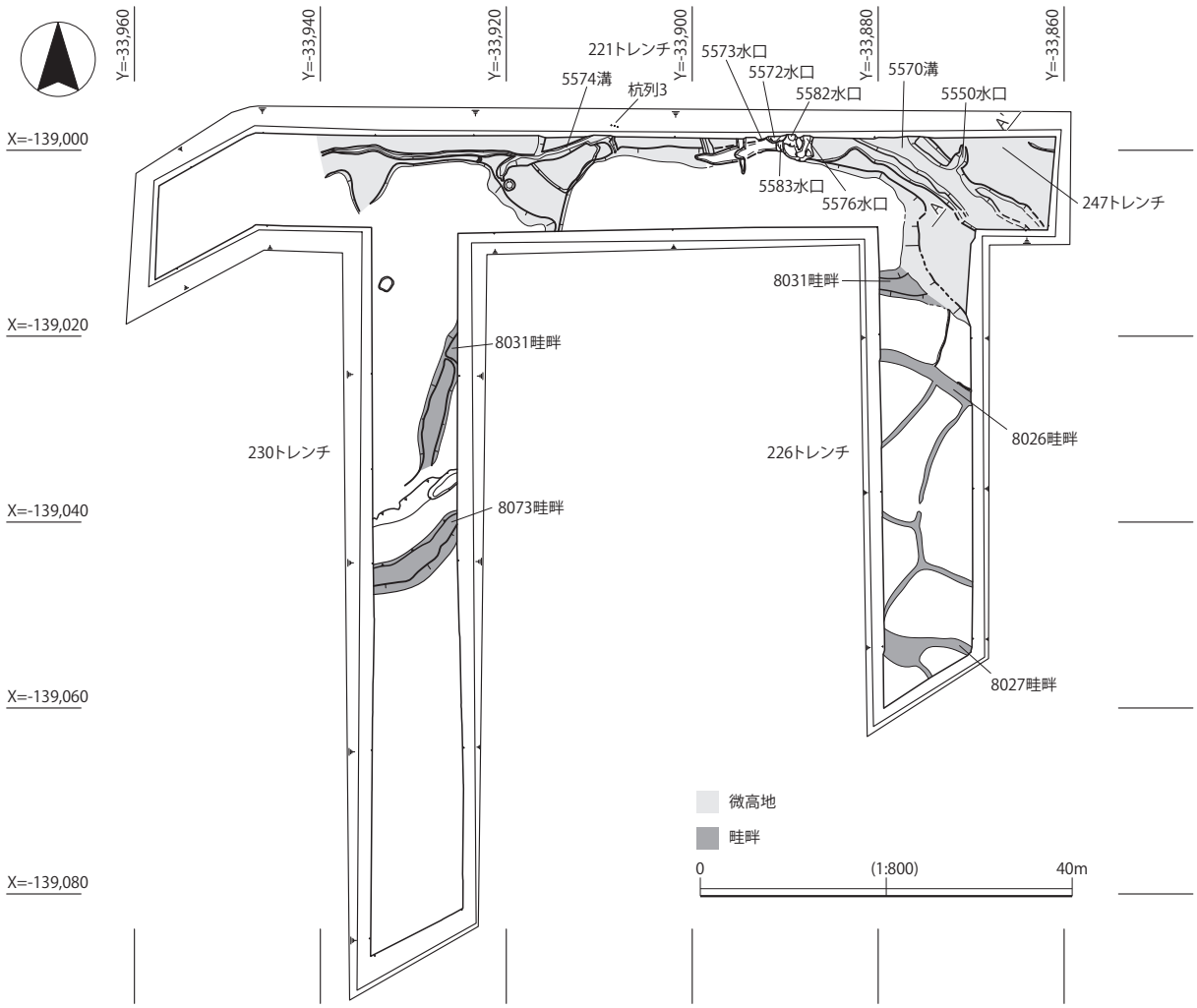


図 234　1－5区　第6－2面平面

第6－2面（図 234、図版 16）

6－1層を除去して検出した遺構面で、6－2層とした粗砂混シルト・シルト質粘土の上面に当たる。地形は、第6－2面と大きく変わらない。調査地南東側で6－1 b層とした泥層に覆われた水田が検出された。南西側では、第6－1面と同じ位置で擬似畦畔が検出された。なお、南西側の一部を除いて、本遺構面で調査を終了した。

水田

調査地南東側で遺存状態が良好な水田が検出された。南東側の水田は、X=-139,040 周辺が低くなる地形に対し、8026・8027・8031 畦畔が設置され、全体が大きく3単位に区画される。また、西方向に低くなる地形に合わせて、8026・8027・8031 畦畔に直交する小畦畔が設置されており、第6－1面と同様、小区画の水田が検出されている。2－1区より西側で検出された水田の区画より1枚当たりの面積が狭く、地形の高低差が反映されたものと考えられる。

調査地北東側の微高地上の 5570 溝は、第6－2面においても主要な灌漑用水路で、5570 溝から取水したと考えられる水口が微高地縁辺で複数検出された。5574 溝の南東側は、引き続き水田として土地利用されており、第6－1面と同様、微高地際で田面の段が検出された。

調査地北西・南西側は、6－1層に帰属する擬似畦畔が検出された。6－1層と6－2層の間に自然堆積層が挟まれなかったことから、遺構面の遺存状況は不良である。また、第5－2 b面 4843 溝の南

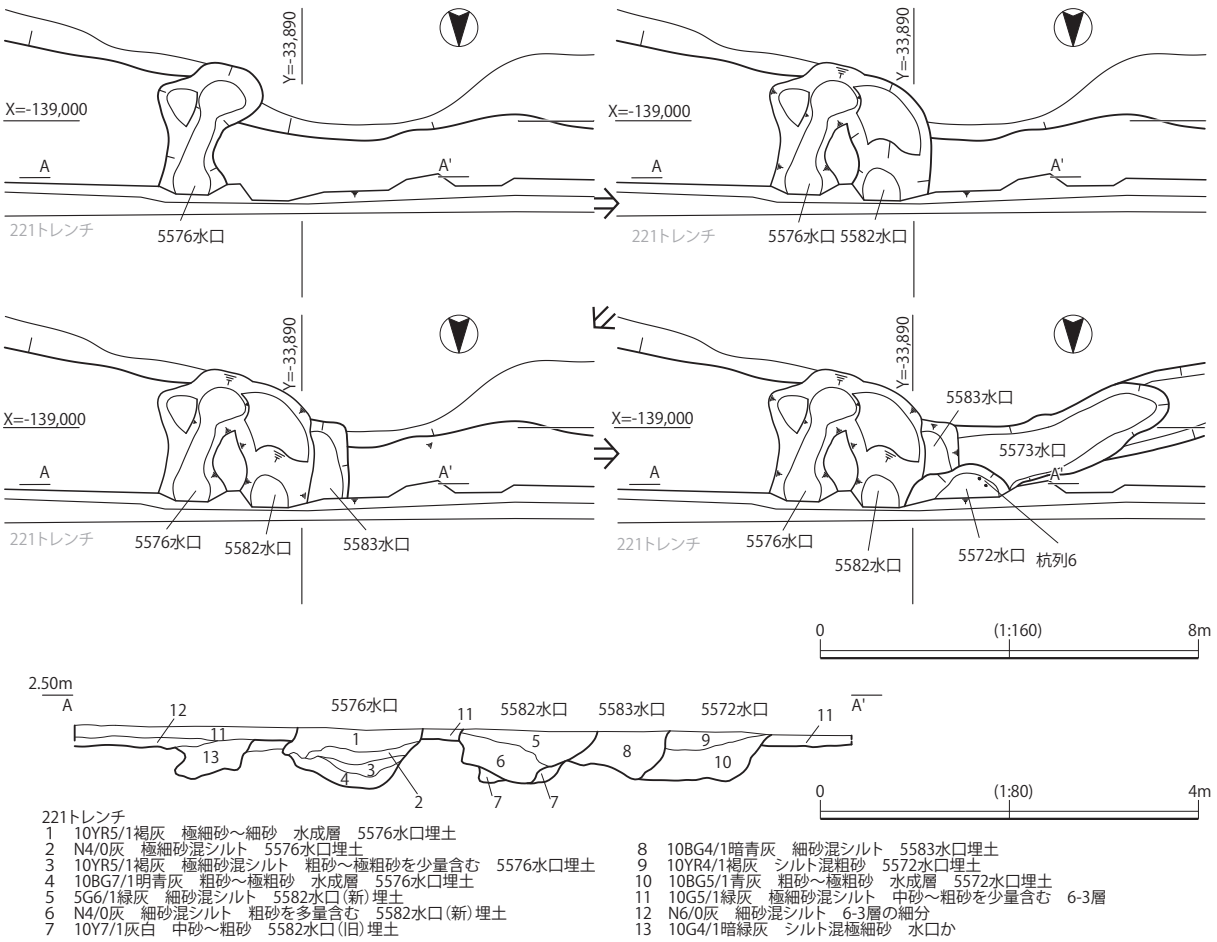


図 235　1－5区　5572 他水口平・断面

側に当たる場所では、8073 畦畔が検出された。8073 畦畔は、南東側の中央部に向かって低くなる地形に合わせて設置されたもので、8030 畦畔とともに古墳時代の地形に影響を及ぼしたと考えられる。なお、8030 畦畔では水口が 1 箇所、5574 溝では水口が 2 箇所検出された。

5576・5582・5583・5572 水口（図 234 ～ 236、図版 16）

5570 溝から取水し、南側の田面に水を供給するための水口が、微高地縁辺で検出された。この水口は 5 回以上の掘り直しが行われたことが平・断面で確認されており、水利施設として重要な機能を果たしたと考えられる。水口は、埋没と再掘削が繰り返されており、西側から東側に移動したと考えられる。埋土は水成層の砂層で、5570 溝の埋没と再掘削に同期して、水口が造り替えられたと考えられる。また、第 6 － 2 面を遡る段階においても、水口ないし溝の掘削が同範囲で行われていたことが、断面の所見から想定され、微高地南側の水田に水を供給する主要な施設として長期間に渡り機能したことが想定される。また、5572 水口には杭列 6 が検出された。杭は 2 本分が検出されており、土留めとして打設されたか、水利施設が設けられたものと考えられる。

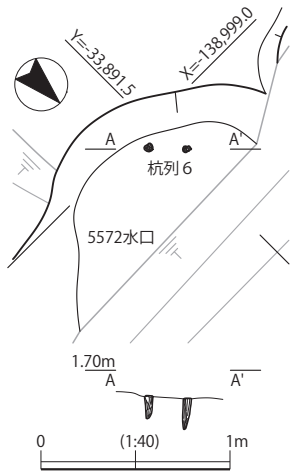


図 236　1－5区　杭列 6 平・立面

なお、これらの水口については、田面の傾斜が南に低くなっていることから考えて、排水機能については積極的に評価していない。

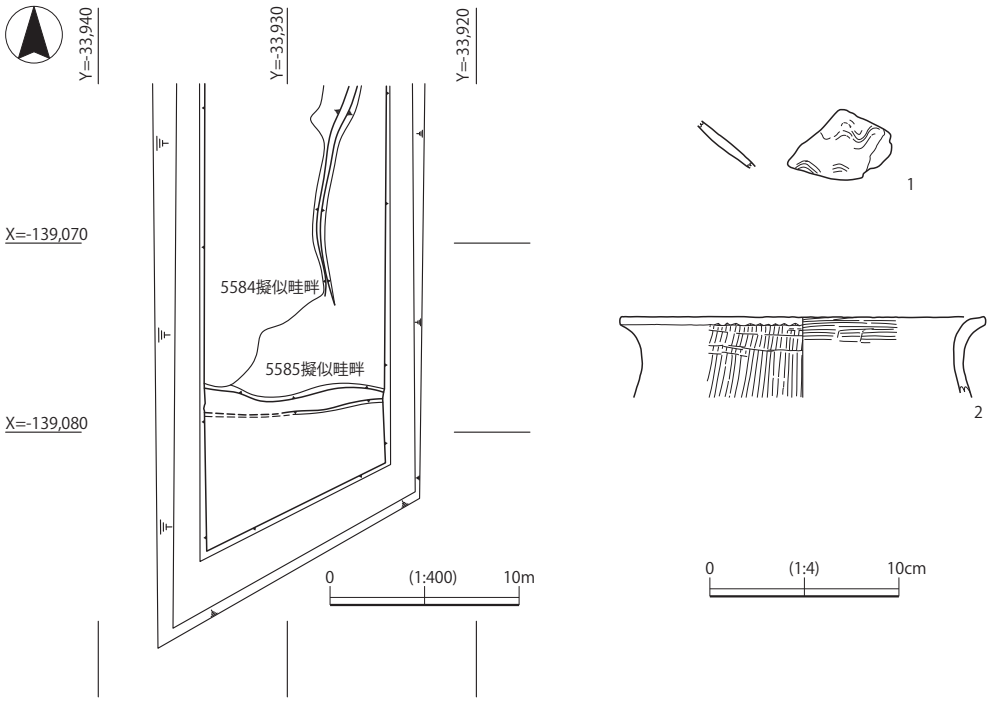


図 237　１－５区　第７－１面平面　出土遺物

第７－１面（図 237、図版 16）

１－５区南西部の一部について、第７－１面の調査を行った。それ以外の範囲は未調査である。第７－１面は、２－１区の調査成果から水田であることが想定できたが、６－２層と７－１層の間に自然堆積層が挟まれなかったため、６－２層に帰属する擬似畦畔が検出されるに留まった。そのため、２－１区のように、第７－１面に帰属する畦畔は確認することができなかった。

７－１層から出土した弥生土器は、図 237 －１・２がある。１は壺体部で、外面に櫛描波状文が２単位施される。２は甕で、口縁端面下側に刻目が施される。外面は縦方向の粗いハケ調整で、内面は口縁部が横方向の粗いハケ調整、体部は磨滅により不明である。Ⅱ様式に位置付けられることから、第７－１面は、他の調査地と同様、弥生時代中期前葉に比定される。

第５項　１－１・２－１区

第２－１面までを機械掘削し、以下、10 面まで人力掘削を行った。なお、第２－１面に至るまでは、各地層の層理面で精査を行って記録作業を行った。

第２－１面（図 238、図版 17）

１－３層を機械掘削して検出した遺構面で、２－１層とした細砂～中砂混シルトの上面に当たる。第２－１面では、調査地全体で水田が検出された。また、近世の溜池と溝、田面の段が痕跡となって残っている。調査地中央では、坪境畦畔が擬似畦畔として部分的に検出された。幅 1.0m で、21 溝の南側に伴う。21 溝の規模は、幅 1.2m、深さ 0.2m である。埋土は湿性堆積物のシルト質粘土である。２－１層からは、瓦器の破片が出土しており、出土遺物と上下の地層の所見を合わせ、鎌倉時代～室町時代前期に形成されたと考えられる。なお、調査地南東側では、江戸時代後期以降に機能した６・７溝が検出された。坪境とは異なる位置で検出されており、室町時代後期まで遡る可能性がある。

第２－２ｂ面（図 240・241、図版 17）

２－１層を除去して検出した遺構面で、２－２ｂ層とした砂層の上面に当たる。第２－２ｂ面では、溜池・水田・溝・土坑が検出された。27 溜池の規模は、長軸 7.0 m以上、短軸 4.0 m、深さ 0.6 mである。埋土は湿性堆積物の粘土～シルトである。27 溜池東側では、96 溜池が検出された。断面の検討によると、

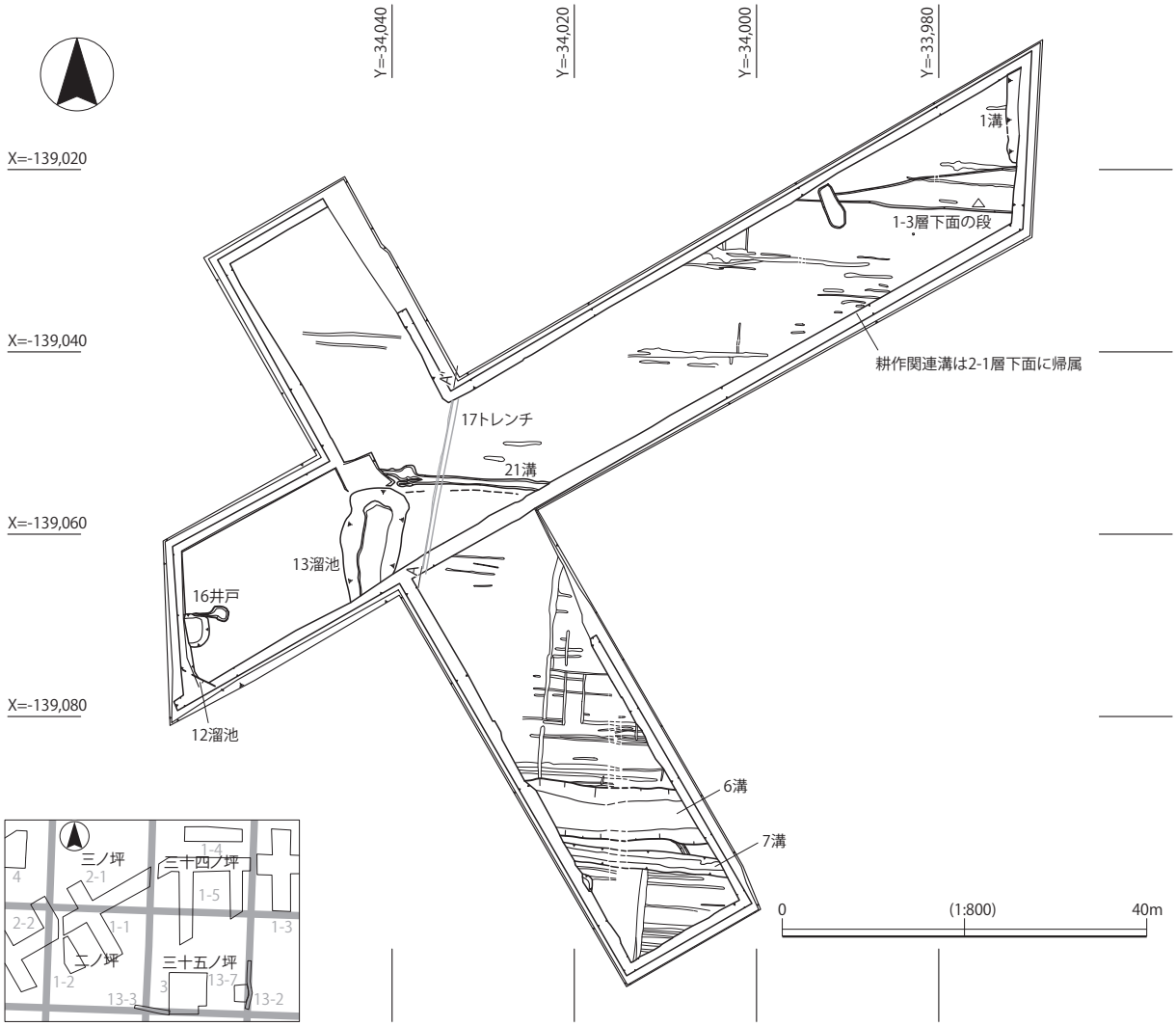
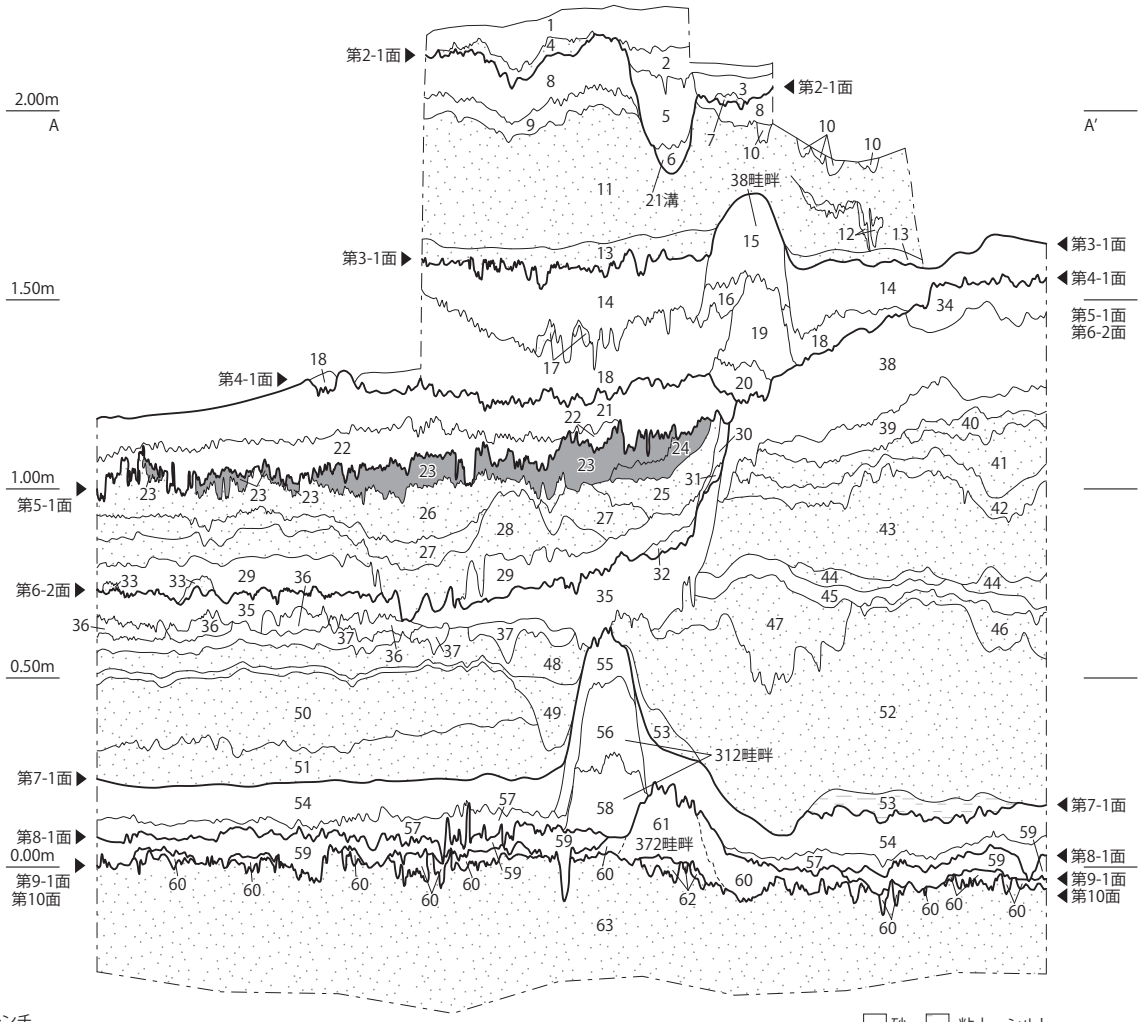


図 238　１－１・２－１区　第２－１面平面



17トレンチ

1 5Y5/1灰 粗砂〜極粗砂混シルト 細礫を少量含む 作土層 1-3層
2 10YR4/4褐 細砂〜中砂混シルト 1-3層の細分
3 10YR6/1褐灰 極細砂〜細砂 1-4層に似る 1-3層の細分
4 5Y8/2灰白 極細砂〜細砂 1-4b層
5 5Y8/2灰白 シルト質粘土 21溝埋土
6 10Y8/1灰白 粗砂〜極粗砂 21溝埋土
7 10YR5/1褐灰 極細砂〜細砂 1-4b層
8 10BG5/1青灰 細砂〜中砂混シルト 作土層 2-1層
9 5BG5/1青灰 細砂混シルト 作土層 2-1層
10 5B5/1青灰 細砂混シルト 作土層 2-1層
11 N6/0灰 細砂 2-2b層
12 10YR7/2にぶい黄橙 シルト混極細砂〜細砂 2-2b層
13 10YR4/2灰黄褐 細砂混シルト〜粘土 2-2b層
14 2.5Y4/2暗灰黄 細砂混シルト 作土層 3-1層
15 5Y4/2灰オリーブ シルト混粗砂 38坪境畦畔
16 N6/0灰 粘土質シルト 3-1層の細分
17 10YR8/1灰白 粗砂 3-2b層
18 2.5Y4/2暗灰黄 中砂〜粗砂混シルト 3-3層
19 2.5Y4/3オリーブ褐 粗砂混シルト 粘土偽礫を含む 作土層 3-3層
20 2.5Y4/2暗灰黄 粗砂混シルト 3-3層形成前の作土層
21 10YR4/2灰黄褐 細砂混シルト 作土層 4-1層
22 10YR5/1褐灰 極細砂〜細砂混シルト 作土層 4-2層
23 10YR4/1褐灰 シルト質粘土 古土壌 5-1層
24 5Y6/1灰 シルト質粘土 古土壌 5-1層
25 N5/0灰 シルト質粘土 斜面堆積物 5-2b層
26 7.5Y5/1灰 粘土 5〜10mm大で偽礫状の堆積を示すところあり 5-2b層
27 7.5Y4/1灰 粗砂〜極粗砂 粘土偽礫を含む 5-2b層
28 2.5Y6/1黄灰 粗砂 細砂の薄層を挟む 5-2b層
29 N4/0灰 粘土 弱い土壌化 6-1層
30 10Y5/1灰 シルト混粗砂 斜面堆積物 6-1層
31 7.5Y5/2灰オリーブ 細砂混シルト 斜面堆積物 6-1層
32 7.5Y4/1灰 粗砂 6-1b層
33 N6/0灰 細砂 6-1b層
34 10YR5/1褐灰 細砂 粗砂を少量含む やや暗色味帯びる 6-1層ないし6-2層に対比
35 N3/0暗灰 粗砂〜極細砂混シルト 作土層 6-2層
36 N3/0暗灰 粘土質シルト 6-2層の細分
37 5Y3/1オリーブ黒 細砂混シルト 6-2層の細分
38 10Y4/1灰 細砂 粗砂を少量含む 6-3層
39 N4/0灰 シルト混細砂 古土壌 6-4層
40 10YR6/3にぶい黄橙 細砂 粗砂を微量に含む 6-5b層
41 5Y6/2灰オリーブ 細砂 5〜10mm大の礫を少量含む 6-5b層
42 10YR4/1褐灰 シルト混細砂 6-5b層
43 10YR7/2にぶい黄橙 粗砂〜極粗砂 3〜5mm大の礫を含む 6-5b層
44 10YR4/1褐灰 細砂 6-5b層
45 10YR4/2灰黄褐 シルト混細砂 土壌化 6-5層
46 10YR4/2灰黄褐 細砂 粘土の薄層を挟む 6-5b層
47 10YR6/1褐灰 細砂〜粗砂 シルトの薄層を挟む 6-5b層
48 7.5Y6/1灰 粗砂〜極粗砂 6-5b層
49 2.5Y6/1黄灰 細砂 6-5b層
50 10YR5/3にぶい黄褐 細砂 粘土〜シルトの薄層を挟む 6-5b層
51 10YR5/1褐灰 粗砂〜極粗砂 6-5b層
52 10YR6/2灰黄褐 極細砂〜細砂 2〜3mm大の礫を含む 6-5b層
53 10YR3/2黒褐 粘土 6-5b層
54 10YR3/2黒褐 粘土 作土層 7-1層
55 10YR4/3にぶい黄褐 細砂〜中砂混シルト 作土層 7-1層
56 10YR4/2灰黄褐 粘土 粗砂を少量含む 312畦畔
57 10YR4/2灰黄褐 粘土 粘土(8層)偽礫を少量含む 作土層 7-2層
58 10YR3/2黒褐 粘土 粗砂を少量含む 黒味を帯びる 312畦畔
59 10YR4/1褐灰 粗砂混シルト 細砂を少量含む 8-1層
60 10YR5/1褐灰 粗砂混シルト 9-1層
61 10YR3/3暗褐 粗砂混シルト 372畦畔
62 10YR4/2灰黄褐 粗砂〜極粗砂 9b層
63 5Y3/1オリーブ黒 粘土 10層

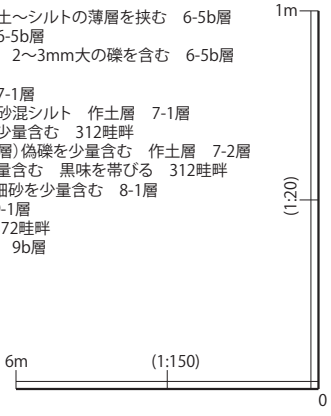


図 239 1－1・2－1区 17 トレンチ断面

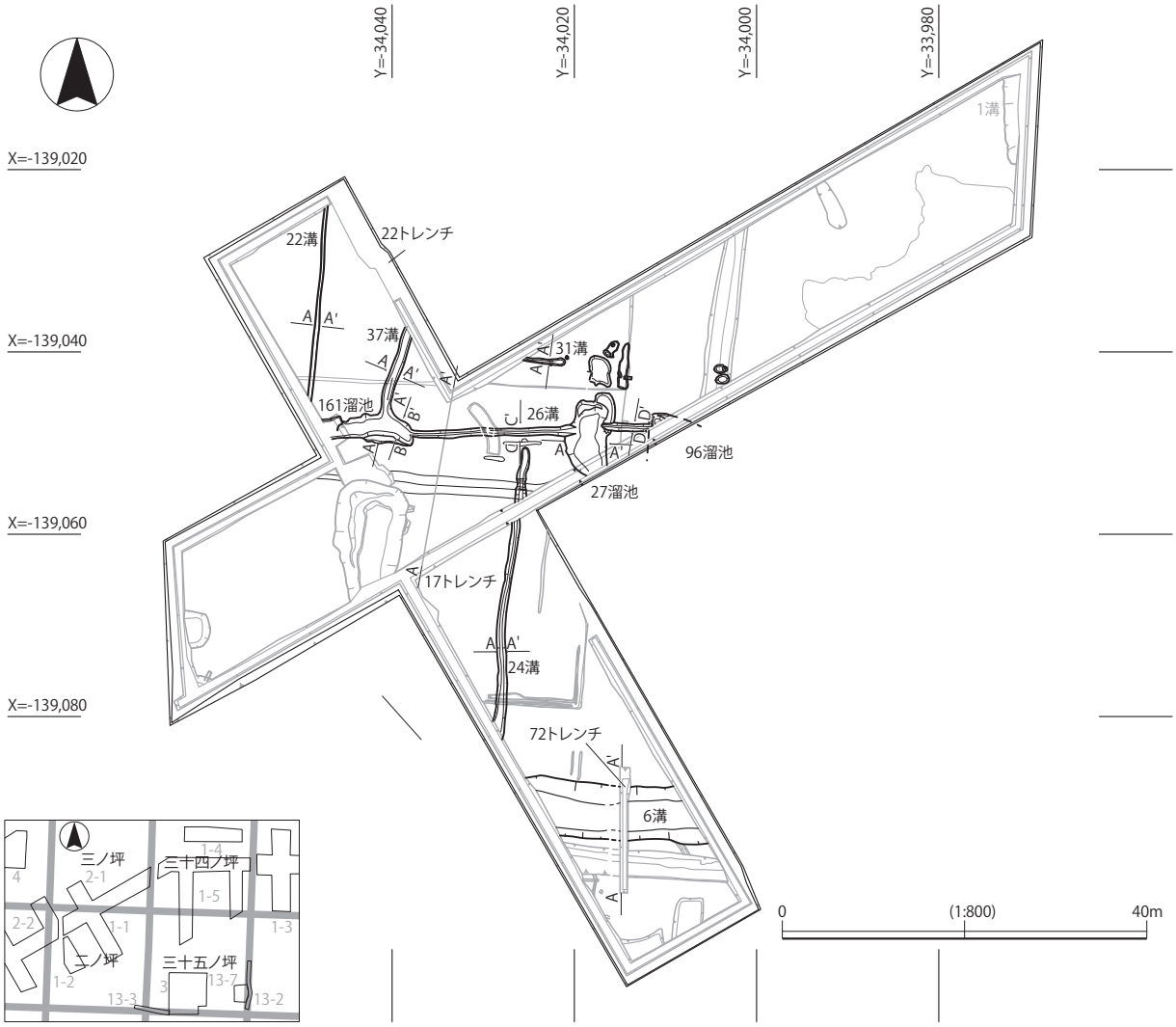


図 240　1－1・2－1区　第2－2b面平面

27 溜池と同規模に復元される。また、27 溜池の西側では、26 溝が 161 溜池と接続している状況が検出された。161 溜池は底面の凹凸が顕著で、他の溜池と異なり、平面形は不整形で、掘り込みが浅い。なお、24 溝は、検出時の状況でブリッジ状に一部が掘り残されており、26 溝と接続しなかった。第2－2 b面で検出された溜池は、2－1 層と切り合い関係が明瞭に抑えられた場所が無く、図 18 の 4 トレンチでは、断面の立ち上がりを2－1 層下面までとしたが、不明瞭な状態であった。他のトレンチや断面においても検討を行ったが、掘り込みを行った面が削平を受けており、時期を特定するに至っていない。溜池埋土は2－1 面で掘削した 13 溜池に類似しており、泥質の土が周辺に堆積する 1－3 層形成時に機能した可能性がある。現状では室町時代前期以降に掘削された可能性を考えており、鎌倉時代まで遡ることはないと考えられる。

1～2層出土遺物（図 243、図版 87）

1～2 層から出土した遺物の内、図 243－1～7 を図示した。1～3 は 1－3 層から出土した。1 は瓦質土器火鉢である。内外面は、横ナデ調整によって仕上げられる。室町時代後期。2 は須恵器坏身である。底面に高台に沿って、弧状に書かれた墨書が認められる。奈良時代後期。3 は瓦質土器の獣脚である。足指 3 本が表現される。室町時代後期。4 は黒色土器で、端部に沈線が認められる。内外面は磨滅しており、ミガキを含めた調整は不明。5 は白磁碗である。Ⅳ－1 類。6 は開元通宝である。初鋳

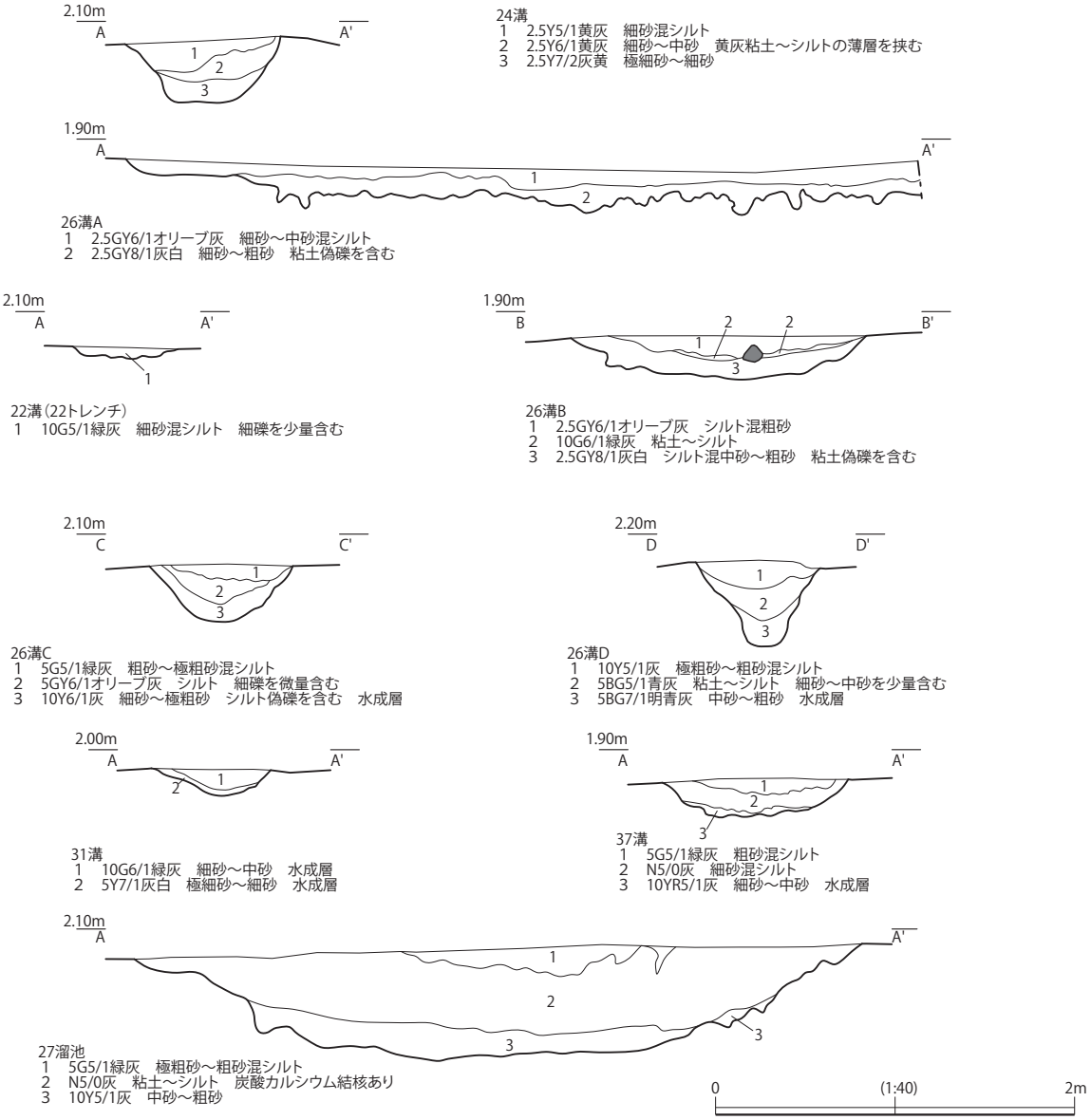


図 241　１－１・２－１区　第２－２ｂ面溝断面

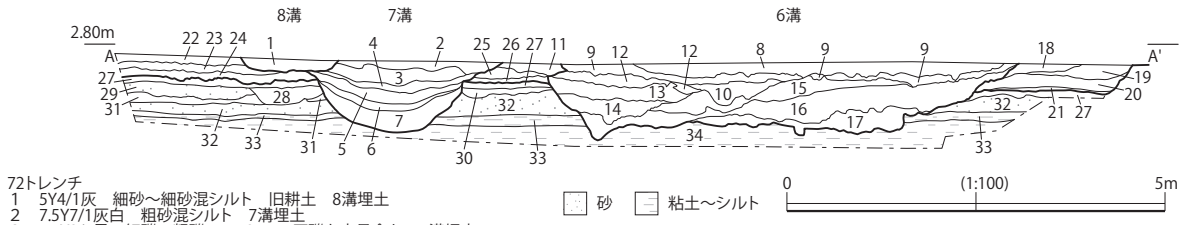
年は 621 年。７はサヌカイト製石鏃で、２－２ｂ層とした砂層から出土した。風化が顕著である。

１－３層は、瓦質土器の出土を根拠として、室町時代後期以降に形成されたと考えられる。４区では、１－３層に対比ができる２－１～２－３層から遺物は出土しなかった。同様に地層の対比が可能な、13－２区４－１層、13－３区２層上部から瓦質土器が出土しており、おおむねこの段階に１－３層は形成されたと考えられる。一方、２－１層は、上下の地層が形成された時期を考慮に入れ、鎌倉時代から室町時代前期に形成されたと考えられる。

第３－１面（図 244、図版 17）

２－２ｂ層を除去して検出した遺構面で、３－１層とした粗砂混シルトの上面に当たる。地形は、５－２ｂ層上面の状況を反映して、調査地東・南側が高くなっており、第２－１面と同じく北西方向に緩やかに低くなっている。第３－１面では、条里型地割の水田が検出された。

水田は長地型地割で、一筆当たり 80 ～ 140 ㎡を測る。調査地中央では、38 坪境畦畔が検出された。平面形は正方形と長方形のものがあり、38 畦畔から 10 ～ 11 mの間隔で東西の畦畔が設置される。



72トレンチ
1　5Y4/1灰　細砂〜細砂混シルト　旧耕土　8溝埋土
2　7.5Y7/1灰白　粗砂混シルト　7溝埋土
3　7.5Y2/1黒　細礫〜粗礫　1〜2cmの円礫を少量含む　7溝埋土
4　7.5Y4/1灰　極粗砂〜粗砂　ラミナあり　粘土の薄層を挟む　7溝埋土
5　7.5Y8/1灰白　粗砂〜細礫　ラミナあり　7溝埋土
6　7.5Y7/1灰白　極細砂〜細砂　ラミナあり　7溝埋土
7　10Y4/2オリーブ灰　粘土　ラミナあり　7溝埋土
8　5Y6/1灰　細砂混シルト　6溝埋土
9　2.5Y7/1灰白　細砂混シルト偽礫　6溝埋土
10　10Y5/1灰　シルト偽礫　6溝埋土
11　2.5Y6/1黄灰　細砂混シルト　盛土か
12　10Y6/1灰　細砂混シルト　2.5Y7/1灰白シルト偽礫を含む　6溝埋土
13　7.5Y4/1灰　極細砂混シルト　粘土〜シルト偽礫を含む　6溝埋土
14　10Y4/1灰　細砂〜粗砂　N5/0灰粘土偽礫を少量含む　6溝埋土
15　7.5Y5/1灰　極細砂〜細砂　ラミナあり　6溝埋土
16　10Y5/1灰　粘土〜シルト　白色粘土の薄層を挟む　極細砂のラミナあり　6溝埋土
17　5Y7/1灰白　粘土偽礫　1-3層起源か　6溝埋土
18　7.5Y6/1灰　シルト混極細砂〜粗砂　細礫〜中礫を少量含む　6溝埋土の細分
19　5Y6/1灰　シルト混細砂〜粗砂　粘土〜シルト偽礫を含む　6溝埋土の細分
20　10Y5/1灰　極細砂偽礫を微量に含む　6溝埋土の細分
21　7.5Y5/1灰　シルト混細砂〜粗砂　細礫〜中礫を微量に含む　6溝埋土の細分
22　5Y7/1灰白　シルト混粗砂〜極粗砂　作土層　1-1層
23　10Y5/1灰　粗砂〜極粗砂混シルト　1-3層
24　N7/灰白　粗砂〜極粗砂混シルト　細砂(1-4b層)を含む　1-3層の細分
25　10Y8/1灰白　細砂〜粗砂混シルト　1-3層
26　10Y4/1灰　粘土〜シルト　細砂(1-4b層)を含む　1-3層
27　10Y5/1灰　細砂混シルト　2-1層
28　10Y5/1灰　細砂混シルト　溝埋土
29　10Y5/1灰　細砂〜粗砂　2-1b層
30　7.5Y4/1灰　細砂混シルト　2-1層の細分
31　10Y6/1灰　細砂混シルト　2-1層の細分
32　7.5Y 5 /1灰　細砂〜粗砂　7.5Y8/1灰白粘土の薄層あり　2-2b層
33　10Y6/1灰　粘土　2-2b層
34　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　2-2b層

図 242　1－1・2－1区　72 トレンチ断面

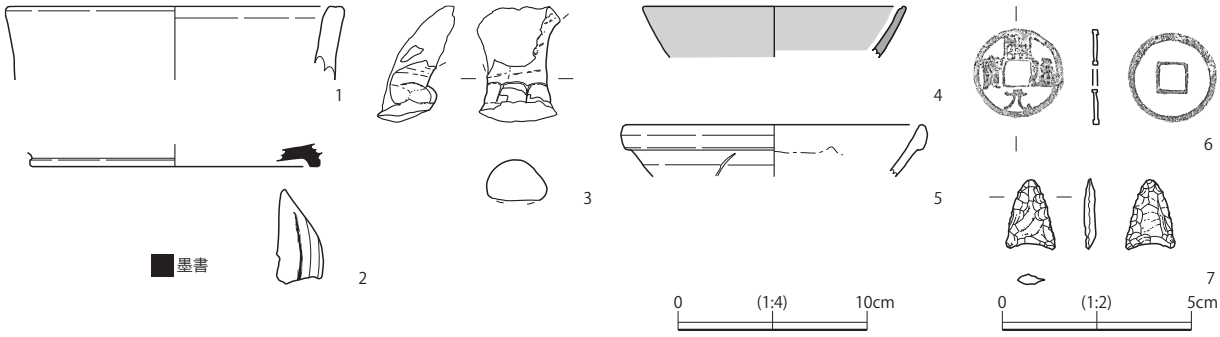


図 243　1－1・2－1区　1－3・2層出土遺物

3－1層の時期を示す遺物は出土しなかったため、時期は不明確である。ただし、4－2層掘削時に出土した遺物であるが、3－1層の時期を示す土器として、図 255 －1の土師器椀がある。また、坪境の 38 畦畔内から図 247 －9の土師器皿が出土しており、2点の土器は、平安時代後期に比定されると考えられる。3－1層の直上に堆積する2－1・2－2ｂ層は鎌倉時代前期以降に堆積した地層と考えられることから、第3－1面で検出された条里型地割の水田は、平安時代後期に位置付けられる。

なお、第3－1面に対比できる遺構面は、1－1・1－3・1－5・2－2・4区において確認できたが、4区4－1層を除いて、2－1区と同様に時期の根拠となる遺物は出土しなかった。

第3－2ｂ面

3－2ｂ層は、調査地南東の一部と3－1層の畦畔の芯で、堆積が確認された。第3－2ｂ面では、3－1層に帰属する擬似畦畔が検出された。3－1層を掘削した段階に、調査地南東では3－4ｂ層が露出しており、同範囲でも3－1層に帰属する擬似畦畔が検出された。3－2ｂ層から遺物は出土しておらず、時期は不明である。3－1層は平安時代後期に形成されたと考えられることから、平安時代中期以前の時期を想定している。

第3－3面（図 246）

調査地の大半は、3－1層を除去した段階で3－3層上面が露出しており、面的に3－2ｂ層に覆われていたのは調査地南東の一部のみである。3－1層に帰属する擬似畦畔が調査地全体で検出された。3－2ｂ層が残存した調査地南東では、第3－1面と異なる位置で 54・8048 畦畔が検出された。南北の間隔が狭く、第3－1面では区画が広げられている。

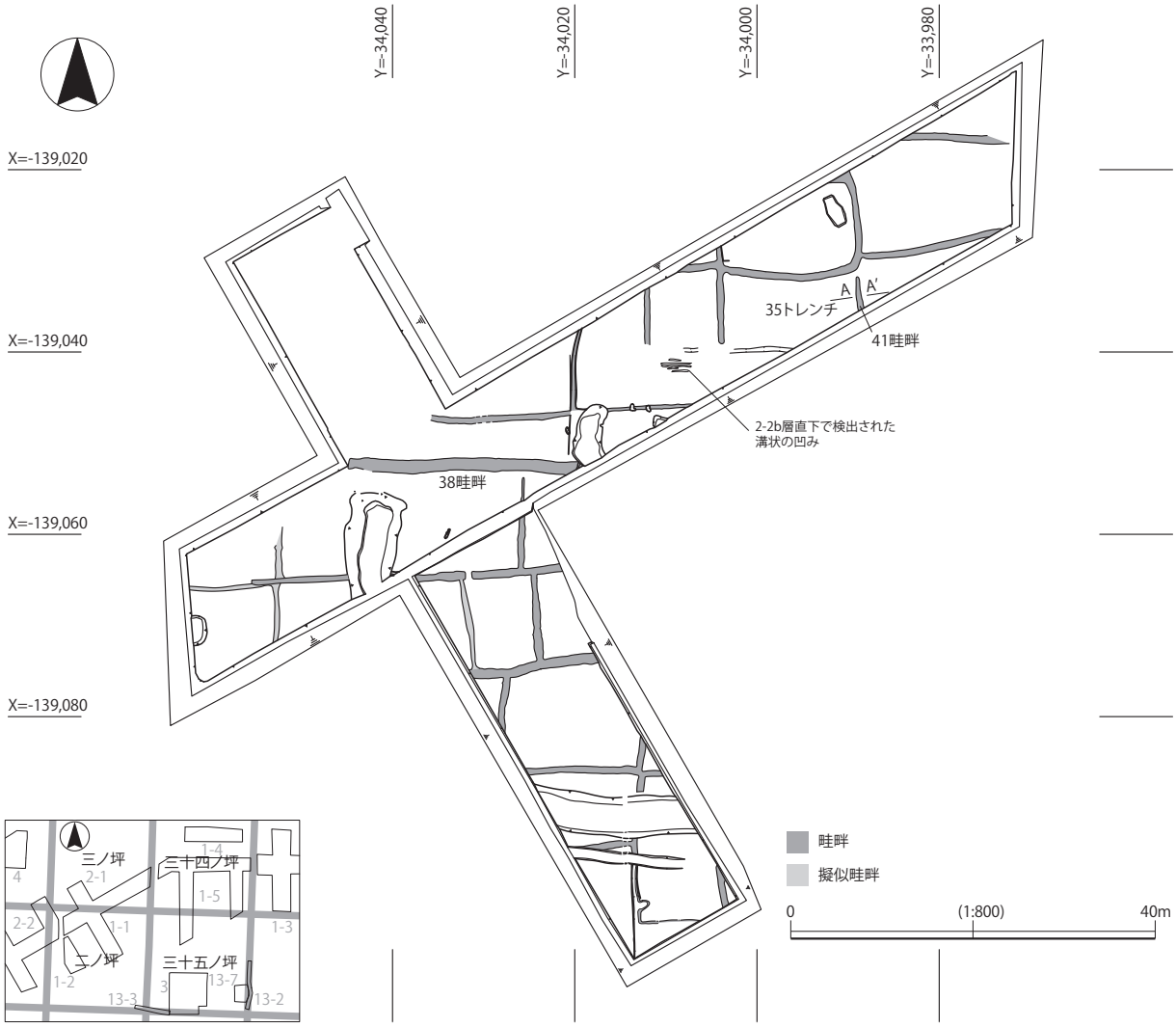


図 244　1－1・2－1区　第3－1面平面

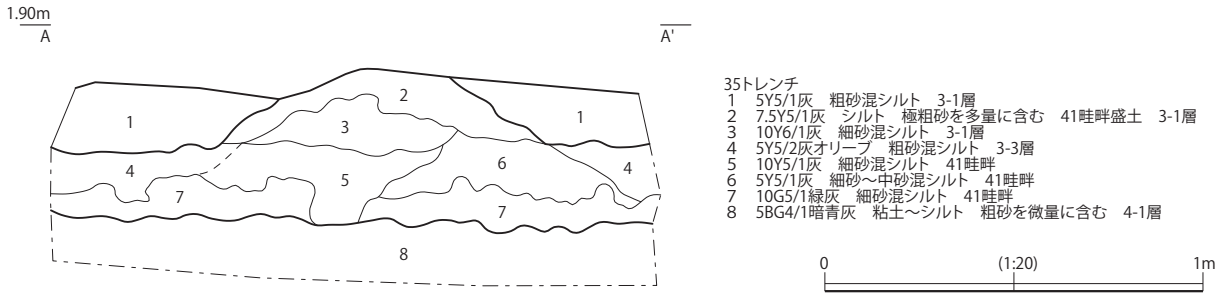


図 245　1－1・2－1区　35 トレンチ断面

3層出土遺物（図 247、図版 118）

3層から出土した遺物の内、図 247 －1～10 を図示した。なお、8は3－1層、9は3－1・3－3層形成時の 38 畦畔盛土内、他の遺物は3－3層から出土した。1・2はミニチュア土器である。4層からも1点同様のものが出土しており、古墳時代に水田で祭祀使用されたものか。3は東海系宇田型甕の破片で、隣接する調査地の1－5区で同一個体の可能性があるものが出土している。外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整される。4は韓式系土器の体部片である。外面は平行タタキ調整の後に沈線が施される。5は須恵器蓋である。6は須恵器坏身。7は須恵器高坏脚部である。方形の透孔があり、

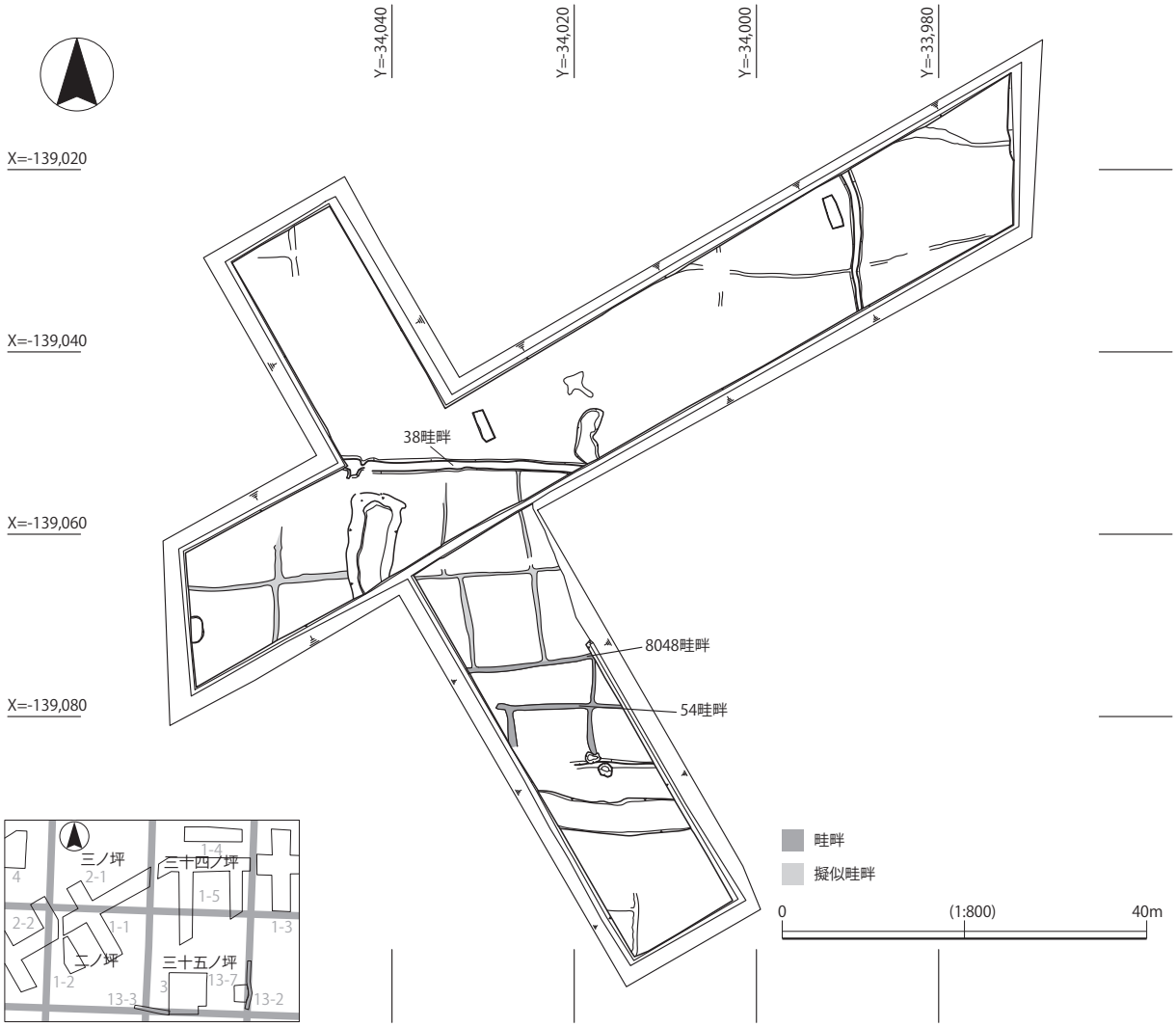


図 246　1－1・2－1区　第3－3面平面

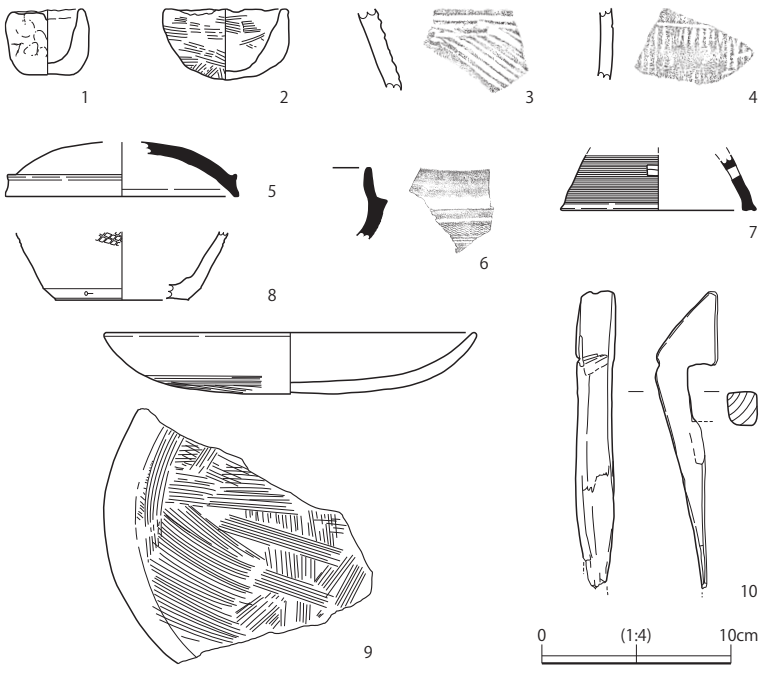


図 247　1－1・2－1区　3－1・3－3層出土遺物

外面はカキメが施される。8は韓式系土器平底鉢である。9は土師器皿である。38 畦畔の盛土で3－1・3－3層として掘り分けしたものが接合した。口縁端部は丸くおさめられる。低平な器高で、器壁は分厚い。外面は粗いハケ調整、内面は磨滅。平安時代後期のものと考えられる。10は木製品の把手である。

第4－1面（図 248、図版 17）

3－4ｂ層を除去して検出した遺構面で、4－1層としたシルト質粘土の上面に当たる。3－4ｂ層が遺存したのは調査地南東のみで、小区画水田が検出されている。その他の

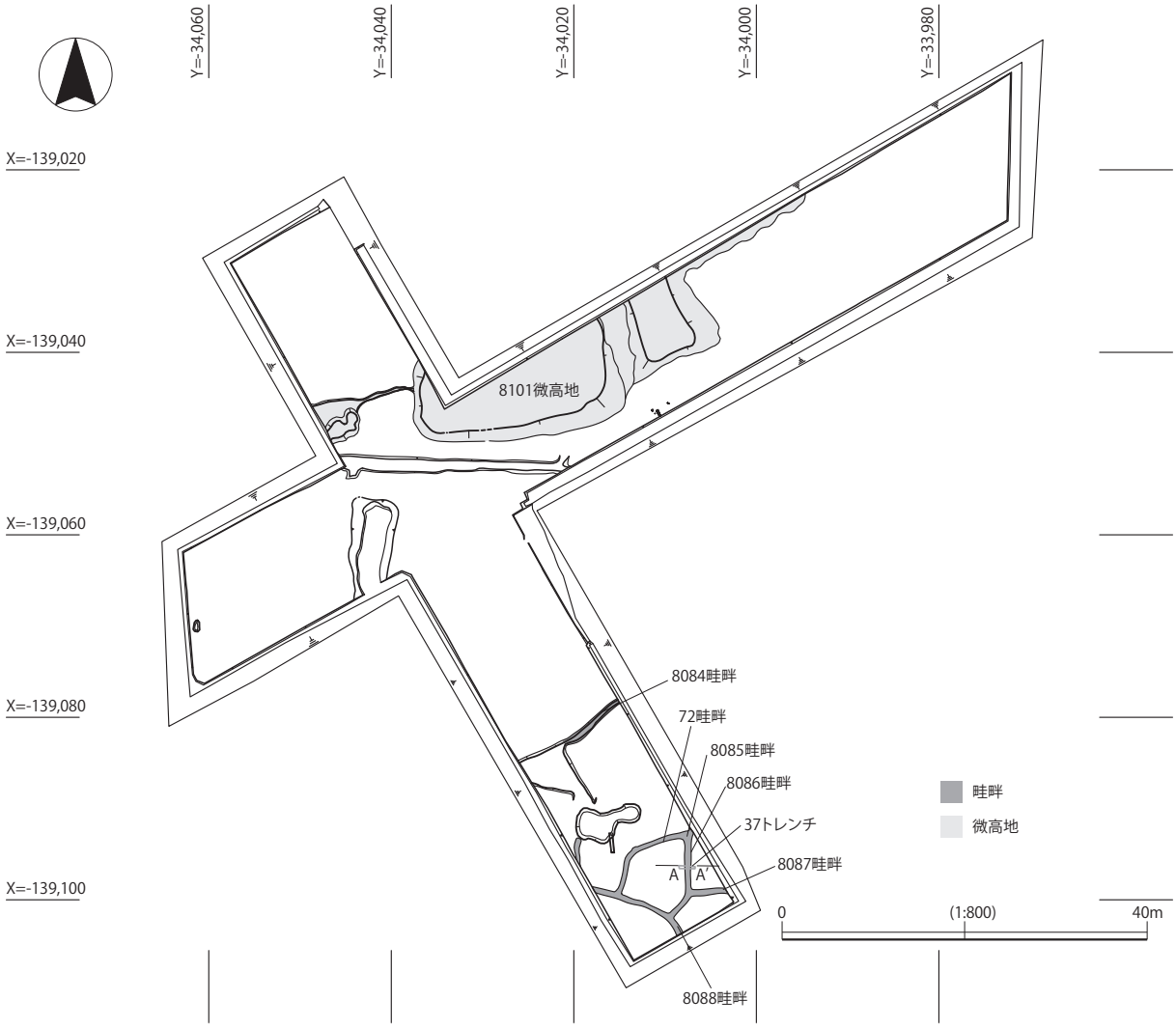


図 248　1－1・2－1区　第4－1面平面

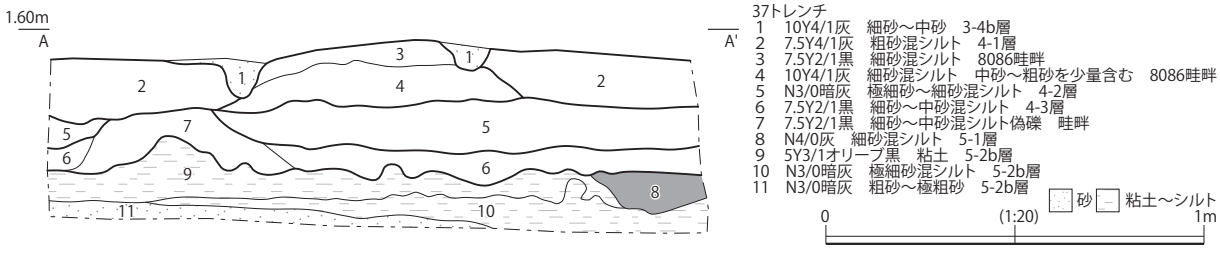


図 249　1－1・2－1区　37 トレンチ断面

範囲は、3－3層を除去した段階で4－1層上面が露出した状態となっており、3－3層下面に帰属する擬似畦畔が検出された。調査地の中央では、8101 微高地がこの段階から顕在化する。8101 微高地周辺では、4－1層が堆積しており、周辺は水田として土地利用されたと考えられる。

水田

8088 畦畔が北東方向に低くなる地形に、8084・8085 畦畔が北西方向に低くなる地形に合わせて配置されており、これに直交する小畦畔を設けた小区画水田が検出された。調査地南東側は、4－1～4－3層形成時に泥質の作土層の堆積が顕著であったが、畦畔内には水成層の砂層の堆積が認められた。この砂層によって、地層を4－1～4－3層に分けて掘削を行い、第4－2・4－3面の検出を行った。

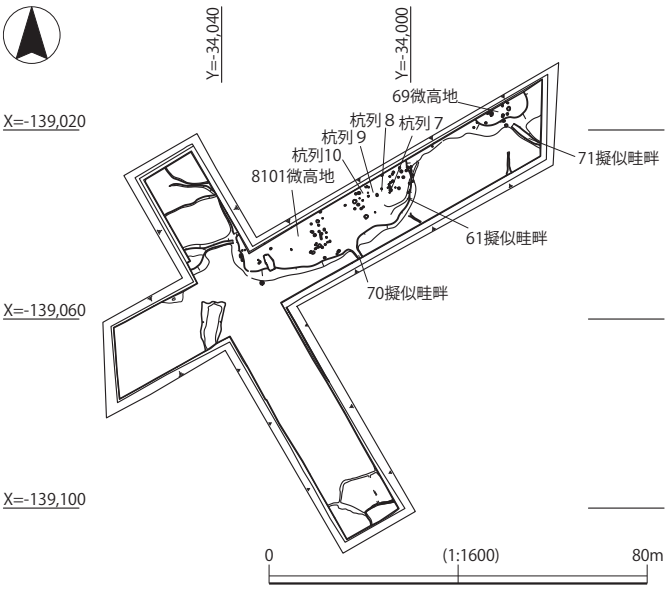


図 250　1－1・2－1区　第4－2面平面

4－1層出土遺物（図 254、図版 88）

図 254 － 1 はミニチュア土器。2 は土師質の把手である。3 は須恵器を模した土師器高坏脚部である。4 は須恵器壺である。5 は須恵器把手付埦である。4 － 2 層出土のものと接合した。把手部分は不明。外面下端は静止ヘラケズリ調整される。6 は土師器壺底部である。奈良時代。3 層に帰属すると考えられ、1 － 5 区微高地上の 4 － 1 層とした古土壌からも出土。7 は須恵器甕である。4 － 2 層出土のものと接合。8 は須恵器坏蓋である。9 ～ 15 は須恵器坏身である。16・17 は須恵器高坏形器台の坏部である。細片を図化。16 は 4 － 2 層、17 は 3 － 3 層から出土したものと接合した。須恵器は、TK73 ～ 43 型式に位置付けられるものである。また、TK209 ～ 217 型式の須恵器細片が 4 － 1 層には含まれており、4 － 1 層の下限は飛鳥時代前期までと考えている。

第4－2面・第4－3面（図 250・251・253、図版 17）

古墳時代中期から後期の遺構面で、調査地北東側では 4 － 2・4 － 3 層として細分が可能であったが、8101 微高地以東では地層の境界部が不明瞭であった。5 － 2 b 層上面が反映された地形で、調査地の東側では 8101 微高地と連続すると 69 微高地が顕在化する。なお、微高地上では、4 － 1 層を除去した時点で、6 層上面が検出された。ピットや土坑などがこの段階で検出されているが、遺構面の帰属を特定できないものも多く含まれており、第 5 － 2 b 面でまとめて報告を行うこととする。第 4 － 2 面では、69・8101 微高地とその周辺に広がる水田が検出された。調査地南東では、第 4 － 1 面の畦畔と異なる位置で畦畔が検出された。また、微高地上では、微高地を囲むように 4 － 1 層に帰属する 61 擬似畦畔が検出された。第 4 － 1 面では微高地上に凹凸が認められることから水田として土地利用されていたとは想定しにくく、土手として盛土されていたものが、擬似状に検出されたと考えている。また、微高地の縁辺部では、微高地に接続する 70 擬似畦畔が検出された。70 擬似畦畔では、畦畔を造成する際に木片が集められている状況が検出された。

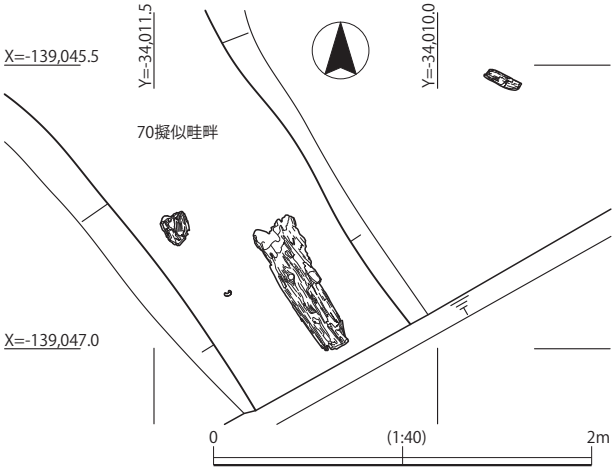


図 251　1－1・2－1区　70 擬似畦畔平面

第 4 － 3 面は、第 4 － 2 面と基本的な景観は異ならないが、調査地南東の水田畦畔は、第 4 － 2 面と異なる位置で擬似畦畔が検出された。

杭列 7 ～ 10（図 250・252、図版 18）

8101 微高地上で、東西に直線的に並ぶものが 4 列確認された。209 土坑形成以降、4 － 1 層形成段階に打設されたものと考えられる。

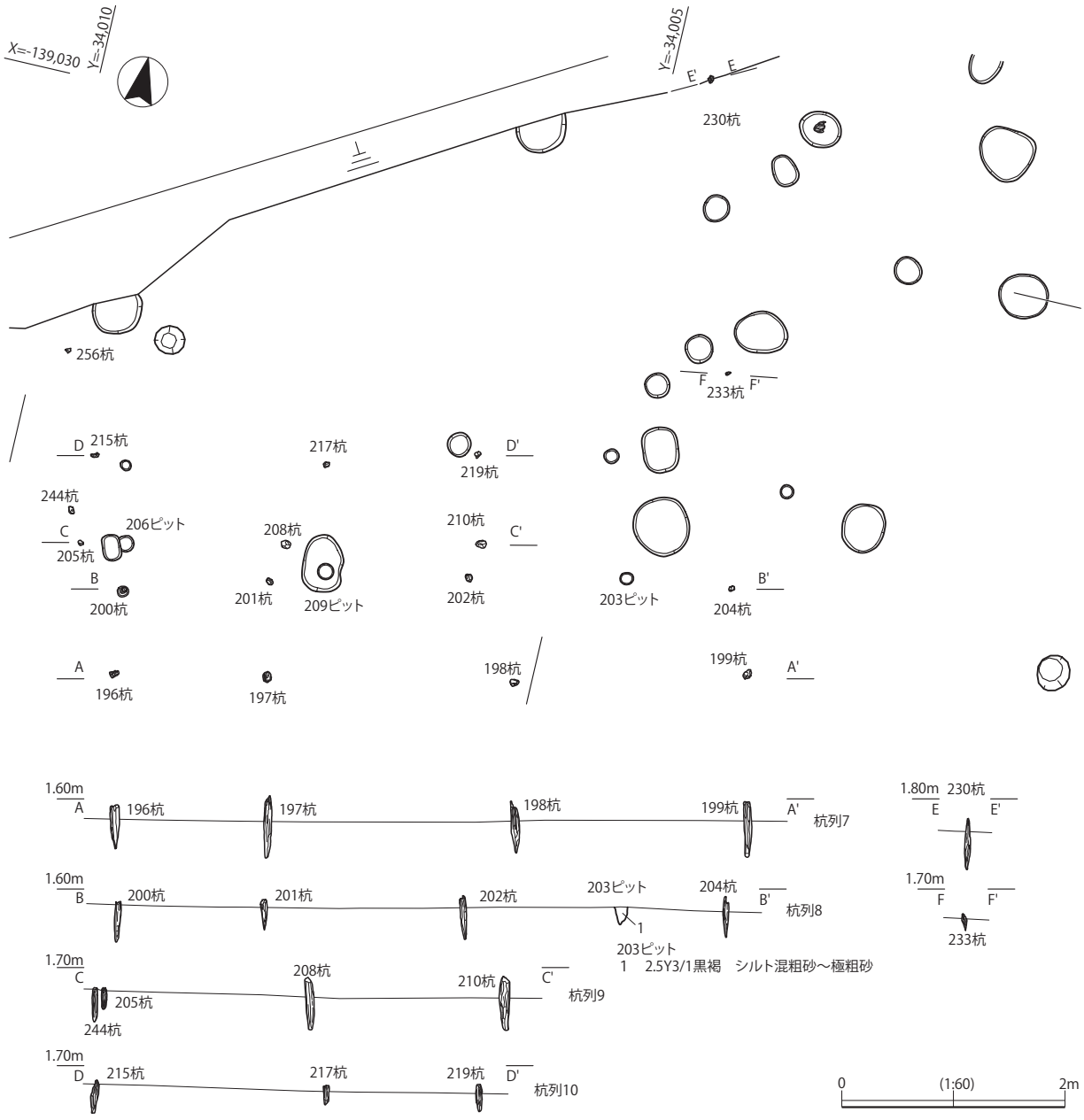


図 252　1－1・2－1区　杭列 7 ～ 10 平・断面

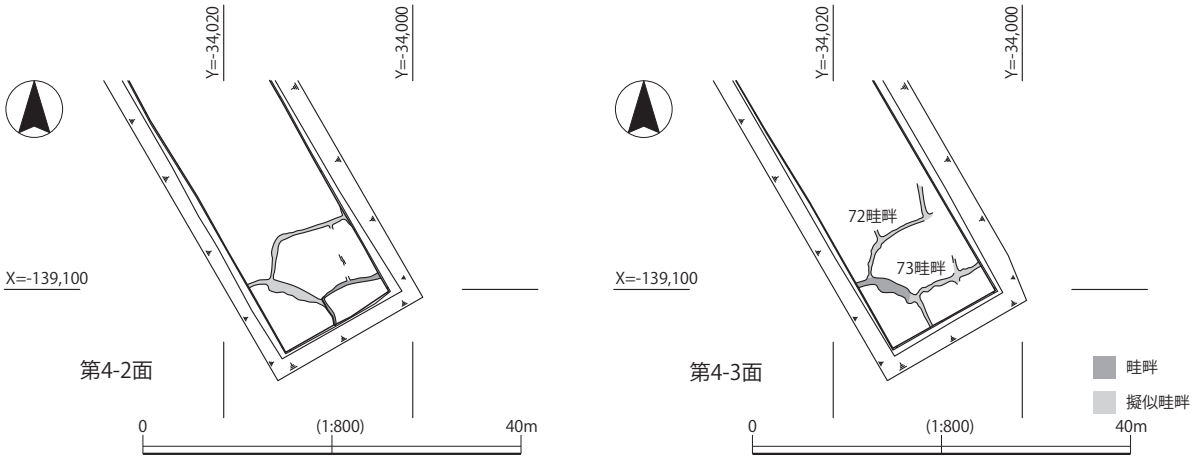


図 253　1－1・2－1区　第 4－2・3 面平面

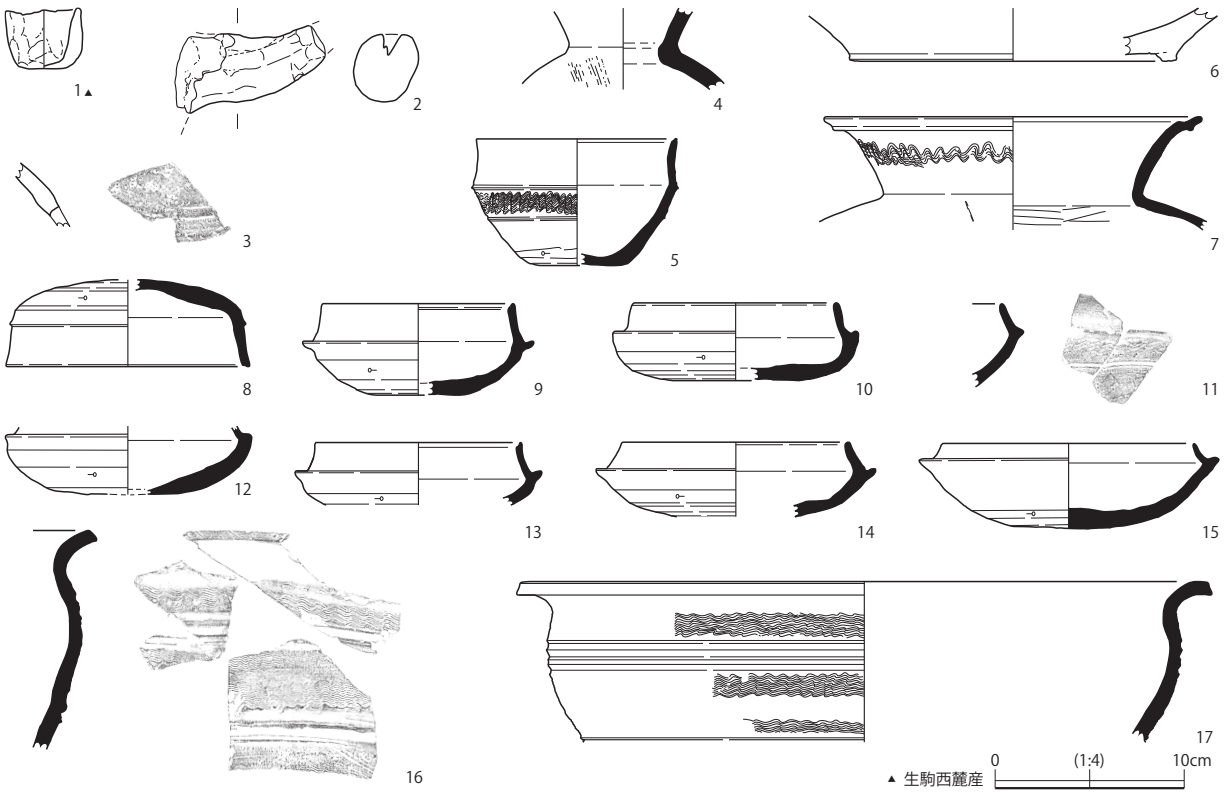


図 254　1－1・2－1区　4－1層出土遺物

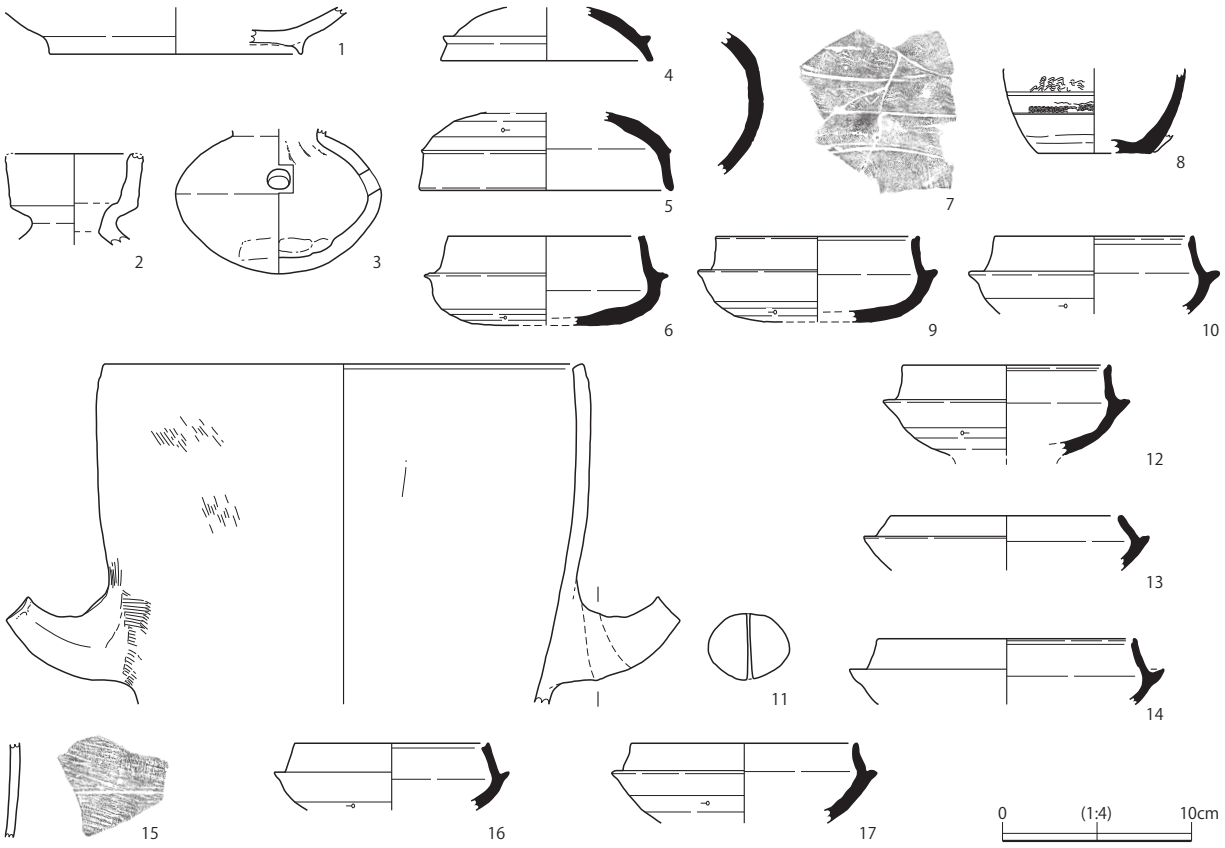


図 255　1－1・2－1区　4－2・4－3層出土遺物

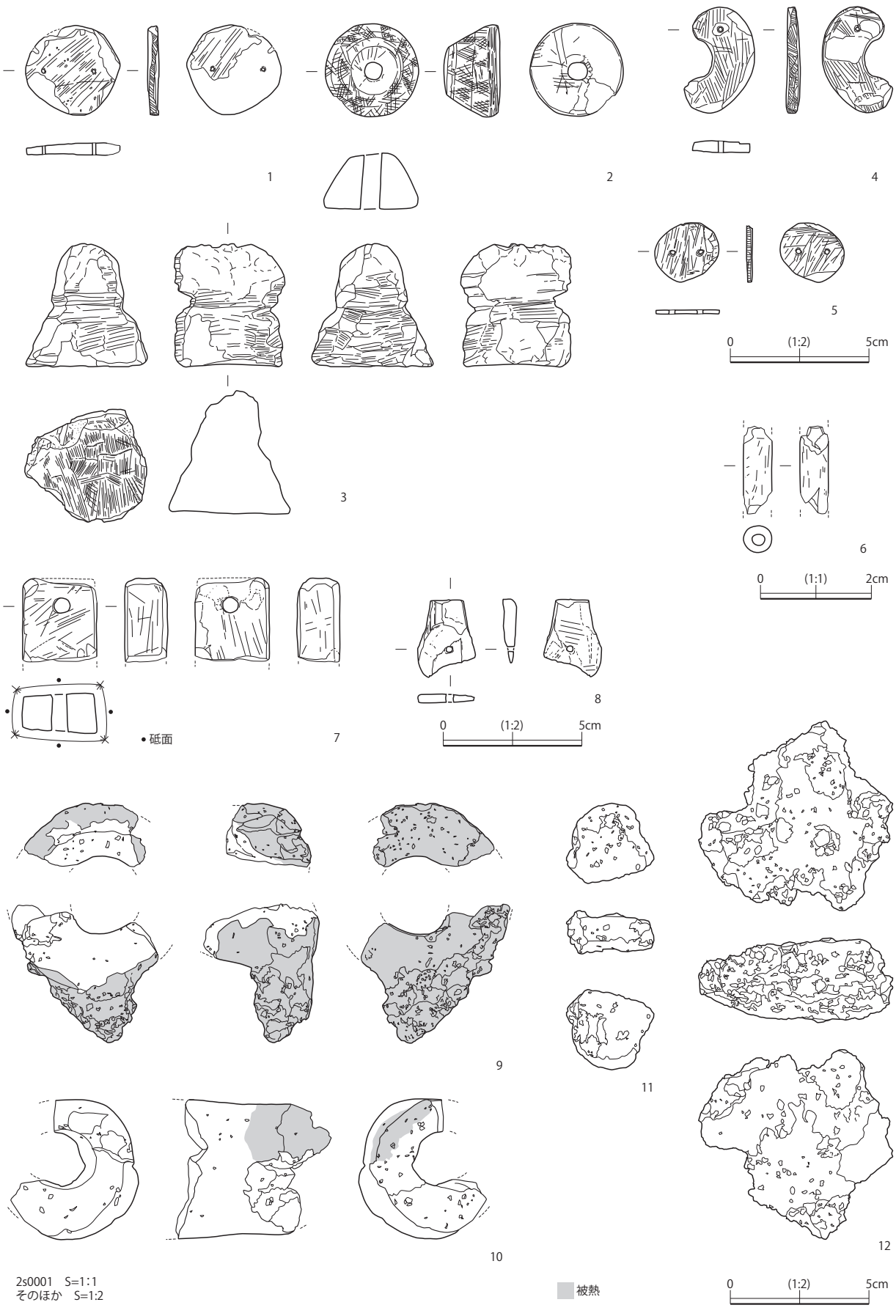


図 256　1－1・2－1区　4層出土遺物

4－2・4－3層出土遺物（図255・256、図版88）

図255－1～14が4－2層、15～17が4－3層から出土した。1は土師器鉢ないし椀の底部である。炭素吸着が不十分な黒色土器か。微高地縁辺部に堆積する4－2層掘削時に出土しており、3層に帰属すると考えられる。2は土師器壺である。3は須恵器を模した土師器甕である。胎土は白色を呈す。4・10は71擬似畦畔内の4－2b層（芯部分）から出土した。4は須恵器坏蓋である。5は須恵器坏蓋である。6・9・10は須恵器坏身である。7は須恵器壺である。8は須恵器把手付埦である。外面下端は低速で行われたケズリが施される。11は土師質の甑で、71擬似畦畔から出土した。12は須恵器有蓋高坏である。13・14は須恵器坏身である。4－2層から出土した須恵器はTK73～TK10型式新段階に比定できる資料で、4－2層の形成時期は古墳時代後期中葉と考えている。

15は韓式系土器鍋ないし甕の体部片である。外面はハケ調整後、沈線が施される。16・17は須恵器坏身である。4－3層から出土した須恵器の内、特に時期が新しいものを抽出しており、17はMT15～TK10型式古段階に比定できるものである。4－2層と出土遺物から明確な時期差は抽出できないが、古墳時代後期前葉以前に形成されたと考えられる。図256－1～12に図示した資料は、4層から出土した石製品・鍛冶関連遺物である。1～4・6・11は4－1層、5・12は4－2層、7～10は4－2層下面で検出した71擬似畦畔から出土した資料である。1は滑石製有孔円板である。2

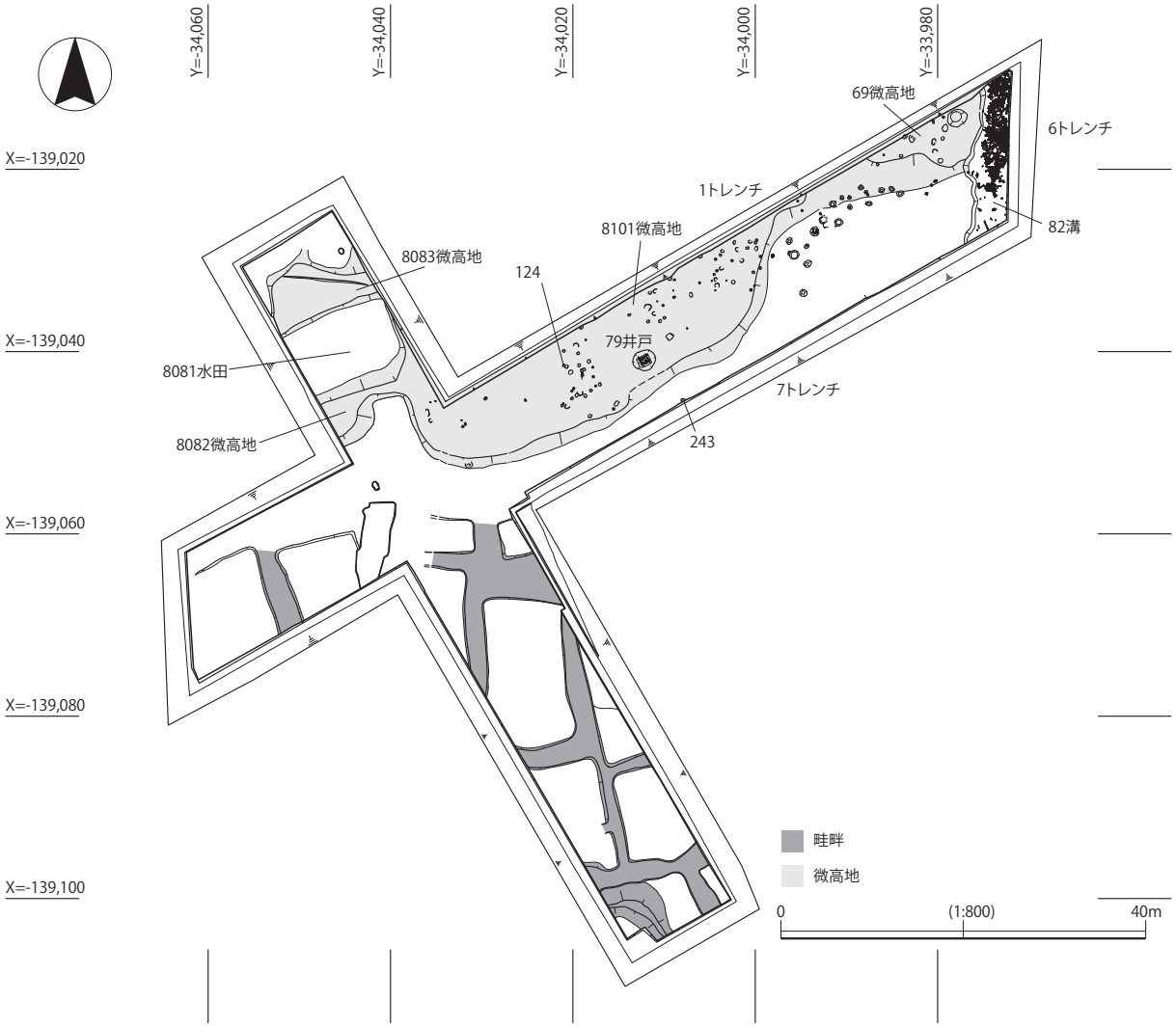


図257　1－1・2－1区　第5－2b面平面

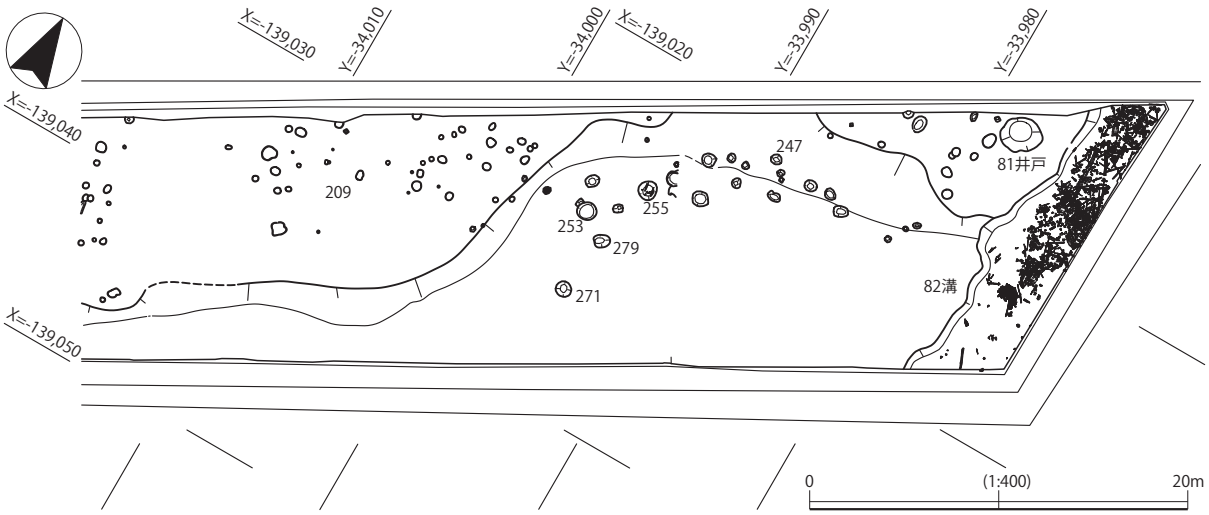


図 258　1－1・2－1区　第5－2ｂ面平面

は滑石製紡錘車である。断面形は台形、鋸歯文が線刻で施される。上端は横方向の粗い研磨で、筋状の研磨痕が残ったままにされる。３は滑石製紡錘車の未成品である。外面を粗く削り、側面中央部に分割用の溝が加工される。４は滑石製勾玉である。５は滑石製有孔円板である。６は滑石製管玉である。７は砥石である。上部中央に円形の貫通孔が開けられる。８は滑石製未成品か、剣形石製品の製作途上の失敗品か。上部に原礫面が残り、円形の貫通孔が開けられる。円形の貫通孔は、分割時のものないし有孔円板の孔に想定される。９・10 は鞴羽口である。９は中型の羽口。精良な胎土。先端部下にガラス化した鍛冶炉粘土が付着。先端の溶解は進んでいる。10 は小型の羽口で、やや粗な胎土。粘土２重巻き付け。先端は故意に破損の可能性。ソケット状か。鋳造関連の可能性あり。11 は鍛冶滓で、上面に白色ガラス質滓が付着し羽口位置を示す。12 はガラス質滓。

第５－１面

５－１層は、遺存状況が極めて不良で、４層を除去した段階で、調査地の大半は５－２ｂ層が露出する。南西部の低地を中心に水田が検出された。詳細は第５－２ｂ面で報告する。

第５－２ｂ面（図 257・258、図版 18）

５－１層を除去して検出した遺構面で、５－２ｂ層とした砂層上面に当たる。69・8101 微高地が調査地北東から中央にかけて検出されており、微高地上で井戸・土坑・ピットが検出された。この微高地は弥生時代中期中葉から後葉の６層形成段階に、周辺の水田開発に伴って造成されたものである。

１－５区で検出された古墳時代集落に近い調査地東側では、古墳時代中期初頭から後葉にかけて機能した 82 溝が検出された。１－５区で検出された同段階の集落と 69 微高地以西の集落の境界部に掘削された溝である。

79 井戸（図 257・259 ～ 263、図版 19・80・115）

8101 微高地で検出された。平面形は東西に長い不整形な形状を呈し、規模は長軸 2.5m、短軸 2.2m、深さ 2.24m である。断面形は、段状になる部分があり、２－２区 917 井戸や１－５区 4837 井戸のように井戸構築時の階段状遺構（足場）として用いられたと考えられる。井戸枠内の埋土は、底面直上が砂層に湿性堆積物の泥が混じった地層、下層が湿性堆積物のシルト質粘土、上層が部分的に腐植の入るブロック土である。井戸枠の裏込め土には木片が入っており、井戸枠を組み立てる際に周辺で枠材の調整が行われたと考えられる。底面に近いところから口縁部を欠いた土師器甕と土師器甕底部が出土した。

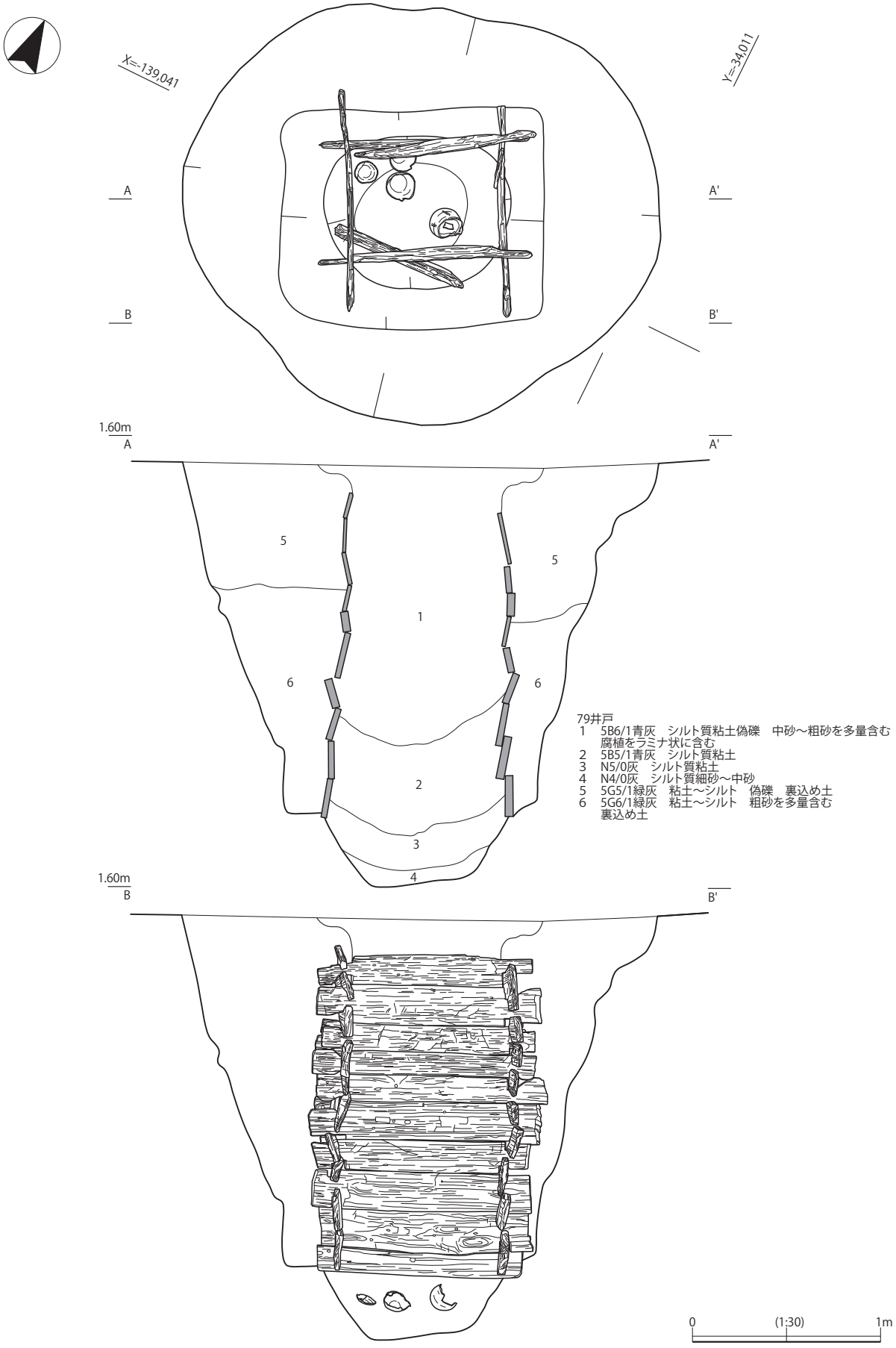


図 259　1－1・2－1区　79 井戸平・断面

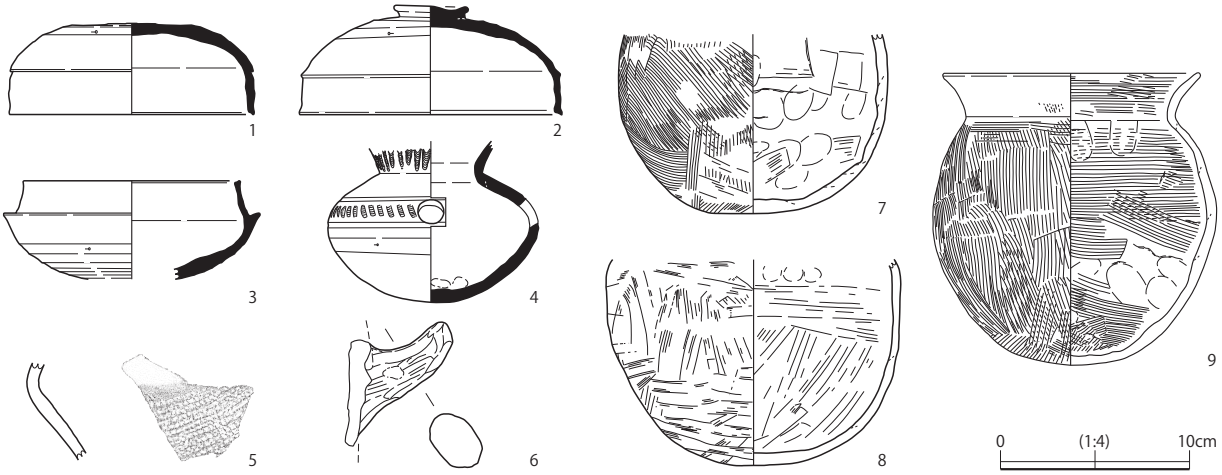


図 260　1－1・2－1区　79 井戸出土遺物（1）

79 井戸から出土した遺物の内、図 260 －1～8を図示した。なお、3・4は上層、1・2・5～9は下層からそれぞれ出土した。1・2は須恵器坏蓋で、2は扁平なつまみが付く。3は須恵器坏身である。4は須恵器瑞である。これらの須恵器は、MT15 型式に位置付けられると考えられ、1は形状的に TK47 型式まで遡る可能性がある。5は韓式系土器鍋の体部片である。外面に格子目タタキが施される。6は把手である。断面形は両端がやや尖がった楕円形を呈す。7～9は土師器甕である。13 －4区 7398 井戸（図 647）と同サイズの甕であることから釣瓶として用いられたものと考えられ、7・8は破損して落ち込んだものであろう。7の外面は斜め方向のハケ調整、内面はナデ後、板ナデ調整で器面が整えられる。8の外面はハケ調整、内面は板ナデ調整される。9は完形品で、外面は縦方向のハケ調整で肩部に横方向のハケ調整される。内面はハケ調整で部分的にナデの痕跡が残る。7・8と同様に、釣瓶として用いられたものか。

79 井戸枠は、全点図示した。図 261 －1～10 が北側、図 261 －11～14、図 262 －1～5が東側、図 262 －6～14、図 263 －1が南側、図 263 －2～11 が西側でそれぞれ用いられたもので、上段から順番に並べている。

井戸枠は、両端上下に方形ないし台形の切り欠きを入れ上下に組み合わせている。枠板の表面は、ハツリを加えて表面が丁寧に整えられる。裏面は割面のままのものが多いが、少数ながらハツリを入れるものもあった。両端に加工を加えて長さを調節しており、井戸枠転用前は建築部材などとして利用されたものか。図 263 －9は、片側の切り欠きが上下に2箇所ずつ加工されており、井戸枠を組み上げる際に大きさを調整したものと考えられる。枠板の幅は、10cm 幅、20cm 幅、30cm 幅の3種類に分かれており、切り欠きのサイズを調節して、水平に積み上げられたものと考えられる。

出土した遺物により、79 井戸の時期は古墳時代中期後葉から後期前葉に位置付けられる。

81 井戸（図 258・264・265、図版 19・80・118）

69 微高地上で検出された。平面形は不整形な形状を呈する。規模は、長軸 2.2m、短軸 1.8m、深さ 1.1mである。井戸枠を設置した際の掘方は、井戸底より深く掘り込まれており、井戸底面の整地と、井戸枠の組み立てが同時作業で行われたと考えられる。枠板は枠の大きさに整えた板材2対（図 265 －2・3）と、板材1枚（図 265 －1）と半割の材3本を組み合わせて構築される。1の板材と半割の材を用いた上部には、棒状の材を横に入れて、内側に倒れ込まないようにしてあり、1の板材の内側には杭が打設されていた。井戸枠は、1・2の枠板を設置した後、板材・半割の材を立てて構築されたと考えられ

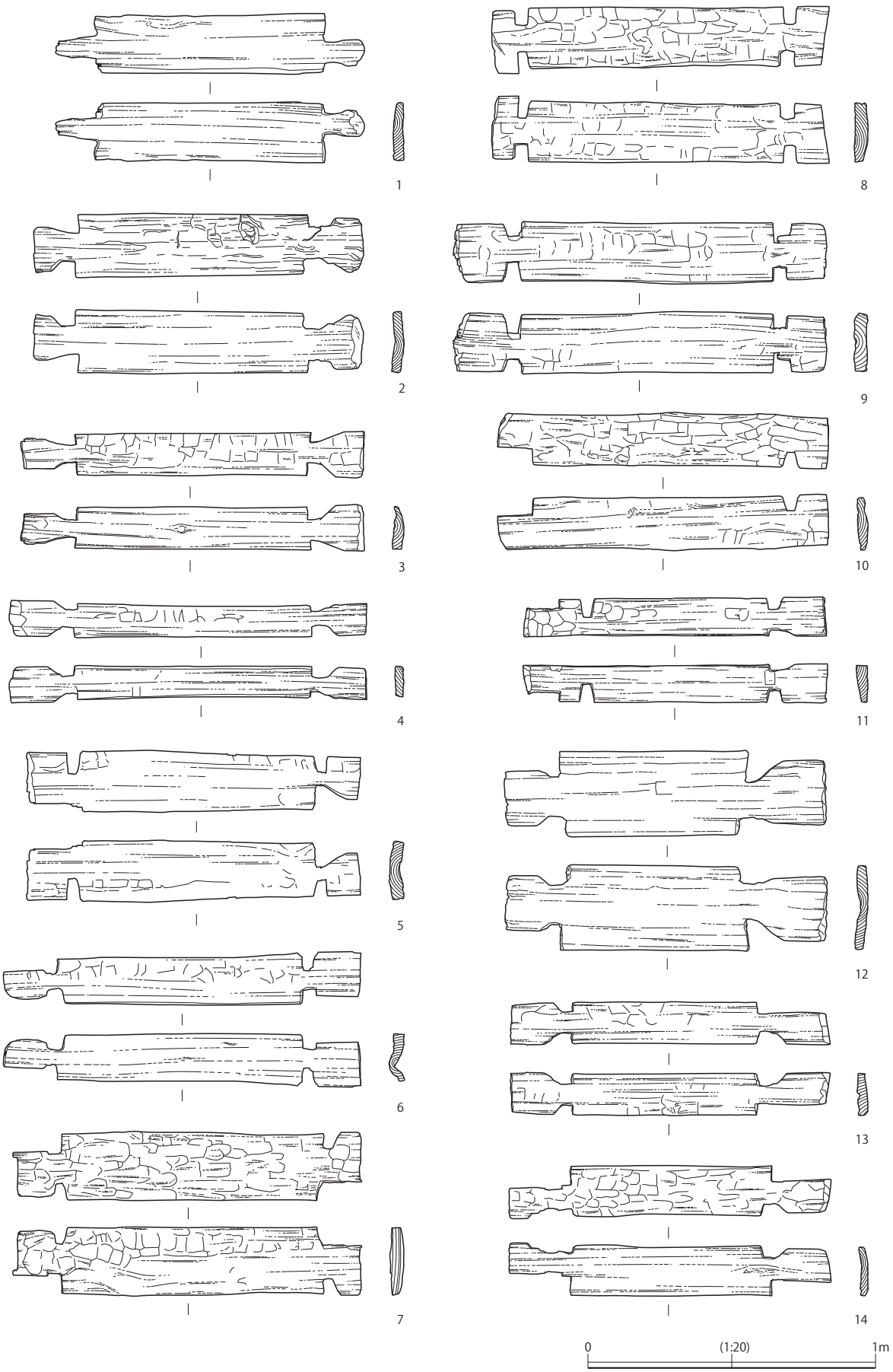


図 261　1－1・2－1区　79 井戸出土遺物（2）

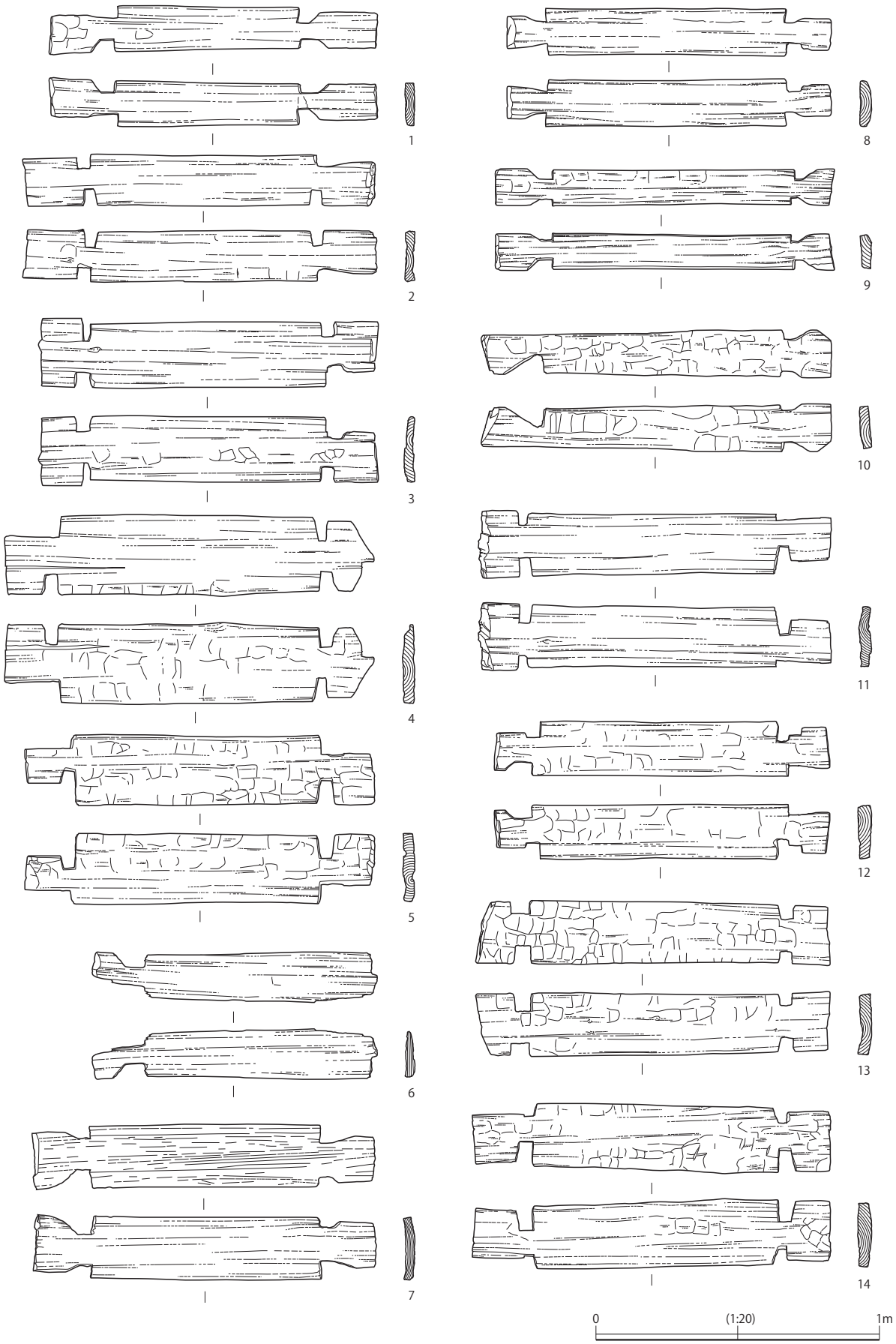


図 262　1－1・2－1区　79 井戸出土遺物（3）

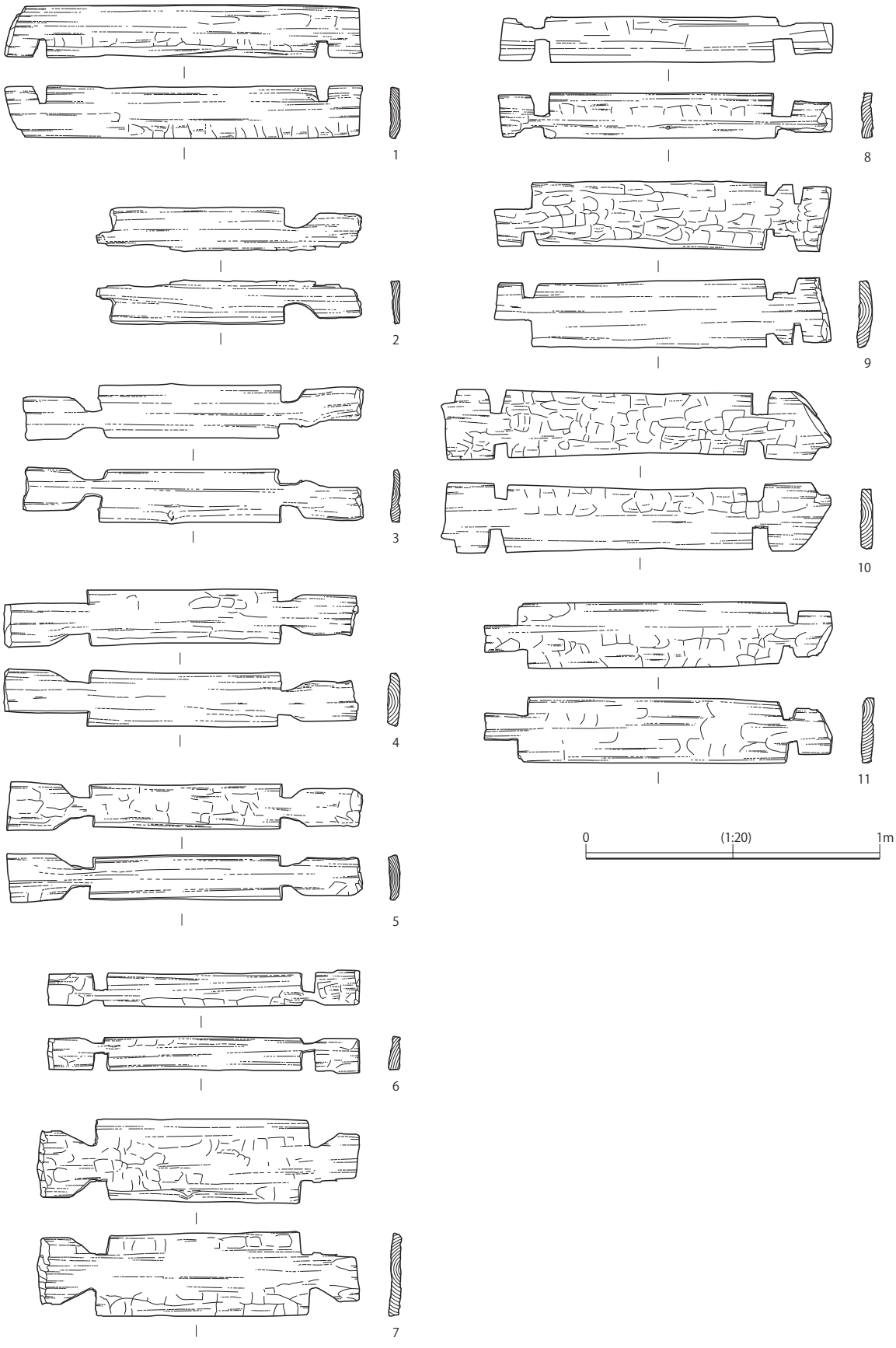


図 263　1－1・2－1区　79 井戸出土遺物（4）

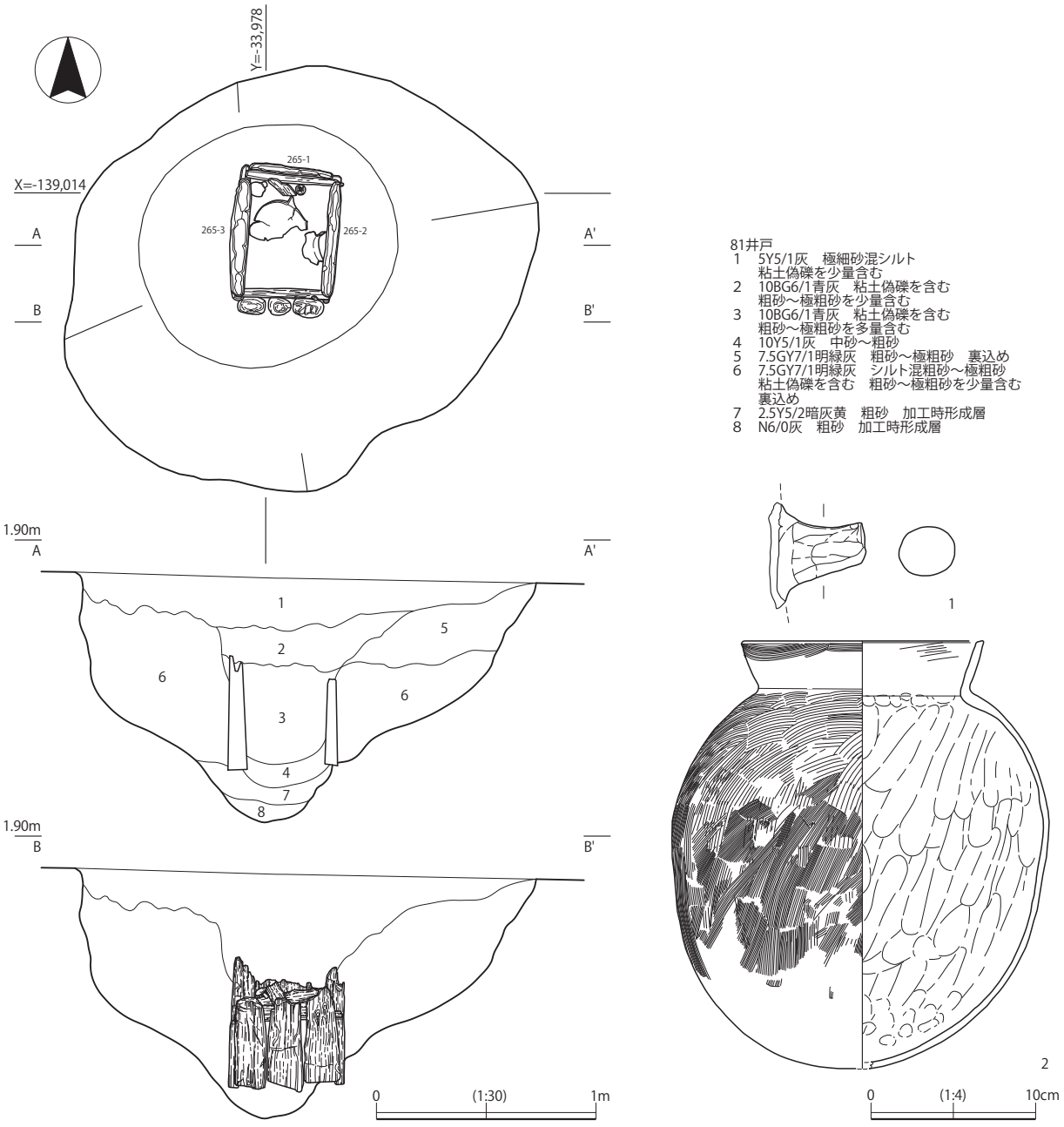


図 264　1－1・2－1区　81 井戸平・断面　出土遺物

る。井戸枠内の埋土は、下層が基盤層由来の偽礫状を呈する砂層、中層下位が湿性堆積物のシルト質粘土、中層上位から上層はシルト質粘土を主体としたブロック土である。井戸底からは、一部欠損する土師器甕が出土した。図 264 － 1 は土師器把手である。断面形は円形を呈する。２は土師器甕である。口縁端部は内傾する端面をもつ。外面は上位が粗いハケ、下位が細いハケ調整で、頸部は指押さえに近いナデが単位幅が狭いピッチで施される。枠板は図 265 － 1 ～ 3 の板材を図示した。１は板材で、表面はハツリ調整、裏面は割面である。上部は腐食により不明。２の表面は下端にハツリが認められる以外は腐食により不明。炭化している部分が認められた。裏面は割面である。井戸枠転用時の方形の切り欠きが上部両端にある。３の表面はハツリ調整で表面が整えられる。裏面はハツリ調整で、割面のままの部分が残る。上部両端に井戸枠転用時の方形の切り欠きが加工される。１～３は転用材と考えており、厚みや湾曲具合から船材を転用した可能性が想定される。

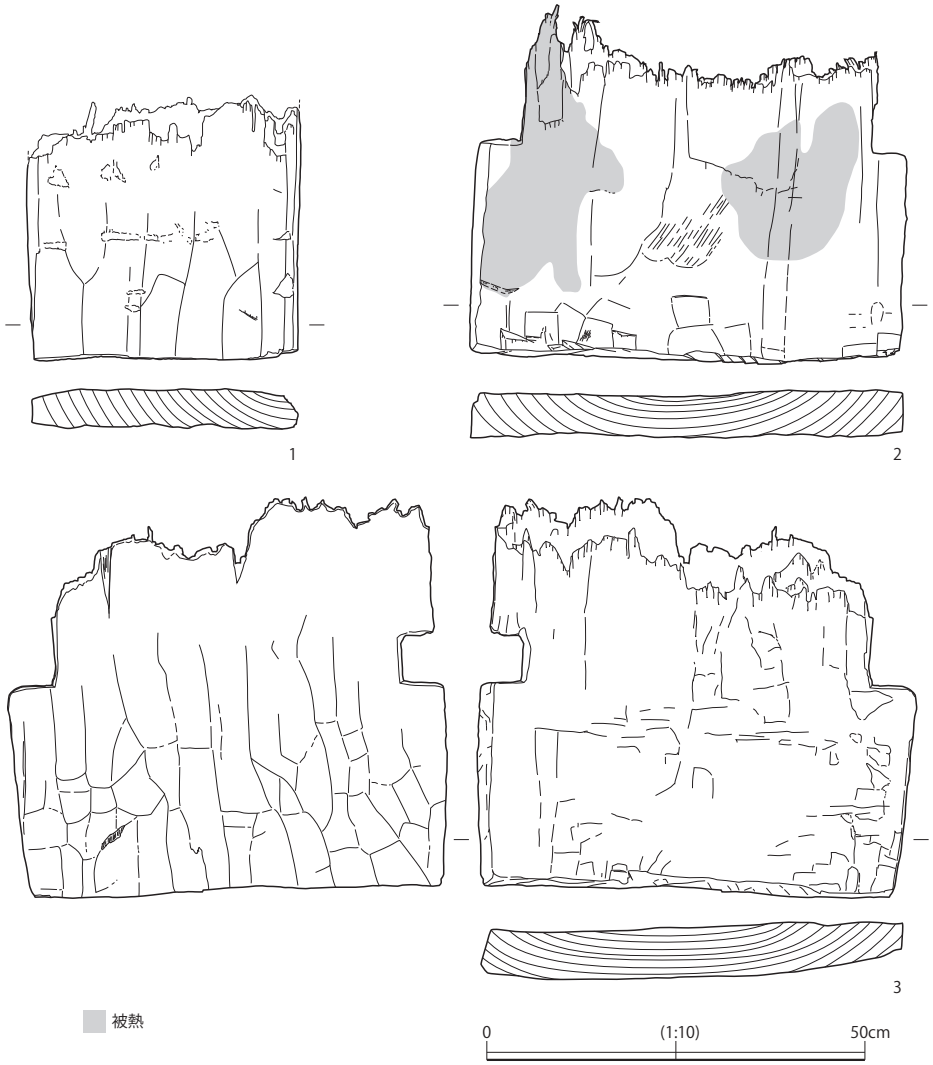
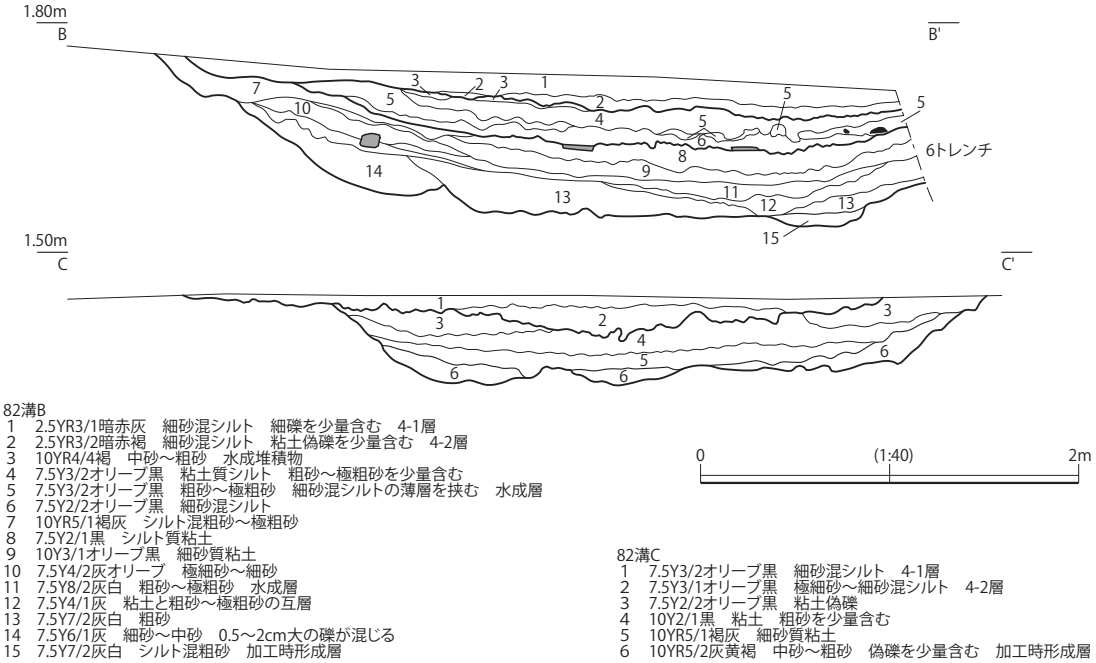


図 265　1－1・2－1区　81 井戸出土遺物

82 溝（図 257・258・266 ～ 287、図版 18・19・70・81 ～ 85・87・109 ～ 114）

調査地北東で検出された。1－5区第5－2ｂ面で検出された集落を西側で区画する溝である。規模は、幅 3.0m 以上、深さ 0.6m である。北側に向かって低くなっており、比高は 0.2 ～ 0.3 mである。

埋土は底面直上が加工時形成層の粗砂～極粗砂、下層が水成層の砂層、中層が湿性堆積物のシルト～細砂質粘土と周辺で形成された土壌に由来する細砂混シルトである。上層は水成層の砂層と湿性堆積物の粘土質シルトが交互に堆積し、溝埋土上面にできた凹地に 4－1・4－2層とした作土が入る。下層の水成層の砂層は、82 溝北側を中心に堆積しており、溝が浅くなる南側に堆積は認められなかった。土器や木製品で完形あるいは完形に近い個体が出土したのは中層の細砂混シルトである。その直下のシルト質粘土からも少量ながら出土した。中層から出土した遺物については、一部をさらに細分して遺物の取り上げを行ったが、82 溝内で南北に地層の対比を行うことができなかった。上層から出土した土器は破片が多数、下層から出土した土器は破片が少数という傾向があり、下層には完形の個体は含まれなかった。また、遺物の分布は北側に集中し、南側に向かって希薄になる。これは、溝が北側に向かって深くなるために、土器や木製品が帰属する地層が北側に良好に堆積することと関係していると考えられる。なお、南側の浅くなる部分は古墳時代後期以降の削平を考慮しても、溝肩部の加工が不明瞭なことから元々浅かったものと考えられる。69 微高地を形成する 6－4ｂ層を確実に掘削した溝の深度と



82溝B
1　2.5YR3/1暗赤灰　細砂混シルト　細礫を少量含む　4-1層
2　2.5YR3/2暗赤褐　細砂混シルト　粘土偽礫を少量含む　4-2層
3　10YR4/4褐　中砂～粗砂　水成堆積物
4　7.5Y3/2オリーブ黒　粘土質シルト　粗砂～極粗砂を少量含む
5　7.5Y3/2オリーブ黒　粗砂～極粗砂　細砂混シルトの薄層を挟む　水成層
6　7.5Y2/2オリーブ黒　細砂混シルト
7　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂
8　7.5Y2/1黒　シルト質粘土
9　10Y3/1オリーブ黒　細砂質粘土
10　7.5Y4/2灰オリーブ　極細砂～細砂
11　7.5Y8/2灰白　粗砂～極粗砂　水成層
12　7.5Y4/1灰　粘土と粗砂～極粗砂の互層
13　7.5Y7/2灰白　粗砂
14　7.5Y6/1灰　細砂～中砂　0.5～2cm大の礫が混じる
15　7.5Y7/2灰白　シルト混粗砂　加工時形成層

82溝C
1　7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト　4-1層
2　7.5Y3/1オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　4-2層
3　7.5Y2/2オリーブ黒　粘土偽礫
4　10Y2/1黒　粘土　粗砂を少量含む
5　10YR5/1褐灰　細砂質粘土
6　10YR5/2灰黄褐　中砂～粗砂　偽礫を少量含む　加工時形成層

図 266　1－1・2－1区　82 溝断面

なることから、当該期における地形の改変は 69 微高地南端までは確実に行われたと考えられるが、溝南側については溝の加工が積極的に行われていなかったと考えられる。

網代は、82 溝の遺物集中部が途切れる南側で、南北 1.1 m、東西 1.2 mの範囲で検出された。植物の繊維束を利用しており、樹皮を加工して用いた可能性がある。また、網代と共に杭が３本検出された。網代を検出した際に認識されたもので、その用途は、１）網代を固定するための打設、２）82 溝に関連する水利施設として打設、３）４層形成段階の土木（水田）に関係した打設が考えられる。直上で 71 擬似畦畔が検出されたことから、３）が最も可能性が高いものか。なお、網代については上層の４－２層と 82 溝埋土の層理面に近い部分で検出されており、71 擬似畦畔の設置と関係する可能性がある。

また、82 溝東側では、溝肩部に沿って杭列４が検出された。杭５本と杭の痕跡１箇所が確認された。

82 溝から出土した資料及び 82 溝に関係する遺物を図 270 ～図 287 に図示した。図 270・271 が上層、図 272 ～ 286 が中層から出土した遺物である。図 270 － 1 ～３・５・６・８は４－２層、４・７・９・10 はトレンチから出土した。図 270 － 1 ・２は須恵器坏蓋である。３は須恵器杯身である。４は須恵器高坏脚部。５は須恵器埦である。端部が反り気味に立ち上がり、端部は丸くおさめられる。外面に突帯が２条めぐる。６は須恵器壺で外面はカキメ、内面に同心円文当具痕が残る。７は北河内地域特有の須恵器無蓋高坏である。端部は横ナデ調整による段が付き、その際の当たりと考えられる段が外面上位に付く。坏部と脚部の接合は須恵器高坏の手法と同じである。内面はハケ調整、外面は横ナデ調整。８は土師器把手である。上面に切り込みがある。９は製塩土器である。胎土が粗く、ナデにより仕上げられる。10 は韓式系土器甑である。外面は平行タタキで、成形時のものと考えられるケズリが観察される。内面には同心円文当具痕が残る。図 270 － 11 ～ 33 は 82 溝上層から出土した土器である。上層はさらに２層に細分して掘り分けを行っており、上層上位から出土した土器は 12・14・15・18・23・30 である。それ以外の土器は上層下位から出土したか、下位の土器と接合した資料である。11 ～ 14・17 ～ 20・23・24 は須恵器坏蓋である。11 は外傾する口縁部で、端部は丸味を帯びた面をもつ。12・13 はの外面は静止ヘラケズリが施される。14 は、外面が静止ヘラケズリで、天井部には平行タ

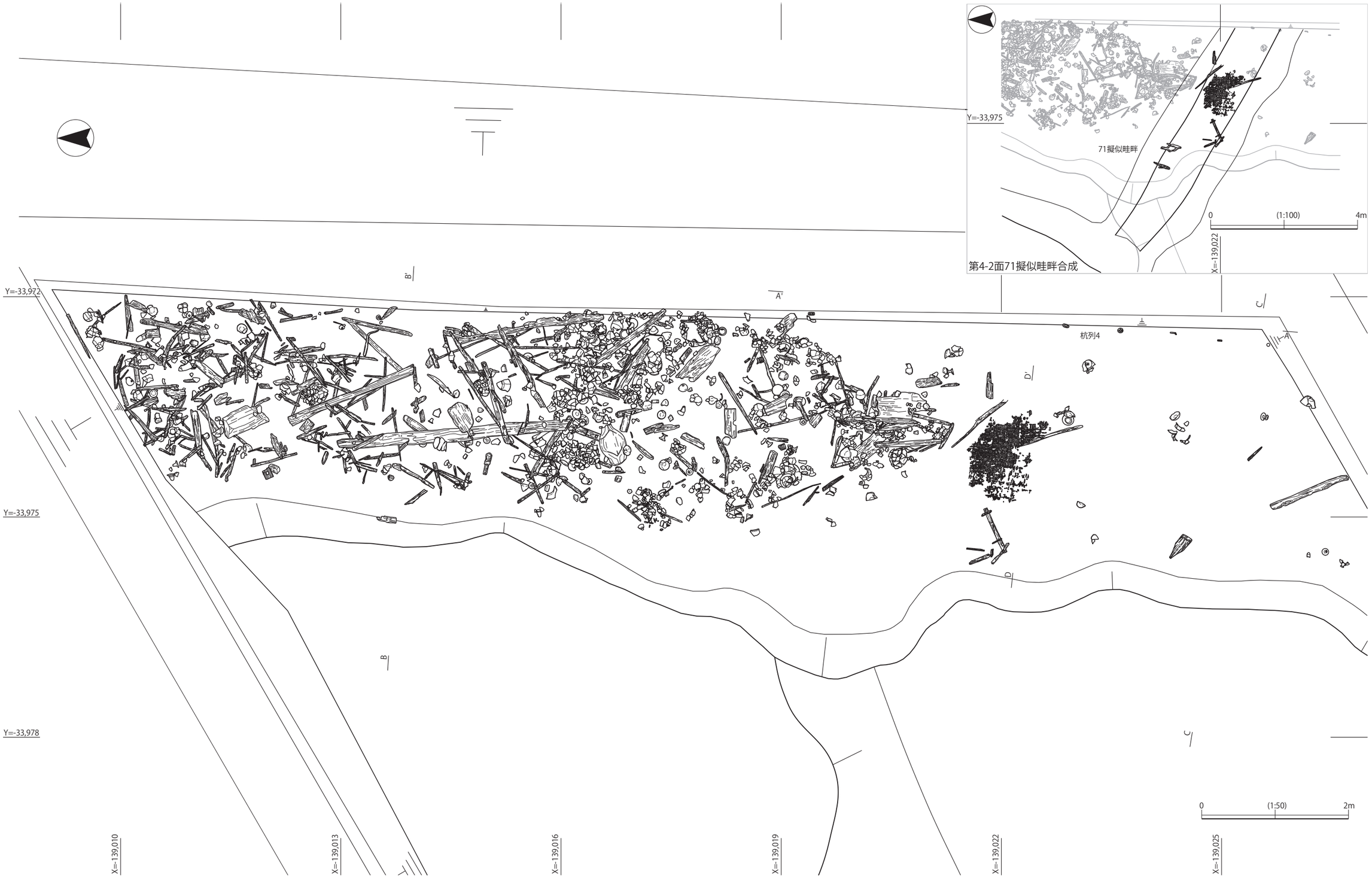


図 267　1－1・2－1区　82 溝平面

図 268　1－1・2－1区　網代・杭列 11 平・立面

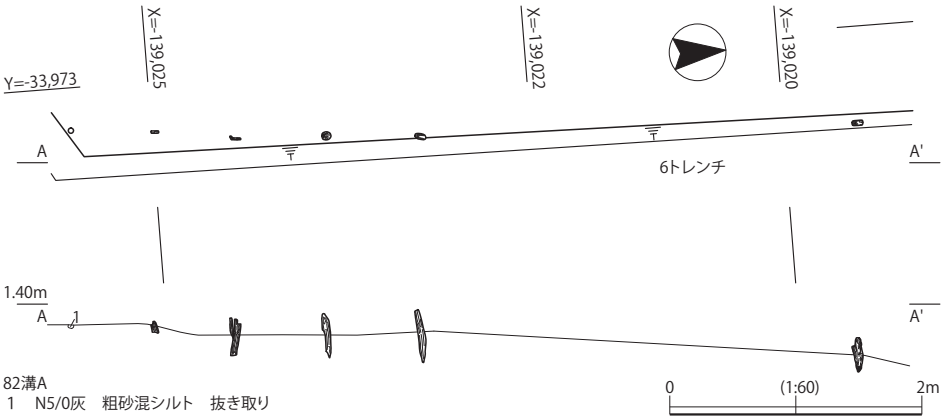


図 269　1－1・2－1区　杭列４平・断面

タキの痕跡が残る。15・16・21 は須恵器坏身である。26 は須恵器蓋である。27 は無蓋高坏の坏部である。25・28 は須恵器高坏の脚部である。29 は土師器有稜高坏である。口縁部は外反し、端部は上方にわずかにつまみ上げられる。30 ～ 32 は土師器高坏である。坏部は屈曲が顕著であるが段にはならない。31 の口縁端面は面をもつ。30 と同じく、坏部の屈曲が顕著である。33 は韓式系土器鍋ないし甕の体部破片である。外面には格子目タタキが施される。

図 271 － 1 は土師器坏である。外面下位はヘラケズリ調整される。２は土師器鉢である。外面は磨滅しているが、板ナデと考えられる痕跡が残る。内面は横ナデ調整される。全体に煤が付着。３・４は把手である。上面に切り込みがあり、４は切り込みを入れる前に上面の粘土が掻き取られる。５～ 10 は土師器甕である。11 は韓式系土器鍋である。把手の上面には切り込み、下面には土器乾燥時の支持棒の穴がある。12 は韓式系土器甑ないし平底鉢の底部である。外面は平行タタキ調整される。

中層から出土した遺物の内、図 272 ～ 286 を図示した。図 272 － 1 ～ 7・11 は須恵器坏蓋である。４と 11 は上層の破片と接合する。８～ 10・12・13 は須恵器坏身である。ON231 ～ TK208 型式。

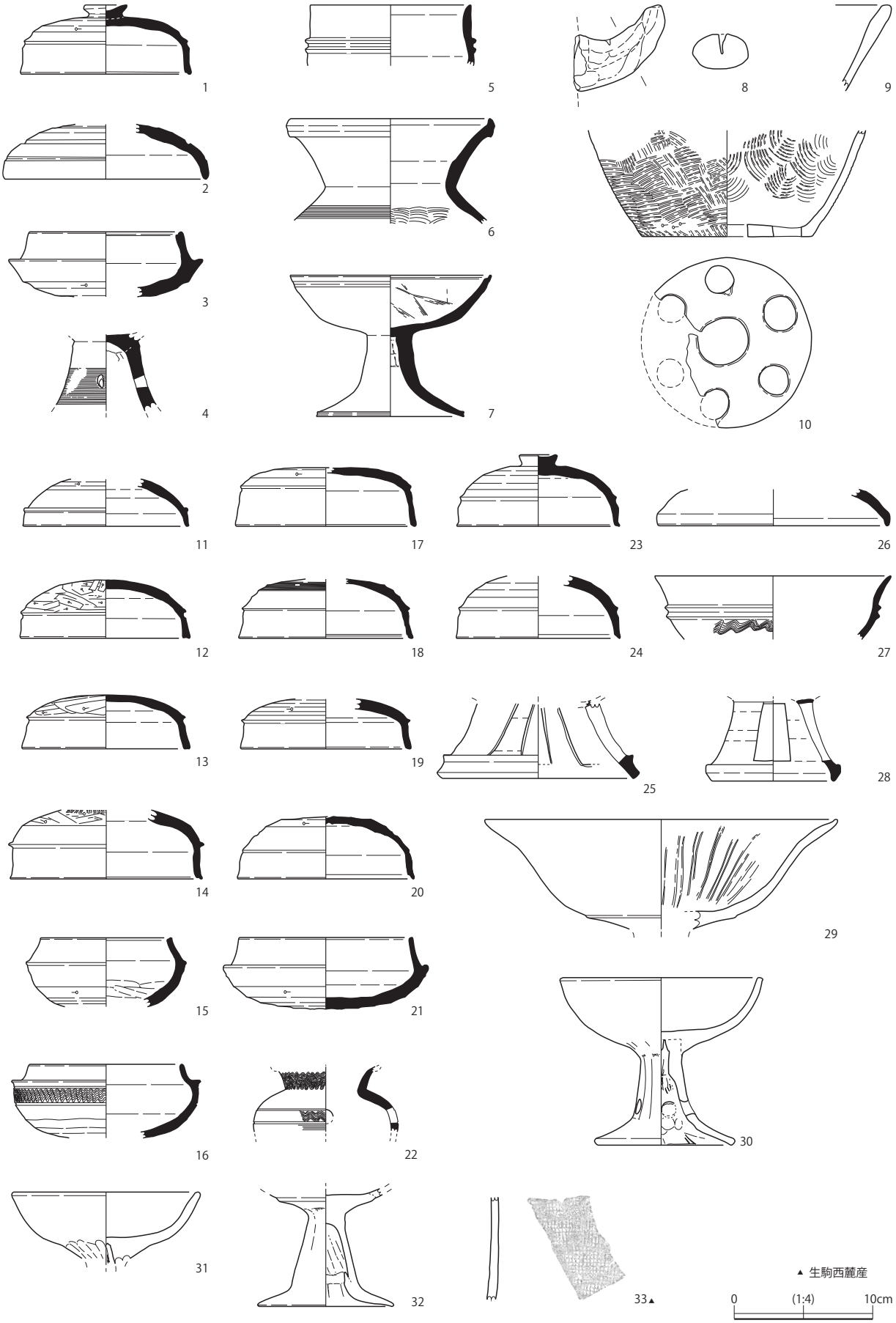


図 270　1－1・2－1区　82 溝上層出土遺物（1）

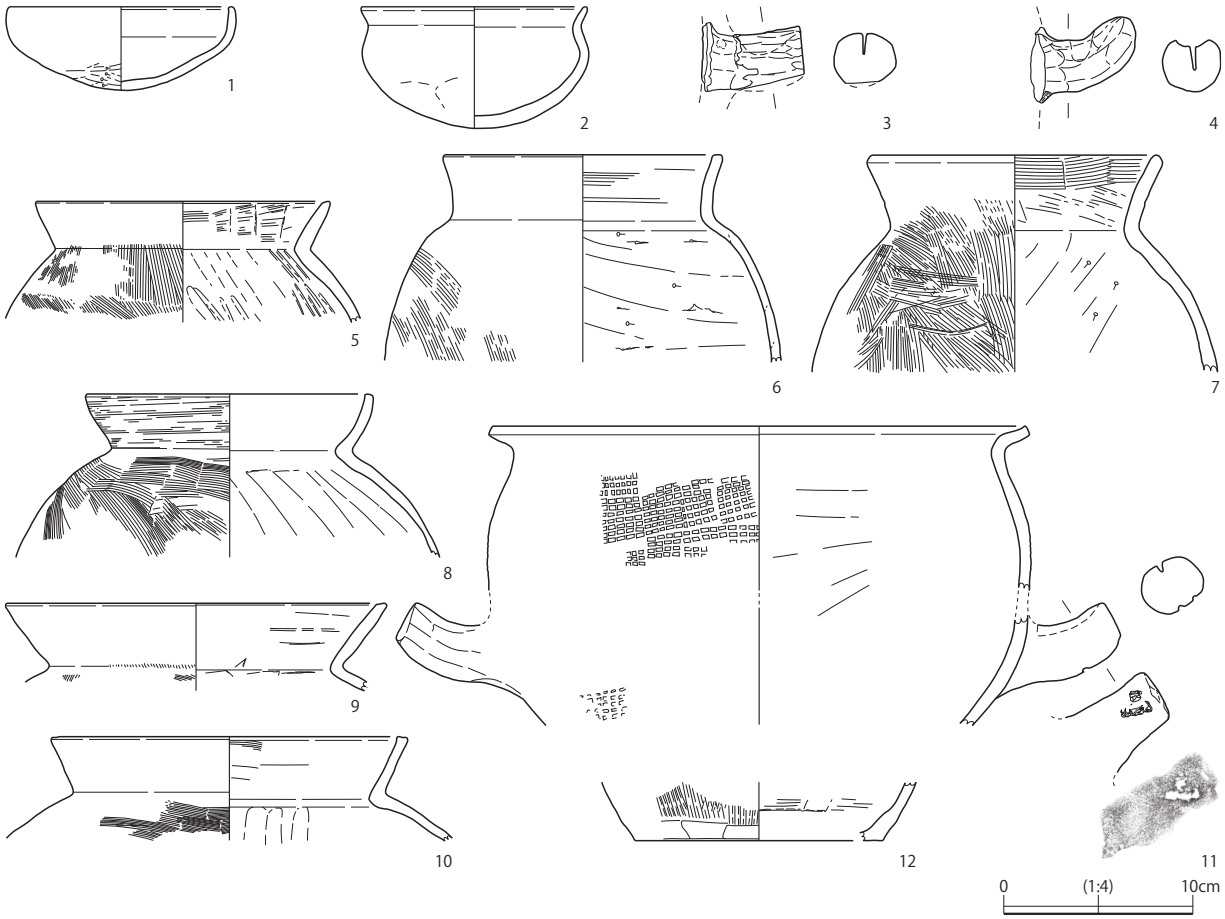


図 271　1－1・2－1区　82 溝上層出土遺物（2）

14 ～ 18 は高坏で、14 は土師器高坏に類似する須恵器無蓋高坏である。18 の坏部外面はヘラ状工具によるナデが施される。19 は須恵器壺底部である。外面下端はケズリ調整。20 ～ 23 は須恵器把手付埦である。20・21 は直接接合しないが同一個体と考えられる。24・25・28 は須恵器甕である。24・25 の突帯は丸みを帯びる。26 は器台脚部である。27 は壺で、列点文が凹線を挟んで 2 段分施される。

図 273・274 は土師器高坏である。図 273 － 1 ～ 27 は坏部の稜が弱いもの、ないし、線状のものである。図 274 は 1 ～ 16 は坏部が椀形のもの、17 ～ 19・23 は坏部が逆「ハ」の字形を呈し小型のもので、20・21・22 は有段高坏で、坏部に明瞭な屈曲があるもの、24 ～ 28 は坏部が逆「ハ」の字形のもの、29 ～ 38 は椀形で、内底面が平らなものである。図 275 － 1 ～ 7 は土師器有段高坏、8 ～ 10 は製塩土器、11 ～ 19 は土師器壺である。15 は内面ナデ、16 は内面が板ナデ後、ナデで仕上げられる。20 は複合口縁壺の口縁部である。図 276 － 1 ～ 12 は土師器鉢である。1 ～ 6 は口縁部が外反するタイプで、1 ・ 2 は底部が平底ないし平底気味のものである。7 ～ 10 は椀形、11 は逆「ハ」の字形の器形を呈す。12 は口縁部が肥厚する。13 ～ 18・20 ～ 25 は韓式系土器である。20 ～ 22 は平底鉢、23 は鍋である。24 は把手下部に土器乾燥時の支持棒の穴が認められる。図 277 ～ 280 は土師器甕である。図 277 は小型の甕、図 278 － 1 ～ 9 は中型の甕、図 278 － 10 ～ 15・図 279 － 1 ～ 9・図 280 は大型の甕である。図 277 － 4 は内面に赤彩が認められる。図 278 － 7 の外面はケズリ気味のナデ、内面はヘラケズリが施される。図 280 － 9 は韓式系土器で、平行タタキが施される。

82 溝から出土した木製品は、図 281 ～ 286 ですべて中層から出土した。図 281 － 1 ～ 8 は祭祀・武具に分類した木製品である。図 281 － 1 は鳥形木製品か。方形の貫通孔が 2 箇所あり。基部（図上左端）

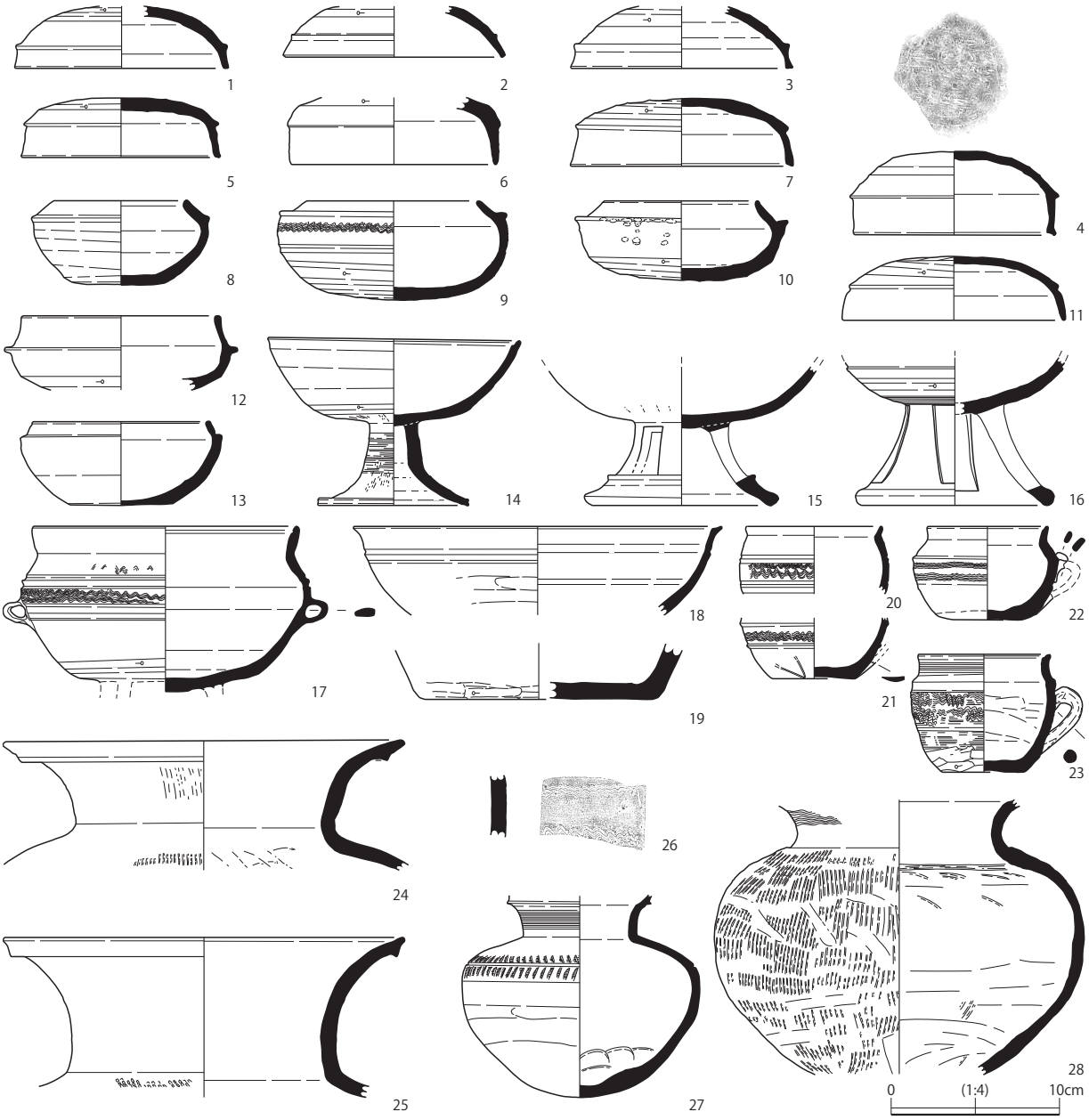


図 272　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（1）

は断面形が円形で、身部との境界が外径に沿って腐食しており、外圧による凹みと考えられる。2は用途不明の木製品である。1と同じく鳥形木製品か。3はさしば形木製品である。全体に腐食が顕著で、下端の柄は加工か欠損によるか判断できない。4は有頭棒である。上端の左右を削って、頭部が加工される。5は刀形木製品である。先端部を片側から削り、刃部となる方を薄く仕上げられる。6は鞘である。上端には緊結具用の段がある。7は弓である。上端は弓弭が加工され、側面は原形のままの反りがある。8は琴の上板で、片端に突起が3箇所認められた。また、緊結用の方形貫通孔が認められる。

図 282 －1～14は、部材・紡織具・雑器類である。1～3は部材に分類したもので、それぞれホゾ穴が加工される。4は不明木製品である。表面は平滑に仕上げられる。裏面はケズリを行ったような凹凸がある。5は槽で、出土した中では最小のものである。側板（短辺）及び底板は欠損するが、原形が復元できる槽である。6は脚台で、上部に方形の切り込みを入れ、組物として使用されたと考えられる。7は把手で、ケズリ調整によって形状を整える。8は部材である。方形のホゾ穴が一箇所あり。9は板

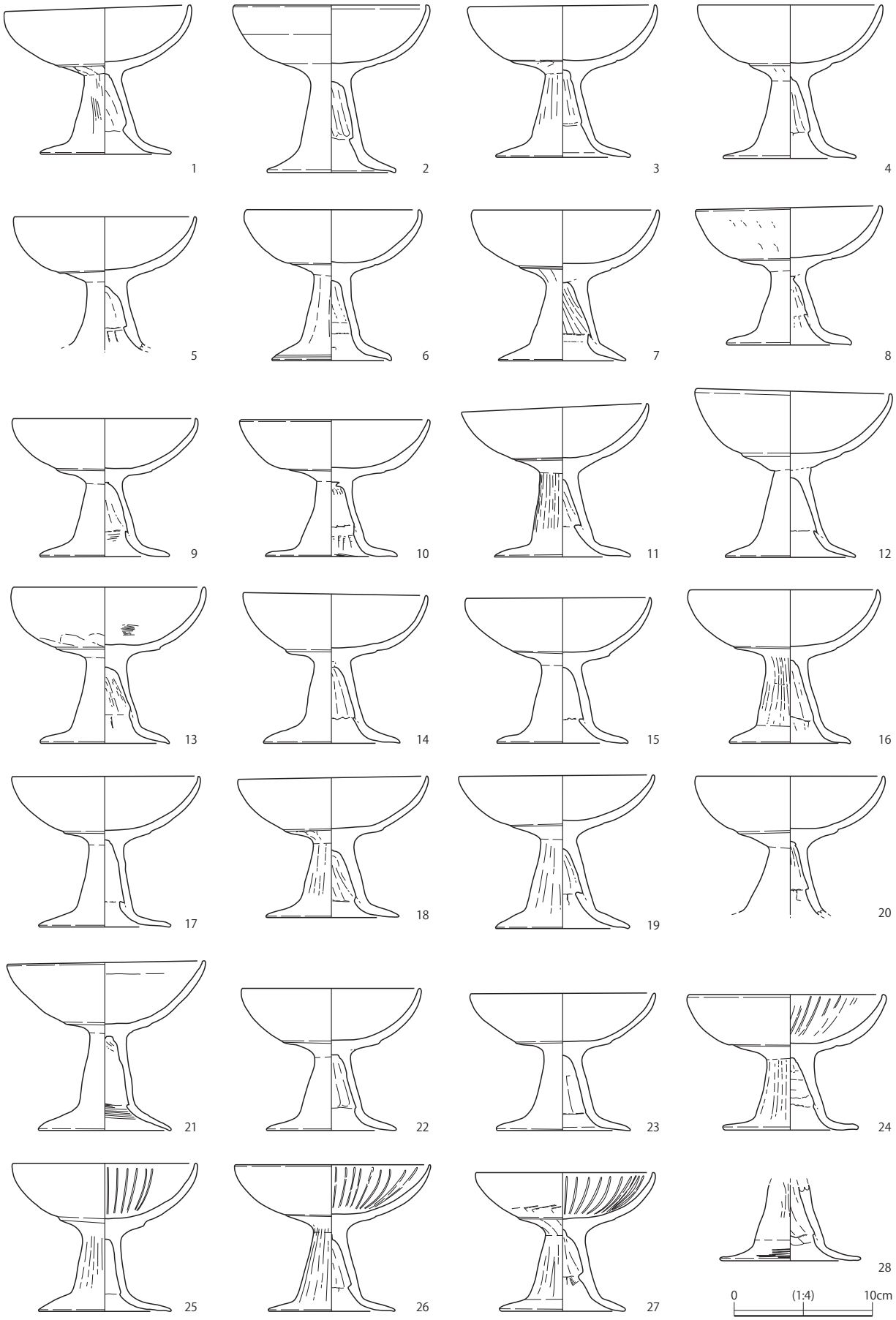


図 273　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（2）

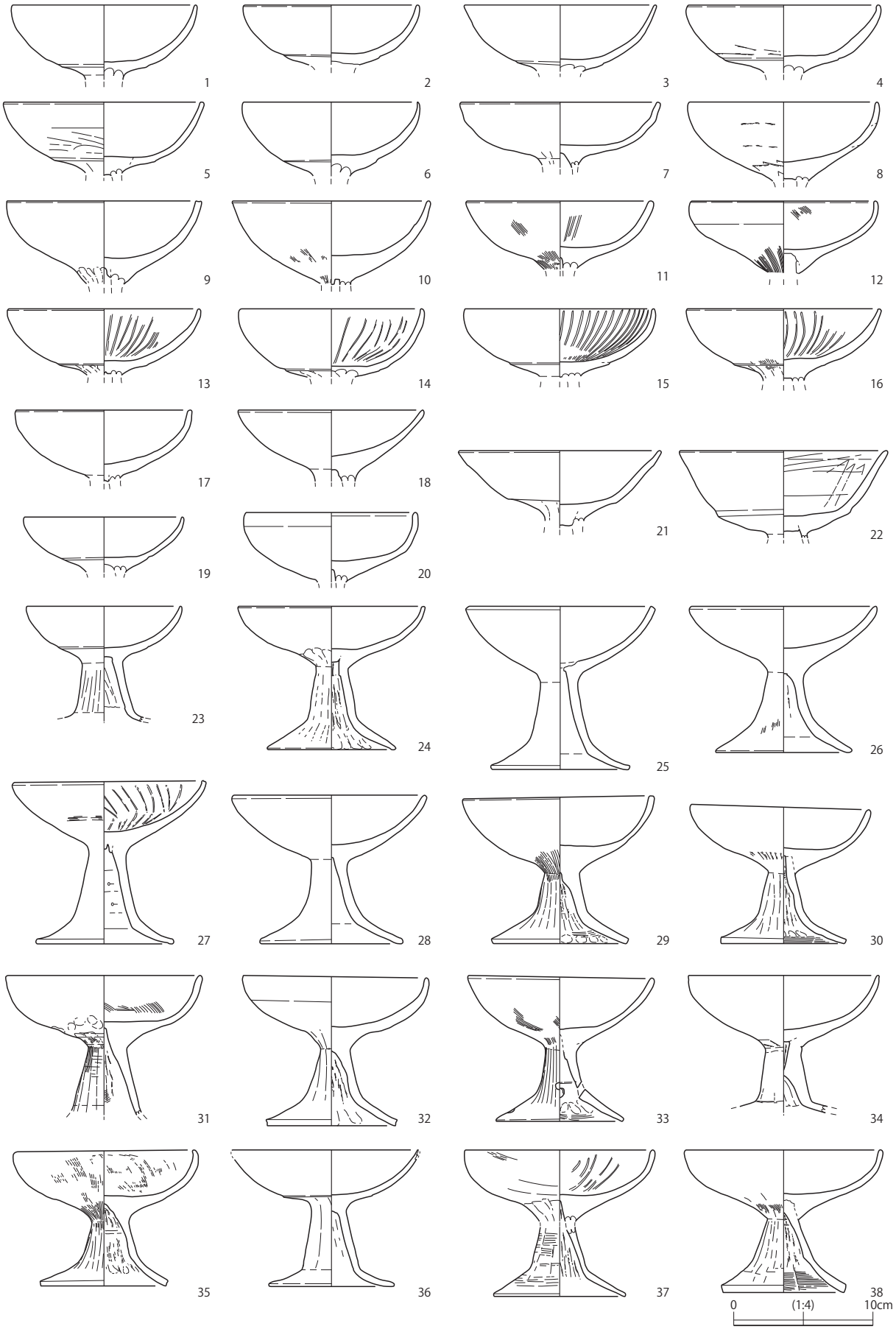


図 274　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（3）

図 275　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（4）

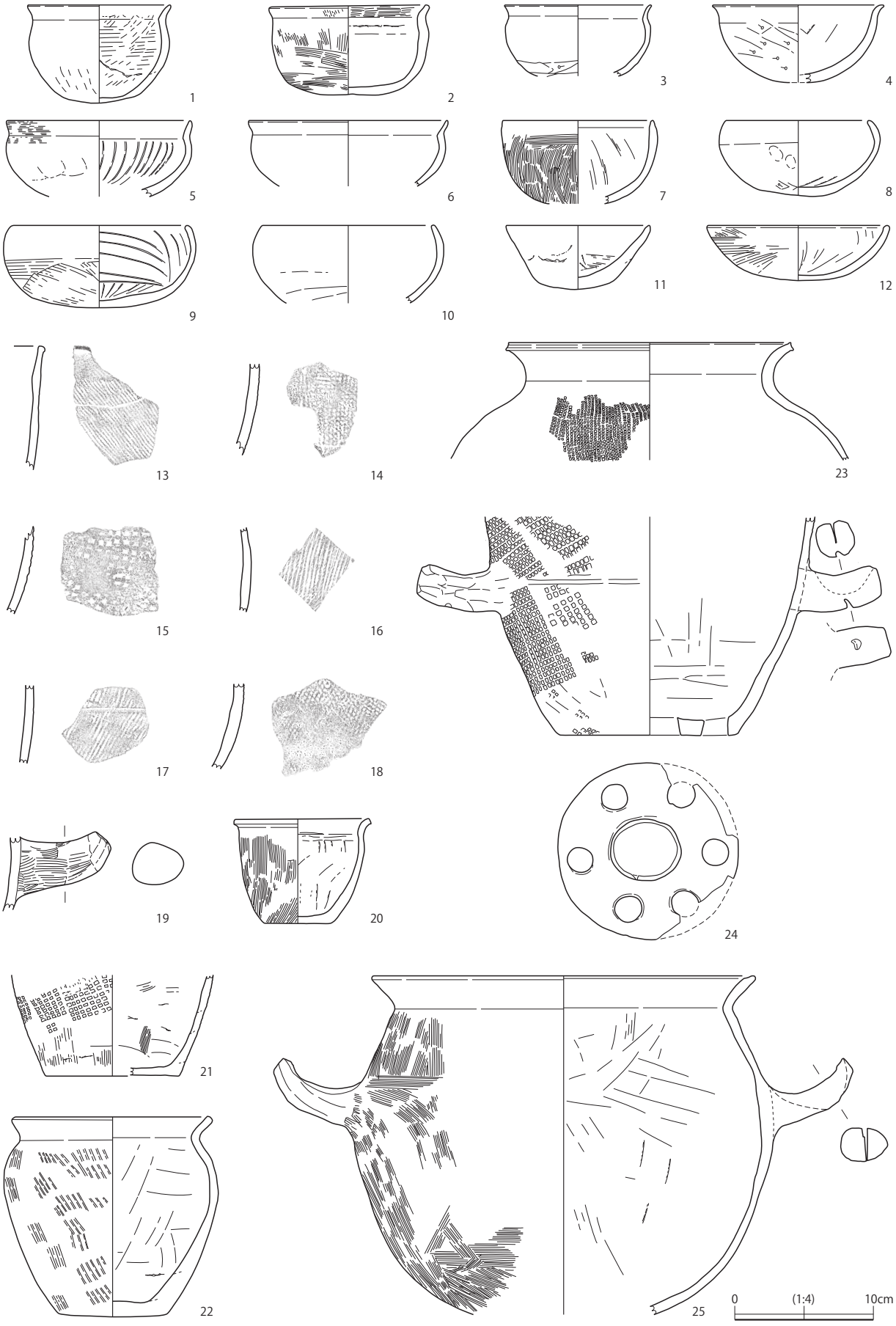


図 276　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（5）

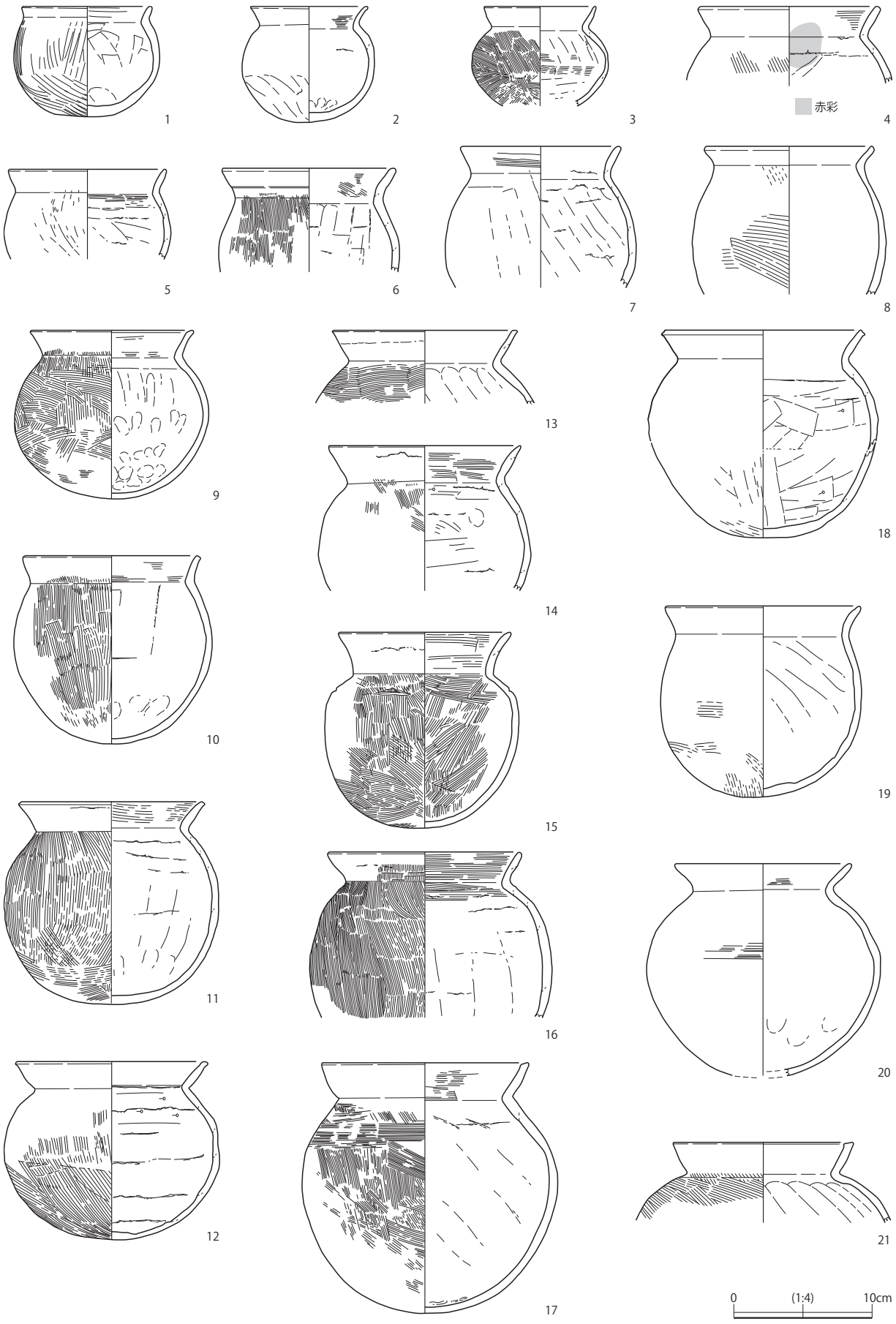


図 277　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（6）

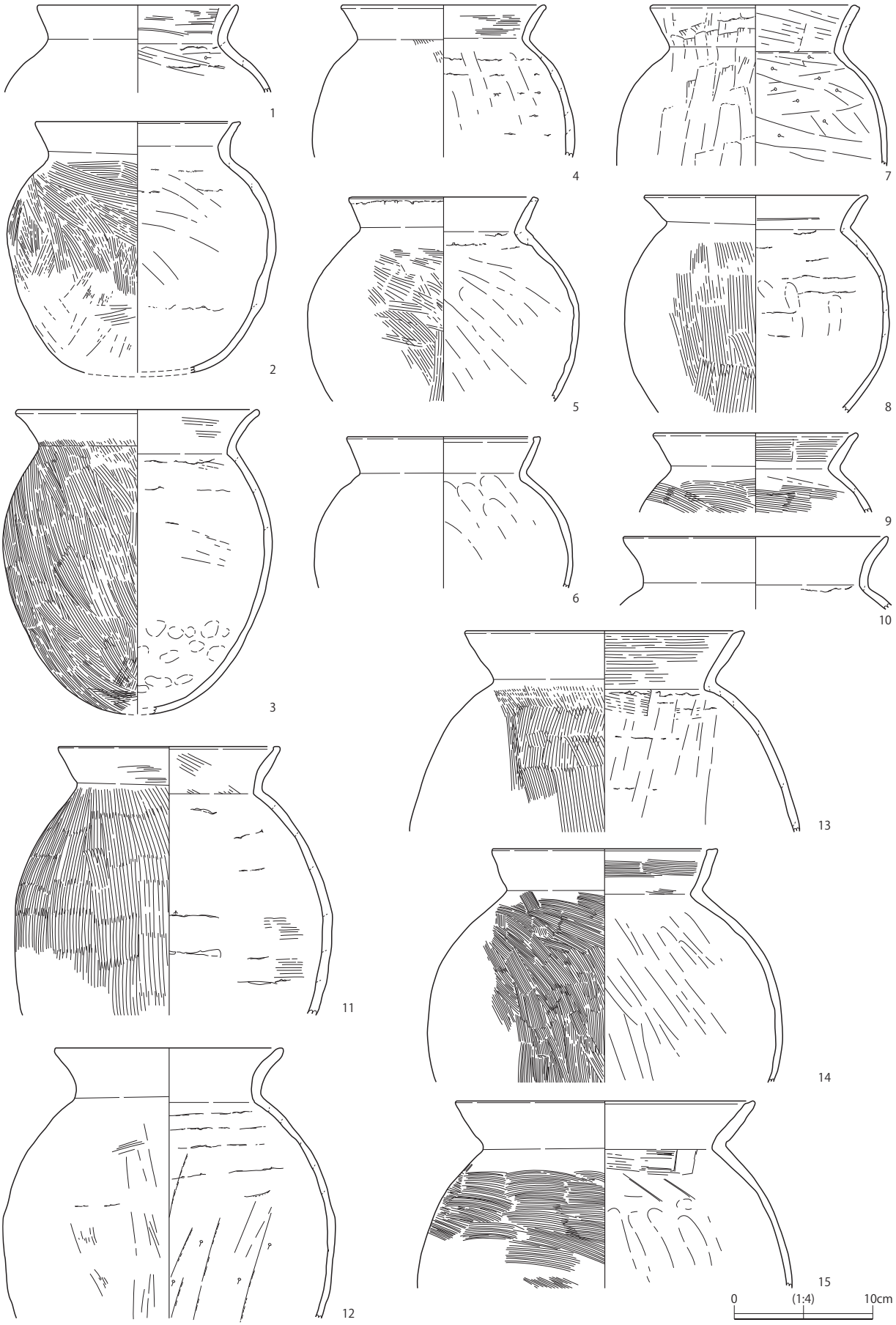


図 278　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（7）

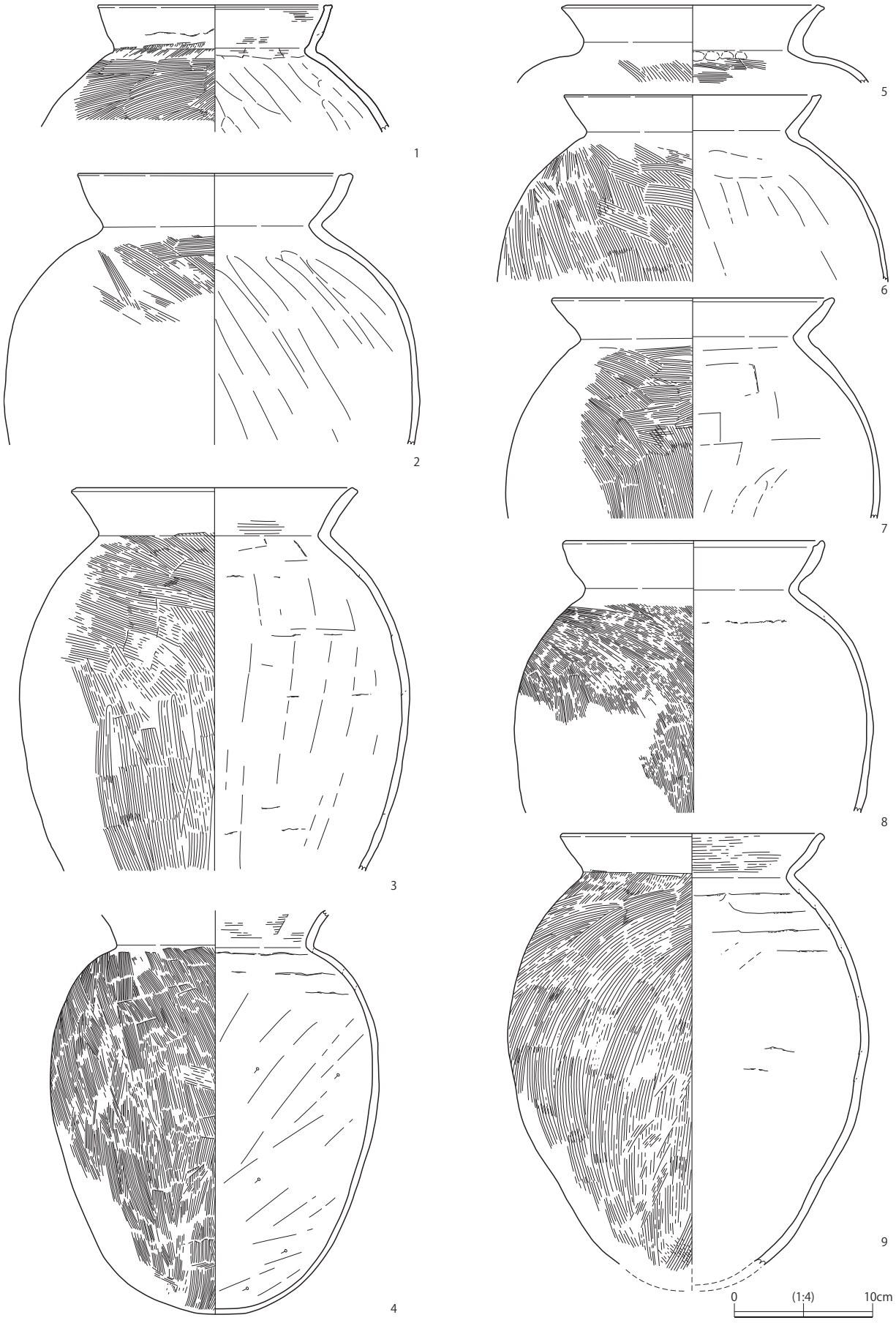


図 279　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（8）

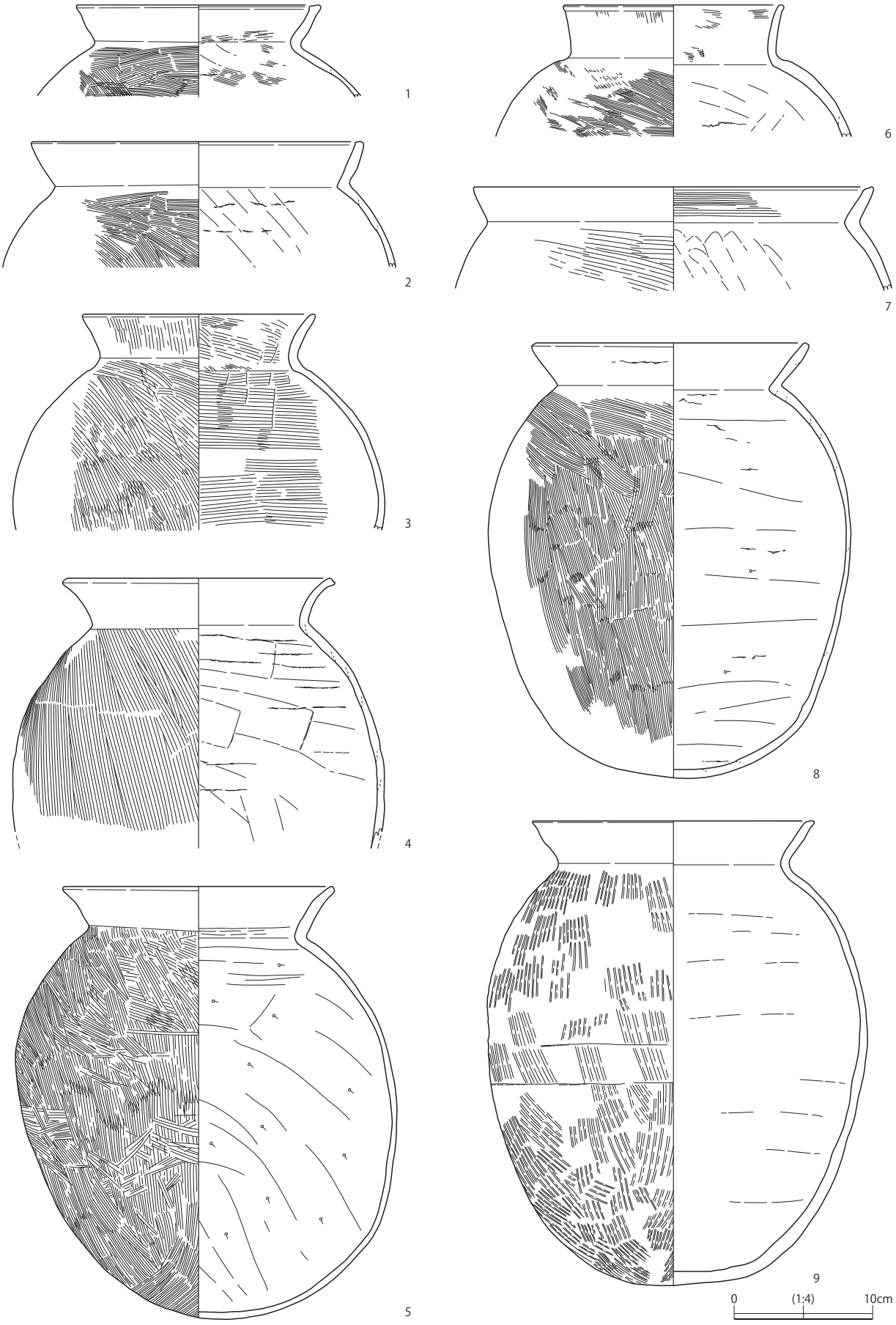


図 280　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（9）

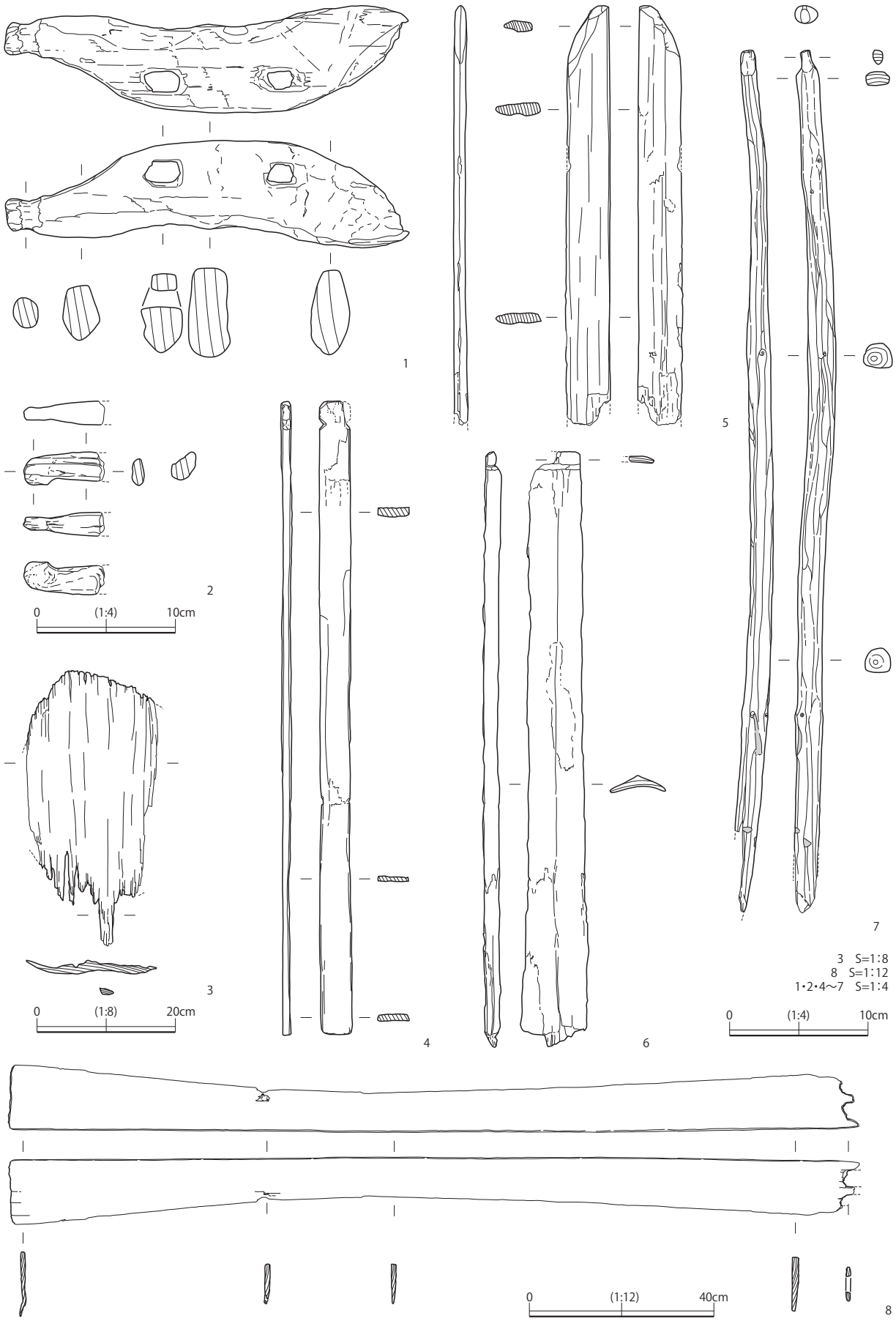


図 281　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（10）

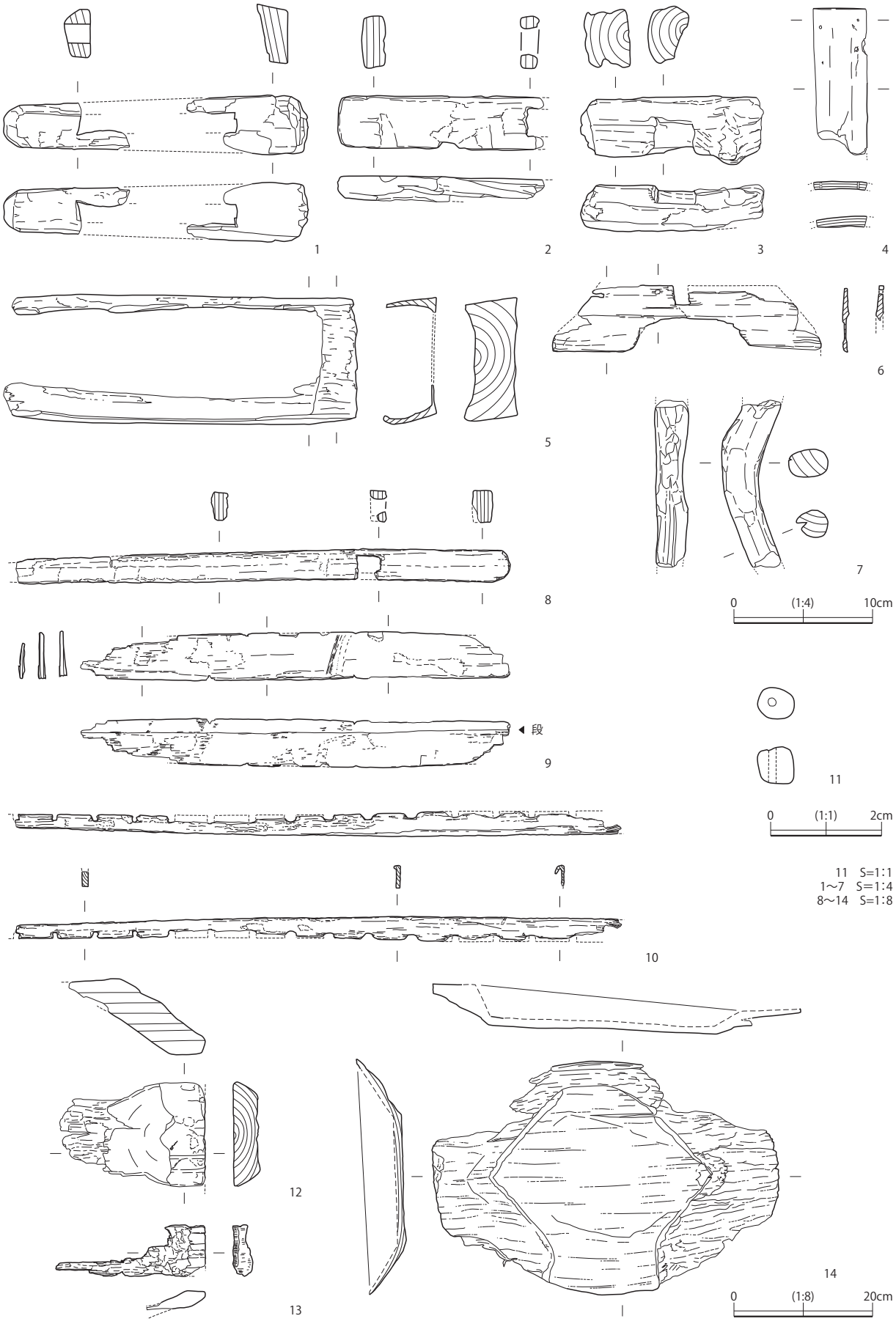


図 282　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（11）

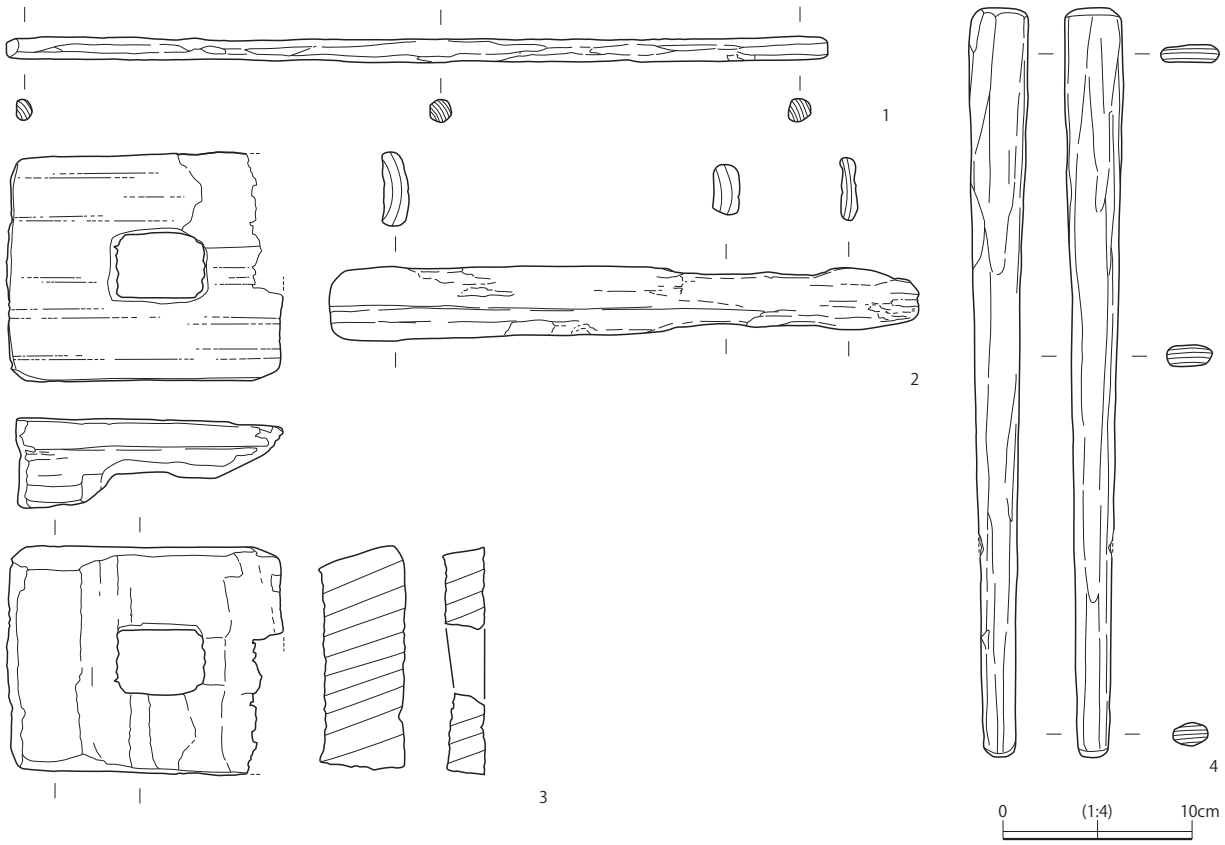


図 283　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（12）

材で、紡織具の緯打具の可能性がある。両側縁は直線的に加工される。裏面は段を有するが、木目に沿って割れたものか。腐食が一定程度進んでいるため加工されたものか判断できなかった。10 は不明木製品である。一方の側縁に、等間隔に方形の切り込みが入れられる。断面形は「一」・「L」・「コ」字形を呈するが、本来「コ」字形を呈するものか。方形の切り込みについては使用時の摩耗か、後の損耗か区別することはできていないが、明確に方形を呈する部分が認められたものと形状が広がって円形に近いものがあり、前者の使用時の摩耗の可能性が高いと考えられる。11 は木製玉である。全体が炭化。中央に円形の貫通孔があり、玉とした。埋木玉か。12・13・14 は槽である。短辺側の方形の突起部が残存。底板は腐食・欠損により不明である。14 は腐食により軟弱であったため、土が付着した状態で図化。底面は菱形に近い形状で、平坦に加工される。図 283 － 1 ～ 4 は棒状木製品・脚台・用途不明木製品を図示した。1 は棒状木製品である。ケズリ調整で全体の形状が整えられる。片方の端部は一方から削ることで先細りに加工される。2 は不明木製品である。図上右側は両側縁が紡錘状に加工される。断面形は方形に近い。形状的には槌に近い形状を示すが、使用痕は認められない。3 は脚台、台座である。中央に方形の貫通孔があり、底面には下駄歯のような突起部が加工される。4 は棒状木製品で、形状は笏に似る。丁寧なケズリが施される。加工痕は使用によって摩耗、破損した部分は認められない。

図 284 － 1 ～ 8 は、土木具に分類した木製品である。1 ～ 4 は横槌である。1 の頭部は全面敲打に使用され、大きく窪む。2 の頭部の作業面は平坦で敲打によりわずかに窪む。3 は、一部を除いて敲打に使用され、大きく窪む。4 は腐食が顕著で、半分以上が欠損する。5・6 は杭である。半裁した状態で出土した。他の杭のように先端にケズリ痕が認められない。7 は矢板で、転用材と考えられる。両面は割面で、先端は平らに加工される。上端は転用時のハツリ痕が残る。8 は不明木製品で、建築部材か。

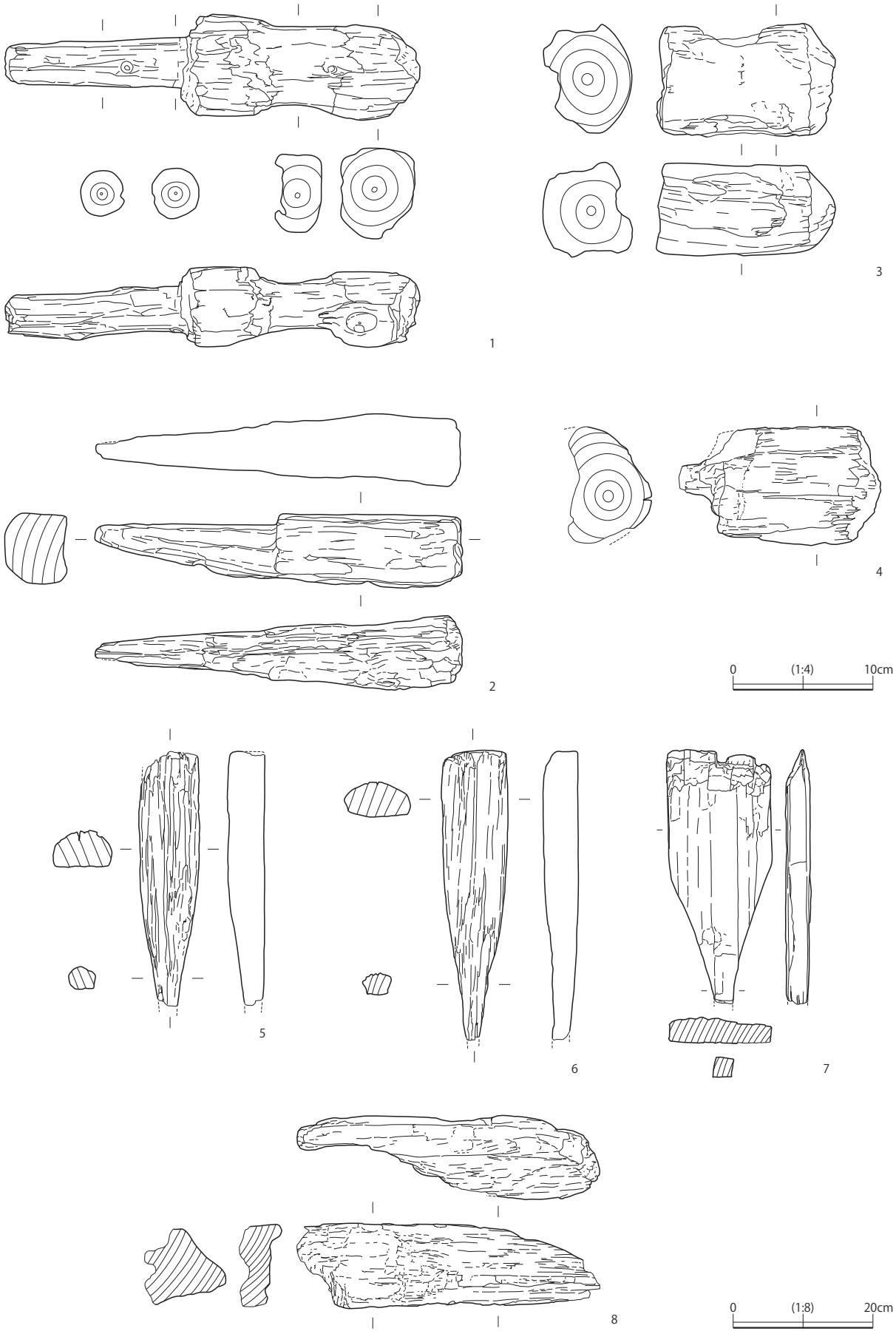


図 284　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（13）

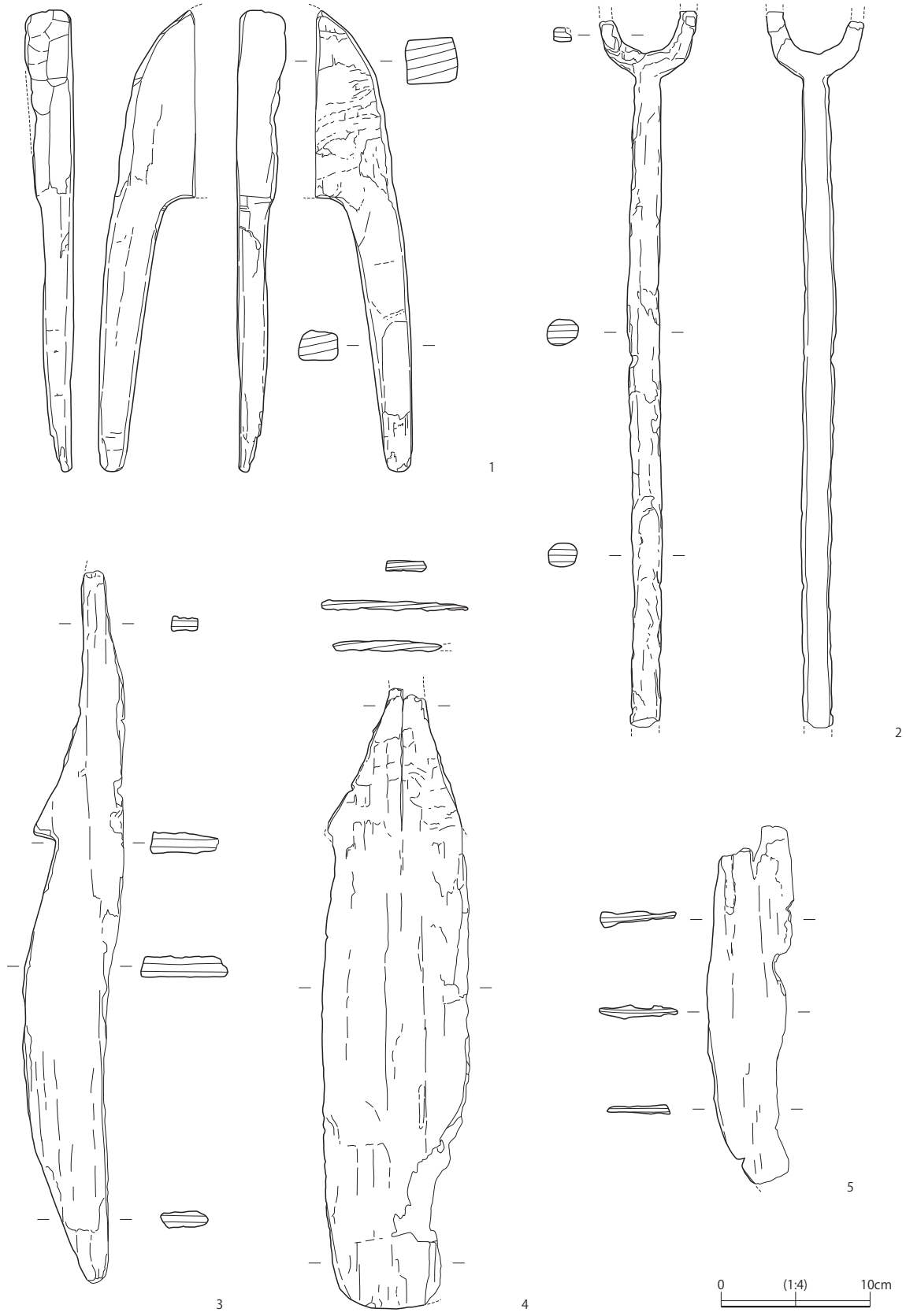


図 285　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（14）

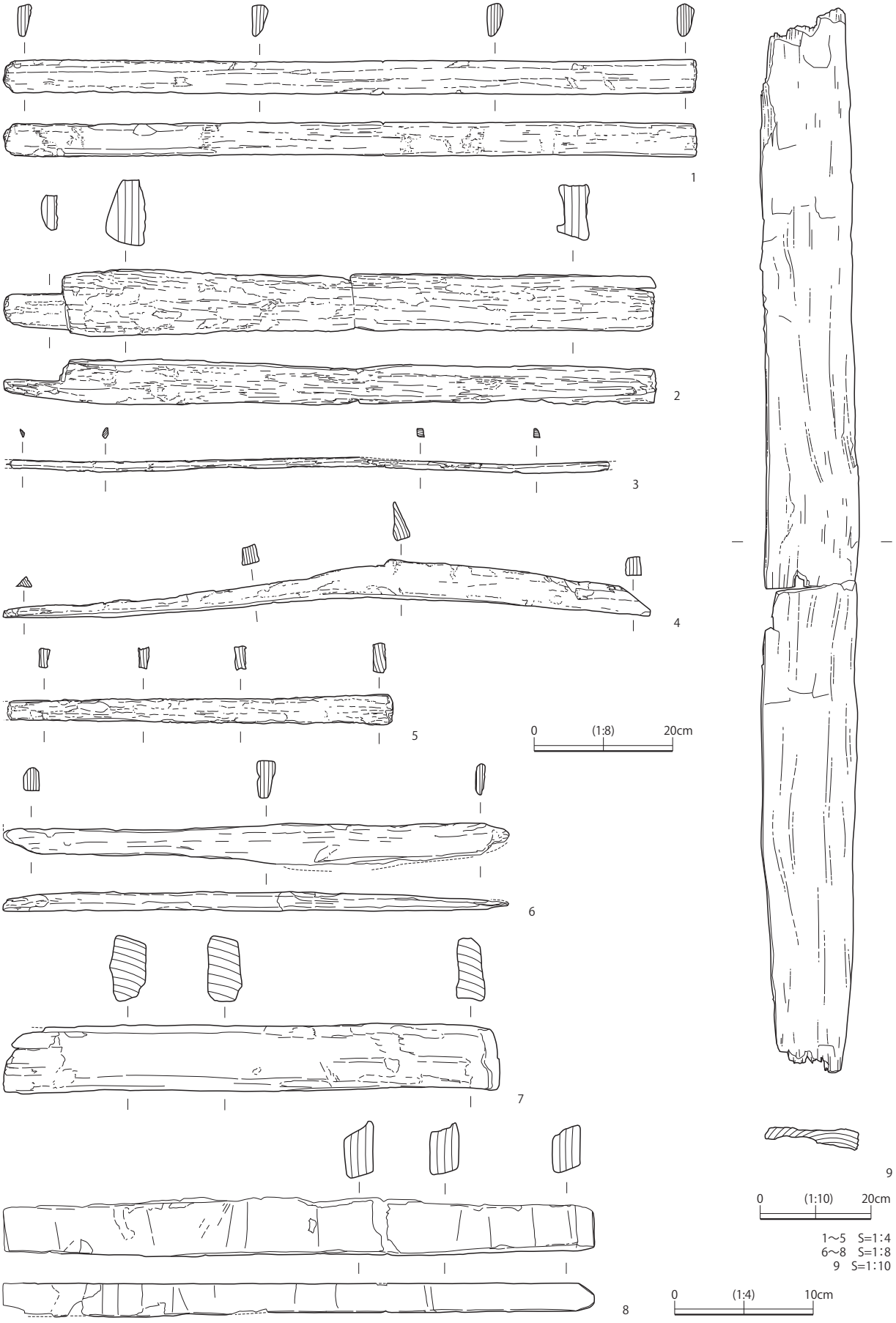


図 286　1－1・2－1区　82 溝中層出土遺物（15）

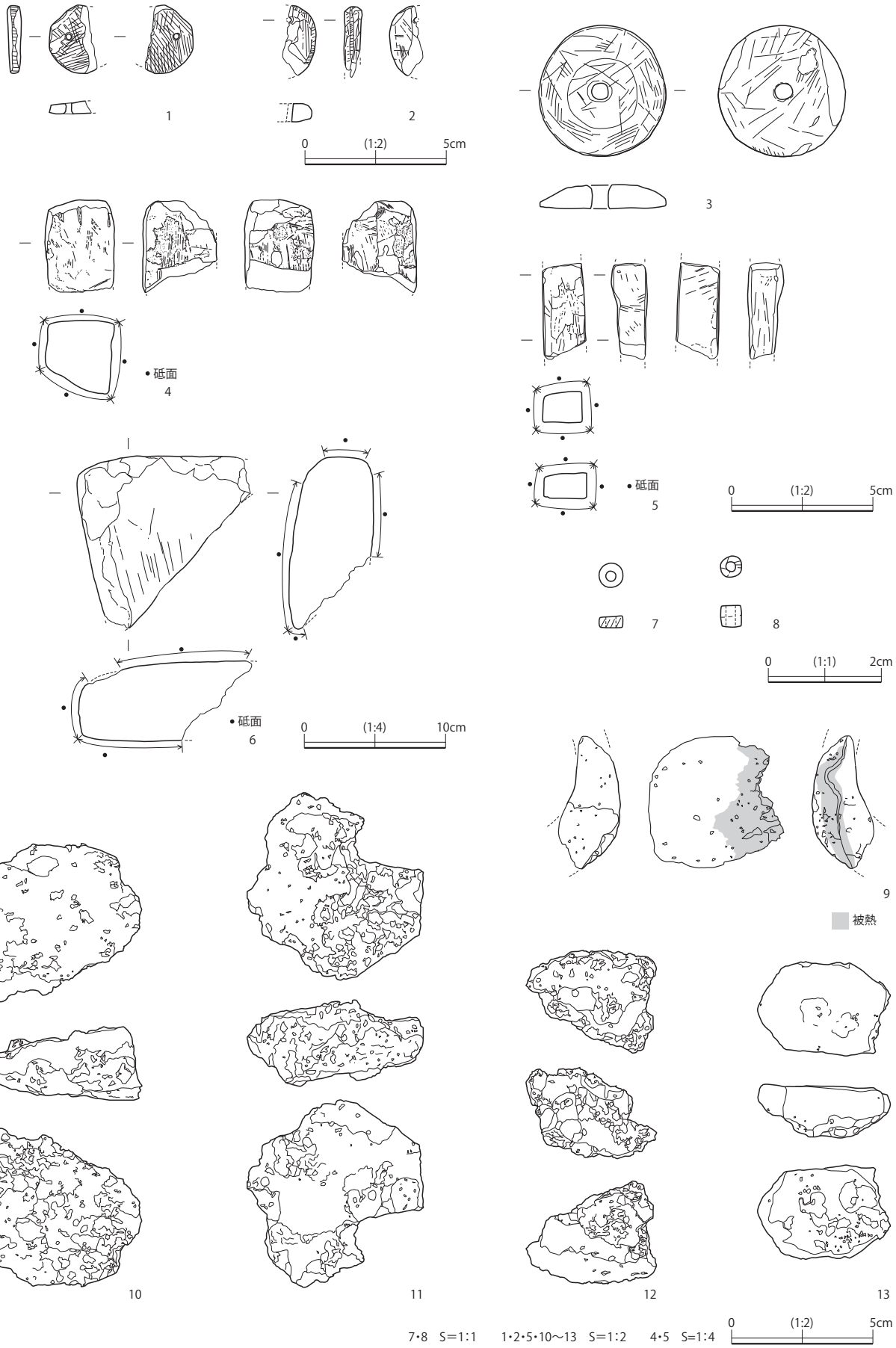


図 287　1－1・2－1区　82 溝上層～中層出土遺物

全体に腐食し、加工痕は不明。なお、上記の木製品以外に大量の杭が出土している。

図 285 － 1 ～ 5 は農具に分類したものである。 1 は鋤で、踏鋤に分類されるものか。丁寧なケズリ調整によって仕上げており、刃部先端は摩耗と欠損が認められる。 2 は柄で、鋤や掘り棒の柄と考えられる。上部の持ち手部分は環状に作り出されるが、欠損しているため全体の形状は不明。土木具の柄としては細いもので、実用に供したのか、強度の点で問題が残る。 3 ～ 5 はナスビ形の平鍬である。 3 点とも腐食が顕著。

図 286 － 1 ～ 9 は、板材・棒状木製品・部材に分類したものを図化。 1 は棒状木製品である。平滑に仕上げられており、ケズリ痕が一部で観察される。両端は折損。 2 は部材で、片側の端部には仕口と考えられる段がある。 3 は棒状木製品である。両端は折損する。 4 は不明木製品である。大きく湾曲し、片側の側縁には段状に加工した部分がある。また、片側の端部（図上右側）と側縁（図上下側）は面があり、側縁の面は割面かと考えたが、平坦な面を形成しており、加工時の形状を留めている可能性がある。 5 は棒状木製品である。断面は長方形を呈す。両端で幅が異なり、片側の端部（図上左側）に向かって幅を減じる。 6 は片側の側縁が平坦に加工され、片側の端部（図上右側）に向かって、幅広に加工される。 7 は不明木製品で、部材の断片か。断面は長方形を指向して加工される。 8 は単位幅が短い加工痕が裏面と片方の側縁で観察される。もう片方の側縁は折損しており不明。表面は腐食が顕著で加工痕は観察されなかった。 9 は大型の板材である。一部でハツリ痕が観察される。両端は折損する。

図 287 － 1 ～ 13 は、石製品及び鍛冶関連遺物である。 1 ～ 5 は 82 溝内の 4 － 2 層、 6 ・ 8 ・ 13 は上層上位、 10 ・ 12 は上層下位、 7 ・ 11 ・ 9 は中層から出土した。 1 は滑石製有孔円板である。 2 は滑石製勾玉である。 3 滑石製紡錘車である。 4 ・ 5 は砥石である。 4 は鉄製品用か。 5 の砥面は 4 面、赤い付着物がある。また、被熱したためか、黒色化する。 6 は砥石で、砥面は 3 面である。 7 ・ 8 は滑石製臼玉である。

9 は鞴羽口で、先端は切り落とされた可能性がある。鋳造に関係するか。 10 ・ 11 はガラス質滓。 11 は羽口下に黒色ガラス滓が付着する。 12 ・ 13 は椀形滓である。 12 は軽めの質感をもつ鍛冶滓。 13 は木炭痕がある。他に馬歯、桃種（多数）が出土した。

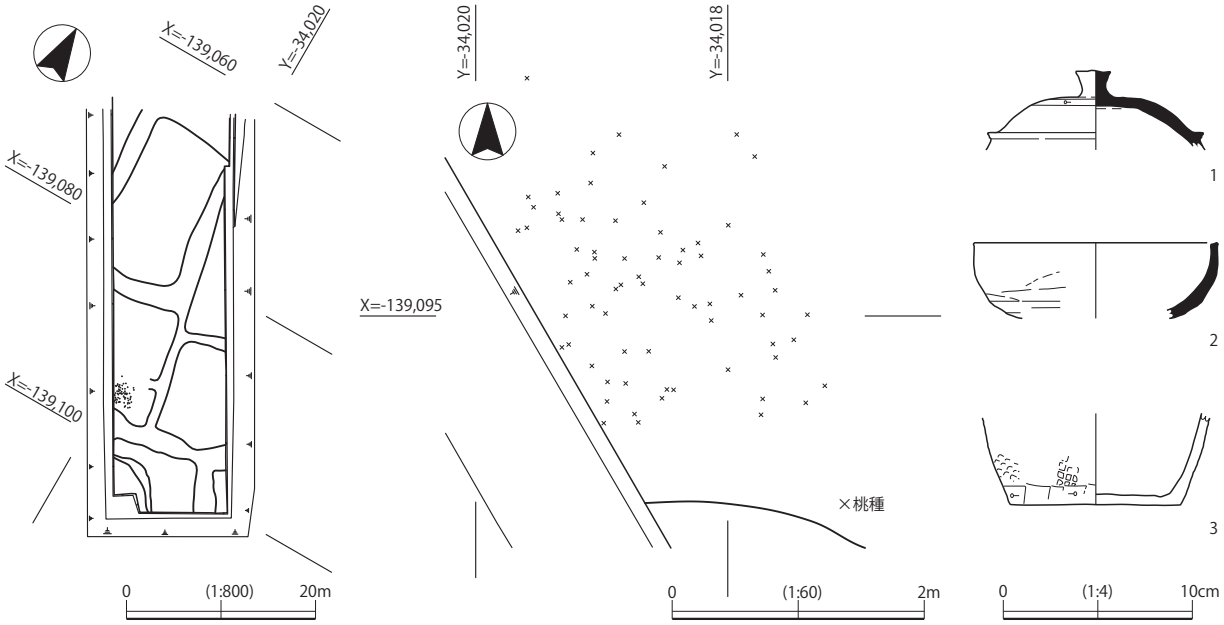


図 288　1 － 1 ・ 2 － 1 区　桃種出土状況平面　出土遺物

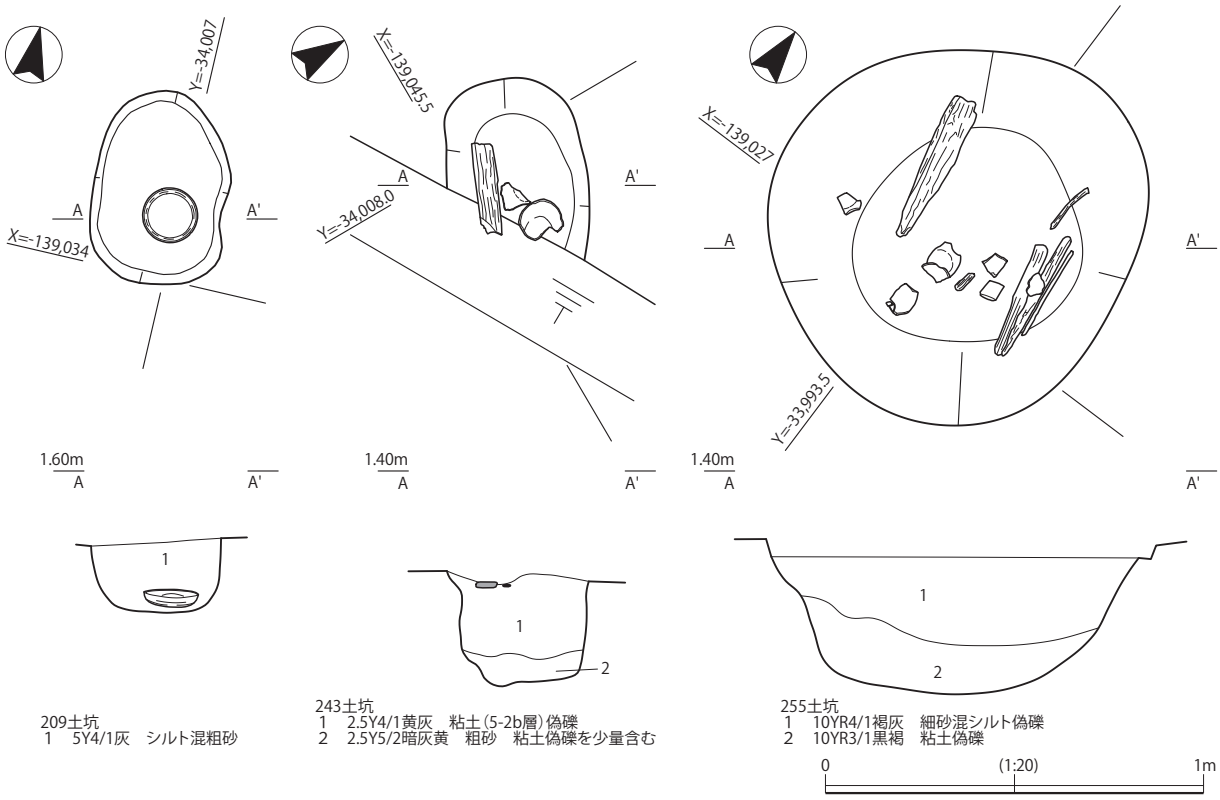


図 289　1－1・2－1区　209・243・255 土坑平・断面

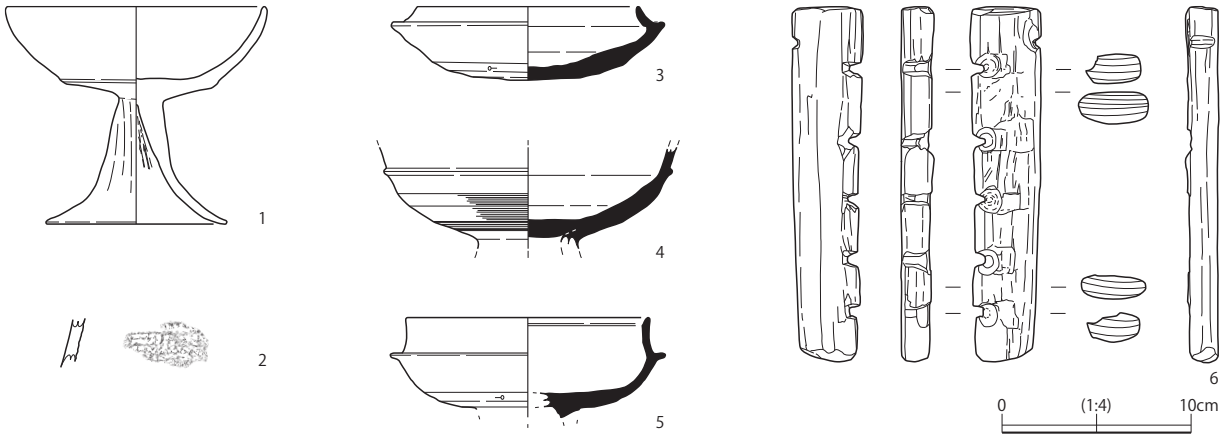


図 290　1－1・2－1区　255 土坑他出土遺物

水田（図 288）

微高地南西・北西で検出されており、畦畔は擬似畦畔の状態で確認された。平面形は長方形で、一枚当たりの区画が大きく、規模が判明したもので 20 × 10 mを測る。調査地南東側では、水田作土から多量に桃種が出土した。341 畦畔北側で、半分以上の個体だけで総数は 69 点以上を数える。作土に含まれる形で出土しており、同様に多数の桃種が出土した 82 溝との関係が注目される。５－１層とした作土から図 288 －１～３が出土した。２・３は４層下面の凹凸が顕著な場所から出土した土器で、共伴する遺物には４層のものが含まれる。１は須恵器蓋である。TK73 型式。２は須恵器鉢である。外面上位は回転ナデ調整、中位はナデ調整が一部認められ、下位はケズリ調整後回転ナデ調整される。３は韓式系土器平底鉢である。外面は格子目タタキが施される。５－１層は、古墳時代中期初頭以前の時期と考えている。

209 ピット・243 土坑・255 土坑（図 257・258・289・290）

209 ピットは、杭列 4 の間で検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 0.5m、短軸 0.35m、深さ 0.2m である。ピット底面から完形に近い須恵器坏身（図 290 － 3）が出土した。TK43 型式。243 土坑は、8101 微高地の南側で検出された。楕円形を呈し、長軸 0.4m 以上、短軸 0.37m、深さ 0.3m である。検出面近くで板材と土師器甕底部が出土した。255 土坑は、69・8101 微高地に挟まれた低地で検出された。平面形は不整な円形を呈する。規模は、直径 1.0 m、深さ 0.4 mである。上層から土師器・木片が出土した。周辺で検出された土坑は、ほぼ同じパターンで埋没しており、微高地縁辺部にあって、取水を目的として掘削したものか。255 土坑から図 290 － 1 の土師器高坏が出土した。

その他の遺構出土遺物（図 290、図版 114）

上記以外の遺構から出土した遺物の内、図 290 － 2・4 ～ 6 を図示した。 2 は韓式系土器の体部片で、124 柱穴から出土した。4 は 271 土坑から出土した。須恵器無蓋高坏の坏部である。TK23 ～ 47 型式。5・6 は 247 土坑から出土した。 5 は須恵器有蓋高坏の坏部である。 6 は木製品の火鑽り臼である。着火部は、片側の側縁に 5 箇所、片側の側縁に 1 箇所で確認された。両端はケズリによって形状が整えられる。

第 6 － 2 面（図 291、図版 20）

5 － 2 b 層を除去して検出した遺構面で、 6 － 2 層としたシルト混細砂の上面に当たる。地形は、北

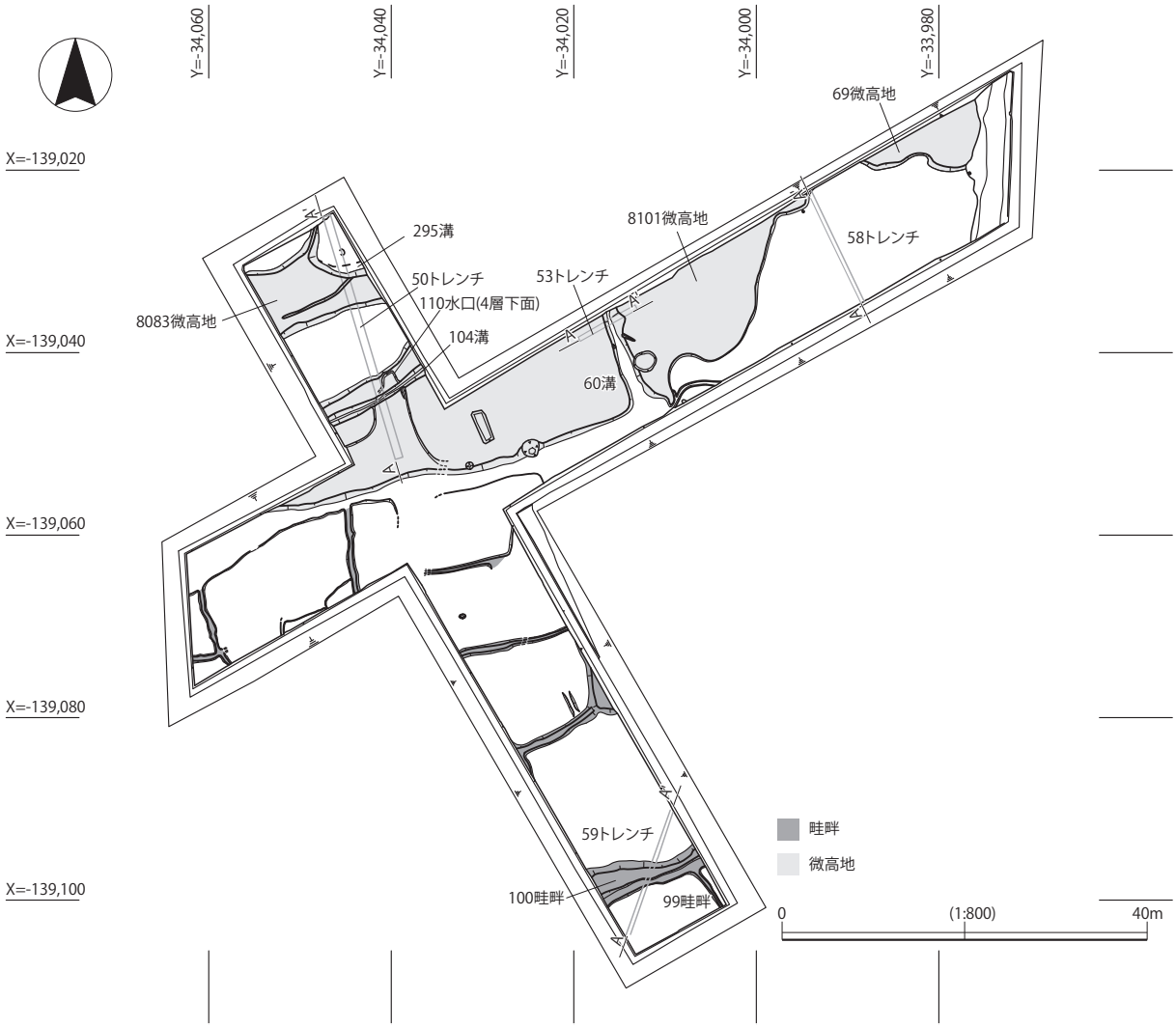
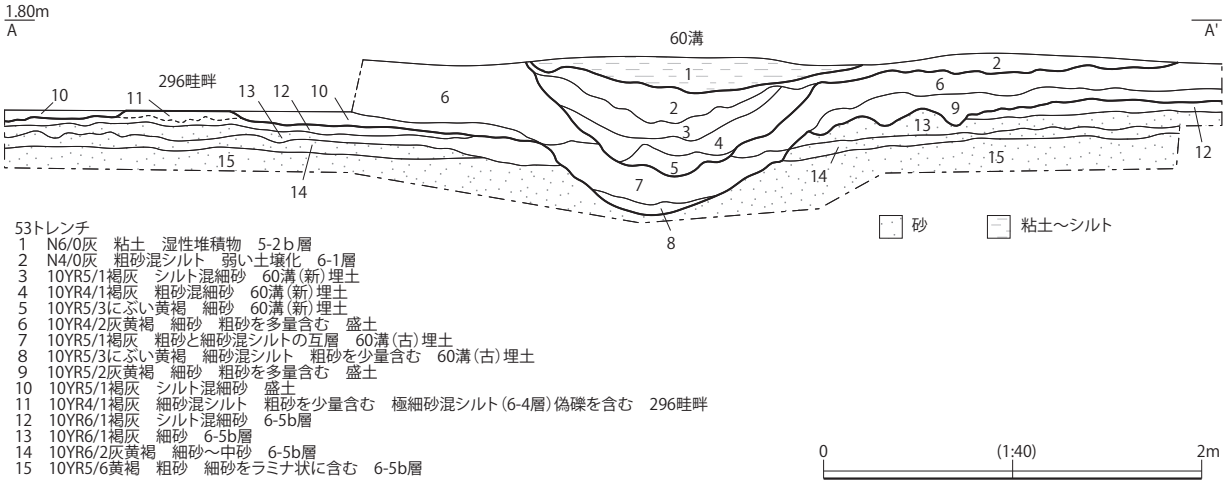
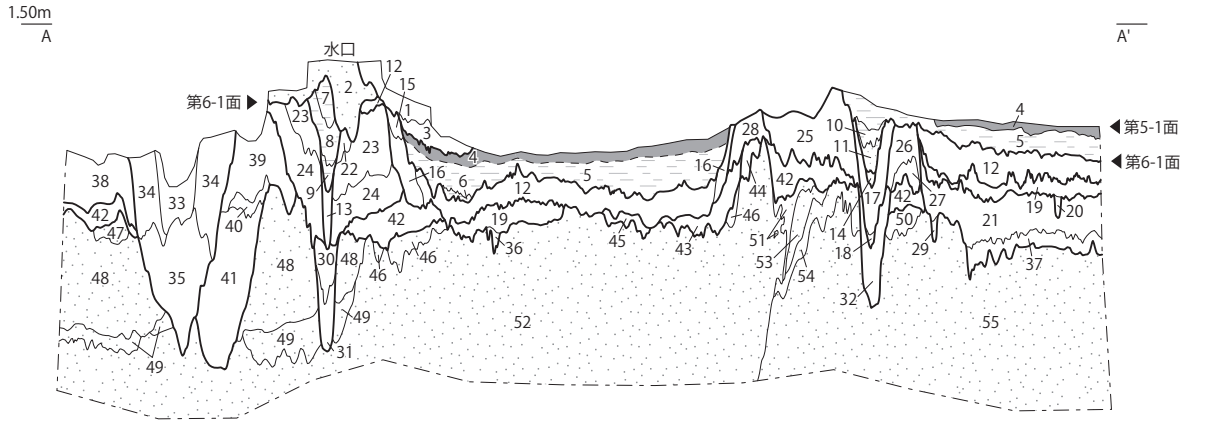


図 291　1－1・2－1区　第 6 － 2 面平面



53トレンチ
1　N6/0灰　粘土　湿性堆積物　5-2b層
2　N4/0灰　粗砂混シルト　弱い土壌化　6-1層
3　10YR5/1褐灰　シルト混細砂　60溝(新)埋土
4　10YR4/1褐灰　粗砂混細砂　60溝(新)埋土
5　10YR5/3にぶい黄褐　細砂　60溝(新)埋土
6　10YR4/2灰黄褐　細砂　粗砂を多量含む　盛土
7　10YR5/1褐灰　粗砂と細砂混シルトの互層　60溝(古)埋土
8　10YR5/3にぶい黄褐　細砂混シルト　粗砂を少量含む　60溝(古)埋土
9　10YR5/2灰黄褐　細砂　粗砂を多量含む　盛土
10　10YR5/1褐灰　シルト混細砂　盛土
11　10YR4/1褐灰　細砂混シルト　粗砂を少量含む　極細砂混シルト(6-4層)偽礫を含む　296畦畔
12　10YR6/1褐灰　シルト混細砂　6-5b層
13　10YR6/1褐灰　細砂　6-5b層
14　10YR6/2灰黄褐　細砂～中砂　6-5b層
15　10YR5/6黄褐　粗砂　細砂をラミナ状に含む　6-5b層

図 292　1－1・2－1区　53 トレンチ断面



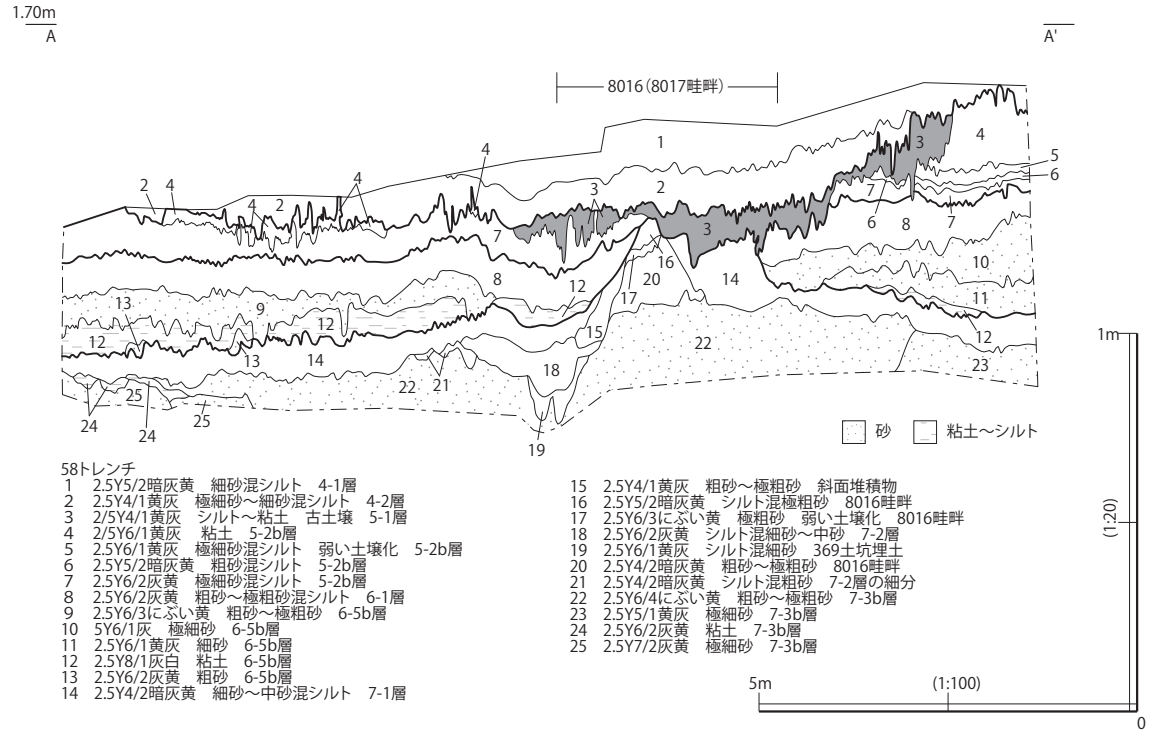
50トレンチ
1　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　作土層　4-1層
2　10Y3/1オリーブ黒　シルト混粗砂　4-1b層
3　10Y3/1オリーブ黒　極細砂～細砂混シルト　作土層　4-2層
4　2.5Y3/1黒褐　シルト～粘土　古土壌　5-1層
5　5Y3/1オリーブ黒　粘土　5-2b層
6　10Y4/1灰　粘土偽礫　5-2b層
7　7.5Y2/1黒　粘土　粗砂を少量含む　5-2b層
8　10Y2/1黒　粗砂混シルト　5-2b層
9　7.5Y2/2オリーブ黒　粗砂～極粗砂混シルト　5-2b層
10　7.5Y2/1黒　粘土偽礫　粗砂を少量含む　5-2b層
11　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂　5-2b層
12　7.5Y2/2オリーブ黒　シルト混粗砂　6-1層
13　10Y3/1オリーブ黒　粘土　粗砂を少量含む　6-1層に対比　104溝埋土
14　7.5Y2/2オリーブ黒　シルト混粗砂　6-1層に対比　295溝埋土
15　10YR4/1褐灰　シルト混細砂～中砂　盛土
16　7.5Y4/1灰　細砂～中砂　盛土
17　2.5GY3/1暗オリーブ灰　シルト混細砂～中砂　295溝埋土
18　2.5GY4/1暗オリーブ灰　粗砂混粘土～シルト　295溝埋土
19　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂　粘土の薄層を挟む
植物遺体・粗砂を少量含む　作土層　6-2層
20　N2/0黒　粗砂　378溝埋土
21　7.5Y3/1オリーブ黒　粘土混粗砂～極粗砂　作土層　6-3層
22　2.5GY3/1暗オリーブ灰　シルト混細砂　盛土
23　N5/0灰　細砂　粗砂を多量含む　盛土
24　10YR4/1褐灰　粗砂混極細砂　盛土
25　7.5Y3/2オリーブ黒　極粗砂混細砂　盛土
26　7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト　盛土
27　7.5Y2/2オリーブ黒　細砂～中砂混シルト　盛土
28　7.5Y4/2灰オリーブ　シルト混細砂　盛土
29　10YR5/1褐灰　シルト混粗砂～極粗砂　溝埋土
30　10YR5/2灰黄褐　細砂　粘土の薄層を挟む　104溝埋土
31　10YR6/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　104溝埋土
32　2.5GY2/1黒　粗砂混粘土～シルト　粗砂を少量含む　295溝埋土
33　10YR6/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　294溝(新)埋土
34　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　6-4層に似る　294溝(新)埋土
35　5Y5/2灰オリーブ　粗砂　294溝(新)埋土
36　10Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂　6-3層
37　10YR4/1褐灰　シルト混細砂　6-3層の細分
38　5Y4/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　盛土
39　10YR5/2灰黄褐　粗砂　盛土
40　10Y2/1黒　細砂混シルト　294溝(古)埋土
41　10YR6/1褐灰　粗砂～極粗砂　細砂～極細砂の薄層を挟む
2～3mm大の礫と互層　294溝(古)埋土
42　10Y3/1オリーブ黒　細砂混シルト　6-4層
43　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂　6-4層
44　7.5Y3/1オリーブ黒　粗砂　6-4層
45　7.5Y3/2オリーブ黒　シルト混細砂　6-5b層
46　10Y3/1オリーブ黒　シルト混細砂　6-5b層
47　5Y5/2灰オリーブ　細砂　6-5b層
48　7.5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　礫を含む　6-5b層
49　5Y5/1灰　シルト混細砂　6-5b層
50　10Y3/1オリーブ黒　細砂　弱い土壌化　6-5b層
51　5GY3/1暗オリーブ灰　細砂　6-5b層
52　5Y4/1灰　細砂～粗砂と2～3mm大の礫の互層　6-5b層
53　7.5Y4/1灰　細砂　6-5b層
54　10Y4/1灰　細砂　6-5b層
55　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　細砂のラミナを含む　3～5mm大の礫を含む　6-5b層

図 293　1－1・2－1区　50 トレンチ断面

側の微高地を高所として、微高地南側は緩やかに低くなっている。調査地北西では、8083 微高地と 8101 微高地の間が、6－5 b 層上面に形成された地形を反映して低くなっている。第 6－2 面では、自然堆積層の砂層ないし泥層に覆われた水田が調査地全体で検出された。

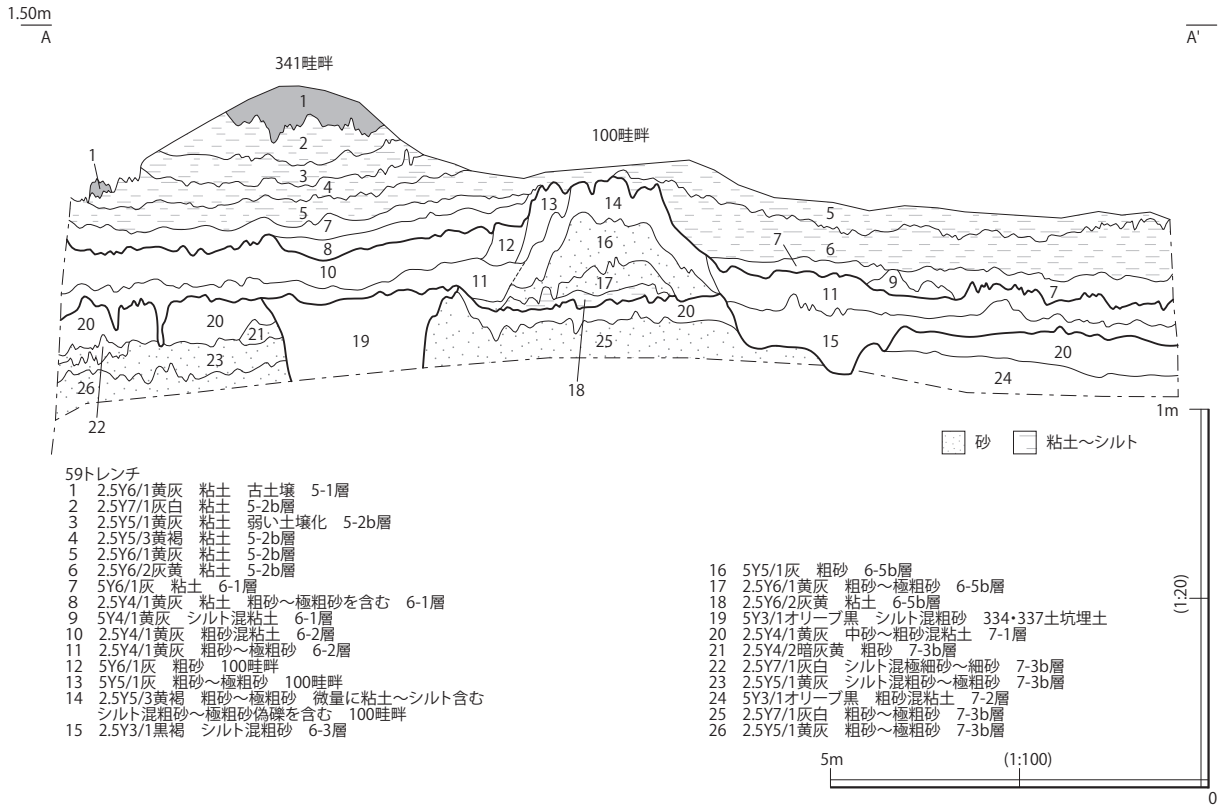
60 溝（図 248・291・292・302・304、図版 20）

8101 微高地で検出された。古墳時代の遺構面の調査時から認識された溝である。60 溝は、8101 微高地を西方向に流れたと考えられる 104 溝から南側の水田へ水を供給したと考えられる。規模は、幅 1.5



58トレンチ
1　2.5Y5/2暗灰黄　細砂混シルト　4-1層
2　2.5Y4/1黄灰　極細砂～細砂混シルト　4-2層
3　2/5Y4/1黄灰　シルト～粘土　古土壌　5-1層
4　2/5Y6/1黄灰　粘土　5-2b層
5　2.5Y6/1黄灰　極細砂混シルト　弱い土壌化　5-2b層
6　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂混シルト　5-2b層
7　2.5Y6/2灰黄　極細砂混シルト　5-2b層
8　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂混シルト　6-1層
9　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂～極粗砂　6-5b層
10　5Y6/1灰　極細砂　6-5b層
11　2.5Y6/1黄灰　細砂　6-5b層
12　2.5Y8/1灰白　粘土　6-5b層
13　2.5Y6/2灰黄　粗砂　6-5b層
14　2.5Y4/2暗灰黄　細砂～中砂混シルト　7-1層
15　2.5Y4/1黄灰　粗砂～極粗砂　斜面堆積物
16　2.5Y5/2暗灰黄　シルト混極粗砂　8016畦畔
17　2.5Y6/3にぶい黄　極粗砂　弱い土壌化　8016畦畔
18　2.5Y6/2灰黄　シルト混細砂～中砂　7-2層
19　2.5Y6/1黄灰　シルト混細砂　369土坑埋土
20　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　8016畦畔
21　2.5Y4/2暗灰黄　シルト混粗砂　7-2層の細分
22　2.5Y6/4にぶい黄　粗砂～極粗砂　7-3b層
23　2.5Y5/1黄灰　極細砂　7-3b層
24　2.5Y6/2灰黄　粘土　7-3b層
25　2.5Y7/2灰黄　極細砂　7-3b層

図 294　1－1・2－1区　58 トレンチ断面



59トレンチ
1　2.5Y6/1黄灰　粘土　古土壌　5-1層
2　2.5Y7/1灰白　粘土　5-2b層
3　2.5Y5/1黄灰　粘土　弱い土壌化　5-2b層
4　2.5Y5/3黄褐　粘土　5-2b層
5　2.5Y6/1黄灰　粘土　5-2b層
6　2.5Y6/2灰黄　粘土　5-2b層
7　5Y6/1灰　粘土　6-1層
8　2.5Y4/1黄灰　粘土　粗砂～極粗砂を含む　6-1層
9　5Y4/1黄灰　シルト混粘土　6-1層
10　2.5Y4/1黄灰　粗砂混粘土　6-2層
11　2.5Y4/1黄灰　粗砂～極粗砂　6-2層
12　5Y6/1灰　粗砂　100畦畔
13　5Y5/1灰　粗砂～極粗砂　100畦畔
14　2.5Y5/3黄褐　粗砂～極粗砂　微量に粘土～シルト含む　シルト混粗砂～極粗砂偽礫を含む　100畦畔
15　2.5Y3/1黒褐　シルト混粗砂　6-3層
16　5Y5/1灰　粗砂　6-5b層
17　2.5Y6/1黄灰　粗砂～極粗砂　6-5b層
18　2.5Y6/2灰黄　粘土　6-5b層
19　5Y3/1オリーブ黒　シルト混粗砂　334･337土坑埋土
20　2.5Y4/1黄灰　中砂～粗砂混粘土　7-1層
21　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂　7-3b層
22　2.5Y7/1灰白　シルト混極細砂～細砂　7-3b層
23　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂～極粗砂　7-3b層
24　5Y3/1オリーブ黒　粗砂混粘土　7-2層
25　2.5Y7/1灰白　粗砂～極粗砂　7-3b層
26　2.5Y5/1黄灰　粗砂～極粗砂　7-3b層

図 295　1－1・2－1区　59 トレンチ断面

m、深さ 0.7 mである。

6－5 b層上面の低い場所を加工して掘削されており、掘り直しを行いながら第6－2～6－5 b面の各段階で機能した溝である。第6－3面 297 溝、第6－5 b面 313 溝が機能した段階についても、60 溝肩部に形成された6－3・6－4層の堆積状況から、同時に併存したと考えられる。埋土は、土

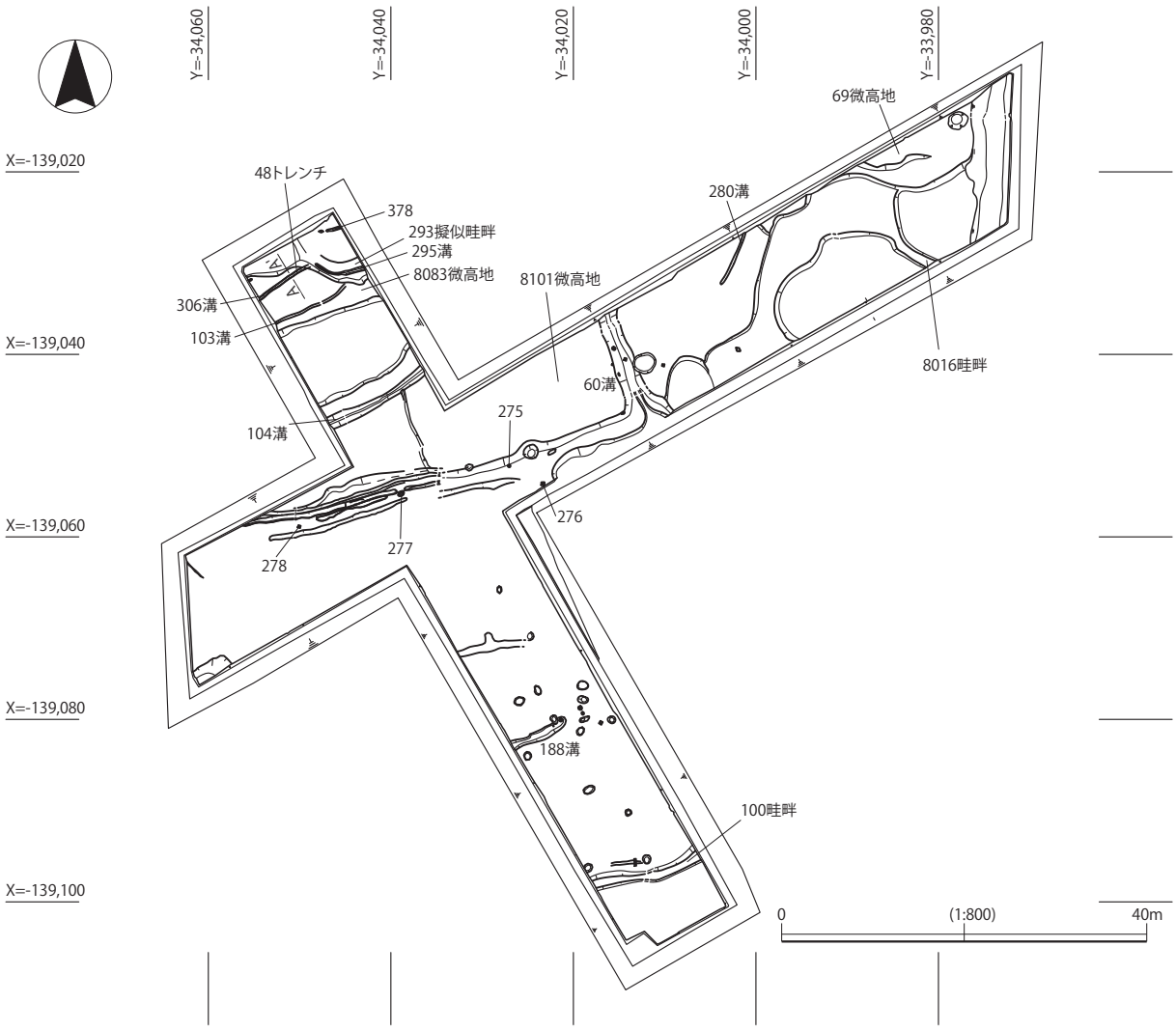


図 296　1－1・2－1区　第6－3面平面

壌或いは土壌由来の砂層で埋没しており、6－2・6－3層形成時に堆積したと考えられる水成層の砂層が下層に堆積する。なお、60 溝の西側肩部から図 304 － 11 の弥生土器の甕が出土した。Ⅳ様式以前のものと考えられる。

第6－3面（図 296、図版 20）

6－2層を除去して検出した遺構面で、6－3層とした粘土混粗砂～極粗砂の上面である。第6－3面では、第6－2面と同じ位置で擬似畦畔が検出された。低地における6－3層は遺存状況が悪く、6－2層を掘削した段階で6－5ｂ層上面が露出する部分があった。69・8101 微高地周辺は6－3層形成段階に大規模な造成が行われており、溝の開削と並行して、微高地縁辺の大幅な加工を行って、耕地を拡大するとともに、微高地に盛土を行って高さを増している。

8101 微高地上では、60・104・280 溝が検出された。60・104 溝はこの段階の基幹水路で、位置は離れるが、1－5区 5570 溝と接続して機能した可能性がある。

図 293 に示したとおり、104 溝は6－3層形成以降に基幹水路として機能したと考えられ、第6－4面 294 溝の埋没を契機として掘削された溝である。第6－5ｂ面の段階に水田開発に伴って微高地縁辺に 294 溝が掘削されて微高地が北側に拡張し（図 293）、6－3層形成段階に 104 溝が機能するようになると考えられる。8083 微高地の北側で検出された 295 溝は、第6－2面調査時には、斜面

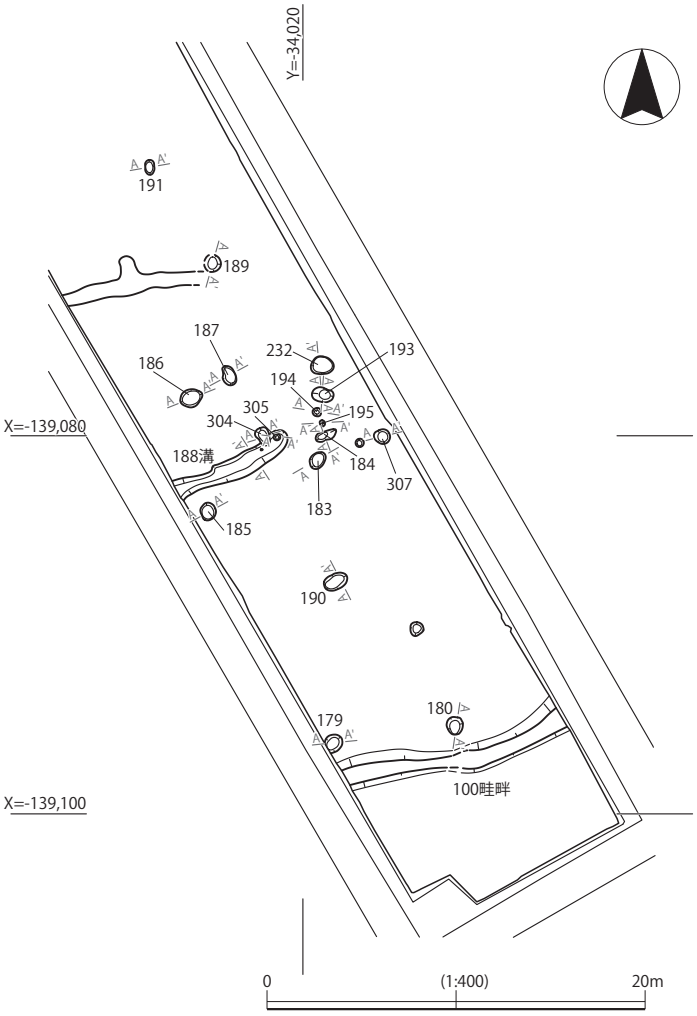


図 297　1－1・2－1区　第6－3面南東側平面

堆積物により認識されなかったもので、第6－3面精査時に畦畔と共に検出された。第6－4面では機能せず、第6－3層形成段階以降に、104 溝と同時期に機能したと考えられる。

1－5区第6－1面 5570 溝や2－2区 1841・1914 溝は同じ位置で掘り直しが行われるが、2－1区では 104・295 溝といった複数の、小規模な溝が機能する機能するようになると考えられる。1－5・2－2区は周辺に適当な微高地が無く、土地条件の制約があって、同じ場所に掘削された可能性がある。

調査地北西、8083 微高地上では 103・306 溝が検出された。流向は南西方向と考えられる。295 溝が水の供給源と考えられたが、高低差が逆転するため、295 溝から導水したとは考えられない。103 溝は第6－1面において検出された溝であるが、土壌化が顕著なことや、古墳時代以降においても微高地のままであったことから、103・306 溝は、遺構面の帰属が古墳時代以降になる可能性がある。

調査地北東、8016 畦畔周辺では、5－2 b層の堆積は 69 微高地内に認められただけであった（図 294）。8016 畦畔周辺は、6－1層形成段階には、平坦化がすすんでおり、第6－1面の標高はほぼ同一であった。

調査地南東、100 畦畔周辺は、6－5 b層上面の状況を反映して、地形的に高い場所である（図 297）。100 畦畔直下の6－5 b層は 8101 微高地を形成する6－5 b層と流向が同じで、土砂の供給源となる流路が側方移動することによってできた地形と考えられる。100 畦畔の北西側では、少数ながら溝・土坑が検出された。遺物がほとんど出土していないため、集落に伴うものではなく、耕作に関連して掘削されたと考えられる。

第6－3面の時期は、6－3層から遺物が出土しなかったため、2－1区調査成果から判断することはできなかった。2－2・4区の調査成果から、2－1区第6－2面は弥生時代中期後葉、2－1区第6－5 b面は弥生時代中期中葉に位置付けられ、6－3層は弥生時代中期中葉以降に形成されたと考えられる。

188 溝から出土した図 304 －6の壺体部は、弥生時代中期前葉に位置付けられるもので、溝の開削と微高地の造成は弥生時代中期中葉に行われたと考えられる。これ以降、弥生時代中期後葉に至るまで、地形的に大きな変化がなく、水田としての土地利用が継続している。

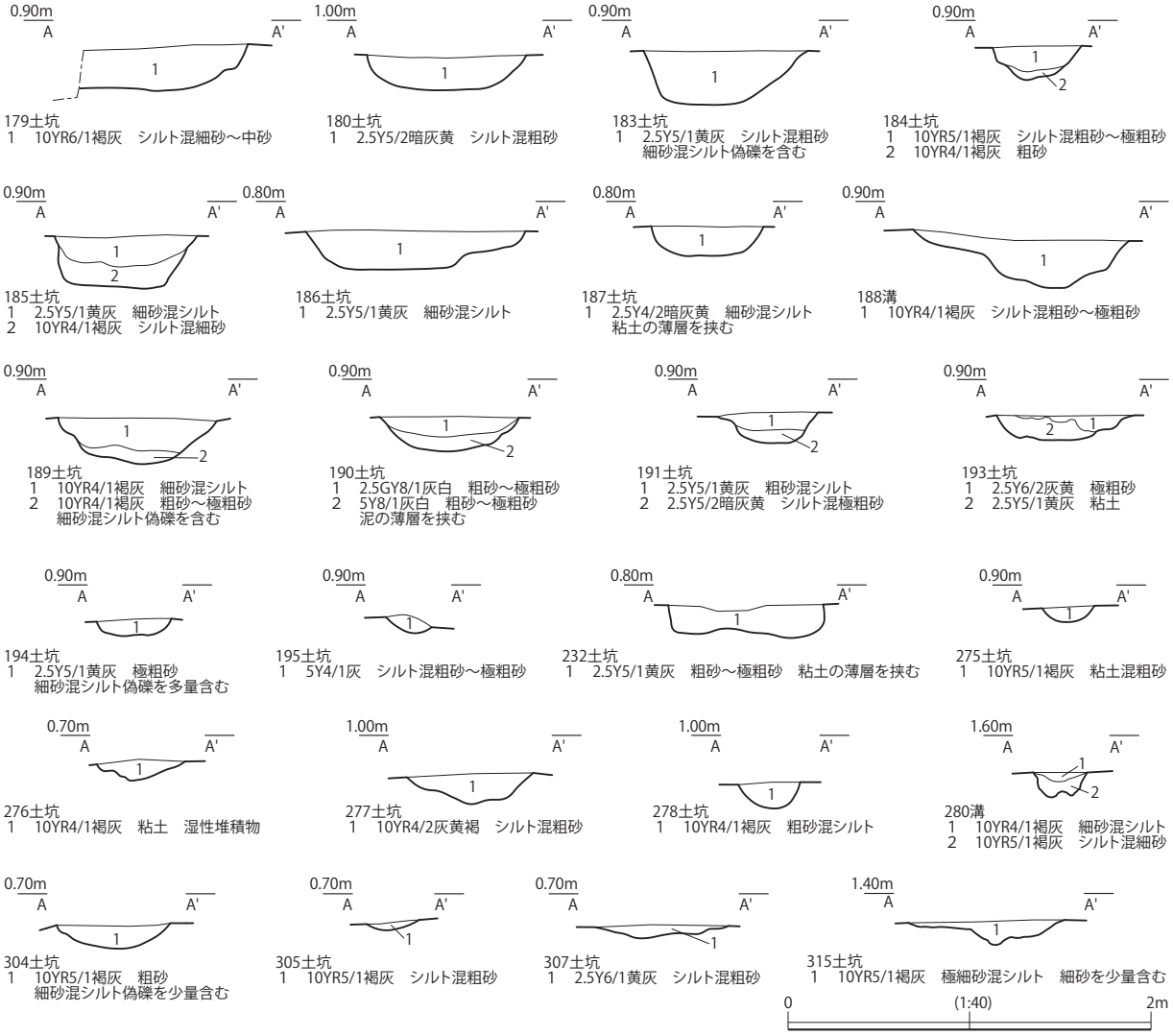


図 298　1－1・2－1区　179 土坑他断面

調査地南東側の土坑・溝（図 297・298）

179･180･186･187･189･190･191 土坑は、埋土が６－５ｂ層由来の砂層と古土壌に由来するブロック土で、埋土は類似する。遺物は出土しなかった。土坑がやや埋まった段階に粘土の薄層が入るものがあった。水田として土地利用されていた範囲内で検出されたことを考慮すると、放置された状態は考えにくく、短時の水採取を目的として限定的に使用されたものと考えられる。

また、第６－４面 299 溝直上で検出された 183 ～ 185・194・195・232・304・305・307 土坑は、断面形が不明瞭で、299 溝の埋土の一単位を検出した可能性がある。299 溝の加工面が失われており、溝が完全に埋没した段階に掘削されたものと断定できない状況で検出されており、299 溝の掘り直しに伴って加工した部分を検出した可能性がある。なお、第６－３面 188 溝は、299 溝埋土の上層を６－２層に対比させて掘削したものである。

第６－４面（図 299）

６－３層を除去して検出した遺構面で、６－４層としたシルト混粗砂の上面である。６－４層は微高地を中心に形成された古土壌で、低地では同層に対比できる地層は確認されなかった。６－４層は６－５ｂ層上部に形成された古土壌で、母材となる６－５ｂ層の土質と同じ砂質で、６－５ｂ層堆積以降に

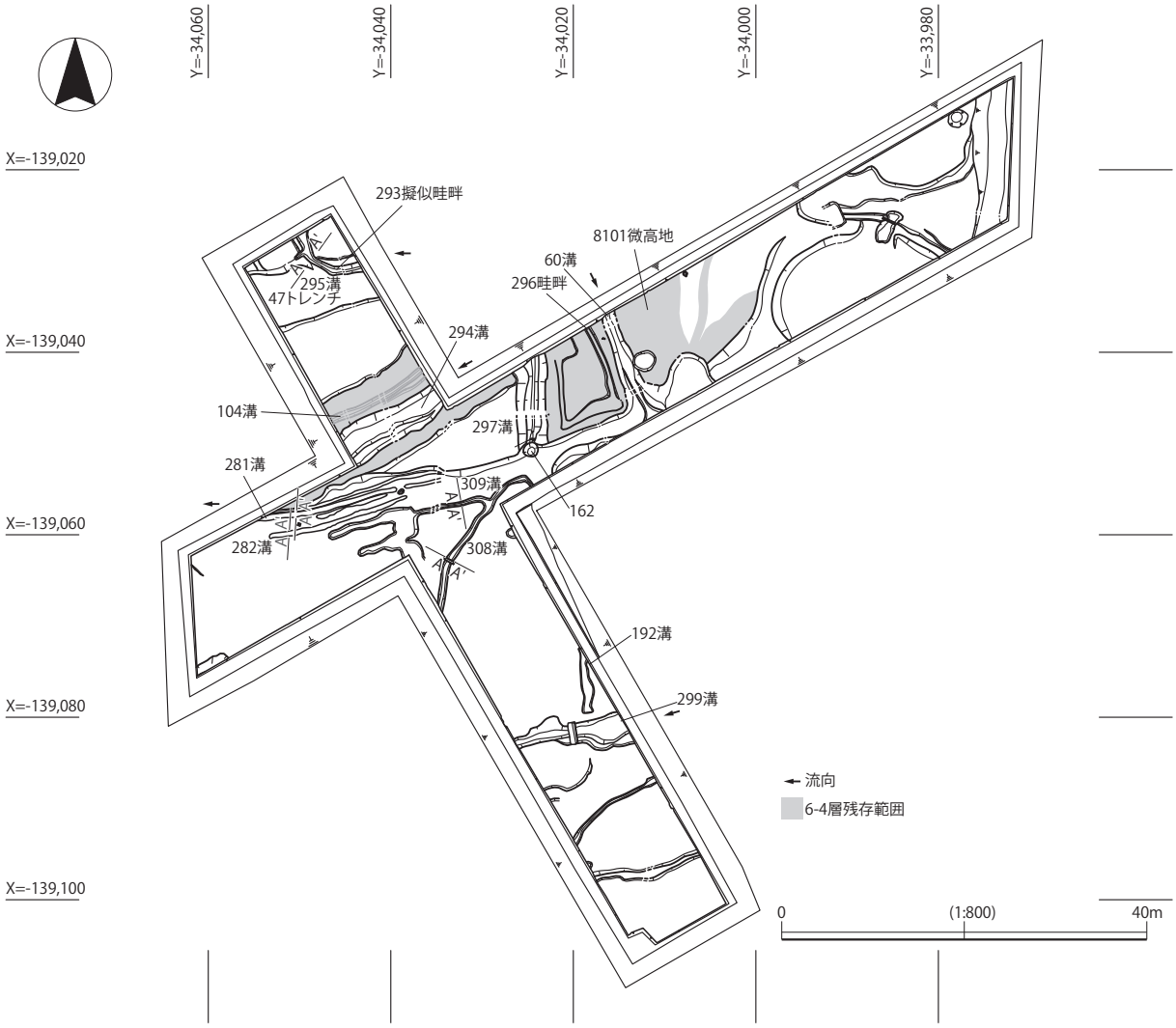


図 299　1－1・2－1区　第６－４面平面

運ばれた土砂がほとんど混じらない。微高地の６－４層は６－３層形成段階の盛土を除去して検出されており、微高地造成前の状況を示す遺構面で、いわば「旧表土」として把握される地層である。なお、６－４層は６－２・６－３層と異なり、層厚は薄いものの暗色が強いため、微高地を形成する盛土と区別しやすいものであったが、地層の連続性が確かめられないことが多く、形成時期については各地点で異なる可能性がある。遺物が出土していないため、検証することはできなかった。

297 溝・162 井戸（図 299・300）

297 溝は 8101 微高地上、162 井戸は、8101 微高地と田面の境界部で検出された。297 溝は 8101 微高地より以南には続かず、162 井戸と接続して水を供給したと考えられる。162 井戸の平面形は不整な円形を呈し、直径 1.6m、深さ 0.6m である。掘り直しが行われており、古・新段階に分けることが可能である。古段階の埋土は、下層が粗砂～極粗砂でブロック土が含まれる。新段階の埋土は、下層がブロック土、中層が湿性堆積物のシルト質粘土、上層は砂質・粘土質のブロック土である。162 井戸は湧水を得ると同時に、297 溝からの流水を受けて水溜めとしても機能したと考えられるが、新段階には水溜めとしてのみ機能したと考えられる。297 溝の規模は幅 1.0m 以上、深さ 0.5m である。埋土はシルト混細砂～極細砂で、第６－４面 313 溝の埋土に類似する。162 井戸と同様、掘り直しがあったことが想定される。古い段階は水成層の砂礫で埋没しており、この埋没を契機として掘り直しが行わ

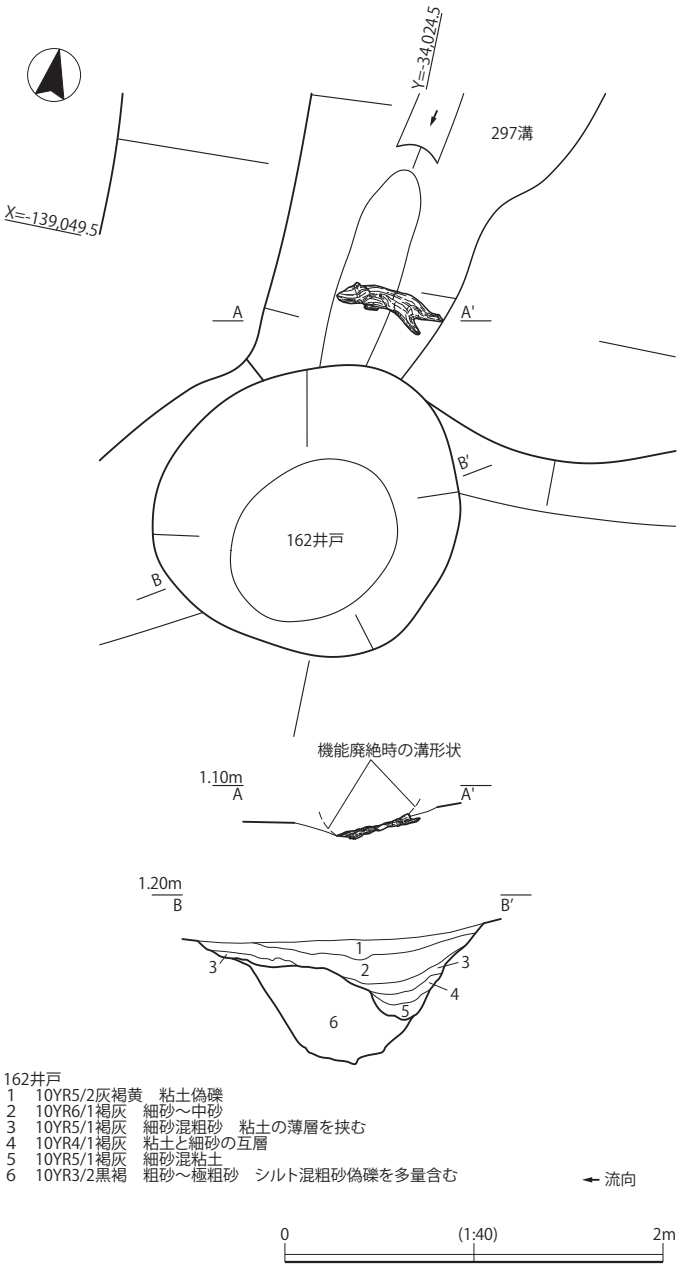


図 300　1－1・2－1区　297 溝平・立面・162 井戸平・断面

れたと考えられる。162 井戸に接続する部分では、溝に対し直交方向に置かれた木片が検出された。水の調節を行うために設置されたと考えられる。やや東に偏する位置から出土したことから、162 井戸の新段階に機能した可能性が高い。

なお、同様の目的で掘削された溝と井戸が、1－5・2－2・4区の当該期の遺構面で検出された。すべて微高地の縁辺部、水田と微高地の境界部に接して掘削されたものである。

296 畦畔（図 292）

60 溝と 297 溝に挟まれた部分では、6－3層形成段階の微高地上の盛土を除去し段階に微高地縁辺と 60・297 溝の肩部に沿って、296 畦畔が検出された。296 畦畔の規模は、幅 0.3 ～ 1.4 m、高さ 0.06 mである。溝肩部は緩やかな斜面地をなすため、土手状の盛土ではなく、微高地上の平坦面を囲うことを目的として畦畔は配置されている。区画内を水田として土地利用した可能性がある。296 畦畔の存在によって、当初、297 溝廃絶以降に 60 溝が掘削されたと考えていたが、同時に機能したことが確かめられた。8101 微高地の南側では、南方向に延びる擬似畦畔が検出されており、この擬似畦畔を境として、60・297 溝の水の供給先が異なった可能性がある。なお、水田が検出された範囲では、6－3層を除去した段階で6－5ｂ層が露出しており、帰属する遺構面は不明ながらも 308・309 溝が検出されており、第6－2・6－3面とは異なる灌漑が行われていたと考えられる。

294 溝（図 299）

8101 微高地で検出された。規模は、幅 3.0 m、深さ 0.5 mで、他の溝より規模が大きい。溝の両肩には堤が伴う。堤は、溝掘削時の排土が用いられており砂質である。294 溝では砂礫による埋没と掘

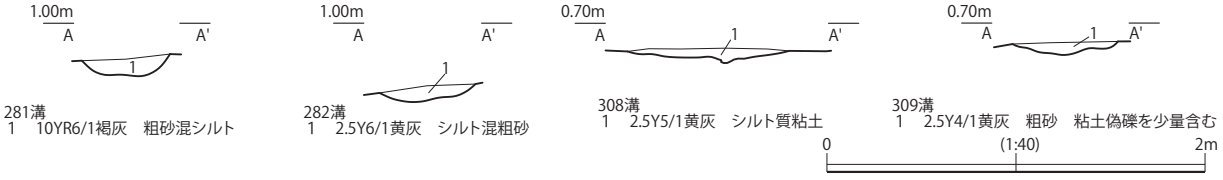


図 301　1－1・2－1区　281 溝他遺構断面

り直しが繰り返されており、１－５区 5570 溝と同様に６層形成段階の基幹水路として機能したと考えられる。5570 溝では水口の付け直しが確認されているが、294 溝は 60・297 溝、第６－５ｂ面 313 溝に水を供給したことが想定される。294 溝は遺物が出土しなかったが、弥生時代中期中葉を中心に機能したと考えられる。第６－５ｂ面 313 溝から第６－４面 297 溝への変遷は、294 溝から 104 溝への変遷と同期したものであったことが想定される。

192・299 溝（図 302）

調査地南東で検出された。299 溝に 192 溝は接続せず、その間は、ブリッジ状に高くなっている状況が検出された。299 溝は加工面に近い状態で検出しており、本来、192 溝と接続して機能したと考えられる。ブリッジ状に高くなる部分は、水の水量を調節する機能が想定される。192 溝の規模は、幅 1.3 m、深さ 0.07 mである。299 溝の規模は、幅 3.2 m、深さ 0.26 mである。両溝の埋土は、シルト混粗砂のブロック土で、最終的に埋め戻されたと考えられる。299 溝埋土の上部については、第６－３面で 188 溝として掘削しており、188 溝から図 304 －６の壺体部が出土した。Ⅲ様式に位置付けられる。

第６－５ｂ面（図 302、図版 20）

６－４層を除去して掘削した遺構面で、６－５ｂ層とした砂層の上面に当たる。先述したとおり、６－４層は 8101 微高地上、６－３層形成段階の盛土直下にのみ遺存したため、６－３層を除去した段階

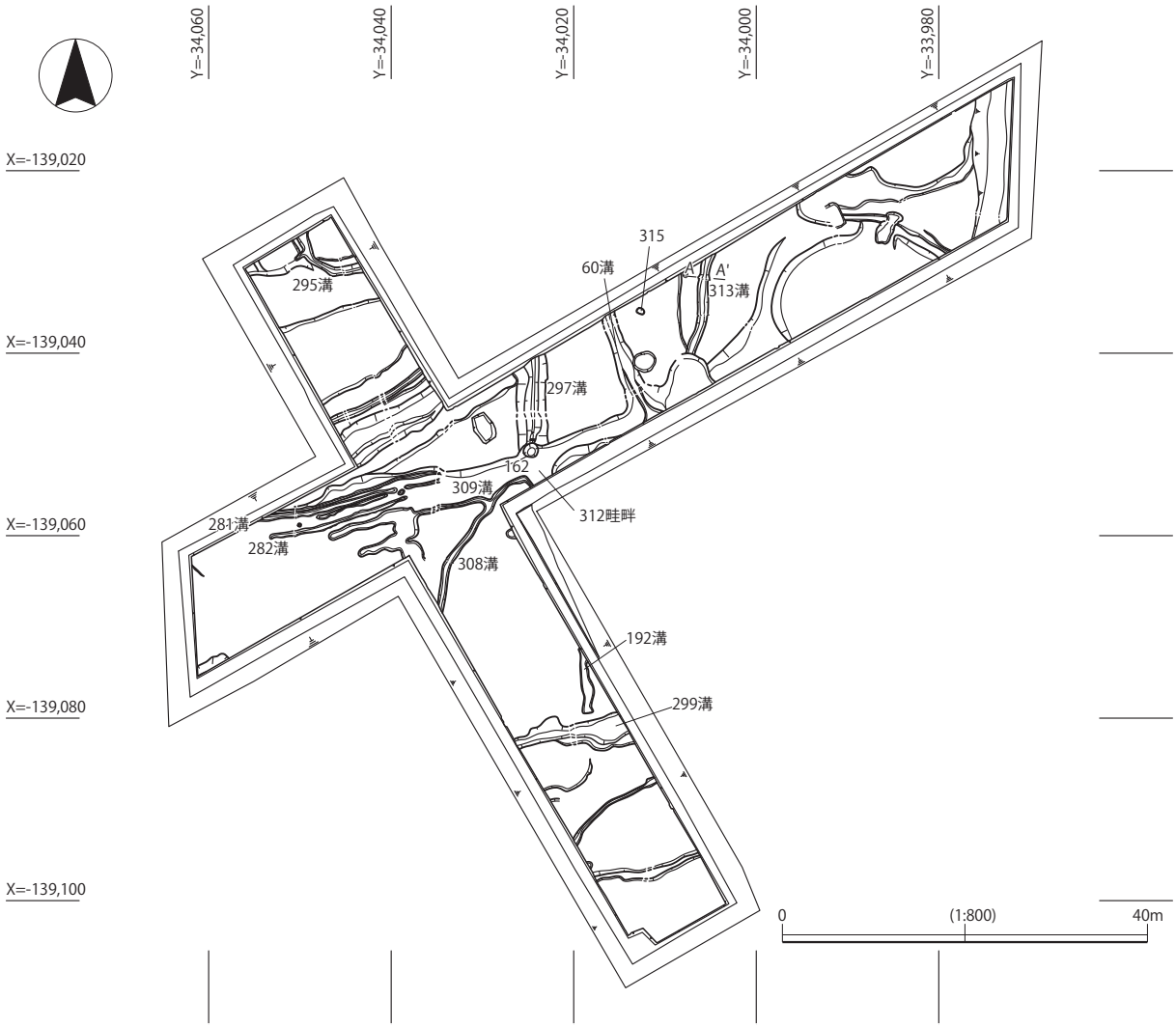


図 302　１－１・２－１区　第６－５ｂ面平面

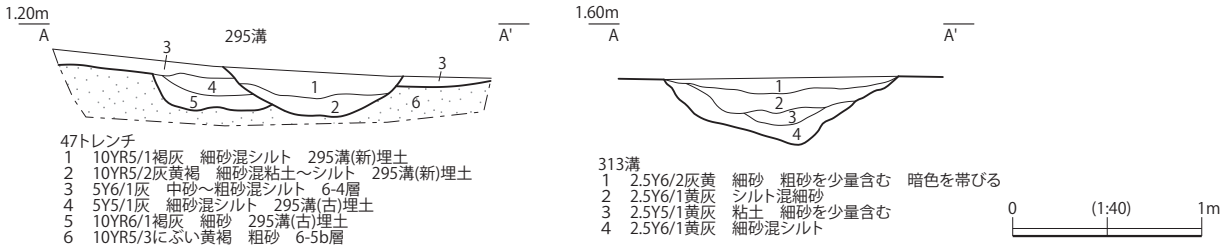


図 303　1－1・2－1区　295・313 溝断面

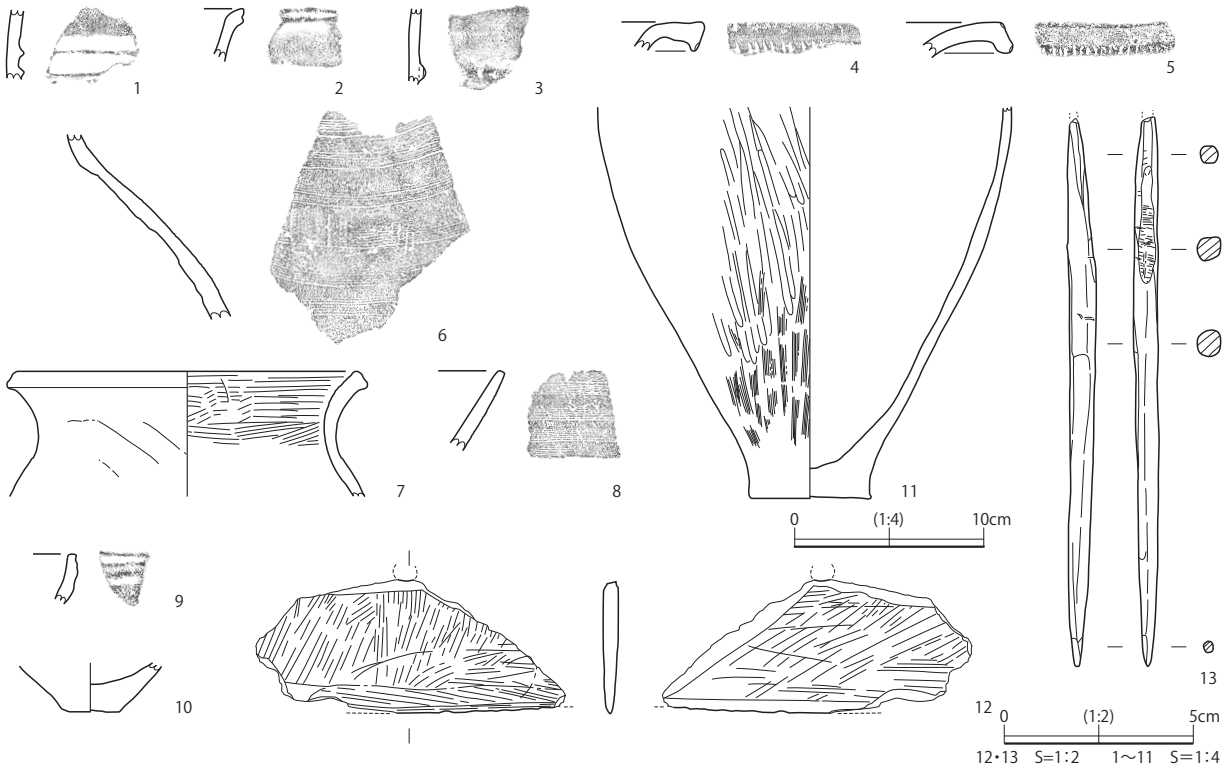


図 304　1－1・2－1区　188 溝・6－2～6－5 b層出土遺物

で、調査地全体は 6 － 5 b層が露出した状態となる。図 302 は 8101 微高地以外は第 6 － 4 面の平面図を合成したものである。第 6 － 5 b面では、8101 微高地で溝とピットが検出された。8101 微高地の南側、281・282 溝が検出された範囲では、東西の溝が複数検出された。地形の平坦化、耕地の拡大に合わせて、地形が高くなる北側に溝が移動したと考えられる。

313 溝（図 302・303）

60 溝の東で検出された。流向は南西方向である。規模は、幅 1.2 m、深さ 0.35 mである。埋土は、下層が泥質の細砂混シルト、上層がシルト質の砂層である。溝の直上には、6 － 4 層が形成されており、溝埋土の上層は 6 － 4 層に対比される。微高地縁辺の水田との境界部は土坑状に加工されており、第 6 － 3 面 162 井戸のような水溜めの機能があった可能性がある。313 溝は、60 溝の溝肩部に形成された 6 － 4 層の堆積状況から、先に埋没したと考えられる。よって、8101 微高地上の溝は、294・313 溝→ 60・294・313 溝→ 60・294・297 溝→ 104・60 溝という変遷で機能したと考えられる。

6 層出土遺物（図 304、図版 78・86・87・118）

図 304 － 1・4・5・7・8 は 1 － 1 区、それ以外は 2 － 1 区から出土した。1・2・12 は 6 － 2 層から出土した。1 は弥生土器壺である。2 は弥生土器甕。全体は磨滅する。3・4 は 6 － 3 層から出土した。3 は縄文土器深鉢である。突帯に線状の刻目が施される。長原式新段階。4 は壺口縁部である。5・

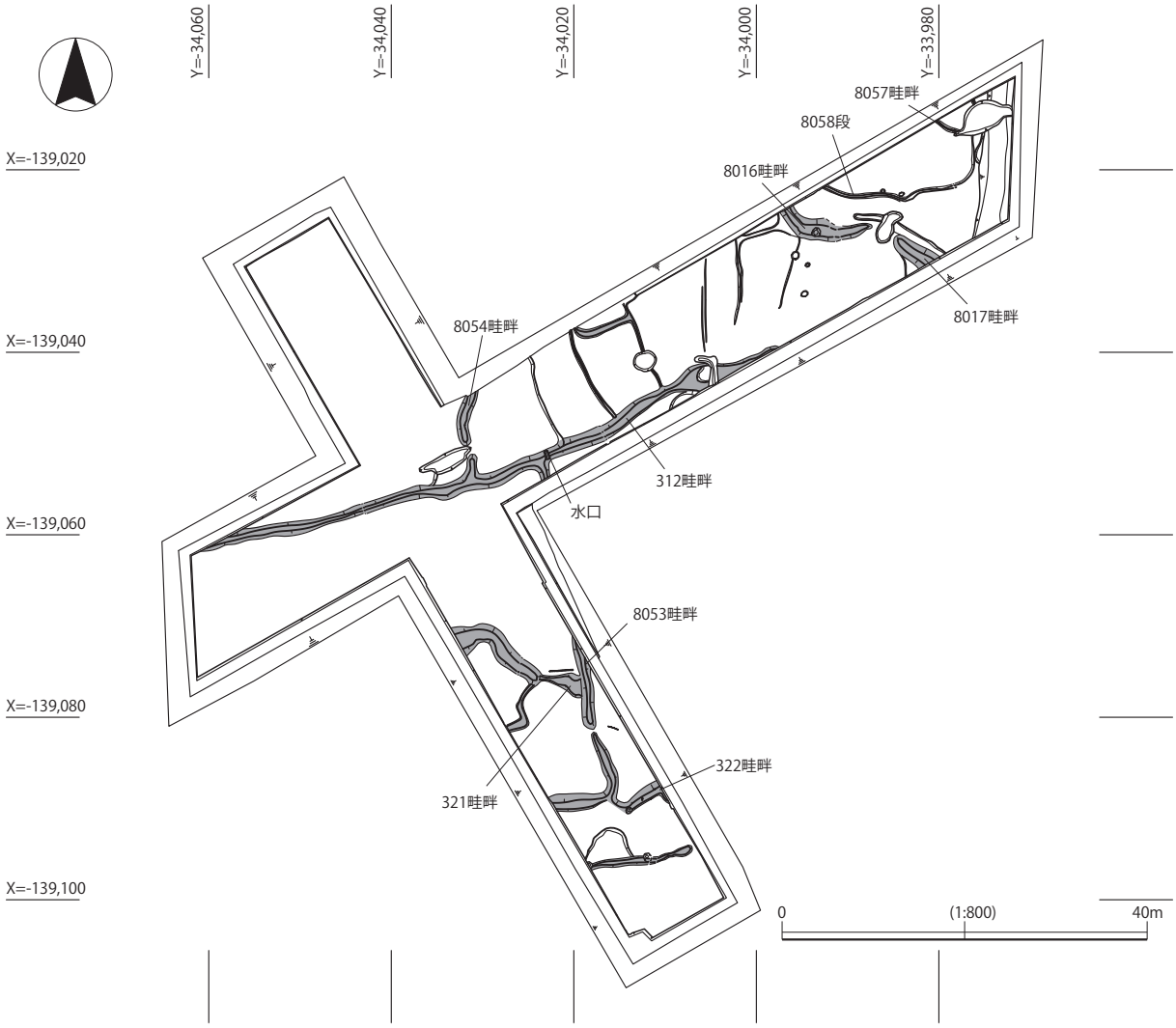


図 305　1－1・2－1区　第7－1面平面

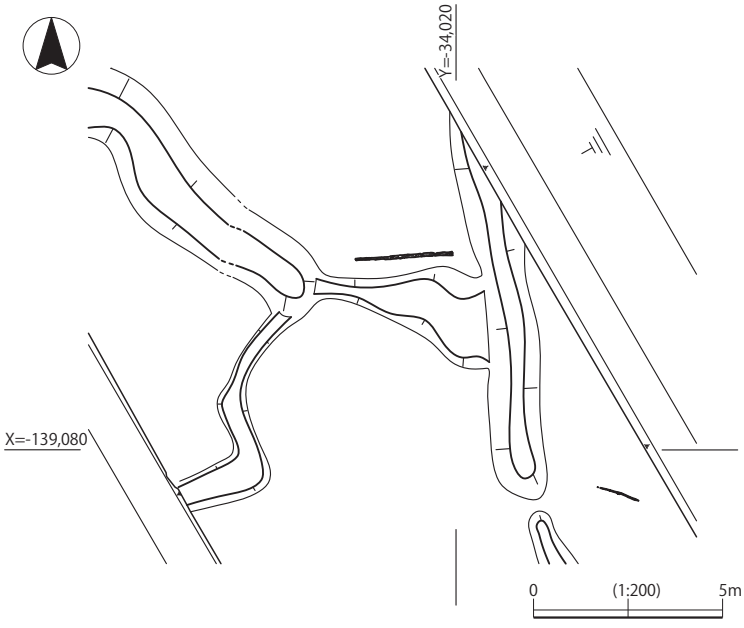


図 306　1－1・2－1区　第7－1面遺物出土状況平面

7～10・13は6－5b層から出土した。5は壺で、口縁端部の上下に刻目が施される。7は壺で、外面はナデ調整、内面は粗いハケが施される。8は鉢で、外面は櫛描き直線文が施される。9・10は縄文土器深鉢である。9は凹線が2条施される。宮滝式に比定される。11は甕である。60溝の肩部から出土した。12は磨製石庖丁である。貫通孔が上部に1箇所確認できる。研磨は粗い仕上がりで、研磨痕が筋状に残る。13は漁具の錘か。下端は先細りに削られ、上端は下端よりも粗いケズリで加工される。上端の加工は転用・廃棄時の加工か。

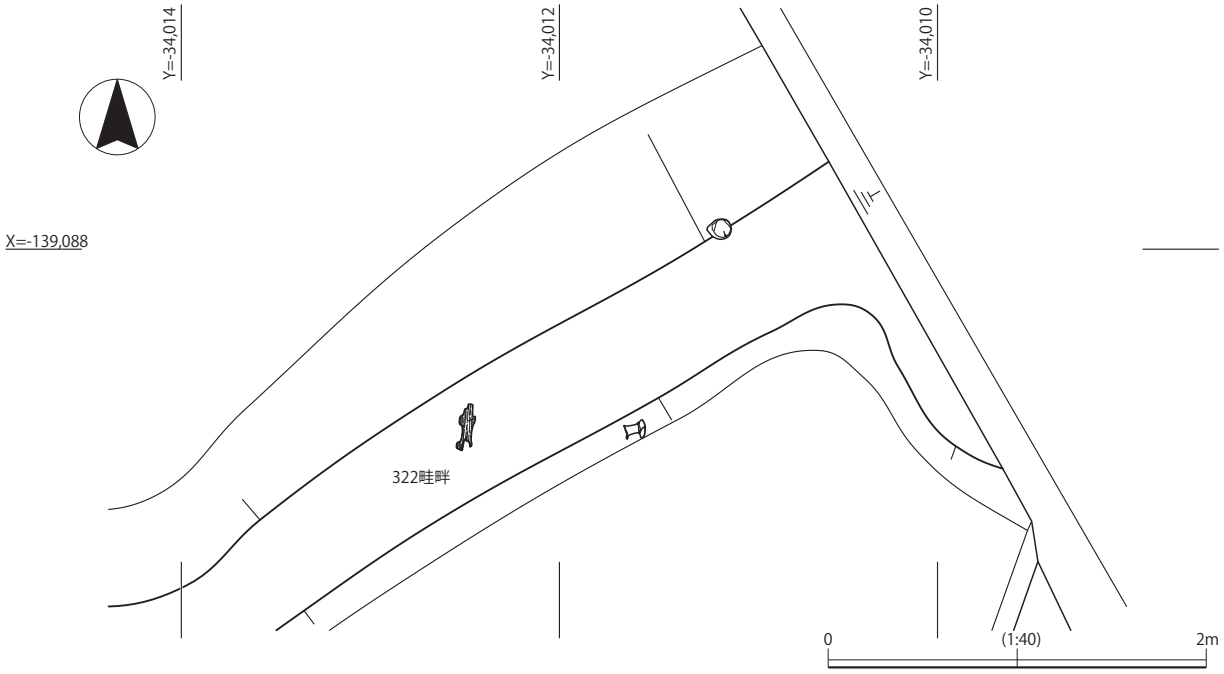


図 307　1－1・2－1区　322 畦畔平面

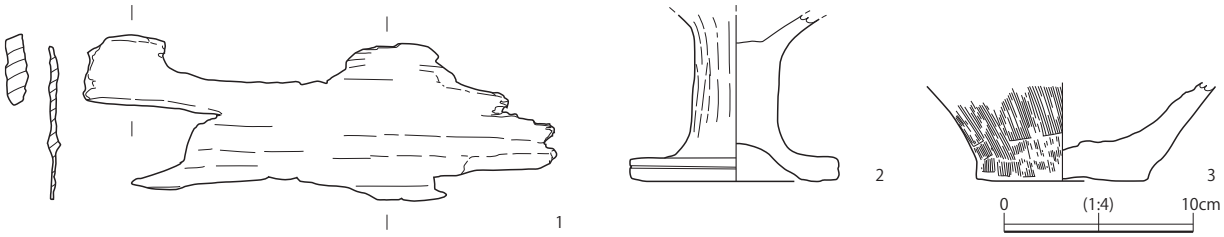


図 308　1－1・2－1区　322 畦畔出土遺物

第７－１面（図 305、図版 20）

６－５ｂ層を除去して検出した遺構面で、７－１層としたシルト質粘土の上面に当たる。７層は３層に細分可能で、７－１・７－２層は水田作土である。第７－１面では、調査地全体で水田が検出された。地形は調査地北東と南東が高く、北西方向に向かって全体的に低くなっている。

水田（図 305・308）

調査地北東では、小区画水田が検出された。8016 畦畔から 8054 畦畔の間は 312 畦畔に直交する小畦畔が検出されており、南西方向に低くなる地形に合わせた畦畔が設置される。8016 畦畔以東では、8058 段で囲まれた範囲が高くなっているが、これは７－３ｂ層上面の地形が反映されたものである。8058 段と 8016 畦畔の間は、溝状に低くなっており、同範囲を利用して北西側に水を回したと考えられる。調査地南東では、北西方向に低くなる微地形に合わせて 321・322 畦畔が設置された。321 畦畔の西側では、歪な区画の水田が検出されたが、これは下層の７－３ｂ層の堆積範囲を反映したものである。調査地北西・南西は、312 大畦畔以外の畦畔は検出されなかった。平坦な地形が広がっており、区画そのものが広かったか、地震の影響によって検出されなかった可能性がある。調査地南東の 321 畦畔に近接して棒状の木片が出土した。１点は 321 畦畔に平行した状態で、１点は水口に近接して出土した。２点共に、７－１層に帰属し、耕作に障害となる木片が畦畔近い場所に廃棄されたと考えられる。また、322 畦畔では、畦畔上部から、図 308 －１～３の木製品・土器が出土した。１は不明木製品である。全体に腐食が顕著で加工痕は不明。形状は「ハ」の字形に復元できる可能性があり、上部の切り欠きか

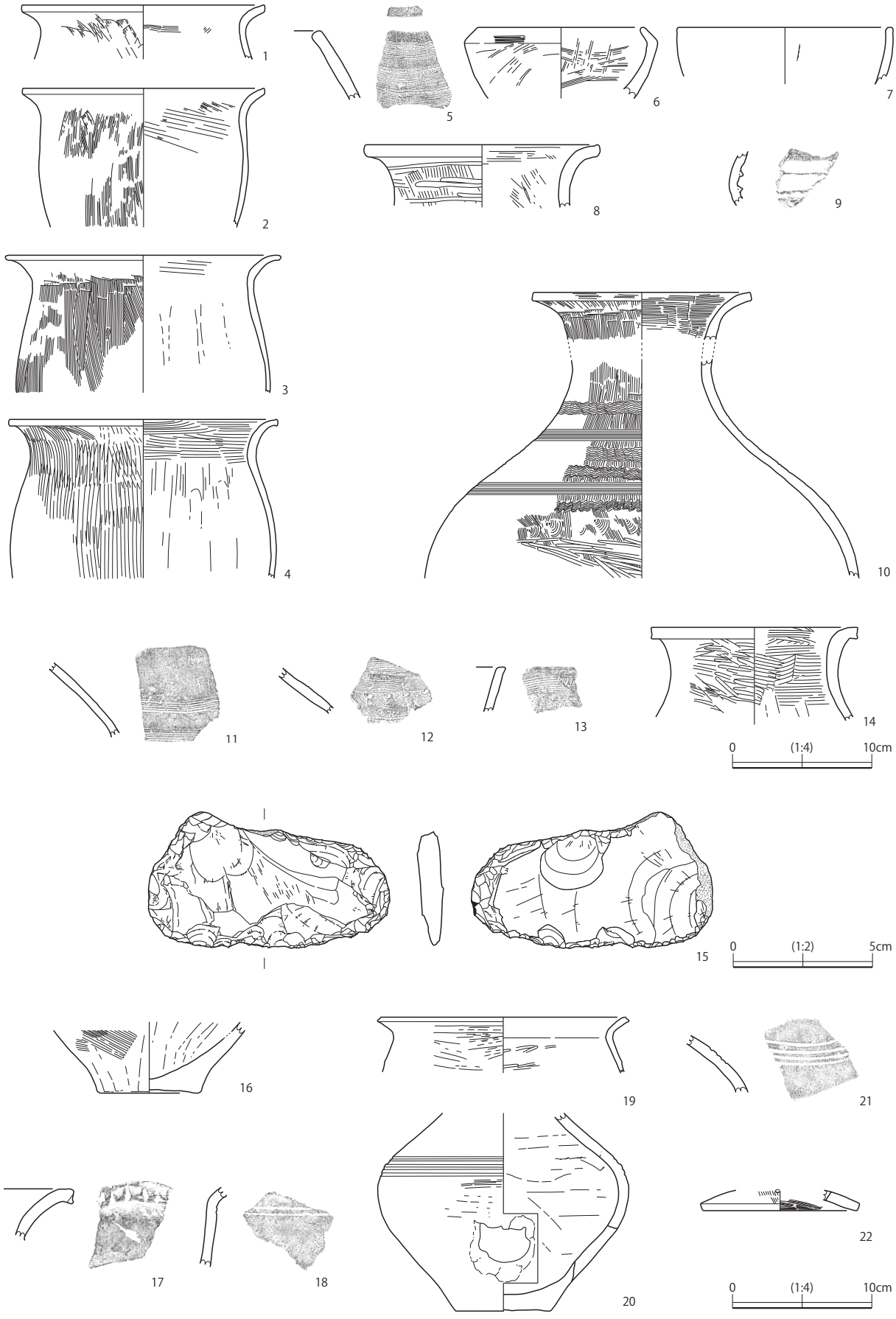


図 309　1－1・2－1区　7－2層他出土遺物

ら、脚台など組物として使用された可能性がある。２は弥生土器高坏である。脚柱部外面及び脚部内面はナデ調整で、脚端部の面にはヘラ状工具で沈線文が施される。３は弥生土器壺の底部片である。高坏脚部・壺底部は、321 畦畔と同じく、畦畔内に廃棄されたものか。

７－１・７－２層出土遺物（図 309、図版 77 ～ 79・86・87）

７層に関連する遺物を、図 309 －１～ 22 を図示した。１～ 15 は１－１区、16 ～ 22 は２－１区から出土した。１～ 11･15 は７－１層、12 ～ 14･17 ～ 21 が７－３ｂ層、22 は側溝掘削時に出土した。１～４は甕で､外面はハケ調整される｡頸部は緩やかに屈曲し､口縁部は歪な形状を呈す。５は無頸壺で、口縁端部に櫛描波状文、外面に櫛描直線文が施される。６は無頸壺で、口縁部が内側に屈曲する。内外面は板ナデ調整される。７は鉢で、内外面はナデで仕上げられ、内面は成形時に板ナデ調整された可能性がある。８～ 12・14 は壺である。10 は櫛描波状文・直線文・扇形文、11 は櫛描直線文、12 は櫛描直線文･扇形文が施される。13 は鉢で、櫛描直線文･扇形文が施される。15 はサヌカイト製削器で、下端に微細な剥離調整によって刃部を作り出しており、両側縁には形状を整えた際の微細な剥離が認められる。16 は壺底部である。外面は板ナデの後ハケが施される。17 は壺口縁で、口縁端部の突帯に刻目が施される。18 は弥生時代前期の甕で、沈線文が２条施される。19 は甕で、外面は表面を横方向にナデ付けるように板ナデ調整されており、ミガキ様に部分的に仕上げる。20 は体部下位に不整形な形

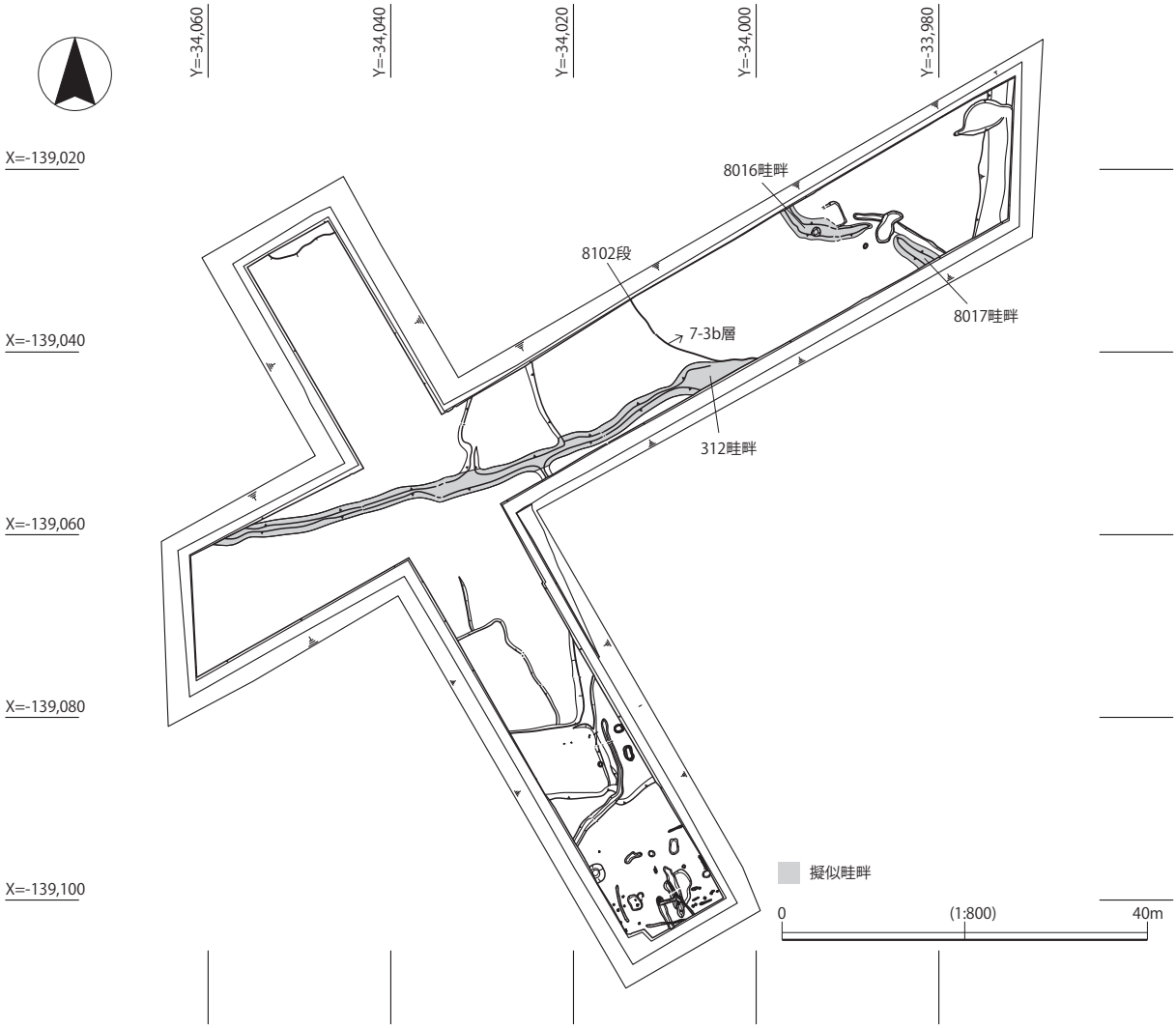


図 310　１－１・２－１区　第７－３ｂ面平面

状の孔があいており、意図的に穿たれた可能性がある。全体に磨滅しており、調整は不明瞭であるが、外面はヘラミガキされたと考えられる。21 は弥生前期の壺体部で沈線文が 4 条施される。22 は壺用蓋で内外面はハケ調整される。Ⅱ－２様式の資料を中心に弥生時代前期の土器が一部混じる。

第７－３ｂ面（図 310・311、図版 21）

７－１・７－２層を除去して検出した遺構面で、７－３ｂ層とした砂層の上面に当たる。７－１・７－２層を掘削した段階で、調査地の大半は８－１層上面が露出した状態となる。７－３ｂ層が良好に遺存するのは、調査地南東と、第８－１面 8102 段以東であるが、両地層が同時期に堆積したものか、連続性は確認できなかった。調査地南東の７－３ｂ層は集落が検出された微高地を形成するが、それ以外の場所では堆積が認められなかった。第７－３ｂ面で、調査地南東の微高地上で溝・土坑・ピットが検出された。なお、７－２層については、地層の掘り分けと遺構面の精査作業を行ったが、基本的な所見は第７－１面と変わらないもので、平面図は割愛した。

324 溝（図 311・313・314、図版 21・77・79）

326 土坑の西側で検出された。規模は幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.2 mである。溝の北西側で弥生土器がまとまって出土した。遺物の集中状況から他の遺構の可能性を検討したが、埋土に切り合い関係を示す痕跡は無くすべて 324 溝に帰属する遺物である。324 溝から出土した土器には図 314 － 1 ～ 11 がある。１・２・４～６は甕である。外面には粗いハケが施され、２・４の口縁端部には刻目が施される。３は鉢である。端部は面をもっており口縁部の仕上時のナデの影響で面の内側がやや拡張する。７～ 10 は壺である。10 は 328・332 土坑、７－１・７－３ｂ層から出土した破片と接合した。外面は口縁直下

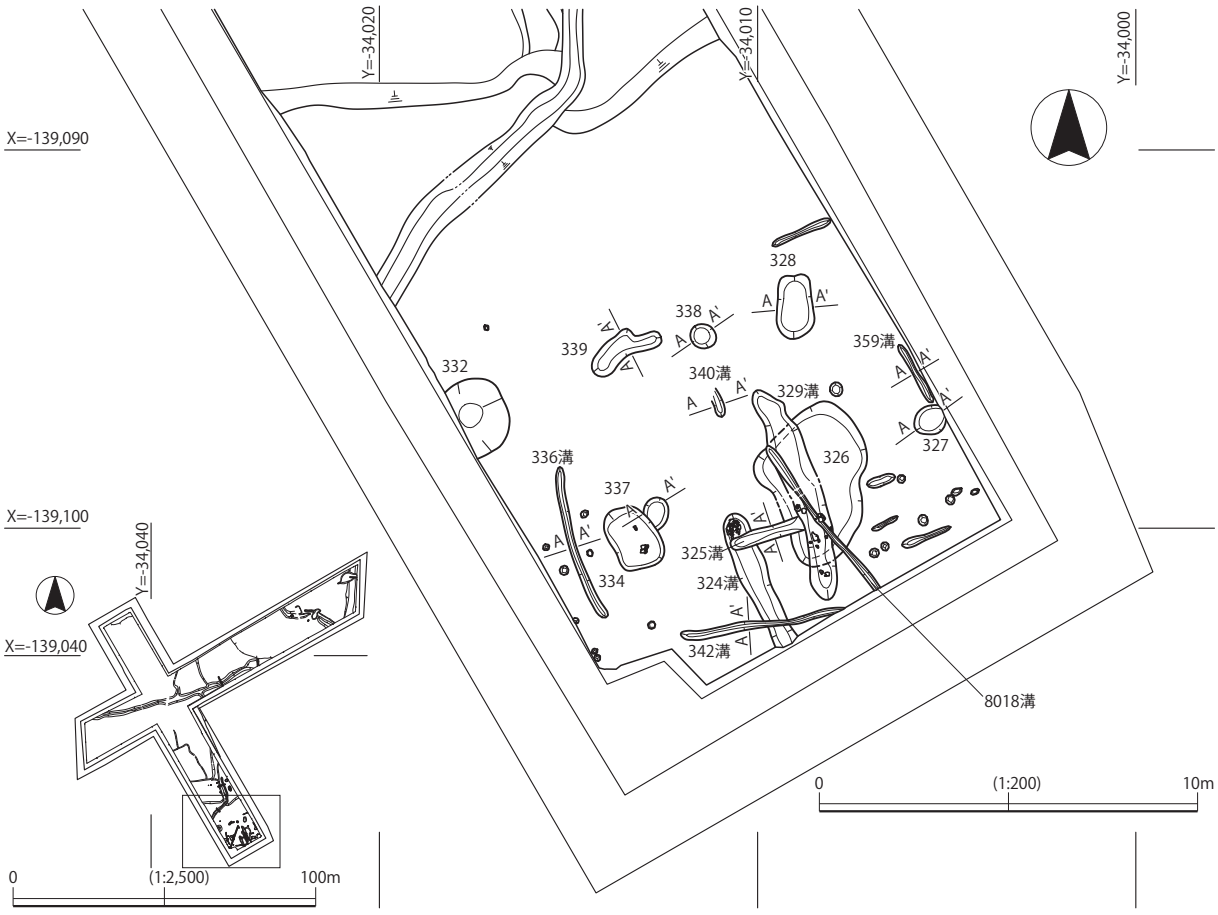


図 311　１－１・２－１区　第７－３ｂ面南東側平面

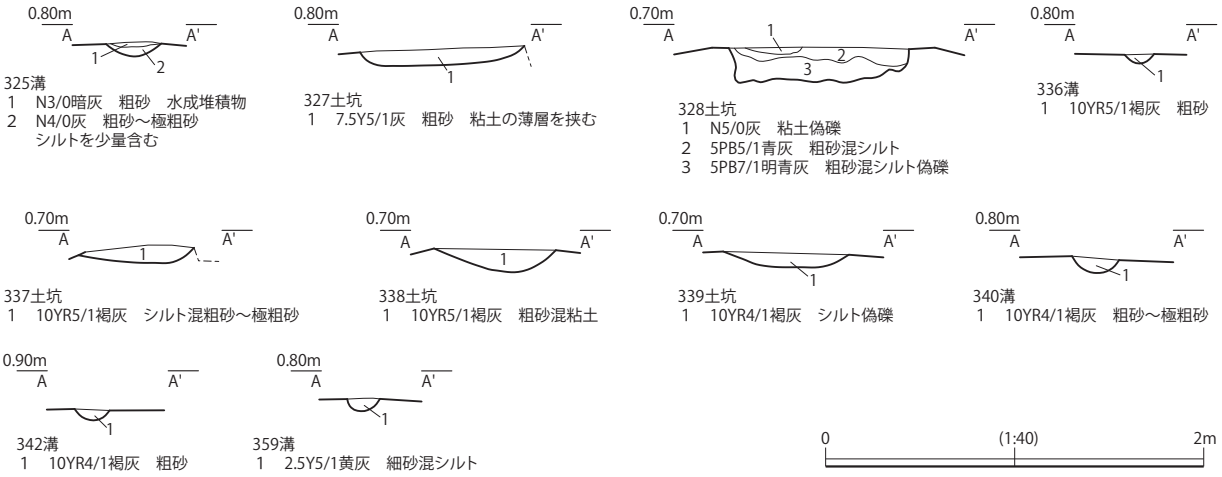


図 312　1－1・2－1区　第7－3ｂ面遺構断面

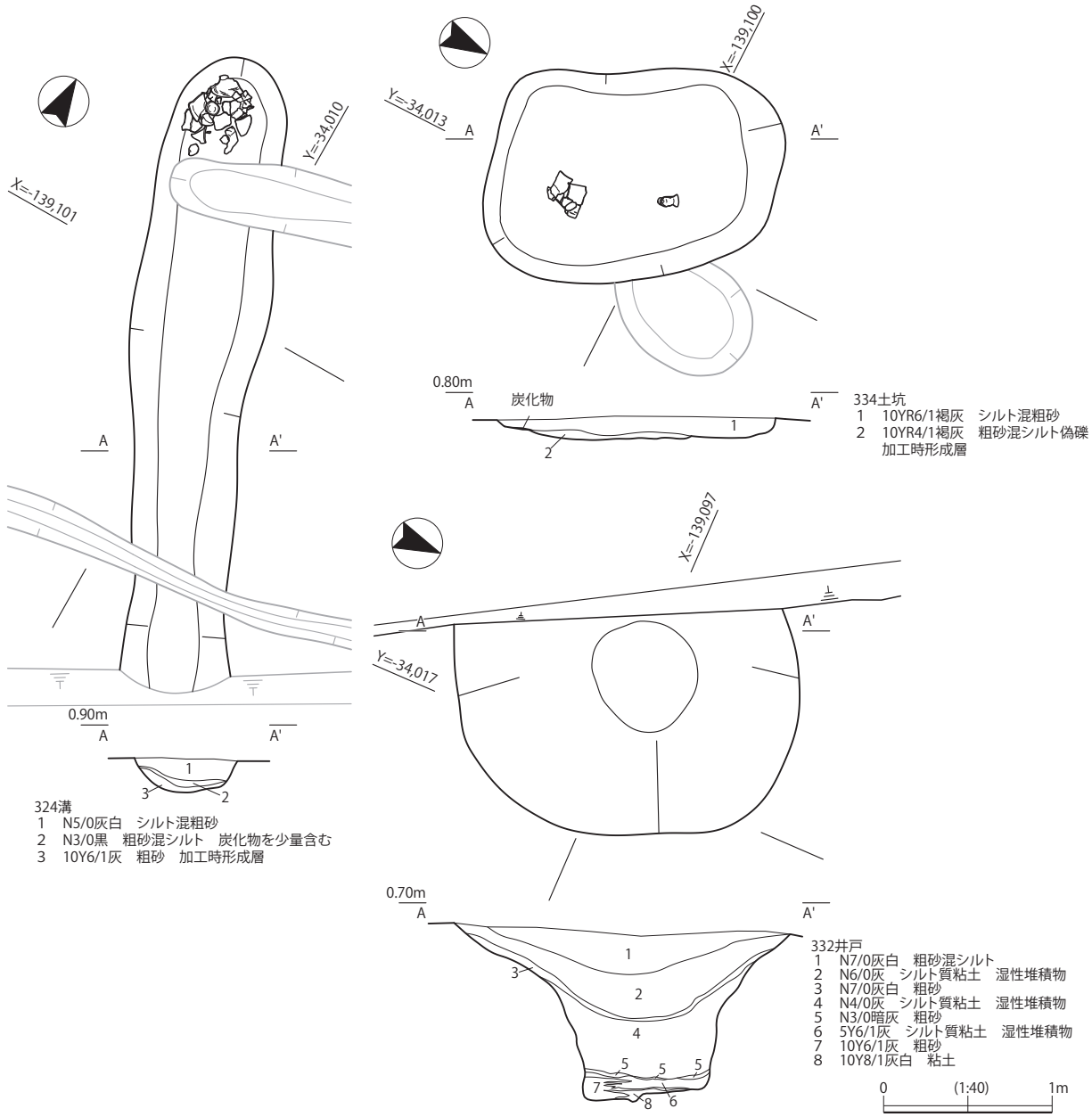


図 313　1－1・2－1区　324 溝・334 土坑・332 井戸平・断面

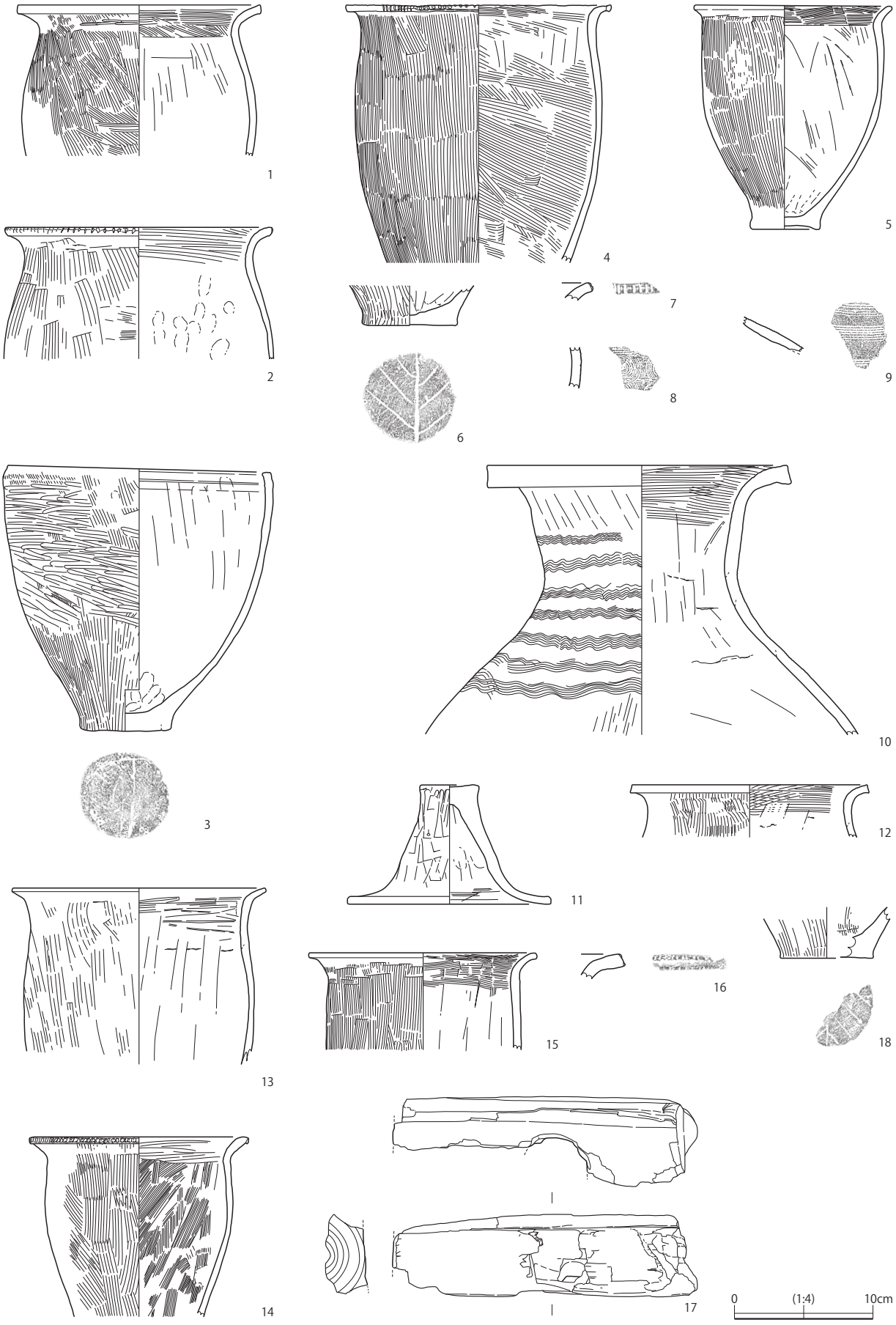


図 314　1－1・2－1区　324 溝他出土遺物

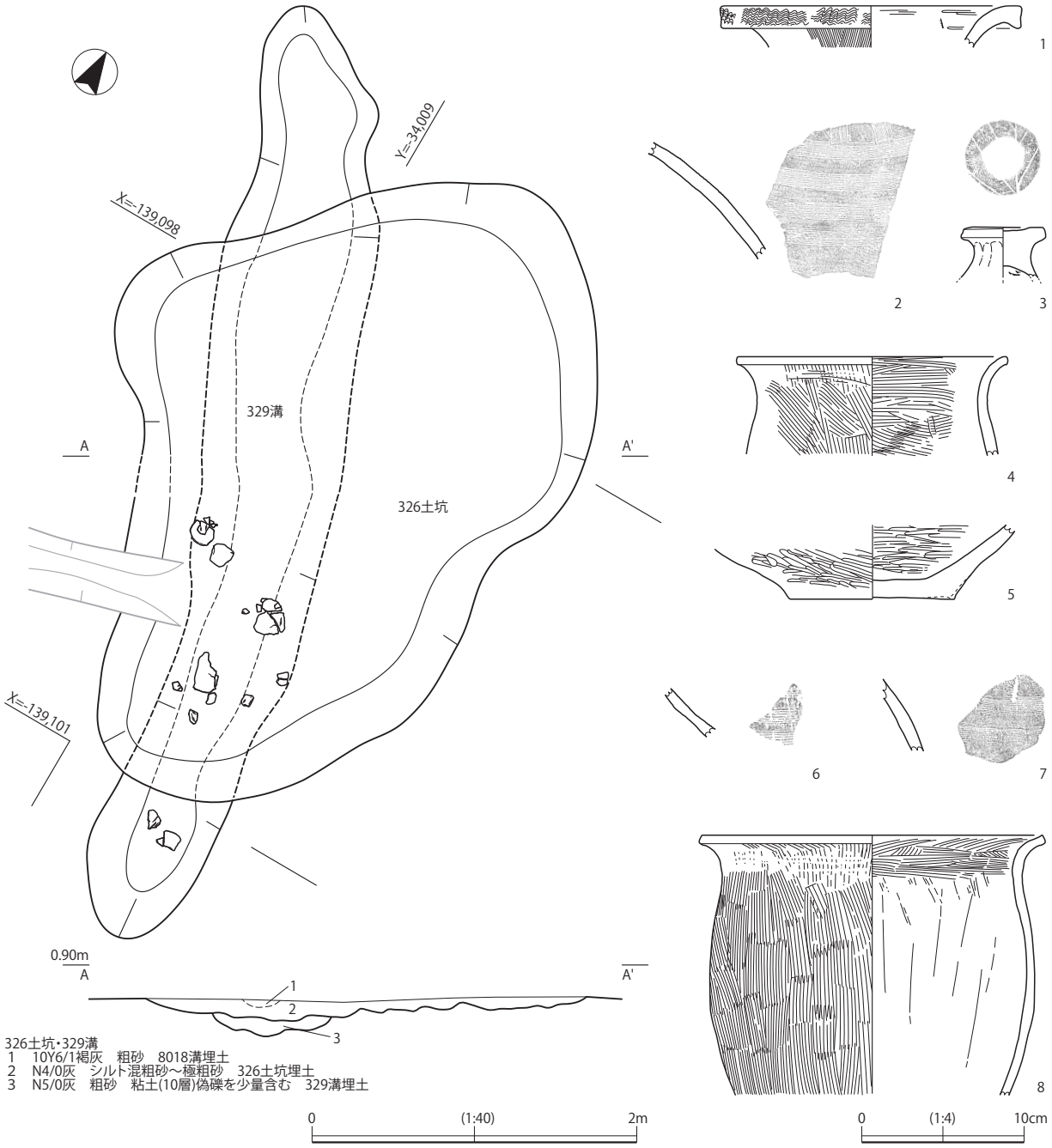


図 315　1－1・2－1区　326 土坑・329 溝平・断面　出土遺物

が板ナデ調整される。体部は櫛描波状文が施されており施文前のハケメが部分的に残る。11 は甕用蓋である。外面は剥離が顕著でケズリの後ヘラミガキされたと考えられる。内面は上部にシボリメが残る。

334 土坑（図 311・313・314、図版 79）

326 土坑の西側で検出された。平面形は不整形な形状を呈し、規模は長軸 1.7 m、短軸 1.3 m、深さ 0.1 mである。埋土は、シルト混粗砂である。炭化物の薄層を挟んで、底面直上には加工時形成層の粗砂混シルトが認められる。334 土坑から、図 314 － 13・14 の甕が出土した。外面は粗いハケ調整で仕上げられる。13 の内面は縦方向のナデ調整が施される。

332 井戸（図 311・313・314、図版 21・75・77・78）

334 土坑の北西で検出された。平面形は不整形な形状を呈し、規模は直径 2.0 m、深さ 1.0 mである。

332 井戸から図 314 － 15 ～ 17 が出土した。15 は甕である。16 は壺口縁部で、端部の上下に刻目が施される。17 は用途不明木製品である。円形の切り込みがあり、建築部材などとして使用されたものか。

326 土坑・329 溝（図 311・315、図版 78）

324 溝の東側で検出された。326 土坑の平面形は不整形、規模は長軸 4.3 m、短軸 3.0 m、深さ 0.08 mである。326 土坑から図 315 － 1 ～ 3 の弥生土器が出土した。 1 は広口壺の口縁部、 2 は壺体部である。 3 は蓋で、上部に木ノ葉の圧痕が付く。329 溝の規模は、幅 0.8 m以上、深さ 0.2 mである。図 315 － 4 ～ 8 の弥生土器が出土した。 4 ・ 8 は甕である。 8 の外面はハケ調整、内面は口縁部から頸部が横・斜め方向のハケ調整、体部が板ナデ調整される。 5 ～ 7 は壺である。 Ⅱ － 2 様式。

その他の遺構出土遺物（図 314）

図 314 － 12 の甕は 328 土坑から出土した。外面は縦方向の粗いハケ調整、内面は口縁部が横・斜め方向のハケ調整で、体部には縦方向の板ナデの痕跡が残る。18 は甕底部で、338 土坑から出土した。底部には木ノ葉圧痕が付く。

第８－１面（図 316・317、図版 21）

７－１・７－２・７－３ｂ層を除去して検出した遺構面で、８－１層としたシルト質粘土の上面に当たる。７－１・７－２層を除去した段階で、8102 段以東と、第７－３ｂ面で集落が検出された範囲以

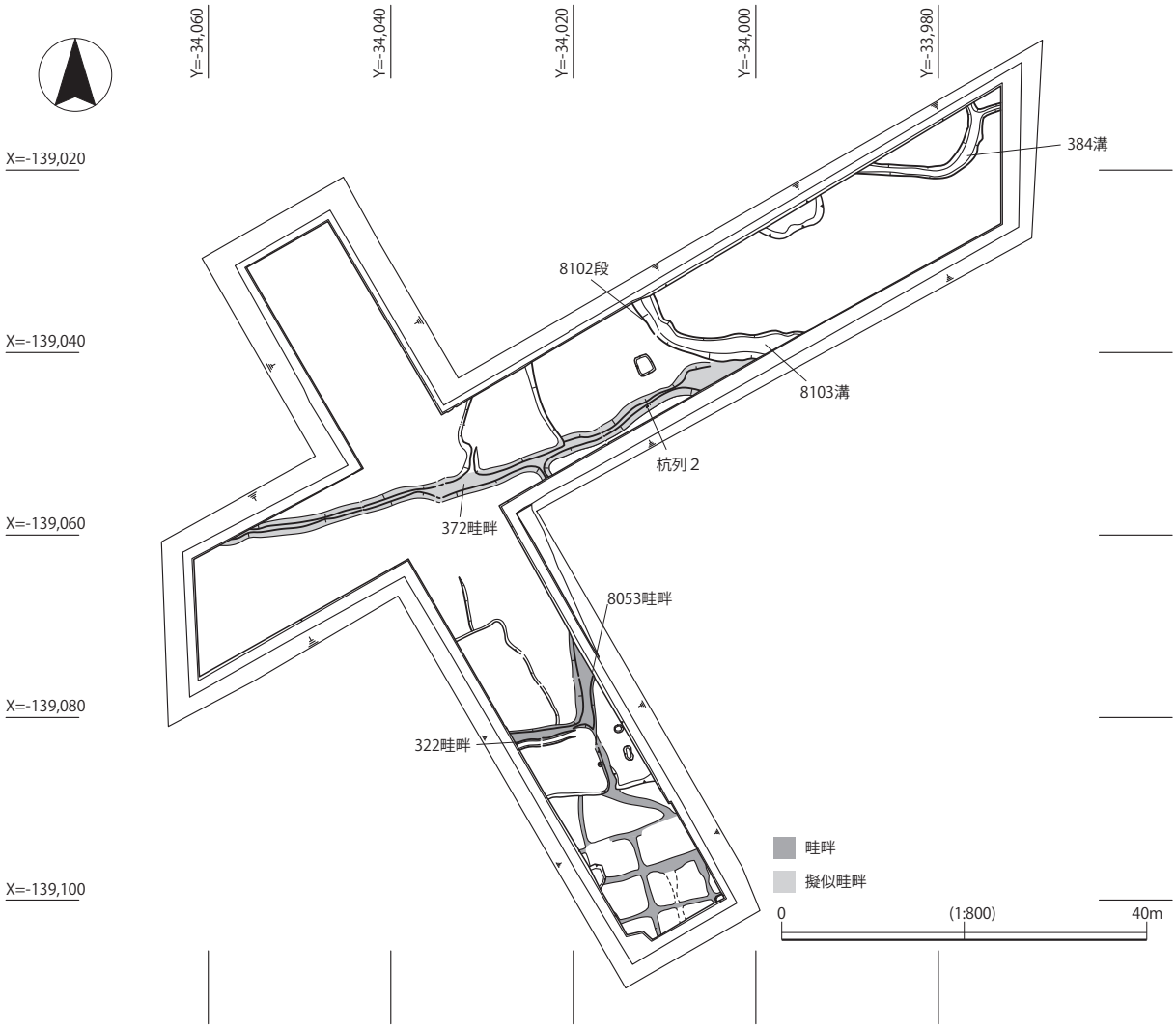


図 316　１－１・２－１区　第８－１面平面

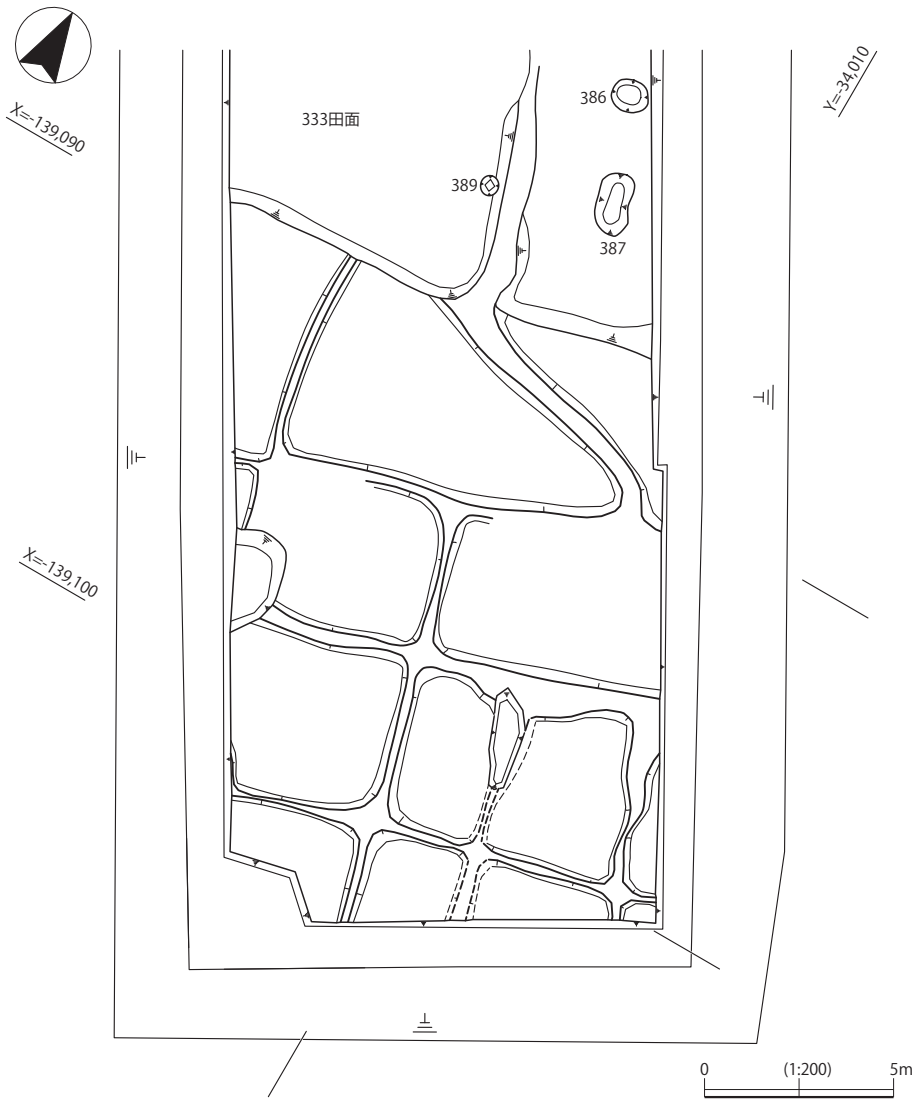


図 317　1－1・2－1区　第8－1面南東側平面

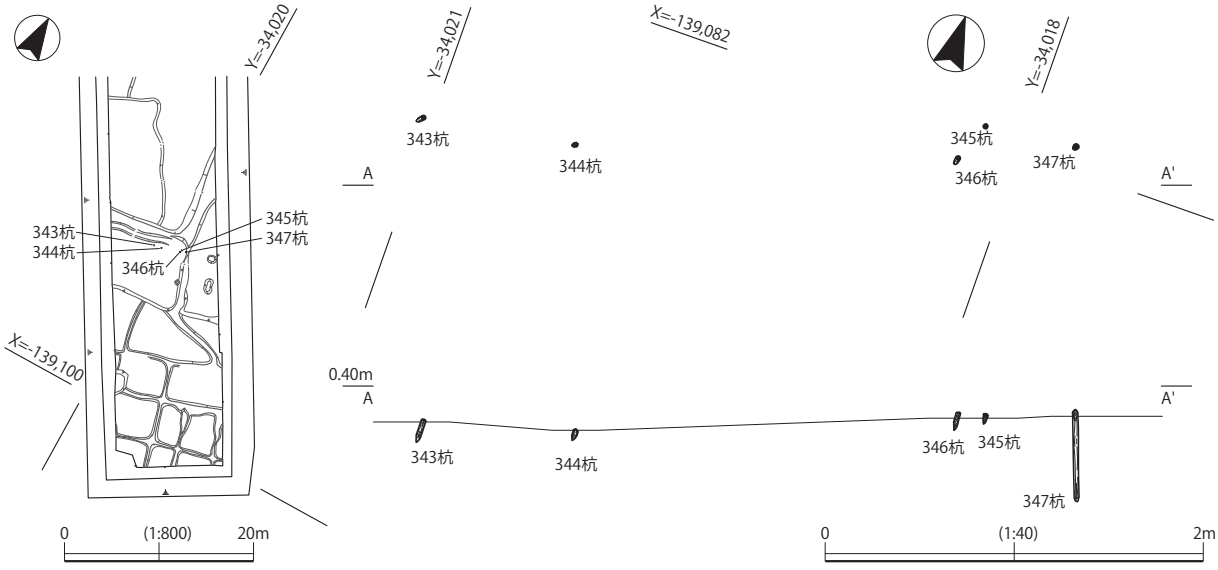


図 318　1－1・2－1区　杭列1平・立面

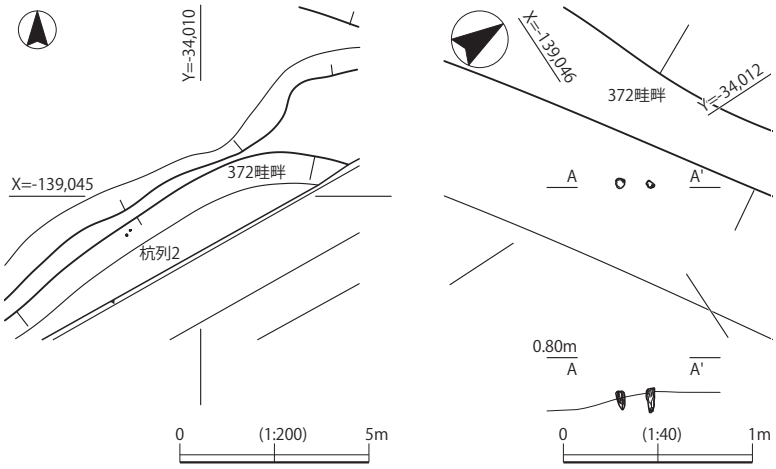


図 319　1－1・2－1区　杭列２平・立面

外は、７－３ｂ層が堆積していなかったため、８－１層上面が露出した状態であった。372 畦畔以北と以南では、第７－１面で畦畔が検出できなかったため、７層に帰属する擬似畦畔が検出されることが期待されたが、一切確認できなかった。

第８－１面では、調査地南東で、小区画水田が検出された。また、調査地中央では第７－１面 312 畦畔とわずかに異なる位置で 372 畦畔が検出された（図 239 の断面参照）。

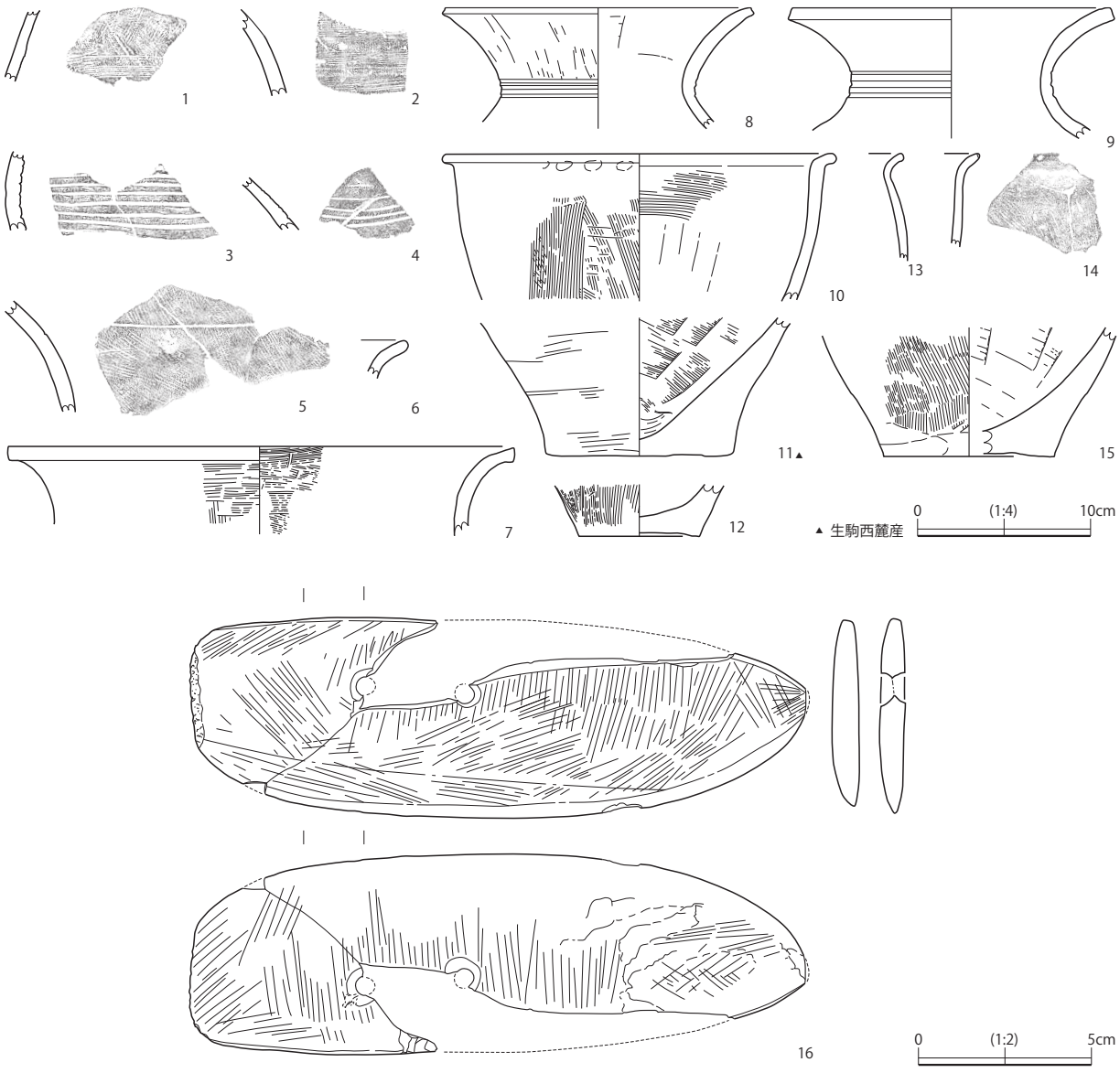


図 320　1－1・2－1区　８－１層出土遺物

水田（図 317）

北側に低くなる地形に対し東西の畦畔を配置し、それに直交する畦畔を設置した小区画水田である。畦畔の規模は、幅 0.5 ～ 0.6m、高さ 0.01 ～ 0.05m である。高さが低いため、検出作業上、やや広がっている部分がある。なお、図 317 で点線表記の畦畔は８－１層に帰属する擬似畦畔が検出されなかったため、遺構として確実性が低い。8102 段以東の低地は湧水が激しく、調査が困難な場所であったが 103・384 溝が検出された。8103 溝の埋土は７－３ｂ層とした砂礫で、8102 段が７－３ｂ層堆積時に攻撃面となっているため浸食痕の可能性がある。384 溝の規模は、幅 1.1m、深さ 0.2m で、砂礫層を埋土とする。掘削時には溝両肩に畦畔が伴っていたように見えたが､検証することは不可能であった。

また、372 畦畔は第７－１面 312 畦畔とほぼ重なる位置で検出されており、372 畦畔に取り付く擬似畦畔はすべて７－１・７－２層に帰属するものである。

杭列１・２（図 318・319）

杭列 1 は 322 畦畔南側で検出された。杭列 2 は 372 畦畔上で検出された。畦畔の斜面に打設されており、機能は不明である。杭列１・２は直上の７層に帰属する可能性がある。

８－１層出土遺物（図 320、図版 78・86・87）

図 320 －１～ 15 の弥生土器と、16 の石庖丁が出土した。１・２は壺体部、13 は甕で、混入資料と

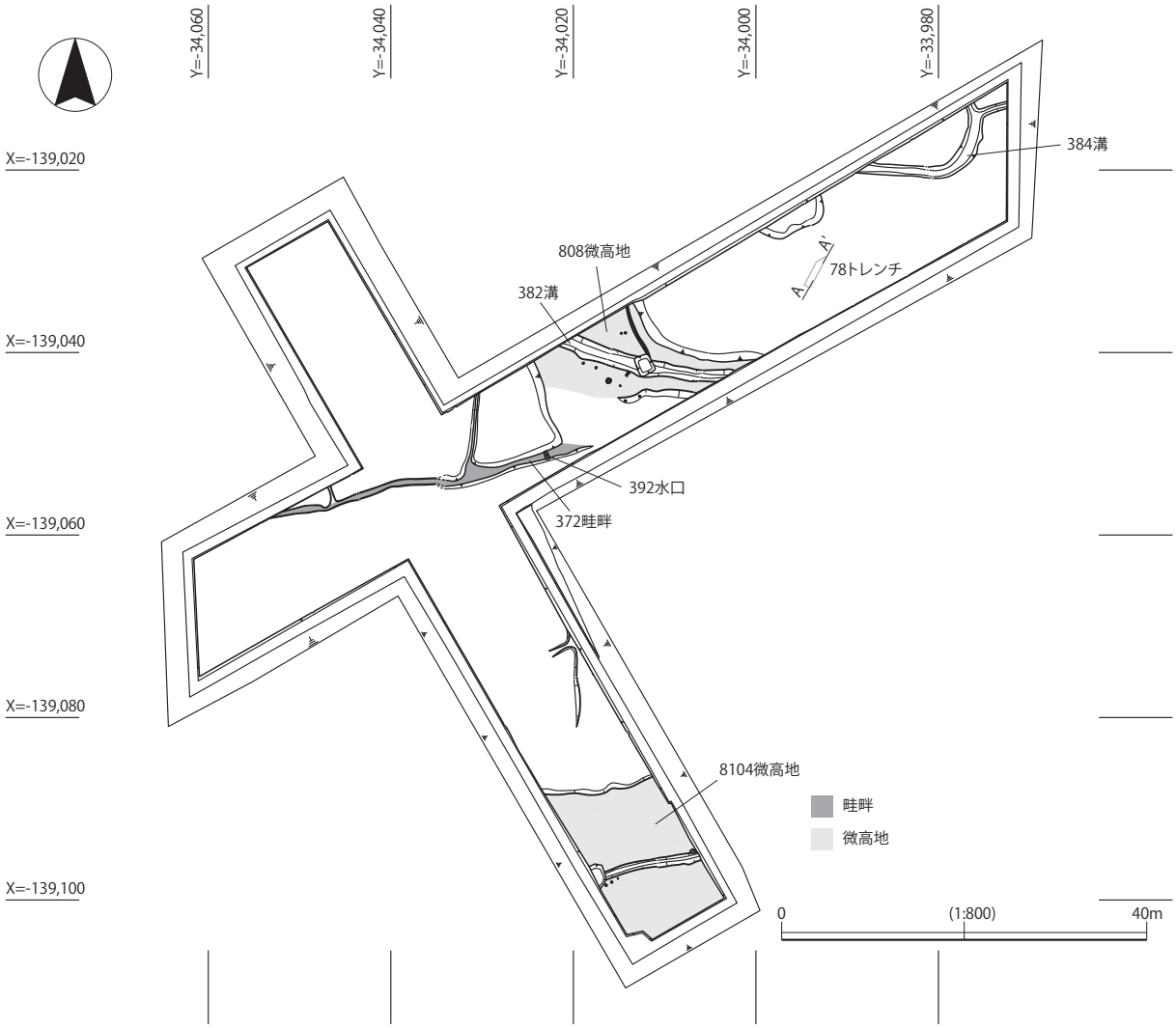


図 321　１－１・２－１区　第９－１面平面

考えられる。３～５・８・９は壺である。３は８条以上、４は６条以上（上の２本は不鮮明）、５は１条、８は３条、９は３条の沈線文が施される。６・７・10～12・14・15は甕である。16は磨製石庖丁で７－３ｂ層から出土したものと接合した。丁寧に研磨されており刃部は鋭利である。粘板岩製。

第９－１面（図 321・322・324）

８－１層を除去して検出した遺構面で、９－１層とした粘土質粗砂及び細砂混シルトの上面に当たる。８－１層を除去した段階に、808・8104 微高地を除いて、調査地の大半は 10 層が露出する。第９－１面では、808・8104 微高地で溝・土坑・ピットが検出されたほか、８－１層に帰属する擬似畦畔が検出された。以下の報告では 808 微高地と 8104 微高地を分けて調査成果を報告する。なお、両微高地では９層を細分して遺構面の検出を行ったが、微高地間で９層は連続しないため地層は対比できなかった。

808 微高地・382 溝（図 321・322・327・328、図版 21・86）

調査地北東で検出された。808 微高地は、10 層上面に砂層が堆積することで形成された高まりが、溝の開削や盛土など人為的な改変が加えられて形成されたものである。808 微高地では、382 溝が検出された。第８－１面水田廃絶期には埋没していたが、382 溝上層には８－１層が堆積していることから、８－１層形成段階には機能していたと考えられる。

第８－１面では、弥生時代前期後葉の水田が検出されており、382 溝は灌漑用の水路として機能したことが想定される。382 溝の規模は、幅 1.5 ～ 2.2m、深さ 0.4m である。埋土は下層が水成層の砂層と細砂混シルトの互層、中層が粘土の薄層を挟む細砂混シルト、上層は８－１層に対比できる細砂混シルトである。382 溝の北東では、395 溝が検出されており、連続性は確認できなかったが、395 溝

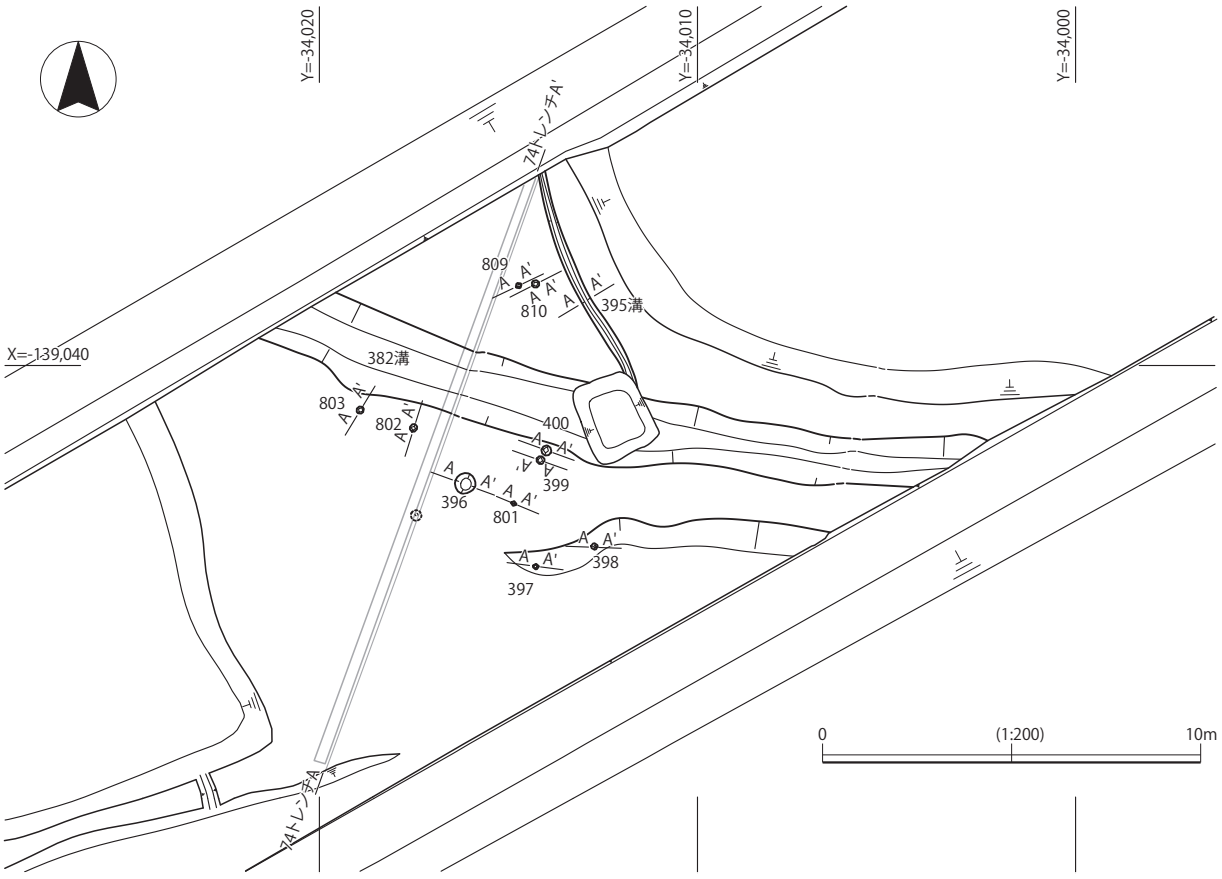


図 322　１－１・２－１区　第９－１面北東側平面

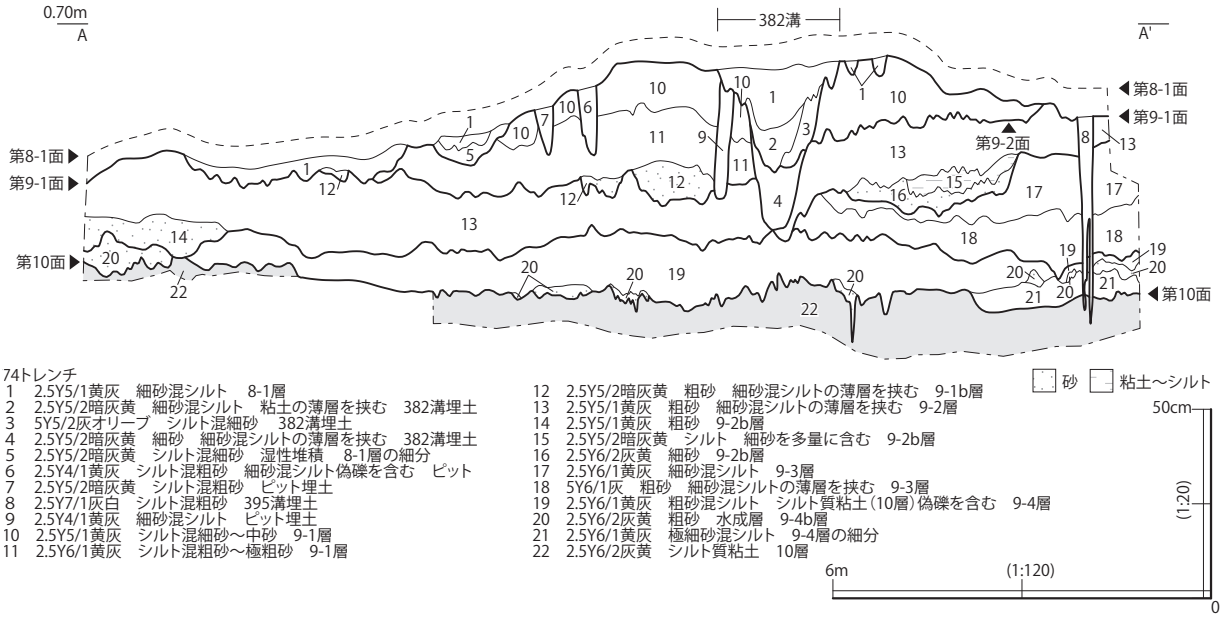


図 323　1－1・2－1区　74 トレンチ断面

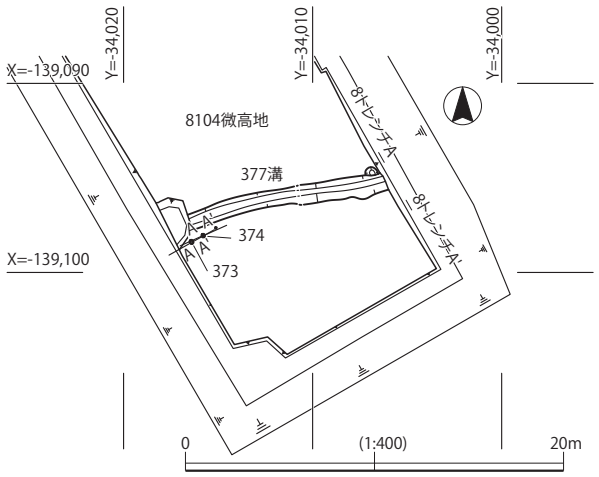


図 324　1－1・2－1区　第9－1面南東側平面

を介して、北東側の水田への水の供給を行っていたと考えられる。

なお、808 微高地・382 溝は調査地北西側では検出されておらず、大きく湾曲して北方向に延びる可能性もあるが、808 微高地周辺の 9 層の層厚が薄いことから、今回検出された範囲の北西側がその末端部となる可能性がある。382 溝から図 327 － 1 ・ 2 の弥生土器が出土した。 1 は甕である。外面には沈線文が 4 条施される。 2 は蓋で、壺蓋か。外面にハケメが残る。 1 は Ⅰ － 3 ～ 4 様式に比定できる。

808 微高地上のピット（図 326）

ピットの規模は、直径 0.15 ～ 0.3 m、深さ 0.04 ～ 0.2 mである。400・399・802・803 ピットについては、溝肩部に沿って掘り込まれた可能性がある。居住域とするには、808 微高地上の範囲は限られており、竪穴建物等の柱穴を構成するものではなかった。

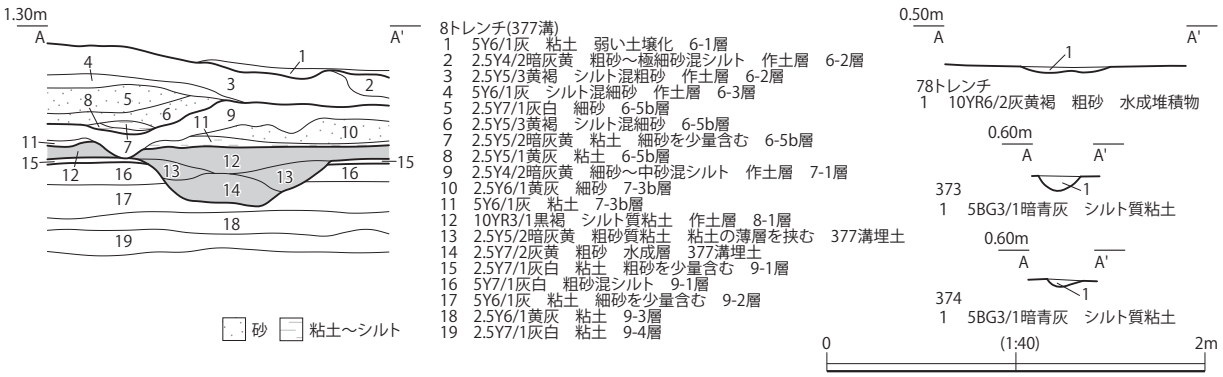


図 325　1－1・2－1区　8 トレンチ他断面

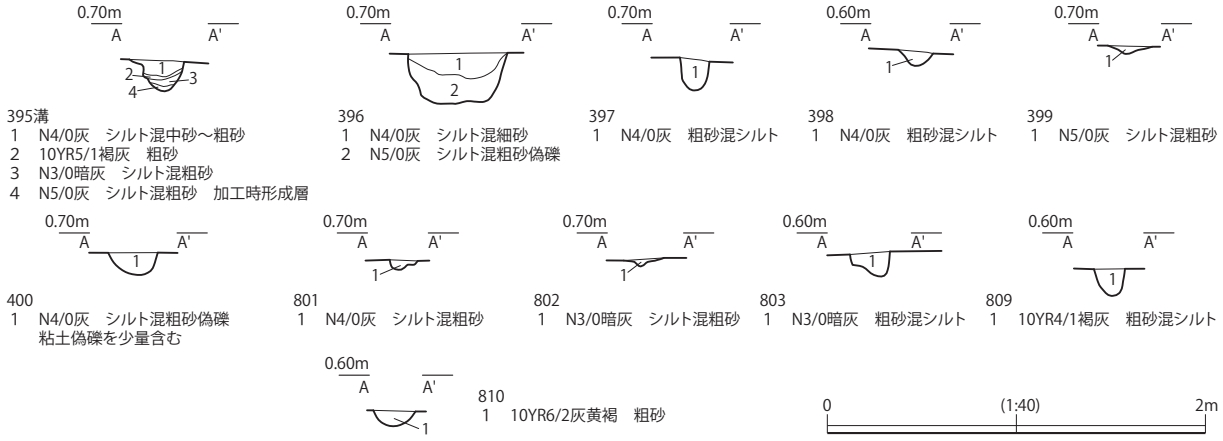


図 326　1－1・2－1区　第9－1面遺構断面

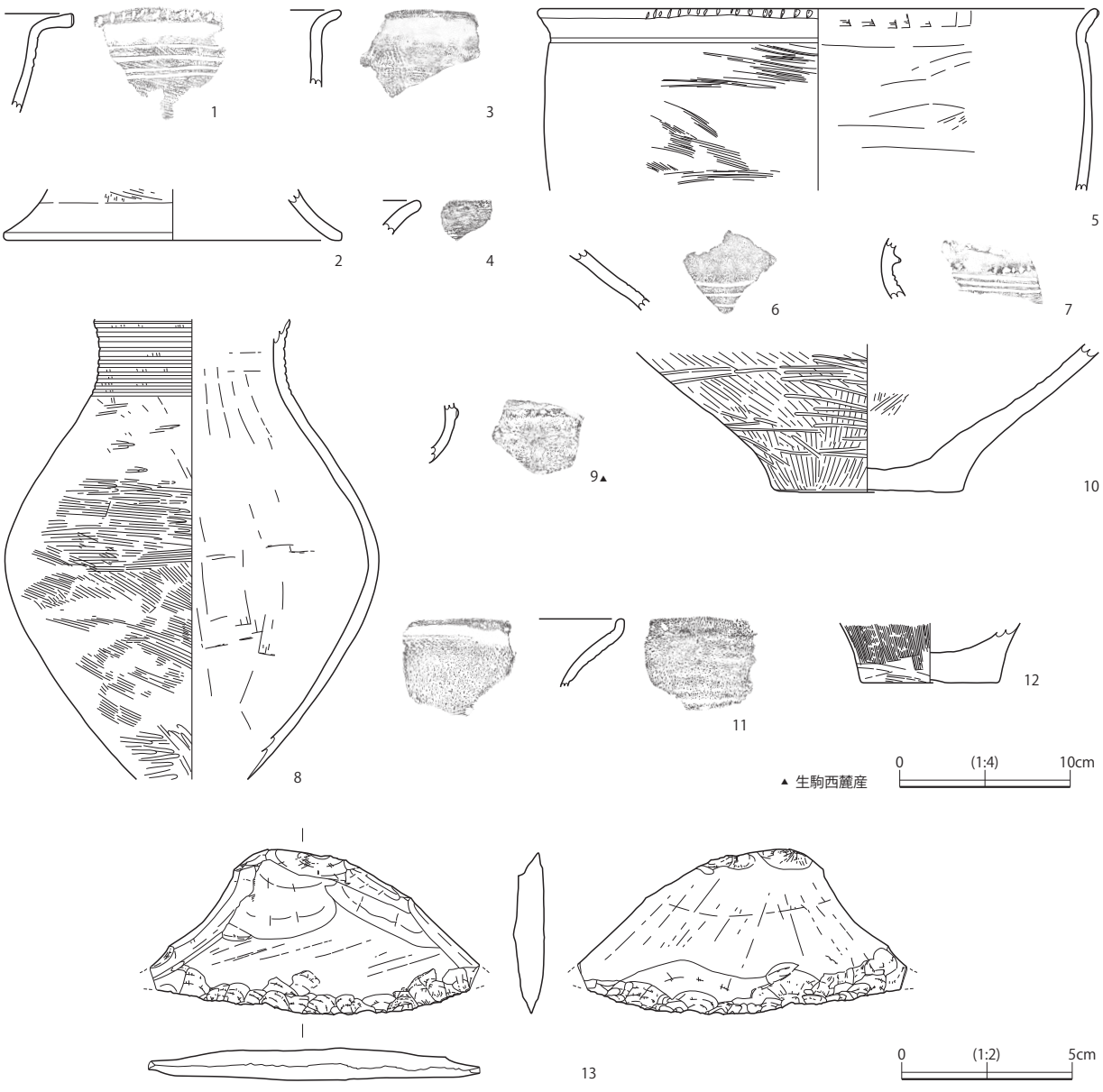


図 327　1－1・2－1区　9－1層出土遺物

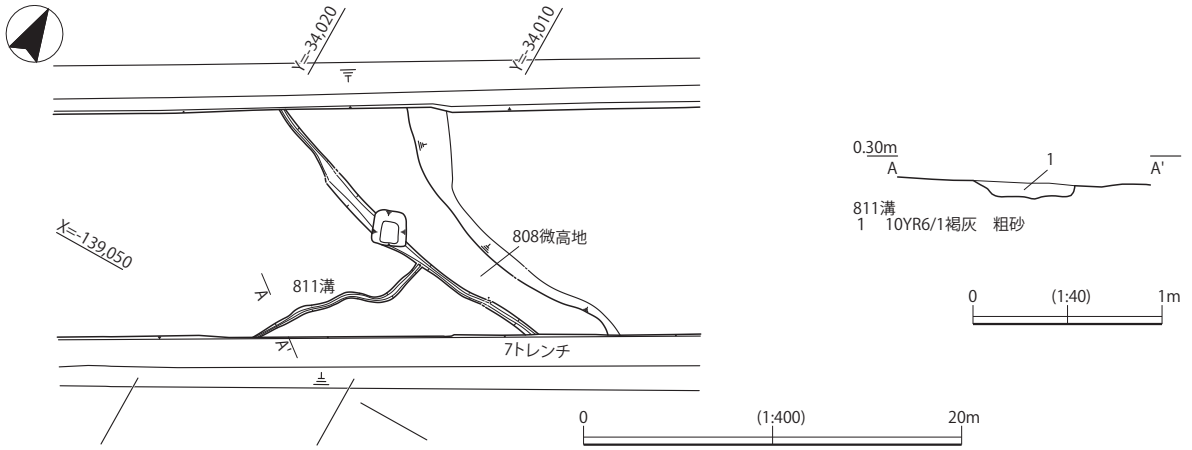


図 328　1－1・2－1区　第9－2面北東側平面・811 溝断面

8104 微高地（図 321・324）

調査地南東で検出された。泥層と砂層が交互に堆積することによって、8104 微高地は形成される。808 微高地と同様、微高地の末端部に相当する範囲が検出されたと考えられる。8104 微高地では、溝・ピットが検出された。377 溝の規模は幅 1.0 m、深さ 0.2 mである。埋土は、下層が水成層の砂層である。上層はシルト質粘土で、8－1層に対比でき、8－1層下面に帰属する溝である。流向は南西方向で、溝両肩部では砂層の高まりが検出された。土壌化により検証しえなかったが、畦畔を伴う可能性がある。また、この高まり部分では、373 ～ 375 ピット3基が検出された。なお、第9－1面に帰属する遺構として報告を行ったが、8104 微高地で8－1層が2層に細分できる範囲で検出されており、溝の機能面は9－1層より確実に新しくなると考えられる。なお、第9－1面から第 10 面で検出された溝については、溝の加工形状（平面形・断面形）が鋭角であったことから、浸食痕ではなく、溝と判断した。

9－1層出土遺物（図327、図版78・86・87）

9－1層から出土した遺物は、図 327 －3～ 13 を図示した。3は無文の甕である。 4は甕の口縁部である。5は大型の甕である。6は壺体部である。外面はハケ後ヘラミガキ、内面は板ナデ調整される。外面は沈線文が3条以上施される。 7は壺頸部である。外面の貼り付け突帯の下には沈線文が3条施される。 8は壺の頸部から体部である。全体に細身の形状で、Ⅱ様式の壺の形状に近い。頸部は板ナデの後に沈線文が 10 条以上施される。体部外面は横・斜め方向のハケ調整で、下位にはヘラミガキ調整が施される。内面は頸部がナデ調整、体部が板ナデ調整される。 9は壺体部で外面に貼り付け突帯が施される。10 は壺底部である。11 は縄文土器深鉢の口縁部である。細片を図化。宮滝式～滋賀里Ⅰ式。12 は甕底部である。13 はサヌカイト製削器である。刃部は小さい調整剥離で作り出される。両端は折損しており使用時の微細な剥離が認められる。

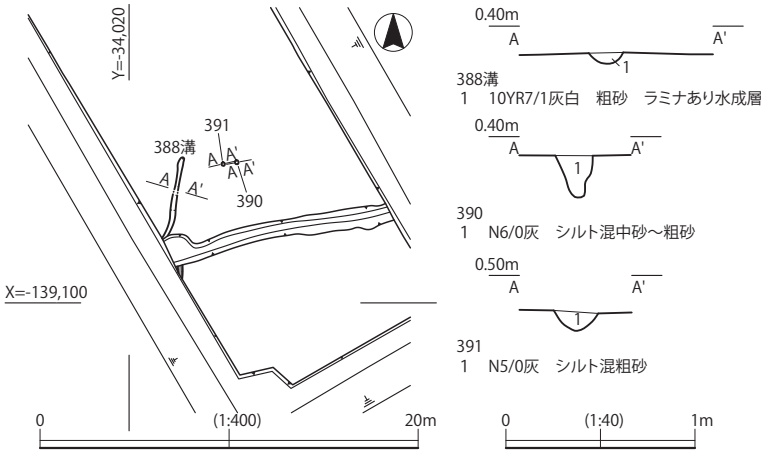


図 329　1－1・2－1区　第9－2面南東側平面・388 溝他断面

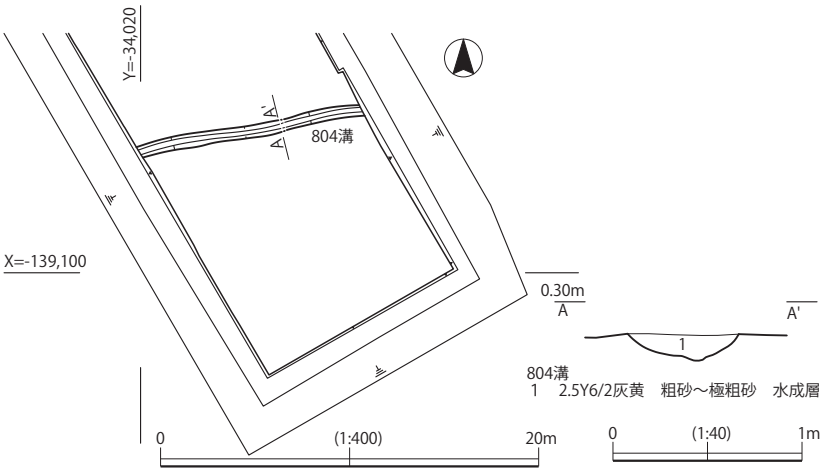


図 330　1－1・2－1区　第9－3面南東側平面・804 溝断面

第9－2面808 微高地（図328）

第 9 － 2 面 808 微高地では 382 溝と 811 溝が検出された。811 溝の埋土は水成層の砂層である。808 微高地の盛土（9－1 層に対比）直下で、9－1 b層とした砂層の堆積が認められており、382 溝を供給源とする破堤堆積物と考えられる。この砂層によって 9－1 層と 9－2 層は明瞭に分かれる。382 溝の同段階の埋土から遺物は出土しなかったが、時期は弥生時代前期中葉以前と考えられる。

第9－2面 8104 微高地（図 329、図版 21）

溝・ピットが検出された。388 溝の規模は幅 0.2 m、深さ 0.06 mである。埋土は水成層の砂層である。ピット 2 基は 9－1 層下面遺構である。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第9－3面 8104 微高地（図 330）

第 9 － 3 面では 804 溝が検出された。804 溝の規模は幅 0.6 m、深さ 0.1 mである。埋土は水成層の砂層である。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

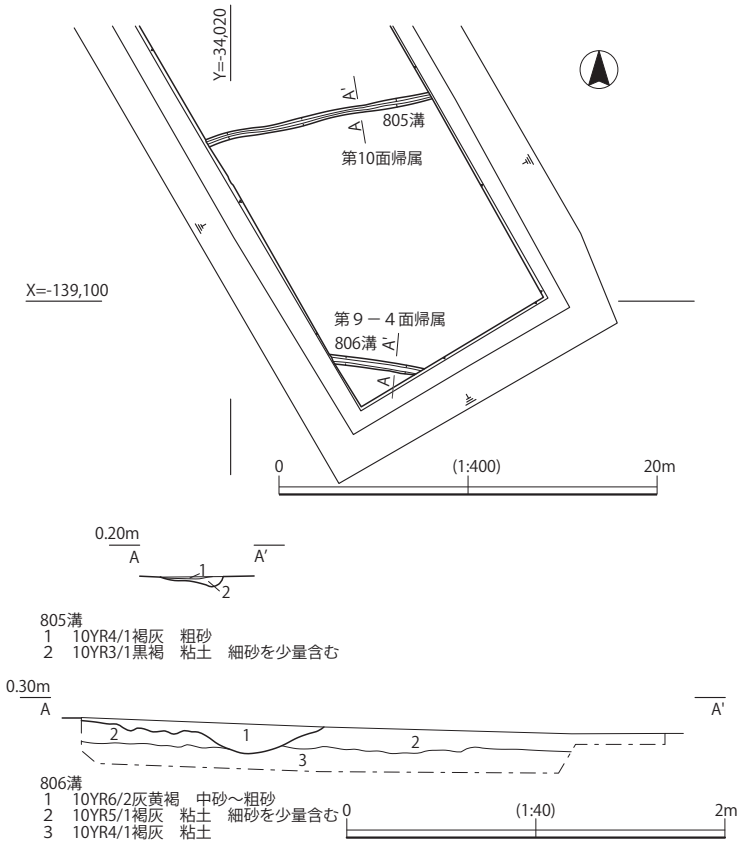


図 331　1－1・2－1区　第9－4・10 面南東側平面

805・806 溝断面

第9－4面 8104 微高地（図 331）

第 9 － 4 面では、806 溝が検出された。806 溝の規模は、幅 0.7 m、深さ 0.16 mである。埋土は中砂～粗砂である。溝肩部が不明瞭な部分が認められる。なお、図 331 では、第 10 面 805 溝を合成して図示した。

第 10 面 8104 微高地（図 331）

9 層を除去して検出した遺構面で、10 b層としたシルト質粘土の上面に当たる。調査地南東で溝が検出された。805 溝は、幅 0.3 m、深さ 0.05 mである。埋土は、下層が粘土のブロック土、上層が粗砂の堆積が認められる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

第６項　１－２・２－２区

１－２・２－２区では、第３－１面までを機械掘削し、以下、２－２区については第 10 面、１－２区については第８面まで人力掘削した。１－２区は、８層より下層についてはトレンチ掘削と断面記録を行って調査を終了した。

第３－１面（図 332、図版 22・97）

２層を機械掘削して検出した遺構面で、３－１層とした粗砂混シルトの上面に当たる。１－２区では、第１－３面に帰属する 1012 溜池と 1011 井戸、２－２区では２－１層下面に帰属する 813 溝（坪境）が痕跡となって残る。

なお、調査地南西側では、２層を除去した段階で、５－２ｂ層上面が露出する部分があり、層理面で図 399 －１の子持勾玉が出土した。地形は２層下面の状況を反映して、ほぼ平坦で、826 段以東で検出された水田で低くなっている。

826 段以東では、条里型地割の水田が検出された。826 段より以西は２層によって削平を受けていたため、畦畔は確認できなかった。

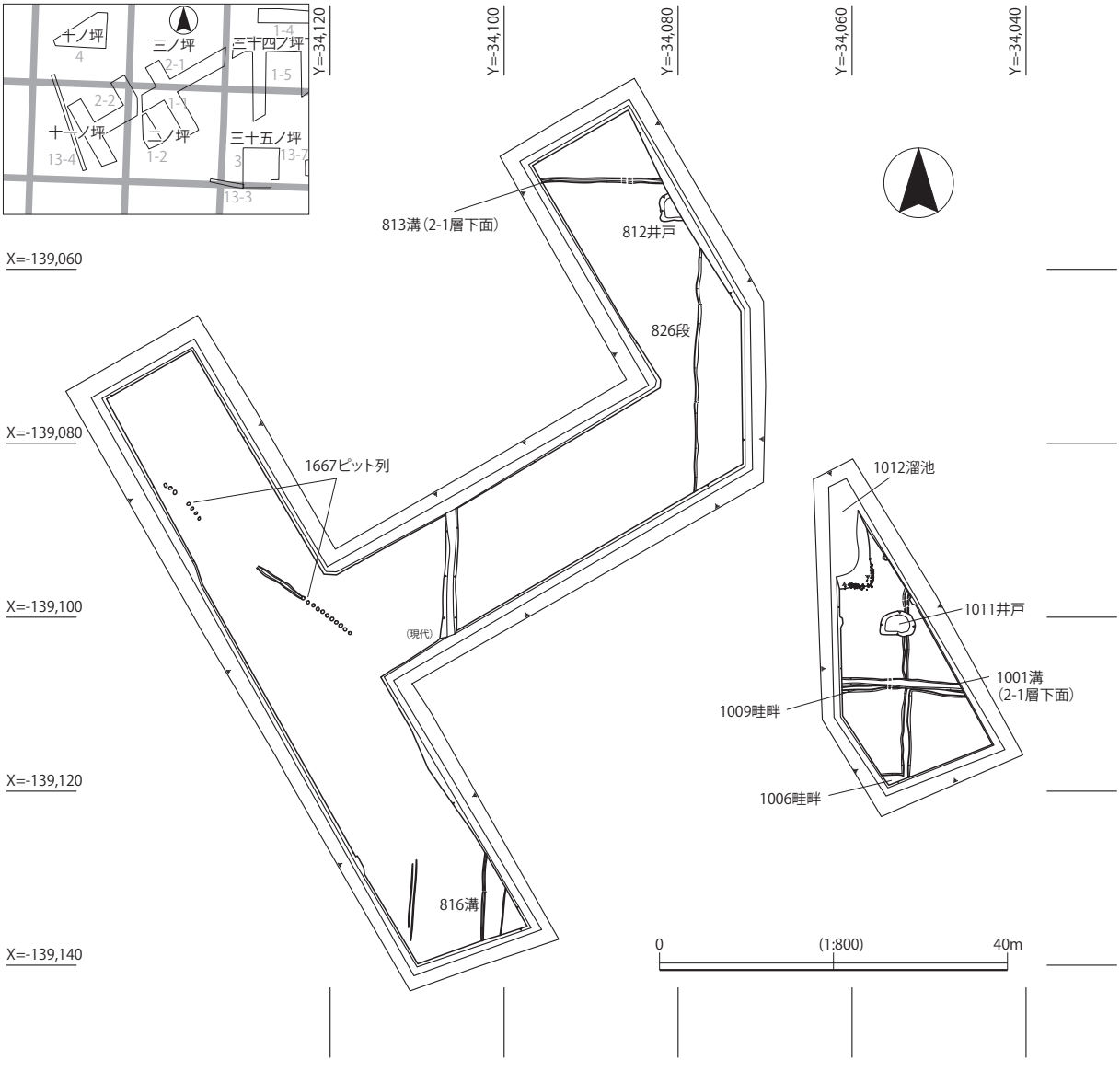


図 332　１－２・２－２区　第３－１面平面

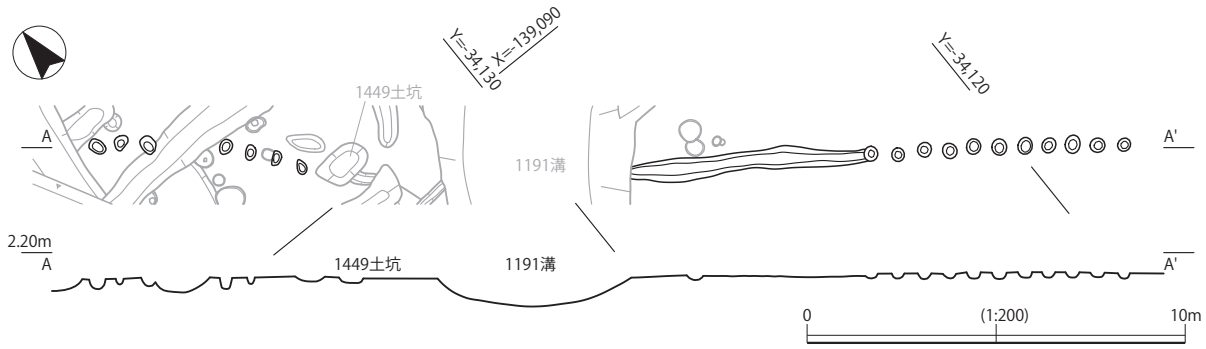


図 333　1－2・2－2区　1667 ピット列平・断面

1667 ピット列（図 332・333）

調査地南西で検出された。ピットは、円形を呈し、規模は直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mである。埋土は粗砂混シルトで、1－3層に対比できると考えられる。溝状に検出される場所もあったが、加工面まで掘削すると円形を呈するピットが連続した状態となる。1－4区 4014・4032 ピット列と形状・埋土共に似ており、耕作に関連して掘削されたと考えられる。

813 溝（図 332）

調査地北東で検出された。坪境の溝である。断面の検討結果、2層の形成段階に掘削されたもので、鎌倉時代前期以降に機能した溝と考えられる。

水田（図 332・335）

826 段以東で検出された条里型地割の水田である。2－2区では畦畔の遺存状況が悪く、826 段の検出に留まる。826 段は段の直上が2－1層により削平されているが、第4－1面では3層に帰属する 814 擬似畦畔が検出されており、十一ノ坪と二ノ坪の坪境に設置された畦畔として機能したと考えられる。時期を示す土器は出土しなかったが、2－1・4区の調査成果から平安時代後期に比定される。

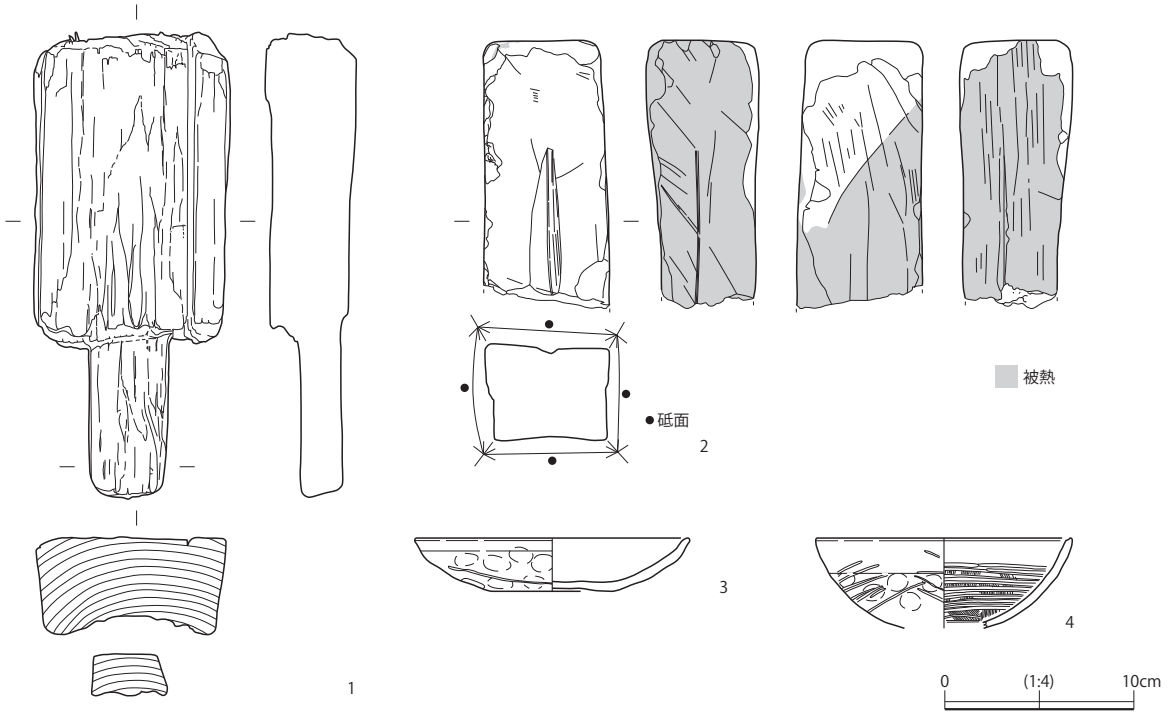


図 334　1－2・2－2区　2－2b～3－3層出土遺物

２－２ｂ・３層出土遺物（図 334、図版 71・76）

図 334 －１は建築部材で、３－３層から出土。断面形が長方形のホゾが先端に作り出される。端部は廃棄時に加工が加えられて折損する。３・４は２－２ｂ層から出土。３は土師器皿である。外面には指頭圧痕が残り、ヘラ状工具による沈線様のミガキが１条観察される。４は瓦器椀である。外面は分割性があるヘラミガキが施され、指頭圧痕が残る。内面はハケの後、密なヘラミガキが施される。２は近世以降に掘削された 1012 溜池から出土した砥石である。砥面は４面で、被熱を受けて黒色化した部分が認められる。断面「Ｖ」字形に使い込まれた凹みがあり、鉄製品の研磨に用いられた可能性がある。

第４－１面（図 335、図版 22）

３層を除去して検出した遺構面で、４－１層とした細砂混シルト上面に当たる。調査地南西側では、５－１・５－２ｂ層が露出した状態となる。３層は、部分的に２層に細分が可能であるが、本調査地では自然堆積層が挟まれなかったため、一括して掘削した。地形は、２－２区南西側で第５－２ｂ面微高地が顕在化して高くなり、中央部から以東は５－２ｂ層上面を反映して低くなる。

２－２区南西側では、1148・1149 田面と３－１・３－２層に帰属する擬似畦畔が検出された。

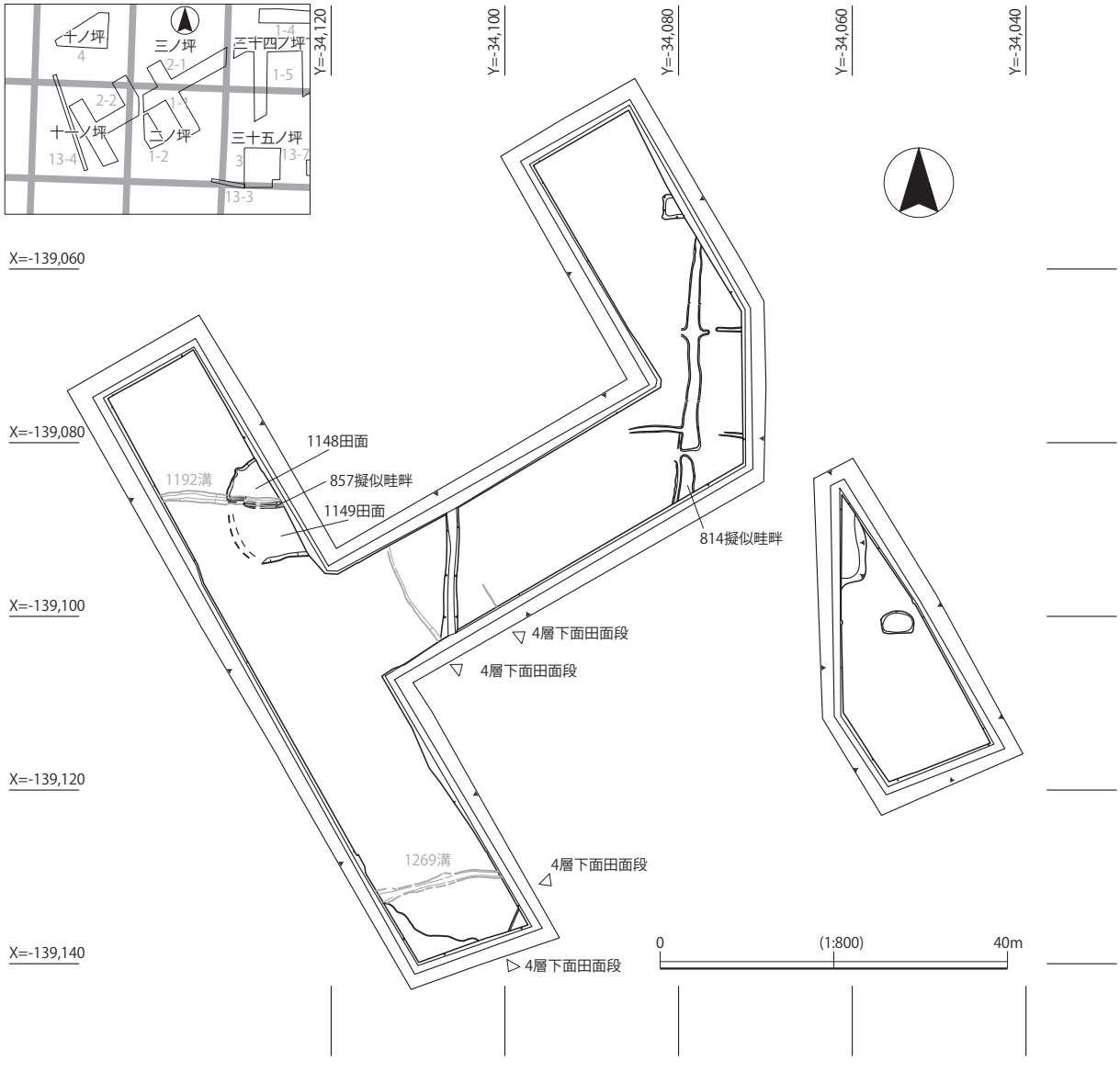


図 335　１－２・２－２区　第４－１面平面

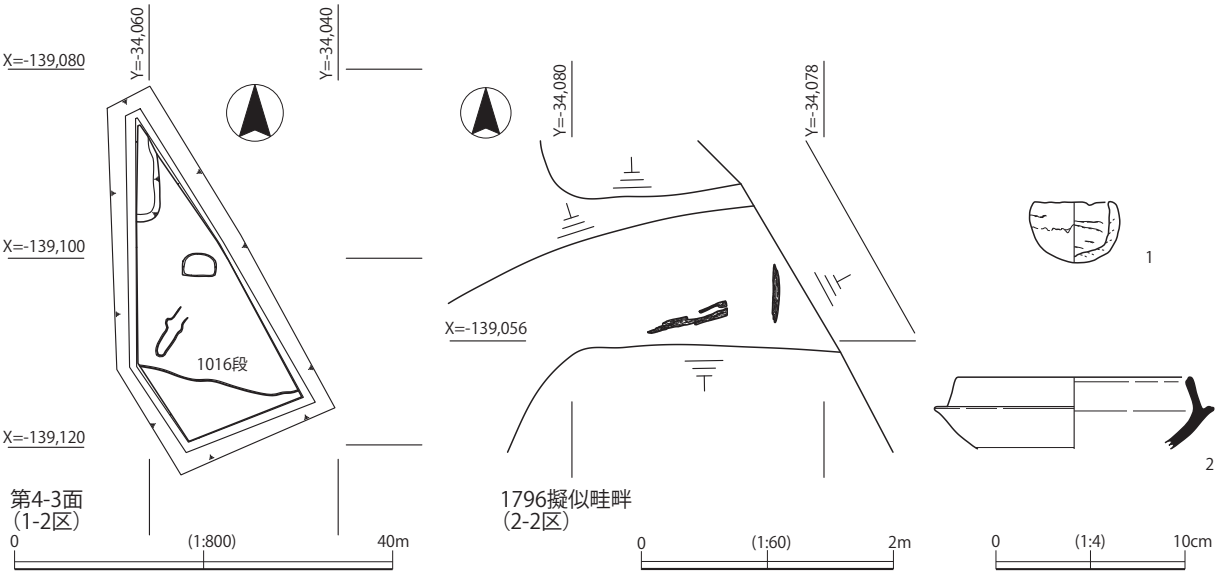


図 336　1－2・2－2区　第4－3面平面・4－2層遺物出土状況平面　出土遺物

1148・1149 田面は、第 5 － 2 b面 1191 溝の上部を加工した小区画の水田である。２層による削平が顕著で、1148・1149 水田と低地の 4 － 1 層の対比を検証する断面が調査地内には無かったため、1148・1149 水田は 4 － 1 層より形成時期が古くなる可能性がある。

第 5 － 2 b面で調査を行った 1192・1269 溝は、上部が２層によって削平を受けていたため、帰属する遺構面が不明であった。出土遺物についても時期を特定しうる遺物は出土していないが、埋土は 4 層に対比できる可能性があり、図 335 に図示した。

なお、814 擬似畦畔は、第３－１面 826 段の直下で検出されており、３層に帰属する。坪境の畦畔で、水口が１箇所検出された。

第４－３面（図 336、図版 22）

２－２区では、４－１層から４－３層について掘り分けを行った。自然堆積層が挟まれないため、遺構面の遺存状況が悪かったが、擬似畦畔等が一部で検出された。第５－２ｂ面 1300 溝の西側で４－１・４－２層下面に帰属する田面の段が検出されており、この段より東側は水田として土地利用されたと考えられる。１－２区では、第４－３面で４－２層下面に帰属する擬似畦畔が検出された。1016 段より以南は５－２ｂ層上面が高いことが反映されて地形的に高くなっている。第４－３面で検出された畦畔は、第５－１面の畦畔と同じ位置で検出しており前段階の畦畔を踏襲したものである。

４層出土遺物（図 336）

１－２区４層から出土した土器を図 336 に図示した。１は土師器ミニチュア土器の鉢である。手づくねによって成形され、粘土接合痕が残る。２は須恵器坏身である。細片を図化。TK10 型式。

第５－１面

４層を除去して検出した遺構面で、５－１層としたシルト～シルト質粘土の上面に当たる。微高地東側に当たる２－２区中央から南西と、１－２区に５－１層は残存した。５－１層の遺存状況は悪かったが、２－１区と同様に水田が検出された。２－２区東側では、第６－１面 8061 微高地を加工した 1797 畦畔とそれに接続する畦畔が検出されている。１－２区においても水田は検出されており、２－１区と同様に、当範囲にまで水田が広がることが確認された。遺物は出土しなかったが、水田の時期は、２－１区調査成果から古墳時代中期初頭以前に位置付けられる。

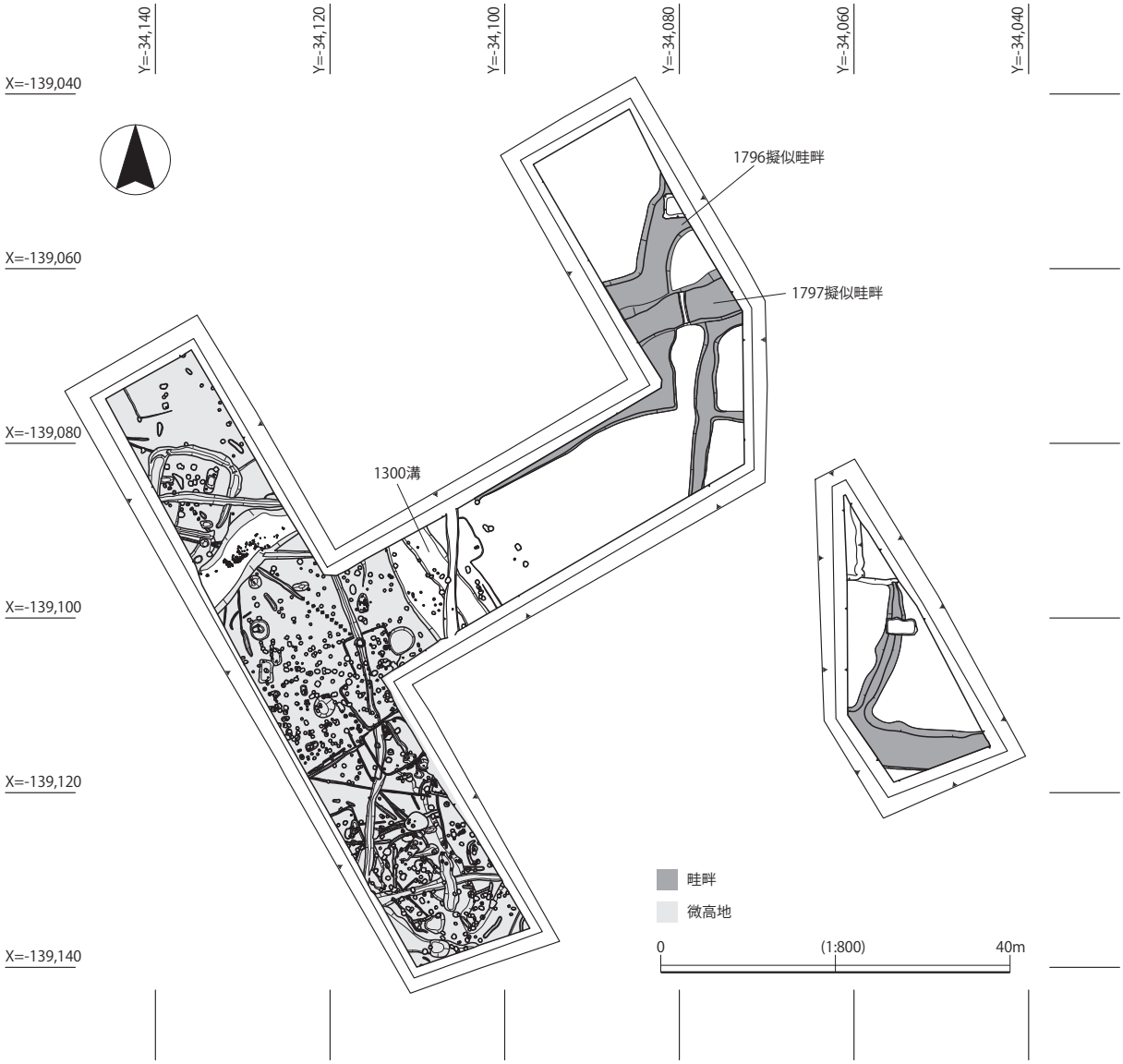


図 337　1－2・2－2区　第５－２ｂ面平面

第５－２ｂ面（図 337・338・373、図版 22）

５－２ｂ層とした砂･泥層の上面に当たる。調査地西側の微高地上では、５－１層は遺存状況が悪かったため、２層を除去した段階で、微高地の大半は５－２ｂ層が露出した。一方、微高地以外の範囲、水田域の５－１層は、作土として残存しており、それを除去して第５－２ｂ面が検出された。

第５－２ｂ面では、調査地西側の微高地を中心に、竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・ピット等が検出された。この微高地は範囲が広かったため、以下では、北側と南側に分けて報告を行うこととする。

微高地北側（図 338）

竪穴建物５・掘立柱建物４以北を、微高地北側として報告する。地形は、５－２ｂ層上面の状況を反映して、調査地中央と 838 溝北東側が高くなっており、当範囲で検出された溝は、地形に即して掘削される。５－２ｂ層堆積過程の新しい段階に機能した 1890 流路（図 401）とそれ以前に堆積した５－２ｂ層上面の凹地に 1191 溝、1890 流路埋没後にできた高まりが東側に向けて低くなる場所に 1300 溝が掘削される。また、1890 流路埋没後の高まりには、838・1452 溝（周溝）が掘削されている。それより北西側は、２層下面の状況で平坦であったが、遺構は希薄である。

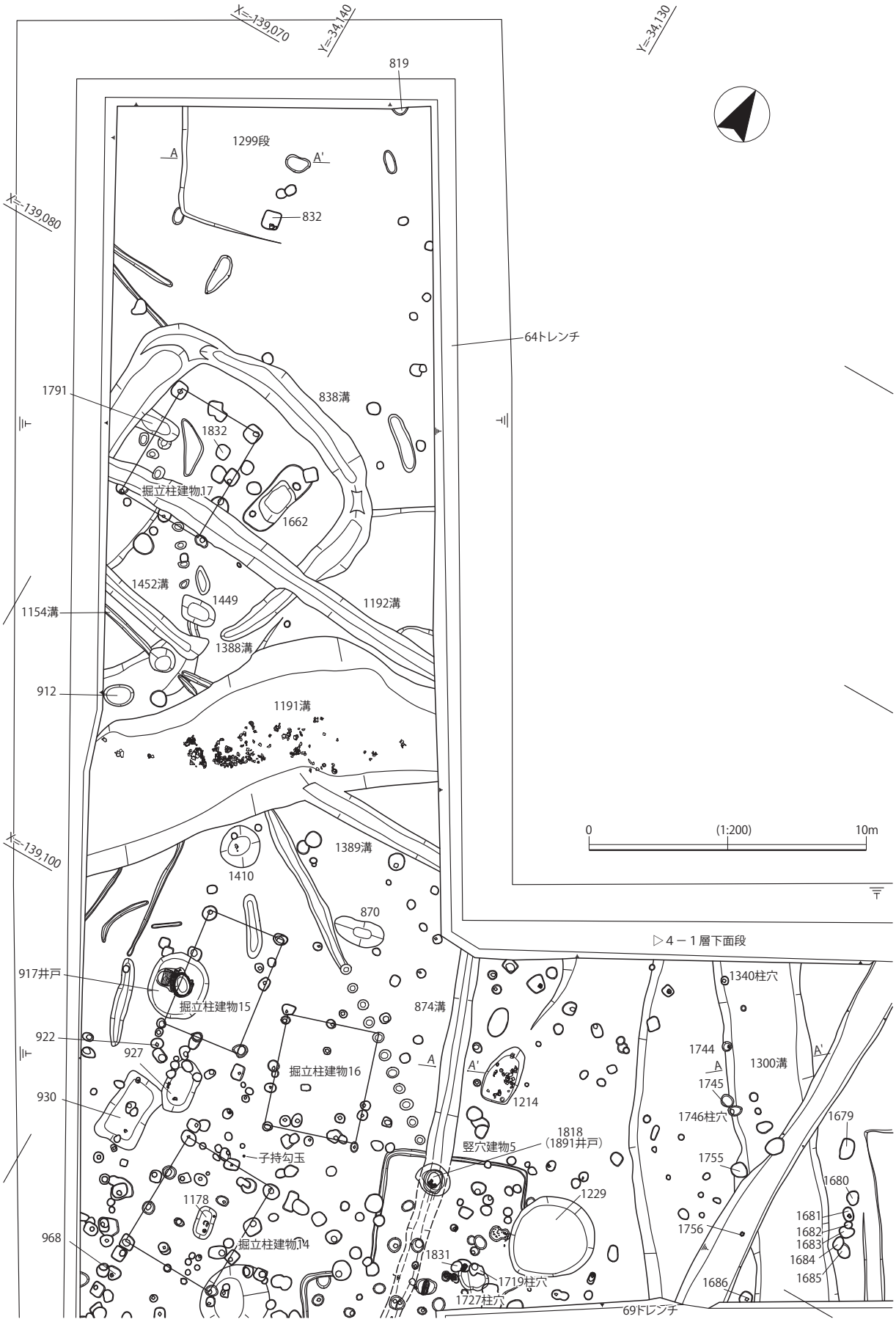
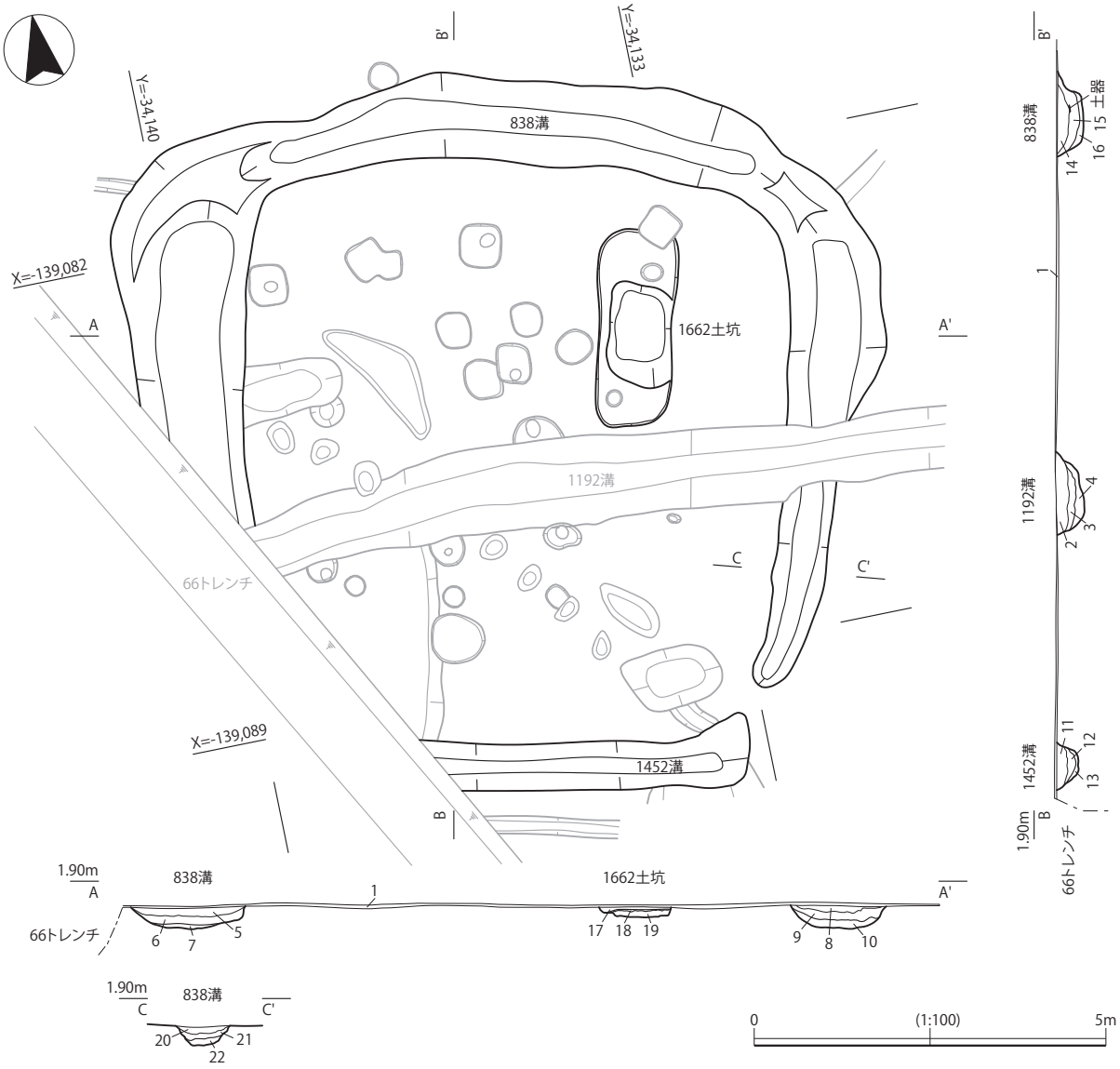


図 338　1－2・2－2区　第5－2b面北側平面



1　5GY4/1暗オリーブ灰　粗砂混シルト　2-1層
2　N6/0灰　極細砂質シルト　1192溝埋土
3　5Y6/1灰　極細砂混粘土　1192溝埋土
4　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　1192溝埋土
5　N3/0暗灰　極細砂混シルト　N7/0灰白　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　838溝埋土
6　N4/0灰　極細砂混シルト　N7/0灰白　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　838溝埋土
7　N4/0灰　極細砂混シルト　N7/0灰白　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　加工時形成層　838溝埋土
8　10YR5/1褐灰　極細砂混粘土　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　838溝埋土
9　10YR3/2黒褐　極細砂混粘土　838溝埋土
10　10YR4/2灰黄褐　極細砂混シルト　シルト～極細砂(5-2b層)を少量含む　838溝埋土
11　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　1452溝埋土
12　N5/0灰　極細砂混シルト～粘土　1452溝埋土
13　N6/0灰　極細砂混シルト　1452溝埋土
14　10YR5/1褐灰　極細砂混粘土　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　838溝埋土
15　10YR3/2黒褐　極細砂混粘土　838溝埋土
16　10YR4/2灰黄褐　極細砂混シルト　シルト～極細砂(5-2b層)を少量含む　838溝埋土
17　5G5/1緑灰　極細砂混シルト　1662土坑埋土
18　5G4/1暗緑灰　極細砂混シルト偽礫　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　1662土坑埋土
19　7.5GY7/1明緑灰　シルト質極細砂　極細砂混シルト(5-1層)偽礫を少量含む　1662土坑埋土
20　2.5GY6/1オリーブ灰　極細砂混シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　838溝埋土
21　N5/0灰　極細砂混シルト　838溝埋土
22　N6/0灰　極細砂混シルト　加工時形成層　838溝埋土

図 339　1－2・2－2区　838 溝他平・断面

838・1452 溝・1662 土坑（図 339 ～ 341、図版 22・90・93）

1191 溝北側で検出された。方形にめぐる溝２条が検出された。西側は 66 トレンチを設定した場所に当たり、全容は不明である。南隅で途切れることや、838 溝の北東・北西の底面が盛り上がることから、周溝四隅を掘り残した、いわゆる「四隅切り」の古墳周溝のような形状を呈している。埋葬施設が確認できなかったことから、古墳と断定するに至っていない。

838 溝の規模は、幅 1.2 ～ 1.7 m、深さ 0.3 mである。東辺・西辺の溝は、南に行くに従い幅が減じ

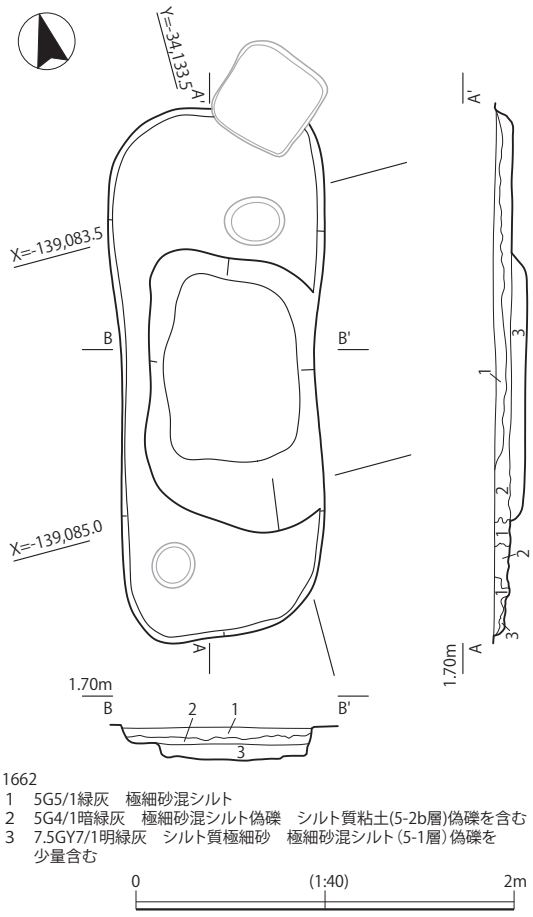


図340　1－2・2－2区　1662 土坑平・断面

る。1452 溝の規模は、幅 0.7 m、深さ 0.3 mである。両溝の埋土は、底面直上が加工時形成層の極細砂混シルト、中層が土壌由来の極細砂混シルト、上層が極細砂混シルトのブロック土で、最終的に埋め戻されたと考えられる。盛土及び盛土がなされていた場合の基底面は、２層とした作土により削平を受けたため確認できなかった。検出時の周辺の状況は平坦であったが、地形的に北方向に低くなることが想定されるため、丘陵上の古墳のように、背面の周溝掘削を最小限に留め、地形が低い方を積極的に加工して、838 溝が掘削された可能性がある。

1662 土坑は、838・1452 溝内で検出された。平面形は長方形を呈し、規模は長さ 2.8 m、幅 1.1 m、深さ 0.17 mである。埋土は、下層がブロック土、上層が極細砂混シルトである。土坑中央では、底面が方形に落ち込む部分が検出された。５－２ｂ層と地層の境界部が不明瞭で、別遺構を検出した可能性がある。1662 土坑の上層の堆積構造は偽礫が観察されており、土坑基底面直上の堆積と考えられる。埋葬施設の可能性を考慮して調査を行っており、埋土をすべて洗浄したが、遺物は出土しなかった。838・1388 溝から出土した土器は、図 341 －１～５を図示した。１は須恵器壺で、1191 溝から出土した破片と接合する。外面は回転ナデ、内面はナデ調整される。２は樽形瓶で 1191 溝出土の破片と接合する。側面端部は外方にやや突出し、近接して突帯をめぐらせ、突帯間には波状文が施される。３は須恵器壺で、1389 溝から出土した破片と接合する。４は須恵器把手付椀である。５は韓式系土器鍋の口縁部である。出土した須恵器は TK73 型式に位置付けられる。

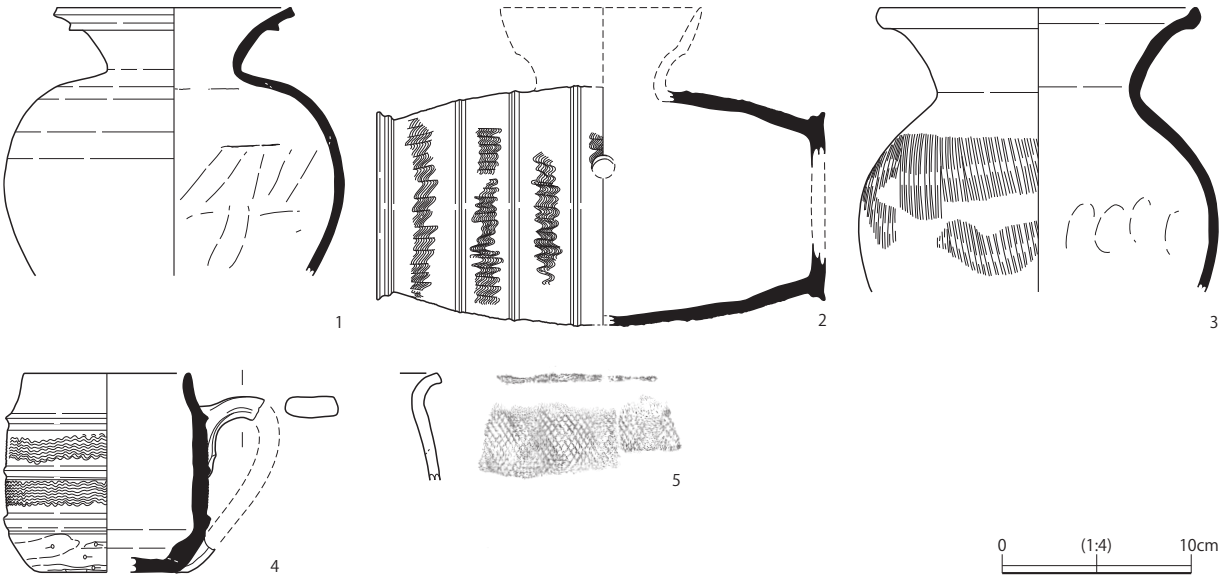


図 341　1－2・2－2区　838 溝他出土遺物

図 342　1－2・2－2区　1191 溝平面

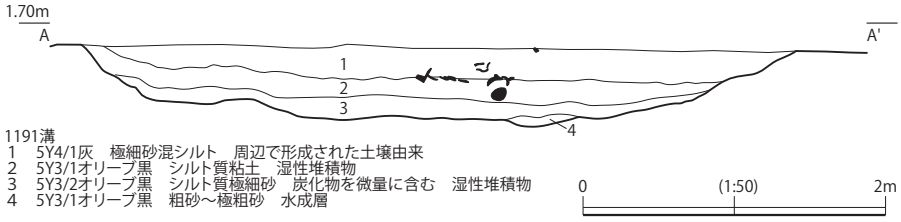


図 343　1－2・2－2区　1191 溝断面

なお、トレンチ内にかかっていたため、平面形など不確定な要素が多いが、調査地北西隅で同様の規模の溝が北側断面で確認された。水田の灌漑用水路である可能性が否定できないものの、今回のような周溝である可能性もあり、記して今後の検証に託したい。

1192 溝（図 338・339）

1191 溝の北側で検出された。切り合い関係は 1192 溝が新しい。規模は、幅 1.2 m、深さ 0.4 mである。埋土は、下層がブロック土、上層が極細砂質シルト・極細砂混粘土である。埋土が 4 層に類似することから、1191 溝廃絶以降、 4 層形成段階に灌漑用水路として機能した可能性がある。出土遺物は無く、時期は不明である。

1191 溝（図 338・342 ～ 350、図版 22・91 ～ 95・97）

838･1452 溝の南側で検出された。微高地上の集落の南を画する溝である。規模は、幅 4.6 ～ 5.7 m、深さ 0.5 mである。埋土は、下層が水成堆積物である砂層、中層が湿性堆積物の泥層、上層が土壌に由来する極細砂混シルトである。遺物は、中層の泥層を中心に出土した。2－1 区 82 溝と比較して、須恵器の量が多く、木製品は出土しなかった。

図 344 －1 ～ 47 は須恵器坏身･坏蓋である。 5 は内面に同心円文当具痕が残る。ツマミが付く蓋は、6・7・16・17・28・40 である。17 は扁平なツマミ、7・28 は輪状のツマミが付く。29 は外面にカキメが施される。44 は内面に同心円文当具痕が残る。須恵器坏身・坏蓋は、TK216 ～ TK47 型式に比定できる。35・40 は TK216 型式、44・46 は MT15 型式に比定され、時期幅のある土器が出土している。26・27・32・39・41・44・46 が上層上位から出土した須恵器である。

図 345 －1 ～ 31 は須恵器坏蓋・高坏・壺・甕を図示した。 1 は坏蓋である。天井部の沈線間に櫛描列点文が施される。口縁部は外傾し、口縁端部は面をもつ。ON231 型式に比定できる資料か。 2 ～ 12 は有蓋高坏である。11 は菱形、12 は円形の透孔が脚部に穿たれる。13・14 は 12 と同じく脚部に円形の透孔があり、14 の脚部突帯はシャープに仕上げられる。15 ～ 20 は無蓋高坏である。19 は把手付無蓋高坏である。脚部には三角形の透孔が大きく開けられる。20 は土師器を模した須恵器の高坏坏部である。一見、瓦質焼成に見えるもので、最終的に焼成不良と判断した。内面には線状に工具の当たりが認められる。坏部と脚部の接合は土師器高坏の手法による。21 は高坏脚部で坏部との接合面に葉脈のような、筋が凸状に認められる。

22 は鉢である。口縁部が「Ｌ」字形に屈曲し、端部に平坦な面をもつ。外面は格子目タタキが施される。24 は須恵器鉢である。外面には、凹線文間に波状文が施される。内面は上位が回転ナデ調整、下位がナデ調整される。25・26 は直口壺である。口縁端部が垂直に立ち上がり、端部に面をもつ。26 は底部に格子目タタキが残る。27 は甕で、カキメが施される。28 ～ 31 は壺である。29・30 の外面は体部が平行タタキ後、波状文・カキメが施される。29 の内面は回転ナデ調整で、底面にはナデの痕跡が残る。

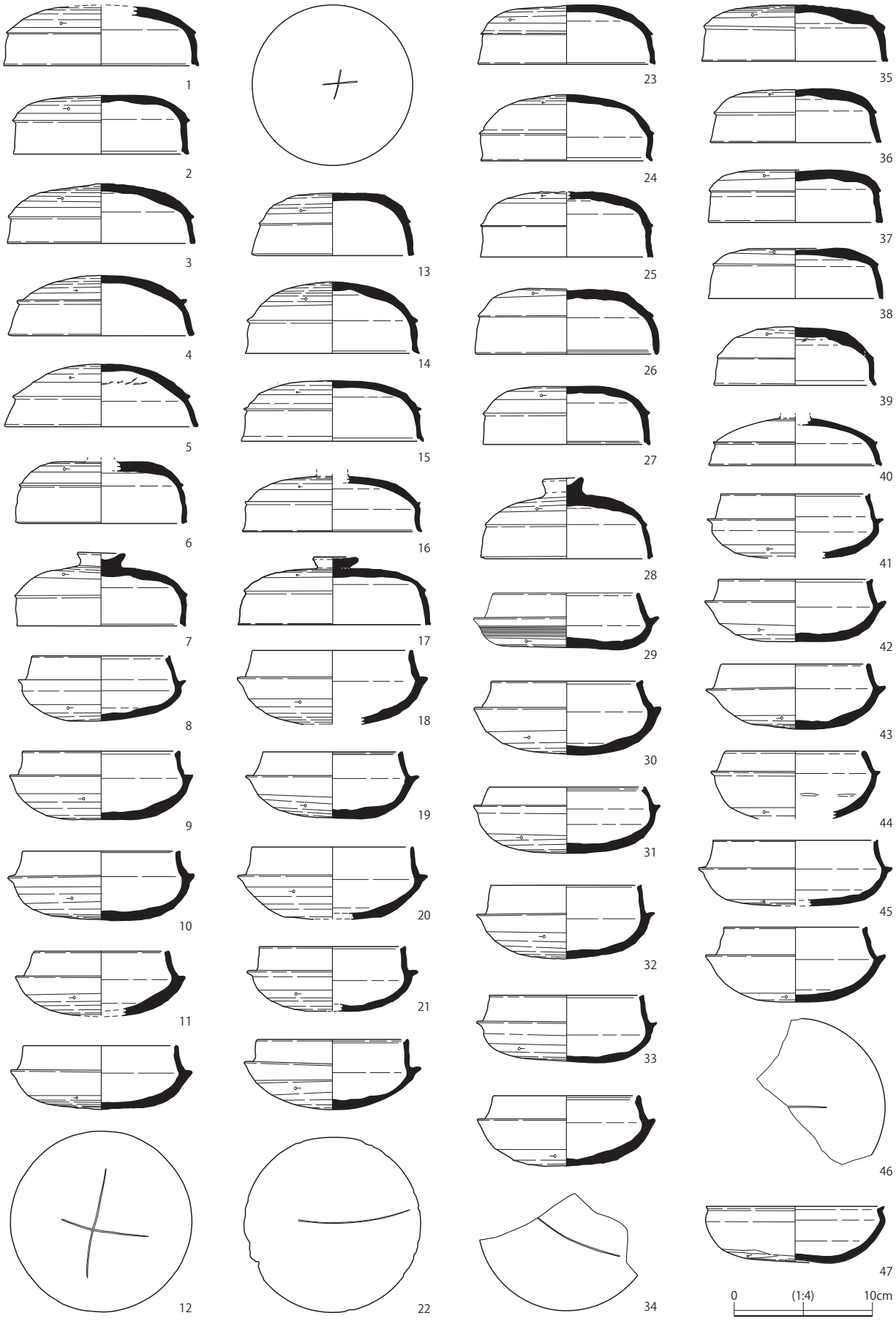


図 344　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（1）

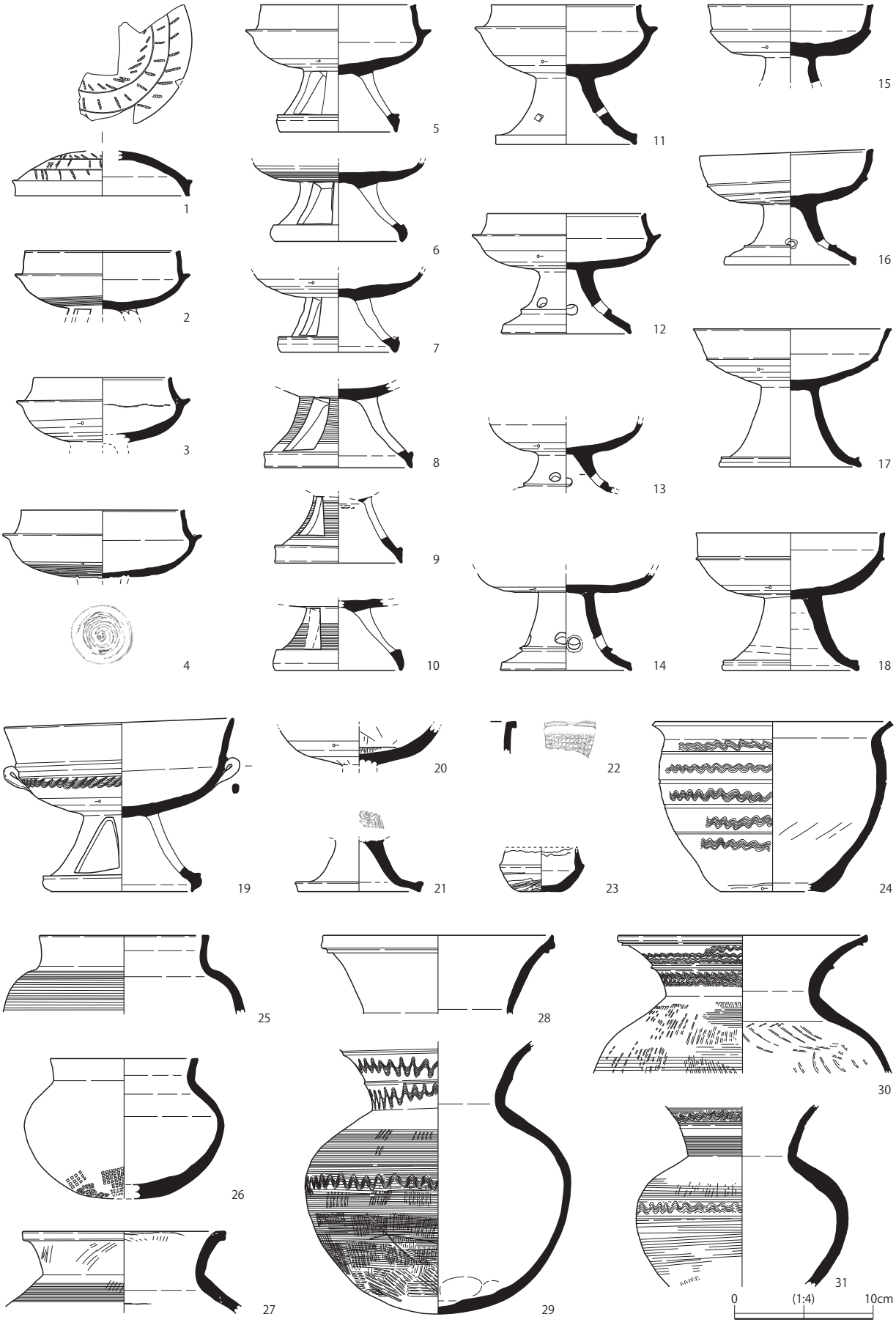


図 345　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（2）

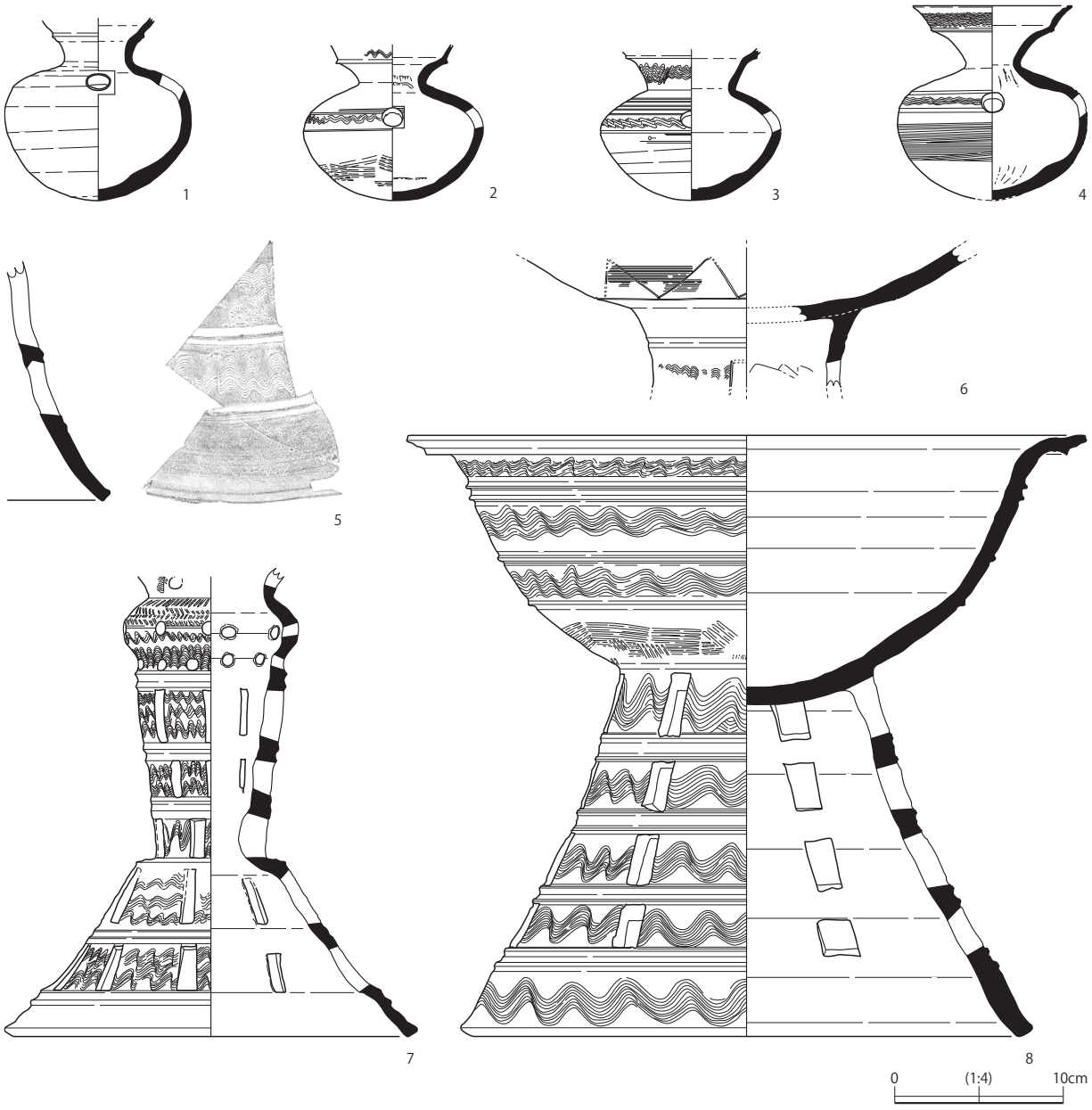


図 346　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（3）

図 346 － 1 ～ 8 は須恵器瑞・器台を図示した。 1 の内外面は回転ナデ調整される。 2 の外面は回転ナデと平行タタキによって仕上げられる。内面は回転ナデ調整され、内底面には、同心円文当具痕が残る。 3 の内外面は回転ナデが施される。波状文を挟んで上位に凹線が 4 条、下位に 2 条（内、 1 条は途中で終わる）あり、その間に透孔が穿たれる。 4 の内外面は回転ナデ調整され、外面下位にはカキメが施される。

5 は器台脚部である。外面には突帯 2 条と波状文 2 単位が施される。 6 は高坏形器台の坏部と脚部である。坏部外面はカキメの後、フリーハンドで三角形の沈線と横方向の沈線を組み合わせて、鋸歯文が施される。 7 は筒形器台である。 2 ・ 3 層から出土した破片と接合した。上部は壺形で円形の透孔が穿たれ、肩部には列点文が 4 段施されている。筒部には突帯を挟んで長方形の透孔が穿たれる。脚部にも、長方形の透孔が縦に並んで穿たれる。 8 は高坏形器台である。口縁直下の幅が狭い箇所に施された波状文以外は、緩やかな屈曲の波状文が施される。坏部の外面下位には平行タタキが残る。

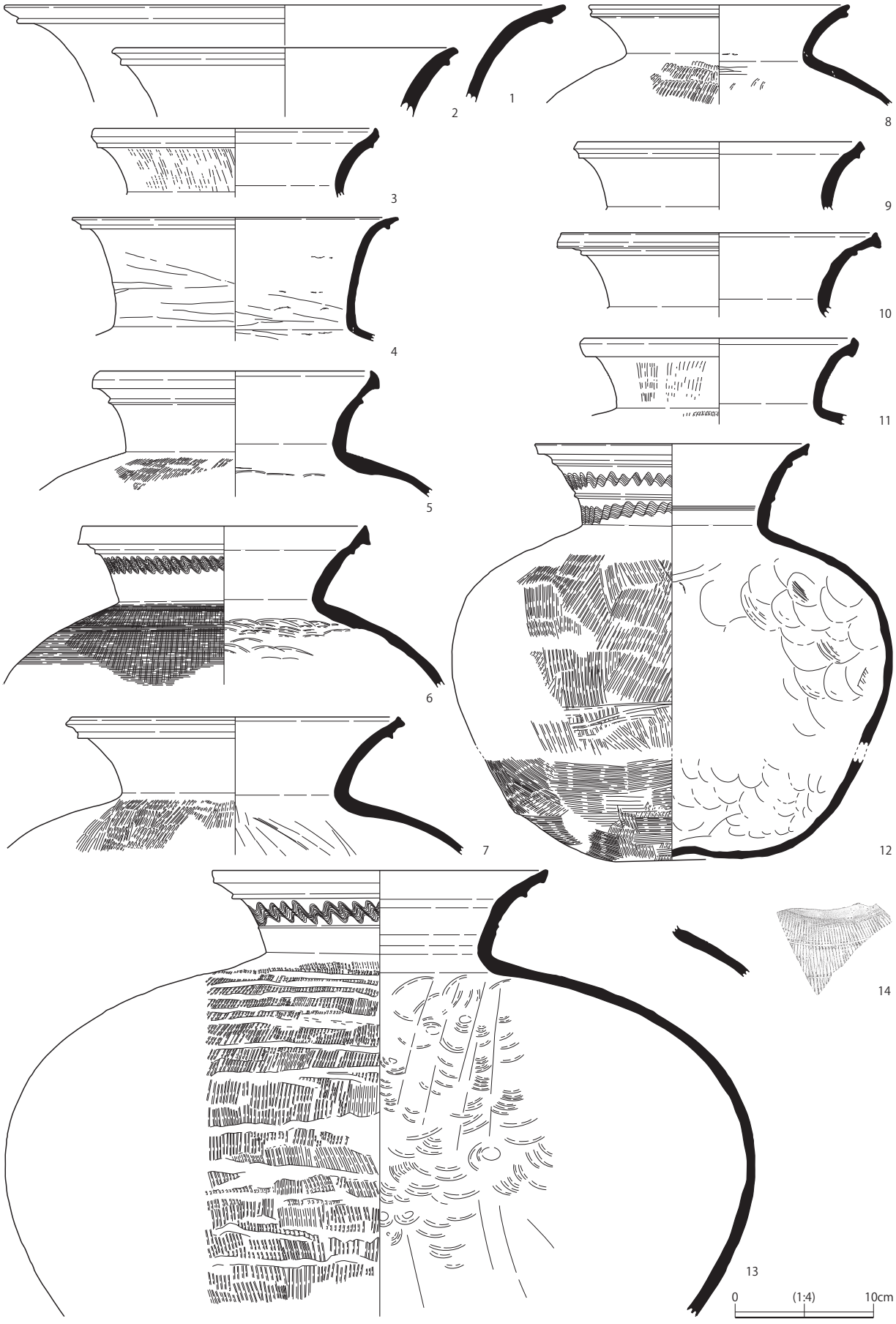


図 347　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（4）

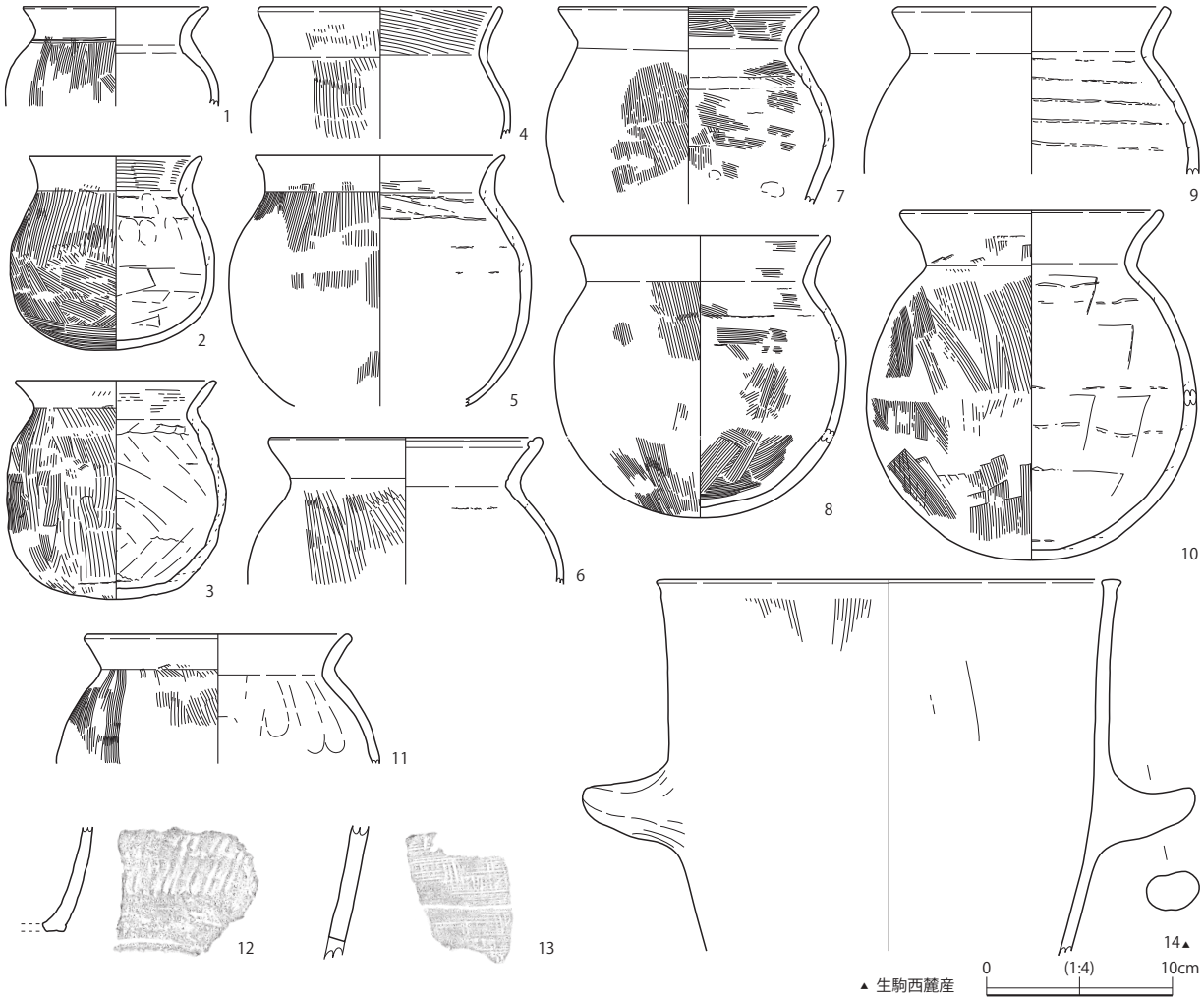


図 348　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（5）

図 347 －1 ～ 14 は須恵器甕を図示した。1・2・4・8は口縁端部より下がった位置に丸味を帯びた突帯がめぐる。3は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、端部に面を持たない。5・10 は口縁端部が内外面からヨコナデされることで、丸味を帯びた端面は上下に拡張される。6・7・9・12・13 は端面と口縁部内面をヨコナデされることで、端部が断面三角形状を呈する。13 の外面は平行タタキ後、間隔をあけた横方向のナデによってタタキが一部消されている。11 は端面上部と口縁部内面をヨコナデされることで、端部が上方に立ち上がる。14 は平行タタキの後に、沈線が施される。

図 348 －1 ～ 14 は土師器甕・甑を図示した。1 ～ 11 は小型の甕である。1 ～ 3 の外面は縦方向のハケ調整、1 の内面はナデ調整、2・3 は板ナデ調整される。4 の外面はハケ調整、体部内面はナデ調整される。5 の外面はハケ、内面はナデ調整されるが磨滅が顕著である。9 の外面は磨滅、内面は粘土接合痕が認められる。11 の外面はハケ調整、内面は指ナデ調整される。12 は韓式系土器甑の底部で、外面には平行タタキが残る。透孔の形状は不明である。13 は土師質の甑で、外面の調整は須恵器の製作手法を用いる。外面は平行タタキの後、カキメが施される。14 は土師器甑である。口縁端部は面をもち、外・内方向に端面が広がる。

図 349 －1 ～ 12 は土師器・韓式系土器の甕・鍋を図示した。1 ～ 11 は甕である。1 は口縁端部に面をもち、体部外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整される。宇田型甕で、東海系の搬入品である。3・6・9 は韓式系土器甕で、体部外面は平行タタキ、内面はナデ調整で、6 の体部内面には指押さえの痕跡が

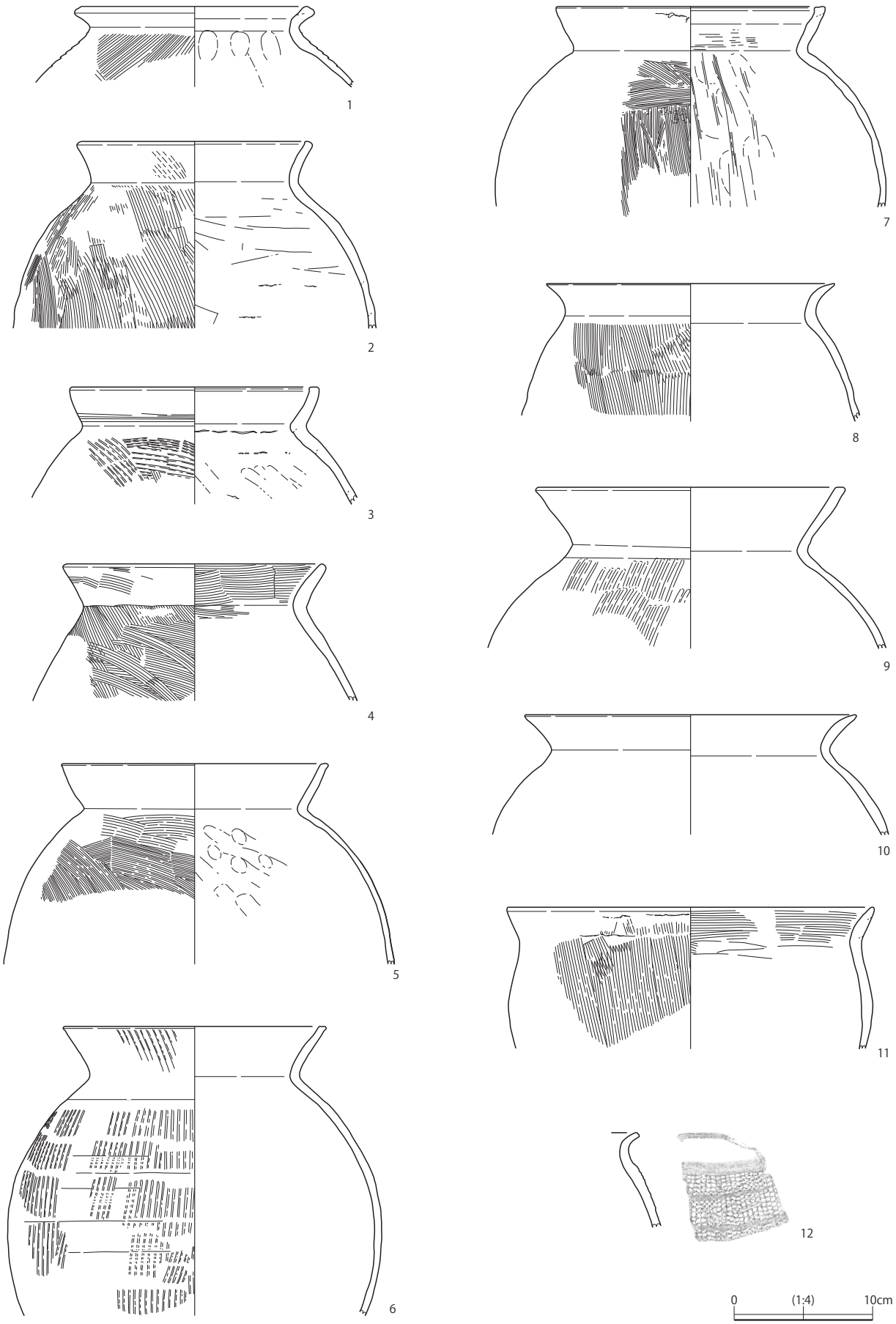


図 349　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（6）

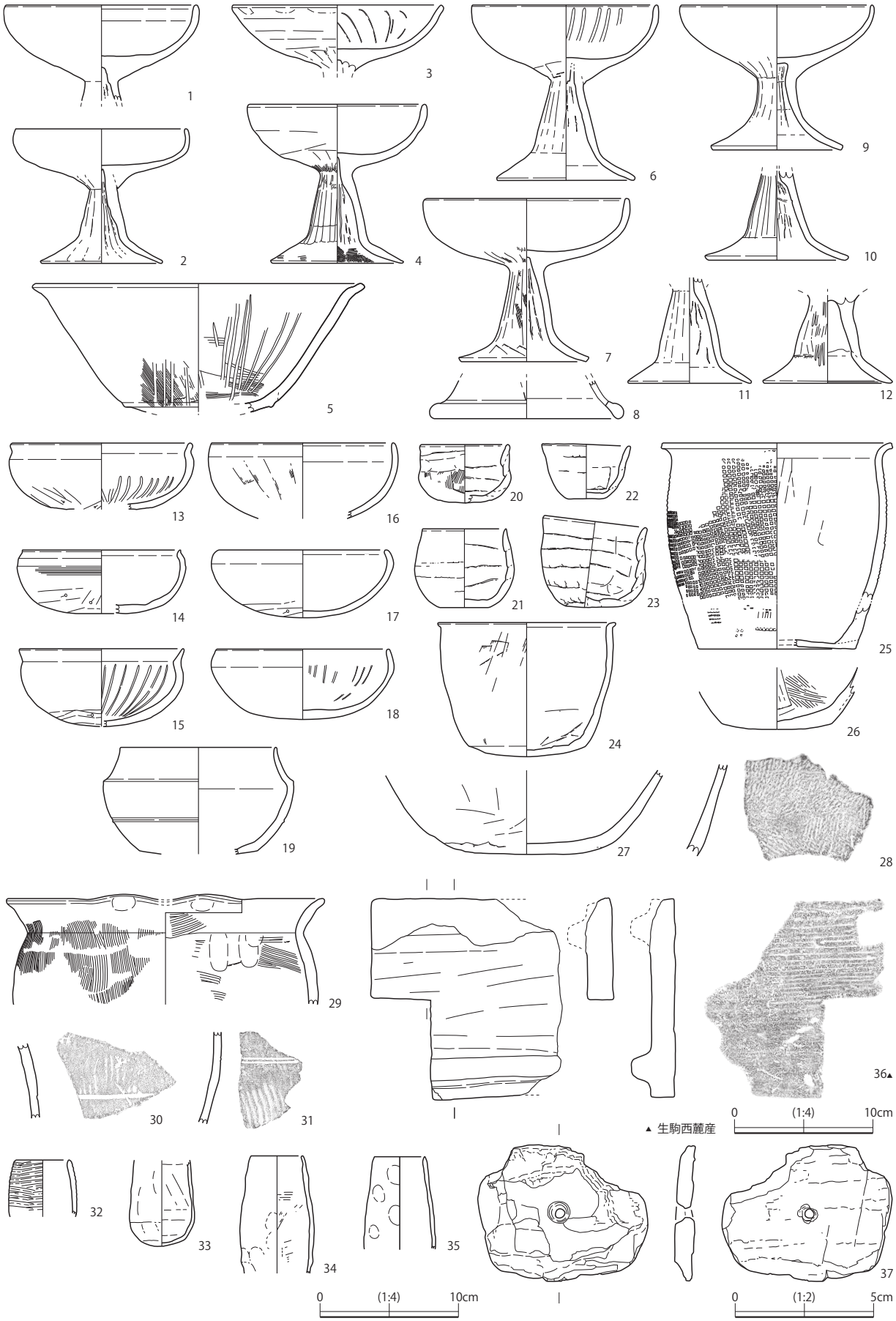
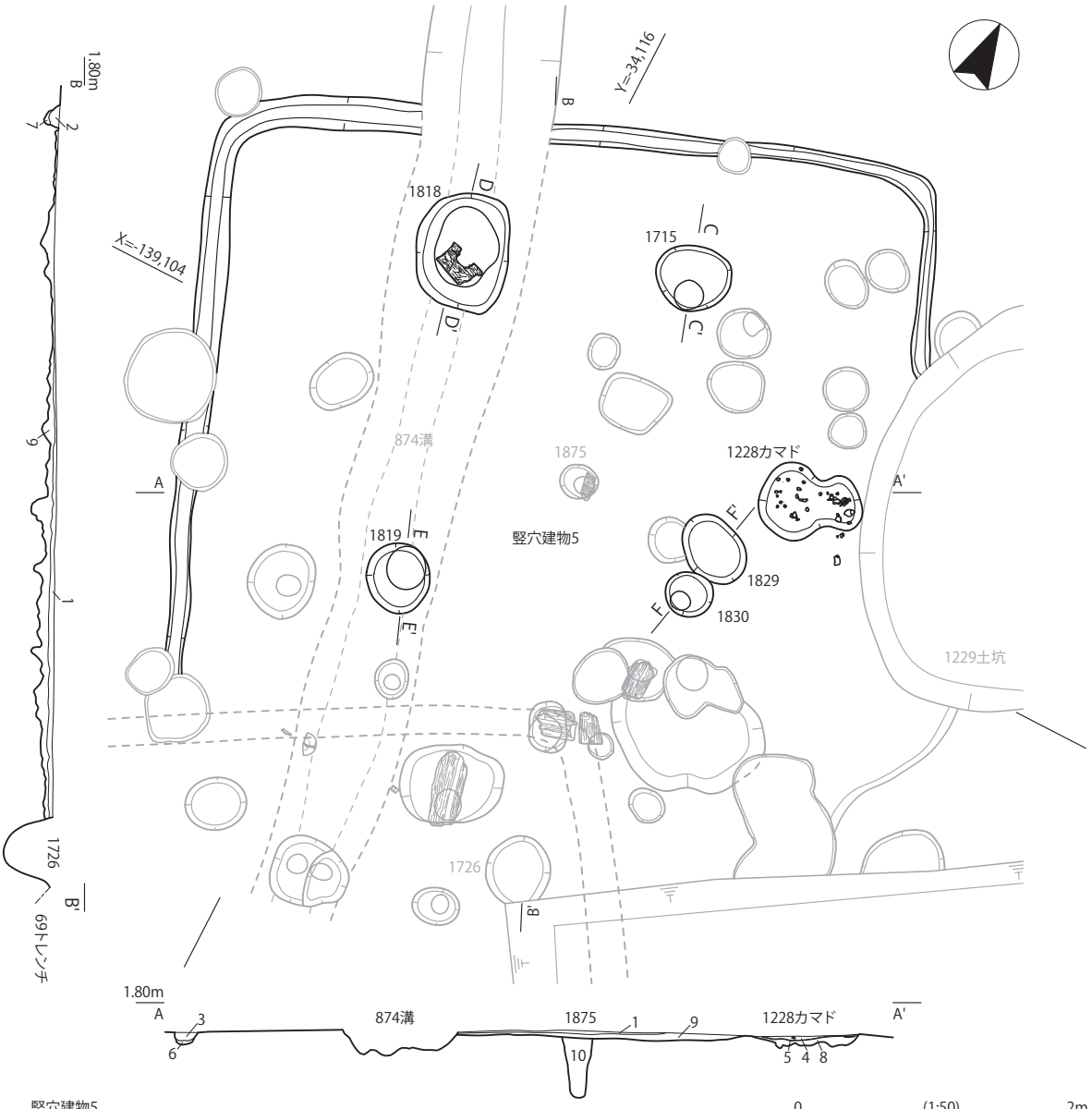
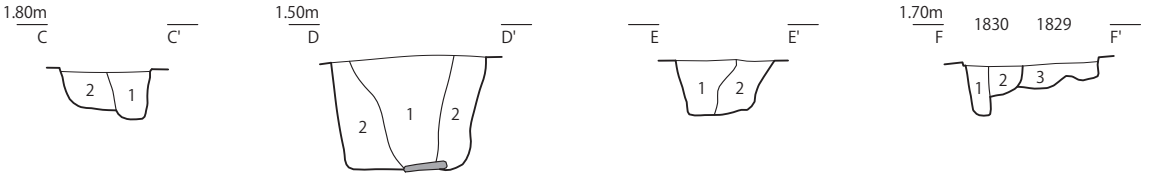


図 350　1－2・2－2区　1191 溝出土遺物（7）



竪穴建物5
1　10YR5/2灰黄褐　極細砂混シルト
2　10YR5/2灰黄褐　極細砂混シルト　壁溝埋土
3　10YR4/2灰黄褐　極細砂混シルト～粘土　壁溝埋土
4　7.5YR4/3褐　シルト
5　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む　機能時形成層
6　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を微量含む　壁溝埋土
7　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　加工時形成層　壁溝埋土
8　10YR4/1褐灰　シルト質極細砂　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む　加工時形成層
9　10YR5/1褐灰　シルト　弱い土壌化　床面・加工時形成層
10　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　1875柱穴

0　(1:50)　2m



1715
1　10YR5/1褐灰　粘土質シルト
　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト
　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む
　裏込め

1818
1　N4/0灰　粘土質シルト　抜き取り
2　N5/0灰　極細砂混シルト
　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を少量含む
　裏込め

1819
1　N5/0灰　極細砂混シルト
　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を
　少量含む　抜き取り
2　N6/0灰　粘土質シルト
　裏込め

1830・1829
1　N5/0灰　シルト質粘土
　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を
　少量含む　抜き取り　1830柱穴埋土
2　N6/0灰　粘土質シルト　裏込め
　1830柱穴埋土
3　N5/0灰　粘土質シルト
　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む
　1829埋土

0　(1:40)　2m

図 351　1－2・2－2区　竪穴建物 5 平・断面

残る。10 の体部内外面はナデ調整される。11 の体部外面はハケ調整、内面はナデ調整される。12 は韓式系土器鍋である。外面はタタキのち間隔を空けて横方向にナデ調整される。

図 350 － 1 ～ 12 は、土師器高坏である。8 は須恵器を模した土師器高坏の脚部で、透孔が開けられる。13 ～ 18 は土師器鉢である。13・15・18 は内面見込みに放射状の暗文が施される。19 は須恵器を模した土師器の鉢である。口縁部と体部の境界にシャープな稜が付き、凹線 1 条が施される。20 ～ 23 は土師器の小型鉢である。24 は韓式系土器平底鉢で、外面は板ナデのち、ナデ調整される。内面はナデ調整。25 は韓式系土器平底鉢で、外面は格子目タタキが施される。26 は韓式系土器の平底鉢である。底部は丸みを帯びる。27 は土師器甕底部である。平底気味。28 は韓式系土器鉢で、縄蓆文タタキが施される。29 は土師器片口鉢である。30・31 は韓式系土器で、平行タタキと沈線が施される。32 ～ 35 は製塩土器である。33 ～ 35 はナデで仕上げられる。36 は U 字形板状土製品である。37 は滑石製有孔円板である。両面穿孔。

竪穴建物 5 （図 351・352、図版 24・96）

1300 溝の西側で検出された。平面形は方形を呈し、規模は一辺 5.2 m、基底面までの深さ 0.06 m である。南東部は土壌化の影響と複数の柱穴に切られていたため検出できなかった。北東辺の中央部では、1228 カマドが検出された。規模は、長さ 0.8 mで、北東側の幅 0.45 m、南西側の幅 0.5 mである。1228 カマドの平面は、北東－南西に長く、平面的にくびれる部分が北東寄りにある。カマド本体は検出されていないが、このくびれより北東がカマド内で、南西が掻き出し口と考えられる。カマド内には、機能時形成層の炭化物を多量に含んだシルト（以下、炭層）が堆積する。カマド上部も削平を受けていたため、この炭層が弧状に検出された。カマド内には形状が大きい破片、掻き出し口には形状が小さい破片が確認され、同時に炭化物や焼土塊が出土した。

竪穴建物 5 から出土した遺物は、図 352 － 1 ～ 4 に図示した。1 は竪穴建物に入れたトレンチから出土したもので、床面形成層に帰属する土器と考えられる。須恵器坏身口縁部で、端部に段がある。TK47 型式か。2 は須恵器坏身、3・4 は韓式系土器である。3 は直線文系平行タタキ、4 は平行タタキが施される。

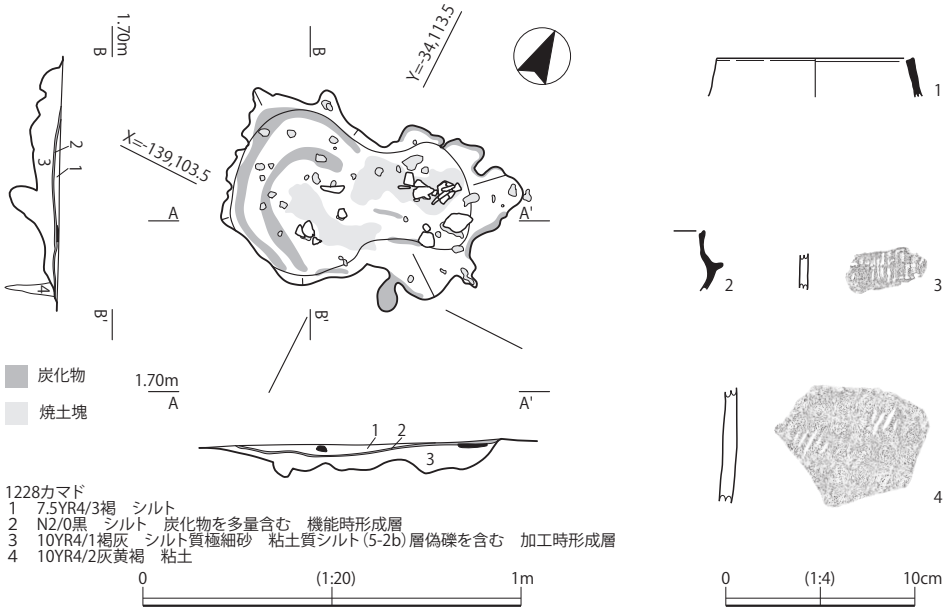
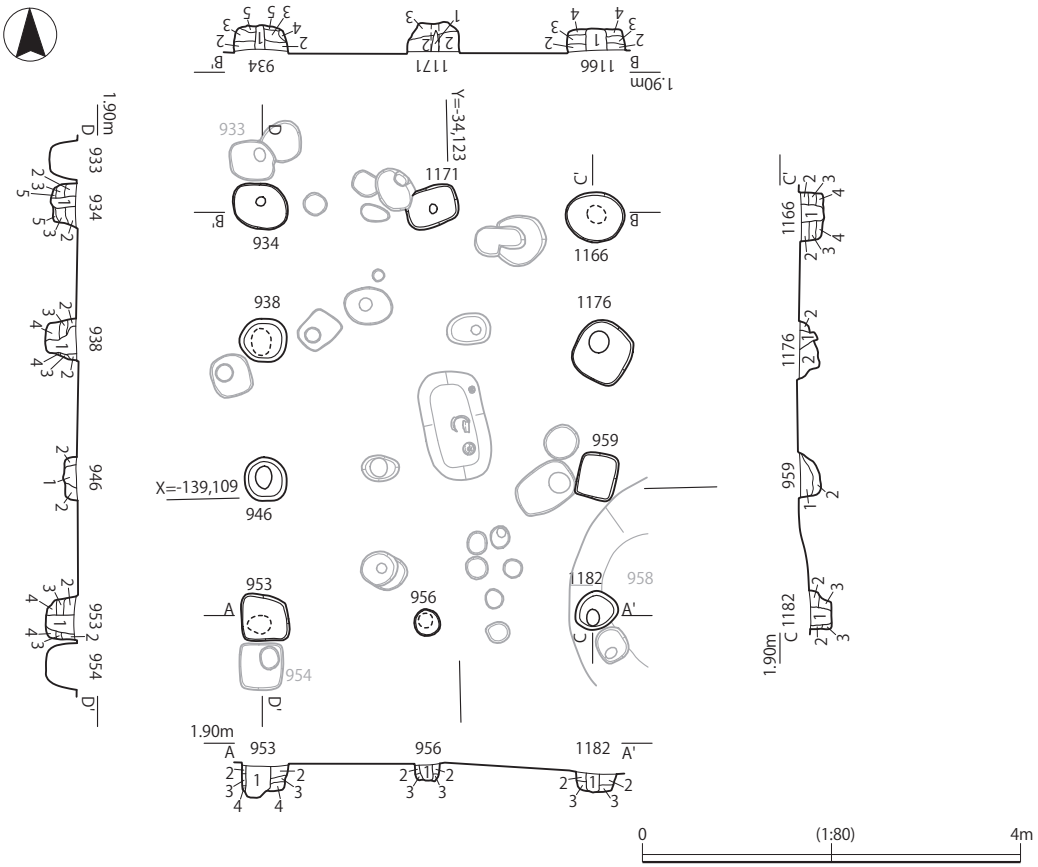


図 352　1－2・2－2区　竪穴建物 5　1228 カマド平・断面　出土遺物



掘立柱建物14
934
1　10YR3/2黒褐　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR4/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　N6/0灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む
5　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む
938
1　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/2黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
946
1　N4/0灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
953
1　5G3/1暗緑灰　シルト　5G6/1緑灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト　5G7/1明緑灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　5G6/1緑灰　シルト　N5/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　5G5/1緑灰　シルト　N5/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
956
1　5G5/1緑灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　5G7/1明緑灰　シルト　10YR5/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　5G6/1緑灰　シルト　10YR5/2灰黄褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
959
1　N6/0灰　シルト　N4/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N3/0暗灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
1166
1　N3/0暗灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N6/0灰　シルト　N5/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　N6/0灰　シルト　N4/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　N6/0灰　シルト　N5/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1171
1　N5/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N4/0灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　N4/0灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1176
1　N5/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N3/0暗灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1182
1　10YR4/1褐灰　シルト　5G6/1緑灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　5G7/1明緑灰　シルト　N4/0灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　N5/0灰　シルト　5G6/1緑灰シルト偽礫を少量含む　裏込め

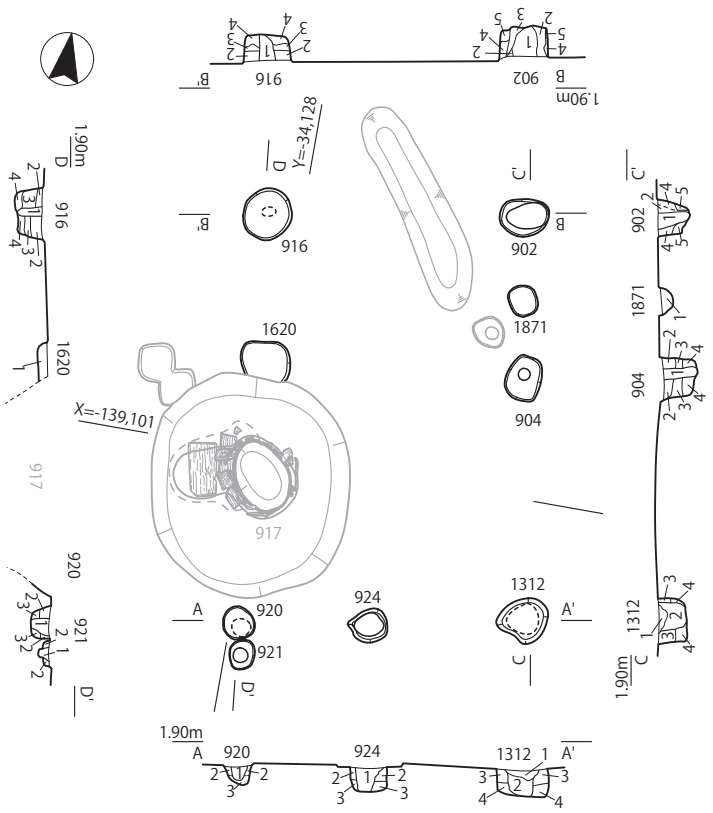
図 353　1－2・2－2区　掘立柱建物 14 平・断面

掘立柱建物 14（図 338・353）

竪穴建物 5 の西側で検出された。構造は 2 間× 3 間である。規模は、梁行 3.4 m、桁行 4.4 mである。柱はすべて抜き取られており、礎板は確認されなかった。934・1176 柱穴のように柱部分が沈下している状況を確認されたが、基盤層が砂質で、調査地南側よりも安定したために用いられなかったと考えられる。柱穴から土師器細片が出土したものがあったが、時期は不明である。

掘立柱建物 15（図 338・354）

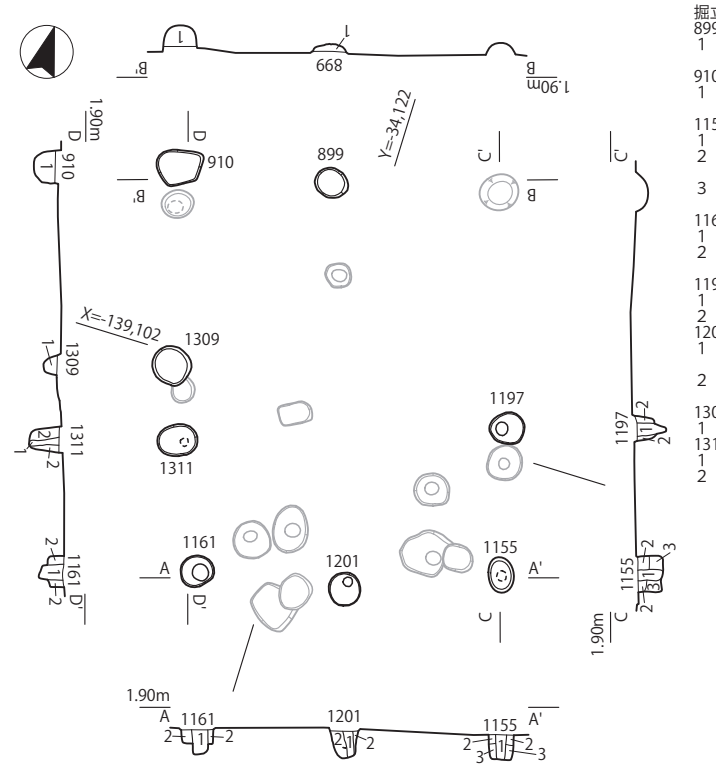
917 井戸周辺で検出された。917 井戸と 1620 柱穴は切り合い関係があり、917 井戸の方が新しい。建物構造は、 2 間× 2 間である。規模は梁行 3.0 m、桁行 4.4 mである。904 柱穴から須恵器無蓋高坏の細片、916 柱穴から須恵器甕体部片が出土した。甕は、外面平行タタキ、内面同心円文当具痕が残る。いずれも細片で、TK47 ～ MT15 型式に位置付けられる。



掘立柱建物15
902
1 10YR3/2黒褐 シルト N6/0灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
2 10YR5/2灰黄褐 シルト 抜き取り
3 10YR3/1黒褐 シルト 抜き取り
4 N6/0灰 シルト 裏込め
5 N5/0灰 シルト 裏込め
904
1 N4/0灰 シルト 柱痕
2 5B6/1青灰 シルト 裏込め
3 N4/0灰 シルト 裏込め
4 N3/0暗灰 シルト 裏込め
916
N4/0灰 シルト 5G6/1緑灰シルト偽礫を少量含む 柱痕
2 N5/0灰 シルト 5G7/1明緑灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
3 5G6/1緑灰 シルト N5/0灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
4 5G5/1緑灰 シルト N5/0灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
920
1 10YR4/1褐灰 シルト N4/0灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
2 5G6/1緑灰 シルト 10YR5/1褐灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
3 10YR4/2灰黄褐 シルト N5/0灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
921
1 10YR4/1褐灰 シルト 5G7/1明緑灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
2 5G6/1緑灰 シルト N6/0灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
924
1 5G5/1緑灰 シルト 10YR5/2灰黄褐シルト偽礫を少量含む 抜き取り
2 5G7/1明緑灰 シルト 10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
3 5G6/1緑灰 シルト 10YR5/1褐灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
1312
1 N5/0灰 シルト N7/0灰白シルト偽礫を少量含む 抜き取り
2 10YR3/2黒褐 シルト N6/0灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
3 N6/0灰 シルト N3/0暗灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
4 N4/0灰 シルト N7/0灰白シルト偽礫を少量含む 裏込め
1620
1 10YR4/1褐灰 シルト 5G7/1明オリーブ灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
1871
1 N5/0灰 シルト

0 (1:80) 4m

図 354　1－2・2－2区　掘立柱建物 15 平・断面



掘立柱建物16
899
1 5B6/1青灰 シルト 10YR5/1褐灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
910
1 5G7/1明緑灰 シルト 10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
1155
1 10YR5/1褐灰 シルト N5/0灰シルト偽礫を少量含む 柱痕
2 N5/0灰 シルト 10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
3 N5/0灰 シルト 10YR5/1褐灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
1161
1 10YR4/1褐灰 シルト N6/0灰シルト偽礫を少量含む 抜き取り
2 N5/0灰 シルト 10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
1197
1 N4/0灰 シルト 柱痕
2 N5/0灰 シルト 裏込め
1201
1 10YR4/1褐灰 シルト 2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む 柱痕
2 2.5Y6/1黄灰 シルト 2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む 裏込め
1309
1 10YR5/1褐灰 シルト 5G7/1明緑灰シルト偽礫を少量含む
1311
1 N6/0灰 シルト 2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む 柱痕
2 N5/0灰 シルト 2.5Y5/1黄灰シルト偽礫を少量含む 裏込め

0 (1:80) 4m

図 355　1－2・2－2区　掘立柱建物 16 平・断面

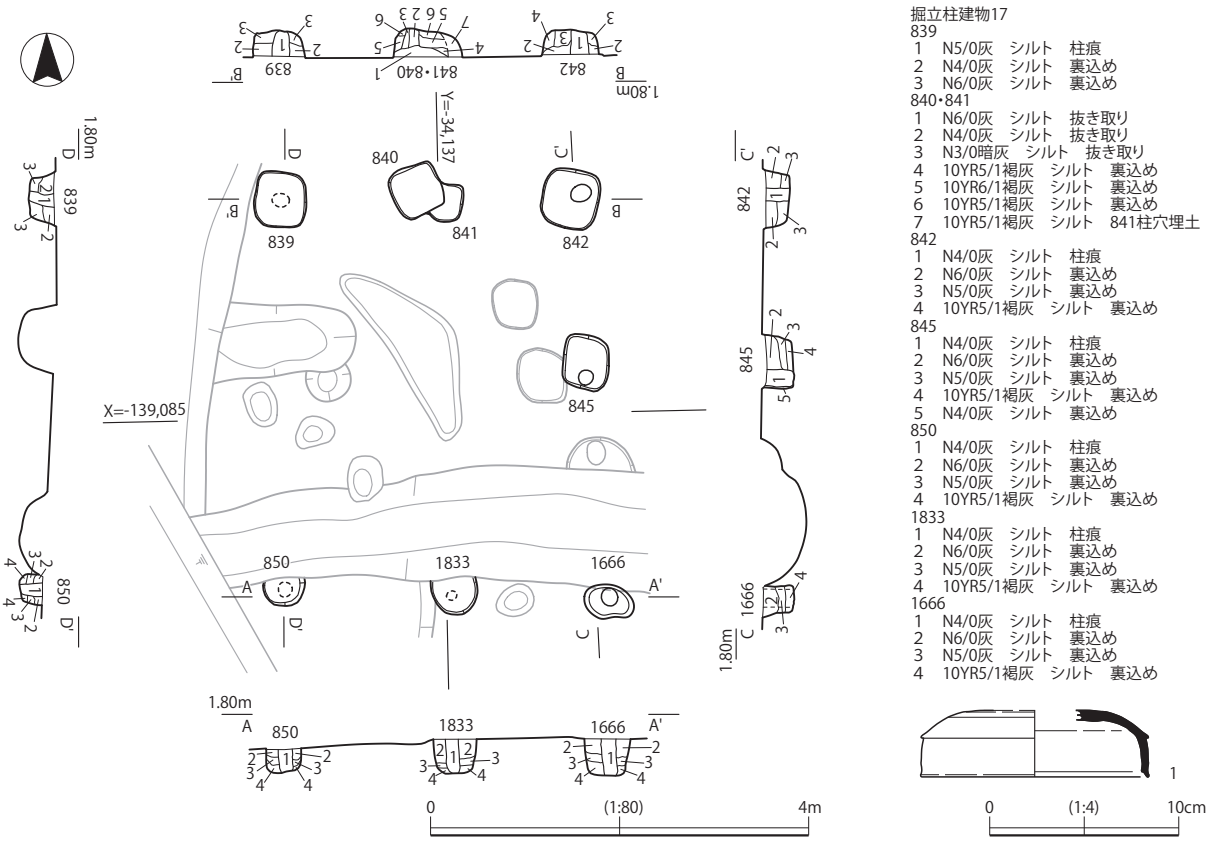


図 356　1－2・2－2区　掘立柱建物 17 平・断面　出土遺物

掘立柱建物 16（図 338・355）

竪穴建物 5 の北西で検出された。北西側の隅柱は 1667 ピット列に撹乱されるため未検出。建物構造は 2 間× 2 間で復元を行った。土師器・須恵器の細片が出土したが、時期は不詳。

掘立柱建物 17（図 338・356）

1191 溝の北側で検出された。構造は 2 間× 2 間である。規模は、梁行 3.4 m、桁行 4.4 mである。西側の桁行の柱穴は、1791 土坑があり検出することができなかった。840 柱穴から須恵器坏蓋が出土した。TK208 ～ 23 型式に比定される。

874 溝（図 338・357・358・374）

1300 溝の西側で検出された。竪穴建物を挟んで 1244 溝としても調査を行っており、後に連続することが判明したため、874 溝として報告する。竪穴建物と切り合い関係があり、874 溝→竪穴建物 6・7 の順に新しい。規模は、幅 0.85 m、深さ 0.25 mである。埋土は、下層が極細砂～細砂、中層から上層は土壌ないし崩落土由来の極細砂～細砂混シルトである。1192 溝ないし 1389 溝と連続すると考えられる。竪穴建物 6 調査時に 874 溝の検出面で図 358 － 8・10 の須恵器坏身が出土した（図 374 を参照）。TK10 型式。874 溝として遺物の取り上げを行ったが、竪穴建物 6 内で検出された 1821 柱穴から出土した破片と接合しており、竪穴建物 6 新段階に伴う土器と考えられる。

1300 溝（図 338・357・358、図版 90）

調査地中央の西側で検出された。規模は、幅 3.1 m、深さ 0.16 mである。埋土は、下層が水成層の砂層、上層が湿性堆積物のシルト質粘土である。上部は、 4 層とした作土層によって削平されている。1300 溝を境に、地形は東方向に向けて緩やかに低くなっており、東側は 4 － 1 ～ 5 － 1 層形成時には

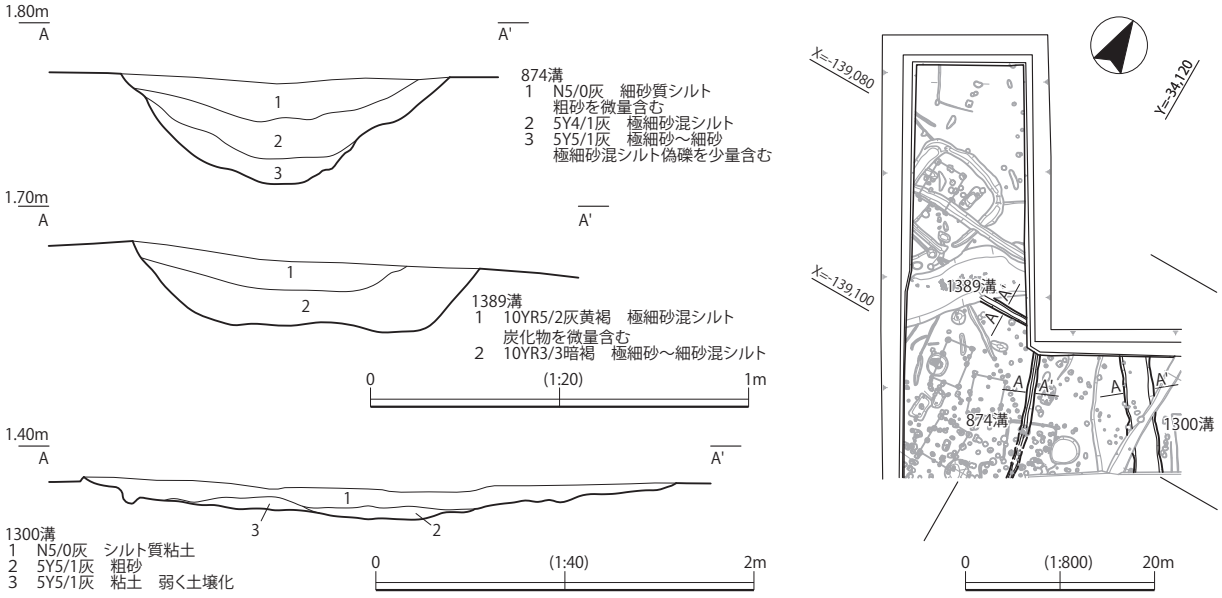


図 357　1－2・2－2区　874・1300・1389 溝平・断面

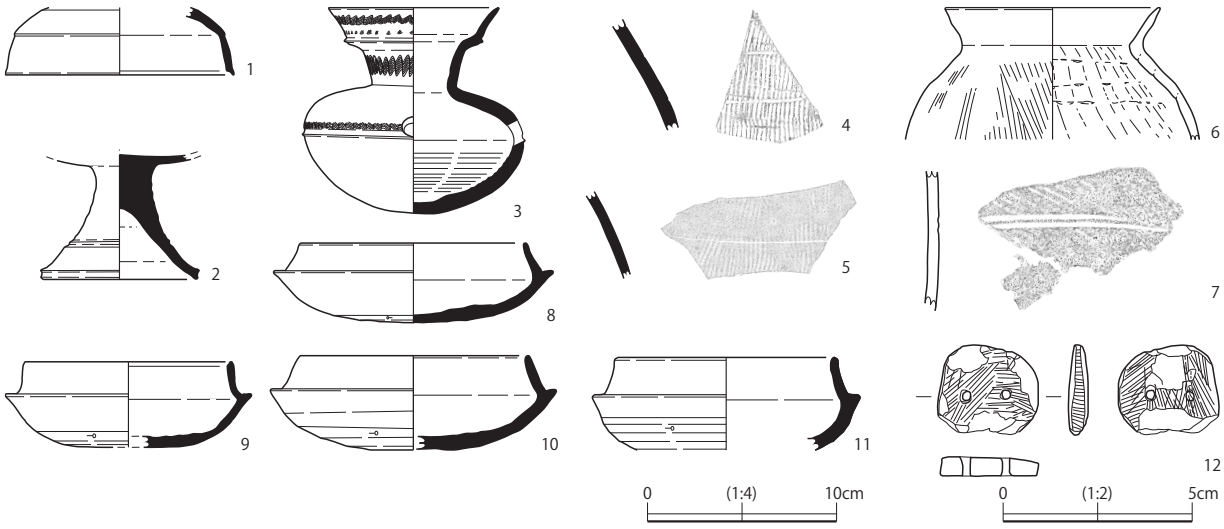


図 358　1－2・2－2区　874・1300・1389 溝出土遺物

水田として土地利用されている。1300 溝の東西でも田面の段が検出されており、地形の平坦化に伴って水田域が西側に拡張されたと考えられる。1300 溝から出土した遺物は、図 358 －1～7 を図示した。1 は須恵器坏蓋である。TK23 型式。2 は須恵器高坏である。中実の脚柱部で、脚部外面には突帯がめぐる。3 は須恵器𤭯である。4・5 は須恵器甕である。体部外面には直線文系平行タタキと沈線が施される。6 は土師器甕である。外面は縦方向のハケ調整、内面は縦方向のナデ調整で、粘土接合痕が残る。7 は韓式系土器の甑ないし鍋の体部片である。外面は平行タタキと沈線が施される。出土した須恵器は TK208 ～ TK47 型式に比定でき、1300 溝は 1191 溝と同時期、古墳時代中期中葉を中心に機能したと考えられる。

1389 溝（図 338・357・358、図版 97）

1191 溝の南側で検出された。1191 溝との切り合い関係はなく、同時期に機能したと考えられる。幅 0.9 m、深さ 0.18 mである。1389 溝から出土遺物は、図 358 －9・11・12 である。9・11 は須恵器坏身。TK23 ～ 47 型式。12 は滑石製有孔円板である。

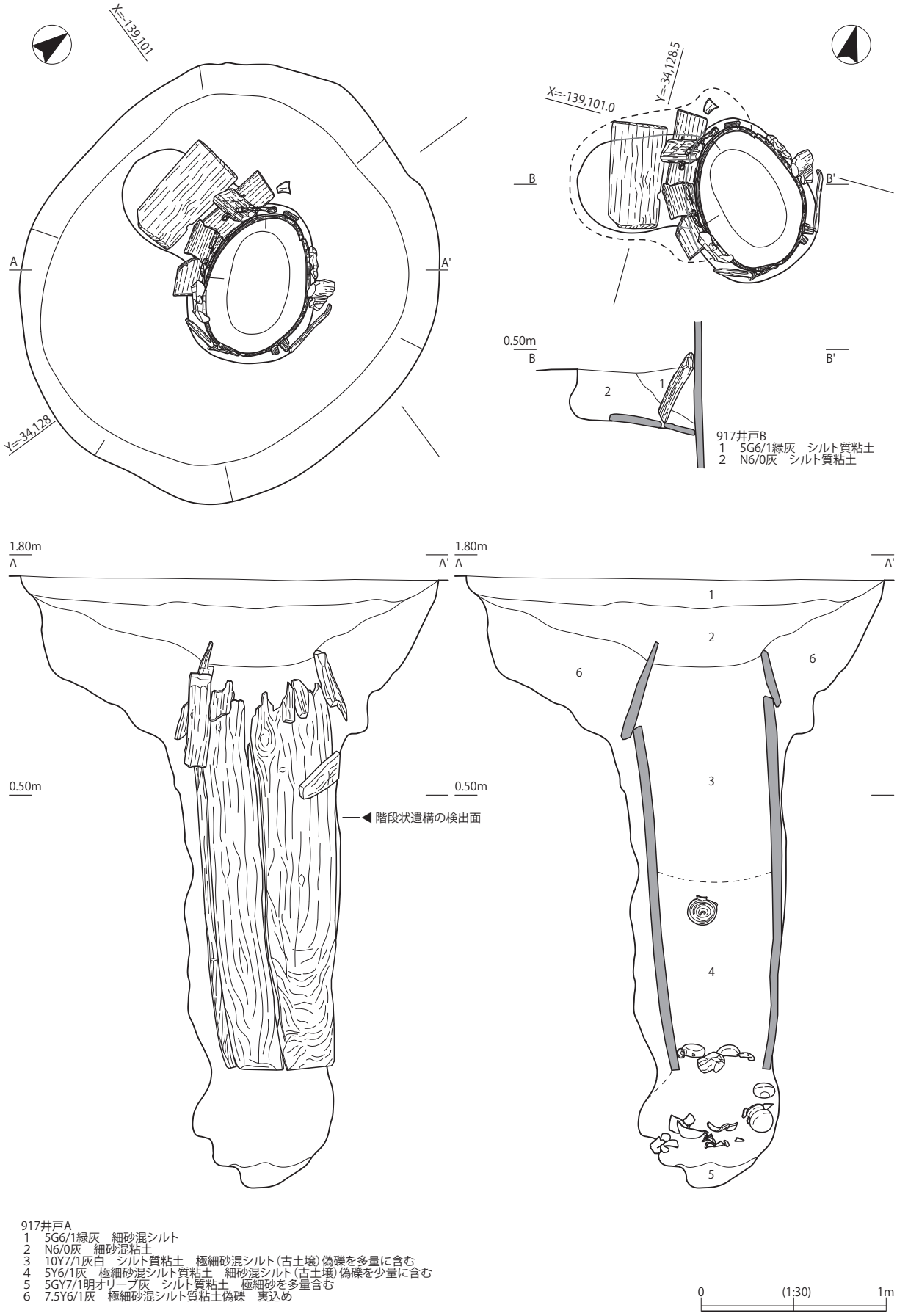


図 359　1－2・2－2区　917 井戸平・断・立面

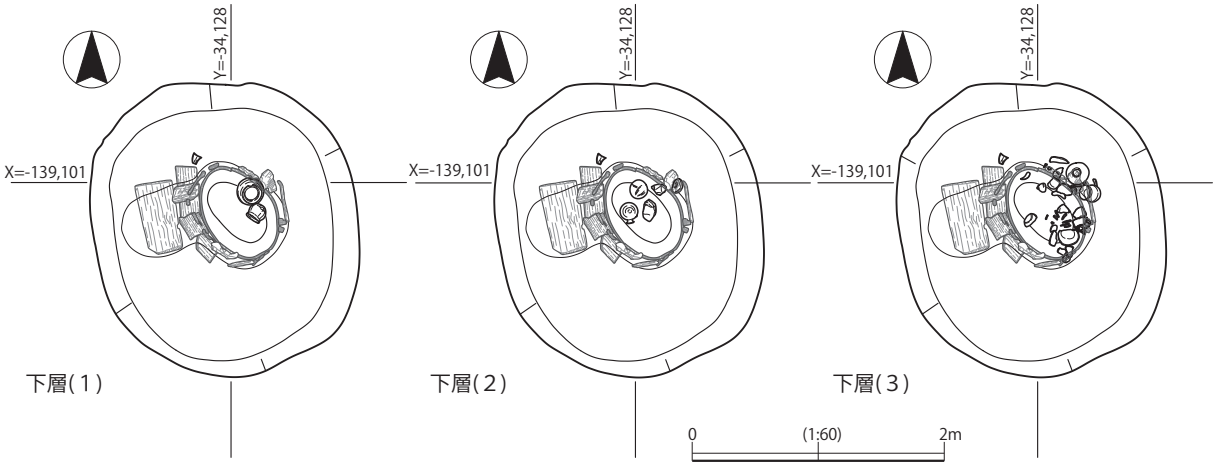


図 360　1－2・2－2区　917 井戸遺物出土状況平面

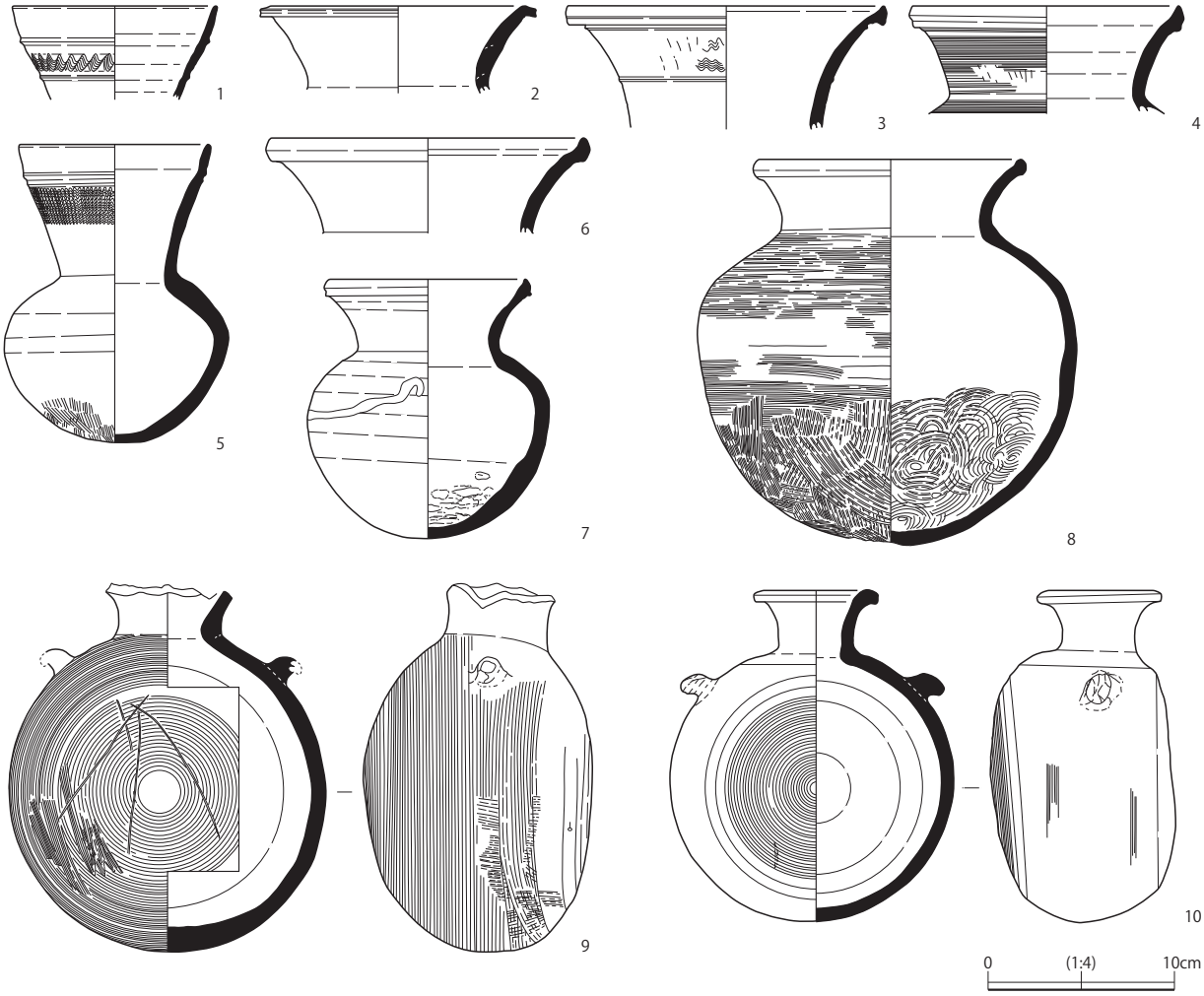


図 361　1－2・2－2区　917 井戸出土遺物（1）

917 井戸（図 338・359 ～ 364、図版 89・116 ～ 118）

1191 溝の南側で検出された。平面形は検出時は不整な円形を呈したが、円形を指向して掘削されたと考えられる。規模は、直径 2.3 m、深さ 3.3 mである。船材を転用した井戸枠が用いられ、井戸枠設置時に用いられた階段状遺構（足場）が検出された。階段状遺構は、平面形は楕円形、規模は長軸 0.63 m、短軸 0.5 mである。断面形はフラスコ形になっており、舷側板が差し込まれて固定されていた。

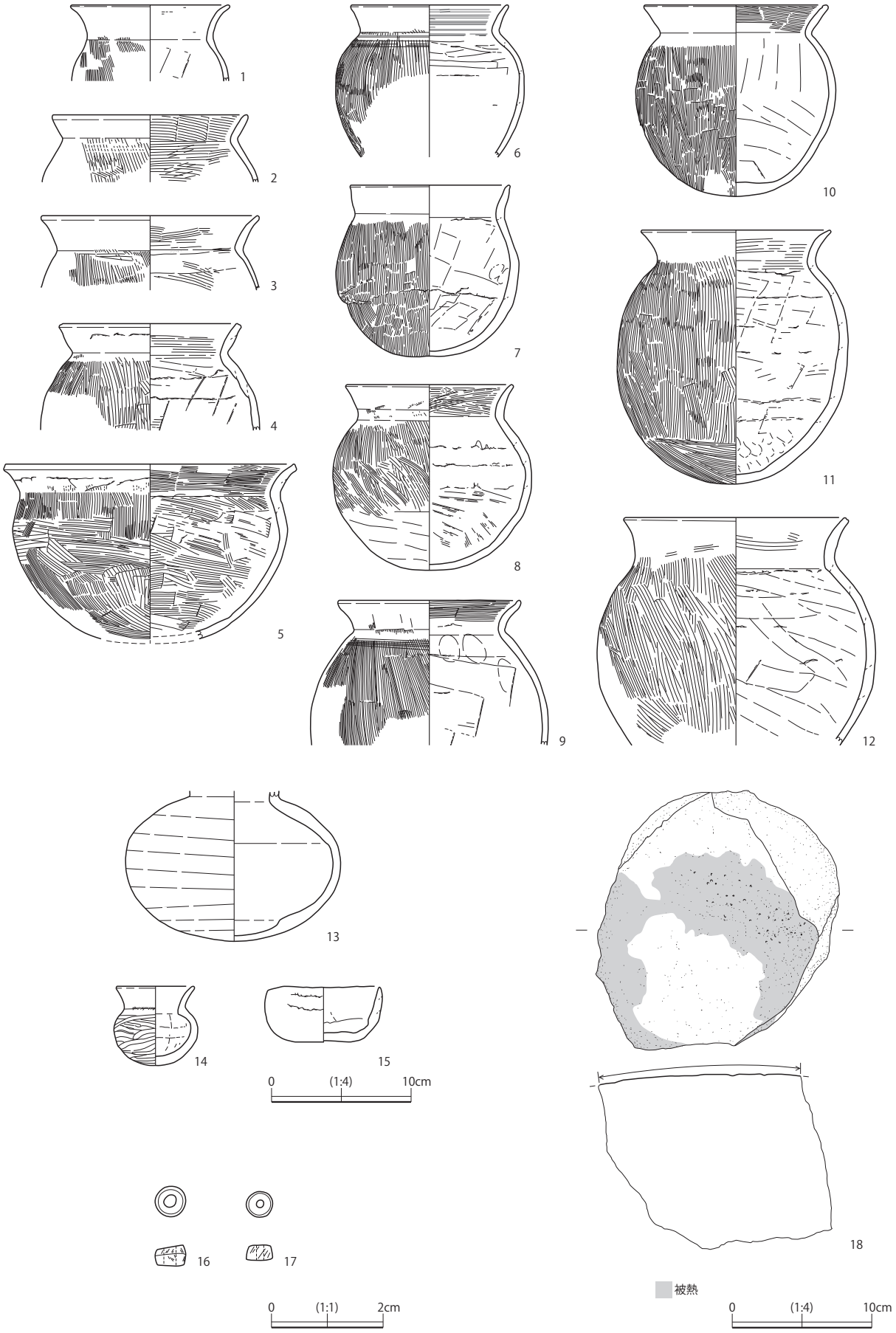


図 362　1－2・2－2区　917 井戸出土遺物（2）

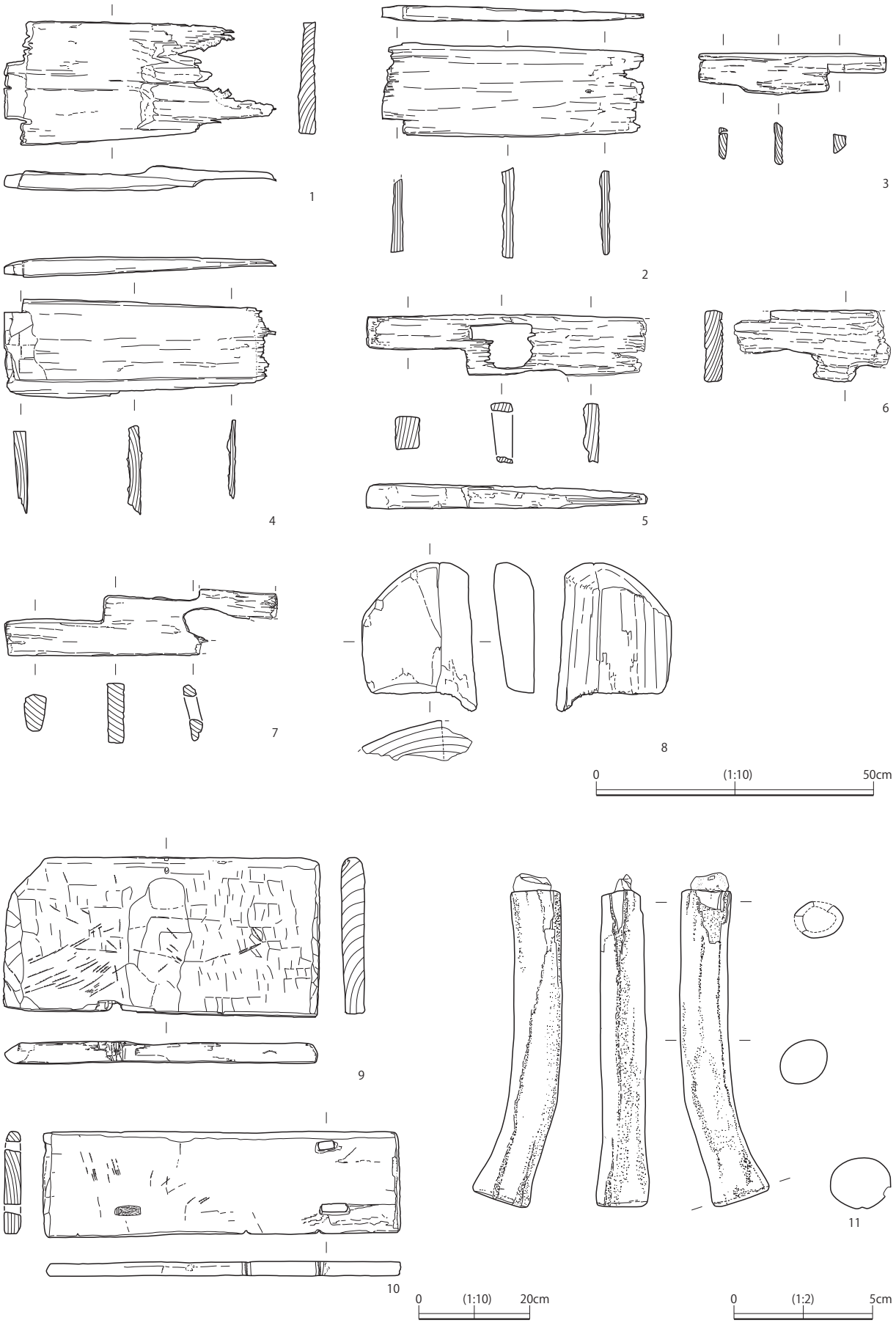


図 363　1－2・2－2区　917 井戸出土遺物（3）

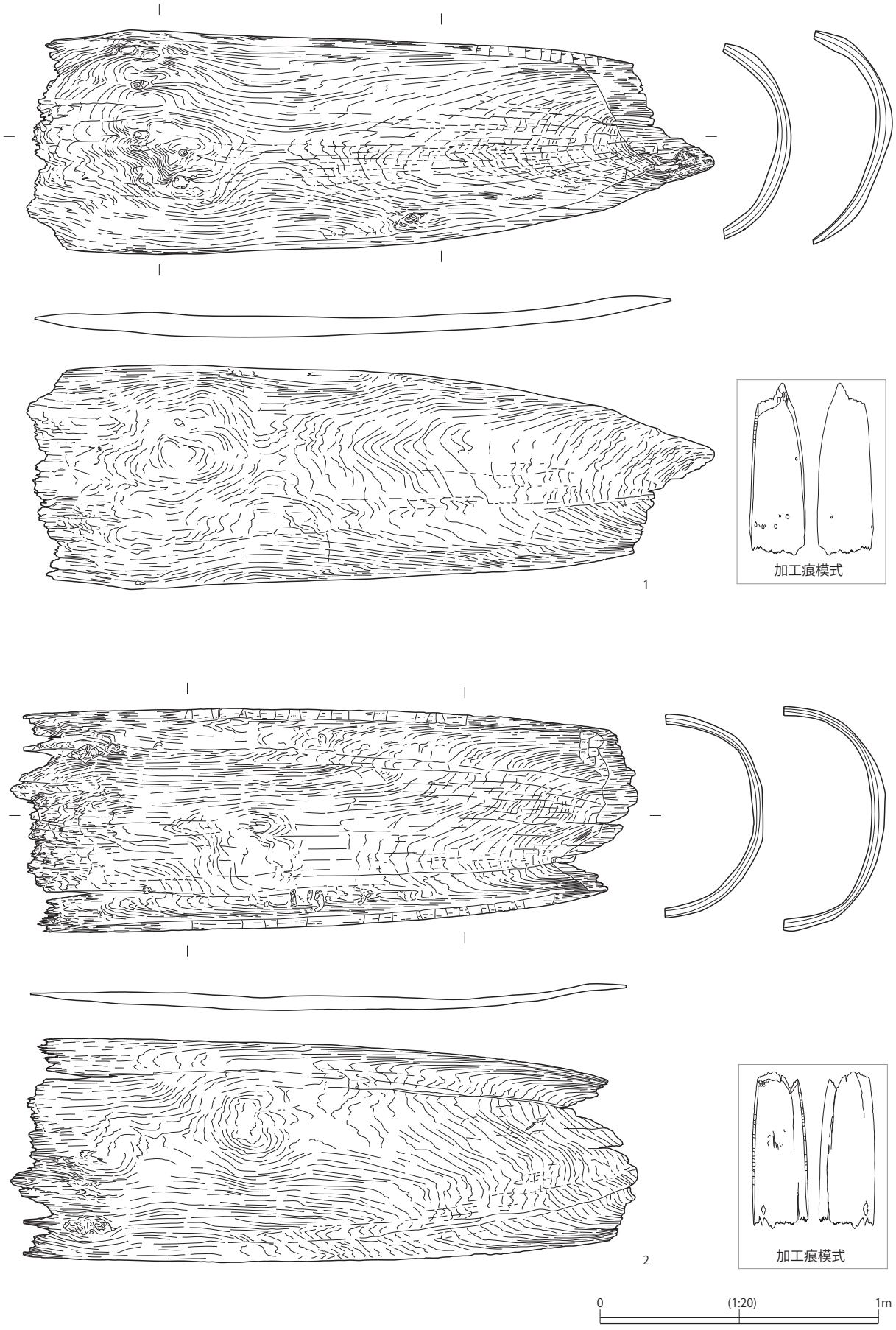


図 364　1－2・2－2区　917 井戸出土遺物（4）

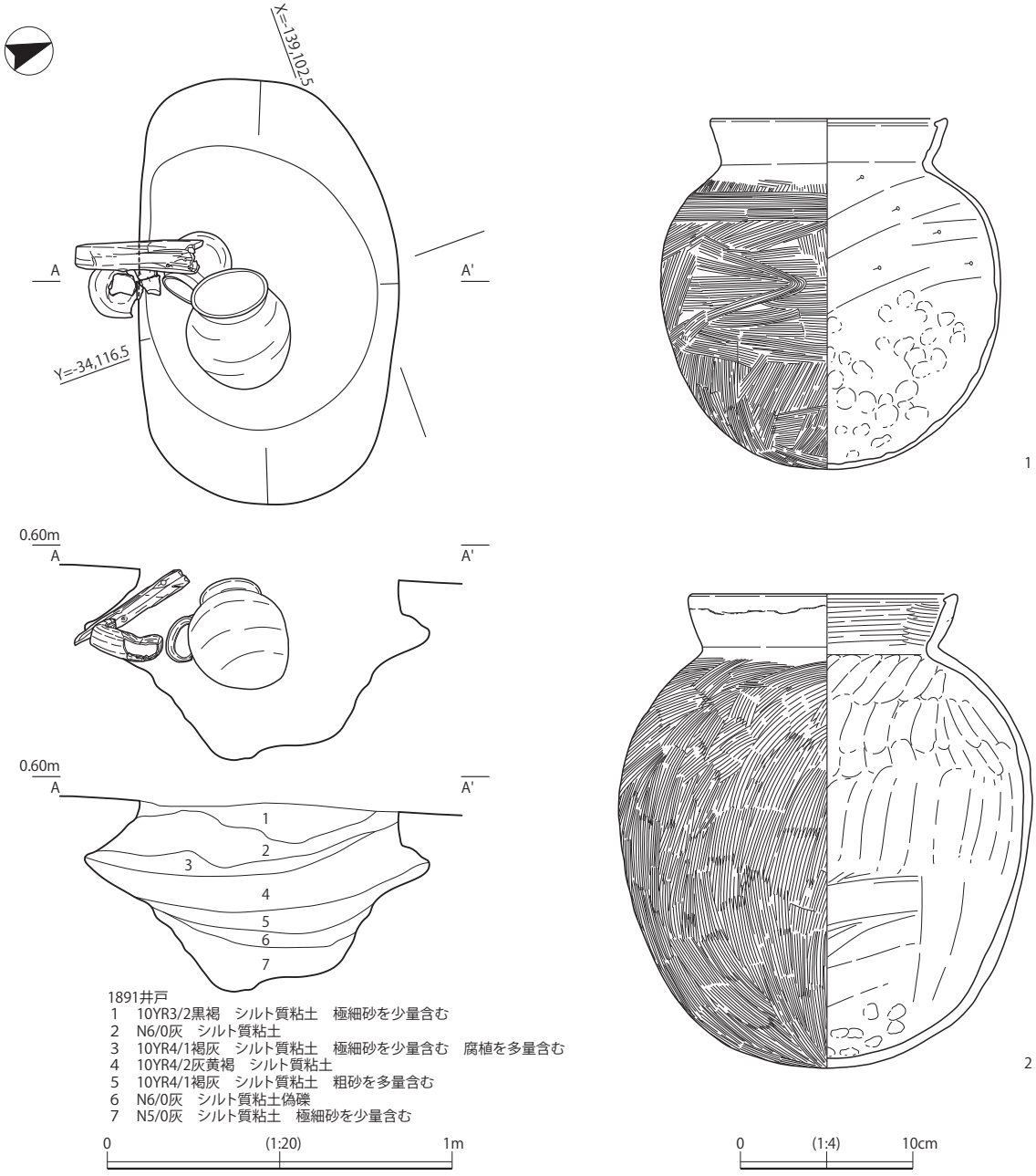


図 365　1－2・2－2区　1891 井戸平・断面　出土遺物

遺物は、井戸枠内の中層から須恵器提瓶、下層から須恵器・土師器がまとまって出土した。図 361－1～10 は須恵器甕・壺・提瓶である。TK43 型式。1～5・7 は壺である。6・8 は甕である。9・10 は須恵器提瓶で、9 は口縁部が意図的に打ち欠かれたもの。図 362 は土師器甕・鉢、石製品である。1～～ 12 は甕である。13 は壺である。14 は赤色を呈する壺である。外面は幅広のヘラミガキが横方向に施され、頸部に成形時のものと考えられるハケメが残る。内面はナデ調整によって仕上げられる。15 は鉢である。16・17 は滑石製臼玉である。18 は台石である。敲打による凹凸が顕著。被熱を受け黒化しており、金床石として使用されたものか。図 363－1～7 は、船材を転用した枠板の上部に斜めに立て掛けられていた板材である。2～7 は舷側板が転用されたものか。8～10 は 917 井戸構築時に使用された階段状遺構に用いられたものである。8 は形状から竪板の先端部か。表面は平滑に仕上げられており、裏面は割面である。9 は舷側板と考えられる。表裏面は短いピッチのハツリによって仕

上げられる。両端は転用時に手斧によって形状を整えたと考えられる。側縁に表面から側面に抜ける貫通孔が穿たれる。反対側の側面には、方形の切り欠きがあり、ホゾ穴の可能性がある。表面には手斧で加工した、弧状の凹みがある。この凹みの左右の木目は押し潰されており、他の船材と組み合った際にできた圧痕と考えられる。10 は、舷側版である。ホゾ穴は３箇所確認されており、一箇所は別材で埋まっている。片側側面には三角形の切り欠きが２箇所あり、若干摩耗が進んだ状態が観察される。11 は刀子柄である。鉄製の刃部が残存する。鹿角を用いており、刃部は圧熱で差し込まれたものか。関部は両関で、切断によって加工されたものと考えられる。

図 364 は、井戸枠に転用された準構造船の底板である。１は、長さ 2.47 m、幅 0.82 m、高さ 0.27 mである。舳側を転用したと考えられる。表裏面は平滑に仕上げられる。転用時の手斧痕が、外縁（図上右側）の割面に認められる。また、舳先端残存部から 2.1 m離れた内面に穴が横に並ぶ。穴は長さ６cm 前後、幅４cm 前後、深さ２～３cm である。２は、長さ 2.25 m、幅 0.8 m、高さ 0.35 mである。艫側を転用したと考えられる。井戸枠転用時の手斧痕が外縁に認められる。また、内面には成形時のものと考えられる手斧痕、幅が狭く木目に沿って施されるヤリガンナ痕が認められた。木目の冬目と夏目に合わせて、ヤリガンナは用いられている。艫側から 1.1 m離れた位置に１と同じく穴が確認された。穴の形状は１と比較して不明瞭で、人為的な加工ではなく、外的な強い圧力によって形成された凹みと考えらえる。穴は、長さ４～５cm 前後、幅３cm 前後、深さ１cm 未満である。

1891 井戸（図 338・365、図版 23・95）

1818 柱穴と同位置にあり、５－２ｂ層掘削中に検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 1.2m、短軸 0.75m、深さ 0.55m である。埋土は、湿性堆積物のシルト質粘土である。底面よりやや高

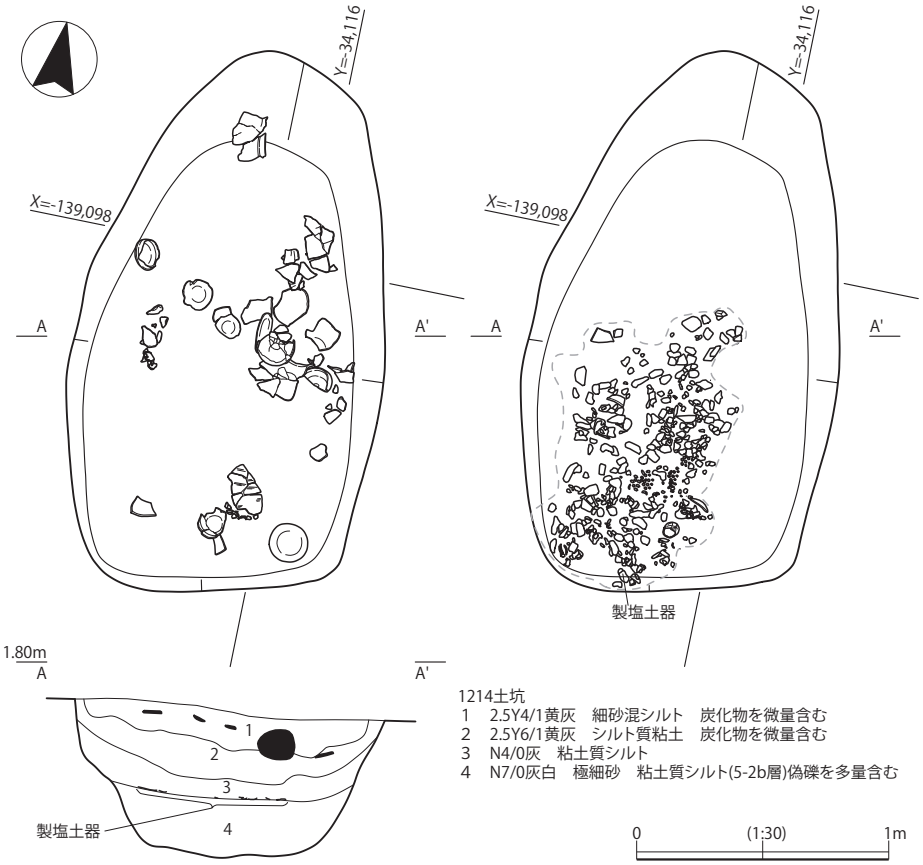


図 366　１－２・２－２区　1214 土坑平・断面

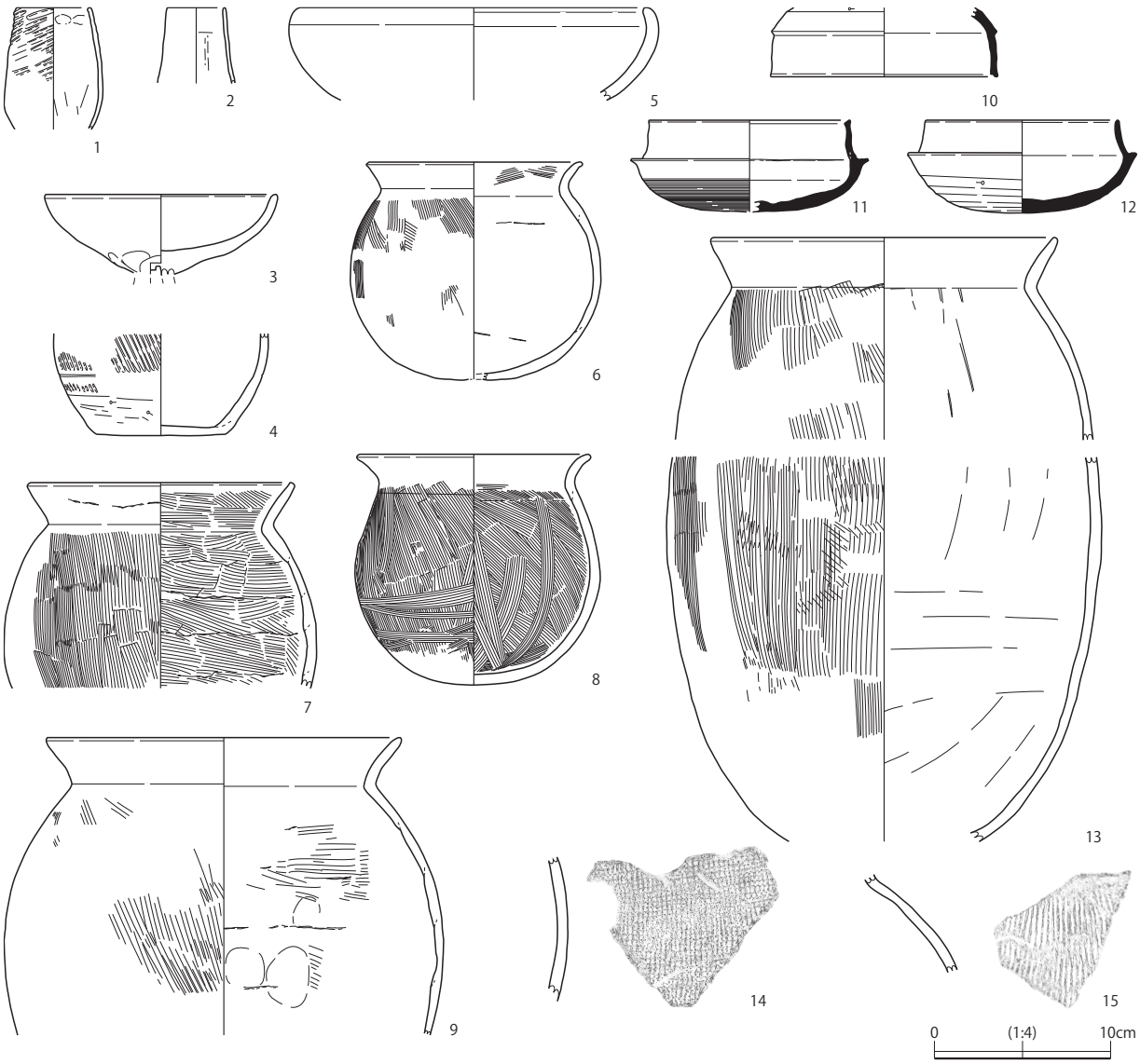


図 367　1－2・2－2区　1214 土坑出土遺物

い位置から土師器甕・瓢箪が出土した。図 365 － 1 ・ 2 は土師器甕である。口縁端部は内傾する面をもち、口縁部内外面がヨコナデされるため、端面内側は突出した形状を呈す。 1 の外面は斜め・横方向のハケ調整で肩部には仕上げに横方向のハケ調整が施される。内面は上位がヘラケズリ、下位が指押さえとナデ調整が施される。 2 は外面は斜め方向のハケ調整、内面は上位から中位が指ナデ、下位が板ナデで、底面には指頭圧痕が残る。須恵器は出土しなかった。土師器甕の特徴から、1891 井戸は古墳時代中期前葉と考えられる。

1214 土坑（図 366・367、図版 23・89）

竪穴建物 5 の北側で検出された。平面形は、不整形な形状を呈す。規模は、長軸 2.2m、短軸 1.2m、深さ 0.6m である。埋土は、下層が 5 － 2 b 層由来のブロック土を含む極細砂で、この直上から製塩土器が大量に出土した。中層はシルト質粘土、上層は細砂混シルトである。完形に近い須恵器坏身・坏蓋などがこのシルト質粘土直上から出土した。

1214 土坑から図 367 － 1 ～ 15 の土器が出土した。1・2 は製塩土器である。1 の外面は平行タタキ、内面はナデ調整で、板ナデの可能性がある。 2 の内外面はナデ調整される。 3 は土師器高坏である。内

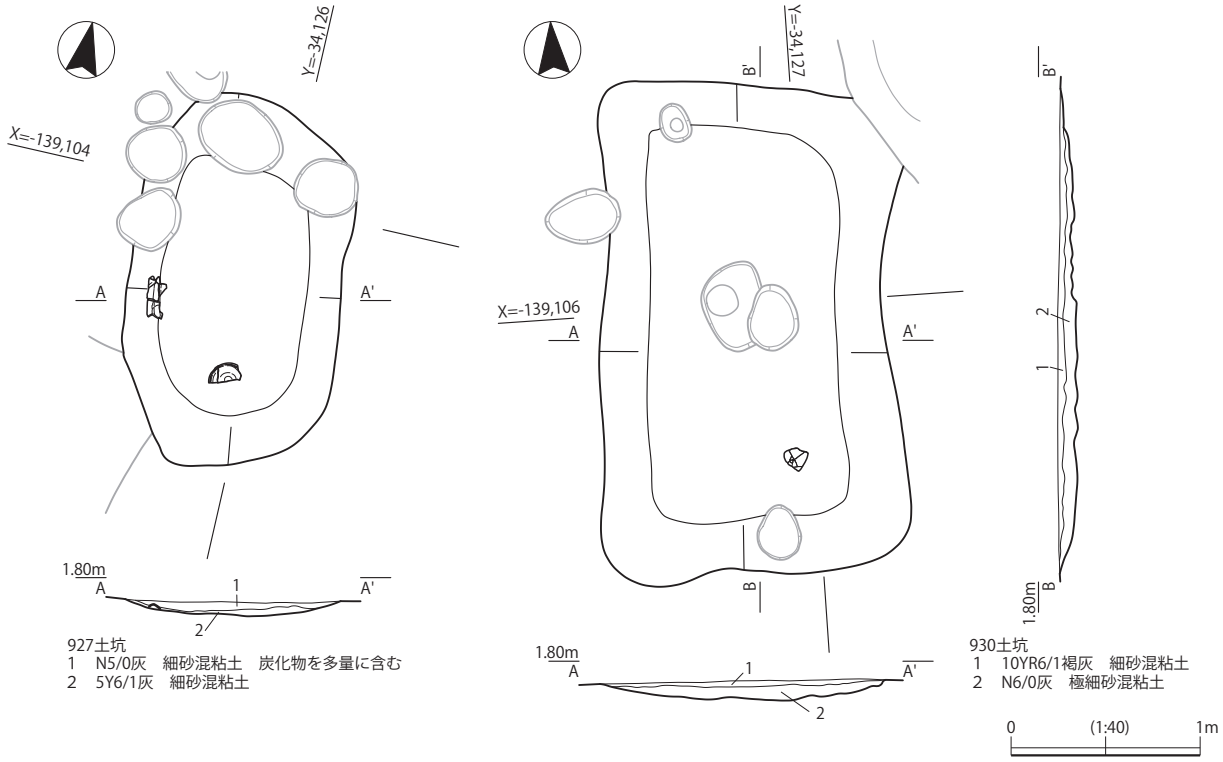


図 368　1－2・2－2区　927・930 土坑平・断面

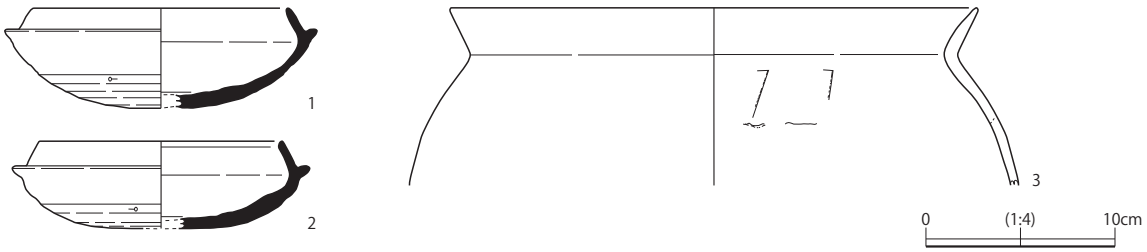


図 369　1－2・2－2区　927 土坑出土遺物

外面は磨滅が顕著であるが、外面下位はナデ調整される。4 は韓式系土器鉢である。外面は平行タタキに沈線が施され、下端はケズリ調整される。6 ～ 9・13 は土師器甕である。6 の外面は磨滅しているがハケメが一部残る。内面も磨滅しているが、ナデによって仕上げられたと考えられる。7 は口縁端面のヨコナデによって端部がつまみ上げられたような形状を呈する。外面はハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。8 の外面は斜め方向のハケ調整で、下位には横方向のハケメが認められる。内面は横方向にハケ調整される。10 は須恵器杯蓋、11・12 は須恵器杯身である。13 は土師器甕である。体部上半と下半で接合する部分がなかったため、図上は分けて表現しており、実際の器高は図示したより小さくなる。外面は縦方向のハケ調整、内面は上位が縦方向、下位が横方向の板ナデ調整が施される。14 は韓式系土器鍋である。外面は格子目タタキ、内面は磨滅しているが、ナデ調整か。15 は韓式系土器鍋の体部である。外面は平行タタキ、内面は工具による横方向のナデが施される。出土した須恵器は TK23 ～ 47 型式に比定でき、1214 土坑は古墳時代中期中後葉に位置付けられる。

927 土坑（図 338・368・369）

917 井戸の南側で検出した。930 土坑と切り合い関係があり、927 土坑が新しい。南北に長い不整形な形状を呈す。規模は、長軸 2.0m、短軸 1.14m、深さ 0.07m である。埋土は、細砂混粘土を主体

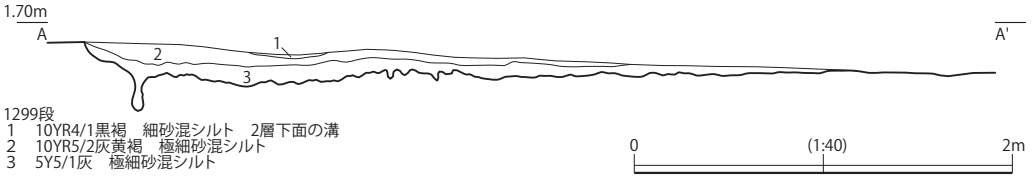


図 370　1－2・2－2区　1299 段断面

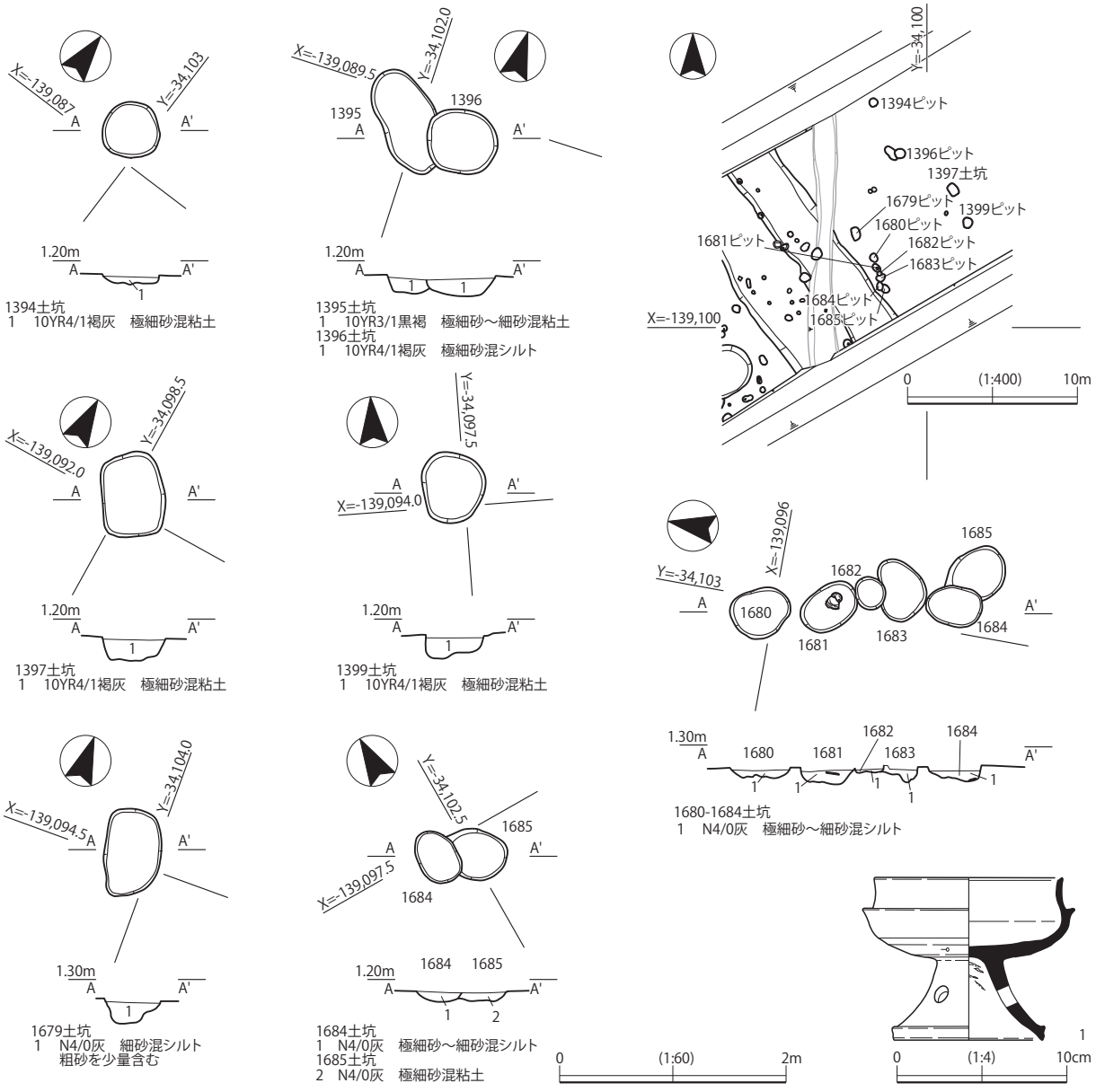


図 371　1－2・2－2区　1394 ～ 1685 土坑平・断面　出土遺物

とする。須恵器坏身と土師器甕口縁部が底面から出土した。927 土坑から出土遺物は、図 369 － 1 ～ 3 を図示した。1・2 は須恵器坏身である。TK10 型式。3 は土師器甕である。細片を図化。内外面は磨滅するが、内面に板ナデの痕跡が残る。

930 土坑（図 338・368）

927 土坑の南西で検出された。平面形は長方形を呈する。規模は、長さ 2.5 m、幅 1.5 m、深さ 0.1 mである。埋土は、極細砂～細砂混粘土である。底面直上の埋土は、偽礫状になっており、加工時形成層と考えられる。土師器・須恵器の細片が出土しており、TK10 型式古段階以降と考えられる。

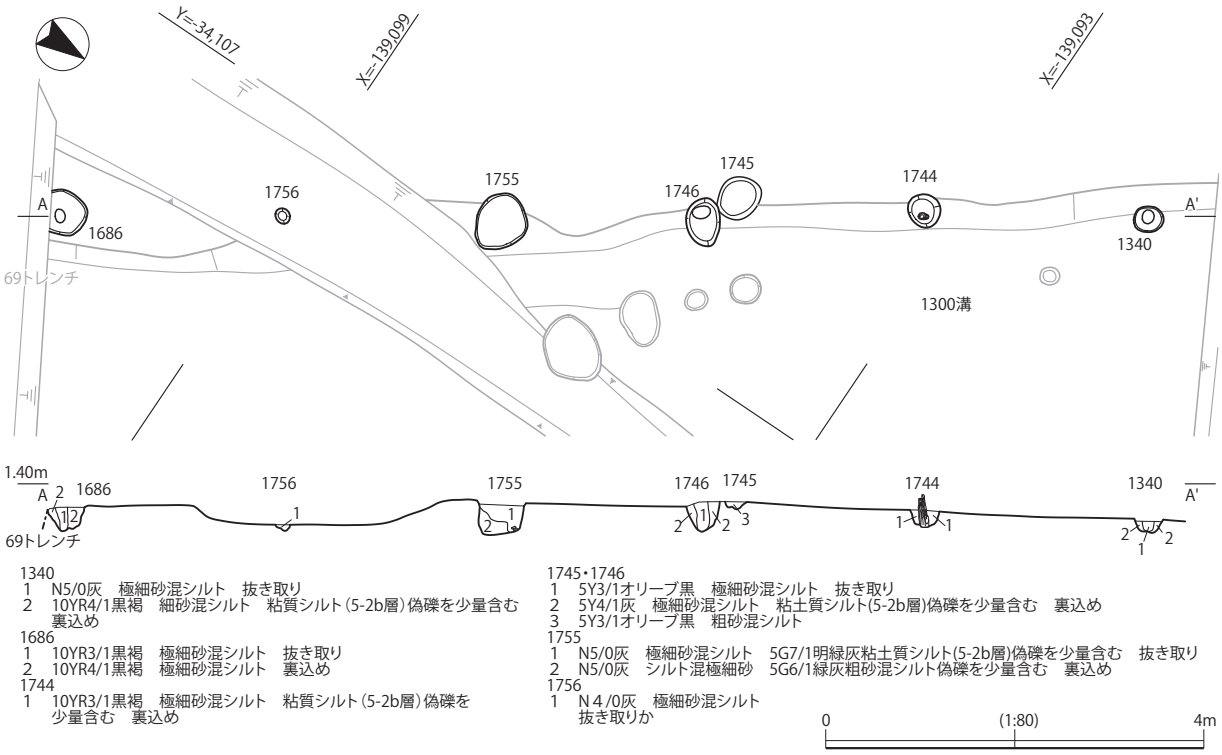


図 372　1－2・2－2区　柵列 1 平・断面

1299 段（図 338・370）

838 溝の北側で、基底面のみが検出された。遺構が希薄な場所に位置する。当初、竪穴建物の可能性がある遺構として調査を行ったが、カマド・主柱穴は検出されなかったことから、最終的に水田の段と判断した。 4 区 632 田面と同様に、古代以降のものか。

1394 ～ 1397・1399・1679・1684・1685 土坑（図 371、図版 35・95）

1300 溝以東で検出された。平面形は、不整形のものが多いが、円形・楕円形を呈するもの含まれる。埋土は、 4 層に類似しており、耕作に関連して掘削されたと考えられる。1681 ピットから口縁部を一部欠いた須恵器高坏が出土した。図 371 － 1 は須恵器有蓋高坏である。TK47 型式。

柵列 1 （図 372）

1300 溝の西肩で検出された。1300 溝と切り合い関係があり、柵列 1 が新しい。ただし、1300 溝は上部が削平されていたため､機能廃絶時の状況が不明であるため､併存していた可能性もある｡柵列は、柱穴が 6 基検出されており、柱根が遺存するものが 1 基あった。他の柱穴では、柱はすべて抜き取られる。柱間は 2.0 ～ 2.4 mを測る。土師器細片が出土しているが、時期は不明。古墳時代後期に 1300 溝周辺は水田となっていた可能性があり、古墳時代中期に建てられたと考えられる。

微高地南側（図 373）

竪穴建物 6・掘立柱建物 34 以南を微高地南側とした。掘立柱建物 34、竪穴建物 7 から掘立柱建物 11 が検出された範囲は、 5 － 2 b 層上面の地形が高くなっており、これより南側の範囲は低くなっている。第 5 － 2 b 層の堆積過程の新しい段階に、流路が西へ側方移動する状況が確認されており、この流路埋没後に形成された高まりが反映された地形となっている。なお、1373 溝の南側の地形は全体的に低くなっており、 5 － 2 b 層と古土壌由来の偽礫が面的に広がる状況が確認されたため、整地が行われた可能性が高い。

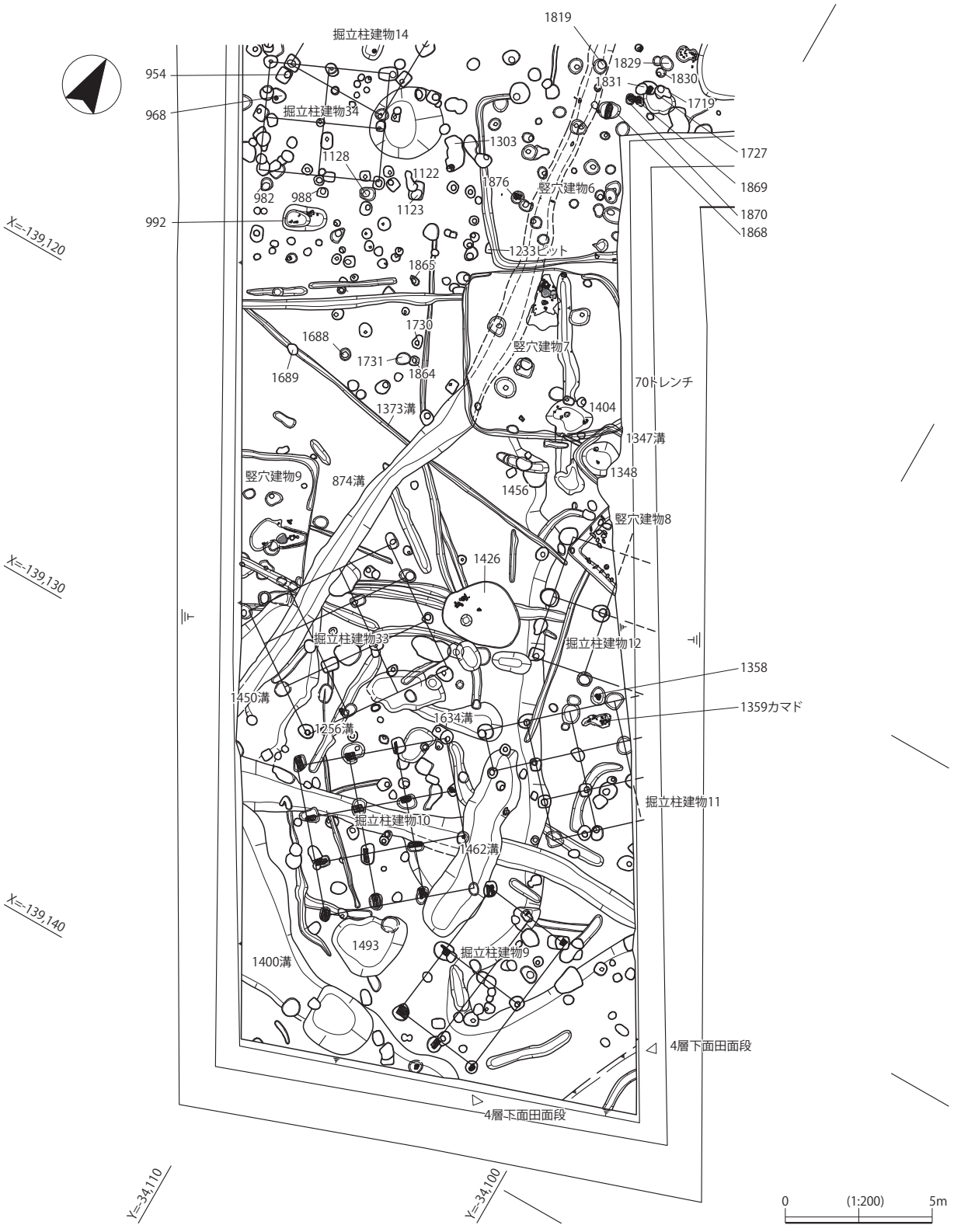
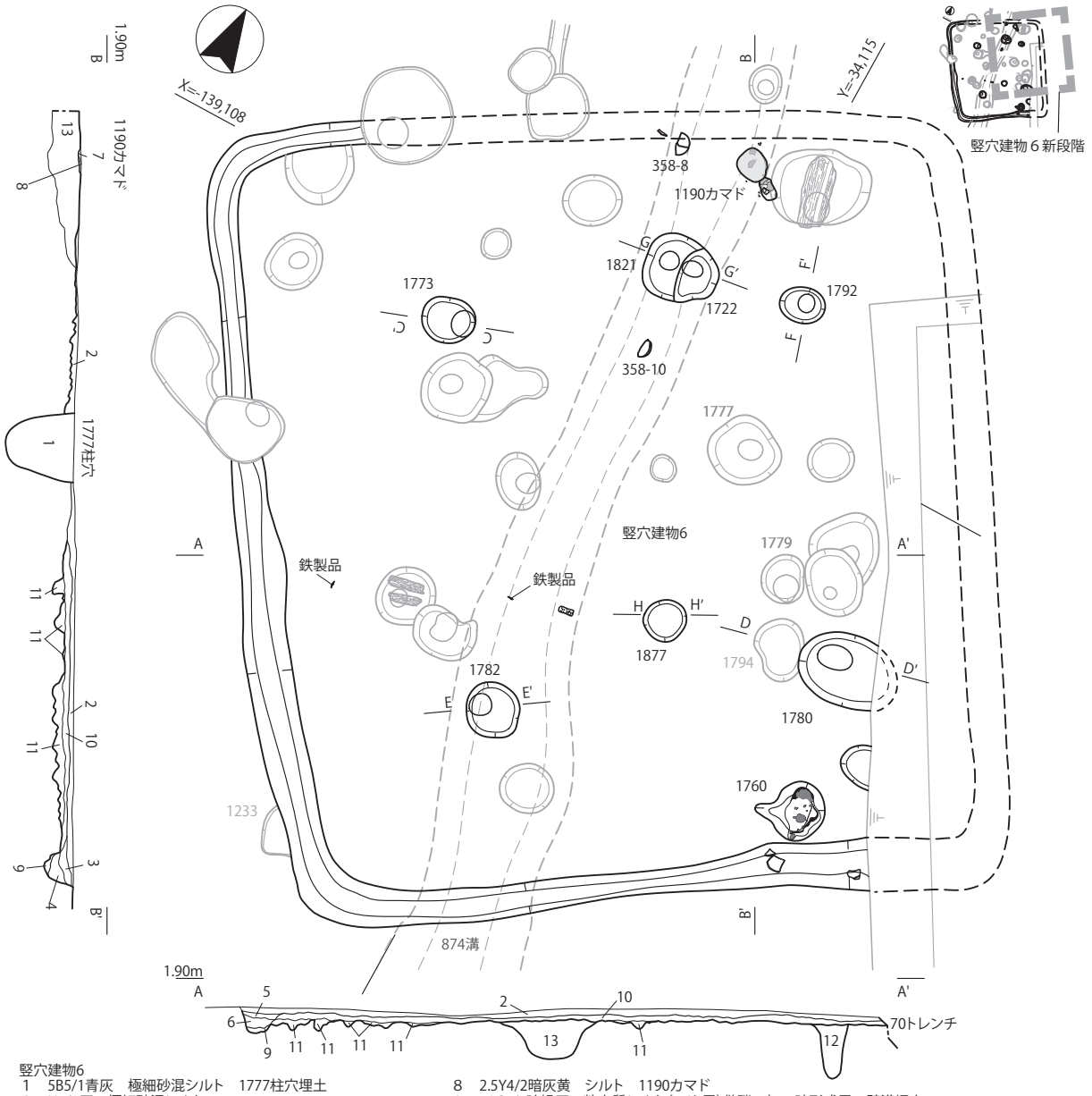


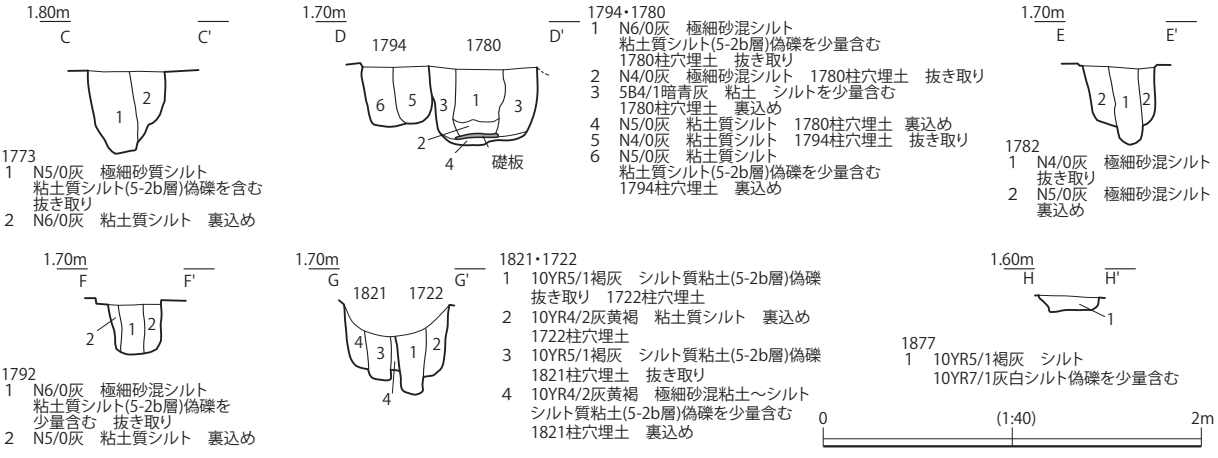
図 373　1－2・2－2区　第5－2ｂ面南側平面

また、調査地南東では、4層下面に帰属する水田の段が検出された。掘立柱建物9より南東側がその範囲に該当する。掘立柱建物 11 の基盤層（5－2ｂ層、流路）の高まりはこの範囲まで連続しており、1300 溝以東で検出された水田と同じように、南東側の地形的に低い場所を水田として土地利用した可能性がある。



竪穴建物6
1　5B5/1青灰　極細砂混シルト　1777柱穴埋土
2　N4/0灰　極細砂混シルト
3　N5/0灰　極細砂混粘土　壁溝埋土
4　N5/0灰　極細砂混粘土　壁溝埋土
5　N5/0灰　極細砂混粘土　壁溝埋土
6　N5/0灰　粘土　極細砂～細砂を少量含む　壁溝埋土
7　2.5Y4/1黄灰　極細砂混シルト　1190カマド
8　2.5Y4/2暗灰黄　シルト　1190カマド
9　10G4/1暗緑灰　粘土質シルト(5-2b層)偽礫　加工時形成層　壁溝埋土
10　N5/0灰　極細砂混シルト　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を少量含む　床面・加工時形成層
11　N6/0灰　極細砂混シルト　床面・加工時形成層
12　N5/0灰　細砂混シルト　1779柱穴埋土
13　N5/0灰　細砂混シルト　874溝埋土

0　(1:50)　2m



1773
1　N5/0灰　極細砂質シルト
粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む
抜き取り
2　N6/0灰　粘土質シルト　裏込め

1794・1780
1　N6/0灰　極細砂混シルト
粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む
1780柱穴埋土　抜き取り
2　N4/0灰　極細砂混シルト　1780柱穴埋土　抜き取り
3　5B4/1暗青灰　粘土　シルトを少量含む
1780柱穴埋土　裏込め
4　N5/0灰　粘土質シルト　1780柱穴埋土　裏込め
5　N4/0灰　粘土質シルト　1794柱穴埋土　抜き取り
6　N5/0灰　粘土質シルト
粘土質シルト(5-2b層)偽礫を少量含む
1794柱穴埋土　裏込め

1782
1　N4/0灰　極細砂混シルト
抜き取り
2　N5/0灰　極細砂混シルト
裏込め

1792
1　N6/0灰　極細砂混シルト
粘土質シルト(5-2b層)偽礫を
少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　粘土質シルト　裏込め

1821・1722
1　10YR5/1褐灰　シルト質粘土(5-2b層)偽礫
抜き取り　1722柱穴埋土
2　10YR4/2灰黄褐　粘土質シルト　裏込め
1722柱穴埋土
3　10YR5/1褐灰　シルト質粘土(5-2b層)偽礫
1821柱穴埋土　抜き取り
4　10YR4/2灰黄褐　極細砂混粘土～シルト
シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む
1821柱穴埋土　裏込め

1877
1　10YR5/1褐灰　シルト
10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む

図 374　1－2・2－2区　竪穴建物６平・断面

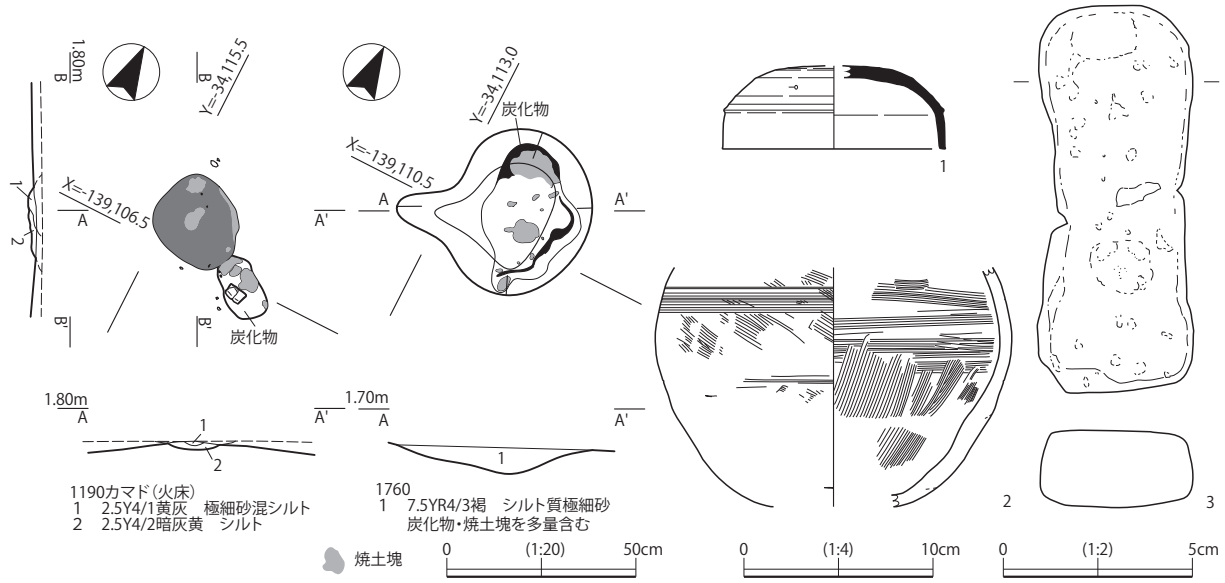


図 375　1－2・2－2区　竪穴建物６　1190 カマド・1760 土坑平・断面　出土遺物

竪穴建物６（図 373 ～ 376、図版 46・96・97）

竪穴建物５の南西で検出された。調査時は１棟の竪穴建物としたが、調査後の検討により２棟の竪穴建物が切り合っている可能性が高いと判断された。１）1190 カマドが竪穴建物の偏った位置で検出されたこと、２）竪穴建物６の加工面では 1821・1877 柱穴が検出され 1190 カマドとの位置関係において妥当性が高いと考えられること、３）874 溝検出面（竪穴建物６加工面）から出土した図 358 －８・10 の須恵器坏身が 1190 カマドが機能した竪穴建物に伴う可能性が高いことを根拠とする。874 溝検出面から出土した土器は 1190 カマドと同じ標高で出土しており、内１点は 1821 柱穴と接合する。竪穴建物と 874 溝の切り合い関係から 874 溝に伴わない可能性が高いと考えられた。以下では、竪穴建物６古・新段階として報告を行う。

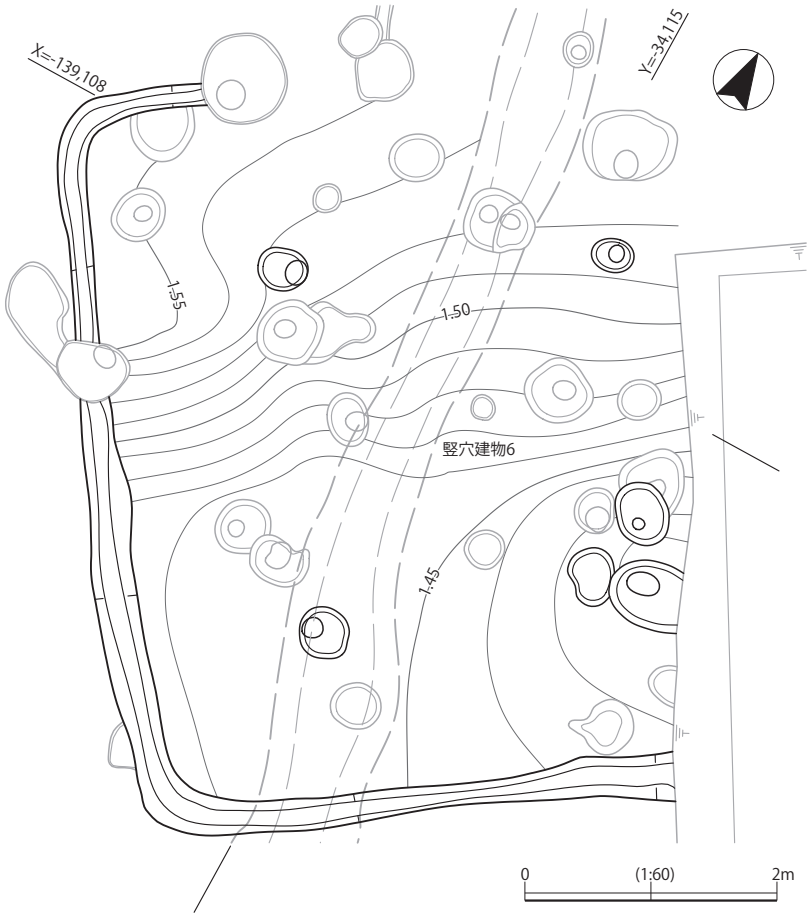
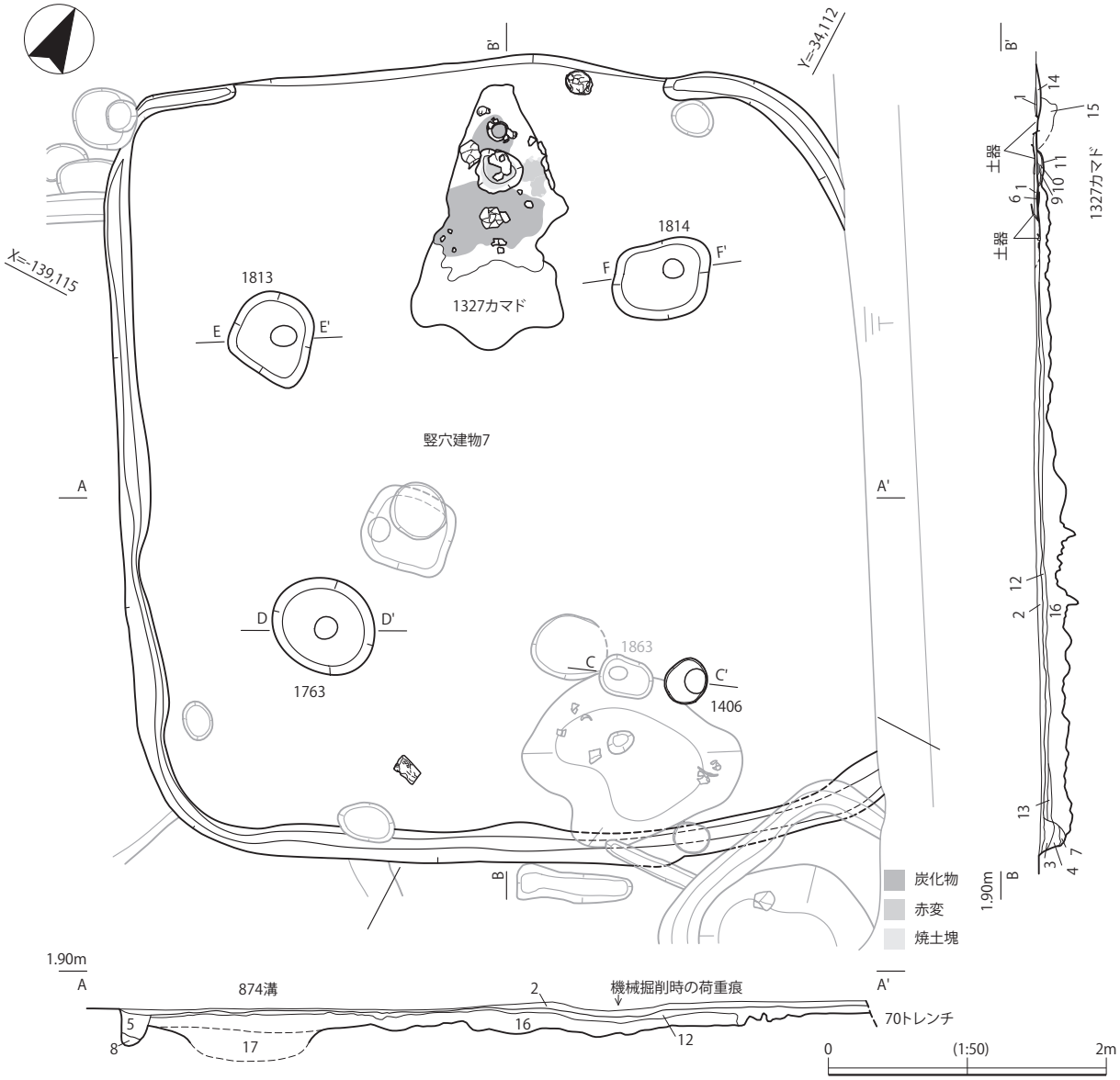
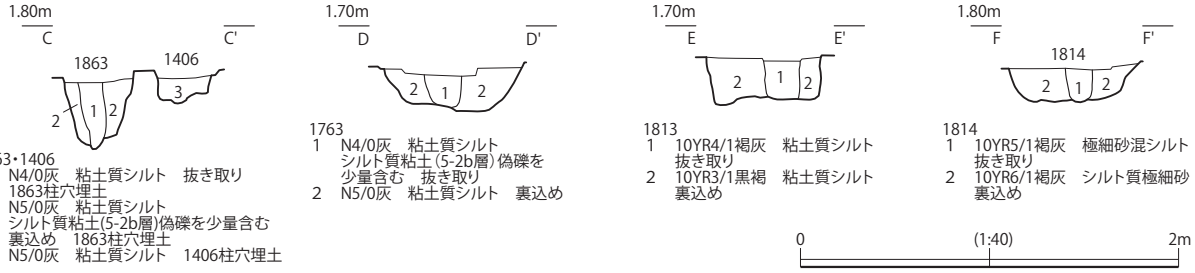


図 376　1－2・2－2区　竪穴建物６加工面平面

竪穴建物６新段階は、北西辺で 1190 カマドが検出された。火床及び炭化物の広がりが検出されており、上部構造は削平により不明である。火床の平面形



竪穴建物7
1　10YR5/2灰黄褐　シルト質粘土
2　2.5Y4/3オリーブ褐　極細砂混シルト
3　5Y5/1灰　シルト質粘土　壁溝埋土
4　2.5Y6/1黄灰　極細砂混シルト　壁溝埋土
5　2.5Y6/1　シルト質粘土　粘土質シルト(5-1層)偽礫と粘土質シルト(5-2b層)偽礫を多量含む　壁溝埋土
6　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む　1327カマド機能時形成層
7　5Y6/1灰　シルト質粘土　粘土質シルト(5-1層)偽礫と粘土質シルト(5-2b層)偽礫を多量含む　加工時形成層　壁溝埋土
8　2.5Y5/1黄灰　シルト質粘土　粘土質シルト(5-1層)偽礫を含む　加工時形成層　壁溝埋土
9　5YR3/4暗赤褐　シルト　火床　1327カマド
10　5Y4/1灰　シルト　火床　1327カマド
11　5Y5/1灰　シルト　火床　1327カマド
12　5Y4/1灰　シルト質粘土　粘土質シルト(5-2b層)偽礫2～3㎜大を少量含む　床面・加工時形成層
13　5Y5/1灰　シルト質粘土　床面・加工時形成層
14　5Y5/1灰　シルト質粘土　床面・加工時形成層
15　10YR5/1褐灰　極細砂質シルト
16　5Y4/1灰　シルト質粘土
17　2.5Y4/3オリーブ褐　シルト　粘土質シルト(5-1層)偽礫と粘土質シルト(5-2b層)偽礫を多量含む　874溝埋土



1863・1406
1　N4/0灰　粘土質シルト　抜き取り　1863柱穴埋土
2　N5/0灰　粘土質シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　裏込め　1863柱穴埋土
3　N5/0灰　粘土質シルト　1406柱穴埋土

1763
1　N4/0灰　粘土質シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　粘土質シルト　裏込め

1813
1　10YR4/1褐灰　粘土質シルト　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　粘土質シルト　裏込め

1814
1　10YR5/1褐灰　極細砂混シルト　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト質極細砂　裏込め

図 377　1－2・2－2区　竪穴建物 7 平・断面

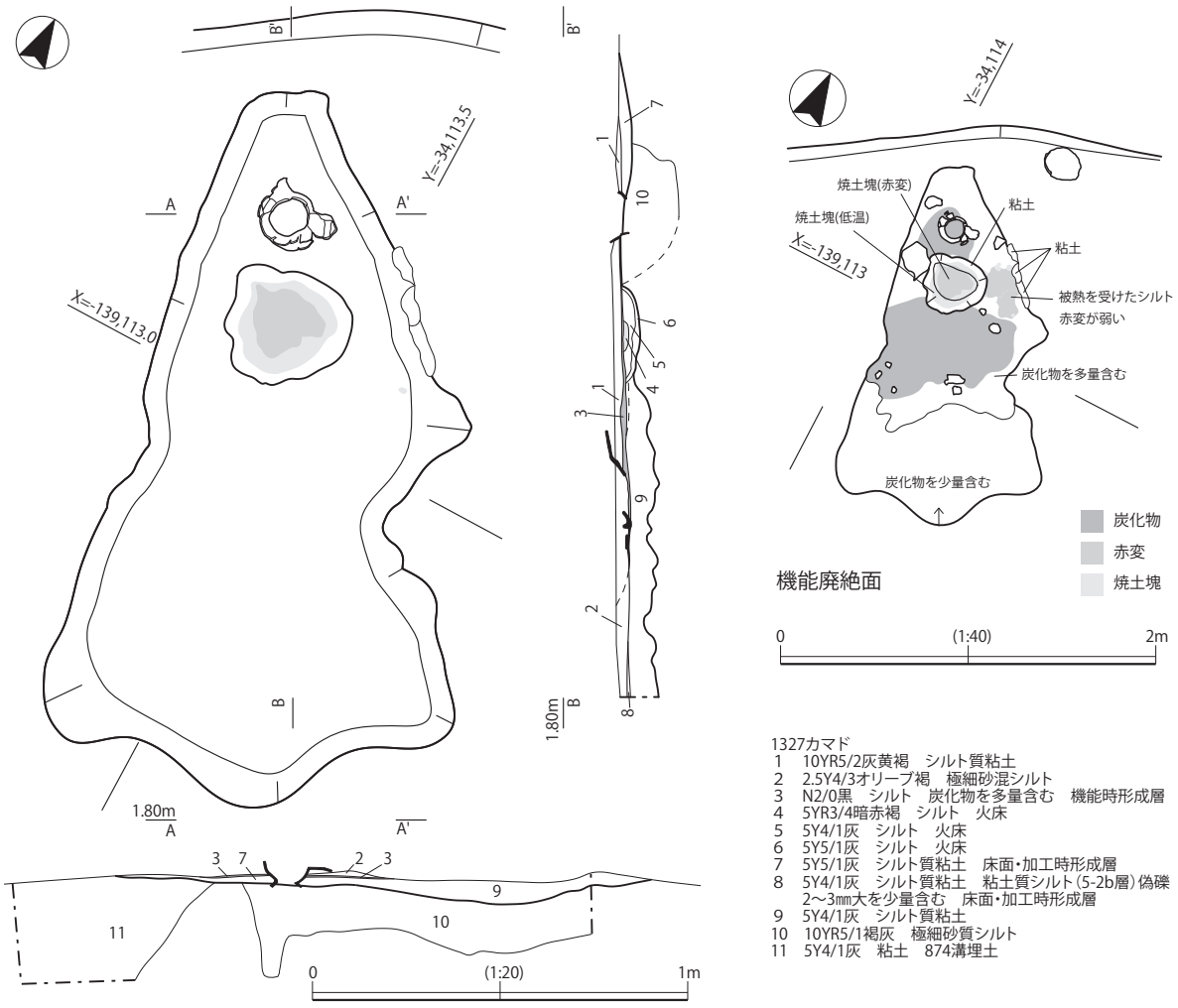


図 378　1－2・2－2区　竪穴建物７　1327 カマド平・断面

は不整な円形を呈し、直径 0.25 mである。主柱穴は 1821 柱穴と 1877 柱穴が検出されており、柱は抜き取られていた。出土遺物は、先述した図 358 －８・10 の須恵器坏身と考えられる。TK10 型式。

竪穴建物６古段階は、平面形は方形、規模は一辺 6.0 mである。床面直上からは、鉄製品・砥石が出土した。竪穴建物の南東では、炭化物・焼土塊が埋土に混じる 1760 土坑が検出された。平面形は不整な円形で、規模は長軸 0.53 m、短軸 0.43 m、深さ 0.07 mである。なお、北東辺中央では竪穴建物６検出時に炭化物・白色粘土塊の分布がわずかに認められた。竪穴建物６のカマドの可能性があるものとして検討したが、カマドと認識されるには至らなかった。

竪穴建物６古段階から出土した遺物の内、図 375 －１～３を図示した。１は須恵器坏蓋である。壁溝内から出土した。TK208 型式。２は須恵器を模した土師器の甕体部で、壁溝内から出土した。外面はハケ調整の後カキメが施される。３は砥石ないし磨石で、軽石が使用される。全体に風化が顕著だが、平坦面が認められる。このほか、鉄製品が出土したが、遺存状況が悪く、器種は不明。

竪穴建物７（図 373・377 ～ 380、図版 24・96・97）

竪穴建物６の南側で検出された。平面形は方形、一辺 5.7 mである。土壌に由来するシルト質粘土で埋没する。北西辺の中央で 1327 カマドが検出された。規模は長さ 1.90 m、幅 0.7 mである。削平や土壌化の影響で本体は検出されなかった。カマド内部と掻き出し口が検出されており、中央がくびれる部分がカマド本体と掻き出し口の境界になると考えら、カマド本体の長さは 1.0 mに復元される。カマ

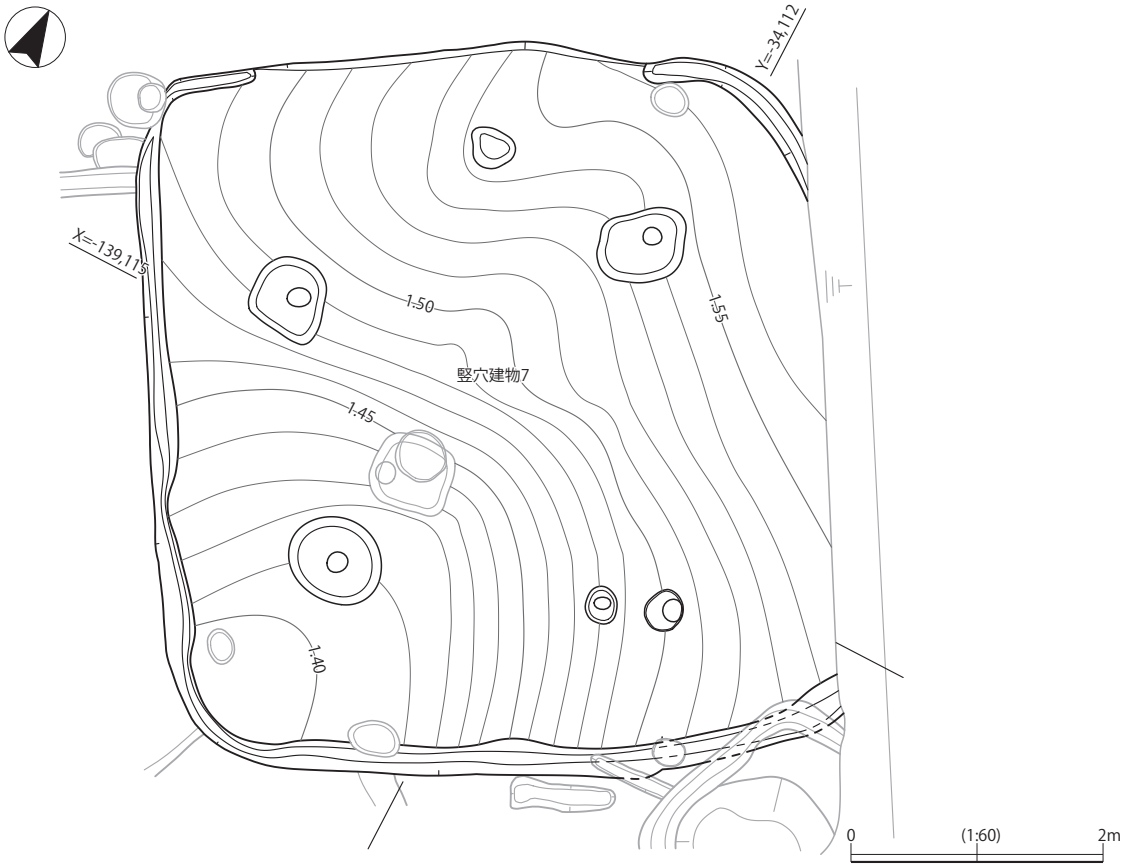


図 379　1－2・2－2区　竪穴建物 7 加工面平面

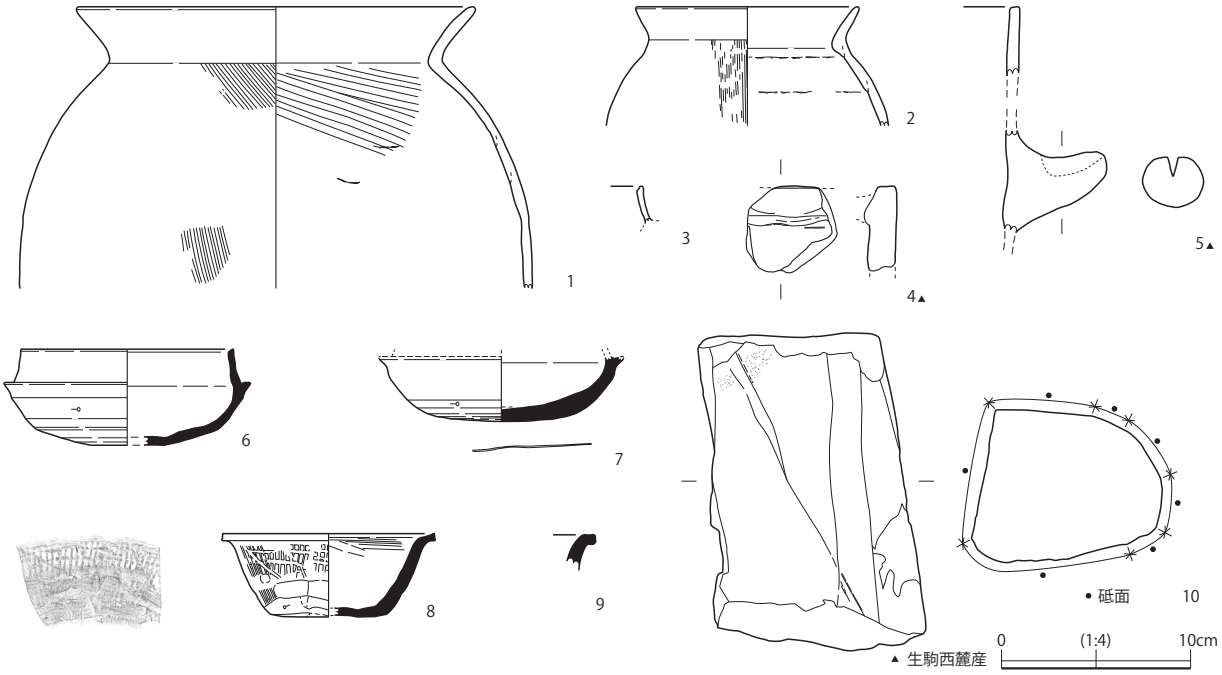


図 380　1－2・2－2区　竪穴建物 7 出土遺物

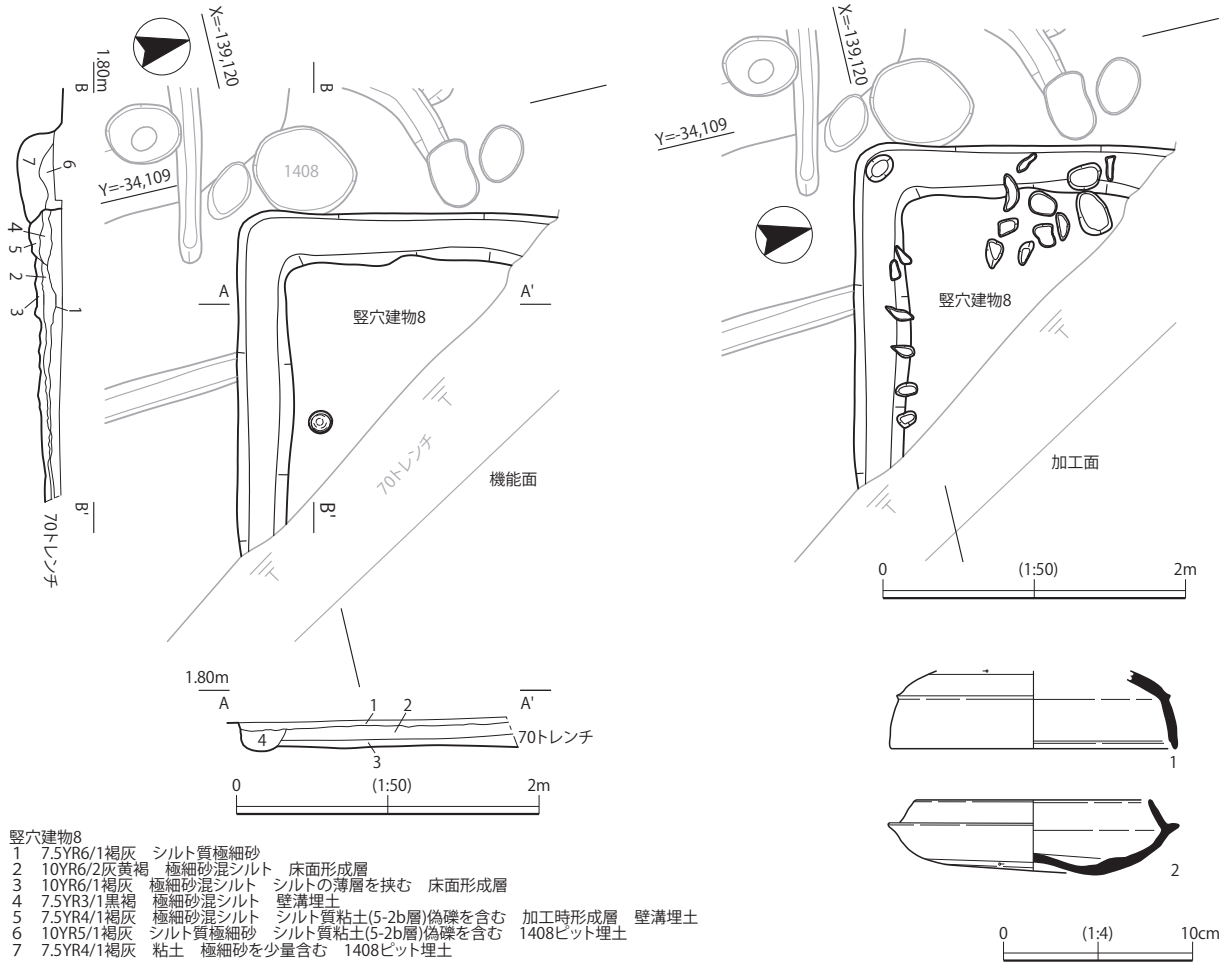
ド内では、支脚として用いられた土師器甕が検出された。カマドの機能時形成層の炭層の堆積が確認されており、直上から焼土塊、土師器甕や甑が出土した。また、支脚の手前では、火床が検出された。火床の平面形は不整な円形、規模は直径 0.3m、深さ 0.05m である。椀形に掘り窪めた部分をシルトを用いて成形した後、真土のようなシルトを突き固めて、火床は構築される。

竪穴建物７から出土した土器は、図 380 － 1 ～ 10 を図示した。１は土師器甕である。内外面はハケ調整される。２は土師器甕で、支脚として用いられたものである。外面はハケ調整、内面はナデ調整される。３は須恵器を模した土師器の坏身である。口縁端部には面があり、６の須恵器坏身に近い形状を呈するか。４はＵ字形板状土製品である。突帯は剥離しており、形状は不明である。５は土師質の甑である。口縁端部には面があり、把手は上部に切り込みがある。６・７は須恵器坏身である。TK23 型式。８・９は百済系陶質土器鉢である。口縁部が屈曲し、端部に面をもつ。８の外面は鳥足文タタキ、内面はナデ調整で、口縁部にハケメが残る。10 は砥石で砥面は７面である。出土した遺物は古墳時代中期後葉に位置付けられると考えられる。

竪穴建物８（図 373・381、図版 24）

竪穴建物７の南側で、竪穴建物南西部が部分的に検出された。主柱穴やカマドは検出されておらず、70 トレンチ断面においても確認することはできなかった。床面からは、図 381 － 2 の須恵器坏身が出土した。また、竪穴建物の加工面では、構築時のものと考えられる鋤の痕跡が検出された。鋤の痕跡は、南側の壁溝肩部と西側壁溝周辺に集中しており、壁溝肩部の鋤の痕跡は肩部に並んだ状態で検出された。他の竪穴建物では、加工時の工具痕は検出されていない。

竪穴建物８から出土した土器は、図 381 － 1・２を図示した。１は須恵器坏蓋である。TK10 型式古～新段階。２は須恵器坏身である。TK10 型式新段階。以上の出土遺物から、竪穴建物８の時期は、古墳時代後期前葉～中葉に位置付けられる。



竪穴建物8
1　7.5YR6/1褐灰　シルト質極細砂
2　10YR6/2灰黄褐　極細砂混シルト　床面形成層
3　10YR6/1褐灰　極細砂混シルト　シルトの薄層を挟む　床面形成層
4　7.5YR3/1黒褐　極細砂混シルト　壁溝埋土
5　7.5YR4/1褐灰　極細砂混シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　加工時形成層　壁溝埋土
6　10YR5/1褐灰　シルト質極細砂　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を含む　1408ピット埋土
7　7.5YR4/1褐灰　粘土　極細砂を少量含む　1408ピット埋土

図 381　１－２・２－２区　竪穴建物８平・断面　出土遺物

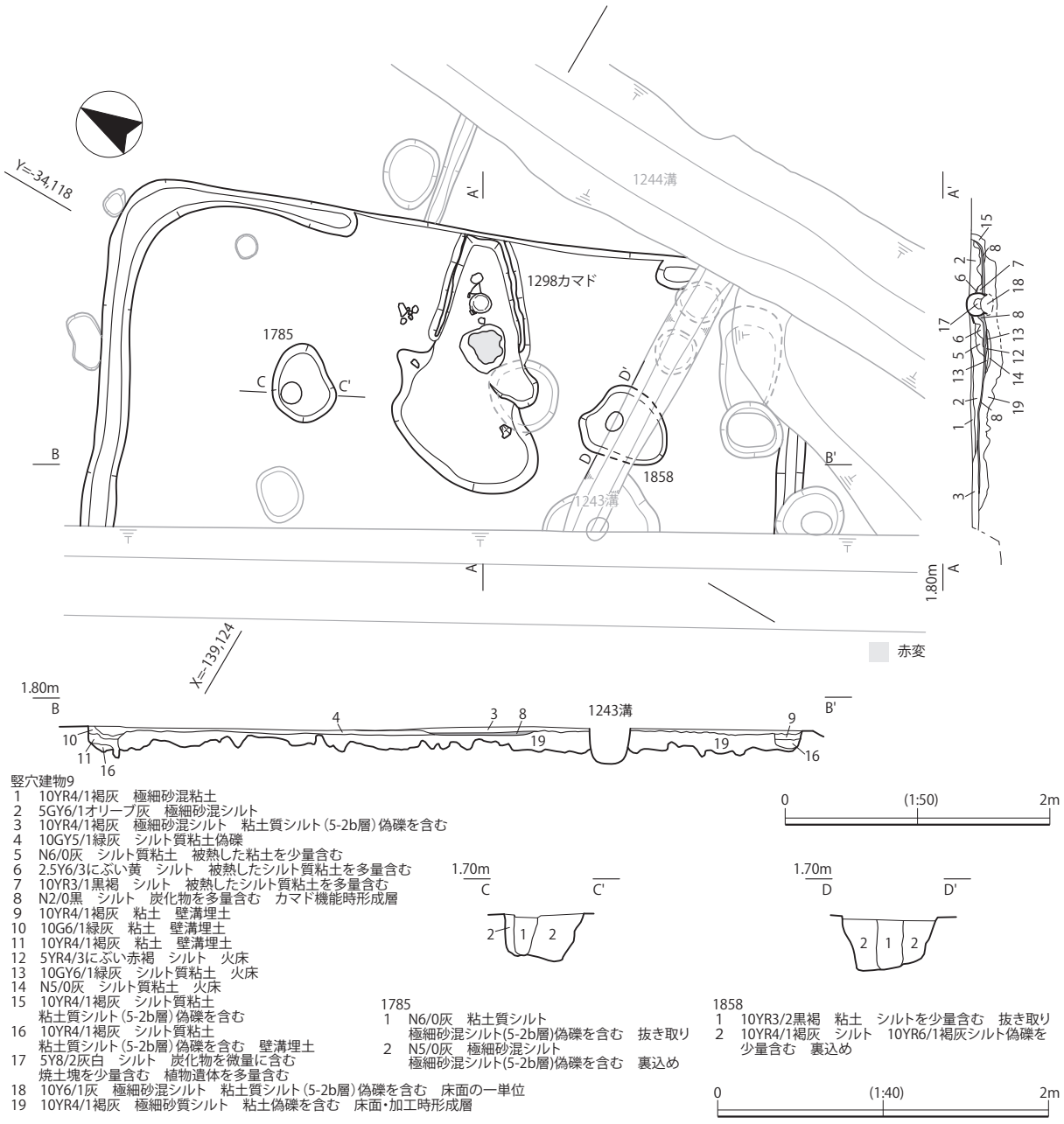
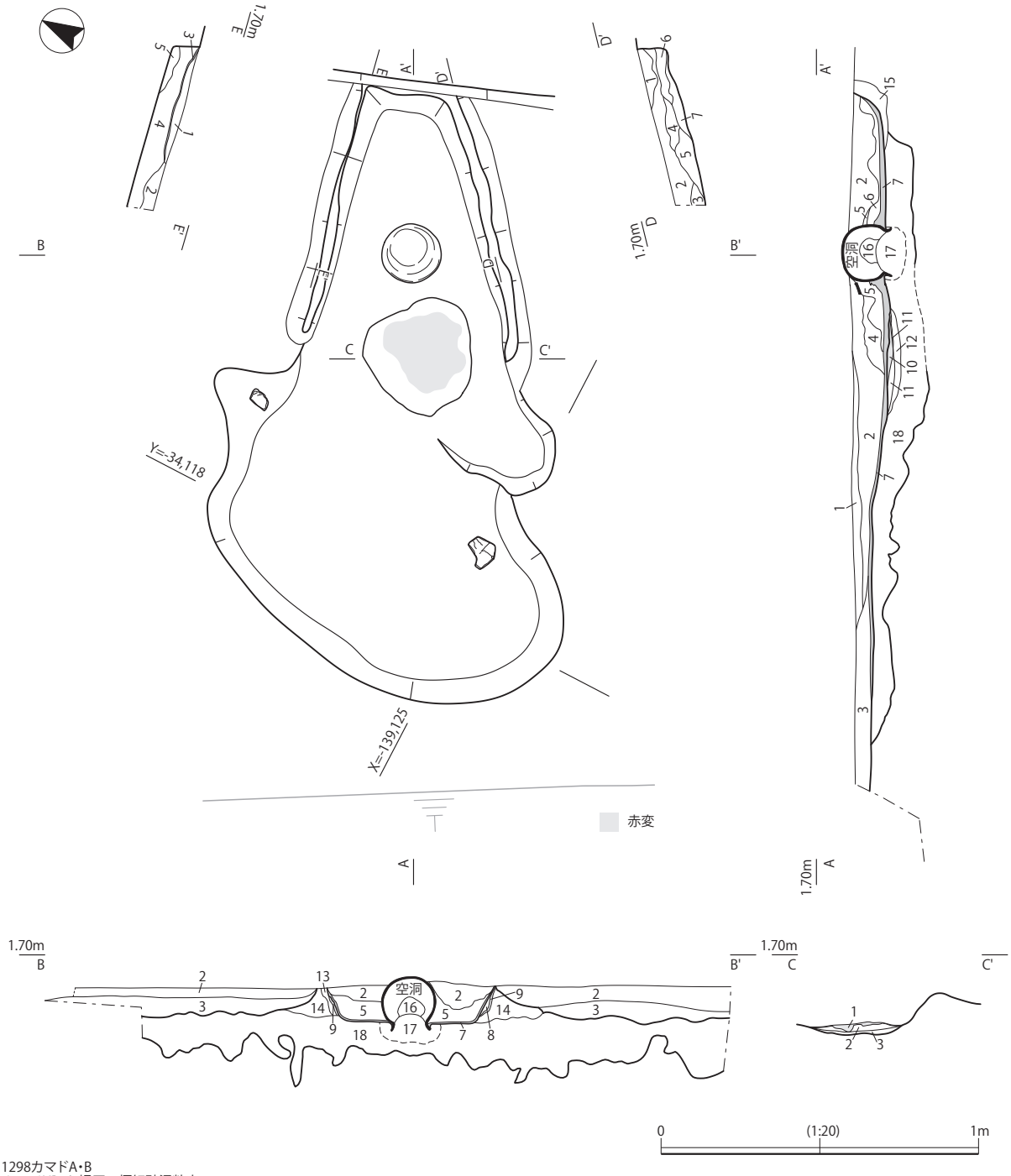


図 382　1－2・2－2区　竪穴建物９平・断面

竪穴建物９（図 373・382 ～ 385、図版 24・94）

竪穴建物７の南西で検出された。平面形は方形、一辺 5.4 mである。主柱穴は２基検出されており、柱は抜き取られていた。なお、北東辺の壁溝は 1298 カマドを除いた中央部が検出されなかった。土壌化の影響によるものと考えており、本来、他の竪穴建物と同様にカマド袖部まで掘削されていたと考えられる。

北東辺の中央では 1298 カマドが検出された。規模は、本体部分の長さ 0.9 m、幅 0.78 m、掻き出し口まで含めた長さ 1.95 mである。支脚として用いられた土師器甕がカマド内中央から出土した。カマド機能時に形成された炭化物を含んだシルト層（以下、炭層）は、支脚の土師器甕の頸部から口縁部に向かって堆積しており、使用時の荷重により、土師器甕が地面に沈み込んだものと考えられる。支脚については、カマド内で設置されるにあたり、ピット状に掘りくぼめたところに口縁部を埋没させて使



1298カマドA・B
1　10YR4/1褐灰　極細砂混粘土
2　5GY6/1オリーブ灰　極細砂混シルト
3　10YR4/1褐灰　極細砂混シルト　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む
4　N6/0灰　シルト質粘土　被熱した粘土を少量含む
5　2.5Y6/3にぶい黄　シルト　被熱したシルト質粘土を多量含む
6　10YR3/1黒褐　シルト　被熱したシルト質粘土を多量含む
7　N2/0黒　シルト　炭化物を多量含む　機能時形成層
8　10R7/1明赤灰　シルト　カマド本体
9　5R7/1明赤灰　シルト　被熱を受ける　カマド本体
10　5YR4/3にぶい赤褐　シルト　火床
11　10GY6/1緑灰　シルト質粘土　火床
12　N5/0灰　シルト質粘土　火床
13　10G5/1緑灰　粘土　カマド本体
14　10YR4/1褐灰　シルト　カマド本体
15　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む
16　5Y8/2灰白　シルト　炭化物を微量に含む　焼土塊を少量含む　植物遺体を多量含む
17　10Y6/1灰　極細砂混シルト　粘土質シルト(5-2b層)偽礫を含む　床面の一単位
18　10YR4/1褐灰　極細砂質シルト　粘土偽礫を含む　床面・加工時形成層
19　10G6/1緑灰　シルト　5-2b層

1298カマドC
1　5YR4/3にぶい赤褐　シルト　火床
2　10G6/1緑灰　シルト質粘土　火床
3　N5/0灰　シルト質粘土　火床

1298カマドD
1　10Y4/1灰　シルト　カマド本体
2　10Y4/1灰　シルト　極細砂を少量含む　カマド本体
3　5Y4/1灰　シルト　シルト質粘土(5-1層)偽礫を含む　カマド本体
4　5Y5/3灰オリーブ　シルト　カマド本体
5　5Y3/1オリーブ黒　シルト　シルト質粘土(5-1層)偽礫を含む　カマド本体
6　10Y4/1灰　シルト　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト質粘土(5-1層)の薄層を挟む　カマド本体
7　10Y3/1オリーブ黒　シルト　シルト質粘土(5-2b層)を少量含む　カマド本体

1298カマドE
1　5B4/1暗青灰　粘土　焼土塊を少量含む
2　10G5/1緑灰　粘土　カマド本体
3　N2/0黒　シルト質粘土　炭化物を多量含む　機能時形成層
4　10G5/1緑灰　粘土　カマド本体
5　N4/0灰　粘土　カマド本体

図 383　1－2・2－2区　竪穴建物９　1298 カマド平・断面

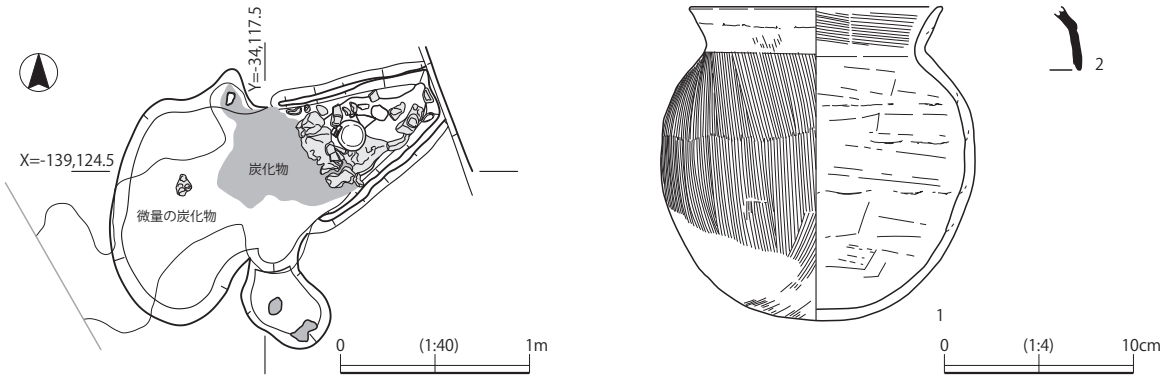


図 384　1－2・2－2区　竪穴建物９　1298 カマド廃絶面平面　出土遺物

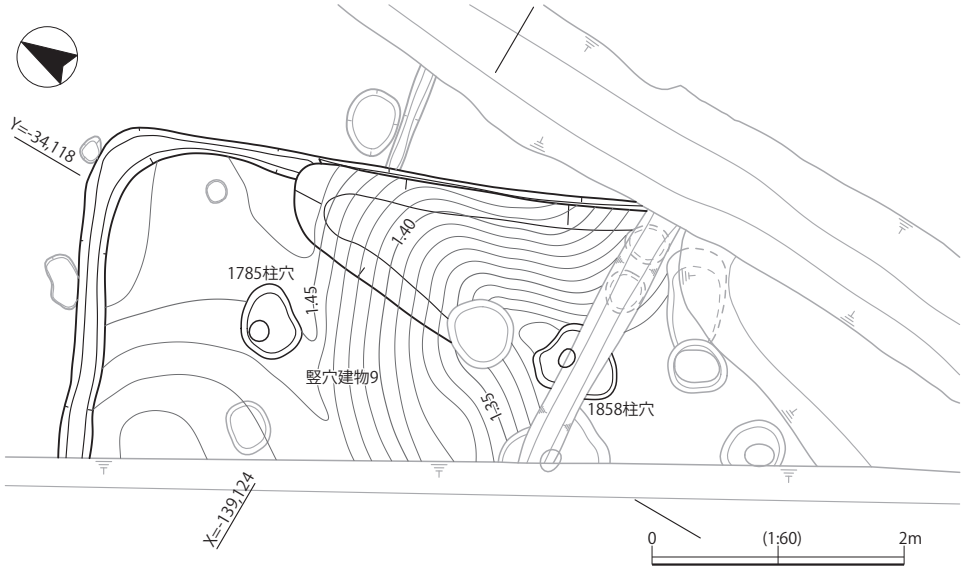


図 385　1－2・2－2区　竪穴建物９加工面平面

用された状況を想定したが、断面観察により、床面を加工していないことが無いことが判明した。合わせて、口縁部への炭層のすり付きが確認されたことから、支脚を据え付けるために周辺を掘りくぼめるようなことはせずに、若干の圧力を上から加えて地面に固定したことが想定される。

支脚として用いられた土師器甕は、甕の内部についても断ち割りを行った。その結果、甕の体部からシルト質の土と植物繊維（スサ）を混ぜ合わせたものが出土した。シルト質の土は真土のように粒径が細かい土質で、土塊として確認され、内面の器壁に沿った部分が空洞となっている状態も観察された。支脚として用いられるに当たり、甕内部にシルト質の土を充填して、土器を補強したものが、被熱による収縮で器壁から剥がれ落ちたものと考えられる。

また、炭層を除去した段階に、支脚の手前では火床が検出された。火床の平面形は不整な円形を呈し、直径 0.35m、加工面までの深さ 0.05m である。火床は床面を椀形に掘りくぼめた部分をシルト質粘土で成形し、粒径の整ったシルトを突き固めて構築される。上部には被熱による赤変が認められた。

また、1298 カマドについては、本体の遺存状態が良好であったため、カマド本体に対して縦方向に断面観察した。カマドの構築法の一部が判明しており、カマド本体は、奥壁側（北東側）からシルト～粘土を重ねて構築されていた。また、カマド袖部に対して炭層のすり付きが２層に分かれる部分が確認されており、内側からカマドの補修を行った痕跡と考えられる。

加工面は、竪穴建物の北東側が高く、1298 カマド直下は溝状に浅く窪んでいる状況が確認された。

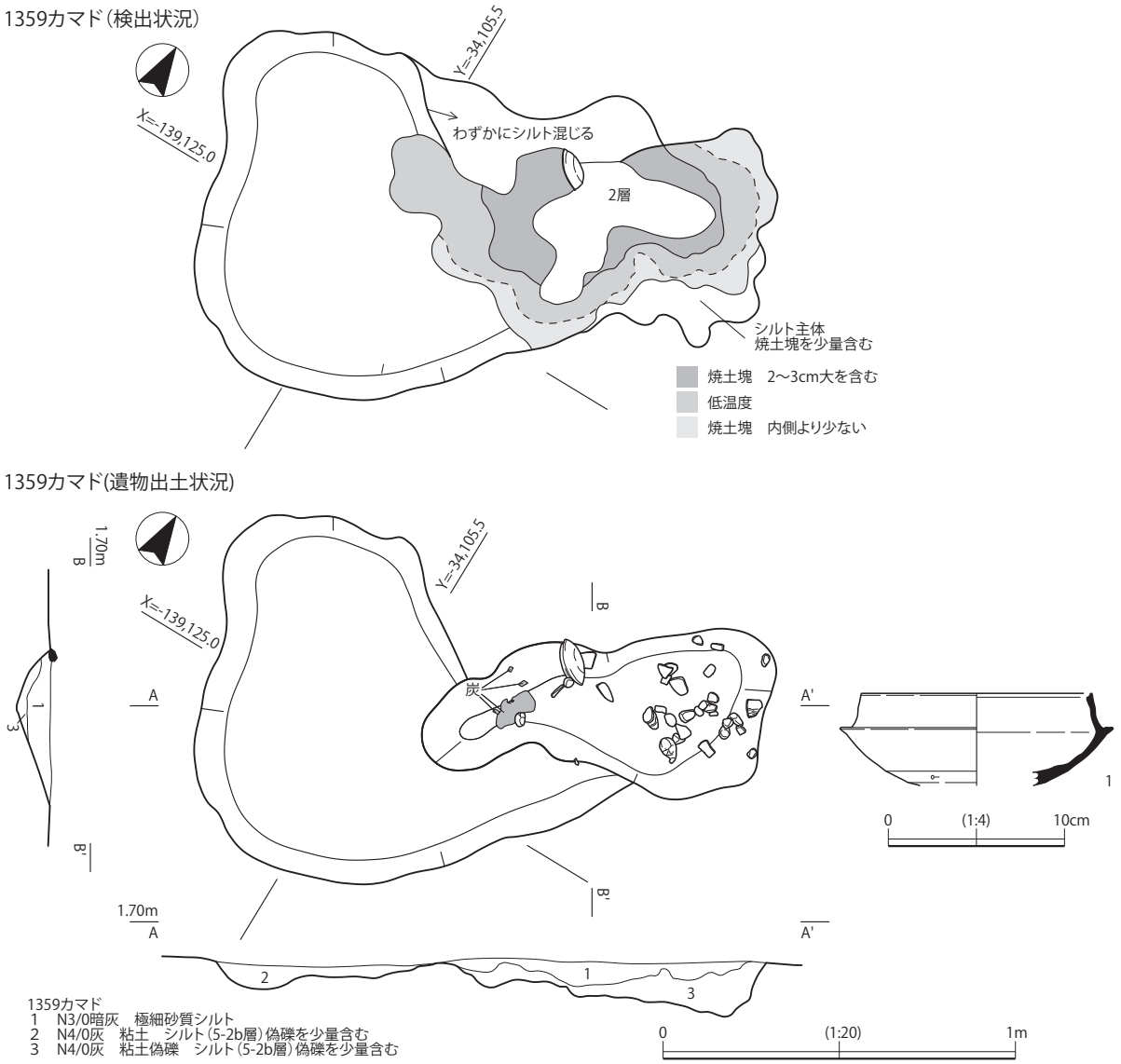
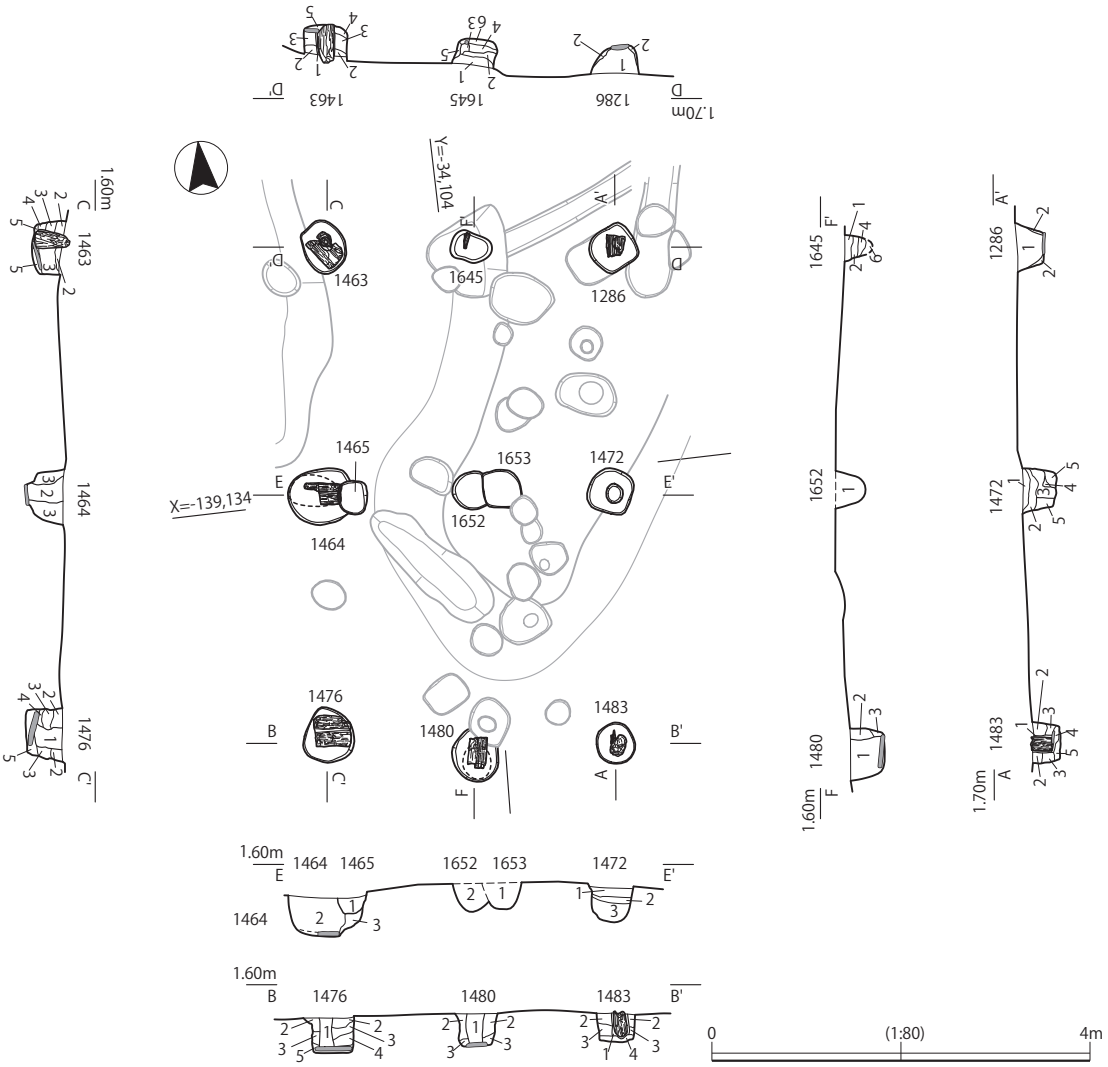


図 386　1－2・2－2区　1359 カマド平・断面　出土遺物

床面・加工時形成層とした、ブロック土によって埋まっており、他の遺構が重複した可能性は無いと考えられる。５－２ｂ層上面では地形的に南方向に低くなっており、その状況を反映して、加工面も北東側が高くなっていると考えられる。なお、1－5区竪穴建物28のカマドも、カマド直下の掘り下げを行って、カマドが構築される。竪穴建物９から出土した遺物は、図 384 －１・２を図示した。１は土師器甕で、支脚として用いられたものである。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向の板ナデ調整が施される。２は須恵器坏蓋である。TK47 型式。

1359 カマド（図 373・386、図版 23）

竪穴建物８の南側で検出された。平面形と埋土からカマドと判断した。竪穴建物に関連する遺構は周辺で検出されなかった。規模は、長さ 1.6m、幅 1.04m、深さ 0.15m である。埋土は、下層が加工時形成層と考えられるブロック土、上層が焼土塊・炭化物を多量に含んだ極細砂混シルトである。掻き出し口を主として検出したと考えており、断面形は凹凸が顕著である。遺物はカマド本体に近い方と考えられる北東側に集中する。1359 カマドから出土した土器は、図 386 －１の須恵器坏身がある。口縁端部には段があり、口縁部は内傾気味である。MT15 型式。

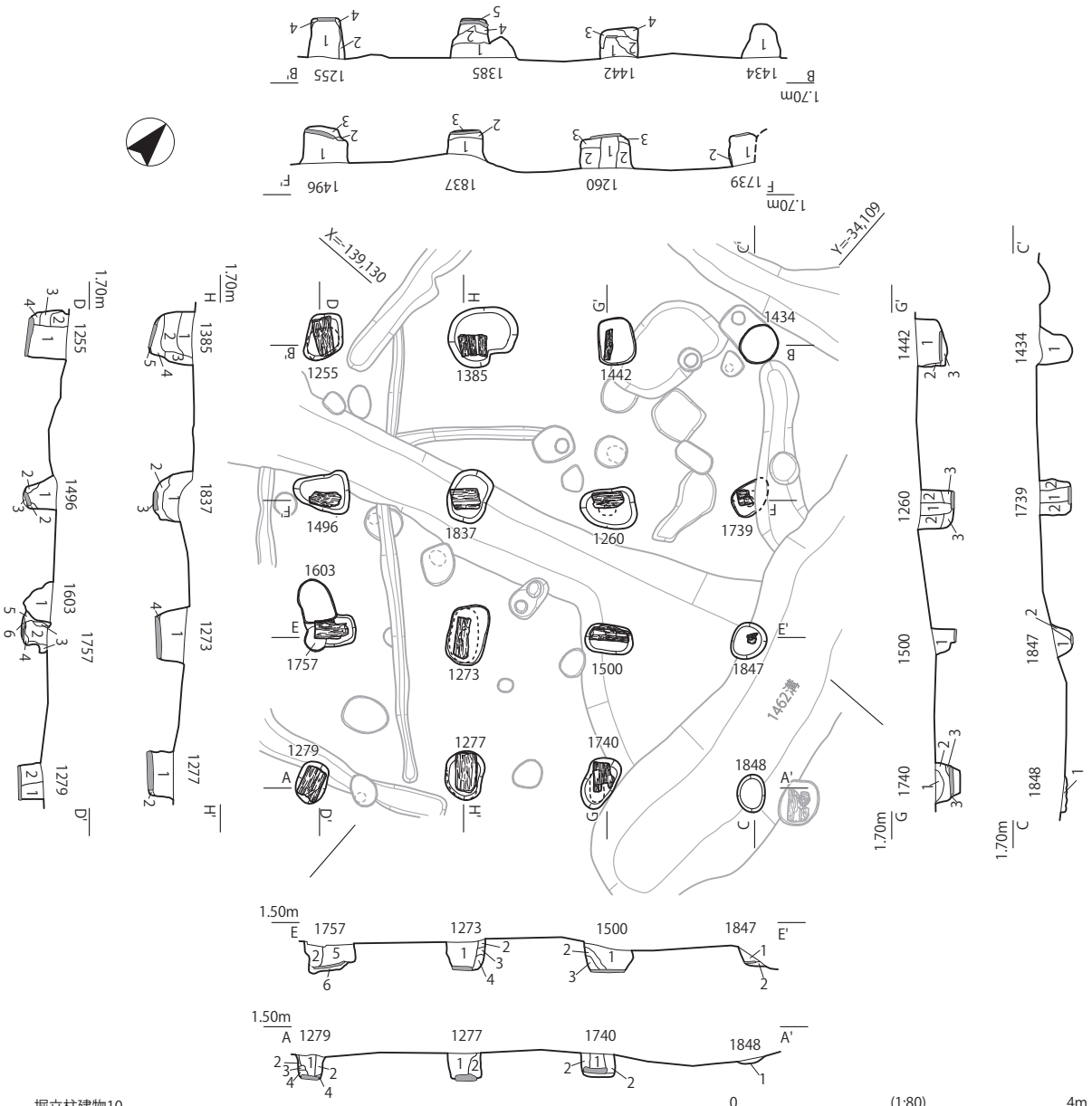


掘立柱建物9
1286
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト　裏込め
1645
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
3　10YR3/3暗褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
4　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
5　10YR3/1黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
6　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1652・1653
1　10YR6/1褐灰　シルト質極細砂
2　10YR4/1褐灰　シルト　抜き取り
1463
1　10YR5/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む
2　10YR6/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR5/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR7/1灰白　シルト　10YR4/2灰黄褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
5　10YR4/2灰黄褐　シルト　裏込め
1464・1465
1　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
3　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/2黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1472
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト　抜き取り
3　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/2黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
4　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
5　10YR6/1褐灰　シルト　10YR4/2灰黄褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1476
1　10YR6/1褐灰　シルト　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR5/2灰黄褐　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR5/1褐灰　シルト　裏込め
5　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1480
1　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR6/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1483
1　10YR6/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
5　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め

図 387　1－2・2－2区　掘立柱建物９平・断面

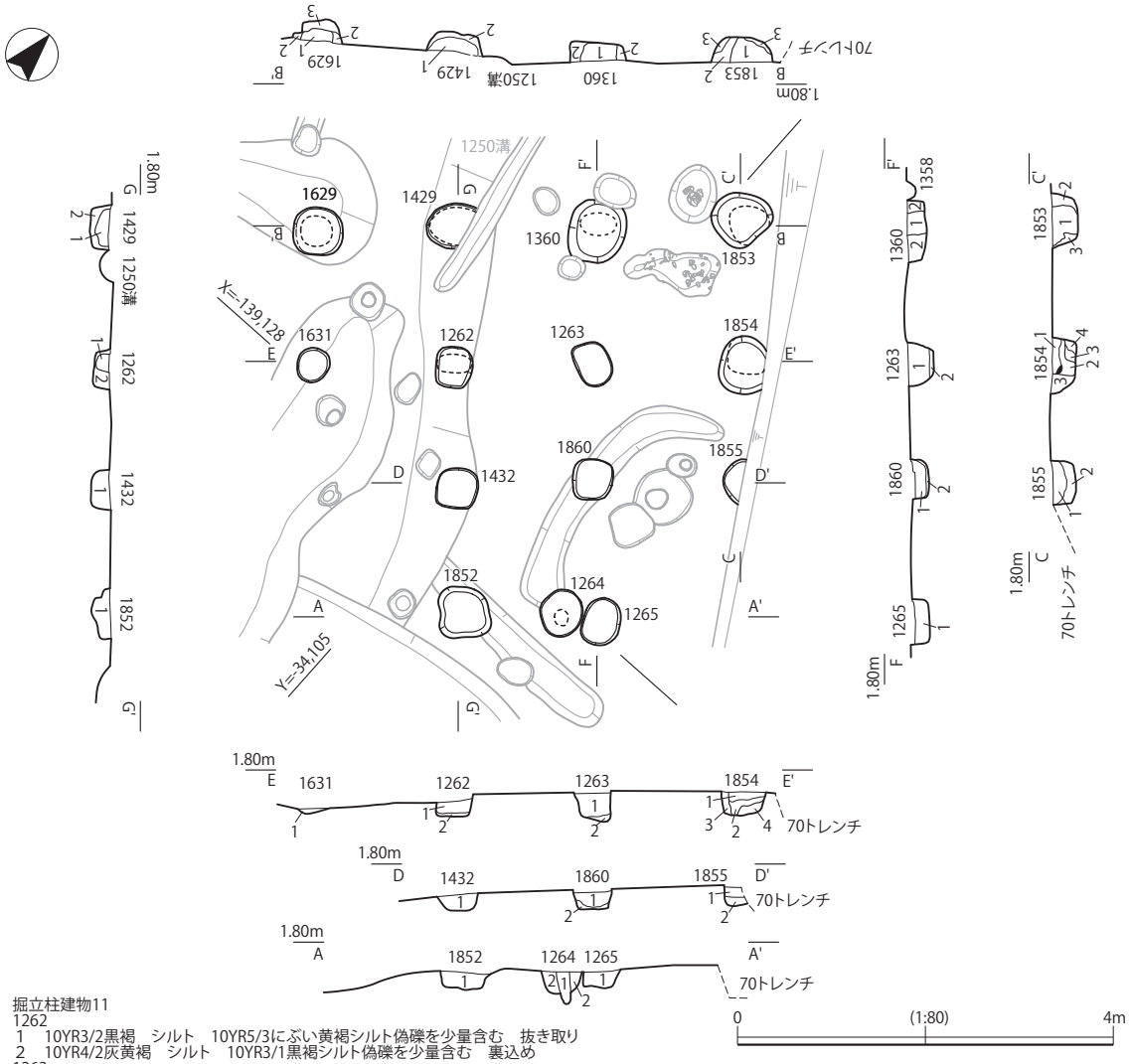
掘立柱建物９（図 373・387、図版 24）

調査地南端で検出された。建物構造は２間×２間である。規模は、梁行 3.2m、桁行 5.2m である。1463・1483 柱穴以外の柱穴は、柱がすべて抜き取られていた。1480・1286・1652 柱穴は、ほぼ同位置で重複する柱穴が検出されており、建て替えがあった可能性がある。礎板が遺存するものが多いが、ベースとなる５－２ｂ層が泥質であることに起因すると考えられる。柱穴から土師器等の細片が出土しているが、時期は不詳である。



掘立柱建物10
1255
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR5/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1260
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR3/1黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1273
1　10YR5/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR4/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1277
1　10YR5/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1279
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/2灰黄褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR5/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1385
1　10YR5/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルトを少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルトを少量含む　抜き取り
3　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルトを少量含む　抜き取り
4　10YR5/2灰黄褐　シルト　10YR7/1灰白シルトを少量含む　抜き取り
5　10YR6/1褐灰　シルト　裏込め
1434
1　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
1442
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR5/2灰黄褐　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR6/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1496
1　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR3/1黒褐　シルト　裏込め
3　10YR4/1褐灰　シルト　裏込め
1500
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
3　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
1603・1757
1　10YR4/1褐灰　シルト　抜き取り　1603柱穴
2　10YR4/1褐灰　シルト　抜き取り　1757柱穴
3　10YR5/1褐灰　シルト　抜き取り　1757柱穴
4　10YR4/2灰黄褐　シルト　抜き取り　1757柱穴
5　N4/0灰　シルト　裏込め　1757柱穴
6　10YR4/2灰黄褐　シルト　1757柱穴
1739
1　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1740
1　10YR6/1褐灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　N6/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
3　10YR5/2灰黄褐　シルト　裏込め
1837
1　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
3　10YR6/1褐灰　シルト　裏込め
1847
1　10YR5/1褐灰　シルト　10YR5/2灰黄褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　10YR7/1灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
1848
1　N6/0灰　シルト　N4/0灰シルト偽礫を少量含む

図 388　1－2・2－2区　掘立柱建物 10 平・断面



掘立柱建物11
1262
1　10YR3/2黒褐　シルト　10YR5/3にぶい黄褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1263
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1264
1　10YR3/1黒褐　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め
1265
1　10YR3/2黒褐　シルト　N5/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
1360
1　N4/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
1429
1　10YR3/2黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1432
1　10YR4/2灰黄褐　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
1629
1　10YR3/1黒褐　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR5/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR4/1褐灰　シルト　10YR6/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1631
1　10YR6/1褐灰　シルト
1852
1　10YR4/1褐灰　シルト　抜き取り
1853
1　N5/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N4/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　N6/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
1854
1　10YR5/2灰黄褐　シルトN6/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　N4/0灰　シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　抜き取り
3　10YR5/1褐灰　シルトN6/0灰　シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　N5/0灰　シルト　N7/0灰白　シルト偽礫を少量含む　裏込め
1855
1　10YR5/1褐灰　シルト　N4/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　N4/0灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
1860
1　10YR4/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR6/1褐灰　シルト　10YR3/1黒褐シルト偽礫を少量含む　裏込め

図 389　1－2・2－2区　掘立柱建物 11 平・断面

掘立柱建物 10（図 373・388）

掘立柱建物９の西側で検出された。建物構造は３間×３間の総柱建物である。規模は梁行 5.2 m、桁行 5.2 mである。柱はすべて抜き取られていたが、礎板が遺存するものが多い。掘立柱建物９と同様、ベースとなる５－２ｂ層が泥質であることに起因すると考えられる。掘立柱建物 11 と北西側の側柱の柱筋が通っており、同時期に機能した可能性が高いが、柱間の間隔が異なっている。掘立柱建物の規模は大きく、集落内で倉庫などとして機能したものであろうか。

1434 柱穴からは須恵器高坏の細片が出土した。その他の柱穴からも、土師器・須恵器の微細な小片が出土したが、時期は不明である。

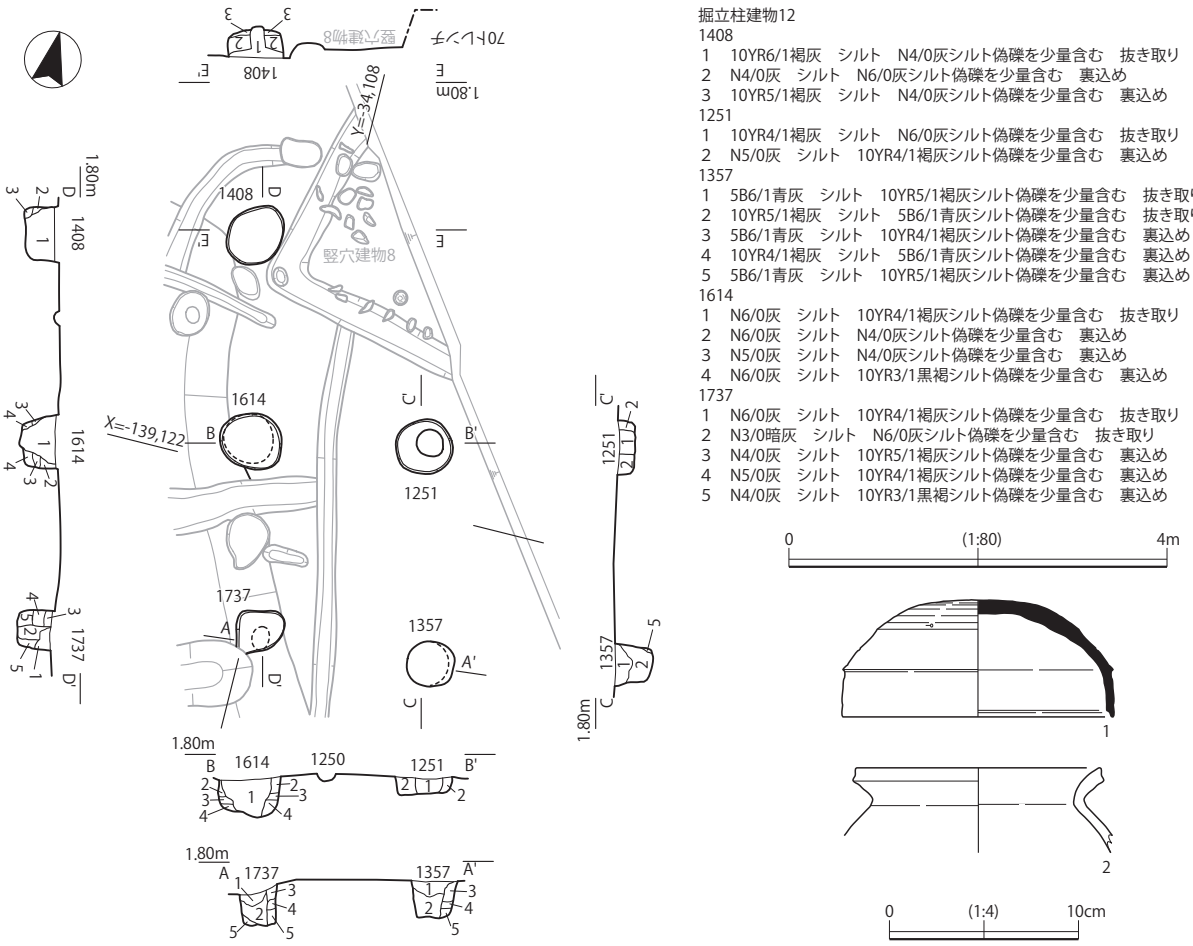


図 390　1－2・2－2区　掘立柱建物 12 平・断面　出土遺物

掘立柱建物 11（図 373・389）

掘立柱建物 10 の北東側で検出された。建物構造は 2 間× 3 間で、1429・1262 柱穴の西側で 1429・1631 柱穴が検出されており、西側に建物が張り出す構造と考えられる。梁行 4.0 m、桁行 4.2 mである。柱はすべて抜き取られていた。土師器細片が柱穴から出土したが、時期の詳細は不明である。

掘立柱建物 12（図 373・390）

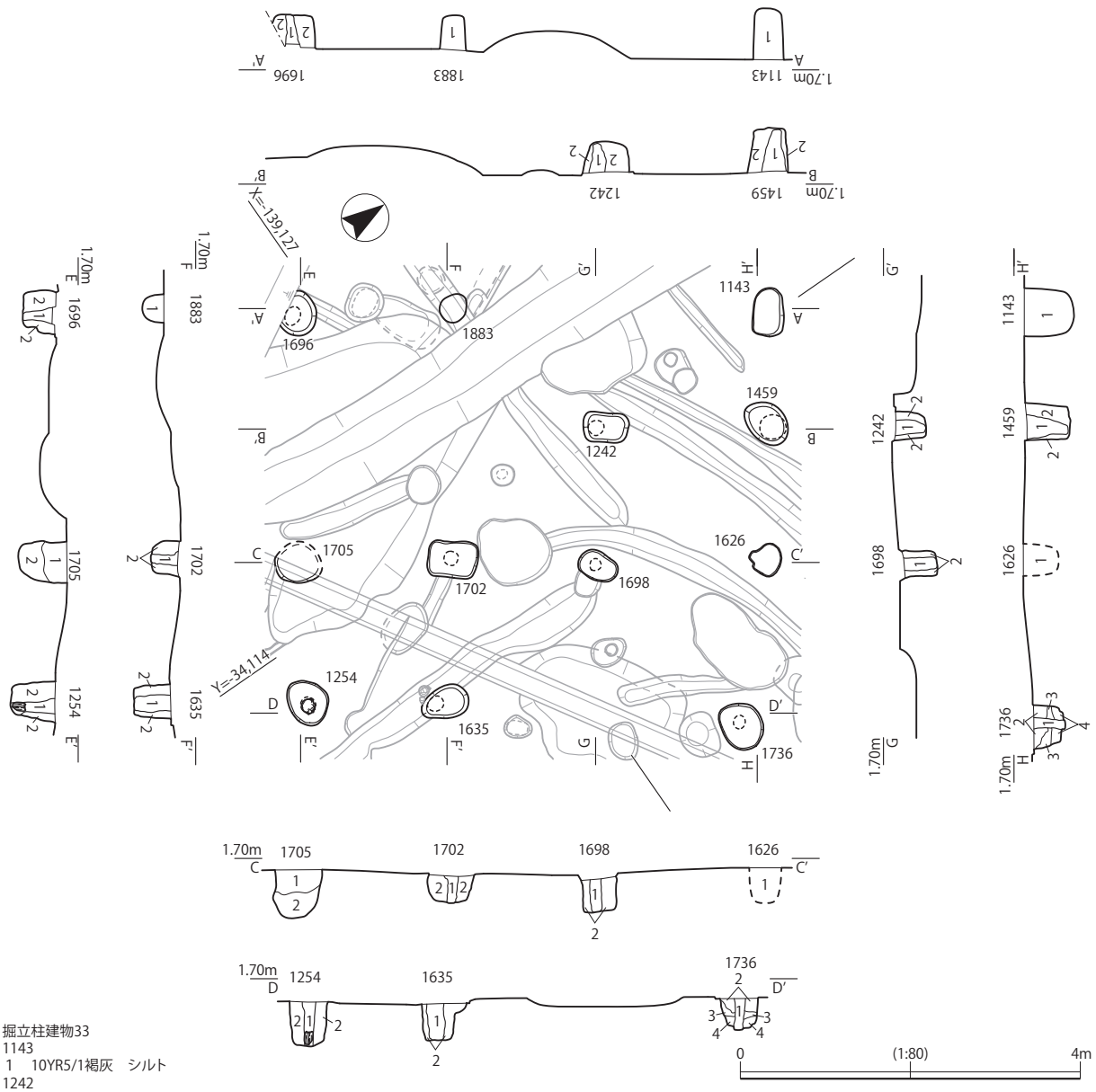
竪穴建物と重なる位置で検出された。竪穴建物 8 に切られており、竪穴建物 8 が新しい。建物構造は 1 間以上× 2 間である。規模は東西 3.4 m以上、南北 4.2 mである。1208 柱穴から土器が出土しており、図 390 － 1 ・ 2 を図示した。 1 は須恵器坏蓋である。MT15 型式。 2 は弥生土器甕か。 5 － 2 b 層に帰属する資料と考えられ、混入資料と考えられる。

掘立柱建物 33（図 373・391）

掘立柱建物 10 の北西で検出された。建物構造は、 3 間× 3 間である。規模は、梁行 4.6 m、桁行 5.2 mである。柱はすべて抜き取られていた。1698 柱穴から TK10 型式新段階と TK43 型式の坏身（図 398 － 11）が出土した。

掘立柱建物 34（図 373・392）

竪穴建物 6 の西側で検出された。建物構造は、 2 間× 2 間である。規模は梁行 3.6 m、桁行 4.0 mである。960 柱穴から須恵器高坏坏部の微細な小片が出土した。調整及び焼成等の所見から古墳時代後期にまで下がらず、古墳時代中期後葉に位置付けられる。



掘立柱建物33
1143
1　10YR5/1褐灰　シルト
1242
1　N4/0灰　シルト　柱痕
2　N5/0灰　シルト　裏込め
1254
1　2.5Y4/1黄灰　シルト　柱痕
2　2.5Y3/2黒褐　シルト　2.5Y6/1黄灰粘土偽礫を多量含む　裏込め
1459
1　10YR3/1黒褐　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR2/1黒　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を多量含む　裏込め
1626
1　10YR5/1褐灰　シルト
1635
1　2.5Y4/1黄灰　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/2灰黄褐　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1696
1　N5/0灰　粘土質シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む
　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を少量含む　抜き取り
2　N6/0灰　粘土質シルト　N7/0灰白シルト偽礫を少量含む　裏込め
1698
1　10YR3/1黒褐　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　2.5Y3/1黒褐　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1702
1　10YR3/1黒褐　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　10YR4/1褐灰　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1705
1　2.5Y3/1黒褐　極細砂混シルト
2　5Y4/1灰　極細砂混シルト　シルト質粘土(5-2b層)偽礫を多量含む
1736
1　10YR4/1褐灰　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　抜き取り
2　2.5Y6/1黄灰　シルト　10YR4/1褐灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
3　10YR4/1褐灰　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
4　10YR3/1黒褐　シルト　2.5Y6/1黄灰シルト偽礫を少量含む　裏込め
1883
1　10YR5/1褐灰　シルト

図 391　1－2・2－2区　掘立柱建物 33 平・断面

1347 溝・1348 土坑（図 373・393）

竪穴建物 7 の北西で検出された。埋土が同じで同時に機能した可能性がある。1348 土坑の平面形は不整な円形を呈する。規模は、直径 1.3 m、深さ 0.1 mである。埋土は炭化物を多量に含むシルトである。1347 溝の規模は、幅 0.2m、深さ 0.04m である。埋土は、細砂混シルトである。1348 土坑から土師器・須恵器・製塩土器が出土した。古墳時代中期後葉以降に位置付けられる。

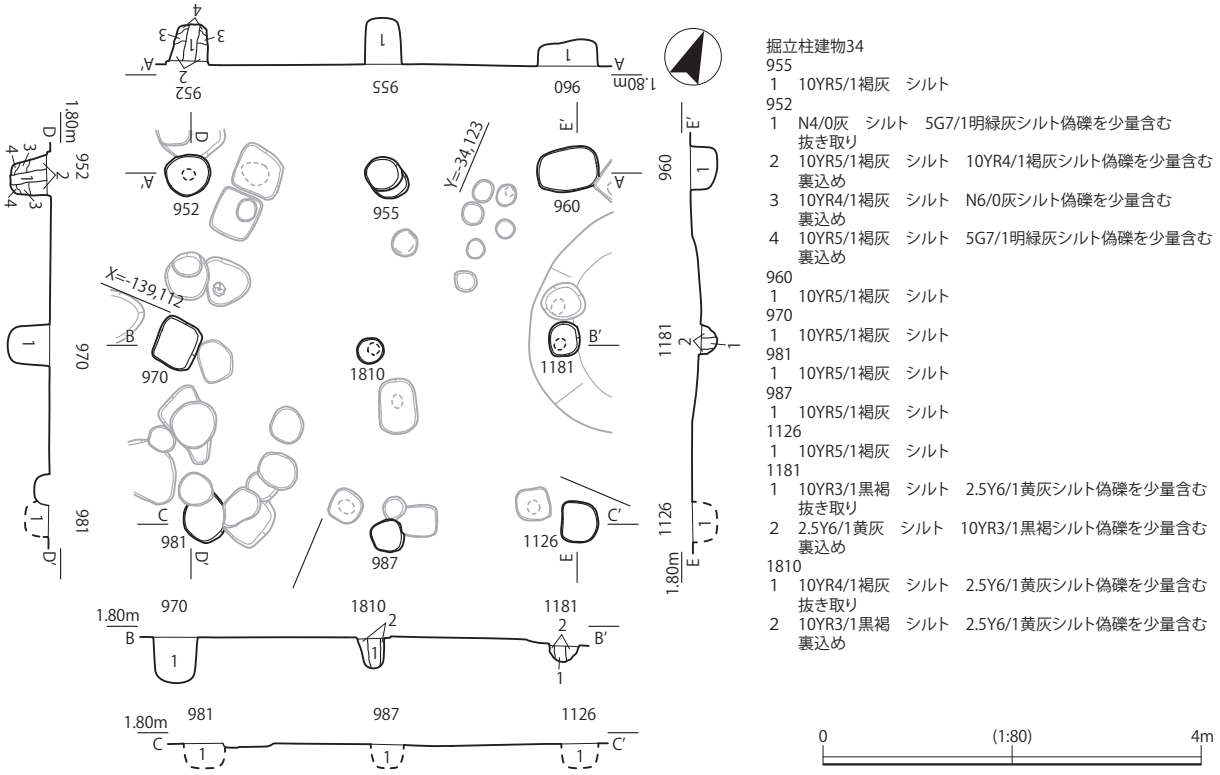


図 392　1－2・2－2区　掘立柱建物 34 平・断面

1178 土坑（図 338・393・394）

930 土坑の南東で検出された。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長さ 1.14 m、幅 0.66 m、深さ 0.14 mである。埋土は、下層が細砂混シルト、上層がシルト質粘土である。底面の直上から、須恵器坏身、土師器甕が出土した。図 394 － 3 は土師器甕である。外面はハケ調整で、内面は磨滅する。 4 は須恵器坏身である。TK208 ～ 23 型式。 5 は土師器鉢である。外面は磨滅、内面はナデ調整が施される。930 土坑の時期は、古墳時代中期中葉から後葉と考えられる。

1358 土坑（図 373・393・394）

竪穴建物 8 の南側で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 0.6m、短軸 0.5m、深さ 0.1m である。埋土は炭化物を多量に含んだ層が下層と中層に堆積し、上層から土師器甕が破片となって出土した。図 394 － 2 は土師器甕で、体部外面はハケ調整、内面は上位から中位が指押さえ後ナデ、下位から底面にかけて板ナデ調整される。

1404 土坑（図 393・394）

1348 土坑の南側で検出された。不整形な形状を呈す。長軸 1.6m、短軸 1.2m、深さ 0.1m である。埋土は 1348 土坑と同じく炭化物を多く含むシルトである。1404 土坑から図 394 － 1 の土師器甕が出土した。土師器甕は体部中位から下を欠損するもので、外面はハケ調整が施される。内面は全体に磨滅しているが、ナデ調整と考えられる。

992 土坑（図 373・393・394）

竪穴建物 6 の西側で検出された。平面形は不整な楕円形、規模は長軸 1.5m、短軸 0.9m、深さ 0.14m である。埋土は極細砂混シルトを主体とし、下層には焼土塊が含まれる。上層から土師器甕・須恵器甕の破片が出土した。図 394 － 6 は土師器甕である。 7 は須恵器坏蓋である。TK23 ～ 47 型式。

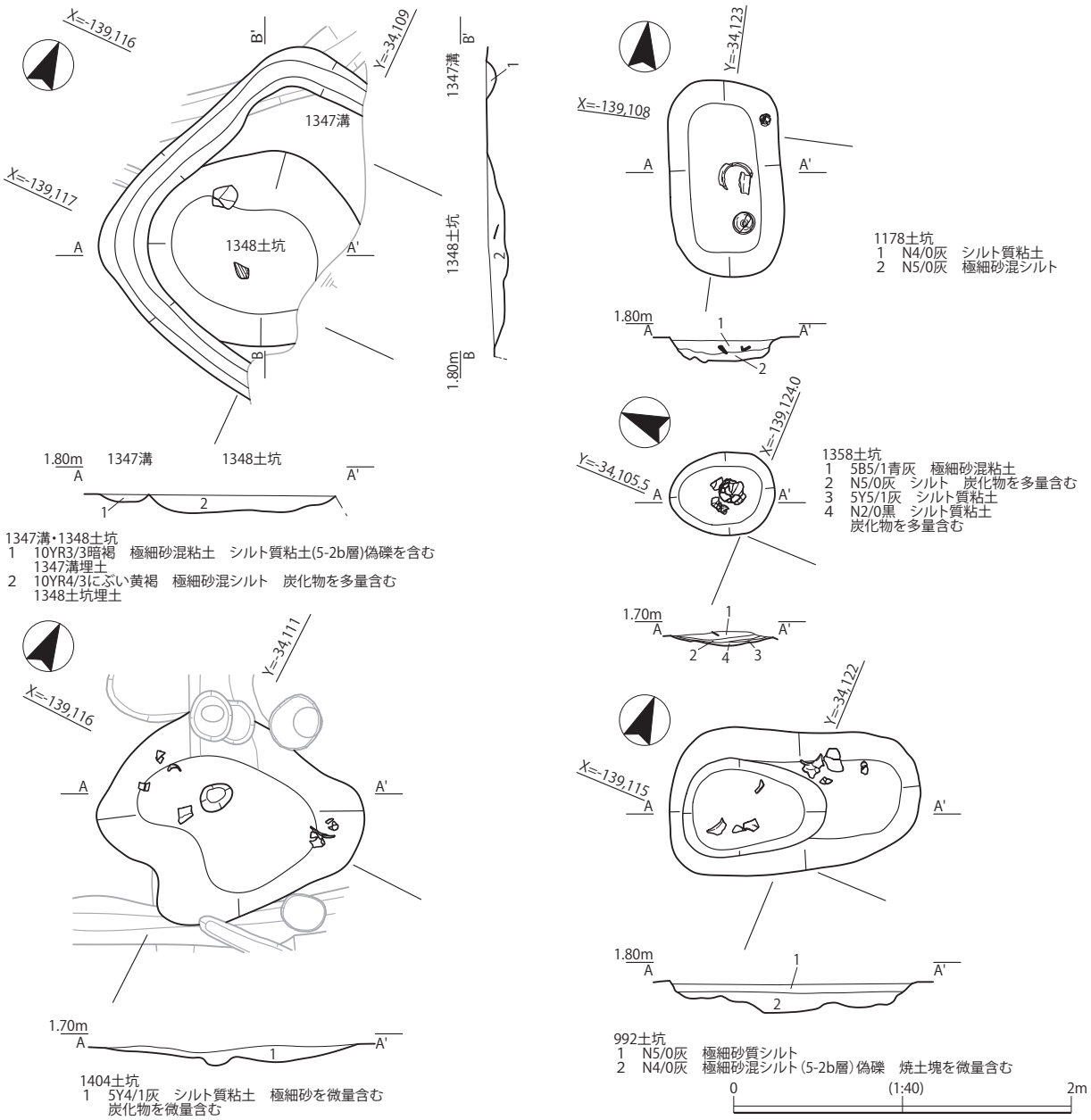


図 393　1－2・2－2区　1347 溝他平・断面

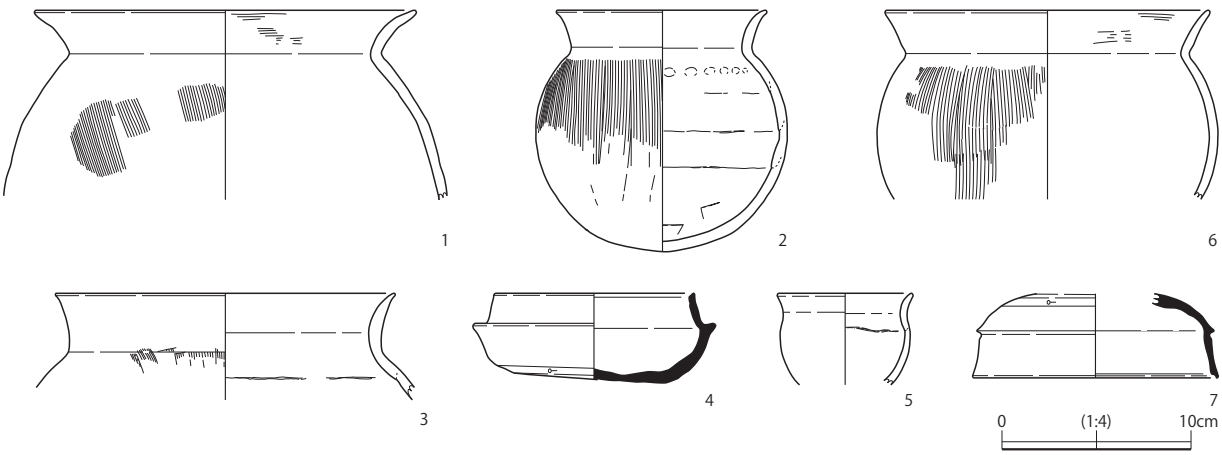


図 394　1－2・2－2区　1404 土坑他出土遺物

図 395　1－2・2－2区　1400 溝他平面

1450 溝・1451 溝・1462 溝・1493 土坑・1643 溝（図 373・395 ～ 397、図版 95・96）

調査地南西､整地が行われたと考えられる範囲で検出された｡それぞれ溝ないし土坑として掘削を行ったが､非連続的ながら微高地周辺で円形にまとまりをみせる。埋土は、古土壌･５－２ｂ層由来のブロック土である点で共通する。遺構検出のため、加工時形成層に近いところまで削り込んでいる可能性もあるが､埋戻しが行われたものと考えられる。1451 溝から図 397 －１～５が出土した。１は須恵器坏蓋。TK10 型式新段階。２・３は土師器甕である。４は韓式系土器甕である。底部は平底気味。外面は直線文系平行タタキ、内面は板ナデが施される。５は須恵器鉢として図化した。樽形腿の可能性がある。外面は沈線の間に波状文が施される。６～９は 1493 土坑から出土した。６は須恵器無蓋高坏の坏部である。外面上位と内面は回転ヨコナデ調整される。外面中位から下位には縦方向のハケが一定の間隔を空

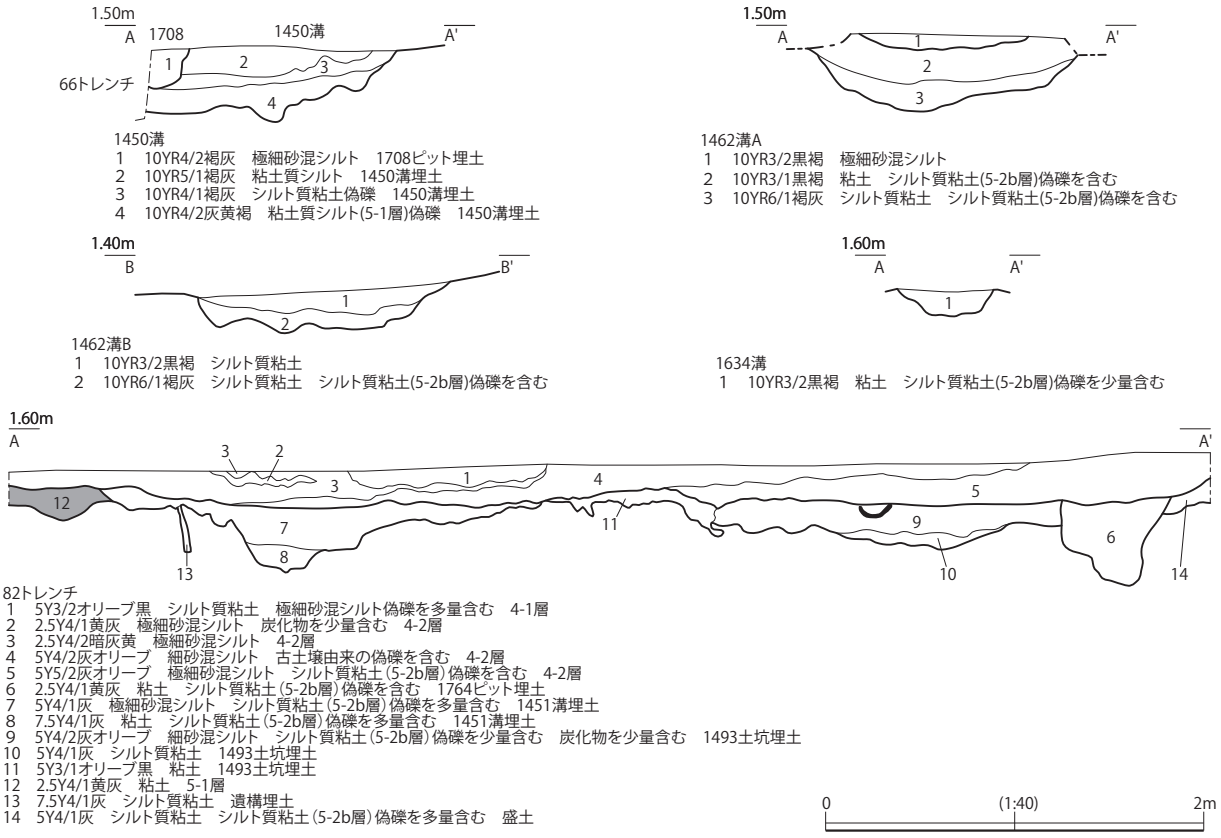


図 396　1－2・2－2区　1462 溝他断面

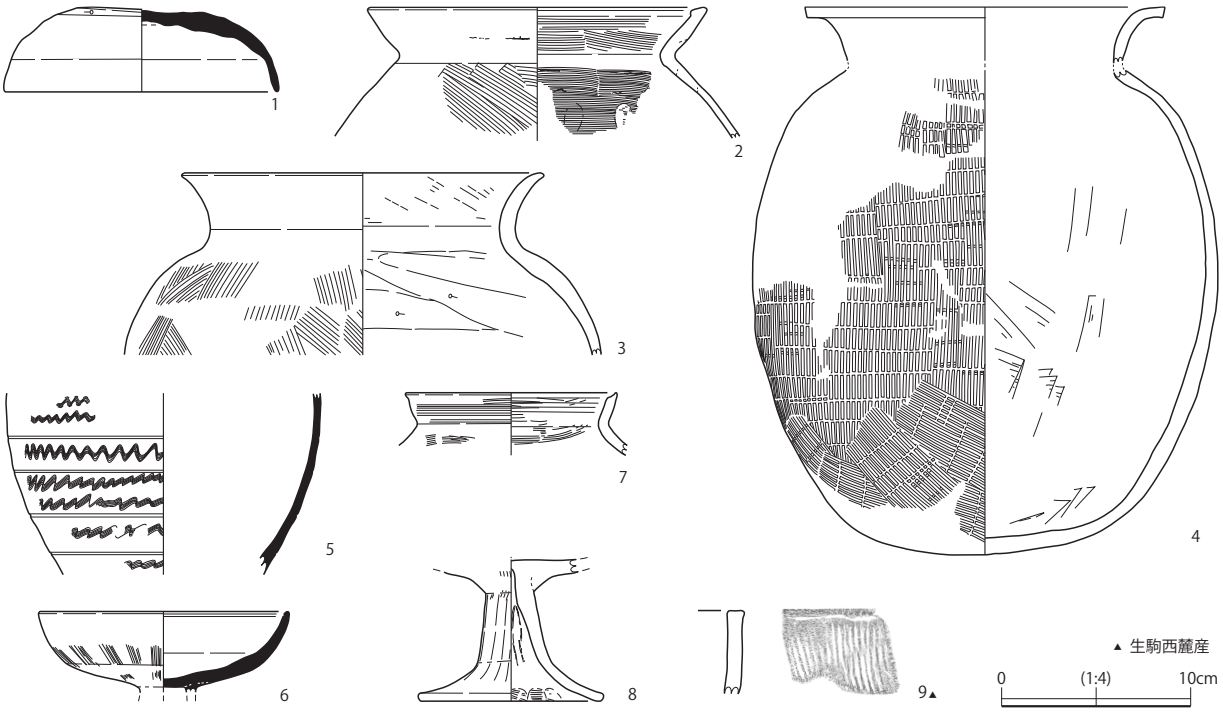


図 397　1－2・2－2区　1400 溝他出土遺物

けて施されており、一部はナデによって消される。7は土師器甕である。口縁端部を内外面から挟み込んでヨコナデされるため、段が形成される。8は土師器高坏である。9は韓式系土器甑である。外面には平行タタキが施される。なお、8・9は遺構番号を誤記載して取り上げを行った。

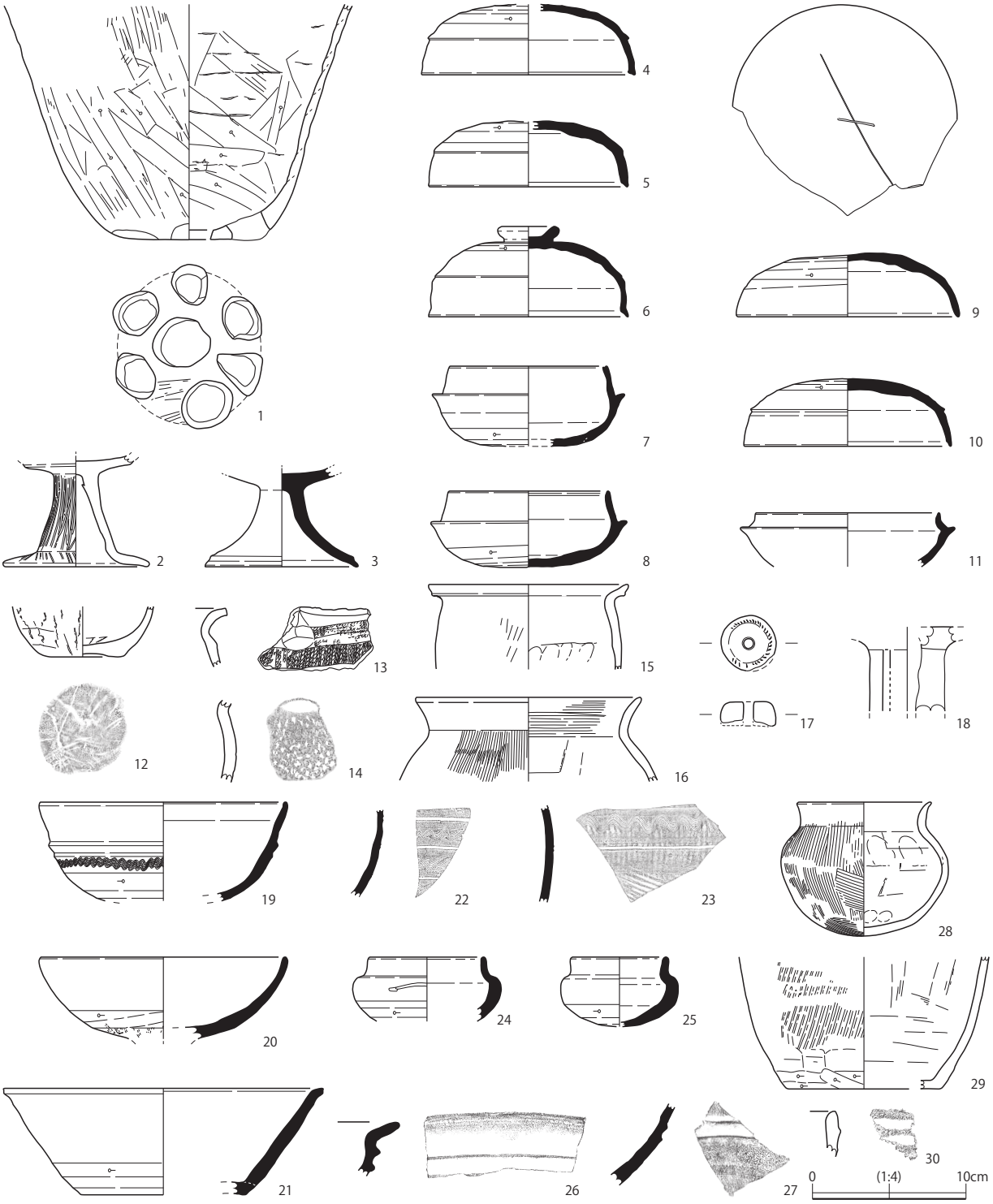


図 398　1－2・2－2区　832 柱穴他出土遺物

その他の遺構・地層出土遺物（図 398・399、図版 96・97）

図 398 － 1・2 は 832 柱穴出土。1 は土師器甑、2 は土師器高坏である。3 は須恵器高坏で 1426 土坑出土。4・5 は須恵器坏蓋で、912 土坑出土。TK47 ～ MT15 型式。6 は須恵器坏蓋で、1128 柱穴出土。TK47 型式。7 は須恵器坏身で、870 土坑から出土。8 は須恵器坏身で 1256 溝出土。10 は須恵器坏蓋で、1456 柱穴出土。9 は須恵器坏蓋で、954 柱穴出土。11 は須恵器坏身で、1698 柱穴出土。TK43 型式。12 は韓式系土器鉢で、819 柱穴出土。13 は韓式系土器の片口鉢で、4 層出土。縄蓆

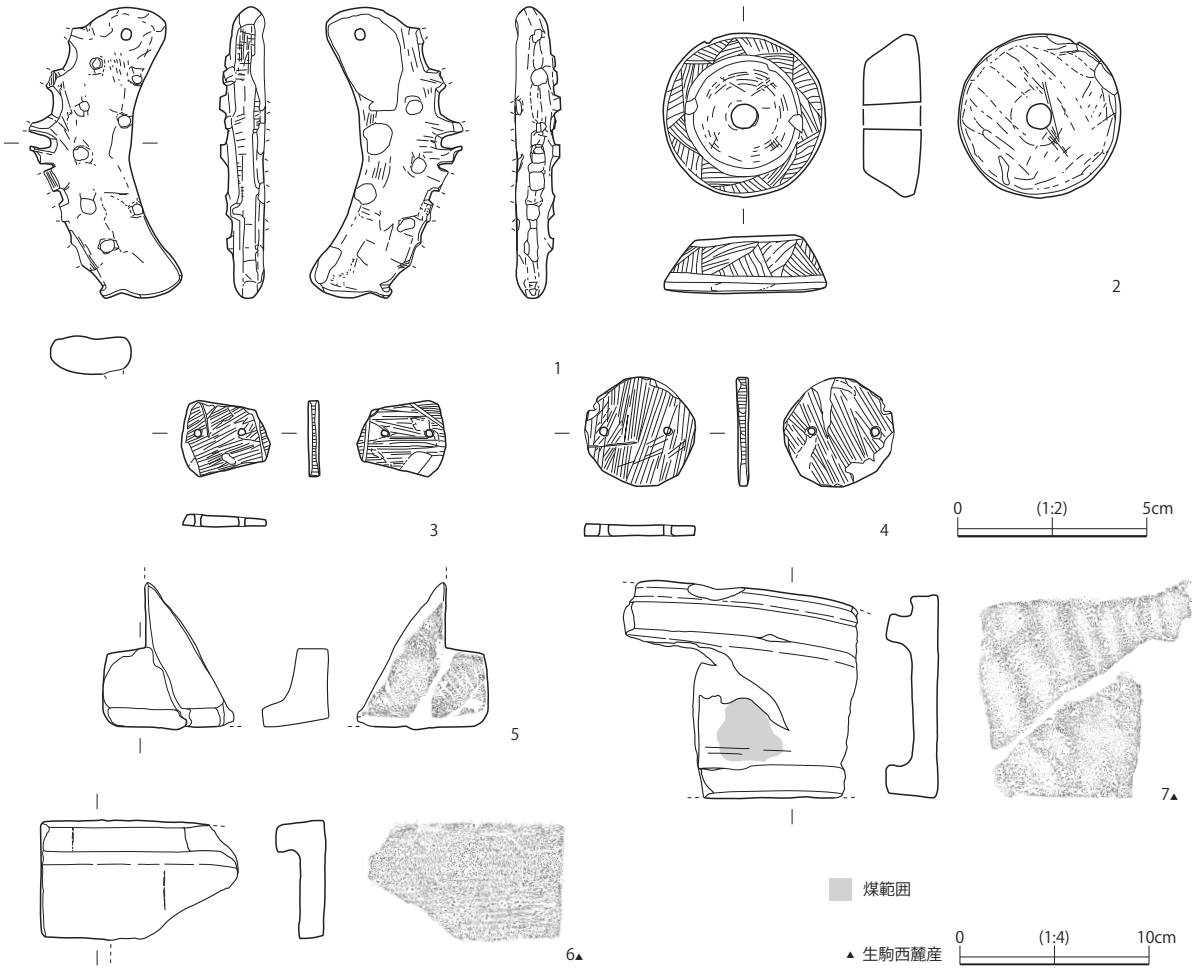


図 399　1－2・2－2区　2層他出土遺物

文タタキが施される。14 は韓式系土器の鉢で、1154 溝から出土。格子目タタキが施される。15 は韓式系土器鉢で、４層から出土。16 は土師器甕で、922 柱穴出土。17・18・22 は２層出土。17 は土製品の紡錘車で、刺突文あり。18 は須恵器を模した土師器で高坏脚部。22 は須恵器鉢の体部片である。19 は須恵器無蓋高坏で、３－１層から出土。20 は須恵器の無蓋高坏で４－２層出土。内面及び外面坏部上位～中位は回転ナデ、下位はケズリ調整で、ハケメが残る。21 は須恵器有段高坏。５－１層出土。23 は須恵器の甕体部。平行タタキ後、板ナデにより器面を平滑に整えた後、上から凹線・波状文・沈線が施される。24・25 は須恵器ミニチュア直口壺で、24 は４－１層、25 は４－２層出土。26 は須恵器高坏形器台の口縁部で、５－１層出土。27 は高坏形器台の坏部で、側溝掘削時に出土した。28 は土師器甕で、４－１層出土。29 は韓式系土器平底鉢である。４－２層出土。30 は浮線文系土器鉢の口縁部で、５－１層出土。氷Ⅰ式に位置付けられる。

図 399－1 は滑石製子持勾玉である。２層とした中世の作土と５－１層とした古土壌の地層境界部から出土した。ケズリと研磨により成形され、側面にはケズリ痕が明瞭に残る。背部の突起は折損する。２は滑石製紡錘車で、４－２層出土。側面に鋸歯文が線刻で描かれる。３は滑石製有孔円板である。不整な六角形状を呈す。４は滑石製有孔円板で、1410 土坑出土。５・６・７はＵ字形板状土製品である。５は方形の切り欠きがあり、断面形が長方形の突帯が付く。胎土は生駒西麓産ではなく、白色を呈するもので、他のＵ字形板状土製品と異なる。６は方形の切り欠きが一辺認められるが、下端が破損しており、切り欠きの大きさは復元できない。７は方形の切り欠きがあり、Ｕ字形板状土製品の中央の部位である。

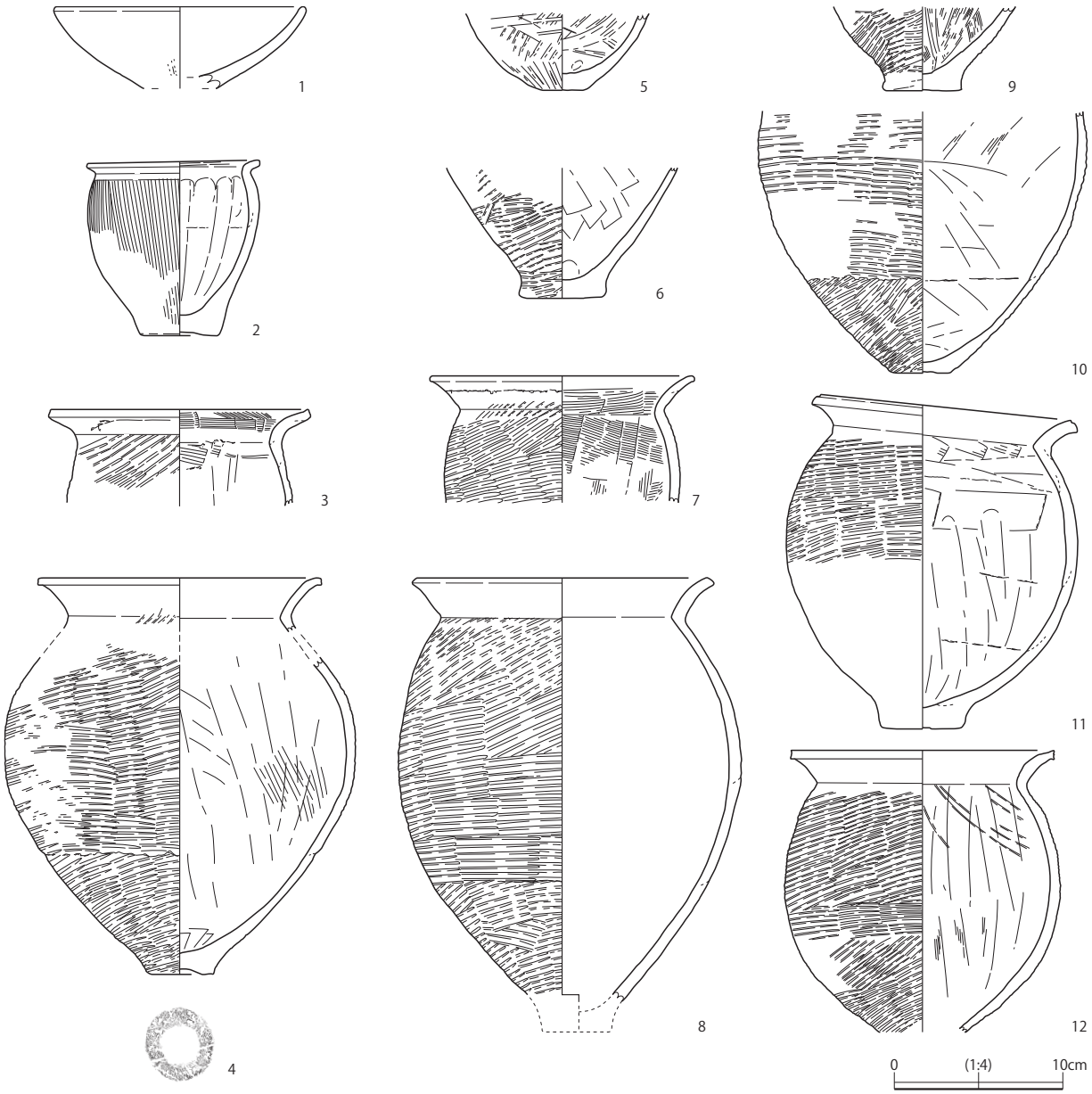


図 400　1－2・2－2区　5－2ｂ層出土土器

5－2ｂ層（図 400・401、図版 22・98）

古墳時代の集落の調査後、5－2ｂ層上部の弱く土壌化した部分を除去して、土壌化の影響で検出が困難であった遺構の確認作業を行った後、第6－1面直上に分厚く堆積する5－2ｂ層の掘削を行った。第6－1面 8059 微高地周辺で、1890 流路が西方向に側方移動していく状況が確認されており、流路内の砂礫層や周辺に堆積する5－2ｂ層から弥生土器が出土した。1890 流路から出土した弥生土器は3・4・7・10・12 である。8は 1303 土坑直下の5－2ｂ層から出土した。

図 400－1は、鉢ないし高坏杯部である。口縁端部は擬口縁状に丸く磨滅する。古墳時代遺物の混入品か。2は小型の甕で、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整される。弥生時代中期以前と考えられる。3～12は甕である。3は口縁端部がわずかにつまみ上げられる。外面は平行タタキ、内面はハケ調整である。4の外面は平行タタキで、タタキは上下で3分割して施される。内面はハケ後板ナデ調整が施される。5の外面はタタキ後板ナデ、下端はケズリが施される。内面は板ナデ調整される。6の外面は

平行タタキ、内面は板ナデ調整が施される。７の外面は平行タタキ、内面はハケ調整が施される。８の外面は平行タタキで、タタキは上下の単位が３分割されて施される。内面は磨滅しているが、ナデ調整が施されたと考えられる。９・10 の外面は平行タタキ、内面は板ナデ調整が施される。11 の外面上位は平行タタキ、下位は剥離・磨滅しており不明。内面はナデ調整で上位には板ナデの痕跡が残る。12 の外面は平行タタキ、内面は板ナデ調整が施される。内面の上位には成形時の工具の当たりが残る。この他、手焙形土器の細片が共伴しており、これらの土器は弥生時代後期後葉に位置付けられる。

第６－１面（図 401・402、図版 25）

５－２ｂ層を掘削して検出した遺構面で、６－１層とした粗砂～極粗砂混シルトの上面に当たる。標高は 8059・8061 微高地が最も高く、両微高地の南北が緩斜面となっている。第６－１面では、この緩斜面を利用した水田が 8059 微高地北側を除いた範囲で検出された。8059 微高地北側は５－２ｂ層とした砂礫による浸食が顕著で、遺構面の遺存状況は不良である。8059 微高地に平行する段のみが検出された。同範囲の６－１層の断面観察でも土壌化が弱く、撹拌が全体に及んでいない状況が観察された。13 －４区の断面でも確かめられており、作土として利用された可能性が低い。

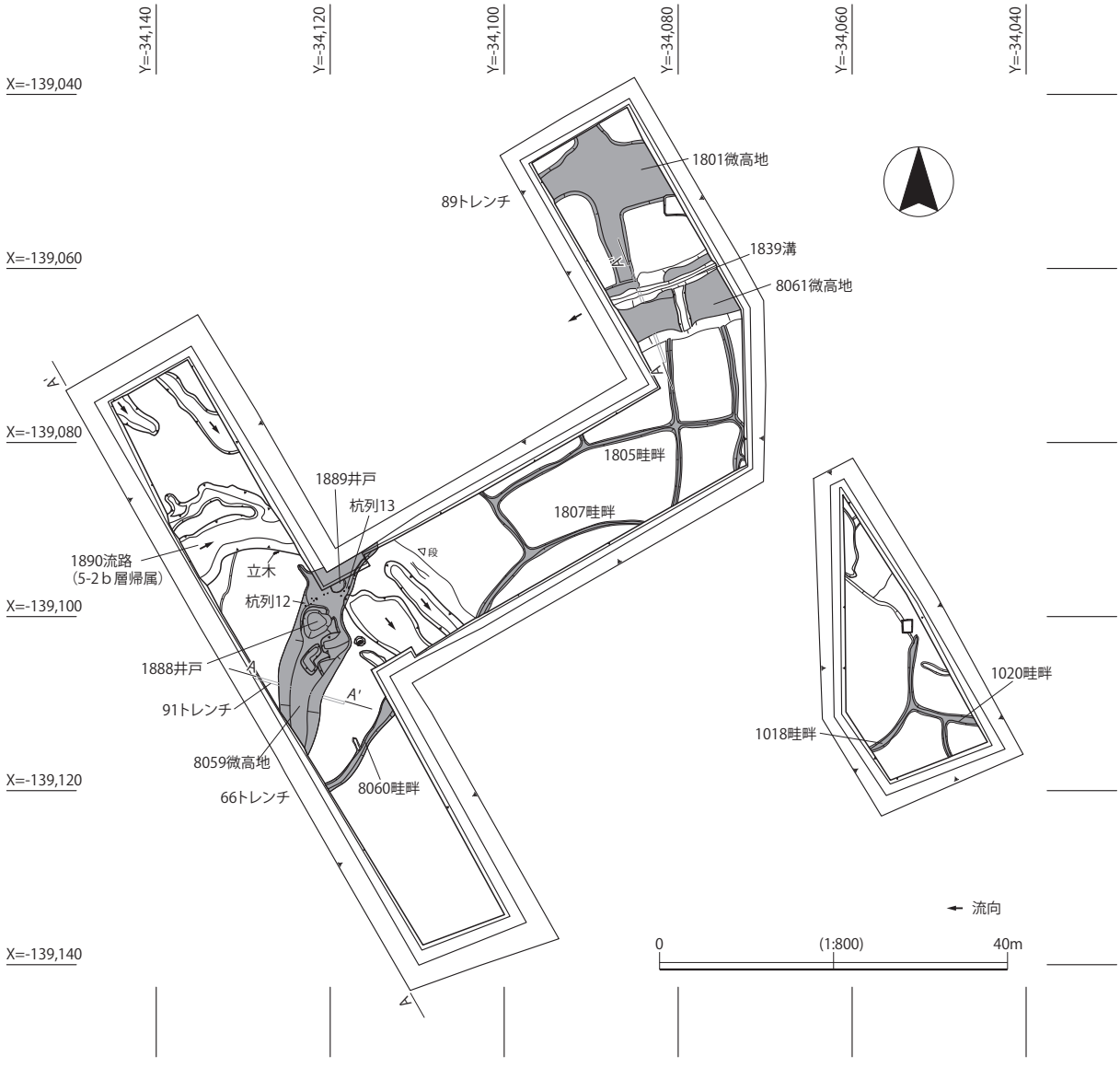
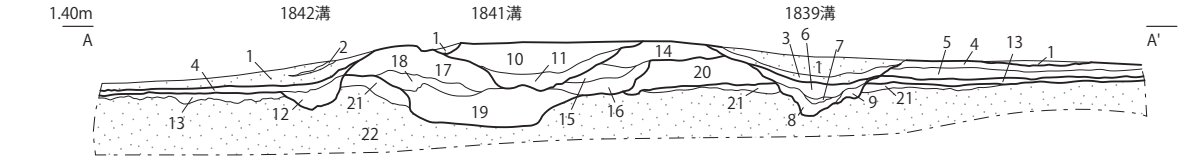
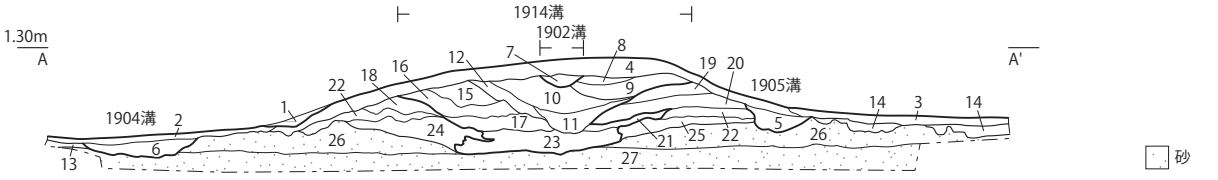


図 401　１－２・２－２区　第６－１面平面



89トレンチ
1　10YR5/1褐灰　粘土質細砂　5-2b層
2　10YR4/1褐灰　粘土　5-2b層
3　10YR4/1褐灰　シルト混極細砂　5-2b層
4　10YR4/2灰黄褐　シルト混粗砂～極粗砂　細礫～中礫を少量含む　弱い土壌化　6-1層
5　10YR3/2黒褐　シルト混極細砂～細砂　弱い土壌化　6-1層
6　10YR3/2黒褐　粘土　細砂～極細砂を少量含む　1839溝埋土
7　10YR3/3暗褐　粘土　1839溝埋土
8　10YR4/2灰黄褐　シルト質細砂　粗砂偽礫を含む　1839溝埋土
9　10YR4/3にぶい黄褐　シルト混細砂　1839溝埋土
10　10YR3/2黒褐　細砂～中砂　細礫～中礫を少量含む　1841溝(新)埋土
11　10YR4/1褐灰　細砂～中砂　2～5mm大の礫を少量含む　1841溝(新)埋土
12　10YR3/2黒褐　粗砂～極粗砂　1842溝埋土
13　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂～極粗砂　偽礫状を呈するところあり　6-2層
14　10YR6/4にぶい黄橙　極粗砂～粗砂　盛土
15　10YR5/1褐灰　細砂～極細砂　粗砂偽礫を含む　1841溝(古)埋土
16　10YR4/1褐灰　細砂　1841溝(古)埋土
17　10YR4/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　2～4mm大の礫を少量含む　盛土
18　10YR3/1黒褐　シルト質極細砂　1841溝(古)埋土
19　10YR5/3にぶい黄褐　中砂～粗砂　1841溝(古)埋土
20　10YR5/3にぶい黄褐　細砂　盛土
21　5G4/1暗緑灰　極細砂～細砂　作土層　6-3層
22　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂　10YR6/3にぶい黄橙細砂を含む　6-4b層



91トレンチ
1　10YR3/1黒褐　粘土　5-2b層
2　10YR3/2黒褐　粗砂～極細砂混シルト　弱い土壌化　6-1層
3　10YR2/1黒　シルト混細砂～中砂　6-1層
4　10YR6/1褐灰　細砂～中砂　粗砂を多量含む　6-1層
5　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂　シルト偽礫を少量含む　1905溝埋土
6　10YR3/3暗褐　細砂混シルト　1904溝埋土
7　10YR3/2黒褐　シルト混細砂　1902溝埋土
8　10YR3/3暗褐　シルト混細砂～中砂　1914溝埋土
9　10YR3/2黒褐　極細砂～細砂　1914溝埋土
10　10YR4/1褐灰　粗砂　1914溝埋土
11　10YR2/2黒褐　細砂混シルト　黒味帯びる　1914溝埋土
12　10YR4/3にぶい黄褐　シルト混細砂～中砂　1914溝埋土
13　10YR4/1褐灰　シルト混粗砂　6-2層
14　10YR3/1黒褐　粗砂～極粗砂　6-2層
15　10YR6/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　1914溝埋土
16　10YR4/2灰黄褐　シルト混細砂　1914溝埋土
17　10YR3/2黒褐　シルト混細砂　1914溝埋土
18　10YR5/2灰黄褐　細砂～中砂　盛土か
19　10YR7/2にぶい黄橙　粗砂～極粗砂　盛土
20　10YR5/2灰黄褐　粗砂～極粗砂　黒っぽい　盛土か
21　10YR4/4褐　細砂　シルトを少量含む　黒味帯びる　1914溝埋土
22　10YR5/1褐灰　極細砂　黒味帯びる　盛土
23　10YR7/2にぶい黄橙　粗砂　3～5mm大の礫を多量含む　1914溝埋土
24　10YR7/2にぶい黄橙　極細砂　盛土
25　10YR6/1褐灰　極細砂　盛土
26　10YR7/1灰白　粗砂　細砂の薄層を挟む　6-4b層
27　10YR2/2黒褐　極細砂　粘土の薄層を挟む　6-4b層

図 402　1－2・2－2区　89・91 トレンチ断面

水田（図 401）

8059 微高地北側を除くすべての範囲で、泥層に覆われ良好な状態で遺存する水田が検出された。2－2区では、8059・8061 微高地に平行する畦畔と、それに直交する畦畔が設置された水田が検出された。1－2区では北西側に低くなる地形に対し、1018 畦畔を設置して区画が行われた状況が確認できた。下層の7－3ｂ層によって形成された高まりが6－1層上面の地形にも反映されたものである。

8061 微高地北側では、2－1区 8083 微高地と連続する 1801 微高地と水田が検出された。1801 微高地周辺は全体的に高い場所であったため、可耕地が限られたためか、水田区画が狭いものとなっている。

8059 微高地南側は、微高地に平行する段が検出されたのみで、畦畔の検出は困難であった。水田畦畔の検出方法を他の範囲とは異なる方法で行ったためで、作業レベルが異なったためである。

8059 微高地北側は、先述したとおり、水田として土地利用されていなかった可能性を指摘したが、1801 微高周辺の地形が高いことから、8059 微高地北側は水回りが確保できなかった可能性もあると考えられる。

1888・1889 井戸（図 401）

8059 微高地上で検出された。1888 井戸の平面形は不整形な形状を呈す。長軸 3.4m、短軸 2.8m、深さ 0.7m である。埋土は、水成層の砂層によって埋没する。2－1区や4区で検出された井戸のように溝と接続して、水溜めとして機能した可能性がある。第6－1面で完掘してしまったために 8059 微高地で検出された溝との対応関係は不明な点を残したが、埋土の対比から同時に機能した段階があったと考えられる。1889 井戸の平面形は、不整形な形状を呈す。埋土は、1888 井戸と同じく、水成層の

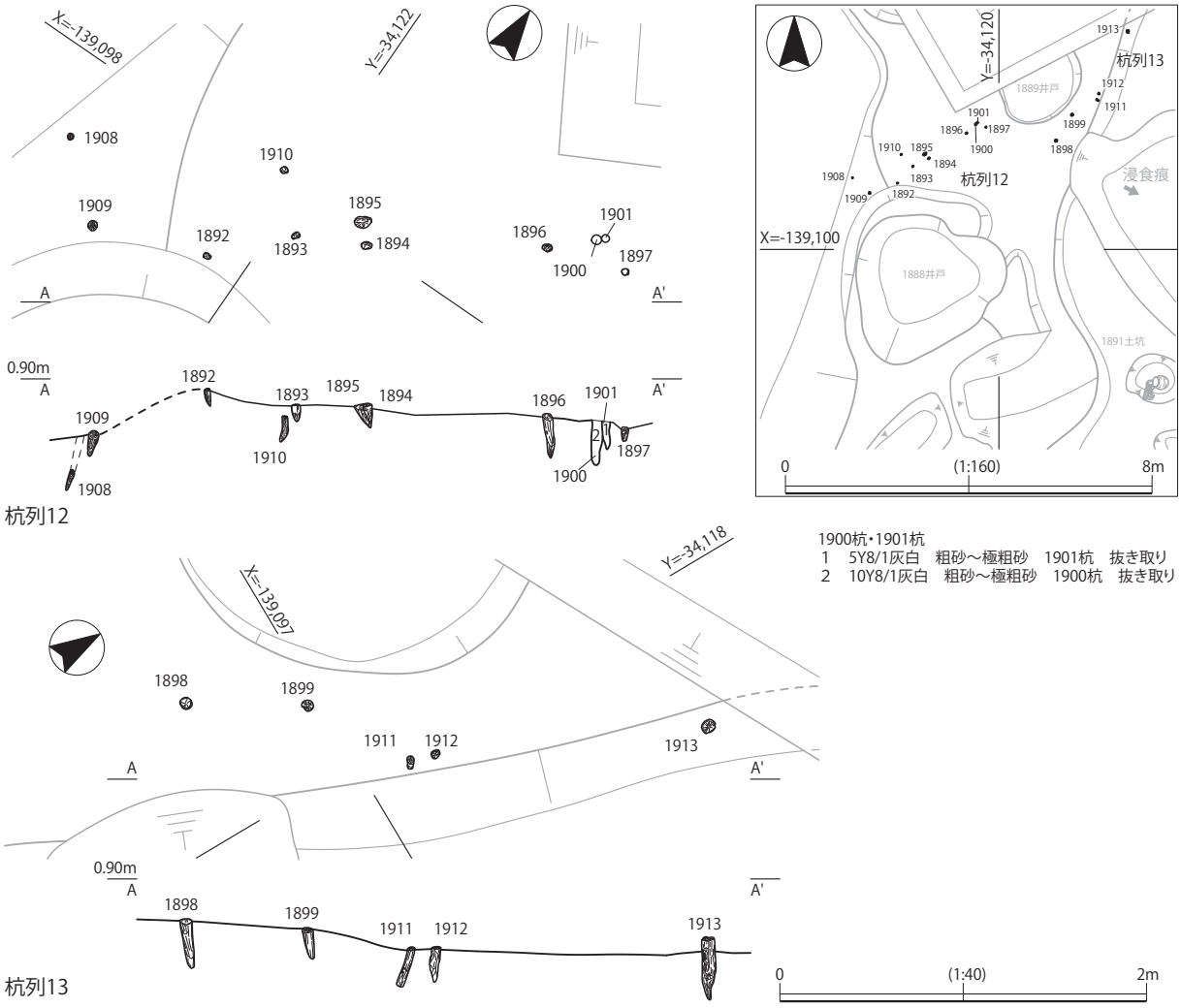


図 403　1－2・2－2区　杭列 12・13 平・断面

砂層である。

8059 微高地では、第６－２面から第６－４ｂ面で溝が確認されており、１－５区 4766 井戸、２－１区 162 井戸、４区第６－４ｂ面の微高地周辺で検出された土坑・井戸などと同様に、水溜めとしての機能があったと考えられる。

8059・8061 微高地（図 401、図版 25）

６－４ｂ層上面の高まりを加工して造成されたもので、６－１～６－３面まで各段階に分けて調査した。両微高地は、１）溝の埋没、２）溝の掘り直し、３）加工時の排土による盛土が繰り返されることによって構築される。8059 微高地では、断面で６回以上の溝の掘り直しが確認された。

杭列 12・13（図 403）

8059 微高地の北東側では、微高地の肩部に沿って杭列 12 と杭列 13 が検出された。土留めのために打設されたものと考えられたが、杭列 12・13 が検出された範囲は、５－２ｂ層による浸食が顕著であった場所で、8059 微高地の南東側には 8059 微高地を越えて形成された５－２ｂ層による浸食痕が残る。そのため、杭列の機能面がおさえられておらず、8059 微高地で検出された溝に伴うシガラミであった可能性がある。この場合、杭列の検出された範囲から、1914 溝に伴う可能性が高いと考えられ、杭列 13 の東側で検出された第６－２面の溝の屈曲部と合致する。

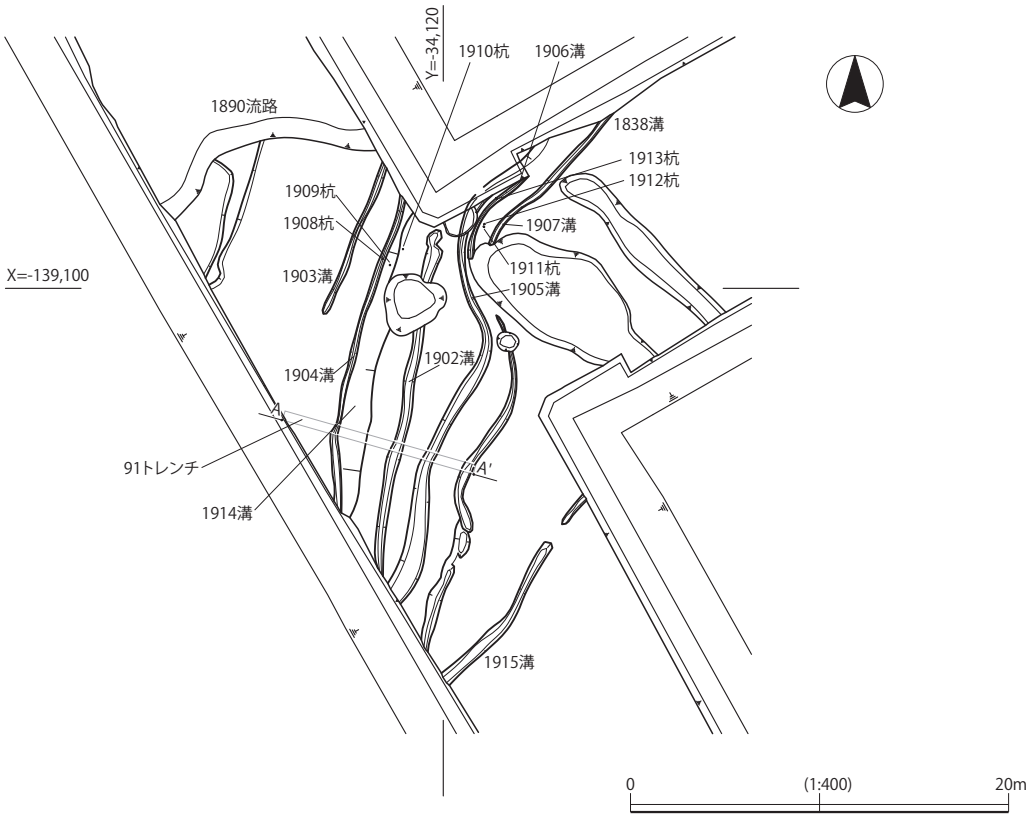


図 404　1－2・2－2区　8059 微高地平面

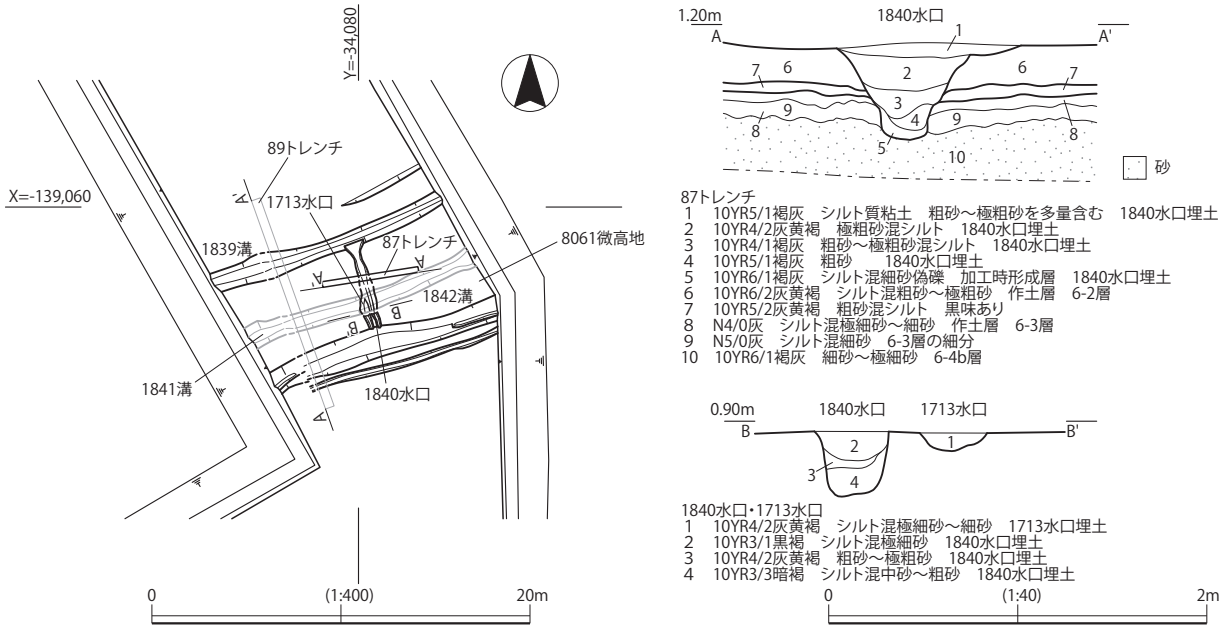


図 405　1－2・2－2区　8061 微高地平面　1713・1840 水口断面

第６－２面（図 404・405、図版 25）

６－１層を除去して検出した遺構面で、６－２層の上面に当たる。６－１層を除去した段階で調査地南西の水田域では、６－４ｂ層が露出する部分があった。第６－２面では、６－２層に帰属する擬似畦畔が検出された。擬似畦畔は第６－１面と同じ位置である。

また、8059・8061 微高地上とその縁辺部では、溝が複数検出された。微高地に平行しており、灌漑用の水路として機能したと考えられる。微高地縁辺部で検出された溝は、低地で形成された古土壌・

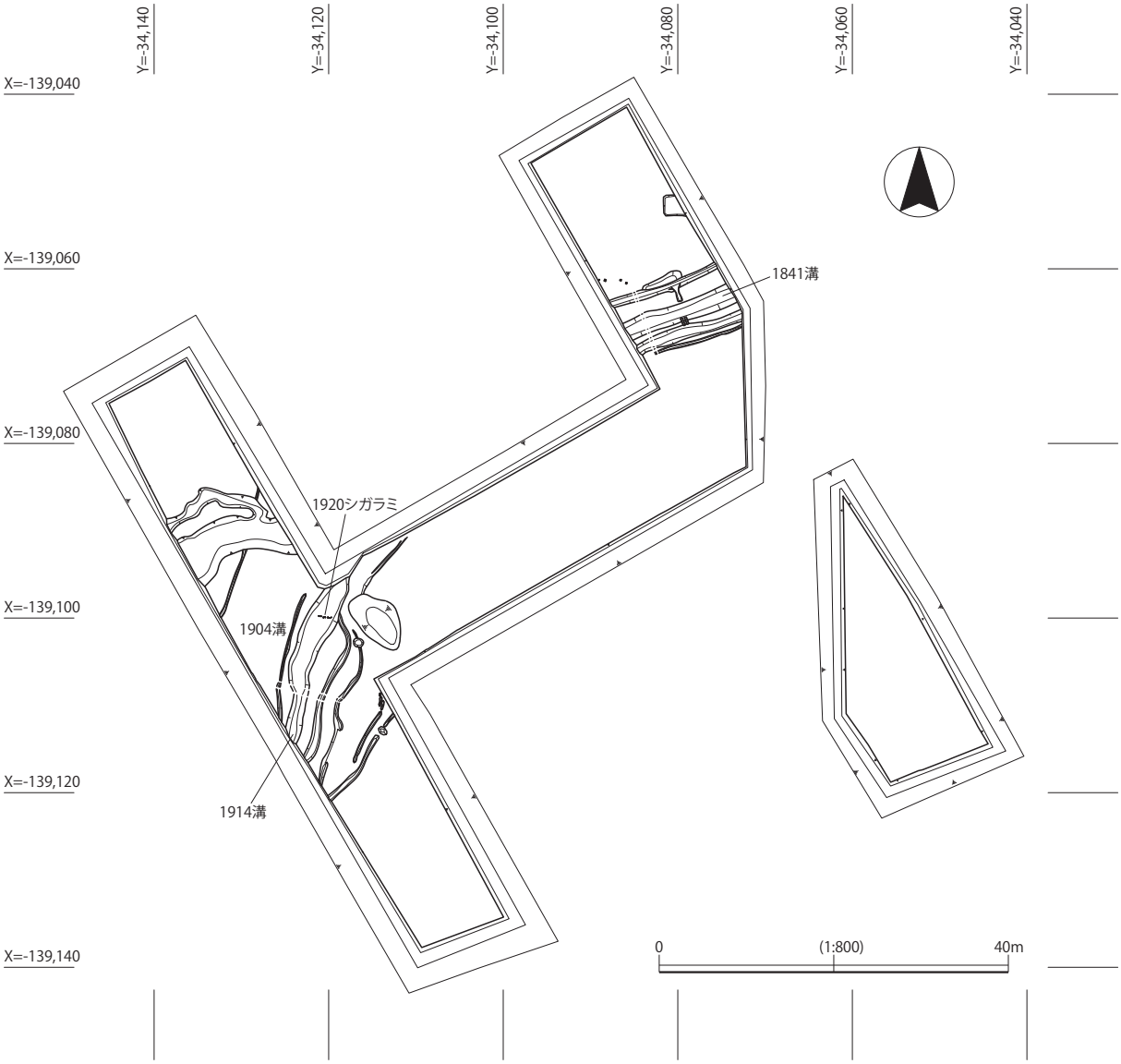


図 406　1－2・2－2区　第6－4ｂ面平面

作土が収斂する場所に当たり、遺構面の正確な帰属は不明である。

8061 微高地は古墳時代に加工が行われたたために上部が失われており、8059 微高地と同段階に形成された地層の対比は困難であったが、1841 溝と 1914 溝、1839 溝と 1914 溝（新しい段階）がそれぞれ同じ時期に機能したと考えられる。また、第6－1面廃絶期には 1839・1902 溝が機能した可能性があると考えられる。

第6－3面（図 405）

8061 微高地内では6－3層が遺存しており、その上面を第6－3面として調査した。6－3層は、2－1区6－4層に対比できる地層で、8061 微高地以外の場所では、堆積が認められなかった。8061 微高地上では、2－1区 294 溝と連続すると考えられる 1841 溝が検出された。

8059 微高地直下の6－4ｂ層上面の高まりは、6－1～6－2層の堆積状況から、時期が新しくなるに従い、高さが増し、幅が狭くなったことが想定される。8059 微高地の南北では、1903・1904 溝と 1838・1915 溝がそれぞれ2条ずつ検出されているが、当該期の2－1区微高地縁辺で検出された溝と同様に、水田域の拡大などに伴って掘削と埋没が繰り返されたものと考えられる。

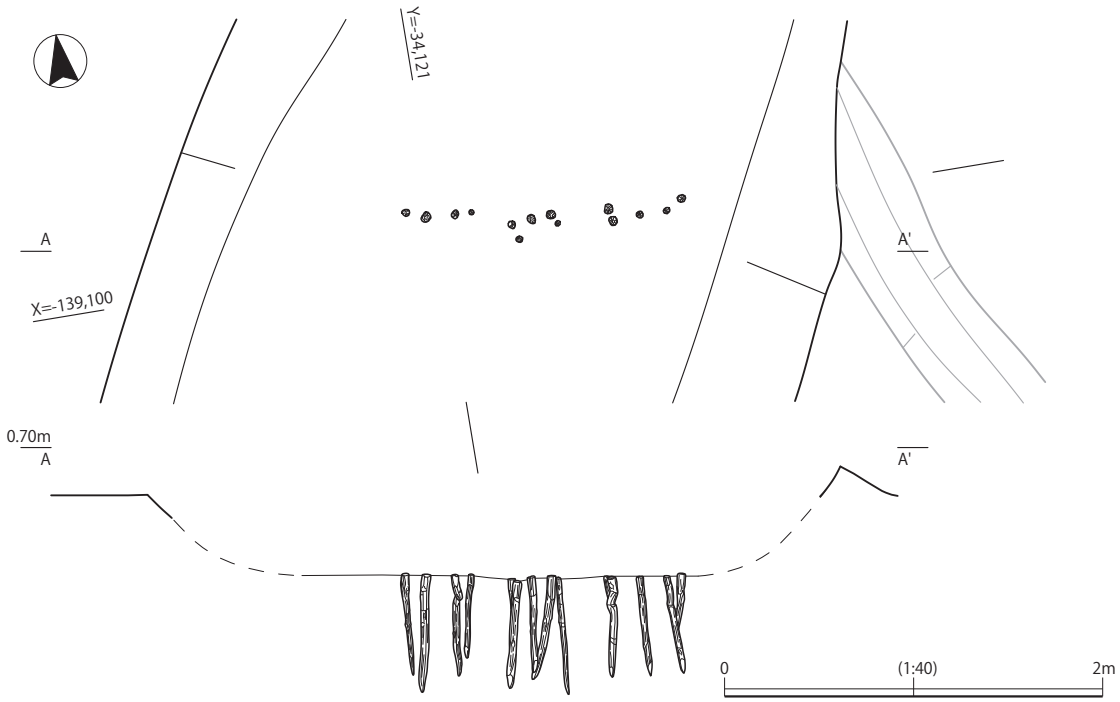


図 407　1－2・2－2区　1920 シガラミ平・立面

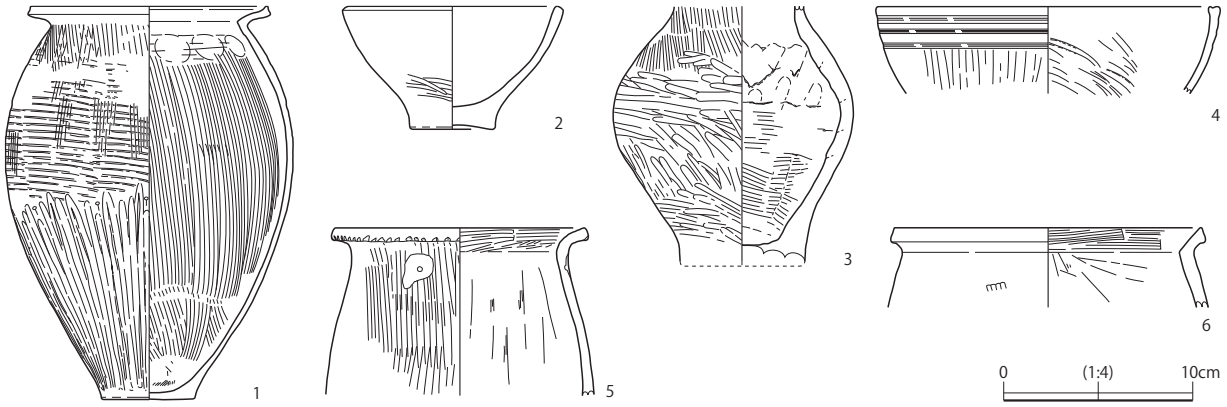


図 408　1－2・2－2区　6－1層他出土土器

第6－4ｂ面（図 406）

6－2・6－3層を除去して検出した遺構面で、6－4ｂ層とした砂層上面に当たる。水田域では、6－2層を除去した段階で、調査地の大半は6－4ｂ層が露出した状態となる。8059・8061 微高地上では、1841・1914 溝が検出された。1914 溝は6－3層に対比できる地層が確認されていないが、2－1・2－2区の当該期の微高地断面の検討から、この段階から機能していたと考えられる。

1914 溝・1920 シガラミ（図 402・404・406・407）

8059 微高地で検出された。1914 溝は、幅 3.5m、深さ 0.4m である。埋土は、水成層の砂層である。1914 溝底面で、溝に直交して杭列が検出されており、同溝に伴うシガラミと判断した。1920 シガラミは、14 本分の杭で構成される。6－4ｂ層掘削中に検出したため、機能面は不明。1914 溝の加工面の幅より狭い範囲で検出されており、1914 溝の新しい段階に機能した可能性が高い。シガラミの南側では、1905・1838 溝が検出されており、溝の機能面には検討を要するが、これらの溝を通じて南側の水田に灌漑を行ったと考えられる。

6－1・6－3・6－4ｂ層出土遺物（図 408、図版 77・99）

6－1層から出土した弥生土器は、図 408 －1～6を図示した。1～4が6－1層、5が6－3層、6が6－4ｂ層から出土。1は甕である。口縁端部がつまみ上げられ、頸部には明瞭な段がある。外面上位はタタキ後、縦方向のハケ、下位はヘラミガキが施される。なお、タタキは粗いハケメのようにも見える。2は鉢である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。3は壺である。4は高坏である。外面はハケ調整の後、口縁部に凹線文が3条施される。内面はハケ調整で仕上げられる。5・6は甕である。5の口縁部は屈曲し、端部は面があり、刻目が施される。

第7－1面（図 409、図版 25）

6－4ｂ層を除去して検出した遺構面で、7－1層とした細砂～中砂混シルト・シルト質粘土の上面に当たる。地形は1－2区は北西方向に低くなっているが、2－2区は中央から南西にかけてはほぼ平坦である。第7－1面では、2－1区と同様に水田が検出された。2－2区では、大畦畔のみが検出されており、小区画の水田は検出されなかった。2－1区の北西側や南西側においても同様の傾向にあり、区画が広い可能性と地震による影響で検出されなかった可能性がある。

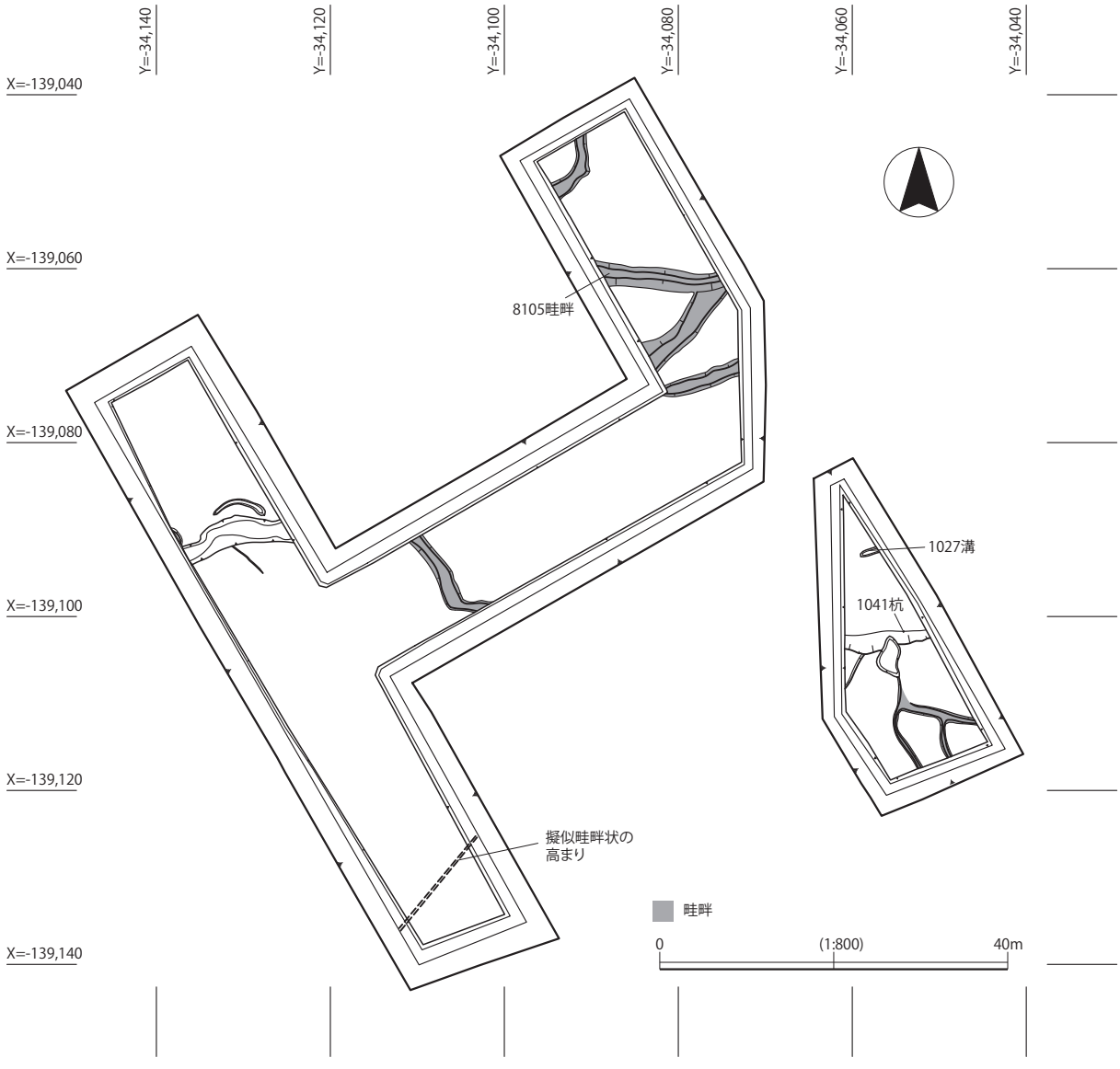


図 409　1－2・2－2区　第7－1面平面

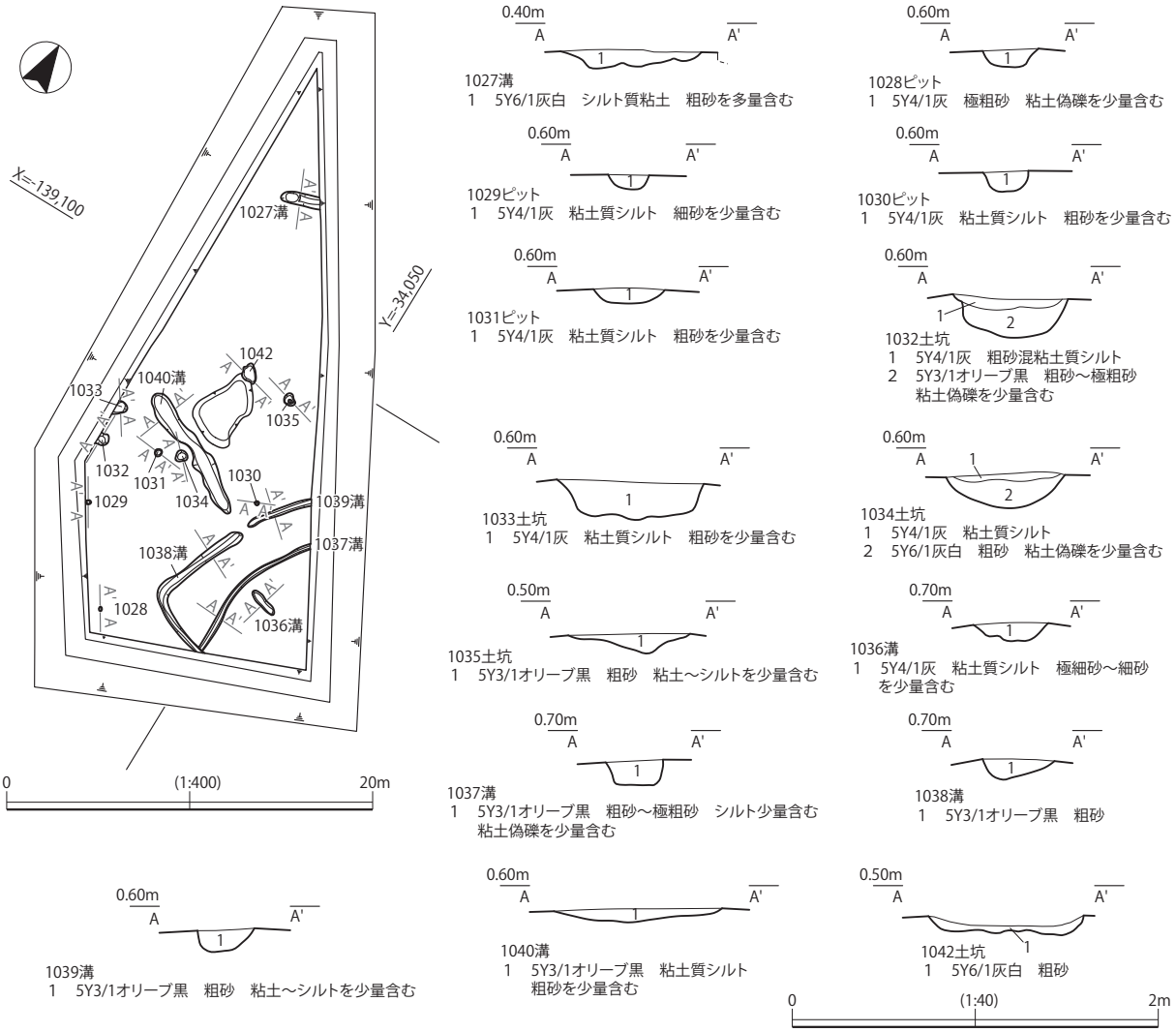


図 410　1－2区　第7－3b 面遺構平・断面

水田（図 409）

1－2区では小畦畔と田面の段が検出された。1－1区と同様、7―3 b 層上面の状況を反映して、周辺より地形が高くなっている。2－2区では、2－1区第7－1面 312 畦畔と連続する 8105 畦畔が検出された。この畦畔周辺で、地形は北西に向かって低くなっており、8105 畦畔の南北で検出された畦畔は、この地形に合わせて配置されたと考えられる。なお、2－2区7層は、7－1・7－2・7－3 b 層に分かれていたが、7－1・7－2層の地層の境界は曖昧であった。そのため、2－1区と異なり、一部を除いて、7－1・7－2層については同時に掘削を行った。

第7－3 b 面（図 410、図版 25）

7－2層を除去して検出した遺構面で、7－3 b 層とした砂層上面に当たる。1－1区7－3 b 層に対比できる地層で、第7－3 b 面では、弥生時代中期前葉の集落が確認された。7－3 b 層によって形成された高まりに集落が立地していると考えられ、1－2区は集落の北西端になると考えられる。

1037・1038・1039 溝（図 410）

1－2区南東で検出された。1037 溝の規模は、幅 0.3m、深さ 0.12m である。1038・1039 溝の規模は、幅 0.4m、深さ 0.1m である。溝埋土は、土壌に由来する粗砂で、水成層は確認されなかった。1037・1038・1039 溝より北西側は緩やかに地形が低くなっており、遺構はそれより北西でも検出されてい

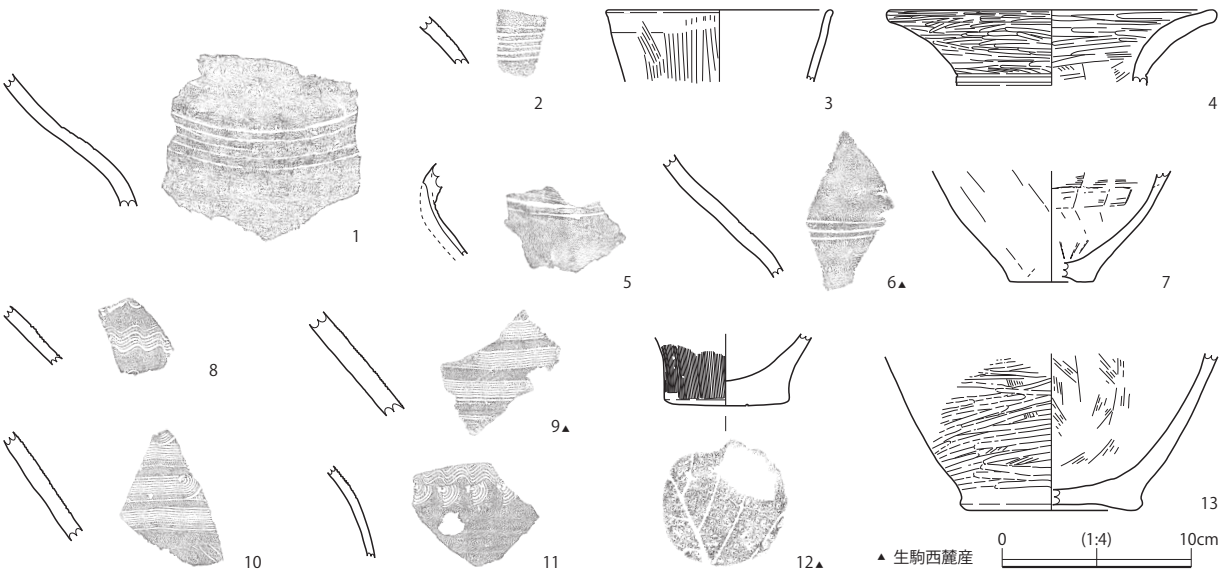


図411　1－2・2－2区　7層出土遺物

るが、集落の境界部に近い場所で掘削された可能性がある。

土坑・ピット（図410）

土坑やピットは、掘り込みが浅いものが多く、出土遺物の量も少量であった。1－1区7層から出土した弥生土器と同時期のⅡ様式の資料が出土した。

7層出土遺物（図411、図版77・99）

7・7－3ｂ層から出土した弥生土器は、図411－1～13を図示した。1～7は2－2区、8～13は1－2区で出土した資料である。なお、先述したとおり、7層は、一部を除いて掘り分けを行っていない。7－1層として掘り分けて掘削したものに8・9・11・12がある。7－3ｂ層から10が出土した。1は壺体部である。外面は板状工具で付けられた段・沈線文4条が施される。2・5・6は壺体部で、2は6条、5は2条、6は3条の沈線文が施される。3は壺の口縁部で、口縁部はわずかに屈曲して、丸くおさめられる。外面はハケ調整、内面は横方向のナデ調整である。4は壺口縁で、頸部に2条の沈線文がめぐる。7は甕で、底部は上げ底気味に仕上げられる。内面はハケ調整である。8～11は壺体部で、外面に櫛描文様が施される。8は櫛描波状文、9は櫛描直線文、10は櫛描流水文、11は波状文と扇形文がそれぞれ施される。12は甕底部で底部には木ノ葉の圧痕がある。13は壺底部で、外面はハケ後ヘラミガキ、内面は板ナデ調整される。このほか、1－1区と同様に、粗いハケが施された甕の細片が出土している。2－2区から出土した弥生土器はⅠ－3～4様式、1－2区から出土した弥生土器はⅡ－2様式に比定される。2－2区では、8層以下の地層が希薄であったために、1－2区より弥生時代前期の遺物が出土したものと考えられる。

第8－1面（図412）

7－1・7－2・7－3ｂ層を除去して検出した遺構面であるが、8－1層は遺存状況が悪く、2－2区南西側の一部と8105畦畔内に認められたのみで、7－1・7－2層を除去した段階で、調査地の大半は10層が露出した状態となる。

第8－1面では、第7－1面8105畦畔直下で、第8－1面においても機能したと考えられる畦畔が検出された。1－1・2－1区では、同段階の水田が良好な状態で検出されており、1－2・2－2区にも水田域は広がっていたと考えられる。この他、2－2区の南西では、土坑が1基検出された。

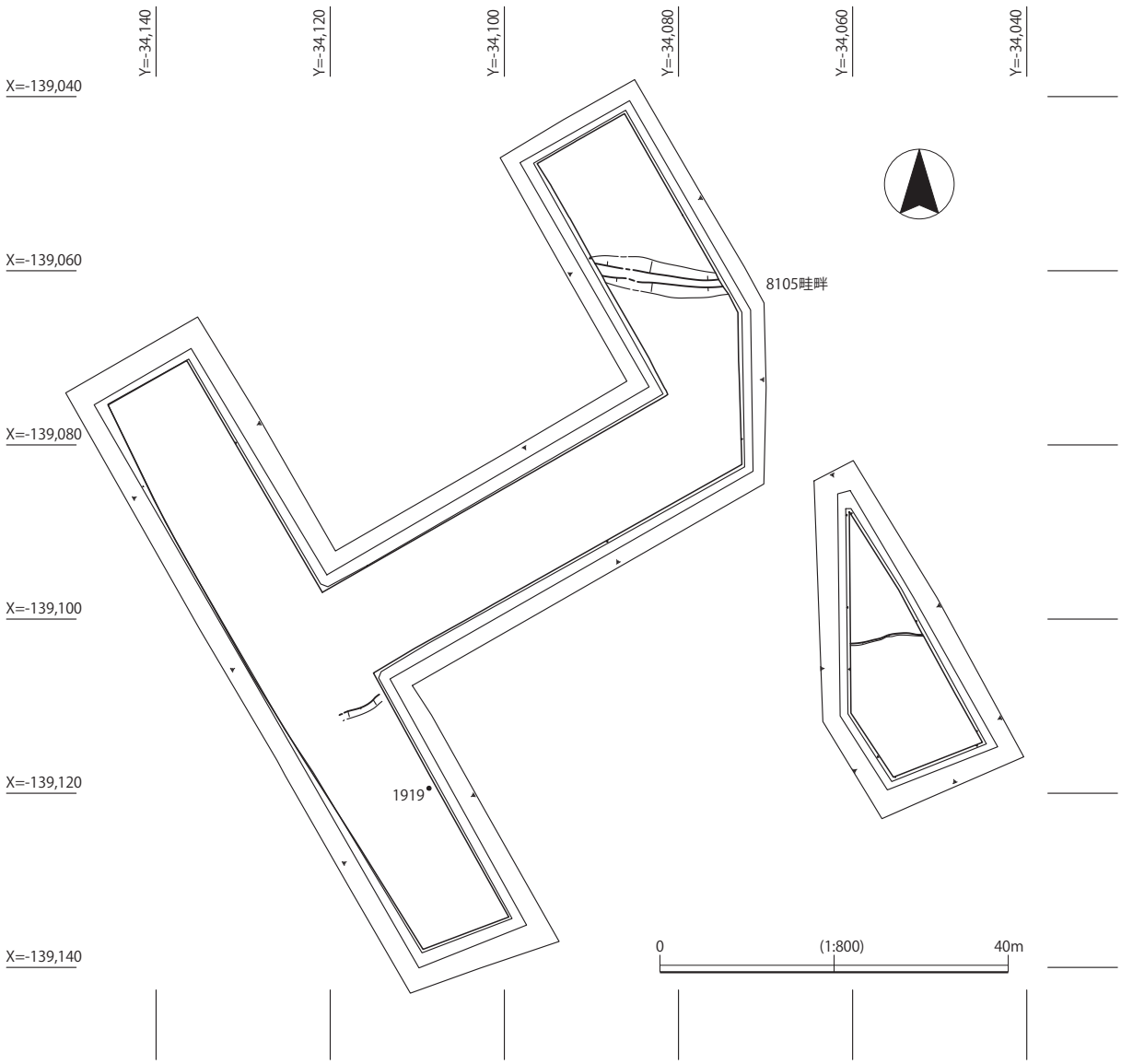


図 412　1－2・2－2区　第8－1面平面

水田（図 412）

調査地北東で、2－1区 372 畦畔に連続する 8105 畦畔（第7－1面と同じ名称を使用）が1条検出された。第7－1面と同じ位置で検出されており、畦畔周辺の8－1層の堆積状況から同段階にも機能したと判断した。

1919 土坑（図 412・413、図版 25・77・99）

2－2区南西で検出された。土坑の直上は7－1・7－2層とした作土によって削平を受ける。平面形は円形で、規模は、直径 0.4 m、深さ 0.2 mである。図 413－1の弥生土器壺が口縁部を欠いた状態で出土した。土坑埋土はブロック土で、弥生土器壺は、埋納された可能性がある。なお、周辺では、1919 土坑以外に、遺構は確認されなかった。図 413－1の壺は、頸部には突帯文1条が貼り付けられ、その上に沈線文が2条以上施される。肩部には沈線文が3条、やや間隔を空けて施される。体部中位には刻目を付けられた突帯文2条が貼り付けられ、その間に沈線文が8条施される。体部外面下位と内面はヘラミガキで仕上げられる。胎土は他の土器と異なり、灰黄色を呈する。播磨・山陰東部地域の搬入品か、その影響下で成立した土器と考えられる。

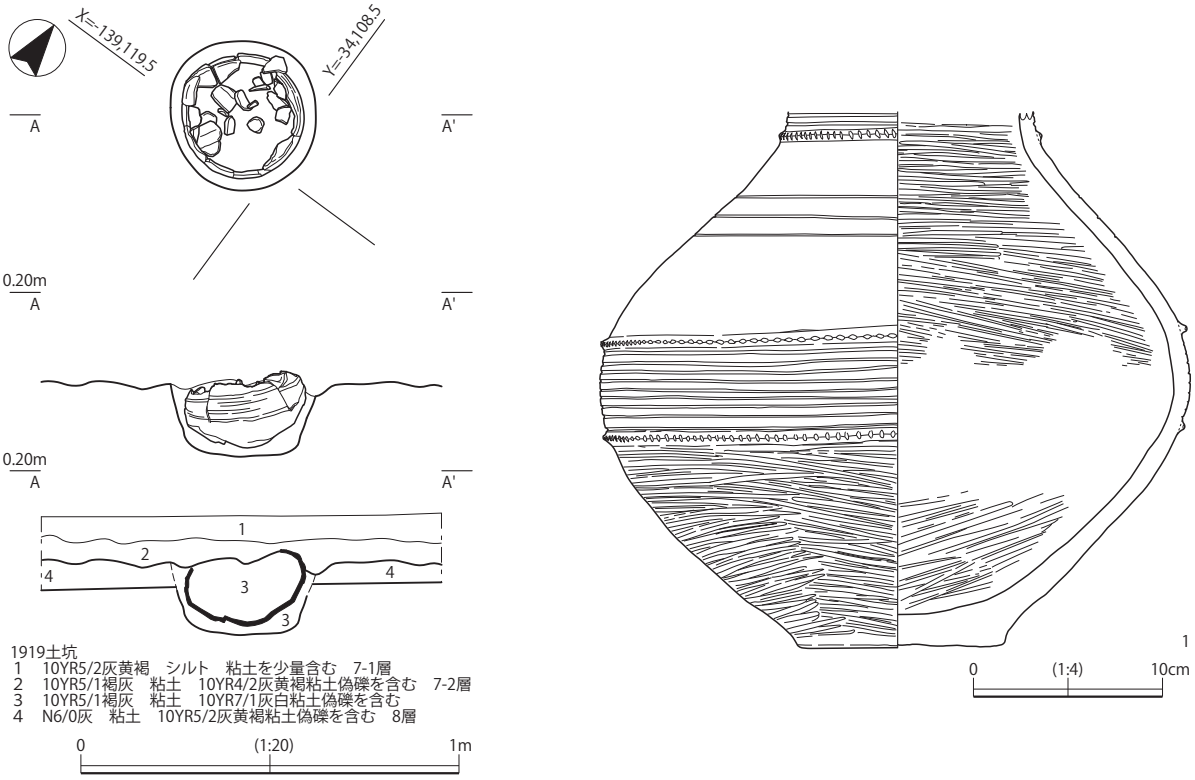


図 413　1－2・2－2区　1919 土坑平・立・断面　出土遺物

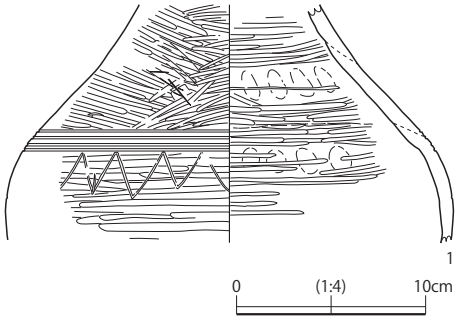


図 414　1－2区　9層出土遺物

第 10 面（図 414）

7・8層を除去して検出した遺構面で、10 層としたシルト質粘土の上面に当たる。地形は、全体に北西方向に低くなっており、標高は -0.2 ～ 0.3 mとなる。1－2区は、8層上面で調査を終了した。遺構は皆無で、第8－1面に帰属する畦畔直下で、田面の段が擬似状に認められたのみである。

なお、9層は1－2区で堆積が確認されており、2－2区では希薄であった。2－2区では、7－1・7－2層に含まれる砂礫が9層に由来すると考えられるような場合があった。

なお、1－2区では、トレンチ断面を精査した際に、図 414 －1の弥生土器壺が9層から出土した。1の外面はヘラミガキの後、ヘラ描き沈線文が4条施される。沈線文の直下には、貝殻腹縁を用いたと考えられる、山形文が浅い沈線文で表現される。内面はナデで成形した後、ヘラミガキされる。Ⅰ－3～4様式に位置付けられる。

第７項　４区

４区では第３－１面まで機械掘削し、以下第 10 面直上まで人力掘削した。なお、第１面から第３－１面までは、機械掘削で地層の掘削を進めながら精査作業を行い、各遺構面の記録を残した。

第３－１面（図 415・416、図版 26）

２層を機械掘削して検出した遺構面で、３－１層とした粗砂混シルトの上面に当たる。調査地北東の３－１層は、第５－２ｂ面の微高地を形成する地層を母材とするため砂質である。一方、南西は微高地周辺に堆積する地層を反映して泥質であった。

第３－１面では２層に帰属する擬似畦畔が検出された。第２－１面から第２－３面においても、同じ位置で擬似畦畔が検出されていたが、擬似畦畔では作土基底面の畦畔直下の高まりや、畦畔際の加工痕（段）は認められなかった。３－１層を掘削中､完形に近い瓦器椀が出土した。図 416 － 15 の瓦器椀で、Ⅱ－１～２型式に位置付けられる。瓦器椀は、出土地点の記録前に遺物を取り上げており、正確な位置は不明である。調査時に確認した出土地点は、X=-139.994、Y=-34.132 周辺であった。３－１層を掘削中に出土した土器で、池島・福万寺遺跡などの事例にみられるように、ピットに納められた可能性がある。３－１層とした作土の下限を示す土器と考えられる。

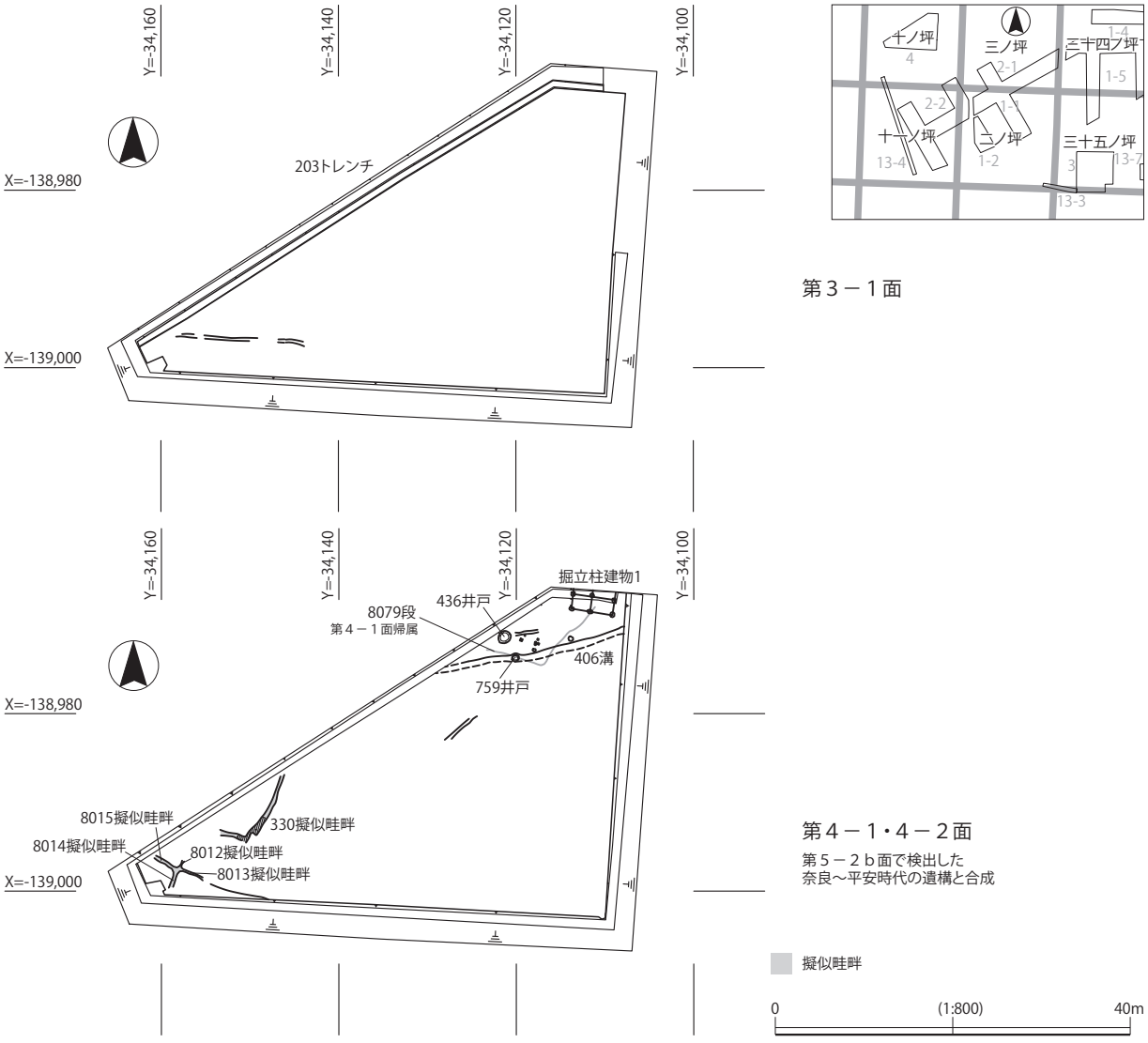


図 415　４区　第３－１・４－１・４－２面平面

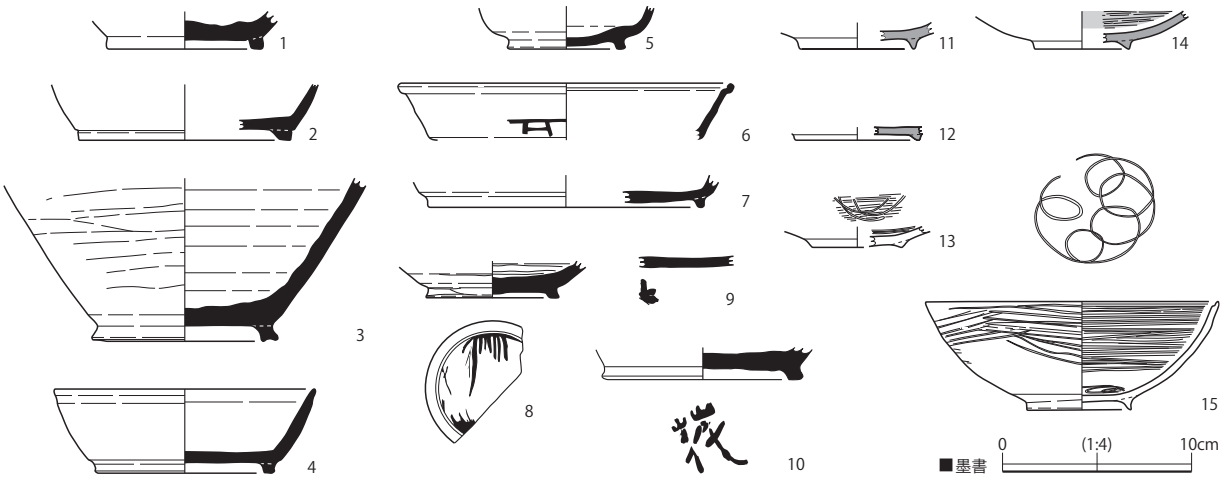


図 416　4区　3－1・4－1層他出土遺物

第4－1面（図 415、図版 26）

3－1層を除去して検出した遺構面で、4－1層とした極細砂混シルト質粘土の上面である。この段階で、調査地北東部と南西部、中央部の一部では5－2b層が露出する。田面の段と考えられる、5－2b層と4－1層の地層境界部（8079 段）が調査地北東側で検出された。

3・4層溝出土遺物（図 416、図版 101）

3－1～4－1層から出土した遺物の内、図 416－1～5・8・10～15 を図示した。8は4－1層、2～5・10は4－2層、1・13・14・15は3－1層から出土した。1は壺底部である。2・4は須恵器坏身である。3・5は須恵器壺底部である。3の外面はヘラ状工具によるナデ、内面は回転ナデ調整される。8は須恵器埦である。体部に明瞭な稜を有する稜埦である。底面に墨書があり、縦・斜めの線と、高台に沿った線が墨書され、内容は不明である。当初、筆ならしの可能性を考えたが、高台内側には墨痕がなく、その可能性は低い。10は高台見込みに「筏」ないし「茂」と墨書される。

11・12・14は黒色土器A類椀である。いずれも細片である。4層の下限を示す資料と考えられ、平安時代中期から後期に位置付けられる資料である。4層からはこれ以外に古墳時代の遺物が多量に出土しており、4－1層直下の古墳時代集落に帰属し、図 442・443 に図示した。

13・15は3－1層から出土した瓦器椀である。13は見込みに連結輪状文の暗文が施される。Ⅱ－3型式。15は完形品に近い瓦器椀で、畦畔・埋納土坑等に伴う可能性が高い資料である。外面は分割性のあるヘラミガキ、内面は密なヘラミガキ、見込みには連結輪状文の暗文が施される。Ⅱ－1～2型式に比定される資料である。

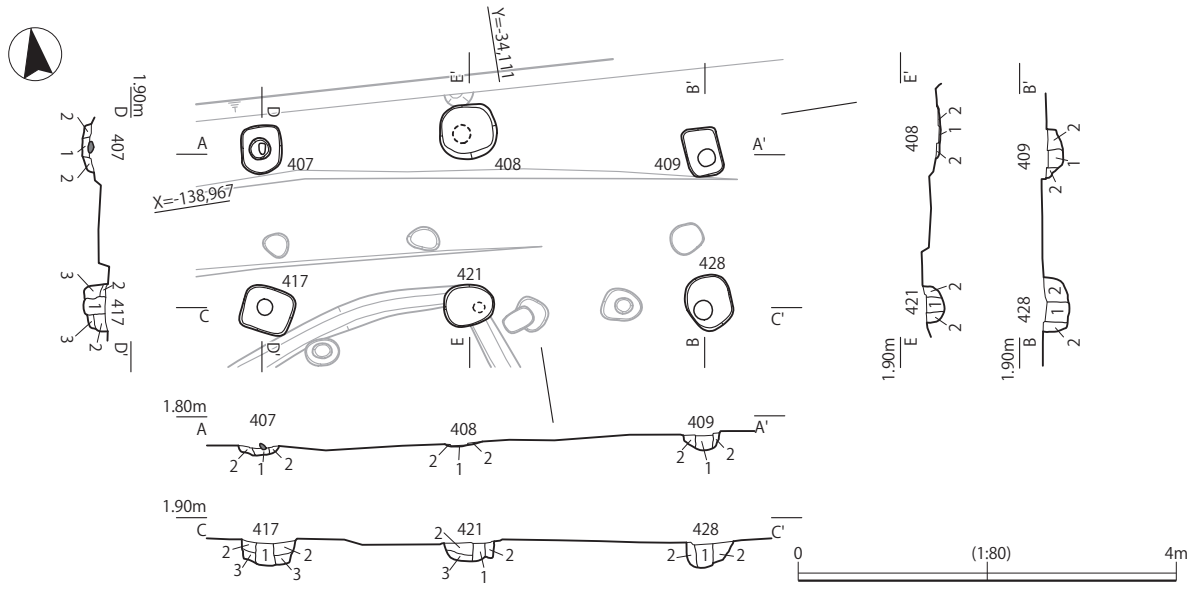
第4－2面（図 415）

4－1層を除去して検出した遺構面で、5－2層としたシルト質粘土の上面に当たる。第4－2面では、4－2層に帰属する擬似畦畔が検出された。なお、図 415 に第5－2b面で検出された奈良～平安時代の遺構を合成し、第4－2面で報告を行う。

水田（図 415）

第5－2b面で検出された 632・636 水田は、4－2層下面に帰属する。632・636 水田に伴う畦畔の痕跡が、330・8013～8015 擬似畦畔である。

330・8013～8015 擬似畦畔内には、金床石に使用した可能性のある台石3点が出土した。古墳時代の集落があった場所を水田として土地利用するに当たり、耕作の障害となるものが畦畔内に集められ



掘立柱建物1
407
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土混粗砂偽礫を少量含む　裏込め
408
1　N4/0灰　シルト質粘土　抜き取り
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　裏込め
409
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土混粗砂偽礫を少量含む　裏込め
417
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
3　N4/0灰　粗砂混粘土　裏込め
421
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
3　N4/0灰　粗砂混粘土　裏込め
428
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め

図 417　4区　掘立柱建物 1 平・断面

たと考えられる。4－2層中から古墳時代の遺物が多数出土していることから、水田が営まれた段階に周辺の地形に対し、相当の改変が加えられたことが想定され、台石はその際に集められたものと考えられる。

水田の時期は、調査時、古墳時代の遺物が多量に出土していたことから、第5－2ｂ面で検出した集落と同時期と判断した。改めて、4－1・4－2層の遺物を検討した結果、黒色土器Ａ類椀の平安時代後期を下限とすることが判明し、2－1・2－2区3－1層に対比できる地層と判断した。

掘立柱建物 1（図 417・421）

436 井戸の南東で検出された。総柱建物で、建物構造は南北２間以上×東西２間である。北側は調査地外にあるため全容は不明である。規模は、南北 2.2 m以上、東西 4.6 mである。柱穴の平面形は、方形ないし方形を指向した形状である。古墳時代の土師器・須恵器の微細な破片が出土しているが、時期の詳細は不明である。柱穴の平面形が方形ないし方形に近いことや、436・759 井戸が近接することから、平安時代以降に建てられた可能性が高いと判断した。

406 溝（図 416、図版 101）

掘立柱建物 1 の南側で検出された。規模は、幅 0.8 ～ 1.0 m、深さ 0.1 mである。埋土は、極細砂混シルトを主体とする。先述のとおり、調査地の西側及び東側で設定したトレンチでは、南側肩部は不明確で、田面の段になる可能性がある。406 溝として掘削した埋土から、図 416 －6・7 の須恵器が出土した。9 は 406 溝に接して掘削を行った 203 トレンチから出土しており、406 溝に帰属する可能性が高いと考えられる。6 は須恵器坏身で、外面に墨書が認められる。判読不可。口縁部は屈曲して、端部は丸くおさめられる。平安京Ⅰ～Ⅱ期。7 は須恵器坏身で、細片を図化。全体に磨滅する。9 は須恵器坏身の底部片である。底部見込みに「大」と墨書される。

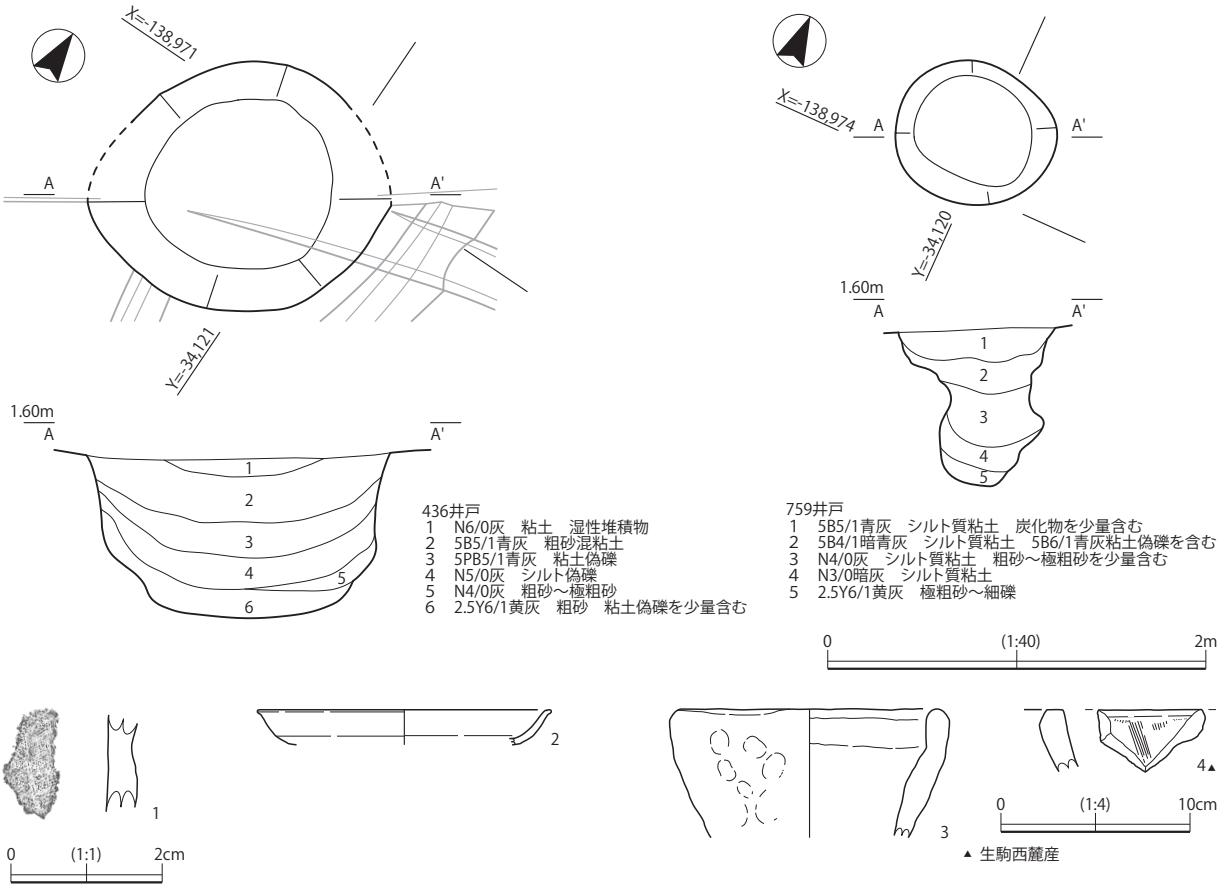


図 418　4区　436・759 井戸平・断面　出土遺物

436 井戸（図 415・418）

掘立柱建物 1 の西側で検出された。平面形は円形、規模は直径 1.6 m、深さ 0.8 mである。埋土は、下層が崩落土と考えられる砂層、中層がブロック土、上層が湿性堆積物の粘土である。

436 井戸から出土した遺物は、図 418 － 1 ・ 2 を図示した。 1 は製塩土器である。外面はナデ、内面には布目圧痕が残る。 2 は土師器皿で、細片を図化。口縁部は外反し、端部は丸くおさめられる。製塩土器は、奈良時代後期から平安時代中期に位置付けられるものである。土師器皿は平城Ⅳ～Ⅴ型式に比定されるものか。

759 井戸（図 415・418）

436 井戸の南側で検出された。素掘りの井戸で、平面形は不整な円形、規模は直径 0.8m、深さ 0.8m である。759 井戸からは出土した遺物は、図 418 － 3・4 である。 3 は製塩土器である。厚手の器壁で、粗い胎土を用いられる。外面は指押さえに近いナデ調整、内面は横方向にナデ調整される。時期は奈良時代に位置付けられる。 4 は移動式カマドの破片で、掛口端部である。生駒西麓産で、混入品である。

第 5 － 2 b面（図 419、図版 26）

5 － 1 層は調査地南西側の一部に堆積が認められたのみで、 4 層を除去した段階で 5 － 2 b層とした砂層の上面となる。地形は、北東側の遺構集中部が最も高く、南東側の水田が検出された範囲に向かって低くなる。ただし、奈良時代以降の作土層である 4 層によって調査地中央は削平を受けており、 4 区周辺の地形を考慮すると、遺構が集中した範囲全体が微高地であったと考えられる。

なお、この微高地は、第 6 － 1 面とした弥生時代中期後葉に形成された地形の傾斜を反映したもので

図 419　4区　第５－２ｂ面平面

ある。微高地南西側を中心に５－２ｂ層とした泥層が堆積したため、地形が極端に変化しなかったと考えられる。

以下では、微高地の範囲が広く、多数の遺構が検出されたため、古墳時代集落の調査成果を 467 溝で北東側と南西側に２分割して報告を行う。なお、古代に帰属すると考えられる遺構については、第４－２面で報告した。

微高地北東側の調査（図 419）

調査地北東隅は４－１層調査時から５－２ｂ層が露出しており、周辺より高い場所であったことが分かっていた範囲に当たる。４－１・４－２層によって、微高地は削平を受けているが、406 溝北側では、竪穴建物が３棟検出されたほか、竪穴建物の主柱穴のみの可能性がある掘立柱建物６が検出された。

南西側の微高地と同様、古代以降の削平が顕著な場所で、同範囲に堆積する４－１・４－２層からは、古墳時代の土師器・須恵器とともに、滑石

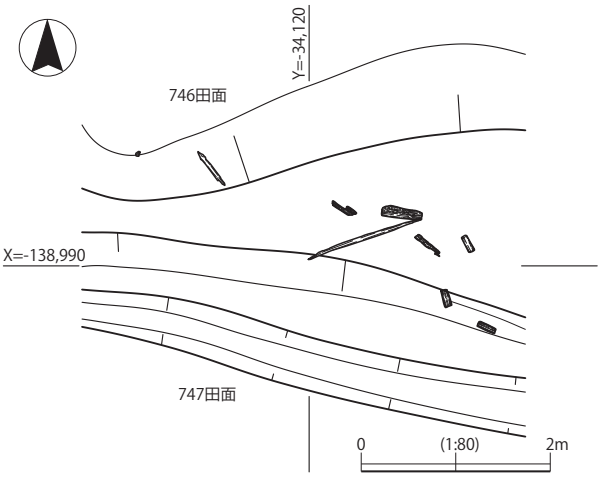


図 420　4区　8067 擬似畦畔遺物出土状況平面

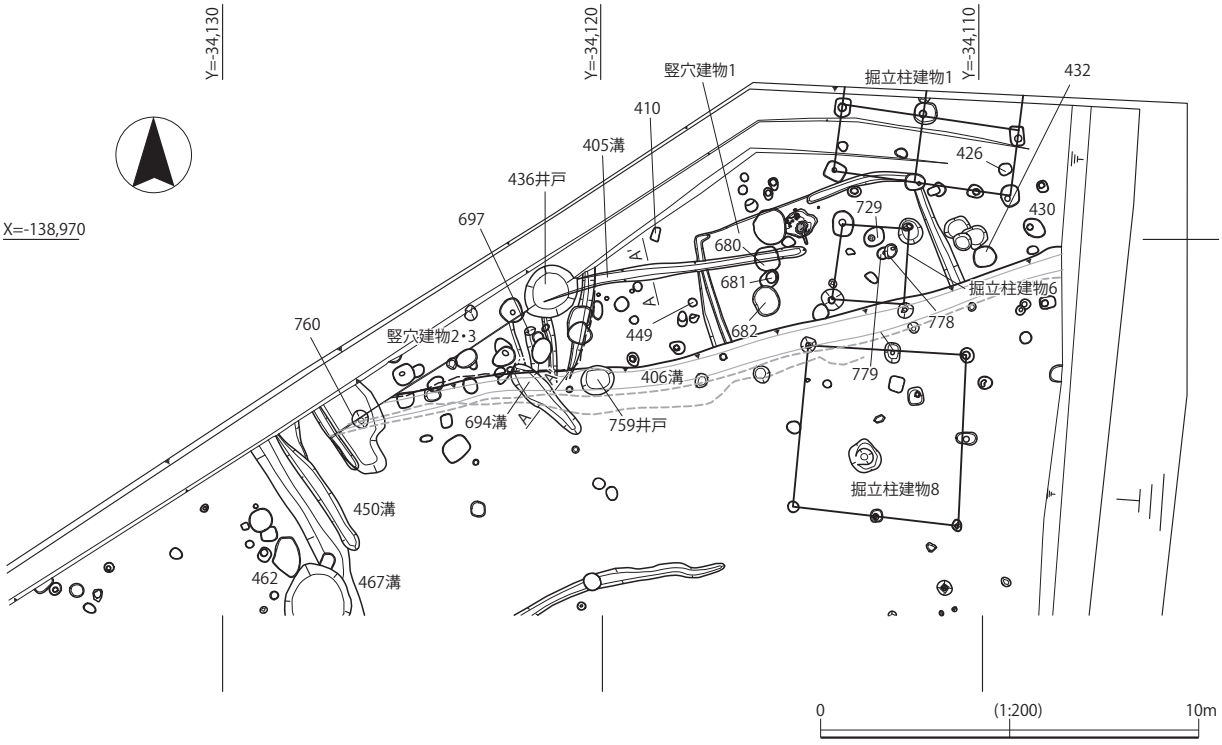


図 421　4区　第５－２ｂ面北東側平面

製石製品・ガラス小玉が出土した。滑石製石製品には、子持勾玉、有孔円板、臼玉、石製品加工前の素材剥片が含まれる。中でも、臼玉は土壌洗浄した中から多量に出土しており、今回の調査では最も多い出土量であった。滑石製石製品が出土した範囲（757 井戸西側）は集落が存在したと考えられ、土器や石製品は、本来、竪穴建物などの遺構に伴うものであった可能性が高いと考えられる。

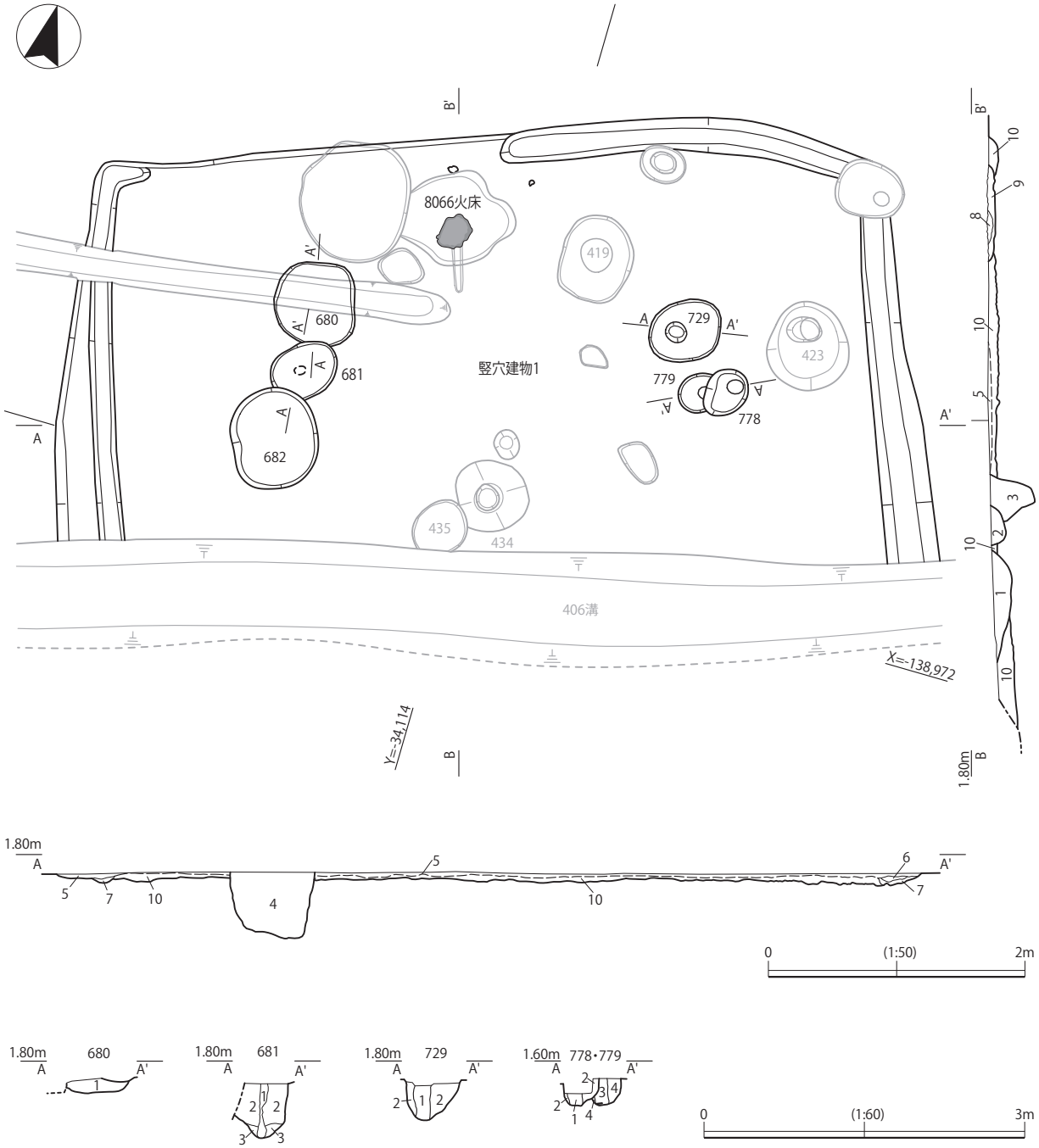
調査地南東には、467 溝により灌漑を行った水田があり、擬似畦畔が２条検出された。上部の作土を除去した段階で、ひと回り小さい区画がそれぞれ検出されており、水田開発当初は一つの区画が狭かったことが判明している。水田の時期は、出土した須恵器から古墳時代中期後葉（TK23 ～ TK47 型式）の時期が想定される。

水田に水を供給した 467 溝の廃絶が TK47 型式以降と考えられることや、467 溝を切る 487 溝からは、MT15 ～ TK10 型式と TK209 型式の須恵器細片が出土していることから、TK10 型式の段階には水田は廃絶されたと考えている。また、8067 擬似畦畔内には、木片が畦畔内に集められ状態が検出された。２－１・２－２区の畦畔においても同様に、木片が畦畔内に集められた状況が検出されており、耕作時に障害となるものが廃棄されたと考えられる。

竪穴建物１（図 421 ～ 424、図版 26）

調査地北東側、406 溝の北側で検出された。４－２層を除去した段階で火床が確認されており、竪穴建物が想定されたが、土壌化や４層による撹乱により、５－２ｂ層をやや削り込んだ状態で竪穴建物１を検出した。南側は削平されており全容は不明である。

西側の壁溝は、当初確認した平面形より内側で検出されており、主柱穴が重複して検出されていることから、建て替えがあったと考えられる。後述する掘立柱建物６についても、竪穴建物であった可能性が高いと考えており、竪穴建物１周辺に集中して、継続的に竪穴建物が建てられていた可能性がある。直下は第６－１面 1534 畦畔が検出された場所に当たり、竪穴建物１周辺は６－１層上面の状況を反映



竪穴建物1
1　N4/0灰　粘土　406溝埋土
2　5Y5/1灰　粗砂混シルト　435柱穴埋土
3　N4/0灰　粘土　434柱穴埋土
4　5G4/1暗緑灰　粗砂混粘土　N5/0灰粘土偽礫・5B5/1青灰粘土偽礫・炭化物を少量含む
　682柱穴埋土
5　10BG5/1青灰　粘土質シルト
6　10BG4/1暗青灰　細砂混シルト　壁溝埋土
7　10BG5/1青灰　粘土質シルト　壁溝埋土
8　2.5YR4/6赤褐　粘土(焼土)　火床
9　5B5/1青灰　粘土　火床
10　5BG4/1暗青灰　粘土　床面・加工時形成層

680
1　5B4/1暗青灰　粗砂混粘土　680土坑埋土

681
1　5Y5/1灰　粘土　5G5/1緑灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　柱痕
2　N5/0灰　粘土　5G5/1緑灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　裏込め
3　5Y5/1灰　粗砂混粘土　裏込め

729
1　N4/0灰　粗砂混粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　N5/0灰　粗砂混粘土　5B6/1青灰粘土偽礫・5G4/1暗緑灰粗砂混粘土偽礫を少量含む
　裏込め

778・779
1　N4/0灰　粘土　粘性強い　柱痕　778柱穴埋土
2　N5/0灰　粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を多量含む
　裏込め　778柱穴埋土
3　N4/0灰　粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を含む
　下部粘性強い　抜き取り　779柱穴埋土
4　10GY5/1緑灰　粘土　N5/0灰粘土偽礫を含む
　裏込め　779柱穴埋土

図422　4区　竪穴建物1平・断面

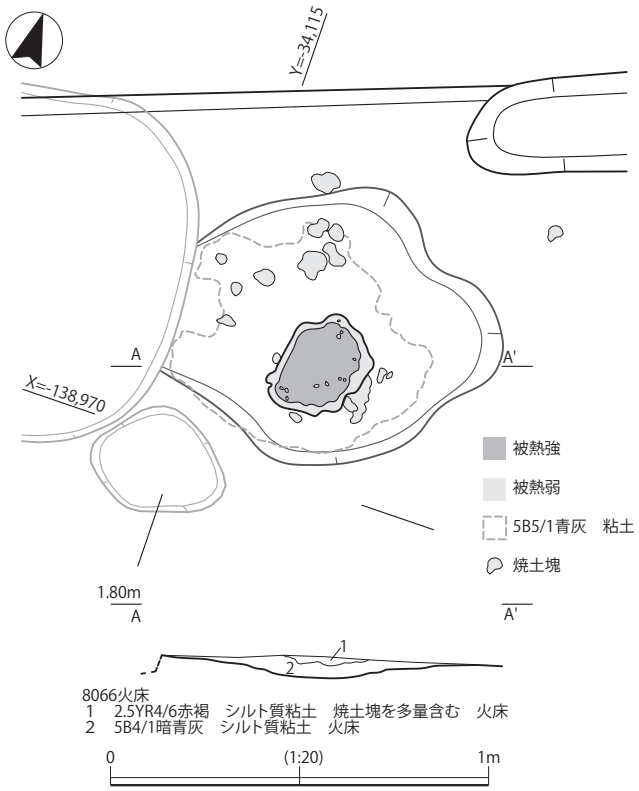


図 423　4 区　竪穴建物 1　8066 火床平・断面

して、地形的に高く、基盤層が砂質であったことから、居住に適した場所であったと考えられる。

竪穴建物 1 の平面形は方形を呈し、規模は北辺で 6.3 mである。壁溝は、加工面の形状がかろうじて遺存したもので、規模は幅 0.2 m、深さ 0.04 mである。北辺の西側は遺存状況が悪く、検出されなかった。西側の竪穴建物の建て替えに伴う段は、加工面の状況を示している可能性が高いと考えられる。主柱穴は建て替え前を含めて 6 基を候補としており、切り合い関係から、680・729 柱穴、681・779 柱穴、682・778 柱穴の組み合わせで機能したことが想定される。ただし、680 柱穴は、北側に偏する位置で検出されており、カマドにも近いことから竪穴建物 1 の構造と関係しない可能性がある。

竪穴建物 1 に伴うカマドは、8066 火床と火床の加工時の平面形が検出された。本体及びカマド機能時形成層の炭化物を含む地層（以下、炭層）は確認できなかった。火床の平面形は不整な円形を呈し、規模は直径 0.25 m、深さ 0.1 mである。

火床は、周囲を大きく掘りくぼめてから、シルト質粘土で成形した後、同じ土質のシルト質粘土と焼土塊を突き固めて構築されたと考えられる。上部に認められた焼土塊は再利用されたもので、カマド機能時の被熱より硬化面が形成される。なお、火床周辺では、炭層を確認できなかったが、粘土や焼土塊が分布する状況が検出されており、直上に堆積する 4 層によって、撹拌を受けたものと考えている。火床周辺で検出された粘土はカマド本体に由来するものと考えられるが、カマド上部構造が復元できるような分布は示さなかった。

竪穴建物 1 の加工面は、北西側が高く、東側に向かって緩やかに低くなる。カマドは、北西側の高い部分のやや東寄りに構築されたと考えられる。加工時の工具痕は確認できなかった。

竪穴建物 1 から、図 424 － 1 の須恵器高坏脚部が出土した。短脚で長方形の透孔が穿たれる。TK208 ～ 23 型式に比定される。

竪穴建物 2・3（図 421・425、図版 26）

竪穴建物 1 の南西側で検出された。段状に落ち込む部分を掘り下げ、壁溝が検出されたことにより、竪穴建物と判断した。竪穴建物 2・3 は、203 トレンチを設定した場所に当たることや、南側が削平されていたことにより、詳細な検討を行うことができなかった。

竪穴建物 2・3 は、竪穴建物 3 の加工面まで掘削して柱穴が検出された。竪穴建物 2・3 への帰属が不明であったため、柱穴と柱穴になる可能性のある土坑断面を図 425 に掲載した。竪穴建物 2・3 南側で、主柱穴となる可能性がある柱穴は検出されなかったたため、竪穴建物 2・3 の南東隅を今回の調査地で検出したと考えている。なお、これらの柱穴の中には、掘立柱建物を構成する柱穴が含まれる可

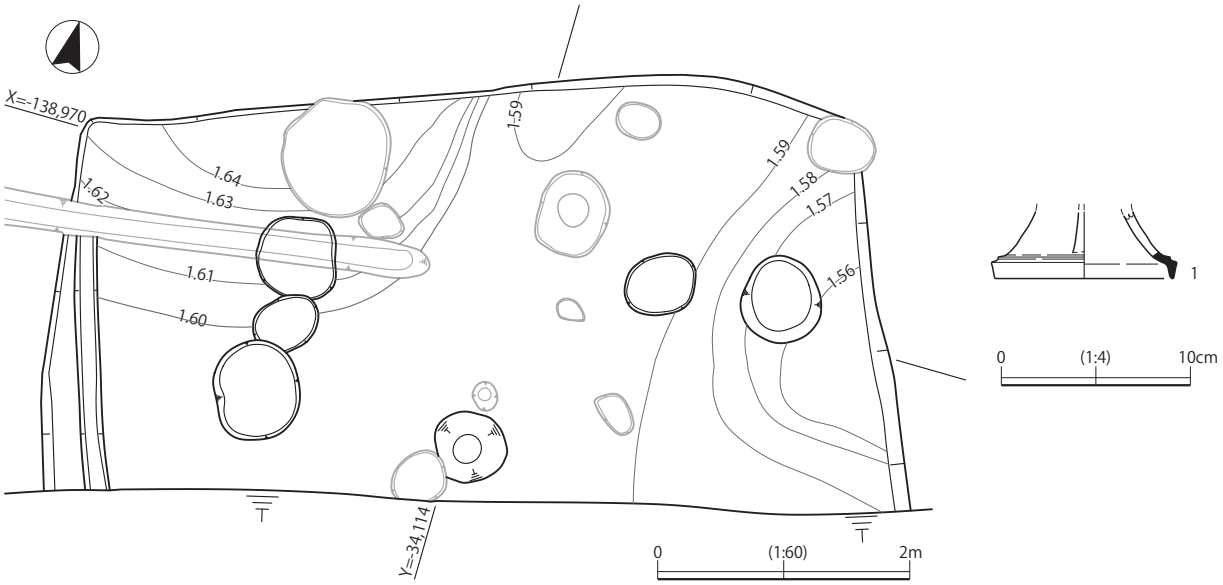


図 424　4 区　竪穴建物 1 加工面平面　出土遺物

能性があるが、今回の調査範囲で結論は得られなかった。

竪穴建物 2 は、加工面で壁溝状の凹みが検出された。断面において、溝としての加工が確認されなかったため、壁溝と断定するには至っていない。カマドは検出されず、埋土中にも炭化物や焼土塊等は含まれなかった。

竪穴建物 3 は、壁溝の一部が検出されたのみで、規模は不明である。加工面まで下げた段階で、壁溝が検出された。カマドは確認されておらず、埋土中に炭化物や焼土塊は含まれなかった。加工面では、東側の壁溝から西に 0.3 m離れて南北の高まりが検出された。加工時に畦畔状に掘り残された部分と考えられるが、その機能は不明である。

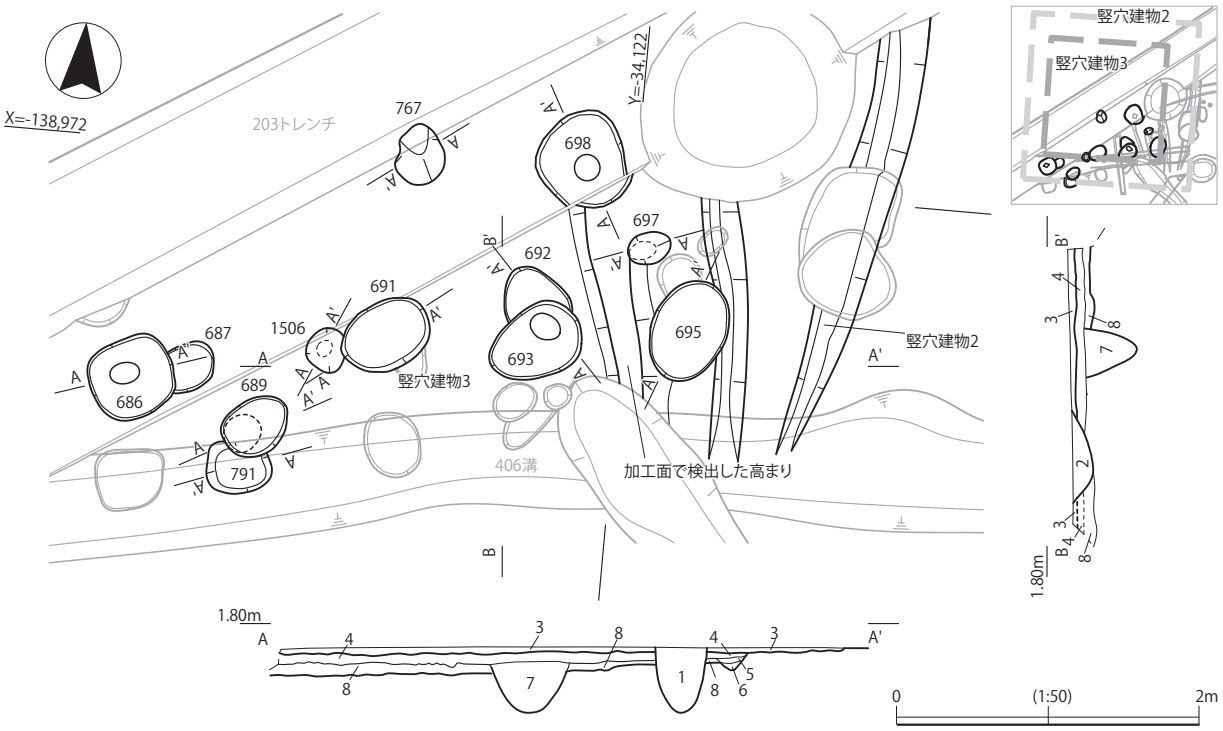
竪穴建物 2 から出土した土器は、図 425 － 2 ～ 4 である。 2 は須恵器坏蓋、 3 ・ 4 は須恵器坏身である。TK47 ～ MT15 型式。竪穴建物 3 から出土した土器は、 1 ・ 7 ・ 8 である。 1 は須恵器坏蓋である。TK47 型式。 7 は須恵器壺口縁部、 8 は製塩土器である。

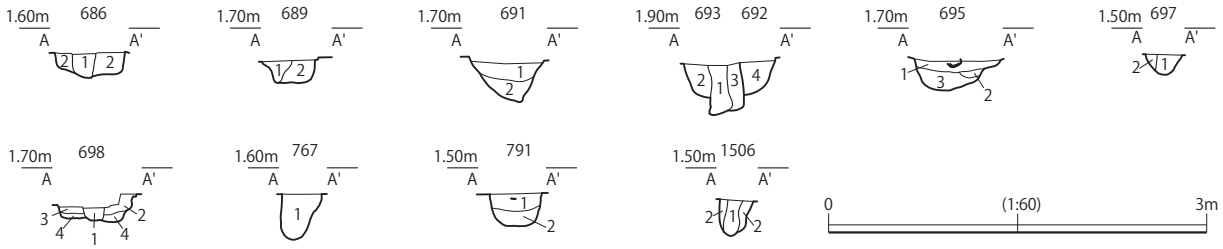
5 ・ 6 は須恵器坏蓋で、695 土坑から出土した。口縁部を上に向けた状態で出土しており、意図的に埋納されたものと考えられる。柱の抜き取り穴の可能性がある。TK47 ～ MT15 型式。 9 は土師器甑で、689 柱穴から出土した。外面はハケ調整、内面は磨滅しており、調整は不明。

竪穴建物 2 ・ 3 は古墳時代中期後葉から後期前葉にかけて構築されたものと考えられる。構造的に多くの課題を残しており、今後の調査による検証が必要である。

掘立柱建物 6 （図 421・426、図版 27）

竪穴建物 1 と同じ位置で検出された。建物構造は、1 間× 1 間である。規模は、2.0 m× 2.0 mである。柱穴の平面形は円形ないし楕円形に近い形状で、柱はすべて抜き取られていた。竪穴建物の主柱穴であった可能性が高いと考えられ、周辺の精査を行ったが、竪穴建物に関連する遺構は検出されなかった。1 － 5 区で検出された竪穴建物 40・41 より遺存状態が悪い。竪穴建物 1 は床面形成層が確認されていることから、竪穴建物であった場合には、これより上位から掘削されたと考えられる。423 柱穴から出土した土器は、図 426 － 1 の須恵器坏身がある。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめられる。TK10 型式古段階に比定される。





竪穴建物2・3
1　2.5Y5/1黄灰　細砂混シルト　695土坑埋土
2　5PB6/1青灰　粘土　粗砂微量含む　406溝埋土
3　2.5Y7/1灰白　粘土質シルト　竪穴建物２埋土
4　5B6/1青灰　粘土質シルト　竪穴建物３埋土
5　5Y6/1灰　極粗砂混シルト　竪穴建物３周溝埋土
6　5B7/1明青灰　シルト～粘土　加工時形成層　竪穴建物３周溝埋土
7　5PB6/1青灰　細砂混シルト　693柱穴埋土
8　N6/0灰　粘土質シルト　竪穴建物３床面・加工時形成層

686
1　N6/0灰　粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を含む　抜き取り
2　5B6/1青灰　粘土　N5/0灰粘土偽礫を多量含む
　炭化物を少量含む　裏込め

689
1　N6/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫・
　炭化物を含む　抜き取り
2　5GY6/1オリーブ灰　シルト質粘土　N5/0灰粘土偽礫を多量含む
　炭化物を含む　裏込め

691
1　2.5Y5/1黄灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫・炭化物を含む
2　N5/0灰　シルト質粘土　粗砂を少量含む

692・693
1　5Y4/1灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む
　炭化物を含む　柱痕　693柱穴埋土
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を少量含む　693柱穴埋土
3　5B4/1暗灰　シルト質粘土　N4/0灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　693柱穴埋土
4　5B4/1暗灰　シルト質粘土　N5/0灰粘土偽礫を少量含む　692土坑埋土

695
1　N5/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を少量含む
2　5Y5/1灰　シルト質粘土
3　5Y4/1灰　シルト質粘土　5B4/1暗青灰粘土偽礫を含む

697
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を多量含む　炭化物少量含む
　下部粘性強い　抜き取り
2　N5/0灰　粘土　5B6/1青灰粘土と10Y7/1灰白シルト質粘土(6-1層)
　を多量含む　裏込め

698
1　N4/0灰　シルト質粘土　柱痕
2　2.5Y5/1黄灰　シルト質粘土　遺物・炭化物を含む　裏込め
3　5B6/1青灰　シルト質粘土　N5/0灰粘土偽礫を多量含む　裏込め
4　5Y5/1灰　シルト質粘土　裏込め

767
1　N5/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を多量含む　粗砂を少量含む

791
1　5B6/1青灰　シルト質粘土　炭化物を微量含む
2　N6/0灰　シルト質粘土　粘性強い

1506
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰シルト質粘土偽礫を多量含む　柱痕
2　N5/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰シルト質粘土とシルト混粗砂(6-1層)
　を多量含む　裏込め

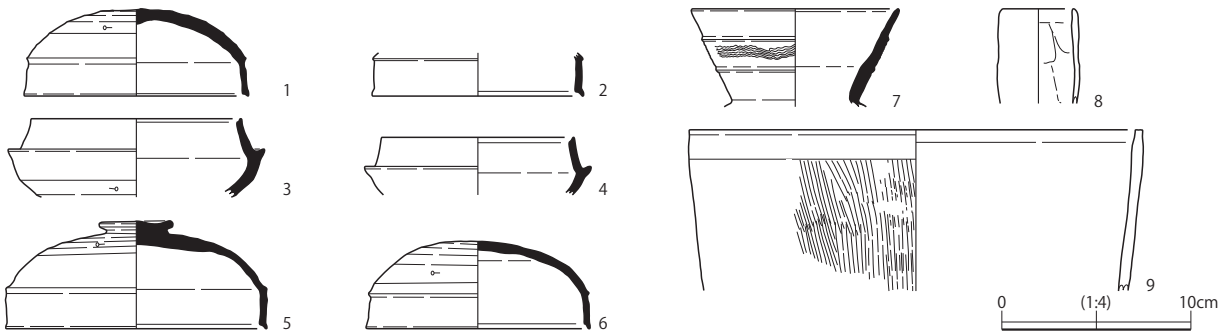


図 425　４区　竪穴建物２・３平・断面　出土遺物

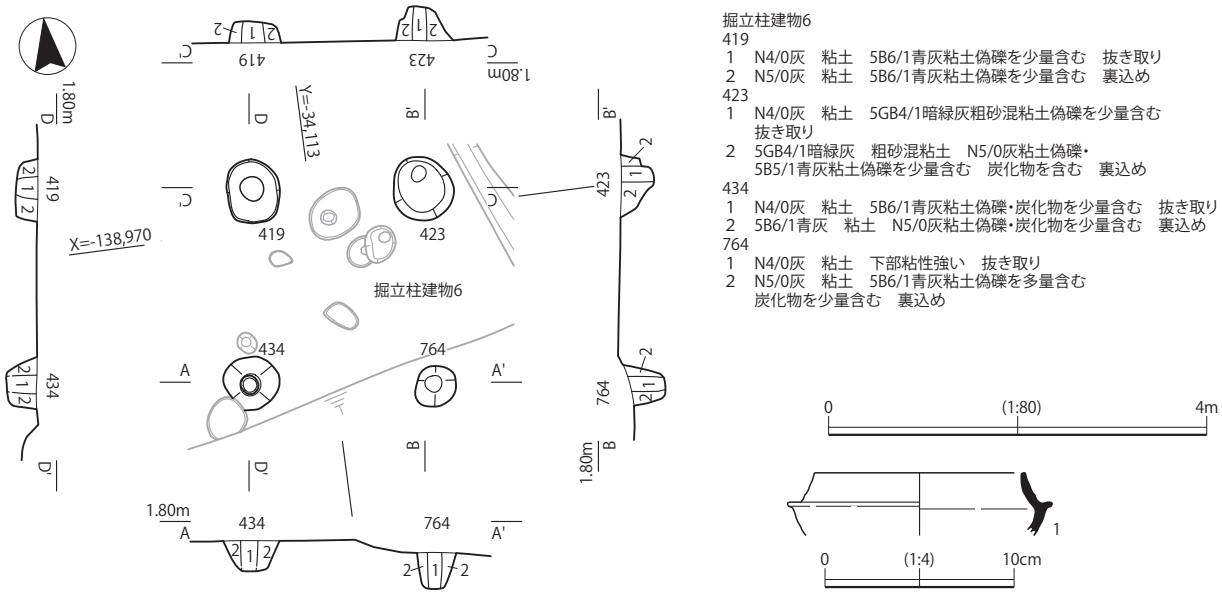


図 426　4区　掘立柱建物 6 平・断面　出土遺物

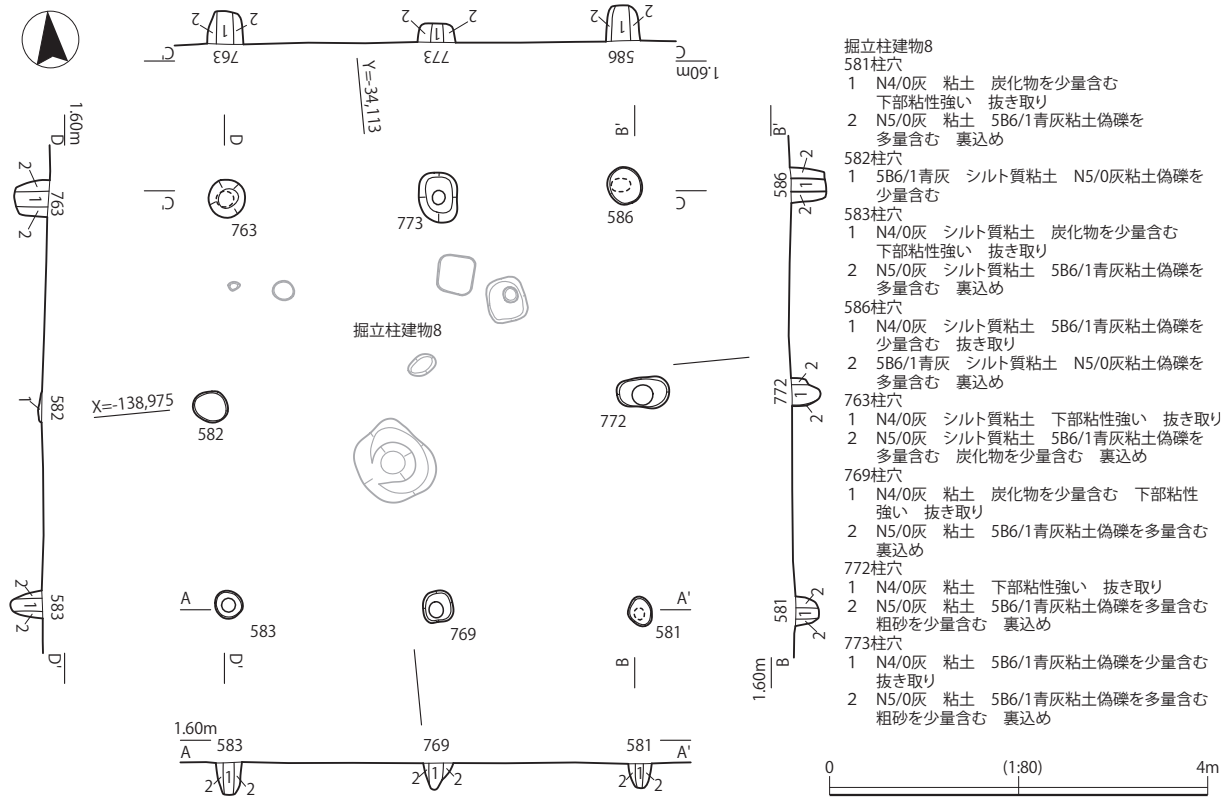


図 427　4区　掘立柱建物 8 平・断面

掘立柱建物 8（図 421・427）

掘立柱建物 6 の南側で検出された。建物構造は 2 間×2 間である。規模は、梁行 4.2 m×桁行 4.4 mである。柱穴は柱がすべて抜き取られており、柱根が遺存するものはなかった。周辺は 4 層による削平が顕著であった場所で、掘立柱建物 8 についても相当の削平を受けたことが想定される。柱穴から土師器細片が出土したが、時期の詳細は不明である。近接する掘立柱建物 6 と建物方位が同じで古墳時代後期以降に建てられたものか。

757 井戸（図 419・428・429・486、図版 27・100・108）

掘立柱建物 8 の南東で検出された。一部 204 トレンチを設定した場所に当たるため全容は不明である。平面形は円形で、素掘り井戸である。周辺は 4 層により削平を受けた範囲に当たり、付属する施設等は検出されなかった。

規模は、直径 3.0 m、深さ 1.4 mである。埋土は、下層が崩落土と考えられる砂層、中層が湿性堆積物のシルト質粘土､上層が偽礫状を呈する細砂混粘土である。中層から上層は泥質の土で埋没しており、最終的には埋め戻されたと考えられる。

下層から土師器甕、中層からほぼ完形の土師器甕 1 点が出土した。下層から出土した土師器甕は、図 429 － 16 で、釣瓶として用いられたものか。また、上層からは、須恵器甕・坏身・坏蓋等がまとまって出土しており、井戸の廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

757 井戸から出土した遺物は図 429 － 1 ～ 18 を図示した。17 が中層、16 が下層から出土しており、それ以外はすべて上層に帰属する。 1 ・ 2 は須恵器坏蓋である。 3 ～ 5 は須恵器坏身である。 6 ・ 7 は須恵器有蓋高坏である。TK47 ～ MT15 型式に比定される須恵器と考えられ、 1 は TK23 型式まで遡るものか。 8 は土師器甑である。外面はハケ調整、内面はナデによって仕上げられる。把手はナデによる成形である。13 ～ 17 は土師器甕である。13 は外面がハケ調整、内面は横方向のナデ調整が施される。14 の外面はハケ調整、内面は横ナデされる。15 は細片を図化。外面はハケ、内面はナデ調整され、内面にはハケメが一部残る。16 の内外面はハケ調整が施される。17 は口縁端部に面を持ち、口縁部の内外面を挟んで横ナデされることで、端面は丸味を帯びる。外面が平行タタキの後カキメ、内面は同心円文当具痕が残る。底部は土器製作時の粘土接合部で剥離している。器形は長胴の土師器甕と同じで、成形と仕上げの調整は須恵器甕の製作手法がを用いられる。 9 ～ 11 は土師器高坏である。 9 の内外面はナデ調整によって仕上げられる。11 は「ハ」の字形に開く脚部である。外面はナデ調整､内面は板ナデの後、ナデ調整される。坏部と脚部の接合は須恵器高坏の接合法に同じである。12 は韓式系土器の体部片で、鉢か。外面は格子目タタキが施される。18 は須恵器甕である。体部から底部の破片も出土したが断片的なものであったことから図示していない。外面は平行タタキによって仕上げられる。頸部は回転ナデ調整されているが、一部平行タタキの痕跡が残る。体内面は同心円文当具痕が認められ、頸部はヘラ状工具によるナデ調整が施される。

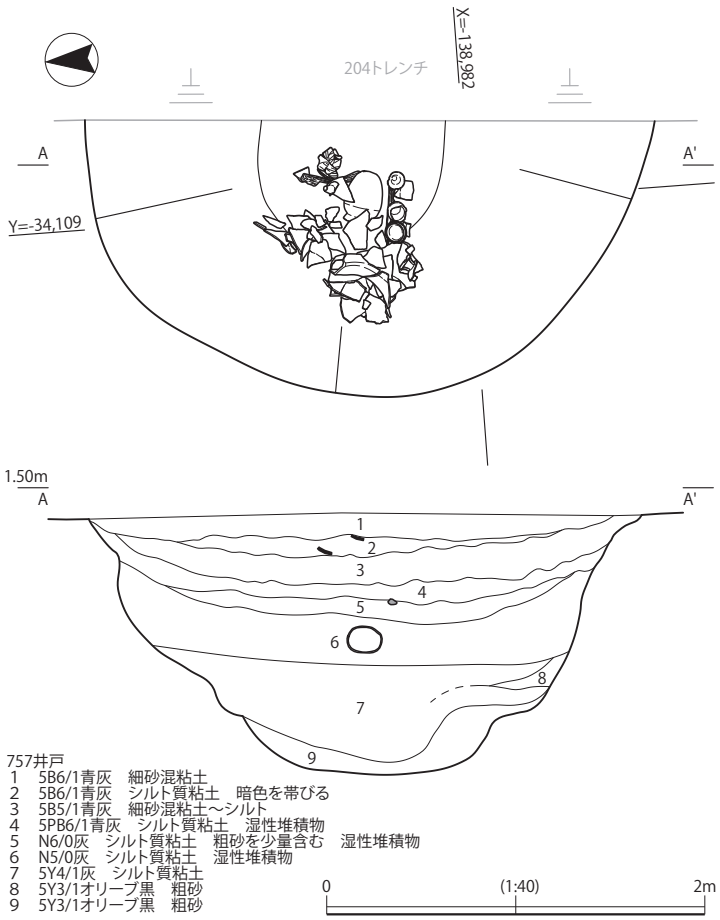


図 428　4 区　757 井戸平・断面

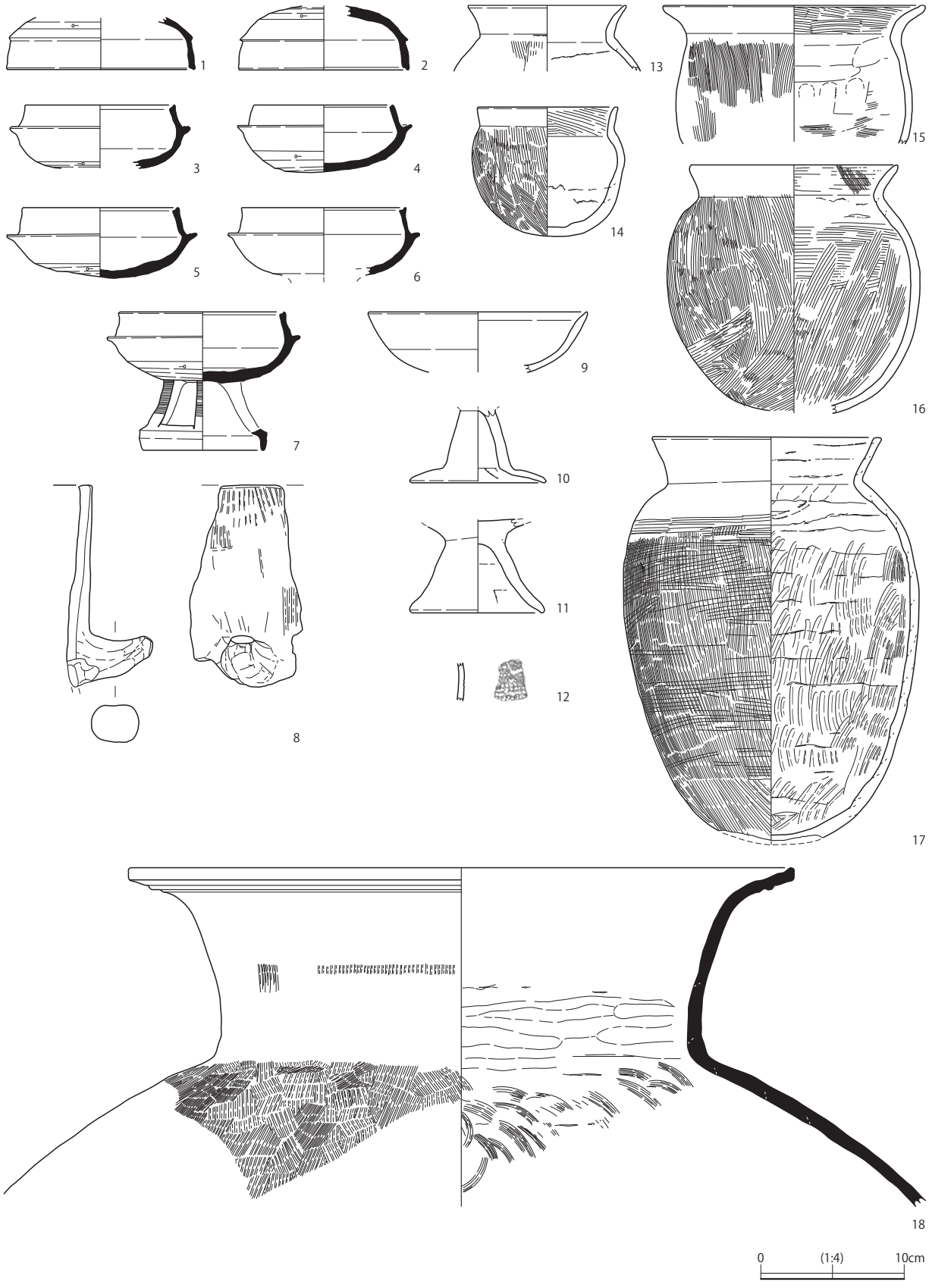


図 429　4 区　757 井戸出土遺物

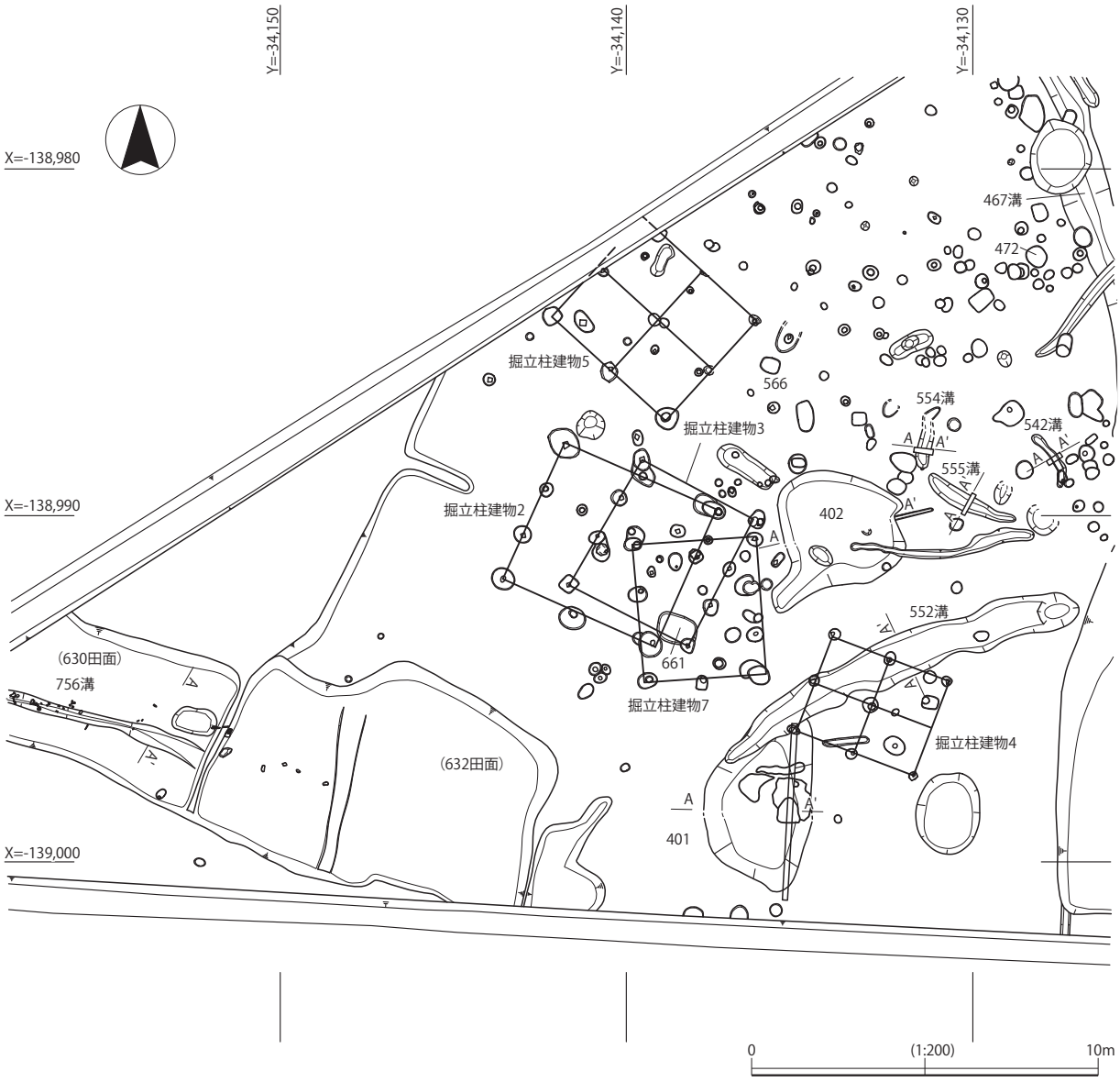
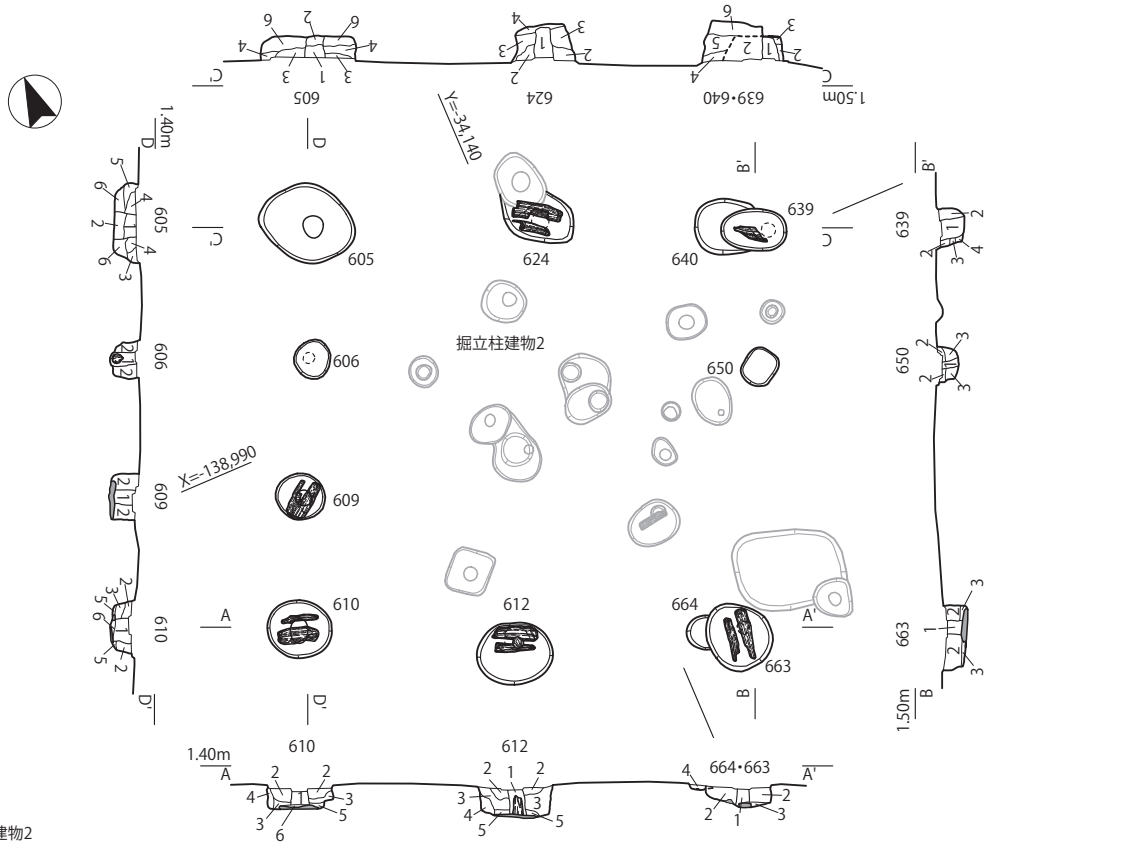


図 430　4区　第５－２ｂ面南西側平面

微高地南西側の調査

467 溝の南西側では、掘立柱建物５棟、土坑・柱穴等が検出された。竪穴建物は検出されなかったが、柱穴が多数検出されており、北東側と異なる土地利用であった可能性がある。６－１層上面の地形が南西側の第５－２ｂ面にも反映されており、南東方向に向かって低くなる地形は第６－１面の微高地の状況を反映したものである。南西側は泥質の地層が広がっており、756 溝周辺では遺構が希薄である。756 溝周辺は、１）第６－１面水田域に５－２ｂ層とした砂層によって、調査地南東隅に高まりが形成される、２）この高まり周辺に泥が堆積することによって形成された地形である。第６－１面の微高地は南西方向に傾斜しており、この微高地に５－２ｂ層とした泥層がすり付くのは 467 溝の南西側である。そのため、地形的に低くなる 756 溝周辺は居住に適さなかったのではないかと考えている。この５－２ｂ層とした砂層の高まりは 747 水田の南東隅で一部その上部が検出されている。なお、630・632 水田は、４－２層から出土した遺物により古代以降となることが判明しており、第４－２面の調査成果で報告を行った。



掘立柱建物2
605
1　N3/0暗灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　5B6/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り
3　N4/0灰　シルト質粘土　裏込め
4　5B5/1青灰　シルト質粘土　裏込め
5　N5/0灰　シルト質粘土　裏込め
6　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　裏込め
606
1　N5/0灰　シルト質粘土　抜き取り
2　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　裏込め
609
1　N5/0灰　シルト質粘土　5B4/1暗青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り
2　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　裏込め
610
1　N5/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り
2　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
3　N4/0灰　シルト質粘土　裏込め
4　5B5/1青灰　シルト質粘土　N5/0灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
5　5Y4/1灰　シルト質粘土　裏込め
6　10YR4/1褐灰　シルト質粘土　礎板の痕跡
612
1　N5/0灰　シルト質粘土　抜き取り
2　N6/0灰　シルト質粘土　裏込め
3　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　裏込め
4　N6/0灰　シルト質粘土　5B4/1暗青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
5　5Y5/1灰　シルト質粘土　裏込め
624
1　N5/0灰　シルト質粘土　5B4/1暗青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り
2　5Y5/1灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を少量含む　裏込め
3　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を少量含む　裏込め
4　N5/0灰　シルト質粘土　裏込め
639・640
1　N5/0灰　シルト質粘土　5B4/1暗青灰粘土・5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り　639柱穴
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　裏込め　639柱穴
3　5B6/1青灰　シルト質粘土　裏込め　639柱穴
4　5B6/1青灰　シルト質粘土　640土坑
5　N4/0灰　シルト質粘土　640土坑
6　N4/0灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粗砂混粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　640土坑
650
1　5B5/1青灰　シルト質粘土　N5/0灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り
2　5B4/1暗青灰　シルト質粘土　5B6/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
3　5B5/1青灰　シルト質粘土　炭化物含む　裏込め
663・664
1　5Y4/1灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　抜き取り　663柱穴
2　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　裏込め　663柱穴
3　5Y4/1灰　シルト質粘土　礎板の痕跡　裏込め　663柱穴
4　5Y4/1灰　シルト質粘土　664柱穴

図 431　4区　掘立柱建物 2 平・断面

掘立柱建物 2（図 430・431、図版 27）

掘立柱建物 5 の南側で検出された。建物構造は、2 間× 3 間である。南東側の桁柱で 609 柱穴に対応する位置の柱穴は検出されなかった。規模は、梁行 4.4 m、桁行 4.8 mである。柱穴の平面形は、不整な楕円形を呈し、梁行の柱穴規模が大きい。柱穴は、柱根が遺存するものが 2 基あり、それ以外はすべて柱が抜き取られていた。また、礎板が遺存する柱穴を 6 基確認しており、612 柱穴は礎板の上に柱が立ったままの状態で検出された。

柱穴から土師器細片が出土したが時期は不詳である。掘立柱建物 4 と建物方位が同じで、TK47 型式以降に建てられたものか。

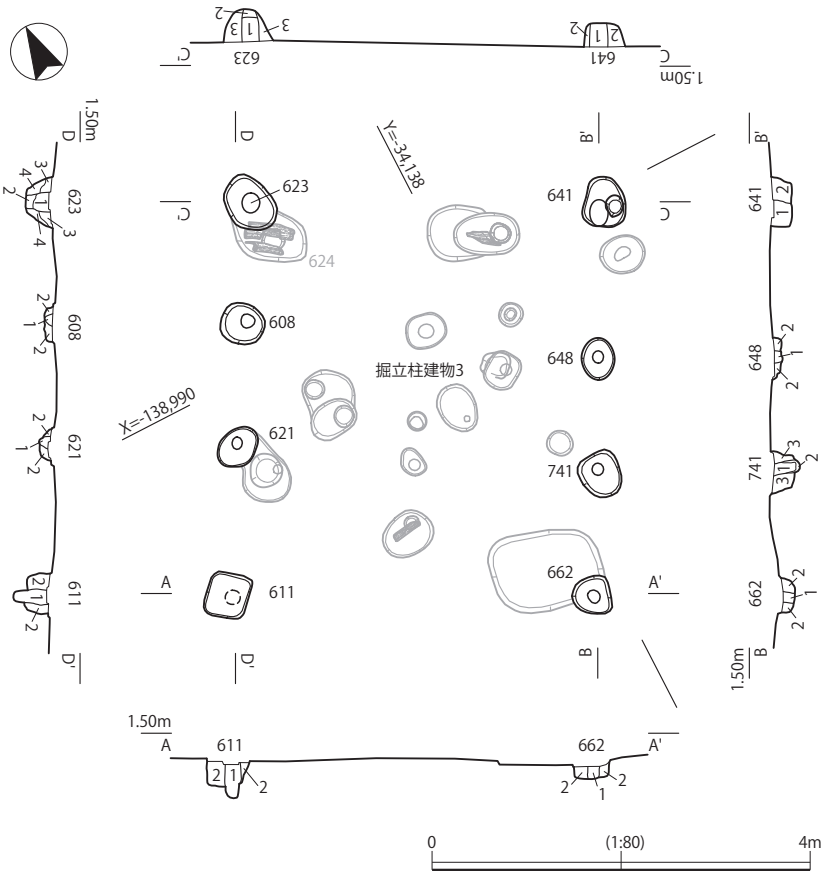


図 432　4区　掘立柱建物３平・断面

掘立柱建物３（図 430・432、図版 27）

掘立柱建物２と重なる位置で検出された。掘立柱建物２と切り合い関係をもつ柱穴があり、掘立柱建物３が新しい。建物構造は、１間×３間である。規模は、梁行 3.9 m、桁行 4.1 mである。柱穴の平面形は方形ないし不整な円形・楕円形を呈し、掘形の規模は小さい。柱穴は柱がすべて抜き取られていた。

柱穴から土師器細片が出土したが、時期は不詳。

掘立柱建物４（図 433、図版 27）

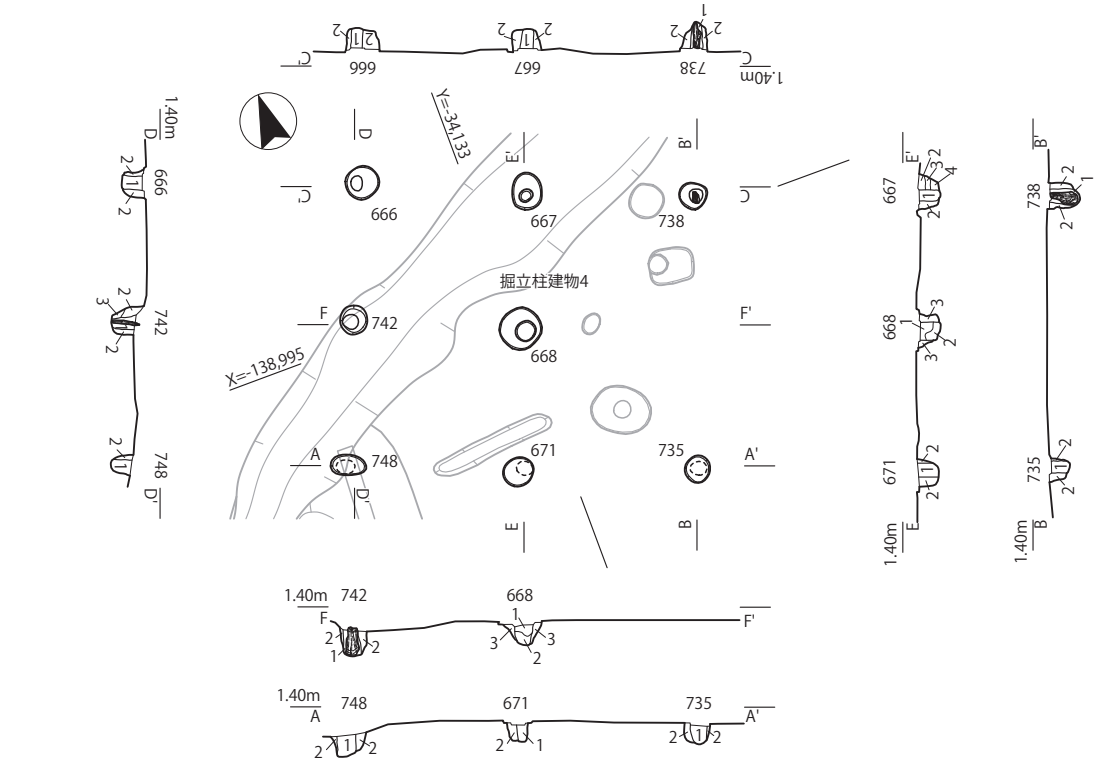
掘立柱建物７の南東で検出された。401 土坑と切り合い関係があり、掘立柱建物 4 の方が新しい。建物構造は、２間×２間である。南東側の桁行では 742 柱穴に対応する柱穴が検出されなかった。規模は、梁行 4.8 m、桁行 5.0 mである。柱穴の平面形は、円形・楕円形を呈す。柱穴では、柱根が３基の柱穴で遺存し、他の柱穴は柱が抜き取られていた。

668 柱穴から須恵器坏蓋の微細な破片が出土した。口縁端部に段があり、稜はやや丸味を帯びる。TK47 型式から MT15 型式に位置付けられる資料と考えられる。また、切り合い関係から、401 土坑の埋没後に建てられたものであることから、401 土坑の廃絶以降、TK47 型式以降の時期に建てられたものとすることができる。

掘立柱建物５（図 430・434）

掘立柱建物２の北東で検出された。建物構造は、２間×２間である。規模は、梁行 3.8 m、桁行 4.4 mである。柱穴の平面形は、不整な円形を呈す。礎板がすべての柱穴で検出されており、内１基は柱根が遺存した。それ以外の柱穴は柱が抜き取られていた。

602 柱穴から格子目タタキが施された韓式系土器の細片が出土した。その他の柱穴から遺物は出土



掘立柱建物4
666
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
667
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　抜き取り
2　5Y5/1灰　シルト質粘土　N5/0灰粘土偽礫を半量含む
炭化物を含む　裏込め
3　N4/0灰　シルト質粘土　裏込め
4　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
668
1　5Y4/1灰　シルト質粘土　抜き取り
2　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
3　5B5/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む
炭化物を少量含む　裏込め
671
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む
抜き取り
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
735
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む
抜き取り
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
738
1　N5/0灰　シルト質粘土　抜き取り
2　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　裏込め
742
1　N5/0灰　シルト質粘土　抜き取り
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む　裏込め
3　N4/0灰　シルト質粘土　炭化物を含む　裏込め
748
1　N4/0灰　シルト質粘土　5B5/1青灰粘土偽礫を少量含む　炭化物を含む
抜き取り
2　5B5/1青灰　シルト質粘土　N4/0灰粘土偽礫を少量含む　裏込め

図 433　4区　掘立柱建物４平・断面

しておらず、時期の詳細は不明である。建物方位は、掘立柱建物２・４より東に偏するが、古墳時代後期以降のものか。

掘立柱建物７（図 430・435）

掘立柱建物２・３と重なる位置で検出された。建物構造は、２間×３間である。規模は、梁行 3.2 m、桁行 4.0 mである。柱穴の平面形は、不整な円形・楕円形を呈する。５基の柱穴で礎板が遺存した。642 柱穴では、柱根に腐朽したものと考えられる木片が含まれた。

655 柱穴から図 435 － 1 の須恵器坏蓋が出土した。TK23 型式で、南側の 401 土坑と同段階に機能したものか。642 柱穴からは、図 435 － 2 の木製の器台が出土した。柱として用いられたものが、芯が腐食して、辺材が遺存した状態のものである可能性もある。

401・402 土坑・552 溝（図 430・436・437、図版 100）

401 土坑・552 溝は、掘立柱建物２の南側で検出された。当初、切り合い関係が想定されたが、断面の検討から同時期に機能したものと判断した。

552 溝の規模は、幅 1.04 m、深さ 0.1 mである。底面の形状は、747 水田側で土坑状にやや深くなっている状況が検出された。747 水田とは、位置的に離れていたため、切り合い関係は把握できなかったが、

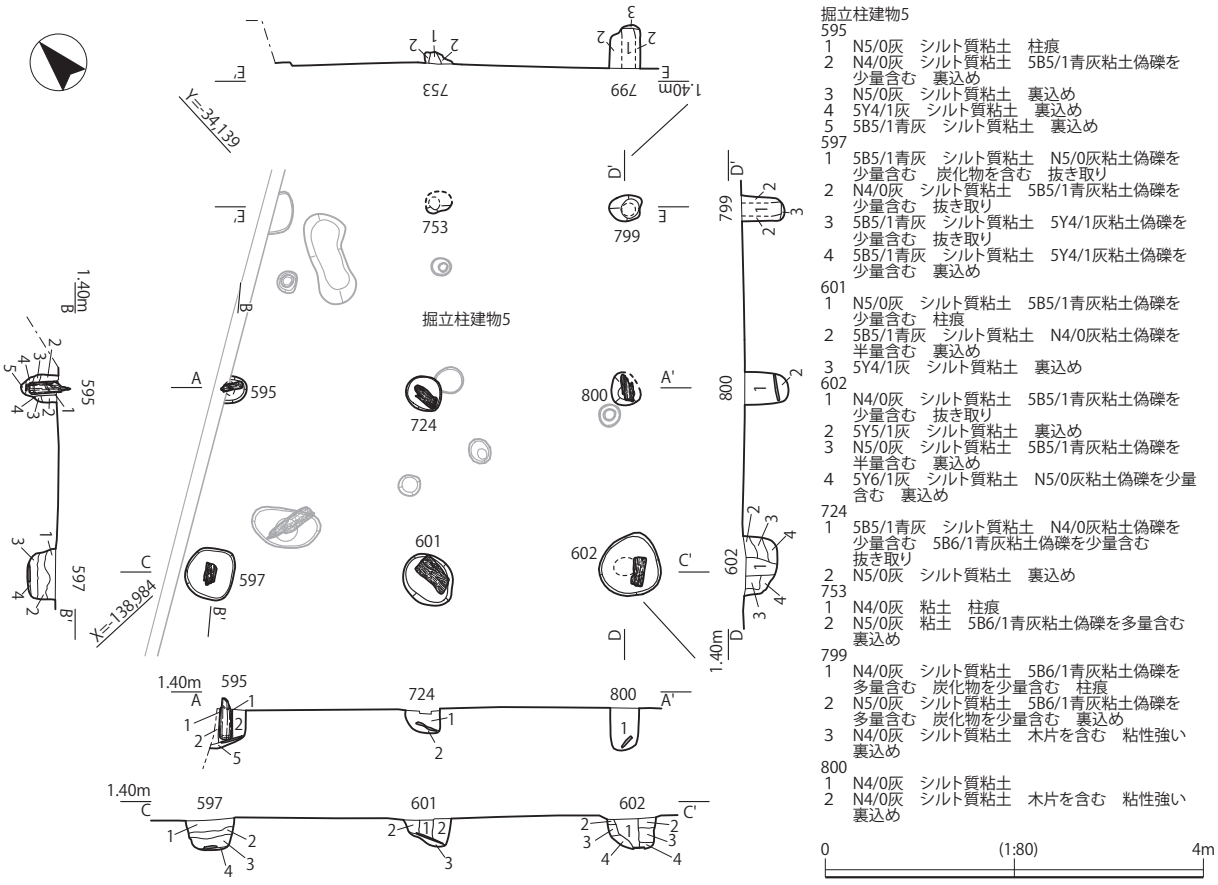


図 434　4区　掘立柱建物 5 平・断面

土質は類似したものであった。埋土は湿性堆積物の粘土で、水成層は確認することができず、水田に水を供給した 467 溝と埋土の対比はできなかった。552 溝からは、図 437 － 1 の須恵器坏身が出土した。

401 土坑の平面形は、南北に長い不整形な形状を呈する。規模は、長軸 5.0 m、短軸 3.0 m、深さ 0.3 mである。埋土は、湿性堆積物の粘土とシルト質粘土で、上層は炭化物の薄層を挟む。

調査では、炭化物を含む地層の上面で検出作業を行った。炭化した木片が不規則に集積している状況が検出されたが、この他に微細な遺物は確認されなかった。なお、401 土坑に近接する 745 土坑は 747 水田の作土と類似した埋土である。

401 土坑から、図 437 － 2 ～ 8 の土器が出土した。2 ・ 3 は須恵器坏身である。TK208 ～ 23 型式。4 ～ 6 は須恵器高坏脚部である。7 ・ 8 は土師器高坏で、8 は坏部内面に放射状の暗文が施される。

402 土坑は、掘立柱建物 2 の東側で検出された。平面形は南西側に突出部を持つ不整形な形状を呈する。規模は、長軸 3.9 m、短軸 3.2 m、深さ 0.3 mである。埋土は、下層から上層にかけて湿性堆積物のシルト質粘土で、中層に炭化物を多量に含んだ埋土が認められる。炭化物の上面で検出作業を行っているが、401 土坑と同様に、炭化した木片の集積を認めるに留まり、その他の微細な遺物は確認できなかった。

401 土坑のように溝と接続する状況は認められなかったが、北東側では、炭化物が埋土に含まれることが特徴的な 542・554・555 溝が近接している点が注目される。

402 土坑から出土した土器は、図 437 － 9 ～ 25 がある。9 は外面に線刻がある土器である。線刻は円弧と斜位の線が表現される。弥生時代後期の壺体部片か。10 ～ 19 は韓式系土器で、外面がタタ

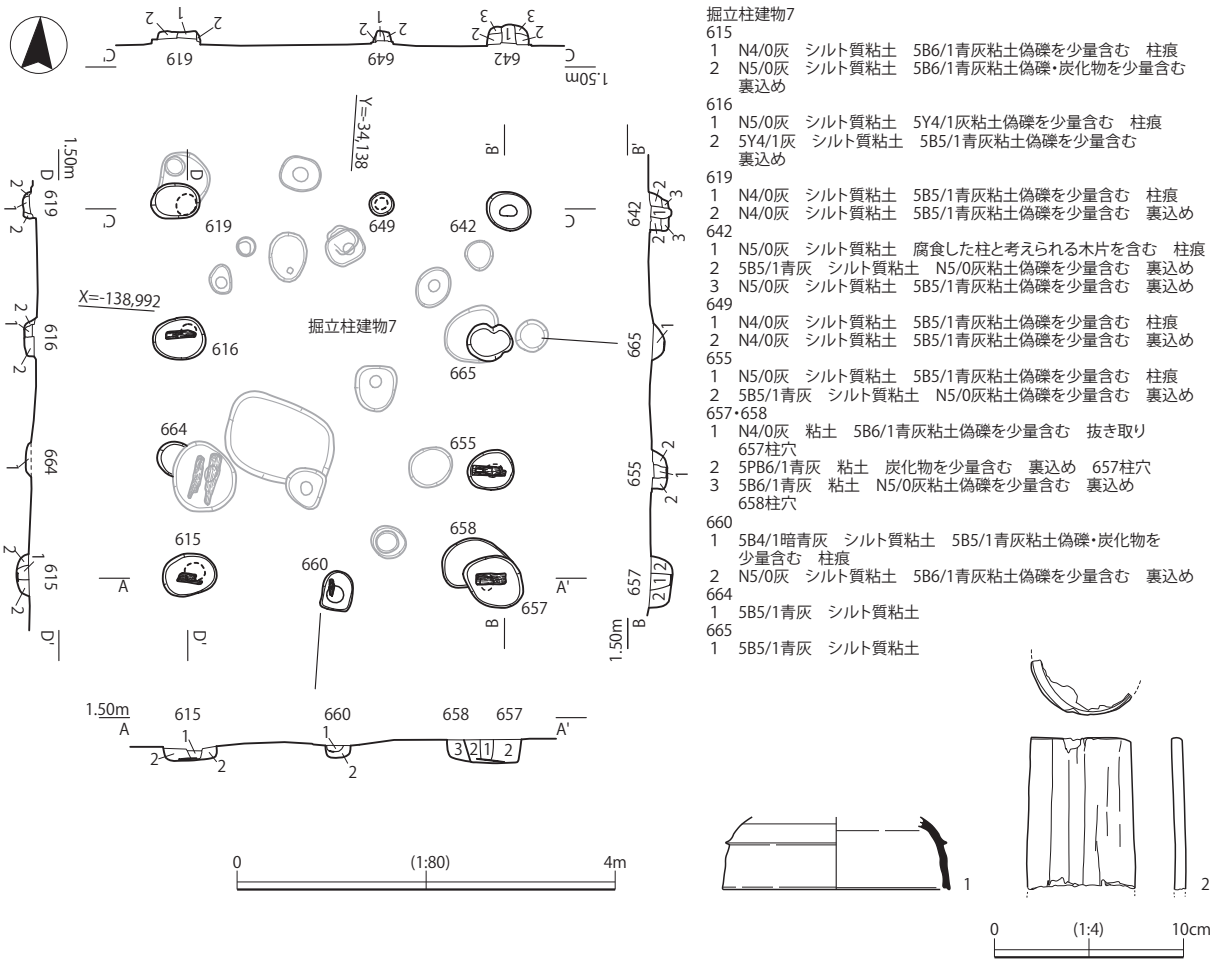


図 435　4 区　掘立柱建物 7 平・断面　出土遺物

キ調整されるもので、同一個体ではないと判断されたものを可能な限り抽出し図示した。10 は甑の口縁部である。外面に格子目タタキが施される。11 ～ 17 の外面は格子目タタキが施され、器種は 11・12・15 が甕ないし鍋と考えられるが、その他は不明である。18 の外面は平行タタキ、19 の外面は格子目タタキが施されており、器種は甕ないし鍋と考えられる。20 は土師器高坏である。脚裾部が短く、端部には丸みを帯びた面をもつ。全体的に磨滅するため調整は不明。21 は韓式系土器平底鉢である。全体が磨滅しており、調整は不明。22 は韓式系土器平底鉢である。外面は格子目タタキ、内面はナデ調整である。外面下端は磨滅しており、調整は不明瞭であるが、ナデ調整された可能性がある。23・24 は把手である。上部に切り込みが入れられる。25 は鍋の把手で、上部に切り込みが入れられる。

401・402 土坑は、第 6 － 1 面で検出した微高地際の 1517 畦畔の東側、5 － 2 b 層上面の凹地を選んで掘削されている。その用途については、1）水溜め施設、2）鍛冶関連施設を想定している。1）については、401 土坑が 552 溝と接続して機能し、401 土坑に導水を行っていたことが想定されたことと、401・402 土坑ともに湿性堆積物である泥を主体とした埋土が認められたことが根拠となっている。

一方、2）については、炭化物が多量に含む埋土が認められたことと、近接する 4 － 2 層に帰属する擬似畦畔内から鉄床石の可能性がある台石が出土したことを根拠とする。ただし、2）については、鉱滓や鞴など鍛冶関連遺物が出土していないため、確実性に乏しく、1）の水溜め施設の可能性が高いと考えられる。

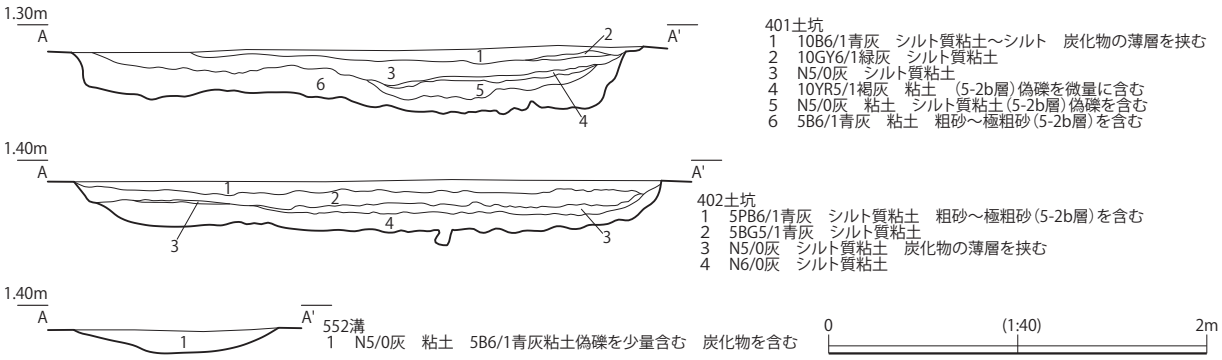


図 436　4区　401・402 土坑・552 溝断面

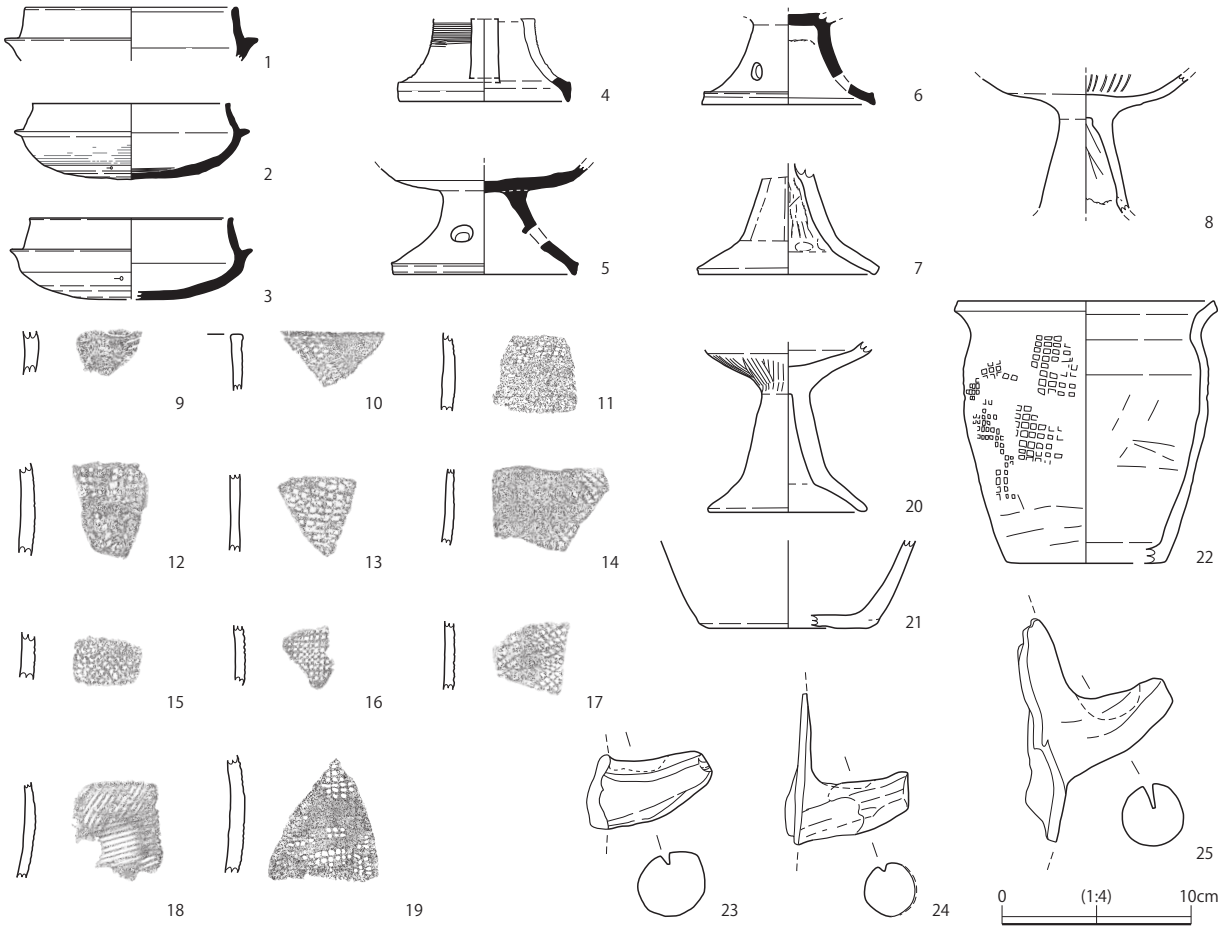


図 437　4区　401・402 土坑・552 溝出土遺物

756 溝（図 430・438・439・440、図版 27・101・102）

630 水田の加工面直上で検出された。756 溝は、当初、水田作土の下面遺構になると考えていたが、4－2層の遺物を検討した結果、4－2層に上部を削平され、基底面がわずかに残った溝と評価するに至った。756 溝及び 756 溝に関係する土器を図 439 －1～9に図示した。1・2は須恵器坏身である。1は受部が口縁端部に近い位置まで立ち上がる。3は陶質土器で、外面に鳥足文タタキが施される。器種は甕か。4は陶質土器鉢で、格子目タタキが施される。5は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面は同心円文当具痕が残る。6は土師質で不明遺物である。7はU字形板状土製品である。突帯は断面形が長方形を呈する。8は叩き石である。表面及び下端に敲打痕がある。9は砥石で、砥面は3面残存する。表面には、線刻状の使用痕があり、鉄製品用の砥石であった可能性がある。また、756 溝周

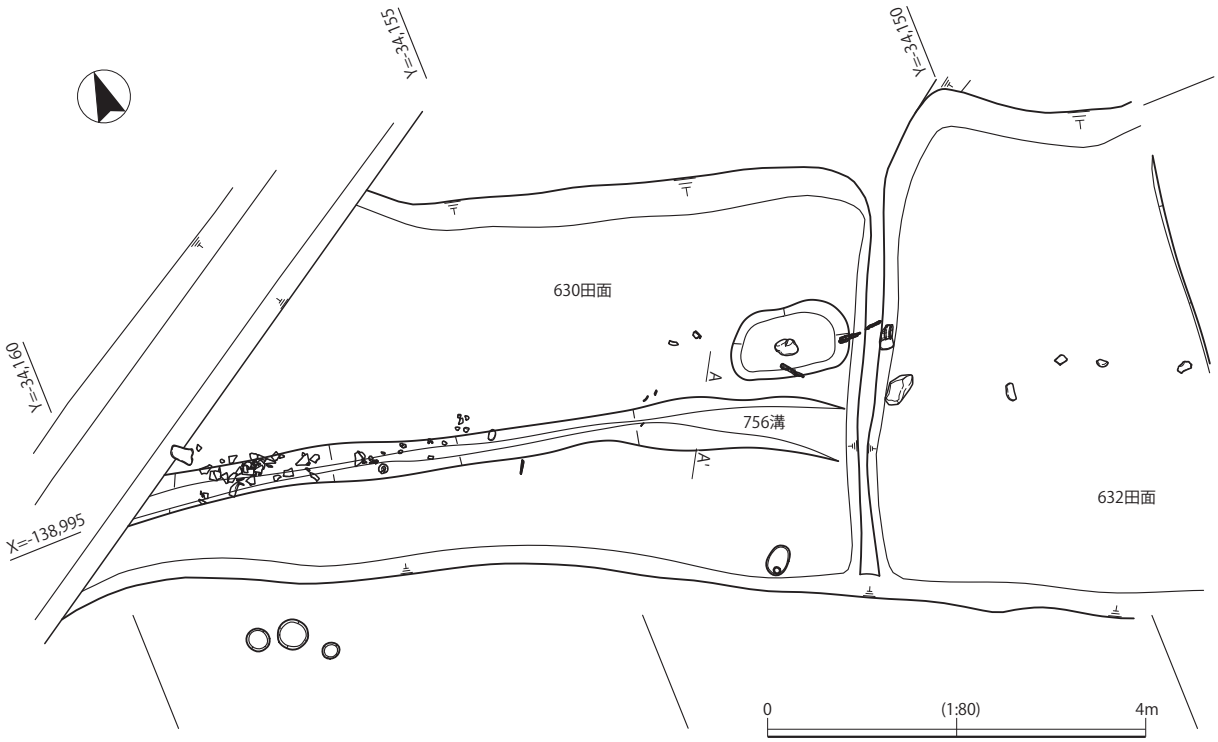


図 438　4区　756 溝平面

辺で検出された擬似畦畔内から、図 439 － 10・11 の台石が出土した。10 の表裏面には大小の剥離がある。楕円・円形・不整形な剥離が不規則に認められるが、強度の強い衝撃が台石に加わって形成されたものと考えられる。裏面は剥離が顕著であるため、本来の形状は推定しえないが、断面形は大きく湾曲しており、使用によって凹んだ可能性がある。11 は作業面が 3 面あり、平坦面を図示した。10 と比較して表裏面は平滑である。被熱した痕跡があり、一部黒化する。側面は図示した左側が遺存するのみで、それ以外は破損した可能性が高い。風化は進んでおらず、割面は新しい。

450・467・487・542・554・555 溝（図 421・430・441・440、図版 27）

450・467 溝は、調査地中央で検出された。450 溝の規模は、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.06 mである。埋土は、シルト質粘土を主体とする。図 441 － 6 の土師器甕が出土した。467 溝の規模は幅 1.3 m、深さ 0.3 mである。埋土は、シルト質粘土を主体とする。流向は南方向で、南東側の水田に水を供給したものと考えられる。第 6 － 1 面の地形を反映した、微高地の縁辺部に掘り込まれたと考えられる。図 441 － 8 の韓式系土器と TK47 型式の須恵器細片が出土している。

487 溝は、竪穴建物 1 ・ 2 の南側で検出された。規模は、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.05 mである。埋土は、シルト質粘土である。微細な破片からの判断となるが、MT15 型式～ TK10 型式古段階の坏蓋と、TK209 型式の坏身が出土している。

542・554・555 溝は、402 土坑の北東側で検出された。542 溝の規模は、幅 0.2 m、深さ 0.02 mである。埋土は、炭化物を微量に含むシルト質粘土で、554・555 溝のように炭化物は多量に含まないが、土質は 554・555 溝に似る。554 溝の規模は、幅 0.6 m、深さ 0.35 mである。埋土は、炭化物を多量に含む粘土である。554 溝から図 441 － 10 の須恵器高坏が出土した。このほか、TK209 型式の須恵器坏身細片が出土しているが、混入と考えられる。555 溝は、幅 0.5 m、深さ 0.12 mである。埋土は、炭化物を多量に含む粘土である。555 溝からは TK23 型式の須恵器坏蓋の細片が出土した。

図 439　4 区　756 溝他出土遺物

その他の遺構、4・5 層出土遺物（図 441 ～ 444、図版 101・102）

上記に掲げた遺構以外から出土した遺物を図 441 に図示した。図 441 － 1・3 は 426 土坑から出土。1 は土師器甕で、外面はハケ調整、内面は指ナデが施される。3 は須恵器坏蓋。TK47 ～ MT15 型式。2 は韓式系土器で、430 柱穴から出土。格子目タタキが施される。4 は 432 柱穴から出土。須恵器坏蓋で MT15 型式。5 は須恵器高坏で 449 柱穴から出土。6 は土師器甕で、450 溝から出土。7 は韓式系土器で外面に格子目タタキが施される。462 土坑から出土。9 は韓式系土器で、平行タタキと沈線が施される。472 柱穴から出土。器種は甕か。10 は須恵器高坏脚部で、554 溝から出土。11 は須恵

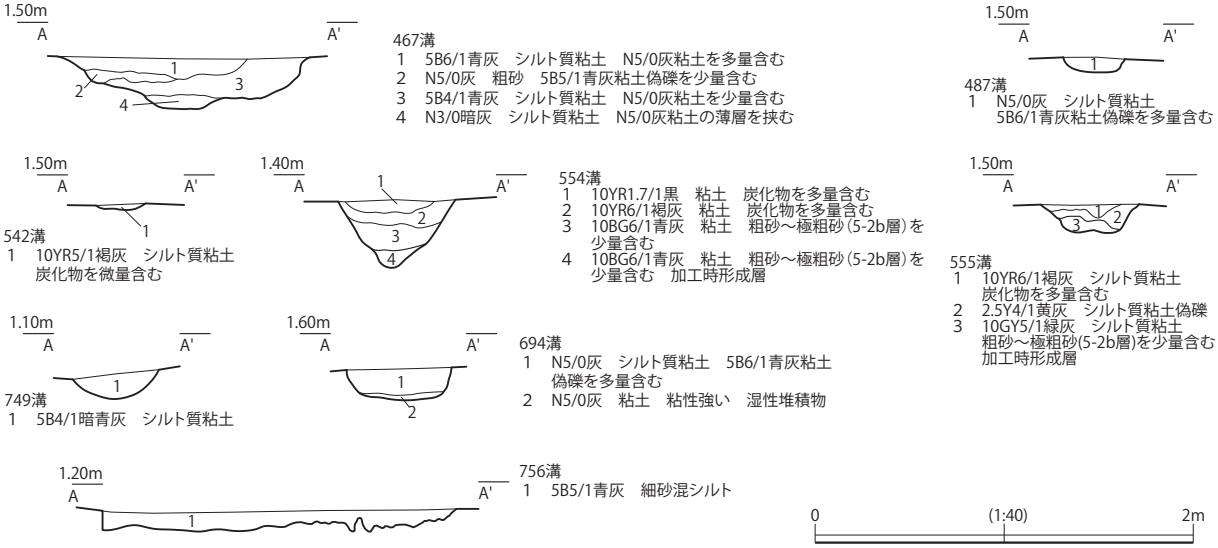


図 440　4区　467 溝他断面

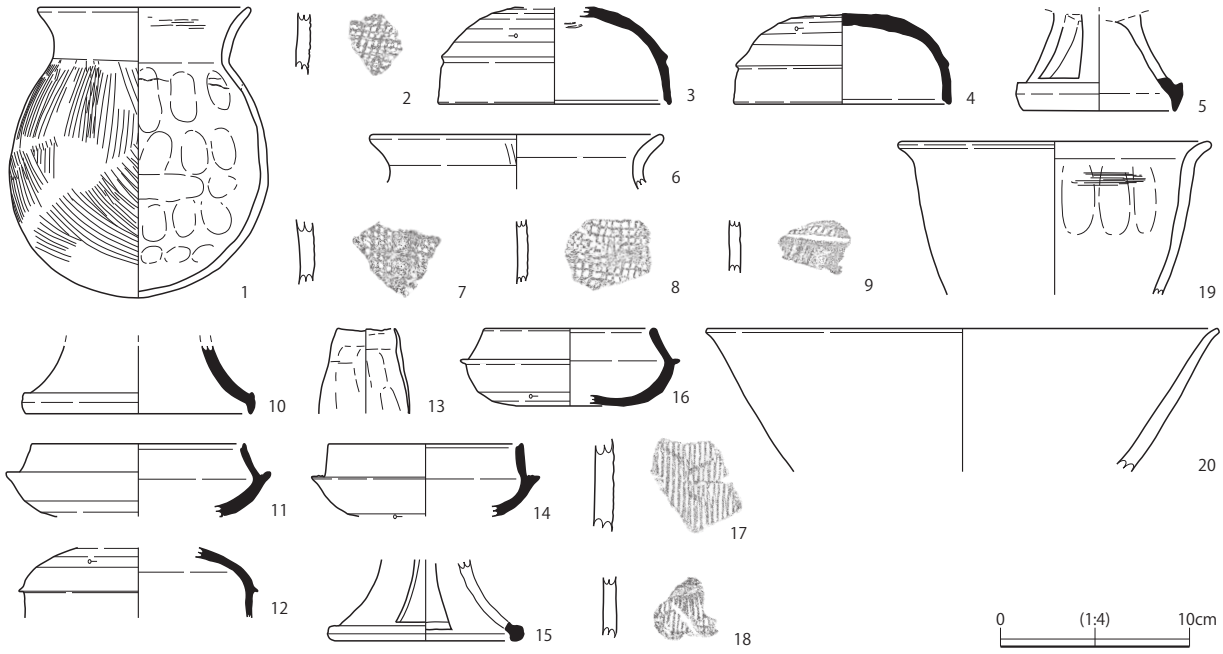


図 441　4区　426 ピット他出土遺物

器坏身で、694 溝から出土。TK10 型式。12 は須恵器坏蓋で、745 土坑から出土。TK208 ～ TK23 型式。13 は製塩土器で、566 柱穴から出土した。14・17 は 749 溝から出土。14 は須恵器坏身で、TK47 型式に位置付けられる資料である。17 は韓式系土器で、鳥足文タタキが施される。15・18 は 745 土坑から出土。15 は須恵器高坏脚部で、TK208 型式。18 は韓式系土器で平行タタキが施される。19 は弥生土器鉢で、483 土坑から出土。6 層に帰属する。20 は土師器有段高坏で、483 土坑から出土。

4・5 層から出土した遺物は、図 442・図 443 に図示した。図 442 － 1・4・5・7・9・15・17 は 4 － 2 層から出土した資料である。1 は須恵器坏蓋、4・5 は須恵器坏身である。7 は須恵器高坏で、坏部と脚部の接合部に突帯をめぐらす。9 は無蓋高坏の坏部である。14・15 は須恵器甕の体部片で、外面に平行タタキと沈線が施される。16 は須恵器坏蓋で、661 土坑から出土した。天井部にカキメが施される。17 は須恵器を模した土師器の高坏である。脚部には長方形の透孔が開けられる。2

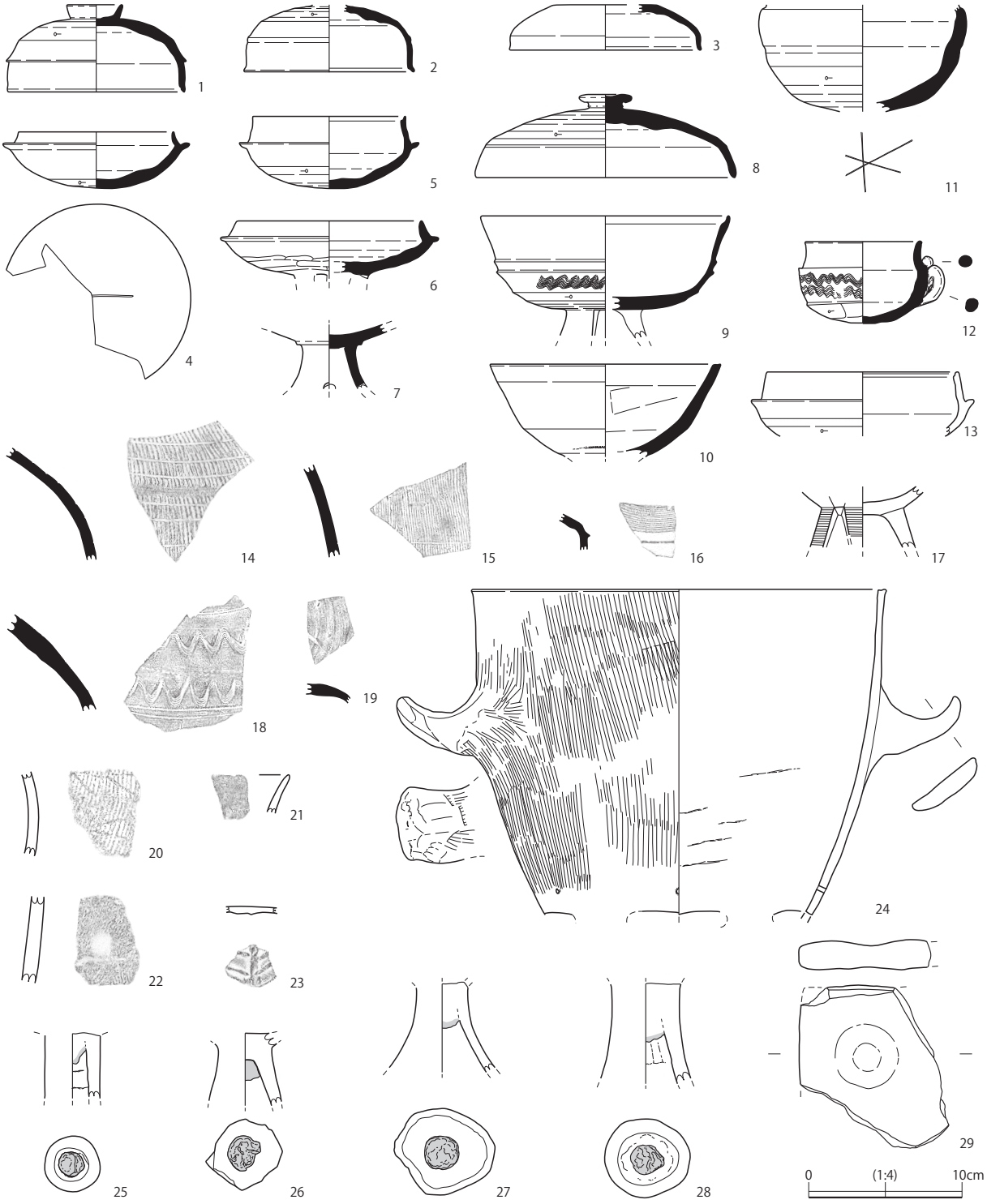


図 442　4 区　747 田面他出土遺物

は須恵器坏蓋で、747 水田から出土。6 は須恵器有蓋高坏で 5 － 1 層から出土した。焼成不良で、胎土に砂粒が多く含まれるため、やや土師質である。坏部底面は静止ヘラケズリが施される。脚部は欠損するが、長方形の透孔が開けられている。TK43 型式の器形を呈するが、外面に静止ヘラケズリが用いられることや、土師質であることから、TK73 型式まで遡る可能性があると考えられる。3 は須恵器蓋で、壺蓋か。8 は須恵器坏蓋で、630・632 田面から出土した。10 は椀形の杯部をもつ須恵器高坏で、632 田面から出土。外面は回転ナデで、櫛状工具の当たりが下位に認められる。内面はヘラ状工具を

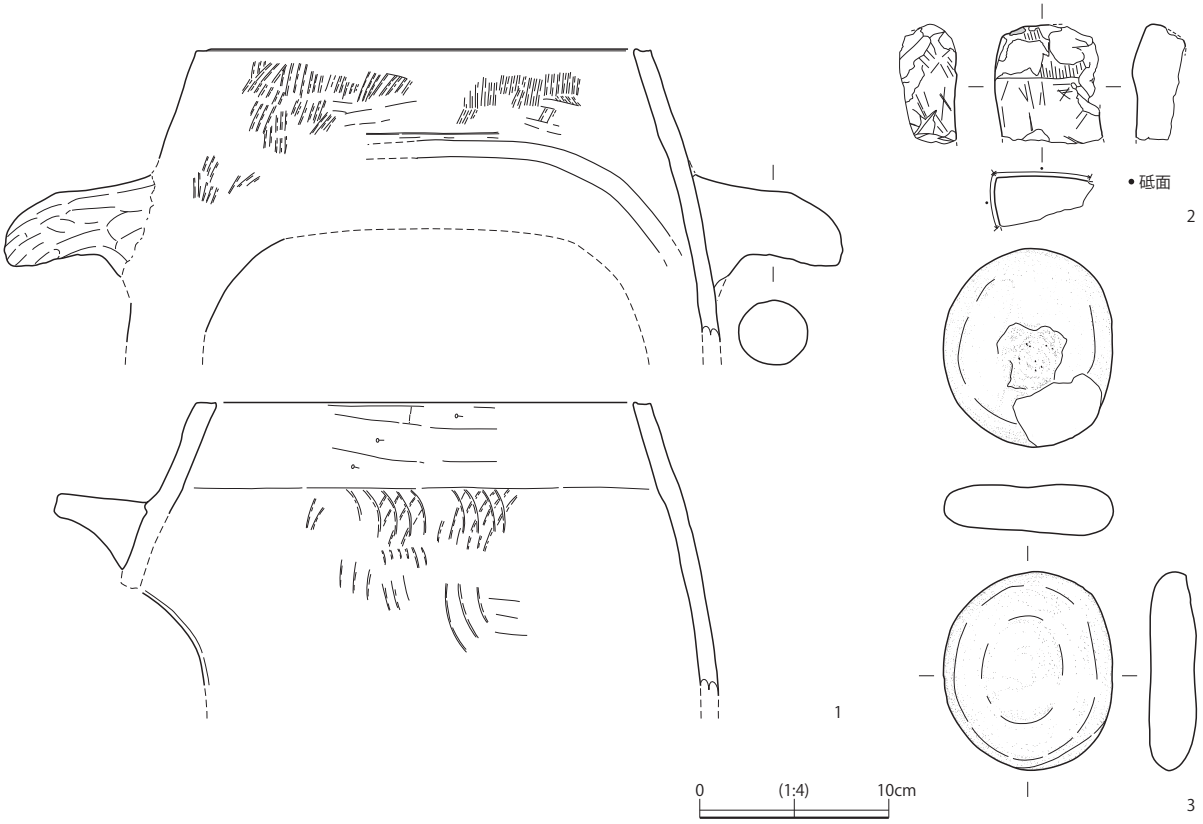


図 443　4区　4－2層他出土遺物

用いたナデ調整が施される。11 は須恵器壺で、630・632 田面から出土。ヘラ記号あり。12 は須恵器把手付埦でトレンチから出土。把手上部に球形の粘土塊を貼り付け装飾が施される。体部は、突帯間に波状文を2条施し、底面は静止ヘラケズリが施される。13 は須恵器を模した土師器の坏身である。18 は須恵器の壺体部で、トレンチから出土。上位に沈線1条以上、下位に沈線2条が施され、間に波状文が2単位施される。また、波状文の間には2段で円形の刺突文が施される。19 は 203 トレンチから出土した須恵器で、坏蓋天井部か高坏坏部になると考えられる。外面にハケメが認められたため図示した。20 は韓式系土器の体部片である。外面は鳥足文タタキが施される。21 は土師器鉢ないし坏の口縁部である。内面に布目圧痕がある。22 は韓式系土器の鉢である。外面は縄蓆文タタキが残る。23 は葉脈状の剥離面が認められる。24 は土師器甑で、側溝から出土。25 ～ 28 は土師器高坏で、25 ～ 27 は 4－1層、28 が 746 田面から出土。脚部内面に、鉱滓状の付着物がある。付着物は、25 を除いて断面形は半円形を呈し、表面は凹凸が顕著である。付着物は、高坏脚部に地下水が溜まりやすい状況にあって土中成分が集積して形成されたものと考えたが、同様の現象が他の土器においては認められなかったことから図示した。29 は土製品で、用途は不明である。中央部に円形の凹みがある。

図 443 －1は移動式カマドで、632 水田から出土。細片を図化。外面は平行タタキで、内面は掛口部分が横方向にヘラケズリ調整される。体部内面には同心円文当具痕が残り、一部ナデが施される。2は砥石で、4－2層出土。砥面は2面。泥岩、或いは未固結の、風化したシルト岩が加工される。3は凹石で、表裏面が使用されており、微細な敲打痕が残る。滑石製石製品は、図 444 －1 ～ 33 を図示した。古墳時代集落の直上に堆積する、4－1・4－2層とした作土から出土。1 ～ 15 は臼玉である。16 ～ 27 は有孔円板である。平面は多角形或いは辺が一辺以上あるものを図示した。16 は円形、17

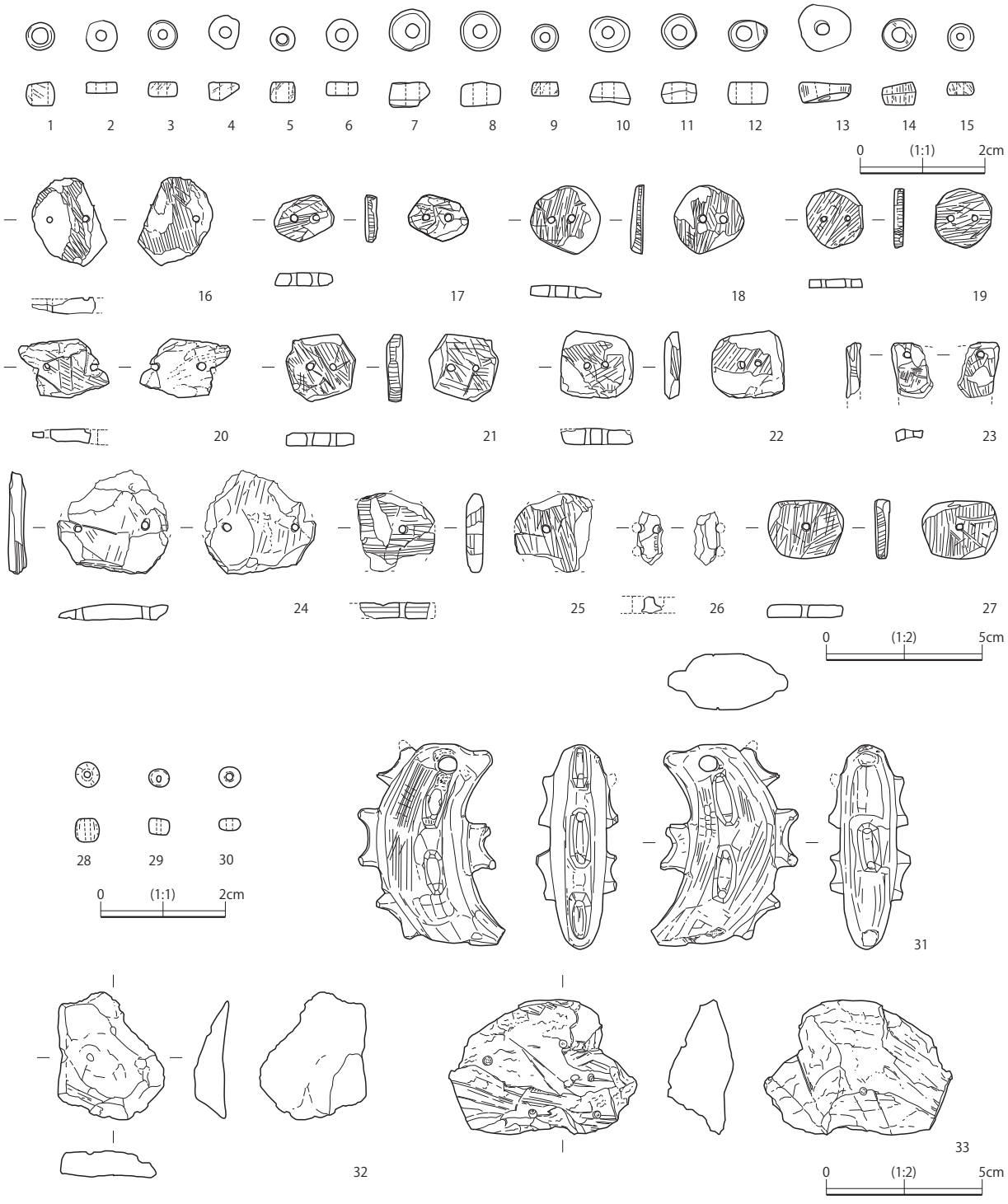


図 444　4区　4－1・4－2層出土遺物

～ 20 は多角形、21 は方形を呈する。20 は 3 箇所貫通孔が開けられる。1 箇所は穿孔に失敗した可能性がある。23 は表裏面には研磨・ケズリ痕と考えられる条線が残る。側面には研磨痕が認められる。24 は大形の有孔円板である。側縁の欠損が著しいが、一部遺存する側縁に横方向の研磨が認められる。25 は厚みを持った有孔円板で、単孔になる可能性がある。26 は貫通孔 2 箇所、穴 1 箇所があるもので、失敗品或いは残片となる可能性がある。表面に一部ケズリ痕のような凹凸が認められる。27 は方形を呈し、中央に貫通孔が開けられる。28 ～ 30 はガラス小玉で、4 － 1 層から出土した。28 は橙色、29 は黄緑色、30 は淡青色を呈する。31 は滑石製子持勾玉である。削り及び研磨によって仕上げられる。

勾玉状突起部は、中央寄りを高くして立体感が表現される。頭部と尾部は削りを施して、上下の形状が対称となるように仕上げられる。32・33 は滑石の残核である。32 の表面には円形の穴が 2 箇所開けられる。表面には一部削りかと考えられる加工痕が認められる。裏面は剥離面である。33 は表面に 5 箇所、裏面に 1 箇所、回転穿孔の穴が開けられる。裏面には分割用と考えられる溝が筋状の痕跡として確認できる。表面下端には、斜め方向のシャープな加工痕が残り、鑿状の工具の加撃痕と考えられ、側面にも加工痕と考えられる微細な線条痕が残る。

第６－１面（図 445、図版 28）

５－２ｂ層を除去して検出した遺構面で、６－１層としたシルト質粘土の上面に当たる。地形は、1517 畦畔が検出された北東側が最も高く、1517・1534 畦畔に挟まれた部分は緩やかな斜面地である。南東側は、1517 畦畔を境に南東に向けて低くなっている。1517 畦畔の西側は、凹凸が顕著であった。

第６－１面では、1517 畦畔より南から東側にかけて、低地を利用した水田が検出された。微高地上は、土壌化が顕著で、遺構面の起伏を検出するに留まったが、６－２～６－４層とした古土壌を除去した段階で集落が検出された。集落に関係する遺構の内、第６－１面に帰属する遺構が検出されることが想定されたが、出土遺物から第６－１面に帰属することが想定される遺構は抽出できなかった。

調査地北東側の 1534 畦畔は、弥生時代中期中葉以降に供給された砂礫層が堆積することによって形成された高まりに人為的な改変が加えられたものである。1534 畦畔周辺では、６－１層から６－３層

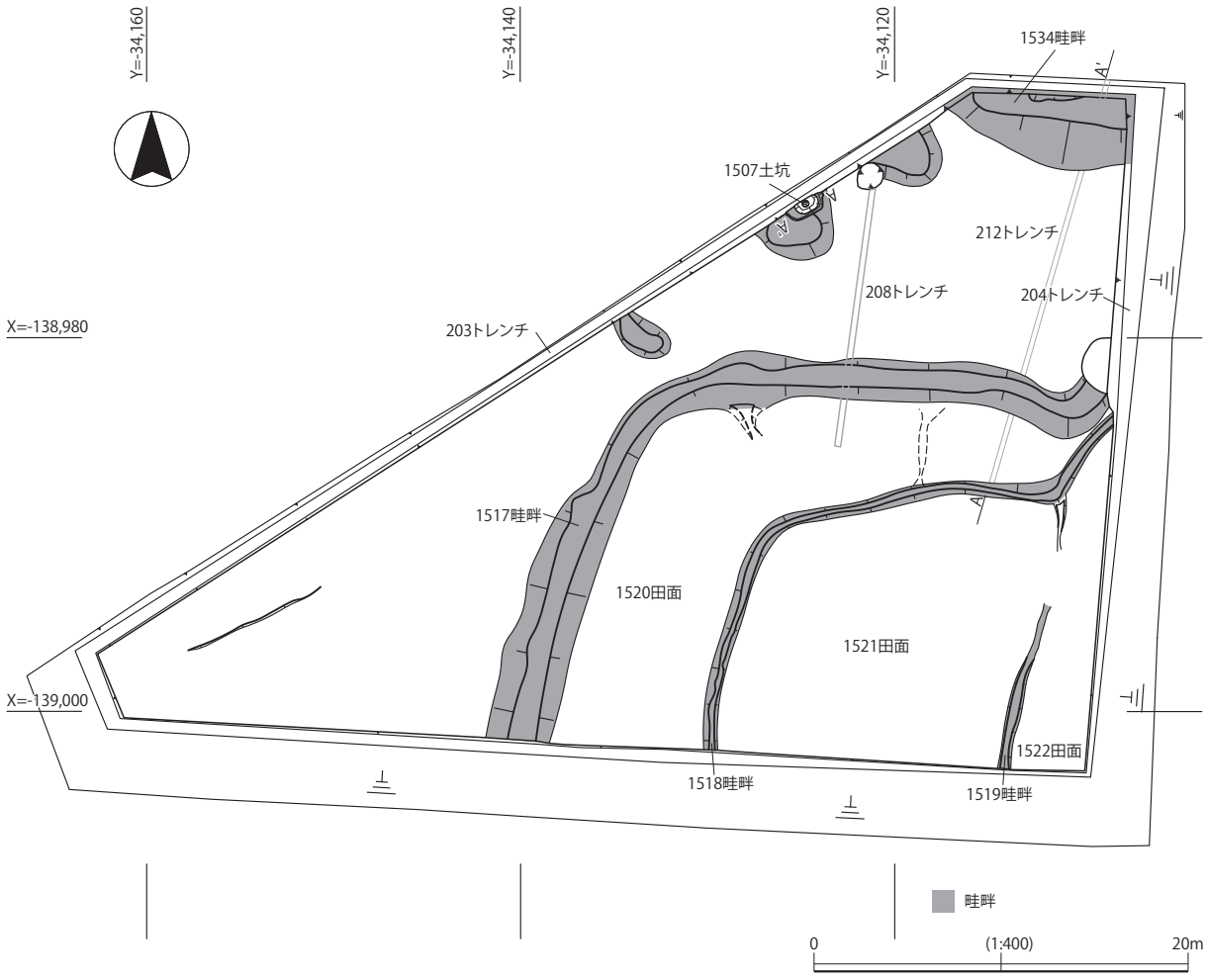
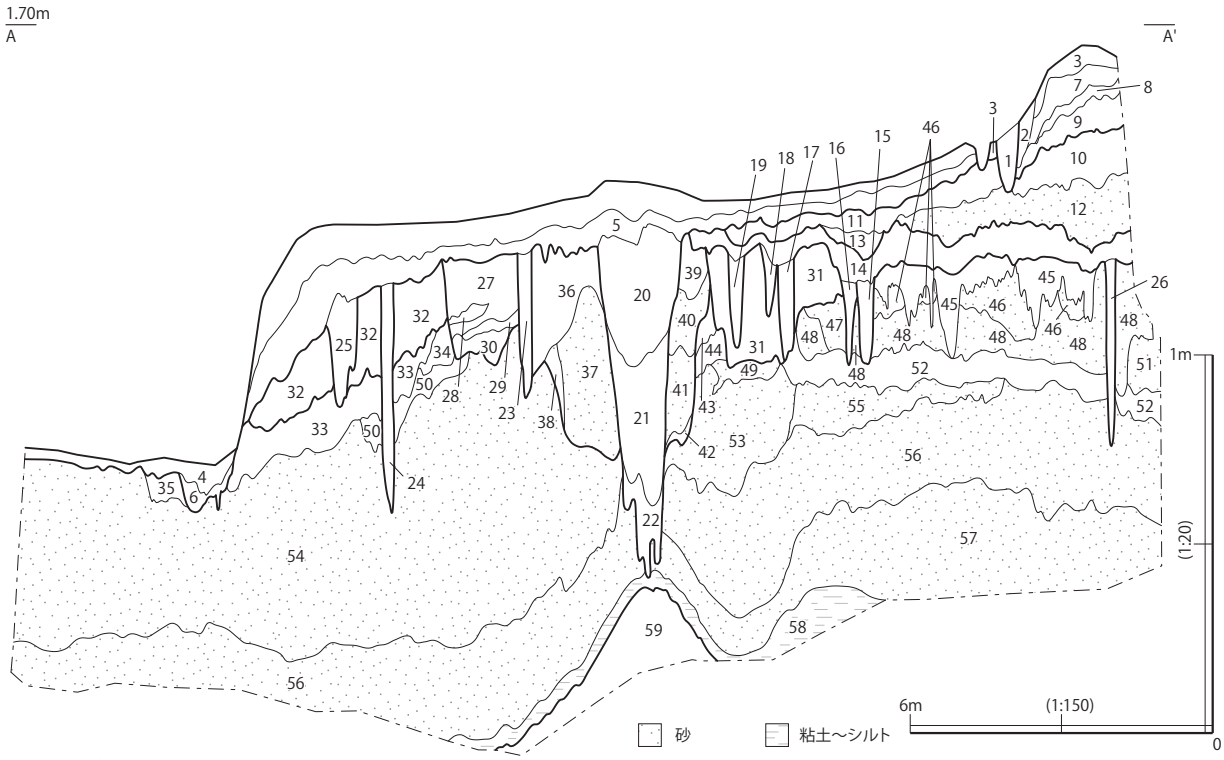


図 445　４区　第６－１面平面



212トレンチ
1　N4/0灰　極細砂混シルト　ピット埋土
2　10Y4/1灰　粗砂混シルト　6-1層
3　10YR5/1褐灰　粗砂混シルト　6-1層
4　10YR3/1黒褐　シルト混細砂～極細砂　6-1-2層
5　7.5Y3/1オリーブ黒　粘土　6-1-1層
6　10YR3/1黒褐　シルト　1528溝埋土
7　5Y5/2灰オリーブ　極細砂混シルト　6-1-2層
8　10Y4/1灰　細砂混シルト　炭化物含む　6-1-2層
9　5Y4/2灰オリーブ　粗砂混シルト　6-1-2層
10　5Y4/1灰　極細砂混シルト　6-2-1層
11　5Y4/1灰　極細砂混シルト　6-2-1層
12　2.5Y6/2灰黄　粗砂～極粗砂　6-2-2b層
13　10Y3/1オリーブ黒　粗砂混シルト　6-2-2b層
14　5Y5/1灰　極細砂混シルト　6-3層
15　10Y4/1灰　シルト混極細砂　2132溝埋土
16　10Y3/1オリーブ黒　シルト混極細砂　2059溝埋土
17　10Y3/1オリーブ黒　シルト混極細砂　ピット埋土
18　10Y3/1オリーブ黒　シルト混極細砂　ピット埋土
19　10Y3/1オリーブ黒　シルト混極細砂　2162溝埋土
20　2.5Y4/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　礫3～5㎜大を含む　2509土坑埋土
21　10Y4/1灰　中砂～粗砂　2509土坑埋土
22　5Y6/1灰　粗砂～極粗砂　2509土坑埋土
23　2.5Y5/2暗灰黄　シルト混粗砂　2533ピット埋土
24　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂～細砂　2507ピット埋土
25　10YR3/1黒褐　細砂～中砂　炭化物を多量含む　2084土坑埋土
26　2.5Y6/3にぶい黄　シルト混極細砂　遺構埋土
27　2.5Y5/2暗灰黄　シルト混細砂～中砂　2165土坑埋土
28　2.5Y4/1黄灰　細砂　炭化物を多量含む　2165土坑埋土
29　2.5Y3/1黒褐　細砂　炭化物を多量含む　2165土坑埋土
30　2.5Y6/3にぶい黄　粗砂　2165土坑埋土
31　5Y5/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　2451流路埋土
32　2.5Y5/2暗灰黄　細砂～中砂　盛土
33　5Y5/1灰　細砂～中砂　粗砂を少量含む　6-4層
34　10Y3/1オリーブ黒　粗砂　6-4層の細分
35　2.5Y3/1黒褐　細砂～中砂　6-4層
36　2.5Y6/3にぶい黄　シルト混極細砂　2450溝埋土
37　2.5Y5/2暗灰黄　粗砂～極粗砂　2450溝埋土
38　2.5Y5/1黄灰　細砂　2450溝埋土
39　2.5Y5/2暗灰黄　シルト混極細砂　2450溝埋土
40　N5/0灰　極細砂　2450溝埋土
41　5Y6/2灰オリーブ　中砂～粗砂　2450溝埋土
42　5Y6/1灰　細砂　2450溝埋土
43　10Y4/1灰　粗砂　6-5b層
44　5B5/1青灰　極細砂　6-5b層
45　5B4/1暗青灰　細砂　粗砂を少量含む　6-5b層
46　5B5/1青灰　細砂　6-5b層
47　5B5/1青灰　細砂　6-5b層
48　5Y6/2灰オリーブ　粗砂～極粗砂　6-5b層
49　5B6/1青灰　極細砂　6-5b層
50　5Y6/1灰　細砂～極細砂　6-5b層
51　5Y6/2灰オリーブ　粗砂　6-5b層
52　5B4/1暗青灰　シルト混細砂　弱い土壌化　6-5b層
53　2.5Y6/2灰黄　細砂　6-5b層
54　2.5Y6/3にぶい黄　細砂～極細砂と粗砂の互層　6-5b層
55　5B5/1青灰　細砂　6-5b層
56　5B6/1青灰　極細砂～細砂　粘土質細砂を含む　6-5b層
57　2.5Y6/1黄灰　細砂と粗砂の互層　6-5b層
58　N6/0灰　粘土　6-5b層
59　10G4/1暗緑灰　粘土　7-1層

図 446　4区　212 トレンチ断面

にかけて、地層の細分が可能であった。第６－３面の平面図に示した第６－４層の堆積範囲は、６－２層とした古土壌形成段階に、地層が収斂する範囲と重なっており、微高地の南西側の６－２層は 1517 畦畔内など堆積の範囲は限られていた。

水田（図 445 ～ 447）

水田は 1517 畦畔とそれに平行する 1518 畦畔、南東側は 1519 畦畔が東側に低くなる地形に合わせて設置される。1520 田面は、図上点線で示した範囲がわずかに盛り上がっており、小畦畔があった可能性があると想定されたが、２－１・２－２区で検出した同段階の水田の調査成果から、一定程度、平坦面が獲得できる場合には、水田区画は広かったと考えている。先述したとおり、1534 畦畔と 1517 畦畔の間は緩やかな斜面地をなし、1517 畦畔の西側は起伏が顕著で水田として土地利用されなかったと考えられる。

1517 畦畔は、水田開発に伴って微高地上の斜面をカットして、盛土が行われて構築されたものであ

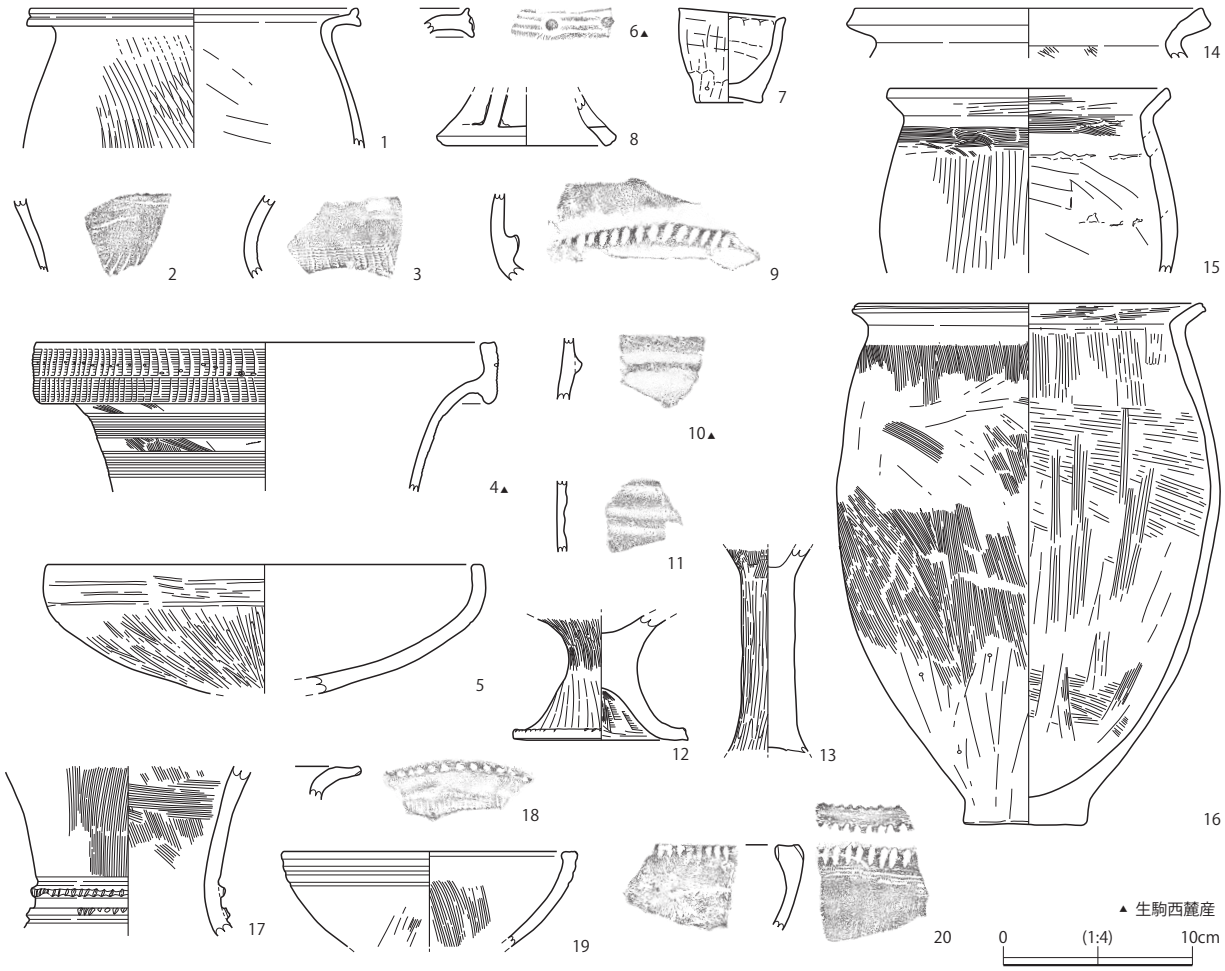


図 447　4区　6－1層他出土遺物

る。この微高地上の斜面は、第6－1－2面で 1517 畦畔西側において溝状の凹みとして検出されている。土壌化の影響で盛土の単位は不明である。1534 畦畔は北側に向かって低くなることや、断面形が蒲鉾状を呈すことから畦畔としたが、弥生時代中期後葉に形成された砂層の末端部、微高地となる可能性もある。

1517 畦畔内から出土した弥生土器は、図 447 － 17・18 を図示した。なお、1534 畦畔の南西側では 1507 土坑が検出されており、図 447 － 13 の高坏脚部が出土した。

6－1層・203 トレンチ出土遺物（図 447、図版 107）

6－1層及びトレンチから出土した弥生土器は、図 447 －1～12・14～16・19・20 を図示した。2・3・5～9・14・15 は、6－1層から出土した。2は壺体部である。細かいハケ調整の後、線刻状の沈線文が認められた。動物の爪痕の可能性がある。3は壺頸部で、簾状文が施される。5は高坏坏部で、内面は磨滅。6は壺口縁である。7はミニチュアの甕である。8は高坏脚部である。赤色の胎土を用いており、他の土器胎土と異質である。中部瀬戸内地方の搬入品か。9は壺頸部で、刻目を入れた突帯が貼り付けられる。14 は甕口縁である。15 は甕である。6－2－2層から出土した破片と接合。内面は板ナデ調整。11 は縄文土器深鉢体部片で、外面に凹線が施される。宮滝式。

1・4・10・12・19・20 は 203 トレンチから出土した。1は甕である。口縁部はつまみ上げられ、端部は横ナデにより凹線文状となっている。4は広口壺口縁である。口縁部は簾状文と刺突文、頸部外面はハケの後櫛描直線文、内面は横ナデ調整される。12 は高坏である。坏部外面はヘラミガキ、内面

はナデ調整、脚部は内外面ハケ調整される。16 はほぼ完形の甕である。外面はケズリ後ハケ調整、内面はハケ調整される。19 は高坏である。口縁部外面に凹線文が３条施される。外面は板ナデ、内面はハケ調整される。20 は鉢と考えられる口縁部である。端面の内外に刻目、外面の刻目直下には櫛描直線文が施される。10 は突帯文土器深鉢である。無刻目の突帯が貼り付けられる。６－１層とした古土壌が形成された時期は、出土した遺物により、Ⅳ様式の後半、Ⅳ－３～４様式の段階と考えられる。上限を示す遺構は第６－２－１面で検出された当該期の 1536 土坑で、下限を示す遺構は弥生時代中期前葉の土器が出土した１－３区 1947 流路・2934 土坑である。

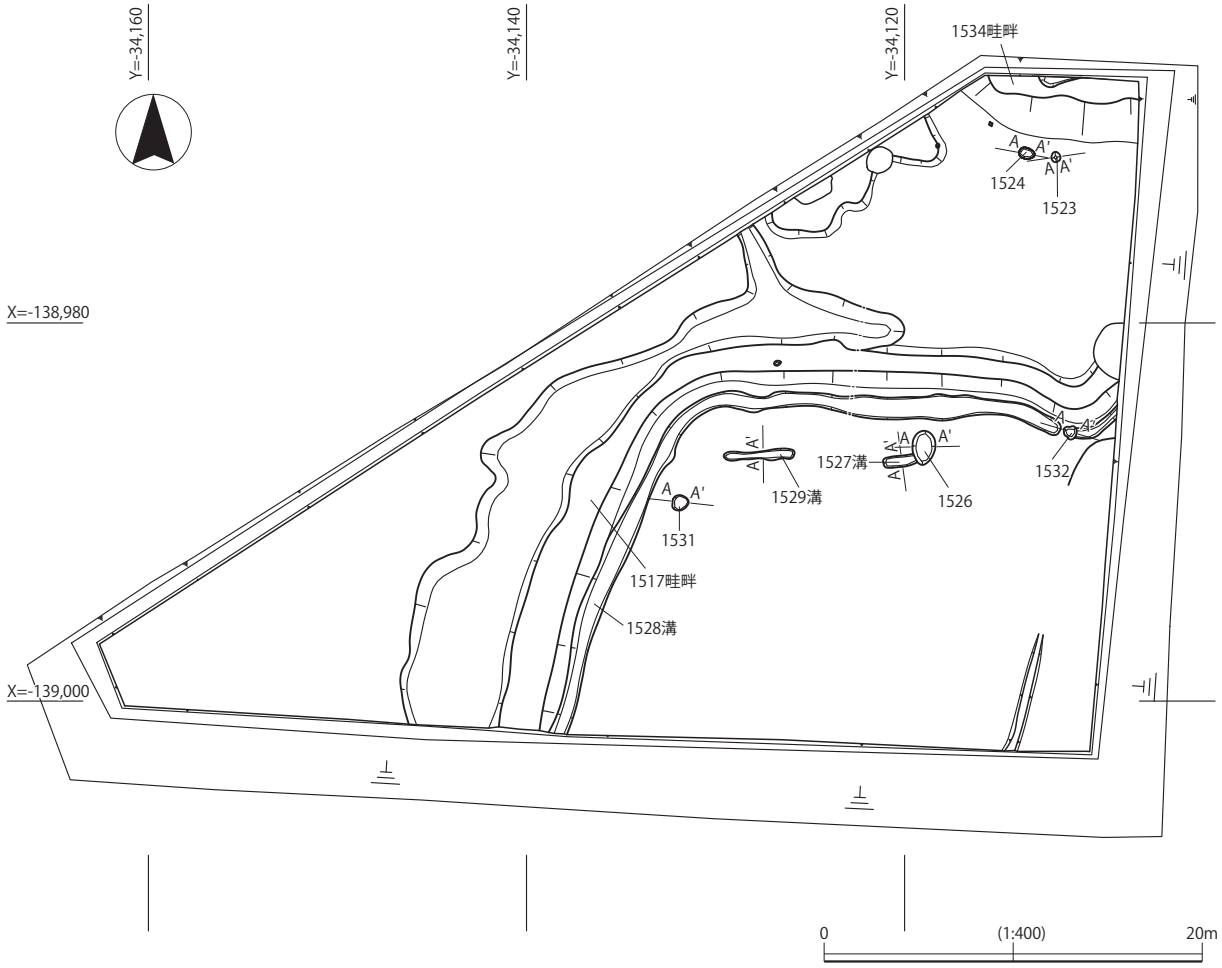


図 448　４区　第６－１－２面平面

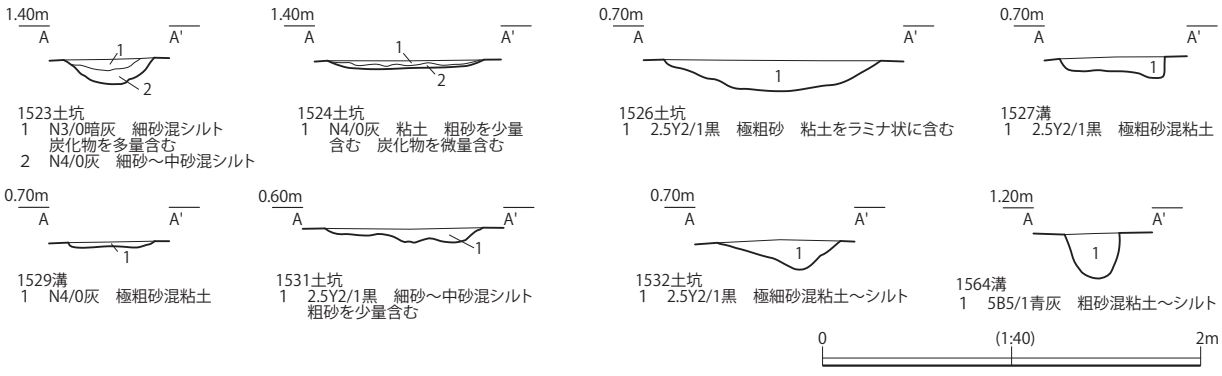


図 449　４区　1523 土坑他断面

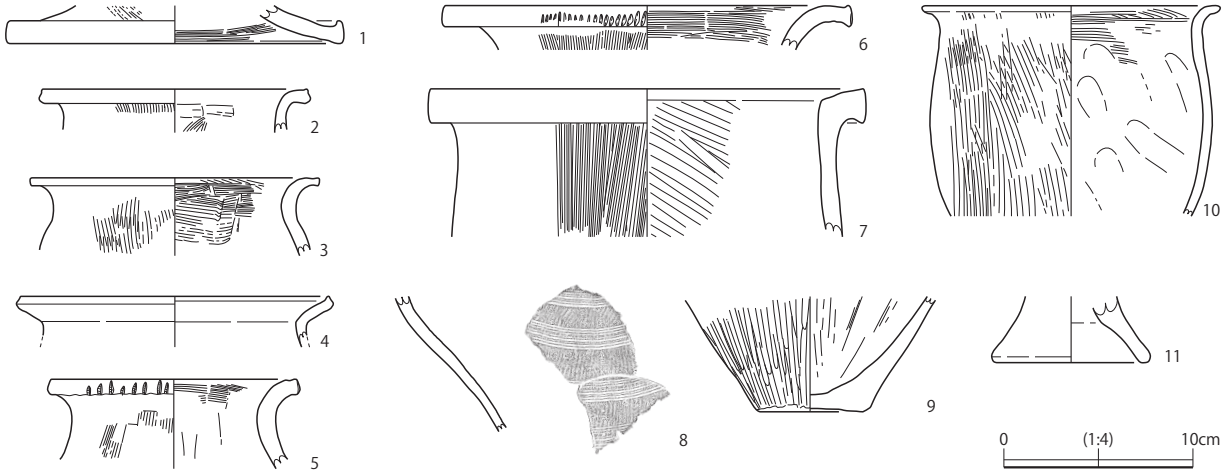


図 450　4区　1528 溝・1526・1537 土坑出土遺物

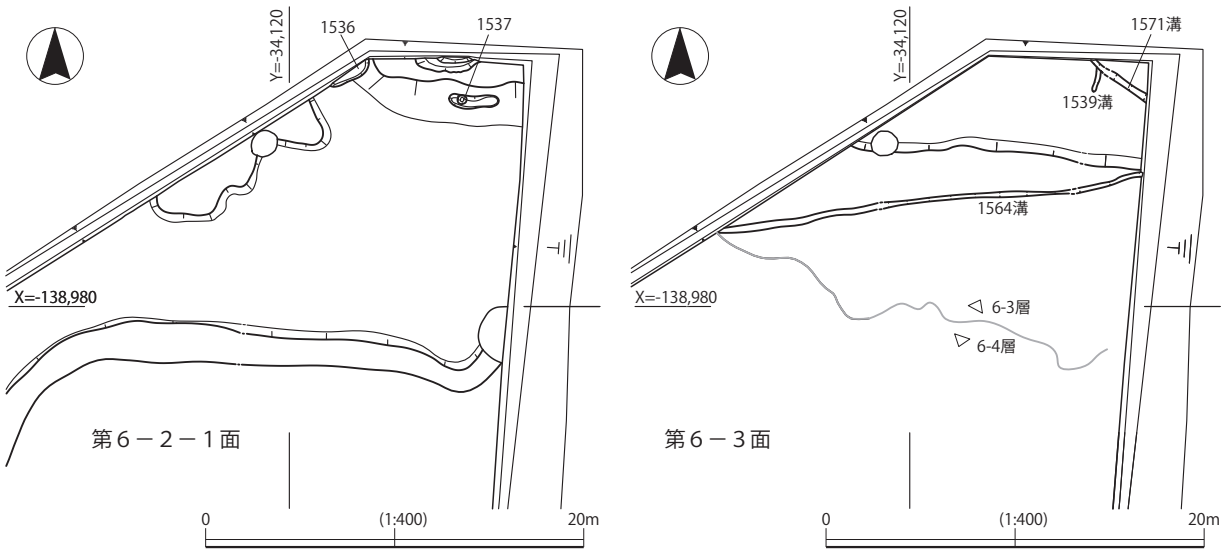


図 451　4区　第６－２－１・６－３面平面

第６－１－２面（図 448）

６－１層を除去して検出した遺構面で、６－２層とした粗砂～極粗砂混シルトの上面に当たる。田面では作土層が薄く、第６－１面 1520 田面の南東は６－５ｂ層が露出する。1517 畦畔が造成される前の斜面地が検出された。1517 畦畔の盛土を外した状態が本来の微高地斜面の形状であったと考えられる。第６－１－２面では、1528 溝南東側で、1526 土坑・1527 溝等が検出された。なお、1528 溝南東側は６－１～６－４層が収斂しており、検出された遺構には第６－１－２面を遡る遺構面に帰属するものが含まれる。

1528 溝（図 448・450）

第６－１面の 1517 畦畔に沿って検出された。６－１層は溝の上部に形成されており、廃絶時には完全に埋没していたと考えられるが、６－１層下面が溝状に低くなっており、水田と同時期に機能したと考えられる。規模は、幅 1.6 m、深さ 0.2 mである。東側の 1532 土坑を検出した部分ではブリッジ状に高くなっている部分が検出された。1528 溝から出土した弥生土器は、図 450 －１～９に図示した。１は蓋、２～４は甕である。５は壺口縁部で、口縁端面に刻目が施される。６は壺口縁部である。７は鉢、８は壺、９は甕である。９の外面はヘラミガキ、内面は板ナデ調整される。Ⅲ－２様式。

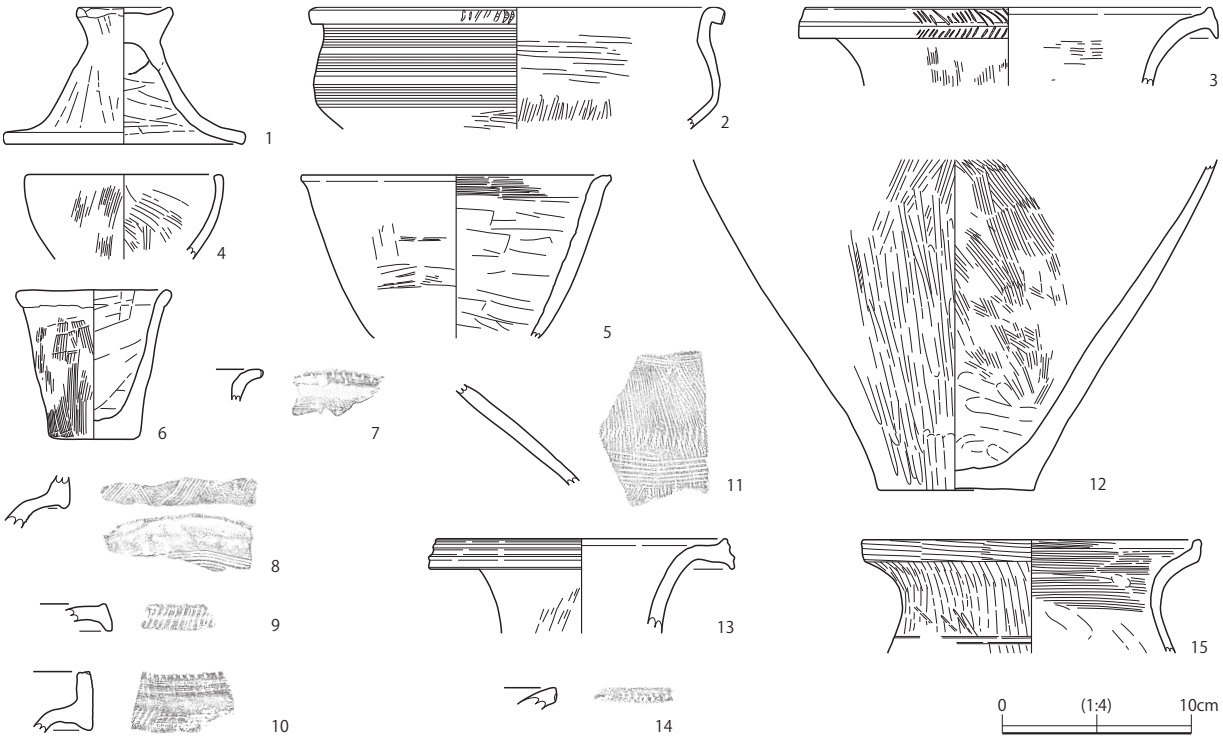


図 452　4区　6－2－2ｂ層出土遺物

1523・1524・1526・1527・1531・1532 土坑・1529 溝（図 448・449・450）

1523・1524 土坑は、1534 畦畔の南側で検出された。1523・1524 土坑は、埋土に炭化物が含まれることが特徴で、炉跡の可能性も想定して調査を行ったが、周辺で竪穴建物等は確認できなかった。また、第６－１面 1520 田面に相当する範囲では、土坑・溝が複数検出された。この内、1526 土坑から図 450 － 10 の弥生土器甕が出土した。10 はⅢ－１様式に位置付けられる。

第６－２－１面（図 451）

調査地の北東で、６－１層から６－３層までの堆積を細分して検出した遺構面である。1534 畦畔と、南西側で６－２－２ｂ層によって形成されたわずかな高まりが検出された。1534 畦畔と本来一連のものであった可能性がある。第６－２－１面では、調査地北東部で土坑が検出された。1537 土坑から図 450 － 11 の脚台が出土している。

1536 土坑（図 450・451・453、図版 28・103・108）

1536 土坑は、北西側がトレンチを設定した場所に当たり、全容は不明である。平面形は不整形な形状を示し、規模は検出長 2.4 m、検出幅 0.6 m、深さ 0.2 mである。埋土は、底面直上が加工時形成層と考えられる極細砂混シルト、中層が粗砂混シルト、上層が湿性堆積物のシルト質粘土である。弥生土器高坏の坏部が加工時形成層の直上から出土した。図 453 － 1 は口縁部外面に凹線文４条が施される。坏部下位はハケ調整の後ヘラミガキで、脚部との接合部には沈線文２条が施される。脚部は坏部に直接の接合関係はなく、復元的に図示した。瀬戸内地方の影響を受けて成立した土器と考えられる。Ⅳ－３～４様式。

第６－２－２ｂ面（図 445）

６－２－２層とした極細砂混シルトを除去して検出した遺構面である。1534 畦畔周辺に堆積する６－２－１層を除去して検出しており、遺構は確認されなかった。

６－２－２ｂ層出土遺物（図 452）

６－２－２ｂ層から出土した弥生土器は、図 452 －１～ 15 を図示した。１は蓋で、内外面は板ナデ調整される。２は鉢である。口縁端面には櫛描列点文が施される。３は広口壺口縁部である。口縁端面は櫛描列点文が２単位施される。４・５は鉢である。４の内外面はハケ調整される。６は小型の甕である。７は甕口縁部である。８は壺で、口縁部外面に櫛描波状文、頸部外面に櫛描直線文が施される。９は直線的な刻目が口縁端部に施される。10 は壺口縁部である。付加状口縁部に刻目と、櫛描簾状文が施される。下段は器壁から離れ気味に施文されるため、列点文に近い簾状文である。11 は壺体部で、外面はハケ後､櫛描直線文が施される。12 は甕である。第６－３面･６－３層から出土した破片と接合。外面はハケの後ヘラミガキ、内面はハケ調整、底面はナデ調整される。13 は口縁端部に凹線文３条が施される。外面は板ナデ調整、内面は磨滅しており、詳細は不明である。Ⅳ－２～３様式。14 は壺口縁部で、口縁端面には櫛描列点文が施される。15 は近江系の甕である。外面は粗いハケ調整で沈線文２条が施される。13 が出土した資料の中では最も新しく位置付けられるもので、第６－１面 1534 畦畔を形成する６－２－２ｂ層は弥生時代中期後葉以降に形成されたものと考えられる。

第６－３面（図 451・455 ～ 466、図版 28）

６－２－２ｂ層とした砂層を除去して検出した遺構面である。第６－３面では､溝が３条検出された。1571 溝は、上面を覆う６－２－２ｂ層下面に帰属する。規模は幅 0.4 ｍ、深さ 0.1 ｍである。埋土は

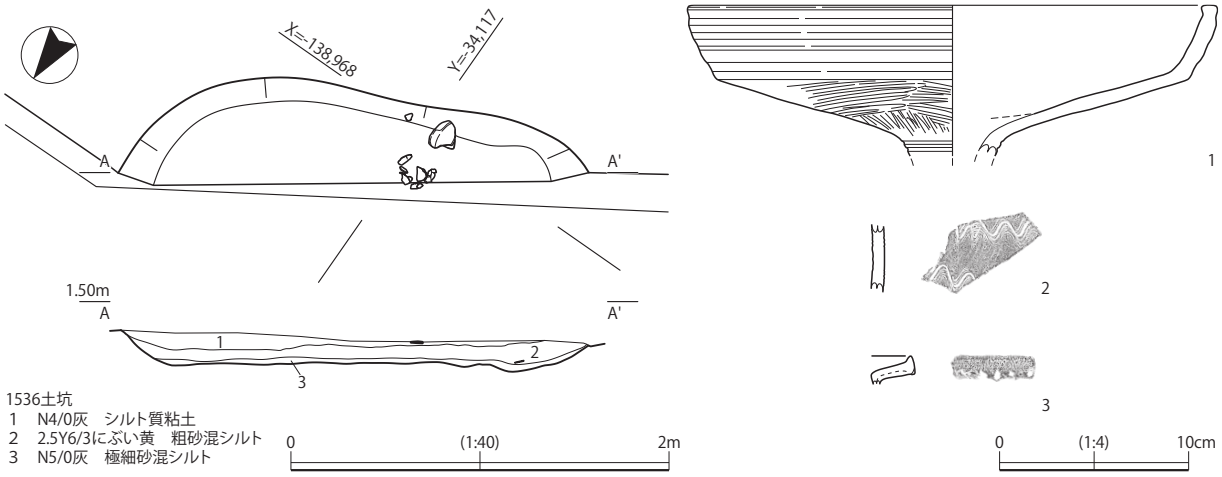


図 453　４区　1536 土坑平・断面・1564 溝出土遺物

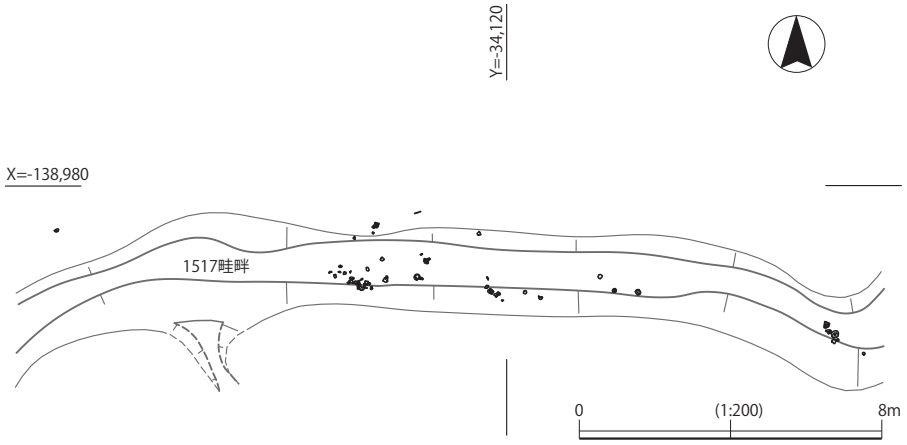


図 454　４区　1517 畦畔内遺物出土状況平面

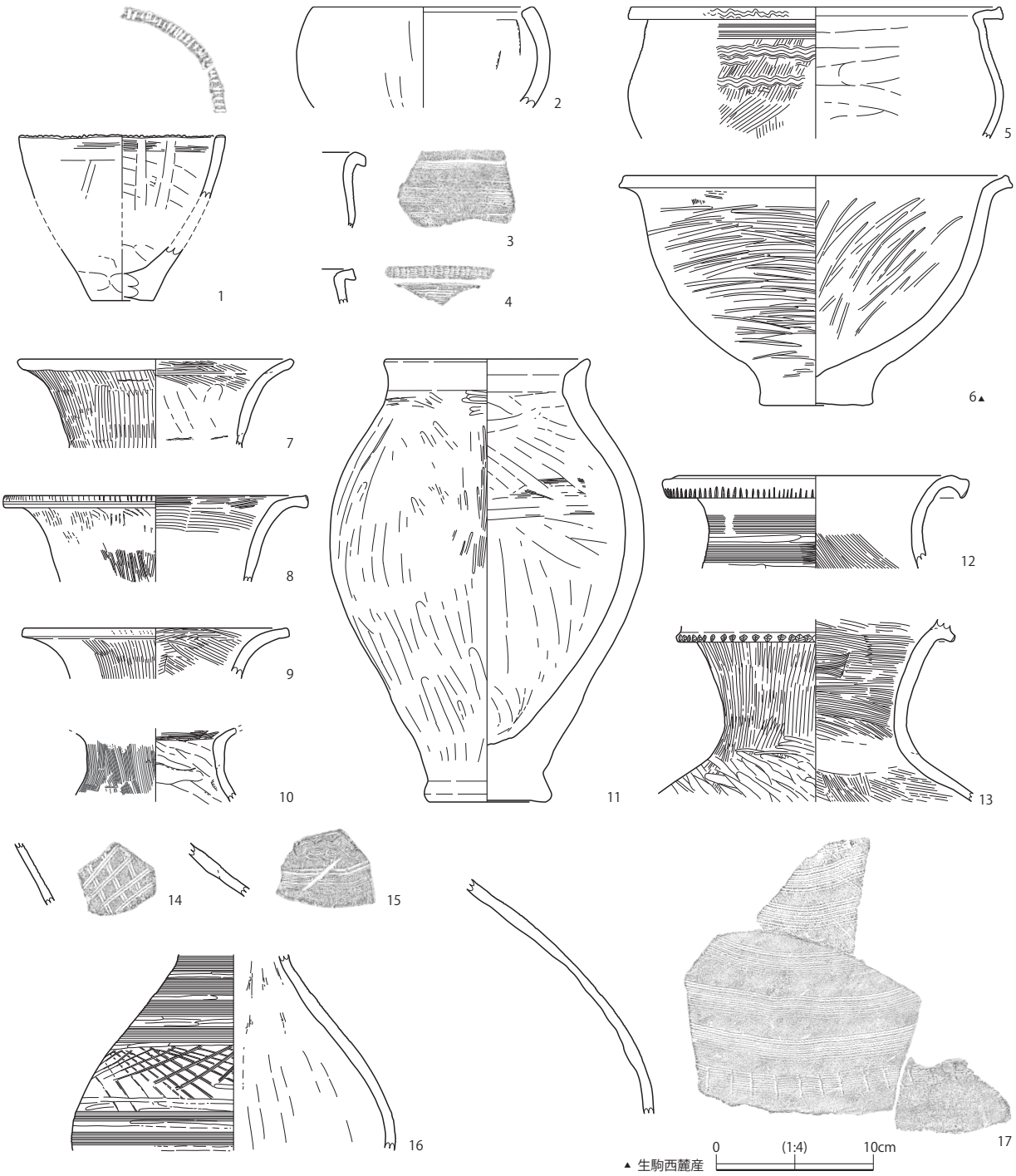


図 455　4 区　1517 畦畔内出土遺物（1）

砂層を主体とする。1564 溝の規模は、幅 0.3 m、深さ 0.2 mである。埋土は、粗砂混シルト～粘土である。1564 溝から、図 453 － 2 ・ 3 が出土した。 2 は壺体部で櫛描波状文が施される。 3 は甕口縁部で端面下端に刻目が施される。Ⅲ様式。

第 6 － 1 面で検出された 1517 畦畔と水田との境界部で、1517 畦畔内の基底面で、完形或いは一部が破損した弥生土器が出土した。1517 畦畔直下から出土した弥生土器は、図 455・456 に図示した。図 455 － 1 ～ 6 は鉢である。 1 は、口縁端部に刻目が施される。外面はナデ、内面は板ナデ後、間隔を空けてナデ調整される。 2 は椀状を呈するもので、細片を図化した。 3 は無文、 4 は簾状文、 5 は櫛描波状文がそれぞれ施される。 6 は 2018 溝・2007 土坑から出土した破片と接合。 7 ～ 17 は壺である。

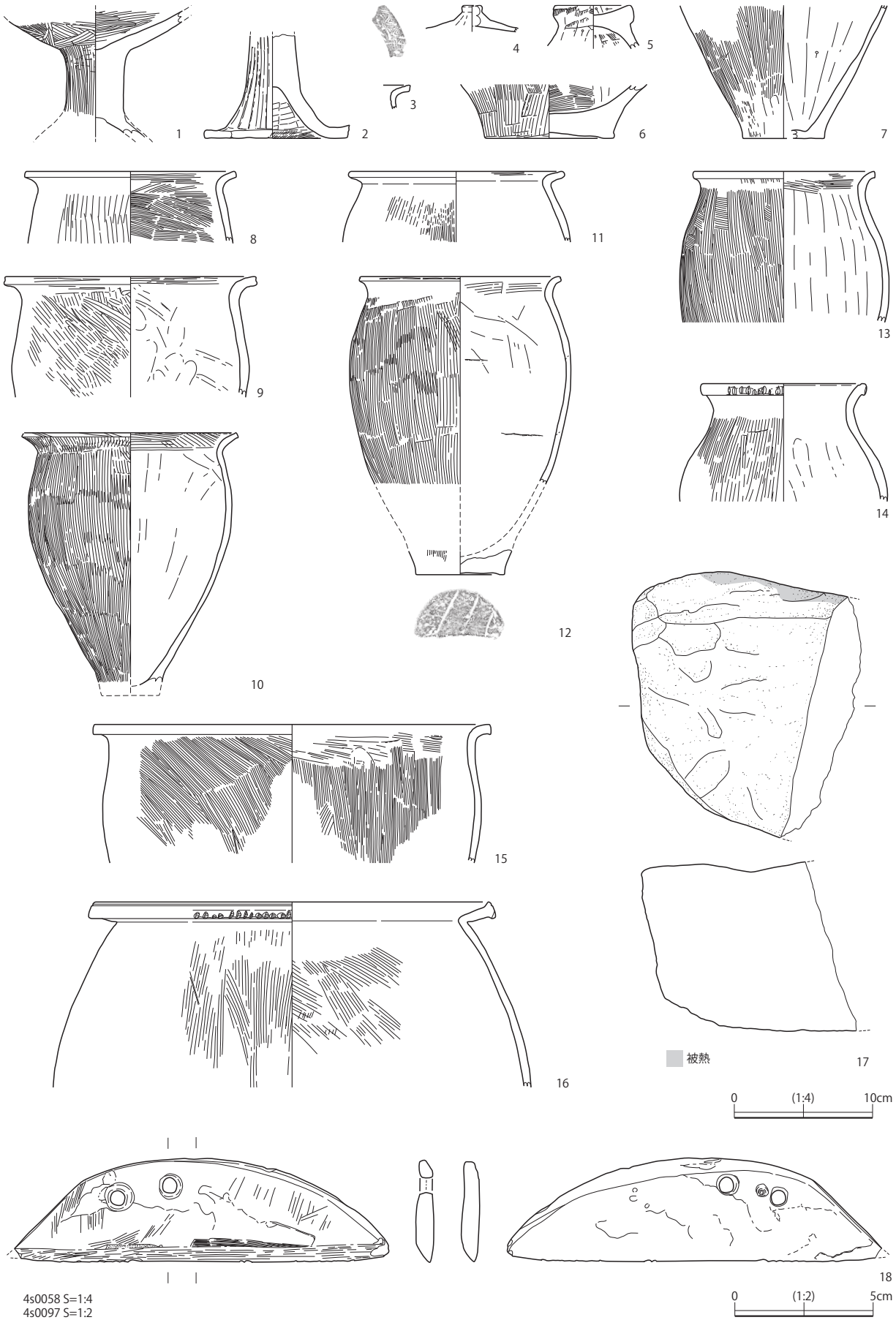


図 456　4区　1517 畦畔内出土遺物（2）

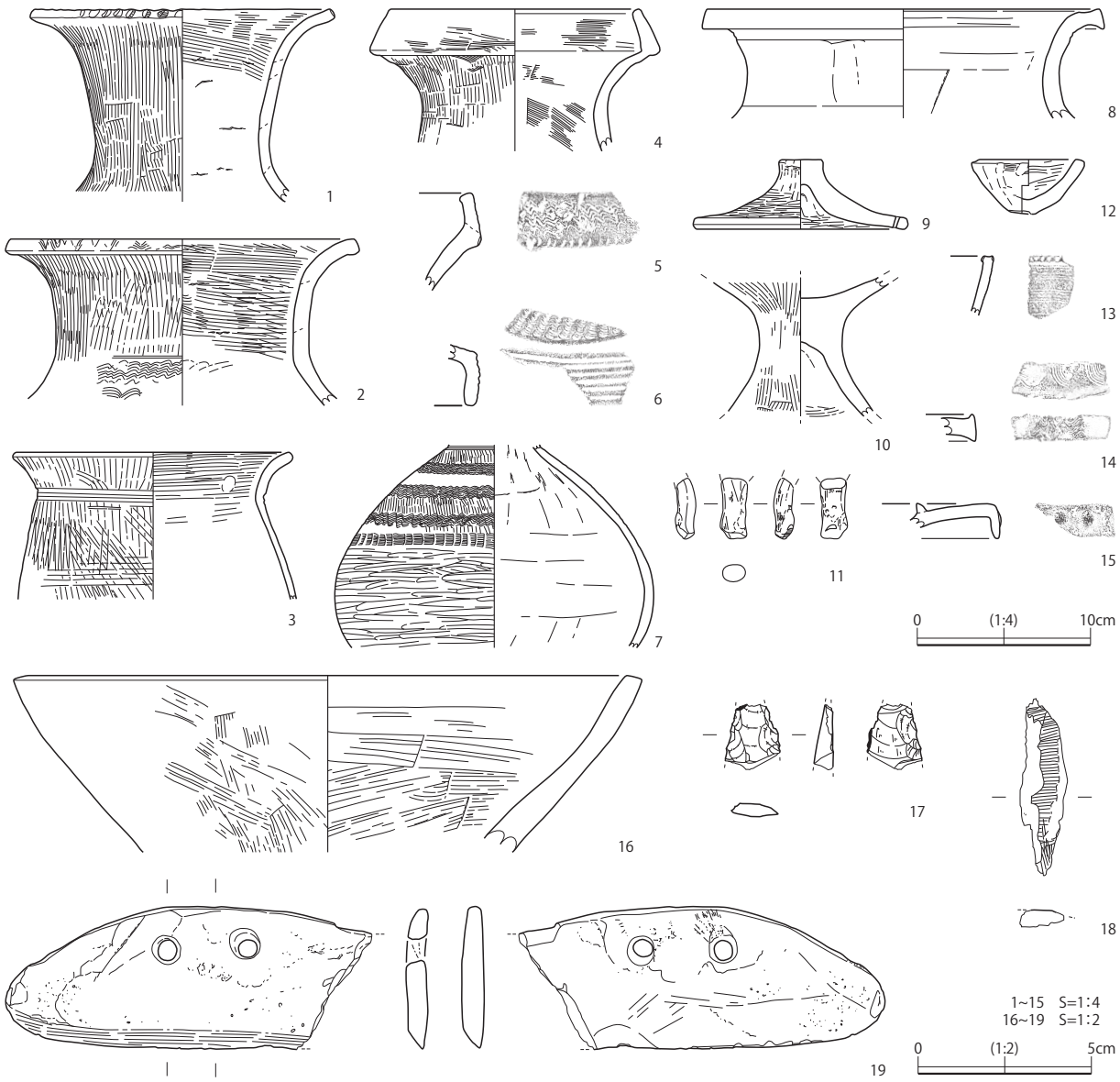


図 457　4区　6－3層出土遺物

8は口縁端部に線状の刻目が施される。11は短頸の壺である。水田側の6－1層から出土した破片と接合する。厚手の器壁で、粗い胎土が用いられる。外面は単位幅が広いヘラミガキ、内面はナデ調整され、一部にハケメが残る。用途不明である。12は太頸の広口壺である。13は口縁端面が斜位に垂下しており、端面下位に櫛目の刻目が施される。2034ピット・2062土坑から出土した破片と接合。16は細頸壺の体部で、外面に櫛描直線文、櫛描斜格子文が施される。17は櫛描直線文、櫛描簾状文が施される。水田側の6－1層から出土した破片と接合。図456－1・2は高坏脚部で、1の内外面はヘラミガキ、2の外面は粗いハケ調整が施される。3は甕口縁部で、口縁部内面に櫛描波状文が施される。4・5は蓋で、4は壺蓋である。5は細片を図化。形状から甕蓋と判断した。6～14は甕である。8の外面は粗いハケが施される。10は外面ハケ、内面は板ナデ調整される。11は外面ハケ、内面は磨滅しており詳細は不明である。14は細片を図化。口縁端部は櫛状工具による刻目が施される。15・16は甕ないし鉢である。16は全体に磨滅するが、口縁端部と体部に煤の付着が認められる。17は台石である。一部被熱する。18は石庖丁である。裏面には貫通孔の間に未貫通の穴が認められる。

６－３層出土遺物（図 457、図版 108）

６－３層から出土した遺物は、図 457 に図示した。１・２・４～８は壺である。１は端部に櫛目の刻目が施される。外面はハケ調整、内面はハケ・ナデ調整される。２は口縁端面に櫛描波状文、頸部に沈線文・波状文が施される。３は甕で、頸部及び胴部に横方向のハケ調整が施される。近江系。４は付加状の口縁をもつ広口の長頸壺で、内外面はハケ調整が施される。５は口縁端面に刻目と櫛描波状文が施される。６は垂下口縁の端面に凹線文６条､内面に櫛描波状文が施される。７は細頸壺の体部である。外面はハケ調整の後、櫛描直線文・波状文、ヘラミガキが施される。８は口縁端部の内側が挟み込まれることによって、断面が三角形状を呈す。外面はナデ、内面は板ナデ調整される。９は壺蓋である。外面は横方向のヘラミガキ、ナデ・ヘラミガキが施される。10 は高坏である。外面は粗いハケメ、内面はナデ及びハケメの痕跡が残る。11 は把手か。ナデ調整によって仕上げられる。12 はミニチュアの鉢である。外面は縦方向のナデ、内面はハケメに近い板ナデ調整が施される。13 は鉢である。外面に櫛描直線文が施される。14 は口縁部に櫛描波状文・扇形文が施される。15 は垂下口縁の壺あるいは水平口縁の高坏で、端面に円形浮文が施される。16 は高坏形土製品である。器壁は厚く、内外面はハケ調整が施される。17 はサヌカイト製石鏃である。上下端は折損。刃部は表面から調整剥離を行い、片側は裏面からも調整剥離を加えて刃部を整えたようである。18 は磨製石器で、器種は不明。縦・横方向の研磨痕が残る。19 は石庖丁である。貫通孔は２箇所開けられる。刃部は片面で擦過痕が観察される。

図 458　４区　第６－４面平面

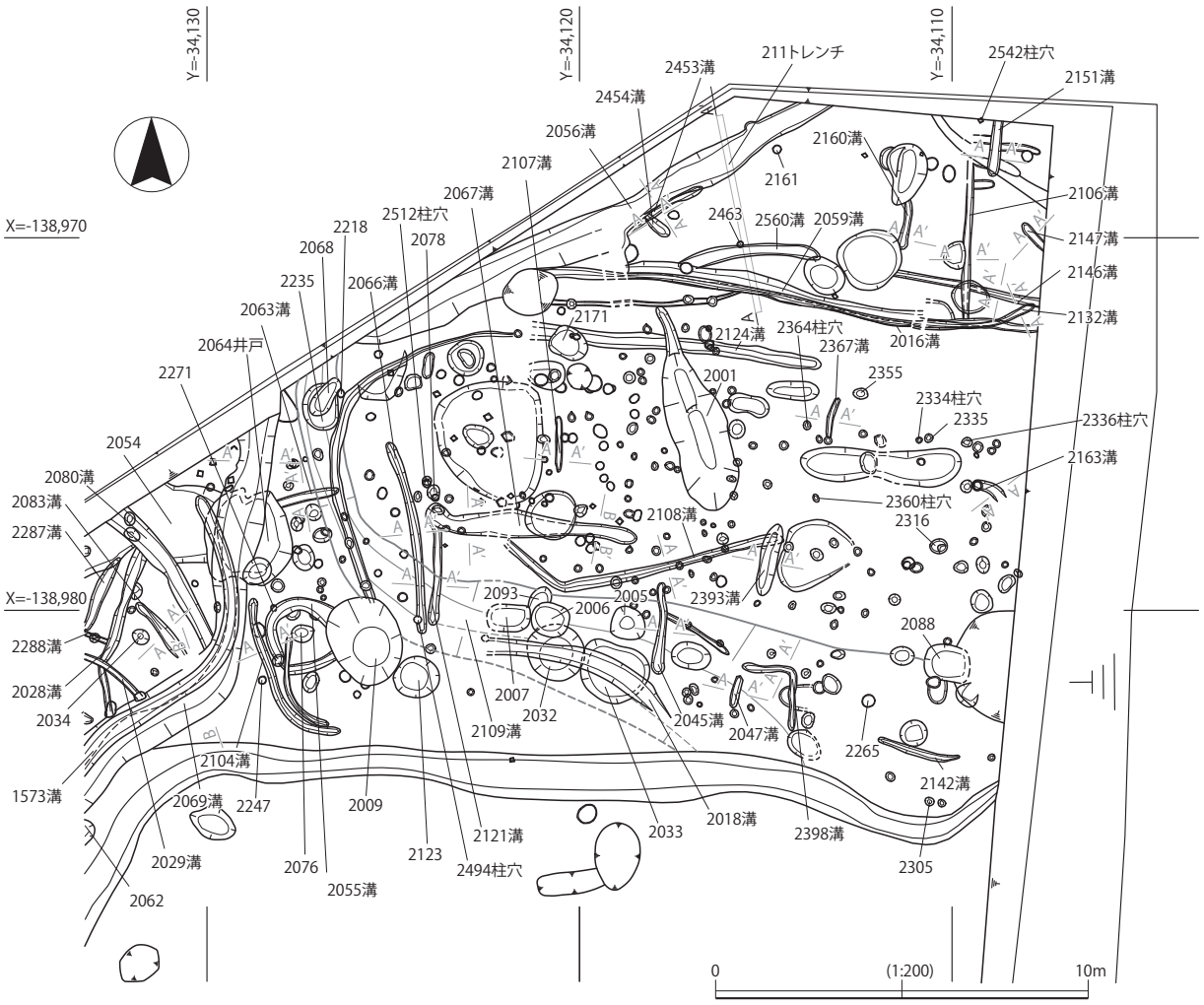


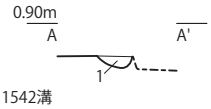
図 459　4区　第６－４面北東側平面

第６－４面（図 458）

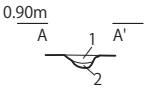
６－３層を除去して検出した遺構面で、６－４層とした細砂混シルトの上面に当たる。ただし、６－４層は遺存状況が悪く、調査地の大半は６－５ｂ層上面が露出する。６－４層は暗色が強く、６－５ｂ層の上部を母材として形成されており、６層中、最も古い段階に形成された古土壌である。北東側の微高地斜面に形成された６－４層と、第６－５ｂ面の 2111 溝が形成された６－４層の形成時期と対比可能かどうかという点については、1573 溝等により地層の連続性は把握できなかったため、詳細は不明である。６－５ｂ層の上面を反映して調査地の北東側の微高地が最も高く、次いで 1573 溝に囲まれた範囲が高く、調査地南西側は平坦である。

第６－４面の地形は、第７―１面で検出された水田と溝の立地を反映したもので、１）第７－１面とした水田が泥層によって埋没する、２）東側から土砂が供給され、調査地南東側に砂の高まりが形成されるという変遷を辿ったと考えられる。第７－１面 2556 溝に対して土砂の供給が少量であったため、第６－５ｂ層の上面においても北側が高くなったと考えられる。第７－１面では 2556 溝の南側は 10 層上面から地形的に高いところで、そのような地形に規制されて、６－４ｂ層とした砂層が供給されたと考えられる。

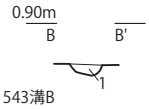
第６－４面では、溝・土坑・柱穴・ピットが検出された。調査地の北東部以外は古土壌が連続して堆積しているため、微高地で検出された遺構の中には、上層に帰属するものも含まれている可能性もある



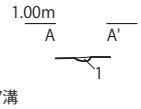
1542溝
1　10YR4/1褐灰　シルト混細砂



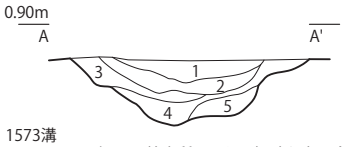
1543溝A
1　10YR3/1黒褐　シルト混細砂～中砂
2　10YR5/1褐灰　粗砂～極粗砂(6b層)を少量含む
　シルト混中砂を少量含む



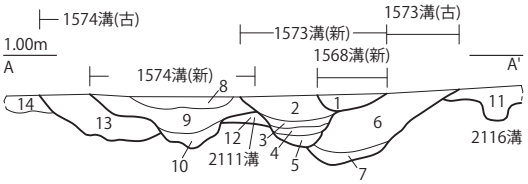
1543溝B
1　10YR4/1褐灰　中砂～粗砂



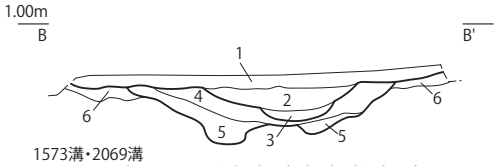
1567溝
1　10YR4/1褐灰　細砂～中砂



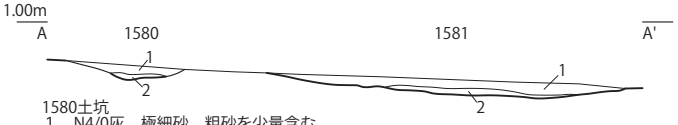
1573溝
1　10YR4/1褐灰　粘土質シルト　粗砂を少量含む
2　N3/0暗灰　極細砂混シルト　炭化物を微量含む
3　N4/0灰　極細砂混シルト
4　N5/0灰　粘土　極細砂混シルト(6b層)偽礫を少量含む
5　2.5Y5/1黄灰　シルト　粗砂を多量含む



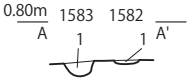
1568・1573・1574・2111・2116
1　5Y4/1灰　シルト混極細砂～細砂　1568溝(新)埋土
2　10YR3/1黒褐　シルト混極細砂～細砂　1573溝(新)埋土
3　10YR2/1黒　細砂　炭化物を多量含む　1573溝(新)埋土
4　7.5YR5/4にぶい褐　シルト　焼土塊を多量含む　1573溝(新)埋土
5　7.5Y3/1オリーブ黒　シルト混粗砂　1573溝(新)埋土
6　10YR5/2灰黄褐　シルト混中砂～粗砂　1573溝(古)埋土
7　10YR4/1褐灰　粘土混細砂　1573溝(古)埋土
8　7.5Y4/1灰　極細砂混シルト　中砂～極粗砂を少量含む　1574溝(新)埋土
9　7.5Y5/1灰　シルト混極細砂　1574溝(新)埋土
10　7.5Y4/1灰　シルト混細砂　1574溝(新)埋土
11　10YR5/1褐灰　シルト混極細砂　2116溝埋土
12　10YR2/2黒褐　シルト　炭化物を多量含む　2111溝埋土
13　5B6/1青灰　極細砂　1574溝(古)埋土
14　2.5Y6/2灰黄　シルト混極細砂～細砂　6-4層



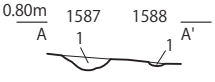
1573溝・2069溝
1　10YR5/1褐灰　シルト混細砂～中砂　粗砂を少量含む　6-3層
2　10YR4/1褐灰　細砂～中砂　粘土を少量含む　1573溝埋土
3　2.5Y5/1黄灰　細砂　水成層　1573溝埋土
4　10YR4/1褐灰　シルト～粘土混極細砂　2069溝埋土
5　10YR3/1黒褐　シルト混細砂　2069溝埋土
6　2.5Y4/1黄灰　細砂混シルト　6-4層



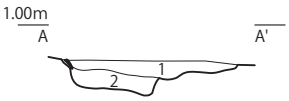
1580土坑
1　N4/0灰　極細砂　粗砂を少量含む
2　10YR3/1黒褐　シルト混極細砂　炭化物を多量含む
1581溝
1　N4/0灰　シルト混極細砂
2　10YR3/1黒褐　シルト混極細砂　炭化物を多量含む



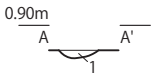
1582溝
1　10YR5/2灰黄褐　粘土混細砂～中砂
1583溝
1　10YR4/1褐灰　粘土混細砂



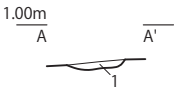
1587溝
1　10YR5/1褐灰　粗砂
1588溝
1　10YR5/1褐灰　粗砂～細砂



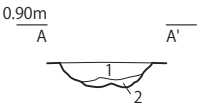
1594溝
1　10YR3/1黒褐　シルト混粗砂～極粗砂
2　N4/0灰　シルト混極細砂



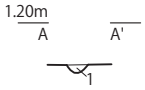
1595溝
1　10YR4/1褐灰　シルト混
　中砂～粗砂



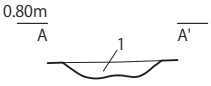
1597溝
1　2.5Y6/3にぶい黄　シルト混粗砂



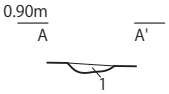
1598溝
1　10YR3/1黒褐　中砂～粗砂混シルト
2　5Y5/1灰　シルト(5-2b層)偽礫　加工時形成層



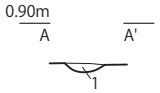
2015溝
1　2.5Y5/1黄灰　シルト混中砂



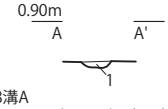
2023溝
1　2.5Y4/1黄灰　極細砂～細砂混シルト



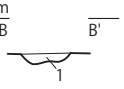
2026溝
1　10YR4/1褐灰　シルト混細砂～中砂
　炭化物を少量含む



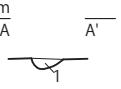
2027溝
1　10YR4/1褐灰　極細砂～中砂混シルト
　粘土偽礫を含む



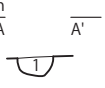
2028溝A
1　10YR4/1褐灰　細砂～中砂混シルト
　粘土偽礫を微量含む



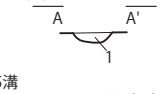
2028溝B
1　10YR4/1褐灰　細砂～中砂混シルト



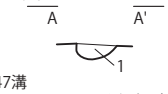
2029溝
1　10YR2/1黒　粘土質シルト
　炭化物を少量含む



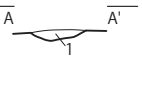
2039溝
1　N4/0灰　シルト混粗砂



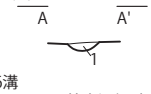
2045溝
1　N4/0灰　シルト混中砂～粗砂



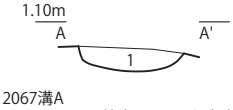
2047溝
1　N4/0灰　シルト混細砂～中砂



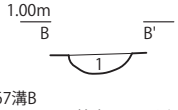
2063溝
1　10YR4/1褐灰　シルト質細砂～中砂
　炭化物を少量含む



2066溝
1　N4/0灰　粘土混細砂～中砂



2067溝A
1　N4/0灰　粘土～シルト混極粗砂



2067溝B
1　N4/0灰　粘土～シルト混極粗砂

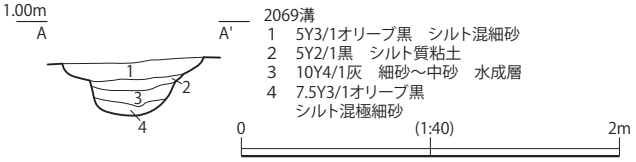


図460　4区　第6－4・6－5b面溝断面（1）

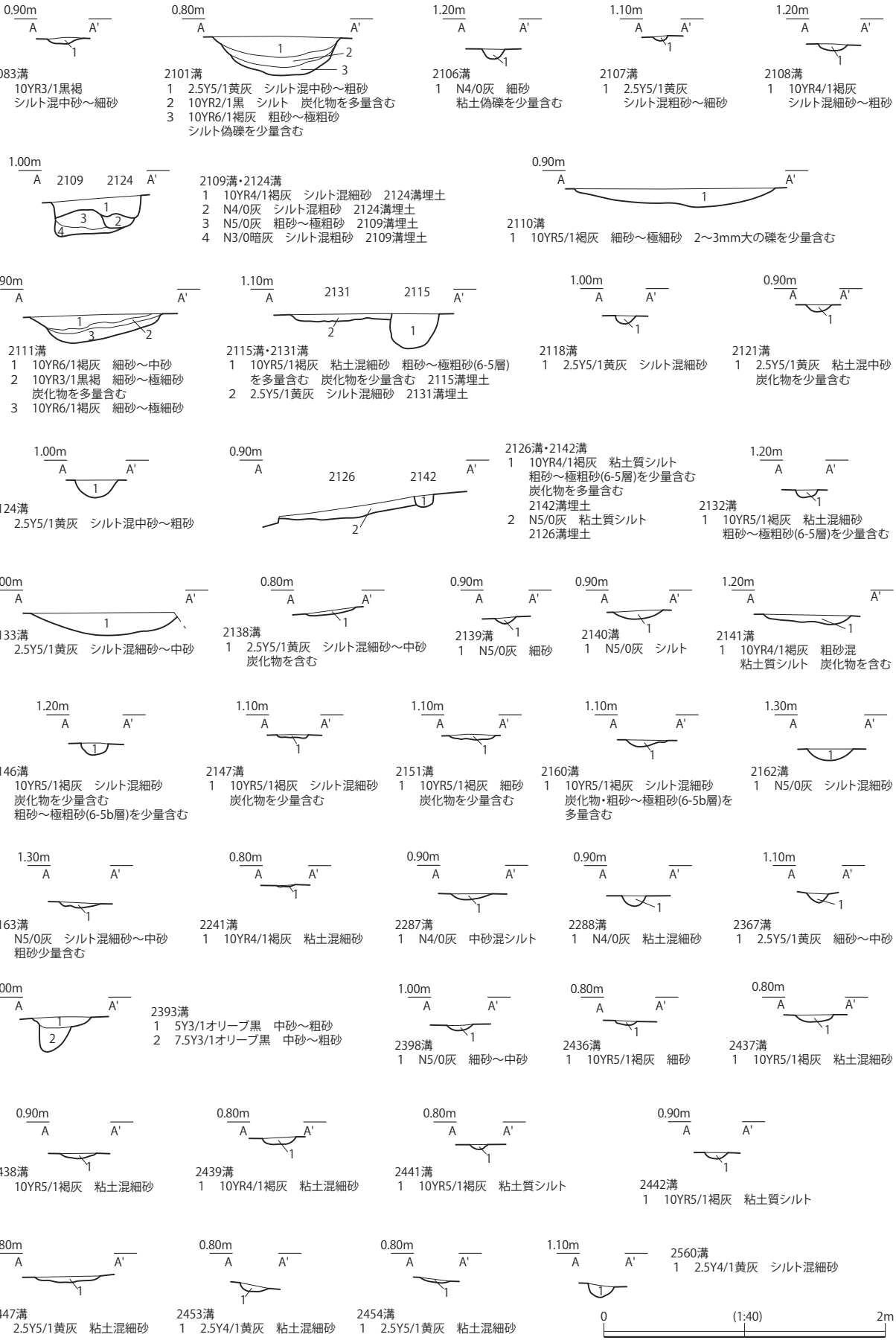


図461　4区　第6－4・6－5b面溝断面（2）

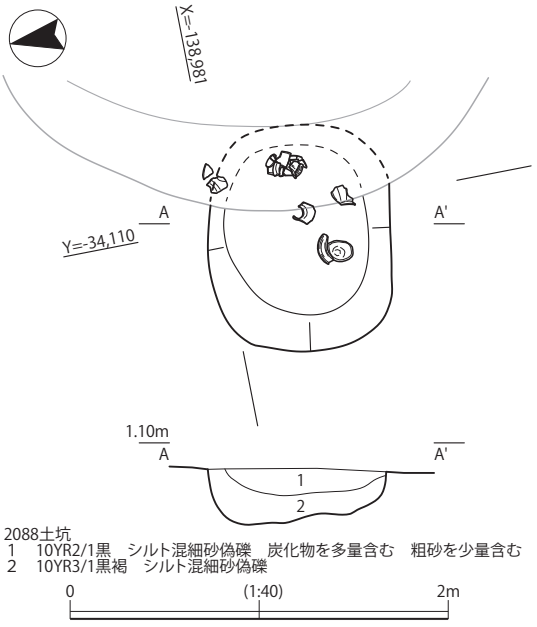


図 462　4区　2088 土坑平・断面

が、微高地上で検出した遺構として一括して報告する。

なお、柱穴・ピットの中には、掘立柱建物を構成する可能性のあるものもあったが、今回の調査で明確に構造が復元できる掘立柱建物はなかった。また、竪穴建物についても、今回の調査地内では検出されなかった。微高地の居住可能な面積を確保できるのは、調査地西側部分のみであるが、起伏が顕著であることや溝の配置状況から竪穴建物の存在を想定するのは難しい。

第６－４面と第６－５ｂ面で検出した溝には、溝機能時及び溝加工時の生活面は、古土壌の形成によって失われており、どの段階にどの溝が機能したのかという点については、検出した順番ではなく、層位的な検証、切り合い関係や出土遺物によって行わなければならない。今回、溝から出土遺物については、細片を除いたすべてを図示した。溝から出土した弥生土器はⅢ－１～２様式に位置付けられ、Ⅲ－１様式に位置付けられるものが大半を占めた。溝の規模は、幅 0.1 ～ 0.3 ｍで深さが 0.05 ～ 0.1 ｍ程度のものと、1573・2056 溝のように幅１ｍ前後で、深さ 0.5 ｍを超えるものがあり、後者は基幹水路であったために複数回の掘り直しが行われている。

また微高地は溝が検出された範囲で以下のように分けることができる。１）2056 溝周辺、２）2124・2109 溝周辺、３）1573 溝周辺、４）1543 溝周辺、５）1587・1588 溝周辺が該当する。１）・３）は基幹水路としての機能、２）・４）は用排水や区画としての機能、５）は灌漑と区画として機能、がそれぞれあったと考えられる。

また、調査地南西の 2117 土坑周辺を除き、今回検出された土坑・井戸は単独で機能したものではなく、溝と接続して機能したと考えられる場合があった。微高地と水田の境界部に掘削されたもので、水

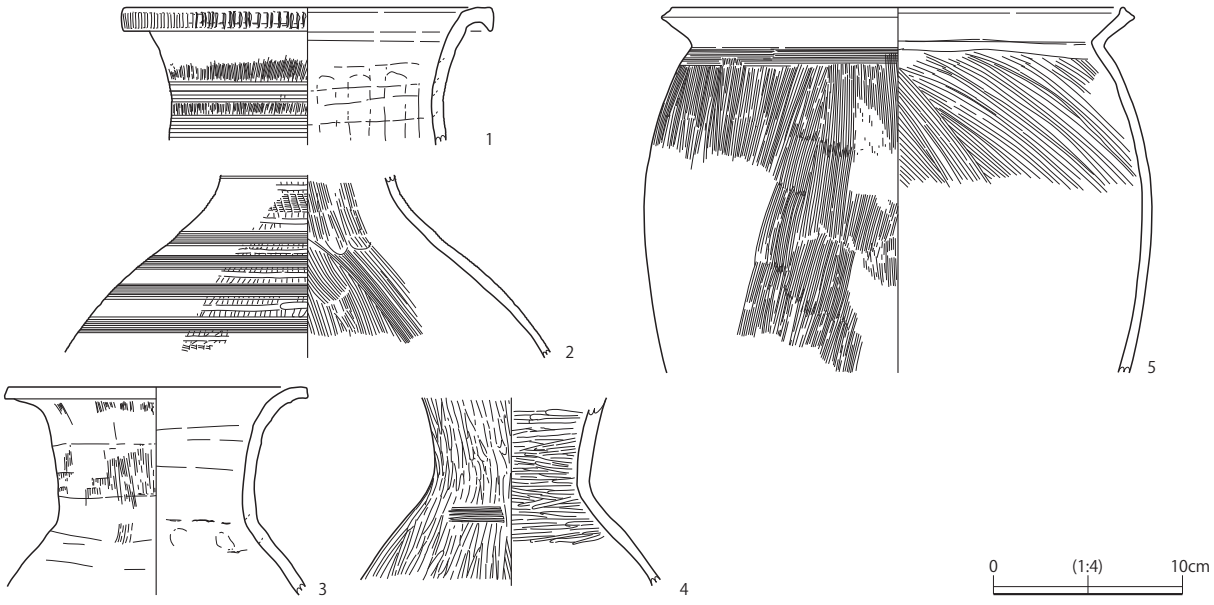


図 463　4区　2088 土坑出土遺物

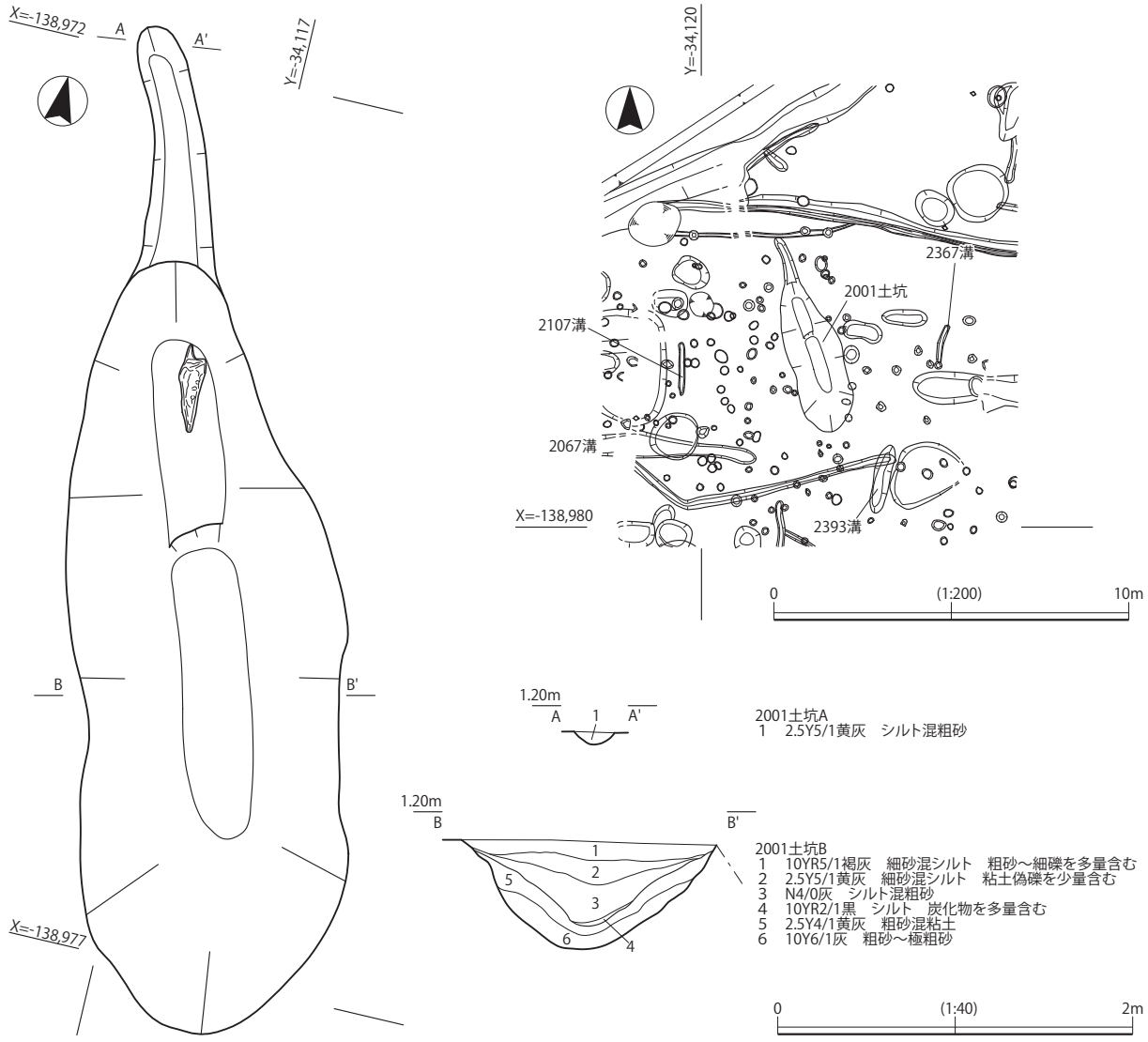


図 464　4区　2001 土坑平・断面

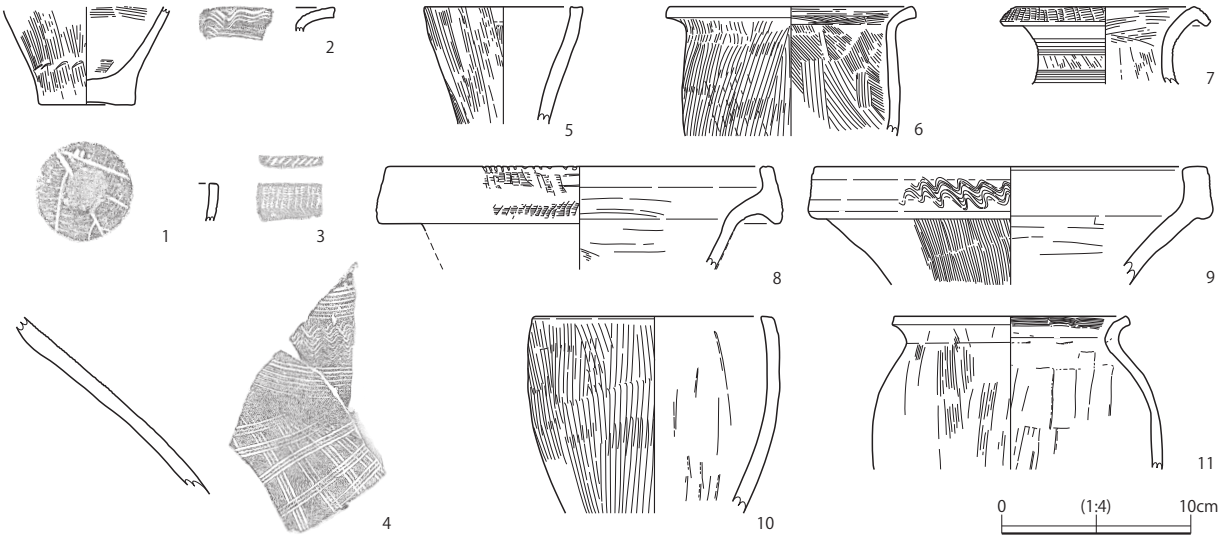


図 465　4区　2001 土坑他出土遺物

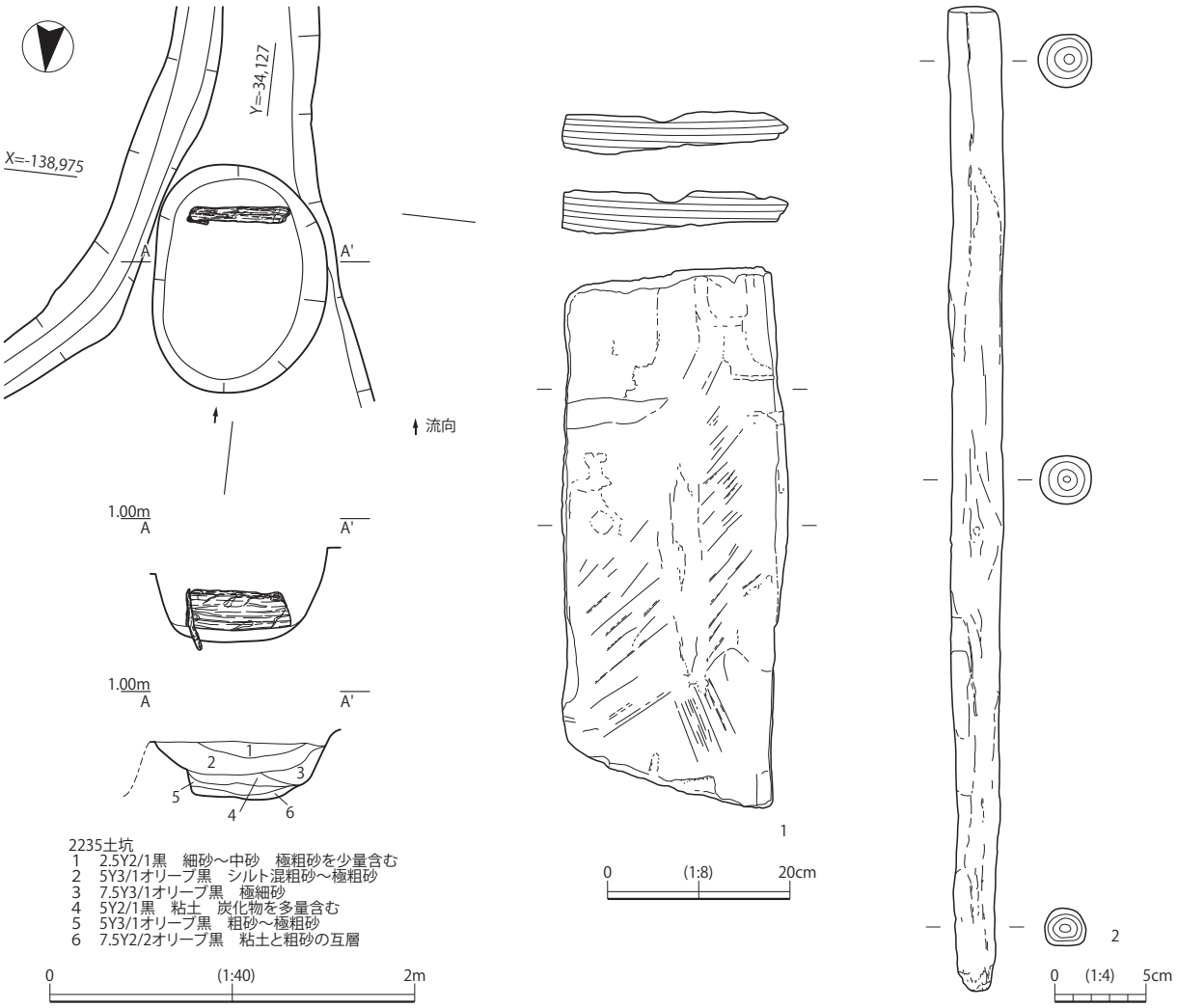


図 466　4区　2235 土坑平・立・断面　出土遺物

溜めとしての機能があったと考えられる。顕著な事例は 2235 土坑で、水流による浸食を防ぐための施設が設けていた。微高地で検出された溝は、これらの井戸・土坑を超えて、水田域では確認されておらず、1－5区 4766 井戸、2－1区 162 井戸、2－2区 1888・1889 土坑と同様に水溜めの機能を有したと考えられる。

井戸と土坑の属性は、第6－4・6－5ｂ面で検出された土坑・井戸の掘削がすべて6－5ｂ層中で止まっていたため、規模と湿性堆積物の有無から判断した。下位に堆積する7層以下の地層は、泥質で、6－5ｂ層が湧水層となっていたと考えており、井戸と土坑の区別は埋土によって判別したところが大きい。また、第6－4面と第6－5ｂ面では、柱穴が多数検出された。規模は、直径 0.3 m前後、深さ 0.5 mで、小規模なものである。柱根が遺存するものも多数検出された。柱は残存長 0.3 ～ 0.5 m前後、直径 0.2 m前後で、先端を両側（2方向）から先細りになるように加工されたものが含まれる。柱は、柱穴の裏込め土のみで支えるのではなく、打設もされていたと考えられるが、柱上部が検出されていないため、検証することはできなかった。

調査地北東（図 459）

2124 溝に囲まれている範囲が微高地の中で高い場所である。周辺では、柱穴が多数検出されたが、掘立柱建物に復元できるものはなかった。柱筋が通るもので復元を試みたが、構造的に問題があり、復

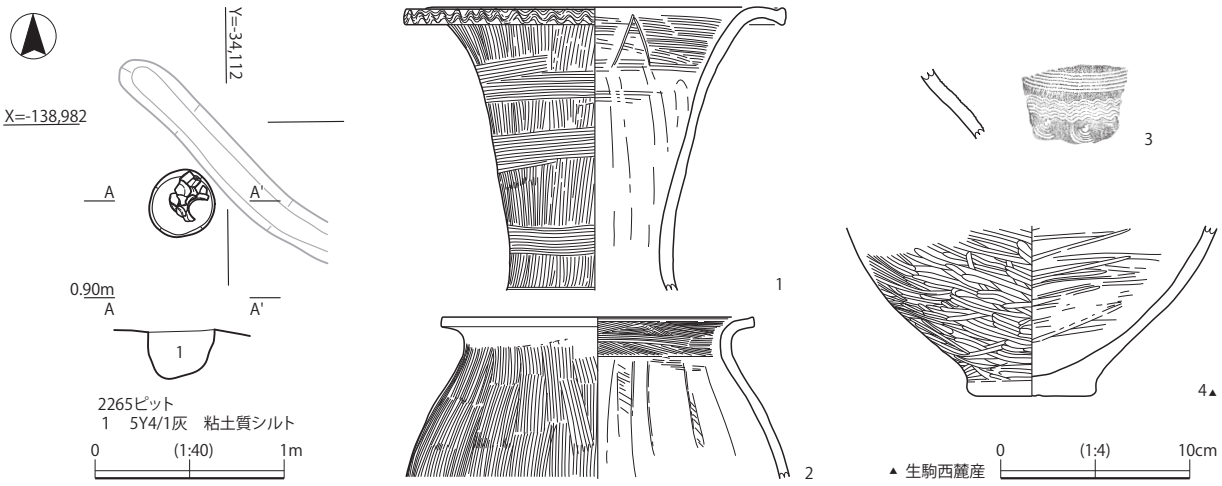


図 467　4区　2265 ピット平・断面　出土遺物

元するに至らなかった。2056 溝が検出された範囲は、第６－４面と第６－５ｂ面の調査において複数の溝が検出された。６－３～６－４層が厳密に対比できなかった場所で、これは溝の掘削が集中的に行われたことに起因している。第６－５ｂ面では 2014・2242 溝は弧状に検出されており、北側に想定される微高地縁辺で掘削された可能性が高いと考えられる。これに対し、第６－４面で検出された 2056 溝は、微高地を縦貫するように掘削されており、今回の調査地で検出された微高地と北側に想定される微高地の間の平坦化が進んだことが背景にあると考えられる。

調査地中央で検出された 1573 溝は、2056 溝と同様、複数の掘り直しされ、集落の用排水や灌漑用水路として重要な役割を占めた溝と考えられるが、1573 溝内では、多数の溝とともに落ち込み・土坑が検出されている。

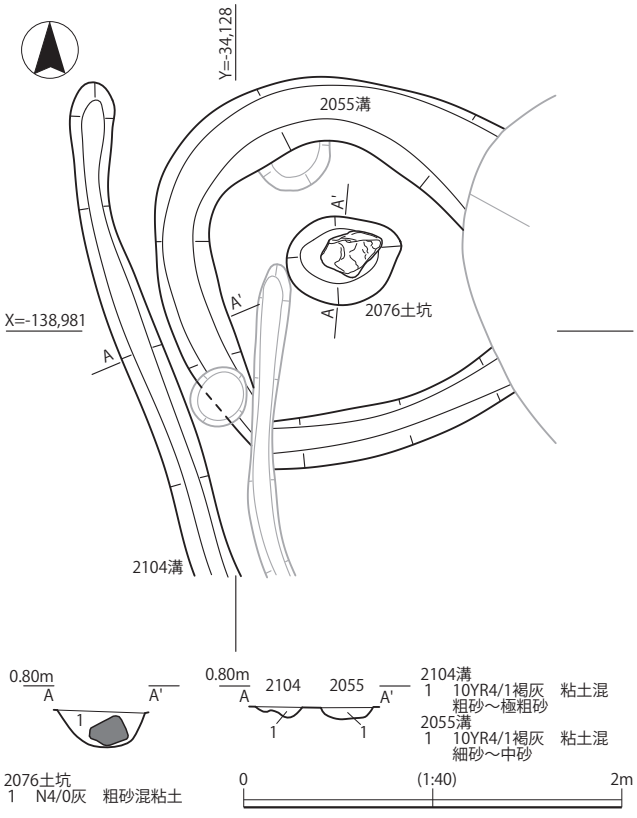


図 468　4区　2104・2055 溝・2076 土坑平・断面

2088 土坑（図 459・462・463、図版 106）

調査地東端で検出された。平面形は隅丸方形状を呈する。規模は、長さ 1.2 m、幅 1.0 m、深さ 0.3 mである。埋土はシルト混細砂のブロック土で、埋め戻されたと考えられる。弥生土器が底面直上から出土した。

2088 土坑から出土した弥生土器は、図 463－１～５を図示した。

１～４は壺である。１は、口縁端部にハケ状工具を用いた刻目が付けられる。外面はハケ調整の後、櫛描直線文が施され、内面は指ナデ調整によって仕上げられる。２の外面はハケ調整の後、櫛描簾状文・直線文が施される。外面はハケに近い板ナデ調整､内面はナデ調整される。４の外面は縦方向のヘラミガキで、頸部に横方向の細かいヘラミガキが一部施される。５は甕で、外面は縦方向のハケ調整、頸部に横方向のハケ調整が施される。

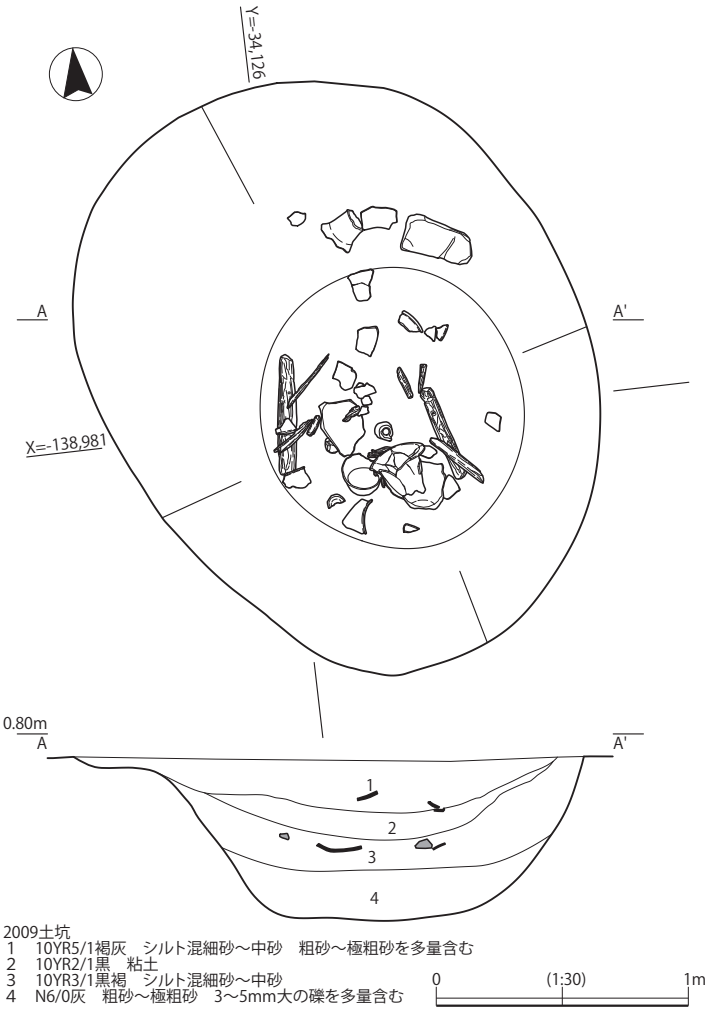


図 469　4区　2009 土坑平・断面

2001 土坑（図 464・465）

2056 溝の南側で検出された。平面形は、南北に長い不整な楕円形を呈し、北側には溝が接続する。規模は、長軸 4.3 m、短軸 1.5 m、深さ 0.6 mである。埋土は、底面直上が加工時形成層及び崩落土の砂層、下層から中層が湿性堆積物の粗砂混粘土～シルト、上層が土壌由来の細砂混シルトである。北側の溝との対応関係は不明であるが、水利施設と考えられる。図 488 の 2014 溝から導水したものか。土坑底面の北側で板材が出土しており、土坑と溝の接続部にあったものが、廃絶時に土坑内に落ちたものと考えられる。

2001 土坑から出土した遺物の内、図 465 －7・8・9・11 を図示した。8・9 は受口状の口縁部をもつ壺である。8 は平坦面の上部に刻目・櫛描簾状文、9 は櫛描波状文が施される。11 は甕である。外面はハケ調整、内面は板ナデ調整される。

1554・1567・1568・1594・1598・2012 溝出土遺物（図 465）

図 465 －1 は甕で、1554 溝から出土した。2 は甕で 1567 溝から出土した。内面に櫛描波状文が施される。3 は鉢で、1598 溝から出土した。口縁端部に刻目、外面に櫛描簾状文が施される。4 は壺体部で、2012 溝から出土した。外面に櫛描直線文・波状文・斜格子文が施される。5 は細頸壺の口縁部である。外面はハケ、内面はナデ調整される。6 は甕で、1594 溝から出土した。10 は鉢で、2023 溝から出土した。

2235 土坑（図 466、図版 28・118）

調査地中央で検出された。平面形は、不整な楕円形を呈す。長軸 1.2 m、短軸 0.9 m、深さ 0.3 mである。埋土は、下層が泥層を挟在した砂層、中層から上層が偽礫状を呈する砂層である。土坑の南側近くで、杭に支えられた板材が検出された。2109 溝と接続して、水流を壁面に直接当たらないようにするための、護岸施設と考えられる。なお、2109 溝は、微高地の斜面地で検出されており、平面的な検出が困難な部分もあったが、複数回の掘り直しが行われたと考えられる。

2235 土坑から出土した木製品は、図 466 －1・2 を図示した。1 は鍬未成品の転用材である。表面には工具を用いたと考えられる、斜め方向の加工痕が残る。両端（図上の上下）は切断面が平坦で、転用時の加工痕と考えられる段が残る。2 は棒状木製品である。木皮を剥ぎ、節はカットされていた。上端部は平坦に加工され、下端は摩耗している。下端の摩耗は、杭に転用した際に生じたと考えられるが、元々、先端は尖らせていなかったと考えられる。農具の柄などを転用したものか。

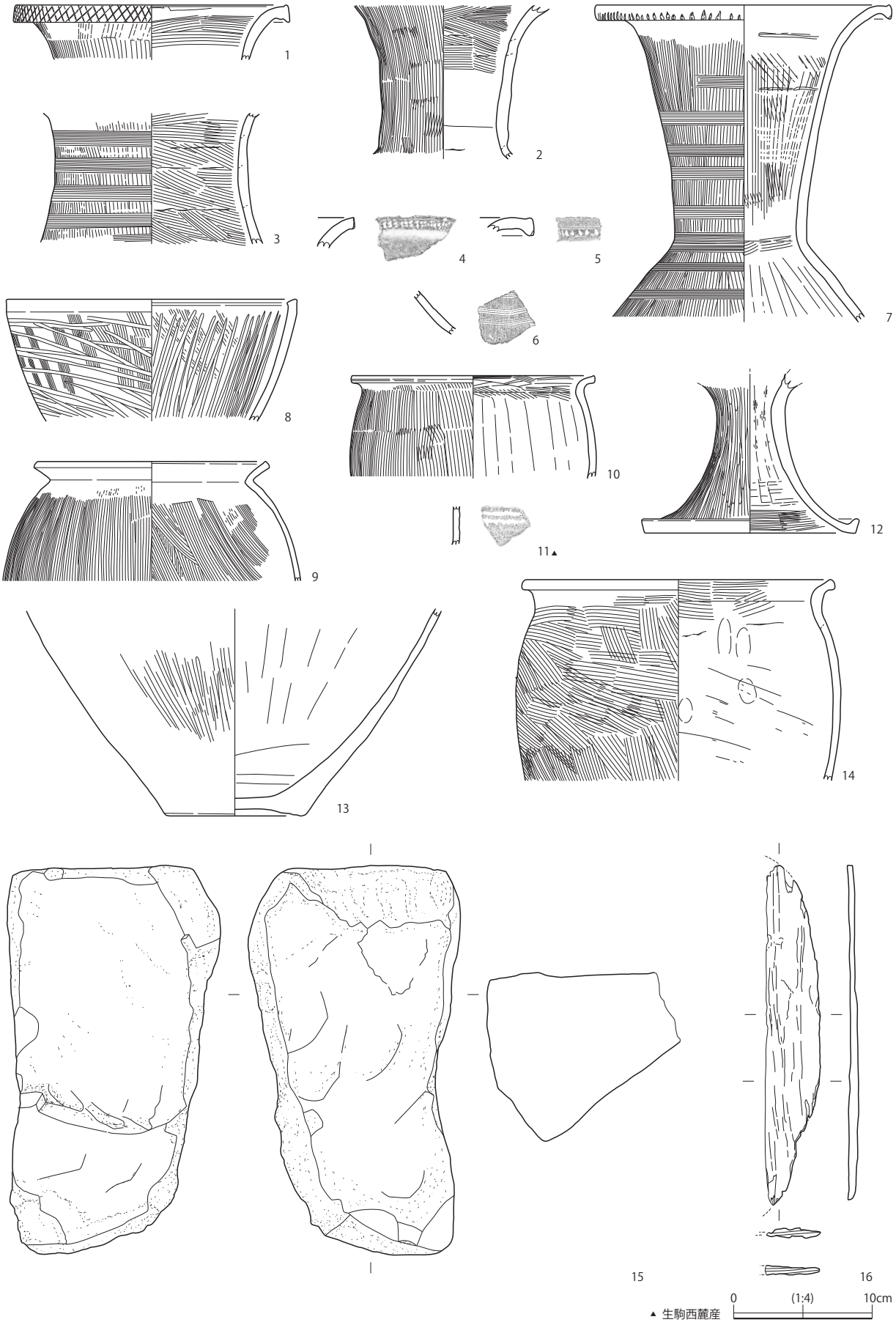


図 470　4 区　2009 土坑出土遺物

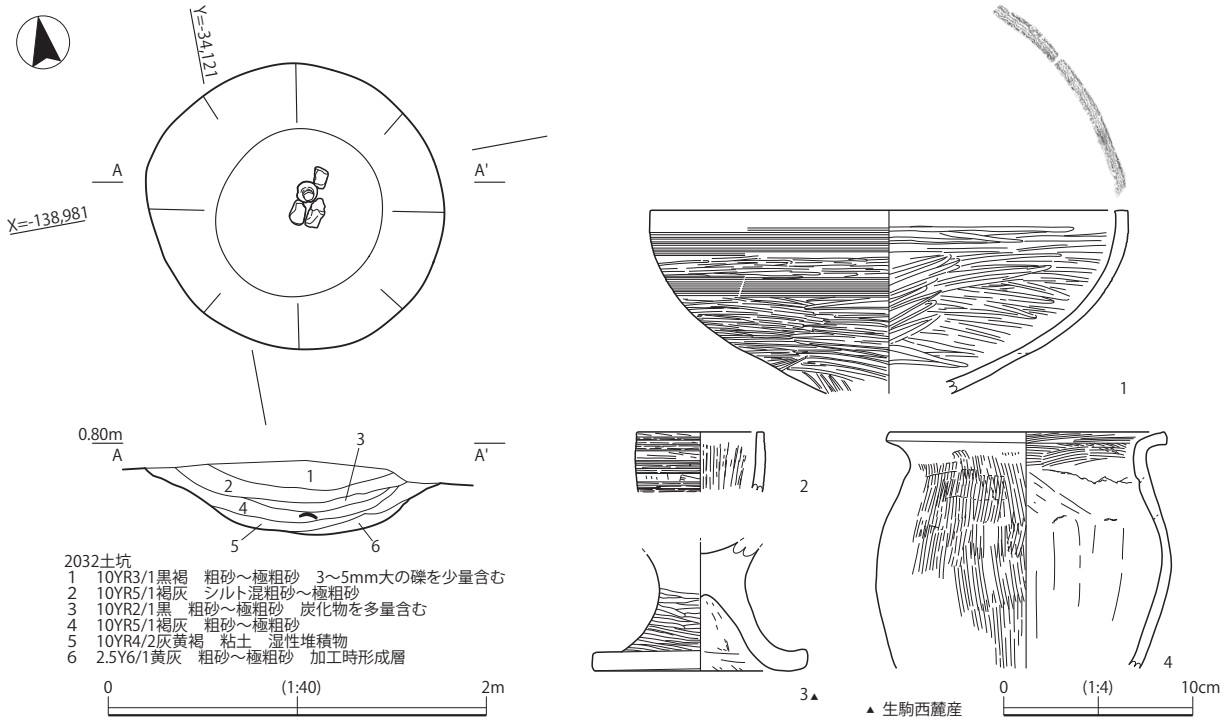


図 471　4区　2032 土坑平・断面　出土遺物

2265 ピット（図 459・467）

2033 井戸の東側で検出された。平面形は円形を呈し、規模は、直径 0.3 m、深さ 0.24 mである。埋土は、粘土質シルトを主体とする。底面から弥生土器がまとまって出土した。

2265 ピットから出土した弥生土器は、図 467 － 1 ～ 4 を図示した。 1 は長頸の広口壺である。口縁端部は櫛描波状文、頸部外面はハケ後櫛描直線文、内面はハケ・ナデ調整が施される。内面には逆「V」字の沈線文が認められる。 2 は甕である。外面はハケ調整、内面はハケ後板ナデ調整される。 3 は壺体部で、櫛描直線文・波状文・扇形文が施される。 4 は壺で、内外面はヘラミガキが施される。

2055 溝・2076 土坑（図 459・468）

2076 土坑の平面形は不整形を呈し、規模は長軸 0.6 m、短軸 0.46 m、深さ 0.2 mである。埋土は、粗砂混粘土である。土坑中央から用途不明の 30cm 大の石が出土し、この土坑を囲うように 2055 溝が検出された。2055 溝、2076 土坑を意識して掘り込まれたと考えられる。2055 溝の規模は、幅 0.3 m、深さ 0.06 mである。埋土は、泥質の砂層を主体とする。弥生土器の細片が出土した。甕の口縁部が含まれており、Ⅲ様式に比定される。

2009 土坑（図 459・469・470、図版 28・102・105・118）

2076 土坑の東側で検出された。平面形は楕円形で、長軸 2.4 m、短軸 1.9 m、深さ 0.64 mである。埋土は湿性堆積物の泥質の砂層を主体とする。2054 溝と接続し、水溜めとしての機能があったものと考えられる。周辺で検出された 2006・2007・2032・2033・2123 土坑についても、微高地縁辺部に立地することや近接して溝が検出されていることから、2009 土坑と同様に水溜めとしての機能があったと考えられる。

2009 土坑から出土した遺物は、図 470 － 1 ～ 16 を図示した。 1 は壺口縁部で、口縁端部に斜格子文、内外面はハケ調整が施される。 2 は壺頸部で、 1 と同一個体になる可能性がある。外面はハケ調整、内面はナデ調整される。 3 は壺頸部で、櫛描直線文が施される。 4 ～ 6 は壺の口縁部と体部の破片である。

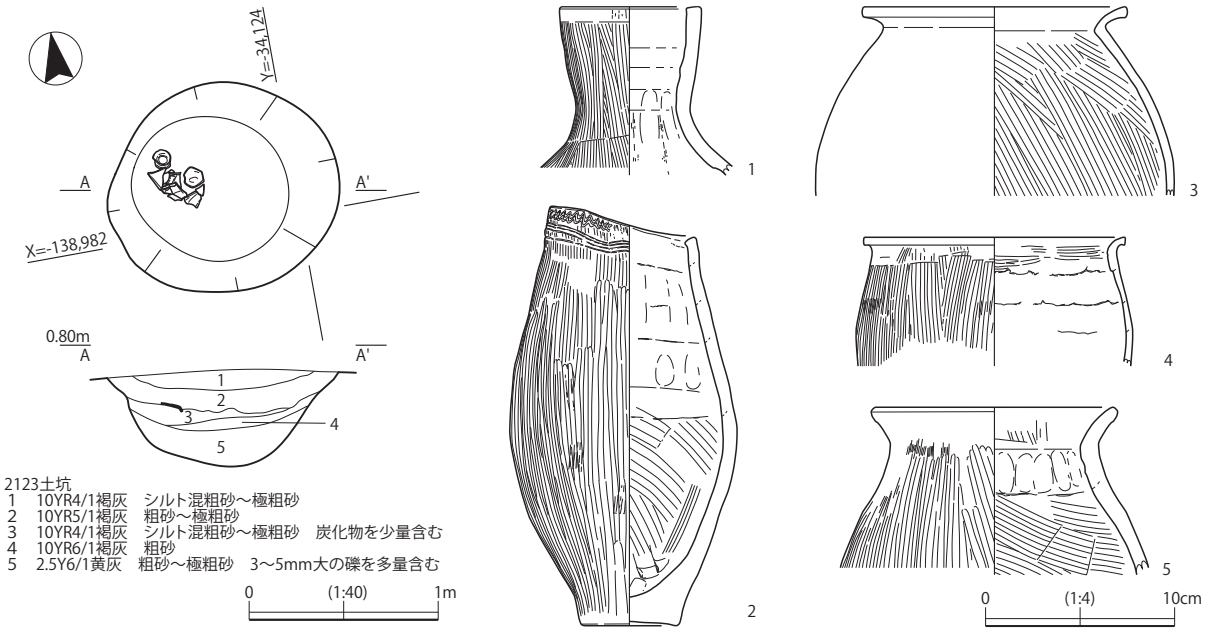


図 472　4区　2123 土坑平・断面　出土遺物

4は、口縁端面にピッチ幅の狭い櫛描簾状文が施される。5は口縁端面の下端に菱形の刻目、6は櫛描直線文が施される。7は長頸の広口壺で、口縁部の下端に刻目が施される。外面はハケ調整・櫛描直線文、体部内面は板ナデ調整が施される。8は鉢で、1517 畦畔内から出土した破片と接合した。内外面はハケ調整後ヘラミガキが施される。9は甕で、内外面はハケ調整される。10 は甕で、外面はハケ調整、内面はナデ調整される。12 は高坏脚部で、外面はヘラミガキ、内面はハケ調整で、脚柱部にはシボリメが残る。13 は壺底部で、外面はヘラミガキ、内面はシボリメが残る。14 は甕で、内面は指押さえ後ナデ調整される。15 は台石で、表裏面には平滑な面が認められる。16 は板材で、半円形の形状を呈す。全体に腐食が進み、加工痕等は不明。11 は縄文土器深鉢の体部片である。縄文時代後期、宮滝～滋賀里Ⅰ式に位置付けられる。出土した弥生土器はⅢ－1様式に比定されると考えられる。

2032 土坑（図 459・471、図版 106）

調査地北西で検出された。平面形は円形で、規模は直径 1.5 m、深さ 0.4 mである。埋土は、下層に湿性堆積物の粘土、中層から上層はブロック土で間層として炭化物を多量に含む砂層が入る。遺物は、拳大の石と高坏脚部が底面から出土した。2109 溝と接続して、水溜めとして機能したと想定される。

2032 土坑から出土した弥生土器は、図 471 －1～4を図示した。1は高坏坏部である。口縁上端部は櫛描波状文、外面はヘラミガキ調整の後、櫛描直線文が施される。2は細頸壺の口縁部である。外面は板ナデの後、板状に近い工具で櫛描直線文が施される。内面はハケ調整で、口縁成形時のシボリメが残る。3は高坏脚部である。外面はヘラミガキ、内面はナデないし板ナデ調整される。4は甕である。外面はハケ調整、内面はナデ調整が施される。出土した弥生土器は、Ⅲ－1様式の中でも古い資料と考えられる。

2123 土坑（図 459・472、図版 28・107）

2009 土坑の南東で検出された。平面形は円形、規模は直径 1.1 m、深さ 0.5 mである。埋土は、下層が6－5 b層に由来する粗砂～極粗砂、中層が湿性堆積物のシルト混粗砂～極粗砂、上層が偽礫状を呈する粗砂～極粗砂で、最終的には埋め戻されたと考えられる。2123 土坑から出土した弥生土器は、図 472 －1～5に図示した。1は無文の細頸壺で、外面はハケ調整、内面はナデ調整される。2は斜

口縁の水差形土器である。口縁部に櫛描波状文・直線文が施される。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は上位がナデ、下位がハケ調整される。三島～西摂地域からの搬入品か。３は甕である。外面はナデ、内面はハケ調整される。４の外面はハケ調整、内面はナデ調整される。５は壺で、外面はハケ調整の後ヘラミガキ、内面はハケ調整で、頸部には指ナデの痕跡が残る。

調査地南西（図 473）

1573 溝に囲まれた範囲と、1573 溝の南西側に大きく分かれる。1573 溝に囲まれた範囲では、1573 溝に直交する溝と 203 トレンチに近い場所で土坑が検出された。1565・2010 土坑は湿性堆積物の泥質の埋土で、北東側微高地縁辺で検出した 2009 土坑等と同様、水溜めの機能を有する可能性がある。なお、1599 土坑を含めた調査地南西側の土坑は、ブロック土か、炭化物を多量に含む埋土のものが大半を占め、調査地北東の土坑と性格が異なると考えられる。1573 溝の南西側は、1543 溝など、小規模な溝によって区画される。1563・1581 溝は、上部が土壌化の影響で失われており、本来連続する溝の、加工面が検出されたと考えられる。

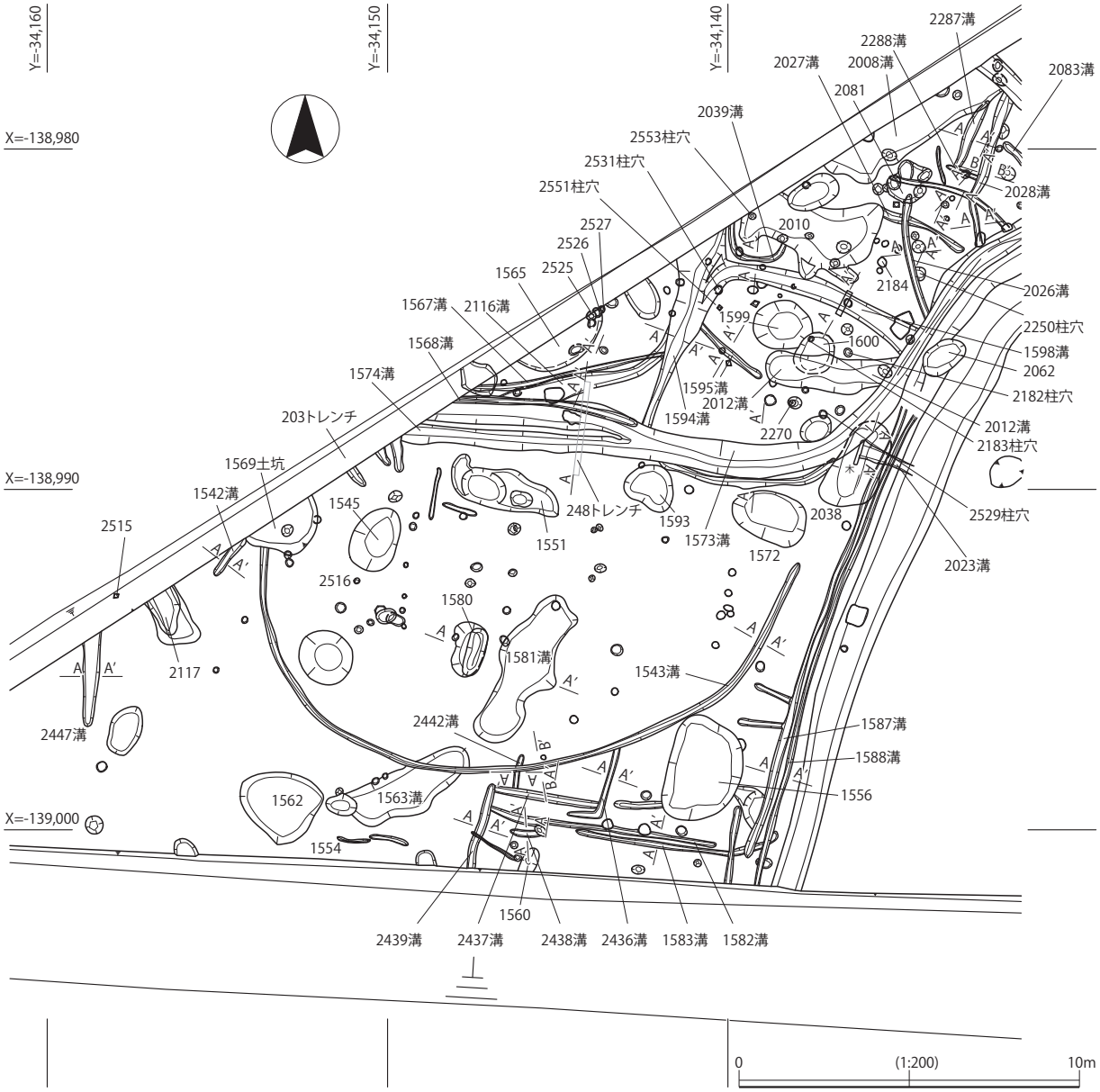


図 473　４区　第６－４面南西側平面

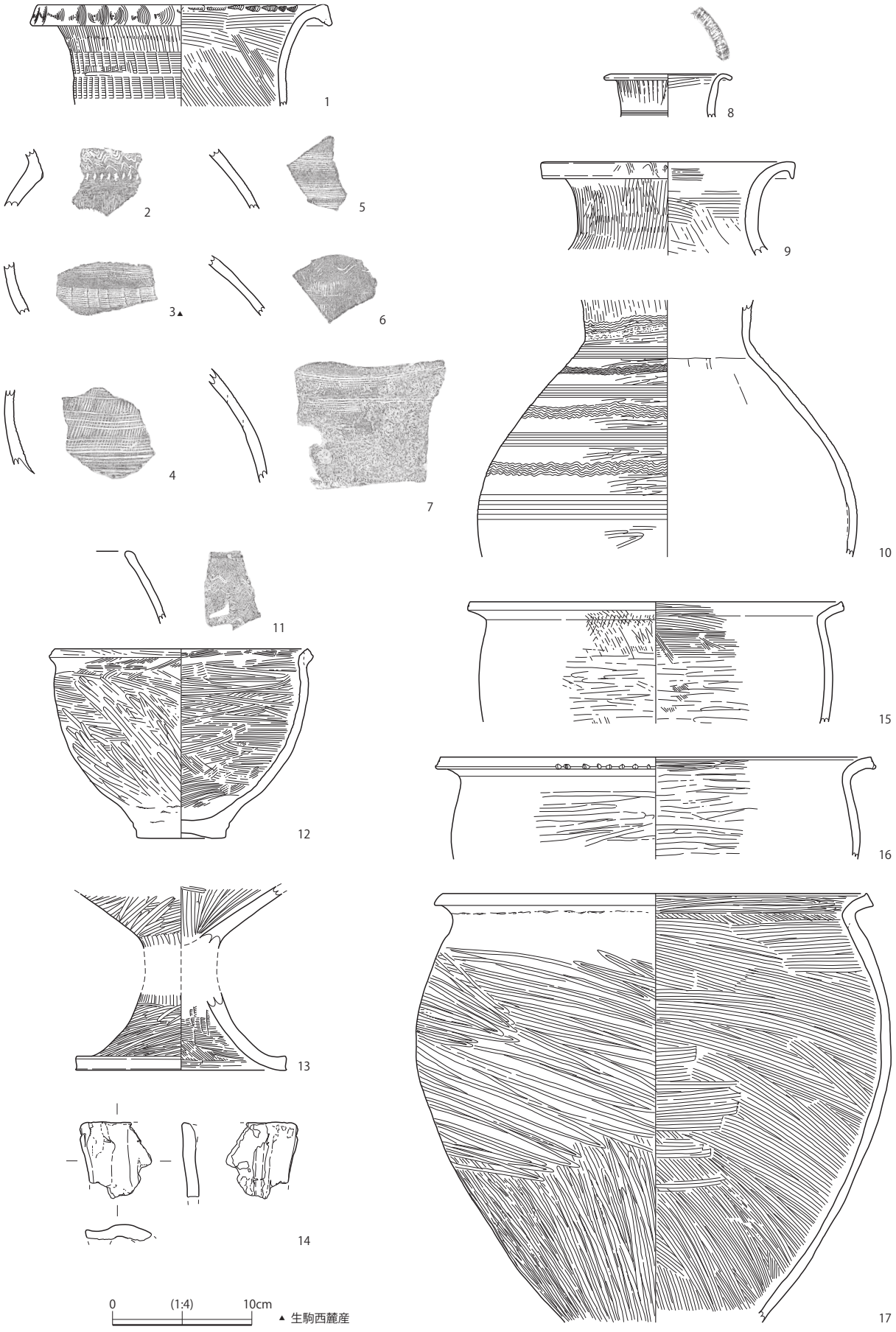


図 474　4区　1573 溝出土遺物（1）

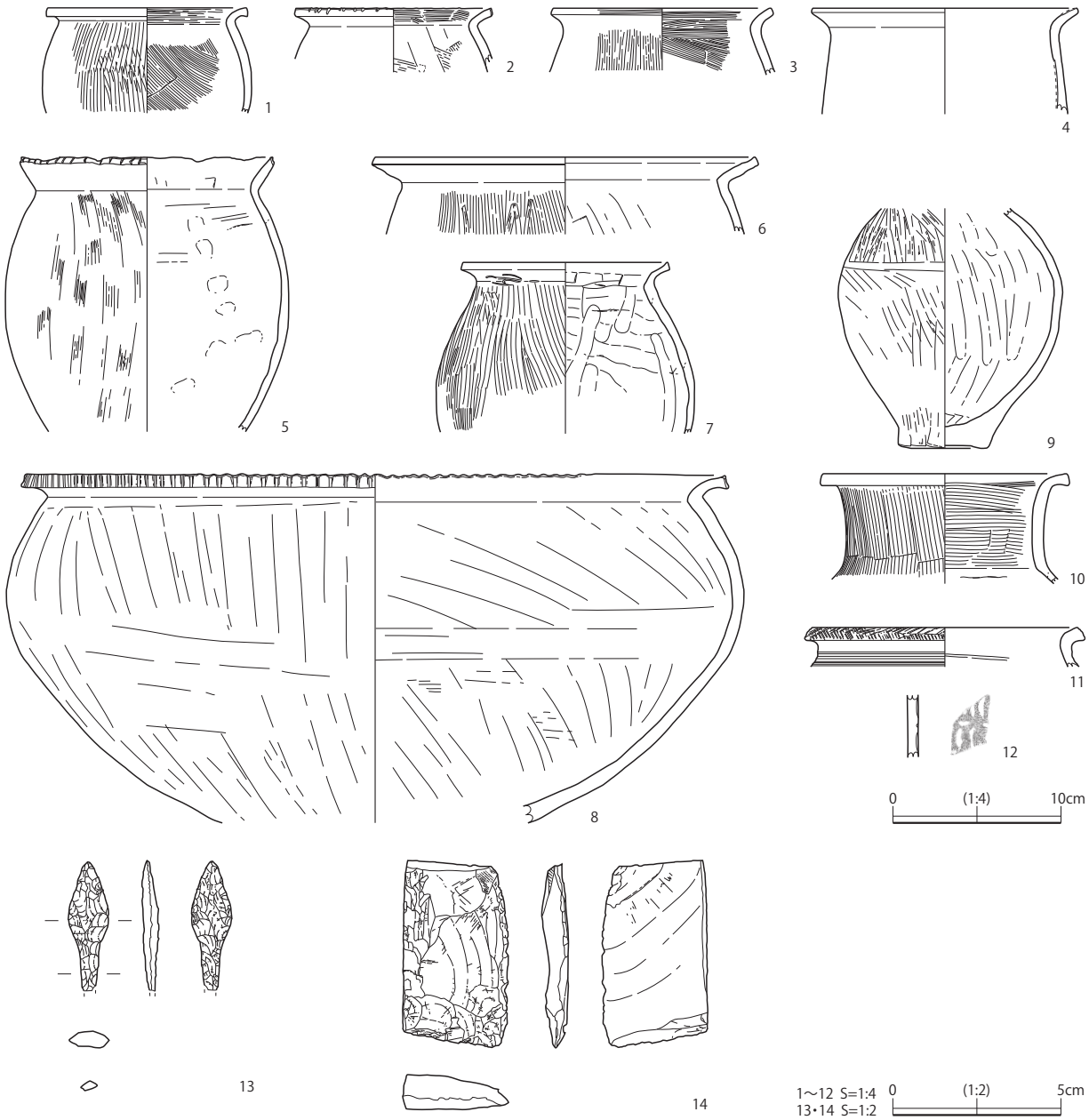


図 475　4区　1573 溝出土遺物（2）

1573 溝（図 460・473 ～ 475、図版 104・105・108）

調査地中央で検出された。規模は、幅 2.1 m、深さ 0.4 mである。複数回に渡って掘り直しが行われており、溝の西側では焼土塊が堆積している状況が検出された。1573 溝から出土した遺物の内、図 474・475 を図示した。図 474 － 1 は太頸の広口壺である。口縁部内面と端面に扇形文が施される。頸部外面はハケの後、簾状文が 2 単位施される。 2 は付加状の口縁部をもつ壺である。平坦面の下端に刻目・櫛描波状文が施される。 3 ～ 7 は壺体部である。 3 は櫛描直線文・簾状文、 4 はハケ調整の後、櫛描直線文、 5 は櫛描直線文、 6 は波状文、 7 は櫛描直線文が施される。 8 ～ 10 は壺である。 8 は屈曲する口縁部の上面に刻目が施される。外面はハケ後櫛描直線文､内面は横方向のナデ調整が施される。 9 は広口壺である。口縁端面に櫛描波状文が施される。外面はハケ、内面はハケ・板ナデ調整される。10 は上層及び中層以下で取り上げた破片が接合したものである。外面はハケ・ヘラミガキの後、櫛描直線文・波状文が施される。11 は無頸壺である。内傾する口縁部で、外面には櫛描直線文が施される。

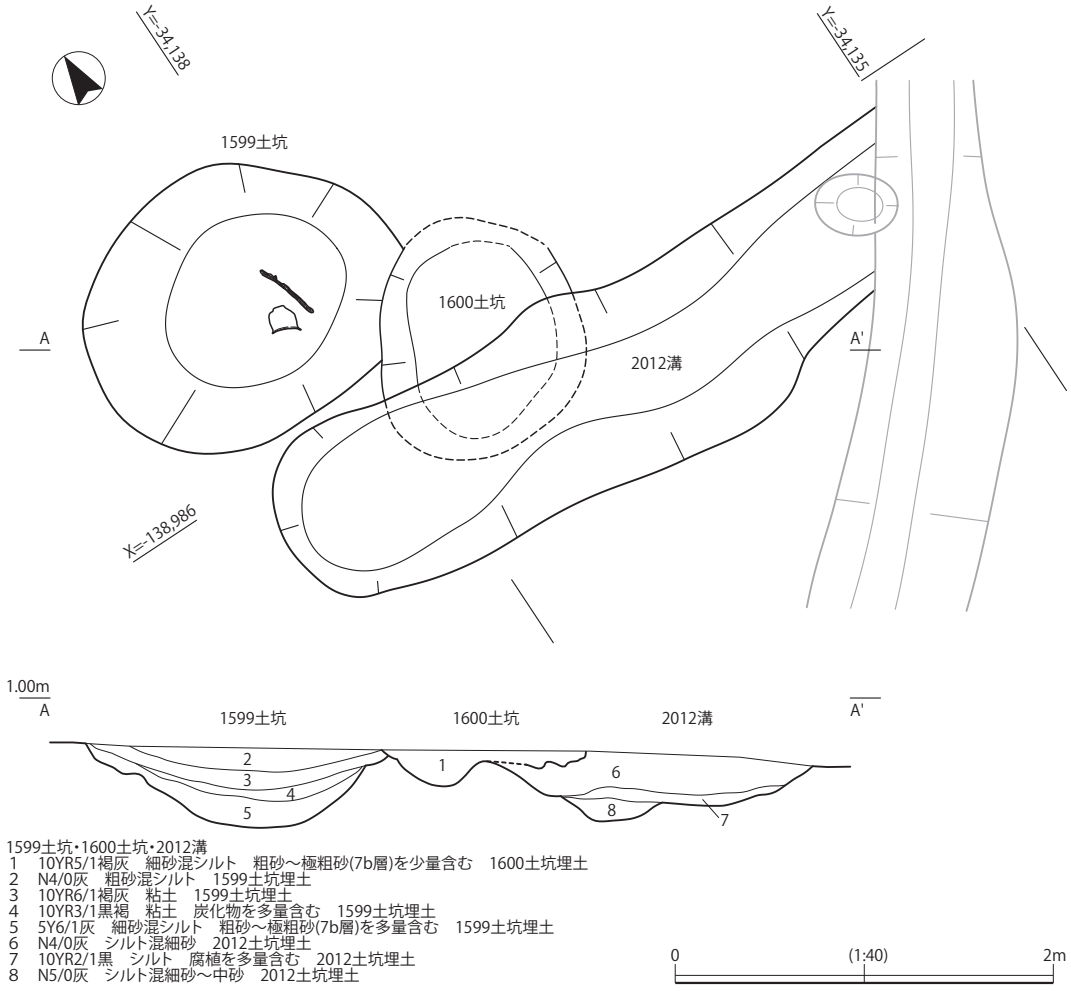


図 476　4 区　1599・1600 土坑・2012 溝平・断面

12 は鉢である。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整が施される。13 は高坏で、坏部が 1593 土坑、脚部が 1573 土坑から出土しており、同一個体と考えられる。14 は不明土製品である。裏面は剥離面で、全体の形状は不明である。表面はナデ調整によって仕上げられており、残存部で断面形は凸状に膨らむ。15 ～ 17 は大型の鉢である。15・16 の内外面はハケ調整後ヘラミガキされる。16 は口縁端面の下端に刻目が施される。図 475 － 1 ～ 7 は甕である。5 は頸部の屈曲が他の甕と比較して弱いもので、口縁端部に刻目が施される。8 は鉢で、口縁端面に刻目を施した後、一部端面上部に刻目が施されるため、端部が波打つような形状を呈す。口縁部内面には器面の粘土が剥離した部分があり、籾圧痕が残る。9 は壺体部で、中層と下層の破片が接合した。10 は広口壺で、1517 畦畔から出土した破片が接合した。内外面はハケ調整。11 は無頸壺である。12 は縄文土器で、爪形文と刺突文が施される。13 はサヌカイト製有茎鏃である。刃部は形状を整えるための大まかな剥離調整を行った後、鏃身上部と下部に微細な剥離調整を行って形状が整えられる。14 はサヌカイト製掻器ないし楔形石器である。研磨を行った面が一面認められることから、元は磨製石器であったと考えられ、断面形から石剣の可能性を想定している。転用時の加工は、打点が離れたところにあったと考えられ、掻器として用いられた際の幅は現状より大きかったと考えられる。下端に表面から剥離調整を行って刃部を作り出しているが、使用時の微細剥離で刃部は鈍くなっている。また、両端にも不規則な剥離調整が認められており、掻器として使用された後に楔形石器として転用されたと考えている。

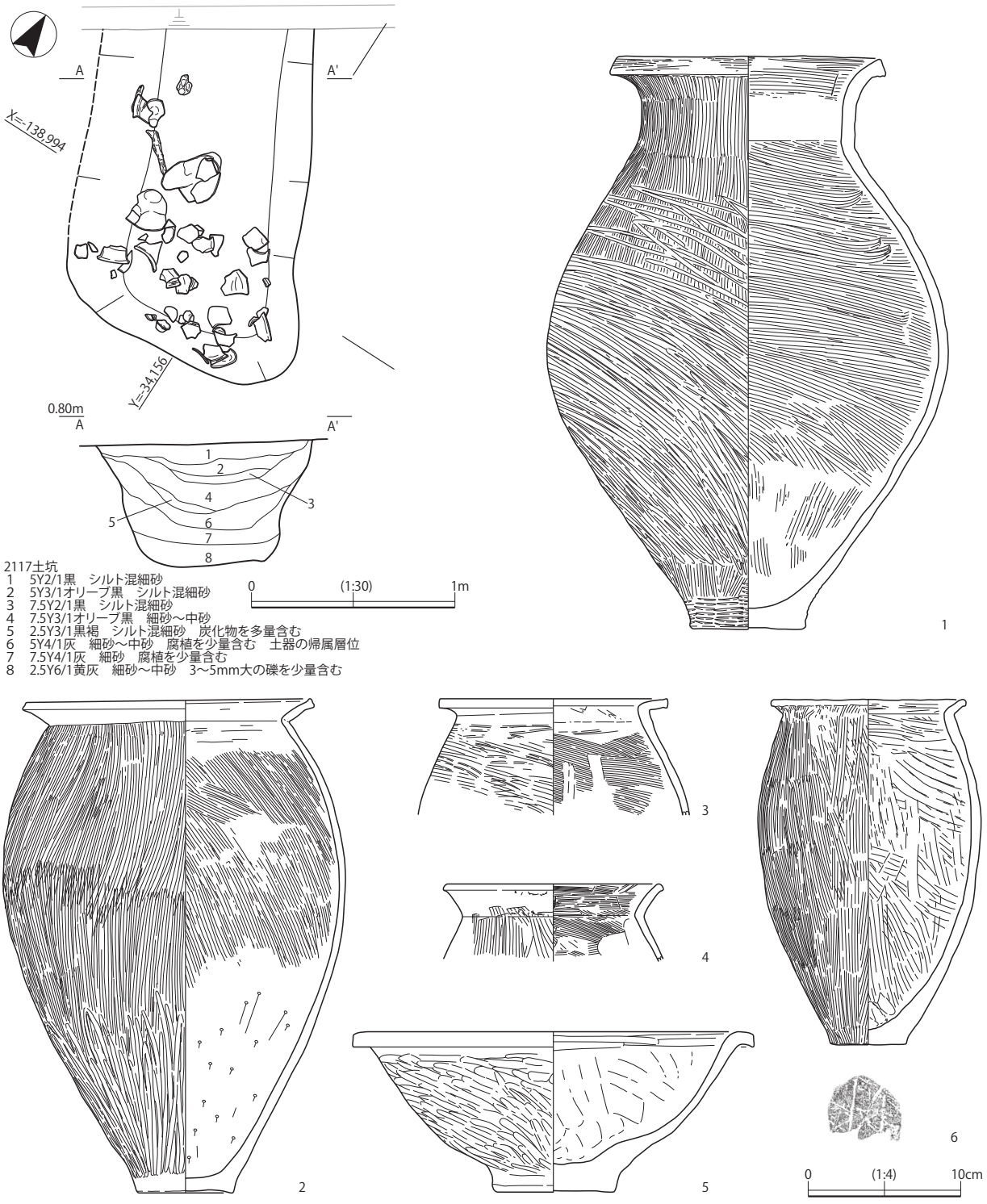


図 477　4 区　2117 土坑平・断面　出土遺物

1599・1600 土坑・2012 溝（図 476・485、図版 29・104）

1573 溝の内側で検出された。1599 土坑の平面形は、不整形な形状を呈す。規模は、長軸 1.7 m、短軸 1.4 m、深さ 0.4 mで、ブロック土によって埋没する。1599 土坑から出土した土器は、図 485 － 12・13・22 の甕を図示した。Ⅲ－ 1 様式。1600 土坑の平面形は円形を呈し、規模は直径 1.1 m、深さ 0.2 mである。埋土は、細砂混シルトのブロック土である。2012 溝の規模は幅 1.0 m、深さ 0.4 mである。埋土はシルト混細砂～中砂を主体とする。図 465 － 4 の壺体部が出土した。

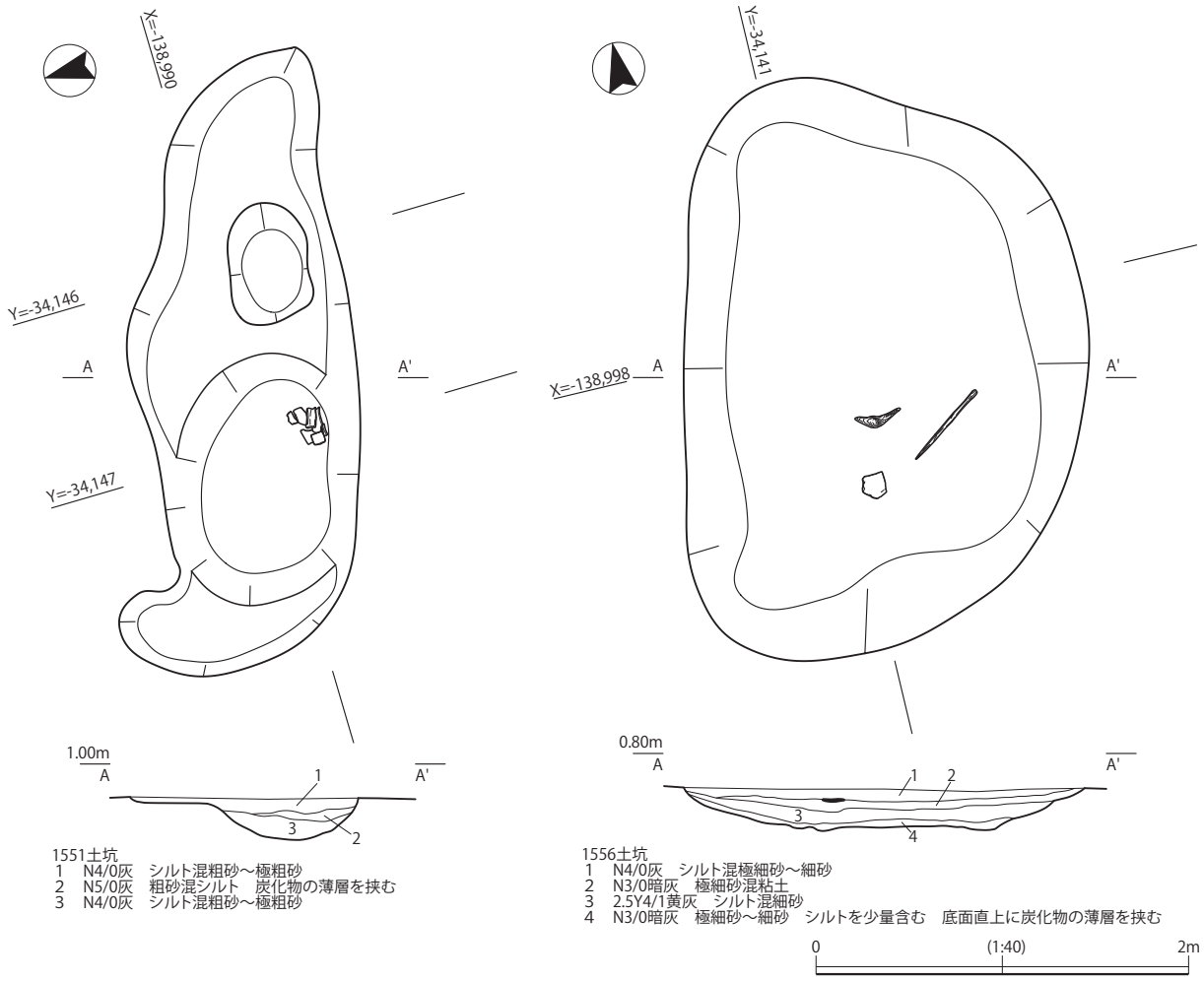


図 478　4区　1551・1556 土坑平・断面

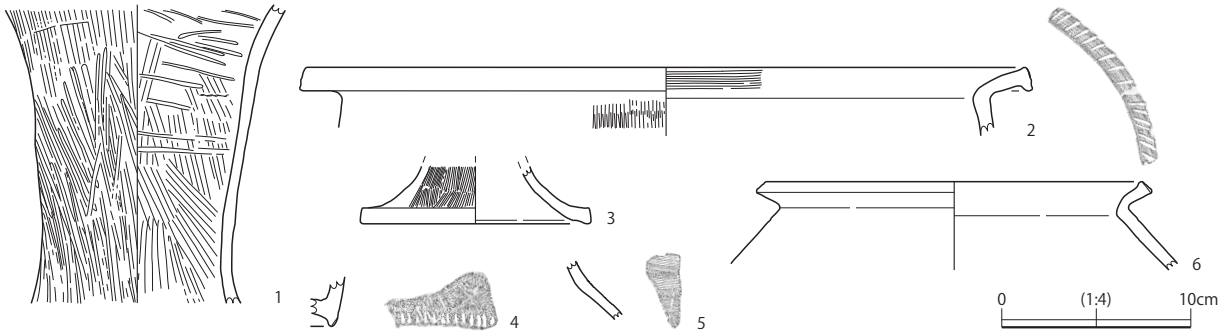


図 479　4区　1551・1556 土坑出土遺物

2117 土坑（図 473・477、図版 29・108）

1553 溝の南西で検出された。一部トレンチにかかっているが、溝状に細長い平面形を呈す。規模は、検出長 1.7 m、幅 1.1 m、深さ 0.6 mである。埋土は、下層から中層が偽礫状を呈する砂層、上層が泥質の砂層である。中層には炭化物主体の地層が間層として入る。多量の弥生土器が、中層の炭化物主体の埋土から出土した。

2117 土坑から出土した弥生土器は、図 477 － 1 ～ 6 がある。 1 は無文の壺で、2117 溝から出土した破片と接合した。外面はハケ調整の後、斜め方向のヘラミガキが施され、底部付近にタタキメが残る。２～４・６は甕である。２は外面ハケ調整、内面は上位がハケ調整、下位はケズリが施される。形態や

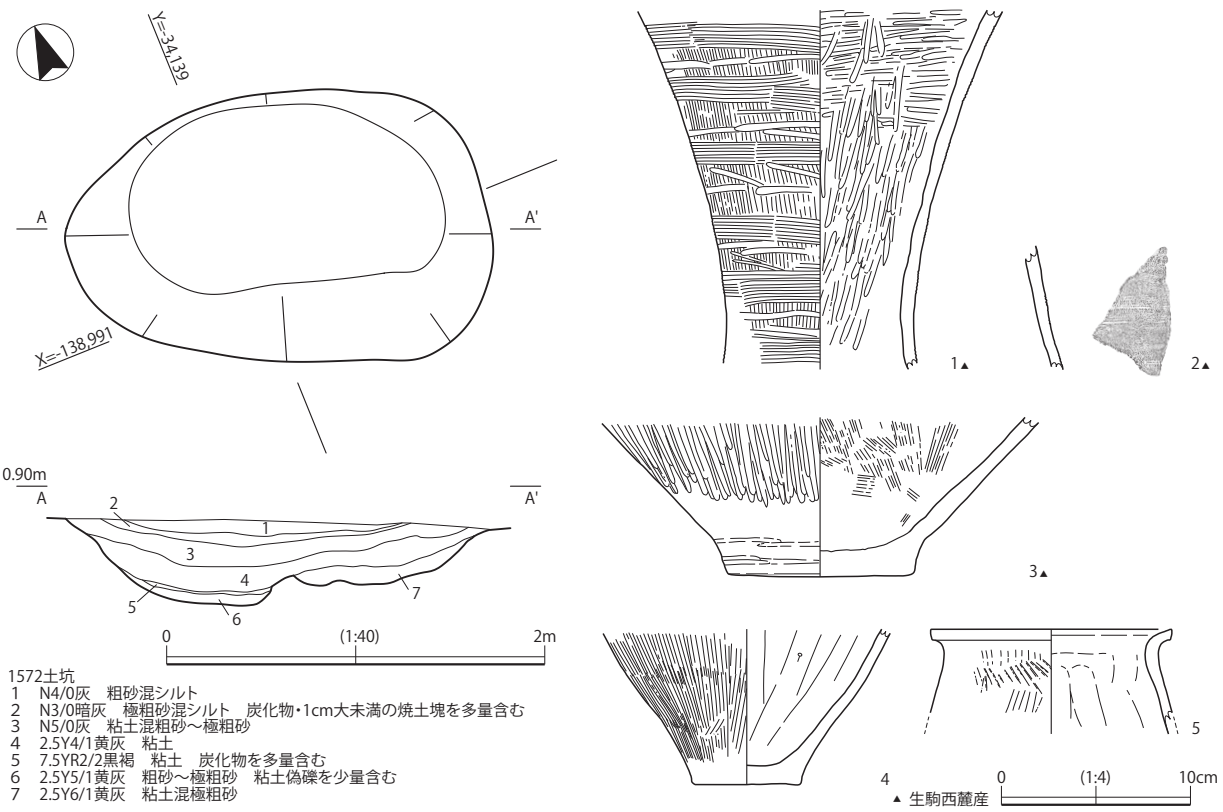


図 480　4区　1572 土坑平・断面　出土遺物

調整等から中部瀬戸内系と考えられる。６の外面はハケ調整、内面はハケ調整の後に縦方向のナデが部分的に施される。頸部の屈曲は逆Ｌ字形。内面のナデは仕上げに余った粘土を器面にナデ付けており、仕上げが粗い。５は鉢である。外面はヘラミガキ、内面は口縁部がヘラ状工具による幅広のナデ、体部が板ナデ調整される。出土した弥生土器は、Ⅲ－１様式でも新しい段階に位置付けられる資料と考える。

1551 土坑（図 473・478・479、図版 103）

1573 溝の南側で検出された。平面形は、東西に長い溝状の形状を呈し、溝の加工面が検出された可能性がある。規模は、長軸 3.2 m、短軸 1.2 m、深さ 0.2 mである。埋土は、シルト混粗砂～極粗砂を主体とし、間層として炭化物主体の地層が入る。

1551 土坑から出土した弥生土器は、図 479－１～３を図示した。１は長頸の広口壺の頸部である。内・外面はハケ後ヘラミガキが施される。２は鉢の口縁部である。細片を図化。端部は面をもっており、端部を挟み込んで横ナデされるため、端面は上下に広がる。３は高坏脚部である。外面はハケ調整、内面は横方向のナデ調整が施される。出土した弥生土器は、Ⅲ－１～２様式。

1556 土坑（図 478・479）

1543 溝の南東で検出された。平面形は南北に長い不整形な形状を呈す。規模は、長軸 3.1 m、短軸 2.2 m、深さ 0.2 mである。埋土はシルト混極細砂～細砂を主体とし、底面直上に炭化物を多く含んだ極細砂～細砂が堆積する。

1556 土坑から出土した弥生土器は、図 479 －４～６を図示した。４は受口状の口縁をもつ壺で、口縁部下端に刻目が施される。５は壺体部で、櫛描直線文が施される。６は甕で、口縁端部にハケ状の工具を用いた刻目が施される。1594 溝から出土した破片と接合した。出土した弥生土器は、Ⅲ－１～２様式、Ⅲ－２様式に近いものか。

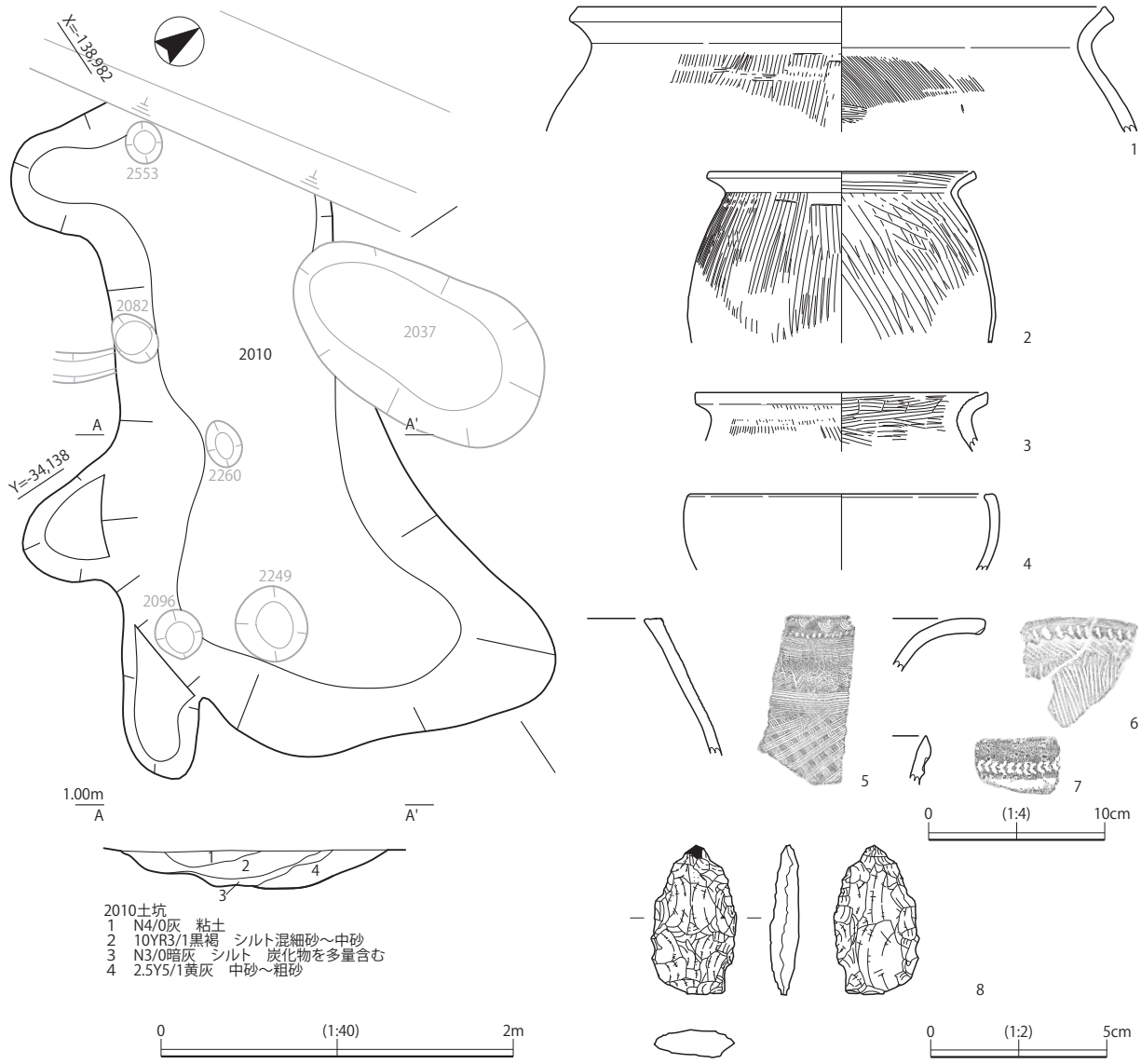


図 481　4区　2010 土坑平・断面　出土遺物

1572 土坑（図 480）

2038 土坑の西側で検出された。平面形は楕円状を呈し、規模は長軸 2.3 m、短軸 1.4 m、深さ 0.45 mである。埋土は、下層が粘土混粗砂で湿性堆積物である。その直上が、偽礫状を呈する粗砂～極粗砂で埋め戻され、炭化物を多量に含む粘土の薄層が堆積する。中層に粘土・粘土混粗砂～極粗砂のブロック土で、その直上に炭化物・焼土塊を多量に含んだ極粗砂混シルトが堆積する。最上層は、土壌由来の粗砂混シルトである。1572 土坑から出土した弥生土器の内、図 480 － 1 ～ 5 を図示した。 1 は長頸の広口壺の頸部である。外面はハケ調整の後、櫛描直線文・ヘラミガキが施される。 2 は壺体部で櫛描直線文が施される。 3 は壺底部である。外面はヘラミガキ調整、内面はハケ調整が施される。 4 は甕の底部である。外面はハケ調整、内面はヘラケズリされる。 5 は甕で、外面はハケ調整、内面はナデ調整される。Ⅲ－ 1 様式。

2010 土坑（図 481）

1599 土坑の北東側で検出された。北西－南東に長い形状を呈し、規模は長さ 3.5 m以上、幅 1.5 m、深さ 0.2 mである。底面直上に炭化物を多量に含んだシルトが堆積する。2010 土坑から出土した遺物は、

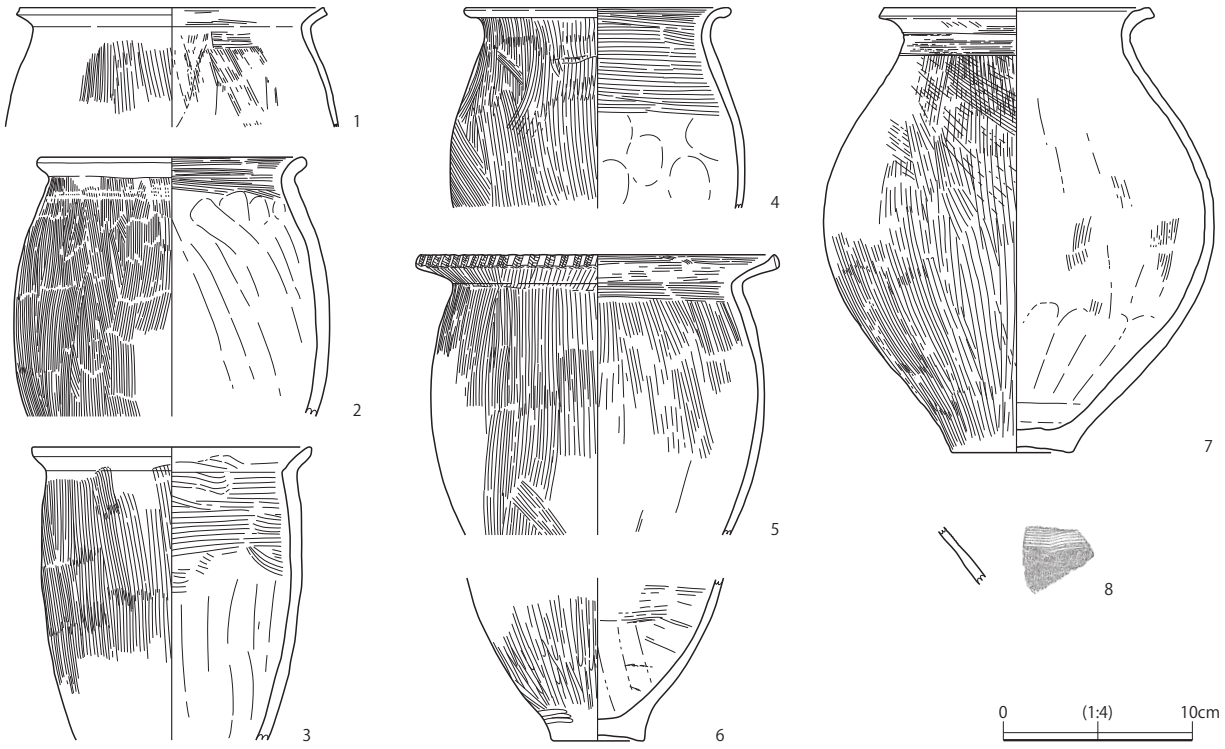


図 482　4区　1562 土坑出土遺物

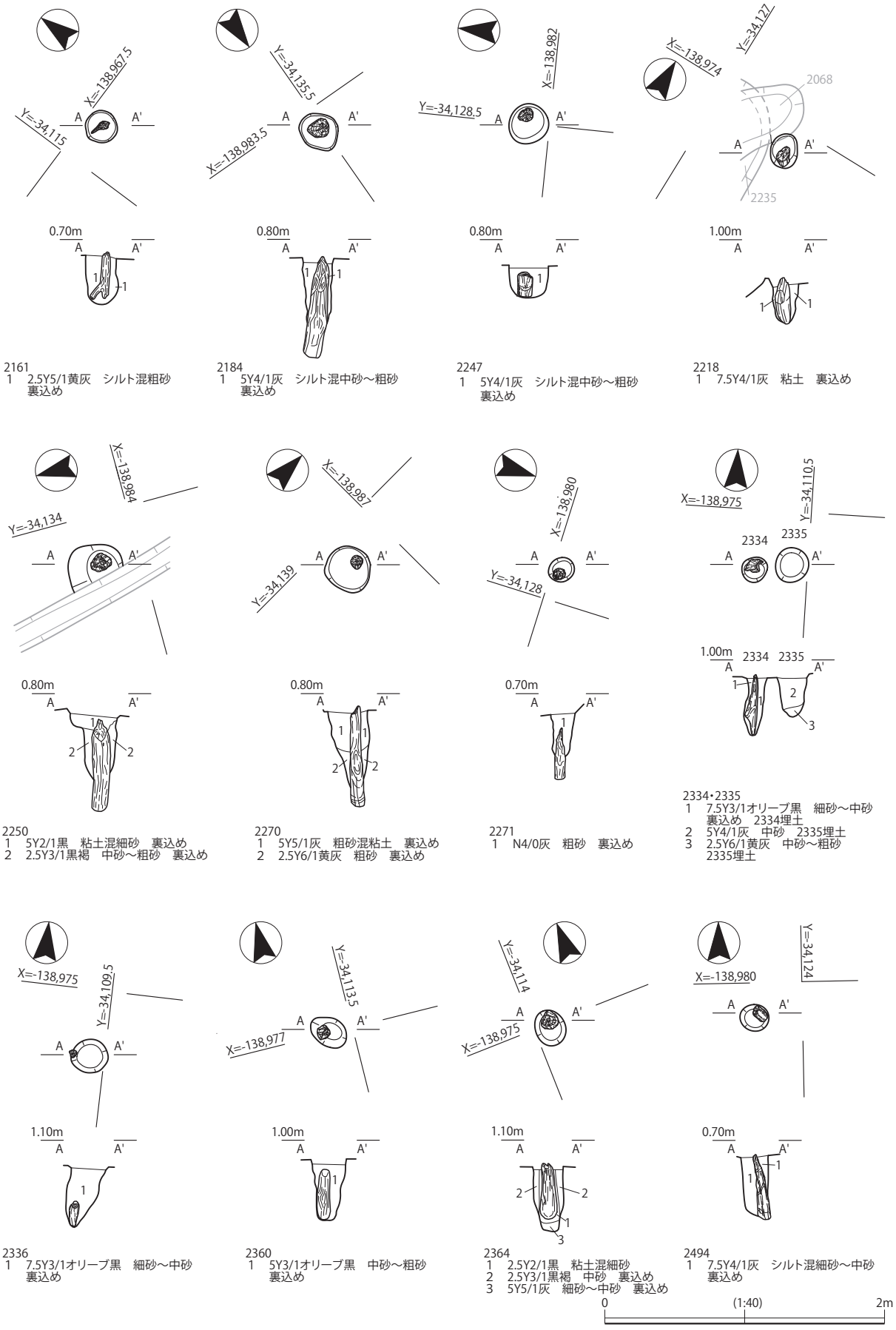
図 481 －１～８を図示した。１～３は甕である。内外面はハケ調整される。４は鉢で、内外面は磨滅。５は無頸壺で、口縁端部に刻目・扇形文、外面に櫛描簾状文・波状文・直線文・斜格子文が施される。内面はハケ調整される。６は壺口縁部である。口縁端面の下位に刻目が施される。内外面は粗いハケ調整。８はサヌカイト製有茎鏃である。鏃身部下端は欠損する。刃部は、表面から大まかに剥離調整を行った後、上部の側縁を中心に微細な剥離調整を繰り返して作り出される。７は縄文土器鉢である。船元式。

1562 土坑（図 482、図版 103）

1563 溝の西側で検出された。平面形は、不整形な形状を呈す。規模は、長軸 2.0 m、短軸 1.7 m、深さ 0.2 mである。埋土は、シルト混中砂～粗砂を主体とする。1562 土坑から出土した弥生土器の内、図 482 －１～８を図示した。１～５は甕である。１は、「く」の字形に屈曲する口頸部で、端部は面をもつ。２の外面はハケ調整、内面はナデ調整される。３の外面はハケ調整、内面は上位がハケ、下位が板ナデ調整される。４・５は、1563 溝から出土した破片と接合した。４の外面はハケ調整、内面は上位がハケ、胴部より下位がナデ調整される。５は、口縁端面に櫛状工具を用いた刻目が施される。内外面はハケ調整、内面頸部は横方向のハケ調整が施される。６～８は壺である。６は壺底部で、外面はヘラミガキ、内面がハケ・ナデ調整される。７は無文の壺で、1563 溝・2011 土坑から出土した破片と接合。外面は粗いハケ調整で、器壁表面をなで付けるように仕上げられるため、条線はヘラミガキのようにみえる。内面は上位から中位がハケの後ナデ調整、下位はナデ調整される。外面は横方向にハケが施されており、一部明瞭な段をなす。８は外面に櫛描直線文が施される。Ⅲ－１様式。

2161 柱穴他（図 459・480・481、図版 29）

４区では多数の柱穴が検出された。柱根が遺存した柱穴を、図 480･481 に掲げた。木皮を取り去り、下端は平らに加工されたものと、杭状に先細りに仕上げるものがあった。杭状に仕上げるものは２方向から削るものが大半を占めた。



2161
1　2.5Y5/1黄灰　シルト混粗砂
　　裏込め

2184
1　5Y4/1灰　シルト混中砂～粗砂
　　裏込め

2247
1　5Y4/1灰　シルト混中砂～粗砂
　　裏込め

2218
1　7.5Y4/1灰　粘土　裏込め

2250
1　5Y2/1黒　粘土混細砂　裏込め
2　2.5Y3/1黒褐　中砂～粗砂　裏込め

2270
1　5Y5/1灰　粗砂混粘土　裏込め
2　2.5Y6/1黄灰　粗砂　裏込め

2271
1　N4/0灰　粗砂　裏込め

2334・2335
1　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂～中砂
　　裏込め　2334埋土
2　5Y4/1灰　中砂　2335埋土
3　2.5Y6/1黄灰　中砂～粗砂
　　2335埋土

2336
1　7.5Y3/1オリーブ黒　細砂～中砂
　　裏込め

2360
1　5Y3/1オリーブ黒　中砂～粗砂
　　裏込め

2364
1　2.5Y2/1黒　粘土混細砂
2　2.5Y3/1黒褐　中砂　裏込め
3　5Y5/1灰　細砂～中砂　裏込め

2494
1　7.5Y4/1灰　シルト混細砂～中砂
　　裏込め

図 483　4区　2161 柱穴他平・断面

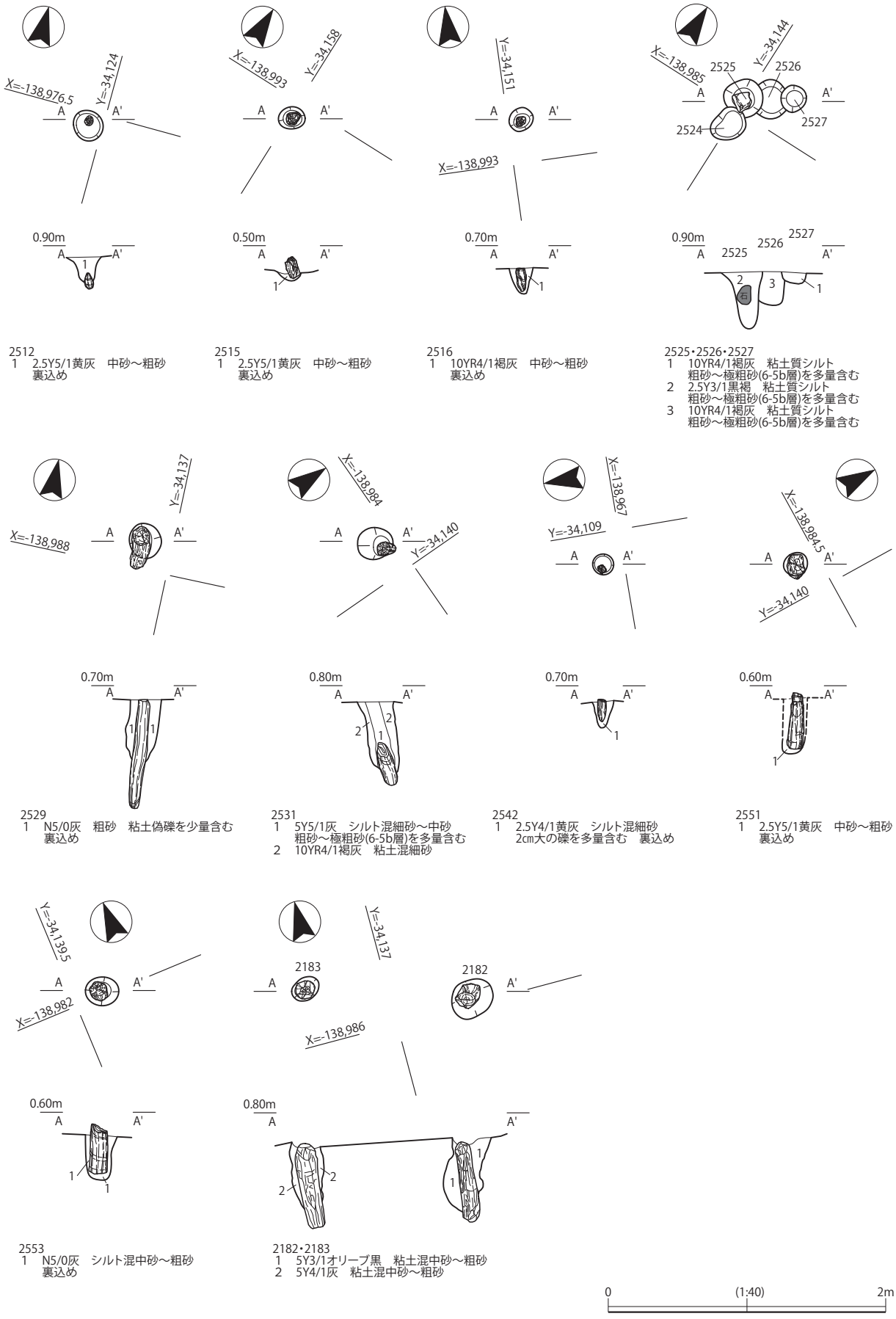


図 484　4区　2512 柱穴他平・断面

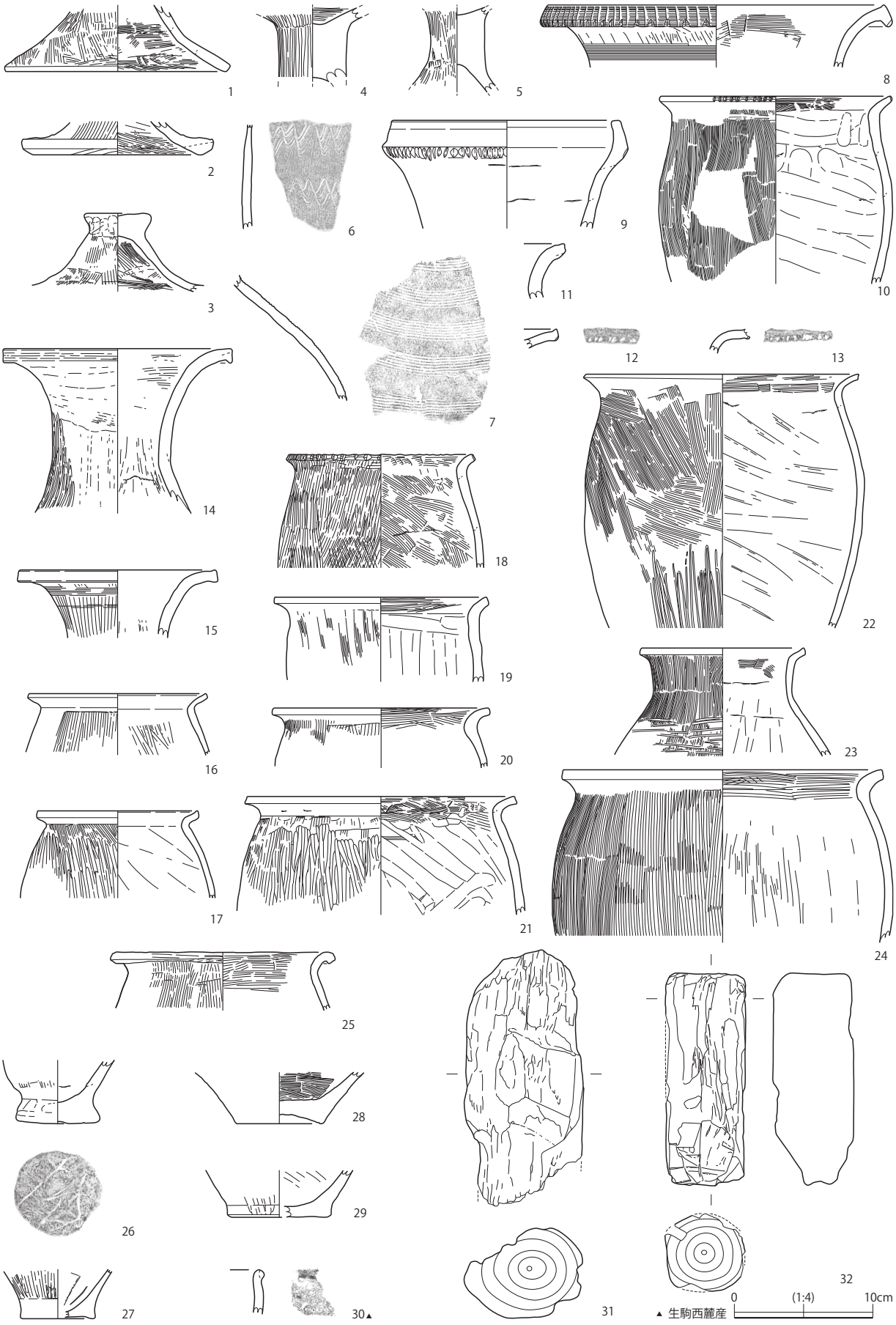


図 485　4 区　2078 土坑他出土遺物

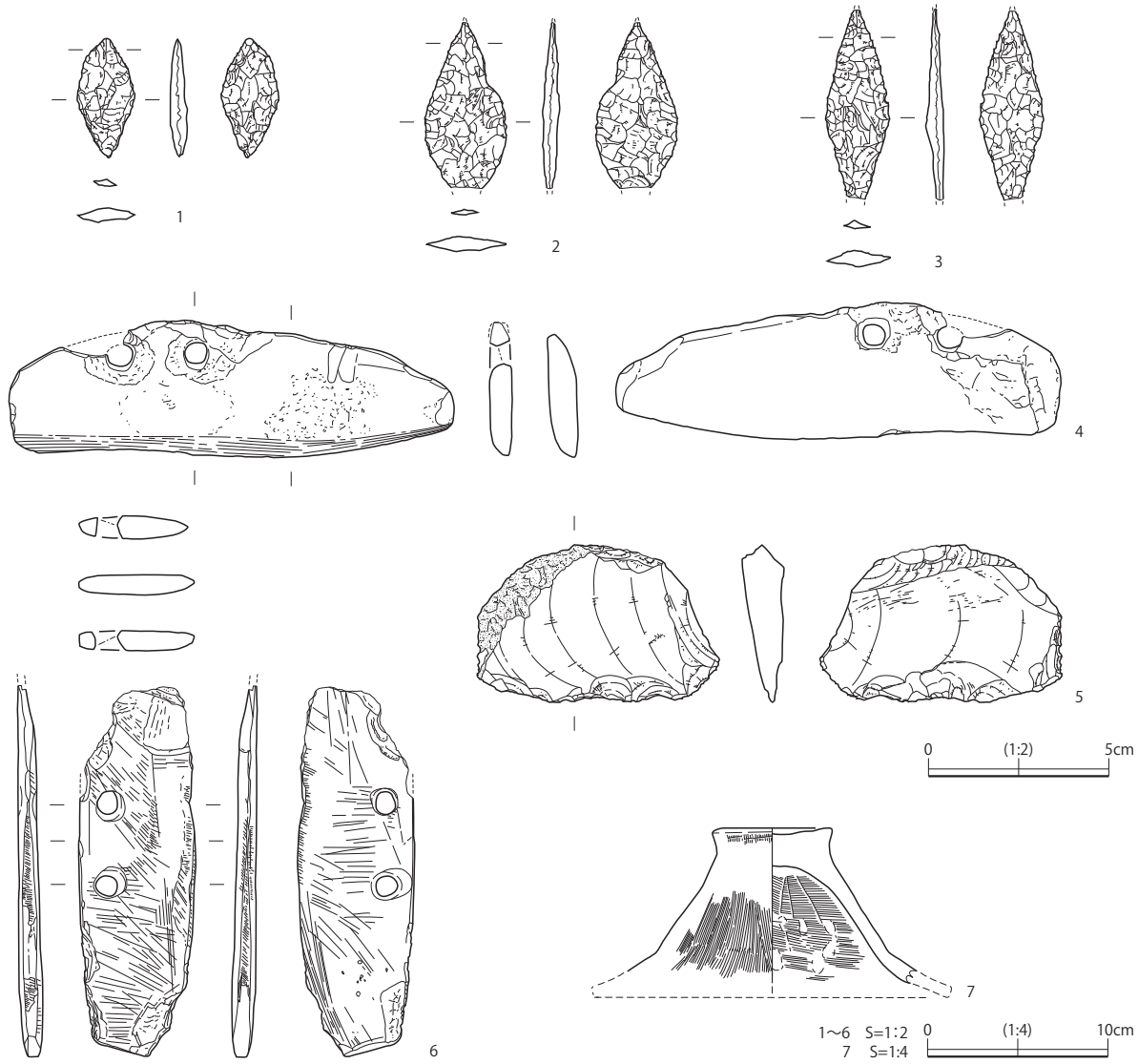


図 486　4区　6－4層出土遺物

その他の遺構出土遺物（図 485・486、図版 104）

図 485 － 1・2は、甕蓋である。1は 2005･2078 土坑から出土した。2は 2463 柱穴から出土した。高坏脚部を転用したものか。3・6は 1593 土坑から出土した。6は壺頸部で、櫛描波状文が施される。4・5は高坏脚部で、4は 2093 土坑、5は 2525 ピットから出土した。7は壺体部で、2450 溝直上から出土した。8・9は 2054 溝から出土し、9は 2009 土坑から出土した破片と接合した。2008・2054 溝の延長上に 2009 土坑が位置しており、同時に機能したと考えられる。8は広口壺で口縁端部は櫛描直線文と櫛状工具を用いた刻目が施される。9は受口状口縁の壺で、屈曲部に刻目が施される。10 は甕で、2008 溝と 2054 溝から出土した破片が接合した。2054 溝は 2080 溝に切れられているが、2008 溝と連続するものと考えられる。20 は 2064 井戸・2008 溝から出土したものが接合しており、2064 井戸と同段階に機能した可能性が高いと考えられる。11 は甕で、1569 土坑から出土した。14 は広口壺で外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で仕上げられる。15 は広口壺で、2064 井戸から出土した。外面はハケ調整、内面は板ナデか。16 は甕で、1560 土坑から出土した。17 は甕で、2081 土坑から出土した。外面はヘラミガキ調整される。18 は甕で、1565 土坑から出土した。口縁端面には刻目が施される。19 は甕で、外面ハケ、内面は縦方向のナデ調整で仕上げられる。21 は甕で、2068

土坑から出土した。22 は甕で 1599 土坑から出土した。23 は壺で、2038 土坑から出土した。口縁部は甕と形状が同じである。24 は甕で、2038 土坑から出土した。外面ハケ、内面はナデ調整で仕上げられる。25 は甕で、2305 ピットから出土した。外面はハケ、内面は横方向のハケ調整で仕上げられる。26 は壺底部で、2008 溝から出土した。底部に木ノ葉の圧痕が認められる。27 ～ 29 は甕底部で、27 は 2008 溝、28 は 1545 土坑、29 は 2171 土坑から出土した。30 は突帯文土器の深鉢である。2355 ピットから出土した。31 は不明木製品で、2316 土坑から出土した。方形の突起部が作り出される。32 は柱根で、2542 柱穴から出土した。先端はハツリ調整されて、先細りする。図 486 － 1 ～ 3 はサヌカイト製石鏃で、1 は 2062 土坑、2 は 1545 土坑、3 は 2008 溝から出土した。

6 － 4 層出土遺物（図 486、図版 108）

6 － 4 層から出土した遺物は、石製品と弥生土器を図 486 － 4 ～ 7 に図示した。4 は磨製の石庖丁である。結晶片岩製。5 はサヌカイト製掻器である。背部に原礫面を残す。裏面の原礫面側から、加撃を加えて素材を獲得し、打点は離れるが表面側を粗割りする。次に、刃部及び背部に微細な剥離調整を行って掻器として用いられたと考えられる。6 は石庖丁から転用された石剣と考えられる。粘板岩製。石剣は、刃部と背部を研磨することで、身幅を整える。切先は欠損しており不明な点があるが、石庖丁として使用時の形状を活かしつつ研磨して形が整えられる。基部に相当する下端は両端が割れており、意図的に打ち欠いて形状を整えた可能性がある。7 は蓋で、内外面はハケ調整される。

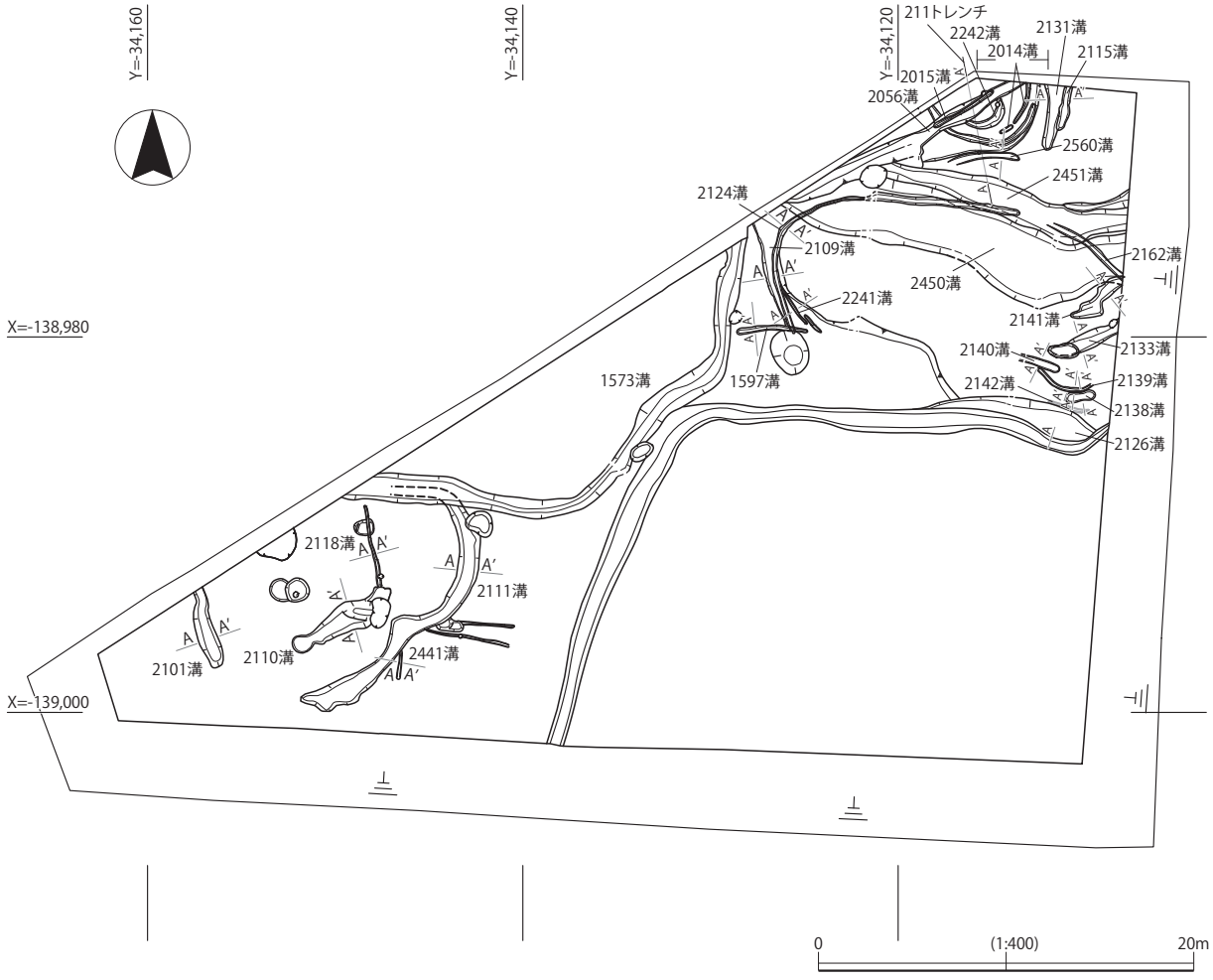


図 487　4 区　第 6 － 5 b 面平面

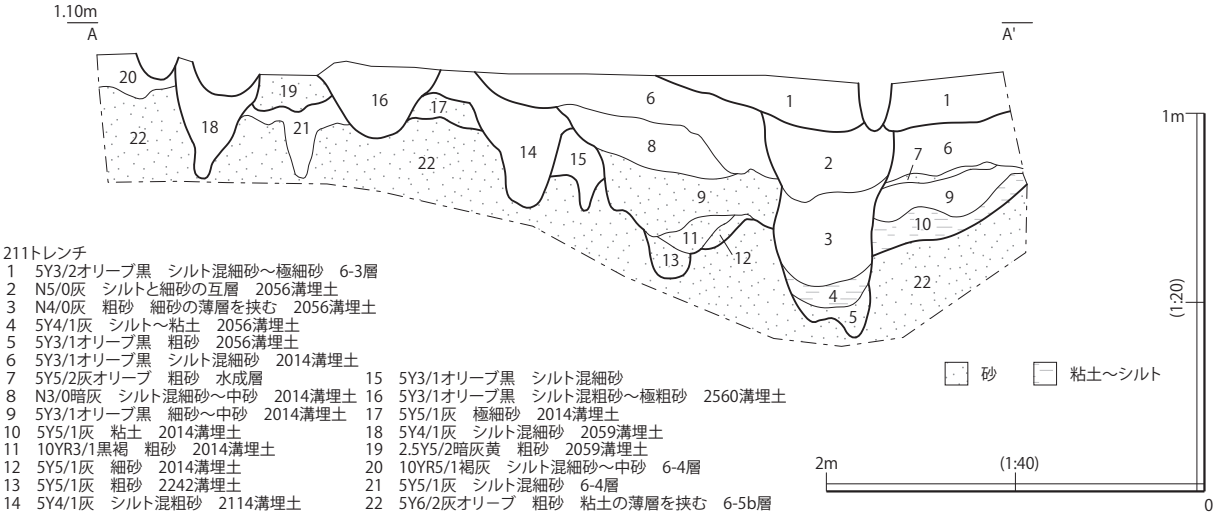


図 488　4区　211 トレンチ断面

第６－５ｂ面（図 487、図版 28・29）

６－４層を除去して検出した遺構面で、６－５ｂ層とした砂層の上面に当たる。６－３層を除去した段階で、調査地の大半は６－５ｂ層上面が露出した状態となる。北東側と南西側の一部に６－４層の堆積が認められた。６－４層は、６－５ｂ層が堆積した後、初期段階に形成された古土壌と位置付けており、層相は母材となる６－５ｂ層の影響を強く受けたものである。微高地上の古土壌は、各地点で同じ条件下で形成されたものではなく、対比が必ずしもできる訳ではない。また、古土壌の形成時期は、各地点で時期幅があったことが想定されるため、自然堆積層を挟まない限り、地層の連続性は確実性に乏しく、北東側と南西側の６－４層についてはある程度の時期幅を考慮する必要がある。一方、第６－５ｂ面は、６－５ｂ層堆積以降に形成された古土壌を除去した遺構面と評価しており、第６－５ｂ面に痕跡として残る第６－４面の溝や土坑を図 487 にも表現する必要があると考えられるが、煩雑になるため省略した。６－４層の堆積が限定的である以上、第６－４面で検出された遺構と同じ時期に機能した遺構も存在したと考えられ、古土壌の掘り分けを行って検出された遺構面という捉え方もできる。地形は、東側に６－５ｂ層の砂層でできた微高地が最も高く、調査地中央で鞍状に低くなって南西部の平坦な微高地へと続く。第６－５ｂ面では溝・ピット等が検出された。

2124・2162・2241 溝（図 461・487）

調査地北東で検出された。2124 溝と 2241 溝は南側で切り合い関係が確認されており、2124 溝が新しい。2124 溝の規模は、幅 0.3 m、深さ 0.12 mである。埋土は、シルト混中砂～粗砂である。2241 溝は、南側で 2009 土坑より以南では検出されず、本来、連続する溝であった可能性がある。

2101・2111 溝（図 461・487）

調査地南西で検出された。平面形・断面所見から 2101・2111 溝は同時期に機能したと考えられる。2101・2111 溝は、幅 0.3 ～ 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mである。埋土は、シルト混中砂～粗砂である。北西側の溝が途切れる部分は、集落の出入口であった可能性も考えられるが、溝の遺存状況を考慮すると加工面を示している可能性もある。

2450・2451 溝（図 461・487）

東側微高地上で検出された。３条の溝は、切り合い関係があり、2450 溝→ 2451 溝の順に新しくなると考える。埋土は、水成層である砂礫である。６－５ｂ層堆積過程でその最終段階に機能した流路の

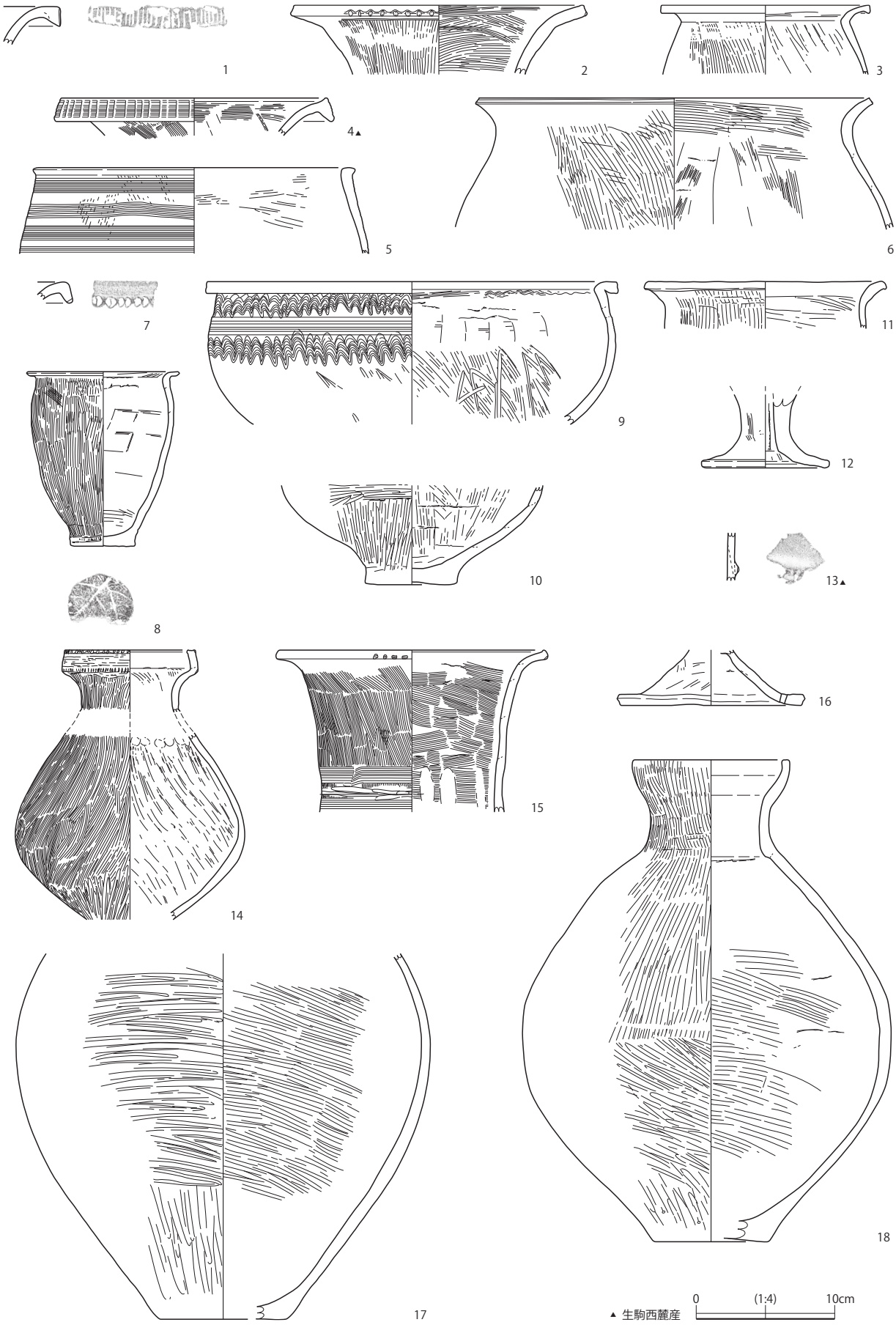


図 489　4 区　2110 溝他出土遺物

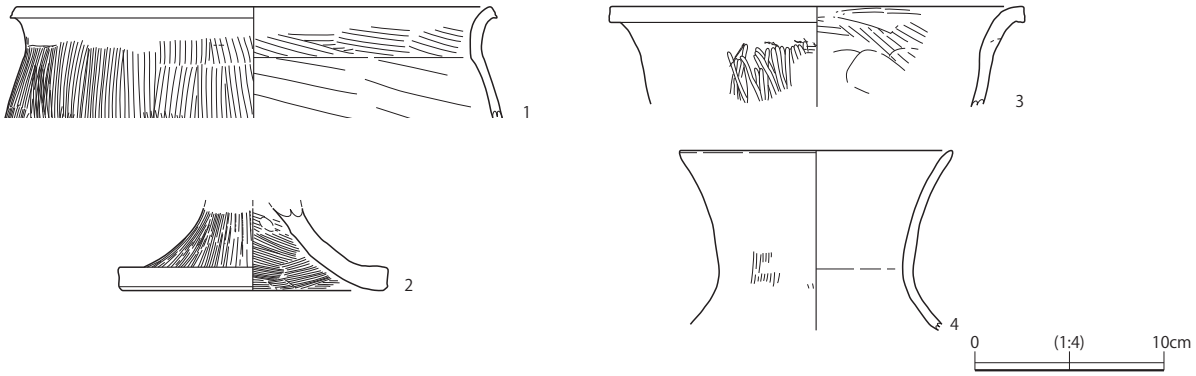


図 490　4区　2109 溝出土遺物

可能性がある。地形的に高い位置で検出されており、２－１・２－２区で当該期の溝が存在することから、溝として報告を行った。

溝出土遺物（図 489・490、図版 106・107）

微高地上では多数の溝が検出された。規模は幅 0.2 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.5 mで、大小の規模が混在した。埋土は、土壌由来の砂層、崩落土、埋戻しと考えられるブロック土、水成層の砂層や湿性堆積物の泥層と、溝の機能を反映して埋没した状況が看取される。第６－４・６－５面で検出した溝から出土した弥生土器を、図 489・490 に図示した。図 489 －１・２は広口壺で、2110 溝から出土した。３は甕で、2111 溝から出土した。３の内面はヘラ状工具によるナデが施される。４～６は 2014 溝から出土した。４は広口壺口縁部である。５は鉢である。外面はハケ調整の後、櫛描直線文、内面はヘラミガキが施されるが、内外面共に磨滅が顕著である。６は大型の甕である。外面はハケ、内面は板ナデ調整される。７は広口壺で 2059 溝から出土した。端面の下端に刻目が施される。８～ 10 は 2080 溝から出土した。８は甕で外面はハケ調整、内面は板ナデ調整され、内面の一部には成形時のハケメが残る。９は鉢である。口縁端面は無文、外面は櫛描直線文・波状文とヘラミガキが施される。内面は頸部直下に粗雑な櫛描波状文、上位は横方向の板ナデ、下位はハケと疎らなヘラミガキが施される。10 は壺で、外面はヘラミガキ、内面はハケ調整される。11 は甕で、2115 溝から出土した。口縁部にかけて肥厚し、端面は丸味を帯びて波打つ。Ⅱ様式か。12 は高坏脚部で、2131 溝から出土した。13 は突帯文土器の深鉢で、2162 溝から出土した。混入品。小「O」字形の刻目が丸い突帯に施されており、長原式に比定できる。14 は近江系の受口状口縁の壺で、2242 溝から出土した。口縁の平坦面上下に刻目が施される。平坦面の刻目間は横ナデによる条線が明瞭に残る。外面は粗いハケ調整、内面は頸部に指押さえ、体部に板ナデが施される。内面の板ナデは器面をナデ付けるように施されているため、ヘラミガキのように見える部分がある。15 は広口壺で、2014・2056 溝から出土した資料が接合した。端面上部を挟み込んで横ナデ調整されるため、端面の上部は突出している。口縁端面の下端に刻目が施される。外面はハケ調整の後櫛描直線文、内面はハケ及び指ナデが施される。16 は蓋で、2018 溝から出土した。外面はナデ調整されるが、成形時のハケないし板ナデの痕跡が筋状に残る。内面はナデ調整。17 は壺で、2018 溝から出土した。内外面はヘラミガキで、内面はヘラミガキの単位幅が広いため、粗いハケメのようにみえる。18 は近江系の受口状口縁をもつ壺で、1517 畦畔・1573 溝・2007 土坑・2018 溝・2109 溝から出土した破片が接合した。内外面は粗いハケ調整が施される。図 490 －１～４は 2109 溝から出土した。１は甕である。細片を図化。２は甕蓋、３は鉢、４は壺である。４は内外面が磨滅しているが、外面にハケメが観察される。

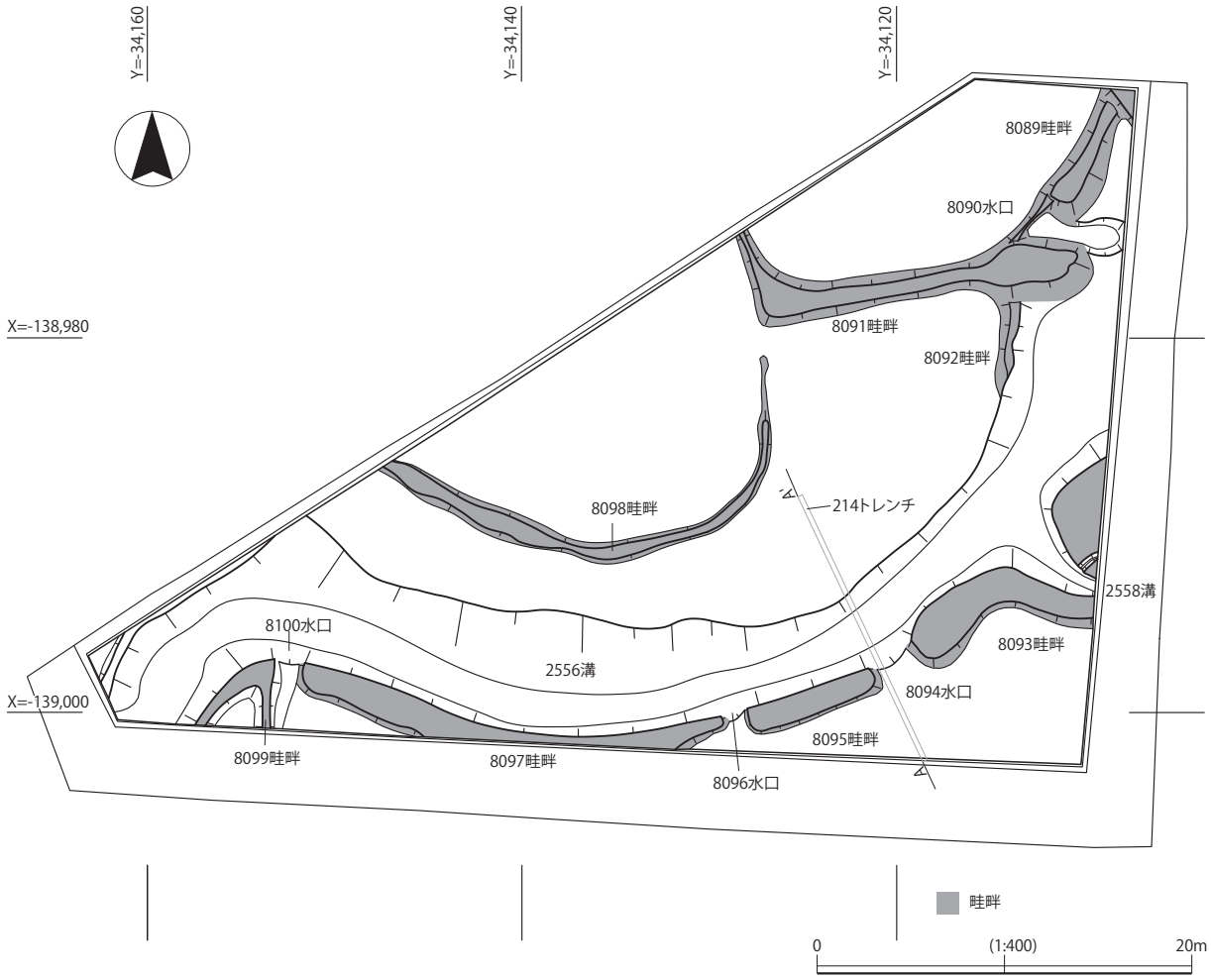


図 491　4区　第７－１面平面

第７－１面（図 491、図版 29）

６－５ｂ層を除去して検出した遺構面で、７－１層としたシルト質粘土の上面に当たる。地形は 2556 溝の南側が最も高い。2556 溝の北側は、北東から南西方向に向かって低くなっている。第７－１面では、６－５ｂ層とした泥層に覆われ、遺存状態が良好な水田が検出された。

水田（図 491）

2556 溝を挟んで南北で異なる区画の畦畔が検出された。2556 溝の南側は、大半が調査 2556 溝肩部に沿って畦畔が検出された。8097 畦畔では、この畦畔に直交する 8099 畦畔と水口が検出された。

2556 溝の北側は、北東側で 2556 溝肩部に沿った畦畔が検出された。また、2556 溝北側の肩部よりやや離れて 8098 畦畔が検出された。2556 溝の北側肩部は明瞭ではなく、緩やかな斜面をなしており、斜面地に小畦畔が配置されて区画が行われている。地形に大きく影響を受けた、水田区画となっており、特に 8098 畦畔の南側の斜面地にその傾向は表れている。

2556 溝（図 491・493）

調査地内を蛇行しながら、南西方向に流れる溝である。今回検出した範囲では、排水を目的として利用されたと考えられる。規模は、幅 3.0 ～ 5.0 m、深さ 0.5 mである。埋土は、下層が細砂から中砂を含む粘土で、下層の９ｂ層が含まれることが想定される。上層が７－１層とした粘土で、2556 溝の南北に堆積する水田作土と連続する。断面の断ち割り結果から、10 層上面に形成された凹地を加工して

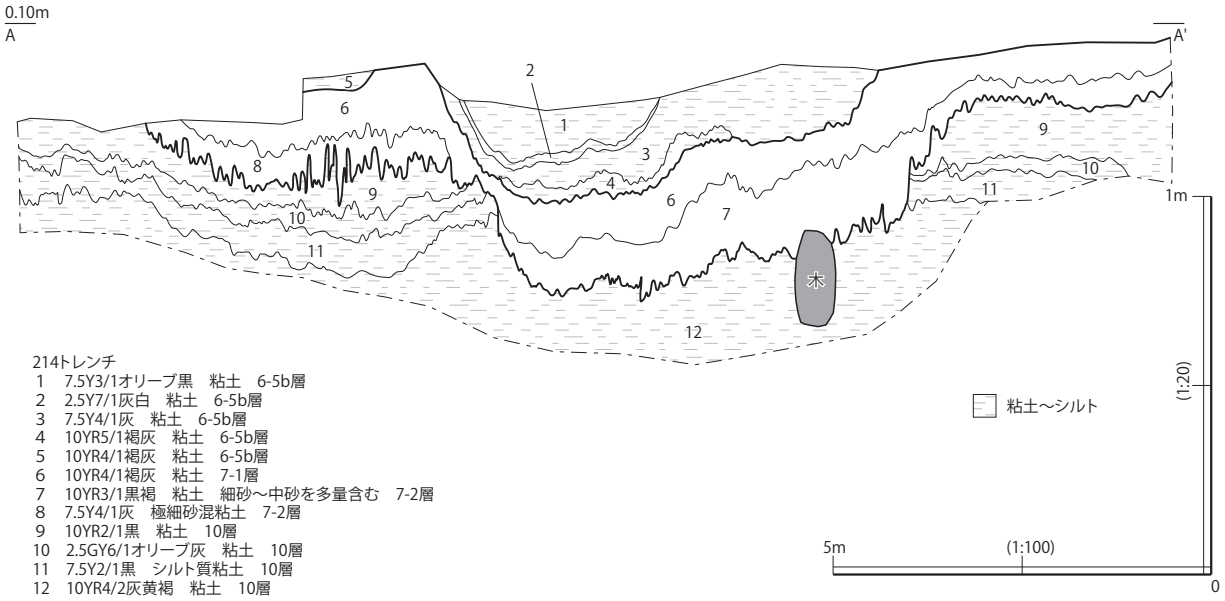


図 492　4区　214 トレンチ断面

溝は掘削されたと考えられる。ただし、東側は、９ｂ層の堆積を切って掘削されており、溝の加工に際しては 10 層上面の微地形が重視されたと考えられる。なお、溝内に９ｂ層の堆積は認められず、７－２層に対比できる埋土中に含まれている状況が観察され撹拌が顕著であったことから、2556 溝内が水田として利用された可能性があるのではないかと考えている。2556 溝から出土した弥生土器は、図 493 － 1 ・ 2 である。 1 は壺である。外面はハケ後横方向のヘラミガキが施され、内面は炭化物が厚く付着しており、調整は不明。Ⅰ様式。 2 は棒状木製品で、柄或いは掘り棒として用いられたものと考えられる。全体に細かいケズリ調整を行って形状を整え、片端は表裏面からケズリを加えて尖らせる。

７層出土遺物（図 493、図版 107）

７層から出土した弥生土器・木製品は図 493 － 3 ～ 5 を図示した。 3 は大型の壺である。外面はハケ調整後、ヘラミガキが施される。内面は炭化物が厚く付着する。 4 は壺口縁部である。口縁端部は面をもち、下方に垂下する。Ⅱ－２様式。 5 は壺体部で、外面に沈線文が４条以上施される。Ⅰ－３～４様式。

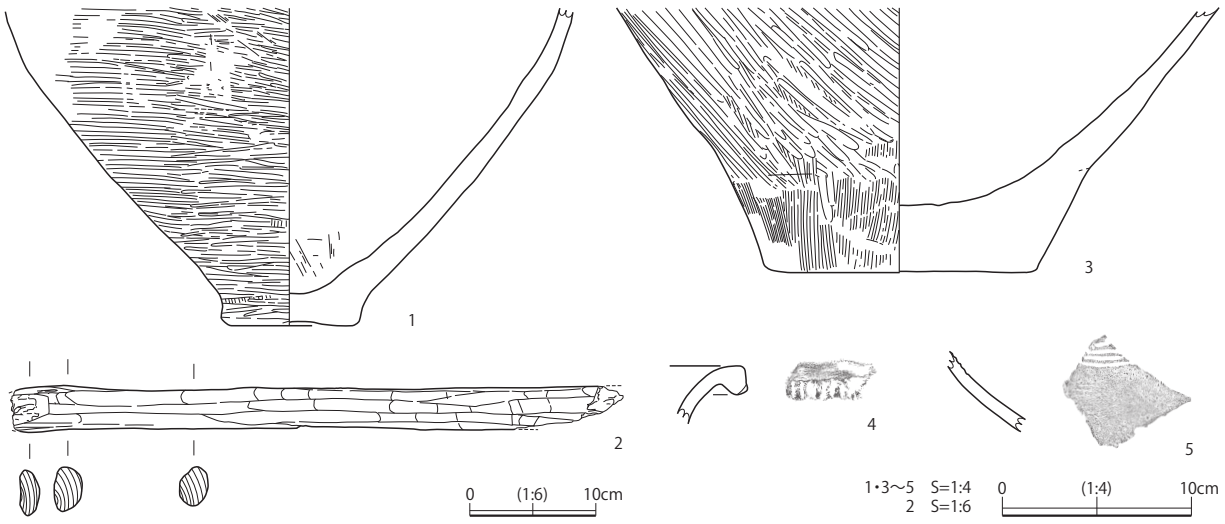


図 493　4区　2556 溝・７－１層出土遺物

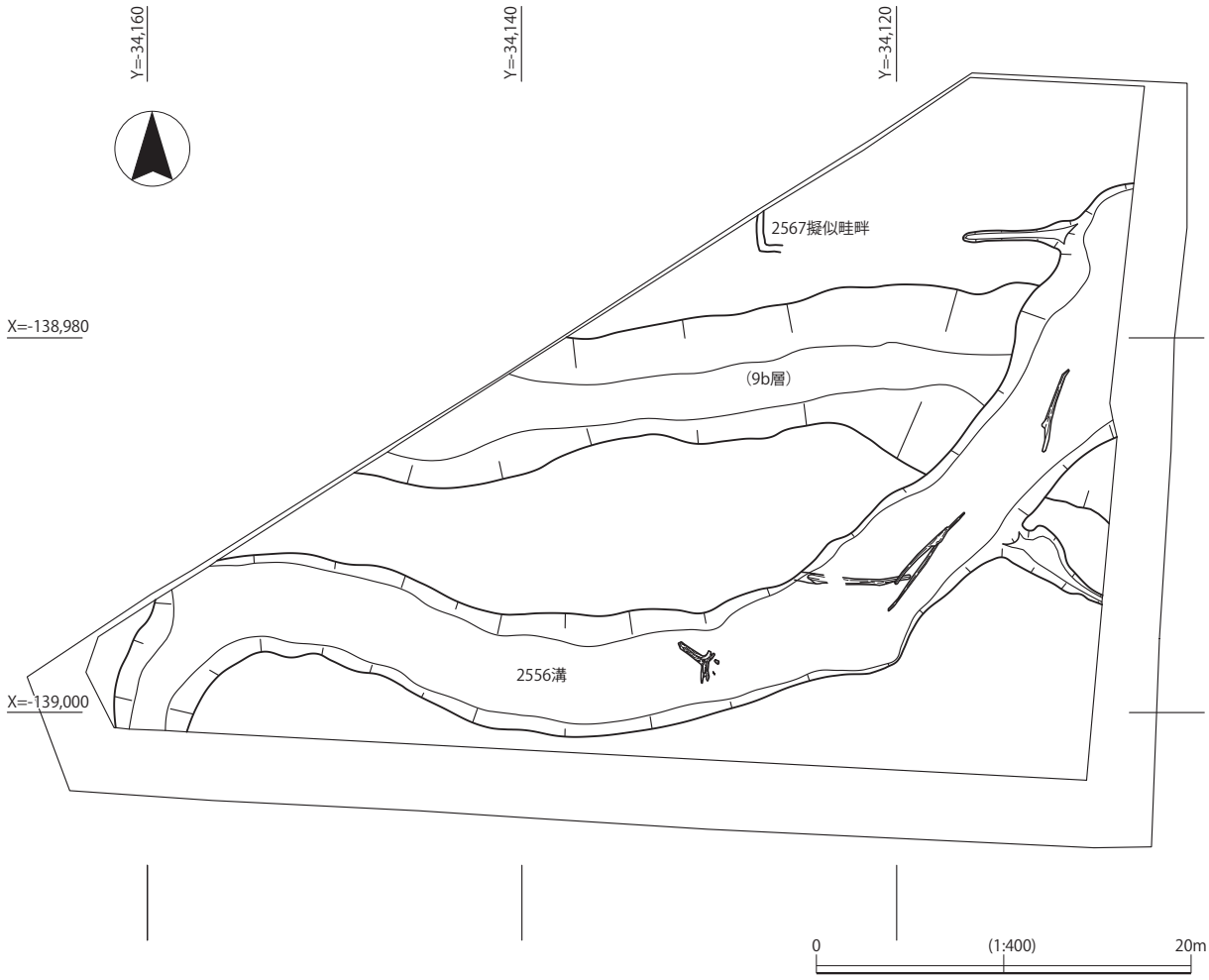


図 494　4区　第 10 面平面

第 10 面（図 494、図版 29）

９ｂ層を除去して検出した遺構面で、10 層としたシルト質粘土の上面に当たる。９ｂ層の堆積は範囲が限られており、調査地の大半は７－１・７－２層とした作土を除去した段階で 10 層上面が露出した状態となる。第 10 面では、９ｂ層による浸食痕と７－２層に帰属する擬似畦畔が検出された。９ｂ層は調査地中央を中心に確認しており、東側から供給されたと考えられる。層厚は３～５cm と薄い。９ｂ層の直上においても、精査作業を行ったが、遺構は検出されなかった。なお、９ｂ層上面は周辺よりやや高くなっており、第７－１面 8091 畦畔はこの直上で検出されている。また、2556 溝底面では、倒木が検出された。倒木は溝に伴うものではなく、腐植を多く含む 10 層に帰属し、溝肩部の 10 層に包含された状態で検出された。倒木周辺には、７－２層に対比できる溝埋土が堆積しており、溝加工時に、倒木は露出した状態であったと考えられる。広葉樹で、樹齢は 20 ～ 30 年に満たないものである。

第 10 面が４区の調査終了面で、205・214 トレンチにおいて、10 層以下の堆積状況を確認した後、調査を終了した。10 層以下では、１m以上の泥層の堆積が認められた。なお、10 層から遺物は出土しなかったが、１－５・２－２・４区では９層堆積以降の地層から、宮滝式～滋賀里Ⅰ式に位置付けられる資料が出土しており、縄文時代後期末から晩期前葉以前に形成された地層と考えている。

（後川恵太郎）

四條畷市文化財調査報告　第 50 集
寝屋川市文化財資料 28
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 252 集

讃良郡条里遺跡

イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書

－第一分冊－

発行年月日 / 2015年 1 月31日

編集 / 発行 四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町1番1号
寝屋川市教育委員会
大阪府寝屋川市本町1番1号
公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号
印刷・製本 / 株式会社 明新社